ハヤテのごとく！～鷺ノ宮家の諸事情～

伽藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハヤテのごとく！～鷺ノ宮家の諸事情～

【Ｎコード】
Ｎ７７４５Ｓ

【作者名】
伽藍

【あらすじ】
代々妖怪退治を生業としている鷺ノ宮家。
その鷺ノ宮家を刀だけで護り続けている一人の青年がいた。
彼には変わった事情と記憶の無い謎の過去があって……
鷺ノ宮家に住んでいる青年を取り巻くドタバタコメディーだったり、妖怪退治だったり、学園ものだったり、何でもありのなんちゃら喜劇のような多分そんな感じ……

そんな訳で本日も絶賛迷走中！！！

序　まず何事も名前から（前書き）

初めての方ははじめまして。

伽藍と申します。

知ってる方は小説一つ積んでるクセにまた書くのかよ～と思うかもしれません。

本当に申し訳ございません！

今積んでいる小説も執筆しています。

何とか頑張りますので

この小説は完全に息抜き小説なのでペースも遅いですがよろしくお願いします♪

序　まず何事も名前から

深夜2時……

周りはすっかり暗くなっていて、ポツポツと街灯の明かりが不気味なていを装いながらうっすらの光を放っている。

そんな中、とある大きな屋敷では中央の場所から部屋の光が漏れている。
その部屋から何やら声が聞こえてきた。

「身元も名前も全く分からないんじゃどうしようもないの……
オババもお手上げじゃ」

「でしたらおばあさま、この子をこの家に置いてあげてはどうですか？」

一人は子供の女の子ような声、もう一つは若い女性の声だ。

「養子に？ウチには生まれたばかりの子供がいるぞ？」

「えぇ、あの子……伊澄には特別な力があります。
ですがこれは人とは異なった力……何かと不安になる事も多いて思います。
だからこの子なら伊澄を支えてくれる良いお兄さん、理解者になってくれる気がするんです」

「ふぅむ……確かにな」

若い女性の言葉に女の子のような声は納得するように唸った。

「だったら一つ条件をだそう」

「条件？」

「このオババが見た所によると、このガキにも力が眠っておる。しかもそれは中々のものじゃ。だから今後、このガキにオババが直々にコヤツを訓練させる。鷺ノ宮家の人間となる以上、それは必ずじゃ」

「わかりました」

女性の声はそう言うとき、今度は少し口調が固くなっていた。

「ではまず、この子の名前を考えましょう」

「ふむふむ、團五郎などどうじゃ？」

「古いですよ」

女の子のような声に女性の声が突っ込むと、僅かに別の声が聞こえてきた。

「……ん」

それは小さな男の子の声だった。

「む、どうしたんじゃワッパ」

「しゅん……」

男の子の声は今後は先程よりはっきりとしたように聞こえる。

「しゅん？
……もしかして、それが名前？思い出したの？」

「多分……名前だけだけど」

女性の声の問いに男の子の声は自身無さげにそう答えた。

「では、決まりね。
アナタの名前は……」

序　まず何事も名前から（後書き）

次回もよく分からないと思います。話は進むごとに事情をゆっくりと明かしていくのでプロフィールとかはありません

其の一　物語の始まりはベタ過ぎるくらいが良いと思う（前書き）

タイトルは未だに迷っています……どうしようかな？

其の一　物語の始まりはベタ過ぎるくらいが良いと思う

灰色……
空は一面の灰色に覆われている…

その空に吸い込まれていくように黒い煙が立ち上ってゆく……

そんな空を見上げている一人の少年がいた。

（……あれ？ここどこだ？）

少年が目線を下にさげると、
彼の目には焼けたように黒焦げになった木材が至るところに突き刺さっている光景が目に飛び込んできた。

（な、これは……）

……さま

（……え！？）

……いさま

次の瞬間、少年の視界がグラリと揺れて、周りは真っ暗になってしまった……

「……お兄様、起きて下さいお兄様」

「……ん、んにゃ？」

とある和室にある布団には青年が横になっている。
その掛け布団を引っ張って声をかけているのは綺麗な長い黒髪に着物を来た少女だった。

青年はそれに反応するようにゆっくりと瞼を開く。

「……ん、伊澄？」

「もう起きる時間ですよ。今日から学校です」

「……あ、そうか」

青年は目の前の少女の名前を呼ぶとむっくりと身体を起こした。
まだ眠いのか青年の頭の黒髪はボサボサと跳ねていて、瞳はダルそうに垂れている。

「お兄様、朝ごはんが出来てますから用意が出来たらいらして下さいね」

伊澄と呼ばれた少女は青年に微笑むと、布団から離れようと…

「う～ん……我が妹、ちょっと髪撫でさせて～」

「お、お兄様！！／／／」

青年はそう言うと少女の髪に手を伸ばそうとするが、彼女は慌ててその手から逃げるように二三歩下がった。

「良いじゃないか、減るもんじゃないし」

「そんな事より早く準備して下さい。でないと遅刻しますよ／／／」

「あ～、伊澄～」

青年が少女の名前を呼ぶが、彼女は構わず和室から出ていってしまった。和室には虚しく伸びる青年の右手だけ……

（いや～、相変わらず本当に可愛い妹だなぁ……
目に入れても全く痛くない……
もう痛くないどころか……うん、痛くない）

青年はうんうんと勝手に頷くと、のそのそと布団から出て立ち上がる。

「さて、んじゃシャワー浴びてくっかね……」

青年は大きく伸びをすると、首を回して和室から出ていく。
そのまま近くにあった扉にノタノタと入っていった……

そろそろ紹介しておいても良い頃だろう。
ここは鷺ノ宮家という屋敷。
超がつくほどお金持ちの家柄である、あの鷺ノ宮家である。

そしてこの青年……
名前を鷺ノ宮（さぎのみや）駿（しゅん）という。

苗字の通りこの家の人間である。

男子にしてはストレートの黒髪に、琥珀色に綺麗な二重の瞳。
身長は大体１７０ｃｍくらいで、細々としてはいるが意外としっかりとした体つきをしている。

今は大体このくらいの説明にしておこう。
彼もシャワーが浴び終わる頃であろうから。

「ふぃ～……目が覚めたら稲村ヶ崎～」

暫くすると、扉から眠気覚ましにサッとシャワーを浴びた駿がバスタオルを肩に掛けて鼻唄混じりに出てきた。

彼は和室に戻ると、壁に掛けてあった制服を手に取り、その下にあった鞄を持ち上げる。

そして壁の上に目を向けると、大きく１１月と書かれているカレンダーが目に入ってきた。

「……もう１１月ねぇ～

時間が経つのは早ぇな～」

しみじみと見つめると年寄りのようにそんな事を呟く。
制服は灰色のスーツのようなものだった。

「何かまだ学生を続けるのかと思うとなぁ……隠居までは一体何年かかるやら」

訳の分からない独り言を呟きながら、駿はさっさと制服に着替えると、布団を畳んで室内の隅に追いやる。
そして、鞄を肩に担ぐと再び和室を後にした。

「いやいや、今日から新天地だ。身も心もリセットしていこう。
取り敢えず、飯だ飯」

其の一　物語の始まりはベタ過ぎるくらいが良いと思う

「あ、お兄様」

「おはよう伊澄」

屋敷の一番広い居間にはいるとテーブルには朝食が並んであった。
その中の一番左の席に腰掛けていた少女が駿に声をかけてきた。

この少女の名前は鷺ノ宮伊澄。
彼女はこの家のお嬢様である。
駿の事を「お兄様」と呼んでいるのでどうやら兄妹らしき関係のようだ。

長い綺麗な黒髪に着物を着ていて、容姿はかなり美人でおしとやかそうな気品がある。
基本的におっとりとしていて、所謂天然な性格。
極度の方向音痴という能力も備わっている少女だ。

「もう少しで学校が始まりますよ」

「あ～ハイハイ。いただきまーす」

駿は伊澄に急かされるようにテーブルに着くと、箸を手に取り手を合わせた。

「しかし俺はまだしも伊澄も高校生なんだよな。飛び級とは言え、何か変な感じだなぁ」

「？」

「まぁ、でも流石は天才。
三千院家のお嬢様のナギも一緒に飛び級なんだろ？
つくづく、白皇学院っつーのは中々恐ろしい場所なんだな」

伊澄は年齢は１３歳と中学生の歳だが、どうやら飛び級らしく駿と同じ高校生なのだ。

「えぇ、ナギも同じクラスです」

「そうかい」

駿は頷きながら朝食である鮭を頬張る。

「しかし高校生か……ん、高校生……まてよ高校生？」

「お兄様？」

（高校生……
高校生と言えば青春。青春と言えば恋。恋と言えば恋人……恋人ォォォォオオオ！？）

暫く動きを止めていた駿だったが、いきなり立ち上がると伊澄の方を向いて彼女の肩を掴んだ。

「ダメだぞ！！お兄ちゃんは絶対に認めんぞ！！
お前にはまだ早い！！恋人なんて俺は絶対に許しません！！」

「はい？」

「あ～、コホン」

駿は彼女から手を離すと、『何でもない』と咳払いを一つ。
そしてまた箸を動かし始めた。

「そういや、義母さんは？」

「えっと、さっきまでいたんですけど……」

「また家の中で迷子か……」

「ハイ」

駿はキョロキョロと辺りを見回すと、ため息をついてまたご飯に向かった。

「いやはや本当に凄いな、親子二人の迷子癖は特に」

「ーーーっ！！」

パタパタと袖を振って抗議する伊澄を横目に駿は箸を口に運ぶ。

「あ、この野沢菜美味い」

「ーーー！！」

「う～ん、やっぱ日本人の朝食は和食に限るねぇ」

抗議を申し立てる伊澄をスルーして朝食を堪能しながらまた年寄り臭い事をのほほんと呟く。

「まぁ、おはようジュン君」

「あ、おはようございます義母さん。あとシュンですよ」

駿が箸を動かしていると、居間に一人の女性が入ってきた。
黒髪をショートカットにして着物を着ている。
容姿は伊澄に似ているがそれもその筈、彼女は伊澄の母親である。

名は鷺ノ宮初穂という。
早速駿の名前を間違えていたが、彼が半ば諦めかけている様子をみると、長い間変わらないらしい。

「また迷子になっていたんですかお母様」

「迷子じゃないわ伊澄ちゃん。
私は台所に向かおうとしただけよ」

「台所は隣ですよお母様」

聞いてお分かりの通り二人とも度がつく程の天然である。
しかし母は娘より更に天然なので、この場合娘がしっかりしているように見える。

「なるほど、居間とキッチンは二つでセットという推理。流石だわ伊澄ちゃん」

「常識ですお母様」

（平和じゃ……）

そんな二人のボケボケトークを聞きながら味噌汁を啜る主人公であった（多分）

＊

駿と伊澄は朝食を終えると、急ぎ足で玄関に向かった。

「いいかい伊澄。頼むから今日は迷子になるなよ」

「ーーっ！！」

「頼むぞ～」

伊澄は駿の言葉にパタパタと抗議を試みる。

しかし駿はそれをスルーしてポンポンと彼女の頭に手を置く。

「じゃあジュン君。伊澄ちゃんをお願いね」

すると初穂も玄関にとことことやって来て微笑んだ。

「任しといて下さい

伊澄には変な虫がつかないように細心の注意を払いますよ。

害虫（おとこ）一人、伊澄には近づけませんから」

「お兄様……」

高らかにそう宣言する駿に伊澄は呆れたようにため息をついた。

「まぁ、それは頼もしいわ。
でも高校生にもなると、伊澄ちゃんももう好い人が出来てもいい年頃じゃないかしら？」

「そんな奴が出来たら、市中引き回しに二週間逆さ釣りにさせて煮えた鉛を飲ましてやります」

手をゆっくりと握りしめて不敵に口元を歪める駿。
主人公にあるまじき表情である。隣の伊澄は呆れたまま。

「そういえば、ジュン君は白皇は今日が初めてなのよね」

「へ？あ、はい」

いきなり会話の流れが変わったので思わずすっとんきょうな声を上げてしまった。

「だったらきっと驚くわね。
大きい学校だから」

「まぁそれも含めて楽しみですね」

因みに彼は小学校、中学校は東京にある某県立に通っていた。
因みに高校も付近の学校に通っていたが、この度白皇学院という学校に編入する事になったのだ。
何故かというのは、それはまた別の機会に。

「行ってきます義母さん」
「行って参りますお母様」

「気をつけてね～」

二人は初穂に頭を下げると、玄関から外に出た。

「いやはや快晴……
まるで天までもが我の旅路を祝福しているようだな」

「誰の真似ですか…」

「気にすんな」

駿は眉を吊り上げると、雲一つない青空に向かってグッと伸びをした。
そのまま家の隅に置いてあった自転車に近づいていく。

「よし乗って。対迷子用人力運用伝達マシーンだ」

「だから迷子になんつなりません」

少し不満そんな声色をあげるが、伊澄は自転車の後ろにちょこんと座る。駿はそれを確認すると自転車にまたがった。

「うっし、んじゃ行くとしますか」

そして、自転車で敷地から出ると、目的地の方に向かってペダルを

漕ぎ始めた……

＊

～白皇学院　正門前～

数十分後…
二人を乗せた自転車は大きく開かれた校門の前で停車していた。

「……」

自転車に乗ったまま目の前の入口を見つめているのは駿。
口はだらしなく開かれていて、目は驚愕したように見開かれている。

「……う、噂には聞いていたが……」

「お兄様？」

「でか過ぎるだろこれは！！！」

彼は白皇学院のあまりの大きさに思わずそう叫んでしまった。
彼は広い鷺ノ宮家には住んではいるがここ白皇はその比では無い。

「本当に学校か！？
どっかのテーマパークとかじゃね？いや、もっと広いか……」

駿は正門に近づいていくと、門の壁に小さくプレートされていた住所に目を向けた。

『東京都杉並区ほぼ全部』

（日本だっけ……ここ……）

駿は住所を見ながら呆然としていると、後ろから車がやって来る音がした。

（……ん？）

振り返るととんでもなく大きいリムジンが校門の前に停車していたのだ。
そしてドアが開かれると、金髪のツインテールに不機嫌そんな表情の少女が嫌々そうに降りてきた。

「ナギ、おはよう」

駿の隣にいた伊澄がゆっくりと車に近づいていく。

「おぉ、伊澄！
おはようなのだ」

伊澄に気付くと、ナギと呼ばれた少女は表情を明るくして伊澄に挨拶を返す。

「何だ、シスコン馬鹿もついているのか。そういえば今日から編入

だったな」

「おう、おはよう。
しかし珍しいな、引きこもりクイーンのナギが学校に来るなんて」

「引きこもりクイーン言うな」

少女は伊澄の後ろの駿に気付くとため息混じりに目を細めた。
駿も少女に近づいていくと、珍しそうに少女を見る。

「しかし編入は今日からだったのか……知っていれば休んだものを」

「こらこら、聞こえてんぞ。
しかし、１１月の後半からって何か微妙だな」

「うむ。お前の顔を見たら急に用事を思い出しのだ。
という訳で帰る」

「お前なぁ…」

駿が少女の頭に軽く手刀を落とすと、今度は反対側のドアが開く音がする。

「ナギ、今日は行かないとダメですよ」

出てきたのはメイド服を着た女性だった。
美しい容姿に落ち着いた佇まいは大人な雰囲気を漂わせている。

「まぁ、おはようございますマリアさん」

「おはようございますマリアさん」

伊澄と駿は振り返って女性に挨拶をした。

「おはようございます伊澄さん、駿君。駿君は今日から白皇に編入でしたよね」

「えぇ、何だか微妙な時期ですけど」

女性はニッコリと微笑んで二人に挨拶を返すと駿に目を向けた。

彼は頭を掻きながら苦笑混じりに返す。

金髪のツインテールの少女の名前は、三千院ナギ。

超お金持ちの家柄、三千院家の一人娘で、伊澄の幼なじみで親友である。

年中不機嫌そんな表情とツンケンとした態度が特徴的な少女だ。

そしてメイド服を着た女性はマリア。ナギの専属メイドであり、完璧超人の代表といえる程の人だ。因みに17歳である。もう一度念を押して言っておくがピチピチの17歳である。

「あら？何か今は不愉快なナレーションが流れた気が」

「気のせいですよマリアさん！！」

マリアは何もない空を見上げて呟くが駿は慌ててそれを否定した。

「そうですか？」

「う、うむ！我々は何も聞いていないぞ」

ナギも取り繕った笑みを浮かべて誤魔化した。

「……まぁとにかく、新しい場所で緊張しているかもしれませんが、頑張って下さいね駿君」

「いえ、むしろ好都合ですよ。
これからは伊澄に変な虫がつかないように目を張れる訳ですから」

拳をグッと前に突き出してフッと微笑する駿。
何というか……残念な男である。

「ホント超度級のシスコン野郎だな」
「お兄様……」

そんな様子に呆れて物も言えないようなナギと伊澄。

「フフ、相変わらずですね。
ではナギ、私はこのまま買い物に行きますから……終わりましたら電話して下さいね」

「仕方ない、学校に行ってやるか……」

ナギが渋々頷くと、マリアは苦笑しながら三人に頭を下げてその場を後にした。
それに続いてリムジンも反対方向に走しり去っていった……

「んじゃ三人仲良く教室に行きますか」

「誰が仲良くするか……ってお前、自分が何組か分かっているのか？」

「いや、知らん」

ナギの疑問に駿は首を振ってスッパリと答える。

「おいおい、だったら何で同じクラスだって分かるのだ」

「簡単。小説は都合良くできてんだ。俺と伊澄が違うクラスになる訳ないだろう」

（……コイツ、バカだ）

サラリと断言する駿を見てナギは額に手を当てた。

そんな訳で三人は校舎に行く前に、事務室に向かってクラス表を貰ったのだが……

ーーーーーーーーーーーーーーC組　１番～、～、～、２０番鷺ノ宮駿、２１番～、～、～……

ーーーーーーーーーーーーーーー

「C組だな……」

「……」

駿はクラス表を手に持ったままじっと見つめている。

「因みに我々はA組だからな」

「……」

まだじっとクラス表に目を下ろして黙っている。

「あの、お兄様…」

「嵌められた……」

伊澄が声をかけようとすると、駿はズーンと負のオーラを漂わせて肩を落としてしまった。

そんな様子にナギはため息をつくと、渋々口を開いた。

「これは決定だしな。まぁ妹離れをする良い機会ではないか」「……」

「それに、伊澄の意見もあるぞ」

駿の様子に構わずにナギは伊澄を肩をポンポンと叩いて言った。

「あんまりこの妹馬鹿に構われるのは嫌だろ?」

「そうですね……出来れば」

「！！！！？」

伊澄の言葉に駿はピタリと動きを止めて石化してしまう。

「い、いえ……嫌とかでは無くて……その…学校では恥ずかしいので…」

「ま、要するにうっとーしいと言うわけだな」

ガラガラガラ…！！

止めの一撃に石化した駿は無惨に崩れさってしまった。
そしてそのまま砂になってサラサラと風に運ばれてゆく……

「さ、バカは放っておいて早く教室に行こう」

「あ……」

伊澄は屍のような兄の姿を申し訳なさそうに振り返るが、ナギに連れられてその場から去っていってしまった。

暫く沈黙状態だった駿にぼんやりとした思考が脳裏に浮ぶ。

（……まさか…
アレが反抗期……なのか）

注）全然違います

キーンコーン……

そんな哀れな主人公の姿の上に
ＨＲ開始のチャイムが響き渡ったのだった……

其の一　物語の始まりはベタ過ぎるくらいが良いと思う（後書き）

え～、こんなうざい奴が主人公です。すみません（笑）

簡単な事情やいきさつは次回とその次の回で少しは分かると思います。

其の二　第一印象は学生生活を決めると言っても良い気がする（前書き）

ちょっと銀ごとが詰まっているのでこちらを更新しました。

こちらも鷺ノ宮の話なのでこれを考えていると、向こうの話も色々と思い付く気が……

其の二　第一印象は学生生活を決めると言っても良い気がする

ガヤガヤ……

入口に『一年C組』と書かれた教室では生徒達ざわめき声がしきりに飛び交っていてどこか落ち着かない雰囲気であった。
それもその筈……

「ねぇねぇ、今日転校生が来るんだって」

「え、本当に？」

「女の子かな～」

先程から教室はずっとその“転校生”の話題で持ちきりなのだ。
様子を見るに性別までは分かっていないようだ。

「オーイ、皆席に着け～」

すると扉が開いて男性が教室に入ってきた。
年齢はまだ若いようで２０代後半くらいか。
左手には名簿を抱えている所を見るに、どうやら先生らしい。
先生が教壇に歩いていくと、生徒達は各々席につき始める。

「え～、聞いている奴もいるかもしれないが今日このクラスに転校生がくる」

先生がそういうと室内は改めてざわざわとし始めた。

「薫先生～！その子は男の子ですか？」

一人の生徒が手を挙げて先生に質問した。

「あぁ、男子生徒だ」

「「へぇ～」」

生徒達は興味津々な様子で転校生が準備しているであろう扉を見つめている。

しかし先生はそれに対して肩を竦める仕草をしてみせた。

「本当ならもう扉の向こうにいるはずなんだがな……

何かまだ来ていないらしく取り敢えず探しに行って貰ってるから、

先にＨＲを始めるぞ～」

「「え～……」」

そんな生徒達の声を背景音に、先生は生徒名簿を開いた。

＊

一方その頃……

「うーん、学院の敷地内には入ったのを見たってＳＰの人達が言っていたけど…」

「迷っているんじゃないか？
ここは無駄に広いから」

白皇の敷地内を歩きながら言葉を交わしているのは二人の女子。
一人は綺麗な桃色のロングヘアーに黄色い髪留めをしている美少女だ。もう一人はセミロングの髪を後ろ軽くまとめて、眼鏡をかけたこちらも美少女であった。

「確かにあり得るわね……」

「えっと……」

頷く桃色の少女の隣で眼鏡の少女は何やらファイルから紙をを取り出す。その紙は駿の顔写真が張られていた。

「“鷺ノ宮”君か……」

眼鏡の少女はその写真を見つめてそう呟いた。

「鷺ノ宮って、あの鷺ノ宮家の事だろうか？」

「多分そうなんじゃないかしら。でも確かナギの友達にも鷺ノ宮伊澄さんがいたけど…
親戚かしらね」

眼鏡の少女の言葉に桃色の少女は頬に手を当てながら考えるように

呟く。

「まぁとにかく、急ごう。
早くしないと薫先生に悪い」

「えぇ、そうね」

二人は周りを見回すと、先程より少し早足で歩き出した。

が、数分後……

「……」

「「……」」

高等部校舎から少し離れた場所に倒れている青年の姿を二人は見つけた。
っていうか駿だった……

二人は暫くその青年を眺めたあと顔を見合せる。

「ハル子……これって…」

「えっと……多分この“鷺ノ宮”君じゃないかな」

眼鏡の少女は手に持っていた紙の写真に目を向ける。
確かに顔写真と倒れている駿の顔は一致していた。

「何で…こんな所に倒れているのかしら」

「クマにでも襲われたのかな？」

「クマって……
でも何だか悲しそうな顔をしてるわね」

桃色の少女は駿の顔を見ると最初に思った事を口にする。

「ふむ……では転校初日に女の子に告白をしたが木端微塵にフラれて倒れたとか…」

「そんな設定勝手に作らないの。とにかく、彼が転校生君なら早く起こしてあげないと」

「そうですね」

桃色の少女が半ば呆れたようにそう言うと、眼鏡の少女は頷いて駿にゆっくりと近づいていった。

そしてトントンと倒れている駿の肩を叩く。

「オーイ……」

「うぅ……ん…」

意外にも駿は軽く肩を叩かれるとすぐに反応した。

「大丈夫？」

「……ん？」

今度は桃色の少女が声をかけると、彼はうっすらと瞼を開き始める。

「……えっと、君は鷺ノ宮駿君でいいのか？」

「へ？」

目を開くといきなり二人の美少女が現れたので思わずすっとんきょうな声を上げてしまった。

「……」

駿は暫く訳が分からないように顔を上げて二人を交互に見るが、取り敢えず口を開いた。

「……えっと、アンタ達は？」

「転校生してくる筈の生徒の姿が見えないから探しにきたのよ。それで……貴方が鷺ノ宮駿君でいいのかしら？」

「……あ、あぁ」

桃色の少女の言葉に駿は戸惑いながらも頷いた。
すると二人の少女は彼を見て各々口を開く。

「桂ヒナギクよ。よろしくね鷺ノ宮君」

「私は春風千桜だ。よろしく」

桃色の少女は『桂ヒナギク』、眼鏡の少女は『春風千桜』と彼に自己紹介をした。

「えっと、あぁ……俺は」

二人の挨拶に駿も慌てて返そうとするが……

バッ…！！

「「「！？」」」

それを遮るように強い突風がいきなり三人を通り抜け……

二人のスカートが少しだけ浮かんだのだ。

それは普段ならさして気になるような事ではないだろう。

ただ今回は位置がまずかった。

ヒナギクは少し離れた所に立っていたので何とも無かったが、

千桜は肩を叩いて起こした為、駿のすぐ横に立っていたのだ。

そして彼は倒れたまま顔だけが上げている状況。

「……！？」

「……あ」

スカートが少し浮かんだといっても、下から見ていればまぁ十分に見えてしまう訳であって…

当然、彼の視界には浮かんでしまったスカートの中が飛び込んできていた。

「……」

「……」

そしてスカートが元に戻ると、
駿がハッと我に返り……

「縞ｇー」

「ーーーーっ！！！／／／」

ドオォォォォン！！！

「ぎゃあアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

言葉は瞬く間に断末魔の悲鳴へと変わってしまったのだった。

＊

～一年Ｃ組～

「お、帰ってきたか二人とも」

「先生…」

C組の教室のドアが開くと、ヒナギクと千桜が入ってきた。
先生は二人を見ると『どうだったか』と目で問いかけた。

「えっと……一応見つかったんですけど……」

「そうか。じゃあ今は教室の前にいるんだな？」

「まぁ一応…」

困った笑みを浮かべているヒナギクと何故か少し顔の赤い千桜の様子を不思議に思ったが、先生は頷くと、取り敢えず二人を席に着かせた。
そして扉の方に目を向ける。

「えっと、それじゃ皆～
転校生が来たらしいから注目」

生徒達は囁き声を止めて扉の方に注目する。
因みにヒナギクと千桜は困ったような表情のまま。

「オーイ、入ってきてくれ」

「……はい」

そんか声と共にガラガラと扉が開かれた。

しかし、そこから出てきた顔を見て生徒達は一斉に目を見開いた。

なんと、入ってきた転校生の顔には無惨なモザイクトーンがかかっていたのだ。

（（な、何だコイツはァァ！？））

一同はのそのそと教壇に歩いていくモザイク顔を見て各々混乱し始めた。

そりゃそうだろう。転校生ですと言ってモザイクがいきなり出てくれば誰だって混乱する。

そんな生徒達の様子をお構い無しにモザイクは教壇の前に教室を一望するように立った。

「え～……遅れて申し訳ない。

今日からこのクラスに編入する事になった鷺ノ宮駿といいます」

っていうか駿だった……

「あ～、この学院は来たばかりなんで勝手がわからないので迷惑をかけるかもしれませんが…」

（（（（そのモザイクの理由が一番分からないよ！！！））））

「よろしくお願いしまーす」

駿はモザイクトーンのまま丁寧に一礼をする。

勿論生徒達はドン引きである。

「あ、あ～…鷺ノ宮、他になんか説明は無いか？」

「え、説明ですか？」

（（（その顔の理由！！！））））

モザイクのまま首を傾げると、一同は心の中で突っ込んだ。

「え～と、好きなものは辛いものと伊ｓ、じゃねーや……
趣味は……えっとアレ、アレしてアレする感じのアレです」

（（（アレって何だ！？））））

駿は途中で面倒になったのかテキトーに手振りで言葉を濁した。
流石に時間も押しているので先生は彼の前に出ると名簿帳をヒラヒラと振って口を開く。

「あ～、もう分かった。
とにかく彼が今日からクラスの仲間になる鷺ノ宮だ多分。
俺は担任の薫京ノ介。
……取り敢えずよろしくな」

「「「よ、よろしく～…」」」

薫先生を始め生徒達はドン引きしながらも何とか目の前のモザイクに挨拶をした。

そんな訳で、鷺ノ宮駿は晴れて白皇学院に高等部一年として編入をしたのだった……

＊

キーンコーン……

「それじゃ今日はここまで～
皆、気をつけて帰ってね～」

教壇に立っていた先生がそう言うと、室内の生徒達はゾロゾロと席を立ち上がり始めた。

その様子に駿は不思議そうに周りを見回す。

（ん？まだ一時限終わっただけじゃないか……）

そうなのだ。まだ時刻は午前中、しかも授業が一つ終わっただけなのに生徒達は帰り支度を始めているのである。しかも一時限目の授業は自習であった。

「今日は土曜日だから午前授業なのよ」

「？」

駿がぼーっとその光景を眺めていると、後ろから声がかかった。
振り返るとヒナギクと千桜が彼に近づいてくる。

（えっと……桂に春風だったな）
駿は二人を見て聞いた名前を思い出すと頷いた。

「へぇ、そうなのか」

「まぁ、本当なら三時限目まであるんだけど……
この学校はホントに特殊だからね……先生が疲れたとかで授業が無くなったり、こうやって授業数が減ったりするのよ」

「良いのかソレ？
教育機関だろココ？」

さらっと言ってのけるヒナギクの言葉に駿は呆れたように聞き返した。

「基本的な自由な学校だからな…生徒達もそうだけど、先生達も自由奔放な人達が多いんだ」

「納得して良いのかソレは…」

千桜は駿の顔をを暫く見つめていた。
先程のモザイクトーンは何事も無かったかのようにキレイさっぱり取れていた。

「あの、さっきはすまない。
とっさに身体が…」

「あぁ、大丈夫。気にしないでくれ（ま、ちょっと得したしな）」

申し訳無さと思い出した恥ずかしさで謝る千桜に駿は前で手を振っ

て答えた。

「そうか……
じゃあヒナ、私は先に時計塔に行っているよ」

「えぇ、分かったわ」

千桜は駿の返事に安心したように頷くと片手を上げて教室から出ていった。

（時計塔？
あぁ……来る前に見たあのでかい塔か……何があるんだろうな）

「じゃあ鷺ノ宮君、私は少しA組に用事があるから」

「A組？
授業が終わったのってここだけじゃないのか？」

「それはそうでしょ。今日は全学年一時限でおしまいよ」

その言葉に駿は『この学校は大丈夫なんだろうか』という考えを隅に払って、顎に手を当てる姿勢を取ると思考を巡らし始めた。

（A組と言えば伊澄がいるクラスだ……授業が終わったとすれば当然放課後だ。
いや……放課後だとォ！？
放課後と言えば青春の代名詞！！
男女の恋愛や告白等が行われる時間帯では無いかァ！！
伊澄が……伊澄がピンチか！！）

ガタッ！

「鷺ノ宮君？」

「俺もA組に緊急の用がある！
案内してくれ！！」

「え、うん……」

ただならぬ雰囲気の駿にヒナギクは戸惑いながら頷いた。

～1年A組～

こちらの教室では隣同士で帰り支度をしているナギと伊澄の姿があった。

「伊澄、昨日マジカルデストロイの最新話を描いたのだが、恐るべき敵、竹田さんが登場してな」

「まぁ、それは大変」

「その竹田さんは身体中が鋼で出来ているという鉄人なのだ。
このままではブリトニーがピンチなのだ」

「それは作戦会議が必要ね！」

ナギの言葉にキラーンと目を光らせて答える伊澄。
二人は一体何の会話をしているのかはご存知、ナギが自作で書いている漫画の話である。

「だったら今日はウチに遊びにくるか？」

「えぇ。あ、でもお兄様に言っておかないと」

「……あの馬鹿なら別にいいだろう」

ナギがあからさまに嫌そうな顔をしながら天井に呟くと…

ガラッ！！

「伊澄ィィィィ！！
無事か！？」

「噂をすれば何とやらだな…」

勢い良くA組の扉が開いて駿が飛び込んできた。

「お兄様！？」

「伊澄！！」

駿は急いで伊澄に駆け寄ると立て膝になって彼女の肩に手を置く。

「大丈夫か？何にも変わった事は無かったか？
変な男に声とかかけられなかったか？」

「大丈夫ですお兄様／／／
ですからその……／／／」

まだクラスに残っていた生徒達の視線を集めている事に気付いた伊澄は顔を真っ赤にして俯いてしまう。

しかし駿はそれを見て安心したように手を離すと、一歩下がって彼女の前でゆっくりと手を広げた。

「さぁ伊澄……
寂しかっただろう俺に飛び込んでおいｄｌ」

「てぃ！！」

しかし飛び込む代わりに、ナギが彼の脛を思いきり蹴りあげた。

「ーーっっっ！！！」

駿は痛みから声にならない悲鳴をあげて床をに倒れこんだ。

「今日はちゃんと学校に来てるのねナギ」

「む？ヒナギクか」

床をのたうち回る駿にため息をついているナギの後ろにはいつの間にかヒナギクがいた。

「彼と知り合いだったのね」

「あぁ、そういえばこの馬鹿はC組だったな」

「鷺ノ宮さんのお兄さんだったのね」

ヒナギクは床に蹲っている駿とその背中を擦っている伊澄を見てナギに尋ねた。

「あぁ、そうだな。
正確には……いや、まぁ…
とにかく見て分かる通り重度のシスコンでどうしようもない馬鹿だ」

「そうなの。でも鷺ノ宮さんみたいな可愛い妹がいたら男子は皆そうなるんじゃない？」

ナギは不自然に言葉を誤魔化したが、ヒナギクは気にならなかったのか二人の様子を見て可笑しそうに言った。

「そういえばヒナギクは何でA組に？」

「美希達を探しに来たんだけどね……聞いたらもう出ていったって……まったく」

彼女は困ったように腰に手を当ててため息をついた。

「あぁ、確か授業終了と同時に飛び出していったな」

「はぁ、仕方ないわね……
それじゃ私は生徒会に行くわ」

「む、そうか」

ヒナギクは時計に気にすると時計塔の方向に目を向けた。

「たまにじゃ無くてちゃんと学校来なさいよナギ」

「む～、まぁいずれな」

まったく行く気の無いの発言にヒナギクは苦笑すると、教室を後にしていった。

「では伊澄、帰るか」

「あ、はい……」

ナギは駿を気遣っている伊澄に目を向けるとそう声をかけた。

「ほら、馬鹿もいつまでだらしない格好をしているのだ」

「脛はなぁ、弁慶の泣き所って言われてるくらいの……」

「あーハイハイ。
とにかくさっさと帰るぞ」

駿はゆっくりと立ち上がりながら訴えるが、ナギは軽くスルーして

伊澄の横に並んで教室の出口に歩いていく。

その後を渋々追う駿であった。

其の二　第一印象は学生生活を決めると言っても良い気がする（後書き）

え～、この小説では１１月の下旬です。ハヤテが出るのが１２月２５日なので彼が登場するのは暫く先になると思います。

取り敢えず次回もよろしくお願いします！

其の三　誰にだって少しくらい見せ場が必要（前書き）

銀ごと完成までもう少しかかりそうです！！
すみません？

因みに今回の話はまだ序盤なのでかなり抽象的な部分が多いと思います。

あと、どこのジャンプだよ！？って感じです（笑）

其の三　誰にだって少しくらい見せ場が必要

白皇学院の敷地内を正門に向かって歩いているのは駿達だった。
澄んだ青空に燦々と輝く太陽が揺れる木々から木漏れ日を覗かせ、三人の頭上を照らしている。

「うむ。今日は頑張って学校に行ったから疲れたな」

「頑張ってって……一時限だけじゃん」

グッと伸びをするナギに駿は呆れたように突っ込む。

「一時限だろうが五時限だろうが学校は学校なのだ」

（五時限の時はサボるだろう…）

駿の肩を竦める仕草に構わず、ナギと伊澄は楽しそうにおしゃべりしながら正門へと向かっていった…

「あ、オーイ！！」

「「？」」

三人が正門付近までやって来ると後ろから声と共に少年が走ってきた。

「む、ワタルか」

「まぁ、ワタル君」

ワタルと呼ばれた少年は駆け足でナギと伊澄の所に近づいてきた。

「おぉ、ワタル」

「あ、伊澄の兄ちゃん！
編入って今日からだったのか」

「その呼び方止めれ」

ワタルは駿に気付くと驚いたように声をあげると、
駿はヒラヒラと手を振ってそう返した。

「そういえば伊澄。俺達同じクラスだよね！！」

「えぇ、そうだったわね」

「今日の授業さ、実はー」

ワタルは再度伊澄に目を向けると、顔を赤くしながら話しかけ始めた。
そんな様子にナギは少し離れて駿の隣に移動する。

「本当に分かりやすい奴だな、アイツは」

「だなぁ……」

駿も呆れたように赤くなっているワタルを眺めている。

「そういえばワタルくらいだな。お前が伊澄に近づく男の中で黙っているのは」

「いや別に黙ってる訳じゃねーよ。もし伊澄に手ぇ出そうもんなら勿論しばき回すが……ただ」

「ただ？」

ナギが聞き返すと彼は若干哀れみに満ちた表情で口を開いた。

「アイツ、超ヘタレだから」

「あぁ……なるほど」

二人の半ば同情染みた視線に気付かずワタルは緊張しまくりながらも話題を作ろうと必死に頑張っている。

「ま、それに伊澄を好きな男子共がいるという事自体は悪いことじゃないからな」

「は？」

「それだけ俺の伊ｓ、じゃねぇや俺の妹が可愛くて美しいという事じゃないか。まぁ当たり前の事なんだけどな、それを改めて再確認できるというかな～」

「……うざ」

まるで自分が誉められたように頭を掻きながら笑う駿にナギ軽蔑１

００％の視線を送る。

「ま、好きになるのは構わないが指一本でも触れれば即地獄に叩き落とすけどな…」

「お前こそ地獄に堕ちるべきだからな」

ワタルは暫く三人（とりわけ伊澄）と話した後、家の用事があるからと帰って行った。
そして正門には長く黒いリムジンがやってくる。

「じゃあ伊澄、行くか」

「えぇ。ではお兄様、行ってきますね」

「あぁ。行ってらっしゃい…
あ、伊澄」

リムジンに乗り込むナギに続いて伊澄も駿にそう言って乗り込もうとするが、彼は気付いたように伊澄を呼び止めた。

「さぁ、いつも通り行ってきますの抱擁をしてくれ！！」

「そんな事しません！！／／／」

目を閉じて両手を広げる馬鹿（シスコン）の前で伊澄は真っ赤になってパタパタと袖を振る。

「まったく……伊澄、ちょっと横に捌けていろ」

「？」

ナギはリムジンの内に設置してあるガラステーブルの上のご馳走が盛られている皿から箸を手に取ると、伊澄を横から駿の前に出てきた。

「オイ、そこの変態」

「ん？」

グサッ！！

そして駿が目を開いた瞬間、ナギは両目に箸をぶっ刺した。

「■■■■■■■■■■！！！！」

「よし、では行くか」

声にならない悲痛な叫び声をあげてのたうち回る駿を後目に、ナギはリムジンに戻っていった。

「あ……でも」

「あの変態が無駄に丈夫なのはお前が一番よく知っているだろう。問題ない」

ナギはそう言うとリムジンのドアをゆっくりと閉めた。

そして未だ地面を転がる駿を残して出発してしまった……

（（（容姿ねぇ……））））

痛みに悶えている駿の様子を見ながら、正門にいた生徒達はリムジンを見送っていたのだった…

其の三　誰にだって少しくらい見せ場が必要

「……アレ、まだ視界が赤いぞ……？」

白皇学院を出た駿は家路に着くために歩いていた。

「こういうのってギャグ補正で次の行では治ってたりするもんじゃないのか？」

などと訳の分からない事を呟きながら住宅街の道を歩いていく。

すると後方から何かが迫ってくるような音が……

ビュン！！！

「！？」

したかと思うと、いきなり駿の横を物凄い勢いの何かが通り過ぎた。
そのあまりのスピードに彼の周りからはつむじ風が巻き起こる。

（え？）

あまりに一瞬の出来事なので理解が数秒遅れて駿は自分を抜いていったモノの方向に慌てて目を向けたが、もうそれは跡形もなく道路からは消えていた。

常人ならば何がなんだか分からないだろうが駿は何とかその正体を捉える事が出来ていた。

「じ、自転車だよな……アレ。
しかも乗ってた奴……女っぽかったけど男だよなぁ」

そう。彼の後ろから来たのは自転車であった。
しかもそれに乗っていた水色の髪をした女の子のような少年ということまで彼は見極めていたのだ。

「……時速何キロだよ」

動体視力は良かったが突っ込む所は間違っていた。

（ま、いいや……帰ろう）

駿は何事も無かったかのように頭を振るとまた再び歩き始めた。

＊

～鷺ノ宮家～

「ただいま～」

駿は鷺ノ宮の屋敷に戻ってくると、屋敷前の門をくぐって敷地内に足を踏み入れた。
そのまま中庭や池を通り過ぎて、屋敷本館に向かう。

「まぁ、ジュン君。
おかえり。ちょうど良かったわ」

すると屋敷の縁側から初穂がひょっこり顔を覗かせてきた。

「シュンですよ義母さん……
えっと、何か用事が？」

「えぇ、さっきリモコンがジュン君宛に。かけ直すっていってたから暫くしたらまた鳴ると思うわリモコン」

「……多分電話って言いたいんですよね、わかりました」

駿は縁側の彼女に頷いてみせると、玄関にぐるりと回って屋敷に入った。

（電話……仕事か）

そして彼は玄関から廊下に出ると、自分専用の和室に向かって歩いていく。

駿の部屋は比較的玄関から近い場所にあり、また扉を開けばすぐに縁側にでるという位置なので、すぐに彼は自室に到着した。

（取り敢えず着替えよう……
なんか制服って堅苦しいんだよなぁ～）

そんな事を思いながら駿は引き戸を引くと自室に入っていった。

駿の自室は普通の和室である。
部屋は青畳の十五畳とやや広めで、引き戸を開くと縁側から荘厳な日本庭園がうかがえる。

部屋の右側には着物が入っている棚と畳まれた布団がおいてある。
棚の上の壁には白い羽織りがかかっていた。
左側にはカレンダーと時計、それに何故か『苦笑』と書かれた額縁が壁にかかっていた。
またもう一つ棚があり、そこには本や漫画等が乱雑に詰め込まれている。

取り分け、何の変鉄もないただの和室。しかしこの部屋には唯一異質な箇所があった。

それは引き戸の反対側、一番奥にある段差がついたスペース。
そこにはポツンと日本刀が寂しく台の上に乗っかっていた。
鞘も柄も白く美しい日本刀だ…

しかし駿はそんなモノには目もくれず制服に手をかけると、着物の棚に近づいていった。

「うーん、伊澄がいないと暇だ」

暫くして駿はそんな事を呟きながら自室から出てきた。

そんな彼の服装は至って普通である。
Tシャツの上から青色のパーカーを着ていて、下は青いジーパンを身につけいた。

伊澄や初穂は着物である鷺ノ宮家に対し、駿の格好はかなり珍しいといえる。

「……そういえば電話がくるんだったな」

彼は大きく伸びをすると、自室から出て縁側に座ると、のんびりと庭を眺めて時間を潰す事にした。

～三千院屋敷～

段々と日が傾いてきて夕日が屋敷を朱色に照らしている。

竹田
『フハハハハ！！ブリトニーよ、貴様の攻撃はこの鋼のボディを持つ私には効かんぞォ』

ブリトニー
『くそ！！一体どうすれば…』
遂に現れた最強の敵！！
その名もＭＲ．超合金（フルメタル）！！
ＭＲ．超合金は全身をダイヤモンドより堅い鋼で覆った５丁目の竹田さんである。
得意料理は肉じゃが。
このＭＲ．超合金の前にはブリトニーのどんな攻撃も通用しない！！
果たして、ブリトニーの運命は！？

「……参ったな」

「参ったわね…」

屋敷のリビングではナギと伊澄が原稿を前に険しい表情をしていた。

「コイツ、ちょっと強すぎて倒せないな……」

「倒せないわね…」

元気にバク●ン中でした…

「こうなったらブリトニーの新たな必殺技を考えるか」

「必殺技ねぇ……」

伊澄は考えるように呟くと、

「でもその必殺技もＭＲ．超合金には通用しないわ！！」

「な、なんだってー！！」

伊澄の発言にナギは驚いて飛び退く。

「とんでもない敵を生み出してしまったな……」

「生み出してしまったわね…」

＊

～鷺ノ宮家～

リリリリ……！！

居間の電話が鳴り響いたのですかさず駿は電話を取った。

「ハイ、鷺ノｍｒ一何だナギか。え？何？ＭＲ．超合金？
あぁ伊澄が遅くなるのな…
あーハイハイ、分かった。執事に迎えに行かせるから勝手に帰すなよ……」

駿はそういうと受話器を元に戻した。

（……ＭＲ．超合金？）

ナギの電話中に出てきた謎のキーワードに首を傾げる。

リリリリ……！！

するとまた電話が鳴り響いた。

「はい、鷺ノ宮。
えぇ聞いております、先程お電話を頂いた……」

今度は別の電話だったようだ。
どうやら先程初穂が言っていた電話主のようだが…

「はい？夜な夜な神社の裏庭で奇妙な音が？

毎回賽銭も無くなる？
でも誰もいないと……
なるほど……わかりました。
ではこちらで調べますので。
えぇ、依頼は鷺ノ宮が承りました」

駿は受話器越しに数回頷くと、左手に持ちかえる。

「えぇ、大丈夫です。仮に妖怪類いの仕業なら駆除から９０日間は無料アフターサポートがつきますから。はい、電話を受ければすぐにお伺い致します。はい、では」

もう数回頷いて、受話器を元に戻した。

（……どこのパソコンメーカーだよウチは）

駿はため息をつくと、居間から出て自室に歩き始めた。

～三千院屋敷～

辺りもすっかり暗くなってきて、屋敷からは光が漏れている。

竹田
『ぐはぁ！？』

ブリトニー
『見たか！！このいかなる物質も砕く伝説の大槌『ピコピコ君』の力を！！』

竹田
『うぬゥゥゥゥゥゥ』

ＭＲ．超合金を倒すためにブリトニーはヤフオクで取り寄せた大槌を振るう。
ＭＲ．超合金の左腕の鋼は砕け、本物の左腕が露になった。

ブリトニー
『これで最後！！』

そしてブリトニーはピコピコ君を振り上げる！
遂に闘いに決着か！？

「うむ、取り敢えず何とかなったな」

「えぇ、でもまだ油断は出来ないわ」

疲れたように額を拭うナギに伊澄は原稿を持ちながらそう口を開いた。

「なぜなら、ＭＲ．超合金にはまだ最終兵器が残っているから！！」

「ぬわぁんだとォォォォ！？」

Gペンを手に持ったまま超オーバーリアクションをするナギ。

（ホントに楽しそうですわね～…）

そんな様子をマリアは呆れたように眺めていた。

＊

～鷺ノ宮家～

「よっと……」

光の漏れる屋敷の縁側から真っ暗になった庭に駿が降りてきた。

しかし彼の服装は先程までとは全く異なっていた。

上半身は藍色の半襦袢のうえに、白い羽織りを着ていた。

白い羽織りは右側の裾が不自然に長く膝手前まで延びていて右側は腰の辺りで止まっている。

また右側の肩の部分に青色のラインが一本入っていて、背中には何故か（辛）という文字が赤丸で囲まれて書いてある。

しかし反面、下は先程と変らず青いジーパンに靴下、靴は普通のスニーカーであった。

上は古風と下は今風という何とも不思議な格好だ。

「ほぅ、今から依頼かえ？」

「？」

そんな不思議な格好の駿が鷺ノ宮家の門まで向かおうと歩いていると後ろから声がかかってきた。

「げ、銀華ばあちゃん」

「全く、相変わらず奇妙な格好をしおってからに」

それは白い装束のようなものをきた銀華と呼ばれる女の子だった。
彼女は駿の近くまで歩いてくると姿を見ると眉を吊り上げる。

「良いんだよ、袴は動き辛いから……」

「フン」

銀華はその話題には興味が無いのかそう言って駿の右手に目を向ける。

「その白夜が必要となると、妖怪悪霊類いか？」

「さぁ、わかんない」

駿は右手に持っているモノ。
それは鞘も柄も綺麗な白で統一された美しい日本刀であった。
柄には縁の部分が薄い金色に装飾されている。

「最初にお前にソレを託した時はかなり不安だったがの……やっぱり未だに不安じゃな」

「あぁ、そうかい」

駿は後半の言葉に不満気に頬をひきつらせて返事をする。

「してどんな依頼なんじゃ？」

「あぁ、最近各地の神社の裏庭で夜な夜な変な声や音がして、賽銭箱等が度々盗まれたり、神社が荒らされたりしてるらしいんだ……それも荒らし方が人間の手によるものとは思えないくらい酷いらしいんだと」

「賽銭泥棒だぁ？」

駿は電話の内容を思い出すように話すが銀華はそれを聞いて呆れたような視線を向ける。

「んで、ここは妖怪類いの仕業なんじゃねーかって話らしい」

「そうか。ならば伊澄は呼ば無くて良いのか？」

銀華の言葉に彼はすぐに首を振った。

「大して巨大な魔があるわけでもねーのに二人も行く必要は無いだろ。それに……」

「それに？」

「可愛い妹をわざわざ危険な場所に連れていく必要も無い！！」

その言葉を聞いて、銀華はほとほと呆れたようにため息をついた。

「過保護も大概にせぬかお前。
嫌われる原因になるぞ」

「あ～、ハイハイ。
分ぁってるよ……」

駿は面倒臭そうに頭を掻くと、銀華に背を向けて門に手をかけて出ていこうとする。

「でも……」

「？」

彼は門の前で動きを止めて振り返った。

「降りかかってくる火の粉は、出来るだけ俺が被ってやらねーといけねぇんだ……」

そう言い残して、駿は門から出ていってしまった。

「ジュン君らしいですね」

「初穂か……」

銀華がやれやれと肩を竦めていると、縁側に立っていた初穂が声をかけてきた。

「全くいつからあんな妹馬鹿になってしまったのかの」

「あら、それは私達のせいではないですか？」

「む……確かに幼い頃から伊澄を守るようには言ってはきたが……アレはなぁ…」

銀華は縁側に飛び乗ると、初穂の横にちょこんと座った。

この銀華、実は駿達の曾祖母にあたる人物だ。

身なりも容姿も少女のように若いがこれでもなんと９１歳である。

「でも本当に良かったのでしょうか、伊澄ちゃんに伝えなくて」

「まぁ駿の言う通り、二人がかりで行く必要も無いだろうな」

「いえ、そうでは無くて…」

初穂は頬に手を当ててのんびり夜空を見上げる。

「ジュン君がまた一人で無茶するんじゃないかって、伊澄ちゃんが心配するから」

「……ま、心配いらんだろ」

銀華はそう言うと初穂に習って上を見た。
夜空には綺麗な月が朧気に輝いている。

「確かに奴には伊澄のような力は一切無いが……
剣の腕だけは飛び抜けておる。
なんせ、あの宝刀“白夜”を扱える唯一の人間じゃからな」

＊

～とある神社～

時間帯はすっかり深夜となり…
なんの変鉄もない神社は閑散としていて人気も一切無い。

が、その神社の広場には体長２ｍはある巨体な悪鬼がニ体のそりと立っていた。

一体は全身が緑色の身体に顔面はキョンシーのように大きな御札が張ってあり隠れている。
もう一体は真っ赤な身体に同じように顔面に御札が張り付けられている。

ニ体は右手に大きな鉈を持っていてそれを引きずっていた。

「ヘッヘッヘ……
兄者、今日暴れるか～」

緑色の悪鬼が汚ならしい笑いで赤色の悪鬼に目をやった。

「待たれぃ……
取り敢えず賽銭を頂こうや」

「あぁ、そうか～」

赤色の悪鬼の言葉に緑色の悪鬼はゲラゲラと笑うと、ニ体はのそりのそりと神社の本堂に向かって歩いていく。

それは明らかにその場には異質な光景であり、この世にはあってはならないモノだった。

「ヘッヘッヘ……」

ニ体が賽銭箱の前までやってくると大きな手を伸ばして……

「よぉ、賽銭泥棒さん」

「む！？」

暗かったので見えなかったが、賽銭箱の上には青年が乗っかっていたのだ。

悪鬼達は驚いて一歩後ろに下がる。

「よっと……」

賽銭箱から降りた青年は白く右側が膝まで伸びている羽織りに白い日本刀を持った……
鷺ノ宮駿その人であった。

「何だ貴様はぁ！！」

「そりゃこっちの台詞」

緑色の悪鬼の叫び声に駿は悪鬼達を面倒臭そうに見上げた。

「何で悪鬼羅刹が賽銭泥棒なんて狡い真似してんだよ。
日本昔話じゃあるまいし…」

「へッへッへ……
違ぇよクソガキ……」

今度は赤色の悪鬼が口を開いた。

「神社ってのはてめぇら下郎共の願掛け場みてぇなもんなんだろ。
俺達はそれをメタメタにするのが堪らなく楽しくてなぁ……
他人の祈願をぶち壊すのは蜜の味とでもいうのかねぇ……
賽銭は手土産だ」

「半端な嫌がらせだなぁ……」

駿は心底呆れたように呟くと悪鬼達を交互に見る。
すると悪鬼達は手に持っていて鉈を重々しそうに持ち上げた。

「ガキ、てめえ見てはならねぇもんを見たんだ……
だったら、分かるよなぁ？」

「兄者～、久しぶりに人の肉が食いてぇよォ～」

悪鬼達は大きく口を開くと僅かに汚ならしい歯を垣間見える。
そんな唸る悪鬼達を無表情で見返す駿。

「……」

「兄者～、俺に殺らせてくれ～」

緑色の悪鬼の言葉に赤色の悪鬼は了解したように横に捌けた。

「ヘッヘッヘ……へ、」

緑色は一歩、駿に足を踏み出すと……

「ウガアァァァァァ！！！」

物凄い速度で思いきり鉈を振り下ろした！！

地面は荒々しい音を立てて砂煙を巻き上げ……
緑色の悪鬼は矛先を見つめて気味悪く唸る。

「ヘッヘッヘ……、へ！？」

しかし次の瞬間、緑色の悪鬼の視界はグラリと揺れて、

「ヌウゥゥゥゥ！？」

まるで氷河が崩れるかのごとく、直立から地面に重々しく崩れ落ちた。

「何ぃ！？」

赤色の悪鬼がその光景に叫び声をあげ何が起こったのかと凝視する。

緑色の悪鬼は両足が無く、膝たちのような形で無惨な姿を晒していて、緑色の悪鬼の下腹部付近には鞘から抜かれた刀を横に寝かしている駿の姿があった。

そう。彼が悪鬼の両足を斬り捨てていたのだ。

そのまま駿は緑色の悪鬼の前で刀を上段に構え……

「ひい！？」

「……」

声を上げる間もなく縦一閃にその刃を振り抜いた。

「がは……！！」

緑色の悪鬼は真っ二つに裂かれて、黒い煙を吹き上げて消えてしまった。

「な、な……貴様ぁ！！」

その光景に唖然していた赤色の悪鬼は憤怒の表情で鉈を振り上げるが……

「っ！！」

「ォォ……！？」

その大きな隙を逃さず筈も無く、駿は日本刀を振り投げ、それは悪鬼の腹部に突き刺さった。

「な…何故……」

「……」

動きがピタリと止まった悪鬼の腹部から刀を横に引いて素早く切り裂いた。

「おォォォ……」

そのまま赤色の悪鬼は唸り声をあげながら地面に突っ伏した。

悪鬼はかろうじて顔をあげて目の前で日本刀を今にもトドメをさそうとしている駿の顔を見た。

「何故……何故俺達が斬れる…

貴様……何者だ……？」

「……」

しかし、駿はそれに答える事なく日本刀を悪鬼の胸の部分に突き立て……
悪鬼は断末魔をあげることも叶わずに、黒い煙となって風と共に消え去ってしまった。

彼の周りにはすっかり何事も無かったかのように閑散としている神社の広場が戻ってきた。

「さて……」

駿はようやく口を開いたかと思うと、賽銭箱の方に戻っていき羽織りの内側から何やら紙切れを取り出す。
その紙切れには家紋のような印が描かれていた。
その紙切れを賽銭箱の一番目立つ所に丁寧に貼る。

「依頼完了しましたっと。
……あ、そうだ」

駿はジーパンのポケットから財布をだして五円玉を賽銭箱に投げ入れた。
そして手をパンパンと叩いてお願いする仕草をする。

「えっと取り敢えず伊澄に彼氏が出来ませんように。
もし仮に出来た場合はソイツにありとあらゆる祟りを起こして下さい。あと伊澄に言い寄ってくる輩がいた場合は東京湾に沈める夢を毎日見せて、まずは精神的にｌｅｔｃ、ｅｔｃ……」

注）お願い事は一つにしましょう

「よし……
頼むぞ神様！！」

駿はうんうんと最低な思考に頷くと、羽織りの裾を翻して神社を後にした。

＊

～鷺ノ宮家～

ギィ……

「ただいま帰りました…」

「まぁ、お帰りなさい」

鷺ノ宮家の玄関からこっそり帰ってくると、初穂が隣の部屋から出てきてくれた。

「依頼は無事に終わったのね」

「えぇ、知らせておきましたので報酬は後ほど。
それより、伊澄は？」

「伊澄ちゃんならさっき寝ちゃったわ。ジュン君が帰ってくるまで起きてるって言ってたんだけれど…」

「あ～、そうですか
とっくに帰ってたか……」

駿は失敗したなと額に手をあてて呟いた。
そして恐る恐る初穂に尋ねた。

「怒ってました?」

「怒ってたわよ～」

「やっぱり……」

本当は伊澄が帰ってくる前に依頼を片付けておくべきだったのだが、悪鬼が出現するのに思いの外時間がかかってしまい、結局彼女に一人で依頼に向かった事がばれてしまったのだ。

「ずっと心配してたからね」

「あ～、そりゃ参ったな…」

駿は疲れたようにため息をつくと、明日の事を考え悩みに更けるのであった。

其の三　誰にだって少しくらい見せ場が必要（後書き）

妖怪退治は度々やるかもしれません。まだ未定です

次回は日曜日！！

そしてその次は月曜日、白皇学院で新たな展開です！

其の四　サ●エさんを見ると日曜日ももう終わりだなと切なくなる（前書き）

伽藍
「すみません！！ゴールデンウィークは予備校が忙し過ぎて息抜き小説であるこちらしか更新が出来ません！！」

駿
「まぁ、こっちはテキトーに書いても平気だからな」

伽藍
「それに書いてて楽しいから本当の意味で息抜きになるし」

駿
「なるほどね」

伽藍
「前回はこの馬鹿がカッコイイという感想やもっとカッコイイシーンを増やしてなども頂きましたが……
やっぱコイツは超シスコンの馬鹿です！！」

駿
「ほっとけ」

伽藍
「では、今回もシスコンパワー全開で始まります！」

其の四　サ●エさんを見ると日曜日ももう終わりだなと切なくなる

一面真っ白な景色……
何も無い真っ白な空間……

そこに一つのお好み焼きがポツンと現れた。
すると、その隣にもお好み焼きがポンと現れる。
更にその隣にもお好み焼きが現れる……

ポンポンポンポン……

そのまま間髪空けずにその隣、その隣お好み焼きが次々と姿を現していく……

お好み焼きお好み焼きお好み焼きお好み焼きお好み焼きお好み焼き
お好み焼きお好み焼きお好み焼きお好み焼きお好み焼きお好み焼き
お好み焼きお好み焼きお好み焼きお好み焼きお好み焼きお好み焼き
お好み焼きお好み焼きお好み焼きお好み焼きお好み焼きお好み焼き
お好み焼きお好み焼きお好み焼きお好み焼きお好み焼きお好み焼き
お好み焼きお好み焼きお好み焼きお好み焼きお好み焼きお好み焼き
お好み焼きお好み焼き……

「ああああああ！！！！」

そんな叫び声と共に、駿は自室で布団から飛び起きた。

「はぁ……はぁ……
どんな夢だよ……ったく…」

額の汗を拭うと一つ大きな息をついて周りを見回した。

（ああ、もう朝か……
あ～、昨日遅かったから寝不足だな……）

彼は掛布団を横に剥がすと、ゆっくりと立ち上がって頭を掻きながら引き戸に向かって歩いていく。少し長めの黒髪は寝癖でボサボサになり不恰好に跳ねている。

「……っ！！」

引き戸を開けると目映い朝日が部屋いっぱいに差し込んできた。
駿は眩しさのあまり思わず目を閉じてしまう。

暫くして瞼を開くといつもの通り、荘厳と佇む中庭が広がってきた。

「何か忘れて……あ」

ボケーとした表情のまま暫く中庭を見つめていたが、直ぐに昨日の事を思い出したのか眉を吊り上げた。

（あ～、そうだった……
昨日黙って行ったから、伊澄を心配させたんだっけか……）

彼は困ったように頭を抱える仕草をするとため息をついた。

（一刻も早く謝っとかねーと。
伊澄と一日、いや一時間でも口がきけなくなったら俺は死んでしまう！！）

拳をグッと握りしめるとブンブンと頭を振って眠気を覚ます。

（その前にシャワー浴びよ…）

其の四　　サ●エさんを見ると日曜日ももう終わりだなと切なくなる

「すまん！！」

「……」

居間では手を併せて頭を下げている駿とそれを椅子に座ってジト目で見つめている伊澄の姿があった。

「えっと……アレ。ちっぽけな妖怪だったし伊澄の手を煩わせる必要も無いかと…」

「……」

「あの……伊澄？」

駿は伊澄と会話をしようとそりゃもう必死である。
だって超シスコン野郎だから。
何よりも伊澄が大事だから。
伊澄に嫌われたら悲しくて死んじゃうから。

「……」

しかしそんな駿の表情とは裏腹に伊澄はジト目のまま。

「分かった！！
だったら伊澄！！お兄ちゃんが一緒にお風呂に入ってあげるから機嫌を直しー」

ポコ！

言い終わらないうちに伊澄が駿の頭を叩いて止めた。

「お兄様……」

「……はい」

伊澄の言葉に駿は丁寧に返事をして正座をしてしまう。

「また黙ってにお一人で出掛けられて…もし何かあったらどうするんですか」

「……すまん」

「お兄様の身体はお兄様だけのものじゃ無いんですよ。鷺ノ宮家にも依頼者の方にも影響があるんですから」

「……うん」

伊澄の前で肩を落としてどんどん萎んでいく駿。
妹に怒られて縮こまっている兄の姿は何とも情けないものがある。

「フフ、伊澄ちゃん昨日はずっと心配していたものね。話す事もジュン君の事ばかり」

すると、何処からかひょっこりと初穂が顔を覗かせて可笑しそうにそう言った。

「へ？」

「お、お母様！！／／／」

伊澄は慌てて立ち上がると初穂に向かって袖をパタパタと振る。
一方怒られていたと思った駿は思わぬ発言に驚いて彼女を見る。

「伊澄……」

「と、とにかく／／／
依頼があった時はちゃんと私にも言って下さいね」

伊澄は恥ずかしさからか顔を赤くしながらそう念を押したが…

「……伊澄、そんなに……そんなに俺の事を心配してくれるなんて！！」

「？」

肝心な部分は全く耳に入っていないようで、いきなり立ち上がると目を輝かせてそんな事を言い始めた。

「俺は今猛烈に感動している……そう。例えていうならかの有名な預言者モーセが囚われたヘブライ人を率いて紅海を二つに割き道を作った伝説を目撃するかのように……」

「お兄様…？」

「よし！！今日はお兄ちゃんが何でも頼み事聞いてあげよう！！
今日一日、俺は伊澄の事だけを考えて行動するぞ！！」

注）いつもの事です

「いえ、ですからお兄様」

「遠慮するな伊澄！！
今日はお兄ちゃんの日だと思ってたくさん甘えてくれたまえ！！」

「えっと……」

何をどうしたらこのような展開になるのかと、伊澄は彼の思考についていけないようだった。

先程まであんなに萎んでいたというのにもうこの様子である。
ただえさえ妹馬鹿な上に極端にゲンキンとくると見てる方も始末が悪いというものだ。

「……あ」

「ん？どうした？」

しかし暫くすると、伊澄は何かを思い付いたように袖を持っていった口を隠す仕草をした。

「そういえば一つお願いしたい事が……」

「おぉ！！何でも言ってくれ」

『伊澄の為なら例え火の中水の中だ』と豪語する駿（バカ）。
だったら本当に火に飛び込んで火だるまになってもらいたい。

「えぇ、実は今日ナギがウチに来るのですが…」

「あぁ、そうか。
料理でも作ろうか？それともお菓子でも買ってこようか？」

「いえ、もっと重要な事を…」

「重要な…？」

伊澄は頷くとそのまま駿の方を振り返るとキラーンと目を光らせた。

「私達の漫画のアシスタントをして貰います！」

「え……」

不用意な発言は思わぬ厄災を招く事がある。

「どうしてそんな苦い顔をされるんですか！！」

「いや……」

あからさまに嫌そうな表情をつくる駿にパタパタと抗議する伊澄。

「あ～他の事でも良いんだぞ？
もっと大変なー」

「アシスタントで……！」

キラーン……

「はぁ……分ぁったよ」

彼はため息をつくと渋々折れて頷いたのだった。

＊

「よし！！では只今より、対ＭＲ．超合金対策会議を始めたいと思う！！」

パチパチパチパチ

午後一時頃……

鷺ノ宮屋敷のとある和室ではＧペンを突き上げてそう宣言するナギと拍手をする伊澄、そして……

「うおぉいそこの馬鹿！！
なんでそんなにダルそうな顔をしているのだ！！」

「馬鹿って言うな」

「これはマジカルデストロイ始まって以来の危機だというのに！！」

「はぁ……」

物凄い面倒臭そうにあぐらをかいて肘をつく駿の姿があった。

「まぁ良い。
とにかく伊澄!!今回は遂にブリトニーとＭＲ．超合金との決着を着けるぞ!」

「えぇ、決着ね」

ナギが分厚い原稿を取り出すと、畳の上に広げ始めた。

「前回はブリトニーがヤフオクで落札した『ピコピコ君』でＭＲ．超合金を追い詰めるのだったな」

「えぇ」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

竹田
『ぐはっ!!』

ブリトニー
『見たか!!いかなる物質も砕く伝説の大槌『ピコピコ君』の力を!!』

竹田
『うぬゥゥゥゥゥゥ』

ＭＲ．超合金を倒すためにブリトニーはヤフオクで取り寄せた大槌を振るう。

ＭＲ．超合金の左腕の鋼は砕け、本物の左腕が露になった。

ブリトニー
『これで最後！！』

そしてブリトニーはピコピコ君を振り上げる！
遂に闘いに決着か！？

ーーーーーーーーーーーーーー

「という感じだが……」

「でもＭＲ．超合金には最終兵器があるのよ」

キラーン！

「……」

駿はそんな二人の様子を呆れたように眺めているとナギがビシッと彼に向けて指をさした。

「よしそこのアシスタント！！
この原稿のＤと書いてあるファイルに整理をしてくれ。
それからＢファイルとＣファイルの１９ページ、６ページをこちらに」

「……はいよ」

駿は渋々言う通りに原稿をまとめ、ファイルを整理し、Ｂ、Ｃと書

かれたクリアファイルの中から19と6ページと書かれた原稿を抜いてナギに手渡した。

「うむ、ご苦労」

「あのなぁ…」

その後もナギと伊澄によるバ●マンは続き……

「新しい原稿を二枚」

「ハイハイ……」

「ペンの替えを！」

「自分でとれよ……」

「む、今すぐスーパートーンが必要なのだ」

「これはこみっ●パーティーじゃねぇ！！」

そんな感じで暫くバタバタとしていたが、何とか二人（主にナギ）は落ち着いたようだった。

しかし……

ーーーーーーーーーーーーーーーー

竹田
『フハハハハ！！遂にこの力を解放する時がきたか！！』

ブリトニー
『何ィ！？』

竹田
「くらうがいい！！この鋼のボディから生み出される脅威の破壊力を持つこの攻撃をォ！！」

ブリトニー
「！？」

竹田
「超合金核融合光線！！」

ドオォォォォン！！

ブリトニー
「な、なんて攻撃だ！！地面が丸ごと無くなってしまうなんて！？」

竹田
「フハハハハ！！これで最後だブリトニー！！」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

「な、何という事だ……」
「何て事なの……」

ナギと伊澄は原稿を前にしてワナワナと震えている。
そんな中、駿がその原稿を持ち上げてまじまじと見つめて口を開く。

「なんつーか……よくこんな低レベルな事で悩めるなお前ら」

「て、低レベルとは何ですか！！」「そうだ！！相手はあのＭＲ．超合金なのだぞ！！」

「あのＭＲ．超合金ねぇ……」

必死に抗議する二人を前に駿は原稿から目を離すと、ため息をついた。

「まぁお前が楽しいなら良いんだけどよぉ……ここは常識人（この三人の中で）として言っておきたい事がある」

「「？」」

「最強の光線だが何だか知らねーが……」

二人は首を傾げてると駿は拳をギュッと握った。

「そんなもの、俺の陽電子バリアーが全て無効化する！！」
→
コイツも同レベルだった

「「……！！！」」

二人は大きな衝撃を受けたように目を見開く。

「なるほど、名案だぞ馬鹿！」

「馬鹿って言うな」

「早速取りかかりましょうナギ！」

「うむ！！」

そんな感じで賑やかに鷺ノ宮家が暮れていくのだった……

ーーーーーーーーーーーーーーー

ブリトニー

『陽電子バリアー！！』

竹田

『な、何ぃ！？我が光線を防いだだとォォォ！？』

ブリトニー

『今だ！！ブラックリストアタァァァァック！！！』

ドオォォォォン！！

竹田
『うわァァァァ！！！これでもうヤフオクで商品が出展出来ないィィィィィィィ！！』

竹田は断末魔の叫び声を荒野に轟かせ、爆発した。

こうして激闘の末、ブリトニーはＭＲ．超合金を倒したのである。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

＊

「いや、中々の激戦だったな……」

「えぇ。でも良かったわ」

太陽大分傾いた頃。
屋敷の門の前で向き合うナギと伊澄。
ナギの後ろには大きなリムジンとＳＰ達が立っていた。

「だがまだ油断は出来ない。
こうしている間にも落武者大将軍の魔の手は十二次元より迫っているのだ。砂糖危機が勃発する日も近い」

「そろそろ修行が必要かもしれないわね」

「うむ……なるほど。バトル漫画のお約束だな！」

伊澄の言葉にナギはうんうんと頷いて見せると片手を上げてリムジンの方に下がっていく。

「この事案は家に帰ったら考えてみよう。では、またな伊澄」

「えぇ、また明日学校でね」

「う、うむ……まぁ仕方ないか。明日だけは学校に行こう」

ナギは学校というワードに顔をしかめるが三度頷くとリムジンに乗り込む。

そのまま、扉が閉まるとリムジンは音をたてて屋敷から去っていった……

駿はと言えば……

「あ、もうサザ●さんの時間じゃん」

ナギ達が騒いでいた和室の後片付けをせっせと行っていた。

「つーか明日学校か……

伊澄とクラス違うんだよなぁ……アレ？」

散らかった消しゴムのカスをを掃除するために畳を拭いている時、

駿は不自然に膨らんだ一畳の畳に気が付いた。

「何だろコレ……」

不信に思った彼は畳に手をかけてそれを持ち上げた。
すると……

『淫らな人妻達～特別個人レッスン～』

「！！！？」

ピンク色が目立つ、女性の体が色々と露になっている表紙の本が姿を現した。
しかも一冊では無く何冊か重なっている。

（これはァァァッ！！）

駿はそれを見つけると途端に目を見開いて瞬時に周りを見回した。
誰もいないと確認すると、また本の束に目を戻す。

（そうだ……秋の大掃除の際に見つかる危険があった為に俺が部屋から移動させた秘蔵コレクションじゃねーかァ！！すっかり忘れてた……ここに隠していたのかっ！！）

額に手をやると安堵するようにため息をつく。

（危ねぇ……危うく自滅する所だったぜ……
こんなモン伊澄に見つかりでもしたら……間違いなく殺られる！！）

彼は冷や汗を流しながら本の束をそっとパーカーの内側に忍ばせた。

（とにかく、今すぐ緊急避難させなくては……）

服の中に本を隠しているのでかなり不自然な格好になっているが、そんな事はお構い無しに駿は直ちにこの和室を後にする。

運の悪い事にこの和室から彼の自室までは結構な距離があった。

（だが幸い今伊澄はナギの見送りに行っている筈……玄関に近付かずとも自室に戻る事は容易い。ならば行動あるのみだ！！）

そうして駿は早足で廊下を歩き始めた。

一つ、二つ……角を曲がって徐々に近づいてくる目的地。

（よぉし！！あとはストレートのみ！！これなら……）

「お兄様？」

「はうっ！！」

前方に自室が見えた瞬間、駿の後ろから伊澄の声がかかった。

彼は全身を強張らせると、ゆっくりと後ろに振り返る。

「あ、あぁ……い、伊澄か。
ナギはもう帰ったのか？」

「えぇ。あの……大丈夫ですか？顔色が悪いようですが…」

「い、いや！！大丈夫だけど！？

あれ、でもちょっとアレがアレだから一旦自室に戻るよ」

駿はひきつった笑みを浮かべるとそくさくと部屋に戻ろうと足を進めるが……

「お兄様」

「ッ！？」

伊澄は真剣な表情で駿の服の裾をキュッと掴んで止めた。

「今朝も言いましたけれど……
黙って一人で行かないで下さい」

「え？」

「確かにお兄様は強いです。
でも、もしお兄様に何かあった時に私達が何も知らなかったら……」

そう言うと裾を掴んだまま悲しそうに俯いてしまう。

「……ったく」

すると彼女の頭の上にポンと手が置かれた。
そっと見上げると優しく微笑む駿の姿。

「……？」

「何を心配してんだお前は。

いつも言ってんだろ。
俺は絶対お前を一人にしない……どんな事があっても、それだけは約束する」

駿はそう言うとクシャクシャと伊澄の頭を撫でた。

「お、お兄様……／／／」

伊澄は恥ずかしそうに、だが満更でもなさそうな表情で顔を赤くした。

「んじゃ、俺はもう行くー」

バサッ！！

そんな様子を見て駿は頷くと部屋に戻ろうとした時、彼の懐から何かが伊澄の足元に散らばった。

「？」

（まさか……！！？）

彼は思い当たるただ一つの事態に顔を真っ白にして固まる。

「……」

伊澄は何かとそれを拾いあげ、

そして、ピタリと止まった。
彼女の手には例の本数冊が……

「……」

「い、いや!?
違うぞ伊澄!!これはその…!!」

「お兄様……?」

「は、ハイ……?」

駿は物凄い冷や汗をかきながらあたふたと目の前で手を振るが、伊澄はジッと例の本を見つめると彼に向ける。

「『淫らな人妻達の特別個人レッスン〜色んな縛り方を教えてあげる?〜』?
色んな縛り方?一体何を縛るんでしょうね?」

「い、いやぁそれは……えっといらなくなった漫画とかかな?」

駿は何とか視線を外して無理矢理言葉を絞り出す。
しかし伊澄は構わず二冊目の本の表紙を彼に見せる。

「『淫乱学園〜貴方色に染まってあげる?〜』
どんな色なんでしょうね?」

「いやぁ、アハハハハ……
赤色かなぁ?それとも青色?」

駿はもう必死に口元をひきつらせて目を白黒させて答えるが、更に彼女は三冊目の本の表紙を彼に見せる。

「『淫乱妻達の午後～特別料理は夫に内緒～』特別料理？それはどんなお料理なんですか？」

「……カレーかなぁ？ハハハハ！！ハハ…ハ…ハ…」

言わずもがなかも知れないが、伊澄は駿を見て微笑んではいる。勿論後ろにはもれなく物凄い黒いオーラが立ち上っているが…

「すみませんが執事の皆さん？」

「「「ハッ！！」」」

伊澄がそう呟くとどこからともなく執事達がサッと現れた。伊澄は彼らにその本を手渡してこう言った。

「燃やして下さい」

「えぇぇ！？」

驚愕の表情の駿を横目に執事達は『わかりました』と頷いて本をとってその場から去っていった。

「ちょっ伊澄！？アレは俺の秘蔵のー」

「お・に・い・さ・ま？」

ゴゴゴゴゴゴ……！！

「……い、伊澄……さん？」

「縛られるのが好きなんですよね？お兄様」

＊

居間では初穂と伊澄がお茶をすすっていた。
すると初穂が気付いたように天井を見上げる。

「そういえば伊澄ちゃん、ジュン君はどうしたの？」

「知りません！あんな人…」

プイッと顔を背けると伊澄は怒ったように答えた。

～中庭の隅～

「……」

鎖でグルグル巻きにされた駿が木にぶら下がっていた。

「落ち着け俺……これは嫉妬なんだよな。
伊澄は自分を見て貰いたいんだけどっていう……そうなんだろ？
そういう事なんだよな、前向きに考えろ俺！！ポジティブにポジティブに！！」

ブラブラと揺れて独り言を呟く駿。端から見ると変人以外の何者でも無い。

「ポジティブに……ポジ……
やっぱ無理ィィィィ！！助けてくれェェェェェ！！」

暫く中庭には悲痛な馬鹿の声が響き渡っていたのだった……

其の四　サ●エさんを見ると日曜日ももう終わりだなと切なくなる（後書き）

～妖怪目録～

ＮＯ．１【赤鬼・緑鬼】

［外見］
体長２ｍ前後で、
顔面は御札で隠れていて、全身はほとんど裸体に近い悪鬼。

［説明］
ニ体はの兄弟で、赤色が兄で緑色が弟。
腕力が取り柄の暴れん坊の妖怪である。
力以外はほとんど力が皆無なので妖術などには滅法弱い。
体長ほどの大きな鉈を振り回して戦う。

［伝承］
遥か昔、とある村に仲むつまじい兄弟が住んでいたが戦で村は全滅し兄弟も死んでしまった。
以来仇を打つために、自分達を殺した軍の大将を探して現世をさ迷い巡っている。

其の五　最上階って何か良い響きがする（前書き）

前回指摘があった為、クラス名を変更いたしました。

ナギ達は一年七組

駿達は一年三組とさせていただきます。

伽藍
「次回辺りに前書きに主人公の簡単なプロフィールを載せるかもしれません」

駿
「ろくな紹介にならん気がする」

伽藍
「では、始まります♪」

其の五　最上階って何か良い響きがする

〜一年三組〜

ガラ……

「んじゃ席につけ〜」

朝の白皇学院高等部一年三組。
ガヤガヤとしていた教室は薫先生が入ってくると、静かになって生徒達は各々着席し始めた。

「あれ？」

「どうしたんだヒナ？」

既に着席していたヒナギクは向かい側の空いた席を見て首を傾げた。
それに隣の千桜が反応する。

「鷺ノ宮君、まだ来てないみたい」

「遅刻みたいだな」

「でもさっきナギと鷺ノ宮さんには会ったんだけど……」

そんなヒナギクに千桜は『迷子になってるんじゃないか？』と言お

うとしたちょうどその時、教室の引き戸が不躾に開いた。

「お……は…ようござ…います」

「「「!?」」」

そして、室内に入ってきた人物の姿を見て生徒達は目を見開いて驚愕の表情を浮かべた。

ソイツは頭から水を被ったかのようにずぶ濡れになっていて黒い髪からはまだ僅かに水が滴っている。更にボロボロの制服に肩で息をしている無惨な姿をさらす……

「ぜぇ……ぜぇ……」

鷺ノ宮駿、その人であった。

「あ、あ～、鷺ノ宮？
お前またなんでそんな事になっているんだ？」

「え……えっと…」

薫先生が恐る恐る尋ねると、駿は扉の前で、濡れた髪がかかった顔を上げて曖昧に言葉を濁します。

それを見たクラスメートの女子の中には……

（（（あ……ちょっとカッコイイかも…／／／））））

等と一部顔を赤らめている者も居たが、それは今は置いておこう。
話を戻して、
何故彼がこんな無惨な姿になっているのか？
それは遡る事一時間ほど前の話になるのだが……

○

晴れやかな朝……
鷺ノ宮家の門の前には自転車の横に立つ駿と伊澄の姿があった。

「よし、んじゃ今から学院に行く訳だが……」

「？」

「くれぐれも迷子にならないように気をつけるんだぞ？」

駿は自転車から伊澄に目を向けるとしっかりと念を押した。

「お兄様の自転車の後ろに座っているだけ。
それで迷子になる事なんて不可能です」

「お前はその不可能な事を成し遂げるから言ってるんだよ」

「どういう意味ですか！！」

パタパタと袖を振って駿に抗議の意を示す伊澄。

彼はそんな姿も可愛いなぁと思いながら自転車に乗った。

「ほれ、乗った乗った」

「む～……」

伊澄はジト目で少し拗ねた仕草をするが、自転車に横に座る。
彼は苦笑混じりにそれを見ると、前を向いてペダルに足をかけた。

「さて、行くか……」

＊

数十分後……

「何でだァァァ！！！」

駿が不意に後ろを振り返ると自転車の後ろにはあるはずの伊澄の姿が消えていた。
彼は自転車を急停車させると、慌てて来た道を全力で戻り始める。

「どうしてだ！？ただ座っていりゃいいのに！！
何でここから迷子になるんだよアイツは！？」

彼はとにかく戻りながらもてる動体視力全てをフル活用して伊澄を探す。

一つ目の角、二つ目の角……
右側の十字路、左側の十字路……住宅街の大通り、小道、脇道……

（やっぱいねぇ！！
つーかこの短時間でどこまでいけんだよ！？）

駿は更にペダルを漕ぐ力を早めるが……

バキッ！

「あぁ！？」

勢い余ってか、ハンドルからブレーキレバーが思いきりもげてしまった。
ちょうど坂道に入る直前である。

（やばっ……！？）

そう思ったが、自転車は一気に坂道を下り始めた。
ぐんぐんとスピードを増して坂道を走り抜ける自転車。

（！？）

すると前方の角からちょうど車が通り抜けようと姿を現していた。

（このままいけば……いや、大丈夫だ！！まだ余裕があらぁ）

しかし止まらない自転車と車まではまだ距離があり、角に到着するまでに車が行ってしまうだろうと駿は考えた。
そして車は通り抜けようと……

ゴン！！

（な……長っ！！）

駿の自転車は思いきり車に激突して宙に放り投げられた。
なんとその車は物凄い長くリムジンだったのだ。

「む……？」

「どうしましたナギお嬢様？」

「いや、今なんかがぶつかったような気が……」

「気のせいでしょう」

リムジン内ではそんな会話が行われていた。
一方駿は……

「……」

放り投げられた自転車ごと、下の川に落下していて、全身がずぶ濡れになっていた。

川は浅瀬になっていて彼は暫く俯いたまま座って黙っている。

『あ～！見て見て！変な男の子がいるよ～』
『あ、ホントだ～！！』

「！？」

すると、突然駿の周りには全身が水色の小人達が現れた。
頭でっかちで翼が生えた不思議な生き物である。

『あ～、人間だ』
『ホントー？』

更にまた新しい水色の小人達がぴょんぴょんと現れた。
そしてバシャバシャと駿に水をかけていく。

「バッ！？……冷た！！」

『アハハ～、嫌がってる～』
『冬の川は冷たいもんねー』

7～8匹の小人は彼に水を被せながらその反応を見て可笑しそうに笑っている。

『あ、何か鞄持ってるよ～』
『食べ物かな～？』
『貰っちゃえー！！』

「！？」

小人達は駿の鞄を取り上げると、そのまま川の向こうに飛んでいってしまった。

「……待ちやがれ童共ォォォォ！！！」

『アハハー！！』

『鬼ごっこだ～』

駿は川の水を掻き分けて小人達の後を追っていった……

ーーーーーーーーーーーーーーー

とまぁそんな事があって、彼はその４０分後に何とか鞄を取り戻して白皇にやって来たのであった。

因みに白皇に着いた際、ナギが迷子中の伊澄を拾っていた事も分かり、そのまま自分のクラスに行った結果、この通り遅刻した訳である。

「実は……家の水道管が破裂して……」

「あ、あぁ……そうか。じゃあ自分の席に着いて」

駿は濡れたのまま薫にテキトーな言い訳をする。

彼も大して突っ込む気は無いようで頷くと駿を席に促した。

それに従って駿はノロノロとした足取りで着席した。

「それじゃ、ＨＲを続けるぞ～」

＊

取り敢えず授業が始まり、先生が教室に入ってくる。

「はーい！
それじゃ授業を始めます。
具合悪い人とかいない？」

「先生ー、鷺ノ宮君が机に突っ伏したまま動きません」

一人の生徒が手を上げて駿の席の方を見た。
先生は彼の机に目を向ける。

「鷺ノ宮君？大丈夫～？」

「……」

返事が無い。ただの屍のようだ…

「……授業を始めまーす」

＊

キーンコーン……

「……んん…」

頭に鳴り響いたチャイムで、駿は重たい瞼をゆっくりと開いた。
目に飛び込んでくるのは教室の白熱灯の光。

駿はスッと頭を上げるとキョロキョロと周りを見回した。
室内ではぞろぞろと生徒が鞄を持って帰り支度を始めている者や、
既に帰っている者もいた。

「……まるで長い夢でも見ていてようだ」

「ようだじゃなくて、本当に寝てたんでしょ」

「？」

駿がそんな事を呟くと、後ろから声がかかった。

「ん、あぁ……
えっと……柱か。おはよう」

「もう放課後よ……」

振り返るとヒナギクが呆れたように腰に手をやってため息混じりに
駿を見ていた。

「放課後って……まだ昼じゃねーか。今日も午前授業なのかい？」

「えぇ。なんでも理事長（代理）や校長達が用事があるみたいね」

「ホント自由奔放な学校な…」

駿は再度周りを見回しすと、肩を竦めて苦笑した。

「でもまぁ、そういう事なら俺は伊澄を迎えにいくかね…」

「お、いたいた」

彼は伸びをして席を立ったちょうどその時、三組の後ろの扉が開いた。

「ん…？伊澄」

「ナギも」

二人が後ろを向くと、教室にナギと伊澄が入ってこちらに向かってきていた。

「どうしたの？」

「いや……」

ヒナギクがナギに尋ねると彼女は伊澄を見た。

伊澄はとことこと駿の元へ歩いていく。

「お兄様、今朝はご迷惑をおかけしました……」

「おぉそれそれ。お前どこにいってたんだよ」

駿は思い出したように頷いて伊澄に顔を向けた。

「えっと、それは……」

「伊澄ならウチの屋敷の入口で迷子になっていたんだ。
それでまぁ、一緒に来たわけなのだ」

「な、ナギ……！！／／／」

迷子になってないとパタパタと抗議する伊澄。

「ま……海を越えなかっただけ良しとしとくか……」

「海って……」

そんな事を呟く駿にヒナギクは半信半疑で突っ込んだ。

「でもこれからは気をつけろよ？登校中はちょっと動いたらダメだからな。ジッとしてるんだぞ？」

「む……ちょっと大袈裟に言い過ぎのような気がします…」

「現に今日も迷子になったろ？」

「今回はたまたまです！
いつもじゃありません！」

兄に向けて袖を振って抗議する妹。後ろにはヒナギクとナギが並んで二人を眺めていた。

「二人は仲が良いのね」

「あんな兄貴がいたら間違いなく私はグレるけどな」

ナギは呆れたように駿を見ると首を振ってみせた。

「それじゃ、私は生徒会に行くから。ナギもこの調子でちゃんと学校に来なさいよ」

「ふん、その分はいずれ目一杯サボってやるからな」

「もう……」

ヒナギクはため息をつくと、片手を上げて教室からでていった。

ナギは彼女を見送ると、鷺ノ宮兄妹に目を戻した。

「オーイ、伊澄とそこの馬鹿。
そろそろ帰ろう」

「……そうね」

「だから馬鹿って言うな」

伊澄は頷くとナギの所に寄っていき、駿は机に戻って鞄に手をかけた。

ガラ……

「え～と……
あ、鷺ノ宮～……いたいた」

「「？」」

急に扉が開くと薫が教室に顔を覗かせて駿達に目を向けた。

「あぁ、いや……
えっと兄貴の方だ。鷺ノ宮兄の方……」

「え、俺ですか…？」

薫はそう言うと駿にゆっくり近づいて目の前に立った。

「えっと……？」

「あの……お兄様が何かご迷惑をおかけしましたか？」

駿の前に立った薫に伊澄が慌てたように尋ねた。

「オーイ、何で迷惑って決め付けんだ？」

「いや、普通の考えだろ」

思わずジト目になる駿にナギが冷静な一言をぶつけた。
すると薫が首を振って答えた。

「いやいや、別にそんな事じゃないんだ。
ただちょっと頼みがあって」

「頼み？」

「あぁ。
あ～……唐突な話なんだが、お前生徒会をやる気はないか？」

「「え！？」」
「……はい？」

全く予期せぬ頼みに駿は勿論、ナギと伊澄も思わず声を上げてしまった。

「えっと……どういう事でしょうか？」

「いや、実は……
ウチの生徒会で先月会計が一人止めてな。今は生徒会の他のメンバーでやりくりしているみたいだが、広い学校だし、大変な仕事だからやっぱり必要との事らしい」

「はぁ……」

「ただ中々普通の生徒には出来ないし、任せられない。
第一やりたがらない。
そこで編入生のお前にやってもらいたいんだと」

「いやいやいや！？
ちょっと待って下さいよ。
そんな大変な役職に何で俺なんかが？」

駿は薫の話す内容についていけないようで慌てて手を振ると、一旦話を止めた。

「俺もよく分からないけど、お前の編入試験の結果と経歴書を見た理事長が『彼ならば適任だ』と言ったそうだ」

「え、あの試験散々でしたよ俺……」

「さぁ。その辺の事は詳しくは分からないけど……とにかくそういう事なんだ。勿論強制とかでは全然無いし、断ってくれても構わない」

薫の言葉に駿は顎に手を当てて考え込む。

（うーん、生徒会ねぇ……疲れるだけであまりメリットは無さそうだな……何より忙しい仕事なんだろうし、その分伊澄といられる時間が少なくなるだろうからな）

一通り考えを巡らせると駿は薫の方に顔を戻した。

「すみません。やはり俺にはー」

「ちょっと待った！」

「！？」

彼が断りの返事をしようとした時、いきなりナギが彼の袖を掴んで引っ張っていった。

二人はそのまま廊下に出る形となる……

「オイオイ、何だよ一体？」

「……」

ナギはそのまま耳を貸せと手で仕草をする。
駿は仕方なく言う通りに屈んでナギに顔を近づけた。

「いいか？よく聞けよ」

「あぁ、何だよ」

「生徒会になればこれまで以上に伊澄の身の安全が保証できるのだぞ」

「？」

ナギの言葉に駿は首を傾げる。

「お前は伊澄に恋人とかが出来て良いと思うか？」

「断じて許さん」

「だが今のままではお前達は別々のクラスだ。お前は伊澄に目を配りにくいし、様子も分からない。だが生徒会に入れば違うだろう。生徒会という名目の元に行動出来るし、伊澄に変な虫がつかないようにし易くなるやもしれん」

「な、なるほど……」

「それにだ…」

ナギは顔の前で人差し指を立てて続ける。

「生徒会を上手くこなせば伊澄の好感度も今よりもっと上がるんじゃないか？」

「……！！」

「少なくとも大変な仕事をこなす男はカッコイイものだ。
そうなればきっと伊澄も嬉しいに違いない」

ナギがそれはダメ押しの一言となった。

「フッ……生徒会。満更悪くねーかもな……」

（なんて扱い易い奴……）

「仕方ない。そうまで言われたらやるしかねーか……」

駿は無駄にカッコイイ微笑をすると、ゆっくりと立ち上がって廊下から教室へと戻る為に足を進め始めた。

（ま、全部嘘なのだがな……
今よりやるべき事が増えれば、
少しはアイツが妹離れするいい機会になるだろう
あのうざいキャラを毎日見なくても良いというものだ）

ナギは肩を竦めると、彼の後を追って教室に入っていった。

「おぉ！やってくれるのか！」

「えぇ。そこまで言われるとお頼みを無下にするもの申し訳ありませんから」

ニッコリと笑ってそう答える駿。薫はホッとしたように息をつくと、『じゃあ後でこの場所に行ってくれ』と言って駿に地図を手渡した。

「生徒会のメンバーには事情を伝えておくから。今日中に挨拶をしておいてくれ。それじゃ、俺はガンプ……仕事があるから」

彼は片手を上げると、そくさくと教室を後にした。

残ったのは三人だけ……

そんな中、伊澄は不安と心配がいり混じった表情で尋ねる。

「お兄様……えっと、本気なのですか？」

「おぅよ。ま、何とかなんだろ多分」

「まぁ、お兄様が決めた事でしたら……、でもどうして突然？」

「そりゃお前……学業に生徒会、華麗に両立してみせてー」

「よし、では我々は帰るか伊澄」

見事に駿の台詞を遮り、ナギは伊澄に話しかけた。

「オーイ、ナギちゃん？

今結構良い所だからね。決め台詞をいうくらい大事なシーンだからね」

「あぁ、一人でいくらでも練習しててくれ」

「いや、そうじゃ無くて…」

しかし、駿の言葉も虚しくナギは簡単に払い除ける。

「とにかく、お前は早く生徒会室に挨拶に行ってくるのだ。これからパシリになる哀れな男をヨロシクと」

「いやパシリじゃねーよ」

「特技は焼きそばパンを3分以内に買ってくる事ですって」

「だからパシリじゃないからな!?」

ナギと駿の即興漫才の間でオロオロとする伊澄。

「とにかくうだうだ言ってないで行ってこい。話はそれからだろ」

「……分かったよ。んじゃ伊澄を頼むな」

「うむ」

駿は頭を掻くと、ナギにそう言って教室の入口まで歩いていく。

「んじゃ伊澄、また後で家でな」

「え?えっと、はい……」

そのまま軽い足取りで教室を後にしていった……

「さて……ん？
どうしたのだ伊澄？」

「いえ……何でも……」

「大丈夫か？」

ガランとなった教室では何か不安そうな表情の伊澄と首を傾げたままのナギの姿が残っていた。

～生徒会室～

ここは白皇学院生徒会室。
時計塔（ガーデンゲート）の最上階に位置するこの部屋は別名“天空の間”とも呼ばれている。

この生徒会室のバルコニーから一望出来る東京都の景色は絶景で、夜になれば１００万ドルの夜景が堪能する事が出来る。

そんな生徒会室の中心に位置する長テーブルには生徒会メンバーが

座っていた。
まずテーブルの一番前の所にヒナギク。その横には千桜と薄紫色の長い髪をした綺麗な女子が座っている。
更にその隣には灰色の髪をカチューシャで後ろにまとめた女子、紫色の髪に二つゴムで留めた女子、黒のセミロングの髪の女子が座っていた。

「ねぇ美希、今日来るって言う会計の子は男子生徒なのよね」
ヒナギクが灰色の女子に尋ねると彼女はコクリと頷いた。
「うむ。薫先生の話によるとな」
「しかしその彼は幸運な奴だな。このような女子だけの生徒会幹部にたった一人の男子として入るのだから」
今度は黒髪の女子がフッと微笑してそう言った。
「でもどんな子か楽しみだね～♪」
「そうですね。
（弄り甲斐がある子かしら？）」
快活そうに笑う紫色の少女と、ニッコリと少しS気味に微笑む薄紫色の女子。
コンコン……

すると、生徒会室の扉からノックする音が聞こえてきた。

「噂をすれば……来たみたいですね」

千桜が扉の方に目を向けてヒナギクに言った。

「どうぞ。開いているから入ってきて」

ヒナギクが扉にそう声をかけると、扉は若干遠慮がちに開かれた。
そして生徒会室に顔を覗かせたのは……

「どうも。えっと会計で来ました鷺ノ宮駿という者ですが…」

「「あ……」」

駿の生徒会メンバー参入の始まりであった……

其の五　最上階って何か良い響きがする（後書き）

～妖怪目録～

ＮＯ．２【河川童子】

［外見］

全身が水色の小人。
体長は６０ｃｍくらい。
背中には水色の小さな羽が生えている

［説明］

川辺や河口付近に数多く生息する小人の妖怪。
基本的に人間には全く害は無い。ただ、とにかく悪戯好きで姿を消しては度々小さな悪戯を仕掛けることがある。

［伝承］

色々と謎の多い妖怪で、伝承は多種多様である。
一説では、水にまつわる神様の子分達であり、各地に散らばって川や湖の様子を神様に届ける伝達係のような役割であると言われている。

其の六　仕事の描写なんかはテキトーで良いと思う（前書き）

伽藍
「え～、前回主人公のプロフィールを載せると言いましたが……
もう少し先になりそうです」

駿
「まだ語れないネタバレ要素が多少はあるからな～」

伽藍
「馬鹿なシスコンプロフィールだけなら簡単なんだけどね。
ちょっとは秘密要素もあるから。まぁ、残念な部分８割、マシな部
分１割、謎１割みたいな…」

駿
「……俺はホントに主人公なんだろうか？」

伽藍
「……ホントにな」

では、始まります？

其の六　仕事の描写なんかはテキトーで良いと思う

其の六　仕事の描写とかはテキトーで良いと思う

ガチャ……

「すみません。会計で来ました鷺ノ宮駿という者ですが……」

「「あ……」」

生徒会室の扉が開らくと、そこから顔を覗かせてたのは駿であった。
ヒナギクと千桜は彼を見ると思わず声を上げてしまう。

「あれ……二人共？」

「「鷺ノ宮君？」」

駿は二人を見て首を傾げるとキョロキョロと生徒会室を見回して恐る恐る入ってきた。

「……えっと、ここは生徒会室でいいのか？」

「え、えぇ……

新しく来る生徒って、貴方だったのね」

ヒナギクはテーブルから立つと駿に近づいていった。

生徒会室にいた残りメンバーも駿に顔を向けている。

「じゃあ新しい会計君、生徒会にようこそ、でいいのかしら？」

「あぁ。しかし二人共生徒会だったのか…」

駿がヒナギクと千桜を交互に見ると二人は頷いた。

「えぇ。私は生徒会書記。

それで彼女は生徒会長です」

「せ、生徒会長ォ！？」

「「？」」

彼は驚いたようにヒナギクを見ると声を上げた。

「生徒会長って学校の全てを統括し掌握するボスと言われる存在だろう！？」

「全然違うわよ…」

「でも取り敢えず偉い実力者なんだろ？マフィアのボスみたいに」

「……何か嫌なんだけどそのまとめ方」

ヒナギクは呆れたように駿に突っ込む。
すると彼女の後ろでスッと立ち上がる生徒がいた。

「その通り……ヒナはこの学校全ての生徒の命を握っているボス。
白皇の頭……」

「言わばミス白皇……！！」

「なのだ～♪」

立ち上がったのは灰色の髪の女子、黒髪の女子、紫色の髪の女子の
三人の生徒だった。
三人は駿の元にゆっくりと歩いてくる。

「アナタ達！！何言ってー」

「えっと……？」

駿は三人を見て尋ねると、まず紫色の女子が前に出た。

「私は瀬川泉！！
いいんちょさんレッドだよ♪」

「そして私は花菱美希……
レッドを支える副委員長ブルー」

続いて灰色の女子が泉の横にスッと出る。更に…

「敵か味方か！？
風紀委員ブラックとは、私朝風理沙だ！！」

黒髪の女子が美希の反対側に出て、三人はそれぞれ戦隊もののようなポーズを取った。

「「「ザ・生徒会役員！！！」」」

ドーン！！

「「……」」

三人の後ろには何故かアクション映画のように爆発音が……

「あ、あぁ……
俺は鷺ノ宮駿。一年三組です」

呆れているヒナギクの横で駿は若干困ったように挨拶をする。

「うむ、よろしくな駿君」

「よろしくね～♪」

「では、君にはちょうど余っている黄土色の称号をあげよう」

美希、泉、理沙の順に各々口を開いて挨拶を返した。

「いや、もう少しマシな色は無いのかよ」

「ほぅ、黄土色は嫌か。
では特別にホワイトの称号をあげよう」

「では駿君、君は今日から“会計ホワイト”だ！！」

「……えらく弱そうな奴だなソレ……」

美希達がビシッと彼を指差してそう宣言する。
駿は“会計ホワイト”の称号を手に入れた！（テイ●ズの称号ゲットの音）

「では改めて。
私は春風千桜。書記をやってます」

「あぁ、春風も生徒会だったんだな。よろしく」

改めて挨拶をする千桜に駿は軽く会釈を返した。

「じゃあ私の番かしらね…」

「え、あ……え！？」

千桜の隣に顔を向けた彼はいきなり声を上げて目を見開いた。

「あ、あ、愛歌さん！？」

「久しぶりね駿君」

「「え？」」

驚く駿にニッコリと微笑む愛歌。そんな二人の様子を不思議そうに見る生徒会メンバー。

「え……二人は知り合いなの？」

「あ、あぁ……愛沢家の繋がり同士の付き合いでよくお会いする事があって……」

「へぇ」

ヒナギクが尋ねると駿は頷いたが、まだ少し驚きを隠せない様子。メンバーは意外そうに彼を見つめた。

「最後に会ったのは何ヶ月前だったかしら？」

「えっと確か……
咲夜んトコの集まりがあった時でしたから……もう一年以上前になりますね」

「まぁ、そんなに……」

愛歌は頬に手を当てると、鞄から何やらノートを取り出した。
表紙には“ジャプニカ弱点帳”と書いてある。

「色々と面白い話（弱点）も沢山あるけれど……
また増えるのかしらね♪」

「「「……！！」」」

彼女はノートを開くと面白そうに微笑んだ。
このノート、ご存知かと思うが表紙のタイトル通り弱点帳である。
あらゆる人の弱点が収められていると思われる究極のノートなのである。
勿論、愛歌の目は完全にSモードに入っている。

「ん〜、
駿君のので面白い話は……去年の4月12日、咲夜さんの屋敷の廊下で私にー」

「わあァァァァァ!!!
ちょっ、何を言い出すんですか!?何か知りませんがダメですよ!!」

「そう?面白いと思うけど」

「俺は絶対面白くないと思います!!」

「それは残念ね」

愛歌は慌てている駿に微笑むとノートを閉じた。
良いように手玉に取られている様子は何とも情けないものがある。

(((あぁ……
彼は既に弱点帳の毒牙にかかっていたのか……)))

弱点帳の事を知っている他のメンバーは気の毒そうな視線を送るのだった……

＊

一方帰宅中のナギ達はリムジンの中に乗っていた。

「それで東中野三丁目が……
ん……どうしたのだ伊澄？」

「え？」

ナギは話しの途中でポーッとしていた伊澄に気付いたのか、首を傾げて彼女に尋ねた。
基本的に彼女はいつもポーッとしているが、ナギの話の時にこんな風になるのは珍しい。

「何か気になる事でも……
あ、もしかしてあの馬鹿の事か？ってそんな訳ｎｉ」

「ふぇ！？」

ナギは冗談混じりに話したが、伊澄はビクッと肩を震わせた。

「え……まさか伊澄。
駿（アレ）みたいに寂しいとか言い出すんじゃ…」

「ーーっ！！／／／」

ブンブンと首を振る伊澄。
どうやら違うと言いたいようだ。

「アッハッハッハ！
ま、軽い冗談だ」

「ーー！！」

冗談めかしく笑うナギに今度は伊澄はパタパタと袖を振って怒ってみせた。

「だが、心配だという表情はしているな」

「それは……」

「一体何が心配なのだ？」

ナギがもう一度尋ねるが、伊澄は何故か黙ってしまう。
そして暫くすると『何でもないわ』と答えた。

（まさか……伊澄の奴……）

その様子にナギは思考を巡らす。この時彼女の頭にはある考えが一瞬過っていたが……

「ナギ？」

「ん？あ、あぁ……何でもないぞ」

伊澄に話しかけられて我に返る慌てて返事をする。

（まさかな……）

ナギはその考えを頭を振って否定する。

二人を乗せたリムジンは屋敷に向かっていくのだった。

＊

～生徒会室～

「では！！

生徒会恒例の、“新メンバー歓迎闇鍋パーティー”をやろうと思う！！」

「「「……」」」

生徒会室には拳を作る理沙の声が響き渡った。

「……えっと、いつから恒例になったのかしら？」

「甘いなヒナ。この小説では細かい事は気にしたら負けだぞ」

ヒナギクがメンバーを代表して尋ねるが訳の分からない答えが返ってきた。

「わーい♪鍋だ～」

「闇鍋か……面白そうね」

理沙に続いて立ち上がる泉と美希。何故か二人ともやる気満々である。

「いや、盛り上がっているところアレだが……
今日も普通に仕事があるぞ」

「「「……」」」

しかし千桜がどっさりと資料をテーブルに置いてそう言うと、三人娘は苦い表情になってをを揃える。

「「「え～……仕事～？」」」

「だから生徒会なんでしょ」

「だったらこうしませんか？」

呆れて突っ込むヒナギクの隣で、愛歌が提案するように口を開いた。

「今日は仕事もありますから、
歓迎会は今週末というのはどうでしょう」

「えぇ、それなら良いと思うわ」「そうですね」

愛歌の提案にヒナギク、千桜も頷いた。

「む～、いた仕方ないか…」

三人娘も他のメンバーが賛成しては反論する余地も無かった。
彼女らの場合は純粋に本日の仕事をサボりたかっただけのような気もするが……

まぁそんな訳で、本日も生徒会は普通に運営される事になった。

「じゃあ、早速で悪いんだけど…鷺ノ宮君には仕事をしてもらうわね」

「あぁ、それは構わないけど…
仕事自体のそもそもの勝手が分からないんだが」

ヒナギクが持ってきた書類の山の前で首を捻る駿。

「駿君、ここの作者は生徒会なんてやった事無いからテキトーに描写を書くみたい。
だからテキトーにやれば大丈夫」

「それはそれで問題なんじゃないですか…？」

そんな彼に多分フォローと思わしき言葉を入れる愛歌。
だがそれは事実。
作者は生徒会に関する知識が全くありません。

だからテキトーに……

「いやいや！？それで大丈夫なのかよ生徒会！！」

こうして今日も生徒会活動が始まった。

○

「「ふぅ～…」」

「終わったね～」

一時間ほど経つと、三人娘達が何やら書き終えて一息をついたところだった。

「珍しい。今日は三人ともちゃんとやったんですね」

「あぁ、たった今終わったトコだ」

千桜の言葉に美希はそう返すと先程まで書いていた紙を持ってメンバー達を見渡した。

「今日は“こんな白皇学院は嫌だ”について考えてみたんだ」

「仕事しなさいよ」

ヒナギクのツッコミに構わず美希達は紙を掲げた。

【こんな白皇学院は入学初日で退学だ！】

・先生が皆ミミズだ
・地下４０００ｍにある
・暗号が『ｙｏｕ　ａｒｅ　ｓｈｏｃｋ』だ
・制服が全身白タイツだ
・教室がメリーゴーランドみたいに回る
・数学教師にロ●ンマスクがいる・柱の模様が毛虫だ
・壁がヌメヌメしてる
・グランドが黒板だ
・体育倉庫にモビ●スーツが置いてある
・ミドルネームがフランチェスカにさせられる
・オーバーソ●ルする
・白皇学院じゃない

「「「よーし、今日の仕事終わりー！！」」」

「仕事をしなさーーーっい！！」

三人娘は紙を読み上げると、一目散に生徒会室から飛び出していった。

室内にはヒナギクの叫びだけがこだまする……

「……いつもこんなんなのか？」

「うん。大体そうかな」

駿が尋ねると千桜は呆れたように頷いた。

「困ったもんだな……」

「「えぇ、ホントに……」」

駿は腕を組むと一息ついて……

「まったく……

ロ●ンマスクは体育教師だろ」

「「そっち!?」」

○

「えっと……

次は部活動の冬季休暇の予算案か……」

駿は書類とにらめっこをしながら顎に手を当てた。

【サッカー部】

・ボール代

・ユニフォーム代

・スパイク代
・備品代
・粘土代

「……え？粘土？」

「ん？どうしたんだ？」

書類を見て思わず声を出してしまう駿に千桜が声をかける。

「あ、いや……
大丈夫だ。多分」

【野球部】
・バット代
・ボール代
・グローブ代
・マシーン代
・備品代
・ユニフォーム代
・紙粘土代

「……は？紙粘土？」

駿は一旦目を離すと、もう一度書類を見る。

・紙粘土代

（……一体白皇の運動部では何が行われているんだ？）

駿は予算案に目を通しながら、まだ見ぬ白皇学院の秘密に首を傾げる。

しかし考えても無駄だとまた書類を捲るのだった……

～数時間後～

「う～……」

駿は書類の山を脇に退けるとテーブルにゆっくりと突っ伏した。

「鷺ノ宮君、お疲れさま」

「お～、あんがと～」

ヒナギクは駿の前にカップに入った紅茶を差し出してくれた。

ヒナギクは勿論、二人も既に仕事を終えているようだ。

千桜は本を読んでいて、愛歌は書類を片付けている。

（しかし桂達はスゲーなぁ…

こんな量を毎日やってたのか…）

彼は紅茶を啜ると、一息ついて素直にそう思った。

「今日は早かったですね」

「そうね～
一人増えるだけで随分効率良く進むわね」

「あ、お役にたてたのなら良かった」

千桜は本を閉じてそう言うと、愛歌も書類を戻して同意した。
駿もそれを聞くと安堵したように頷く。

「それじゃ、今日はこれで終わりだから解散にしましょうか」

「えぇ」
「そうですね」

ヒナギクがそう言って机から立ち上がると、千桜達もそれに続く。

「鷺ノ宮君、生徒会の活動は朝もあるから来れる日はお願いね」

「あぁ、了解」

駿は頷くと三人と同じように鞄を持って立ち上がった。

「じゃあ、解散ね」

こうして、彼の生徒会初日は何の山も落ちも無く、平凡に終了したのだった……

＊

「ふわぁ……」

駿は時計塔を出て敷地内をブラブラと欠伸混じりに歩いていた。
ヒナギクは剣道部があるからと、千桜と愛歌は帰宅するために別れたのだ。

そんな訳で今は一人なのだが…

（伊澄を迎えに行くにはまだ時間があるし……この際白皇を色々見て回ってみるかな……）

彼はもう一度時計塔を振り返るとそう考えて頷いた。

「さて……
まずはどこに行ってみようか…」

其の六　仕事の描写なんかはテキトーで良いと思う（後書き）

伽藍
「今回はギャグマンガ日和のネタを使ってみました」

駿
「聖徳一週間のアレだったな」

伽藍
「感想、意見、批評、評価
是非お願いします！！」

駿
「後俺は変態でもロリコンでも無いからな。
シスコンなだけだぞ？」

伽藍
「それは変態要素に繋がるんじゃね？」

駿
「否！！それは違う！！」

伽藍
「……えっと、次回もよろしくお願いします？」

其の七　放課後の過ごし方（前書き）

伽藍
「取り敢えず次回は、もう一方の小説を更新しますので、少し間が空くと思います」

駿
「何か銀さん達に申し訳ない」

伽藍
「お前が行ったら八つ裂きにされるかもな」

駿
「マジでか！？」

伽藍
「では、始まります！！」

其の七　放課後の過ごし方

初日の生徒会も終了し、駿はフラフラと白皇の敷地内を放浪していた。伊澄をナギの家まで迎えに行くにはまだ数時間もあるのだ。

（しかし……伊澄がいないと……なんというか、しっくりこないつーか、なんかなぁ……）

少し寂しそうに三千院屋敷があると思わしき方向に目を向ける。しかしすぐに首を振って、敷地内に視線を戻した。

「まぁこの際だから……
白皇を色々見て回るかな。
取り敢えずテキトーな近場から……」

駿は大きく伸びをするとゆっくりと歩き始めた。

其の七　放課後の過ごし方

～テラス～

「はぁー、これが……」

白皇学院はご存知の通り超お金持ちが通う学院である。
それ故に学院内の施設は他の学校よりも圧倒的に充実している。

各校舎の裏にに設置されたこの大テラスはその典型的な例と言えよう。
室内は大理石の床に白で統一された高級感溢れるテーブルや椅子。
更に華麗で繊細な柱が荘厳な雰囲気を醸しだしている。

屋外に出れば日差しが程好くあたる開放的な空間で風に揺れる木々のせせらぎが心地よい。

「噂には聞いていたけど……
ホントにスゲー学校なんだなぁ……」

駿はテラスの中外を行ったり来たりしては周りの雰囲気に頬を緩める。

「こういうのも良い……んん？」

暫くテラスを歩き回っていると、室内の端にあるテーブルの下に何やら人影らしきものを見つけた。

（え……アレ、人か！？）

駿は不思議に思ってそのテーブルを凝視すると、なんと人が倒れているようだった。
彼は慌ててテーブルに駆け寄る。

「ちょっ、大丈夫ですか！？」

「う、うーん……」

倒れていた人物は水色の髪をした女性だった。
短めの髪に長袖のシャツに長ズボン姿、所謂私服姿で地べたに蹲っている。

駿が肩を叩くと女性は何とか顔を上げて彼を見上げた。

「あの……えっと？」

「う、ううう～……お腹が」

「お腹？
もしかして痛いんですか！？」

女性は駿に向かって何とか言葉を絞り出す。

「お腹が……減った……」

「は？」

「もう二日間何も食べていな……」

バタリ

「あ、ちょっ！！
大丈夫ですか！？ちょっと！？」

女性は言いかけてまた顔を地面に突っ伏してしまった。
駿は慌てて鞄を女性の前に持ってくる。

「えっと食べ物……
あ、餡団子がありますけど……」

「団子！？」

いきなり女性が顔を上げて期待満点で彼を見つめてきた。

「え、えぇ……
でも手作りなんで口に合うかは…」

「大丈夫！！そんな事は気にしないわ！！」

「あぁ、でしたら」

駿は鞄からテーブルの上にタッパを取り出した。蓋を開けると綺麗な串団子が整って並んでいる。

「どうぞ」

「ありがとう！！いただきます！！」

言うが早いか、女性はテーブルにつき、タッパの中身の団子を凄まじい速度で平らげていく。
その様子を唖然と見守る駿。

「あ～！！美味い！！
生き返るわぁー！！」

（凄い速度……
よっぽどお腹が空いてたんだな……）

そして数分後……

「ごちそうさま！！
美味しかったわ～！！」

女性は椅子に座ったままタッパを空にして目の前で手を併せた。
先程とは違って満足そうに満面の笑顔だ。

「あ、お茶です」

「お、ありがと～」

駿は水筒から緑茶を出すと、女性に差し出す。
女性はそれをグッと飲み干すと、一息ついて彼に目を向けた。

「いや～、ありがとう少年。
餓死するところを助けてくれて。ってかコレ少年の手作り？」

「えぇ、一応。
趣味で少し、和菓子作りをやってるので」

「へぇ、凄いわね。
ごちそうさま、団子の少年」

「あ、いえ。
ところで……何でこんな所で倒れられていたんですか？
というかあのアナタは？」

「私？私は……あ！！」

女性は自分に手を向けて自己紹介しようとするが、何かを思い出したように声を上げた。

「少年！！今何時！？」

「えっと、１５時半くらいですが……」

「１５時ィ！？
やばい！！丸々二つすっぽかしちゃった！！このままじゃヒナに怒られる！！そして給料も危ないじゃん私！！」

女性は勢いよく立ち上がると、顔を青くしてそう叫ぶ。

「え、あの？」

「私は今餓死以上に危機に晒されているわ！！
という訳でもう行かなくては！！
さらば、団子の少年！！」

「あ、ちょっと！？」

駿が呼び止める暇もなく、女性は一目散にテラスから飛び出していってしまった。
そんな後を呆然と見送る駿……

「……だから、誰？」

＊

「……何だココ？」

駿はテラスから出て、敷地を歩いていると変な丸い建物にたどり着いた。

「……え、つーか大丈夫なのかこの建物（著作権的に）」

「おや、君は駿君ではないか？」「本当だ～♪」
「珍しい来客だな」

「へ？」

駿が建物の壁を興味本位でペタペタと触っていると後ろから声がかかった。
振り返ると、建物の中から美希達顔を覗かせてこちらを見ていた。

「三人共？
何でこんな所に？」

「ふむ。
では君の疑問にお答えしよう」

美希が手招きするので、彼は建物の入口に歩いていく。
そして、彼は恐る恐る建物の中に足を踏み入れた。

「……？」

建物の中には巨大なテレビやらフィルムやら色々な機材がところ狭しと並んでいた。
一言で言うならまるで秘密基地のような空間である。

「ここは？」

「私達の部室だよ」

「部室？」

駿は室内をキョロキョロと見回して、首を傾げる。

「私達は動画研究部をやっているんだ。読んで字の通り動画を研究する部活だよ」

「へぇ……動画研究部……」

駿は８ミリや１６ミリカメラを手に取っては暫く眺めていると、不意にポンと手を打った。

「あ、そうか。
要するに映研だろ？映画研究部」

「いや、違うぞ」

しかし理沙がそれをあっさり否定する。

「別に私達は映画とは撮らないよ」

「にはは、そんな難しい事は出来ないよ～」

続いて美希と泉もそれに頷いてみせる。

「え、じゃあ何をしてるんだ？」

「決まっている！！」

美希が手を上げるとそれに習って理沙、泉も手を上げて駿に顔を向けた。

「動画研究部とは文字通り動画を研究する部活！！」

「古今東西の面白おかしい動画を撮ったり集めたりして皆で爆笑！！」

そして三人はビシッと彼を指差して声を揃えた。

「「「それが我々の動画研究部。略してＦＢＩ！！」」」

「略せてねーよ」

「この小説で細かい事を気にしたら負けなのだよ駿君」

呆れ半分ではあるが、何となく部活は理解した駿であった。

「はぁ、まぁ内容は分かったが、具体的にはどんな動画を撮ってんだ？」

「ほぅ、気になるかね？」

「まぁ一応な」

ニヤリと不敵に口元を吊り上げる理沙。

「だったらちょうど良い。
今から撮影に行こうとしていた所なんだ。
一緒に来てみる？」

今度は美希がハンディカムを取り出してみせるとそんな事を言った。

「今から？」

「そうだよ～。さっき三人で話し合ってたんだよ」

泉もそう言って美希の隣でニコニコと笑っている。

（どうせ暇だしな……
学院を知る良い機会になりそうだし……）

駿はそう考えると『一緒に行かせてもらうよ』と三人に返す。
すると美希が頷いて一歩前に出てきた。

「撮影にはプランが二つあるんだ。プランAとプランB。
今回は新入部員の駿君にどちらかを選ばせてあげよう」

「いや、入った覚えは無いんだが……」

「まぁまぁ、細かい事はさておき。プランはどちらが良い？」

美希は駿の前に二本の指を立ててみせる。

「因みに……プランA、Bは何がどう違うんだ？」

「プランAは白皇学院にまつわる噂を検証していこうという、まぁよくありがちな活動ね」

美希は駿の問いに、まず一つ目の指を折って答えた。

「プランBは違うのか？」

「プランBこそ動画研究部の最大の特徴と言っていい活動！！」

「おお……！！」

美希はビシッと宣言すると、駿もその勢いに呑まれそうになりながらも頷く。

「その名も……
“ヒナの着替えを撮影しよう～リベンジ篇～”だ！！」

「んじゃ、またな」

駿は片手を上げて部室を後にしようと……

ガシッ！

「「「待ちたまえ！！」」」

三人の手に捕まりそれは阻まれてしまった。

「どうしたんだ駿君。
もしかして一刻も早く撮影したくなったのか？」

「んな訳あるか。逆だ逆。
帰ろうとしたんだよ…」

駿は逃げられないので仕方なく三人の前に戻ってくる。

「撮影プランBがつまらなかったか？」

「それは撮影じゃなくて盗撮だろ！！犯罪だぞ犯罪！！」

「大丈夫だ。我々三人で楽しむだけだから。あ、駿君を入れれば四人か」

「いや、だからそれが犯罪なんだろ」
呆額に手を当てると呆れたように突っ込む駿。

「とにかく、プランBは却下。
つーかどんな時でもやっちゃダメだからな」

「「「え～」」」

三人は一斉に口を曲げて口を揃える。
とはいえ、予想通りだったのか微笑するとすぐに抗議（？）をするために口を開いた。

「駿君はヒナの生着替えを見たくないというのか？
一般男子の永遠の夢なのに」
→
悪ノリ

「そうだそうだ！！
しかも胴着姿からという超レアな動画だぞ」
→
悪ノリ

「ヒナちゃんはいっぱいファンクラブもあるんだよ～」
→
悪ノリ

三人は口々に駿にそんな事を言い始める。

「「「本当はそういうの好きなんじゃないの～？」」」

「まぁ、嫌いじゃないが（一般男子として）……
つーかお前ら……楽しんでるだろ」

「「「バレたか」」」

すぐに三人の意図を見破った駿に美希達は『残念』と面白そうに呟いた。
もし頷いていたら何をさせるつもりだったのだろうか…

「まぁ、では今日は新入部員歓迎も兼ねて無難にプランＡにしておくか」

「だから入ってねーんだけど」

「「「面白い動画撮るぞ～」」」

「聞けよ！！」

そんな訳で、ハンディカムを手にした美希に続いて駿達は動画研究部の部室を後にした。

＊

「本日検証したいと思う噂はこれよ！」

『白皇の敷地内には鰐（ワニ）がいる』

取り敢えず四人は敷地にでると、美希がおもむろにメモ帳取り出してそこに書かれた文を三人に見せた。

「「え？ワニ？」」

「おぉ、ワニか～」

ポカンとした表情の駿と泉に対して理沙は普通に頷いていた。

「という訳で、この噂の真偽を我が動画研究部が解明したいと思う……ん、どうした？」

「いやいや、あり得ないだろ。
だってワニだぞ？アマゾンとかにいるあの爬虫類のアレが、
こんな学校にいるわけないだろ」

駿は顔の前で再三手を振ってそう言うと、美希がくるりと顔を彼の方に向けた。

「駿君、嘘か本当かは二の次なのよ。私達動画研究部はその事例についと検証し爆笑動画を撮る事が第一の目的！」

「そこに爆笑を組み込む意味があるのか」

ツッコミ所が有りすぎたので、取り敢えず彼はそこを突っ込んでみた。

「甘いな駿君。大事なのはインスピレーションなのだよ」

「とにかく検証開始だな」

理沙の言葉に続いて、美希がメモ帳をヒラヒラと振って歩き出す。
駿と泉は困惑顔のままそれに続くのだった。

＊

～森の奥っぽい所～

「オーイ、どこまで行くんだ～？」

「ふむ、もう少し先に目撃情報があるのだが…」

四人は白皇の至るところにある森の中の一つを突き進んでいた。

「やっぱデマだって。
つーかそろそろ帰り道分かんなくなｔー」

ガサガサ……！！

「「「！！」」」

突然、近くの茂みから草がかき分けられる音がした。

「……もしや、例の」

「まさか。犬かなんかだろ」

駿の否定を切り口に、四人は恐る恐る茂みの側に寄っていく。
そしてその茂みをゆっくりと分けると……

「「「おぉ…」」」
「わ～」

茂みの向こうには大きな沼。
まるでアマゾンの一部を切り抜いて貼り付けたような光景が彼女達の前に広がっているのである。
そして……

ガサガサ……！！

そして四人の目線の先には、沼に浮かんでいるゴツゴツした鱗の大きな身体がしっかりと……

（（（（居ちゃった……））））

ワニが居た。
何故か居た。

どういう原理でここに生息しているのかは一切不明だが、居てしまったのである。

（まさか本当にいるとは……）

（何やかんやでいつも通りテキトーなおふざけ動画を撮るつもりが……）

（ワニだよねアレ……
本物だよね……）

三人娘はまさか本当にワニがいるとは、といった表情で唖然としている。

（オイ、ここにいたらいつ見つかるかも分からない。ツッコミを入れる前に取り敢えずこの場を離れよう）

（うん、そうだね）

駿が小声でそう言うと三人は頷こうとするが……

グルルルルル……！！

「「「「「！？」」」」」

同時、ギラギラと黄色い瞳が彼らを捉えたのだった。

（（（（（……）））））

「……」

暫く一方的にワニに睨まれて固まる四人。
四人は勿論だが、ワニの方も動こうとはしない。
そんな感じで沼の周りは膠着状態から緊張感に包まれていた。

「……え、アレ？
襲ってこないよ？」

「……品定めしてんじゃないか？」

「マジでか」

ワニを見つめたまま、そんな事を呟き合う三人娘。

「どちらにしても……このままじゃ遅かれ早かれワニの餌だ。
いいか、慌てず騒がずゆっくりと後退すんだ……
ゆっくりだぞ……」

駿の言葉に三人はゆっくり頷くと、ワニの瞳を見つめながら慎重に
一歩ずつ下がり始めた。

（ゆっくり……ゆっくり……）

ワニは四人を見つめてはいるが、そのまま動かずにその様子を眺め
ているようだ。

（よし……もう少し。
奴の視界から離れりゃ後は走って逃げるだｋ……）

キーンコーンカーンコーン……

（なんでこのタイミングでだァァァァ！！）

白皇の敷地内にチャイムが鳴り響いた。
そして……

「グオォォォ！！！」

「来たァァァ！？」
「にゃ！？」

ワニは沼から思いきり跳ねるように飛び出すと、大きな口を開けながらの駿達のいる茂みの方向に向かってきた。

「どどどどうしよう！？
このままじゃ食べられちゃうよ！？」

迫り来るワニに泉が指差してアタフタと三人を見る。

「よし！この際だから突っ込んでおくか。
何で白皇にワニがいるんだ！」

「んな場合かァァァァァ！！」

能天気な美希のボケに駿が叫んでいるうちにワニはもうすぐ目の前まで迫ってきた！！

「ギャアァァァァァス！！」

「どおォォォォ！！？」

「おぉ！？」

「食べられるーーっ！？」

そして更に口を広げて……

バーン！！

「「「？」」」

突如鳴り響いた銃声……

目の前にはひっくり返ったワニの姿。

そして駿が振り返ると、隣には拳銃を持った理沙の姿があった。

「え……リサちん？」

「……朝風、何持ってる？」

「何って……麻酔銃だ。

大丈夫、これで暫く眠っているだろう」

理沙は手に持った麻酔銃を見せてフッと微笑してみせた。

「んなモン持ってんなら先に言えェェェェェ！！！」

「にはは～、流石リサちんだね……」

駿のツッコミなどどこ吹く風というように理沙は銃口に息を吹きかける仕草をしてみせた。
それを見て困ったように笑う泉。そして美希は……

「あ……カメラ回してないな」

謎のワニは白皇学院ＳＰ達によって無事に捕獲され、その数日後アマゾンの広い場所に放たれたという……

そして夕方……
正門の前には四人が突っ立っていた。

「いや～、動画を撮れなかったのは残念だが面白い一日ではあったな」

「しかし噂は本当だったな」

「動画研究部のお手柄だね～♪」

美希達は各々活動の感想を言い合っていた。
そんな三人の様子を見て駿は肩を竦める。

「んじゃ、俺は伊澄の迎えがあるからこれで」

「まぁまた機会があったらウチの部活に顔でも出してくれ。今度は君の爆笑動画を撮るつもりだからな」

「へぇへぇ、気が向いたらな」

駿はそう言うとヒラヒラと手を振ってみせた。

「では、さらばだホワイト」

「また明日ね～♪」

「あぁ、またな」

そんなこんな彼は白皇学院を後にしたのだった。

＊

～三千院家～

「あら、駿君。いらっしゃい」

「あ、マリアさん。こんばんは」

駿が屋敷に到着すると、玄関からマリアが出迎えてくれた。

「伊澄さんのお迎えですよね」

「えぇ、一人で帰ると必ず迷子になりますからねアイツは。
もう大丈夫ですか？」

「えぇ、ご案内しますわ」

駿はマリアに案内されて三千院の屋敷に入っていった。
そのまま二人はナギの自室までやって来る。

「オーイ、そろそろ帰ー」

ナギの部屋に入ると、室内の床には原稿が散乱していて、ぐったりと崩れ落ちているナギと伊澄の姿があった。

「まさか……ウニ蜥蜴将軍にあんな必殺技があるなんて……
ブリトニーでは太刀打ち出来ないのか！！」

「もう地球は終わりよ……」

「あ、あぁ。
それは……大変だな」

取り敢えず今日はもう突っ込むのが面倒だったので暫くスルーして、
その後伊澄を何とか連れて帰った駿であった。

其の七　放課後の過ごし方（後書き）

～妖怪目録～

ＮＯ．３【ワニ（多分）】

［説明］
妖怪でも何でも無いただのワニ。白皇学院の敷地内にひっそりと生息していた。
理沙の麻酔銃により捕獲される。

［外見］
普通のワニ

［伝承］
何故、何処から、どのような経緯でやって来たのかは不明だが、白皇学院の沼に突然住み着き始めた。
詳細は一切不明

其の八　危険は身近な所に潜んでいたりいなかったり（前書き）

伽藍
「また銀ごとの執筆が詰まったので、先にこちらを更新してしまいます」

駿
「ホントすみません」

伽藍
「話を二つに分けました。取り敢えず前編です。
馬鹿な所ばかりでは無く、久々に妖怪退治の話です」

駿
「ま、今回は違うけどね」

伽藍
「次回は思いきり戦闘になります。結構本気な感じで……
今回はその前置きみたいな話ですね」

駿
「いつも以上にグダグダですが、よろしくお願いします」

其の八　危険は身近な所に潜んでいたりいなかったり

「へへへ……
北の酒場にゃ～女を酔わせる～……ひっく」

深夜……
ひっそりと静まりかえった夜道を一人の男が歌を歌いながらフラフラと千鳥足で歩いていた。
顔が真っ赤で随分と酔っ払っているようだ。
右手には先程コンビニか何かで買ったのだろう、ビールとスルメイカのパック、それから懐中電灯がビニール袋に入れられてあった。

男が歩いている道の下には小川が流れていて、前方には反対側の道を繋ぐ為の橋もかかっていた。

「あ～、おっとっと……
危ねぇ危ねぇ……うお！？」

男は足を縺れさせて少し躓いた後、一回持ち直したが、再び足を滑らせる。

「おぉぉぉ！？」

そのまま男は道から緩い坂の下の河川敷まで転げ落ちてしまった。

「痛ててて……
あ～、腰打ったか～？」

男は腰を擦りながらむっくりと起き上がる。
目の前には深夜のせいで暗く静かに流れる小川が……

ゴオォォォォ……

「おう？」

上の道に戻るために坂を登ろうとしたその時、男の耳に何か音が聞こえてきた。

「？」

男は音がした方向に顔を向ける。それは男がいる側の河川敷の左側から聞こえてきたようだった。

ゴオォォォォ……

低い唸り声……
いや、どちらかというと吸い込むような風の音の方が近い気がする。

「んだァ？犬コロかァ？」

男は音のする左側に歩いていく。暫く歩くと、脇に大きな穴が開いていた。

坂道のちょうど橋の下に、約２ｍ、人が入るには十分過ぎる程大きな穴。
それは地下水道であった。

稀に業者の人が中にある水道管等をチェックするために入るために開いている地下水路。
もっと言えば下水道である。

中は暗く臭いため、
普通の人は勿論だが、業者の人間も滅多に入らない。

「何だァ、下水道しかねぇ」

ゴオォォォ……

男がつまらなそうに穴に顔を向けたとき、また低い低い音が聞こえてきた。

「……こん中から聞こえてんのかァ？」

男は地下水道の入口を覗こうと目を凝らすが、何分深夜の為に真っ暗で先１ｍすら見えない。

すると男は何を思ったのか、袋から懐中電灯を取り出した。
そしてスイッチを入れるとゆっくりと穴に近づいていって、前方に懐中電灯の向けた。

真っ暗な下水道を一筋の光が頼り無さそうに二三回上下に大きく揺

れる。
しかし光小さい為か、下水道の中は全く見えない。

「……帰るかァ」

冷たい風も吹き付け、目の前には不気味な下水道の入口。
すっかり酔いも覚めてしまった男はそう呟くと、懐中電灯のスイッチをきって穴から離れる事にした。

「こりゃ飲み直しだなァ…」

男の足が穴の側から移動しようとした、その時……

ガッ!!!

「んん!?」

突然男が動きを止めた。
止めたと言うより、何かに引っ張られたと言う方が正しい。

更に引っ張る力が強くなり、
男が慌てて振り返る……

「ひ、ひぃぃぃ!!?」

それはあり得ない光景であった。

地下水道の穴から、黒く太いモノがいくつか伸びて足に巻き付いていたのだ。
ソレはざらざらとしていてまるで髪をいくつも集めて束にしたような気味の悪い蔓のようだった。

「ひぃぃぃ！？」

真っ暗な空間の中からウネリをあげて伸びてくるソレは次から次へと男の足に絡まっては、引きずり込もう引っ張ってくる。

「う……ああ…あ」

仕舞いには、男の身体までにも絡まってきた。

ゴオォォォォ……

唸るような低音が入口から男の背筋を異常なまでに凍らせ、全神経を強ばらせる。
彼は本能で感じる。
このままでは間違いなく“死ぬ”と……

「ひぐ……あ、あぁ！！」

そう思った瞬間、
男はグッと目を閉じて反射的に右手を穴に向ける。
そして、無我夢中で持っていた懐中電灯のスイッチを押したのだろう。

細いが強い光が暗闇に向かって一直線に伸びていった。

バッ……！！

途端、地下水道の入口から男に絡みついていたモノが力を緩めた。
そして徐々に男から離れてズルズルと穴に戻っていく……

「……え？」

男が恐る恐る目を開けるが、彼の身体にはもう何も無い。
足にも、身体にも、肩にも……
先程まで絡みついていた黒いモノは綺麗さっぱり消えていた。

「……」

男は口を開いたまま全身を震わせると……

「ひいいいいいい！！」

弾かれたようにその場から走り去っていってしまった。
後には無惨に転がった懐中電灯だけが鈍く光っていた……

ゴオォォォ……

其の八　危険は身近な所に潜んでいたりいなかったり

～鷺ノ宮家～

「ＺＺＺ……ＺＺＺ……」

朝、六時頃……
鷺ノ宮家のとある和室では駿が爆睡していた。
ここは駿の自室である。

「むにゃ……伊澄……恋人なんてお兄ちゃんは…認めんぞ……」

このシスコンは一体どんな夢を見ているのだろうか。

ガラ……

「お兄様、起きて下さい」

すると、和室の引き戸がゆっくりと開いて伊澄中に入ってきた。

「ＺＺＺ……ＺＺＺ」

「お兄様」

伊澄は駿の布団に歩いていくと、彼を起こそうと声をかけるが一向に起きそうに無い。

「起きて下さい、今日は生徒会のお仕事ですよ」

「……ＺＺＺ」

仕方なく、伊澄は駿の傍まで寄ると今度は揺すってみる。

「起きて下さい」

「あと十五分……」

「お兄様」

どことなく呟く駿をもう一度揺する伊澄。

すると彼女にスッと彼の手が伸びてきた。

「ん……後五分…だからな…」

「！？」

完全に寝ぼけているのだろう。
そのまま駿は伊澄を掴むと、抱き寄せるように引き込んだ。

突然の事だったので反応に遅れ…結果、伊澄は抱き枕のようで駿に抱きしめられる形となってしまった。

「ーーーっ！！／／／」

「……ｚｚｚ」

まぁ、当然彼女の目の前に駿の顔がある訳で……
このままだと何か大変な事態が起こりそうな絵面である。

「……」

「／／／」

アタフタと真っ赤になる伊澄とは対象的に、駿はぐっすりと夢の中をさ迷ってる。

「……むにゃ」

「！！／／／」

寝ぼけまなこの駿が寝返りを打とうとしたので、更に伊澄に顔が近

づいていく。
しかし彼女はほぼ反射的にお札を取り出した。
そして……

ドオォォォォォォォン！！！！

屋敷の側を通りかかった人は
爆発音と雷が天高く登ったのを目撃したという。

＊

～生徒会室～

「あ～、ホントダルいわ……
どっかに大金でも転がってりゃやる気になるのにな～」

「……だったら大金でも何でも探して来て良いからここから出ていってくれる？」

まだ朝早い生徒会室ではテーブルに足を投げ出して天井に呟くのは水色の髪の女性。
その様子を呆れたように見つめているのはヒナギクだった。

「そんな冷たい事言わないでよヒナ～
そんなんじゃお姉ちゃんまた酒に溺れた生活しちゃうわよ」

「それはいつもの事でしょ！」

ヒナギクはため息をつくと、視線を外して資料を整理し直す。
すると隣に座って本を読んでいた千桜が女性に振り返った。

「っていうか、昨日の授業は何をしていたんだ？
世界史には出てなかったみたいだけど」

「いやぁ～、それがほとんど記憶が無いんだけどさ……
軽く餓死しかけてぶっ倒れてたみたいなんだよね～」

女性は頭に手をやると困ったように笑う。

「まったく……二日間帰ってこないと思ったら」

「……雪路らしいな」

千桜はパタリと本を閉じると紅茶を一口啜った。

「そういえば、昨日聞いたんだけど生徒会に新しい子が来たんでしょ？男子生徒って話だけど」

思い出したとばかりに女性は天井から施設を元に戻した。

「えぇ。会計の役割にきてくれたのよ」

「へぇ……」

ガチャ…

「噂をすれば、来たみたいですよ」

そんな話をしていると生徒会室の扉がゆっくり開く。

「あ、どうも……」

「「……」」

しかし現れたのは顔が酷く無惨にもモザイクトーンが貼ってある奴だった。

「……鷺ノ宮君」

「ん？」

っていうか、駿だった。

ヒナギクは呆れたように立ち上がると彼に寄っていく。

「……ねぇ、一つ疑問なんだけど、普通に学校に登校してくる事は

出来ないのかしら？」

「俺だってなァ……
なりたくてなってる訳じゃないんだよ……」

ヒナギクが最もな質問を投げ掛けると駿はため息をつきながら答える。

「何か知らんけど朝起きたら既にこんな状態で……
オマケに部屋は何かが爆発したんじゃないかってくらい丸焦げ…」

彼はめちゃくちゃになった顔を振ると、ガクリと肩を落とした。

「あまつさえ、今朝は伊澄も何故か口をきいてくれなかったし…
ああ、お兄ちゃんは一体どうしたらいいんだ……」

（（……それはそれは））

その様子にヒナギクもテーブルに座っていた千桜もかなり引いている。

「あれ、その声……」

「……へ？」

そんな駿にいきなり水色の髪の女性が割り込むような形で声がかかった。
彼もその声の方向に振り返る。

「もしかして昨日の…」

「あ、アナタは…！！」

女性を見ると駿は驚いたように一歩下がる仕草をする。

「団子の少年！？」

「昨日の変な人！！」

二人はお互い指を差し合ながらそれぞれ声をあげた。

「「団子？」」

「あ、やっぱそうか！
いや～助かったわ昨日は。
そうか、新しく入った子は君だったのか～」

軽快な調子の女性に首を傾げるヒナギクと千桜。

「えっと、どういう事？お姉ちゃん」

「昨日餓死しかけてぶっ倒れてたって言ったでしょ？
それを助けてくれたのがこの団子の少年なのよ」

「いや、そんな愉快な名前じゃ無いんですけどね」

女性の言葉に駿は多分困ったように笑った。
いかんせん顔がめちゃくちゃな状態なので定かでは無いが…

「団子とは？」

「この少年に団子を食べさせて貰ったから。
いやぁ、でもあのままだったらホントに餓死してたね、うん」

「「……」」

サラッとそんな恐ろしい事を言ってのける女性。
その様子からするに、随分楽観思考の人のようだ。

「でも、何で鷺ノ宮君はお団子を持ってたんだ？」

「あぁ、たまたま昨日は団子を作って持って来ててさ。
こう見えても、和菓子を作るのが趣味なんだよ」

彼はそう言って多分笑ってみせたのだろうが、
そんなモザイク顔で言われても……と戸惑うヒナギクと千桜であった。

キーンコーン……

「あ、ヤバ！！今日は朝一で会議だった！！散々サボってきたから
今日は出ないと…！！」

ちょうどその時チャイムが鳴り、女性は慌てて立ち上がった。

「それじゃね！！」

「あ、お姉ちゃん！！」

そのまま女性はヒナギクの言葉も聞かず、あっという間に生徒会室から飛び出して行った。

「……」

「えっと、何かゴメンね。お姉ちゃんが迷惑かけたみたいで」その後を唖然と見送る駿にヒナギクは声をかけた。

「いや、別に……というか、あの人誰？」

「あれは桂雪路。白皇学院の先生でヒナのお姉さんだよ」

駿の疑問に答えたのはテーブルに座っている千桜だった。

「へぇ……先生だったのか…って、お姉さん……？えっと……桂の？」

「えぇ、一応ね」

「ホントに似てないけどな」

彼の反応は当然といえば当然だろう。才色兼備の美少女の妹とはま

た違った雰囲気の女性だったからである。
何というか、ヒナギクがきっちりとした性格ならば、雪路は大雑把な性格とでもいうのだろうか…

（世の中には色々な兄弟姉妹がいるんだな……ま、それを言ったらウチもそうか……）駿はしみじみとそんな事を思いながらゆっくりと長テーブルに着いた。

「というか、今更だけど……
その顔大丈夫？」

「あぁ、問題ねーよ。
ギャグ補正でもう数行したら元に戻ってるから」

「「……」」

そんな訳で、生徒会執行部達は各々仕事を始めるのであった。

「アレ、今日愛歌さんは？」

「愛歌さんなら今日は体調が優れないからお休みだよ」

「じゃあ、花菱達は？」

「「サボりね（だな）……」」

其の八　危険は身近な所に潜んでいたりいなかったり（後書き）

伽藍
「どんどん文章が書けなくなってきてる気がする……」

駿
「いや、知らないよ」

伽藍
「という訳で、感想、評価、批評、質問、お願いします！」

駿
「どんな訳？」

※伊澄が駿を起こすシーンは、近衛先生の“ゼロの白夜叉”にあったモノを許可を得て参考にさせていただきました

其の九　日常と非日常の境目（前書き）

伽藍
「すみません、もう一回分割したので次回で終わります」

駿
「一日が長いな」

伽藍
「まぁまぁ。
では、そんな訳で始まりますが……その前に、この小説にピッタリのキャッチコピーを考えてきました」

駿
「へぇ、どんな？」

“鷺ノ宮駿　本日も残念街道まっしぐら！！”

駿
「いや……いくら何でもこれは酷いんじゃ…」

伽藍
「では、始まります！！」

其の九　日常と非日常の境目

人々の願いとは何か……？
それは平和である。

平和とは何か……？
それは両親、兄弟、姉妹、友達、そして愛する人……特に妹！！
それらが笑って暮らせるかけがえのない時間の事である。

しかしもし、そんな平和が脅かされそうになった時……
アナタは立ち上がらなくてはならない。
大切な伊ｓじゃねーや、人々を…そのかけがえのない時間を……
護るために！！

それが何かを犠牲にする事になったとしても……
それでも……！！

「という訳で、俺は帰るが……
後の事は頼んだ。生徒会執行部と役員の諸君」

放課後……
時計塔の最上階に位置する生徒会室で、鷺ノ宮駿は軽く敬礼するポーズを取ると出口に向かおうとして……

ガシッ！

「待ちなさい」

ヒナギクに簡単に捕まっていた。

「離してくれ桂。
俺の気持ちは上記に述べた通り固まっている」

「いきなり訳の分からないモノローグで仕事をサボらないでくれるかしら」

駿はジタバタと離脱を試みるが首根っこを掴まれていて一向に前に進まない。

「……」

彼はため息をつくと、仕方なくヒナギクに振り返った。

「……何かを護る為には、何かを犠牲にしなければいけない事もあるんだ……
それは生徒会の仕事もそうだ。
平和を護る為には、時にそれをサボる事もやむを得ない」

「聞いた事ないんだけど、そんな話」

「君はまだ若い。いずれ分かる時が来る……では、」

駿はフッと微笑すると、彼女に背を向けて生徒会室を後にしようと

……

ガシッ！

「ダメよ。ちゃんと仕事しなさい」

「う～……」

いとも簡単にヒナギクに引きずられてテーブルに戻された。
そのまま席に着かされる。

「お前は事の重大性が全く分かっていないぞ！！」

「ハイハイ、何でも良いから……これ、書類ね」

駿の抗議の声を軽く流して、ヒナギクは彼の目の前に書類の山を置いた。

「断じて良くない！
伊澄が一人で家に帰ろうとしているんだぞ！？もし危ない目にでも遭ったら……
この時間帯は車も多いし……
もしかしたら何処の馬の骨かも分からん男に声をかけられるかも……！！」

「執事の人達が沢山ついてるでしょ？」

「傍に俺が居ないじゃないか！！！きっと今頃、

怯えているに違いない。
寂しがっているに違いない。
……ぬおォォォォ！！兄でありながら俺はァァァァァ！！」

立ち上がると、極度の心配からいきなり頭を抱えて悶え始めるバカが一名。
何ともまぁ、残念な奴である。
そんな様子を見て千桜はソッとヒナギクに顔を寄せた。

「なぁ、もしかして鷺ノ宮君ってシスコンなのか？」

「えぇ……
ナギによると重症のね」

ヒナギクは呆れたようにため息をついてみせた。

すると、頭を抱えている駿の隣で紙と向き合っていた美希達がスクッと立ち上がった。

「その通りだ駿君！
私達は君の考えに同意するぞ」

「我々も動画研究部の平和の為に生徒会の犠牲はやむを得ないと思うぞ」

「だね～♪
私もそう思うな～」

三人娘は何かを期待するようにヒナギクを見るが、

「ダメよ。アナタ達はただサボりたいだけでしょ」

「「「う〜……」」」

簡単に一刀両断された。

三人は残念そうに声をあげると、渋々席に座った。。

「鷺ノ宮君、もう早く仕事を終わらせるしかないよ」

「えーい、仕方ない!!
こうなったらやるかァ…!!」

千桜の言葉に、駿は覚悟を決めて書類の山に取りかかるのであった

……

其の九　現実と非現実の境目

キーンコーン……

今日何度か目のチャイムが敷地内に鳴り響く。

「あ～、肩が重ぇ……」

白皇学院の正門には疲れたように盛大に息をつく駿。
その隣にはヒナギクと千桜が並んで歩いている。

「……せっかく仕事が終わりかけたと思ったらアイツら……仕事を増やしやがって……」

彼の言うアイツらとは三人娘の事である。
あの後、隙を見て美希達がエスケープしたので、駿達の仕事が三人分増量したのだ。
終わりかけだった仕事がいきなり倍近く増えたので彼の精神的ダメージは大きかった。ついでに疲労感も。

「困ったものですね」

「本当にね。
まったく、あの子達には……
明日ちゃんと言っとかないと」

ヒナギクも千桜の隣で三人の素行にため息をつく。

仕事の愚痴（？）を主に、三人は正門を出て帰路に着こうと住宅地に歩いていった。

「しかし……
白皇ってのは変わった同好会が沢山あるんだな……」

「確かにそうかもね」
「広いからな白皇（ここ）は」

「例えば……」

駿は先程見た書類に書いてあった部活の名前を思い返すために額に指を当てる。

「“温泉同好会”“薬剤同好会”“世界遺産研究同好会”“地質同好会”“鉱山同好会”“国旗同好会”“黒魔術同好会”“ＳＯ●団”“ザ●ト同好会”“リリ●ル研究同好会”“ジャッジ●ント同好会”“生徒会ファンクラブ”ｅｔｃ、ｅｔｃ……」

「凄いわね……全部覚えてるのそれ？」

彼の記憶力に感心半分呆れ半分の目線を向ける二人。

「そういや、二人は何か部活とか入ってないのか？」

「いや、私は何も入っていないよ」

不意に駿がそんな事を尋ねると、千桜は首を振って返す。

「私は剣道部に入ってるわ」

「……剣？」

続いてヒナギクが答えたが、駿の眉が一瞬少し不自然に動いた。
しかしすぐに表情を元に戻す。

「それも、ヒナは女子の主将だよ」

「は～、スゲーなぁ……
会長に主将とは……」

千桜の補足に彼は驚いてヒナギクを見ると、『文武両道ってやつだな』と頷いた。

「鷺ノ宮君は何か部活には入らないの？因みに剣道部ならいつでも歓迎よ。男子が少ないからね」

「部活ねぇ……」

駿は難しい表情で首を捻る。

「うーん、運動とかあんまり得意じゃないからなぁ」

「そうなの？」

「あぁ。それも特に球技。
アレはてんでダメだ。一切出来ない」

駿の言葉に意外そうな表情をするヒナギクと千桜。
何となくだが、運動が苦手のタイプには見えなかったのだろう。

「まぁ、それにさ……
部活なんて入ったら伊澄から目を離す時間が増えてしまうだろ。
そんな危険なリスクをおかす事は出来ない！！兄として！！」

「「……」」

どちらかというとこちらの方が本音のように思えるのは、恐らく彼女達だけでは無いだろう。

「超絶な過保護だな…」

「鷺ノ宮君、あんまり構い過ぎると嫌われたりするわよ？」

「何を言う！？
二人とも……少し考えてみてくれよ」

彼はアメリカのホームドラマよろしく両手を大袈裟に持ち上げると、ヒナギク達を交互に見ながら続ける。

「あんな可愛い妹に“お姉様～”なんて呼ばれたらどんな気分だと思う？」

「……」

ヒナギクは呆れたような表情をしているが、千桜は取り敢えずその

光景を頭に思い浮かべてみた。

ーーーーーーーーーーーーーー

辺り一面は綺麗なエーデルワイスの花畑。
千桜はそんな花に囲まれた青レンガのお洒落な家のテラスで静かにティータイムを取っている。

可愛い妹
「お姉様～♪」

すると、少し離れた場所から可愛らしい女の子が花の冠を左手に持って、こちらへやって来る。

可愛い妹
「千桜お姉様～♪」

無邪気に右手を振って、満面の笑みで……

ーーーーーーーーーーーーーー

（……確かに、それは／／／）

と千桜はヒナギクの隣でこっそり顔を赤くしていた。

「ハル子？」

「何でも無い／／／」

「ま、そんな訳で。部活は考えた事も無いよ」

二人の目の前で駿は頭を掻いて話をまとめた。

その後も学院の会話を続けながら帰路に着く三人。
いつの間にか川原の方までやって来ていた。この先で駿とヒナギク達は別れる訳だが…

「本当なんだって！！」

「「「？」」」

川原道の下の河川敷の方からそんな叫び声が聞こえてきた。
三人がその方向を見ると、中年くらいの男が初老の男性に何か抗議をしているようだ。

「そうは言ってもねぇ…」

「本当なんだ！！信じてくれよ！！」

中年の男性は川沿いの右側にある場所を指して仕切りに叫んで、初老の男性は困ったような表情でそれに対応しているのである。

「もういい！！」

すると中年の男は業を煮やしたのか、そう怒鳴って初老の男性の前

から早足で去っていってしまった。

「あれ、区内長のジーさんじゃ無かったか？商店街のイベントとかでよく見た事ある……」

「えぇ、坂倉さんね。
どうしたのかしら？」

ヒナギクは頷くと、『下に行ってみよう』とジェスチャーする。千桜達も頷いてそれに従った。

「あの、坂倉さん？」

「ん？
おぉ、桂さんの所の……ヒナちゃんじゃないか」

ヒナギクが初老の男性に話しかけると、彼は穏やかな笑みを浮かべて返した。
その様子から察するに、どうやら顔見知りのようだ。

「君達も白皇の生徒さんかい？」

「春風千桜です」
「鷺ノ宮駿です」

坂倉の顔がヒナギクから二人に向けられたので、軽く会釈をして挨拶をした。

「ああ、春風さんと鷺ノ宮さんの所の……」

区内長だけあって、この区内の家は大体覚えているのだろう。

坂倉は『よろしく』とゆっくり挨拶を返してくれた。

「ところで……さっき揉めていたみたいですけど……

何かあったんですか？」

「え？あ、あぁ……

そんな大した事じゃあ無いんだけどねぇ」

坂倉は困惑顔のまま言葉を選ぶように暫く考えると、手を振って三人を見た。

「さっきの人はウチの区内の田仲さんっていう人でね。たまに一緒に飲みに行く飲み仲間なんだけど……その田仲さんがねぇ。昨日幽霊を見たっていうんだよ」

「「幽霊？」」

「……」

「そう。何だかよく分からないんだけど、そこの地下水路の入口になってる大きな穴があるだろう？」

坂倉は三人の位置から右側にいった所にある大きな穴を指差した。

「昨日の深夜、そこで田仲さんが酔って帰っていたら唸り声のような音がするもんだから穴を覗いてみたんだって……そしたらいきなり“黒い何か”が田仲さんを掴んで引きずり込もうとしたとか何と

か…」

「「……」」

ヒナギクも千桜もいきなりな話に思わず黙り込んでしまう。

「ああ、でも大丈夫だよ……多分酔ってて夢と現実がごっちゃになっちゃったんだろうから。
年をとるとそういうのよくあるからねぇ」

二人の表情を見て慌てて坂倉はそう言うと、快活そうに笑った。

「なあジーさん、それって本当にこの穴ですよね？」

いつの間にか、今まで黙っていたと思った駿が地下水路前に立っていた。

「え、鷺ノ宮君？」

「……」

彼は黙ったまま目の前の暗闇の先を暫くジッと見つめていたが、
何を思ったのか突然近くに転がっていた石を掴んだ。

「よっと！」

「「？」」

そしてその石を入口に向かって放ったのだ。
カコーンという音が水路の中に響き渡る。

「えっと、どうしたんだ？」

「まぁまぁ」

不自然そうな表情の千桜達に駿は曖昧に頷いていると……

「ミャア……」

水路の入口から一匹の猫が鳴きながら出てきたのだ。

「やっぱり……」

「「？」」

駿は納得したように一人で呟くと、出てきた猫をそっと抱えて坂倉達の所まで戻ってきた。

「さっきの男性が聞いた唸り声ってのは多分コイツですよ」

「え、猫がかい？」

「えぇ。猫ってこうやって喉をゴロゴロ鳴らす事がよくありますよね。多分中にいたコイツのその音が水路内に反響して大きな唸り声に聞こえたんだと思いますよ」

駿は猫をゆっくり地面に下ろしてやると、猫はサッと彼の元から逃げるように走っていってしまった。

「地下水路って音が反響し易いですからね。加えて深夜なら辺りは

静かだからより音波が増長しやすい……よくある話ですよ」

「じゃあ、穴から掴まれたっていうのは……」

「それこそ区内長さんの言う通りだよ」

ヒナギクの言葉に駿は一旦坂倉に顔を向けて言った。

「深夜にこんな場所を通るくらいだから、その田仲さんって人は相当酔ってたに違いないよ。だからきっと帰る途中にでもこの辺で倒れて夢でも見てたんじゃないかな。んでもって起きたらこんな場所にいたもんだから夢と現実がごっちゃになった……そんな所じゃないかな」

「おぉ、なるほど」

彼の説明に坂倉は感心したように手の平をポンと打った。

「確かに、それが一番辻褄が合う説明ですね」

「そうよね。幽霊って聞いてちょっと驚いたけど」

千桜とヒナギクも言われてみればその通りだと納得したように首を縦に振る。

「そうそう。幽霊だの妖怪だの…そんな非科学的な事が有るわけないって。超情報化社会の日常においてさ……」

駿はそう言って納得した三人と同じように口を揃えてはいたが、

その目線はしっかり地下水路の方を捉えて離さなかった……

＊

「ただいま帰りました～」

ヒナギク達と別れて、駿は自宅に帰宅すると、時刻はもう夕暮れになっていた。

彼はキョロキョロと辺りを見回すと、ソロリと玄関から屋敷に入っていく。

「あ、執事さん」

「お、これは駿殿」

途中、縁側を歩いている時に鷺ノ宮家の執事を見つけたので声をかける。

因みに何故“駿殿”と言っているかというと、最初は彼らも“駿お坊ちゃん”と言っていたのだが、彼がその呼び方を極端に嫌がった為にこのような呼び方になったのだ。

「伊澄は、今出掛けてますか？」

「えぇ。先程ナギお嬢様のお宅にお送りいたしました。あぁそれから、今夜はお泊まりになるとおっしゃっておられましたよ」

「そうですか。分かりました」

駿はニッコリと笑って礼を言うと、そのまま自室には向かわずに反対方向の廊下に歩いていく。

（なら、都合が良いな……）

そんな事を思いながら彼はとある部屋の前までやってきた。
そしてその引き戸をコンコンと軽く叩く。

「銀華ばあちゃん、居る？」

「……駿か。どうした？」

暫くして駿の返事に返って声を聞くと、彼はその引き戸を開けて、部屋に足を踏み入れるのだった……

＊

深夜……
零時を過ぎた合図の音が鷺ノ宮家の居間にある大きな古時計から鳴っている……

そんな中、屋敷の門の前には青年が一人立っていた。

藍色の半襦袢の上に右側の裾が不自然に長い白い羽織り。
下は白い袴が足元まで伸びていて白いわらじが下から覗いている。

「妖怪なんぞ日常ではあり得ないか……」

右手には柄も鞘も白い美しい日本刀が握られている。

（……違いねぇ。ソイツは壊しちゃならねぇ秩序なんだろうよ）

自嘲気味に口元を歪めると、クルリと背を向けて門に手をかけた。

「だがここからは……
非日常（けがれ）の時間だ……」

眼光を鋭く光らせて、
鷺ノ宮駿は深夜の闇に姿を消していった……

其の九　日常と非日常の境目（後書き）

感想、質問、批判、お待ちしております！

また、こんな話ややり取りをして欲しいというアイデアがあったら是非感想に書いて下さい！

頑張ってお答え出来るように執筆してみますので！

其の十　穢れの刻（前書き）

伽藍
「取り敢えず、今回で一日が終了です！！」

駿
「長いな……」

伽藍
「うん。これからはもっと早く進めるから」

駿
「んじゃ、始めますか！！」

其の十　穢れの刻

時は少し戻って
酉の刻（午後六時）……

「ほぅ……下水道とな？」

駿は曾祖母である鷺ノ宮銀華の部屋に正座をしていた。

「ああ、人が引きずり込まれそうになったんだとさ」

「ふぅむ……」

それに向かい合っているのは野良猫を周りにクナイをいじっている銀華。

「なぁ、ばあちゃん。そんな時間帯の地下水路にいるのってどんな類いの奴だと思う？」

「まぁ……私怨・怨恨の類いかのぅ」

「怨恨？」

銀華は子猫を撫でながら少し考えるとそう言った。

「うむ。そういう日の当たる事の無い寂れた場所には集まり易いも

のじゃ。かつてそこで死んだ物の怨みが周りの強い怨みを引き寄せて形となったんじゃないか？」

「……マジでか」

駿はそれを聞くと心底嫌そうに顔をしかめる。

「そういうの苦手なんだよな俺。怨みとか憎悪とかそういうの……」

「なんじゃ情けない。お前はそれでも私の弟子かえ？」

彼の弱気な発言に銀華は猫から目を離すと呆れたようにため息をついた。

「拾われてきた五歳のお前を、このオババが手塩にかけて鍛えて、可愛がってやったというのに……」

「鍛えるって……単にボコボコにされてただけじゃねーか……しかも散々各地に引っ張り回しやがって……七歳の時、熱帯雨林に置き去りにされた時の恨みはまだ忘れてないぞ」

「何じゃ、まだそんな事を根に持っておるのか……ちっさい奴じゃのぉ～」

「ちっさくねぇ！！」

銀華は駿を見るとやれやれと肩を竦めてみせる。

彼はとんでもないという表情をして首を振るが。

「まぁとにかく、その近辺にいるのは念の塊じゃろう。
大した事はない雑魚じゃな」

「……そうか。
とは言え、このまま放っぽいてても危ないから、さっさと片付けとくかね……」

話を戻した銀華に駿は頷くとゆっくりと正座から立ち上がる。
そのまま一回伸びをすると引き戸の方に向かっていく。

「おい、馬鹿。
また伊澄に黙って行くのか？」

「……しかたねーだろ。今伊澄はナギの家に泊まってるんだから。
俺だって、
本当は連絡したいんだよ？
だけどわざわざ帰って来てまた迷子になったら大変じゃねーか。
だから仕方なく……」

「白々しいのぅ……まったく」

ヒラヒラと手を振る駿に銀華はジト目を向ける。
本当は微塵もそんな事を思っていない事が簡単に見てとれる。

「んじゃ、深夜になったら行ってくるわ。あんがとな」

「オイ」

部屋から出ようとする駿にもう一度後ろから声をかける銀華。

「雑魚とはいえ……怨念の強さによっては力も侮れんぞ。気を抜くなよ……」

「分ァってるよ……だから……」

そう言うと彼はそっと人差し指を口に当てて銀華に振り返った。

「この話、伊澄には内緒な」

其の十　穢れの刻

時は戻って子の刻（午前零時）

「ここか……」

暗闇が静けさを引き立てる中……和服姿の駿は地下水路の前まで来ていた。

ゴオォォォォ……

「確かに……
何かいるみてぇだな……」

水路の入口から低い唸るような音が響いてくると、駿はキッと目を細めて面倒臭そうに呟いた。

「さてと……」

彼はそのまま足を入口に向けて進めて行く。
暗闇が永遠と広がる空間を目の前に、白夜を少し持ち上げる。
しかし入口の奥からは何も音がしない……

「……？
何もねーな……」

暫く目の前に立っているが、何も起こらず静まり返っている。

ガシッ……！！

「な！？」

駿が一旦後ろを振り返った時だった。いきなり足を何かが掴んだ感触が彼を襲った！！

「……！？」

振り返ると両足に黒い髪の毛のような束が巻き付いていた。
しかも相当な力強さである……

「っ！！タイミング悪ぃなオイ！！」

更に水路の奥から黒い蔓のようなモノが次々と伸びてきて彼の足、膝、体に順に巻き付いてきた。

その力はあまりにも強く、駿は成す術もなくうつ伏せにさせられてしまう。
浅瀬の川沿いだが、下に水があるので彼は水面に叩きつけられ息が出来ない状態になる。

「あ…ぐっ……！！」

黒い蔦は容赦無く締め付ける力を強めると、そのまま彼を入口に引きずり込み始めた。

駿は水路の中の水中に全身を飲み込まれた。

「ゴボッ……！！」

蔦が無数に絡み付いてきて彼は身動きが取れない……

このままだと窒息死は時間の問題だろう。

（くっ！！）

咄嗟に駿が白い日本刀“白夜”を握りしめると、目映いばかりの銀色の光がいきなり水路中を一斉に覆った。
それは、白夜から放たれる強烈な光……

途端、先程まで彼に絡み付いていた黒い蔓のようなモノが一瞬力を弱めた。

（……！！）

駿はその僅かな隙を見逃しはしなかった。
素早く白夜で自分の周りを一閃すると、黒い蔦は切り裂かれて彼から離れていく……

「っぷは！！」

駿は水面から顔を上げると、水路の奥に向かって全力で走っていった。
白夜に纏う光のおかげで真っ暗な地下水路の先が何とか見える。

どうやらまっすぐな通路が暫く続いた先に、大きな地下広場があるようだ。
しかも水位は今の通路よりもかなり深いようだ。

「あーっ！！
この汚れ落ちるかな、クソっ！！」

駿は羽織りや袴についた黒ずみを見てそう悪態をつくと、奥にとにかく走っていく！

その後ろからスルスルと黒い何かが追っていった。

＊

「！！」

駿は通路を抜けると、大きな地下広場に出た。
しかしかなり水位が深く、白夜を持ったまま泳ぐ形となった。

「おっ……！！」

すると駿は前方にコンクリートで出来た陸を見つけた。
無論急いでそこを目指す訳だが…勿論後ろからは無数の黒い蔦が追ってくる。

「しつけーな……！！」

駿は泳いだまま凄まじい速度で白夜を振るい、それを凪ぎ払う。

そして何とかコンクリートの陸地にたどり着いた。
すぐに水面から這い上がってコンクリートの上に立った。
黒い蔦は追うのは止めたのか、
地下内は静まり返る……

「……」

駿は一回周りを見渡すと、ゆっくりと息をついて白夜を構えた。
腰を低く保った居合いの姿勢……

「来いよ化物」

ゴオォォォォォォォ……

彼の言葉が地下内に響くと、下の水の中からゆっくりとソレは姿を現した。

真っ黒でドロドロとした太い触手が駿の立っている周りからのっそりと無数浮き上がってくる……

そして前方には黒い坊主のような大きな頭……
紅く丸い目がギラギラと駿を捉えて離さない。

「予想外にデカイな……
まるでタコだ……」

駿は苦々しそうに呟く。
全身が真っ黒の巨大なタコという彼の表現は間違ってはいないだろう。

駿の足と周りの触手が動いたのはほぼ同時だった！！

『ウゥウウウ！！』

「っ！！」

触手が唸りをあげて駿に振るわれ、彼はそれを一閃する。
すぐさま次の触手が這うように彼を襲う！！
その隣の触手も、その隣の触手も……次々と。

しかし駿はそれ以上に速い。
暗闇を照らす一筋の光は目にも止まらぬ速度で、太い触手を捌いていく！！

『オォォォ…！！』

白夜が触手を斬り裂く度に、正面の黒い本体は苦しそうな呻き声をあげるかのよう……

そんな呻きが鳴り止まぬ中、
駿は周りの全ての触手を斬って片付けた。
残っているのは目の前の海坊主のような黒い頭本体だけ……

「これでようやく一対一だな」

『……』

のっそりと紅い目をギョロつかせると正面の駿を捉える。

『グ……ググ……』

「……」

彼は再度居合いの構えで白夜を寝かせる。

刹那……

『アアアアア……』

目の前の大きな頭から人間の手の形をしたモノが次々と飛び出して駿に一斉に伸びていった。

そして頭自身も彼に向かって倒れるように迫ってくる！！

「上等……！！」

『オオオオオ！！！』

駿は歯を食い縛ると、

正面から巨大な頭と無数に伸びる手に向かって突っ込んでいった……！！！

＊

「ただいま帰りました……」

駿は静かに鷺ノ宮家の門を開けて小声で呟くと、敷地の中に入ってきた。

「なんじゃ、思ってたより遅かったのぅ」

「おぅ!?」

慌てて振り返ると、腕を組んで門に寄っ掛かる銀華の姿があった。

「んだばあちゃんか。
脅かすなよ」

「なんじゃその言い草は。
だが、片はついたみたいじゃな」

銀華の言葉に彼は『なんとかね』と答えて頷いた。

「それにしても……臭っ!!
ちょっ近寄るなお前!!溝の臭いがするぞ」

「え?そんなに臭い?」

「ああ。酷い臭いじゃ。
全身からする」

銀華は思いきり顔をしかめると、シッシッと手を払う。

「その臭い、取れないと絶対に伊澄に嫌われるぞ」

「えぇ!?絶対!?」

「もう寝るわ。
お前は早く服を洗って臭いを取れ」

銀華はサッと背を向けると一刻も早く離れようと屋敷に戻っていく。

「ああ、因みに洗濯機は動かせんぞ。さっき壊れた」

「……つまり?」

「手で洗え。今」

「……」

その後……
明け方近くまで、庭で和服を手洗いしている可哀想な青年が一人寂しくいたという……

其の十　穢れの刻（後書き）

伽藍
「話のアイデアだけでなく、妖怪思いついたって方も是非感想欄にお願いします」

駿
「ギャグ的な妖怪だと俺は楽で嬉しいんだが」

伽藍
「次回もよろしくお願いします♪因みに目録は次回です」

この辺で一旦主人公プロフィールとか入れといた方が良くね？　追記：９／３０

伽藍
「この辺で一回キャラ紹介でもしておきたいと思います。
といっても核心部分には一切触れない簡単なものです」

駿
「散々な紹介になりそうな気がする…」

伽藍
「実際散々なキャラじゃんお前」

駿
「……いや、まぁそうなんだけどさ……少しは良い所も書いて欲しい訳でさ…」

伽藍
「んじゃ、簡単にプロフィールです！」

追記：９／３０
主人公の挿絵を載せてみました。恐ろしく下手ですが……

この辺で一旦主人公プロフィールとか入れといた方が良くね？　追記：9／30

泉
「いつも笑顔の、いいんちょさんレッド♪」

美希
「役員の頭脳、副委員長ブルー！」

理沙
「敵か味方か、風紀委員ブラック！！」

千桜
「て、敵を欺く七変化、書記イエロー／／／」

愛歌
「影の参謀（弱点帳）、副会長パープル♪」

駿
「超シスコンな主人公（一応）、
会計ホワイト！！」

一同
「そして我らが最強の司令塔！！
“完全無欠な才色兼備、会長ピンク！！”」

【ザ・白皇学院生徒会】！！

ドーン！！！

ヒナギク
「……何よコレ？」

美希
「いや～、主人公プロフィールの回だろ」

千桜
「だったら普通にやれば良いでしょう／／／
流石にこれは恥ずかしいというか……／／／」

愛歌
「そうかしら？面白いと思うけど♪」

駿
「何故弱点帳を広げるんですか愛歌さん！？」

理沙
「ま、という訳でただ紹介してもつまらないからこんな風にしてみたのだよ」

泉
「なのだ～♪」

ヒナギク
「ホント行き当たりばったりね……」

美希
「では、今までの情報を元に私が駿君のプロフィールを仕上げてみたぞ！」

愛歌
「今のところなので、まだまだ秘密の部分がたくさんありますよ♪」

美希
「では、どうぞ！」

鷺ノ宮　駿

＞ｉ３２１１７―２１５９＜

【性別】
男

【年齢】
１６歳

【誕生日】
５月５日

【血液型】
Ｏ型

【家族構成】
？？？（過去）
妹、母、祖母、曾祖母（現在）

【身長】
１７１ｃｍ

【体重】
５２ｋｇ

【好き】
伊澄×∞、鷺ノ宮家、伊澄を撫でる事、伊澄が喜ぶこと（思い込み）

【得意】
エロ本の隠し方（日々鍛錬中）、和菓子作り、妖怪退治、剣

【嫌い】
俺を馬鹿って言う奴、伊澄を傷つける者（事）、

【苦手】
怒った伊澄、球技（自称）、ジャプニカ弱点帳

【備考】

自他共に認める超度級のシスコンであり、長所より遥かに短所が目立つという何とも残念な一応本作の主人公。

外見は意外と見られる顔はしている。黒髪はストレートに首の真ん中より少し下まで伸びている。
瞳は綺麗な琥珀色をしていて二重になっている。
身長も高くルックスも良い方だが上記の短所（？）がそれら全てを台無しにしているという。

五歳の時に彼を、鷺ノ宮家が引き取ったらしい。
詳しく状況はまだ謎。
その時から銀華が直々に散々な訓練をされた。
本人曰く七歳の時に熱帯雨林に置き去りにされた事も……

その時から伊澄を護るように言い聞かせられて今やこんな超シスコン野郎になってしまった。

伊澄のような術式は一切扱えないが剣術、体術に関しては群を抜いている模様。
全体が美しい白色の宝刀“白夜”を戦いの際に扱う。
白夜については後々秘密が明かされる筈……

また、極度のシスコンの為によくロリコンや変態と勘違いされるが実際は全く違うらしい。
恋愛対象は年上の女性。（発見されたエロ本より）
特技にある通り、エロ本は見つからないように隠すが場所を忘れる事が多々あり、前回見つかった時は伊澄に縛り吊るしにされた。

美希
「……と、今のところはこんな感じかな」

駿
「うおォォォォい！？
どこまで知ってんだお前は！？」

泉
「にはは～、赤裸々に暴露されちゃったね～？」

ヒナギク
「でも流石にこれは……」

千桜
「すまん。フォロー出来ない」

駿
「止めろォォォォ！！
そんな目で俺を見るなァァァァァァァァァァァ！！」

理沙
「安心したまえ。このやり取りは本編とは一切関係無いからな」

美希
「その通りだ駿君。
これはあくまで番外なのだからな」

愛歌
「でも、こういう回では話題に出来るわよね～

フフフ……♪」

駿
「わあァァァァァ！！！」

こうして、駿は自身の中にある意味別のエンディングを迎えたという……完（笑）

駿
「いや、勝手に終わるなよ！！」

美希
「まぁ、こんな彼だが読者の皆さん、これからも生徒会及び諸事情を……」

一同
「よろしくお願いします！」

この辺で一旦主人公プロフィールとか入れといた方が良くね？　追記：9／30

後、二三話を挟んだら月光閃火さんが考えて下さったオリキャラが登場します！
駿と関係が深いというキャラです。よろしくお願いします♪

月光閃火さん、投稿ありがとうございました！

次回もよろしくお願いします♪

其の十壱　とある生徒会室の百物語（前書き）

今回の話は怖い話が多々あります。ご了承下さい

伽藍
「よくある学園ネタの話です」

駿
「んじゃ、始まるぜ～」

其の十壱　とある生徒会室の百物語

午後五時……
日も暮れてきてうすら暗い空に僅かに夕焼けの橙色が入り混じっている。

「あ～……」

白皇学院生徒会室では、鷺ノ宮駿が窓からそんな空を見上げながらだるそうに唸っていた。

「どうしたんだ？今日はずっと元気が無かったな」

「あぁ、ちょっと寝不足でな…
今日二時間しか寝てなくて」

書類を片付けていた千桜がそう尋ねると彼はのっそりと顔を上げて答えた。
なるほど、彼の目の下にはうっすらと隈があった。

「二時間って……何してたらそんな睡眠時間になるのよ…」

そう聞き返したのは会長の机で書類に目を通していたヒナギク。

「んな決まってんだろ。
アレだよ……洗濯」

「「せ、洗濯？」」

「そう、洗濯。
桃太郎のおばあさんの如く、寒空の下庭で一人寂しく洗濯をしてたわけよ」

駿は『ふわぁ…』と欠伸をすると書類にペンを走らせては脇に退ける。

「何でそんな事？」

「きっと……」

ヒナギクが尋ねると隣で整理をしていた愛歌が人差し指を立てて口を開いた。

「駿君が何故か夜中遅くに泥だらけで帰ってきたんだけど、家の洗濯機が壊れていて、大事な服だったから仕方なく庭で手洗いをしていたら明け方になっちゃった……みたいな感じじゃないかしら」

「おっしゃる通りで……
ってか何で知ってるんですか！？」

「さぁ、何となくよ♪」

驚いた視線を向ける駿に愛歌はニッコリと微笑んで返してくれた。

「……まぁとにかく、そろそろ仕事もきりがつきそうだし休憩でもしましょうか」

「そうですね……」

ヒナギクは敢えてその辺の事情には触れず、立ち上がると食器棚に向かっていく。
無論、紅茶を淹れるためである。

「あり？
そういや花菱達は？」

「あの三人なら、開始三分でいなくなったよ」

「……ある意味凄いよな」

千桜が鞄から小説を取り出しながら出口を見て言うと駿は呆れたように呟いた。
と、千桜の鞄が倒れた拍子に中からノート等が駿の前に飛び出してきた。

「あ！！」

「あぁ、大丈夫」

千桜は慌てて拾おうとするが駿が代わりにそれらを拾った。

「ありがとう」

「あぁ。

……ん？」

彼はノート類をまとめて千桜に返そうとした時に、彼女の名前が書いてあるのが目に入った。
暫くそれを見つめると、意外そうに口を開く。

「……春風の下の名前のチハルって、千桜って書くんだな」

「そうだけど……
読みにくいよね」

千桜はそう尋ねるが、駿は首を振って微笑んだ。

「とっても良い名前だな。
本当に綺麗な読み方だと思うよ」

「え？
あ、ありがとう／／／」

いきなりの言葉に思わず顔を紅くしてしまう千桜。
しかし駿はそれには気付かずに千桜のノートをトントンと揃える。

（名前を綺麗なんて言われの……始めてだな／／／）

「あ、ハイ。ノート」

「ありがとう／／／」

嬉しそうに口元を緩める千桜に駿は揃えたノートを渡した。
彼女はそれを受け取ると頬を赤らめたまま鞄にしまう。

「名前って大切だから。

きっと……色んな想いが込められてるんだろうな」

「……？」

しかし彼がそう言った言葉は、千桜に向けられているというよりは彼自身に向けられているように思えた。

「「何ラブコメってんだー！！」」

「「！？」」

いきなり二人に叫び声を上げたのは美希と理沙だった。
後ろには泉の姿も。

「は、花菱！？」

「美希！！
アナタ達今までどこに行ってたのよ！？」

机に座っていたヒナギクも当然突然現れた三人娘に声をかける。

「何、そろそろ休憩の時間かと思ってな」
「サボっていたんだが面白い事を思いついたのでやって来たんだ！」
「なのだ～♪」

「……アナタ達ねぇ」

「あらあら」

三人娘のメチャクチャな言い分に頭を抱えるヒナギク。
その隣では困ったように微笑む愛歌。

「しかし、面白い事って何だよ？」

「フッ、よくぞ聞いてくれたなラブコメ真っ最中だった駿君」

「止めんかその言い方」

美希は微笑すると、無駄に一回転してビシッと指を掲げた。

「本日の生徒会の企画は……
ズバリ、百物語だァ！！」

其の十壱　　とある生徒会室の百物語

真っ暗な生徒会室に、立てられた蝋燭からゆらゆらと光が漏れている。

「では……
順番に怖い話をしていこうか」

「「「待てい！！」」」

暗いので定かでは無いが、
美希と思われる声が語り始めようとするとヒナギク、千桜、駿の声がそれを止めた。

「何でいつの間にこんな状況になってるのよ！？」

「そりゃ、百物語をやるからな」

理沙と思わしき声がさも当たり前のように言ってのける。

「だから俺達がいつそんなものをやるって言ったよ」

「まぁまぁ、どうせ休憩する所だったんだろう？
なら良いじゃないか」

「いや……だけど」

駿は言いよどむが三人娘はもうやる気満々なように不敵に笑っていた。

「あら、良いんじゃない？
たまにはこういうのも」

「「「愛歌さん！！」」」

クスリと笑った声は恐らく愛歌であろう。

「ほら、愛歌さんもこう言ってる事だし……やろうよ～♪」

「「「……はぁ」」」

遂には愛歌まで賛成するように言い出したので、ヒナギク達は渋々頷くことにした。

因みに百物語とは…
日本の伝統的な怪異語りの方法である。
百本の蝋燭を立てて、一人が一話ずつ怪談を語り、語り終えたら目の前の蝋燭を吹き消す。
それを続けて百話目を語り終えて蝋燭を消すと本物の怪異が現れると言われている。

因みに今回七人で行うので百じゃねーじゃんとかそういうツッコミは無しの方向で。

というわけで一番手……

「では、まずは私が先鋒を務めよう！」
美希と思われる声が高らかにそう宣言した。

ーーーーーーーーーーーーーーー

【ベッドの下の男】

これは私が外国に旅行に行った時の話です。
私は友人と共にアメリカに旅行に行きました。
様々な観光名所を見て回り、ショッピングも楽しみ、大変満足してチェックインしたホテルに戻りました。

そして夜……
私達はベッドに横になってテレビを見ながら談笑していました。
部屋には縦長の鏡も立て掛けてありました。

しかし、暫くするとだんだんと友人の口数が減ってきたのです。

私は『どうしたの』と尋ねましたが、友人は何でもないと答えました。どうにも友人の顔色が悪いのが、気がかりでしたが、私はまたテレビに目を戻しました。

暫くすると、友人が『喉が渇いたのでジュースを買いにいこう』と

言い始めました。
私は動くのが面倒だったので、『一人で行ってきて』と言いましたけれど、友人は頑なに『一緒にいこう』と言うのです。
半ば強引に部屋から連れ出されて下の売店まで行くと、友人は真っ青な顔をしてすぐに警察に連絡するようにといいました。
私は『一体どうしたの？』と尋ねると、友人は……

「見てなかったの……？
アンタのベッドの下にナイフを持った男がいたんだよ！？」

数時間後、私達のいた部屋から連続殺人犯が警察に逮捕されたそうです。
そう。友人は立て掛けてあった鏡から私のベッドの下が見えていたのです……
もし、私が頑なに部屋から出るのを拒んでいたら……

ーーーーーーーーーーーーーー

フッ……

美希の前にあると思われる蝋燭が吹き消された。
室内には気味の悪い風が筒抜ける気がした……

ギュッ……

（……え！？／／／）

千桜が座っていると、いきなり彼女の右手が握られた。
彼女の右隣には駿がいる筈なので、手を握っているのは彼だといえるだろう。

（な、暗いからっていきなり大胆な……／／／）

「では、次は私がいこう」

千桜のそんな思考を止めるかのように理沙と思わしき声がした。

ーーーーーーーーーーーーーー

【試着室の秘密】

南アジアの方には色々と危険な噂があります。
これはそんな噂の一つ……

とある国に一組の夫婦が旅行に来ていました。

ツアー旅行で二人はとても楽しみました。
しかしこのツアーには決まりがあって、この国の下町には決して行くなということでした。

そんなわけで旅行も最終日、最後は自由時間が与えられたので夫婦はこっそり下町にいってみました。別段何事も無く、夫婦は順調に買い物を楽しみ、最後にとある洋服屋に入りました。
しかし夫は疲れていたので外で待っている事にしました。

しかし、いくら待っても妻が戻って来ません。
流石に業を煮やした夫が洋服屋に入りましたが妻の姿は何処にもありませんでした。
店員に聞いても行方が分からず、結局妻が見つからないまま夫はツアー団体に戻りました。

ツアーの人間に事情を離して国の警察や日本の警察に捜査を託して夫は一体日本に帰りました。

しかし一向に連絡は無く、見かねた夫は再びその国の下町に捜しにいった。
捜しても捜してもやはり見つからない。
諦めかけたその時、ある見世物小屋が目に入ってきた。

興味本位から入ってみると……
ソコには四肢を無惨にも切り取られた人間達磨がズラリと並んでいました。
そしてその中に……

「ア……ナ…タ」

ーーーーーーーーーーーーーー

フッ……

理沙の前の蝋燭が消える。
またまた不気味な風が七人をすり抜ける。

（鷺ノ宮君……いつまで握っているつもりだろう／／／
いや、別に嫌とかではないけど……）

未だに千桜の手の上には駿の手がおかれているようだ。

しかし周りが静まり返っている所を見ると、皆大分怖がっているように思える。

「……じゃ、じゃあ、次は私だね」

どうやら泉のようだ。

ーーーーーーーーーーーーーー

【コンセントから生えるモノ】

ある所にアパートに独り暮らしの男がいました。彼はパソコン関係の仕事をしていたので、アパートの部屋には沢山のタコ足配線が繋がっていました。

しかしある時、隅に埋もれた配線の中に黒い髪の毛が数本挟まっているのを見つけたのです。
男は自分から落ちた髪の毛だろうと特に気にせずにいました。

そして一ヶ月……
また男は隅の配線を退かすと……なんと１ｍほどの長い髪の毛が配線の至るところに巻き付いていたのです！！

男は驚いて配線を更に退かすと、その髪の毛はコンセントの差し込み口から垂れていました。
恐怖に刈られた男は一気に髪の毛を抜き取りました。

すると大量の血が差し込み口から吹き出しました。

「痛ぇな……」

ーーーーーーーーーーーーーー

フッ……

泉の前の蝋燭が吹き消され、静まり返った室内の光は残り四つとなった。

「次は私ですね……」

方向からして愛歌だと思われる声が語りを引き継ぐ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

【……】

暗いよ……苦しいよ……痛いよ……

……

……

……

……助けてよ……

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

「え？あの……愛歌さん？」

「あら、どうしたの？」

美希と思わしき声が尋ねるが、愛歌はすまし声で返した。

「と、とにかく、次にいこうか」

「じゃ、じゃあ私が……」

ヒナギクと思われる声が戸惑いがちにした。

ーーーーーーーーーーーーーーーー

【喋る生首】

都内ではよく人身事故がありますが、遺体は無惨にもバラバラになるそうです。

それを片付けるのは駅員さんの仕事で一般の乗客は滅多にそんな場面は目撃しないのが普通ですが、ある乗客が偶々事故の際に下に転がっていた首をみてしまったのです。

すると、動かない筈の生首の目がギョロリと動いて……

「何見てるの？」

ーーーーーーーーーーーーーー

フッ……

ヒナギクの前の蝋燭は恐る恐る吹き消される。
若干皆が震えているのは気のせいでは無いだろう。

「じゃあ、次は私が」

今度は千桜と思われる声がした。声の様子から何故か少し赤くなっているように思える。
それもその筈、彼女は手を握られているのだ。

ーーーーーーーーーーーーーー

【予知夢】

ある女性がこんな夢を見ました。

夜中の帰り道、老婆に道を尋ねられ道を教えました。

その後アパートの前まで行くと、突如後ろから来た男に刺されてしまうという悪夢でした。

そして後日、女性が夜中の帰り道を歩いていると、見たことのある老婆に道を尋ねられました。
なんとそれは夢で見た老婆だったのです。

怖くなった女性は全速力で老婆を振り切り家に逃げ帰りました。
そしてアパートの自分の部屋の扉の前まで来ると、
赤い血でこう書かれていた。

『夢と違うことするんじゃねえよ』

ーーーーーーーーーーーーーー

フッ……

千桜の前の蝋燭が消されて、生徒会はますます暗くなってきた。

「そ、その…／／／
鷺ノ宮君？」

「ん？その声、春風か？
どうした？」

「いや、何でも無い／／／」

「……？

ま、いっか。んじゃ、最後は俺だな」

駿と思わしき声はそう言うと、息を潜める素振りをする。

「我が鷺ノ宮家に代々伝わる……とびきり恐ろしい話を皆さんにお話ししましょう」

駿が声を低めると、周りがグッと息を呑むのが聞こえた。

ーーーーーーーーーーーーーーー

【立ち直れなくなる話】

これは本当にあった話だ。

ある朝、俺が居間まで朝食を摂りに行くと、いつも通り義母さんと伊澄がいた。

俺は義母さんと伊澄に挨拶をした……

しかし……

義母さんは返してくれたが、伊澄からは何の返事もなかった。

俺はもう一度伊澄に挨拶をしたが、伊澄はなんと……

顔を背けたのだ！！

ーーーーーーーーーーーーーーーー

フッ……

「「「終わりかいィィィィィィィ！？」」」

駿が蝋燭を消すと同時に一同が思いきり転けた。
愛歌のクスリと笑う声も駿の耳には届いてくる。

パチ……

そのまま、生徒会室に明かりが戻った。どうやらヒナギクが室内の明かりをつけたようだ。

「っていうか駿君！！
それのどこが怖い話なのだ！！
せっかく良い感じの雰囲気だったのに…」

「にはは～……
結局こうなったね～」

「はぁ……」

三人娘は勿論、ヒナギクも呆れたようにため息をついていた。

「いやいや、メチャクチャ怖い話だろう」

「「それは君だけだぞシスコン」」

三人娘の器用なツッコミが駿に投げかけられた。

すると駿は隣で少し顔を赤くしている千桜に気が付いた。

「あれ？どうしたんだ春風？」

「いや……いくら暗いからといっていきなり手を掴むのは…」

「手を掴む？
誰が……？」

千桜の言葉に駿は首を傾げて聞き返す。

「だから……」

「えっと……俺は何も掴んで無いぞ？ずっと腕は組んでたしな」

彼はそう言って今まで組んでいた腕を解いてみせた。

「……え？」

千桜は一瞬表情を固める。

「あの～……」

「「「？」」」

そんな中、愛歌が一同に声をかけた。皆は愛歌は振り返る。

「私がまだ話終えて無いんだけど……？」

「「「は？」」」

彼女の言葉に一同は一瞬思考を停止させる。

「えっ……だって愛歌さん、さっき話を……」

「まだ私は話してないわよ？
ほら、蝋燭だって」

確かに、愛歌の前の蝋燭は火が灯ったままである。

「ちょっと待ってくれるかしら……」

ヒナギクは手を前に出して皆の言いたい事をまとめようとする。

「ここにいたのは七人。
話をした順番は美希→理沙→泉→愛歌さん→私→千桜→鷺ノ宮君だと思ったのだけど、愛歌さんは話をしていない……」

「し、しかも……千桜は誰かに手を握られたけど、駿君は一回も手を動かしていない…」

ヒナギクと美希は若干冷や汗を浮かべながら話をまとめる。

「つー事は……」

「「「「「この部屋には八人いた……って事……」」」」」

・・・・・・・

ガタッ！！

「うおォォォっ、皆逃げろォォォ！！」

「のわァァァ！！お化けが出たァァァァ！？」

「本物か！？本物なのか！？」

「にゃあァァァァ！？」

「ずっと掴まれてた！？」

「もぉ、何なのよーーーっ！！」

一同は物凄い勢いで立ち上がると、女性陣は皆涙目で、駿も顔をひ

きつらせて叫び、一目散に生徒会室から飛び出していった！！！

残ったのは愛歌が一人。

「あらあら……」

彼女は目の前にあった蝋燭をそっと吹き消した。

「ちょっとやり過ぎちゃったかしらね～♪」

よく見ると愛歌の隣にはレコーダーの機械があった。
彼女はそのレコーダーのスイッチを押すと、

『暗いよ……苦しいよ……』

と音声が流れてきた。
愛歌は悪戯っぽく微笑むと、鞄を持って席を立った。

「でも……千桜さんの手の事はどういう事なのかしらね？」

愛歌は頬に手を当てて天井を見上げる。
そして生徒会室の電気を消して、逃げていった一同の後を追うのだった……

百物語で有名な話……

話最中に人が一人増えている事がたまにあると言う。
しかし終わると元に戻っているそうな……

其の十壱　とある生徒会室の百物語（後書き）

質問があったらお願いします！
質問コーナーを作ろうと思いますので。

妖怪目録は次回で？
すみません

伽藍
「まずい！！こっちのネタばかりが思いついてしまう！！」

駿
「またこの間みたいな事態にはならないだろうな？」

伽藍
「大丈夫！５月中には銀ごとを更新するようにするから！！」

駿
「ま、取り敢えず始めるか」

伽藍
「因みに次回は生徒会の歓迎会の話です」

駿
「いきなり次回の話！？」

其の十弐　プロジェクト鷺ノ宮～迷走者たち～　「今夜は妖怪退治にかけた

鷺ノ宮伊澄……
代々妖怪退治を生業と由緒ある一族の末裔で、歴代最強の力を持つ超方向音痴の少女である。

鷺ノ宮駿……
その伊澄の兄であり、超妹馬鹿な青年。
剣一本で妖怪から大妖魔まで成敗する、一族では勿論、妖怪退治において最強を謳われる鷺ノ宮家の長男である。

西に妖怪があれば、迷子になった妹を兄が何とか目的地に連れていき調伏し……

東に悪霊があれば、迷走する妹を兄が何とか連れて調伏する！

詳細な地図を用意していただけるか、案内人を派遣して下されば、多分そこそこ時間通りに現場に到着？

妹の式術と兄の剣術で妖怪達を一撃必殺で悪霊退散！！

（この辺で地●の星の伴奏が流れ始める）

これはそんな二人が……
妖怪退に向けた苦悩と努力を綴った……
真実の物語である
（田口ト●ロヲのナレーション）

其の十弐　プロジェクト鷺ノ宮
～迷走者たち～
「今夜は妖怪退治にかけた兄妹の物語です」

ーーーーーーーーーーーーーー

拝啓　鷺ノ宮様へ

本日、午前零時
負け犬公園の広場にて待つ。
決闘されたし。
（武器持参）

一言
「貴様らの家名を醜い血で濡らしてやる！！光が闇に屈する時が来たのだァ！！」

敬具　妖怪Ｂ・Ｍ

ーーーーーーーーーーーーーーー

「……果たし状だな」

「果たし状ですね」

すっかり日も暮れた午後七時。
鷺ノ宮屋敷のとある部屋では、鷺ノ宮駿とその妹の伊澄が目の前の手紙を見て首を捻っていた。

遡る事３０分前……
駿が学院から帰宅した際に、屋敷の門の前に綺麗な封筒がおかれていた。

何事かとそれを拾って家に持ち帰った。
宛先が無く、身に覚えが無い。
伊澄に尋ねたが彼女も知らないと言うので、封を開けてみた訳である。すると上記のような紙が出てきて今に至るわけだが……

スパーン!!

「何で妖怪が果たし状出してんだよ!?」

取り敢えず駿は床に手紙を叩きつけて突っ込んでおいた。

「まぁ、お兄様。お手紙をそんな風にしてはいけませんよ」

「いやおかしいだろ!!
何でわざわざ宣戦布告!?
つーか誰だよB・Mって!?
知らねーよそんな奴!!何知り合いみたいに送って来てんだよ!?」

「……？」

一切ツッコミを入れない伊澄の代わりに駿が立て続けに突っ込む。
その後疲れたのか腰を落とすと盛大にため息をついた。

「……ったく、馬鹿馬鹿しい。
悪戯か何かか？」

「でもお兄様、このままにしておく訳にもいきませんよ？」

駿は手紙を指で摘まむと疑わしそうに眉をひそめるが、伊澄が小首を傾げて彼を見つめた。

（か……可愛い過ぎる／／／）

「お兄様？」

「コホン！！
い、いや……何でもない／／／」

何気ない伊澄の仕草に駿は『生きてて良かった』と思いつつ咳払いをして話を戻そうとした。

「ま、伊澄の言う通り放っておく訳にはいかないだろうが……
見るからに馬鹿っぽいぞコレ
害のある妖怪なのか？」

「こんなものを送ってくるって事はそういう類いの妖怪だと思いますよ。
私達が行かないと他の方に襲いかかるかもしれません」

「ん……それは、まぁ」

伊澄の最もな発言に彼は決まりが悪そうに頷くが……
しかし頭を掻いて困ったような表情を伊澄に向けてみせた。

「でも、確か今日は他に依頼が入ってるんだぞ？」

「えぇ」

そうなのである。実は本日の鷺ノ宮家には妖怪類いの依頼が既に一件入っていたのだ。

「ですが、そんなに時間はかからないご依頼だと思いますよ」

「うーん……」

伊澄の言う通り、依頼内容は神社を荒らす程度の人には害を与えない下級妖怪達の除去である。

彼らにとっては朝飯前と言っていい仕事だ。

「先に神社に向かいましょう。公園の妖怪は果たし状を送ってくるくらいですからそれ相応の妖怪だと思います。いきなりは危険です」

「つってもなぁ……こんなアホなモン送ってくる妖怪が……ってか妖怪なのか、本当に？」

駿は胡散臭そうに果たし状を見ると顔をしかめる。

「お兄様。そのような事を調べるもの私達の仕事ですよ」

「……そうだな。伊澄がそう言うなら」

ゴーン……

駿が頷くと同時に古時計の午後七時半を知らせる音が鳴り響いた。

「おっと……
でもその前に、飯だ飯」

「はい」

彼は立ち上がると、伊澄の頭をポンポンと優しく撫でてそう部屋を後にした。

＊

午後十一時……

大きな爆発音が夜中の神社に響き渡る。

「はぁ……」

「……」

その広場の中心に鷺ノ宮兄妹。

駿は疲れたように白夜を地面に突き刺して腰を下ろしていて、伊澄

は御札を構えて真剣な表情で立っていた。

「思ったより数がいたな……
何か疲れた……」

彼は疲れた口調で息をつく。
その様子だと、どうやら神社の退治は済んだらしい。

「えぇ。
ですが、ここからが本番です」

「はぁ……」

キラーンと目を光らせて駿に振り返る伊澄。
しかし彼は盛大にため息をつく。

「お兄様、強敵と戦う前の戦闘員との闘いでそんなにやる気を無くしてどうするのですか。
歴代ヒーローさん達は皆メインの敵と戦うまで一生懸命ですよ。
スーパー戦隊さんとか仮面ライダーさんとか」

「俺がいつ日曜の朝のヒーローになったんだよ……」

「あう！」

駿は伊澄に軽くデコピンをすると苦笑混じりに立ち上がった。

「仕方ねぇ、もうひと頑張りしますかね」

「……痛い」

彼は額を擦る伊澄の頭に手を置くと、白夜を片手に歩き出した。
上着の白い羽織りが暗闇にヒラリと翻る。

その後を慌てて伊澄は追っていくのであった。

＊

～負け犬公園～

駿と伊澄が公園の広場に着くと、目の前には大きな茶色いマントを被って全身を隠しているモノが立っていた。
背丈は大体２ｍ程あり、足元からは緑色のゴツゴツとした様相の足が姿を覗かせていた。

「クックック……
約束通り来るとは、流石は鷺ノ宮家よ。その心意気だけは誉めてやろう。
しかしその小さくも屈強な光が我が深淵なる奈落に葬られる事を、これから貴様ら自身の身体にじわじわと刻みつけてｙ」

「長ぇーよ！！！

んなくだらん前口上の為に俺達を呼び出したのかテメーは！！」

駿はマントの言葉を遮って叫び、話を止めさせた。

「わざわざ果たし状まで出して決闘したいんだろ？
だったらさっさとそのフード脱げよ。最低限の礼儀として」

「フッ……
随分と余裕だな。しかし、貴様のその余裕がいつまで続くかな」

マントは顔を隠して不敵に笑ってみせる。

「冥土の土産に教えてやろう。
貴様らも融合現象という事を聞いた事があるだろう」

「「融合？」」

「そう。本来出会う筈の無い物体が一つの物体にまとまる事。
これを妖怪にあてらるのは本来ならそのような能力を持つ妖怪か、
上級妖怪のみが持つ力よ……
かの最悪最凶の妖怪、“地獄の牛鬼”もこの現象の代表妖怪といえよう……」

「融合妖怪……」

「んな事ペラペラ話して良いのかよ……」

茶色いマントの言葉に、伊澄は目をキラキラさせて、駿は呆れながらも聞いていた。

「しかし、この能力（ちから）を我が手に入れていたとしたら……

どうする？」

「な！？」

「まさか！？」

「クックック……

先程までの余裕は無いようだな。良いだろう！！貴様に拝ませてやる、この我の最強の姿を！！」

マントはそう言うと思いきり身を揺すり中の姿を現そうとする！

「お兄様！」

「あぁ、分かってらぁ！！」

伊澄が駿に顔を向けると彼は白夜を構えるて前方を睨む。

「さぁ、見て恐怖に恐れおののくがいい！！

この我の……！！！」

バッ！！！

「ブラシマンティスのな！！！」

現れたのは全身緑色のゴツゴツの鱗に覆われ、直立した両手の歯ブラシを構えるカマキリ…

「待たんかいィィィィィィ！！！！」

取り敢えず駿の渾身のツッコミが広場に響き渡った。

「ちょっ！！
おま、それ……！！」

目の前のカマキリに指をさして何かかける言葉を探す。

「フン……
どうやら相当驚いているようだな」

「そりゃ驚くわ！！
散々寒い前口上聞いて、融合だの最悪だのほざいた挙句に、
出てきたのが両手が歯ブラシのカマキリだったら！！」

駿は直立のカマキリに向かって白夜の柄を突きつけて怒鳴る。

「馬鹿かテメーは！！
歯ブラシってどんなチョイス！？
何でよりにもよって両手の鎌をブラシに替えたんだよ！？
お互いの良いところを見事に殺し合ってんじゃねーかっ！！」

「な、何て所業を……！！」

しかし隣の伊澄は口を袖に隠して驚いたように震えていた。

「伊澄！？
ちょっ、お前コイツの何処が恐ろしいんだよ！？
いくら妖怪だからってこれは手抜き過ぎる妖怪だろ！！
明らかに悪ふざけが生み出した産物じゃねーか」

「お兄様……
物質と妖怪の融合なんて……
この世に起こり得てはならない事ですよ……
これからは私達も対処の仕方を考えなくては…」

「いや……だから……そうじゃ無くて……」

真剣にズレまくっている伊澄の様子に駿は頭を抱えて首を振る。

「クックック……
あまりの恐ろしさに、驚愕し声も出ないようだn」

「呆れてんだよ!!!」

また白い柄を突きつけカマキリを怒鳴りつける。

「つーかお前!!
そのなりでよく果たし状なんて堂々と送れたもんだな!!
そっちに方にビックリだよ!!」

「フッ、あまりの恐怖に怒鳴って誤魔化しているのといった所か…
…青いな」

「……はぁ」

的外れなカマキリ基、ブラシマンティスの発言に盛大なため息を吐いて肩を落とした。

「とにかくお兄様、今は早く退治してしまいましょう」

「……いや、何かもうやる気が……」

「そんな事を言ってる場合ではありませんよ」

ダランと虚脱状態になっている駿に伊澄は御札を取り出しブラシマンティスを見据えた。

「残念ながら女よ。
既に男の方は我の恐ろしさに戦意喪失しているぞ」

「あのなぁ……
俺のモチベーションも考えろよ。夜中に、しかも妖怪に果たし状を送られて、んで出てきたのが両手歯ブラシの妖怪って……
そりゃ戦闘意欲も下がるわ！！」

今回ばかりは、もっともな意見である。

「まぁ良い！！貴様らに見せてくれるわァ！！」

「「！？」」

ブラシマンティスは思いきり身体を上げると大きな二つの目がギラリと光った。
そして次の瞬間ー！！

ドォォォォン！！

駿に向かってブラシマンティスの目からビームが放たれた。
彼は咄嗟の勘で避けたが、地面は禍々しく抉りとられた……

「何て威力……」

伊澄はその地面に目を向けると、目を見開いて呟く。

「クックック……
そうだろう。なんせ我が瞳から放たれるこの光線は超陽電子を使ったモノだ。
これならば人間など一瞬で骨まで溶かす程容易く殺れるわ……
凄まじいだろう？」

「いや確かに凄まじいけど……」

一方の駿は取り敢えず地面からブラシマンティスに視線を戻すと…

「歯ブラシ何の意味もねぇじゃねーかァァァァァ！！！」

闇夜に何度目かの彼の叫び声が幾重も木霊する。

「では、そろそろ本気でいくぞ！！我が闇夜の内に眠る漆黒の牙が、貴様の琴線のような光の希望を断ちｋ」

「うるせェェェェェ！！」

……その後、ブラシマンティスは駿によって秒殺されました。

～妖怪目録～

NO．３【怨念】

［外見］
一定の形容を成していないおどろおどろしい黒いモノとしか言い様が無い。

［説明］
人々の怨みや怨恨、憎悪が集まって出来た低級の妖怪。

だが、念の強さによって大きさや強さが変わる。
怨念が強ければ強い程、大きく強大になっていく。

駿が倒したモノは強さで言うと中くらい。
彼は視界の暗さ、地下水路の立地の悪さに思わぬ苦戦を強いられたが、本来ならば秒殺出来る。

［伝承］
詳細不明

NO．４【ブラシマンティス】

［外見］
カマキリが直立して、両手が歯ブラシになっているという何とも間抜けな姿。

［説明］
上記の外見の通り、非常に間抜けな格好の妖怪。
駿曰く『妖怪にしても手抜き過ぎる妖怪』

戦闘能力はイマイチ。戦闘方法は二つの目からビームを発射するというもので、両手の歯ブラシは何の意味も成していない。

駿に未だかつて無いほどツッコミをさせたある意味最強の妖怪でもある。

［伝承］
何故かカマキリは歯ブラシと合体してしまった。
本人の意思なのか事故なのかは謎である。

其の十参　闇鍋は十分な注意の元で良識の範囲内で行いましょう（前書き）

伽藍
「今回は闇鍋の話です！」

駿
「相変わらず作者は訳の分からないフリーダムっぷりですがどうかよろしくお願いします」

伽藍
「次回はオリキャラの登場です！！月光閃火さん、ありがとうございました！」

駿
「では、始まります！！」

其の十参　闇鍋は十分な注意の元で良識の範囲内で行いましょう

人間は比較的環境適応力が高い生き物だと思う。

一度環境が変わっも、何だかんだでそこに自分を順応させていくことが出来る。

例えば県から県に越しても早ければ一週間、遅くとも一ヶ月くらいでその場所に馴染んでしまうものである。
或いは海外。言葉の弊害はあるものの、一年もいれば自然と馴染んでいる自分に気がつく筈だ。

それは別段意識的に起こるものでは無く、生物いや人間特有の生きていく手段の一つだと言える。

流石に水中や天空に順応しろと言われたら一見無理があるかもしれないが、それにしたっていざそのような状況になってみれば、何とかしてしまうのが人間である。
地球温暖化で海水面の上昇が問題とされているが、町が沈むとなれば、人々は水中で暮らす術を模索し実用していくであろう。
１００年、２００年後は人類は水中都市を築き上げそこで生活していたとしてもなんらおかしくはない。

こう考えるとき、人間とは随分と頼もしくも逞しい生き物だと痛感させられる。

「……で？」

「で、とは？」

「何故今そんな話を？」

午後一時を少し回った生徒会室には机に座って紅茶を飲むヒナギクと長テーブルでノートパソコンを叩く駿の姿があった。

「この学校に来て早十日……
最初は前の学校と勝手があんまりにも違うモンだからアレかと考えてたけど……
何だかんだで大分慣れたなぁと思ってさ」

「それは良い意味で？」

「あ～……多分な」

駿の返事にヒナギクは『それは良かったわね』と笑うと、また紅茶を啜った。

しかし何故生徒会室にこの二人しかいないのかと言うと、話は大体一時間前に遡る。

「歓迎会？」

「ああ」

生徒会室で駿は目の前にいる美希、泉、理沙の三人娘に首を傾げてみせた。

周りのヒナギク達も思い出すように頬に手を当てる。

「駿君が初めて生徒会に来た時に言っただろう。

歓迎会で闇鍋をやろうと！」

「今日が約束の土曜日だ！」

「なのだ～♪」

ああ、確かそんな事もあったなぁと駿達は二三回頷いてみせた。

「あなた達、仕事や宿題は忘れるのにそういう事は覚えてるのね」

「フッ、我々を見くびって貰っては困るな」

「お楽しみはしっかり覚えてるよ♪」

「褒めても何も出ないぞヒナ」

「褒めて無いわよ（だろ）」

三人に呆れたようにため息をつくヒナギク達。
しかし三人は既に大きな鍋を長テーブルに置いてあった。

「ま、そんな訳で今から鍋の材料をみんなで買いに行こうと思うのだ」

「どう？ちーちゃんも愛歌さんもヒナちゃんも一緒に行かない？」

美希に続いて泉がテーブルに座っていた千桜、愛歌、ヒナギクに声をかける。

「まぁ仕事も終わりましたし、私は大丈夫ですよ」

「う～ん……私はこの後用事があるのだけど……
面白そうだから買い物には行こうかしら」

意外にも乗り気な千桜と用事があるという愛歌は、美希達にそう返事をして立ち上がる。
しかしヒナギクは立つ代わりに首を振って答えた。

「私は仕事が少し残ってるから、ここで待っるわ。皆で行ってきて」

「うむ。分かった」

「ちょっと待たれよお嬢さん方」

頷く美希に対して、駿がようやく突っ込んだ。

「何んで俺には聞かないの？」

「決まっているではないか駿君」

座ったまま小首を傾げる駿にクルリと美希は振り返ると微笑してみせた。

「今日の主役は君だからな。

材料が何かが少しでも分かったかつまらないじゃないか」

「……何か嫌な予感がするんですけど」

含み笑いをする三人娘に駿は口元をひきつらせる。

「では取り敢えず、君の買ってきて欲しい材料を書いてくれ」

「……材料ねぇ」

彼はそう言って渡された紙を見て腕を組んで暫し考えるが…

『何か辛いもの』

と簡単にペンを走らせると、美希に紙を返した。

「よし、では行くか」

「フッ、まぁ楽しみに待っていてくれたまえ」

「だぞ♪」

「参加は出来ないけど、材料は面白いモノを買ってきてあげるからね」

三人娘は勿論、
愛歌まで微笑んでみせるので尚の事恐ろしくなる駿……
そんな訳で五人は意外と楽しそうに生徒会室を出ていった。

「……激しく不安だ」

「まぁ愛歌さんもついてるんだし大丈夫よ、多分」

「いや、俺が言ってるのはそういう意味では……」

駿はそう言ってヒナギクを見るが、彼女は不思議そうに首を傾げ、意味を解していないようだった。彼も『まぁいいか』と少し息をつくとテーブルに座り直した。

「それより鷺ノ宮君、世界史の課題終わらせちゃったら?」

「ん?あ……
そういや提出いつだっけか…
あれ、明後日か?明明後日?」

「明日でしょ……」

呆れたようにジト目になるヒナギクに駿は『そうだったか』とぼけると、近くにあったノートパソコンを自分の手元に持ってきた。

「んじゃ、テキトーにでっち上げ……いや仕上げるか」

「はぁ……」

欠伸混じりに駿はパソコンを開くと、隣のため息を聞こえないふりをしつつ、キーボードを打ち始めるのであった……

そんな訳で今は生徒会室には駿とヒナギクの二人しかいないのである。

「……ふぅ」

トン、とエンターキーをダブルクリックするとパソコンのディスプレイにレポートの題名が確認画面と共に現れた。

「終わった……」

そのまま、画面でファイルを開くと名前つけて保存し、遂にパソコンを閉じた。

「あら、随分早いのね」

「テキトー仕上げんのは得意」

「……」

ヒナギクは書類から目を離すと、駿はヘラっと学生にあるまじき発言をしてみせる。

そのまま彼は室内の時計に目を向けた。

「あとどのくらいで帰って来るんだろう……」

「多分、商店街だから。
あと２０分くらいじゃないかしら」

「だったら……
これを片付けてしまうかな」

ヒナギクが頬に手を当てて答えると、駿は隣にあった自分の鞄を前に持ってきた。

「片付ける？」

「ああ。ちょっと手伝ってくれない？」

鞄を探りながら答える彼に、ヒナギクは不思議そうに近づいて行って、取り敢えず向かい合う前の席に座ることにした。

「手伝うって、何を？」

「えっと……
あったあった。コレだよ」

駿が鞄から取り出したのは小さい漆塗りの箱だった。
彼が蓋を開けるとそこには…

「桜餅？」

「そ、桜餅」

中から顔を出したのは五きれの羊羹だった。
綺麗な小豆色をしていて、漆塗りの箱のせいかそれぞれがやたら高級に見える。

「ホントは伊澄と昼休みに食べる（超甘い甘いティータイムという勝手な思い込み）つもりで作ってきたんだけど、アイツいつの間にかナギの家に行っちゃったから」

「鷺ノ宮君が作ったんだコレ」

「まーね。
つー訳で嫌いじゃ無かったかどうぞ」

彼は箱をヒナギクの前にスッと押し出した。

「でも、良いの？
鷺ノ宮さんの為に作ったんじゃ？」

「そのつもりだったんだが……
先に奴らに見つかったら、恐らく鍋に入れられるぞ？
闇鍋の中に……」

「……それは、確かに遠慮したいわね……」

ヒナギクはその光景を思い浮かべて顔をしかめる。

「だろ？
だから今のうちに食べちまおうと……」

「えぇ。じゃあ頂きます」

彼女はそう言うと、中にあった楊枝で、一つ桜餅を口に運んだ。
そしてすぐ、驚いたように口に手を当てる。

「あ……美味しい」

「当然」

駿はその反応に満足そうに頷いて微笑してみせた。

「多少なりとも本場京都仕込みだからな。
人並み以上には美味く作れるつもりだよ」

「え？京都？
鷺ノ宮君って京都出身だったの？」

さも当たり前のように彼はそんな発言をしたのだが、勿論ヒナギクは驚きの表情を向ける。

「違う違う。
八歳の時に半年くらい京都にいたんだ。
老舗の和菓子屋に居候してたんだけど、店主のじいさんに和菓子の

初歩を色々と仕込まれて。
それ以来和菓子作りが趣味になったんだよ確か」

「へぇ〜」

駿は懐かしいそうに桜餅を口に運びながら話す。

「でも、何で京都に？
その時も東京に住んでたんでしょ？」

「あ〜……
ウチの曾ばあちゃんがね、急に和菓子を食べたくなったらしくて
『お前ちょっと本場の味習って来い』って京都にいきなり放り込まれたんだよ。んで、右も左も分からない状態の時に拾ってくれたのがその老舗のじいさんだった訳」

「……放り込まれたって」

「まぁ基本メチャクチャだから。鷺ノ宮家の人は」

唖然とした彼女の前で駿はもう一つ桜餅を頬張る。

「俺が寝てる間に曾ばあちゃんが勝手に運んだらしくてさ。
朝起きたら目の前に広がってんのが京都の下町なんだから……
あん時は流石にビックリしたわ、ハハハ」

「なんていうか……
苦労してるのね……」

「いやいや……

あ、もう一つどうぞ」

最早意味が分からない彼の境遇に、ヒナギクは取り敢えずそう返事をしておいた。

駿は手を振って苦笑すると、箱に手を向けて和菓子を勧める。

一体彼は何者なんだろうと本当に謎に思うヒナギクであった。

Q．彼は何者か？

A：残念な超シスコン男

（満点解答）

ガチャ……

「ただいま～♪」

「帰ったよ～」

「ホントに大丈夫だろうか……

この闇鍋……」

そうこうしてるウチに生徒会室の扉が開いて三人娘と千桜が帰ってきた。

「おー、おかえり」

二人は桜餅を片付けると、サッと箱を鞄にしまった。
美希達は材料の入った袋をテーブルに置き、理沙が中くらい鍋を持ってきた。
そして一言、

「では、諸君！！
さっそく闇鍋を開始しようではないか！」

＊

闇鍋とは？

親しい者同士、多人数で自分以外は不明な突発した具材を持ち寄り暗中で調理する鍋料理である。

作法：闇鍋の調理は、鍋の場所がわかる程度の暗所で行うことを基本とする。
最低でも1人1品ずつ具を持ち寄る。その際、他の参加者に何を持ってきたのかを知られないようにすると、後の楽しみが増す。
このとき、世間一般で人間が食べるのに適していると言われる物を具とするのが基本である（必ずしも守る必要はない）
※Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ引用

「……という訳で、これより駿君の歓迎闇鍋大会を始めたいと思う」

「……はぁ、どうも」

何だかんだで鍋を囲む形になった六人。
その中で美希は立ち上がり一同を見回す。
鍋の脇には未知なるの食材が入った袋が並んでいる訳だ。

「まぁさっそく始めたいが、その前にやるべき事がある」

「「「やるべき事？」」」

「そう」

今度は美希の隣の理沙が立つと、スッと駿を指差した。

「……俺？」

「君は晴れて歓迎会の席に参加したのだから、この生徒会により馴染んで（我々の仕事を肩代わり）もらう為にすべき事！」

「今うっすら本音が見えたんだけど……」
「んで？何だよそれ？」

周りの駿達が何事かと理沙に尋ねる。

「それは……皆を名前で呼ぶ事だ！！」

「……は？」

指差されている駿はきょとんとした表情。
散々勿体ぶっていたのに『何だそんな事?』という感じである。

「名前で呼び合った方が仕事も任せ易いし、罪悪感も無くなるし、何より苗字だと長い、君は」

「あのなぁ……」

「まぁ冗談はさておき、
やっぱり仲間になるんだから苗字より名前の方が良いと思うって事よ」

上記の話を美希が引き取りそうまとめた。

「えぇ、そうね。
私も苗字だと間違えられたくない人もいるから……
ヒナギクでいいわ。
よろしくね駿君」

「私の事も千桜でいいよ。
よろしく駿君」

二人はそう言って駿を見た。
ヒナギクの言う間違えられたくない人は勿論姉である。

「あ〜、分かった。
改めてよろしくヒナギク、千桜。それから美希、理沙、泉の三人娘も」

「ああ、よろしく」

「よろしくホワイト君」

「よろしくね～♪」

一同は改めて挨拶をし合うと、もう一度中心に位置する鍋に視線を戻す。

「さて、では取り敢えず食材の入った袋を分けよう」

美希は買ってきた袋六つを各人に一つずつ分けた。
これで周りの人間は勿論、本人達さえ知らない材料が目の前に配布された事になる。

「美希。これ食べられる物を買ってきたんでしょうね？」

「安心しろヒナ。
どれもこれも食べられる材料だ」

ヒナギクの不安そうな問いに、美希はそう断言する。

「モヤシとか白菜とかの野菜は切らなくても大丈夫なのか？」

「既に切ってある野菜を買ってきたからそのままで平気だよ」

「んじゃ、最初にダシをとるか……」

こうして六人の闇鍋歓迎会はゆらゆらと幕を開け始めた……

～２０分後

生徒会室は電気が消されて、カーテンも閉められ光は多少漏れるものの、暗くなってはいた。

「ダシは完成。
ここまでは問題なし……
ここから各々が材料を入れていく訳だが……」

「「「……」」」

駿の言葉に答えるように、グツグツの鍋の煮える音が生徒会室に響く。

「取り敢えず具材を入れていこうか……」

「そうだな。時計回りで回していこうか」

テーブルに座っているメンバーで時計回りとすると、
美希→理沙→泉→千桜→ヒナギク→駿という回りになる。

そんな訳で……
一番手：美希

「よ～し、では最初は軽いところからいこうか」

ジュウゥゥゥ……

美希がそう言って袋から何かを開けて鍋にいれたと思われる。
すぐに室内に音が響く。

「……オイ、明らかに軽く無いような音がしたんだが…」

「まぁ気にするな」

「「「……」」」

駿達は暗闇で見えない未知なる鍋に不安感を募らせる。

続いて二番手：理沙

「よし、私も続けてとっておきの材料を入れたいと思う」

バチバチバチバチ！！

理沙の声に続いて、電気が走るような音が鍋から……

「オイィィィィィィ！！
お前何した今！？」

「ちょっと理沙！？」

「食べられる物なんですか！？」

駿、ヒナギク、千桜は当然理沙の方向に叫ぶ。

「安心したまえ。
ちゃんと食べられる皆も大好きなモノさ」

「「「……」」」

返ってきたのは何故か自信満々な理沙の声。

そして三番手：泉

「ミキちゃんもリサちんも大変そうだから、いいんちょさんがこの辺でリカバリーしてあげるよ♪」

ドドドドドドドドド！！

「「「！？」」」

「あ、あれ？」

しかし聞こえてきたのは火山噴火のような音と、泉の若干うろたえた声。

「おま、どこがリカバリー！？

リカバリーどころか、何かリベリオンの音がしてるんだけど！！
鍋の中が反乱の真っ最中なんだけれども！！」

「にはは～……
暗かったから、入れる材料間違っちゃったみたい」

駿のツッコミに泉はとんでもない発言を返してきた。

ようやく折り返し
四番手：千桜

「ここで普通の具材を入れたところで、もう手遅れのような気が…」

・・・・・・・

千桜は何かを鍋に入れたようだが、何の音もしなかった。

（（良かった……
千桜の具材はまともみたい…））

ホッと胸を撫で下ろす駿とヒナギク。
だが千桜の言う通り、既に遅い気がする……

続いて五番手：ヒナギク

「ちゃんと私達で食べないといけないんだから……」

・・・・・・

彼女の時もまた、変わった反応は無かったようだ。

「良い流れなのでは？」

「もしかしたら、何とかなるかもしれないわね」

取り敢えず一周目の最後
六番手：シスコン

「オーイ、名前違うんですけど…」

訂正
六番手：変態

「オイ」

「もう良いから、
放っておいて進めよう駿君」

「これは良く無いだろ……」

美希の言葉に駿はため息をつきながら袋から何かを取り出す。

「ま、鍋といったらこれは定番だろーな」

ジジジジジジ……！！
プクプク……ボン！！！

「あり？」

「ちょっと駿君！？」

「一体何を入れたの！？」

奇妙な音が暫く続き、後に間抜けな駿の声。
周りからは勿論抗議の声が飛んでくる。

「いや……普通の物を入れただけなんだけど」

「何か化学反応みたいな音がしてましたよ……」

千桜の言葉通り、焼けるような音に最後は軽い爆発音である。

「では、二周目にいこうか！」

「「「……」」」

こうして再び順番は戻って美希にターンが移っていくのであった……

＊

生徒会室の電気がつくと、周りは一気に明るくなった。
沈黙する六人の前にはグツグツと音をたてる鍋が一つ。
蓋がしてあるので中身は一切分からない。

「闇鍋完成だな」

「鍋といえるものになっているのか果たして……」

長テーブルには顔をひきつらせる駿達と面白そうな表情の三人娘。

「さっそく開けるよ～♪」

「「「……！！」」」

グッと息を呑む一同をもとい、泉が鍋の蓋に手をかけた。
闇鍋の醍醐味……
緊張の一瞬である……！！

「「「オープン♪」」」

カパッ……！！

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

駿、ヒナギク、千桜は勿論、先程までノリノリだった三人娘も一気に表情を固めてしまう。
決して字数稼ぎとかでは無い。

「あ～……
これは……何だ？」

「……鍋でしょ？」

「鍋……なんだろうな」

一同の前にある鍋の中にはグツグツと煮たった液体に様々な具材が浮き沈みしていた。
ただその液体の色が異常である。

白雪姫の魔女とかが作っていそうな紫色の毒々しい液体……
ならばまだ良かった。

この鍋の中身は違う。
紫色を通り越して黒々とした液体をベースに、白、紫、緑、赤等々。

様々な色が浮かんでいる異常な光景が広がっているのだ……

「……まさかここまでとんでもない事になろうとは……」

「でもちゃんと食べないとね…」

泉の言う通り、食べ物は作った以上は粗末にしてはならないのである。
絶対に無駄にしてはいけない。

「じゃあ最初に……
駿君からいってみようか」

「……俺か」

駿はある程度覚悟していたかのように顔をしかめると、前方の鍋に顔を向ける。

「……じゃあ、まずはちょっとだけ」

駿はお椀を持つと、鍋にかかったお玉をもう片方の手に持って中身を掬った。
取り敢えず具材には手を出さず、ダシだけをお椀に入れる。

「「「……」」」

そしてゆっくりとお椀を口に運んでいく。
その様子を固唾をのんで見守る五人。
当然である。明日は我が身なのだから……

「頂きます！！」

そのまま彼はお椀の中身を一気に飲み干した。
しかし次の瞬間！！

（……おぅ！？）

彼の視界がグニャリと歪んだ。
かと思うと思いきり頭部を殴られる感覚。

（ぐっ……！！！）

たて続けに喉や鼻、そして器官が燃えるかのように……
そして……

（まずっ……いや、痛えエエエエエエエエエエエエ！！！！
胃が！！胃が焼け……沈むゥウウウウウウウウウウウ！！！！）

声にならない叫びが駿を襲う。

「駿君！？ちょっと平気！？」

「だ、大丈夫か駿君！」

千桜やヒナギクは彼の様子に声をかけるがそんなのに答えられるような状態ではない。
顔を俯かせて拳を握り、必死に何かに耐えるように全身を震わして

いる。

「駿君!!一体どれくらいの威力なんだ!?」

「ダークメ●ア……並みかも……しれない……」

美希の問いに必死に声を絞りだす駿。

「ダークメ●アか……
威力３０００の二段技……
最強のＰＡだな」

「まずいぞ!
ダークメ●アに耐えうるナビ等この世に存在しないぞ。
このままでは駿君はデリートされてしまう……!!」

「大変だよ!!」

千桜は思い出すように呟いて、理沙と泉は悶え苦しむ駿に手を向ける。

「ううん、よく見て!!」

しかしヒナギクが彼を指差すと、駿は震える手を何とか前に差し出す。

「補助チップ……『アンダーシャツ』」

「アンダーシャツ!?」

「アンダーシャツ……
どんなダメージも必ずＨＰを１残して踏みとどまるチップ…」

必死の駿の言葉に驚いたように声をあげる美希。
千桜は相変わらず冷静に解説を続ける。

「でもダークメ●アは二段攻撃。一回目にアンダーシャツで踏みとどまっても二回目でデリートされてしまうぞ」

「確かにダークメ●アは二回攻撃だが、最後列にいれば一回目は避けられる……
恐らく駿君は最後列に予めいたんだろう」

理沙の疑問に千桜は駿を見ながら解説を加えた。
ネタが分からない人は『ロックマンエクゼ』をやってみよう（笑）

「……うっ」

駿は歯を食いしばって顔を上げると、空になったお椀を前に置く。

「何とかなったが……
このままじゃいかん。
ＨＰリカバリーが必要だ……」

「取り敢えずフルカスタムですぐにターンを繋ぐんだ」

「もう！！
いい加減そのネタは止めようよ～早く闇鍋を食べないと……」

まだゲームネタを引っ張っている駿と千桜に泉は腕をバタつかせて突っ込んだ。

「……そうね。
では闇鍋を六等分しようか」

「「「……」」」

美希がそう言うと、五人は各々覚悟を決めたように頷いた。
駿はまだ青ざめてはいるが……

そんな訳で、綺麗に鍋の中身を六等分しｔ

「ちょっと待てェェェェ！！！」

駿の悲痛な叫びにも似たツッコミが室内に響いた。
それもその筈。周りのメンバーの前にはお椀一杯の中身があるにも関わらず、彼の前には鍋がそのまま一つ置いてあるのだから。

「これのどこが六等分だよ！！
割合が明らかにおかしいですよねコレ！？」

比率でいうと、
１：１：１：１：５↑駿
みたいな感じである。

「何で俺が残り全部！？

死んじゃいますよね！？」

「落ち着くんだ駿君。
これはアレた……白皇の生徒会に入る為の儀式というか…
ほら、よくあるじゃないか。
海外には成年に成るためにバンジージャンプをする部族とか」

「ここは東南アジアでも無ければ通過儀礼も存在しねーよ！！」

美希のテキトーな言葉に冷や汗を浮かべて抗議しようとする駿。

「大丈夫だ。多分君なら生きて返って来れるさ」

「ファイトよ、駿君！」

「というか私達も結構な量を頂く事になるんだが……」

「にはは～、私達もファイトだね～……」

（オメーら他人事だと思いやがって……！！）

周りの皆の言葉に駿は一旦がっくりと肩を落とすと、
二三回首を振った。

「仕方ねぇ！！
ここで退いたら鷺ノ宮の名が廃る！！」

意味はよく分からないが取り敢えず決心は固まったようだ。

「それでは皆一緒に……」

「「「頂きます……！！」」」

生徒会室には日本で一番意を決した“頂きます”が発せられたと言って良いだろう。

勿論翌日の日曜日……

生徒会メンバーは全員が生徒会を欠席したという。

因みに……

～鷺ノ宮家～

駿の自室では布団に横になる駿とご飯をお盆を持った伊澄がいた。

「あーん」

「お兄様！！／／／／

食事くらいはご自分で食べて下さい」

「う～……

起き上がれないほど身体中が痛い。伊澄に食べさせてもらわないと

死んじゃう……」

「……／／／」

布団にくるまった駿はそんな事を言い始めるので、伊澄は仕方なく箸でご飯を彼の口に持っていく。

「お兄様」

「あーん」

駿は幸せそうに口を開いて伊澄に食べさせて貰っていた。

「美味しいですか？」

「ん……美味しい」

そんな感じで、彼はかなり至福な日曜日を過ごしたそうな……

其の十参　闇鍋は十分な注意の元で良識の範囲内で行いましょう（後書き）

三人娘の
～生徒会通信！！～

美希
「タイトル通り、今回から私達が次回予告や質問、本編で気になった所を通信するぞ」

理沙
「そういう訳だ。よろしく頼む」

泉
「じゃあさっそく本編で気になったところいくよ～♪」

【闇鍋でメンバーが入れた具材はなんだろう？】

美希
「これな～
結局三周したからな」

理沙
「まぁ、大体こんな感じだったな」

一周目

美希：ブロックアイス
理沙：ワタパチ
泉：バナナ
千桜：ネギ
ヒナギク：モヤシ
駿：コチュジャン

二周目

美希：煎餅
理沙：ショートケーキ
泉：イカスミ
千桜：メロンパン
ヒナギク：マシュマロ
駿：ハバネロ

三周目

美希：アダムの林檎
理沙：イカロスの翼
泉：ディーハンの腕
千桜：ガネーシャの鼻
ヒナギク：ミカエルの瞳
駿：ヴィシュヌの化身

泉
「最後は作者の悪ふざけだね～」

美希
「三周目はスルーしてくれ」

理沙
「まぁそんな訳で、次回の予告に移ろうか」

美希
「次回は月光閃火さんが投稿してくれたオリキャラが登場するよ」

泉
「駿君と意外な関係があるみたいだよ」

理沙
「おっとここからは次回のお楽しみだな」

三人娘
「では、また次回～！」

其の十四　再会は突然に……（前書き）

伽藍
「今回は閃火さんが考えて下さったオリキャラが登場します♪」

駿
「閃火さん、本当にありがとうございました！」

伽藍
「一応レギュラー化すると思いますので、どうかよろしくお願いします」

駿
「暫くはオリキャラの話になるらしいぞ」

伽藍
「では、始まります！！」

其の十四　再会は突然に……

深夜……
辺りは静寂に包まれていて、道路にある電灯がうっすらと光を放っている。

そんな中…
静まり返る白皇学院の正門の前に、一人の青年が立っていた。

「……」

白髪のざんばら頭に漆黒の澄んだ瞳、大体１７０ｃｍ後半の背丈。
体格はしっかりしていて、顔立ちはどこか勇ましさを感じる。

「ここか……
白皇学院つーのは……」

青年は正門から奥の暗闇に立つ時計塔を遠目で眺めるとフッと息をついた。

「ったく手間かけさせやがって……ここに居んだな、駿」

其の十四　再会は突然に……

灰色……
果てしない灰色の空が上空に広がっている。

「……」

その空を黙って見上げる少年が一人。黒く伸びた髪に虚ろな瞳が気味の悪い空に向けられている。

「……」

そして少年が顔を下ろすと、彼の周りには黒く焼けたような木材が乱雑に地面に刺さっていたり、横たわっていたり、または散らばっていたり……
まるで大火事でもあったような光景が広がっている。

「……」

彼は無気力そうに視線を巡らせ…瞳には何も映っていないかのように朦朧としてる。

しかしその拳はきつく、きつく握られていた……

「……え…で…」

かすれるように口から出た言葉は今にも消え入りそうで……
僅かな風の音にさえ、かき消されてしまいそうだった。

「……っ」

暗闇から開けると、よく見慣れた天井が目に飛び込んできた。
加えて朝日の光が障子に遮られ弱まりながらも顔を覆う。

「……朝、か」

そんな光を浴びながら、鷺ノ宮駿は自室で目を覚ました。
彼はむっくりと身体を起こす。
ボサボサになった黒髪は至るところが跳ねていて、綺麗な二重の目はダルそうに垂れていた。

「……目覚め悪ぃ」

そう小さく呟くと、彼は二三回首を振って布団から這い出して立ち上がる。

「シャワー浴びよ」

＊

「まぁ、おはようジュン君」

「おはようジュン君」

身なりを済ました駿が居間に入ると、初穂ともう一人の老女が挨拶をしてきた。

「あ、おはようございます。
ていうかお帰りになっていたんですか祖義母さん」

「ええ。本当は三日前に帰るつもりだったのだけど、いつの間にか知らない場所にいてねぇ」

そう言いながらも呑気そうな様子なのは鷺ノ宮九重。初穂の母にあたり、駿と伊澄の祖母にあたる。話からするに彼女も伊澄や初穂と同じように迷子癖があるようだ。

二人はのんびりとちゃぶ台でお茶を啜っている。

「おはようございますお兄様」

「あ、おはよう伊澄」

奥からはとことこと伊澄が歩いてきて顔を覗かせた。

服はもう和服に着替えてある。

「あの、お兄様。実は昨日……」

「ああ、どうし……んん!?
は、八時!?」

伊澄が駿に何かを伝えようとするが、彼はいきなり視線を時計に向けた。
そして驚愕の声をあげる。

「やべぇ!!
朝一で生徒会だった!」

「あの、お兄……」

駿は一旦は置いた鞄を慌てて持ち上げると、居間の横にあった鍵かけから自分の自転車の鍵を探し始める。

「ジュン君、朝御飯は?」

「あ、大丈夫です!!
朝昼兼用にしちゃいますから!!」

「あの……」

アッチに行ったりコッチに行ったりと登校の準備をする駿。
伊澄の様子には気付いていないよう。

「忘れモンはねーよな……
よし、伊澄行こう！」

「ふぇ！？
あ、あの……」

駿は暫く居間を出たかと思ったらまたすぐに戻ってきて、今度は伊澄の手を取る。

「それじゃ、行ってきます義母さん！！大義母さん！！」

「行ってらっしゃ～い♪」
「気をつけるんだよー」

完成に行動に追いつけていない伊澄の手を引いて、駿はお茶を飲んでまったりしている二人に挨拶を済ませ、急ぎ足で居間から出ていったのだった。

＊

～生徒会室～

「しかし……
またいきなりだな」

「そうね～

まぁ仕事が減るのならありがたいのだけれど」

「理事長（代理）もいきなり今朝言うから……」

朝の生徒会室では、会長であるヒナギクと副会長の愛歌、書記の千桜が何やら話し合っていた。
三人の視線の先には書類のようなものが一枚。

バタン！！

「おっと！？」

「あぅ……」

すると、いきなり扉が開いて駿と何故か連れられた伊澄が慌てて入ってきた。

「駿君に……鷺ノ宮さん？」

「あ、おはよう二人とも」

「あらあら。
相変わらず兄妹仲良く登校ね」

三人は扉に向かって顔をあげる。駿は伊澄の手を掴んだまま間に合った事に安堵したように室内に入ってきた。
どうやら急ぐあまり伊澄まで連れてきてしまったようだ。

「あ～、申し訳ない。
寝ぼけてて遅れた」

「すみません。お兄様がご迷惑をおかけして……」

三人に手を繋がれたままの伊澄がちょこんと頭を下げる。

妹に頭を下げられる兄は何とも情けないものである。
彼はバツの悪そうに頭を掻いていた。

「ってか、三人はさっきから何を見てるんだ？」

「あ、そうそう。
コレについて話してたの」

彼の言葉にヒナギクは話を元に戻そうとてにあった一枚の書類を掲げてみせた。

「……何だコレ？」

「これは編入手続き書だよ」

千桜は駿の隣に近づくと、そう教えてくれた。

「編入手続き……俺の？」

「ううん。別の人の」

「別の人って……
また編入生が来るって事か？」

駿がそう尋ねると、三人は首を縦に振った。
どうやらまた白皇に新たな編入生がやって来るらしい。

「でも、それを言われたのがついさっきなのよ。
理事長（代理）が『今日から編入生が来るから』っていきなり」

「ホントいきなりですね……
しかも理事長って」

愛歌の話を聞いて、駿はその理事長は一体どんな人物なのかと思う一方、編入生の話も気になるようで。

「それで、その編入生の人はどんな人？」

「えっと……
高等部一年で私達と同じクラスの男子生徒ね。
それで……」

ヒナギクが書類に書いてある簡単な事を読みあげていく。
男子と聞いて頷く駿の横で伊澄は何かを再び思い出したように彼の袖を引っ張るが気付いていない様子。

「あ、そうそう。
生徒会に来るみたいなの、その生徒」

「生徒会に？」

「えぇ。これは理事長が『有能な子だから』って決めたみたい」

なんと編入生がいきなり生徒会にもやって来るようだ。
駿は驚いたように三人に目を向ける。

「って事は、俺はクビですか！？
もしくは左遷！？」

「残念ながら違うわよ駿君……
その生徒は副会長に着くみたいよ」

「残念ながら！？
今残念ながらって聞こえましたよ愛歌さん！？」

愛歌はニッコリと微笑むとそんな事をいってのけた。

「あれ、でも副会長って愛歌さんなんじゃ？」

若干ショックを受けている駿は、フッと気付いたようにヒナギクに尋ねた。

「本当は副会長って二人の役なのよ。だから残念だけど駿君はそのまま。もう一人執行部に増える事になるわね」

「残念って言った会長！？
また残念って聞こえましたけれども！？」

駿は更にショックを受けたように一歩下がって突っ込む。

「本当に理事長（代理）も突然よね」

「まぁあの人は基本他人の意見は聞かないわよね。

決めたら勝手に進めるから」

「え……無視ですか？
お二人とも、残念の件はスルーなんですか？」

駿のツッコミは聞こえていないのか、ヒナギクと愛歌はもう一度用紙を見て話し合う。

「でも人手が増えるのは嬉しいかもね」

「私はたまに休んでしまうから代わりになって貰えたら助かるわ」

「あのちょっと……
聞こえてますよね？
いくら俺でも傷つきますよ。
泣いちゃいますよ？」

駿は二人を交互に見るが、二人とも彼に視線を向けずに用紙に視線を落としていた。

「この書類だと今日付けで編入する事になってるから、もう少しで来るのかしら」

「多分そうなんじゃない？」

「あの……」

ヒナギクの疑問に愛歌が答えた時、伊澄が二人におずおずと話しかけてきた。

「どうしたの鷺ノ宮さん？」

「えーと……」

ヒナギクは彼女に気付くと、用紙から顔をあげる。

因みに駿はというと

「……」

部屋の隅で膝を抱えて体育座りをしながら落ち込んでいた。
彼の頭上には何か暗いオーラがのしかかっている。
そんな彼の隣では千桜が肩に手を置いて慰めていた。

「その方のお名前は……」

「ああ、名前ね。
名前は……」

伊澄の問いにヒナギクは再度用紙を見ると口を開いた。

「鷹ノ瀬翼（たかのせつさ）君という名前ね。
付近の高校からの編入らしいけど……」

「は！？」

しかし、彼女の言葉に反応したのは伊澄より先に駿であった。
彼は勢い良く立ち上がると、ヒナギクの前まで飛んできた。

「駿君！？」

「ヒナギク！！
お前今なんて言った！？」

「え？なんてって……
東京の高校から編入してきたって……」

「その前！！
編入してくる奴の名前！！」

駿の尋ね方があまりにも焦っているように見えたので、ヒナギクは不思議に思いながらも用紙に目をやる。

「えっと……
“鷹ノ瀬　翼”君って書いてあるわよ」

「鷹ノ瀬……翼ァ！？」

駿は驚いたように二三歩下がって声を荒らげる。
何事かとヒナギク達は彼に注目するなか、伊澄は彼に向かって袖を振って何かを言おうとしている。

「ですからお兄様。今朝……」

コンコン！

しかし彼女の言葉を遮るように、生徒会の扉がノックされる音がした。

「すんませーん！
編入生の鷹ノ瀬なんですが、生徒会に挨拶しにきました」

聞こえてきたのは男らしいよく通る声。
生徒会メンバーは当然扉の方を見るが……

「いや、ちょっと待て！
俺が先に出る」

「駿君？」

「ちょっと確認したい事が……」

その中で、駿がいち早く反応して扉に恐る恐る近づくいった。
そして扉を開ける。

そこから現れたのは、
白髪のざんばら頭に漆黒の澄んだ瞳、大体１７０ｃｍ後半の背丈。
顔立ちは男らしくしっかりしている男子だった。

「……お、さっそくいやがったな。よォ駿。元気にｓ」

バタン！！

男子生徒が片手を上げて挨拶する途中で駿は思いきり扉を閉めた。

「え……駿君？」
「どうしたんだ？」

「……」

彼はゆっくりと深呼吸をすると、もう一度扉を真っ直ぐ見つめる。
そして扉に手をかけてゆっくりと開けていった。

「あ、てめっ！！
何いきなり閉めてんだオイ。
挨拶の途中で」

ガッ！！

再度駿は扉を男子生徒の目の前で閉めようとしたが、男子生徒はそれを足で止めて阻む。

「オイ！！どういうつもりだ。
何で閉めるんだよ」

「それはこっちのセリフだァ！！
何でテメーがここに居んだ！！」

男子生徒は駿に尋ねるが、彼は思いきり叫び返した。

「何でって、編入したからに決まってんだろ」

「知るか！！さも当たり前のように言うなよ！！」

「落ち着けって。今朝電話したじゃねーか。
話は聞いてんだろ？」

男子生徒は取り敢えず駿の両肩に手を置いて落ち着かせる。

「いや知らねーから！！
電話なんてしてねぇだろお前」

「したっつーの。
ちゃんと伊澄ちゃんが出てくれたぞ？」

男子生徒がそう言うと、駿の側に伊澄がとことこと寄ってきた。
そして彼の服の袖を引いて注意を促す。

「本当ですよ。今朝お兄様に伝えようとしたのですけれど……
お兄様は急いでいらしたので…」

「あ、そういや……確かに」

駿は今朝伊澄が何かを自分に何かを伝えようとしていたかもしれないと思い返してた。

「何だ駿。伊澄ちゃんの話もちゃんと聞いてやってねーのか」

「う〝っ……」

駿は痛い所を突かれたように顔をしかめた。

「あの……
そろそろ良いかしら？」

「「あ……」」

二人が一段落着いたところで、ようやくヒナギクが声をかけた。
千桜と愛歌も不思議そうに彼らを眺めている。

男子生徒は周りの様子に気付くと、若干慌てて室内に入ってきた。
駿も渋々その後に続く。

「悪い悪い。
えっと、ここが生徒会室で良いのか？」

「えぇ。そういうアナタは今日来る事になっている編入生の鷹ノ瀬翼君で良いのかしら？」

「ああ。俺は鷹ノ瀬翼だ。
今日付けで白皇学院と生徒会に編入してきた。よろしく頼む」

翼はヒナギクの問いに頷くと、室内の一同を見回して挨拶をした。

「私は桂ヒナギク。
生徒会長をやってるわ。
よろしく」

「春風千桜です。
生徒会では書記を。よろしく」

「霞愛歌です。
副会長をやってるわ。
よろしくね鷹ノ瀬君」

三人は簡単な自己紹介を翼に返した。彼は『よろしくな』と笑ってそれに答える。

「それで……
彼が会計の駿君なんだけど……
二人は友達なの？」

ヒナギクは恐らく一同の疑問を代表して尋ねると、駿が顔の前で手を振って答える。

「腐れ縁だよ腐れ縁。
友達なんて大層なもんじゃねーから」

「相変わらず連れねーな。
互いに拳を交えて辛い時も苦しい時も鼓舞し合った親友……いや戦友じゃねぇか」

「勝手に記憶改ざんすんな。
つーか止めろその言い方」

翼の思い返すようなセリフに駿は口をへの字曲げて言う。
しかし二人のその様子に生徒会メンバーはますます首を傾げる。

「えっと……
お兄様と翼様は中学校時代からのお友達なんです」

「そうだったの……」
「なるほど……」

代わりに伊澄が二人の関係について三人に説明する。

「よくご迷惑をかけるお兄様と仲良くして頂いて、本当に優しい方なんですよ」

「なるほど。
それは確かにそうかもね」

「何故納得してるんですか愛歌さん!?それだと俺が問題児みたいですよね!?」

伊澄と愛歌の発言に慌てて突っ込む駿。

「いやいや、んな事はねーよ伊澄ちゃん。まぁコイツが問題児なのは認めるが」

「あのなぁ……」

翼は軽く笑うと、肩を竦めてみせる。駿は額に手を当てると、彼に視線を向けた。

「大体お前、何んで編入なんてしてきたんだよ?

向こうで何かあった訳でもねーだろ？」

「オメーを追ってきたに決まってんだろ。
いきなり向こうから姿消しやがって……」

「……」

駿は深くため息をつくと椅子に腰かけた。

「落ち着いた頃に言うつもりだったんだよ。
良いだろ別に。俺が何処にいこうが」

「何言ってやがる。
俺がいなかったらオメー男の連れ居なくなんだろ？
ま、今は女子に囲まれてるみたいだけど」

「ぐはっ……」

駿は彼の言葉に思いきり表情を暗くすると、顔を俯かせる。
その様子に……

（（やっぱり友達が少なかったんだ……））

ヒナギクと千桜は若干納得したように頷いた。
あれほど極度のシスコンなら納得である。

「ま、そんな訳でよろしくな。
皆もよろしく」

翼は軽く駿の肩を叩いて、生徒会メンバーに改めて挨拶をした。

こうして、生徒会メンバーに新たな仲間が加わる事になったのであった……

其の十四　再会は突然に……（後書き）

三人娘の
～生徒会通信！！～

美希
「という訳で、このコーナーも記念すべき二回目ね」

理沙
「目標はサザエさんの話数を超えることだな」

泉
「無理だと思うよリサちん」

美希
「ではさっそく企画に行ってみよー！！」

【ここだけの裏話！！】

理沙
「タイトル通り、様々なゲストを呼んでなんちゃって裏話をやってみようと思う」

泉
「じゃあ一回目だよ～♪」

美希
「最初のゲストはこの小説の作者でもある伽藍と我らが主人公の鷺ノ宮駿君だ！」

ジャジャーン！！

伽藍
「どうも。飽き性の激しい伽藍です。作品を積ませてしまってホント申し訳ございません」

駿
「何のっけから懺悔してんだ。
鷺ノ宮駿です。よろしく」

美希
「では、さっそく隠された秘話を聞いてみよー。
まずは作者から」

伽藍
「あ、ハイハイ。何でも聞いて下さい」

泉
「では、この小説と主人公の駿君について色々と答えて頂きま～す♪」

理沙

「こちらで質問は考えてきた。
取り敢えずこんな感じだ」

Q1．この小説を書くことにしたきっかけは？

Q2．ストーリー構成について

Q3．主人公について

伽藍
「了解です。
んじゃまず最初のきっかけから。きっかけは……実は何も無いんです。ただ夕方駅前を歩いていた時にフッとハヤテのごとくの二次創作を書きたいなと思って」

美希
「衝動的に生まれたという事か」

伽藍
「まぁそうですね。
特に理由は無いかな」

理沙
「では二つ目の裏話にいくか」

伽藍
「ストーリー構成についてはもう大分先までまとまってます。
取り敢えず駿の周辺の話をやるところまでは」

泉
「何でこんなお話にしたの？」

伽藍
「ハヤテの二次をやろうと決めたは良かったんですが、どんな立ち位置にするかは悩みました。
最初は執事か教師にしようと思ってたんですよ。
ただ他の先生達もやっているし、何かもう少し特徴を出したいなーと思って。
それで、だったら原作キャラの身内にしてみようと」

美希
「でも、何故伊澄君だったの？」

伽藍
「とにかく身内にするなら下の兄弟より上が良いと思ったんですよ。
それでどうせなら妹がいいな～と考えて（自分は男なんで）。
実は最初はナギの生き別れの設定にしようと考えてたんです」

理沙
「ほぉ、えらく意外だな」

伽藍
「えぇ。
でも個人的にナギが妹でもあんまりな～って思って……
それで、他に誰が妹が良いかって考えた時に伊澄が浮かんだんです。
その時は一発で“コレだ！！”と思いましたね」

美希

「ふむふむ。
では最後にいこうか。
『主人公について』」

伽藍
「主人公……
当初は女の子だったんですよ。
鷺ノ宮楓（かえで）っていう」

駿
「えぇ!?そうなのか!?」

伽藍
「うん。女の子の主人公で伊澄にベッタリっていうね。
やっぱし妖怪退治はしたかったから日本刀使いだったけど」

美希
「シスコンというのは変わらなかったんだな」

伽藍
「シスコンは最初から決めてましたね。伊澄が妹になったら普通はシスコンになりますよそりゃ」

理沙
「では、その楓君はどんな設定だったんだ?」

伽藍
「では、簡単に没主人公設定をば……」

鷺ノ宮　楓

【年齢】
１６

【誕生日】
１０月１５日

【血液型】
Ａ型

【家族構成】
不明（過去）
妹、母、祖母、曾祖母

【身長】
１６０ｃｍ

【体重】
秘密♪

【好き】
剣道、伊澄、ハヤテ、生徒会メンバー、落ち葉、料理、和菓子、
可愛いもの

【得意】
剣道、体術、　料理、和菓子作り、勉強、運動　家事全般

【嫌い・苦手】
昆虫とか足の多い生き物、寒さ　辛いもの

【容姿】
綺麗な黄色いロングヘアーで右側の前髪の横を赤いリボンで結って卸している。
二重のエメラルドの瞳で容姿はかなりの美少女。

出るところは出て締まるところはしまった身体。
服は和服だったり、制服だったり、洋服だったりと様々。

【備考】
鷺ノ宮家に引き取られた少女で、伊澄の事を溺愛しているシスコンなお姉ちゃん。

剣道七段の腕の持ち主で、他にも体術を習得している。
その為、妖怪退治では鷺ノ宮家最強と謳われている。

内面は結構乙女チックで嬉しかった事を日記に書いたり、恋バナが大好きだったりする。

料理はかなり上手で、伊澄の分のお弁当もまとめて作っている。
和菓子作りが得意なのは現在の主人公に受け継がれた。

設定ではハヤテに恋をする予定だったので、好きの所にハヤテが入っている。
恋には奥手で普段よりかなりピュアになる。

伽藍
「とまぁこんな感じです」

駿
「負けた……
何かもうあらゆる面で負けた」

美希
「ほぅ。ハヤ太君はあんな彼女にもフラグを立てるのか」

理沙
「これは中々なキャラだな。
駿君じゃ太刀打ち出来んな」

伽藍
「実は彼女、せっかく作った設定で勿体無かったので別の苗字で物語に登場します。
駿の過去に関係した……」

泉
「おっとネタバレ禁止だよ！」

美希
「何！？ハヤ太君と見せかけまさかの駿君にフラグが！？」

伽藍
「それは秘密です。
とにかく当初は女の子の主人公だったのですが、僕はあまり女の子の心情とか分からないので、いくらか考えて男にしました。

そしたら壊せるわ壊せるわで（笑）そんでこんな残念なキャラになっちゃったんですよ」

駿
「失敗作みたいに言わないでくれません!?」

伽藍
「で、次はこの駿（ばか）に関してですが……」

駿
「馬鹿って言うな」

伽藍
「まぁ切り替えが上手いキャラではありますね。
普段の変態や馬鹿ぶりと夜の顔とギャップが激しいです」

美希
「お～、確かに夜の駿君は強いらしいな」

駿
「……何かその言い方止めてくんない？
何か嫌な響きなんですけど」

伽藍
「でも彼は本気出しませんから。実際どのくらい強いのかは一切不明ですよ」

泉
「へ～」

伽藍
「大体妖怪退治だと二三割、良くて四割くらいしか力を出してません。本気はめったに……どころかほとんど見れないんじゃないかと。まずキレませんから、彼は」

駿
「だな～」

理沙
「伊澄君に手を出したらキレるんじゃないのか？」

伽藍
「それは彼の中では“怒る”に分類されますね。“キレる”は本当に本当に稀です。三億円当たるくらいの確率ですね～」

理沙
「随分と温厚なんだな駿君は」

駿
「いやぁ、俺としては……」

伽藍
「温厚つーか馬鹿なんですよ。馬鹿だからキレないの」

駿
「うぉぉい！！馬鹿って言うなよ馬鹿って」

美希

「本編で彼が本気になることは？」

伽藍
「それは秘密です♪」

泉
「じゃあ最後。駿君のモデルは誰なんですか～？」

伽藍
「モデルですか。
モデルは無しですね。
誰をイメージして作った訳では無いので」

理沙
「おっとそろそろ時間だな。今回はこの辺で終了だ」

泉
「では、ゲストの伽藍さんでした～！！」

伽藍
「ありがとうございました～♪」

駿
「え？俺は？」

美希
「君には次回から我々のアシスタントをしてもらうからな」

駿

「はい！？」

理沙

「では、次回は翼君の知られざる能力と駿君が不機嫌な理由が明かされるぞ！」

泉

「なのだ～♪」

駿

「オイィィィィイ！！」

其の十伍　世の中上手く出来ている（前書き）

伽藍
「いよいよ翼君のスペックが明らかになります！
駿、まさかの主役降板の危機か！？」

駿
「マジでか！？」

伽藍
「では始まります！」

其の十伍　世の中上手く出来ている

～生徒会室～

午前８時半……

「しかし偶然ですね。
まさか短期間で親友の二人が同じ学校の生徒会、まして同じクラスに編入してくるなんて」

翼が生徒会に顔を出しにやってきて少し時間が経たった頃。
生徒会メンバーは取り敢えず朝の仕事にキリをつけ、クラスに向かうまでの間少し休憩していた。

そんな時に千桜が二人を交互に見て口を開いたのだ。

「違うからな千桜。
親友じゃなくて腐れ縁だからな腐れ縁」

「まぁ腐れ縁でも何でも良いが、付き合いは割と長い事は変わりねーな」

駿が大袈裟に手を振って否定してみせると、翼は肩を竦めてそんな風に言った。

「前の中学校の知り合いって言ってたけど……

知り合ってどのくらいになるの？」

「そうだな……
中学一年の時からだから大体四年にはなるか」

翼はそう言うと、座っている駿の側まで来て彼の肩をポンポンと叩く。

「はぁ……」

「だから大抵考えてる事や癖は分かんだよ。
例えばホラ」

ため息をつく駿の鞄から、翼はサッと何かを取り出した。

「「「？」」」

全員が何かと注目する彼の手にあったものは……

『人妻解放区～淫らな癒しの時間～』

「！？」

「やっぱここに隠してやがったな」

艶やかな肌を露出する女体満載のエロ本だった。
因みに作者が持っているタイトルとかは関係無い。

「な、お、おまっ……！！」

「相変わらずだなオメー。
どうせまた一時避難用に鞄に入れといたんだろ？」

翼の手にある本を見て一気に青ざめ声にならない叫びをあげる駿。
その表情はまさしく絶望そのものである。

「「「……」」」

は呆れたような視線が千桜から送られ、愛歌は面白そうに微笑んでいる。
一方伊澄とヒナギクからは蔑むような絶対零度の視線が送られていた。

「……あ、え！？
ちょっと待て皆！！もしかしてこの本俺のだと思ってんの？
いやいやいや！！違ぇよコレ！？
コレはアレだよ。アレ……えっと、今朝中学生から没収したんだよコレ。けしからん奴だったな、うん！！だから俺がだな……」

駿は目をアタフタと泳がせて長テーブルに向かってそう話す。
しかし一同の空気は変わらない様子。

「いやいや、ホントだからな！？
俺が嘘をつくなんて、まさかそをな……」

「そう……
なら、これは没収しても構わないわよね」

「へ？」

すると、いつの間にかヒナギクが翼から本を取り上げていた。
途端に駿の表情が白くなる。

「だから、お兄様のでないなら燃やしも構いませんよね。
という意味ですよ」

隣にはニッコリと微笑む伊澄。
しかし笑っているのは表情だけ。何故か札を手に持っている。

「何も燃やすことはないんじゃないですか？
それは酷すぎるんじゃないですか？」

「でも、駿君のじゃ無いんでしょ？」

ヒナギクの言葉に彼はグッと表情をしかめて唇を噛む。

「いや、そうだけど……
でも燃やしたら、その中学生が可哀想じゃないか。
俺はね、彼が暫く反省した後に返すつもりだったんだよ。
だから、今は取り敢えず俺に渡してくれ。な？」

「「……」」

伊澄とヒナギクは彼の言い分を聞いて呆れたようにジト目になっている。

「じゃあ、どうぞ。
鷺ノ宮さん」

「ありがとうございます会長さん」

「って渡す相手が違う！！」

ヒナギクが本を伊澄に渡そうとするのを駿がツッコミで遮った。

「ダメよ。こういういかがわしい物を生徒に渡す訳にはいかないの、生徒会長として。
だから没収します」

「ちょっと待って！！
ちょっと待っ……いや、お待ち下さい！！」

駿は慌てて彼女の前に膝まづくと、懇願するように叫んだ。

「今回だけは勘弁して下さい！！
確かにさっきの話は嘘だけど、どうかここは一つ武士の情を！！」

「ダメったらダメ。
没収します。これは会長命令よ」

「そんな酷い！！
職権乱用！！権力の横暴だ！！」

取り付くしまもない彼女に駿は悲劇のヒロインのように口に手を当てて訴える。

「酷くない！！
とにかくダメなものはダメよ」

「そんな！！

それを持っていかれたら俺の生活が！！生きる術が！！」

必死に説得を試みようとすがりつくような駿。
しかし二人は情をかけらも落としはしない。

「……何か役人にすがる農民みたいだな」

「ハハハ、確かにそんな感じだな」

そんな様子を眺めていた千桜が呆れたように呟くと、いつの間にか隣に座っていた翼が他人事のように笑って答える。
因みに愛歌は“弱点帳”に何かをメモしていた。

かくして……
必死の駿の抵抗（？）も虚しく、エロ本はヒナギクにより没収され、伊澄によって帰らぬものになってしまった。

（ううっ……
まだ一回しか読んだこと無かったのに……）

クラスに向かった生徒会メンバーや職員室に向かった翼には続かず、駿は一人別れを悲しみに暮れていたという……

おかげでＨＲには遅刻。

其の十伍　世の中上手く出来ている

「え～、突然だが。
今日から新たに編入生がウチのクラスに来る事になった」

「「「お～！！」」」

朝のＨＲで、早速薫がクラスメートに向かってそう言った。
生徒達は期待に満ちた声でリアクションを返す。

「まぁ下手な前置きは無しにして、早速紹介といくか。
入って来ていいぞ」

ガラ……

薫の言葉に教室の扉がスッと開いて、廊下から翼が軽快そうに入って来た。
しかし先程の生徒会室での格好とは違い、彼は軽く制服を着崩して

いているラフな格好だった。
紺のカーディガンがよく似合っている。

そんな彼の姿を見るや否や、クラスの生徒会メンバーを除いた女子陣は色めきたった。

身長良し。身体つき良し。髪型良し。容姿良し。
総じてルックスが非常に高いのだから、当然の反応であろう。

翼は黒板の前まで来ると、教室全体を見回した。

「あ～、えっと……
堅っ苦しい挨拶は苦手なんで、簡単に。
鷹ノ瀬翼っつーもんです。
まぁ色々迷惑もかけるかもしれないけど、どうか一つよろしく」

彼はそう挨拶を終えると、爽やかに笑ってみせた。
キラキラとした笑顔に……

「「「きゃあーっ！！／／／」」」

クラスの女子陣は顔を真っ赤にしてそう叫んだ。
男子も何か負けたようにがっくりと肩を落とす者もいる。

「おー、おー……
俺の時とはえらい違いだな」

そんな中、駿は頬杖をついてため息混じりに窓の外を眺めていた。

当然と言えば当然だろう。
片や初日からモザイクで入ってきた男子と片や着崩した制服とカーディガンがよく似合うワイルドな男子なのだから。

「よし、じゃあ鷹ノ瀬は……
鷺ノ宮の隣に座って貰おうか」

「はい」

薫の言葉に翼は頷くと、そくさくと駿の隣に歩いていった。

「お、隣か。
よろしくな駿」

「はぁ……」

翼は駿に向かって笑ってみせると、女子陣はその様子に興味深そうに見つめていた。

しかし翼の様子とは対照的に、駿が憂鬱そうな表情でいるのは理由がある……

～1時限目　数学～

「あ～、この問題を……
じゃあ鷹ノ瀬」

「はい。
え〜、〜〜だから、〜〜」

先生に咄嗟の問題に指された翼は立ち上がると、何も見ずに口頭で計算式を答えた。

その様子に教室は驚いたようにどよめく。

「お、おぉ……
完璧だ。ありがとう」

先生も関心したように頷くと、翼は席に着いた。

〜2時限目　現国〜

「え〜、さっきの抜き打ちテストだが、満点は桂、霞、それに鷹ノ瀬の三人だ。
九割は春風だな」

「「おぉ〜」」

先生が翼の苗字を言うと、またも教室では驚きの声が上がった。
ヒナギク達に並ぶだけで相当凄いという事か。

「他の皆も四人のように頑張れよー」

因みに駿は八割だったそうだ。

～3時限目　英語～

「では、ここの文法的説明を……鷹ノ瀬、出来るか？」

「ここは～～、～～だから、～～で～～～」

「素晴らしい。完璧」

英語の先生は翼の回答に満足したように頷くと、授業を次に進めていった。

～お昼休み～

昼はクラスメート（主に女子）が翼の周りに集まってあれこれと質問攻めになっていた。

「あらあら、凄いわね。
鷹ノ瀬君の周り」

「そうですね。
編入生でいきなりあれほどのスペックを見せつけたら」

「……」

ヒナギク、愛歌、千桜、駿は少し離れた位置で彼の様子を眺めてい

た。

「えっと、駿君？
大丈夫？」

「い、いや別に！？
全然だけど！？
全然何にも気にしてないからね！？ああ、大丈夫大丈夫！！」

「「……」」

明らかに動揺しまくっていて、言葉に全く説得力が無い。
半ば同情するように駿を見る二人。

「大丈夫よ駿君。
人には人の良さがあるから。
鷹ノ瀬君には鷹ノ瀬君の良さが、駿君には駿君の良さがあるわ。
だからあんまり気にしない。
ね？」

「あ、愛歌さん……！！」

「あらあら、よしよし♪」

駿は感極まって隣の愛歌を見上げた。
彼女は彼の頭を撫でながら微笑んでいる。
しかし同時に……

（愛歌さん……
さりげなく弱点帳を……！！）

（また駿君の弱点が記録された訳ね……）

駿を慰めている傍ら、弱点帳に何かが書き込まれているのを千桜とヒナギクは目撃した。

確かにこれは後日言われてみると彼にとっては凄く恥ずかしい事になるだろう。

因みに、愛歌に撫でられている駿を羨ましそうに見ている男子が沢山いたとかなんとか……

～四時限目　体育～

「遂に来てしまった……
この恐ろしい時間が……」

体育館で駿達のクラスが集まってこれから体育の授業が始まろうとしていた。

体育館は二つに分けられ右側を男子、左側を女子という風に区分されていた。

本日、駿が最も憂鬱な気分であった一番の理由である。

薫が男子達の前に立つと、予定表のようなバインダーを見て口を開く。

「んじゃ、男子はバスケをやるぞ。チームはクジで決めるからな」

そう。球技である。
しかしただ球技だからというわけでは無い。
問題は……

「お、同じチームだな。
やるからには頑張るか、駿」

「……」

翼(こいつ)である。
駿は同じチームと聞いて一層憂鬱そうな表情をする。

「よし、チーム替えしよう」

「照れんなよ。
チームはもう決まりだ」

そんな訳で体育の授業が始まった……

＊

キャアァァァァ！！！

体育館に響き渡る黄色い声。
どうやら休憩中の女子達が隣の男子のバスケットを観戦しているようだった。

彼女達の視線の先には勿論、鷹ノ瀬翼の姿がある。

「もらったァ！！」

「！？」

かと言っていると、またも翼が男子二人を抜き去り綺麗にレイアップを決めた。
特典版の表情が加算される。

キャアァァァァ！！

またも黄色い声が体育館を包む。『翼くーん！！』とか『こっち向いてー！！』とか様々な熱のこもった声援が浴びせられていた。

これでは男子を敵に回すのは間違いない……と思いきや。

「鷹ノ瀬の奴、スゲーなぁ。
さっきなんて3ポイント連続で決めてたぜ」

「いやはや、天は二物を与えるどころか三も四も与えるな～」

それすら通り越して最早感心している者が多かった。
圧倒的な差を感じればそれは自然と敬意に変わる。

「よっ！！」

おおぉ～！！

今度は何とダンクシュートを決めた。これにはクラスは勿論バスケ部の人間も驚愕したように声を上げた。

ルックスや勉強だけではなく、運動までかなり高いスペックを見せは彼はもう注目の的といえよう。これが他クラス、更には学校全体に広まる時間はそうかからないであろう。

一方主人公（一応）はというと

「もらい～」

「のわっ！？」

ドリブル中のボールは簡単に奪われ……

「よし！！」

「あれ？」

敵を止めようとするもいとも簡単に抜かれ……

「鷺ノ宮！パス！」

「へ？

わぶっ！！」

あまつさえ、パスされたボールは受け取る反応すら出来ずに顔面に直撃。そのままぶっ倒れる始末であった。
目も当てられないとはまさしくこの事である。

しかし、女子陣はそんな彼を見て『可愛い♪』とか『頑張れ♪』等と、意外に好評だったのだが、勿論駿はそんな事は知る由も無かった。

「そらっ！！」

最後に今日何度目かの3ポイントシュートを翼が華麗に決めると、黄色い声援とともに体育の授業は終了したのだった。

＊

～生徒会室～

「いや～、噂には聞いていたが、ホントに翼君はハイスペックだな」

「もう仕事終わってるなんて凄いね～」

「この調子で我々の分まで…」

「どさくさに紛れて自分の仕事をサボらないの！！」

放課後の生徒会室。
長テーブルに座っている翼の前には生徒会役員の美希、泉、理沙の姿があった。
三人は別のクラスだが、本日の彼の活躍を聞いていたらしい。

お互いに挨拶を終えて、早速サボろうとした三人娘にヒナギクが注意を入れている所だった。

「しかし、三人は役員な訳か。
ここの生徒会は随分と大規模なんだな」

「まぁ、この学院自体がとんでもない広さだから。
人数が多くないとまとめるのが難しいのよ」

翼の言葉に美希がさらりと答えた。因みにいつもサボっている者が言ってもまったく説得力が無い。

「美希達は役員つーけど、どんな役職なんだよ？」

「フッ、よくぞ聞いてくれたな翼君。特別に我々生徒会メンバーの秘密を教えてあげよう」

首を傾げる彼に、
理沙と美希は不敵に笑うと、泉にビシッと指した。

「まず彼女がレッド！！
生徒会メンバーの斬り込み隊長といえよう」

「にはは～、いいんちょさんレッドだよ～♪」

泉はニッコリと元気よく笑ってそう答える。

「そして私がブルー。
副委員長ブルー！」

美希は自分に向けて親指を指して見せた。

「更に敵か味方か！？
風紀委員ブラック！！」

理沙は腕を組ながらニヤリと口元を吊り上げる。

「更には書記イエローの千桜、
副会長パープルの愛歌さん！！
そしてそれらを総括する、我らがリーダー会長ピンクのヒナ！！」

「我が生徒会はこういった序列で構成されているのだよ翼君」

注）ほとんど嘘です

「そして、前回新たに加わった彼が……」

美希はそう言って駿のいる方向に指を向けようとしたがそれをストップした。
なぜなら……

「……」

「よしよし♪」

「まぁ、人生色々あるから。
落ち込むのは早いと思うよ」

駿は室内の隅っこで膝を抱えて落ち込んでいたからである。

愛歌が若干面白そうではあるが頭を撫で、千桜は肩に手を置いて慰めてはいるものの、彼から発せられるあまりの負のオーラに美希は思わず話を止めてしまったのだ。

「また随分と落ち込んでいるな駿君は……
もしかしてエン●リープ●グが破損したのか？」

（（よっぽど体育の時間が堪えたのね（んだな）……））

ヒナギクと千桜は先程の体育の授業を見ていたので、何となく理由はわかっていた。

「いつものようにツッコミが無いぞ！！ホントに大丈夫か駿君！」

「やはり泉のあの一言がキツかったか……」

「ふぇぇ！？
私何も言ってないよ！？」

三人娘がそんな事を言っていると、駿がのっそりと立ち上がってゆらゆらと長テーブルに着いた。

「別に大丈夫……慣れてるよ……前の学校でなんていつもそうだったからさ……
女子から渡された手紙は１００％コイツ宛てのラブレターだし、
バレンタインだって渡されたチョコレートは全部翼宛て……
三年と１０ヶ月……その繰り返しさ……」

「「「……」」」

そう語る駿の目は明らかに大丈夫じゃない程虚ろになっていた。

「そうさ……
まったくモテた事が無いのも、彼女が出来た事が無いのも、シスコンと蔑まれてきたのも、
全部テメーのせいだと言えるってかお前が悪い！！全て！！」

「責任転嫁してんじゃねーよ、仕事しろ」

パコンと駿の頭を翼は軽く殴って止めた。

「痛っっ……
冗談だろーが冗談」

「分ァってら」

「「「？」」」

しかし駿はため息混じりにそう言うと、翼も肩を竦めて返した。
そんな様子を不思議眺める他のメンバー。

「駿君？
大丈夫なのか？」

「ん？ああ、んな事でそこまでへこまねーよ。
もう慣れたし……
まぁ体育で落ち込んでたのは嘘じゃないけど」

どうやら、今のやり取りは二人の中では普通通りのものらしい。
しかしやはり心なしか落ち込んでいるようには見えるが……

「……別にいくらモテようが、ラブレターを貰おうがどうでも良いんだよ、んな事は」

「「？」」

彼はフッと微笑して室内を見回して目を見開くと……

「なぜなら俺には……
伊澄がいるからな！！！」

やっぱり馬鹿だった……
救いようの無い馬鹿だった……
さっさと朽ち果てた方が地球の為である。

「そこまで言うことは無いんじゃないですか！？」

そんな馬鹿はさておき、新たな仲間を加えた生徒会は本日もそこそ

こ順調に進んでいった。

＊

「お、そうだ駿。
俺は今まで通り剣道部に入るつもりだから。明日の放課後見学に行くぞ。もう顧問にも入部届けは出しといた」

「へ～、そりゃ良かったな」

仕事中の駿に向かって翼がそう言うが、彼は画面に没頭していてテキトーに返していた。

この発言には剣道部部長のヒナギクも驚いていたが、彼女が何か言う前に翼は続けて口を開く。

「勿論お前の分もな」

「へ～、そりゃ良かったな」

カタカタ……カ…

「って、は！？」

キーボードを打つ手を止めて翼の方に振り返る。

「誰が！？」

「お前が」

「どこに！？」

「剣道部に」

・・・・・・

「ふざけんなァァァァァァァァァァァ！！！」

平穏とは程遠い叫びが生徒会室から時計塔を包み込んだ。

其の十伍　世の中上手く出来ている（後書き）

三人娘の
～生徒会通信！！～

【三人娘のちょっと先取り】

美希
「いや～、オリキャラの翼君は随分と好評だな」

理沙
「これも一重に月光閃火さんのおかげだな」

泉
「ありがとうございます♪」

美希
「気になるプロフィールは次回で紹介するぞ（多分）」

理沙
「そして反響が大きかったと言えば楓君の事もだな」

美希
「まぁ、あのステータスと美貌ならば駿君に勝目は無いな」

駿
「ほっとけ！」

理沙
「因みに作者によると、
楓君のＣＶは能登麻美子さんだそうだ」

泉
「登場が楽しみだね～」

美希
「その登場についてだが、本編では意外と早いらしいぞ」

駿
「何だと！？」

理沙
「駿君の過去が明かされるのは当分先らしいが、彼女の登場自体は
結構早いらしい」

泉
「なるほど～
そこから物語が進むにつれて二人の関係や過去がわかってくるんだ
ね～」

駿
「主役降板の危機！？」

美希
「では今回は、【ちょっと先取り】のコーナーでした～」

理沙
「次回もよろしく！」

其の十六　深夜には危険がいっぱい潜んでる（前書き）

伽藍
「言い忘れたのでちょっと補足事項を！！」

駿
「ん？補足？」

伽藍
「えっと、前話の時間は１２月６日ということになってます。
今回の話は時間軸が頻繁に移動しますので一応書いておきました」

駿
「もう少しで序章が終わりらしいな」

伽藍
「はい。この序章が終われば徐々に原作介入になっていきますので、
ハヤテの登場ももう暫く待って頂ければ」

駿
「んじゃ、始まります！」

其の十六　深夜には危険がいっぱい潜んでる

これは前話の１２月６日の前日。
１２月５日の深夜の出来事である。

「ふぃ～……
今日もあの野郎逃げやがったなァ」

「ったく、手間かけさせやがって」

黒服にサングラスをかけた厳つい男達がぞろぞろと深夜の商店街を歩いていた。
彼らの手には日本刀やら金属バットやら、物騒なモノが握られている。

文面だけで分かる通り、彼等はヤクザである。というかそれ以外の何者でも無い。

「兄貴、次あのオヤジが言い訳かましやがったらどうします？
臓器抜き取って沈めときますか……？」

「穏やかじゃねーなァ……
もう少し優しく諭してやっても良いんじゃねぇか、なぁ？」

「ゲハハハ！！違いねぇ！！」
「諭すって、殴る蹴るだけじゃないっすか！！」

兄貴と呼ばれる男が周りにそう尋ねると、男達は可笑しそうに笑って答えた。

そんな嫌な意味で賑やかな集団は商店街から公園の方向に移動していった。

その時……

『つかぬ事をお伺いしたい…』

「あ？」

黒服の男達の前に、スッと見知らぬ男が現れた。

「何だてめぇ？
つーか何だその格好？」

『？』

しかしソイツは人というにはおかしな格好であった。

黒くくすんだ兜を被っており、身体中は黒い甲冑に包まれている。

甲冑は足軽が着けるような軽いもののようだが、至るところに斬られたような傷や返り血が黒々とこびりついていた。

しかし異常なのは兜や甲冑から覗くその身体である。

顔は兜が深く見えないが、覗く肌はあまりにも青白く、まるで死人のようである。

下のわらじを履いた足元に至っては若干透けて見えるようだ…

「んだてめえ？
こんな時間にコスプレか？」

「ダハハハ！！悪趣味なモン着てやがんなァ、オイ！！」

しかし男達はその不可解な様子には気付かずに目の前の兜の男に向かって馬鹿にしたような声を投げかける。

『貴殿らに聞きたい事がある』

「ああ？」

「ここは何時代かってかァ？」

甲冑の男は周りの様子は気にせず、低い声で尋ねる。

『我は抻祇（しんぎ）と申す。
貴殿ら、我が主を知らぬか？』

「「は……？」」

抻祇と自称した甲冑は兜に顔を伏せたまま男達にそんな言葉を低く続ける。

「主だァ？
お前何言ってんだ？」

「何だコイツ……

頭がいかれてんのか？」

「面倒臭ぇ。
相手にすんなオメーら。
……去ね去ね」

一番厳つい男が周りの男達を宥めると、抑祇にシッシッと手を振って追い払うような仕草をする。

『悪いが質問に答えてもらおう。我が主を知らぬか？』

「ああ？
知らねーよ！！」

そのまま男達は歩き出そうとするが、抑祇はその前に憮然と立ちはだかる。

「うぜぇ……
兄貴、やっちまいましょうぜ」

「……面倒臭ぇな」

男達はそう言うと、目の前の抑祇を睨み付ける。

「悪く思うなよ……
こちとら仕事出来ねーでイラついてんだ。
俺達の憂さ晴らしになれや」

『……』

リーダー格の男の言葉に、周りの男達は日本刀や金属バットを持ち上げて歪んだ笑みを浮かべる。

「やっちまえェ！！」

「「「うらァァァァ！！」」」

そして、叫び声と共に男達は一斉に目の前に飛びかかっていく。
押祇はというと無言で腰の日本刀に手をかけ……

『知らぬか……
ならば貴殿らに用は無い…』

その数秒後……
商店街には悲痛なうめき声が立て続けに響き渡った……

其の十六　義は時として道を誤らせる　上

～鷺ノ宮家～

「はぁ……」

「お兄様？」

時は前話の時間軸である１２月６日の夜に移る……

鷺ノ宮家の居間で鷺ノ宮駿は盛大にため息をついていた。

そんな彼の様子に伊澄は小首を傾げる。

「どうかされたんですか？」

「伊澄……！！

お兄ちゃんを心配してくれるんだな！？

ああ！！俺はなんて幸せなんだ！！

こんなに可愛い妹に心配されるなんて……悩みなんてどうだって良いさ！！この幸せだけで俺は生きていける！！」

駿は大袈裟に声を高らかに上げて、感動したように伊澄をジッと見つめた。

今にも抱きしめんばかりの勢いだと手にとるように分かる。

本当に一々面倒臭い奴である。

「お兄様……」

「あ、すまん冗談だ（冗談じゃないけど）
いや、実はな……」

呆れたような伊澄の言葉に彼は一旦咳払いをすると、事のあらましを話始めた……

四時間前……

～生徒会室～

「ふざけんなァァァァ！！」

室内には駿の叫び声が響き渡る。

「え？
鷹ノ瀬君って剣道部に入るの？」

「翼で良いよ。
ああ、中高と剣道部だったから。そういやヒナギクは剣道部だったな。よろしく」

駿の叫びをスルーしてヒナギクは翼に尋ねると、彼はさも当然のように答えた。

「そうだったの
そういう事なら剣道部は大歓迎よ。男子が元々少ないから尚更ね」

「おー、ソイツはありがたい。
んじゃ頑張らせてもらうかね」

ヒナギクは納得したように微笑むと、翼もニッと笑って頷く。

「オーイ、勝手に話を進めるな。つーかお前、入部すんのは勝手だが……自分だけだろ？」

「いや、オメーもだ」

「だから何でだよ！？」

確かに最もな疑問ではある。
駿は理不尽だと言わんばかりに翼にくってかかる。

「逆に何で疑問に持つんだよ？
当たり前の事じゃねーか」

「俺はお前のその飛躍思想の頭が疑問だよ。つーかお前の存在そのものが疑問だ」

やれやれという素振りをする翼に呆れと苛立ちが混ざったような口調で駿は続ける。

「お前の考えがどんだけ飛躍してんのか知らんが俺は部活に入るつもりは毛頭無いからな」

「オイオイ……
そりゃねぇだろ？
オメーから剣をとったら何が……」

「……！！」

「あ、いや……何でもねぇ」

翼は駿の表情を見て途中で話を止め、曖昧に言葉を濁す。

駿が僅かに一瞬だが、話に対して『黙ってろ』と睨んだからだ。
周りの皆はそんな一瞬の出来事に気付く筈も無いが、翼は納得したように僅かに頷いて話を誤魔化したのだ。

「とにかく、入部届けは出しといたからな」

「だから俺の意思は！？」

しかし次の瞬間には、二人は何事も無かったかのように元の通りのやり取りを再開する。

「別に良いじゃねーか。
減るもんじゃないし」

「減るよ！！
伊澄といられる時間が少なくなっちゃうだろ！？」
「……お前、いい加減妹離れしたらどうだ？
伊澄ちゃんだっていずれは恋人も出来て結婚していくんだから」

「無い！！そんな事は絶対無い！！

伊澄は……」

猛抗議する駿の言葉に翼は肩を竦めると、呆れたようにヒナギクの方に顔を向ける。

「どうだ？
コイツも剣道部に入れた方が良いと思わないかい？」

「でも、嫌がるのを無理矢理には……」

「おお！！
流石会長！！生徒一人一人の事を常に考えていらっしゃる！！
生徒の鏡だなホント！！」

ヒナギクの生徒会長らしい発言に駿は大きく頷いて同意する。

「でも部活に入れば今より妹離れ出来ると思うぞ？
総合するとコイツの為になるんじゃないか？」

「……確かにそれもそうね」

「え？アレ！？」

しかし翼の最もらしい言葉に頬に手を当てて考え直すヒナギク。
形成が逆転しつつある。

「生徒会長として生徒の為を思うなら、ここは一つ。
コイツを救う為に」

「うん。良いんじゃないかしら」

「オイィィィ！！」

翼の上手い口車にヒナギクはニッコリと笑って答えた。
遂に形成は逆転した。

「そういう訳だ。
諦めろ駿」

「嫌だ！！断固拒否する！！
これ以上伊澄との時間を少なくしてたまるか！！」

「それ思ってんのお前だけな」

「とにかく！！
入部は撤回だ。入部届けも返しにもらいに行ってくる！！」

駿は頑なに首を横に振って折れようとはしない。
絶対に譲れないものが彼にもあるということか。

「分ァった分ァった……
んじゃ見学だけならどうだ？
明日行くって言っちまったから取り敢えず見学だけ」

「……まぁ、見学だけなら」

「よし、決まりな」

見学だけという提案に駿は渋々折れた。翼は頷くとそう言って何やら予定表に書き込み始める。

「平和ね～」

「そうですね」

そんな様子を紅茶を飲みながら眺めているのは愛歌と千桜。
因みに三人娘はエスケープしていた。

「なるほど……
つまり剣道部にいかなくてはならなくなったと…」

「見学だけな。
入部だけは絶対しないけど」

駿はため息混じりにヒラヒラと手を振ってみせた。

「でもお兄様、
鷹ノ瀬家は悪霊退治の類いを生業としている中では有数の優れた家系の一つです。
その次期当主となる翼様と一緒にいられる事はトラブルが起きた時に何かと都合が良いと思いますよ」

「トラブルねぇ……」

伊澄は頬に手を当てる仕草をしながら言うが、駿はやはり首を横に振った。

「仕事は大概深夜なんだし、アイツは一人で平気だろ。
そもそも、その時間帯お前はどうなるんだよ？
もしも何かあったらそっちの方が大変だろ」

「……お兄様」

駿の真っ直ぐな言葉に伊澄は途端に温かい気持ちになって彼を見つめる。
だがそれもつかの間……

「具体的には兄と妹と甘い時間とか兄に甘える時間とか、その他諸々のスウィートタイムが無くなってしまうじゃないか！！
それは由々しき問題だろ？
俺にとっても、伊澄にとっても」

「……お兄様を少しでも見直した私が馬鹿でした」

相変わらずなシスコンに、彼女のそんな気持ちは一瞬で冷めてしまった。

「そんなに誉めるな妹よ」

「誉めてません……」

伊澄はため息をつくと、一旦視線を外して外に目を向ける。
そして再び駿に振り返った。

「そういえばお兄様、今日は一件依頼が入っていました」

「依頼？どこから？」

「えっと……鬼武者ノ公路系のヤクザの方々からでした」

「……へ？ヤクザ？」

伊澄の言葉にキョトンとした表情になる駿。

「……その依頼って、もしかして何か臓器的なモノを売ったり白い粉的なモノを運んだりするやつじゃないよな？」

「違いますよ。
悪霊類いの依頼です」

「ヤクザが悪霊って……」

ツッコミ所が多々あるが、取り敢えず彼は話を聞くためにちゃんと伊澄に向かい合った。

彼女の話によると、
なるほど依頼内容は悪霊類いのものらしかった。

事の発端は一週間前。
公園にたむろしていた不良達に不審な男が話しかけてきたという。
彼らが驚いたのはその格好だった。
それは黒い兜、甲冑を全身に身につけ、死人のように白い肌に透け

るような足元だった。
ソレは彼らに一言『我が主を知らぬか?』と尋ねたそうだ。

彼らは馬鹿にして喧嘩をふっかけたらしいが、黒い甲冑は帯刀していた日本刀で返り討ちにしたらしい。仲間の中隠れていた一人が救急車を呼んで不良達病院に送られたというが……
彼の話によると、不良達は全員背中を斬りつけられただけで命に別状はなかったという。

警察はただの障害事件として処理したらしい。

その後も、公園付近で何度か似たような被害があり、つい先日もヤクザグループが被害にあったそうだ。

この話は被害にあったヤクザの同じ系列のグループが見かねて、鷺ノ宮家に依頼を申し込んだ時に聞いたという事だった。

「……また面倒な依頼を受けたもんだな」

「……ええ」

話を聞き終えた駿はため息をついて呟いた。
伊澄も同意見なのかゆっくりと頷いてみせる。

「これは恐らく……
呪縛霊の類いだと思います。
ソレの話から察するに、遠き古来の時代に亡くなり……何らかの理

由で成仏出来ずに現世をさ迷っている霊……」

「だとすると……厄介だな。
呪縛霊は単に潰しても成仏しない……
この世に残った未練を無くしてやらねぇと……また何度でも蘇るからな」

「ええ……」

二人は難しい表情のまま黙り込む。特に駿は考え事をしているのか単に面倒なのかよく分からない表情だ。

「何にしても、これ以上被害が広がるともっと面倒な事になるから……今日中に片付けるか」

「そうですね」

暫く二人は黙っていたが、不意に駿はそう言って立ち上がる。

「成仏の時は頼むわ。
悪霊自体は俺がテキトーに何とかするから」

「はい」

二人は一旦居間を後にし別れる。駿は用意の為に自室に、伊澄は迷子にならなければ多分自室に向かった。

駿は自室に入ると、私服から和服に着替える為に服の掛かっている壁に手をおいた。

「……」

そのまま半襦袢、袴、羽織りと順に着付けていき、スッと帯を締めた。そして部屋の奥の台に置いてある白い日本刀に目を向ける。

彼は側まで歩いていくと、白夜を手に取った。

「んじゃ……行きますかね」

そのまま彼は部屋の明かりを消すと、自室をゆっくりと後にするのだった……

其の十六　深夜には危険がいっぱい潜んでる（後書き）

三人娘の
～生徒会通信！！～

美希
「え～、前回翼君のプロフィールを載せると言いましたが……」

泉
「今載せるとちょっとネタバレになっちゃうのでもう少し待って下さい、と作者が言ってました～」

理沙
「という訳で駿君から作者の代わりに謝罪します」

駿
「何で俺が！？」

美希
「良いから良いから」

駿
「……どうもすみませんでした。（納得がいかんが……）」

美希
「まぁそんな訳で、今回は珍しく真面目な話のようだな」

泉
「駿君の活躍に期待かもね～」

理沙
「次回は前回と見比べると本当に凄まじいギャップになると思うぞ」

駿
「んじゃ、今日はこの辺で」

三人娘
「次回もよろしく～♪」

其の十七　仕事で妥協してはダメ（前書き）

伽藍
「今回は短めです。
次回で依頼は一応完了しますが、ちょっとした伏線も残ります」

駿
「では、始まります」

其の十七　仕事で妥協してはダメ

午前零時……

「……」

鷺ノ宮家の庭にある門の前には、白い羽織りに白い袴を着た青年が立っていた。

無論、それは鷺ノ宮駿である。

彼は帯刀している“白夜”に手を置いて目を閉じていた。
時折吹く夜風が彼の綺麗な黒髪をさらう。
その様子から、どうやら心を落ち着かせ鎮めているらしい。

「……お待たせしました、お兄様」

「……」

すると、彼の後ろから伊澄が先程とは違った和服に身をつつんでやって来た。
しかし駿は振り返らずに背を向けたままでいる。
よほど精神統一に集中しているのだろうか……

「お兄様？」

「……」

伊澄はクイッと彼の着物の袖を引っ張るが反応は無い。

「あの……」

「……ｚｚｚ」

もう一度彼女は袖を引っ張ると、彼は首をかくんと動かして寝息をたてた。

「お兄様……」

「……ん？」

伊澄はため息をつくと、駿をパタパタと叩く。

彼はうっすらと瞼を開けた。

要するに彼は精神統一をしていたのでも何でも無い。

単に寝ていたのだ。

緊張感も何にも無い奴である。

「……あ、済まん。

もう行く時間か」

「どうして立って寝ていられるんですか」

「寝て……違うってコレは、風の動きを読んでたんだよ。

精神を研ぎ澄ませる為にだな…
あ、待って!!ホントだって!!」

伊澄は呆れたように首を振ると無言で門から出ていく。
駿も慌てて彼女の後を追うのだった……

其の十七　義は時として道を誤らせる　中

～負け犬公園～

「寒いな……
大丈夫か伊澄?寒くないか?」

「ありがとうございますお兄様。大丈夫です」

駿と伊澄の二人は被害者達の証言があった公園に来ていた。

深夜、それも日付が変わっているとあって外は寒く、また物音一つしない静けさに包まれていた。

駿は伊澄の様子を気にして声をかけるが、彼女は軽く微笑んで返した。

「確か……この辺で被害証言が多いんだけどな」

「そうですね。
暫く待ってみれば出現するかもしれません」

「待つ、か……」

彼女の言葉に駿は曖昧に頷くと、やり場の視線を空に向けて時間を費やすことにしたのだった。

ガチャ……

「「？」」

暫く二人は公園の真ん中で手持ちぶさたしていたが、不意に聞こえてきた重金属音に振り返る。

『ほぅ……童っぱ二人か』

「お出でなすった」
「ええ」

なんと、彼らに近づいてきたのは黒い甲冑を着たモノだった。
甲冑と言っても見た目からもかなり軽いもののようで金属の部分より比較的布生地の部分が多い。
頭には酷く欠けた提灯兜、切傷の絶えない手甲、腕甲。
胴の防具には返り血が茶色く変色して至るところにこびりついている。
まるで、戦場の前線に出ていた侍の格好である。

カタッ……

のろのろと二人に近づいてくる黒い甲冑の様子は異常であった。
顔は隠れて一切見えず、腕から覗く肌は死人のように青白い。
足元に至っては防具のみで肌は透けているのだ。

「また随分とけったいな格好してる悪霊だなオイ。
戦争にでも行くのか？」

『……』

駿は前方から近づいてくる甲冑に顔を向けて眉を吊り上げる。

『貴殿らに尋ねる……

我が主を知らぬか？』

「「……」」

甲冑は駿達の前まで歩いて来ると、依頼の報告にあった通りの言葉を問う。二人は顔を見合わせて頷き合った。

「……アンタだな。
最近この辺で辻斬り紛いの事をしでかしてる輩っつーのは」

『……辻斬り？』

甲冑は駿の言葉に疑問口調でそう返した。

「深夜、この付近でおきしな事を尋ねては人を斬りつける……」

『某は辻斬りなどしせり申さぬ。ただ主の探しているだけだ』

「……主？」

甲冑は低く落ち着いた声で帯に差している刀に手を置いた。

『某は名を抻祇と申す。
もう一度尋ねる。貴殿ら、我が主を知らぬか？』

「……知らねーな」

「お兄様！」

駿は訝しげに抻祇を見つめると、あっさりと首を振る。

その様子に伊澄は慌てて彼に声をかけた。なぜなら抑祇の問いに『知らない』と答えると斬りつけられると報告にあったからだ。しかし……

『そうか……
ならばよい……』

「「？」」

抑祇はそれだけ言うと、二人に背を向けて離れて行こうとした。

「オイ……」

『……？』

駿は意外そうな表情で抑祇を呼び止めた。
甲冑はピタリと動きを止めるが、二人に背を向けたまま。

「アンタ、俺達を斬りつけないのか？」

『……某は自ら斬るような事はしておらん。
誰しも向こうから仕掛けてきた事。某は軽く返してやっただけの事』

「正当防衛という事ですか？」伊澄は黒い甲冑を不思議そうに眺めて尋ねた。
しかし、抑祇は返事をせずにただ目の前の暗闇に目を向ける。

『知らぬならば良い……
邪魔をしたな』

そして、ゆっくりと音をたてながら足を進め出す。
その抑祇の動きを止めたのは、後ろから声をかけたから駿だった。

「そっちはそれで良いかも知れねぇが、俺達はそういう訳にはいかねーんだ」

『……』

「さ迷える霊を成仏させるのが鷺ノ宮の仕事なんでな」

駿はそう言いながら背を向けた抑祇に近づいていく。

『つまり……
某に成仏しろと…？』

「簡単に言うと」

彼は甲冑の後ろで肩を竦めて見せる駿。

『止めておけ。
無駄な痛みや傷を受けたくはなかろう。某とて貴殿ら人間を相手にする気は無い。
分かったら……立ち去るがいい』

「「……」」

抑祇は取り付くしまのないようにそれだけ言うと、刀に手を置いてまた立ち去ろうと……

「なるほど……
とんだ世間知らずのお侍って訳か」

『……！！』

不意にかかった駿の言葉に、黒い甲冑はギシと音をたてて動きを止めた。

「どんだけ剣に自信があんのか知らねーが……
世の中には、テメーより強い人間（やつ）なんざ五万といるんだぜ」

『……ほぅ』

口元を緩めてそう話す駿に背を向けたまま、抻祇は刀の柄に手をかける。

『ならば貴様が……そうだと言うのか！！！』

刹那……
大気が裂けるような音と共に、周りの地面が浮き上がるような感覚を伊澄は覚えた。
彼女は何が起こったのか分からずに前方に目を向ける。

「！？」

そこには、駿の方に向きを変え、抜刀している抻祇の姿があった。

あり得ない速度……
全く目で追うことが出来ない……まさしく瞬速の抜刀術である。
だが驚くべきは……

「……」

《……!?》

その目にも止まらぬ速さの刀を、受け止めていた者がいたことである。
それは鞘に収められたままの白い日本刀で刃を受けている駿であった。

「お兄様!」

《……止めた…だと?》

押祇は自身の刀に反応した目の前の人間に疑問を感じられずにはいられない。
彼は先程までとは明らかに雰囲気が違うのだ……

「試してみるか?
世間ってのは狭いようで意外と広いもんだ」

『……』

押祇の刃が駿の鞘にあたり、

不快な摩擦音だけが暫く公園を支配するのであった。

其の十七　仕事で妥協してはダメ（後書き）

三人娘の
～生徒会通信！！～

美希
「うーむ、普段の駿君とは雲泥の差だな」

駿
「そんな難しい言葉よく使えたな」

美希
「何だとー！！」

泉
「まぁまぁ……
今回は作者さんからちょっと何かあるみたいです！
では、どうぞ～」

伽藍
「あ、どうも……
えっと、感想に『ハヤテは出るの？』と質問があったのでそれについてお答えしたいと思います。
ちょっとネタバレになるので、見たくない方は戻って下さい。

まず、もう少しして冬休みになったら序章が終了します。
そうしたら、駿は冬休みの間鷺ノ宮から離れて別の場所にいきます。
そしてそこで、この小説でかなり重要な人出会い、色々とまぁあって冬休みが終わって少ししたら戻ってきます。
その時に多分ハヤテが登場するかなと思います。
なのでハヤテがナギの執事になるところからの暫くは駿はいないので、あしからず」

理沙
「なるほど……
その出会いというのはもしや」

伽藍
「それは勿論秘密です」

駿
「何だか不安しかないが…」

泉
「そんな訳で、今回は短めにこの辺で～♪」

美希
「次回もよろしく！」

其の十八　上には上がいる（前書き）

伽藍
「熱でずっと寝ているので更新が出来ました」

駿
「そういえば、前から聞きたかったんだけど……
この小説って何がしたいんだ？」

伽藍
「……」

駿
「……」

伽藍
「では、始まります！」

駿
「始まるのかよ！？」

其の十八　上には上がいる

ギシギシ……

「……試してみるか？」

『……』

不敵に微笑む駿に無言で刃を押し付ける抻祇。
暫くつばぜり合いが続く状態が続いたが、フッと刃の力を抜くと抻祇は一歩下がると刀を横に寝かせる。

『……面白い。
主の前の余興といくか』

「……」

駿も数歩下がり距離をとると、鞘からソッと刃を抜いた。
美しい白い光が闇夜に僅かに煌めく。

『……』

「……」

二人の間に言い様の無い沈黙が支配する。
ピリピリと張りつめた空気は横にいる伊澄にも伝わってくる。

（本当は無念を晴らして成仏させるつもりだったのですが……）

こうなってしまっては仕方ないと、彼女は悪霊と対峙する駿に成り行きを任せる事にした。

伊澄は念のために御札を数枚用意しておき前方を見据える。

「……」

『……』

押祇は日本刀の柄に手をかけ、

相手の手の動きを瞬きをも惜しむように睨み付ける。

次の瞬間……！！

『ハァッ！！』

「……」

両者は己が刀を振るい、暗闇に発火するような銀色の光が散る。

鉄同士がぶつかり合う不協和音が一度、二度……回数が重なる毎に速くなっていく。

『ぬん！！』

「っ！！」

押祇が素早く上段から刀を振り下ろせば、駿はそれを白い刃で受け止める。
たて続けに横から刀を振り抜こうとすれば、駿は刃を引いてそれを弾く。
また一瞬の間もおかず、更に素早く横に刀を振り、それをまた受け止める。

押祇の剣速は言わずもがな、並の人間では目で追う事が出来ないであろう連撃を重ねる。
しかし、一方の駿はそれら全てを受け止めているだけで、一切反撃に転じようとしない。
相手の攻撃に反撃出来ないのか、或いは反撃しないでいるのか。
どちらにしても、彼が防戦一方の状態であることに変わりは無い。

『ぬぅ！！！』

「……っ！！」

押祇は柄に最大の力を込めて、下から駿の刀を叩きつける。
彼は後方に弾かれ相手からいくらか距離を取る形になった。

「お兄様！」

伊澄は慌てて叫ぶが、駿は簡単に受け身をとって立ち上がった。
その彼の表情からは特に何も窺うことは出来ない。
一切の無表情なのだから……

押祇は刃を青眼に構えてゆっくりと摺り足で距離を計りつつ目の前の男を睨み付ける。
その男……駿はと言えば、何を考えているのか刀を構えもせず目の前の敵に向かい合っているのだ。

《全く攻めてくる気配がない…
舐めているのか、或いは攻めあぐねているのか……
どちらにしても、来ないのならこちらからいくまで！！》

一瞬押祇は姿勢を屈めると、刀を向けて再び駿の元に駆けた。

そして再度繰り広げられる刃と刃の攻防戦。
銀色の刃が鋭く大気を裂きながら連続して駿を襲う。
彼は白銀の刃でそれを寸での所で受け止めていく。
押祇は剣の速度を上げ、鉄と鉄とが不快な金属音をたてて激しくぶつかり合う。
先程と同じように、駿は受けているだけで反撃に移ろうとする様子は見られない。

何度目か刀が交わり、押祇は更に刀を横に振るう。

『甘い！！』

「！？」

しかし、横に振るわれたと思われた刀は駿が受ける刃のギリギリのところで軌道が変えられ、一瞬の間もなく下から駿の身体に斬りかかった。

「っ！！」

『ぬ！？』

彼は咄嗟にそれをかわそうと押祇の身体を蹴り飛ばした。
振るわれた刀は空を切ったが、刃の先が駿の顔をかすめ、薄い斬り傷を負わせた。

再度距離が出来た二人の間……
蹴り飛ばされた押祇はゆっくりと立ち上がって刀を構え直す。
駿の頬は切れて血が伝っていた。

『この変化に反応するとはな……某の時代でも大抵の者は刀の錆になったものだが……』

「物騒な時代だな」

押祇は刀を構えたままジリジリと駿ににじり寄っていく。
駿もまた、刀を下段に構えて距離を取っていく。

『！！』

刹那、押祇は青眼から刀を突き出し、駿がそれを刃で弾いた。
たて続けに押祇は刀を横に凪ぎ払う。

「っ！！」

今度は駿はそれを受けずに、一歩後ろに飛び回避をはかる。

《はァ！！》

押祇の刀はそれを許そうとせず、横に振る軌道を一気に突きに変えて駿の身体を貫こうとする。

『ぬぅ!?』

彼は咄嗟に身体を捻るとそのまま地面に手を付いて、後ろに一回転して距離をとった。

『っ!!』

「っと!」

押祇は間を置かずに距離を詰めようと前に踏み出し刀を振るう。が、駿は屈んでそれを避けると地面を蹴って後ろにさがる。

『逃げに転じたか!!
愚かな!!』

押祇はそう叫ぶと、刀を握る手に力を込めて更に前に素早く踏み込んでいく。

戦局は先程とはうって変わってのモノになっていた。
間合いを詰め攻める押祇とひたすら距離を取りそれを避ける駿。

闇夜に光る二つの銀色はまるで黒い海を泳ぐように縦横無尽な軌跡を描いていく。
一方の銀は獲物を捕らえようと、もう一方の銀は逃れようと。

だが、そんなやり取りが永遠と続く筈も無く……

「ーっ！！」

駿の後ろには網目のフェンスが連なっていた。
ここは公園。
広さには当然限界があるのだ。

『詰みだ
もう逃げることは叶わん』

逃げ場を失った彼に向かって押祇は摺り足でにじり寄り、
駿はそれを迎え討とうと居合いの構えをとりこの日初めての反撃体制になった。

そして次の瞬間……！！

『はァ！！』

「……！！」

押祇は足の神経に集めた集中を放ち、一気に距離を詰め駿めがけて刀を突き出す。
それと同時に駿の目が鋭く見開かれた！！

○

沈黙が闇夜の公園を支配する。
風は細くたなびき弱々しい音をたてている。

「お兄様！」

ようやく伊澄が追いつくと、そこには向かい合った駿と押祇の姿があった。

『……』

押祇の刀は上から半分が切断され、半分になった刃は彼には届かずに突き出されていた。
駿はというと、鞘に刀を納めて柄に手を置いている。
足元には半分になった刃の上部が転がっていた。

そう。駿は居合いで押祇が突いた刀を叩き斬ったのである。

『……なるほど』

暫く動きを止めていた押祇が、折れた刀を突き出したまま声を発した。

『逃げに転じたのは某を誘い出し軌道を絞る為であったか……』

押祇の言う通り、
駿はわざと自分をフェンスまで追い詰めさせたのだ。
一見逃げ場が無いようだが、後ろが塞がっている分視野を３６０度から前方に絞ることが出来る。
加えて相手に追い詰めさせたと油断を与える事で動きや隙を大きくさせて行動を予測し易くする訳だが……
どちらにしても、自分の刀の速さに自信が無ければあまりに危険な

策である。

抻祇は刀を手から離して地面に落とす。そして数歩下がって駿に改めて向かい合った。

《某は……井の中の蛙だったという訳か……
奴の本気はあの居合いの瞬間だけだったのか。某にはとても見切れる代物では無かった……》

そして抻祇はその場に屈むと、あぐらをかいて座りだした。
その様子に、駿は首を傾げて柄から手を離す。

「……あん？」

『某の負けだ。
これ以上の抵抗は意味を成さん。除霊するならば一思いにやるが良い……』

そう言うと、抻祇は甲冑の鈍い音をと共に本体を少し揺らして座り込んでしまった。
どうやらもう戦う気は一切ないらしい。

「そう言ってるが……
どうする伊澄？」

「そうですね……」

伊澄は駿の傍まで歩いてくると、座っている抻祇に目を向ける。

「迷える魂を導かせて頂くのが私達の仕事。

出来れば悔いの無いよう、未練を切って成仏して頂きたいのですが……」

『……未練、か。
残念ながら、今となっては晴らす事も出来まいよ』

薄い兜を被った頭はゆっくりと横に振られた。

「なぁ、アンタが言う主ってのは誰で、その主に会って一体どうしたいんだ？」

『……それを主らに言ってどうなる？』

「んなもん話してみねぇとわかんねーだろ。
除霊されるにしても腹ん中スッキリさせた方が良いんじゃねぇの？」

駿の言葉に沈黙を守っていた押祇だったが、暫くして兜に隠れた顔ゆっくりと上げた。

『昔の話だ……』

今から８００年以上前……
平家の将軍に仕える勇猛な家臣が一人いた。
彼は人徳、忠誠心、機転、戦術…何れにおいても優れた人物であり上からも信頼は勿論、家臣を大切に扱う故に下からも信頼の高い男であった。

某はその男に仕える家臣の一人であったのだ。

我々平家は時流に乗って栄え、栄光の時代を築き上げた。
しかし時代とはいつも突然に移り変わるもの……

挙兵した源氏の頼朝が勢力を拡大し、平家は次第に押される事になっていった……

そんな時であった……
あの悲劇が起きたのは……

北陸における源義仲の勢力は日に日に増大していき、こちらとしても何とか手を打たなくてはならなくなった。
平氏は平維盛・通盛を大将にして十万の軍勢を派遣した。
某もその中にいた。我々は加賀国に到達し、加賀国・越中国の国境である砥浪山付近で義仲軍と対峙することになった。

そこで、義仲の軍は我々を狭い倶利伽藍峠に誘い込み、谷の下にに落とすという作戦をたてたのだ。
奴等は昼間は時間を稼ぎ、辺りが暗くなってから四方から猛然と攻めてきた。

我々はというと暗さに道も定まらず、皆が谷の方に退いたため、軍の皆はあっという間に谷底に落ちていった。
これにより大半の平家の軍勢が谷に重なり合って死亡した。

某は何とか逃げおおせ茂みの奥に潜むことした出来なかった。
仲間は皆死に、某だけがのうのうと生き延びた事にどれだけの罪悪感苛まれたかは今も忘れぬ。

しかし幸か不幸か、生き延びた為にやって来る敵の姿を目撃する事になった。
決死覚悟だ……
大将が出てきたら飛びかかり、共に谷に落ちるつもりだった……

だが、某が目にしたのは信じがたい光景であった。
義仲の隣にいたのは、忠義に厚かった我が主であったのだ……

その後の事はよく覚えていない。某は必死で逃げおおせ、仲間の平家と共に都落ちをした……
結局、後の戦いの中で戦死したがな……

無念と失念に幾年も世をさ迷っている時に……
この世で主を見たという話を耳にしたのだ……

『……以来数百年、某はいかなる場所をさ迷い歩いた。
主を探し出し、あの時の事を問いただす為に……

そしてもし主が源氏に回っていたのならば……』

「……ならば？」

『仲間の仇を討つために主を斬る……』

押祇の顔は隠れて見えないが、兜の奥の暗闇でギラリと瞳が赤く光ったように見えた。

『とは言え、それはもう叶わぬ事となったがな……』

「……」

押祇はそう言うと、肩の力を抜いて声色を落とす。

「……じゃあこうしねーか？」

『？』

すると、駿が目の前に出てきて鞘で押祇を小突いた。

「アンタはそれが無念だと言う。俺達はアンタを除霊しなきゃならねぇ。
だったら早い話が……
俺がその主って奴を倒して話を聞きゃいいって事だ」

「お兄様！？」

『……貴様』

突拍子も無い彼の発言に隣にいた伊澄まで驚いて振り返る。

「ま、今も世に残ってるつー事は悪霊の類いだろ。
だったら、どの道俺達がやるべき事に変わりはねーしな」

『貴様が……？
主の相手になれるとでも？』

「さぁな。
ただ、このまま無念タラタラで除霊されるよりは、あの世で少しでも期待出来る事があった方が良いんじゃねーかと思ってよ」

《何の保証も無いが……
何故だか確信が持てるこの感じ…こやつなら、よもや……》

駿はそう言って少し肩を竦める仕草をしてみせた。
それを聞いた押祇は隠れて見えないが、フッと微笑したような気がした。

『某が……
貴様に期待などするとでも思っているのか？』

「おー、言ってろ言ってろ。
あの世で朗報でも聞いて腰抜かしやがれ」

憎まれ口を叩く押祇に、駿は眉を吊り上げて言い返した。

『良いだろう……
どうせ除霊される身ならば、主に託してみるのも悪くない』

「……」

抻祇は先程と違ってどこか満足そうに言うと、再び顔を俯かせ両手を膝の上に置いた。

駿は伊澄に目を向けると、彼女は頷いて抻祇の前に出る。

「では、除霊を致します……
どうか安らかな眠りについて下さい……」

『ああ……頼む』

彼女は札を兜の上に貼り、目を閉じてその上に手を翳した。

すると、徐々に抻祇の身体は下から薄くなっていく……

『主は赤の和風に身を包んだ男だ……六尺もある極めて長い刀を帯刀している鬼のように強い男だ』

「六尺って……長いな」

『名は家臣の口からは言えぬ。
だが見れば一目で分かる』

抻祇の身体はもう下から半分が消えてしまっていた。

『時に貴様……名はなんと申すか』

「駿だ。鷺ノ宮駿」

『駿か……
貴様には我らと同じ匂いを感じる…いや、同じというより……前にどこかで感じた……』

「……は？」

意味不明な抻祇の発言に、駿は思わず口を開いてしまう。

『血の、私怨の気配……
そう、例えるならば戦の匂い……幾ばくもの修羅を持つ戦人（いくさびと）の雰囲気……』

「何言ってんだアンタ？」

抻祇は考え込むように顔を俯かせていたが、終いに諦めたように顔を上げた。

『思い出せんが……
貴様はそんな雰囲気を持っている……』

「？？？」

訳が分からない駿の前で、抻祇はもう顔だけしか残っていない状態になっていた。

『気をつけろ……
何かがおかしい……貴様には……少なからず違和感を感じる……』

「どういう意味だ？」

駿は思わず聞き返すが、もう顔の半分も残っていない。

『いずれ分かるやも知れぬ……
貴様は……』

「あ、オイ!!」

押祇は何かを言い残そうとするが、それを成せずに遂に消え去ってしまった……

貴様には……少なからず違和感を感じる……

（違和感？
一体、何の……）

クイッ

「ん？」

駿が押祇の残した言葉を反芻して考え込んでいると、不意に袖が引っ張られた。

「お兄様？」

「あ、ああ……」

駿が振り返ると、そこには不思議そうに見つめてくる伊澄の姿があ

った。
除霊をしていた彼女には、先程のやり取りは聞こえていなかったのである。

「どうしたのですか？
難しいお顔をなさって……」

「いや、何でもない。
ちょっと今晩の重要な事について考えただけだよ」

「？」

伊澄は首を傾げるが、何かを思い出したように口を開く。

「お兄様、あんな約束をされて大丈夫なんですか？」

「約束？」

「ですから、悪霊を代わりに引き受けると言った……」

伊澄が言っているのは、先程駿が押祇と交わした約束の事である。

「ああ……
まぁああでも言っとかねーと、
未練でまた世に出てくるなんて事が起こるかもしれねぇからな」

「それで……
お引き受けするのですか？」

「引き受けるったって、悪霊ならいずれ退治しなきゃならねー時が

来んだろ。
そん時思い出しゃ良いんだよ」
駿はさして気にしていないのか、気楽そうに伸びをしてそう言った。
「そうですね……」
「んじゃ、帰るか……」
伊澄はまだ少し腑におちないようではあるが頷いた。
「そういえばお兄様……
今夜の重要な事って、何ですか？」
「おー、それか。
そりゃ一緒に寝るにあたってどっちの部屋で寝るのかという極めて重要な選択だ。
俺が伊澄の部屋で一緒に寝るか、伊澄が俺の部屋で一緒に寝るか……」
駿はコホンと咳払いすると、さも嬉しそうにそんな事を語りだしたが……
「……」
「あ、ちょっと伊澄ちゃん!?
ゴメン冗談だから!!いや、本当にそうなったら嬉しいけど…じゃねーや、冗談冗談!!

だからそんな軽蔑の眼差しを向けないで!?絶対零度の視線は止めて!?」

「……」

「ああ!!無言で去っていくな!!
お願い!!ちょっと、ねぇ聞いてる伊澄ちゃん!?
嫌いにならないでくれェェェェェェェェェ!!!」

公園には情けない兄の叫び声が響き渡る。
やっぱり馬鹿はいつも通り馬鹿だった。

其の十八　上には上がいる（後書き）

三人娘の
～生徒会通信～

泉
「やったー！！
駿君が勝ったよー！！」

理沙
「うむ。やったな」

美希
「嬉しい限りだな」

駿
「お前ら……そんなに俺の事を……」

三人娘
「どうでもいい駿君の活躍が終わって、次回からは私達の出番だー！！ワーイ！！」

駿
（……だろうと思ったよ）

美希
「質問が来ていたな。

えっと何々、『ハヤテは登場しますか?』
ふむ。勿論登場するらしいぞ」

理沙
「そして駿君がいない間に着実にフラグ立てるだろうな!」

駿
「伊澄だけは絶対にダメだからな!!」

泉
「にはは~、という事で序章と冬休み篇が終わったらちゃんと登場しますので待ってて下さいね♪」

美希
「では、また次回!!」

三人娘
「よろしくお願いしま~す♪」

其の十九　それが僕らの青春だったり無かったり（前書き）

伽藍
「今回一話にまとめてみたら随分長くなりました」

駿
「今回は翼が大活躍します！」

伽藍
「果てはこのまま主人公交代も……」

駿
「……それだけは無いと祈ろう。では、結構長めですが始まります！」

其の十九　それが僕らの青春だったり無かったり

よく晴れた朝……

白皇学院の正門には登校してくる生徒が次々と入っていく。
背の高い高校生もいれば、低い小学生くらいの生徒もいる。
小中高一貫なので、白皇の生徒にとっては当たり前の光景だが、普通の高校生にしてみるとなんだか妙な感覚であろう。

（……やっぱり色んな年齢の生徒が居るんだな）

正門に向かって歩いている鷺ノ宮駿もその一人であった。
高校からの編入なので、やはりこういう光景は不慣れなのだ。

彼は鞄を右手で持って肩に担ぎながら時折周りを見回しては足を進める。

「あ、駿君」

「？」

そんな彼の後ろから声がかけられた。振り返るとそこには同じく鞄を持った千桜が歩いて来ていた。

「あ、千桜。

おはよう」

「うん、おはよう」

お互いに挨拶すると、千桜は駿の傍まで歩いていく。
そして二人並んで登校する形となった。

「ん？そういえば妹さんは居ないみたいだけど……」

「ああ、伊澄なら休みだよ」

「休み？」

千桜は首を傾げると、駿は若干困ったように頷いた。

「今朝伊澄が何か戦隊の特撮見てたらしいんだけどな、その正義のヒーローの主人公が死んでしまったとか何とかで……」

「すみませんお兄様……
今朝はどうしても動く気になれなくて……」

「伊澄！？ど、泣いてるのか！？」

「もうこんな思いは……
ごめんなさい」

「……という訳で今日は家にいるみたいだな」

「それはまた……」

駿の回想に千桜はどう反応したら良いのか分かりかねている様子。
そこで彼女は話題を変える事にした。

「そういう駿君も眠そうね？
寝不足？」

「いや、実はな……
小学生の時にやってたＦＦ７を最近またやり始めたんだけど…」

「７か。５、６と名作が続いての名作だな」

「ああ。５は最高だよな。
それでさ……」

彼の話を聞いた千桜の目がキラリと目が光る。
駿はそれに頷くと話を続ける。

「昨日の明け方に樹海の神殿に入ってしまったんだよ。
そこで止めようと思ったんだけどな……不覚にも止まらなくなってさ……それで、あのイベントが……」

「エ○リスか……」

「……ああ」

何故だかしんみりとした雰囲気になっているのは、プレイした人には分かると思うが、そのダンジョンでとても悲しい事件が起こるのである。そのゲーム内の転換点言っても良い。

「ホーリーのマテリアが地面に落ちてあの音楽が鳴った時は二回目にも関わらず目頭が熱くなった……」

「あの曲のまま戦闘に入るからな……あのボス戦は燃えるな」

「ああ。
そんで止めるに止められなくなって……」

二人は何やら真剣に頷きあって正門を通過する。

「小学生の時はあのままになるのが嫌でさ、サガフロのディスク入れたりしてたけど」

「あのバグはイベントでよくフリーズするからな」

「そうなんだよな。
だから、あのまま進めないで一旦ＦＦ７を止めて、ＫＨをやって向こうで会いにいったりさ」

「あー、あるある」

二人が何の話をしているのか分からない人は、
ＦＦ７とキングダムハーツというゲームをやってみよう！

「そういや近頃やたらモンハンが流行りだしたよな。

2ポータブルが出た途端急に」

「1ポータブルの時はそれほどでも無かったし、それ以前は認知度さえ低かったけど」

注）この小説の中では2が出たばかりの時間軸です。

「やっぱりモンハンはポータブルだから流行るんだよな。据え置きでやるには限界あるしさ」

「うんうん。ポータブルの方が通信も断然しやすいしな」

二人はゲームの話で盛り上がりながら時計塔に足を進めていく。ある意味健全な高校生の登校風景のように思える。

「よォ、ご両人」

「「？」」

そんな時、二人の後ろから快活そうな声がかかってくる。振り返ると、二人に向かって走ってくる鷹ノ瀬翼の姿があった。

「あ、鷹ノ瀬君。おはようございます」

「オメーか……」

「おぅ、おはよう」

翼は駿達の元に寄ると軽く微笑んで挨拶を返した。

「しかし、知らなかったぞ。
駿、お前もやるじゃねーか」

「は？何が？」

翼は二人に並ぶと駿と千桜を交互に見るニヤリと笑ってみせた。
彼の真意が分からない駿は首を傾げて聞き返す。

「隠さなくたって良いって……
二人は恋仲なんだろ？」

「「は！？／／／」」

翼のいきなりの発言に駿と千桜は真っ赤になって彼に振り返る。

「誰が恋仲ですか！！／／／
違いますよ！！／／／」

「何だ違うのか？
だけど朝から一緒に登校してるし、二人だけで楽しそうに話していたじゃないか」

「それは偶々…！！／／／」

顔を赤らめて慌てて否定する千桜に翼は楽しそうに口元を緩めてみせた。
そんな彼に千桜はますます赤くなってしまうが…

「クッ……ハハハハ！！

悪い、冗談だよ冗談」

「な……／／／」

翼は本当におかしそうに声をあげて笑い出した。
どうやら二人をからかっていた様である。

「でも、端から見たらかなり良い感じだったぞ」

「オメーはいつも考えを飛躍させ過ぎなんだよ……」

「はいはい。
そういう事にしといてやるよ」

駿は頭を掻きながら少し気まずそうに翼に返す。
翼は面白そうに頷くと、一歩前に出ると二人に振り返った。

「んじゃ、俺は先に行くから。
後でなご両人！！」

「「だから違うわ！！／／／」」

翼はフッと微笑すると、軽く手を頭の前で振って走り去っていってしまった。

「「……」」

残された二人の間には何とも言えない雰囲気が流れる。

「……あ」

「え？」

すると、駿が何かを思い出したようにポツリと声を漏らした。

「そういえば……
そろそろ来るな……」

「来る？」

「いや、翼のな……」

駿がそう言いかけた時、彼の傍に十数名の女子生徒が駆け寄ってきた。

「あの……！！
鷺ノ宮先輩ですよね！！」

「（やっぱり来たか……）
ああ、そうだよ」

彼女達を見ると、駿は心の中で溜め息をつき、それを表に出さないように言葉を返す。

女子生徒達はその言葉を聞くと、何やら互いに顔を見合わせてキャッキャッと囁き始めた。
『あなたが行きなさいよ』とか
色めきたった様子で小突き合いをしている。

「あ、あの……！！」

暫くすると一人の女子生徒がおずおずと前に出てきた。

「こ、これ……」

彼女が駿に差し出したのはピンク色の可愛らしい手紙だった。
所謂、ラブレターというヤツである。
それも一枚では無く十数枚はあることから、恐らく後ろにいる女子生徒全員分のものなのだろう。

「……」

普通の男子なら飛び上がって喜びそうな状況だが、駿は何かを諦めたようにそれを受け取った。
何故なら彼は女子生徒から言われる次の一言を大体予測しているからである。

「これを……
鷹ノ瀬先輩に渡して下さい!!／／／お願いします!!／／／」

女子生徒は手紙を渡すと、すぐさま真っ赤になって駿の前から去っていく。
それに続いて後ろにいた女子生徒達も顔を赤くして去っていってしまった。

「……はぁ。
やっぱり来たか」

「……もしかして、さっき言ってたのってこの事？」

後に残った駿が大きく溜め息をつくと、千桜が少し遠慮がちに尋ねる。

「あ～、アイツ昨日転校して来たろ？まぁだから今日あたりから来ると思ってさ。
本人に直接渡す勇気の無い女子はこうやって俺に渡すんだよ」

「……なるほど」

「……取りあえず、時計塔に行くか」

「……そうだな」

先程とはまた違った気まずい雰囲気を見かねた駿が、敷地内にそびえる時計塔を指差す。
千桜も頷くと、二人は時計塔に向かって歩いていった。

＊

～生徒会室～

「お、よォ」

「……」

駿達が生徒会室に到着すると、ちょうど翼が長テーブルで十数枚の

手紙と格闘している所だった。

「あ、おはようハル子、駿君」

「おはようヒナ」

「おはよう会長」

横でファイルを整理していたヒナギクが二人に挨拶をしてきた。

「なぁ、翼は何をやってんだ？」

「翼君ならラブレターと格闘中だ。何でも全てにちゃんと返事を書くみたいだからな」

「のわ！？」

駿はヒナギクに尋ねるたが、それに答えたのはいきなり彼の後ろから現れた美希だった。

「なんだ美希か……
いきなり後ろから出てくるなよ。……しかし、編入二日目で凄いなアイツ……」

「うむ。駿君とはえらい違いだな」

「言わないでくれ。
俺の心のライフはもうゼロだ」

駿は胸に手をあてる仕草をすると、座っている翼の方に向かっていく。

「相変わらず大変だなモテ男。
それ全部返事すんのか？」

「ん？
ああ……一字一字丁寧に書いてくれたんだ。
一人一人の想いもあるからな。
ちゃんと返事はしないと」
翼は若干疲れたように、だが手紙を見てしっかりと頷いた。

「でも全部断んだろ？」

「まぁ……
俺にはまだそんな甲斐性無いからな。申し訳ないけど」

駿の言葉に翼はフッと息をついてペンを置く。

「そうかい……
感傷に浸ってるところ悪いが……これ追加な」

「な！？」

駿は翼の目の前に更に先程渡された十数枚のラブレターを置いた。

「お、鬼……」

「仕方ねーだろ。さっき頼まれたんだから。
ちゃんと渡したからな」

「はぁ……
こりゃ生徒会の時間じゃ終わらねーな……」

グテーとテーブルに突っ伏してうだる翼。

「まぁ頑張れ。
んじゃ、俺は先に教室に行ってっから。
それと最後に一言いいか……」

駿は翼の前を離れて出口の前あたりまで歩くと、振り返った。

「オメーの悩みは贅沢なんだよ！！！」

「「「……」」」

そんなセリフを残して駿は生徒会室から出ていった。

「本当に駿君は見ていて飽きないな」

呆れたような一同の中で、美希がそんな事を呟いた。

其の十九　それが僕らの青春だったり無かったり

「サブタイ出んの遅っ……
つーかオイ、今から何処に行く気だよ？」

「何処って……武道場に決まってんだろ」

授業も終わって放課後。
駿と翼の二人は白皇の敷地内を歩いていた。
駿は何故こんな状況になっているのか分からない様子で尋ねると、
翼が当たり前のように答える。

「武道場？」

「お前……忘れたのか？
今日の放課後、剣道部に行くって言ったじゃねーか」

「……ああ。
あったな、そういえば」

翼に言われて、駿は思い出したように小さい数回頷いた。

「あったなって……
お前は鳥頭か……」

「仕方ねーだろ。
昨日は深夜から色々あって忙しかったんだよ」

「深夜……悪霊か」

翼はなるほどと納得したように後ろの駿に振り返る。
駿は頭を掻きながら面倒くさそうに歩いていた。

「まさか……
お前が負けるような相手が出てきたとか？」

「あのなぁ……
負けてたら俺が今ここにいねーだろ。あの世でフワフワ浮かんでるよ」

駿は右手の人差し指を上に広がる青空に向けてみせる。

「そりゃそうか。
お前が適わない相手が出てきたら、きっと今頃俺達もやられてんだろうな」

翼は肩を竦めておどけたように口元を緩めた。

「だけど……
いずれは出てくる……
俺達じゃ手のつけられないような、とんでもねぇ化物どもが……」

駿の脳裏に浮かぶのは昨日の押祇が言った言葉や銀華と共に見た昔

のおぞましい光景等……

「……駿」

「っても、ソイツが一体や二体なら良いんだけどよ。
出来るだけ数が少ない事を祈るばかりだな」

翼も真剣な表情になり、何だか雰囲気が堅くなってきたと感じた駿は軽い口調で続ける。

「まぁ、もしもの時はちゃんとオメーが骨拾ってくれや。
鷹ノ瀬家の御当主さん」

「縁起でもねぇ……
お前が伊澄ちゃんおいて先にくたばるたまかよ」

そう言って立ち止まる翼の前を、駿は振り返らず手をヒラヒラと振って歩いてい……

「ちょっと待て」

「!?」

そのまま歩いて行こうとした彼を翼は呼び止める。

「武道場は右側だぞ。
そっちは正門だろーが」

「……」

「今お前、このまま逃げる気だっただろ？」

「……」

振り返らず答えない駿に近づいていくと、翼は彼の肩を掴んだ。
そしてそのまま右側に引きずっていく。

「ったく……
珍しく真面目になったと思ったらこれか」

「……何故バレた？」

「見え見えなんだよ。
お前の考えてることくらいな」

引きずられている駿はそれを聞いてダルそうに息をつく。

「何かシリアスっぽい雰囲気にしてそのまま後の展開を全部うやむやにするという俺の完璧な計画が……」

「アホ」

翼はやれやれと首を振ると先程より目的地に向かう足を速めるが…

「面倒くせ～
嫌だ～行きたくね～」

駿は小学生よろしく駄々をこね始めた。
引きずられながら……

「ったく……
分かったよ。今日見学に行ってくれたら俺の家で晩飯食わしてやるから」

「晩御飯!?」

翼は呆れながらも振り返ってそう提案すると、駿は見事にそれに反応した。

「オメーが作るご飯?」

「当たり前だろ。
まぁ姉さんも今日は当番だけど」

「弥生さんも!?
……仕方ねぇな」

すると、駿は引きずられるのを止めスクッと立ち上がり翼に並んで歩き始めた。

「ゲンキンな奴だな」

「何言ってんだ。
プロ級のお前が作る飯が食べれて、エプロン姿の弥生さんに会えるんなら剣道部の見学くらいなんて事ねぇって。朝飯前朝飯前」

(本当にコイツは……)

コロッと態度を変えて武道場に行く気満々の駿を見て、翼は心の底

から溜め息をついていた。

「しかし、駿が俺の家に来るのは久しぶりだよな」

「久しぶりって……
1ヶ月前までしょっちゅうお互いの家に行ったり来たりしてたじゃねーか…」

「いやまぁ、そうなんだけどな。急に1ヶ月も空くと久しぶりに感じるっつーか……」

二人がそんな話をしていると、前方に武道場らしきモノが見えてきた。入口の側には胴着姿のヒナギクの姿もある。

二人は若干急ぎ足で彼女の元に寄っていった。

「すまない。
コイツが馬鹿やるもんで遅れた」

「だから馬鹿って言うな」

「ううん。まだ部活は始まってないから大丈夫」

ヒナギクは首を振ると二人に向かってそう答えた。

さて、三人が何かしようと動きかけた時、後ろから意外な声がかかってくる。

「ん?こんな所で何をしているのだ?」

「「ナギ？」」

それは三千院ナギだった。
彼女はいつも通り不機嫌そうな表情で鞄を持って歩いている所だった。

「お前、何で学校にいんだ？」

「今日はエイプリルフールじゃないわよね？」

「お前ら無茶苦茶言うな……
学生なのだから登校して来て当然だろう！！」

ナギがそう叫ぶと、ドーンと駿とヒナギクに衝撃が走る。

「オイ、オメー何があった！？
どこかで頭でも打ったのか？」

「何か変な食べ物でも食べたりしたのかしら？」

「……お前ら殴るぞ」

不安そうに顔を見合わせる駿とヒナギクに、拳を震わせるナギ。

「今日は普段サボっていた単位の補習があったから仕方なくだ。
何でも無いのに誰が学校に行きたいとなど思うか」

「それが普通なのよナギ」

「う〝……ところでどうして駿（ばか）がここに？」

ヒナギクとの会話が日常生活の諸注意にまで及びそうになるのを感じたのか、ナギは咄嗟に話題を変えて駿を見る。

「いや、剣道部の見学にな」

「お前が？
あの超妹馬鹿のお前が部活に？」

ナギは信じられないような表情を駿に向ける。

「入らないから。
あくまで見学だけだから。
まぁ色々と込み入った事情があってな」

「ほぅ……
私としては馬鹿が部活などやってくれれば平和になって良いと思ったのだが」

「馬鹿って言うな」

ナギはあからさまに残念だというように肩を竦める。

「せっかくだからナギも今日くらい部活に顔を出しなさいよ」

「む……」

するとヒナギクが若干呆れたようにナギに向かってそう言った。
ナギは痛いところを突かれたように口をつぐむ。

「って、ちょっと待て。
会長、今なんと？」

「え？
だからナギも今日くらい部活に顔を……」

「ナギの部活？」

駿はヒナギクの言葉に疑問を抱いて、もう一度尋ね返す。

「ええ。ナギは剣道部に入ってるのよ。まだ籍は残ってるから」

「ええ！！？剣道！？」

「……何だその反応は」

明かされた衝撃の事実に、駿は数歩下がって声をあげる。
それが不満なのかナギは眉を吊り上げた。

「え、だって……
剣道だろ？剣道ってあの竹刀で闘うアレ……」

「……」

そう言って駿はナギに今一度目を向ける。
そして……

「嘘だろ……」

「うぉい！！何で私を見て言うのだ！！そして何故目を反らすのだ！！」

「だって……」

駿はそれ以上は答えなかったが、それは万人共通の理解ということで敢えて省略する事にする。

「まぁ、それより中に入って。
そろそろ部活が始まるから。
ナギもせっかくここまで来たんだから今日くらい顔を出しなさい」

「う……分かったのだ…」

ヒナギクは武道場の入口を指してそう言うと、ナギは渋々頷いた。
先に二人が武道場の中に入っていく。

「オイ、さっさと行こう」

「おう」

翼は少し離れた所でバスケットボールと遊んでいたが、駿の言葉に気付くと直ぐにこちらにやって来た。

○

武道場の中は１０人前後の女子生徒と幾らかの男子生徒がそれぞれ胴着を着たり防具を着けたりと準備をしていた。
これだけの大きな学校にしては、なるほど確かに人数は少ないように思える。

他の部活、特にサッカー部やバスケ部等と比べてみてもそれは明らかである。

そんな落ち着いた雰囲気の武道場に三人は足を踏み入れた。
時折まだ冷たさの残る床がひんやりと心地よい。

「胴着姿似合ってるな。
様になってるよ」

「あら、ありがとう。翼君」

翼とヒナギクの何気ないやり取りに落ち着いていた武道場はザワリと音をたてた。
特に男子生徒の反応が敏感なようである。

（今、桂さんがアイツの事を下の名前で!?）

（つーかあの男前誰だ!?）

男子生徒達は目でアイコンタクトを取り合いながらピリピリと神経質な空気を作り出した。
しかし、そんな雰囲気は次の一言で一気に殺気へと崩壊する。

「なぁヒナギク、見学ってあれ?テキトーに隅に座ってりゃいいのか?」

「ええ。構わないわよ」

「「「!?」」」

それは駿がヒナギクに尋ねた一言であった。
これを聞いた男子生徒全員の頭にコ○ン君よろしく線が一気に駆け巡る。

(あの野郎!!
今、桂さんのこと『ヒナギク』って!!)

(呼び捨てだとォ!?
なんて羨ましい!!!)

(一体どういう関係だァァァ!?)

つい今までの神経質な空気はあっという間に殺気に変わった。

(ん……?
あれ?なんかさっきと部の雰囲気が違うぞ……何でだ?)

男子部員から送られる猛烈な殺気は流石に駿にも伝わったようだ。
彼は理由も分からず首を傾げている。

「じゃあ皆に紹介して、ちょっと一緒にやってみましょうか駿君、翼君」

「お、そうだな」

「いや、俺は……」

ヒナギクが振り返ると、翼は嬉しそうに頷くが駿は両手を出して遠慮しようとする。

「でも、今日防具持ってないんだけど」

「無しじゃダメ？」

「む、まぁ…大丈夫か」

翼は暫し考え込むが、彼女の言葉に同意して首を縦に振った。

「じゃあ二人とも、取り敢えず顧問の先生に……」

「オーイ、人の話聞いてんの？
俺はやらないって……」

「桂さん！！！」

駿がヒナギクに突っ込もうとした時、四人の後ろからとある男子が叫んでやって来た。

「こんな奴……
うちで剣道させることないですよ」

「は？」

その男子は緑がかったグレーの髪の毛が首の下まで伸びていて、やや細みがかった体系で頭以外防具を着けていた。

容姿はどちらかというと女性よりだと思える。

「おい！！
そこの黒髪のお前！！」

「……？」

彼は駿の前で立ち止まると、勢い良く駿に指を突き刺す。
駿は訳が分からずに首を傾げる。

「僕と勝負だ！
もし僕に負けたら、二度とここに来るなよ！！」

「ちょっと東宮君！？」

東宮と呼ばれた男子は駿に向かって竹刀を突き出して睨みをきかせる。

「……二度とも何も、俺はただの見学でだな」

「問答無用だ！！
野々原！！野々原ー！！」

駿の言い分を聞かず、東宮が指をパチンと鳴らすと武道場の天井から突然何かが降りてきた。

「野々原？」

「ウチの執事さ！
お前の相手は……

この戦闘執事（コンバットバトラー）、野々原楓がする！！」

東宮が右側にスッと移動すると、後ろから白い執事服に身を包んだ男が前に出てきた。
細目で人の良さそうな顔立ち、白く長めの綺麗な髪をしている。

「あ、という事でどうも。
東宮の家で執事などをやっている野々原楓でございます」

「あ、これは御丁寧に。
鷺ノ宮駿です」

野々原は右手を身体の前に出して丁寧にお辞儀をした。
駿も慌てて軽く会釈を返す。

「そうですか、これはこれは。
貴方が鷺ノ宮家のあの……
御噂はかねがね……」

野々原は興味深そうに駿に顔を向けると頷いてみせた。

「噂って……
何かしら？」

「さぁ？
どうせ馬鹿でシスコンとかそんなんじゃないか？」

既にヒナギク、ナギ、翼の三人は武道場の端駿達の成り行きを見ていた。

「どうしてそんな噂が執事さん達の間で話題になるのよ…」

「だって実際あの馬鹿について思い当たる事なんて無いしな……
ああ、後変態とか」

まったく酷い言われ様である。
翼もそんな二人の会話を聞きながら苦笑混じりに壁に寄っ掛かっていた。

「オイ、そこの鷹ノ瀬」

「何だ？三千院のお嬢」

ナギは野々原と向き合っている駿を見ていたが、不意に翼に声をかける。

「あのまま馬鹿を戦わせて良いのか？
アイツ運動とか苦手だし、お前ならまだしも、アイツがあの執事に太刀打ち出来るとも思えんが……」

「まぁ、あれで駿は結構な強運を持ってたりするからなぁ。
案外何とかなるんじゃねーか？」

「「何とかって……」」

そう言う翼ではあるが、彼は明らかに今の状況を楽しんでいるように見える。
まるで最初から勝敗の行方など分かりきっているかのように……

一方の東宮は竹刀を駿に向けて声を張り上げる。

「さぁ野々原!!
アイツだ!!今スグあいつをやっつけてくれ!!」

「かしこまりました。
……が、その前に」

ドガッ!!!!

「「「……」」」

野々原は思いきり東宮の顔面に向かって回し蹴りを喰らわした。

その様子に色んな意味で唖然とするヒナギク達。

「野……!!野々原!!
お前、何を…!!」

「お坊っちゃま?
私、教えませんでしたっけ?」

いきなり蹴り飛ばされた東宮は膝をついたまま顔を上げて訴えるが、
野々原は両手を後ろに組んだまま近づいていく。

「男なら……
敵わぬ敵にもひとまず当たれと…」

彼は後ろから凄まじいオーラを出しながら笑顔（多分元からそんな顔なので判別は出来ないが）でゆっくりと。

「それなのに、戦わずして人に頼り自分は何もしないなど……そんな軟弱な男に……」

「ひい！？」

「育てた覚えはないぞゴルァァ！！」

「ギャーーーーー！！！」

野々原の怒号、東宮の叫び声と同時に武道場の一角でそれはそれは凄まじい教育が始まった。

まるで漫画のように煙が巻き起こり、中からは時折東宮の手が助けを乞うように突き出されるがすぐに沈められる。

「「「……」」」

武道場にいる他の部員達もかなりの同情の視線を向けて、執事と主のやり取りを暫く眺めていた。

・・・・・

「……」

「……大丈夫？東宮君」

数十分後、東宮はボロボロになって武道場の端、ヒナギク達の隣でのびている。
それはさておき、武道場の中央では野々原が竹刀を駿に向けて向かい合っていた。

「さて、お坊っちゃまへのお仕置きも済みましたし……
始めましょうか」

「いや、ちょっと待ってくれ！！」

しかし、駿は慌てて野々原の前で手を振ってストップをかける。

「？」

「何か話がおかしな方向に進んでるけど、俺はアンタと闘う理由は無いから」

駿は一二歩下がって闘う気満々の相手を落ち着かせるように話す。

「フッフッフ……
さては野々原のオーラに恐れをなしたな！！
所詮鷺ノ宮の家名は名ばかりということか！！」

「いやだから、恐れる恐れないの問題じゃ……」

いつの間に復活したのか、東宮が端から駿に向かって叫んだ。
駿は困ったように彼の方向に目を向ける。

「「……」」

ある意味打たれ強い彼の様子に思わず呆れるヒナギクと翼。
しかしナギの反応は違った。

「オイ馬鹿！！
ここまで言われて引き下がるのか！！」

「は？」

「お前はいくら馬鹿にされても構わんが伊澄もいる鷺ノ宮を馬鹿にされるのは許せないのだ！！
この勝負に勝って見せつけてやれ！！」

ナギは駿を指差して叫んだ。
彼女の言葉はかなり失礼ではあるが、確かにその気持ちは大いに理解できる。
やはり親友を馬鹿にされたのと同じような気になるのだろう。

「……確かに、
ここまで言われて勝負を放棄したらとんだ負け犬だな」

「……」

駿はナギの言葉を聞いて頷くと、視線の野々原に移す。

「少々荒っぽいかも分からねぇが……見せてやるよ。
鷺ノ宮の本気を……！！」

「ーっ！！」

ギラリと鋭く光る彼の瞳に、野々原は勿論、周りの部員達も一瞬驚いたように息を呑んでその光景を見守る。

「……つー訳だ。
行ってこい、翼」

「「待たんかいィィィィィ！！！」」

が、その緊張感に包まれた雰囲気は駿の一言で台無しになった。
見事にハモった翼とナギのツッコミが武道場に響き渡る。

「オイ！！
何なのだそれは！！」

「何が行ってこいだお前！！」

思わず駿に詰め寄る二人だが、彼は何ら不思議はないように口を開く。

「だから、翼が俺の代わりに闘うって事だよ。
あ、野々原さん。そういう訳なんで、お願いしまーす」

「お願いしますじゃねーよ！！」

「何でそういう流れになるのだ！！おかしいではないか！！」

全然納得していない二人を見て、駿はあからさまに面倒くさそうに

溜め息をついた。

「おかしいのはそもそもこの流れだ。どうして入部するつもりの無い俺が闘う事になってんだって話な訳よ。だったら入部するつもりの翼が闘うのが話の筋だろ？」

「いや、でもさっき鷺ノ宮の本気をみせるとかどうとか……」

「だから、この状況をいかに自然且つ納得出来るかを今の数秒で考えたんだ。
これぞ鷺ノ宮の本気よ」

そう笑顔で言いきった彼に、最早誰も突っ込もうとはしなかった。
あの東宮さえ開いた口が塞がらないといった表情である。

「さぁさぁ、邪魔者はさっさと脇に行こうな。
んじゃ、後は頼んだ」

「……はぁ」

駿は翼の肩をポンポンと叩くと、ナギの背中を押すように中央から離れるように歩き出した。
翼はやれやれと諦めたように首を振った。

○

改めて、武道場の中央では翼と野々原が向かい合っていた。
その様子を道場の端で部員達同様に眺める駿達。

「ねぇ、翼君って前の学校でも剣道をやってたのよね」

「ああ、そうだよ。
アイツの家は昔からの名門武家らしいからな。
幼少からずっと剣道をたしなんでたんだと」

「へぇ……」

ヒナギクは翼を見ながら少し意外そうに頷いた。

「でも駿君も剣道部だったんでしょ？」

「俺はアレだ……
幽霊部員だから。ナギと同じで」

「お前と一緒にするな！！」

ナギは心外だと言うように両手を振り回して抗議する。
似たようなものだとは思うが…

端で三人がそんなやり取りをしてる中、いよいよ翼と野々原の勝負が始まろうとしていた。

「何だか当初の目的から大分ズレているような気はしますが……
一手ご享受お願いします」

「鷹ノ瀬君の武勇も色々と聞いていますよ。
こちらこそよろしくお願いします」

二人は防具は一切着けず、竹刀を構えると二三歩下がって向かい合った。

「っ！！」

「！！」

互いに目が合った瞬間、二人は同時に床を蹴って竹刀がぶつかり合う。

暫くつばぜり合いを続けた後、互いに距離をとる。

かと思うと再び竹刀を交えていく。お互い凄まじい速度で周りの部員は目で追うことが出来ない者も多い。

「へぇ……

あの鷹ノ瀬とかいう男、やるじゃないか。

ウチの野々原とやり合うなんて。野々原は最高クラスの執事なんだぞ」

「最高クラスだぁ？

翼なんて幼少から剣をたしなんで軽く段位も持ってるんだぜ。

それに他の運動もずば抜けてんだからな」

「何だとぉ！！

野々原なんてな……」

「お前ら恥ずかしくないのか…」

二人の試合を観戦しながらくだらない張り合いを始めた駿と東宮に

向かってナギは心底呆れたように突っ込む。

「っ……！！
中々やりますね！！」

「そっちこそ！！」

一方、中央の二人の闘いはかなりの均衡状態になっていた。
野々原が攻めれば翼はそれを上手く利用して反撃に転じる。
しかしまたそれを利用され反撃される。その繰り返しである。

「仕方ありません……
少々荒っぽくはありますが…！！」

「！？」

一旦距離をとった野々原は、そう言って身体の周りから炎のような赤いオーラを出し始める。

刹那……！！

「超爆裂炎冥斬（セーフティーシャッター）！！！」

「ぐはっ！！」

全身が巨大な炎に包まれた野々原が翼に向かって物凄いスピードで突っ込んできた。
彼は辛うじて身体を捻って回避を試みるが炎に巻き込まれて吹き飛ばされてしまう。

「……あの、東宮君？」

「何だアレ……」

突如起こった出来事にヒナギクと駿は唖然とした様子で東宮に顔を向ける。

「何って……

野々原の超必殺技に決まっているじゃありませんか、桂さん。

一流の執事なら必殺技の一つや二つ、持っていて当然。

いや、持っていなくてどうしますか！！」

（（執事って……））

東宮の熱の入った言葉に二人はこの世界における執事の存在について改めて疑問を感じた。

因みにナギに至ってはもう突っ込む気も無いようだった。

「流石鷹ノ瀬君……

私の必殺技を初見でかわすとは……噂に違わぬ実力の持ち主のようですね」

「お誉めあずかり光栄だがな……どうやらそんな状況じゃあないらしい……」

翼は超爆裂炎冥斬は避けたが、その後連続で野々原に攻められて、遂に道場の壁際まで追い込まれてしまっていた。

「ですがこれで最後です！！
次の一撃で終わりにしますよ！！」

「……っ！！」

その状況に一同は息を呑んだが、駿だけは冷静……というより何かを分かっているように翼を眺めている。

「超爆裂炎冥斬！！！」

「翼君！！」
「勝ったか！？」

壁際に向かって巨大な炎が叩き込まれた。
ヒナギクと東宮はそれぞれ状況が分からず叫ぶが……

竹刀の突き刺さる壁際の煙の中から現れたのは……

「いやよく見るのだ！！」

「「！？」」

ナギがいち早く指差す方は本来なら翼がいるべき場所。
しかしそこに翼の姿は無く、代わりにカーディガンが野々原の竹刀にかかっていた。

「いない！？まさか…！！」

野々原は何かに気付いたように慌てて振り返えろうとするが、

「!?」

「面ーーーー!!!」

スパァァァァン!!!

舜速で背後に回っていた翼が、竹刀を振り下ろした!!

＊

「ふふ……
負けましたよ。わざと私を壁際に誘い込んで隙を作ってそこを打ち込む。流石鷹ノ瀬家のご長男ですね」

「いえ、そんな……
ちょっと不意をついただけです。それに、野々原さんは大分手加減をしていたでしょう」

武道場の外にはのびている東宮を抱えた野々原と翼や駿達の姿があった。

「それはお互い様ですよ。
今度はお互い本気で手合わせしてみたいものです。

勿論、鷺ノ宮君とも」

「へ？俺？」

「ええ。楽しみにしてますよ。
では、我々はこれで……」

何故東宮が再びのびているかというと、あの闘いの後彼が女々しく負け惜しみを言ったのでそれに怒った野々原が教育をしたのだ。
野々原は一礼すると、東宮を持って去っていった。

「フッ……他愛ないな」

「「お前は何もしてないだろ」」
そんな姿を見送りながら腕を組んで微笑する駿にナギと翼が叩いてツッコミを入れる。

「なんだかごめんなさいね。
変な事になっちゃって」

「いいよ。楽しかったし。
気にするな」

ヒナギクは申し訳なさそうに謝るが翼は笑って答えた。

「じゃあ、翼君は入部する事で良いのね」

「おー、これからよろしく頼むわ」

ヒナギクは今度は駿とナギに顔を向ける。

「で？駿君はどうするの？
それからナギは少しは剣道する気になった？」

「……まぁ確かに、中々白熱した闘いではあった……」

「翼もカッコ良かったけどな…」

駿とナギは互いに顔を見合わせると、ちょっと間を置いてヒナギクに視線を戻す。

「「でも剣道部に行く気は無いな。だって剣道の面て凄く汗臭いし」」

ピキッ！！

キッパリとそんな発言をする二人にヒナギクを始め、剣道の部員に怒りマークが浮かび上がる。

「つーか前から思ってたんだが、よくこんなもん被って運動する気になるよな～」

「ああ、私も思った。
それに剣道漫画って面が邪魔でキャラの表情や区別が分からんし…
…」

スパーン！！

「剣道を馬鹿にするなーーっ！！」

「痛っ！？ちょっ待て！？
何すんだヒナギク！！」

「わー！！何をするのだー！！」

この後、二人は剣道の良さ、素晴らしさの色々を一時間正座で聞かされるはめになった。
ナギのスポーツへの目覚めも、
駿のシリアスへの目覚めも、まだまだ遠いのであった……

其の十九　それが僕らの青春だったり無かったり（後書き）

三人娘の
～生徒会通信！！～

キャラクタープロフィール

鷹ノ瀬　翼
＞ｉ３２１４８―２１５９＜
【年齢】
１６歳

【誕生日】
８月２２日

【血液型】
Ｂ型

【家族構成】
次回をお楽しみに！

【身長】
１７８ｃｍ

【体重】
６８ｋｇ

【好き・得意】
剣道、剣、駿、運動、料理、
祭事、家事全般、家族、生徒会

【嫌い・苦手】
うじうじした奴・態度、言い訳　昔の思い出

【備考】
駿の数少ない男友達で親友。
運動神経抜群、頭脳明晰、容姿端麗と完璧超人の生徒会副会長。
性格は明るく快活。曲がった事やひねくれた事が苦手で常に物事には真っ直ぐ取り組む。

駿とは中学生の頃、とある事がきっかけで知り合った。
その時の詳細はいずれ本編で書く予定。

また鷺ノ宮家にはやや劣るが、妖怪退治を生業としている名門鷹ノ瀬家の長男であり、駿同様に仕事をしている。近いウチに共闘させると思う。

家事全般はそつなくこなせる意外な一面を持ち、料理はプロ級の腕前を持つ。
駿は『妖怪退治なんて止めて料理屋を開いた方が良い』と何度もいうほど。

彼はこの先、駿や他のキャラ達と色々支え合いながら活躍する予定です。

美希
「はい。今回大活躍だった翼君のプロフィールでした～」

理沙
「もうどちらが主人公か分からないな」

泉
「駿は活躍しなさ過ぎだよ～」

駿
「作者のせいだろうがァァァァアアア！！」

三人
「わ～♪
駿君が怒った～！！」

次回もよろしくお願いします♪

其の二十　お前ン家～鷹ノ瀬家の人々～（前書き）

伽藍
「今回は翼君の家と、作者がかなり出したかったキャラがちょっと登場します！」

駿
「んじゃ、始まります！」

注）前回の話も訂正しましたが、駿が翼の家に行くのは三ヶ月ぶりということにしました。
ご了承下さい

其の二十　お前ン家～鷹ノ瀬家の人々～

前回までのあらすじ！！

駿と翼は剣道部に行って何やかんやでバトルが始まり、何やかんやで翼が入部し、何やかんやで駿は翼の家に行く事になったのであった！！

其の二十　お前ン家～鷹ノ瀬家の人々～

日も徐々に西に沈み始め、
住宅街や道路が鮮やかな橙色に染め上げられている夕暮れ……

「すっかり日が落ちてきたな」

「今日ほとんど何もしてない気がする……」

そんな通学路を歩いているのは帰宅中の駿と翼であった。

「ってかまだ足が痺れてる……
アイツに二時間も正座させられたからな……」

「アレはお前が悪い。
人には触れてはいけない部分があるんだ」

アレとは前回、駿とナギが剣道についての一言がヒナギクを怒らせた事である。
そのため、二人はヒナギクにかれこれ１１０分説教を受ける羽目になってしまったのだ。

「しかしオメーもよくやるな……メチャクチャな執事とあんな闘いを繰り広げた挙句、あんだけ稽古しつもまだピンピンしてんだから……」

「あのくらいでバテてたら……
実戦の時いつ死んでもおかしくねーだろ」

実戦……
それは二人の間では“妖怪退治”という意味で共通の理解とされている言葉である。
翼はやや大袈裟に肩を竦めると、鞄を肩に担ぎ直して歩を速めた。

ワイシャツは三つ上のボタンまで開けられ、その上から適度に着崩したベージュのカーディガンを羽織って歩いている彼の姿は、何とも部活帰りの学生らしい。
一方の駿は第一ボタンのみを開けたワイシャツに紺のカーディガンを着こんでいた。

因みに手袋とマフラーもしっかりと身につけいる。
その為か、隣の翼の姿もあってどことなく弱々しい。

「しかし寒いな……
もう１２月か……」

「そうなに寒いかぁ？
このくらいの方が涼しくて良いけどな」

「俺の体はオメーと違って繊細なんだよ。
あ～、寒っ！！」

カラッと笑って伸びをする翼の隣で駿は寒そうに身体を震わせると手袋に白い息を吐いた。

「そういやもうすぐ期末テストだけど……
勉強の方は大丈夫か？」

「え？そうなのか？
もうすぐぐっていつ？」

「お前……
ホント相変わらずだな……
１２月１８～２２日だよ。ってかもう一週間も無いぞ」

「あ～……
ま、成るようになんだろ。
テキトーにやるさ」

駿は面倒くさそうに目を細めると歩く歩調を少し速める。

翼はやれやれと肩を竦めると駿に合わせるように続いた。

二人が暫く歩いていくと、左前方に中々大きな屋敷が見えてきた。
低く横に広い純日本風の武家屋敷の建物であった。
遠目からでも分かる大きさではあるが、鷺ノ宮屋敷よりは随分と小さい。

「よく考えりゃ、オメーの家は白皇からもそんなに遠く無かったんだな」

「だから編入して来れたんだけどな。流石に引っ越す訳にはいかないし」

そのまま真っ直ぐ進んで行くと大きな十字路が目の前に広がってきた。ここを左に曲がれば目的地である鷹ノ瀬家はすぐである。

「たった3ヶ月だとは思ったけど、こうして歩いてみるとやっぱ久しぶりだな」

「そうだろ？
おっ、もう到着……」

ドカッ！！

二人が十字路を曲がって屋敷への直線の道に入った時……
前方から何かを蹴ったような音が大きく響いてきた。

「「ぐえっ！！」」

「いい加減にしなさい！！
アナタ達それでも男！？」

屋敷の門と思われる前には金髪の二人の高校生くらいの男子が重なるように倒されていて、それを見下ろして叫ぶのは女性だった。

長く美しい白い髪に綺麗な藍色の二重の瞳。
そして整った容姿。
水色の柄がある半袖の上から白いワンピースを着ていて、下はデニムの青いスカート。

総じて言うとかなり美人である。そんな女性が二人の金髪男子を睨みつけているのである。
駿達が目的地とする屋敷の門の前で。

「この……！！
やりやがったな！！」

「それはこっちのセリフよ。
高校生にもなって弱い者イジメなんて、恥を知りなさい」

金髪の二人組はヨロヨロと立ち上げると負けじと女性を睨み返すが、女性は構わずに叱責する。

「んだと……！！」

「女の癖に……」

一人が女性の言葉に噛みついて、もう一人が恨めしそうに唸ると自分の懐を手で漁った。

「俺達に逆らったどうなるか教えてやる！！」

金髪の一人が取り出したのはなんとナイフであった。

男子はそれを女性に向けるが…

「まったく……

自分の非を認めようと出来ないのねアナタ達は」

女性は一切怯まず、それどころか呆れたように溜め息をついた。

「黙れ！！女の癖に！！」

「その女に簡単にやられてた坊や達は誰だったかしら？」

「この……！！」

挑発するような言葉に金髪の一人は怒りが頂点に達したのか、おもむろにナイフを振り上げて女性に飛びかかろうとした。

ガシッ……！！

「！？」

が、その振り上げられた手は女性に届くことは無く、後ろから出てきた手に真上で止められていた。男子が慌てて振り返ると……

「オイ……
んな物騒なモン振り回してんじゃねーよ」

「な！？」

その腕を止めていたのは駿であった。徐々に力が込める彼の手が男子の腕にメキメキと嫌な音を立ててめり込んでゆく……

「うぐっ……！！」

男子はあまりの痛みに思わず手の力を無くし、ナイフは金属音と共に地面に転がった。

「テメー！！
なに……、！？」

隣にいたもう一人の金髪が駿に叫んで飛びかかろうとするが、その男子の肩にはもう一つ、後ろから伸びてきた手が置かれる。

「！？」

それは翼だった。
彼もまた手に力を込め、男子の肩にめり込ませてゆく。

「ちょっと良いか？」

声は至って普通だったが、その目は一切の予断を許さぬほど鋭いものだった。

「「ひぃ！！」」

その視線と力の為か、
男子二人は情けない声を上げたかと思うと、一方は駿の手を何とか振り払い、もう一方は翼から何とか抜け出して後ろに向かって思いきり走り出した。

「「覚えてろ！！！」」

「……」

金髪達はひいひい言いながら一目散にその場から去ってしまい、その場に残されたのは駿、翼そして女性の三人になった。

「今時あんなセリフ言う奴等いるとは……」

二人が去った後を心底呆れたように眺める駿。
その隣で翼はすぐに女性に目を向ける。

「姉さん、大丈夫か？」

「ええ、大丈夫よ。この通り、元気は有り余ってるわ」

女性はニッコリと翼に向かって微笑む。
そう。なんとこの女性、翼のお姉さんだというのだ。

「有り余ってるじゃないよ……
姉さん、いつも言ってるだろ。
あんまり無理はしないでくれと」

「あら、別に無理なんてしてるつもりは無いけど……」

「はぁ……」

そう言って悪戯っぽく微笑む女性に翼は困ったように思わず手を額にやる。

「駿君！
久しぶりね、元気にしてた？」

「えっ、ええ……
お陰様で。久しぶりと言っても3ヶ月ですよ」

弥生と呼ばれた女性は駿の方に顔を向けると、彼に寄っていって手を握ると挨拶する。
駿はちょっと驚いたように、だが嬉しそうに返した。

「姉さん……
誤魔化さないでくれ。今度はなんだってこんな事を？」

「仕方ないでしょ。
だってあの二人が中学生くらいの小さな男の子からお金取り上げていたんだもの……」

話によると、彼女が家に帰ってきた時二人の金髪が男の子をかつあげしていたらしい。
見かねた彼女は、金髪達から少年を助けたそうだ。
それで最初は金髪二人を諭そうとしたのだが、あまりに口が悪く反抗的だったので平手ではっ倒したそうだ。

「……姉さん。
気持ちは分かるけど、やっぱり危ないよ。女の子なんだから」

「む～……
そうは言っても……」

「気をつけてよ。
姉さんそういう事になると性格変わるんだから」

翼は心配そうに弥生に声をかけるが、彼女は頷くのを渋るように口をつぐんでいる。

「そうだ、駿君がこの時間に来たって事は晩御飯食べていくのよね？」

「え？あ、ご迷惑でなければ……」

駿はいきなり話を振られたので慌てて返事をする。

「ううん、大丈夫よ。
だったら今から翼と作るから。
さぁ、中に入って！」

「また、そうやって誤魔化して逃げるんだから……」

屋敷の門に向かっていく弥生に翼は呆れたように呟く。

「あ、そういえば……
助けてくれてありがとね、

二人とも♪」

弥生はそう言って二人にウィンクしてみせると、門をくぐって中に入っていってしまった。

「相変わらずだな、弥生さんは」

「……ホントにな。
しかも悪事に対すると性格が激変するからさ。
なおのこと困ってるんだよな」

二人は門の前で顔を見合わせる。駿の言葉に翼は苦笑混じり溜め息を吐いた。

「ま、そこが姉さんの良い所でもあるんだけどな」

「ん、だろうな」

二人は頷き合うと、門をくぐるために足を踏み入れた。

＊

鷹ノ瀬家は前述した通り鷺ノ宮家と同じように武家屋敷のような作りである。

しかし、鷺ノ宮家はとんでもないお金持ちで、屋敷も半端ではなく広いのに対し、鷹ノ瀬家はそこまで広くないというか、むしろ小さいくらいだ。無論財力のある家柄にしてはという意味ではあるが。

それは鷹ノ瀬家自身の要望であり、したがってこの屋敷には執事なるモノも一切いないのである。

ガラ……

「ただいま～」

「お邪魔します……」

屋敷の玄関から戸を開けて、翼と駿は家の中に入ってきた。

「駿ーーーーーっ！！！」

「ぬおぅ！？」

すると突然、駿に向かって何かが凄いスピードで突っ込んできた。成す術無く、彼は腹部に突っ込まれてひっくり返ってしまう。

「弥生の言う通りじゃ！！
駿、久しぶりじゃの！！」

「……うぅ…
お久しぶりです、飛鳥さん……」

倒れている駿の上でピョンピョン跳ねている見た目１２歳くらいの女の子。１２歳くらいの割にはスタイルが良く容姿はかなりの美少女である。
綺麗な白い髪の所々赤い髪がラインを引くように混じっている。

「ただいま。
騒ぎ過ぎだよ、ばあちゃん。
もう少しで夜なんだから静かにしないと。取り敢えず駿から降りて」

「う～！！
だってせっかく駿が来たのに～」

少女は翼の言葉に渋々駿から降りて横に立つ。
それでようやく駿も起き上がる事が出来た。

「っていうか駿！！
三ヶ月も顔を見せんで何をしておった！！
遊び相手が翼だけで寂しかったではないか！！」

「いや、ちょっと色々ありまして……すみません」

かと思うと急に怒り出した少女。駿は慌てて何かを誤魔化すように彼女に謝る。

「ばあちゃん、無理言わないの。それに大丈夫だよ。コイツはこうしてまた来てくれるんだから」

「む～……
まぁなら良しとするかの……」

腑に落ちない表情の少女に翼は屈んで目線を合わせる。

「今日は駿も一緒に晩御飯を食べるから。ばあちゃんも用意手伝ってきて、俺もすぐ行くから」

「本当か！！
分かった！！行ってくる！！」

少女は嬉しそうに頷くと、玄関から奥に走っていこうとする。

「……あ、そうじゃ駿。
銀華は元気にしてるかえ？」

「ええ。元気過ぎて困るくらいですよ」

「そうか！
せっかくだし今度会いに行って来るかの」

そう言って今度こそ元気良く奥に駆けていってしまった。

「相変わらず元気だな～
飛鳥さん、もう１００歳過ぎてるっていうのに……」

「元気過ぎだよ。
心配だからもう少し大人しくして欲しいくらいなんだけど」

そうなのである。
実はあの少女、１００歳を超えてるという翼の曾祖母なのだ。
翼は飛鳥の走っていった後を眺めて肩を竦める。

「でも、銀華さんと言い、飛鳥ばあちゃんと言い……
何であんな容姿なんだろう…」

「気にしたら負けだろ。
世の中不思議な事だらけなんだから」

「……そうだな。
ま、いっか。上がれよ。
今から飯作るから」

「あ、俺も用意手伝うよ」

翼に続いて、駿も鷹ノ瀬家の屋敷に入っていった。

＊

カキン！！カキン！！

純和風の屋敷には意外なリビングルームで響き渡る金属音。
テーブルにはコップやお皿が並べてあった。

「ふん！
やるの駿……我が連撃を防ぐとはな！！」

「甘いですよ飛鳥さん！
そんな攻撃が俺に当たると思ってるんですか」

そんなリビングに、フォークを構えた飛鳥と皿を構えた駿の姿があった。先程の金属音はどうやら投げられたフォークを皿で防いだ音だったようだ。

「言うようになったの。
では私の奥義をみせてやるぞ！！」

「そんなモノ、俺の華麗な必殺技で返り討ちにしてやりますよ！！」

二人はフォークや皿をそれぞれ構えて睨み合うと、一歩をｄ

バコッ！！

「用意をしろ！！
何遊んでんだ二人とも！！」

二人の頭の上には翼の拳が容赦なく振り下ろされた。

「痛ててて……」

「……」

駿は頭を擦りながら翼を見上げるが、飛鳥はうるうると目に涙を溜めると……

「うわァァァん！！
翼が殴ったァァァァ！！」
飛鳥はそう叫んで奥で調理している弥生の所に走っていってしまった。

「まったく……
お前も乗るな。
ほら、飯出来たから先に座ってろ」

「いや、皿運ぶよ」

こうして、着々と晩御飯の準備は進んでいき……
弥生が調理場から出てきた（飛鳥が彼女に抱きついていたが）時には、テーブルには様々な料理が並ぶ形となった。

○

「美味い！！
やっぱり弥生さんの料理は本当に美味しいですね！
勿論翼のも」

「あら、ありがとう。
腕をかけた甲斐があるわ」

「何か付け足しみたいな言い方だな……」

それで四人はテーブルを囲む。

ダイニングテーブルには翼、隣に弥生。その向かい側に飛鳥、その隣に駿が座っていた。

「そういえば……
親父さん達は帰ってないのか？」

「ああ。
何でも仕事が忙しいらしくてな。当分日本には帰って来れないらしい」

「そっか。
大変なんだな相変わらず」

翼の両親は現在日本にはいないらしい。彼の両親の話はまた追々話す事にするとして……

「だったらこの屋敷にはたった三人なのか」

「そうだな。まぁ広すぎる気はするかもな」

翼はリビングを見回して二三回首を縦に振った。

「私はもっと狭くて良いんだけどね……元々広いからこの屋敷は」

「何を言っておる！！
狭くしたら目一杯走り回れないじゃろうが」

「フフ……その歳でそんな事言えるのはおばあ様と銀華さんくらいですね」

両手をパタパタと振って抗議する飛鳥を見て、弥生はおかしそうに笑う。

「いや、でも銀華ばあちゃんは本当に笑えないくらい元気ですから。元気な上に孫に容赦無さすぎですからね。何度死にかけた事か……」

「ハッハッハ！！銀華は厳しいからな。どうじゃ駿？この際私の孫にならんかえ？」

飛鳥は愉快そうに駿の頭をポンポンと叩いてそうな事を言う。

「そうなると……駿は私の弟君になるわねあ、勿論“お姉ちゃん”って呼でね」

「俺の兄ってのは何か嫌だから弟にしてくれよ。俺は“兄上”でな。一生こきつかってやるぞ弟」

「どこの改造計画！？何着々と進めてるんですか！！」

そんな冗談を肴に、鷹ノ瀬家の晩御飯は団欒に包まれていた。

ここまでは駿にとっても平和な一時であった。食事の後に弥生が“あんな事”を言い出さなければ……

「そうだ！
さっき弟って言ったけど……
もしかしたら妹の方が良いかもしれないわね」

「はい？」

弥生のそんな一言に駿の平和は音をたてて崩壊する。

「だから……」

弥生はそう言うと、一体何処から持ってきたのかクローゼットを駿の目の前に引っ張り出してきた。

「“男の娘”でも良いんじゃないって事よ」

「……」

彼女はクローゼットの中から女性用の服を取り出してそう言った。
当然、駿は顔を一瞬ひきつらせると、スクッと立ち上がる。

「あー、もうこんな時間ですか。あんまり長居も申し訳ないのでこれにて失礼しますね。
晩御飯ごちそうさまでした」

彼はそのままリビングを抜けて玄関に向かおうと……

ガシッ…！！

「まぁ待たれ」

「……！！」

そんな彼を掴んだのは飛鳥であった。彼女はその身なりからは想像出来ないほどの力で駿を引きずり戻してゆく。

「中々名案だと思うぞ。
私は別に孫娘でも構わんぞ？」

「そうですよね、おばあ様」

ついで弥生も駿を掴むものだから彼は完全に逃げ場を失った。

「ちょっ！？
あの……マジですか？」

「前から思ってたんだけど、絶対駿君は女装似合うと思うわ。
だから……ね？」

（ね？じゃなくて……！！）

弥生はニッコリと微笑むがその言動に駿は色んな意味で恐怖する。

「いやでも……！！」

「ええい焦れったい！！
男ならウジウジするな！！」

「ちょっと弥生さん！？性格が変わってますよ！？

っおわ！！」

あくまで逃げようする駿に弥生は彼を簡単に放って部屋の角に追い詰めた。

「いやいやいや！？
おかしいですよ！！こんな事になんの意味が…」

「情けないのぅ。男なら四の五の言わずに腹をくくって女装をせんか！！」

「そこからもう間違ってるんですよ！！
あ、ちょっとま……！！
待っ…！！」

しかし迫り来る二人を前に駿はもうどうする事も叶わない。
出来る事があるとすれば……

「翼君！！
助けろ……俺達友達だろ？」

「……ま、頑張れ」

ニヤリッと一言。

「翼ァァァァ！！
テメー後で覚えてろよォ！！」

そんな叫びも虚しく木霊するだけだった……

15分後……

二人の前には水色のワンピースに黒いチェックのスカートを着たかなり可愛い女の子が座っていた。もう一度言い直そう。かなりの美少女がいた。

「凄いわね……」

「ま、まさかこれほどとはの」

っていうか駿だった。
駿は若干涙目で二人を見上げている。

「元が良いから似合うとは思ってたけれど……ここまで似合ってるなんて」

「これは予想外じゃの……
というか駿、そんな目で私達をみるな……」

二人は彼……いや、彼女の視線に若干の罪悪感に苛まれながらも……

「まだこっちにも可愛い服が沢山あるわ!!」

「いや、ここは和服で!!」

「イヤァァァァ!!」

二人によって次々に衣装が出され、更に女装させられる羽目になる

のであった。

「アッハッハッハッハ！！！」

因みに、翼は隣で腹を抱えて思いきり爆笑していた。

この出来事は後に、男の娘“シュンちゃん”を生むきっかけになったという……

「なるかァァァァアアア！！！」

＊

「ううー……

何か大事な尊厳を失った気がする……」

翼達に別れを告げて、鷹ノ瀬家を後にした駿は一人夜の住宅街を歩いていた。

弥生と飛鳥の行動が更にヒートアップする前に、いい加減に翼がそれを止めさせたのだ。

とは言うものの彼も大爆笑していたのだが……

「……何故か風がいつもより身にしみるな……

何でだろ……」

そんな感じで暫く感傷に浸りながら駿が歩いていると、ちょうど目の前の十字路で横から人が出てきた。

「わっ！！」

「きゃっ！！」

当然駿とその人はぶつかってしまう。相手の声から察するに女の子の声だと駿はすぐに分かった。

「あ、すみません！！
ぼーっとしてて、大丈夫ですか？」

彼はすぐに倒れている女の子に声をかけて手を差しのべた。

「いえ、私の方こそ余所見をしていて……ごめんなさい」

女の子は差しのべられた手に掴まると、ゆっくりと立ち上がった。

「あの、お怪我はありま……」

そして彼女は相手を気遣おうと顔を上げて駿を見た瞬間、言葉を止めて固まった。

シックな上からスカートまで黒いワンピースに黒いをロングコートを着ているその美少女は、
美しい黄色い髪を長く垂らして、右側に伸びた髪を赤いリボンで結っている。
目は二重で大きく、綺麗なエメラルド色の瞳が駿を捉えて離そうとしなかった。

「……しゅ…ん…？」

「え？」

彼女は僅かに震えるような声で、確かに駿の名前を呼んだ。
かと思ったら……

「なぁ！？」

いきなり彼女は駿に抱きついてきたのだ。

「え？え？ええ！？」

「良かった……
本当に……本当に…」

駿は突然の出来事に訳が分からず意味も無く首を左右に振って周りを見るが人目はほとんど無い。
一方の少女は彼に抱きついたまま掠れるようなか細い声でそう呟いた。

「ちょっ……！！
ちょっと待って！！」

「……」

駿は何とか彼女を自分から引き離すと、目の前の少女の目は涙で潤んでいた。

「えっと、えっと……
何が何だか分からないんだけど
君は俺の事を知ってるのか？」

「……！！」

少女はその言葉を聞くと何処か悲しそうに、だが予想通りというような複雑な表情で駿を見つめた。が、それも一瞬の事……

「あ、ごめんなさい！！
人違いでした！！私ったらとんだご迷惑を…」

「え？人違い？」

「すみません！！
友達によく似ていたもので…
本当にごめんなさい！！」

少女は一転して表情を戻すと、今度は頭を下げて謝ってきた。

「い、いや……
間違いなら良いんだ。
ちょっとビックリしたけど……」

「ごめんなさい！！
失礼します！」

駿がそう言うと、彼女は急いでその場から去っていってしまった。
彼はその様子を間違って恥ずかしかったのだろうと解釈して、納得する事にした。

（……でもあの人、確かに“しゅん”って言ったよな……
歳も俺と同じくらいだったし……ま、いっか）

腑に落ちない所はあるが、いきなり美少女に抱きつかれたラッキーなイベントとくらいに思って、駿は再び帰り道を歩き始めたのだった……

ーーー

暗い路地……
人気の全くない薄気味悪い狭い路に、先程駿に抱きついた少女が立っていた。
彼女の片手には携帯電話があり、誰かと会話しているようだ。

『本当か！？
見間違いの可能性は？』

「無いわ。
私達が彼を見間違う筈無いもの。記憶はやはり失っているようだったけど、あれは間違いない」

携帯から聞こえてくる男の声に、彼女は淡々と応える。

『だが、相当経っているんだ。
髪や容姿が変わっていることだって……』

「私も驚いたけど……
本当にそのままだったわ。
今彼が生きているとすれば私達と同じ１６歳……
さっきの彼は、私達が知ってる１６歳の彼そのものだった……
髪も、瞳も、声も……あの温かさも……」

少女は胸に手を置くと目を閉じてそう言った。

『そうか……
遂に見つけたんだな。
だが俺達は今この国から離れられない。三つ目の鍵がここで見つかりそうだからな』

「そう……
でもまだ三つなのね…
十年かけて三つ……」

『諦めるな。
残りの鍵も必ず見つかる。扉も必ず見つける』

携帯から聞こえてくる男の声は力強く、確信をもったものだった。

『だからお前は奴の傍にいてやるんだ。記憶が戻るものなのか戻らないものは分からないが……
全ての準備が揃った時、アイツが俺達の元に来れるように、お前がついていろ』

「ええ……分かった」

『アイツが命をかけて守ろうとしたモノを俺達は絶対に守り通さなくてはならない。
……頼んだぞ、楓』

そこで携帯電話の通話は切れた。彼女は携帯を閉じると、黙って夜空を見上げる。
空には幾つか星があるものの、他は東京のネオンでかき消され、かなり明るく闇夜と言うには不釣り合いだった。

（いつかまた皆で見れるかな…
満天の星空を……
アナタも一緒に……）

其の二十　お前ン家～鷹ノ瀬家の人々～（後書き）

三人娘の
～生徒会通信！！～

キャラクタープロフィール

鷹ノ瀬　弥生（やよい）

【年齢】
ひ・み・つ？

【誕生日】
１０月くらい？

【血液型】
Ａ型

【家族構成】
父、母、弟、曾祖母

【身長】
１７０ｃｍ

【体重】
怒るわよ？（黒笑）

【好き・得意】
家族、翼で遊ぶこと、駿で遊ぶこと、駿に女装させること、料理、弓道

【嫌い・苦手】
曲がったこと、ひねくれた考え、言い訳、ナヨナヨした男、卑怯な奴、ゴキブリ

【備考】
鷹ノ瀬家の長女で翼の実の姉。
スタイル抜群でかなり美人なお姉さん。
駿の憧れの人だったりする。

普段は優しくおしとやか（？）な筈だが曲がった事や悪い事を見ると勇敢で厳しく男勝りな性格へと急変する。
言い寄ってくる男は多いが、ほとんどは彼女より勇敢では無い奴で蹴り飛ばされて、はい終了といった感じ。

翼を弟に持つためもあって彼女と付き合える男はそうはいない。
当然恋愛経験０な為、かなり初であったりする。

妖怪退治には何らかの関わりを持つが、詳細はいずれ本編で明かされる。

鷹ノ瀬　飛鳥（あすか）

【年齢】
１００歳以上

【誕生日】
忘れた……

【血液型】
多分Ｏ型

【身長】
１２７ｃｍ

【体重】
とっても軽い

【好き・得意】
悪戯、翼、弥生、駿、駿と遊ぶこと、翼の料理、弥生に抱っこされること、言霊

【嫌い・苦手】
翼が怒った時、年寄り扱いされること、一人でいること、お留守番

【備考】
とにかくまぁ元気な翼の曾祖母。実年齢にして１００歳を超えているというが、銀華と同じで見た目は少女。

大の悪戯好きで、これから本編でも色々とやらかすかもしれない。
駿の事を翼同様孫のように可愛がっており、いつも一緒に遊びたが

る。

妖怪退治には本編で明かされるが、何らかの関わりがある。

※この鷹ノ瀬家の姉、曾祖母名前と性格は月光閃火さんのアイデアです。それに僕がアレンジと細かい設定を加えました。
弥生さんの性格急変もアレンジ設定です。

月光閃火さん、アイデアありがとうございました！！

～妖怪目録～

NO．５【抻祇（しんぎ）】

［外見］
真っ黒な甲冑姿。
甲冑には至るところに斬り傷や返り血が付着している。
頭はボロボロの兜を被っていて、顔は隠れて見えない。

［説明］
甲冑を身につけてはいるが、その動きはとても素早い。

帯刀した刀は柄が黒く、それを舜速で振る居合い術を得意とする。
十八番は正眼の構えからの突き。これを破ったのは彼が戦った中ではたった二人。
彼の主と鷺ノ宮駿の二人だけであるという。
彼は駿の雰囲気をどこかで感じた事があるらしいが一体？

［伝承］
古来平安の時代に平家に仕えて武士で忠誠を誓った主に裏切られた悲劇の男。

当時はかなり名の知れた剣豪で、彼の主と対決をして負けたが、その腕を買われて主の家臣となった。

美希
「というわけで一気にやったな。次は質問だ」

泉
「はいはーい♪
最初の質問だよ。『駿君の好みの女性のタイプを教えて下さい』」

駿
「やっぱり年上で大人の女性かな～。弥生さんとかマリアさんとか。
後は同作者が書いてる『銀魂のごとく』の蒼妃さんとかドストライクだ！」

理沙
「なるほど。シスコンで年上好きということか」

泉
「次いくよ～♪
『駿君と翼君の強さを教えて下さい』」

美希
「これは作者に聞いた方が良さそうね」

伽藍
「えっと、すみません！！
詳しくは言えないので簡単に言いますね。
まぁぶっちゃけ二人ともチート並に強いです。
ただ翼君は常に全力ですから強さは分かっていますが、駿はまだ全くわかりません。
彼は本当に力を出さないので……ただ、本気になったらそれはヤバいです」

駿
「無いけどな、そんな事は」

伽藍
「まぁ……
まだね」

美希
「では、今回はこの辺で」

理沙

「次回もよろしく！！」

泉

「なのだ～♪」

其の二十一　幼馴染みって色々と大変（前書き）

伽藍
「今回はまた二つに分割してしまいました」

駿
「えっと、色々ありますが取り敢えず始まります！」

其の二十一　幼馴染みって色々と大変

日曜日……

それは学生は勿論、日本人にとって休みの代名詞である。
その言葉を聞くだけで不思議と心は弾み、何故だか元気が湧き出てくる。

ある者は朝早くからゲームを楽しみ、ある者は遊びに出かけ、ある者は沢山の睡眠をとる。

日曜日は全ての人々にとって、大変貴重な時間であり、かけがえのない一日なのである。

「……ＺＺＺ」

ここに、自室で気持ち良さそうに眠っている少年が一人。
名前を鷺ノ宮駿という。

無論、彼もまた日曜日の楽しみを満喫している一人である。

「……ん…」

彼はうっすらと瞼を開けると顔に手を置いてゆっくりと身体を起こした。

そして部屋の壁にかけてある時計の方に目を向ける。

「ふわぁ……まだ１０時……
もう少し……寝よ……」

駿は欠伸をすると眠たそうにそう呟いて、またゆっくりと横になって掛布団を戻し……

「って二度寝しとる場合かァァァァ！！！」

「ぶべらっ！？」

いきなり布団ごとひっぺがされ、駿は成す術無く顔面から畳の上に放り出されたのだった。

其の二十一　幼馴染みって色々と大変

「まったく……」

顔から着弾した駿の後ろには腰に手を当てた少女が立っていた。
緑がかったグレーの長めのショートカットに緑色の瞳をした美少女である。
白がベースに薄い花模様が書かれたワンピースに黒いカーディガンを羽織っている。

「痛つつつっ……
……いきなり何しやがんだ!!
咲夜!!」

「それはこっちのセリフや!!
せっかくこうして可愛くて優しい幼馴染みが来てるっていうのに、
何でのうのうと二度寝しようとしてんのや!!」

駿は顔を擦りながら後ろを見上げると、少女はビシッと指差しながら怒鳴る。

「知るか!!
大体なぁ、もし仮に可愛くて優しい幼馴染みならこんなメチャクチャな起こし方はしねーだろ!!」

「それはそれ。これはこれや」

負けじと叫び返す駿の言葉はいつの間にか彼女が持っていたハリセンであっさり落とされた。

この少女の名前は愛沢咲夜。
財閥愛沢グループのご令嬢にして駿の幼馴染みである。
故に伊澄、ナギ、ワタルの幼馴染みでもあり、この五人の中では常

識人の位置といえるだろう。

「あ～……
んでお前がこんな朝っぱらからいやがんだよ……」

「暇やから」

「たった二文字で俺の貴重な睡眠時間を奪わないでくれますか」

駿はあからさまに面倒くさそうに溜め息をついて頭を掻く。

「せやけどそれだけやない……
今日は自分に言いたい事もあって来たんや」

「あ？」

咲夜は眠たそうに見上げてくる駿に再び指を突きつける。

「なんで主人公の自分の幼馴染みであるウチの出番がこんなに遅いんや！！
２５０分なんてアニメなら８話分は終わってるやないかい！！
……っとこんなんはおかしいって事を伝えに来たんや」

「いやおかしいのお前だよね。
文句言う相手間違ってるから。
作者に言うべきだからねソレ」

駿は欠伸をすると、彼女に背を向けて布団を引き直してまた横になろうとした。

「ちょっと自分。
何で寝ようとしてるん？」

「眠いから。
用ってそんだけなんだろ？
だったら俺が作者に言っといてやっから……
んじゃそういう事で」

彼は手を上げてヒラヒラと振ると横になって掛布団を被ろうと…

ゴロン！！

咲夜は布団を引っ張って駿は再度畳に転がった。
二三回地面を回るとジト目の駿が彼女を見上げる。

「……何？」

「せやから、せっかくウチがこうして自分に会いに来たんやから」

「何で俺なんだよ……
伊澄なら家に居んだろ？」

彼はだるそうに身体を起こすとその場にあぐらをかいた。

「伊澄さんなら部屋でテレビでＤＶＤを見とるがな。
『死んだと思ってたヒーローがもしかしたら生き返るかもしれないからその結末を見守ります』

とかなんとか。
んで、ウチは自分に会いに来たん」

「要するに完全な暇つぶしじゃねーか……」

呆れたように咲夜を見ると、駿は首をゆっくり回した。

「んで？」

「決まってるやないか。
自分はウチが面白いと認めた男やで。将来お笑い界で売れる為には今の内に腕磨かな。才能だけでやってける程あの世界は甘くないんや」

「ご存知かもしれませんけど、俺は芸人を目指した事は一度たりとも無いんですよ」

「そんな事はええねん！！
要はインスピレーションや！！」

「……」

会話が繋がらない。
そもそも駿の話を聞く気が無いようである。

「因みに、これから何をするつもりなんだ？」

「せやな、無難に外に出てネタ探しやな」

「……」

駿はクルリと背を向けると、何も言わずに布団に戻っていく。

「……おやすみ」

「うぉい！！
今話聞いてたん！？」

「分ァった分ァった。
んじゃこうしよう……」

駿は布団に横になったまま、いい加減にそう呟く。

ーーーーーーーーーーーーーー

『たたみがいちめんにひろがっている。どうやらここはわしつのようだ。』

『シュン　けんし　７８６
さくや　ツッコミ　２２８』

よくみると“おわらい
てんかいち”のしょう
ごうがおちている。
ひろいますか？

【↓はい／いいえ】

シュン　けんし　７８６
さくや　ツッコミ　２２８

あらたなしょうごうを
てにいれた！
ふたりは“おわらいて
んかいち”になった！

「……こんなで良いだろ。

では、そういう事で」

「良い訳あるかーーーっ！！
ってかなんでファミコン仕様！？」

「俺の頭の中は古き良きゲームはまだまだ健在なんだよ。
んじゃ俺寝るから」

駿は咲夜に横になって現に答えるあたりはもう寝る準備が万全といった感じである。

「……自分ほんまに寝てしまうん？」

「……ぐぅ」

そう尋ねた咲夜の声は少し寂しそうであったが、返ってきたのは寝息のような声。

「酷い……！！
駿はウチといるより寝てる方がええっていうんやな…」

「……」

うるうると瞳に涙を溜めると、
両手を胸にあて後ろに向いてしまう咲夜。

「ウチの気も知らんと、自分はそんな事言うん……」

「……」

シンとした何とも言えぬ空気が室内を支配する。
ちょっと駿が動いたような気がしたが……

「寝てしまうんやな……」

「……」

「……グスン」

「だあァァァァ！！
分ァったよ！！起きりゃ良いんだろ起きりゃあ！！」

駿は掛布団を剥がすと、頭を掻きながら無理矢理起き上がった。

「ほんま？
ありがとう。流石自分、話が分かるな♪」

（コイツは……！！！）

すると咲夜は先程の涙はどこへやら、笑顔で元気良く駿の方に振り返った。

彼はワナワナと拳を震わせるが、だるそうに頭を掻きながら今度こそ立ち上がった。

「つーかお前、あんまり簡単に男の部屋に入ってくるなよ」

「何で？」

「何でって……
仮にも男と女だぞ。
色々と問題がだなぁ……
第一この状況だって端から見たら俺がお前を連れ込んでるように見えるだろ」

小首を傾げる咲夜に駿は一般の考える常識を話す。
が、彼女はすぐに首を左右に振った。

「別にええやん。
そんなの、今に始まった事やないし。昔と変わらへんよ」

「その言い方止めてくんない？
どう聞いても俺が毎回お前を連れ込んでるみたいに聞こえるから。
読者にも勘違いされるから」

そくさく歩いていき、部屋の引き戸に手をかける。

「？」

「居間かなんかで待ってろ。
俺は一っ風呂浴びてくっから」

駿はそう言うと部屋から出ていこうとするが、咲夜がいきなり彼の腕に抱きついてそれを止めた。

「だったら……
一緒に入らへん？」

「ぶっ！？」

彼女の歳より大分大きな胸が駿の腕に当たる。
勿論彼も男な訳で、突然の事に加え柔らかい感触に動揺して吹き出してしまう。

「な、お、お前何を……」

「甘ァァァァい！！」

スパーン！！

駿が慌てて彼女を振り返ろうした時、ハリセンが叩き込まれた。

「そこはベタなボケに対する素早いツッコミやろ！！
自分、養成所で何を習ってたんや！！」

「お前さぁ……
いっぺんだけで良いから男になってくんない？
そしたら心置きなくぶん殴れるから」

一瞬でも動揺してしまった自分が情けないやら恥ずかしいやらの駿であった。

＊

～住宅街～

「相変わらず話の運びが下手やな～」

「それは言わないでやれよ」

駿と咲夜は二人並んで外を歩いていた。
咲夜は周りを見ながら何かを考えるように、駿は面倒くさそうに歩いていた。

「ったく……
なんで貴重な休みをお前の訳の分からん計画に費やされなきゃならないんだよ……」

「訳の分からんとは何や。
これはお笑いで成功を望む奴にとっては当たり前の事なん」

「だから何で俺も目指してる事になってんだよ。
お前は勝手にナギと漫才でもやってろ。目が離れてました～って」

「ハリガ○ロックか！！
古いな自分。オモロイけども」

「いや、俺結構好きなんだけど」

咲夜のツッコミに駿はうんうんと一人で頷く。
勿論作者も大好きです。

「まぁとにかく……
俺が言いたいのは、色々と忙しいって事なんですよ」

「どこがや……
寝てただけやないか」

「睡眠は人類にとって無くてはならないものなんだよ。
睡眠、食事、運動、この三つを満たしてこそ人は初めて……」

「ハイハイ……
でも自分、もうすっかり眠気は覚めたみたいやん？」

彼の話が長くなりそうだったので咲夜は手を振ってそれを遮る。

「誰のせいだと思ってんだよ…」

「ふーん……
ひょっとして……」

彼女はスッと駿に寄るとニヤリッと笑って彼にくっつく。

「……自分、さっきのお風呂の話本気にしたん？
それで眠気も覚めちゃったんやな」

「うぐっ！！違うわ！！
つーか引っ付くな、離れろ！」

駿は一瞬躊躇ったが慌ててそう言い返すと、咲夜を引き離す。

「何や、ウチと自分の仲やのに…つまらんやっちゃな～」

「どんな仲だよ。
腐れ縁だろ」

何というか、二つしか違わないとは言え、年下に簡単に手玉にとられている駿は何とも情けない。

そんな感じのやり取りをしながら、二人は商店街を進んでいく。

「ま、下らん冗談はここまでにしといて……
今日は街にはびこるネタになりそうな出来事を探すんや」

「はびこるって……
一体どんな？」

「せやな～……
例えば爆笑ハプニング映像とかに出てそうな笑いから日常の些細な笑いまで色々あるな。
とにかく笑いは必須や」

（要するに面白けりゃなんでも良いって事じゃねーか……）

駿は溜め息をつくと、宛の無い歩みを進めようとするが……

「自分、アレを見てみ」

「あん？」

咲夜が突然立ち止まって、前方の電柱に指を向けた。
電柱の上には電気工の人が配線か何か修理を行っている所だった。

「こんな所でもお笑い関係に遭遇や」

「どこが？」

「よく見てみ。
あの手の動き……アレはツッコミの練習に違わない」

「……」

取り敢えず咲夜の話を聞く事にする駿。
彼女は電気工を見つめ一人で頷くと続ける。

「あの寸分の狂いの無い動作、無駄が無く且つ隠れながらも熱い魂が確かに込もってる」

「……」

「アレは長年漫才でツッコミをやってきた人物に違わないわ。
しかも相当な手練れやな」

「お前俺に突っ込めって言ってんの？」

更に二人が歩いていくと、今度は肉屋の主人が買い物に来た奥さん達に肉を売っていた。

「あの主人……

只者やない……」

「絶対只者だろ。
ちょっと小太りの人の良いただの肉屋の主人だろ」

「ちゃうちゃう。
ああやって大声を出して周囲の注意をひく。
声はお笑いの基本やからな。
しかも叫んでいる言葉は恐らく自分らの芸名を…」

「だからこじつけだろーがァァァァ！！！」

遂に駿が叫んで突っ込むと、咲夜はフッと微笑して背を向けた。

「流石やな。最初はボケに対して的確なツッコミを入れていき、盛り上がった所でインパクトのあるツッコミに切り替える。
成長したな自分」

「……さっきまでのはボケのフリだったのかよ」

「当たり前やないか。
そんな事も分からんようじゃまだまだウチの相方は遠いで。
ナギを超えてみせんか」

咲夜はクルリと振り返ると駿に指を突きつける。

「ナギもいい迷惑だろうに」

「どういう意味や！！」

彼は今日何度目かの溜め息をつくと、何かを思い出したように左腕の時計を見た。

「もう昼じゃねーか……
なぁ、歩くの疲れたしその辺のファミレスで飯食っていかないか？
ネタ云々はその後で良いだろ？」

彼の言葉に咲夜は頷いて顔を上げた。

「せやな。
じゃあ軽く食べとくか。
駿の奢りで」

「待てコラ。
誰が奢るといった、誰が」

「アホー！！
デートで女の子に奢るのは男の役目やないか」

「コレのどこがデート！？
単なる暇つぶしだろうが！！」

「あー、もうごちゃごちゃ小さいやっちゃなー
とにかく行くで」

咲夜は耳を塞いで五月蝿がる振りをすると、向かい側にあるファミレス“デイジーズ”に向かっていってしまった。

「来週ＰＳＰ買い替えるつもりだったのに……
仕方ねぇ、テキトーに依頼料値上げするか……

って、勝手に先行くなよ！」

駿は財布を開けて中身を確認すると、急いで彼女の後を追っていった。

○

～ファミレス店内～

「メニューはお決まりになりましたでしょうか？」

「ええ。俺は和服オムライスとサラダバーで」

駿の言ったメニューをメモに書き留める店員。

「ウチは、ナポリタンとコーンスープ。それから苺のジェラードとミニレモンパフェ、あとチーズケーキと……」

「待て待て待て！！
お前どんだけ頼む気だオイ！！」

「じゃあそれで」

「アナタ話聞いてますか！？」

咲夜がそう言ってメニューを閉じると、店員は一礼して二人のテーブルを後にした。

「別に平気や。
ウチ、甘いものは好きやから」

「誰もオメーの心配なんてしてねーよ!!俺の財布の心配してんだよ!!」

とか何とか言っても、結局は駿が奢ることになる訳で……

数分後、二人のテーブルにはオムライスとナポリタンが運ばれてきた。デザートは食後、サラダバーとスープはバイキングのように取りに行かなければならない。

「しかし、一見なんの変鉄の無いファミレスにも、ビックリなネタが潜んでいる筈や」

「飯の時くらい忘れろよ」

駿と咲夜はサラダバーとスープを取りに行くため、奥にあるスペースに向かって歩いていた。

「いや、今日はなんだかビックウェーブが来そうな気がするで……長年の勘がそう言うてる」

「どんだけ使い道の無い勘だよ」

駿は呆れたようにそう言って、サラダバーの前に立った。
横にはスープの入った鍋があって咲夜もそこに到着したわけだが…

「キャー!!!」

「騒ぐんじゃねぇ！！」

突然、レジの方で女性の悲鳴が店内に響き渡った。
かと思うと、すぐに男の怒鳴り声がそれを叩くように響いた。

「！？」

二人がレジの方に顔を上げると、覆面を被った三人の男がなんとライフル銃を構えて店内に突っ込んできていたのだ！！

「キャァァァァ！！」

たちまち店内は子供やら女性やらの悲鳴で大騒ぎになるかと思われた。

「騒ぐんじゃねぇって言ってんだろうが！！
殺されてぇのか！！」

三人がライフルを突きつけると、一気に静まり返った……

（ほらほら咲夜。
来たぞ特大のビックウェーブが。出番だぞ出番。見事に突っ込んでこの場を笑いに変えてみせろ）

（出来るかアホーーっ！！
関西人にも限界があるっちゅうねん！！）

（限界なら超えてゆけ。

それを超えてこそお前は真のお笑い天下一をとれる筈だよ）

（その前に死ぬわァァァ！！）

奥のスペースにいた駿達がそんなコントを繰り広げているウチに、あっという間にファミレスは制圧されて客と店員の全員が人質に取られる形となってしまった。

一体彼等は何者なのか！？
ファミレスの客と店員の命は！？
そして駿と咲夜の運命やいかに！？

面白そうなんで次回に続く

「「続くんかい！！！」」

其の二十一　幼馴染みって色々と大変（後書き）

伽藍
「えっと、本編の通り
駿と咲夜は幼馴染みという設定にしました。
まぁ彼女はナギ、伊澄、ワタルとも幼馴染みで親友なんですが、
駿とは何だかんだである意味一番付き合いが多い幼馴染みという設
定でやらして貰ってます。
腐れ縁的な。
詳しくは本編で追々。
まぁ今後の関係は色々と意外な部分もありますが、どうかよろしく
お願いします」

美希
「って、私達のコーナーはどうした！！」

駿
「今回は休みだそうだ」

泉
「にゃに！？」

理沙
「まさか、作者の謀略か！？」

伽藍
「次回もよろしくお願いします♪」

其の二十二　ドリンクバーだけで何時間も居座る客ってよくいるよね（前書き）

伽藍
「えっとお知らせがあります。
実は序章が終わったら冬休み篇に入ると申し上げましたが、変更したいと思います。
序章→1章→冬休み篇にしたいと思います。
理由は主人公同士を最初に出会わせたいからです。
1章は12月25日～大体1月3日くらいまでで、その後冬休み篇で駿は暫く違う場所にいきます。
いきなりの変更すみません。
ですがこういう路線で行かせて頂きます！！」

駿
「あと少しでハヤテも登場らしいです」

伽藍
「あと、オリ妖怪の登場は序章と言いましたが、1章に変更したいと思います。
本当にすみません！！
1章中には必ず出しますので
では始まります！！」

其の二十二　ドリンクバーだけで何時間も居座る客ってよくいるよね

「全く……
年はとりたくねぇな。
こんな日でも風で身体に痛んで仕方ねぇ……」

ファミレスの外ではダンディな顔付きの男が加えていた煙草を離して紫煙を吹き上げながら呟いた。
ヨレヨレの茶色のコートを不恰好に羽織ったやたら渋いその男は『ＫＥＥＰ　ＯＵＴ』と書かれた黄色いテープをくぐると警官服の人々やパトカーが集まっている所に歩いていく。

そう。ファミレスの周りは既に警察が囲んでいる状況なのだ。

「よォ、どうだい状況は」

「あ、警部。
お疲れさまです」

男は人々をすり抜けてパソコンを眺めているショートヘアーの女性に声をかける。
女性は振り返ると、パソコンから離れて男に寄っていった。その様子からどうやら彼らは刑事達のようだ。

「事件発生は３０分ほど前。
ファミレスが強盗に乗っ取られたと警察に通報が入りました」

「連絡は店内からか？」

「ええ。声から察するに青年のようでした。
あ、これが録音したものです」

女性と警部は話しながらパソコンの方に歩いていくと、女性が何やら操作してウィンドを開く。

『あ～、もしもし？
お、なんかこういう状況で連絡を取るのってメタルギアっぽいな。
こちらス○ーク。パラメディク、応答してくれ……なんつって」

「馬鹿やっとる場合か！！」

「あ～そうだった。
えっとですね……今●●区のデイジーズにいるんですけど、えっと何か変な覆面が銃持って三人乗り込んで来てですね……店内が占拠されて……取り敢えずヤバそうなんで助けて下さい』

『アホ！！
んなテキトーな説明で分かるか』

『デケー声出すなよ。
見つかったら終わりだぞ。

店内に幾つか監視カメラがあるんでパソコンで繋げば中の様子は分かると思います。
あ、もうこれ以上は……
それじゃ』

プツンと音がしてパソコンのウィンドウは元に戻った。

「なるほど……
んで、その監視カメラってのは？」

「はい、今中央のカメラに接続出来ました。
様子は極めて厄介ですね。
三人の男達がライフル銃を向けながら客や店員を一ヶ所に集めています」

女性はパソコンに映った映像を見ながら警部に話す。

「ふむ……
その連絡をよこした奴はその中にはいないのか？
隠れている様子だったが」

「わかりません。
もしかしたら見つかったのかもしれません。この映像を繋げたのは連絡があってから２５分後ですから。もしかしたらバレた可能性も……」

警部は腕を組ながらその話を聞くと、ちょっと間を置いて首を振った。

「いや、だったら恐らく見つかってねぇだろうな」

「？」

「何故そう思うんですか？」

「そりゃオメー……
勘に決まってんだろ」

「いや知りませんけど」

警部は煙草の吸い殻を地面に落とすと足で踏みねじって続ける。

「だが強盗が乗り込んで来ているのにあの冷静な声色。
案外、ソイツが何とかしてくれるかも知れねーよ」

「警部！！
仮にも警察官なんですから、そのような無責任な発言は！！」

「分かってるさ……
まぁ、ただ俺達は今は動けないからな……」

女性が怒ったように食って掛かるのを簡単にあしらうと、警部は険しい表情で店内の映像を見つめて唸る。

（その小僧とやら……
どう動くのかねぇ……）

其の二十二　ドリンクバーだけで何時間も居座る客ってよくいるよね

～ファミレス～

さて、外にいる警部の興味をそそったらしい
その青年はというと……

（なぁ、駿。
さっきからずっとこのままやけど……これからどうするん？）

（……取り敢えず連絡を聞き付けて警察の方々はいらっしゃったみたいだな）

三人の死角になるドリンクバーの奥のスペースに隠れて様子を窺っていた。

店内中央には他の客全員が集められて、三人は外の様子を見ながら人質に銃を向けている。

「おい、どうすんだ……

サツがもう嗅ぎ付けて来やがったぞ……」

「くそっ……！！
いくらなんでも早すぎるぞ！！」

怒りと焦りのあまり思いきりと椅子を蹴飛ばす男。
その音に驚いたように身体を震わせるお客達。

「お、落ち着け……
金は奪ったし、何せこっちには人質がいるんだ。
どうせサツがいるなら逃走用の車と飛行機でも用意させよう」

「くっ……！！
こうなりゃ背に腹はかえられない。どうせなら車はバスにさせ、人質全員のせて空港にいっていくらか人質をとったまま海外に逃げ込むか……」

窓には一面にカーテンがかかっているが、そのカーテンを少し開けて外の様子を窺いながら会話をする強盗犯達。
その表情にはかなり動揺が走っているようだが、銃はしっかりと人質に向けられている。

店のレジは台から落ちていて、無惨に荒らされて中のお金は空っぽになっている。

（しかしアホやな……
自分らの計画をべらべら喋るなんて……コ○ン君もびっくりやで）

（つーかんなモンこの人質の数じゃ用意されるわけねーだろ……）

駿と咲夜はそんな強盗犯達をこっそり眺めながら呆れたように溜め息をつく。

（これからどないするん？
自分、その顔は何か考えがあるんやろ？）

（……勿論、無い）

スパーン！！

（ってーな！！
何しやがんだオメーは！！）

（それはこっちのセリフや！！
自分、この流れやったら何か作戦の一つや二つ考えてるのが普通やろ！！）

（んなモン簡単に出来る訳ねーだろ！！こんな流れそう無いからね普通！！）

二人は奥のスペースでバレないようヒソヒソ声でツッコミ合う。

（せやかて、どうするん？
このままやとウチら全員つれてかれてまうで）

（確かにそれはやべーな……

早く帰らねーと伊澄と一緒にいれる時間が減る）

（それはどうでもええわ！！）

駿は確かにと口に手を当てると目を細めて考え込む。

（仕方ねぇ……

こうなったら例の作戦を実行するしかないな）

（例の作戦？）

作戦名【神武】

1．駿が低姿勢を保ちつつ出口の方向に進んでいく。

2．咲夜が飛び出していって三人の注意を一点に集中させる。

3．その隙をついて駿はレストランを脱出。

4．以下略

スパーン！！

「だから叩くなって！！

痛いだろ！？」

「痛いのは己の頭や！！

何やねんコレ！！

結局自分が逃げてるだけやんけ！！つーか以下略ってなんや！！」

「以下略は以下略に決まってんだろーが。
かのレッ〇＝フェール曰く“成すに任せよ”だ」

「ただ放り投げてるだけやないか！！このアホ！！」

咲夜は思わず立ち上がって駿に向かって叫ぶ。

「だがら、デケー声出すんじゃねー！！
見つかったらどーすんだ！！」

駿も立ち上がって咲夜に向かって声をあげるが、実際は彼の方がうるさかったりする。

「どうかすんのはお前やろ。
そんなんだからモテへんのや」

「んな事ァ今関係ねーだろ！！
そもそも誰のせいでこんな事になったと思ってやがんだ！！」

「なんやとー！！」

二人の口論は白熱していき自覚が無いのか大声を出しあっていたが……

「大体オメーはいつもいつも！！」

「それはこっちのセリフやねん！！」

ガチャ……

「「？」」

聞き慣れない音に二人が振り返ろうと後ろを見ると、頭には黒くつややかに光る銃口が突き付けられている。

「お宅ら……何？」

そして銃をもった覆面達が三人とも駿達にギロリて視線をむけていたのだ……

「「「……」」」

・・・・・・

「「「「……」」」」

「「「……」」」

覆面を被った三人を前に、
正座させられているのは駿と咲夜の二人である。
二人の後ろには人質の客や店員達がその様子を見守っている。

「なるほどな……

道理でサツが動くのが早い訳だ。まだ客が隠れていようとは……
お前ら連絡したんだな？」

三人の中の一人が駿達の前に一歩踏み出して見下ろしてきた。

「あー、通報したのはコイツです」

「お前や！！」

駿は隣の咲夜を指差すが、彼女に思いきり突っ込まれる。

「まんまとやってくれたな……！！貴様らどうしてくれんだ！！」

「どおぉぉぉ！？
落ち着いて！！落ち着いて！！」

額に銃口を思いきり突きつけられた駿は両手をあげて慌てたように
のけ反る。

「これが落ち着いていられるかコラァ！！
テメーらのせいで俺達の綿密な計画が台無しになったんだぞ！！」

「いやいや！！
アレ、これ違いますから！！
通報したのはこの人であって、俺は全然関係無いんですよ！？
むしろ止めたくらいですから！！」
「はぁ！？」

今日何度目かのハリセンが駿の頭に落ちる。

「自分何人に全部投げようとしてんのや！！
ええ加減にせんかいこのシスコン馬鹿！！」

「大体、事の発端はオメーなんだから責任とってここで一生捕まってろ！！俺は絶対面倒に巻き込まれんのは嫌だ！！」

「もう既に巻き込まれてるわ！！
現在進行形で！！
どっかのシスコンが馬鹿やったおかげでな！！」

「それはこっちのセリフだハリセン女！！
オメーが黙ってりゃ事は丸く収まったんだよ！！」

二人は白熱してきたのか、徐々に立ち上がって声を張り上げる。

「オイテメーら！！
今の状況が分かってんのか！！
大人しくしねぇと打ｔ」

「「うっさい！！黙ってろ！！」」

バキッ……！！！

「ぶべら！？」

真ん中の男が怒鳴ってライフルを二人に構えようとするが、駿と咲夜の勢いに任せた拳が顔面に飛んできてそのまま後ろにノックアウトされてしまった。

「大体自分は！！」

「オメーはいつもいつも！！」

しかし二人はそれに構わず互いを指差し合いながら口論を続ける。
その様子に人質達も唖然と口を開けている。

「「あ、兄貴ィィィ！？」」

倒れた男を見て思わず男二人は叫ぶとすぐさま口論している駿達を睨み付ける。

「テメェェェ！！なにしやがんだコラァァ！！」

「だ～か～ら～……」

「！？」

左の男が駿に銃を振り上げて飛びかかろうとするが、簡単に頭を掴まれると……

「うるせェって言ってんだろーがァァァァアアアア！！！！」

「ごぶぅぅぅ！？」

駿は渾身の勢いで男の顔面を前にあったテーブルに叩き込んだ。

「貴様ぁぁぁ！！」

「いい加減に……」

今度は右から男が咲夜の横を通り過ぎて駿に突っ込んでいこうとしたが……

「うるさいっちゅーねん！！！！」

「こぶぅあ！？」

男は彼女にハリセンで思いきり叩き込まれ、横に吹き飛ばされてノックアウトした。

（（（（（ええぇぇぇぇーーーっ！？））））））

客も店員も愕然である。

先程まで自分達は三人の人質になっていたのに、その三人はいつの間にか気絶しているのだから。

「あー！！

ああ言えばこう言うな自分は！！」

「口が減らねぇのはオメーの方だろ！！そもそもなぁ……！！」

二人は最早そんな様子には目もくれず口論し合いながらレストランの出口から出ていってしまった。

「なんやと！！」

「なんだよ！！」

レストランから出ても二人は喧嘩しながら警察の横を通り過ぎてゆく……

そんな二人の様子をただ見ていた警察は……

「……警部、解決しちゃいましたね」

「……取り敢えずアレだ。
人質と犯人の確保」

パソコン画面を呆れたように眺める部下の女性に、警部は目の前のレストランを指差してそう言うと警察達はすぐに突入していった。

こうして、何のヤマもオチも無く事件は無事に解決したのだった。

～鷺ノ宮家～

「良かった……
ヒーローさんは生き返ってくれました……」

伊澄は部屋の引き戸を開けて廊下に出てきた。

ギャー！！ギャー！！

「……？
お兄様？咲夜？」

暫く歩くと居間で駿と咲夜が口論しているのを目にした。

「……どうしたのでしょうか？」

そもそもの原因である彼女は、こうして首を傾げて二人を宥めようと居間に入っていくのであった。

其の二十二　ドリンクバーだけで何時間も居座る客ってよくいるよね（後書き）

三人娘の
～生徒会通信！！～

美希
「次回、駿君の未知なる第三のシスコン能力が開眼する！」

駿
「いきなり次回予告！？
つーか第三って何だよ！？」

理沙
「しかしもう1章も終わりか～
駿君が主人公でいられるのもここまでという事か」

駿
「え？そうなの？」

美希
「無論、ハヤテ君がフラグ乱立するからな。
残念ながら……」

理沙
「それでも強く生きるんだ…」

脇役
「いやいやいや！？
おかしくね……って名前が！？」

泉
「にはは～
じゃあまた次回～♪」

其の二十三　兄はいつだって全力投球（前書き）

～今回の話の前に～

時は遡って１２月１８日……

美希
「まずいぞ！！
期末テスト前日だというのに全く勉強していない！！」

泉
「わ～！！どうしようどうしよう？赤点とったらせっかくの冬休みがパーだよ！？」

理沙
「安心したまえ諸君！
前日となった今、これ以上ジタバタしても無駄！！
だから今から私が必勝の策を授けてやろう！！」

美希・泉
「必勝の策！？」

理沙
「それは……
全ての解答欄に3と書き込む最終奥義だ！！」

ドーン！！！

理沙
「これで２５点は確実に頂き、テスト自体も五分そこらで終了。
且つ前日だというのに悠々と遊んで過ごせるおまけ付きだ。」

美希
「な、何て事なの……！！
革命だわ、今白皇に革命の白旗が掲げられた」

泉
「創〇記の誕生だねミキちゃん！」

三人娘
「よーし、遊ぶぞー！！」

翼
「……このテストってマーク方式なのか？」

千桜
「というか赤点って３５点以下なんだが……」

ヒナギク
「もう居ないわね……
あの娘達……」

翼

「そういや駿、お前勉強してるのか？」

駿
「……ＺＺＺ」

スパーン！！

駿
「ってーな！？
何だよ！？」

翼
「だからテスト勉強してるのかってか人の話の最中で寝るな」

駿
「テスト勉強？
……テストっていつだっけ？」

一同
「……」

因みに編入生や特待生が悪い成績をとると、必然的に厳しい処分が下るらしい……

其の二十三　兄はいつだって全力投球

冬休みが始まる前に、生徒には厄介なイベントが準備されている。
それは言うまでもない、期末テストだ。

ここ白皇学院も例外では無く、先日この期末テストが行われた。

そして本日、冬休み前最後の登校日である１２月２３日。
その結果は敷地内の大掲示板にズラリと初等科から高等部まで貼り付けられるのである。

～二学期期末審査結果～

順位	名前	得点（８００点）
１位	桂ヒナギク	７９６点
２位	霞愛歌	７８２点
３位	鷹ノ瀬翼	７８０点

４位　鷺ノ宮伊澄　７７２点
５位　三千院ナギ　７７１点
・
・
・
９位　春風千桜　７１５点
１０位　鷺ノ宮駿　７１０点

～生徒会室～

「「「何でだよ！！！」」」

「……何がだよ」

生徒会室では三人娘の大声が響き渡る。
それを駿は仕事をしながら面倒くさそうな声で返していた。

「決まってるでしょ……
駿君の成績の話よ！！」

「そうだそうだ！！
どういう事だこれは！！」

「聞いてないよこんな話ー！！」

美希は期末テストの順位表のコピーを出すと理沙と泉は１０位の所の駿の名前を指差した。

「だから何が？」

「「「何でこんなに成績が良いんだーーっ！！」」」

「……いや、何でって言われても」

ビシッと駿に指突きつけ三人娘はそんな事を言い始めた。

生徒会室にいるヒナギク、愛歌、翼、千桜は呆れたようにその様子を眺めている。

「まかさ……

駿君がこんなに成績が良いなんて……」

「天地がひっくり返えるくらいにビックリだ」

「……お前ら俺の事なんだと思ってんの？」

駿は書類を横に寄せると、眉を吊り上げて三人の方に顔を向ける。

「生徒会メンバー、特に執行部の皆は凄まじく頭が良い。

反面、我々は常に低い成績に甘んじ肩身の狭い思いをしてきたわ……」

「いつそんな思いしてたのよ」

まるで舞台役者のごとくぐっと胸に手を当てる美希に当然ツッコミをいれるヒナギク。

「だがそんな時！！
君が生徒会やって来たのだ！！」

しかしそんなツッコミをスルーして理沙が声高らかに駿を指差す。

「とんでもないシスコンで初日はモザイク顔で登校。
エロ本は年上系人妻系、加えて運動音痴で特に球技は壊滅的……
ここまで欠点だらけの駿君なら勉強だって全然出来ない筈！！」

「そんな訳で、我々は君を同志と見なしていたのだよ」

「何それ、ねぇ。
……泣いていい？」

美希と理沙の言葉が矢のように駿の胸に刺さりまくっていた。

「「「しかし、君は我々の期待を裏切ったのだーーっ！！！」」」

「知るかァァァァァ！！」

当然の叫びであった。

其の二十三　兄はいつだって全力投球

「「「う～……」」」

数分後……

三人娘はヒナギクに怒られて、山のような書類を前にだるそうにうだっていた。

駿は作業が遅れたので何とか筆記用具を動かしている。

翼や愛歌達は既に仕事を終わらせて紅茶を飲んで休憩していた。

「む！？」

「「「？」」」

そんな時、駿が突然肩を震わしたかと思うと天井を見上げて何かを考えるように動かしていた手をピタリと止めた。

「……くる！！」

「「「？」」」

かと思うといきなり目を見開いて訳の分からない声をあげる。
その様子に一同は首を傾げてみせたが、翼だけは『またか……』と呟いている。

ダン！！

「ちょっと行ってくる……！！」

「え、駿君！？
どこに行くの？」

駿はテーブルから勢い良く立ち上がると、周りには目もくれず早足で出口に向かう。
彼の謎の行動に慌てて引き留めるヒナギクだったが…

「伊澄に危険が迫ってる……！！
俺の第六感がそう告げてる……」

「は？」

「待っていろ伊澄！！
今助けに行く……！！」

言うが早いか、彼は全速力で生徒会室から飛び出していった。

「……えっと、何あれ？」

「……あ、あぁ。
アレな……」

取り敢えずヒナギクが翼に振り返ると、彼は困ったような表情で頬を掻いてみせた。

「アイツなぁ……
昔っから……今もそうなんだけど伊澄ちゃん命な奴だから、少しでも離れているととにかく心配がつきないんだ」

翼は話ながら目を出口の方に向けてはまた元に戻す。

「そんな中でアイツには特別おかしな能力があってさ……
何でも伊澄ちゃんに危険が迫ると何故だか分かるらしいんだよ」

「分かる？」

「ああ、何か頭にピンと来るとか何とか。
とにかく絶対に分かるんだとさ」

「「はあ……」」

聞かされた訳の分からない特殊能力に頷いていいものか、曖昧な返事をするヒナギク達。

「でも、具体的に危険ってどんな事なの？」

「そりゃ勿論、アイツにとっての危険でもある訳だから……」

＊

～テラス～

白皇のテラスはお昼ということもあって人で賑わっている。
と言っても、冬休み間近の午前授業期間故に生徒のほとんどが帰宅しているので、平常の時よりはかなり少ないのだが。

「……」

テラスの隅っこには5～6人くらいの男子生徒が固まっていた。
年齢からするに中等部の一年生か二年生くらいだろう。

「き、今日も可愛いな……
鷺ノ宮さん……」

その中の一人の生徒が熱っぽくテラスのあるテーブルを見つめていた。そこにはナギと伊澄が向かい合って昼食をとっている。
彼は伊澄を見つめているのだ。

「オイ、頑張れよ。
今日こそ誘ってみろって」

「一歩を踏み出す勇気だぞ」

周りいた他の男子が彼を激励している様子から、どうやら一人の男子生徒の告白（？）を応援しにきているらしい。

「わ、分かった……
行ってくるよ皆」

男子生徒は周りの激励に答えるように頷くと、伊澄達の座っているテーブルに足を進めていく。

そして程無くして彼女達の前に少年がたどり着いた。

「あ、あの……！！」

「「？」」

少年は顔を赤らめながら緊張気味に声を発すると、ナギと伊澄はそれに気付いたのか振り返る。

「鷺ノ宮さん…！！
えっと、ちょっと良いですか？」

「……はい？」

少年の言葉にナギはなるほどといい表情をしたが、伊澄は不思議そうに首を傾げる。

「そ、その……！！
もしよかったら、明後日僕と……」

しかし……
少年のその言葉が続けらる事は無かった。
なぜなら彼の後ろにはある男が立っていたからである。
ギラギラと輝く鋭い刃が少年の首のすぐ横に置かれていて、彼も自分の状況を把握するのに時間はかからなかった。

「……」

少年の首に日本刀を突き付けている男が放つプレッシャーに彼は冷や汗をダラダラと流して直立して固まる。

「オイ小僧……
そのまま続けるか、首が飛ぶか。どちらか好きな方を選べ」

「あ、あ…う……」

男は地獄の闇魔のようなドスのきいた声で日本刀の柄を握る手に力を込める。

「し……
失礼しましたーーーっ!!!」

少年は伊澄達に物凄い勢いでお辞儀をすると、全速力でその場から駆けていってしまった。

「……童(がき)が。
俺の妹を口説こうなんざ一千年早ぇよ……」

「「……」」

ゆっくりと刃を鞘にしまいながら呟くその男は、紛れもなく鷺ノ宮駿その人であった。

（（（（（……））））））

テラスの生徒達は一部始終のやり取りを見て、呆れたような視線を向ける者もいれば、苦笑混じりにに眺める人もいた。

「ちょうどいい……
ここにいる全員にも言っておきます」

駿はそんなテラスに、特に先程の男子生徒５人に鋭い視線を向け眼光を光らせる。

「今後……
もし俺の妹を口説こうとするような奴がいた場合は……
容赦無く首を飛ばしますから♪」

ニッコリと……
駿は刃に指をなぞらせながらそう言った。
その言葉を聞くや否や、先程の男子生徒達は一目散に逃げてしまった。テラスの生徒達も彼の事を知ってる者は苦笑いをして事の顛末を眺め、呆れたようにどこかに去ってしまう者と様々てあった。

「フッ……他愛ないな。
それより大丈夫か、伊ｓ」

パコッ！！

駿が伊澄に振り返ろうとするが、どこから取り出したのか彼女が持っていたピコピコハンマーで頭を叩かれてしまった。

「い、伊澄！？
な、なにを……！！」

「お兄様……
いい加減にして下さい…」

いきなり叩かれた駿はおどおどしながら伊澄の方に顔を向ける。

「え？あれ？
えっと、もしかして怒ってる…？」

「当然です。
先程の男子生徒にも周りの方々にも迷惑をかけたのですから」

「だ、だってそれはあの野ｒ……あの男子生徒が伊澄に…！！」

ピコッ！！

再度駿は彼女にピコピコハンマーで叩かれる。

「他の方々に見られて恥ずかしい事やご迷惑がかかる事はしないで下さいと何度も言った筈です。

学校では特に」

「うっ……
それは……」

オロオロと伊澄を見ては言葉を探す彼の様子は本当に情けないものがある。

「とにかく！
ダメなものはダメです」

「……」

こう伊澄に言われてしまったら、もう彼は何も言い返せない。
口を閉ざして黙っている様子から少しは反省しているのかと思いきや……

（やっぱり、怒った伊澄も可愛いなぁ……
ああ、頬とか膨らましたりもっと感情的に怒ったらもっと可愛いのに……！！）

やっぱり、どこまでも救いようのない超シスコン野郎だった！

＊

～生徒会室～

「おー、駿。
お前どこに行ってたんだよ」

駿が生徒会室に戻ってくると、翼を始めとする生徒会メンバーが彼に振り返った。

「緊急事態発生だ。
時は一刻を争う」

「「「？」」」

入ってきた駿の表情は険しく、その瞳からは一片の予断も許さぬ雰囲気がうかがえる。

「駿君？」

「オイ、どうした？
何があった」

ただ事ではないその様子に翼達は口々に尋ねる。

「ああ……
実はな……」

駿は手早くテーブルに座ると、事のあらましを語り始めた。

～１０分後～

「「はぁ……」」

取り敢えず翼とヒナギクは当然のごとくため息をついていた。
千桜は呆れたようにライトノベルのページを進め、愛歌はすまし顔で紅茶を啜っている。
三人娘は聞いていたのかいないのか、書類の前で野垂れていた。

「つまり……
お前の無駄な話を要約すると、
“伊澄ちゃんが告白された”って事だな」

「されてねーよ。
未然に防いだっつーの」

「……はぁ」

話をまとめた翼はまたため息ついて額に手を当てる。
だが、そんな事にお構い無しに駿は話を続ける。

「まぁ、そんな訳で今後も気の抜けない状況が続くわけだ。
またあの下級生がいつ言い寄ってくるかも分からないしな。
いや奴だけじゃ無い、他の野郎も来るかもしれない。
何たって、伊澄は最高に可愛いからな」

（（（流石シスコン……）））

「本当は安全が生徒会をやってる暇は無いんだが……
まぁそういう訳にもいかないから、俺は仕事をしながら出来るいくつか案を提言したいと思う」

「案？」

呆れ一色の雰囲気も気にせず彼はテーブルの上に腕組んだ。

「ああ……
取り敢えず手始めに、伊澄の教室の天井四隅、床の四隅、教卓、それから天井中央の計１０コの監視カメラを設置してくれ。
取り返しのつかない事になったら大変だからな」

「もうあなたの頭が取り返しのつかない事になってるわよ」

中々辛辣な言葉ではあるが、ヒナギクの指摘は最もである。

「分かってるって、それだけじゃ危険だっていうんだろ？
勿論教室だけじゃ無い。
移動教室には全て上記と同じ配置を、テラスや講堂にもつけた方が良いな。
監視は生徒会室で」

「出来るわけないでしょ」

「……」

バッサリと意見を切り捨てられたが、駿は暫く視線を手元に落とすと何事も無かったように再び口を開く。

「でも監視カメラはあくまでサブ。おまけだ。本題は各校舎の屋上に狙撃用のスペースを確保することだ。
伊澄にいつ良からぬ虫がついても射撃出来るようにな。
俺のＧ２２やＭ２４は射程が９００までは何とかなる。
だからその範囲の確保を」

「しないわよ」

またもバッサリと切り捨てるヒナギク。
というかもう彼女の視線は氷点下に達している。

「Ｇ２２ってＡ〇社のスーパーマグナムじゃないか……
英国陸軍、ドイツ軍も御用達だった……
Ｇ２２はドイツ軍名称。
英国軍名称は確か……」

千桜はライトノベルから目を離すとキラリと目を光らせる。

「ってか何で軍用ライフルをお前が持ってんだよ。
つーか使えるのかよ…」

「そこは鷺ノ宮家の力だ。
ま、Ａ〇社の方が使う機会は多いけどな。最近はあんまないけど」

「どこでだよ!?
そもそもいつだ!?」

珍しく翼は声を荒げて駿に突っ込んだ。

「まぁ、んな事はどうでもいいんだよ。

とにかくコイツがあれば野郎の一人や二人、簡単に頭を吹き飛ばすことが出来る……」

駿は口元を歪めると不敵に生徒会室の窓ガラスから外に目をやる。
その表情はまさに悪役そのもの、発言もとても主人公のモノとは思えない。

「よし、んじゃ早速会議をー」

「「少し頭を冷やせ（しなさい）！！」」

翼の握りこぶしとヒナギクの平手がバカの頭に振り落とされた。

○

「ったく……
伊澄ちゃんの事になると本当に暴走するなお前は」

「本当にな……」

「ホントにね～」

翼が困ったように肩を竦めると、千桜と愛歌も紅茶を啜ってそれに同意した。

「……いやあの、何でも良いんだけどよ……
取り敢えずコレほどいてくれませんか？」

一方駿はロープがぐるぐる巻きにされて長テーブルの椅子に縛り付けられていた。

「ダメよ。
放っておいたら何するか分からないでしょ」

「だからって縛り付ける事は無くね？何か最近扱いが酷いような気が……」

縛られた椅子から逃れようとジタバタと動く駿にヒナギクはピシャリと言い放つ。

すると、翼がゆっくりと椅子の前まできて視線を駿と合わせるように腰を屈めた。

「なぁ駿……
いい加減妹離れをする時期じゃないか？」

「……！！」

彼のそんな言葉に駿はビクッと肩を震わせる。

「妹離れ……？
それってどこの国の風習だ？」

「いや風習じゃないから」

駿は視線を無意味に泳がせると、翼から反らす。

「あんまりベッタリだとそのウチ本当に嫌われる日が来るかもしれ

ないぞ」

「そ、そんな事は……！！
そもそも兄妹ってそんなモノじゃないか？」

「あんだけベッタリなのはお前くらいだよ」

「……うう」

駿は何とも言えぬ表情で唇を噛んで再度視線を反らす。

「いや、実際そんなものよ駿君。ヒナと雪路を見れば分かる」

「私？」

今度は美希が、いつの間に仕事を終えたのかいや果たして終えたのかは分からないが、駿に話しかけてきた。

「雪路はヒナにベッタリだが、その結果いつもヒナにボコボコにされたり追い返されたりしてるでしょ？」

「いや、それベッタリというより単に桂先生がお金を借りに来てるだけじゃね？
それで怒られてるだけだろ」

「……そうとも言うわね」

駿がよく生徒会室に飛び込んでくる雪路の姿を思い出して答えると、美希はコクリと頷いてしまう。

「何か……
よく考えると私とお姉ちゃんも姉妹間の関係がダメな気がしてきた
……」

「にはは～、まぁ桂ちゃんだからね～♪
ってあれ？ヒナちゃん？」

「私人の事言えないわ……」

ヒナギクは色々と自分達姉妹の事を思い出したかと思うと、
テーブルで頭を抱えて落ち込み始めてしまった。

そんな彼女を愛歌が横で慰めてくれている。

「ま、まぁとにかく。
俺にも姉がいるけど、全然ベッタリじゃないぞ。
知ってるだろ？」

「あ、はいは～い♪
私にも双子のお兄ちゃんがいるけど、全然だよ。
むしろいつも放っとかれてるかな～」

翼に続いて泉も駿に自分の兄妹の話を打ち明ける。

「……けどよぉ。
今更伊澄と離れろって言われても……それは」

「そうじゃ無いよ。

今のベタベタの状態から少し距離を置いたらどうかって話だ」

「距離……ねぇ…」

駿は考えるように床を見たり天井を見たりしている。

「伊澄ちゃんももう13歳だし、お前ももう17になるんだ。
そろそろお互いの事に一歩退いて考えてみた方が良いだろ。
さっきの話然り、告白されても伊澄ちゃんならしっかりと自分で出来るさ」

「……そういうもんなのかなぁ」

翼の最もらしい言葉に普段にはあり得ない事だが、駿も真面目な表情で口に手を当てる。

「いきなりは無理だろうからな。今は少しずつで良いんだよ」

「……ふむ」

「それに駿君、もしかしたら距離をとる事で逆に縮まる、なんて事もあるかもしれないぞ」

千桜が本をパタリと閉じると、彼の方に顔を向けた。

「なるほど……
そういう考え方も有りか」

「うん」

そう頷く千桜のライトノベルの表紙には“我輩の妹があんなに可愛いわけが無い！！”とのタイトルが……

「とにかく、少し鷺ノ宮さんと話してきたらどうかしら？お互いの状況を話すのは大切だと思うわよ」

「そうだね……んじゃ、ちょっと行ってくるわ」

早くも復活していたヒナギクの言葉に駿は頷くと立ち上がろうと……

「その前に縄ほどいてくんない？」

「「……」」

＊

～テラス～

「う～ん、何か緊張するな」

「何でだよ？」

「いや
改まってする話でも無いからさ……」

学院の大テラスを歩いているのは駿と翼それにヒナギクだった。
二人は部活に行くので、
ついでに一緒について来てくれたのである。
愛歌と千桜は帰宅、三人娘は反対方向の動画研究同好会にエスケープしていった。

しかし何故駿がテラスを歩き回っているかと言うと、元々伊澄と一緒に帰る約束をしていたからなのだ。

「しかし良かった。
何はともあれ、これでようやく駿も脱シスコンへの第一歩か。
俺の悩みの一つが少しは軽くなるかねぇ」

「翼君の悩みだったの？」

「まぁ、な……
コイツが暴走した時は止めんのいつも俺だったしさ」

隣を歩いているヒナギクが首を傾げたのを見て、翼は肩を竦める。

「中学生の時なんかもっと大変だったんだぜ。
コイツ事ある毎に学校抜け出して白皇に飛んでくんだから」

「それは……容易に想像できる光景ね……」

彼女の頭には学ラン姿のまま白皇学院に飛び込んでくる駿の姿がう

かんだ。

「でも駿君、昔からそんなだったのなら、さっき決めた事大丈夫なの？」

「正直厳しかったり辛かったりする部分もあるかもしれないけどさ……

俺はやっぱり伊澄が笑顔でいてくれる事が一番大切だからさ……

ま、気長にやるさ」

駿は二人に振り返ると、薄く微笑してみせた。

それを見て、二人もどこか安心したように口元を緩めた。

「お、居たぞ伊澄ちゃん」

「本当だ」

そうこうしているウチに、伊澄がテーブルに座っているのを発見した。がしかし……

「あれ？誰か居るわね……」

「男子生徒……だな」

彼女の前には昼間とは違った男子生徒が立って向かい合っていた。

背丈的には中等部くらいの男子生徒だろうか。

「オイ駿、まずは……

ってあれ？」

翼が駿に落ち着くように話しかけようとするが、もう既にそこには彼の姿は無かった。

「あの！
鷺ノ宮さん！実は」

伊澄の前で男子生徒が何かを言いかけた瞬間……

ジャキッ！！

「！？」

「オイ小僧……
それ以上先を言えば頭に穴がもう一つ増えるが……どうする？」

男子生徒の後ろにはマグナム（何処から持ってきた！？）を持った駿が眼光を光らせて見下ろしていた。
駿はマグナムを少年の頭に突き付けて引金を引こうと指を悪戯にさまよわせる。

「因みに返答次第では手が滑って頭ごと吹き飛ばしちまうが……」

「ひいぃぃぃ！！」

駿が次のセリフを言う前に、男子生徒は叫び声を上げながら一目散

に走り去ってしまった。

後日分かった事だが、この男子生徒は告白をしようとしたのでは無く、先生に頼まれて伊澄を呼んで来ようとしただけだったのだとか何とか……

駿は男子生徒の逃げていった方向を睨むと息をつく。

「ったく……
油断も隙もありゃしねぇ。
大丈夫か伊ｓ」

「「どこが気長だ！！」」

直後
翼とヒナギクに後頭部を殴られて駿はぶっ倒れたのだった……

脱シスコンへの目覚めは遠い

其の二十三　兄はいつだって全力投球（後書き）

美希
「次回で遂に序章が終わりか」

理沙
「といっても次回はかなり短いらしいぞ。
原作開始と序章を繋げるだけど何のオチも無いただの話らしい」

泉
「ようやくハヤ太君の登場か～♪」

美希
「そして駿君のフェードアウトか」

駿
「それは違うだろ！？」

まぁ、次回は本当に短いです。
原作開始前の確認事項みたいなものですので。
そして次回が終わったら1章の開始です！！

多分次回はハヤテ中心になると思います。

次回もよろしくお願いします♪

序ノ終　それは始まりを告げる晩鐘（前書き）

ようやく序章終わりです！！
次回から1章開始！！

これからもよろしくお願いします♪

序ノ終　それは始まりを告げる晩鐘

序ノ終　それは始まりを告げる晩鐘

～鷺ノ宮屋敷～

「ええ？
冬休みにスイスに？」

「はい。
ナギと咲夜と一緒に」

屋敷の居間では駿と伊澄が向かい合って朝食を摂っていた。
本日１２月２４日から正式に冬休みが始まる。
勿論学校は休み、生徒会も暫くは休みだ。

「一体いつまでスイスにいるんだ？」

「１２月２６日から年明けまで行こうとナギが」

「そうか……
つまりその間俺と伊澄は離ればなれになってしまうんだな……」
駿は箸を置くと縁側に歩いていき広がる青空を見上げる。
「ああ神よ！！
このような試練を俺に与えようというのか！！
我がｋ」
ドォォォォォン……！！
「近所迷惑ですお兄様」
大声で訳の分からない事を叫びだした彼に、伊澄は札を飛ばして爆発させた。
「……ま、まぁ、そういう…事なら楽しんで……来て…くれ…」
煙の中からボロボロになった駿がヨロヨロと歩いて戻ってきた。
「そういえば今日の夕方から迎賓館でクリスマスイブのパーティーがあるそうですよ。
ナギが言ってました」
「あ……ああ、そういやそんな話をしてたな……
伊澄は行くのか？」

「いえ、今日の夜は曾祖母様に呼ばれて用事があるので。
でもナギが一人になるのは心配です……」

伊澄は頬に手を当てて答える。
と同時に駿はちゃぶ台の座布団の上に座り直した。
「そっか、銀華ばあちゃんが……ナギの事は心配無いんじゃねーか？多分咲夜とかが行くだろ。
アイツ騒がしいの好きだし」

「お兄様は行かれないのですか？」

「ああいう堅苦しいパーティーとかの嫌いだからさ。
そもそもウチはクリスマスとかあんま関係ないしな。
それに今日は夜依頼も入ってるんだよ」

駿は朝食を食べながら首を横に振ってみせた。

「依頼が……
すみません、今日の夜は外せないのでお兄様一人にお任せしても良いでしょうか？」

「いいよ。
下級ばっかの依頼だしさ。
つーか元々そのつもりだったけどな」

「……元々そのつもりだったんですか？」

「あ、やべ……」

思わず口を滑らしてしまった駿は箸を止める。

「いや違うぞ。
えっとアレ……
そういえば、銀華ばあちゃんの用事って何なんだ？」

「話を反らさないで下さい」

「うっ……
……分かってるよ。依頼があった時は勝手に出てったりしないよ」

駿はため息をつくと再び箸を動かし始めた。
そんな彼に伊澄は小首を傾げて見つめる。

「本当に？」

「ああ、本当だよ」

じ～……

「……」

じ～……

「今日は特撮特集でヒーローさん達のスペシャルがありましたね」

「いきなり話変わりますね！？」

駿はずっこけてちゃぶ台に頭を打ちつけた。

＊

鷺ノ宮家でのクリスマスイブは何の変鉄も無く過ぎていった。

この家は元々海外のイベントや行事を取り立てて祝うような家系ではないのである。

加えて伊澄や初穂達はかなりボーッとしているのでそういった事に疎いという事もある。

酷い時には夏になってから

『あら、そういえば去年の12月25日はクリスマスだったわね』

と言い出す始末である。

彼女達の時間の区分けは最早四季のみかと思わせる程だ。

しかし反面正月やお盆といった日本独特の行事はかなり盛大に執り行われるのだが……

そんなこんなで、本日クリスマスイブも鷺ノ宮家では普通の時間が流れていた訳である。

「もう夜か……」

駿はのんびりと縁側に座ってお茶を飲んでいた。
青い半襦袢の上から白い直垂を着ている。
そして下には白い小袴姿。

辺りはあっという間に暗くなっていき、先程まで夕暮れで朱く染まっていた縁側が嘘のように黒く塗りつぶされていた。

「あ～……
しかしクリスマスイブか～……
世の中の男女は仲良く手を繋いでデートとかを楽しんでるんだろうな～」

一口お茶を啜ると、徐々に金色の光を強め始めた月を見上げて呟いた。

「ま、俺には無いけどね。
そんな相手も経験も一度も無いから……」

自分の言葉でかなり堪えた駿は月から目を離して暫く俯いて落ち込んでしまう。

「……いかん、せっかくの聖なる夜だと言うのに。
ちょっと夜風にでも当たりながら散歩してこよう」

駿はそう呟いて頭を二三回振ると、履物を履いて縁側から中庭に降りていく。
そしてそのまま、静かに門から屋敷の外に出ていった。

（もう7時半か……
依頼まではもう少し人目が少なくなる時間がいいな……）

駿はそのまま宛もなくフラフラと歩いて行く。
住宅街を過ぎ、商店街を過ぎ、
そして遂には、負け犬公園にまでたどり着いた。

（さて、宛も無くここまで来てしまったわけだが……
どうしようか。
もう戻……んん？）

駿がそんな思案を巡らしながら公園を歩いていると、林に囲まれた一本の木の側に水色の髪をした女の子……のような青年がいるのを発見した。

（……何やってんだろう）

その青年はこの寒空だというのにコートの中にはTシャツ一枚という格好で、下はジーパンを履いている。
しかし何より駿の目を引いたのは、その挙動不審さである。
コソコソと何かを覗くような仕草をしている彼は、端から見れば不審者そのものだ。

（……）

駿は暫し迷うように考えたが、何かを決めたのか、直ぐに足を青年のいる林に向けて進めた。

そして……

「よォ、青年。
こんなトコでコソコソ何やってんだ？
着替えでも覗いてんのか？」

「！？」

これが……
鷺ノ宮駿とこの青年……
綾崎ハヤテが初めて出会った瞬間だった。

序ノ終　それは始まりを告げる晩鐘（後書き）

ー次回！！

ハヤテ
（いくら頑張ったって……
いくら努力したって……
結局世の中はズルい奴が勝つんだよ……！！）

前代未聞！！
１億５０００万の借金を背負わされた青年と……

駿
「結局、ねぇ……
まぁ、そうかもしれねーな
世の中なんて不公平の塊みたいなもんだから。
でもよぉ……」

謎の過去を持った青年が出会った時……

ハヤテ
「……何で、何も言わなかったんですか？」

駿

「さあな……
でもコレはオメーの問題なんじゃないかと思っただけだよ」

ハヤテ
「……」

駿
「ま、その身体の中に少しでも血が流れてんなら、
やるべき事は必然的に決まってくるんじゃねぇか？」

ハヤテ
（……！！
……僕は……）

物語は動き出す……

ーーー　第一章、始動！！

ハヤテ
「いや……
そんな大袈裟なものじゃないですからね？」

駿
「誇大予告もいいところだよな……」

其の壱　イヴの夜に一人でいる野郎達は色んな辛い事情を抱えてるからそっとしておこう

疲れた……
ちょっと色々あってボロボロです（笑）

では、今回から第一章が開始です！！

よろしくお願いします♪

其の壱　イヴの夜に一人でいる野郎達は色んな辛い事情を抱えてるからそっとしておこう

１２月２４日……

クリスマスイブ……

世間の若い男女は恋だデートだと色めきたち、社会人達は来るべき冬休みの為にやる気を出して仕事に励む……

そして子供達は深夜にやって来るであろうサンタクロースに胸を踊らせ、持ってきてくれるプレゼントの事で頭はいっぱい……

世間が、社会が……
国が不思議と浮かれ気分になる
そんな日に…

貸主（甲）学館組

借用書

借主（乙）綾崎瞬

金．１５６．８０４．０００円

・　　ハヤテくんへ？　　・　　後は任せた♪

・　・

一足早く来たそそっかしいサンタさんは……
僕、綾崎ハヤテの元に……
何よりも残酷なプレゼントを置いていった……

其の壱　イヴの夜に一人でいる野郎達は色んな辛い事情を抱えてるからそっとしといてあげなさい

「……」

ヒラヒラと雪が舞う夜……
青年、綾崎ハヤテはフラフラと公園を歩いていた。
彼の右手には借金の借用書。
そして左手には僅か１２円の小銭が握られている。

（臓器を売られそうになり……
必死にここまで逃げてきたけど…全く……本当になんて親だ）

ハヤテは借金を押し付けて行方を眩ました両親を恨み、夜空を睨み付ける。

（あのタイプのヤクザは取り立てると言ったら警察だろうと取り立てるタイプ……
しかも１億５０００万……
何があろうと絶対見逃すわけがない！！）

ハヤテは手のひらにある１２円を見つめて歯を食いしばった。

（僕みたいな人間が手っ取り早く１億５０００万作るには……
それこそ強盗か身代金目的の誘拐くらい……
頼れる親戚はいないし友達じゃ迷惑をかける……
つーかこの寒空の下、野宿したら凍死する……）

その手の平をきつく握りしめて目を見開く。

（こうなりゃもう悪い人間になるか！？あんな親やヤクザに命狙われてんだ……
多少の悪事は許されて当然！！
いや許されるべき！！
強盗だろうが誘拐だろうが……
自分が助かるためなら！！）

するとハヤテのバックにサンタの格好をしたおじいさんが浮かび上がってきた。

『だが信じろ……
最後に笑うのはきっと、
ひたむきで真面目な奴だから…』

「違う！！！」

しかしそんな想像を振り払うようにハヤテは思いきり木に拳を打ち付けた。

（結局、世の中はズルい奴が勝つんだよ！！
真面目に頑張ったって……
手に入るものなんか何も無いんだ！！）

ハヤテの目はもう犯罪者のものとなりかけている。

（フラン〇ースの犬のネ〇だって…良い人を貫いたから死んだじゃないか！！
だったらもう迷うことは無い！！
捕まったってムショで温かい食事と布団が待ってるさ……）

ハヤテが木の側から顔を覗かせると、ちょうど中学生くらいの背丈の女の子が自販機を眺めている光景が目に入ってきた。

（幸いこんな夜の公園に一人、誘拐しやすそうな少女がいるし…！
！これはもう……仇をとれというネ○の啓示！！
だったら……！！）

ハヤテが一歩を踏み出そうとしたその時だった……

「よぉ、青年。
こんなトコでコソコソ何やってんだ？
着替えでも覗いてのか？」

「！？」

いきなり彼の後ろから声がかけられたのだ。
慌ててハヤテが振り返るとそこにはーーー

「ん～？
でもこの辺に住宅はねーよな。
あ、もしかして双眼鏡使ってるとか？」

「……」

かなり整った顔立ちに二重の瞼には綺麗な琥珀色の瞳。
首の下くらいまで真っ直ぐに伸びた黒髪の青年がハヤテの隣の木に寄りかかっていた。
服装は現代では珍しい和服姿。
白い直垂に中の紫の下地。

白い小袴という格好だった。

しかし今のハヤテはそんな事を突っ込んでいる余裕も、見知らぬ他人と会話している余裕も、そもそもこれから行おうとしている事を他の人に目撃される訳にはいかないのである。

「い、いきなり何ですか！？誰だか知りませんけど僕は今とても忙しいのでどこかに行って下さい」

「堅い事を言うなよ青年。そりゃ確かに良い覗きスポットがあったら独り占めしたい気持ちはよく分かるけど。ただそういう楽しみはやっぱり皆で共有してこそだろ？」

「覗きなんてしてませんてば！！何でこの寒空の下でそんな事をしなきゃいけないんですか！！」

ハヤテは横に並んできた青年に向かって叫ぶが、青年は手を振ってハヤテに顔を向ける。

「いやいや、イヴにこんな場所で一人寂しくコソコソしてるなんて覗き以外他に理由は無いだろ。安心しな、俺も寂しい一人もんだから。あ、でもガキには興味ねーよ。年上のお姉さんな。出来ればナイスバディの」

「だから違うっていってんでしょーが！！僕は覗きじゃ無くて誘拐をしようとしてるんですよ！！

だからもう向こうに行ってて下さい！！」

「ほぉ……誘拐ねぇ」

「……あ」

自白ーー

隠していた事を自分から打ち明けること。

自爆ーー

今のこいつのような状況

「……」

「まさかこんなにあっさり口を滑らすとは思ってなかったけどな」

呆れたような青年の言葉から、

彼は最初からハヤテが何をしているのか聞き出すつもりだったようだ。

ガシッ！！

「へ？」

暫く黙っていたハヤテだったが、いきなり青年の肩に両手を叩くように置いた。

「この計画を聞かれた以上、このまま逃がす訳にはいきませんよ」

「聞かれたって……
勝手にお前が喋ったんだろ」

「今からアナタにも共犯になってもらいます!!
残念ながら拒否権はありません…アナタにも聞こえるでしょう、善を貫き失意のウチに亡くなっていったパト〇ッシュ達の無念の叫びが…!!」

「聞こえねーよ
お前はフラン〇ースの犬を何だと思ってんだ」

しかしハヤテは全く聞く耳を持とうとしない。

「今から僕とアナタは共犯です!!僕が誘拐を実行しますから逃亡ルートを確保して下さい」

「待て待て!!
勝手に話を進めるな。
つーか、何で誘拐なんてしようとしてんだよ!!」

再び木の陰に戻ろうとするハヤテの肩を青年が慌てて掴む。
するとハヤテは無言で二枚の紙を青年の前に差し出した。

「？」

青年は訳が分からずその紙を受け取るが……

「……!!」

それを見て青年は目を疑った。
紙は借金1億5000万と、とんでもない額の書かれた借用書だった。

「……オイオイ。
どこの漫画の話だよコレは。
つーかどんだけ借金してんだよ……」

「これは僕の親の借金です。
とにかく、これを返せなければ僕には明日が無い……
だから今から悪になるんですよ……！！」

ハヤテは青年から紙を返して貰うと、彼に背を向けて木の側に寄っていく。
青年もそのままハヤテから離れる訳にもいかずにそれに続いた。

「そういえば……
まだ名前を聞いてませんでしたね……僕は綾崎ハヤテと言います。
貴方は？」

「……駿だ」

青年は何とも言えない表情で腕を組んだまま名前を名乗った。
そう。今更では彼は鷺ノ宮駿である。

「そうですか……
では駿君、今から誘拐するのはあの自販機の前にいるあの少女ですよ」

「ん？あれ……？
（アレ、ナギじゃねーか……
何やってんだあんなトコで）」

自販機の前にいたのは他でもない、三千院ナギであった。

駿は前方にいる思わぬ知り合いに驚きの表情をするが、ハヤテはそんな事には気付かない様子で自販機を睨み付ける。

「取り敢えず悪への第一歩として僕があの娘に誘拐の交渉をしてきます」

「いや、交渉してる時点で悪じゃねーよ」

林から顔を覗かせるハヤテと駿はヒソヒソと話を続ける。

「僕が交渉を取り付けたら、駿君は見張りと逃亡ルートをお願いします」

「いや、オイ
ちょっと待っ…」

呼び止めようとする駿を置いてハヤテは木々を抜けて自販機に向かって歩き出した。

（ったく……
面倒くせーな……！！）

駿はハヤテを止めるために後を追おうとするが、一歩踏み出したと

ころで留まった。

そして暫くキョロキョロとして考え込むと……

（……やっぱ様子をみるか。
面白くなりそうだし）

若干咲夜の癖が移ったかなとしみじみと思う駿であった。

一方ハヤテは自販機にぐんぐんと近づいていく。

（よし！！
今から僕は悪になるぞ……！！
少女を誘拐し身代金要求！！
勝つ！！悪で勝つんだ！！）

そしてハヤテがナギの前に出ようとした時……

「ねーねー、
君可愛いね～」

「せっかくのイヴなのに一人なんて寂しくない？」

「……え」

若い二人組の男が彼女に話しかけてきた。
どうやらナンパのようであるが、ナギはどうしていいやら困ったような表情。

そんな彼女に構わず手を掴むと連れていこうとする。

「俺達とどっか遊びにいこうよ。今からｓ」

「人の獲物に手を出すなァァァァ！！！」

しかし次の瞬間、
ハヤテが二人に拳を振るい吹き飛ばした。

「ネ○の命日にナンパなんてお前らどこのパト○ッシュだ！！
帰る家のある人はとっとと家に帰れ！！」

「「ひィィィ！！」」

ハヤテは更に叫んで威嚇すると、二人は慌てて逃げていった。

「あ、ありがとう……
なんか知らんが、助かったよ」

「……」

ハヤテがハッとして振り返ると、ナギが薄く微笑んでお礼を言ってきた。

（おっといかんいかん。
何感謝されてんだ僕は……
今からこの子を誘拐してたっぷり身代金を頂くんだ！！
甘い顔なんてしてる場合じゃ…）

「クシュン！！」

「……？」

ナギのくしゃみを聞いてハヤテは我に返ると、彼女に振り返った。
よく見ればこの寒空なのに半袖の服でかなり寒そうである。

「……」

「！」

ハヤテはため息をつくと、やをら着ていたコートを彼女にかけてあげた。

「女の子が体を冷やすの良くないから……着てなさい
（甘い！！甘いよハヤテ！！
こんなんじゃ立派な犯罪者になれねーよ！！）」

立派な犯罪者とは何だろうか。

「安っぽいコートだな。
作りは荒いし生地は重い。
おまけにサイズはブカブカだ」

「……！！」

数々の失礼な発言にハヤテは身体を震わせるが……

「……でも、温かい。
気に入った」

「……」

ナギはそう言うと少し頬を赤らめてハヤテに微笑んでみせた。

「助けて貰ってばかりでは悪いから……私からもお礼がしたいな」

「お礼？」

「うむ、何でも良いぞ。
言ってみろ」

ニッコリと微笑む少女にハヤテはニヤリと悪魔の笑みを浮かべる。
ならば話は早い。身代金要求のための人質になれと。

「じゃ、単刀直入に言うよ……」

「うんうん」

ハヤテは咳払いを一つすると、ナギを見つめる。

「僕と……
付き合ってくれないか？」

「へ？」

「僕は……
君が欲しいんだ（人質として）」

ハヤテの誘拐目的のセリフに、ナギは顔を真っ赤にしてしまった。
絶妙に互いが勘違いするようなこの言い回し……

「ば……！！
イヴの夜だからっていきなりそんな告白……
自分が何を言っているのか分かっているのか？」

バッ！！

「分かってるさ。
こんな事……
冗談じゃ言わない。」

「……」

吐息のかかる距離……
ハヤテの犯罪者の目は、ナギには迫る美男子の瞳に見えている。

「命がけさ……
人目見た瞬間から……
君をさらうと決めていた…」

「わ…分かったよ…」

ナギはもう蒸発しそうな勢いで顔を赤くしながら俯いた。

「その代わり！！
浮気とかは絶対ダメだからな！！」

「え？

あ…うん。分かってるよ
（浮気？なんの事？）」

ハヤテは疑問に思ったが敢えてスルーした。

○

場所は戻って先程の林の中。
駿はその様子を眺めていた。

（何言ってんのかはよく聞こえねーけど、取り敢えず何かおかしな方向にいってないか？アレ）

すると、ハヤテがなにやら駆け足でこちらに戻って来た。

「駿君！やりました！！
あの娘の住所を手に入れてきましたよ！！」

「……」

ハヤテは不敵に笑いながら駿の側に来ると、紙を目の前に出してきた。

「良かったな。
んで？この後どーすんだ？」

「勿論、身代金要求の電話をかけるんですよ」

ハヤテが公衆電話の方に歩き出したので、それについてゆく駿。

（いい加減教えてやった方が良い気がするが……
もう少し放っておくか）

駿は意気揚々と電話ボックスの中に入ってゆくハヤテを見ながらそんな事を考えいた。

そして、ハヤテはダイヤルを一心不乱に押している。

（さて、脅迫電話をかけて……
身代金を要求だ。
もう誰も僕を止められないぜ）

ガチャ……

『はい、もしもし？』

「あ、もしもし。
綾崎ですけど……」

馬鹿な犯罪者がよくやるミスー今のコイツのようなミス。

「……」

『もしもし？
綾崎？』

ガシャン……

（終わったーーーっ！！！
僕の完璧な計画が始まる前に終わったーーーっ！！
名乗ってどうするんだァァァァ！！）

頭を抱えて夜空を見上げる馬鹿な犯罪者擬きが一人。

「オイ？」

「フフフ……」

あまりにも早くボックスから出てきたハヤテを不審に思った駿が声をかけるが、彼は自虐的に笑い始めた。

「駿君……
どうやら僕はル○ンにはなれなかったようです」

「は？」

「そもそもどうやってお金を受け取る気だって話ですよ。
第一そんな大金、一般家庭にある訳がない」

ハヤテが夜空を見上げると、煌々と輝く月に照らされた白雪がヒラヒラと舞い散っている。
耳を澄ませば……
風の隙間からジングル・ベルが聞こえてさえきた。

（死のう……）

「ちょっ！？
おい、お前！！」

駿が止める間も無く、ハヤテは道の上にうつ伏せに倒れた。

今青年は……
確かに人生のどん底にいた。

「ああ！！
だめです！！
そんな所に寝ていたら！！」

「「え？」」

駿がハヤテに歩み寄ろうとしたまさにその時、
女性の声が二人の後ろから聞こえてきた。

そして……

「がっ！？」

倒れているハヤテの上を、自転車のタイヤが思いきり轢いてしまったのである。

要はハヤテは自転車の下敷きになった事になる。

「あ、あの……！！
大丈夫ですか！？」

すぐさま自転車に乗っていた女性が、倒れているハヤテに歩み寄ろうと自転車から降りてきた。

「あれ？マリアさん？」

「へ？」

駿が女性に声をかけると、彼女は驚いたように振り返る。
なんと女性はマリアであった。

「駿君？
どうしてこんな所に？」

「いや、そりゃ俺のセリフなんですが……
それより、コイツを」

「ああ！！
そうでした！！」

駿がハヤテを指差すと、マリアは慌ててハヤテに駆け寄る。
そしてゆっくりと彼の前に膝を降ろした。

「あの……
だ…大丈夫ですか？」

（くそ！！
せっかく人が安らかに凍死していたのに邪魔して……

全くどこのどいつ……）

ハヤテは頭を擦りながら、自分を轢いてきた人に文句の一つでも言ってやろうと目を開けた……

「……」

「あの…
お医者さん呼びましょうか？」

それはハヤテが今まで見てきた人の中で……
最も綺麗な人だったという。

「あの……
体の方は？」

「体がどうかしましたか？」

ハヤテは目をキラリと輝かせるとスクッと立ち上がった。

「……えっと」

「ご心配なく。
頑丈なだけが取り得ですから」

ハヤテはさっとマリアに背を向けると格好を良く人差し指を立ててそう言った。

（お…驚いたよパト○ッシュ。
世の中にはこんな綺麗な人がいるんだよ……

お前は犬だからわかんないだろうけど……）

「あの～駿君？
この人とはお知り合いですか？」

「知り合いと言えば。
１５分前までは赤の他人でしたけど」

一人思いに浸っているハヤテを見て、マリアが隣にいる駿に困ったように尋ねてきた。
駿は肩を竦めるとそう返す。

「っていうか駿君！？」

「へ！？」

すると、ハヤテはいきなり駿を掴むと彼女に見えないように顔を寄せてきた。

「あの綺麗な女性の知り合いなんですか！？」

「え、ああ……まぁ」

ハヤテは更に駿に何かを尋ねようとしたが、後ろからマリアが話しかけてきた。

「あの～
本当に大丈夫ですか？」

「へっ！？
はい勿論！！頭はいつも緩んでますから！！」

慌てて駿から離れて振り返るハヤテ。

「あの……
ご無事でしたらちょっとお聞きしたい事があるのですが」

「はい！なんでしょうか！」

「えっと、今私人を探しているんです。１３歳になる女の子なんですが……」

「……え？」

マリアの言葉に先程までの浮かれ具合はどこへやら、一気に固まるハヤテ。

（もしかして、あの娘の身内か？いや、まだ分からない……
確か今日の運勢は……）

「背が低くてパーティードレスで、ツインテールの髪型の可愛い子なんですけど……
心当たりありません？」

（最悪でした！！！）

ハヤテは一気に思考をフル稼働させてこの状況を打開する術を考える。

（いかん！！
ここはシラを……）

「あの子世間知らずですから、変な人についていって誘拐とかされないか心配で」

（無理そうですね！！）

マリアの予感的中の言葉に勝手に追い詰められるハヤテ。

「で、でも何でその子はこんなクリスマスイブの夜に一人で出歩いたり？」

「実は迎賓館でのパーティーに出席していたんですが、あの子ったら急に飛び出してしまって…」

（迎賓館でパーティー！？
て事はあの子、金持ちの娘か！？）

ハヤテは再びマリアの方を見て、口を開いた。

「あの…
その子はあなたの妹さんか何かですか？」

「いえ、違いますよ。
家族ではありませんから。
まぁでも、家族みたいなものですかね？手のかかる子で、いつも心配させられます……
そこが可愛いところでもあるんですけどね」

その言葉を聞いた時……
ハヤテを言い知れぬ感情が覆った……

（あの子には……
心配してくれる人がいるんだ…
僕は一人で、あんな酷い親しかいないのに……
あの子にはこんな綺麗で優しい人が……）

それは嫉妬……
自身でも分かるくらい明らかに卑しい感情……

ハヤテがきつく拳を握りしめるのを、ずっと隣で黙っていた駿が気付かない筈が無かった。

「知りません……
そんな子は……見てませんよ」

「そうですか……
もう少し探してみますね。
お時間を取らせてすみませんでした」

「いえ……」

マリアは残念そうに肩を落とすと、自転車をゆっくりと引いてハヤテ達の元から離れていった……

「……何で、言わなかったんですか？
知り合いだったんでしょ？」

ハヤテは横目でずっと黙っていた駿を見た。
彼は何を考えいるのか頭を掻くとハヤテの方に振り返る。

「人を数ページも空気にしといてよく言うぜ……
ま、これはオメーの問題なんじゃないかと思っただけだよ」

「……そうですか。
では、僕はこれで」

ハヤテはさして興味がないようにつぶやくと駿に背を向けて歩き出した。

「確かに……
世の中なんて不公平の塊なのかも知れねーな」

「……」

ハヤテの後ろ姿がその言葉でピタリと止まる。

「……そうですよ。
いくら頑張っても、いくら努力しても……
結局世の中ズルい奴が勝つんですよ……」

「じゃあ、お前はそんな下らない結論に至る為に今まで生きてきたって訳だ。
なんとまぁ……つまらん答えだな」

「……！！」

駿は近くの塀に寄りかかると、舞い落ちてくる雪空を見上げる。

「世の中で誰が勝つとか、誰は負けるとか……んなモン俺達に分かるわけないんだよ」

「……」

「ズルい奴が勝つと思ったんならそれは別に構わねーけど。でも、誰にも断言は出来ねぇよ」

ハヤテは振り向かないで足を止めている。

「人生だ世の中だ悟るのは死ぬ瞬間で十分だろ。人生何が起こるかなんて誰にも断言出来ないんだからな」

「……」

「何も分からない。誰にも分からない。だから、どんな方向にも転がせる可能性がある」

駿の言葉にようやくハヤテが振り返った。だがその表情はまだ暗い。

「ま、条件があるけどな」

「……？」

「誰にでも出来るけど誰にでも出来ないたった一つの条件」

駿はもたれてた塀から離れると、ハヤテを真っ直ぐに見据えた。

「動きゃ良いんだ」

「！！」

「確かに俺達は何も分からないけど、でもだからこそ分かることもある」

駿はようやくハヤテの隣に肩を並べた。
そしてもう一度空を見る。

「……動かなきゃ何も始まらねぇって事だよ」

「でも……
僕は……！！」

ハヤテが何かを反論しかけた時だった……

「あの……」

「「？」」

先程去っていった筈のマリアがなんとハヤテ達の所に戻ってきたのだ。

「ちょっと待って下さいね」

そして彼女は自分がしていたマフラーを取ると……

「え？」

フワリとハヤテにかけてあげたのだ。
ハヤテは面をくらったように顔を赤くしてマリアを見る。

「こんな寒い夜にそんな薄着でいると風邪を引くと思って……」

その大きなマフラーの温もりと、彼女の慈愛に満ちた微笑み……
そして先程の駿の言葉は……

人生のどん底にいた少年にとって、かなり効いたという……

「えぐっ……」

「「え？」」

ハヤテがいきなりしゃくりあげたのでドキリとするマリアと駿。
かと思うと……

「うわあああああ……」

「ええ！？」
「ぬお！？」

ハヤテは声を上げていきなり泣き始めてしまった。

「え？え！？
あの、駿君！？私何か悪いことでもしましたか！？」

「いや……
彼にも色々あるんですよ多分」

マリアは助けを求めるように駿に尋ねるが、彼も曖昧に首を傾けるだけだった。

暫くうずくまっていたハヤテだったが、何かを決意したように立ち上がりマリアに顔を向けた。

「あの!!
その女の子ですけど……実は!!」

「誰かーーーーっ!!!」

ハヤテの言葉を遮るように、突如女の子の声が響いた。

「ぐっ!!何をする!!
離せ!!」

「うるせぇ!!
大人しくしろ!!」

三人が振り返ると、二人の男が少年を車に無理矢理押しめている姿が目撃された。
少女は黄色い髪にツインテールの……

バタン！

扉が閉じられ車は勢いよく発進していった。

「……あの」

「大変！！
あの子ったら！！
本当に誘拐されてる！！」

マリアは慌てて周りをキョロキョロと見回す。

「どうしましょう！！
と、取り敢えず警察を……！！」

そんな彼女の前でハヤテは車の後ろ姿を眺めている。

（く…成る程神様…
これはそういう試練なのか…
誘拐なんて企てた償いを今しろって事なんだな……

だったらいいぜ！！
やってやる！！）

ギラリと瞳が光を放つ。

「自転車、ちょっとお借りしますよ」

「え？」

ハヤテはマリアの自転車のハンドルを掴む。

「お前……」

「ご心配なく……
僕はただ“動く”だけですから！！可能性を掴むために」

ハヤテのその言葉に駿はなるほどと口元を緩めた。

「ちょっと君！！
相手は車よ！？
そんな自転車なんかじゃ……
絶対に追いつけるわけが」

ガッ！！！！

「……え？」

「マジでか……」

マリアが止めようとしたが、ハヤテの乗った自転車は猛然の加速を
見せてその場から消えていった……

（ったく仕方ねぇ……！！）

「って、駿君？」

駿は地面を蹴ると側にあった住宅の屋根に飛び乗った。

「マリアさんは早く警察に連絡して下さい。
俺はアイツを追っかけますから」

「え？でも……
徒歩で追いつくなんて」

マリアは屋根を見上げて当たり前の疑問を口にするが……

「奴ら逃亡目的なら高速に出るでしょう。
ここから高速までの道はかなり入り組んでますから、
屋根伝いの方が早いですよ。
んじゃ……！！」

「あ、駿君！？」

しかし彼は既にその屋根から前方の屋根に飛びうつっていた。

「……えっと、とにかく警察に連絡を…！！」

二人の人間離れの行動に、マリアは突っ込んでおこうか迷ったがそれどころではないと急いで携帯電話を取り出した。

＊

逃走中の車はかなり危ない激走を繰り広げていた。

「ちっ…！！
国道に逃げればこっちのモンだが、道が入り組んでやがる！！」

「アニキ、捕まったらお仕舞いだぞ！」

車の中、運転席にはニット帽を被った男が助手席にはサングラスにキャンピングハットを被った男が座っていた。

「……」

後部座席には不機嫌さ１２０％のナギが座っていた。

「いいかお前ら！！
逃げようとしても無駄だぞ！
助けが来るからな」

「はっ！！
馬鹿はお前だ小娘！！
時速８０キロ以上の車に追いつける奴がいるか！？」

「いるさ！！
命がけで私をさらうと誓った。
だから呼べば来るさ！！」

「だったら今すぐ呼んでみやがれーーーっ！！！」

ナギが思いきりそう叫ぶと助手席の男が後部座席に襲いかかろうと身を乗り出した。

ハヤテーーーーーっ!!!!

その瞬間……
車の上を自転車が飛んできて追い越した。

「何ィィィ!?」

「!!」

そのまま自転車は砂煙をあげて車の前方に着地した。

「おい、この悪党ども!!
大人しくその子を……」

「ってオイィィィ!!
ぶつかる!!ぶつかる!!」

「ハヤテ!!」

しかし車は止まらずに時速８０キロでハヤテの目の前まで迫った。
ナギは勿論ハヤテは目を閉じて激突を覚悟した……が、

「あれ……？」

いつまで来ない衝撃にハヤテが目を開ける。

すると彼は空中に浮いていた。
いやというより……

「悪ぃな…
自転車はぶっ壊れたぞ多分」

「駿君!?」

車とハヤテの激突を避けるため、駿が彼の首根っこを掴んで飛び上がっていたのだ。

「お前はさっさと後ろからお嬢様を救ってやれ」

「でも車は…!!」

「俺に任せといて良い」

そう言うと駿は空中からハヤテを車に向かって放り投げた。

ハヤテは勢いをそのままに、人間業とは思えぬほど素早く後部座席に乗り込んできた。

「助けにきたよ!!
逃げよう!!」

「ハヤテ!!」

ハヤテは車内でナギを抱えると、すぐさま脱出しようとする。

「馬鹿め!!

超高速のこの車から飛び降りれば命はないぞ！！」

ニット帽の男はハヤテに向かってそう怒鳴るが、ハヤテはフッと微笑すると……

「はあァァァァ！！」

「「えぇぇぇぇぇ！？」」

思いきり車から飛び降りた！！

ハヤテはナギを抱きしめながら何度か空中を回転すると、荒々しく地面を削りながらも着地に成功したのだ。

「馬鹿なぁ！！」

「アニキ！！どうすんだ！？」

「こうなりゃこの車であの野郎を轢いてやれ！！」

ニット帽の男がハンドルを切ってハヤテ達のいる方向に車を向けようとする。

ドン！！

だが……

車のボンネットにもう一人の男が飛び乗ってきた。

それは闇夜に艶やかな白を纏った駿だった。

「な!?野郎邪魔だ!!
振り落とされてーのk」

男がそう叫んだのと、駿が日本刀を鞘にしまう音がしたのはほぼ同時だった。
次の瞬間……!!

「「!?」」

車の屋根は丸ごと後ろに吹き飛び、オープンカーのような状態になってしまった。

「な!?今なにを!!」

「斬りやがった……
車の屋根を切断しやがった…!!」

それは一瞬……
目にも止まらぬ居合いで、駿は男達の頭スレスレの地点から上を切断したのである……!!

「このまま大人しく車止めるか…白夜(こいつ)の錆になるか……どっちがいい……?」

「「……自首します」」

その容姿からは想像をつかぬ冷徹な瞳を向ける駿に、二人はもつダメだと本能で悟った。

車が急停車すると、すぐさま後ろからサイレンの音と共に何台ものパトカーが囲むように現れたのだった……

○

「大丈夫？
怪我は無い？」

「うん……
また助けられたな。ありがとう。ちゃんとお礼をしないとな」

「ハハハ……
そんなお礼なんて（僕も誘拐未遂だし）
でも、新しい仕事とか見つけてくれると嬉しいかな」

「……仕事」

道の脇ではナギとハヤテが向かいあっていた。
お礼を言われたハヤテは若干罪悪感に苛まれつつ苦笑混じりに答えるハヤテ。

「ふわあ……」

「あ、駿君！！」

ハヤテの後ろから欠伸をしながら駿もやって来た。

「あの誘拐犯達は？」

「ああ、警察の方々が逮捕してくれたよ」

ハヤテが後ろを見ると、確かにいくつもねサイレンが赤い光を夜空に放っていた。

「っていうか、何でお前がここにいるのだ！！」

「あー、細かい事は放っとけ。
とにかく、助かったから良かったじゃねーか」

「ハヤテのおかげでな。
１００％ハヤテのおかげだ！！」

「ハイハイ。
そうだな……」

ナギはハヤテにしか気付いていなかったのでその考えは仕方ない。
駿は適当に返事をすると、顔をハヤテの方に向けた。

「お疲れさん」

「ええ……
でも……流石に今回は……疲れて……」

バタン！！

「「？」」

話しているとハヤテの視界はグラリと歪み、彼はそのままが倒れてしまった。

「おい！！
ちょっとお前！！」

「……」

ナギが慌てて駆け寄るが、ハヤテは意識を失っているのか返事が返ってこない。

「ど、どうしよう駿！？
ハヤテが、ハヤテが……！！」

「落ち着けって……
多分過労だな。かなりハードな生活してたみてぇだから」

「そ、そうか……」

駿もハヤテの側に寄ると、冷静にそう言ってナギを落ち着かせる。

「仕事か……」

「？」

ナギは暫くハヤテの背中を見つめると、ソッと呟いた。

「よし決めたぞ！！
私はコイツを執事にする！！」

「執事？」

ナギは立ち上がると、ハヤテのコートを翻して高らかに宣言した。
駿は首を傾げると彼女を見上げる。

「ああ、姫神の後任がまだ決まって無かったからな。
恩人をただで帰しては三千院の名が廃る。それに新しい仕事を探してくれとも頼まれた」

「……そうか。
多分コイツも喜ぶと思うよ」

駿は安心したように頷くと、立ち上がってその場から歩き出した。

「あ、オイ！
どこに行くのだ？」

「ん、散歩の続き。

じゃあな……」

駿は手をヒラヒラと振ると、雪の中白をたなびかせて去って……

「ぶべらっ!?」

「……」

雪で滑って盛大に転けた。

最後までしまりの無い奴だと呆れるナギだった。

「ナギ!!」

「おお!!
マリア!!」

去っていった駿と同時に、後ろからマリアが走ってきた。

「ちょうどいい、私のケータイを頼む」

「へ?ああ…」

訳が分からず慌てて携帯電話をナギに渡すマリア。

ナギは携帯を開くとボタンをプッシュして電話をかけた。

「クラウス、私だ。
位置はわかるな?
大至急医療班を手配してくれ。
一分以内だ」

「彼は……過労のようですね。
大丈夫だと思いますよ」

ナギが携帯を閉じると、マリアが倒れているハヤテの様子を見終えて言った。

「ところでさっきから気になってたんですけど……
あなたのそのみすぼらしいコートは一体？」

「や、確かにこれは哀れな程安い作りのコートだが……！！」

ナギは顔を赤くして頬を掻くと言葉を続けた。

「せっかく命の恩人がくれたコートだ。
大事に着てやらねば三千院家の名が泣くだろ」

「へ？じゃあそのコートはこの方の？」

「ん、まぁ…」

そうこうしているウチにヘリコプターが二人の後ろに降りてきた。
『三千院家医療班』と書かれた医療用ヘリである。

「そういえば、駿君はこちらには来ませんでしたか？」

「ああ、アイツなら散歩の途中だからって帰っていったよ。
まったく、馬鹿が何しに来たんだか」

「もうナギ…
（今度ちゃんとお礼をしないといけませんね）」

ナギの言葉を聞いてマリアはたしなめるように、だがクスリと微笑んでそんな事を考えた。

「そういえば、姫神の後任の事なんだが。まだ決まって無かったよな」

「ええ。それが何か？」

「こいつにする」

「は！？」

ナギはヘリからおくられる風に髪をたなびかせながら、薄く微笑すると振り返ってみせた。

「礼をすると約束した。
新しい仕事を見つけてくれとも頼まれた。
だからこいつを、この三千院ナギの新しい執事にする？」

様々な思いが交錯する中……
綾崎ハヤテの新しい人生が幕を開けるのだった……

因みに……

～鷺ノ宮家～

「あら？
ジュン君、ご依頼は？」

「……あ」

用事を思いきり忘れていた駿であった……

其の壱　イヴの夜に一人でいる野郎達は色んな辛い事情を抱えてるからそっとしておこう

後半は疲れもあって、色々と省きました。
一章は基本的にハヤテと駿の両方にスポットを当てていきたいと思ってます。
一章は元旦過ぎくらいまでです。その後は冬休み篇になります。

これからもよろしくお願いします♪

其の弐　地雷は踏むまで分からないけど踏んでからじゃ遅い（前書き）

学校で教わる歴史は知っている……

でも、自分達がいる世界とは別の世界には全く知らないような歴史がいくつもあるかもしれない……

それこそ、既存の常識が反転するような歴史が……

駿

「……何コレ？」

伽藍

「たまには真面目に前書きやろうと思って」

其の弐　地雷は踏むまで分からないけど踏んでからじゃ遅い

１２月２５日の朝……

～鷺ノ宮家～

「伊澄お嬢様、準備が出来ました」

「はい」

鷺ノ宮家の門の前で執事の男達がリムジンの扉を開けた。
そのリムジンに歩いて近づいていく伊澄。

「ではお母様、行ってまいります」

「ええ、気をつけてね伊澄ちゃん」

彼女は門前を振り返ると、初穂がニッコリ微笑んでそう返した。
今日からナギ、伊澄、咲夜でスイス旅行に行くのでこれから空港に向かうのである。

「あと、お兄様にはくれぐれも無理をしないようにと……」

「はいはい。
伊澄ちゃんたら昨日からそればっかりね」

「そんな事ありません！」

伊澄は慌てて袖をパタパタと振って抗議する。

「まぁちゃんと言っておくから、安心して行ってらっしゃい（言っても聞かないとは思うけれど）」

「……はい」

伊澄は渋々頷くとゆっくりとリムジンに乗り込んだ。

そして初穂が呑気に手を振るなか、車は出発していった……

「はぁ……」

一方、屋敷内の縁側には駿が足を投げ出して座っていた。

私服では無く和服姿の彼は呆けたように青空を見上げている。

「なんじゃ……

昼間からその格好とは珍しいの」

「ん、ばあちゃんか……」

すると隣からぴょんぴょんと銀華が跳ねてきた。駿は上げていた顔を彼女に向ける。

「帰ってきたの朝だったから……そのまま寝ちゃって」

「依頼か。
明け方までかかったのか？」

「いや、そうじゃなくて……
河川敷で夜明けの空を見てたらいつの間にかな……」

眠たそうにもう一度空を見上げると欠伸をする駿。
そんな彼を見て銀華は呆れたようにため息をつく。

「相変わらずボーッとしているのぅお前は。
……そういえば刀はちゃんと手入れしているのかえ？」

「え？
白夜（あれ）は手入れなんかしなくたっていいだろ？
折れない刀なんだから」

「そうじゃないわ。
正宗のことじゃ」

「正宗？」

銀華は首を振って居間の方向を指差すと、駿は小首を傾げる。

「最近全然構ってやってないじゃろ？たまには使ってやれ」

「ああ……手入れってそういう事か」

駿は納得したように頷くと、足を組み直して続ける。

「いやでも、正宗は使い手の能力を最大限に引き出す化物みたいな武器だ。
切札こそすれ、普段はなるべく使わない方がいい」

「まぁそれはそうだが……
アレはお前の為にあるようなものだからの」

最もらしい彼の発言に銀華は腕を組むと柱に寄りかかる。

「そりゃありがたい話だけど……普段は白夜（あれ）で十分だよ。
つーか前から気になってたんだけど……」

「？」

「あれって一応鷺ノ宮家の宝刀なんだろ？
何で何の能力も無いんだ？」

駿も銀華と同じように柱に寄りかかると尋ねた。

「正宗や白桜は潜在能力を最大限に引き出すアルテ◯ウェポン的な能力があるじゃないか。
だけどあれには何も無いただの刀だろ？」

パコッ！！

「痛っ！！？」

「馬鹿者！

代々伝わる宝具に何て口の聞き方じゃ！」

銀華はクナイの柄で彼の頭を叩くと指を突き付けて叫ぶ。

「遥か昔の平安時代……
源氏と平氏の二大勢力による大合戦において、化物や式神を大量に使役する源氏によって平氏は瀕死にまで追い込まれた。

そんな時、突如平氏に現れた五人の英雄。
彼等は圧倒的勢力差にも屈せず戦いで終始平氏を優勢に、遂には平氏を勝利に導き遂には合戦に終止符を打った。

その英雄の一人が使っていたという刀が白夜じゃ！！」

「……はぁ
（また始まった……）」

「白夜は由緒ある刀なんじゃ！
分かったかこの阿呆！！」

「ハイハイ、俺が悪かったよ。取り敢えず落ち着いて」

駿はまた始まったとため息をつくと熱くなっている銀華を宥める。

「あのな、ばあちゃん。
いくら歴史を調べても、そんな史実は無いんだよ。
源平合戦で勝ったのは源氏だし、平氏は滅びたんだから」

「フンっ。
そんな上っ面だけの歴史ばかりを信じおってからに。

そんなモノはいくつもある歴史の中に一つに過ぎん。
鷺ノ宮に口伝されているその歴史はどこかの世界で確かに存在したのじゃ」

「はぁ。
まぁ、うん。分かったよ」

何を言っても無駄だろうと分かると駿は立ち上がって銀華に背を向けた。

「どこに行く？」

「学校だよ。
２９日までは生徒会があるから」

彼はヒラリと袖を翻すと頭を掻きながら自室に戻っていった。

其の弐　地雷は踏むまで分からないけど踏んでからじゃ遅い

～生徒会室～

「あら、おはよう駿君」

「あ、おはようございます愛歌さん」

駿が生徒会室に入るとテーブルに座っていた愛歌が振り返って微笑んでくれた。
普通の男子生徒だったらその笑顔を見ただけで日頃のストレスや疲れも吹き飛ぶことだろう。
かくいう駿も勿論その一人である。

（弱点帳が無ければなぁ）

「駿君？
何か失礼な事考えなかった？」

「いえ！！滅相もありません！！」

ニッコリと笑ったまま尋ねる愛歌に、ビシッと慌てて敬礼してみせる駿。
若干顔がひきつっているが…

「よぉ、お前にしちゃ早起きだな」

「ん、まぁそうかな」

横に置いてある本棚から翼も姿を現した。
駿は頬を掻くと長テーブルの椅子に着いた。

「あれ、会長は？
千桜や美希達も居ないけど」

「ヒナギクは千桜と一緒に職員室に用事があるって。
もうじき帰ってくるんじゃないか？んで、いつもの通り三人娘はエスケープ……つーか元々来てないな」

「そうかい」

翼も棚からいくらか書類を取り出すと、テーブルに置いて駿の隣に座った。

「ふわぁ……」

「寝不足？」

「ええ……
今日帰ったの明け方ですから」

眠たそうに欠伸を噛み殺す駿を見て愛歌が尋ねる。

「色々と大変ね～、鷺ノ宮家は」

「ハハハ……
まぁ仕方ないんですけどね、そういう家柄ですから」

駿はそう言って苦笑すると、隣の翼が何か思い出したように口を開いた。

「そういやお前、昨日の夜何かあったのか？」

「は？」

「いやさ、姉さんが昨日の夜にお前を見たって言ってたんだよ。何でも車のボンネットに飛び乗って抜刀して車を斬ってたとか何とか…
白い着流しの男の子だったとか言うから……お前だろ？」

「あ～……
うん、俺だ」

駿は面倒くさそうに頭を掻くと、適当に返事をする。

「あら、もしかして日頃のストレスから夜な夜な車を襲っていたとか？」

「そんな盗賊紛いな事しませんよ……ってかそんなストレス溜まってるように見えますか？」

「ええ♪」

「……」

微笑んで断言した愛歌に色んな意味で落ち込む駿。
彼は二三回首を振ると、話を元に戻すために続ける。

「まぁそんな愉快な理由は無いですけど、昨日ナギがその車に誘拐されそうになってたから」

「三千院のお嬢が？」

「ああ。
んでまぁ色々とあって、ある一人の青年と協力してナギを救出したんだよ。車に飛び乗ったっていうのはそん時じゃないかな」

駿は書類を自分の前に置くと、筆記用具を手にとって答える。

「ほー、そんな事がねぇ」

「でも、今の時期に三千院家のお嬢様を誘拐しようとするのは納得出来るわね」

愛歌は頬に手を当ててそう言うと、駿も『そうですね』と頷いた。
しかし翼は理由が分からないのか首を傾げる。

「え、どうして？」

「姫神君が居なくなったからよ。彼のような強い人が居ないとやっぱり危険ね」

「姫神って……
三千院家の執事の人ですよね。
クビになったっていう……
俺はよく知らないけど」

翼が思い出すようにつぶやくと愛歌はゆっくりと頷いてみせた。

「何でクビになったんですか？」

「さぁ……
それは分からないわね」

「……」

翼が尋ねるが、彼女は何か含んだような表情で肩を竦めた。
何故だか重たいような雰囲気になりつつあるような生徒会室。

「とにかく、専属の執事がいないという話なら解決するかもしれないんですよ」

「「？」」

そんな空気を駿が変えるかのように口を開いた。

「さっきいったその青年をナギが気に入ったみたいで、なんか三千院家の執事にするとか言い出して……姫神（あいつ）の後任の」

「……三千院家の執事に？」

「いや、まだ決まったかどうかはわかりませんけど……
アイツはそう言い張ってるみたいですよ」

駿は曖昧にそう答えるが、愛歌は少し驚いた表情をしていた。

「そうか。
でも良かったじゃないか。
お嬢も自ら決めたんなら尚更」

「そうかもな」

ガチャ……

「まったく……
お姉ちゃんは……」

「まぁ相変わらずだけどな」

そうこうしているウチにヒナギクと千桜が帰ってきたので、三人はこの話を取り敢えず終了させたのだった。

○

ピリリリリ……

「あ、はい。
鷺ノ宮です」

携帯電話が鳴ったので駿はテーブルに座ったまま取り出し電話に出た。因みに今は生徒会室には翼以外の人間はいない。
それぞれがちょっとした用事で出払っているのだ。

「あ、マリアさん！！
え？いやいや、昨日は単に巻き込まれただけですからそんな…
本当ですか？
じゃあお言葉に甘えて……
え？相談？わかりました、ではお伺いしますね」

ピッ！！

駿は携帯電話を切ると、畳んでポケットに入れた。

「どうしたんだ？」

「いや、マリアさんが昨日のお礼をしたいから屋敷に来てくれってさ。後何か相談したい事があるって、何か結構困ってるみたいだったよ」

駿はスクッと立ち上がると鞄を肩にかける。

「相談ってなんだろうな……
つーか今から行くのか？」

「ったり前だろ。
マリアさんが困っているのに呑気に生徒会の仕事なんてしてられるかよ」

駿はテーブルから離れると座っている翼を振り返りながら話を続ける。

「テキトーに体調不良とか言っておいてくれ。
何か気の毒な感じだして、んじゃヨロシク」

「何がヨロシクなのかしら?」

「「!?」」

駿がそう言ってドアに目を戻すとちょうどヒナギクが立っていた。
笑顔で……

「えっと……」

「ん?」

駿は困ったように視線を360度ありとあらゆる所にさ迷わせる。
そして窓を見ると……

「あ、桂先生が生徒からお金借りてる」

「え!?」

窓を指して叫ぶ駿に、ヒナギクは慌てて窓に目を向けた。
その隙に……

「逃げる!!」

「あ、こら待ちなさい！！」

「悪いが待てない！！」

こうして駿は生徒会室からの脱出に成功した。
後が怖いが取り敢えず今は考えないでおきたいと駿は考えながら時計塔を後にした。

＊

1時間後～

～三千院屋敷～

「そうだったんですか。
ハヤテが執事に」

「ええ。ナギが聞かなくて、トントン拍子に話が進んでしまって」

屋敷の客間にあるダイニングテーブルで駿は紅茶とケーキをご馳走になっていた。
そこで彼はマリアから『ハヤテが執事になった』という話を聞いたのだった。

「彼もナギも喜んでるでしょう。それで、今彼は？」

「ハヤテ君なら屋敷をお掃除してくれてますよ。
手際も容量も本当に良くて、知識も色々と豊富ですから驚いていますわ」

「へぇ～
それって天職ってやつですか。
ホント人生どう転ぶか分からないですね」

駿は安堵したように息をつくと、紅茶を一口すする。

「それで、相談ってなんでしょうか？ハヤテの事ですか？」

「はい……実は」

困ったようにマリアはため息をつくと、事の次第を話し始めた。

話の内容はナギが誘拐されそうになったのを愛の告白を受けたものだと勘違いした事。
ハヤテは全くそんなつもりが無い事。
執事長であるクラウスに追い出せと言われたが仕事が物凄く出来るハヤテを追い出す理由が無い事などであった。

「それはまた、随分とややこしい事になってますね……」

「はい……
本当にどうして良いのか」

駿の言葉にマリアは頬に手を当ててため息をついた。

（なるほど……
あの妙なやり取りはそういう事だった訳か）

駿は昨晩の自販機の誘拐未遂事件の時に腑に落ちなかった点がようやく今納得した。

「駿君はどう思いますか？」

「そうですね……
やっぱり直接本人達に伝えた方が良いと思いますよ。
長引けば長引く程傷は深くなると思いｍ」

駿が口に手を当てて思案するような仕草をした時、隣の液晶テレビで先程まで放送されていたニュースが終わり、次の放送番組が始まった。

［ＶＶＢＳ　総力特集！！］

キレる子供達

～今、何が起こっているのか！？
え！？こんな子供が大事件を！？～

「「……」」

そして立て続けにテレビから聞こえてくる親や子供達の悲痛な声や、教師達の嘆き。

「……いきなり伝えるのもアレですし、少し様子を見た方が良いかもしれませんね」

「……そうですわね」

二人は何とも言えない表情でテレビを見つめると、リモコンの電源ボタンを押した。

○

一方ハヤテはと言うと……

～ナギの書斎～

「こ、これは……！？」

ノートを開いて驚きの声を上げていた。

そこに書かれていたのはご存知、ナギの自作漫画である『～世紀末伝説～マジカルデストロイ』であったが、ハヤテはそんな事は一切知らない。

「……絵日記？」

一人首を傾げた。

「おい……
人の部屋で何を勝手に見ている……」

「お嬢様！？」

すると後ろからナギがいきなり現れた。
慌ててハヤテは振り返ると持っていたノートがナギの目に飛び込んできた。

「あ！！そ…それは私のまん…」

「だ、大丈夫です！！
ほとんど読んでいませんから！！
お嬢様の“絵日記”は！！」

ビキッ！！！

「え……
絵日記だと……」

「はい！！
え？あれ？」

ワナワナと震えるナギに何が何だか分からないハヤテ。

しかし次の瞬間……

「この……バカァァァ！！！」

ハヤテは思いきり部屋から蹴り出された。

「お、お嬢様！？」

「うるさい！！
もうお前なんか知るもんか！！」

そしてペンや花瓶やお皿等々、次々とハヤテに投げられていく。

「人の気持ちも知らないで！！
ハヤテのバカ！！
バカバカバーカ！！！

もう出ていけーーーっ！！！！」

ガシャーン……

「……」

数分後……

ハヤテは閉じられた三千院屋敷の裏門を見上げていた。

（あんなに怒らせてしまってはもう会わせる顔がない……
あれはよっぽど大切な絵日記だったのだろうなぁ……
さようなら僕の平穏……
短い間だったけどありがとう）

ハヤテは泣く泣く屋敷の前から去ろうと振り返ると……

「やあ綾崎君」

「ようやく会えたな」

昨日のヤクザさん達が人も殺せる眼光でハヤテの前に立っていた。

「あ……どうも」

成す術無くハヤテは車に押し込められて、そのまま連れ去られていってしまった……

「「……」」

そんな様子を屋敷から眺めていたのはマリアと駿。
二人の後ろには座って紅茶を飲むナギの姿が。

「いいんですか？」

「？何が？」

マリアがナギに振り返って尋ねるが彼女は何の事か分からずに首を傾げる。

「アイツ、本当に屋敷を出ていったぞ。
出ていったつーか連れ去られていったけど」

「は！？」

続く駿の言葉にナギは焦ったように声を上げた。

「いやいや！！
私は部屋を出ていけと言っただけで、屋敷を出ていけなんて言ったつもりは……」

「「あ～……」」

まぁそんな訳で……
綾崎ハヤテ
出番はこれにて終了～

「いやいや！！
終わってやるなよ！？
まだ私とハヤテの物語は一話しかやってはいないではないか！！」

「それもそうですね……」

身振り手振りで焦りを表すナギに困ったように天井を見上げるマリア。

（また厄介事の予感……）

そして駿はこの後の展開を考えてため息をつくのだった……

其の弐　地雷は踏むまで分からないけど踏んでからじゃ遅い（後書き）

【白夜】

備考

代々伝わる鷺ノ宮家の宝具。
正宗や白桜に比べると何の能力も持たず、ただの日本刀と変わらない。
だが、ただ一つ絶対に折れないという不思議な力がある。
駿が毎回白夜を使うのはこの理由が主。
本人曰く『折れないから手入れもしなくて良いし、楽じゃん』

伝説では遥か昔、二大勢力がぶつかった大戦争を終結に導いた英雄が使っていたという伝説の刀。
ただ何故それが鷺ノ宮家にやって来たのかは不明である。

しかし、歴史を調べてもそんな史実は一切存在せず、それ自体が伝説となっている。

三人娘の
～生徒会通信～

泉

「はろろ～ん♪
三人娘だよ～♪」

理沙
「今回は駿君とこの小説のキャラクター達の関係を簡単にまとめてみようと思う」

美希
「あくまで現時点の関係ね。
もしかしたらこれからあんな関係やこんな関係に」

駿
「ならねーよ！！
つーか何その行き当たりばったりな企画！？」

三人娘
「では行ってみよー！！」

【各キャラの駿との関係的な？】

鷺ノ宮　伊澄

・関係
【義理の妹】
とんでもないシスコンを兄とする苦労人の妹。
行き過ぎた兄を何とかしたいと日々頑張る。

・必殺技

【お・に・い・さ・ま?】
怒った時に発動される奥義。
主にエロ本が発見された時に発動される。
鎖でぐるぐるに縛られて暫く逆さ吊り

鷺ノ宮銀華

・関係
【師匠】
ある意味駿が最も恐れている且つ尊敬している曾祖母。
スパルタならまだ良い方。
特訓内容は聞かない方が身のため

・必殺技
【地獄の特訓】
言えない……

鷺ノ宮初穂

・関係
【お義母さん】
駿を拾ってきた張本人。
いつもボーッとしているお母さん

・必殺技
【忘れんぼう】
半年前の事を思い出す事もある

三千院　ナギ

・関係
【腐れ縁】
文字通り腐れ縁。
ナギ本人は駿を面倒な知り合いと思っている。出来れば関わりたくないらしい。

・必殺技
【お金】
よく分からん

マリア

・関係
【相談役のお姉さん】
時々今回のように相談する側にもなる間柄。
ぶっ飛んだお嬢様達に苦労する常識人仲間でもある

・必殺技
【17歳ですよ～♪】
アルテマとビッグバンを足して3を掛けたくらい

愛沢咲夜

・関係

【幼馴染み】
この場合は咲夜がツッコミで駿がボケになる

・必殺技
【ハリセン】
意外と痛いよ？

橘ワタル

・関係
【弟みたいな感じ】
幼馴染みだけど兄弟っぽい所もあるので

・必殺技
【ＡＶの秘密レンタル（笑）】
駿の時のみに適応。
ただし見つかったら色々とヤバい

桂ヒナギク

・関係
【上司的な？】
駿はいわば『手のかかる部下』
暴走を止める役

・必殺技
【会長命令】
不正を摘発する。

主にエロ本等を没収（燃やす）時に発動する

霞愛歌

・関係
【生徒会での保護者】
多分駿は最も扱い易い。
昔から保護者みたいな感じ。
詳細はいずれ

・必殺技
【頭を撫でる♪】
そうやって励ましたり慰めたりしてくれる。
もれなく弱点帳がついてくる（笑）

鷹ノ瀬翼

・関係
【腐れ縁】
中学生の時からの付き合い。
実は翼とは最初から仲が良い訳では無かった。
詳細はいずれ

・必殺技
【鷹ノ瀬君（先輩）にこれ渡して下さい！！】
駿への精神的ダメージを与える。かなり大ダメージである。

春風千桜

・関係
【気の合う友達（ゲーム等）】
実は駿もゲーム好き。
モンハンとか二人でやると思う。どうでも良いが駿は太刀。

・必殺技
【ここが戦場ならお前は既に死んでいるぞ！！】
そう言われましても……

三人娘

・関係
【悪友】
悪知恵だけはテレパシーのように意思疎通が出来る。
取り敢えずもっと絡ませる予定。

・必殺技
【エスケープ】
ある意味最強の必殺技

……全体的に生徒会と家ばかりで学校の描写が全然無いですね。
ハヤテが入学してきたらかなり増えると思います。

美希
「いや～、行き当たりばったりな企画だから何のオチも無く終わったわね」

理沙
「どう責任を取るつもりだ駿君！！」

駿
「何で俺のせいになってんだよ」

泉
「またね～♪」

其の参　いつの時代でも口は災いのもと（前書き）

特に無し！！

駿
「なら書くなよ」

伽藍
「では始まります！！」

其の参　いつの時代でも口は災いのもと

～面倒だから三行で済ませる～
　前回のあらすじ！！

ハヤテは屋敷を追い出された！
でもそれは彼の勘違いだった。
ハヤテはヤクザに連れ去られた！

「いやいや！？
そんなたった三行で済まさないで下さいよ！？」

「うるせーな……
お前は売られる身なんだから大人しく黙ってろ」

（え～
それはあんまりっすよ……）

こうして、ヤクザ達の運転する黒い車に乗せられてハヤテは目的地
である地獄に突き進む。
不幸まっしぐらな青年である…

其の参　口は災いの元

～三千院屋敷～

「良いのか？
ホントに行っちまったぞ」

「わっ…！！
私は部屋を出ていけと言っただけだ！！
それなのに屋敷から、しかも自分から出ていくなんてそそっかしいにも程がある！！」

向かい側に座っている駿の言葉にナギはそう叫ぶと慌てて手元にカップを引き寄せる。

「それに掃除とはいえ、人の部屋に勝手に入るなど……
怒鳴られても文句は言えまい！！」

「まぁ、ブチ切れた理由は部屋に入られた事よりも……
せっかくの自信作を『絵日記』
呼ばわりされた事になるように感じますけど……」

「……！！」

マリアが窓に目を向けながらそう呟くとナギはびくりと肩を震わせてカップを落としてしまう。

「ま、アレは漫画だろーが絵日記だろーが変わりゃしねぇけどな。
何だっけ、『新世紀伝説マジカルゲリヲン』だっけ？」

「どういう意味だァァ！！
それに『世紀末伝説マジカルデストロイ』だ！！」

「いやどーでも良いから」

ナギは立ち上がってテーブルに身を乗り出すが、駿は心底どうでもよさそうに手を顔の前で振ってみせた。

「そもそも大事な物をきちんとしまう癖をつけないからこんな事になるのですよ？」

「うぐっ…」

「日頃から部屋の掃除は人任せ。着ていた物は脱ぎっぱなし。
身の回りの物くらい自分で整理整頓する癖をつけなさいといつもアレだけ言ってるのに……」

「……」

グサリグサリと言葉の矢がナギの頭や背中に刺さってゆく。

「それにあれはハヤテ君の失敗というより……
ちゃんと注意しなかった私の失敗ですし……
いいんですか？このままで？」

「……」

しかしナギは目を閉じたまま考えるように動こうとしない。

「まぁ、でもお嬢様がそこまでおっしゃるのですから仕方ありません。
ハヤテ君の事はこのまま忘れましょう！！」

「え？」

クルッと振り返り人差し指を立てるマリアにナギはピクリと肩を上下させる。

「元々ハヤテ君はお嬢様が独断で雇うと決めただけの人……
そのお嬢様が用無しと言うならもはや引き止める理由も無いですねし……」

「え？いや……！？
それはその……！！」

ナギは思わず立ち上がって数歩前に出た。

「ハヤテ君の事を嫌いになったのなら、むしろこのままの方が…」

「や！！だから嫌いになんて…」

「なんて？」

「……」

慌てて声をあげるナギにニッコリと微笑み返すマリア。
するとナギは暫く黙って目を反らすが……

「ま、とはいえハヤテは恩人だ。恩人を見捨てるような真似…
三千院家の人間としてするわけにはいかん！！」

（（右と言えば左。
左と言えば左……））

駿とマリアは顔を見合わせるとお互い苦笑してみせた。

「でもどうやってハヤテ君を見つけ出すんですか？」

「ウチの情報網ならば金貸しのヤクザくらい……
あ、クラウスか。私だ。
大至急手配してもらいたいものがある。
……うむ、頼む」

ナギはかなり高級そうな受話器を電話機に戻すと息をついて椅子に座り直した。

「ではマリア……
後は頼む」

「は！？」

いきなり話を振られたマリアは驚いたように声をあげる。

「まさかと思いますけど、今更『ちょっと言い過ぎだかな』と思ったけど怒鳴り付けた手前会いづらくて……
それで私に行けとか言ってるんでしょうか？」

「……」

「お嬢様はハヤテ君の主ですよね？」

「……」

ガタッ！！

「じょ、冗談だよ冗談！！！
自分で行くに決まってるだろ！！」

「ですよねー」

ナギは勢いよく椅子から立ち上がると向かい側に座って傍観を決め込んでいる駿に目を向けた。

「そういう訳だ！！
オイそこの馬鹿、ハヤテを助けに行くぞ」

「はぁ？
何で俺が行かなきゃならねぇんだよ？後馬鹿って言うな」

「な、お前はハヤテがどうなっても良いと言うのか！？」

「え～……」

ナギに指を突き付けられるが、
駿はさもダルそうに眉を吊り上げる。

「駿君、私からもお願いします。勿論私達もついて行きますが、
やはり心配ですからナギと一緒に行って頂けませんか？」

「まぁ……ナギ一人で前に出させるのは危険ですからね。
それにハヤテも心配だ。
俺で良ければ喜んで力を貸しましょう」

「まぁ、ありがとうございます♪」

しかしマリアが頼むと一転、
椅子から立ち上がり無駄に格好をつけて頷く駿。
ナギはそんな彼を見て心底呆れた視線を送っていた。

「あ、そういえばナギ」

「何だ駿（ばか）？」

「お前今日から伊澄達とスイスに行くんじゃなかったのか？」

確かにそうなのである。

今日は伊澄、咲夜、ナギでスイスに旅行に行くという予定だった筈なのだ。
だがナギは今ここにいる。

「ああ、ハヤテが来てゴタゴタしていたからな。ドタキャンした」

「お前なぁ、される側の気持ちを少しは考えてやれよ。咲夜とか荒れて乗り込んでくるぞきっと……」

流石幼馴染みということか。
駿のその予想は見事に当たることになるがそれはまた別の話……

＊

ここはどこかの廃虚……
そしていくらの黒服の男達にハヤテが連行されている。

「あの……
ここは一体どこでしょうか？」

「あ～ん？」

ハヤテがおずおずと尋ねると額に傷が入った男が答えた。

「病院」

（絶対嘘だ！！！）

ガラガラと開け放たれるガレージの廃虚にハヤテは確信した。

「あ～
僕は急に用事を思い出しました
……という訳で帰ります！！！」

「あ！！
待ちやがれこのガキ！！」

そしてハヤテは白々しく声をあげると地面を蹴って黒服達から逃げ出すが……

「あの野郎！！
またあの足の速さで逃げる気だな！！」

「そうはさせるか！！」

強面の一人が手を振ると目が危ないチワワ達が次々とハヤテに飛びついて噛み付きだした。

「ああっ！！
つぶらな瞳のくせにそんな！！」

「ラブリーな奴が優しいとは思うなよーーーっ！！！」

そして直ぐに連れ戻されて黒服達に捕まってしまう。

「大体てめぇの親が悪いんだろ！！金が無いなら体で払うしかねーだろうが！！」

強面の男がハヤテの借用書を突きつけて怒鳴る。

「大丈夫♪
肺も肝臓も心臓も二つあるから！！」

（僕の心臓は一つしかありません！！）

ハヤテは絶句するが時既に遅し、黒服に囲まれて廃虚に押し込められようとする。

「良いからとっとと臓器売らせろやァ！！」

「嫌だーっ！！
そんなアバウトな数え方をする人には臓器を売られたくない！！」

しかし両腕をガッチリと掴まれているハヤテは最早身動きが取れない状態である。

「誰か……
誰か助けてーーーーっ！！！」

ハヤテの叫び声が響いた瞬間、
黒服の男の額にカードが飛んできて突き刺さった。

「助けてやろうか？」

「だっ！！
誰だお前は！？」

黒服達が叫ぶと目の前にやって来たのはオペラ座の怪人のようなマスクを付けた黄色い髪のツインテールの少女だった。

「あ、あの……
何をやっているのですか？
お嬢様」

「……！！
お、お嬢様などではない！！」

仮面の少女は慌ててハヤテに背を向けるとあたふたと言葉を探す。

「私の名前はナ……
いや…違っ……
えっと、えっと……
仮面……マスク……
“マスク・ザ・マネー”だ！！」

「は、はぁ……」

明らかに今考えただろうと思うハヤテだった。

そんなハヤテ達を後ろの方でリムジンが何台か止められていた。
その車のすぐ傍でハヤテ達の様子を眺めているのは駿とマリア、そ

して三千院家ＳＰの方々である。
「あの……
アイツ一人に行かせて大丈夫なんですか？」
「ナギが『ここからは一人で行くから誰もついて来るな』と言ったのですから、そうさせてあげましょう。
でももし本当に危なくなったら、助けてあげて下さいね♪」
「はぁ、まぁ……」
いくら後ろといってもナギ達の場所から僅か数十メートル無いし離れた距離。
何かあればすぐにナギ達の元に駆けつける事が出来るだろう。
「それにもしかしたら、こういう所で二人の距離が縮まるとかもしれませんから」
駿が前方を見つめて尋ねると、マリアは薄く微笑んで答える。
「確かに、二人の誤解を解くより二人がお互いを好きになった方が良いですよね……
でもハヤテがアイツを好きになるって事は……」
幼女性愛者（ロリコン）への目覚めが……
「……それはまずくないですか？」
「……そうですわね」
二人は中々恐ろしいハヤテの未来を予想して顔を見合わせた。

「本当にややこしい事になってますね……」

「そうですね……
本当に困っていますわ」

マリアは頬に手を当ててため息をついてみせる。
暗闇の中で月光に照らされる彼女のその仕草はどこか儚げで美しかった。
それこそ年下の男性がドキリとしてしまうような……

（それ俺じゃん……）

一人地の文に突っ込む駿はおいておき、前方ではヤクザ達とナギの言い合いが始まっていた。

ヤクザの一人が借用書を突きつけて怒鳴るが、ナギ基マスク・ザ・マネーは『違法金利だハゲ』と相手を挑発する。
ヤクザは額に青筋を浮かべてマスク・ザ・マネーを睨み付けると、今度はハヤテが彼女の前に立ちはだかる展開となった。

『この人には指一本触れさせない』と……
しかしヤクザ達に蹴り飛ばされると簡単に袋にされてしまう。

そして一人のヤクザが
『人間扱いして欲しかったら今すぐ１億５０００万返済してみせろや！！』
と怒鳴ると、

「してやるよ……全額返済」

ナギがそう呟いて指をパチンと鳴らすと、マリアの隣にいた筈の駿が大きなスーツケースを持ってナギの横にやって来た。

「駿、頼む」

「へ～い」

駿はスーツケースを黒服達の前まで運ぶとゆっくりと地面に降ろして開いた。
するとどうだろう。
そこからはお札の束が山ほど飛び出してきたではないか。

「「「!?」」」

流石に仰天するヤクザ達。
ハヤテも唖然といった感じでその様子を眺めている。

「まさか……全部本物？」

「ったりめーだ。
コレ重かったんだぞ」

札束を見て声を上ずらせるヤクザに駿は肩に手を当てて答える。

「これで……
文句は無いだろう貴様ら」

「……」

そして暫し睨み合うマスク・ザ・マネーとヤクザの男。

「おい、帰るぞ」

「え!?いいんすか兄貴!!」

男の一人がスーツケースに札束を戻すとそれを担いでハヤテに背を向けた。

「金を払わない奴には容赦しねーが……
払えば客だ。
手は出さねーよ」

ヤクザはそう言ってゾロゾロと彼等の車の方に引き上げていった。
『今度はあんたがそいつから、この金を返してもらうんだな』
と捨て台詞を残して……

「では私もこれで……
行くぞ、召し使い」

「誰が召し使いだコラ」

マスク・ザ・マネーは踵を返すと駿を連れてハヤテの前から去っていこうとするが……

「ちょ……
マスク・ザ・マネーさん!!」

「？」

ハヤテが彼女を呼び止めた。

「お嬢様に会ったらこのお金は全額働いて返すから……
これからも執事の仕事をよろしくとお伝え下さい」

「……はは。
だが彼女は、その金をただでプレゼントしたつもりだぞ？」

「ダメですよ、働いて返さないと……」

彼女は振り返りそう言うが、ハヤテは首を横に振った。

「だって悪いじゃないですか…
そんなおかしなマスクをつけて助けに来てくれた方に」

ピキッ……！！

「ですからそのお金は……」

「働いて返せ！！」

一変。
マスク・ザ・マネーは先程の言葉を１８０度ひっくり返した。

そう。彼女はこの姿をとてもカッコイイと思っていたのだ。
しかしハヤテに可笑しなマスクと言われてしまった……

（またコイツは……
余計な事を……）

彼女の隣で呆れたようにその様子を見ている駿。

「やはりお金の貸し借りは白黒はっきりつけないと正義のために良くない。
だからそのお金はお前が馬車馬のように働いて……
持ち主である三千院ナギに一円残らず全額返せ！！いいな！！」

「え……？
あ……はい……」

怒りマークをいくつも浮かべるマスク・ザ・マネーに何が何だか分からないハヤテ。

こうして……
両親の残した借金は……
晴れてハヤテ本人の借金になった……

「あの……マリア様
あの二人放っておいていいんですか？」

「良いんじゃないですか？
兄妹みたいで♪」

前方で始まったナギの一方的な喧嘩を見守るＳＰ達とマリアであった……

そして翌日……

～生徒会室～

「はい、仕事量三倍ね♪」

「マジっすか！？」

前日逃亡した罰として、駿には大量の書類と資料の山が会長からプレゼントされたという……

其の参　いつの時代でも口は災いのもと（後書き）

次回ー！！
遂にあの人物と駿が接触！！
そして彼に関係する新たなキャラが少しだけ姿を見せる……！？

伽藍
「次回もよろしくお願いします♪」

其の四　夜明けの予兆（前書き）

今回は短い上に、ほとんど時間が進まない話です。
更に物凄く抽象的でかなり分かりにくいと思います。

何コレ？みたいな感じになるかと
ですがそれはいずれ分かる時がきます。

一応重要な話です。

駿
「では、始まります！！」

其の四　夜明けの予兆

闇夜を這う銀色の光……
それは縦横無尽に暗闇の海をを泳いでいく……
まるで何かを斬り裂いていくかのように……

『ギャアァァァァ！！』

ボンッ！！

明け方の神社に響く悲鳴。
そして煙とともに何かがその場から後を消す……

「……」

その様子を神社の広場で確認すると、無言で日本刀をしまう青年が一人。

白い着流しに白い袴。

そして風にさらわれる綺麗な黒い髪……

「……」

その青年は琥珀色の瞳で広場を一望すると、踵を返して暗闇の中に姿を消していった……

其の四　夜明けの予兆

「ふわぁ……」

欠伸を一つ

鷺ノ宮駿は川沿いのちょっとした丘を歩いていた。

時刻は午前五時半……
冬なので辺りはまだまだ薄暗く、突き刺さるような冷たい風が吹きつける。

「……眠い」

しかし駿は大して寒さを感じていないのか、呑気に呟きながら足を進める。
彼の姿は依頼の時の和服姿。

（もう夜が明け始めてんな……）

駿は西側の空を見ると少しずつだが下の方が薄明かるくなり始めている。
彼はそれを確認すると下の河川敷に降りていく。

開けた広場には、
真ん中に木で出来た屋根付きのベンチが並ぶ建物があった。
屋根に蔦が生い茂っていて柱にまで伸びている。
やや古めかしい外観だが、よく日除けの為に使われる場所であり、正面には綺麗に流れる小川と緑が繁る草原があって非常に眺めが良い。

（ここからは空が綺麗に見えるんだよな……）

駿は長椅子のある所に向かって歩きながら口元を緩めて空を見上げる。

依頼で帰りが明け方になる時、よくそこで座ってゆっくりと空を眺める事……

ただ何もせず、何も考えずに夜が明けていく空を見つめている。
それが彼の楽しみの一つでなのである。

（……ん？人か？）

そんな思って駿は足を進めたが、そこに既に誰かが座っている事に彼は気付いて首を傾げる。

彼が不思議に思うのは無理も無いだろう。こんな時間この場所に人がいるなんて珍しい事である。

（……？）

駿は長椅子の場所に近づいてみると座っていた人も気付いたように顔を向けるのが分かった。
そして……

「「……あ」」

駿とそこにいた人がばったりと出会う形となった。
二人はお互い驚いたように声をあげるが、相手の方が特に驚きが大きいようだった。

駿の前に座っていたのは女性。
綺麗な黄色い髪は腰の辺りまで卸していて、右側の髪を赤いリボンで可愛らしく結っている。
服装は足元まである黒いロングコートを纏っていて、よくは見えないが下にはセーターにスカートと着ていた。

「君は……この前の…」
「えっと……あ…」

駿が驚いている理由は既に彼女と出会っているからだ。
そう。前回翼の家からの帰り道に偶然あったあの美少女である。
その時、彼は彼女にいきなり抱き付かれたのである。

二人は暫く何を言っていいものかと不思議な沈黙に包まれたが…

「……隣、いいかな？」
「え？
……あ、はい」

駿は彼女の返事を聞くと、ゆっくりと隣に腰を降ろした。

「綺麗な空だよな……」
「え？」

駿は空を見上げると唐突に口を開いた。

「この場所はさ……この辺で西の見渡しが一番良いんだ。
だから特に明け方が綺麗なんだよ」
「……」

「生きてりゃ嫌な事や辛い事なんて山ほどあるけど、
そんな時はここで何もせずにのんびり空見てんだ。
何か悩んでる事なんてどーでもよくなるんだよな……」

「ええ……
確かに綺麗ね」

見上げたままの駿に彼女は薄く微笑んで始めて言葉を返す。
すると彼は視線を薄明かるい空から美少女に戻した。

「んで？
君は何でこんな時間にこんな所にいるんだ？」

「それはあなたもじゃない？」

「俺？」

駿は先程からの疑問を見ず知らずの彼女に投げかけた訳だが、至極当然のようにそれは笑顔で返されて彼の所に戻ってきた。

駿がこんな時間に外出している理由はいつも通り依頼の為である。

今回は明け方との依頼だったので彼が家を出たのが午前四時だったのだ。
だが勿論そんな事をばか正直に言うわけにはいかない。

「えっと……ジョギング」

「あら、そんな格好で？」

彼女は可笑しそうにクスリと笑うと駿の服を見て言った。
そう、彼は和服姿だ。
和服姿でジョギングをする奴が一体何処の世界にいるというのだ。

「あ、いや……
これはアレだ。一見和服だけど、実は優れたランニングウェアなんだ。通気性抜群で軽いしクールビズという……」

「それは珍しいわね。
でも今は冬よ？」

「あ……」

そんな駿が面白いのか彼女は楽しそうにクスクスと笑う。

「いや、
それを言うなら君だって」

「楓」

「へ？」

駿が慌てたように彼女に顔を向けると、一言そう返された。

「私の名前。
篠月楓（しのづきかえで）
楓で良いよ」

「……」

ニッコリと。
楓は駿に向かって微笑んだ。

「……ああ。えっと、
俺は鷺ノ宮駿だよ」

「……」

我に返った駿が慌てて挨拶を返すと楓はそれを聞いてどこか寂しそうな表情を一瞬見せたが……

「じゃあよろしくね、駿」

「……よろしく」

すぐに笑顔に戻して手を差しのべる。
駿はその様子に何か引っかかるような気持ちを覚えたが、それは表情に出さずに握手をした。

「……夜が明けていくね」

「ん？
お、本当だな」

楓が西側の空を見つめると、駿もそれにつられて振り返る。

一面にはられた薄暗い水色を徐々に徐々に鮮やかな黄色が登ってゆく……
そして二色は絶妙に混ざりあいそして広がってゆく……

それは見慣れている筈の光景なのにやはり幻想的で、形容しがたい美しさをありありと見せつけてくれた。

「綺麗……」

「そうだな」

二人は刻々と変化してゆく空の様子にただ見入っていた。
ありふれた景色でも少し気に止めればこんなにも違って見えるのかと言うように……

そしていつの間にか光が漏れだして遠くの太陽がその姿空に煌々と浮かび上がった……
朝の始まりである……

「おはよう」

「え？」

「朝の挨拶でしょ？
だから、おはよう♪」

「あ、ああ……おはよう」

楓はそう言って微笑むと彼は首を傾けて挨拶した。
どうも掴めないタイプの彼女に駿は内心首を傾げつつ、時計を見ると時刻は午前六時十五分をさしていた。

（つーかこの分だと今日徹夜になるな……

今日は仕事無きゃ良いけど…）

「あ、そうだ！」

「？」

すると、突然楓が思い出したように声をあげると駿に目をむけてきた。

「ねぇ駿、お腹空いてない？」

「そう言われてみりゃ……
確かに」

「だったら……」

駿の返事を聞くと楓はコートの内側に隠れていたハンドポーチのようなバッグから何かを取り出した。

「はい、朝ごはん」

そして駿の手の平にビニールに入ったパンを乗せてくれた。

「……メロンパン？」

「うん♪
私メロンパン大好きだから」

楓は笑顔でそう言うと嬉しそうに両手を合わせた。

「えっと、貰って良いのか？」

「うん。
まだ種類があるから」

駿は渡されたパンを持ったまま尋ねると、楓は自分のバッグを指して頷いた。

「そっか。
んじゃ遠慮な……」

「……」

「どうしたの？」

【醤油メロンパン】

駿はパンを食べようとビニールのパッケージを見て固まった。
そこにはメロンパンの前に『醤油』という文字。

「あの……
何ですかコレは？」

「醤油メロンパンだよ♪」

「……醤油メロンパン？
……醤油？」

駿はまじまじとパッケージを見つめながら頬をひきつらせる。

「とっても美味しいわよ♪」

「……マジ？」

「うん！」

力強く頷く楓だが、彼は当然のごとく首を傾げる。

何せ醤油とメロンパンという異色の組み合わせなのだから。

「……あの～、他のメロンパンはありませんか？

出来れば普通の……」

「えっと……」

その問いに楓は首を振ると、

バッグからいくつか袋を取り出して彼の前に出してみせた。

【ラー油メロンパン】

【ワサビメロンパン】

【デミグラスメロンパン】

「それから……」

「いや、もう醤油で良いです」

次々と飛び出してきた恐ろしいメロンパンの数々に駿は両手を振っ

て彼女を止めた。

「しかし……
醤油って……食えるのかな？」

「む、失礼ね～。
とっても美味しいのよ。
他のメロンパンも美味しいけど一番のオススメ。
騙されたと思って食べてみて」

「う～ん……」

そこまで言われたら食べない訳にもいかない。
駿は渋々袋を開けると恐る恐るパンを口に運ぶ。

「……」

「ね？
美味しいでしょ？」

メロンパンを食べる駿に楓は小首を傾けて尋ねるが……

「……騙された」

「む……！」

彼は頭を押さえると顔をしかめてそう呟いた。
楓は少しムッとしたように駿を見る。

「味覚は人それぞれって言うから……俺は嫌だけど」

「……美味しいのに」

楓は拗ねたように呟くと、どこから取り出したのかもう一つの『醤油メロンパン』を口にした。

「まぁ、日本独特の醤油の風味がメロンの香りに恐ろしくマッチしていない所が逆に良くないとも言えなくもないような気がしないでもないような……」

「馬鹿にしてる……？」

ジト目で見つめてくる楓に構わず駿は無理矢理醤油メロンパンを口に放り込んだ。

「さてと……
それじゃ、俺はそろそろ失礼しようかな」

「あ、うん……」

駿は長椅子から立ち上がると歩いて休憩場を後にしようとする。

「あ、待って！！」

「ん？」

楓も立ち上がると歩いていく彼を呼び止めた。

「また明日ね」

「明日？」

楓は口元を緩めて薄く微笑してみせた。

「……俺は明日来るかどうか分からないんだけど」

「ええ。

でも、また明日会う気がするから……」

「何だそりゃ……」

彼女につられて駿も微笑すると背を向けて再び歩き始めた。

「あんま不健康なモノは食い過ぎんなよ」

彼は頭を掻きながらヒラヒラと手を振って河川敷を後にするのだった……

その後ろ姿を見えなくなるまで見つめていた楓。

「……やっぱり彼よ。

間違いない」

「あら、私（わたくし）は早すぎる結論だと思いますわよ楓さん」

彼女がそっと口を開くと、その隣から突如もう一人の人間がまるで魔法でも使ったかのように姿を現した。

「世の中に似ておられる殿方は沢山いらっしゃいますわ」

楓の隣に現れたのは紅く美しい唐衣を身に纏った女性だった。
顔の前に山吹色の扇子を広げているので容姿は分からないが、藍色の瞳に、青みがかった黒髪を長く卸している。

「いいえ、確かに彼だわ。
和服姿だったから驚いたけど尚更確信が持てた」

「楓さんは昔からそそっかしいですから逆に信用出来ませんわ」

「な!?
どういう意味よ!?」

楓は隣の女性の言葉に思わず顔を赤くして声をあげる。

「確かに先程の殿方は瓜二つでした……
ですがどこか雰囲気に欠けますわね」

「雰囲気って……」

紅い唐衣を来た女性は扇子を少し傾けて続ける。

「あの方は私にとっては無くてはならない大切なお方ですわ。
もし仮に、楓さんの言う通り生きておられるあの方が、
先程の殿方だとおっしゃるならば当然相当お強い筈です……
でしたら」

「綾?」

そこでピシャリと扇子を閉じると美しい美少女がそこから顔を覗かせた。

「この私……皇綾姫（すめらぎやめ）が直々に確かめてさせていただきます」

この日……

誰も気にもとめないような水面下で、だが確かに何かが動き始めたのだった。

其の四　夜明けの予兆（後書き）

三人娘の
～生徒会通信！！～

泉
「今回は早速質問が来てるよ～」

美希
「えっと『作者に質問。駿君はお金持ちの家に住んでいるのに金銭感覚は普通なんですか？』」

伽藍
「はい。駿は金銭感覚は一般人となんら変わりません。
ゲームのソフトを買うのに所持金が足りないと嘆くレベルです。
理由は彼の鷺ノ宮家に来てからの修行時代にあります。
いずれ本編でやりますが、彼はとにかく色々な国や場所に放り込まれたりしたのでお金の価値は人一倍分かっています。
これ以上は本編でやるので、こんな感じで」

泉
「はい、ありがとうございました～♪」

理沙
「という訳で次回！！
駿君の身に何かが起こる！？」

美希
「時間軸は今回の話と同じ日、続きになってるよ」

泉
「それではまた次回～♪」

其の伍　取り敢えず運命って言っておけばソレっぽい（前書き）

伽藍
「これってハヤテのごとくだよね……」

駿
「はい？」

伽藍
「という訳で始まります！」

駿
「いやどういう訳だよ！？」

其の伍　取り敢えず運命って言っておけばソレっぽい

キーンコーン……

「……ｚｚｚ」

「寝るなー」

スパーン！！

午後の生徒会室。
そんな中、翼の声と共に乾いた音が響いた。

「ってーな！！
何するんだよ！？」

「起こしてやってんだろーが。
寝てんのバレたらまたヒナギクに怒られるぞ」

駿は後頭部を押さえながら翼を見上げるが、翼はヒラヒラと手を振ってみせる。
今の音は翼が持っていた教科書で書類を前に寝ていた彼を叩いて起こしたものであった。

「オイ勘弁してくれよ……
今日寝てねーんだって。
ほら、俺の顔疲れてダルそうだろ？」

「そうか？
いつもと変わんねーぞ？」

「いや、それはそれで傷つくんですけど……」

「知るかよ……
ほら、根性根性」

翼はうだっている駿の肩を叩くと彼の前に積み上がった書類を差し出した。

「はぁ、マジか……
ってか最近皆厳しいような気がする……」

駿はくたびれたように肩を落としてため息をつく。

コトッ……

「はい、駿君」

「ん？」

すると、彼の前に一つのーカップが置かれた。
駿が顔を上げると目の前には心配そうに小首を傾げる千桜の姿。

「普通のコーヒーだけど、
飲めば少しは眠気や疲れがとれるよ」

「千桜……」

湯気が立ち上ぼりコーヒーのコクの深い香りが駿の思考をはっきりし始めさせた。

「ありがとう……！！」

「な！？駿君！？／／／」

彼は立ち上がると千桜の両手をとって包むとお礼を言った。
彼女は突然の事に驚いて頬を赤らめる。

「千桜は優しいな……
やっぱ人間、お互い助け合う心が大切だよな……！！」

「／／／」

駿は彼女の様子には気付かず素直に感動して手を握る力を強めた。
それがますます彼女を赤くさせるのだが……

（仕事頑張ろう……）

ちょっとした優しさが身にしみた駿の１６歳の冬であった……

本日の生徒会メンバーだが、愛歌は体調不良で欠席。
三人娘はテストの点数がすべからく酷く補習。
ヒナギクは彼女達の補習を教える羽目となっていた。
よって現在、生徒会室には駿、翼、千桜の三人しかいない。

まぁそんな訳で三人は各々仕事に取りかかっているねだが……

「なぁ……」

「「？」」

そんな中、書類の山に頭を乗せてぐったりしていた駿がおもむろに口を開いた。

「醤油味のメロンパンって、食った事ある？」

「……」

翼は隣に寄っていって駿の額に手を当てた。

「熱は無いな」

「何で可哀想なものを見る目を俺に向けるんですか」

駿は翼の表情を見てゆっくりと頭を起こす。

「メロンパンが醤油の味がしたのならそれは疲れてるんじゃないか駿君。
帰って休んでも良いよ」

「おお、そうだな。
俺が送ってこうか？」

「違ぇよ！！
そうじゃ無いから！！
その哀れみの視線は止めてくんない！？」

二人の視線に駿は叫ぶと、コホンと咳払い一つして落ち着きを取り戻す。

「俺が食べてるとかそんなんじゃ無くてだな、今日の朝そんな奇妙なパンを食べてる奴に会ったんだよ。んでソイツが美味しいとか言ってだな…」

「「へぇー」」

「全然信じてる声じゃ無いっすね……」

駿は棒読みな返事に呆れてため息をつきながらも続ける。

「まぁ、それで他にもワサビ味のメロンパンとかデミグラスソース味のメロンパンとか訳の分からないモン出してきてさ……
……そんなパンって売ってんのかな？」

「「……」」

そんな彼の言葉と様子に翼と千桜は顔を見合わせる。

「そうだな……

樹海にはそんな店もあるかもな。まぁ頑張れ」

「だからその哀れみに富んだ視線は止めてくれません!?つーか樹海なんて行かねーよ!!」

どうやら二人ともそんなパンは知らなかったようである。

醤油メロンパン発言は鷺ノ宮駿という人間を変な奴として二人の認識を新たさせることになったような違うような。

まぁ元々頭のネジが飛んでる変な塊のような奴なので今更変わらないとは思うが……

「地の文でそんな酷い事書くなよ!!」

其の伍　取り敢えず運命って言っておけばソレっぽい

～鷺ノ宮家～

深夜…

生徒会の仕事も終わり駿は家に帰った駿は縁側に寝転んでいた。
伊澄は旅行で居ないので特にする事無しに夜から深夜までそうやって過ごしていたのだ。

「……そろそろ行くかな」

彼は仰向けに寝転んでから暫く目を閉じた後、起き上がって首を二三回振った。

“行く”というのは勿論依頼の話である。
本日は依頼が無かった筈だが、駿が生徒会に行っている間に依頼が入ったらしい。
『神社で化物を見た』と……

せっかく休めると思った彼だが、こういう家なので仕方ないと和服に着替えて縁側で時間を潰していたという訳だ。

「よっこらせっと……」

年寄りのような声をあげて駿は縁側から降りると、頭を掻きながら家の門の前まで歩いていく。

「……眠」

大きな欠伸を一つ。
駿は門をゆっくりと開けて闇の中に消えていった……

そして十数分後……

駿は目的地である神社を目指してフラフラと下に河川敷が広がる小高い道を歩いていた。
今朝通った道と同じだが、明け方時小川がきらびやかに光っていたのと違って、暗闇にサラサラと水の流れる音だけが聞こえる。

（……ん？
アイツ……）

そんな中、駿は河川敷にある屋根付きの長椅子に座っているある姿を目にした。
彼は少し首を傾げるが、すぐに河川敷に降りていってその休憩場に向かっていく。

「よぉ」

「え……？」

駿は椅子の前まで来ると、
座っている相手の前で軽く声をかけた。
相手は驚いたように伏せていた顔を上げる。

「あ……駿」

「こんばんわ」

その相手は今朝同じ場所で出会った篠月楓だった。
彼女は駿を見るとどこか安心したように微笑んでみせる。

「隣いいか？」

「うん」

駿も彼女の表情を見て少し口元を緩めると隣に腰を降ろした。
長椅子といえど人が三人座ればいっぱいになるくらいの広さなので、
二人の距離は拳二つ分くらいしかない。

「んで、篠月は何してるんだ？」

「楓でいいよ」

「分かったよ……
楓はなんでこんな時間にこんな所にいるんだ？」

駿は少し気恥ずかしそうに頬を掻くと、改めて彼女に尋ね直す。

「えっと……そうね。
風にあたってたのかな」

「そっか……
確かにここは風当たり良いよな。眺めも良いし」

駿がそう言って前方の川の方向を眺めると楓も微笑んだまま頷いてみせた。

「そういう駿はこんな時間にどうしたの？」

「え？

あ、あぁ……えっとジョギング？」

「クスクス」

突然聞き返された駿は慌てたように視線をさ迷わせると、首を傾けてそう言った。

そんな彼を見て口に手を当てて可笑しそうに笑う楓。

「最近流行ってるのかしら。

今朝も和服姿でジョギングしてるって人に会ったわよ」

勿論駿の事である。

「……良いんだよ。

和服がいかに運動に向いているかが再認識される時代がくる筈だよ多分」

「あら、それは楽しみね♪」

そんな時代絶対に来ない。

来て欲しくない。

ジョギングしている人が全員和服姿の光景を考えてみると中々恐ろしいものだ。

「あ、そうすれば……
お腹すいてない？夜食にパンでも食べる？」

「醤油メロンパンなら遠慮する」

「む……」

楓がビニールの包みを取り出すのと同時に駿がバッサリと言いきった。彼女はパンの包みを持ったまま駿にちょっと怒った視線を向ける。

「……美味しいのに」

彼女は拗ねたようにそう言うと、メロンパン両手で持って食べ始めた。そのちょっと怒った様子が何だか可愛らしい。

「なぁ、そんなパン一体どこに売ってんだ？
地底都市かどっか？」

「む……普通にパン屋さんで売ってるよ」

「いやいや……
普通じゃな店だからねソレ」

ジト目になる楓に向かって駿は大袈裟に手を振る。

「普通だよ。
大好評発売中なんだから」

「いや……
今日知り合いに言ったら可哀想な目で見られたんだけど。
病院につれてかれそうになったんだけど」

「皆知らないだけだよ。
本当はとっても美味しいのに見た目で決めちゃうんだから」

（……それは大好評とは言わねーだろ。大不評だろ）

駿は呆れたようにため息をつくと椅子から立ち上がった。
無論依頼に向かう為である。

「俺はそろそろ行くな」

「あ、うん。
また明日ね」

「明日会うかどうか……ってこのやり取り今朝もしたよな」

駿は頭を掻きながら楓に振り返ると、彼女は『そうだね』とクスリと笑ってみせた。

「きっと明日も会えるよ」

「……そうかい。
んじゃ、明日はちゃんとした食べ物を持って来る事を期待するかね」

彼はそう言いながら、休憩場に背を向けて歩き出し、闇の中に消えていった。

「……」

「では、私も参りませんと」

駿が去った後、その後ろを見つめる楓の隣にスッと唐衣姿の女性が現れた。

「今日彼の家に依頼を出したのは貴方なのね、綾」

「ええ。
楓さんの言う通り、あの殿方は退魔を生業とする家柄でした。
でしたら直接呼び出す方が早いですわ」

唐衣姿の女性、綾姫は山吹色の扇子を顔の前で広げて駿の去った方向を見つめる。

「綾、しつこいようだけど…
目的を間違えないでね」

「分かっています。
本気を出すような事を致しませんわ。あくまで私が確かめるだけですから」

「本当に大丈夫？
綾は負けず嫌いだから……」

かなり不安そうに綾姫の顔を覗き込む楓。

「誰が負けず嫌いですかっ。
ご心配には及びませんわ。
もし楓さんの言う通り、あの殿方が彼ならば、将来皇家をお継ぎになるお方です。
下手な真似は致しませんわ」

「貴方の親が勝手に決めた事でしょ。後を継ぐのは決まってないわよ……」

綾姫がそう言って袖をひくと、
楓は少しムッとしたように言葉を返した。

「あら、嫉妬ですか楓さん？
らしくありませんわね」

「違うわよ！！」

「とにかく……
あの殿方があの方なのかどうか、私が直々に確かめて差し上げますわ」

楓は慌てて立ち上がって叫ぶが、彼女は気にせずピシャリと扇子を閉じると一瞬で闇の中に姿を消してしまった。

「もう、綾……！！」

楓も困ったように顔をしかめるとロングコートを翻して、綾姫を追うように闇の中にその身を隠したのだった。

＊

駿は依頼の目的地である神社に到着していた。
古めかしい賽銭箱にいくらか神聖な雰囲気のある奉納蔵。
中心には開けた広場の周りには林が生い茂っていている。

その広場の真ん中付近に白い和服姿の鷺ノ宮駿が白夜を片手に佇んでいた。
深夜の風に綺麗な黒髪がたなびいている。

その様子を神社から離れた住宅の屋根から眺めている二つの影。
一人は黒いロングコートを纏った楓。そしてもう一人は紅い唐衣の綾姫だった。
彼女達の場所は神社の位置は見渡す事が出来るが、神社からはかなり気付きにくい。

「何故楓さんが付いてきますの？私一人で問題ありませんわ」

「何かあってからじゃ遅いからついてきたのよ」

楓はそう言って左手に持っていた日本刀に視線を落とした。
彼女が持っているそれは柄から鞘まで黒く統一されていて、鞘が凡そ四尺はあるだろう長さ。

つまり一般に言われる日本刀の刃よりずっと刀身が長い事になる。

「先程も申し上げましたが、
余計な手出しは無用ですわ。
あくまでもあの殿方の力量を試すもの。私でもそのくらいの分別はわきまえています」

「分かってるわよ」

楓がそう言ってため息をつくと、綾姫は満足したように頷いて扇子をヒラリと翻す。

「……」

綾姫は目を閉じるとその扇子を胸の前まで持ってきた。
すると彼女の周りには紅いオーラのようなものが纏い始まる。

「出でよ……」

そう一言呟くと……
綾姫の周り、屋根には次々に全身がただ黒色の仮面を付けたモノ達がゾロゾロと現れ始めた。
二足歩行のソレはキョンシーのような猫背で仮面には何か模様が入っている。
仮面以外は何も身に着けていない、というより身体が全て黒くかなり不気味な様相を成している。

ソレが十数体、屋根の上で綾姫を囲うように立ち尽くしているのである。

黒い仮面達は全員が手に小刀やクナイを携えている。

「これは私の使役する中では最弱の式神……
とは言え、最弱といって油断してかかると足元を掬われます……」

「……」

複雑そうな表情の楓の隣で、綾姫は扇子を閉じて神社の広場に向けてみせた。

「さぁ、お行きなさい」

静かなその掛け声と共に、黒い仮面達は音もたてずに素早く屋根から飛び降りていった。

○

ザッ！！！

「っ！！」

神社の広場にいた駿は僅かに地面を駆ける音を聞き付けた駿は、白い柄に手をかけて神経を３６０度全てに張り巡らせた。

刹那ーーー！！

彼の頭上にニ体の全身黒い仮面が姿を現した。
彼が刀を抜くと同時に、仮面達は小刀を突き立て彼に振り下ろしてきた。

「荒っぽい挨拶だなぁオイ！！」

「「！？」」

駿は瞬時に鞘で二つの小刀を受け止めると、片方の仮面を足で思いきり蹴りあげた。
蹴られた方がバランスを崩しながらも小刀を放るが、駿はそれを刃で弾くとそのままもう横に振り払って両方の仮面を一刀両断した。

「！？」

しかし、今度はその後ろから三体の仮面が綺麗な並列でクナイを両手に突っ込んできていた。

「なろ！！」

「ヴ！？」

駿はいち早く気配に気付いたのか、背を向けたまま左の一体を鞘で突きあげる。
隣のニ体がそれで一瞬動きを止めてしまう。
その統制を失った仮面達の一瞬の隙を突き、彼は反転し低く姿勢を

保ったまま……

「グオ！？」
「ヴヴ！？」

目にも止まらぬ速さで二体の胴体を真っ二つに斬り裂き……

「ヴ！？」

立て続けに身体を捻って左の一体の顔面に思いきり蹴りをくらわした。
ソイツは吹き飛び先の仮面達と同じように煙と共に消える。

そしてまた訪れる静寂……

（個々で暴れる妖怪にしてはやけに統制の取れた動き……
コイツは式神の類いか……？
だとしたら動かしてる奴がどこかに……）

ザッ！！

「ちっ！！
何体いやがんだよ…！！」

また後ろから聞こえた地面を擦るような小さな音に、駿は刀を持つ手に力を込めた。

○

黒い仮面達と駿の戦いを屋根から眺めてる楓と綾姫。

「……確かに、似てますわね」

「だから言ったでしょ」

綾姫が目を細めて刀を振るう駿を見つめる。

「身体の動きと刀の動きに一切の無駄が無い。
且つ、常に状況を的確に読み素早く行動に移す……
集団戦に慣れた戦い方ですわ」

「ええ。
身体に刻まれた記憶は無意識に表れるものよ」

綾姫は扇子を顔を半分隠すように開いた。
楓も腕を組ながら戦場と化した神社の広場を見つめる。

「ですが異なる事もありますわね……今戦っている彼は刀を一本しか使っていませんわ。
ですがあの方は……」

「いいえ。
鞘も使って無意識でしょうけど二刀の戦い方になっているわ……

それに……」

楓が続けようとした時、仮面の一体が駿の顔面にめがけてクナイを直撃させた。
しかし……

「反射神経もかなりのものよ」

「ですわね……」

駿はそのクナイをなんと口でくわえて受け止めていたのだ。
彼はクナイを噛んだままニヤリと笑ったかと思うと日本刀を振り抜き仮面を叩き斬った。

「これで納得したでしょ？」

「……どうてしょう。
確かに出来るようですが、相手は所詮最弱の式神。
これだけで決めるのは浅はかだと思います」

「本当に負けず嫌いね綾は……
さっきと言ってる事が変わってるわよ……」

楓は綾姫の返事にやれやれと困ったようにため息をつく。

「ですが……」

「え？」

「普通の殿方とは違う事はわかりました。

あの方であるかは別に、彼を私が認める男性として差し上げても良いですわ」

（負けず嫌いな上に本当に高飛車ね……）

隣で澄まし顔をしている綾姫を呆れたように見る楓。

「それはそうと楓さん。
貴方、ここにいてよろしいんですの？」

「？」

「私の式神は大体片付けられましたわ。ともすれば、彼はここに来る筈です。
貴方は顔を知られているのですから、この場にいてはまずいのでは？」

綾姫が神社を見つめたままそう言うと楓は少し焦ったように口を開いた。

「え？ちょっと、何で駿がここに来るのよ？」

「先程から、私が必要以上の魔力を放っているからですわ。
彼も戦っている相手が妖怪では無く式神と気付いたようですし、
ここに来るのも時間の問題かと」

扇子で顔を隠したままニッコリと微笑む綾姫。

「な……
貴方もしかして、彼と接触する気！？」

「ええ。少し申し上げたい事もありますしね」

「……」

かなり不安そうに見つめる楓だが、綾姫はどこか愉快そうな様子である。

「ご心配せずとも余計な真似は致しませんわ。ちょっとご挨拶をするだけです。ですから、楓さんは先に戻っていて下さいな」

「……」

○

「……！！」

「ヴヴ！？」

神社の広場で最後の一体の仮面を駿は斬り裂いた。
仮面は気味の悪い音を放って消え去ってしまう……

（コイツで全部か……
後はこんな事を仕掛けた奴が何処にいるかだな……）

彼は何かに感づいた眉を吊り上げると、神社から離れて近くにある林の中にはいっていった……

そして数分後……

「……」

駿はとある住宅の屋根の上に立っていた。
彼の前には紅い唐衣を風にたなびかせ背を向けている女性の姿。

「アンタだな……
さっきの式神は……」

「まぁ、バレてしまいましたか……」

女性はクルリと振り返ると、扇子で顔を隠したまま駿に向かって視線を向けた。

「バレて、ねぇ……
わざわざ誘き寄せてるような気がしたんだけど……」

「フフ、どうでしょうね……」

顔を隠しているので詳しい表情は分からないが恐らく微笑んでいるのだろう。

「単刀直入に聞くけど……

一体何が目的だ……？
今日依頼を入れたのもアンタか？」

「あらあら、そんな恐い表情をしないで下さいな。
確かにアレは私の式神ですが、
何も敵対するためのものではありません。むしろ逆と言いたいのですよ」

「？」

彼女の言葉に駿は訝しげに顔をしかめるが、彼女は首を振って続ける。

「鷺ノ宮家にお強い退魔師がいると聞いて、どんなものか見てみたくなりまして……
敵意はありませんわ。
これは本当です」

「……ま、ならそういう事にしておくよ」

最後の言葉は真剣なもので、その藍色の瞳はしっかりと彼に向けられている。

駿はどうしてか目の前の女性が悪い奴に見えなかったので、肩を竦めるとそう言った。
彼女は『ご理解頂けて嬉しいですわ』と微笑んで扇子を閉じた。

そこから現れたのは、美しく整った彼女の容貌。
月明かりに照らされて幻想的に輝く青みがかった長い髪。
そしてそれと一緒に風にさらわれるようになびく唐衣……

深夜の闇に似つかわしいその美少女の様相に、駿は思わず目を奪われてしまった。
勿論恋愛的な意味では無いが

「私は皇綾姫と申しますの。
貴方のお名前は？」

「あ、あぁ……
鷺ノ宮駿だ」

駿は我に返ると、少し慌てて挨拶を返した。

「そうですか。
では駿様……」

「？」

綾姫はまた扇子で口元を隠して背を向けると、顔だけ駿の方に振り返ってみせた。

「またお会いする機会があると思います。
私、男性の方は基本的に嫌いなのですが、駿様は私が認めた方なので見かけたら是非声をかけて下さいね」

「はぁ、そりゃどうも。
……ってちょっと待て、アンタ一体何者……」

「では、ごきげんよう」

ニッコリと微笑んだかと思うと、綾姫は駿の前から姿を消してしまった。
それは一瞬の出来事で……
まるで魔法のように……

「な！？オイ！？」

駿は消えた綾姫に驚いて周りを見回すが、シンとした静けさが支配するのみで……
既にただの屋根の上にだった…

（転移術……？
いや、でも発動するまでに時間が零に近かった……
伊澄でさえ力を使うのに時間は使うってのに……）

もし本当にそうなら……

冷たい風が改めて身に染みるように感じた駿は……
黙って柄を強く握りしめた……

其の伍　取り敢えず運命って言っておけばソレっぽい（後書き）

三人娘の
～生徒会通信！！～

美希
「おー、駿君もアレだけど新キャラは凄まじいな」

駿
「アレって何だよ！？」

理沙
「うーん、アレはアレだな」

泉
「アレだね～♪」

駿
「あー、アレね～
……だから何だよアレって！！」

美希
「次回は私達の活躍らしいぞ！！」

理沙
「む、そうか！！

遂に私達にスポットが！！」

泉
「よーし、頑張るぞ～♪」

伽藍
「まあ未定だけどね、次回は」

三人娘
「なぬぅー！？」

伽藍
「次回もよろしくお願いします」

其の六　え～とアレアレ……そうだ、試練に行こう（前書き）

今回と次回はハヤテの話です。
特に次回話ハヤテが活躍します
（予定）

その次は翼君メインの話になります。
よろしくお願いします♪

・今回のナギと駿のやり取りは某ギャルゲーの○崎君と○原君のやり取りを参考にした部分があります。
そういうのが嫌いな方は先に謝っておきます。
すみません

其の六　え～とアレアレ……そうだ、試練に行こう

先日……
ハヤテはマスク・ザ・マネーに借金を肩代わりして貰いヤクザの魔の手から救い出された。
しかし、彼の余計な一言が彼女を怒らせて借金は結局自分の元に戻ってきてしまう事になる。
その借金総額や何と……

１５６，８０４，０００円

～三千院屋敷～

「全額返済まで……およそ４０年ですね」

「まぁ、額が額ですからね…無理のない返済計画ではこうなるでしょう……」

屋敷のリビングではマリアが渡した明細書を見て表情をひきつらせたハヤテが震えていた。

「言っておくが、無利子、無担保、出世払いで一億五千万も貸してくれる金融機関は無いんだ！！
感謝されこそすれ、恨まれる筋合いは無いぞ！！」

そして若干罪悪感に苛まれているナギは椅子に座りながらそう言っていた。
罪悪感の理由は無論彼女が一時の感情で借金をハヤテに突き付けたからである。

「だ…大丈夫…ですよ？
感謝は…してますから…」

「笑顔がひきつってますわよ？」

しかし……
借りたお金の額のあまりのデカさに、改めて震えるハヤテであった……

「ふぅ……」

ハヤテは箒で庭を掃きながら疲れたように汗を拭って本日も澄んだ青空を見上げた。

年の瀬も押し迫った１２月２７日。
新しい生活が始まった。
ハヤテが帰る家は家財道具ごと無くなっていたし、

自分を売った親を捜す気にもなれなかったので、
彼はこの三千院のお屋敷で執事の仕事を始めたのだった……

（確かに額はデカいけど……
前の生活に比べたら天国のような環境だし……
返済まで４０年って事は完済した時にはまだ５６歳！！
人生はまだ半分残っている……
信長的には６年オーバーだけど）

しかし彼はグッと拳を握りしめて目を光らせる。

（とにかくこの仕事をクビにならないように……
頑張ろう……！！）

前向きがモットーな綾崎ハヤテである。

其の六　え～とアレアレ……そうだ、試練に行こう

「というか、クビ以前に雇っていません」

ハヤテの前向きな考えは三千院家の執事長であるクラウスの一言によって打ち砕かれた。

「こんなどこの誰とも分からぬ男を採用するわけにはいきません。当然じゃないですか」

ギュッ！

「なるほど……
つまらんジョークをいうのはこの髭か？クラウス……」

「痛たたた……
私自慢のカイゼル髭が……」

ナギはクラウスの髭を力いっぱい引っ張った。

「私が私の命を救って貰った礼に雇うと決めた。
この決定に変更はない！！」

「姫神の後任の執事は私が決めると約束した筈です！！
お嬢様の頼みでもこればっかりは譲れません！！」

こんな感じでナギとクラウスはハヤテを雇うか否かを巡って口論を

始めてしまった。
そんな特に書く事も無いような言い合いが十分ほど続いた挙句……

「それでは、適性試験をしてみてはどうでしょう？」

見かねたマリアが両手を合わせて微笑んで口を開いた。

「「適性試験？」」

「はい？
本当にお嬢様を守れる人間かどうか試してみれば分かりますし…
本当にお嬢様を守れる人ならば、例え煮えたぎるコールタールのプールでも泳いで渡れる筈ですし…」

笑顔でそんな事を口にするマリアにハヤテは頬をひきつらせる。
そんな彼には構わずナギは大きく頷いた。

「確かにきっと……
上空２千ｍから落下しても平気だろうし……」

「いや、全然平気じゃ無いですよ？」

「素手で腹を空かしたヒグマとも戦える筈だよきっと！！」

「戦えません、っていうか聞いてますかお嬢様？」

「よし！！
その適性試験とやら、受けてたとうではないか！！」

（話を聞けェェェェ！！）

ハヤテの声は完全に聞こえていないのか、ナギはキラキラと目を輝かせると拳を前に出して言いきっていた。

「わかりました。
では、その男が三千院家の執事に相応しいか試す試験を行いましょう」

「ほぅ……
まぁどんな試験だろうが、ハヤテなら楽勝なのだ」

しかしクラウスはフッと微笑すると自慢らしいカイゼル髭を撫でて明後日の方向を向く。

「では、三千院家執事適性試験として“試練の洞窟１Ｆ”に挑んで貰いましょう！！」

ドーン！！！

「……あの、何ですかそのウィザー○リーの最初のダンジョン感溢れる名前は？」

「ふん。
舐めて貰っては困るな小僧。
試練の洞窟は三千院家が執事の力量を測る試験として正式に採用されておるのだ」

呆れ半分でおずおずと尋ねるハヤテにシレッと答えるクラウス。

「そうか……
またあの試練を行うのか」

「でもクラウスさん、あの試練で帰って来れたのは最近では姫神君しかいませんよ？」

（ええ！？
本当にあるの！？ギャグじゃ無かったの！？）

ナギとマリアが思っていた以上に真面目な反応をしたので色んな意味で驚くハヤテ。

「お嬢様がそこまで自信を持って薦める男ならば、この程度の試練乗り越えて当然だと思いますぞ。それとも、こんな試練すら越えられないとでも？」

「む！！
馬鹿にするな！！ハヤテならばそんな試練朝飯前だ！！」

「ならば決定ですな……」

ハヤテの意思は一切関係無し。
クラウスは『説明の準備の為に一旦屋敷に戻るからここにいて下さい』と言ってその場から立ち去ろうとするが…

「ちょっと待って下さいクラウスさん」

「何だマリアよ」

マリアが彼を呼び止めた。
クラウスが振り返ると彼女は人差し指をたててニッコリと微笑む。

「試練の洞窟までは遠いですし、中もどうなっているか分かりませんからハヤテ君一人というのは危険だと思います。
ですから付き添いの人を一人付けるというのはどうでしょう？」

「付き添い？」

「ええ」

しかしクラウスは訝しげそうに顔をしかめてみせる。

「これは彼の技量を試す試験ですぞ？」

「ですが、もし何かあった時の為に一人は隣にいた方が良いかと。
そのくらいの配慮はクラウスさんでしたら当然考えますよね？」

「む……まぁ確かに」

「そうですよね」

マリアの言葉に渋々だが折れたクラウス。彼女はそれを確認すると『適任の方がいるから呼んできます』と屋敷の方に戻っていった。
残ったのはクラウス、ナギ、ハヤテの三人。

「まぁ、ではマリアがその付き添いを連れてくる間に適性試験の内容を簡単に話すぞ」

「は、はぁ……」

軽く咳払いをしてハヤテに向き直るクラウス。
ハヤテはここまで話が進んでしまった為後には引けず、頷いておくことにした。

「君には今からこの屋敷の敷地内にある洞窟に向かってもらう」

（敷地内に洞窟!?）

「その魔の洞窟の１Ｆの一番奥に三千院と彫られた純金の棒が納められている。
それを無事に取ってきたら、まぁ適性有りと判断しよう」

（魔の洞窟!?
魔って言いましたけど今!?
ってか１Ｆってなんだ!?
何階層もあるのか!?）

説明の端々……というか丸々がツッコミ所満載である。
敢えてスルーする訳にもいかない彼は心中で突っ込んでおいた。

「分かったか少年?」

「フッ、ハヤテに不可能はない。それだけは言っておこう」

（僕達まだ会って間もないですよね……!?）

自信満々にクラウスに胸を張るナギ。ハヤテの気持ちなど一切関係ないようだ。

「あの試練に今まで幾多の執事がやられてきた事か……
果たしてそんな少年に成し遂げられるかどうか……
結果を楽しみにしていましょう」

クラウスはクルリと背を向けると屋敷の方向に歩いていってしまった……

「よし、頑張れハヤテ！」

「え、ええ……
まぁ、はい……」

まだ見ぬ適性試験にハヤテはどうして良いものか途方に暮れるが、
ナギの手前頷かない訳にはいかないのである。
不憫な男であった……

15分後……

「なるほど。
確かに付き添い人には適任かもしれんな」

「ええ」

ナギはマリアに連れて来られた人物を見て納得したように頷く。
その人は今、ハヤテの隣に立たされている。

「よし、では頑張って来るのだぞハヤテ！」

ナギの掛け声と共にハヤテと付き添い人は課題の洞窟に向かって歩き始め……

「あの～……」

「何だ。
何か疑問があるのか？」

「疑問しか無いんですけど……
俺は何故ここに連れて来られたんですか？」

連れて来られたその人物とは……鷺ノ宮駿その人であった。

「決まっているだろ。
お前はハヤテの付き添いだ」

「いや、何の付き添いだよ？」

「試験の」

「何の？」

「執事の」

「……」

駿は数回瞬きをして地面に視線を落とすと……

「丁寧に過程を説明してくれる配慮も無しッすか！？」

「一々面倒な奴だな……」

当然のツッコミを入れるがナギは心底面倒臭そうにため息をつく。

「つまりだな……
斯々然々という訳だ。
分かったか馬鹿」

「お前全ての説明がそんな方法で片付くと思ったら大間違いだからな。後馬鹿って言うな」

するとマリアが二人の間にゆっくりと入ってきた。

「突然お呼びしてごめんなさいね。私が説明しますから」

「はぁ」

彼女は申し訳無さそうに口を開くとまだ状況がさっぱり掴めていない駿に事情を話し始めた。

・・・・・説明中・・・・・・・・・

「はぁ、なるほど……

つまりハヤテは執事である事を認めて貰う為に“あの洞窟”に向かうことになったんですか」

「簡単にまとめるとそうですね」

駿は大体の事情を把握したらしく、何回か頷いていた。

「でも、どうして俺に？」

「えっと……」

首を傾げる駿にマリアは近づくとナギ達に聞こえないようにそっと顔を寄せた。

「駿君なら何回も行った事がありますよね？」

「そりゃ、まぁ……昔散々ばあちゃんに痛め付けられた場所の一つですし……」

「ですから、場所や中の様子も知っているだろうと。それに、駿君なら頼りになると思ったので……」

「ええ、それは……（って、待てよ！？）」

駿はマリアに返事をしようとしたが何を思ったのか言葉を止めた。そして急に彼女に背を向ける。

（今、頼りになるって言ったよな……って事は俺はマリアさんに頼

りにされてるって事か！？）

「？」

背を向けたままの彼に不思議そうに小首を傾げるマリア。

（頼りに……はっ！！！
もしや……これはマリアさんＥＮＤのフラグが立った！？）

注）違います

（言われてみれば……
今話しているときの瞳がいつもより麗しく輝いていたような……
それに頬も赤くなっていた気がする！！）

注）１００％勘違いです

（そうか！！
いや、だがしかし！！
俺には伊澄がいるだぞ……！！
伊澄を裏切れというのか！？
でも……いや……だけど…）

頭を抱えて心の中で訳の分からない葛藤を始める馬鹿一名。

「あの……駿君？」

「はっ！！
あ、ハハハ……すみません。
何の話……っと、ハヤテの付き添いの話でしたね」

マリアの言葉に気付いた駿は慌てて彼女に振り返って乾いた笑い声をあげる。

「それでえっと、お願い出来ますか？」

「……ええ、任せて下さい！
必ずやマリアさんの為にこの任務を果たさせてみせます！！」

何を思ってか駿はマリアの手を取ってそう宣言した。
全く救いようの無い奴である。

（私の為じゃ、無いんですけどね……）

困ったようなマリアを余所に、駿はナギ達の前に戻っていった。
ナギは腕を組ながら彼に目を向ける。

「それで、状況は理解したか？」

「ああ、分かったよ。
付き添えば良いんだな」

駿が仕方ないとばかりにそう言うと、ナギはうむと頷く。
マリアも彼女の隣に戻ってきた。

「まぁ本来はお前のような馬鹿にハヤテを任せるのは不安且つ不本意だが、ハヤテが危険な目にあうかもしれないからな。
それは絶対にダメだ」

「俺は危険な目にあってもいいっていう風に聞こえるんだけど」

「ああ。構わん」

「ちょっとは考えましょうよ！？」

即答で断言してみせたナギ。

彼女の認識ならば駿はどうなっても良いらしい。

「すみません駿君。

突然巻き込んでしまって。

えっと、僕一人でも大丈夫ですよ？」

ハヤテが申し訳無さそうに駿にそう言うと何故か隣のナギが口を開く。

「何、遠慮するなハヤテ。

ダンジョンに危険は付き物だ。例えば矢が降ってきたらコイツに代わって貰えば良いし、岩が転がってきたらコイツが喜んで身代わりに下敷きになってくれる事だろう」

「それ最早ただの盾ですよね！？

つーか泣くぞ！？」

「勝手に泣け」

ナギの素っ気ない一言に駿はさめざめと涙を流し始めた。

そんな様子を困ったように見守るマリア。

「なぁ、駿」

「……なんでしょう？」

うるうると涙を流す馬鹿にナギは一言。

「目障りだから泣くなら隅っこで泣け」

「アンタ血も涙も無いですね！？」

流石に駿が気の毒になる構図ではある。

「まぁそんな事は置いといてだ」

「置いとくなよ！？」

「一々五月蝿い奴だな……」

駿に向かって大層面倒臭そうにため息をつくナギ。

「ものを頼む立場ならお世辞でも良いから誉めてくれても良いんじゃないかと思うですけど…」

「……誉める？

う～ん、残念ながらお世辞でも思い浮かばんな」

ナギは真顔で駿を見るが、暫くして横に首を振ってみせた。

駿は立ち上がって頭にはいくつか怒りマークを浮かべる。

「……ホント、オメーの態度には毎回毎回頭が下がるよ」

「そうか？ありがとう」

「褒めてねーよ！！！」

そんなコントのような口論のようなやり取りがこの後十数分間も続いたという……

まぁそんな訳で……

「すみません……
こんな事に付き合わせてしまって……もし嫌だったら…」

「いいよもう……
どうせ今日は暇だったし」

駿とハヤテは並んで屋敷の庭を歩いていた。
結局何だかんだで駿がハヤテを洞窟に向かう事になったのだ。

「そういえば、この間はありがとうございました」

「この間？」

「あのクリスマスイブの時と借金の返却の時の……まだちゃんとお礼を言ってませんでしたから」

ハヤテはそう言ってニッコリと微笑んだ。

「ああ。
まぁ良かったじゃねーか。
借金の心配も仕事も無くなった訳だしな」

「その仕事が決まるかどうかの試験らしいんですけどね」

「そういやそうだったな」

二人はそんな他愛ない会話をして歩いていく。
そして脇にある林を抜けて細い小道を通り、霧がかった西洋風の洋館が立ち並ぶ場所を通り過ぎていく……

「あの……
ここって庭ですよね」

「気にすんな。
何でも有りなんだよ。
ここの三千院屋敷は」

ハヤテは頬をひきつらせて洋館等を眺めているが、
駿は慣れたものなのか周りには目もくれず歩いていく。

そして更に暫く歩くと、
ようやく前方に岩でゴツゴツとした奇妙な洞窟が見えてきた。
近づくと分かるがかなりの規模の大きさである。
高さは５m、幅はいくらあるかも分からない……

「ここですか……
っていうか本当に日本なんですかここは?」

「まぁ多分な」

二人は広く開かれた洞窟の入口までやって来た。

「んじゃ、入る前に中の簡単な構造を説明しよう」

「は、はぁ……」

駿は岩でゴツゴツとした入口を見上げてそう言った。
ハヤテは未だ唖然としたまま洞窟を眺めている。

「この洞窟は“試練の洞窟”
名称の通りウィザー○リーとかに出てきそうな洞窟系のダンジョンだ」

「本当にありそうですよね…」

「まあな。
ただ侮ること無かれ。
この洞窟は地下３０階まで続く超大規模なダンジョンなんだ」

「地下３０階！！？
ええ！？地下があるんですか！？」

ハヤテは驚いたように地面を見て叫び声をあげる。

「おー。
何でも作った人がＴＯＦ大好きだったらしくてな。
これはモー○ア坑道を意識して作ったらしい。

ただなぁ、あんまらにも地下深く作ったんで遭難者が続出してな、
その後は閉鎖されて試験用にしか使われなくなったんだ」

「いやいや！？
作る前に気付きましょうよ！？」

もっともな意見である。
だが常識に囚われないのが三千院家なのである。

「まぁそれは置いといて、
今回の試験はこの洞窟1階の奥にある宝物を取ってくる試験らしい」

「はぁ、それは先程も聞きましたけど……」

「洞窟は階層が下がる毎にダンジョン内の敵がドンドン強くなっていく仕組みになっているんだ。
だから今回の試験はそんなに時間がかからないと思うけど」

「ちょっ、ええ！？
敵！？敵がいるんですか！？どんな！？」

さらっと言ってのけた駿だが、
ハヤテは目を見開いて入口に目を向ける。

「えっと……
確か、エンカウント式のモンスターが出現するんだ。
因みに各階の宝物の前には強制バトル式のモンスターが出る。
5の倍数の階層には大ボスもいるんだとさ」

「……作った人の顔が見てみたいですね」

もうツッコミ気になれないのか、ハヤテは呆れたように駿に目を向けた。

「ま、細かい事はさておき。
とっとと行こうぜ」

「はぁ……」

まぁ、そんな訳で駿とハヤテは対照的な足取りで洞窟に入っていくのだった……

「因みに俺は何にもしないから。戦うのはお前だけな」

「ええ!?マジっすか!?」

其の六　え～とアレアレ……そうだ、試練に行こう（後書き）

美希
「うおぉい！！
今回は私達の話では無いのか！？」

伽藍
「気分でハヤテの試験の話にしてみました」

理沙
「おのれ作者！！」

泉
「せっかく楽しみにしてたのにー！！」

伽藍
「では、次回の次回の次回という事で！！」

三人娘
「また逃げる気か！！」

ハヤテ
「ハハハ……
次回もよろしくお願いします」

其の七　ハヤテのダンジョン～執事の職と金の秘宝～（前書き）

すみません？
今回で試験を終わらせるつもりでしたが、長くなりそうで次回まで続くことになっちゃいました。
なので前回言った予定は一つズレる事になりますね。

伽藍
「最初はふざけてテキトーにやろうと思いましたが、結構真面目になりました。
ハヤテが活躍します！」

駿
「んじゃ、始まります」

其の七　ハヤテのダンジョン～執事の職と金の秘宝～

試練の洞窟……

三千院屋敷の敷地内の庭にある洞窟型ダンジョン。
洞窟の規模は相当なもので、
地下は３０階まで造られており、各階層には冒険者を苦しめ悩ます仕掛けが多々見受けられる。

元々はアミューズメント目的で造られたこの洞窟だが、あまりの深さに遭難者が続出した為に今は閉鎖されて三千院家執事の採用試験用としてのみ使用されている。

また、長年放置していた事で洞窟内にはモンスターが出現するようになり、階層を下っていくとモンスターがドンドン強くなっていくというＲＰＧお約束の仕組みになっている。
５の倍数の階層には中ボスも存在しており、最下層である地下３０階には洞窟の主が存在しているという。

この洞窟の最下層まで到達出来た者は数える程しかいない……

綾崎ハヤテ

○ステータス

【借金闘士】
ＬＶ．１
ＨＰ．１００／１００
ＴＰ．１５／１５
ＥＸＰ．００００００
次のレベルまで．５

力．５
体力．５
敏捷．８
運．－９９９９

攻撃・１０
防御・１０
命中・３０
回避・６０

所持金／－１５６８０４０００Ｇ

○特技
・無し

○アイテム
・無し

鷺ノ宮駿

○ステータス

【付き添い人】
ＬＶ・？？？
ＨＰ・？？？
ＴＰ・？？？
ＥＸＰ・？？？

次のレベルまで：？？？

力：？？？
体力：？？？
敏捷：？？？
運：？？？

攻撃：？？？
防御：？？？
命中：？？？
回避：？？？

所持金／１５００Ｇ

○特技

・分析（アナライズ）
消費：２
敵の簡単なステータスを明らかにする事が出来る。

・エスケープ
消費：１０
通常戦闘ならば確実に逃げる事が可能。

○アイテム

・みたらし団子
駿の手作りの団子。

団子はモチモチと柔らかく、みたらしは絶品。
ＨＰを小回復する。

・芋羊羹
駿の手作りの羊羹。
口当たりがよく甘さ加減も絶妙。ＨＰを中回復する

・ピンク色の本
秘蔵の人妻、お姉さん系の成人向け雑誌。
冒険者のテンションを一時的に上昇させる。
ロリコンの方はテンションが下がるかも

「って何なんですかコレは！？」

「何って、ＲＰＧにはお約束のステータス紹介だろ」

薄暗く岩がゴツゴツと飛び出している洞窟の内部にいるのはハヤテと駿だった。

「お約束でも無いしＲＰＧでも無いですよ。
そもそもレベルって何ですか」

「これはこの洞窟でどのくらい戦闘経験があるかのレベルだ。
個人の技量や体力は最初は一切関係なくレベル１から始まるから。
まぁ戦闘を積んでいけばドンドンレベルアップするよ」

「しなくていいですよ」

そんな会話を交わす二人の目の前には大きな石で出来た階段が荘厳な雰囲気を醸し出していた。
下に続いているので、どうやら地下に降りる為の階段らしい。

「さて、んじゃこっからが本当の試練の始まりだ。
モー○ア坑道地下1階」

「モー○ア坑道じゃ無いでしょ」

「敵は基本的に雑魚ばかりだけどお前のダンジョンステータスも初期値だから、無茶はすんなよ」

「ダンジョンとかモンスターとかスルーするのは無茶じゃ無いんですか？」

ハヤテはまだ一応ツッコミを入れているが、駿は何も聞こえないように階段の下に広がる闇を見つめている。

「体力がヤバくなったら遠慮なくコマンド『補助』を選べよ」

「え？何ですか？
コマンド！？」

「回復アイテムなら十分な量はあるから。
後は戦う前には一応コマンド『アナライズ』もしとけ。
俺が敵のステータスをお前に示す。相手の弱点が分かるかもしれねーからな」

「いや、何ですかコマンドって！？どこにもスクロール出来る場所

無いですよね！？」

ハヤテは慌てて自分の近辺を見るが、ただゴツゴツした岩があるだけだ。

「んじゃ、大まかに理解出来た所で出発すっか」

「大まかどころか幅広く意味不明になりましたけれども！？」

「心配すんなって。
どうせ地下1階は分かれ道もほとんど無い一本道だから」

「そこじゃ無いですよ！？」

こうして、冒険者ハヤテは付き添い人の導きにより『試練の洞窟』の地下へと足を踏み入れてゆくのだった……

○

～三千院屋敷～

「マリアよ」

「何ですかクラウスさん？」

屋敷の応接間の一つでクラウスが窓の外を眺めながら立っていた。
呼ばれたマリアは掃除の手を止めて彼の元に歩いていく。

「試験の事だが、駿殿を付き添わせたそうではないか」

「ええ」

「彼は鷺ノ宮家の長男にあたる人間、もし何かあったら我々の首が間違いなくだな……」

「大丈夫ですよ」

若干ひきつっているクラウスにマリアは微笑んで続ける。

「鷺ノ宮家の方にも話を通してありますし、それに何より駿君なら問題ありませんよ」

「うむ……
まぁ彼の事はワシよりお前の方がよく知っているから何とも言えんが……」

クラウスはそう言われてしまってはマリアを信じるしか無いので仕方なくと承諾の意を表す。

「だが、もう一人のあの少年の方はどうだろうか。
確かに体力や運動神経はそこそこありそうだが、あれは今まで幾多となく半端な執事達を退けてきた試練。
例え、地下1階と言えど、並の者では合格出来ますまい」

「採用試験に用いる事自体間違っているとは思いますけれど」

本当に彼女の言う通りだと思う。

「まぁ、帰って来れたのならば執事としての職を与える事にしましょう」

クラウスは外を眺めてのんびりとそう言った。

○

一方、
こちらは試練の洞窟地下1階…

「……流石に地下は暗いですね」

「地下1階なんてまだまだ良い方だよ。最下層なんて灯り無きゃ何も見えねーから」

冒険者ハヤテと付き添い人の駿は地下1階の内部を歩いていた。
駿の言う通り内部に分かれ道などは見受けられ無いが、別に一本道と言うわけでは無く、そもそもかなり開けた広場だった。
広場と言っても薄暗くじめじめとしていて奥までは見渡せない。
また、その広場にはいくつも岩で出来た洞穴部屋があり、本当にダンジョン感ありまくりだ。

「やっぱり洞穴部屋には全部入った方が良いんですかね？」

「まぁ中にアイテムとか武器とかがある宝箱があるかもしれないからな。敵が出てくるかもしれないけど」

ハヤテが一つの洞穴の前に立って尋ねると、駿は欠伸混じりにそう答えた。

「だったら入ってみましょう！
アイテムや武器なら助かりますし、敵ならレベルアップが出来ますよ！」

「お前若干楽しそうじゃない？」

「いえいえ！
そんなまさか！何かゲームの中に入り込んだみたいで実は心中ワクワクしてるなんて事は全然無いですよ！」

ハヤテの顔にはは内心ワクワクしまくりと書いてあった。

「まぁなら入るか……」

そんな訳で二人は洞窟内の一つ目の洞穴にはいってゆく。

刹那、二人の視界が渦を巻くように捻れ始めた。

「え？何ですかこの画面効果？」

「戦闘だ。エンカウント式だから」

すぐに二人の視界は元に戻ったが、代わりに目の前にはコウモリのようなモノが二匹現れた。

「って何か出てきましたよ!?」

「だからモンスターだって。
因みにテイ○ズ式だからリアルタイム戦闘だぞ。ターン制とかじゃないから」

駿はそう言いながらハヤテから少し距離をとって壁に寄りかかる。

「キシャア!!」

「うわわ!?来た!!」

二匹のコウモリ達はハヤテ目掛けて翼を広げて襲いかかってきた。
彼は何とかそれを避けると駿の方に顔を向ける。

「駿君!分析をお願いします!」

「へ〜い」

駿は頭を掻きながらそう答えると、ハヤテに襲いかかるコウモリに目を向ける。

・駿は分析(アナライズ)を使った!

ーーーーーーーーーーーーーーーー

【コールバット】

ＬＶ．１３
ＨＰ．１２０／１８０
ＴＰ．０／０
ＥＸＰ．１０

力．１５
体力．１０
敏捷．５
運．？？？

攻撃．２０
防御．？？？
命中．５
回避．？？？

無効：闇、？？？
弱点：光、打撃

ーーーーーーーーーーーーーーーー

「悪いな。普通の分析だと分かるのはこんな感じだ」

「なるほど！
弱点は光と打撃ですか！！」

ハヤテは分析結果を頭の中で反芻しながらコウモリの旋回攻撃を回避する。

「だったら！！」

そして三度目の旋回攻撃が襲いかかろうとした時、
ハヤテは一瞬屈んでコウモリの腹部に入り込み……

「でやァァァァ！！」

「グブッ！？」

脚力を活かしたサマーソルトキックをおみまいした！
コウモリは叫び声をあげて緑色の煙と共に消え失せる。

「キシャア！！」

後ろからもう一体のコウモリがハヤテに飛びかかってきたが、

「はあァァァァ！！」

「グバッ！？」

ハヤテはバランス失った体制からフライングニールキックをコウモリに叩き込んだ。
先程のサマーソルトで着地が不安定だったが逆にそれを利用した見事な連携攻撃。

コウモリはあっという間に消え去ってしまう。

（お～、スゲーな……）

これには壁に寄りかかり一部始終を眺めていた駿も驚いていた。

《リザルト》

・経験値２０を獲得した
・２４０Ｇを手に入れた！
←
だがハヤテの借金からは差し引かれなかった！

・ハヤテはレベルアップした！
レベルが２になった！

・ハヤテはレベルアップした！
レベルが３になった！

「良かったな～、一気に二つもレベルが上がったぞ」

「っていうか一体誰が出してるんですかコレ？」

素朴な疑問は置いといて、戦闘が終了すると二人は洞穴部屋の中を探索する。

「あ、宝箱」

ハヤテは中の隅に置かれた宝箱を発見した。
勿論早速開けてみる。

・ハヤテはロングソードを手に入れた！

中身は何と武器だった。
残るは空になった空き箱のみ。

「剣ですね」

「これで素手から武器ありになったな。戦いが大分楽になるし、攻撃力も上がるだろう」

綾崎ハヤテ

〇アイテム
・装備

武器：ロングソード
盾：無し
頭：無し
腕：無し
体：無し
足：無し
その他：無し
その他：無し

○ステータス

ＬＶ．３
ＨＰ．１００／３８０
ＴＰ．１５／３５
ＥＸＰ．２０
次のレベルまで．１５

力．７
体力．８
敏捷．１２
運．－９９９９

攻撃．３５
斬り．５
突き．５
防御．１０
命中．３０
回避．６０

ハヤテと駿はこの洞穴部屋を出ると、洞窟内に戻る。

「さて、この地下１階にはまだ十数ヶ所洞穴部屋があるみたいだけど、全部入ってみる？」

「いえ、流石にそれは時間がかかり過ぎですから……
課題の秘宝の方に向かいながら洞穴を見つけたら入っていく事にしましょう」

「課題の場所はここから北側だからな。まぁ真っ直ぐ行くか」

二人は薄暗い洞窟を北側に向かって歩いていく。

デンデン～♪デンデン～♪
ティロリロリロリ～♪

「何ですかこの音楽？」

「アレだよアレ……ダンジョン内のＢＧＭだよ」

「遊び心あり過ぎですね…」

また暫く洞窟を歩いていくと、右側に洞穴があった。
二人はそれを見つけると洞穴の前まで立ち止まる。

「入るか？」

「そうですね」

ハヤテが先に、駿がそれに続いて洞穴にはいっていった。

「「……」」

中の洞穴部屋は先程と造りは同じだったが、部屋の中心には大きな棺桶が置いてあった。

「何ですかねコレ？」

「棺桶だろ」

「開けたらやっぱり……出てくるんですかね？」

「多分な」

ハヤテは恐る恐る棺桶の蓋をズラしていく。そして棺桶の中身が半分まで見えた所で……

「グオォォォォ！！」

「やっぱり出た！？」

ハヤテ達の視界が渦を巻くように歪んで、戦闘が始まった。

ハヤテの前には足を引きずり手を垂らしながらノロノロと歩くゾンビのようなモンスターが三体も出現した。

「なるほど……棺桶だから吸血鬼かと思ったらゾンビですか」

「頑張れ～」

前方のゾンビ達を睨み付けるハヤテとは対照的に駿は壁に寄りかかり傍観を決め込む。

「駿君！お願いします！」

「了解～」

・分析（アナライズ）を使った！

ーーーーーーーーーーーーーーーー

【グール】
ＬＶ．１６
ＨＰ．１９０／２２０
ＴＰ．０／０
ＥＸＰ．３０

力．？？？
体力．２０
敏捷．？？？
運．？？？

攻撃．３０
防御．？？？
命中．５
回避．２

無効：闇、打撃

弱点：光、突き、？？？

ーーーーーーーーーーーーーー

「打撃が無効か！
なら武器の出番ですね！」

ハヤテはそう言って先程入手したロングソードを構えた。

「グオォォォォ！！」

「はあァァァァ！！」

まず最初に飛びかかってきたグールを目にも止まらぬ速さで一刀両断！
一体目のグールは消えないまでもその場に崩れおちる。

「でやっ！！」

「「グオっ！？」」

続けて剣を地面に叩きつけて岩の破片を残りのグール達に当てる。
グールニ体は数歩後退りをするが、その時にちょうど縦に重なる形となった。

彼がその隙を見逃す筈も無く……

「真空〇斬！！！」

「「ガアァァァ……」」

ロングソードを横に寝かせたかと思うと、ＲＰＧ恒例の技名を叫びながら思いきりグール達に向けて振り払った。

（真空〇斬！？
著作権的に大丈夫なのか！？）

駿はハヤテの剣技もさることながら、技名に驚いていた。
多分伏せ字にしているから大丈夫だとは思うけど……

「グオォォォォォ！！」

「！？」

ハヤテがニ体のグールを倒すと同時に、崩れていた一体目のグールが飛びかかってきた！

「ぐはっ！？」

ＨＰ．１００→７１

予期せぬ奇襲にハヤテは避ける間もなくグールの攻撃を受けてしまった。
彼は受け身をとってグールと距離をつくる。

「ハヤテ！！
回復アイテムだ！！」

「！！」

駿は咄嗟に叫ぶとハヤテに向かってアイテムを投げる。
ハヤテは何とか受け取った。

「ソイツを使えば回復するぞ！」

「ありがとうございます！！
これをｔ」

ハヤテが受け取ったモノに視線を落とすと、それはアイテム『ピンク色の本』だった。

「いるかァァァァ！！」

「グオォ！？」

ハヤテはアイテム『ピンク色の本』をグールに向かって思いきり投げつけた！
本の角がクリーンヒット！！

「あああああ！！
俺のコレクションの中でもベスト１０に入る逸品がァァァァ！！」

「グオォォォ……」

グールは緑色の煙と共に消え失せた。勿論ピンク色の本も一緒に……

「あ、勝った……」

「何て事してくれんだよォォォォォォォォォォ！？」

悲痛な駿の叫び声が洞穴に響き渡っていた……

《リザルト》

・経験値９０を手に入れた！
・６００Ｇを手に入れた！
←
だがハヤテの借金からは差し引かれなかった！

・ハヤテはレベルアップした！
レベルが４になった！

・ハヤテはレベルアップした！
レベルが５になった！

・ハヤテはレベルアップした！
レベルが６になった！

・ハヤテはレベルアップした！
レベルが７になった！

「いや、緊迫した戦闘でしたね……」

「テメーェェェェ！！
俺のベストを何て使い方しやがんだコラァァァァ！！」

駿は汗を拭うハヤテの首根っこを掴むと、ブンブンと思いきり揺すり始めた。

「知りませんよ！！
大体あの場面で渡すアイテムがどうして成人向け雑誌なんですか！！」

「回復すんだろ、日々の疲れとかストレスとか！！
年上のお姉さん達に！！」

「使いどころが違うわ！！
体力回復アイテムでしょ！？」

全くハヤテの言う通りである。
駿は深々とため息をついて肩を落とすと、何かを取り出してハヤテに渡した。

「ほらよ、回復アイテムの芋羊羹だ。犠牲になった俺のベストの分まで回復しろよコノヤロー」

「あ、どうも」

すっかり意気消沈している駿からハヤテはそれを受け取ると、ゆっくりと口に運ぶ。

「美味しい……！！

これ、駿君の手作りですか？」

「そうだけど……美味い？」

ハヤテの言葉に駿はスクッと顔を上げる。

「ええ！！

今まで食べた芋羊羹で一番美味しいですよ！！」

「え？そんなに？」

「ええ！」

「そっかそっか！

あ、まだおかわりあるからな」

ものの３秒……

駿の機嫌は既に治っていた。

現金な奴である。

ハヤテ

ＨＰ．７１↓８５０

「あ、棺桶の中に何かありますね」

「？」

体力も無事に回復した所で、二人は洞穴部屋から出ようとしたが、

ハヤテが先程の棺桶から何かを見つけ出した。

・ハヤテはブルーメイルを手に入れた！
・ハヤテはレザーグローブを手に入れた！

「あ、防具ですね」

「おー、これで少しは敵のダメージも軽減すんな」

早速装備するハヤテ。
といっても防具を着けても外観は変わらないのだが。
そこはＲＰＧでは突っ込んではいけない部分である。

綾崎ハヤテ

〇アイテム
・装備

武器：ロングソード
盾：無し
頭：無し
体：ブルーメイル
腕：レザーグローブ
足：無し
その他：無し
その他：無し

○ステータス

ＬＶ．７
ＨＰ．８５０／８５０
ＴＰ．３０／６０
ＥＸＰ．１１０
次のレベルまで．９０

力．１２
体力．１３
敏捷．１６
運．－９９９９

攻撃．５０
斬り．１５
突き．１５
防御．６０
命中．３５
回避．７０

少しずつ装備が揃ってきたハヤテは駿と共に洞穴部屋から洞窟に戻ってきた。

「しかしお前、よくあんだけ戦えんな。ビックリしたよ」

「いえ、小さい頃から親がアレだったもので、稼ぐために代打ちで因縁つけてくる客を相手にしたり、歌舞伎町でツケの回収の仕事をしたり、食べ物を補う為にサファリパークに侵入してライオンの餌を強奪したりしてましたから～」

言葉の端々に苦労がにじみ出る少年である。

「……そりゃ、凄まじいな」

「まぁ今思えば笑い話ですけどね」

「へぇ……」

駿は笑いながらとんでもなく壮絶な過去を口にするハヤテを見て何とも言えない表情になる。

「とにかく！
今は執事として認めて貰う事が先決です！！
急ぎましょう！」

ハヤテはそう言って拳を作って暗くて先が見にくい北側の方向に目を向ける。

（神様……
どうか彼が仕事という幸せを掴む事だけでも手伝ってやって下さい……）

そんな健気なハヤテを見て、
そう思わずにはいらない駿であった……

其の七　ハヤテのダンジョン～執事の職と金の秘宝～（後書き）

～生徒会通信！～

美希
「真面目に作ったのかふざけてるのかよく分からないわね」

理沙
「でもハヤ太君は流石だな。
敵とのレベル差をものともしない戦いっぷりだ」

泉
「でも次回まで続いちゃうんだよね～、私達の出番大丈夫なのかな？」

美希
「大丈夫。いざとなったら作者の痛い動画を流出させると脅せば、この小説は我々の支配下に……」

泉
「ならないと思うよ？」

理沙
「まぁ、もう少し待ってやるか。そんな訳で次回のお話は！！」

冒険者ハヤテは洞窟で敵との激しい攻防を繰り広げ、付き添いの駿

のサポート（？）を受けながら更にレベルを上げていく！

そして彼の前に立ちはだかるダンジョンお約束の中ボス！！

果たして彼は無事に秘宝をもって帰り執事の仕事を手にする事が出来るのか！？

三人娘

「次回もよろしく～！！」

其の八　続・ハヤテのダンジョン～執事の職と金の秘宝～（前書き）

伽藍
「次回からはもっと真面目にやりま～す！」

駿
「最低な前書きだな」

伽藍
「そんなこんなで、始まります！」

其の八　続・ハヤテのダンジョン～執事の職と金の秘宝～

○現在のステータス

ハヤテ　ＬＶ．７
ＨＰ．８５０／８５０　ＴＰ３０／６０

駿　ＬＶ．？？？
ＨＰ．？？？／？？？　ＴＰ．？？？／？？？

前回、試練の洞窟に挑んだハヤテは持ち前の技量で次々とモンスターを倒していきＬＶを六つも上げていた。
そして、ハヤテと駿は相変わらず暗がりの洞窟の中を歩いている。

「地下１階って言っても……
結構広いですね」

「まぁ元々アミューズメント目的で造られたらしいからな」

「アミューズメント！？
この洞窟がですか！？」

ハヤテは驚愕の声をあげるが無理もない。

どこの世界にこんなアミューズメントを造ろうと考える馬鹿がいるというのか。

「世の中分からないですね……」

「とか何とか言ってるウチにまた洞穴があるけどな」

秘宝のある北側へと進んでいた二人の右側にまた例のごとく洞穴が現れた。

“進行方向にある洞穴部屋には入ろう”との事だったので、二人は洞穴に入る事にする。

ハヤテが最初に洞穴に入り、その後に続いて駿がのんびりと後を追っていくのだった。

そんなこんなで洞穴部屋に入った二人。
洞穴の中には前回同様の造りだが、宝箱が二つも置いてあった。

「あ、二つも宝箱」

「ラッキーだな」

ハヤテは早速二つあるウチの左側の宝物を開ける。

・宝物はトラップだった！！

「！？」

ハヤテ達の視界がグルグルと歪んで、戦闘が開始された。

「トラップですか！！」

彼等の前に現れたのは盾と剣を構えた二人の女性の騎士だった。
銀の鎧を身につけ、赤いマントを羽織った騎士達は殺気のこもった視線をハヤテに向けてくる。

ハヤテも負けじとロングソードを二体に向かって構えた。

「ハアァァ！！」

それが開戦の合図かのように、一人目の騎士が地面を駆けてハヤテに剣を振るった。
彼は受け止めずに後方に跳んでそれを回避する。

「情報お願いします！」

「仕方ねーな」

ハヤテは後ろで壁に寄りかかっている駿に振り返ってそう言うと、駿は頭を掻きながら二人の騎士に目を向ける。

・分析（アナライズ）を使った！

ーーーーーーーーーーーーーー

【イーヴルナイト】

ＬＶ．１８
ＨＰ．１８００／２０００
ＴＰ．３０／３０
ＥＸＰ．２００

力．？？？
体力．？？？
敏捷．？？？
運．？？？

攻撃．７０
防御．５０
命中．４０
回避．４０

無効：無し
弱点：無し
ーーーーーーーーーーーーーーー

「って、何かいきなり強くなってませんか！？
ＨＰも三桁になってますし！！」

「いや、作者が前回の敵のレベルが１０代の割にＨＰが低すぎることに気付いてな。
今回から修正するそうだ」

「知るかァァァァ！！」

ハヤテは叫びながら向かってきた騎士の剣を受け止める。

「くっ……！！」

「ハアァ！！」

騎士の一人が立て続けにハヤテに連撃をくらわせる。
ハヤテは押されながらも繰り出される剣を受け止めていく。

「ハヤテ！
斬り→突き→襲爪〇斬破→秋〇雨のコンボだ！！」

「出来るかァァ！！」

駿の危ない発言に、

攻撃を受け後退りながらもツッコミを忘れないハヤテ。

「やるしかない！！
お前なら出来る！！」

「そんな事言っても……！！」

「執事の職か路頭をさ迷うかだぞ！！」

「ええい、分かりましたよ！！
もうどうにでもなれ！！」

ハヤテは開き直ってそう叫ぶと、ロングソードを勢いよく振り上げて…

「でやァァ！！」

「グッ！？」

まずは騎士に会心の斬りを叩き込み、隙を作らず続けて突きをおみまいする。
さらに…

「襲爪ーー！！」

「ヌゥ！？」

ハヤテが飛び上がって剣を振り上げると騎士に雷を落とす。

「〇斬破！！」

「グッ！？」

そのまま浮かんだ騎士に向けてロングソードを上から下に叩きつけ、かと思ったら下から上に突き上げ、また上から下に叩きつける！！

その連撃が終了し騎士は地面に落ちたが、ハヤテは隙を与えず敵の目の前に着地し……

「秋〇雨ーーっ！！」

「グア！！！」

騎士に向かって目にも止まらぬ速さで無数の突き攻撃を繰り出した！敵はそれに耐えきれずに緑色の煙にまかれて消え去った。

「マジ使っちゃったよ……
スゲーなアイツ、怖いもん無しだな」

色んな意味で危ない目の前の光景に駿は寄りかかりながら面白半分呆れ半分の表情。

「はあァッ！！」

「！？」

ハヤテの方はもう一体の騎士の前まで距離をつめていた。
彼は渾身の力をロングソードに込めて……

「殺劇舞〇剣ーーっ！！
良い子の皆、著作権には気をつけろよーーーっ！！！」

「グワァァァ！？」

無数の斬撃を一気に叩きこみ、更に敵を打ち上げて斬撃を追加しながらそう叫んだ。
因みにこの追加攻撃にはコマンドが必要だ！

「はぁ、はぁ……」

「おー、勝った勝った」

ハヤテは地面に着地して、息を切らせながらも立ち上がる。
もう一体の騎士も消え去ってしまった。

《リザルト》

・経験値４００を手に入れた！
・２０００Ｇを手に入れた！
←
だが、ハヤテの借金からは差し引かれなかった！

・ハヤテはレベルアップした！
レベル８になった！
・

・・・

・ハヤテはレベルアップした！
レベル１１になった！

「良かったな～
かなりレベルが上がったじゃねーか。これなら安心してａ」

「良い訳あるかーーーっ！！」

「ぶべらっ！？」

洞穴部屋を出た所で、
ハヤテは取り敢えずドロップキックを駿の顔面にくらわせた。
駿は吹き飛ばされて堅い地面に転がる。

「いきなり何すんだよ！？」

「それはこっちの台詞ですよ！！
あんな技出してどうするんですか！！」

「いや、使ったのお前だよね？
俺はサポートしただけだぞ」

「そのサポートが色んな意味で危ないんですよ！！」

ハヤテは困ったようにため息をつくと首を振って駿を見た。

「とにかく、もうテイ○ズの技は無しです！
使うのも薦めるのも」

「まぁそうだな……
もう少しで秘宝のある場所だから後は気合いで頑張るか」

ハヤテは人差し指をたててたしなめるように言うと、駿は首を回して渋々同意して北側の暗がりを見つめた。

二人はまたまた対照的な足取りで歩き始める……

まぁ、これ以上雑魚戦を長々とやるのは時間的にも体力的にもアレなのでここからは簡単に結果だけにさせて頂こう。

・ハヤテはコールバット×3に遭遇した！
←
勝利した！！

・ハヤテはグール×2、コールバットに遭遇した！
←
勝利した！！

・ハヤテはイーヴルナイト、グール×2、コールバット×2に遭遇した！
←

勝利した！！
←
レベルアップ！
ハヤテはレベル１２になった！

と、そんなこんなで戦いで経験値を貯めて、敵からアイテムを入手したり、時々宝物から装備を入手したりとダンジョンを満喫（？）しつつ……

遂に課題の秘宝がある大きな洞穴の前に到着した。

綾崎ハヤテ

○ステータス

ＬＶ．１２
ＨＰ．１４００／１４００
ＴＰ．１００／１００
ＥＸＰ．１９６０
次のレベルまで．６９０

力．４５
体力．４０
敏捷．５１
運．－９９９９

攻撃：１００
斬り：４５
突き：４５
防御：７３
命中：７０
回避：９０

〇アイテム
・装備

武器：ルーンサーベル
盾：三千院家の鍋蓋
頭：アイアンヘルム
体：ブルーメイル
腕：レザーグローブ
足：レギンス
その他：無し
その他：無し

「遂に到着したな……」

「物凄く省きましたけどね」

「良いんだよ。
読者もいい加減飽きてんだろ。

さっさと例のモン手に入れて帰ろーぜ」

駿は欠伸混じりにそう言うと、さっさと終わらせたいのかハヤテの背中を押すように追いやる。

秘宝のある大きな洞穴の前には大きな扉。

扉には何か色々と文字が書き込んであり、ＲＰＧでも重要なポイントっぽい雰囲気がある。

ギギギギ……

扉に手をかけるとまるで招き入れるように重々しく軋みながら開き始める。

ハヤテが先に、続いて駿がノロノロと部屋に入っていった。

○

～三千院屋敷～

「そういえば……」

「？」

ナギが自室に籠って読書という名漫画に耽っているので、マリアとクラウスは二人応接間で待機していた。
そんな時、彼女が不意に口を開いたのだ。

「先程牧村さんが来てましたよね？何かあったんですか？」

「ああ、その事か……」

クラウスは両手を後ろに回して屋敷の窓から外を眺める。

「ただ秘宝をとってくるならば簡単なので、ちょっとした“障害”を用意させて貰ったのだ」

「はぁ……
それで牧村さんに？」

「そういう事ですな」

クラウスは背を向けたまま自慢らしいカイゼル髭を丁寧に撫でる。

「でも大丈夫なんですか？
彼女、作るものの加減知らないですから……」

「そこは心配いらんだろう。
『対執事業務用のロボット』だと言っておられたからな」

「『執事業務用ロボット』ですか……」

マリアは彼の言葉を聞くと不安そうに顔を天井に向けた。

「まぁ、多少自衛機能もあるとは言っておられたが、あくまで業務用ロボットだと」

「はぁ、自衛機能ですか……」

（二人とも無事だと良いのですけれど……）

彼女は頬に手を当てて困ったようにそうため息をつくのだった。

○

二人が扉を開いて取り分け広い場所に入ると、広場の奥の方に恐らく“金の秘宝”を飾ってあるだろう小さな台座が一つ。

しかしその台座の前に何かが待ち構えるように立っていた。

「あ、あれは……？」

「秘宝を守護する中ボス的なアレじゃね？」

「いや、アレじゃねって……」

テキトーな駿の言葉にハヤテは呆れながらも、前方によくよく視線を向けると……

「お待ちシテおりました、
綾崎ハヤテさん……」

「「……」」

何か不細工なロボットがこちらに向かって歩いてきた。
寸胴なドラム缶のような胴体に山なりの頭。
両手両足はむき出しのブロック。耳はネジマキ、てっぺんにはアンテナがピコピコと鳴っている。
まさしく昭和のロボットのイメージまんまである。

「……あの、何ですかアレ？」

「だから……
中ボスなんじゃね？」

「今までの流れでこんなのがラストなんですか……」

二人がヒソヒソと話している間にロボットは彼らの前までやってきた。

「私ハ現在、三千院家の支配下の企業が開発した介護ロボ『８（エイト）デス』」

「「か、介護ロボ……」」

何と秘宝の守護者は介護ロボットだった！

「えっと……

介護ロボットの貴方と戦うんでしょうか？」

「イエ、私はあくまで介護ロボット。戦闘は致しません」

エイトは首……は無いので頭を振ると妙に高い音声を出す。

『執事業務対決をシテ頂きます』

「執事業務対決？
でも、ここは洞窟で何もありませんよ？」

ハヤテはキョロキョロと辺りを見回すが、当然岩の突き出た洞窟内しか見受けられない。

『ゴ安心下サイ。
私がプログラミングした三千院家のワンルームをホログラムシステムを使ってこの場に再現しマスから』

「ええ！？
そんな事が出来るんですか！？」

『私ハ最先端の介護ロボ。
このデータ回路に不可能の文字はありません』

「ええ！？最先端！？
こんな昭和のポンコツロボットギャグアニメみたいなのが最先端！？」

ハヤテはエイトを見てのけ反ると驚愕の声を上げる。
因みに今の発言にエイトはピクリと不細工な顔に怒りマークを浮か

べる。

「駿君！！
コレが最先端なんですか！？
こんな不細工な様相で！？」

「本体前にしてよく言うよな、
お前……」

ハヤテは駿に振り返って納得出来ないとばかりに抗議をする。

「だってこんなのが最先端なら、日本はもうおしまいですよ！！
変形も合体も出来そうもないこんな……」

ブチッ！！

『そんなに合体や変形が見たいなら……』

「へ？」

『お前を変形してモザイク人形にしてやろうかァァァアアア！！』

「うわ！？」

エイトが拳を振り上げて飛びかかってくる。

・なんか戦闘が始まった！

エイトの拳をなんとか避けたハヤテだが、洞窟の地面には意外と深い穴があいてしまう。
力はそこそこあるらしい。

『チッ！！
外したか！』

「って、介護ロボットなのに何でそんなに短期なんですか！？」

ハヤテは急いでエイトに向かい合うと突っ込んだ。

「これだと老人問題どころか人口問題に発展すんな……」

駿はいつも通り離れた壁に寄りかかりハヤテとエイトの様子を傍観する事にした。

「執事業務対決はどうしたんですか介護ロボ！」

『うるせーっ！！
こうなりゃ分かりやすくバトルでかたをつけるんだよ！！』

ズンズンと不細工な足をハヤテに進めていくエイト。

「やっぱりこうなるんですか……駿君、分析を！！」

「へいへい」

・分析（アナライズ）を使った！

秋風に
栄華を誇る
鷺ノ宮
眺めに緩む
我が伊澄かな

「ってなんですかコレは！？」

「すまん。
分析がどうやら出来ないらしい。だから代わりに俺が即興で作った和歌を……」

「いりませんよ！！」

ハヤテは繰り出されるエイトのパンチを避けながら叫ぶ。

「今の和歌はな、秋の栄えに乗る鷺ノ宮家で眺めては頬が緩む伊澄の可愛さと、
秋の長雨で無防備に緩む伊澄の表情とを詠ったんだ。
眺めと長雨の掛詞でだな……」

「知るかァァァァ！！」

ハヤテは駿の苗字も、まして伊澄の事などは勿論知らないが今の彼

にそんな事を考えている余裕は一切ない。

『こうなれば！！』

「！？」

エイトは胴体の目の前をカパリと開けると……

ドドドドドド！！！

「だあァァァァ！？」

物凄い数のミサイルがハヤテに向かって発射された！

「てか本当にコイツ介護用なんですかーーっ！？」

「スゲー実用的な」

叫びながら逃げていくハヤテを相変わらず見てるだけの駿。

だが、所詮広さも限られている洞窟の中。

ハヤテは遂に壁際に追い詰められてしまった。

『追い詰めたぞ小僧！！』

「なんのっ！！」

突き出された拳をギリギリで避けたハヤテ。
すると……

ドッ！！！

『な、何ィ！？』

エイトの拳は壁を貫通したのだが、何とそこから大量の水が噴き出してきたのだ。

「さっき気付いたんですよ！！
この洞窟内にも水道管が敷かれていると！！
恐らく予備用の水道管でしょうが！！」

『まさか小僧！？
それを狙って……！！』

「機械は水に弱いでしょうからね！」

ハヤテは怯んでいるエイトの後ろに回り込む。

『それがどうした！！
日本のロボットの生活防水は世界一ィィィィィ……、グッ！？』

エイトは振り返ろうとするが、追い討ちをかけるように腕が壁を突き抜けたまま抜けない。
その間にハヤテはエイトの背中をこじ開けて電源コードを引っ張り

出した。

「これにこのＲＰＧ特性の純銀の剣を突き刺せばどうなるか…
わかりますね？」

全身が水に濡れた状態、通常よりも高い電圧の電源コード、そして
電気をもろに通す純銀の剣……

『待て……！！
この状態でそれを使うと……
お前も感電してしまうぞ！！』

「……大丈夫ですよ」

『何！？』

ハヤテはこの状況でフッと微笑してみせた。

「こんな事もあろうかと、
ダンジョンで装備『サンダーマフラー』を入手してますから！！」

【サンダーマフラー】
・装備：その他
効果：雷属性の攻撃を無効化

「ライ○インーーーーっ！！！
良い子の皆は絶対に真似するなよーーっ！！」

『ば、馬鹿なァァァァ！？』

洞窟内には電撃が大音響し……
何やかんやでエイトは機能停止。ハヤテは本当に無傷で、無事に目的の金の秘宝を手に入れる事が出来た……

そんな訳で帰り道……

「いや～、色々と大変でしたけど何とか目的が達成出来て良かったです」

「お前何だかんだ言ってＲＰＧ要素大活用だったからな」

二人は試練の洞窟の地下1階から1階に上がり、出口の目の前まで来ていた。

「駿君、今回は本当にありがとうございました」

「俺何にもしてないけどな」

「いえ。
僕一人では絶対に達成出来なかったですよ。
本当にありがとうございます」

律儀に頭を下げるハヤテ。

駿は少し気恥ずかしそうに頭を掻くと『そうかい』とわざと素っ気なく頷いてみせた。

「では出ましょうか」

「ああ」

まずハヤテが金の像を抱えたまま出口を出た。
それに駿も続こうとしたが……

「！！」

何かに気付いたのかその歩みを止める。
そして暫く黙っていたかと思うと、地面を睨み付けるようにして下に顔を俯かせた。

（最下層に“何か”いやがんな…でけぇ魔は全部片付けたと思ってたが……
また随分と厄介そうなのが住み着きやがったか……？）

駿のその考えにまるで呼応するように、下から1階に静かだが全身を震わせるうめき声のようなものが彼に伝わってきた……

（また……
近々来る必要があるかもしれねーな……）

彼は舌打ちをすると、踵を返して洞窟を後にするのだった……

○

「おお！！
流石ハヤテだ！本当に秘宝を手に入れてきたではないか！」

屋敷に戻ると、ナギが待ってましたと言わんばかりにハヤテに駆け寄ってきた。
後ろには安心したように微笑むマリアと気難しそうな表情のクラウスもいる。

「どうだクラウス！
約束通りハヤテは課題をクリアーしたぞ。まだハヤテの資質に不服か？」

「分かりました。
まぁ約束は約束です。
取り敢えず、綾崎を雇っておいても良いでしょう」

『その代わり、執事の規則に従えない場合はクビにしますぞ』と、そう言い残してクラウスはクルリと背を向けたまま彼らの前から去っていった。

「お疲れさまです。
大丈夫でしたかハヤテ君？」

「ええ、まぁなんとか」

ハヤテは若干苦笑いすると、マリアに向かってそう答える。

「それよりハヤテ！
ダンジョンは一体どんな風だったのだ？聞かせてくれ！」

「あ、はい。
それがですね……」

そしてすぐに興味津々と目を輝かせているナギの相手をしにいってしまった。

「駿君、ハヤテ君の事本当にありがとうございますね」

「いえ、俺は本当に何もしてませんから」

マリアは後ろにいた駿に寄っていくと微笑んでお礼をいう。
駿の返事は一見謙遜ともとれるが、実際何もしていないのであるから実は謙虚でも何でも無い。
ほとんどハヤテの頑張りである。

「もしこの後、ご予定が無かったら紅茶をご馳走しますわ。
どうですか？」

「あ、ではお言葉に甘えて」

マリアの提案に駿は上記のように大人っぽく対応するが、
内心では……

（マリアさんにティータイムに誘われただと！？
これは、まさかフラグイベント的なアレか！？

春か！？スプリングなのかァァァァ！？）

等と検討外れも甚だしい事を思い浮かべてはしゃいでした。

つくづく馬鹿な奴である。

「ではハヤテ君。

早速執事としての仕事をして頂きますね♪」

「はい！

了解ですマリアさん！」

とまぁそんなこんなで、

ハヤテは何とか三千院家の執事として認めてもらうことになったのであった。

これは……

そんな彼の前途多難な執事人生の幕開け……

其の八　続・ハヤテのダンジョン～執事の職と金の秘宝～（後書き）

美希
「よし我々の出番だな！」

理沙
「では、いつものタイトルコールだ！！」

泉
「ではでは～♪」

三人娘
「三人娘の～！！
生徒会通ｓ」

愛歌
「愛歌の、
言われてみたい最高の決めセリフ～♪」

～言われてみたい最高の決めセリフコーナー♪～

愛歌
「という訳で今回の後書きを担当させて頂く霞愛歌です♪」

三人娘

（乗っ取られたァァァァ！！）

美希
「って！！
何やってるんですか愛歌さん！」

愛歌
「だって皆楽しそうなんだもん♪」

理沙
「しかし決めセリフとは？」

愛歌
「ここぞって時の決めセリフを男性陣三人に聞いてみようっていう
コーナーよ」

泉
「原作のおまけでも似たような事やってたよね？」

愛歌
「細かい事はおいといて、
まずは綾崎ハヤテ君に言ってもらいま～す♪」

ハヤテ
「ええ！？僕ですか！？」

愛歌
「では、どうぞ♪」

ハヤテ

「えっと……では

『いつだって
君は僕の太陽さ』」

愛歌・美希
「うわぁ……」

理沙
「一体何様のつもりなんだれるなハヤ太君は……」

ハヤテ
「仕方ないでしょ！？／／／
だってそういう企画じゃないですか！！」

因みに皆さんもよく知る我が侭お嬢様や生徒会長、ハムスターには
効果抜群だったそうです（笑）

愛歌
「はい、次は鷹ノ瀬翼君です♪」

ハヤテ
「切り捨て早っ！？」

翼
「え？俺か？
決めセリフって言われてもな…」
美希

「ハヤ太君の作った空気を変えるんだ翼君！！」

ハヤテ
「どういう意味ですか！？」

翼
「仕方ないな……」

愛歌
「では、張り切ってどうぞ♪」

翼
『何も言うな……
今は、俺にその体を預けたままでいい……』

愛歌
「なかなか恥ずかしい台詞ですね～」

美希
「でも流石翼君だな。
彼が言うと何故か全く違和感がない」

泉
「にはは～／／／
凄い台詞だね」

因みにこのセリフで白皇の二割は嬉しさのあまり気絶、後の女子生徒の過半数は黄色い声援を盛大におくるほどである。

愛歌
「では、最後は主人公である駿君に言って貰いましょうか♪」

美希
「ここはかなりのプレッシャーだな。翼君の後とは」

理沙
「一体彼はどんなセリフを見せてくれるのか!?」

駿
「ったく、さっきから見てりゃハヤテも翼もセリフに想いが全く込もって無いじゃねーか。
そんなペラペラな言葉、いくら言ったところで心には届きゃしねーよ」

美希
「おお!!
しかも自らハードルを上げるような発言を!?」

理沙
「これは相当難易度が高い空気だぞ!!」

愛歌
「では、張り切ってどうぞ♪」

駿
「では……
とっておきの決めセリフを……」

一同

「……」

駿
「『次回に続く！！！』」

ズルゥ！！！

一同が盛大に転けて
案の定そんなオチ？

愛歌
「昔駿君が私に言ってくれたセリフなんてどうかしら？
例えば中等部の時……」

駿
「わあァァァァ！！！
そんな事なんで覚えてんですか！？」

愛歌
「弱点帳♪」

二人の関係はいずれ本編という事で（笑）

其の九　鷹ノ瀬家の退魔剣士（前書き）

伽藍
「今回は初めて一人称視点で書いてみました！」

駿
「俺の？」

伽藍
「いや、違うから。
ってか君、今回空気だから」

駿
「……え？」

其の九　鷹ノ瀬家の退魔剣士

午前六時ー

冬休みの最中である年末のこの時期、この時間帯らまだ外は薄明かるい。
日の出まではもう少しかかるだろう。

そんな時刻に、
俺、鷹ノ瀬翼は家のキッチンに立っている。

理由は至って簡単。
勿論朝御飯は作っているからだ。

鷹ノ瀬家では基本的に家事は当番制なんだが、朝は家族は皆弱い為、俺が毎日支度をすることが暗黙の了解となっている。

ま、俺は料理が好きだから良いんだけど。
とはいえ、洗濯や掃除まであくせくとしていると、たまにドンドン主夫化してきている自分にハッと気付いたりするんだよな。
ある意味複雑かもしれん……

グツグツ……

何てしょうもない事を考えている間に鍋が音をたて始めた。
俺はすぐにダシをとっていた昆布を鍋から取り出して、お玉に味噌を乗せると沸騰したダシ汁にいれて溶かしながら混ぜていく。
（昔は味噌汁一つさえ、ろくに作る事も出来やしなかったてのにな……）
昔と言ってもそれは小学生の時の話。
まだ親父や母さんが家に普通にいた頃の話だ。
俺の両親は仕事の都合でよく海外を回っているのだが、それは俺が小学校高学年になった頃から。
だからその時から、家事を俺も手伝うようになったんだっけか。
（最初なんて味噌を入れてから火をかけたりしたもんな……）
俺は料理をし始めてから間もない頃の事を思い返して、思わず口元を緩めてしまう。
そうこうして朝御飯の準備を一通り終えた。
時計に目を向けると、ちょうど午前七時を回っている。
俺が次にやる事は家族を起こす事だ。
うちの家族構成は両親と姉、それと曾祖母の計五人。
だけど両親は海外だから今は三人でこの家に住んでいる。

「先に姉さんから起こすかな」

俺はリビングから出ると、軽い足取りで玄関に前の広間に出る。

鷹ノ瀬は代々続く名家らしいが、両親の意向で家は小さな一軒家になっている。

小さいと言っても普通の一軒家に比べればかなり広い家だ。

三階建ての８ＬＤＫという文句無しの広さ。

ただ、名家にしてはやはり小さいのだろう。

俺は十分過ぎるくらいだけど。

「姉さーん！！
朝だぞー！！」

俺は玄関から二階に続く階段がある場所の前まで行くと、上に向かって声をかけた。

……が、返事はない。

まぁ姉さんは朝弱いからな。

「姉さーん！！
朝御飯いらないのか？
下げちゃうよー」

ガチャ……

「……食べる」

「やれやれ」

朝御飯を下げると先程より声を張り上げると、二階から扉の開く音がして、パジャマ姿の姉さんがノロノロと階段を降りてきた。

大層眠そうで、綺麗な髪も幾らか跳ねている。

しかしまだ寝ぼけているのかヨタヨタと階段を下ってくる様は普段のキリッとした姿からは想像出来ないくらいに無防備だ。

「……眠い」

「いいから。

ご飯はテーブルに出来てるから、先に食べてて。

俺はばあちゃんを起こしてくるから」

「……うん。

ありがと～」

俺の隣までやって来た姉さんは、虚ろな返事をするとそのままフラ～とリビングに入っていった。

それを見送ると、俺は階段を上がって……

「朝ご飯ーーーーっ！！」

「うわ！？」

いこうとしたら、いきなり腹部に何かが突っ込んできた。

たまらず俺はひっくり返ってしまった。
こんな事するのは決まってるな…

「おはよう。ばあちゃん、朝からホント元気だな……」

「翼!!お腹減った!!
早く朝御飯!!」

突っ込んで来たのはうちの曾ばあちゃんだった。
見た目は中学生くらいの少女だが、その実年齢は１００歳超。

ぴょんぴょんと俺の上で跳び跳ねるばあちゃんはあり得ないほどの元気さだ。
つーか痛いからな。

「朝御飯なら出来てるよ。
姉さんも席に着いてるから」

「うん!!」

ばあちゃんは元気良く頷くと、俺の上から降りてリビングに走って入っていった。

「ホント元気な……」

俺はゆっくり起き上がると、ため息をついてリビングに向かっていった。

俺もさっさと飯食っちまうか。

今日も朝から生徒会だしな。

其の九　鷹ノ瀬家の退魔剣士

～白皇学院～

午前九時。
俺は白皇学院の敷地内を歩いていた。
勿論生徒会にいく為だ。

姉さんは仕事に出たし、ばあちゃんは家でドタバタやっている事だろう。

そんな事を考えて歩みを進めていくうちに、前方に高い高い時計塔

が見えてくる。

今日の予定は午後まで生徒会で新学期の行事についてのあれこれを議題にして会議。
確か依頼が入ってたから夜は仕事があるな。
暇な午後は新しい料理でも作ってみるか。
良い鰹を貰ったんだよな。
和風イタリアンとか良さそうだ。

……やっぱり俺、だんだんと家庭じみてきてないか？

時計塔に入って、エレベーターで最上階へ。
その最上階、“天球の間”と呼ばれる部屋に生徒会はある。

その生徒会室の前までくると、扉に手をかけた。

ガチャ……

「おー、翼君！
おはよう」

「おはようシルバー！！」

「おう！？」

生徒会室に入ると、何といつも生徒会をサボってばかりいた美希と理沙がいるではないか！
これには流石に驚いた。

「お前らがこんな時間にいるなんて……今日は台風か？」

「ハッハッハ。
全く冗談がキツいな翼君は」

理沙はそう言って笑う。
いや、全く冗談のつもりは無いのだが。

「甘いぞ翼君。我々が何の理由も無しに朝から生徒会に来るとでも思っているのか？」

「？」

理沙が何故か自慢気に腕を組んでそんな事をいってきた。
正直全然思っていないが、取り敢えずここは首を傾げておくことにしよう。

「私達だって本来なら進んでここには来ないはず…
だけど今朝は何と補習があったのよ」

「はぁ」

「だからやむなく、この場所に避難してきたという訳よ」

……要するにただ補習をサボってきただった。

美希の言葉から察するに泉は見事に逃げ遅れたようだ。

「でも、久々に来たんだから仕事くらいしてけよ」

「「う～ん……」」

そこは考える所なんだろうか？

「今日は何をするんだっけ？」

「新学期の行事とかについてのあれこれを会議するんだろ」

予定が完全に抜けているらしい二人に本日の予定を教えてやる。

すると二人はポンと手を打って納得したように頷いた。

「なるほど、会議ならテキトーにダラダラしてれば終わるわね」

「なら私が考えた新学期特別企画も提案するか」

二人はとても仕事熱心だった。

色々な意味で。

「「ん？どうしたんだ翼君？」」

「いや、お前ら生徒の鏡な」

俺は肩を竦めると、取り敢えず荷物をテーブルの上に置いた。

○

「それじゃあ、基本事項はこんな感じだけど……
新学期のことで個人的な意見や考えがある？」

時間は飛んで、只今会議中。

長テーブルの一番真ん中で皆を見渡してそう口を開いたのは桂ヒナギク。
この生徒会の生徒会長をやっている女子生徒だ。
剣道部主将で学年トップの成績。絵にかいたような文武両道の生徒である。

「そうね～
1月は特に何も無いから、
強いて言うなら2月はマラソン大会とかの準備とかかしら」

その隣で資料に目を通しながらそう答えたのは霞愛歌さん。
俺達の一つ上の年齢だが事情で学年は一緒になっている。
ヒナギクと同じでかなり頭も良いし仕事も出来る生徒会副会長。
……が、サディストである。
武器は弱点帳という聞くだけで恐ろしいものだ……

「でもマラソン大会の概要は1月に入ってからですよね」

黒板の前にたっている女子生徒は春風千桜。
生徒会の書記で彼女もまた有能な生徒の一人だ。

アニメやゲームが趣味。

後ろの方でのほほんとしているのが、花菱美希と朝風理沙。生徒会役員でもう一人いる瀬川泉を加えた三人でよく行動している事からよく三人娘と呼ばれている。
泉は現在補習中らしい。

そして副会長である俺を加えた以上のメンバーが生徒会……
いや、もう一人いたな……

「はい！！はいはい！！」

ちょうど愛歌さんの隣に座っていた男子生徒が手を挙げていた。

「……どうしたの駿君？」

ヒナギクは彼を見ると半ば呆れたような表情をして彼を指した。

コイツは鷺ノ宮駿。
俺とは中学生の時からの付き合いで、親友兼腐れ縁。
基本的に見てて飽きない面白い奴だ。

駿は咳払いをして立ち上がると、一旦生徒会室を見回して口を開く。
さて、この俺の親友は一体どのような意見を出すのだろうか？

「え～、1月は文字通り年の最初の月。一年の始まりでありとても重要な月でもあります。
だというのに生徒のかなり気が緩みやすい月です」

「……」

「そこで、今回俺が提案したいのは新たな同好会の設置です！
その名も『妹同好会』！！」

単に同好会を作りたかっただけだった！
つーかあの大層な前置きの意味が分からん。

完全に場の空気は冷めているというのに、駿は堂々と続ける。

「同好会の趣旨は至って明瞭。
“いかに妹を大切に思っているか！？”これがこの同好会の…」

「じゃあ、他に意見も無いみたいだから今日の会議はこれで終わりましょうか」

駿の熱弁の最中だったが、
ヒナギクは完全にスルーした。

「ちょっと会長！？
俺の話がまだ終わって」

「はいはい。
分かったわよ、却下ね」

「早過ぎませんか！？」

ヒナギクはため息をつくと『却下』という意向をコンマ2秒で駿に伝えた。

流石、白皇の生徒会長は伊達じゃあないな……

言い忘れていたが、駿は重度のシスコンである。
妹の伊澄ちゃん一筋で、彼女の事になると周りが見えなくなるという困った奴なのだ。

「待ってくれ会長！！
なんで黒魔術同好会がＯＫで俺の提案するのはダメなんだ！？」

「ダメなものはダメよ」

その困った奴は案の定困った事に直訴をしていた。
ある意味男らしいが……

こんな困った奴ではあるが、
実は俺が一番尊敬する奴でもある。まぁ、これは周りにも本人にも内緒だけどな……

「俺の他にもきっとこの同好会を望んでいる若人は沢山いるはずだ！！ヒナギクには聞こえないのか、周りから発せられる熱いパトスが……！！」
「聞こえないわよ！！」

若人って……
お前は何時代の人間だ。

とまぁ、そんなこんなで本日も平和過ぎるほど平和だった。

＊

生徒会が終わって、家に帰った俺は予定通り新しい料理を作って、
ＴＳＵＴＡＹＡで借りてきた某ロボットアニメを見て時間を潰した。
因みに某ロボットアニメとは他でも無い勇〇シリーズである。

高校生になって言う事でも無いとは思うが、アレは燃える。
意外かも知れないが、俺の趣味の一つだ。

その後、姉さんが帰ってきてばあちゃんと三人で夕食をとった。
他愛のない団欒の後、俺はばあちゃんの年甲斐もない遊びに付き合
い、そうこうしているウチに時刻は深夜になった……

鷹ノ瀬家は代々続く名家だと言ったがそれには理由がある。
それは鷹ノ瀬家が代々妖怪退治というけったいなモノを生業として
いたからである。

それを知らされたのは俺が中学生になったばかりの頃だった。

鷺ノ宮家には及ばないが、歴史ある伝統らしい。
現在は妖怪、悪霊退治の退魔専門としての仕事として成り立っているのである。

鷺ノ宮というから駿も同業者であるが、そういう意味ではアイツは俺の先輩にあたる。
駿は五歳からその生業を背負わされたのだという。
十三だった時ですら恐ろしかったのにそれを五歳の時からやってのけていたなんて驚きだ。

話を戻すが、本日は依頼が入っていたので深夜、俺は依頼にあった場所に出掛けることになった。
姉さんとばあちゃんにそう伝えてすっかり暗くなった外へと足を踏み出す。
今回の依頼はかなり簡単なものだったので俺一人で問題ないだろうとの判断だ。

そんな訳で、現在……
深夜でひっそりとした住宅街を一人歩いているのだ。

目的地はとある神社。
妖怪退治では定番のスポットと言えるだろう。

「……眠っ」

昼寝しとけば良かったなと若干後悔に苛まれたが、俺は直ぐに首を振って目的地へと歩みを早めた。

○

～神社～

神社に到着してから凡そ１５分くらい経っただろうか。
俺の前には目を回して消えてゆく下級妖怪の数々。
そして俺は黒い木刀を手に握っている。

そう、既に依頼は完了してしまっていた。

依頼人も簡単なものだとは言ってはいたが本当に今回の依頼は簡単なものだった。
俺としては嬉しい限りだ。
さっさと帰って寝るか。

「……ん！！」

疲れや眠気を吹き飛ばすように勢いよく延びをする。
だが、そのまま歩き出そうとしたその時……

「伏せて！！」

「！？」

突然上空から聞き慣れない女性の声が響いた。

俺は咄嗟に言われた通りに屈んで伏せる。

カッ！！！

たった今俺が立っていた場所に狐の妖怪の姿が現れた。

そして次の瞬間ーー！！

その妖怪が後方に吹き飛ばされてしまった。

それは一瞬の出来事……

だが俺はすぐに状況を理解した。どうやらあの狐の妖怪は俺に飛びかかってこようとしたようだ。

それをいきなり聞こえてきた声に助けられた。

じゃあ声の主が今狐の妖怪を吹き飛ばしたのか？

「ごめんなさい。
怪我はない？」

すると、屈んだ状態の俺の横に女性が着地してきた。

「ああ。
すまない、助かった」

「いいえ。
あれは私が見失った妖怪だから。感謝するのは私の方よ」

俺は立ち上がって女性に礼を言うと、彼女は首を振ってそう返事をした。

長く綺麗な黄色い髪に、右側の髪を赤いリボンで結ってある。
黒くかなりの大きなカーディガンを羽織っていて、
その下は白いブラウスに水色のミニスカート。
そして手には柄が漆黒でやたら長い刀身の日本刀を持っている。
俺と同い年くらいか、かなりの美少女だった。

「感謝って、どういう意味だ？」

「貴方がここで魔力を持った妖怪達を相手にしてたから、あの妖怪がここにきたんだと思うわ。
間に合って良かった」

どうやら俺が妖怪退治している所を見られていたようだ。
という事は同業者か何かだろうか。そういえば俺は駿や伊澄ちゃん以外の同業者を知らないな……

「あのー」

「待って」

俺はまだあまり整理出来ていない状況を彼女に尋ねようとしたとき、彼女が声をあげた。

視線は前方に向けられているので、俺も同じように前方を見ると、先程吹き飛ばされた狐の妖怪がこちらを睨み付けていた。

どうやらまだ退治されていなかったようだ。狐の大きさは狼より少し大きいくらい。

なるほど、素早さに特化した類いの妖怪か。
これからちょっとした隙にすぐ逃げられてしまうだろう。
どうやら今は臨戦体制のようだが……

「ちょっと厄介ね……」

「え？」

彼女がそう呟くと同時に、狐の周りには数十体の妖怪が次々と現れ始めた。
手下を召喚したと言ったところか……

本当は早く帰りたかったんだけど、そうは問屋が下ろさないようだ

「雑魚はなるべく引き受けよう」

「え？」

「またこの数を相手にすればあの妖怪に逃げられる可能性が高い。だから君はあの狐だけをおってくれ」

俺はそういうと木刀を握り直して周りの下級妖怪を睨む。

「ごめんなさい。
私の不注意で巻き込んでしまって」

「良いって。

さっき助けて貰った礼だと思ってくれ」

「ええ、ありがとう」

彼女はそう言って微笑んだかと思うと、左手に持っていた日本刀を正眼に構えた。

そのまま一気に前方の狐に向かって駆けていく。
その彼女に周りの妖怪が数体行く手を阻もうとするも……

「祈りなさい……」

彼女はスッと目を閉じてそう呟くと日本刀を横に寝かせる。

「……！！」

そして、彼女が一太刀入れると、あっという間に数体が次々と斬撃をうけて消滅していく。
いや、あれは一太刀ではない。
恐らく幾重もの攻撃を仕掛けているのだろうが、まるで一太刀に見えるほど攻撃が速いんだ。

参ったな……
ありゃ、駿よか速いかも知れねぇ……

夜天を駆ける彼女の姿は、美しくそして恐ろしいものだった。
まるで神話に出てくる戦女神を彷彿とさせるような……

「グォォォ……」

「っといけねぇ。
俺の役目はこっちだったな」

フと我に返ると俺はいつの間にか数十体の妖怪に囲まれそうになっていた。
予想通り、素早い彼女よりボーッと突っ立ってた俺に標的をかえたようだ。

「ま、どちらにいってもテメーらの行く末は決まってんだけどな……」

妖怪達は一斉に俺に向かって飛びかかってくる。

「こっちも、極楽浄土には程遠いぜ！！！」

木刀を渾身の力で握ると、自分の周りに思いきり振り払った！

「「ギァァァァ！？」」
「「グォォォ！？」」

それだけで十体以上の妖怪が消え去る！
だがまだまだ数は残っている訳で……

「おおォォォォォ！！」

俺は木刀を奴等に向けて振り払うのだった……

○

数十分後……

凡そ五十体以上を倒した所で、急に妖怪達が姿を消し始めた。
恐らく先程の狐が彼女に倒されたのか、もしくは逃げられたのかのどちらかだろう。

「まぁ、とにかく一難去った訳だな……」

俺は木刀をしまうと、腰に手を当てて周りを見渡す。
すると、少し離れた場所から彼女が歩いてくるのが見えた。
その落ち着いた様子から倒したものだろうと確信する。
もし逃げられたのにあの落ち着きぶりだったらある意味大物だ。

「倒せたんだな？」

「ううん、逃げられた」

ズルゥ！！

普通に逃げられていた！

コイツ、大物だ……

「なんて冗談♪
ちゃんと倒したわ」

「は？」

と思ったら、今度はクスリと微笑んで彼女は日本刀を鞘にしまう。
何だか、ちょっと変な奴のような気がするぞ……

「ありがとう。
貴方がいなかったらきっと捕まえられなかった」

「いや、まぁ乗り掛かった船だったからな」

彼女は丁寧に俺に向かって頭を下げてくれた。
訂正、変な奴じゃ無くてちゃんとした女の子でした。

「でも凄いわね。
あれだけの数の妖怪を相手にしても無傷なんて」

「いや、そんな事は……
あ、そういえば……
ずっと気になってたんだけど」

「？」

俺は先程から気になっていた事を彼女に尋ねることにした。

「こんな事してるって事は、
君も同業者なのか？」

「同業者？」

「だから、妖怪退治を仕事にしている方なのかって事だよ」

「そっか……
こっちではそういう風に言うのね……」

俺の言葉を聞いた彼女はそう呟くと、一人で納得したように頷き始めた。

「うん。
まぁそんなような感じかな」

暫くして顔を上げると、彼女はそう言って微笑んでみせた。
妖怪退治かと聞かれて笑って返せるなんて凄いと思う。
さっきの戦いを見てもそうだけど、かなり長いことこの世界に携わっているのだろうか……

「あ！！
もうこんな時間」

「ん？ああ……」

彼女の言葉に俺は腕時計を見ると、時刻は午前1時半だった。
学生が歩き回っていい時間帯じゃあ無いな。
きっと彼女もそう思って…

「いけない！
あのコンビニ2時までだからこのままじゃメロンパン買えなくなる！」

……は？メロンパン？

「じゃあね！
私急がないと！」

「は？あ、ちょっと！？」

訳の分からない発言をしたかと思うと、急に神社から出ていこうとする。

「あ、そうだ」

「？」

かと思ったらまた急に立ち止まって俺の方に振り返った。

「私は篠月楓っていいます。
貴方は？」

「へ？あ、ああ……
俺は鷹ノ瀬翼だ」

普通に自己紹介だった。
つーか何か流れがズレてないか？

「翼君ね。
よし、覚えたわ。
じゃあ、またね」

「え？また？」

楓といった女の子はそう言い残して、神社から去っていった。
……何というか、掴み所が無い性格だな。

俺は暫くそこに立っていたが、肩を回して延びをすると神社を後にすることにした。

（しかし……
えらく強かったな……）

そう思うと何だか少し悔しいような気もする。
俺も負けてられない、か……

俺は都市の明かりのせいで星が見えにくくなった夜空を見上げる。
そして一息いれて、帰路につくのだった……

まだ彼は知らない。
この出会いが後に彼を大きな運命にへと引きずっていく事になるということを……

其の九　鷹ノ瀬家の退魔剣士（後書き）

翼と楓の出会いの話です。
と言ってもほんの一部ですが。
これはいずれ、翼が駿の過去に関わってくる時の重要なポイントになってくると思います。

しかし一人称視点って難しいですね……
かなり苦労しました？
おかしな点があったら是非おっしゃって下さい！

次回もよろしくお願いします♪

其の十　女装は心の鎧です（前書き）

今回は
其の十、其の十一と二話連続投稿です！
両方とも見ていって下さい！

【変更点】

楓の服装を変更することにしました。
“黒いコート”でしたが、
“黒いかなり大きいカーディガン”
に変更します。ご了承のほどお願いします。

其の十　女装は心の鎧です

今日は１２月２９日
年末も年末である。

そんな日の朝の白皇学院……
敷地内にある時計塔の最上階にある生徒会室。

「「はぁ……」」

生徒会室では二人の女子生徒がため息をついていた。
一人は花菱美希。もう一人は朝風理沙。
生徒会役員で副委員長と風紀委員の二人である。

「暇ね……」

「ああ、すべからく暇だな」

二人はどうやら暇を持て余しているようだった。

「補習抜けてきたはいいけど…
泉は置いて来ちゃったしな～」

「加えて生徒会室も皆出掛けていて誰もいないし」

暇というより補習をサボってきただけのようだった！

因みにヒナギクと千桜は生徒会の用事で外出中。
愛歌は職員室。
翼と駿はまだ来ていない。
そして……

（ミキちゃん！！リサちん！！
置いていくなんて酷いよー！！）

「こら瀬川！！
余所見してないで問題を解け！」

「えーん！！」

数名の補習者と一緒に教室でしっかりと勉強させられているのだった……

其の十　女装は心の鎧です

そんな訳で、現在生徒会室には美希と理沙の二人だけなのである。

「「う～、暇～」」

そんな風に二人がゴロゴロとうだっていると……

ガチャ……

「おはよーさん……」

「「おっ！」」

生徒会室の扉が開いてノロノロと駿が入ってきた。
二人は面白くなりそうな人物の登場に顔を上げる。

「む？
駿君、その手紙どうしたんだ？」

「ああ、これ……？」

やって来た駿は右手に二三枚の手紙を持っていた。
駿は尋ねられると呆れたような表情で二人を見る。

「これはアレだよ……
ラブレター……」

「「……誰の？」」

「……翼のだよ」

彼は拗ねたようにそう言うと、乱雑にラブレターを長テーブルに置いた。

「ふむ、流石だな翼君だな。
全くラブレターの勢いは衰えないな」

「ホントにな」

理沙の言葉に駿は深々と息をつくとテーブルに着いた、

「しかし、駿君は全然平気そうね？」

「まぁ、もう中学ん時から四年余りで慣れてるからな。
別に羨ましくなんか……」

駿はヒラヒラと手を振ってすまし顔のまま……

「羨ましくないの？」

「メチャクチャ羨ましいっす！！」

超正直な奴だった。
まぁ、そりゃそうだろう。

「そうか……
ちょうど我々も暇を持て余していたんだ。お望みならば我々が駿君にどうすればモテるようになるかを教えてあげてもいいぞ？」

「モテる方法！？」

理沙の悪ノリ感溢れるこの発言も今の駿には効果抜群である。
ガバッと顔を上げるモテない男、鷺ノ宮駿。

「ふむ。
まず、今の駿君には決定的に足らないものがある。
それが何だか分かる？」

「決定的に足らないもの…？」

恐らく悪ノリ2号であろう美希が駿に向かって指を差す。
しかし彼は全く分からないとばかりに首を傾げる。

「それは女心よ！」

ドーン！！

あまりの衝撃に駿のバックには荒波が岩に打ち寄せる光景が浮かんできそうである。

「女心？」

「そう。モテる男が必ず心得ているといっていいのが女心。
これが分かっていないと話にならないわね。
つまり、女心を心得ずしてモテよう等とは笑止千万！！」

「な……！！
何故か凄い説得力だ！！」

今までに無い気迫に駿は座ったまま思わず後退りしてしまう。

「そう。
そして駿君がモテる為には女心を習得しなければならないぞ」

「……どうすればいいんだ？」

「知りたい？」

「ああ、教えてくれ！
美希、理沙！」

駿の言葉に二人はフッと微笑すると口を揃えて……

「「それは……
女装だーーーっ！！」」

ガタッ……

「お前らに聞いた俺が馬鹿だったよ……じゃあな」

駿は席を立って生徒会室を出ようと扉に手をかける。

「「待ちたまえ！」」

「なんだよ！？」

駿の袖を掴んで引き留める美希と理沙。

「せっかく我々が真面目に君の事を考えいるというのに！！」

「お前らさっき暇を持て余してるとか言ってたじゃねーかァ！！」

全くもってその通りである。

しかし美希達は首を振ってみせる。

「女装を侮るな駿君。

女装をすれば女心も自ずと見えてくる筈だ」

「いや、それ何か違くね？」

「それに駿君なら似合う気がするしな……」

「それが本音だろ！！」

15分後……

「……」

美希と理沙の前には水色のワンピースを着た黒いロングヘアーの美少女が立っていた。

「ま、まさか……

コレほどまどとは……」

「予想以上だな……
黒髪のウィッグをつけると完全に女の子だぞ……」

目の前の美少女は他でも無い、駿だった。
彼は自分の格好があまりにも恥ずかしいらしく、冷や汗すら流していた。

「あの、すみません……
もう勘弁して下さいませんか？」

「「いやいや、とってもよく似合っているよ」」

「そういう問題じゃねーんだよ！！」

美少女は二人に向かって心底訴えるように叫ぶ。

「ってか、今ヒナギク達が来たらどうするんだよ！
俺の人としての尊厳が危ういんですけど！！」

「まぁ、これからは男の娘として認識を新たにされる事は必須だな」

「必須じゃねぇ！！」

ワンピースを着たまま身体を震わせる彼女、いや彼の様子は言葉以外は完全に女の子だ。

「大体、こんな姿愛歌さんに見られたりでもしたら……
色んな意味でもう学校に来られなくなるって！！

（特に弱点帳！！）」

「まぁ……
それは困るわね～」

「！？」

するといつの間にか駿の隣に愛歌が座って紅茶を飲んでいた。
美希と理沙も驚いたが、駿は飛び上がって退けぞる。

「あ、あああ愛歌さん！？
いつからそこに！？」

「駿君が女装し始めた所からかしらね～」

「してません！！
させられたんですよ！？」

ハマり過ぎている女装の格好で言っても説得力は無いのだが。
しかし愛歌はそんな彼を見て微笑んでみせた。

「大丈夫よ駿君。
そんな格好をしているのも何か事情があるんでしょう。
だからこの事は誰にも言わないであげるわ」

「あ、愛歌さん……」

彼女の優しい言葉に駿は思わず目頭が熱くな……

パシャ！

「安心して、この事はすぐに忘れてあげるから♪」

愛歌は持っていたデジカメで駿の美少女姿を撮って、更に『ジャポニカ弱点帳』と書かれたノートに何やら色々と書き始めた。

（忘れる気ねぇーーーっ！！
まんじりとも忘れる気ないよこの人！！つーか今写真撮られなかった！？）

ある程度予想してたけどやはり突っ込まずにはいられない駿。

（流石愛歌さんだ……
またも駿君の弱点が一つ……）

（最大の弱みだな……）

美希と理沙も流石だと思いつつ自分で無くて良かったと内心思っていた。

「まぁそれはそうとして…」

「簡単に置かないで下さい」

愛歌はパタリと弱点帳を閉じると、美希と理沙そして駿を見ながら口を開いた。

「もう少しでヒナギクや千桜さんも帰ってくるけど……

駿君はその格好のままで良いの？」

「ええ！？
マジっすか！？」

駿はワンピースを翻して生徒会室の扉の方を見る。

「ちょっ、美希！
このままじゃ俺の人権が……
早く俺の服を！！」

「そうね、ちょっと悪ふざけが……」

美希はそう言って長テーブルにある駿の服を取ろうと……

「ニャーン！！」

「あ、」

一体どこからやって来たのか、結構大型の猫が服の端を掴んだ。
そして、その服を引きずってそのまま生徒会室から飛び出していった。

「なぁ！？
え、ちょっ！！」

「ニャーン！！」

女装のまま駿は入口に手を伸ばしたが、既に猫は去ってしまった。

「あ～、行っちゃったな」

「オイィィィィ！！
行っちゃったじゃねぇかよ！！
どうすんだコレ！！」

生徒会室から出た猫を時計塔から出る前に捕まえようと、駿は慌てて扉から出ようとしたが…

「「あ……」」

「い〝ぃ！？」

ジャストミート。
ヒナギクと千桜が駿の目の前に現れた所だった。

（どんだけ間が悪いんだ俺はーーーっ！！
いや、まだバレたと決まった訳だ……）

彼は時の終わりを悟り、ガクリと膝をついてしまう。

「えっと……
駿君……よね？」

「女装……か？」

（バレてる……！！！）

二人は目の前に座り込んでいる美少女を見て、すぐに駿と見抜いてしまった。

「い、いや！！
違うんだヒナギク！！これには色々と複雑な事情が……」

彼は長い黒髪（ウィッグ）のせいでをたなびかせ顔を上げて訴えようとする。

「……やっぱりそうなのね。
一瞬ホントに女の子かと思ったわ」

「しかし……
かなり似合ってるな／／／」

ヒナギクは改めて驚いたように、千桜は色んな意味で顔を赤らめている。

「いや、そうじゃなくて…！！」

「分かってるわよ。
少なくとも駿君に女装趣味があるとは思っていないわ」

「え？」

ヒナギクは少しため息をついたようにそう言うと、生徒会室の中までやって来る。

「大方、美希や理沙達がまたふざけてこんな事になったんじゃない？それで色々と不幸が重なって着替えるに着替えられない状況になったんでしょう」

流石は白皇学院生徒会長。
驚異的洞察力である。

「二人とも補習をサボってこんな事を……」

「いや～、駿君があまりにも似合っているのでついつい」

美希と理沙はバツの悪そうに苦笑してみせた。

「全く。
駿君も嫌がってるじゃない」

「会長……」

ヒナギクの言葉に駿は感動したように彼女を見つめる。
というか、目を潤ませていると最早女の子にしか見えないのだが。

しかし、駿の感動も次のヒナギクの一言で打ち砕かれる事になる。

「それに、彼女にはこっちのフリフリの服の方が似合ってるわよ！」

ヒナギクは生徒会室に何故かあるクローゼットから白い可愛いらしい服を取り出してみせた。

「ちょっと待てェェ！！
彼女じゃない俺男だから！！」

「いや、ここは敢えてコスプレなんかが良いと思う」

駿の叫びも虚しく、今度は千桜がクローゼットに何故か入っていたアニメキャラのコスプレ衣装を取り出す。

「いや、それならコレだ！」

「う～ん、コレなんかどうかしら？」

「オイィィィィ！！
聞けェェェェ！！」

そんな訳で悪ノリは女性陣全員に広がり、遂にはどの服が一番似合っているか等という駿には恥さらし極まりないイベントが開催される羽目となった。
しかも試着室が設置され、着替えは自分で行うというかなり屈辱なおまけ付き。

その一時間半後、翼が遅れて生徒会にやってくると駿が泣く泣く戦闘不能になっていて、
周りの女性陣は罪悪感から彼を慰めているという光景が目撃されたという……

其の十　女装は心の鎧です（後書き）

後半へ続く！

其の十一　運命の赤い糸ってあれ何で赤いか知ってる？（前書き）

今回は
其の十、其の十一と二話連続投稿です！

両方とも見ていって下さい！

其の十一　運命の赤い糸ってあれ何で赤いか知ってる？

年の瀬も迫った１２月２９日……
年末は世間も何かと忙しく、人々もまた忙しなく動いている。
そしてまた、とあるレンタルビデオ屋でも師走の忙しさが……

「忙しくねーよ」

レンタルビデオショップ橘。
店内のレジに座って頬杖をついていた橘ワタルは不機嫌そうに呟いた。
彼は若干１３歳にしてこのビデオ屋の店長なのである。

「まぁ、仕方ありませんよ若。
最近は不景気ですし……」

そう言ってワタルを慰めているのは、貴嶋サキ。
彼の同居人である。
いつもメイド服を来ている。

「別に店はいつも通りだからそんな事で不機嫌なったりはしねーって……
それより……」

「それより？」

「俺の出番はどんだけ無いんだよ！？初登場がたったの４分の１ページで後は全く出て無いじゃないか！！」

ワタルは天に向かって指を突き立ててものを申した。
どうやら自分の出番が全く無かった事を気にしていたらしい。

「まぁまぁ若。
きっとこれからは沢山出番がありますよ」

「……どうだかな」

サキに宥められて渋々ながらレジに座る。
しかしやはり不機嫌な表情は変わっていない。

と、まぁ客足もいつも通りの平和なレンタルビデオショップ橘の午後。

ウィーン……

「あ、いらっしゃいませ！！」

そんな時、店の自動ドアが開いてお客が入ってきた。
ワタルもドアの方に顔を向けると……

「こんちわ……」

「あ、駿」

入ってきたのは鷺ノ宮駿だった。彼は若干目が虚ろになっていてかなり疲れているようだ。

「ど、どうしたんだ？」

「え？何が？」

彼はフラフラとレジの前まで来るとぐったりとした様子でワタルに目を向ける。

「何がって……
メチャクチャ疲れているみたいじゃないか。大丈夫か？」

「別に疲れてるわけじゃねーよ…ただアレだ。色々と尊厳を失ったんだよ……」

「は？尊厳？」

駿の言っているのは午前中に生徒会室で起こった惨劇の事である。
どうやらまだ傷は癒えてないようだ……

「まぁんな訳で、長さんの時代劇とかアニメとか見て疲れを取ろうと思ってさ」

「あ、ああ……
そっか。まぁ色々借りてってくれよ」

「うん……」

駿はへなへなと頷くと負のオーラを漂わせながら店内のビデオ棚に歩いていった。

「駿さん、大分落ち込まれてるようですね……身の回りが凄まじく暗いですね」

「そうだな。せめて沢山レンタルして貰って元気を出して貰おう」

「さりげなく願望が混じってますよ若……」

ワタルとサキはそんな感じで駿の事を見送るのだった。

其の十　運命の赤い糸ってあれ何で赤いか知ってる？

「はぁ……

午前は散々な目にあったな…」

駿は盛大にため息をつきながらＤＶＤの手にとっては眺め、そしてまた棚に戻していく。

彼の手には既に三枚のＤＶＤ。

三枚とも『緋色の剣客』というシリーズモノの時代劇だ。

『緋色の剣客』はこの世界では有名な時代劇。

かつて最強を謳われた悲しき過去を持つ男が日本全国を周りを様々な人々と触れ、様々な景色を目の当たりにし、様々な悪事を裁いていくという人情ドラマだ。

駿がゲームやアニメに負けず劣らず好きな大河ドラマである。

因みに現在も放送中でシーズン八までＤＶＤ出ている。

（シーズン五を三枚も借りたし、さっさと帰ってみちまうかな…）

そんな考えを脳裏に過らせて棚を後にしようとするのだが……

（いや、もう少し他の時代劇を見てくか……）

駿はそう考え直して、『緋色の流浪人』のコーナーから別の時代劇の棚に移動していく。

もう少し他の時代劇を見てからでも帰るのは遅くないと思ったのだろう。

（う～ん……

たまには鎌倉の……いや、平安時代の時代モノのなんかも……）

駿は羅列されているＤＶＤに手を伸ばして選ぶようにずらしていく。

しかしすぐにとあるＤＶＤの前で手をピタリと止めた。

（お……
これなんか、面白そう……）

そしてそれを取り出そうと手を伸ばし……

「「……え？」」

駿の手の平が伸びてきたもう一つ手と重なった。

彼がそちらに顔を向けると、隣には長く綺麗な青みがかった黒髪に赤い唐衣を着た美少女が一人。

「……駿様？」

「アンタは……確か皇？」

そう。彼女はついこの前駿が会った皇綾姫であった。
綾姫は駿を見て少し驚いたようだったがすぐに嬉しそうな表情に変わった。

「まぁ、覚えていて下さいましたのね」

「いや、そりゃまぁ……」

出会いがアレだけ衝撃的ならば忘れる筈も無いだろう。
綾姫はそう言って微笑むと、頬に手を当てて何かを考え始めた。

（殿方の手と私の手が偶然にも同じ場所に重なりあう再会……
まぁなんてロマンティックなんでしょう／／／
私達の間をまるで運命の赤い糸がしっかりと結んでいるようですわ
／／／）

彼女は顔を赤らめながら目を閉じて自分の世界に想いを馳せているようである。

「あの～」

駿は話を続けたいので彼女に話しかけるが聞こえていないのか、頬に手を当てて目を閉じたままである。

（やはり、こちらでも私達は結ばれ合う運命なのでしょうか……
ああ、私は一体どうしたら……）

仕方が無いので駿は綾姫の肩に手を置いて話しかけることにした。

ポンポン……

「お～い」

「ひゃう！？／／／」

すると、彼女は我に返って真っ赤になりながら駿に視線を戻す。

「すみません！
えっと、えっと……
ちょっと考えをしてまして…」

「はぁ」

慌てて取り繕おうとする綾姫に駿は軽く首を傾げるが、特に気にしていないようだ。

「それより……
えっと、皇？」

「フフ、そんな他人行儀な。
綾姫でよろしいですわ」

「あ、ああ……
なら綾姫」

「はい？」

彼は思いきり他人ではないかと思ったが、そこは追求せずに彼女の言う通り名前を呼ぶと、綾姫は小首を傾げてそれに反応する。

「何でこんな所にいるんだ？」

「何でって、ＤＶＤを借りにきたに決まってますわ」

「あ、いや。
うん、まぁそうなんだけど…」

彼の間抜けな質問に綾姫は若干呆れたように返した。
駿は頬を掻きながら伝えたい内容を言い直す事にした。

「こういう場所いるなんてちょっと意外だったからさ」

「あら、そうですか？
私、結構こういう娯楽も好きですわよ」

「へぇ……
（つーか娯楽って……）」

そう言ってニッコリと微笑む綾姫に駿は思わず苦笑いしてしまう。

「あ、そういや……
はい、コレ」

「？」

彼は思い出したように先程取ろうとしていたＤＶＤを棚から取り出すと、それを彼女の前に差し出す。

「コレ借りたかったんだよな。
一つしか無いみたいだから」

「でも、駿様も借りようとなさっていましたのに……
よろしいんですの？」

「いいよ。
俺は別に借りるつもりは無かったしさ」

彼はそう頷くと、綾姫はそれを受け取って駿を見つめる。

「そういう優しいところも、
変わっていらっしゃらないのですね……」

「へ？」

「いえ、何でもありませんわ。
ありがとうございます」

彼女は首を振って何でも無いと言うと、お礼をいってＤＶＤを受け取った。

そんな訳で、二人は借りたいものも借りたので会計の為に一階のレジに降りていく。

「まぁ、駿様も『緋色の剣客』を見てますの？
私も大好きですわ」

「おう、アレは時代劇の傑作だと思うよ」

「ええ、話の構成や男気溢れる人情が素晴らしいですわ」

二人は好きな大河ドラマで話を弾ませながらレジまでやって来た。

因みに綾姫は他に『勇者エク○カイザー』と『伝○の勇者ダ・○ーン』というＤＶＤを借りていた。

「おお、アンタ！！
女性なのに勇者シリーズを借りてるなんて、やるな！」

「このくらい当然ですわ。
女性なのに、という部分が引っかかりますが」

「ああ。だが俺のオススメはだな……」

しかも恐らく初対面であろうワタルとの間でも何か知らないが会話が弾んでいた。
綾姫は外見や言葉遣いからは想像し難いが、実はそういうモノも意外と好きなようだ……

（何つーか伊澄と似てんな……
ま、いいか）

綾姫に対してツッコミ所は多々ある気はしたが、駿は敢えて突っ込まない事にした。
特に今は気にする事でも無いと思ったのだろう。

綾姫のレジが済むと次は駿の番である。
彼女は先に外に出ると店の前で待っているといって出ていった。

「あの姉ちゃん、なかなか見る目があるな……」

「どーでもいいけど、初対面で何故アレだけ会話を交わせるのか俺には全く理解出来ねーよ」

ダン！！

「何言ってんだ駿！
同じアニメ（たましい）を共有するものなら出会った瞬間に分かるもんだろ！
それがＳＦ、ロボットならばそれは必然！
熱いパトスが聞こえてくるだろ！」

「聞こえねーよ。
つーか前回の俺のセリフと株ってるからな」

机を叩いて身を乗り出してくるワタルに駿はさも面倒臭そうに返事をする。

「仕方ない！
なら今すぐガン〇ムを見ろ！！
取り敢えず初代からＺＺまでを全巻と加えて……」

「だあァァァ！！
テメー何勝手にレンタル増やしてんだコラ！！
んな量借りる金ねーよ！！」

駿は先にレンタル登録されたＤＶＤ三本を引ったくり金を払うと急ぎ足でレジを後にした。

「ちっ！逃げたか……」

「若、お客様は大切にしましょうよ……」

レンタルビデオショップ橘は今日もそこそこ平和だった。

○

ビデオショップを出た二人は帰り道に着いている。
駿は学生鞄とビデオ屋の袋を持って、綾姫は和服姿に袋を持って歩いていた。

「なぁ」

「はい？」

「綾姫はこの辺に住んでるのか？」

駿はずっと気になっていた事を彼女に尋ねた。

「ええ。そうですが……
どうして急に？」

「いや、妖怪とか悪霊とかそういう類いのものを相手にする家系ってのはまぁ色々あるだろうけど、この辺で皇なんて苗字は聞いた事が無かったから」

「ああ、なるほど」

綾姫は納得したように頷くと、顔を駿の方に向け直した。

「私達は、そういう類いの依頼をお受けしたりしているんではありませんの。
お金も頂きませんし、依頼も受けた事はございませんわ」

「え……？」

「説明すると長くなりますが……そうですわね……そういう力を元々もっているだけで、身の回りに危険が迫ったら対応していると言いますか……」

綾姫自身も上手く説明することが難しいらしい。
頬に手を当てて考えてはいたが、遂には首を振った。

「遠かれ近かれ、駿様には分かる時が来ます。
ですから今は駿様の思った通りに考えて貰って構いませんわ」

「？？？」

綾姫はそう言って頷くが、
話が抽象的過ぎるため、彼は益々首を傾げる。

「まぁ、ここでお別れですわね。私はこちらなので」

「へ？
あ、ああ……」

そんな会話をしていると、いつの間にか二手に分かれた道までたどり着いていた。
駿の家は右で、綾姫の帰り道は左らしい。

「それでは駿様。
また、必ずお会いしましょうね。ごきげんよう」

「……ああ」

綾姫は扇子を取り出して顔を半分隠して丁寧にお辞儀をすると、スッと左側の道に歩いていったのだった。

駿もそれを見送ると右側に足を進めていく。

（……って、私達？
私達って……どういう意味だろう？）

歩きながら、駿はフと先程の彼女の言葉を反芻しながら引っかかったものについて考えていたが…

（ま、いっか……
さっさと帰って見よ見よ）

彼は直ぐに考えを振り払うと、鷺ノ宮家に向かって足を早めるのだった。

其の十一　運命の赤い糸ってあれ何で赤いか知ってる？（後書き）

二話連続は疲れました？

質問は次回の後書きに回します。すみません！

次回もよろしくお願いします♪

其の十二　可愛いものには棘がある（前書き）

今回はｔｏｋｋｉｉさんが考えて下さったオリジナル妖怪の登場です。今回も前編と後編に分けました。

では、始まります！！

其の十二　可愛いものには棘がある

鷺ノ宮家……
代々妖怪退治を生業とする由緒正しい家柄である。

そんな鷺ノ宮家では度々妖怪退治の依頼が入ってくる。
それが殆どだが、稀に他の形で妖怪退治に携わることもある。

例えば……

～鷺ノ宮家～

「……」

平凡なとある日の朝、鷺ノ宮駿は部屋で呆れたように突っ立っていた。
そして彼の手には一枚の紙。
その紙には『鷺ノ宮駿（笑）超残念な輩（爆）』と乱雑な筆文字で書かれていた。

「……」

しかも、それは一枚だけで無い。彼の枕元に同じ紙が凡そ１００枚近くはあるであろう山積みになっていた。

「……？」

駿は一通りそれを眺めて、何かの気配に気付いて部屋の後ろを振り返る。

ちょうど、駿の部屋の入口である引き戸の間から熊のぬいぐるみのようなモノがこちらを覗いていた。恐らくソレはこっそりと覗いているつもりなのだろうが、愛らしい小熊のぬいぐるみの顔が半分くらい出ていてはっきり言って丸見えである。

「……」

取り敢えず駿は紙から目を離して、部屋の入口の所まで歩いていくと……

ガラッ……

「うわわ！？」

「……」

引き戸を開けて、
部屋を覗いていた熊のぬいぐるみの目の前に立った。

「何してんだコラ」

「ーーっ！？」

そしてその可愛らしいクマを片手でヒョイと持ち上げると、駿の目線の高さまで持ってくる。

その小熊のらしき生き物は全長は大体４、５０ｃｍといったところか。茶色くフワフワしているテディベアのような姿の生き物で、クリクリとした大きな黒い瞳が見ていて何とも愛らしい。

「わー！！離せー！！」

駿に摘まれるような形で持ち上げられたクマは小さな両手両足をジタバタさせて暴れ始める。

「……離してやっても良いけど、まず質問に答えろ。お前は何、妖怪？名前は？」

「うるさいうるさいうるさーい！！離せーーっ！！」

「……はぁ」

駿の言葉に全く答えようとせずジタバタを続けるクマ。彼はため息をつくと、クマを掴んだまま中庭にある池の前まで歩いていく。

「いいかクマ公。この鷺ノ宮家自慢の池にはな、無数のピラニアが生息しているんだ。普段からあんまり餌を与えて無いからきっとメチャクチャ腹を空かしてるな。お前をこの池に落としたらどうなると思う？」

「……！？」

その話を聞いた途端に驚いたようにピタリと動きを止めるクマ。
そして怯えたように黒くて真ん丸の瞳を駿に向ける。
勿論嘘であるが……

「……熊」

「あん？」

「悪熊（あくま）……」

それがクマの名前らしかった。
何というか、可愛い外見とはかけ離れた名前である。

「……悪熊ってお前、その外見でよく名乗れんな」

「う、うるさいやい！！
この名前はカッコイイんだ！！
馬鹿にするなーーっ！！」

どうやら自分の名前にかなりの誇りを持っているらしかった。

「まぁいいや……
んでオメー、妖怪なのか？」

「うん……」

「あの紙のもオメーの仕業か？」

「うん……」

駿が自分の部屋に山積みになっている『鷺ノ宮駿（笑）超残念な輩（爆）』と書かれた紙を指差す。

悪熊はコクリと頷いたのでどうやら彼の悪戯（？）のようだ。

「何でこんな事しやがんだ？
部屋が散らかるだろ？」

「ちゃんと理由があるもん！」

「あぁ？理由だぁ？」

駿は訝しげに表情をしかめると、再び悪熊を持ち上げて顔の高さまで持ってくる。

持ち上げられた悪熊はコクコクと大袈裟に頷く。

「うん。それはね……」

「それは……？」

駿が首を傾げると、悪熊は小さな手をヒョイと伸ばす……

「死ねーーーっ！！
鷺ノ宮駿ーーーっ！！！」

「どおォォォォ！！？」

その小さな手からいきなり物凄く鋭そうな爪が五本出てきて間髪を入れずに駿に襲いかかってきた。彼は持ち前の反射神経で寸での所で顔を反らせてソレを避けるが…

「えい！」

「あっ！」

悪熊は駿の持つ手の力が緩んだ隙にぴょんと手をすり抜けて飛び跳ねて彼の前から逃げていく。

「やーい！やーい！
ここまでおいで～♪」

「……」

小学生のような挑発染みた言葉を並べて、悪熊は去っていってしまった。

「……何だアレ」

残された駿は部屋の前に突っ立ってただ唖然とそれを見送っていたのだった。

其の十二　可愛いものには棘がある

シャワーを浴びて、着替えを済ました駿は居間に向かって廊下を歩いていた。

「ったく……
あのクマ公、部屋を散らかしやがって……」

駿は部屋中に山積みにされた紙のことを思い出してため息をつく。
あんな成りでもどうやら妖怪らしく、だとするとあの紙は所謂果たし状とも考えられる。

（ま、放っときゃいいか……）

駿はそんな風に思考を振り払うとと足を早め、朝御飯の為に居間に到着する。

「どう？美味しいクマちゃん」

「うん！とっても美味しい♪」

ずざざざぁーーーっ！！

居間に入ってくると同時に駿はそのままの勢いで盛大に転けてきりもみ状態で床に滑り込んだ。

なんと居間では初穂が朝御飯を悪熊に振る舞っていたのだ。
彼女もまた、悪熊と一緒に朝食を摂っている。

「まぁ、おはようジュン君。
今日も元気いっぱいね」

「ああ……おはようございます
っていうか……」

駿は顔を上げて挨拶を返すと、ガバリと起き上がって初穂に向かい合っていた悪熊の元にツカツカと歩いていく。

そして頭を掴んで駿の目線の高さまで持ち上げた。

「ここで何をやってんだテメーは……」

「わぁ！！は、離せ！！」

「離せじゃねーよ。
何で当たりのように朝飯食ってんだお前は？ああ？」

駿はそう言って持ち上げたままジト目で顔を近づける。

「もう……
ダメよジュン君」

「へ？」

すると、その様子を見ていた初穂が口に人差し指を当てて駿をたしなめた。
彼は驚いたように手の力を緩めたので、その隙に悪熊はぴょんと初穂の胸に飛び込む。

「よしよし……
大丈夫？クマちゃん」

「うん……」
初穂は悪熊を抱いてその頭を優しく撫でる。

「ジュン君
せっかくのお客さんを怖がらせちゃダメでしょ？」

「いや、あの……
お客つーか、ソイツ妖怪なんですけど」

駿はかなり困ったように初穂と悪熊の両方を交互に見る。

「動物でも妖怪でも、ジュン君を訪ねてきたお客様なんでしょう？
そうよねクマちゃん」

「うん！
僕は鷺ノ宮駿を抹殺するためにわざわざ妖怪の国からやって来たん

だよ！」

悪熊は初穂に撫でられて気持ち良さそうに頷いた。

「ね？
だからイジメたらダメよ？」

「いやいや！！
色々ツッコミ所があるけど、
今抹殺って言いましたよね！？
わざわざ俺を殺りにきたって事ですよね！？」

「もう、ジュン君ったら。
この子がそんな事するわけ無いじゃない。
アメリカンジョークよね？」

初穂がニッコリと悪熊に微笑みかけると、悪熊は照れたようにだがしっかりと首を振った。

「ううん！！
僕は真剣に駿をぶっ殺しに来たんだよ！」

「まぁ、本当にお上手ね」

悪熊が元気よく物騒な事を言うのに対し、クスクスと本当に可笑しそうに笑う初穂。

「じゃあ、ジュン君も一緒に朝御飯たべましょうか」

「……はあ」

何が“じゃあ”なのかさっぱり分からない駿ではあったが、一々突っ込むのも無駄だろうと悟ったのか、彼女に言われた通り席に着くことにした。

「クマちゃん。
朝御飯の時はジュン君と仲良くするのよ？」

「うん！！」

初穂の言葉に悪熊は可愛らしく返事をしていたが、

「べ～……」

「……」

彼女の見ていない所で、駿に向かってアッカンベーとしていた。

＊

朝御飯も済み、駿は身支度を整えて学校に向かおと玄関にいた。
見送りに初穂がニコニコと微笑んで立ってくれている。

「あの義母さん？
あのクマ公は？」

「クマちゃんなら元気いっぱいに外に走っていったわよ」

「……そうですか」

悪熊は現在鷺ノ宮家にはいないようである。
流石に妖怪を初穂達のいる家に残して学校に行くのは抵抗があったが居ないのなら大丈夫だろう。

「じゃあ、行ってきます」

「行ってらっしゃ～い」

ニコニコと手を振る初穂に見送られて、駿は学校に向かうことにした。

門を出て通学用に使う自転車の所まで歩いていく。
しかし駿は自転車の前で動きをピタリと止めた。

「……は？」

自転車はいつも通り停車しているのだが、なんとサドルが外されていたのだ。
外されたサドルは自転車の前車輪の横に転がっている。

「……？」

駿は何かの気配に気づいて振り返ると、近くのから熊のぬいぐるみのようなものがこちらを覗いているのを発見した。
が、それは直ぐに引っ込んでしまう。

「……はぁ」

駿はそれを確認すると、ため息をついてサドルを戻した。
そして、自転車を使って白皇学院に向かう。

だが……

ガタン！

「んなっ！？」

暫く走っていると前輪がパンクして、かと思うと続けざまに後輪もパンクする。

「……はぁ」

駿が振り返ると、また近くの住宅から熊が顔を覗かせていた。
彼は仕方なしに歩きで自転車を引いていく事にしたが……

ドン！！

「だあァァァァ！？」

工事中じゃないマンホールの上を通った瞬間それが外れて地下に落

下したり……

グサッ！

「痛っ！？」

駿が通ろうとした道にマキビシがまかれていたり……

ザバーっ！！

「うわっぷ！？」

どこかのスプリンクラーがいきなり起動して水が駿に向かって噴射してきたり等……

それは地味な不幸が立て続けに登校中の彼を襲ったのだった。

＊

～時計塔最上階～

「……」

駿が最上階にある生徒会室の扉に手を伸ばそうとして手をピタリと止めた。

何故なら両開きのドアの取手に画ビョウが両面テープで貼り付けられていたからである。

「……」

駿は画ビョウのトラップを無言で片付けると、振り返ってエレベーター近くにある死角にツカツカと歩いていく。

そして……

「おいコラ」

「んーーーっ!?」

そこに隠れていたものを持ち上げて引きずりだした。

それはあの可愛い妖怪、悪熊であった。

「お前な、これは抹殺じゃなくて悪戯だろ!!」

「うるさいやい!!

これは立派な死のトラップだ!!」

「はぁ……」

駿は悪熊に指を突きつけて叫ぶと負けじと悪熊は言い返した。
それを見て彼は今日何度目かのため息をつくと、改めて目の前の可愛い妖怪に目を向けた。

「あのなぁ、オメーの目的はどうだか知らんが、他人にまで迷惑をかけるような事は止めろ。
あんな風に取手に画ビョウを貼り付けられたら危ないだろ」

「でも…！！」

「でもじゃねーよ。
目的が俺だけなら周りには迷惑かけたらダメだろ？」

「うっ……」
確かに人の教えとしては道徳的で初歩的なことである。
それを諭す駿は至って正しいのだが……
妖怪と人間の会話にしては色々とおかしいような気がする。

「返事は？」

「……うん」

ツッコミ所は多々あるが、どうやら他人には迷惑をかけないということで納得したらしい。

ガチャ……

「あ、やっぱり駿君ね。

今日は遅刻よ？」

「！？」

駿は悪熊を持ったまま一旦時計塔から出ようとしたのだが、ちょうど生徒会室の前を通ろうとした時ドアが開いて中からヒナギクが出てきた。

どうやら先程の声に気付いたらしい。

（やべっ！！

今はクマを持ったまま……

なぁ！？）

駿が慌てて悪熊を隠そうと手を見るが既にそこにはおらず、悪熊はなんと駿の肩の上にちょこんと乗っかっていたのだ。

（何してんだテメーはァァァァァァァ！！）

「えっと駿君？

それ……何？クマ？」

「え！？

ああ、えっと……」

勿論、ヒナギクは駿の肩の上に乗っかっている悪熊を見て首を傾げる。駿は咄嗟に天井に目を反らすと頭をフル回転させて対応する術を考える。

そして……

「これな、これはアレだ。

鷺ノ宮家の……ペット、そうペットだ。ペットの小熊だ」

「……ペット？」

果たしてペットで熊を飼うという家庭があるだろうか？

（くっ……！！
ダメか……！？）

駿は不思議そうな表情をしているヒナギクの反応を息を呑んで見守る。

「へぇ、とっても可愛いわね♪」

「……あ、ああ」

全く問題は無かった！
駿は半ば安心半ば呆れたように頷くと悪熊を肩に乗せたまま生徒会室に入っていく。

「おー、おはよー駿君。
って、その肩の上に乗っている可愛い生き物はなんだ！？」

「これクマさんなのかな！？
クマさんだよね！？」

珍しく生徒会室にいた三人娘が悪熊を見て駿の方に寄ってきた。
そして千桜と翼も何事かと寄ってくる。
愛歌は生徒会室にいなかったので仕事中か欠席のどちらかだろう。

「これは、えっと鷺ノ宮家のペットなんだ。ペットの小熊」

駿が肩の上を指差すと悪熊は愛らしい目を女性陣一同を見回して首を傾げた。

しかし若干警戒しているのか駿の肩から動かない。

「「「小熊～！？」」」

三人娘や千桜は駿の肩の上で小首を傾げる悪熊を見て顔を赤らめて色めきたった。

「おう？」

「え？」

すると悪熊は警戒を解いたのか、スルスルと駿の腕を伝って隣にいたヒナギクの腕に移っていく。

「か、可愛い……！！」

ヒナギクは見上げてくる悪熊を暫く見つめると、顔を赤らめてクマを抱き締めた。

悪熊はかなり嬉しそうにしているのは駿にも分かった。

「ひ、ヒナ！

次は私に抱かせてくれないか！？」

「いや、私にも！」

こうして、悪熊はその愛くるしい姿で生徒会女子メンバーをあっという間に虜にした。
女性陣は悪熊をしきりに撫でたり、抱っこしたりする。

そんな中、翼がこっそりと駿に近づいてきた。

「おい、どういうこった？
小熊のペットなんて俺は見たことねーぞ？」

「ああ、コイツはな……」

駿が事のあらましを簡単に説明しようとするが……

「駿君……
この小熊、何て名前なの？」

「え？名前？」

悪熊を撫でて可愛がっているヒナギクが駿を振り返ってそんな事を尋ねてきた。

「あ～……名前は無いんだ。
決まってないつーか……」

「「「へぇ……」」」

ヒナギクと女性陣の視線に駿は頭を掻きながらそう返した。

「ほう、だったら名前を考えてあげようじゃないか」

ほんわかした雰囲気の中、理沙がそんな事を提案した。

「じゃあ、クマだからクマ吉っていうのはどうかしら？」

（（（クマ吉……）））

ヒナギクが提案した名前に一同は呆れたような空気になる。

「な、何よこの空気は？」

「何つーか……
酷いネーミングセンスだな」

「な、どういう意味よ！？」

あまりのネーミングセンスの無さに呆れた一同代表の駿が口を開いた。

「取り敢えずそれは却下だな」

「全く、ヒナももう少しカッコイイ名前を考えられないものか…」

「な！！出来るわよカッコイイ名前くらい！！」

美希と理沙の言葉にヒナギクは抗議の声をあげる。

「ほぅ。だったらどんな名前をつけるんだ？」

「えっと……
た、タイタニック……」

（（（うわぁ……）））

やっぱりネーミングセンスは最悪だった……

そんな感じで、本日の生徒会は女性陣が悪熊を可愛がる事でほぼ終了してしまった。

＊

「はぁ？妖怪？」

「ああ……」

生徒会も無事に終了し、駿と翼は二人で帰宅していた。
その際に事のあらましを翼に説明したのだ。
駿の肩には疲れたのか気持ち良さそうに眠っている悪熊もいる。

「何でお前を殺りにきた妖怪が、お前の肩で眠ってるんだ？」

「知るかよ……

つーかほら、起きろオイ」

駿はため息をつくと、肩に乗っかっている悪熊の頭をペシペシと叩いた。

「うーん……、！？

鷺ノ宮駿！！いつの間に！？」

「オメーが勝手に寝てたんだろーが」

起こされた悪熊は驚いたように駿の肩から飛び退くと、二人から距離を取る。

「そうだ！

忘れてた！今日の夜僕と決闘しろ！！」

「は？」

「鷺ノ宮駿！！

僕はお前を倒す！！だから決闘しろ！！」

「……」

唐突過ぎる展開についていけないのか、駿は呆れたような表情を向けるが。

「結論から言うと、嫌だ」

「何で！！」

「面倒だから」

駿はヒラヒラと手を振ってとりつくしまもない様子。

「ダメ！！戦うんだ！！」

「何で俺なんだよ？
他の奴でもいいだろ？」

彼がそう尋ねると、悪熊は少し間を開けて改めて駿を見上げる。

「僕の家は、由緒正しい代々の妖怪の家なんだ。
お父さんもお母さんもお兄ちゃん達も立派に妖怪として活躍している。
それで今度は末っ子の僕の番なんだ。一人前の妖怪になるために、退魔師を一人で倒す。
それが僕の家の条件なんだ。
だから僕はこの辺で強いって言われてる鷺ノ宮駿の所にきた！！」

「長々と説明ご苦労なこったが、オメーんトコの家庭事情に俺を巻き込むな」

駿はもう色々と突っ込むのにも疲れたようだ。

「うるさい！
とにかく決闘しろ！！
今日の午前零時、場所は負け犬公園近くの神社だ！！」

「ってオイ！！
待て、勝手に……」

それだけ言うと、悪熊は駿が止めるのも聞かずに脱兎のごとく走り去ってしまった。

それを呆れたように眺める二人。

「お前もまた、変なのに目を付けられたな。
行くのか？」

「行かねーよ。
あんなモン一々相手にしてたら日が暮れるっての」

「あ、そういえば……」

駿が面倒臭そうに頭を掻いてそう返事をすると、翼が何かを思い出したように声をあげる。

「今日の深夜、神社の方から依頼が入ってた。妖怪が頻繁に出るって。しかも結構厄介な奴が数体らしい。
あのクマ、それに出会ったらヤバくないか？」

「知るかよ。
俺ァ帰って寝るから」

駿は興味の無さそうに欠伸を一つ、再び帰り道を歩き始めるのだった。

深夜１１時半……

「……」

悪熊は小さな身体をいっぱいに動かして負け犬公園近くにある神社にやって来ていた。
その目はやる気と緊張に満ちて……いる訳では無く、ただ可愛らしくクリクリとしている。

「駿に勝って、僕も一人前って認めて貰うんだ！
よーし、頑張るぞーっ！！」

ドン！！

『痛てぇ……』

「え？」

勢いよく振り上げた手だったが、それが大きな何かに当たった。
悪熊が見上げると、そこには自分を見下ろしている恐ろしい形相の化物が目に飛び込んできた。

全身が黒色で、顔は仰々しいほどに光る赤い目とギラギラと光る鋭い牙が口から覗いている。
体長は３ｍ程の悪熊から見ればかなりの巨体である。
頭のてっぺんには二本の角。

『オイ……
てめえ今、この黒鬼様になにしやがったァ？』

「う、うわ……！！」

それは紛れも無く鬼であった。
手には巨大な鉈。
そんな恐ろしい鬼に凄まれては小さな悪熊はひとたまりもない。
悪熊はヨロヨロと黒鬼から離れていこうとするが…

『何とかいえゴルア！！！』

「！？」

低い地の底から響くような唸り声にすっかり足がすくんでしまったようだ。
動けないで縮み上がる悪熊。

『ちょうどいい。
何かイライラしてたんだァ……
喧嘩売ったのはてめえだし、いっちょしばくかァ！！！』

「！？」

言うが早いか、黒鬼は鉈を思いきり振り上げて……

『うらあァァァァ！！！』

「！！」

勢いよく振り下ろしてきた！

悪熊はもうダメだと目をキツく閉じた…

だが……

悪熊には鉈の衝撃も痛みも来なかった。代わりに抱きしめられる温かい感覚……

「よォ……

まだ生きてッか、クマ」

「お前！？」

悪熊が目を開けると、彼を抱きしめた鷺ノ宮駿が逆さまに地面に転がっていたのだ。

そう。鉈が悪熊に振り下ろされる直前に駿が悪熊を抱きそのまま転がって直撃を避けたのである。

「翼……

奴（やっこ）さんはどんくらい居やがんだぁ？」

駿は砂まみれになった白い和服を払いながら起き上がると、ダルそうに隣に声をかける。

すると煙の中、駿の隣に鷹ノ瀬翼が黒い木刀を構えて姿を現した。

「そうだな……
ざっと１０体以上はいるんじゃねーか？」

「あ～、マジか……」

言葉通り、先程鉈を振るった黒鬼の周りに次々と似たような姿の黒鬼が現れ始めた。

駿はさも面倒臭そうにそう言うと、悪熊を掴んで自分の肩の上に乗せる。

「んじゃ、ちょっくら動くとするかね……」

そして彼は白夜を鞘から抜き放つと、前方の鬼達を見据えた。
綺麗な黒髪が夜風にたなびく。

「真冬に鬼退治か……
中々上等なもんじゃねーか…」

駿の言葉を受けて、翼も微笑すると鬼達を睨み付ける。

この戦いの行く末まるで急かすように、冷たい夜風が神社にただ吹

き付けているのだった……

其の十二　可愛いものには棘がある（後書き）

～三人娘の生徒会通信！！～

美希
「今回はいくつか質問が来てるわね」

理沙
「では、久々に質問コーナーといきますか！」

泉
「はいは～い♪
ではでは、最初の質問だよ♪
アシスタントの駿君！質問を読んで下さ～い♪」

駿
「俺がいつアシスタントになったんだよ……」

美希
「いいからいいから」

駿
「ったく……
え～、最初の質問『翼君に質問です！本気で恋をしたことがありますか？』」

美希

「これは中々大胆な質問ね」

理沙
「では、翼君！
どうぞ～！」

翼
「うーん……
本気も何も、恋自体まだ無いと思うな。
小さい頃は覚えてないけどな」

泉
「へぇ～」

理沙
「なるほど。
では本編で恋があるかに期待だな」

駿
「いや、これそういう小説じゃ無いから。作者も困ると…」

美希
「じゃあ、次の質問ね」

駿
「聞けよ！！
え～『駿は伊澄命？それとも妹命？』
伊澄に決まってるだろう！！
伊澄は俺の全てだと言っていいからな！！
もう最高に可愛い、いや世界一、いや宇宙一、とにかくこの世に現

存するいかなる……」

美希
「長くなりそうだから質問は私が引き受けよう。
続いての質問『ヒナギク達に質問。女装した駿を見て女としてどう思う?』
確かにかなり美少女だったが、」

ヒナギク
「同じ女の子としてちょっと複雑ね」

駿
「女の子じゃないから俺は!!」

千桜
「でも、かなり似合ってましたよね／／／」

愛歌
「良い写真が撮れたわ♪」

駿
「消して下さい!」

泉
「いいな~。
私も見たかったよ~」

理沙
「ああ、最高に愉快だったぞ。
最後には和服姿でお止めになってお代官様~と」

駿
「言ってないしやってない！！」

美希
「では次の質問。
皆に質問『駿の事をどう思う？』見ていて飽きない面白い男子生徒ね」

理沙
「我々三人娘とのコンビネーションは抜群だな！」

泉
「だね～♪」

ヒナギク
「そうね。楽しい人だと思うわ。暴走がたまに傷だけど」

千桜
「話も合うし、その…仲の良いクラスメートだと思います」

理沙
「それだけ？
気になるとかはないのかないのか、千桜君～？」

千桜
「な、ありませんよ！！／／／」

翼
「ハハハ……

まぁ、俺は結構頼りにしてるけどな。あんなんでもさ……」

弥生
「うーん、可愛いかしらね～」

飛鳥
「鍛え甲斐のあるやつだ！！
それに楽しいやつだ！！」

ワタル
「そうだな～
小さい頃からの付き合いだし、兄貴みたいなもんかな？」

サキ
「また怒られますよ若……」

咲夜
「ウチも小さい頃から一緒やから……あんまりどうとか考えた事はないな……
どうなんやろ？」

ナギ
「敵だ。以上」

マリア
「もうナギったら……
そうですわね～、お嬢様関連で苦労人同士ですわね」
ナギ
「どういう意味だ！！」

初穂
「ジュン君は良い子ですよ～」

九重
「そうだねぇ～」

銀華
「オババから言わせればまだまだ子童じゃがのぅ」

ハヤテ
「僕は頼りになると思いますよ。何度も助けて頂きました」

伊澄
「お兄様は確かにたまにいき過ぎることもありますが、
その……一番……あの／／／
その……えっと／／／
やっぱり何でも無いです／／／」

美希
「では次の質問『愛歌さんに質問。駿の弱点はどのくらいありますか？』」

愛歌
「そうね～
まぁ半分以上は……」

駿
「ええ！？冗談でしょ！？」

愛歌
「どうかしらね～？」

美希
「次の質問『生徒会メンバー＋弥生さん、ナギ、マリアに質問。
駿とハヤテにどんな女装させる』」

駿・ハヤテ
「どんな質問だーーーっ！！」

ナギ
「無論ハヤテはミニスカネコミミの女装だ！！」

マリア
「駿君にもミニスカートは似合いそうですわ♪
後は白いカーディガンに…」

弥生
「いえ、駿君は水色のワンピースがベースに決まってるわ。
後は上から…」

マリア
「いいえ、ミニスカートは譲れません！
それに黒いニーソックスは絶対に必要です！」

弥生
「違うわ！
絶対ワンピース！」

マリア
「ミニスカートです！」

駿
「……俺の意思は？」

ヒナギク
「私はワンピース派かしら。
ハヤテ君はウサギミミとか…」

千桜
「私はミニスカートかな／／／」

愛歌
「可愛ければ何でも良いわ♪」

三人娘
「以下同文！」

駿・ハヤテ
「……うう？」

美希
「次の質問『皆が楓のメロンパンを食べた感想は？』
すまない。これは本編中でやりますので。
最後の質問『綾姫に質問。好きなものは何ですか？』
って事で綾姫さん、答えをどうぞ～」

綾姫

「えっと、どうすれば良いんですの？」

楓
「綾、質問に答えればいいのよ。好きなものだって」

綾姫
「えっと……
食べ物は何でも食べれますわ。
特に野菜は好きですね」

理沙
「ほほう。
では趣味は？」

綾姫
「映画、ＳＦ鑑賞ですわ！
あと私、強い殿方が好きなのでロボットアニメとかも好きです！」

美希
「楓君、他に彼女の好きな事は無いのかい？」

楓
「えっと……
あ、綾は撫でられるの好きよね？」

綾姫
「ふぇ！？／／／
べ、別にそんな事はありませんわ！」

楓

「照れちゃって可愛い～
よしよし♪」

綾姫
「な！？いきなり撫でないて下さい！！／／／」

美希
「ほぅ、これは面白い。
よしよし～」

理沙
「私もだ、よしよし」

泉
「よしよし～♪」

綾姫
「もう皆さん！！／／／
止めて下さいませーーっ！！／／／」

駿
「……何か俺ハブられてね？」

翼
「気にすんな。
ま、んじゃ今日はここまで。
次回もよろしくな！」

其の十三　妄想癖じゃなくて想像力が豊かなんだとか取り敢えず言い訳してみる

伽藍
「今回は前回に話題となった駿のツンデレ行動の真相が明らかに！」

駿
「だからツンデレじゃないから」

伽藍
「今回はかなりアレな妄想とかもあります。ご了承下さい」

其の十三　妄想癖じゃなくて想像力が豊かなんだとか取り敢えず言い訳してみる

時は少し遡り……
午後七時頃の鷺ノ宮家

「本当にいいのか～？」

「あん？
何がだよ？」

居間では座布団に座ってテレビに目を向けている翼と、畳の上に頬杖をついて横になっている駿がいた。
翼がテレビを見ながら駿に声をかけると、いかにもダルそうな返事が返ってくる。

「あの小熊の妖怪の事だよ。
多分今夜はあの辺危険だぞ。
場所変えるなり日時変更するなりしてやったら？」

「何で俺を抹殺しに来た妖怪を自ら助けるような事をしなきゃいけねーんだよ。
第一、もうどっかに行っちまって伝えようがねぇだろ」

「まぁ、そりゃそうなんだけどよ……」

「そういう事」

何か言いかけた翼に『もうこの話は終わり』とばかりに横になって背を向けながらヒラヒラと手を振る駿。
そんな感じで彼は全く気にしていないような素振りを見せていた…

午後11時……

「……」

居間のテーブルで翼は白皇で出された冬休みの宿題に取りかかっていた。
相変わらず駿は横になったまま、時折欠伸をしては呑気にテレビに目を向けている。
テレビにはグルメ番組が流れていて、リポーターが包み焼きハンバーグを食べる様子が映っていた。

「なぁ、やっぱ行ってやった方が良いんじゃないか？」

翼はその様子にため息をつくと、背を向けている駿に話しかけるが…

「ん～？
ハンバーグが何だって？」

「お前めちゃくちゃオフモードな……」

案の定と言うべきか、
のんびりとした返事が返ってきただけだった。

「いや、美味そうじゃん」

「まぁ、確かに美味そうだけどさ……」

オフモードの彼を動かそうとするのは中々至難の技である。
だが焦る事は無い。きっと明日の朝になれば……

「ってそうじゃなくて、神社に行った方が良いんじゃねーかって話だよ」

「メンドイ」

駿はそう言って顔をまたテレビに戻してしまう。

（ったく……
仕方ねーなァ……）

翼は困ったように息をつくと、勉強道具を片付けて横に退けた。
そして駿の横に歩いていって腰を降ろす。

「伊澄ちゃんなら何て言うかね～」

「？」

“伊澄”という単語に駿は反応して隣に座ってきた翼を見上げる。

「旅行から帰って来た伊澄ちゃんがこの話を聞いたら悲しむんじゃないか？」

「……」

「心優しい彼女の事だ。
きっと深く胸を痛めるに違いない」

「う……」

駿は痛いところを突かれたように顔をしかめる。

「でも、もしあの熊を助けにいったらそれは感動する筈だ」

「え？」

「本来倒すべき妖怪を自らの命を顧みずに助ける。
とても勇敢で寛大だ。
これには伊澄ちゃんも胸を打たれるだろう」

「……」

翼の言葉を聞いてるウチに駿は徐々に顔を上げて、いつの間にか座り直していた。
翼は予想通りと口元を僅かに緩めると続ける。

「いや、惚れ直すといってもいいな」

「マジでか」

座り直しているかと思ったらもう身を乗り出している。

「ああ。

伊澄ちゃんにとってお前は特別で大切な存在だ。
そんなお前がこんな徳のある行動をしたら、そりゃなぁ」

「……」

駿はその言葉を聞きながら、天井に目を向けて想像してみることにする。

注）これは全て駿（ばか）のアホな妄想によるモノです

鷺ノ宮家の縁側にある柱に寄りかかっている駿。
夜風にあたりながら時折目を閉じては髪が風で揺れる。
注）妄想なのでかなり美化されています

伊澄
「お兄様？」

駿
「ん？」

すると、駿の所にゆっくりと歩いてくる伊澄。

駿
「やあ、伊澄。
ほらご覧よ。今日は綺麗な満月だ」

駿はそう言って薄く微笑む。
注）何度も言いますが美化度１８０％の妄想となっております。

伊澄
「お兄様……
翼様から聞きました。
命を顧みずに妖怪さんを助けてあげた、と」

駿
「そんな大層な事じゃないよ。
妖怪だろうが動物だろうが関係ない。
人として当然の事をしただけさ」

顔を赤らめて傍までやって来る伊澄に駿は笑って頭を撫でてやる。
彼女は益々頬を紅潮させた。

伊澄
「本当に優しいですね……
お兄様は……」

駿
「少しは誇れる兄になったかな」

伊澄
「いいえ……」

駿
「？」

しかし伊澄はゆっくりと首を振って駿を見上げた。

伊澄
「旅行に行って離ればなれになっている間、色々と考えました。
確かに咲夜達といて楽しかったのですが……でもどうしても胸が痛くて……
この気持ちは何のかがずっとわかりませんでした……
でも、ようやく気付きました」

駿
「それは……何だい？」

伊澄
「お兄様です……／／／」

伊澄は一層顔を赤らめて、上目遣いで駿の事を見てくる。

注）妄想稼働率２５０％
臨界突破しました
警戒体制に移行します

駿
「俺？」

伊澄
「はい……
私の心も気持ちも、もうお兄様の事を考えられずにはいられないんです……」

駿
「……」

伊澄は駿の前まで来て、彼の倒れ込むように寄りかかった。
駿はそれを優しく支えてあげる。

伊澄
「お兄様……
もう兄妹としているのが辛いんです……」

駿
「……伊澄」

伊澄
「ですから……
あの……私、これからは……」

しかしその言葉が続く事は無かった。何故なら駿が伊澄の事を抱きしめたからだ。

伊澄
「!?／／／」

駿
「分かってる……
もう何も言うな……」

伊澄
「お兄様……」

伊澄も目を閉じるとゆっくりと駿に身体を預けた。

注）妄想稼働率４８０％
　警報発令中、警報発令中

満月の月が二人の姿を優しく見守るように闇夜を照らしている。

伊澄
「お兄様……！！」

駿
「伊澄……！！」

二人はお互いに見つめ合い……

めくるめく永遠の愛の世界へ……

「のおォォォ！！！
そして夜の胡蝶にィィィィ！！？」

「……」

妄想から返った駿はゴロゴロとひたすら畳の上に転がって何やら悶えまくっていた。
馬鹿一色である。

「か、可愛過ぎる……！！
何て可憐な……ぐっ！！」

（コイツ、ホントに面白いな…）

胸を押さえて踞る駿。
そんなどうしようも無い馬鹿を面白そうに眺める翼。

「何を想像してたかは知らんが、取り敢えずどうする？」

「助けにいくに決まってんだろーが！！ほら、モタモタすんな。
先に門に行ってろ、戦いは既に始まってるんだ……！！」

駿はガハリと起き上がると、支度の為に急ぎ足で自室に向かっていった。

「アイツの扱い易さは超一級だな」

翼はそう呟いて肩を竦めると、居間を後にするのだった。

其の十三　妄想癖じゃなくて想像力が豊かなんだとか取り敢えず言い訳してみるけど、そんな状況に立たされた時点でもう既に手遅れ

だと思う

午前零時……
神社の広場では前方にそびえる黒鬼を睨み木刀を構えている翼。
上は黒いパーカーを羽織って、下はかなり傷の入ったジーパン姿。

そして隣には日本刀を片手に面倒臭そうに頭を掻く駿の姿。
白い直垂に白い袴姿だ。

ガシッ！

そんな駿に悪熊は真ん丸の目を潤ませて抱き付いてきた。

「ううーーっ！！
誰も助けてなんて言ってないぞ！！お礼なんか言わないぞーーっ！！」
「あー、分ァった分ァった。
お前色々混乱してるからな」

セリフとは裏腹に必死に飛び付いてくる悪熊の頭に駿はポンポンと手を置いてやる。

一方、彼らの前方では先程鉈を振るった黒鬼を始め、それより小さい黒鬼達が集まり始めていた。大体どれも２ｍそこそこといったところか。

「つーか聞いてねーぞ。
なんであんなに居やがんだ？」

「さぁ、家族なんじゃね？」

十数体の黒鬼達を見て面倒臭そうに呟く翼に興味が無さそうに答える駿。

すると一番大きな黒鬼が駿達を威圧するように見下ろしてきた。

『オイ……
何だてめえら……』

「あー？
何だって……アレだよ。
アレしてアレするアレだよ。
なぁ？アレだよな俺達」

「いや知らねーよ。
んなテキトーに俺に振るなよ」

駿の言葉に翼は呆れたようにそう言うと、木刀を肩に担いで黒鬼を見上げる。

「ま、簡単に言えば退魔師ってところかな？」

『あー？退魔だぁ？』

一番大きな黒鬼が赤い目をギラつかせて唸る。

『餓鬼共がいっちょ前に……
俺達が何だか分かってんのかァ？俺達はなァ、n』

「いや、知らね」

『うおォい！！
それを今から説明しようとしたんだろうが！！
途中で遮るんじゃねぇ！！』

話のドスのきいた声で話を止めた駿に叫んだ。
肩の上に乗っていた悪熊はビックリして固まる。

「だって聞いたじゃん。
疑問形だっただろ」

『返事をするタイミングってもんがあるだろうがァ！！
こっちの名乗りが始まろうとしてんだろォ！！』

「うるせーなぁ……
一々喚くんじゃねぇよ……」

駿はさも面倒臭そうに頭を掻くと、一番大きな黒鬼の方に目を向ける。早く話せと目で合図を送ったのだ。

『ケッ……まぁいい。
俺達はなァ、泣く子も黙る
“黒鬼ブラザーズ”よォ！！』

ドーン！！

「「……」」

黒鬼の言葉を聞いた二人は何とも言えない表情で沈黙するが…

「取り敢えず、家族だったみたいだな」

「だな……」

取り敢えず首を縦に振って納得しておいた。

『冥土の土産に貴様らに教えてやろう。
左から、次郎！！三郎！！四郎！！……』

黒鬼が点呼していくと、呼ばれた小さな黒鬼達はその様相に似つかわしくないほど背筋を立てて直立してゆく。

『八郎！！九郎！！十郎！！十一郎！！
十二郎！！まさる！！以上だ』

「「……」」

十三体全員が点呼され、大きな黒鬼の前に一列に並んだ。
鬼が一列に高々と並びそびえるその様子は中々壮観である。
因みに最後の名前が“まさる”なのは二人とも突っ込ま無かった。

『さて兄弟達……
この辺を荒らす前に、腹ごしらえといこうか……
今宵は久々に人肉が喰らえるぞ。何せ美味そうな餓鬼が二人もいるからなァ』

その言葉に並んだ黒鬼達は各々鉈を構える。
その目は赤く怪しげに光り、先程までのふざけた雰囲気は消え去っていた。

「クマ、オメーは後ろの林にでも引っ込んでろ。
出てくるなよ」

「う、うん」

駿は悪熊をゆっくりと地面に降ろしてやると、そのまま後方にある木々に隠れるように促した。

そして表情を引き締めると、駿は日本刀を横に寝かせ、翼は木刀を正眼に構えて黒鬼達に対峙する。

「翼、お前どうすんだ?」

「俺は一体一体引き付けるよ。
あんま多敵は得意じゃねぇしな」

「んじゃ、俺が中心に突っ込みゃいいわけな」

さらっと言ってのける駿を見て翼は思わず微笑を漏らした。

「こうして並んで暴れんのって結構久しぶりだな」

「楽しそうに言うな」

彼の軽口に駿が呆れたようにため息をついて返す。

『生意気な餓鬼共が！！
てめえら、肉片一つ残してやるなァァ！！』

『オォォォォォ！！』

一番大きな黒鬼の号令で十三体の黒鬼達が鉈を振り上げ一斉に飛びかかってきた。

「さて駿、鬼退治といこうじゃねーか！！」

「俺は雉で、お前は吉備団子な」

「全然足りねーよ！！
桃太郎どこだよ！？」

駿と翼はそんなやり取りを交わしながら真っ直ぐと黒鬼の群れに突っ込んでいく。
が、その途中で翼が右に大きく逸れた。

それにつられて、前衛の黒鬼ニ体が翼の方に向かい群れを抜ける。
これは彼の狙い通り。
一体一体を引き付けて相手をする為である。
一方の駿は日本刀片手に群れの中に突っ込んでいった。

○

悪熊は驚愕していた。
言うまでもなく戦場と化した広場の光景にである。

前方に繰り広げられている戦いの中心人物は二人。
黒いパーカー姿の鷹ノ瀬翼と白い和服姿の鷺ノ宮駿。

まず注目すべきは先程右に逸れた翼だ。
彼はある程度注意を引き付けた後、下がりながら一体一体と対峙してゆく。
しかしいくら一対一の形を作るとはいえ、相手は鬼だ。
全長こそ翼より少し高いだけだが、力は人間等とは比べものにならないほど、遥かに強い筈。

だが前述した通り、悪熊は驚愕していた。
それは翼はそれを物ともしなかったからである。

『オォォォォ！！』

「よっと……！！」

鉈が振り下ろされれば難なくそれを受け止めて弾き返す。
かと思うと間髪を入れずに敵の足元に木刀を振るい打ち崩す。

『ガアァッ！！』

「遅ぇよ」

崩された黒鬼の隣からもう一体が鉈を突き出してきたが、そんな事は予想済み。
翼は既に後ろに回り込んでおり、先程と同じ足を崩して……

「おぉぉぉ！！」

『ゴアァッ！！？』

渾身の力で木刀を縦に振るい一刀両断。黒鬼は消え去る。
立て続けに先程崩した黒鬼へ今度は大きく横一閃！！
もう一体の黒鬼も消え失せ、あっという間に二体がやられてしまった。

彼の戦い方は例えるならば研ぎ澄まされた一本の刃のように鋭く、また美しかった。

だが、悪熊が一番驚かされたのは駿の方であった。
翼とは違い、駿は黒鬼六体に囲まれるような状況だった。
誰が見ても圧倒的に不利な事態だし、実際にそうである筈だ。
いや、そうでなければならない筈なのに……

駿に至ってはまるで違った。

まず彼は後ろを振り返るような事は一切しない。
囲まれているにも関わらずだ。

普通ならば自分の後ろに何体の敵がどのようにしているのかが全く分からないだろう。
だが、彼はまるで後頭部に目でもついているのか、後ろからの攻撃を簡単に避けている。

次に何と言ってもその剣技だ。
翼とは対照的に型にはまることの無いメチャクチャな軌道だが、とにかく速い。
四方八方何処からくるか分からない刃、それが目にも止まらぬ速さで迫ってくるのだ。

後ろで見ている悪熊でさえその動きを目で追う事が出来ないのに、まして目の前にいる黒鬼達にそれが見えるだろうか。

剣だけでは無く、体全身を使ったその戦いに周りの黒鬼は成す術無く次々と姿を消してゆく。

（……）

木々の間から顔を覗かせながら悪熊はただ目を見張っていた。
圧倒的。鬼達がまるで子供のようにあしらわれている。
駿の戦いが経験からきているだろうことは彼も容易に想像できる。
だとすれば、一体駿はどれだけの経験を積んでいるというのか？

そもそも高々十六歳の青年にそこまでの経験を積む事が果たして可能なのか？

その強さが単なる努力や経験といったものでは無いのではないかと考える悪熊ではあったが、それが何なのか彼は知る由も無い。

戦局はあっという間に一番大きな黒鬼が一体残される形となってしまっていた。

翼が四体、駿が九体。

いとも容易く敵を殲滅してしまったからである。

『……』

「後はてめえ一人だな」

目の前の光景が信じられない様子で立ち尽くす黒鬼を翼が睨み付けて言う。

『オノレ餓鬼共……』

「「……」」

すると、高々とそびえるその巨体からギラギラと光る赤い眼光が二人を見下ろしてきた。

そして黒鬼は大きな鉈を振り上げる。二人も日本刀と木刀を構えて対峙する。

『次郎、三郎、四郎、五郎、六郎、七郎、八郎、九郎、十郎、十一郎、十次郎、まさる……』

「「……」」

『兄弟の敵じゃあァァァァ！！！』

黒鬼は兄弟の名前を一人一人呼んだ後、思いきり突っ込んでゆき、鉈を振り下ろした！

勢いよく舞う砂塵……
だが二人の姿はそこには無かった！

「「だから……」」

『！？』

しかし次の瞬間、黒鬼の足元に翼そして顔の前には駿がそれぞれ現れた。
二人は刀を振り上げて……

「「何で最後だけまさるだァァァァァァ！！！！」」

渾身の一撃＋先程スルーしたツッコミを打ち込んだ！
これが伝家の宝刀“時間差ツッコミ”である。

こうして一番大きな黒鬼もあっという間に夜の闇へと散っていったのだった。

○

「おーいクマ。
居んなら出てこいよ」

「……」

駿が声をかけると、悪熊はトコトコと林の中から姿を現した。
悪熊はちょこんと駿の前に座って見上げる。
駿は面倒臭そうに頭を掻いて座る悪熊を見た。

「で、どうすんだ？
今から決闘すんのか？」

「……」

悪熊はもう分かっていた。
人間界に一人飛び出してきたばかりの自分と、目の前の青年との圧倒的な差を。
自分がいかに無謀で井の中の蛙だったかを。

「ふん！！
こ、今回は助けられた借りもあるから、勘弁してあげるよ！！

僕の家は借りは返す主義だからね！！」

「はぁ」

しかしそんな事を口に出す悪熊ではない。
彼は立って駿に向かって精一杯強がってみせる。

「次はもっともっと強くなってまた決闘を申し込むから！！
だから首を洗って待っててよ！！」

「……そりゃ、大変だな」

そんな悪熊の様子に思わず口元を緩めてしまう駿。
何故悪熊が決闘を止めると言い出したのかが今の一言で分かってしまったからだ。

「ふ、ふん！！
そんな余裕でいられるのも今のうちだからね！！
次会うときはその表情を恐怖で染めてやるんだから！！」

「ソイツは困ったな。
俺が生きてる間に頼むぞ」

「むーーーっ！！
馬鹿にしてーーーっ！！」

軽口をたたく駿に悪熊は両手を振り回して襲いかかるが簡単に止められてしまう。

「絶対絶対負けないからね！！

覚えてろよーーっ！！」

「あ、オイ！？」

悪熊はぴょんと跳ねて駿から離れると、そんなセリフを残して走り去っていってしまった。

「何なんだアイツ……」

そんな様子を呆れたように見送る駿。
すると彼の肩に翼がポンと手を置いてきた。

「良いじゃねーか。
これで一件落着だろ？」

「……お前、最初からこうなる事が分かってて俺を連れ出しただろ？」

「ま、オメーの戦う姿をみせるのが一番手っ取り早いと思ってな」

そう、翼は最初から悪熊に手を引かせる為に駿をここに連れてきたのだ。

「なるほど……
俺はまんまとお前に乗せられた訳ね」

「妙な言い方だな。
ともかく、感謝しろよ」

「はいはい、分ァってるよ。

今度何か奢ってやるから」

二人はそんなやり取りをしながら、家に帰っていったのだった……

そんな二人をこっそりと眺めている人物が一人。

少し離れた建物の屋根にいた。

（なるほど……

アレが楓さんの言っていた“鷹ノ瀬翼”という人物ですか）

それは、皇綾姫であった。

彼女は扇子で顔を半分隠しながら気配を悟られないように、帰ってゆく二人を目で追っていた。

（やはり駿様のお知り合いでしたのね……

中々の手練れのようですし、これからも駿様の様子を観察する上で、あの人物とは早々に接触しておいた方が良さそうですわね）

彼女は翼に視線を送ると、袖を翻して屋根から一瞬で姿を消したのだった。

～翌朝～

（あ～、もう年の瀬か……）

家の廊下を駿は歩いていた。

フと空を見上げると青く雲一つない快晴だ。

「おはようございまーす」

朝の挨拶と一緒に朝食を採るため居間に入ろうと……

「どう?美味しいクマちゃん?」

「うん♪美味しい♪」

ずざざざぁーーーっ!!

居間に入ってきた駿は、そのままの勢いで転けて床に滑り込んだ。

「まあ、おはようジュン君。

今日も朝から元気ね♪」

「……おはようございます。

つーか……」

駿は取り敢えず顔を上げて挨拶すると、体を起こしてツカツカと朝食を食べているモノの前まで歩いていく。

「何でお前がいんだよ!?」

「わーーっ!!
離してよーーーっ!!」

それは何とあの悪熊だった。
悪熊は持ち上げるとバタバタと手足を振って暴れだす。

「もう、イジメたらダメよジュン君」

初穂がたしなめるように注意すると、悪熊は逃げるように彼女に抱き付いた。

「よしよし。もう大丈夫」

「うん」

そして撫でられてご満悦そうな悪熊。

「あの義母さん?
ソイツどうしたんですか?」

「クマちゃんはね、暫くこの家にいる事になったの」

「ええ!?」

駿は驚いたように悪熊を見ると、彼は小さい身体を可愛らしく精一杯大きくして胸を張ってみせる。

「僕は一人前になるって家族に約束したからね!!

だからここで沢山修行して強くなるんだ！！
そして駿を倒すんだ！」

「いや前提がもう間違ってんだよ。何て倒すべき相手の元で修行しようとしてんだよ！？」

駿にしては最もな言い分である。しかし悪熊は首を大きく振ってみせる。

「うるさいやい！！
ぶっ殺すよ駿！！」

「だったら尚更出てけよ」

「べーっ！」

初穂に抱っこされたまま悪熊は舌をだしてみせた。

「二人とも仲良くしなきゃダメよ。ね？」

「はーい♪」

だが初穂がそう注意すると元気の良い返事をしてみせた。

「ジュン君も、クマちゃんの事をしっかり面倒見てあげてね？」

「あのだから……」

「？」

「……」

駿は抗議しようと初穂を見るが、彼女の笑顔に事情を説明する気も失せてしまったようだ。

「絶対ぶっ殺すからね！
覚悟しなよ駿！！」

「……もう、どうでもいい」

そんな訳で、鷺ノ宮家では家族（？）が一人増えたという。

其の十三　妄想癖じゃなくて想像力が豊かなんだとか取り敢えず言い訳してみる

～三人娘の生徒会通信！！～

美希
「やはり駿君はツンデレでは無かったか」

理沙
「だがそれが彼らしいな」

泉
「じゃあ質問いきまーす♪
最初の質問～♪」

美希
「えっと『駿、ハヤテ、翼に質問。ダンジョンに挑むならどんなパーティ？』

駿
「えっと俺はガンガンいこうぜタイプだな」

ハヤテ
「僕はいのちはだいじにタイプです」

翼
「俺はバランス良くのタイプだな」

美希
「じゃあ最後の質問ね『駿君に質問。伊澄ちゃんが「お兄ちゃん大好き♪」って抱き付いてきたらどうする？』」

駿
「もう死んでも良いです！！」

伊澄
「そんな事しません！！／／／」

美希
「いやいや、これは実際にやって見て反応を確かめるべきだな」
→
悪ノリ

理沙
「さぁ伊澄君！
レッツトライだ！！」
→
悪ノリ

泉
「ではでは～♪」
→
悪ノリ

伊澄
「え？ええ！？／／／」

駿
「いつでも良いぞ伊澄!!
さぁ俺に飛び込んでおいで!!」

伊澄
「ーっ!!／／／」

ブンブンと首を振る伊澄。

駿
「ならば仕方ない!
俺からいこう!!」

そう言って伊澄に抱き付こうとする変態(しゅん)

伊澄
「!?／／／」

伊澄は咄嗟にお札を取り出し…

ドオォォォォン!!!

駿は爆発した……

美希
「ではオチもついたところで」

理沙

「また次回！」

泉

「またね～♪」

其の十四　大晦日って何かやたらテンションが上がる（前書き）

伽藍
「活動報告でのＩＦ案の投稿、本当にありがとうございます！！皆様の案がどれも素晴らしいので、１章と２章の間に三つか四つ。そして２章以降も一区切りつくときにちょくちょく投稿されたＩＦ案を入れていきたいと思います。なので、かなり遅くなる案もあるかもしれませんが、一応今のところ全て採用しているのでご了承のほどをよろしくお願いします♪」

駿
「ホントに思いつきで始めたのに、こんなに集まるとはビックリだな」

伽藍
「恋愛絡みが圧倒的に多いんだよね。特に君のが……」

駿
「え……？」

伽藍
「では、始まります♪」

駿
「おいィィィィィィ！？」

其の十四　大晦日って何かやたらテンションが上がる

１２月３１日と言えば、勿論皆さんご存知大晦日。
一年の最終日で大晦（おおつごもり）ともいう。

この日は一年のあらゆる穢れを取り去って新たな年を迎えるための大掃除をしたり、長寿を願う気持ちから年越し蕎麦を食べたり、百八つの煩悩を取り去るために百八回の除夜の鐘を聞いたりするのである。
因みに年越し蕎麦はこの除夜の鐘を聞きながら食べるのが本来のしきたりとされている。

そんな一年の締めくくりの年。
代々続く名家“鷺ノ宮家”では…

「そういえばもうクリスマスも終わったのよね～」

「いや、クリスマスつーか、もう今日は大晦日で明日は正月なんですけど……」

頬に手を当ててポーッとしている初穂に取り敢えず突っ込んでおく駿。
彼の肩にはちょこんと悪熊が座っておにぎりを食べている。

「なるほど……

情には惑わされずにカレンダーに書かれた事実のみを信じる。
流石ねジュン君」

「常識です義母さん」

「でもカレンダーが12月31日を示しているからといって、果たして今日が絶対に12月31日だと言い切れるかしら？」

「義母さんは言えるんですか？」

・・・・・・

「まぁ、今日も良い天気ねジュン君」

「そうっすね」

縁側に目を向けて微笑む初穂にズズッと味噌汁を啜って答える駿。
そして肩の上で可愛らしく首を傾げる悪熊。

本日も恐ろしいくらい平穏な鷺ノ宮の朝だった……

其の十四　大晦日って何かやたらテンションが上がる

「ね、駿。
大晦日って何？」

「あ～？」

駿は今、白皇学院にある時計塔の前まで来ていた。
そんな中、肩に乗っていた悪熊が駿を見上げて尋ねる。

「さっき初穂さんに言ってたじゃん、今日は大晦日だって」

「あ～、言ってたな」

「で、大晦日って何？」

首を傾げる悪熊を見て駿は若干面倒臭そうな表情をすると肩の上の小動物に目を向ける。

「大晦日ってのは一年の最後の日の事だよ。
締めくくりの一日だから色々と日本人らしい行事があんだよ」

「ふーん……」

「ってかお前、何でついてきてんだよ。
大人しく家で待ってるかとっとと家族のもとに帰れよ」

「うるさいなー
良いじゃんか、僕だって皆に会いたいんだもん」

駿の言葉に悪熊は頬を膨らませる仕草をする。
どうやら昨日の生徒会での可愛がられようにすっかり生徒会メンバーがお気に入りになってしまったらしい。
まぁ女性陣はくどいくらい可愛がっていたから無理もないが……

「……オメー絶対喋んなよ。
もし喋ったら白皇にあるワニの潜む沼に連れてくからな」

「う、うるさいやい！！
分かってるよ馬鹿駿！！」

駿は念のためそう釘をさしておいた。悪熊はワニと聞いて一瞬震えるが精一杯強がってみせる。

そうこうするウチにエレベーターは最上階に到着した。

ガチャ……

「お～、おはよう駿君」

「おはよ～♪」

「んん！？」

駿が生徒会室に入ると、中にいた美希達三人娘が顔を上げて挨拶してきた。
勿論彼は驚いたように入口で足を止める。

「美希達三人が生徒会に、しかも俺より先に来ている？
そんな馬鹿な、これは夢に違いない。どれ、頬をつねってみよう」

「「「どういう意味だ！！」」」

三人娘は頬をつねろうとした駿に向かって抗議の声をあげる。

「あら、おはよう駿君」

「ああ、ヒナギク。
それに愛歌さんと千桜も、おはようございます」

ヒナギクが書類を持ったまま扉の前の駿に近づいてくる。
駿はテーブルに座っていた愛歌と千桜にも気付くと、三人に挨拶を返した。

「あ！！」

すると、駿の肩の上に乗っていた悪熊が降りてヒナギクの元に駆け寄っていった。

「昨日の！！

私のこと覚えてるの？」

（コクコク）

ヒナギクが抱き上げて尋ねると、悪熊は小さく頷いてみせた。

「返事してくれてるのね！
可愛い！！」

それを見た彼女は嬉しそうに頬を赤らめて悪熊を抱きしめる。
悪熊も嬉しそうに顔を赤くしているのが駿には分かった。

「ひ、ヒナ！
次は私にも抱かせてくれ！！」

「ううんミキちゃん！
次は私だよ！」

「泉、次は私だろう！」
「もう皆！
怖がってるでしょ！！」

そんな感じでヒナギクの周りに女性陣が集まっていく。
駿はやれやれと息をつくと、愛歌の隣の席に腰を降ろした。

「あんな可愛い子、駿君の家に居たかしら？」

「いや、ちょっと色々ありまして……昨日ウチに転がり込んで来たんですよ。
しかも、勝手に居座り始めて」

「あらあら、それは大変♪
駿君は昔から動物になつかれやすいから、きっと慕って来てくれたんじゃない？」

愚痴を溢す駿にクスクスと笑って答える愛歌。

「いや～、それは無いと思いますよ……（現に抹殺するだの喚いてるからな……）」

「そうかしら？」

曖昧に苦笑する駿に愛歌は少し不思議そうに首を傾げる。

「あ、そうだ。
今日から翼は家族旅行とかで欠席です。帰ってくるのは４日くらいって言ってました」

「ええ、後で伝えておくわ」

そう。翼は久しぶりに両親が一時日本に帰ってくるというので一家で旅行に出掛けているのだ。

「そういえば、美希達まで一緒でどんな話し合いをしてたんですか？」

駿は先程から少し気になっていた話題を振ってみせる。
しかし返ってきたのは思いもよらぬ話だった。

「ええ、実は駿君に似合う女装を皆で考えてたのよ」

「……え？」

「それで、やっぱりセーラー服もいいけど着物も似合うって意見が二つに分かれて……」

「……」

楽しそうに、しかも若干Ｓモードで話す愛歌を見て、自分の知らない所でそんな恐ろしい会議が行なわれていたのかと震える駿。

「でも、もうおしまいみたいね～」

「……」

愛歌の言う通り、女性陣は悪熊に夢中で今は会議の事などお構い無しなのだろう。

ちょっとだけ悪熊に感謝する駿であった。

○

午前中の生徒会……

会議といってもさした議題があるわけでも無く、大晦日という事もあってか今日は軽い話し合いで会議は終了した。

そして今、生徒会メンバーはティータイムをとっているのだが、

そんな中理沙が提案するように口を開いたのだ。

「あ、そうだ皆。
明日ウチの神社で初詣でもしないか？」

「「「初詣？」」」

彼女の言葉にメンバーは口を揃えて尋ねる。

「ウチのって、お前の家神社だったのか？」

「ああ、話して無かったか？
私の家は大神社で、その巫女なんだよ」

「初耳だ……」

さらっと言ってのける理沙に駿は驚いたように彼女を見る。

「ふっ、驚いたか？」

「巫女っていうのがな」

理沙から巫女へ結びつけるというのは確かに難しいかもしれない。
その様子に何処か満足そうに不敵に笑うと理沙は続ける。

「ま、とにかく話を戻そう。
元旦から暫くは学校も生徒会も休みだろ？
だから元旦の朝は皆で日本人らしく初詣でいこうじゃないか」

「……へぇ、初詣か。

ソイツは良いな」

真っ先に反応したのは意外にも駿だった。

「ほぅ、駿君にしては意外な反応だな」

「こう見えても、一応元武家育ちだからな。
割りと日本の行事は好きなんだよ、正月とか縁日とか」

「うん、出店やイベントも色々あって結構盛大なお祭りともなっているよ」

理沙はうんうんと頷きながら駿に顔を向けて説明する。

「私も良いと思うわ。
お正月に皆で集まるって楽しそうだし、ね？」

「そうですね。
私も賛成です」

ヒナギクと千桜も理沙の提案に同意する。

「ふむ、正月祭か！
我々生徒会メンバーの真価が問われる時だな！！」

「私も賛成～♪
皆でいっぱい遊ぼ～♪」

「ええ、私も賛成」

美希、泉、愛歌もそれぞれニッコリと笑って賛成の意を示す。

「皆賛成のようだな。
翼君が居ないのは残念だが、彼の分まで騒ぐとするか」

「「「おー」」」

どうやら話はまとまったようだ。更に理沙は思い付いたように人差し指を立ててみせる。

「どうせなら皆、着物姿で初詣しないか？」

「着物……振袖って事よね？」

「うん。やはりせっかくの正月だし形から入るのも悪くないかなと思ってな」

理沙の言葉に女性陣はなるほど、とそれぞれ納得したようだ。

「そうね。
せっかくだし、たまには和風にいくのも良いかも」

「楽しみだね、ミキちゃん！
でも着付けって難しそう」

嬉しそうな表情の美希と泉。

「千桜さんはどうするの？」

「う～ん、一応着物はあるとは思いますけど」

「だったら着てみたら?
絶対可愛いと思うわ♪」

どうしようかと考える千桜とニコニコと微笑む愛歌。

「えっと……
着物なんてあったかしら?」

思い出すように頬に手を当てるヒナギク。

「因みに駿君は巫女服な」

「何でだよ!?」

「いや、似合いそうだから」

「普通に和服でいかせて下さい」

理沙の言葉に必要以上に拒否の意を露にする駿。
今にも土下座しそうな勢いである。

「じゃあ、明日の朝9時に朝風神社に集合って事で」

「ええ」

「分かったわ」

「わかりました」

「にはは～、楽しみだね♪」

「しかし、翼君がいない分両手に花だな駿君は」

「そりゃどうも……」

まぁ、そんなこんなで生徒会メンバーは明日の元旦、理沙の神社で初詣をする事になったのだった。

＊

ゴーン……ゴーン……

午後１１時４５分……

鷺ノ宮家の縁側に座っていた駿は年明け前に鳴り始めた除夜の鐘の音を何となく聞いていた。

奥の居間では初穂が悪熊を膝に乗せて九重と話している。

「何をいっちょ前に黄昏ておるんじゃ」

「ん？
ばあちゃんか……」

駿が鐘の音を聞きながら月を見上げていると、銀華が屋根の上から彼の前に降りてきた。

「つーか屋根の上で何やってたんだよ」

「遊んでた」

銀華がそう言うと何処からか小さな子猫がわぁーと溢れて中庭に走っていった。

「しかしお前にしては珍しく神経な表情だったの……」

「珍しくは余計な。
……今年は特に色々あったからもう年が明けるのかってしみじみにしてたんだよ」

「ほぅ……」

銀華はちょこんと駿の隣に座って同じように月を見上げる。

「ならば今年は、お前にとって特別な年だったんじゃな？」

「どうかな……
今までの月日も勿論かけがえのないモノだけど……
でも、今までとは何か違う気はするな。それはこ来年にも続いてる、

そんな気がする……」

「さむっ」

「その反応はおかしいだろ!?
シリアスなセリフだよコレ!!」

銀華が肩を抱いて震える仕草をしたので抗議の声をあげる駿。
何となく最後まで締まらない奴である。

「ま、いいかの。
お前がそう考えるなら、きっとそうなんだろう」

「？」

銀華は縁側から立ち上がると、近くの柱にもたれ掛かる。

「最初にここに来た時に比べて、随分マシな表情（かお）になりおった」

「……」

「まぁ、まだまだ未熟も未熟。
生意気な童（がき）ではあるがのっ」

銀華は忘れずにそう付け加えると子猫を追って中庭の向こうに去ってしまう。そんな様子に駿は思わず声を殺して笑ってしまった。

ドーン!!

何処かで花火の打ち上がる音がする。そして居間のテレビからもリポーターや人の騒がしい音が聞こえてくる。

どうやら年が明けたらしい。

「また、一年が始まんのか～」

グッと伸びをして駿は縁側に仰向けに寝転がる。

今年は一体どんな出来事が彼を待っているのか。

それが楽しい事ばかりで無い事は彼自身分かっているが、でも少しでも多く、自分だけじゃ無い周りの人々も笑顔になれる事があれば良いと……心の底からそう願う

「まぁ、テレビの人々が皆さん賑やかですよお母様」

「ホントだねぇ……

宝くじで一等でも出たんじゃないかしら?」

「なるほど……流石の推理ですねお母様」

居間の二人のそんな会話が駿の耳に入ってきて……

（不安だ……）

不安な一年になりそうだった……

其の十四　大晦日って何かやたらテンションが上がる（後書き）

三人娘の生徒会通信！！

美希
「次回は遂に初詣編だな！」

理沙
「駿君は両手に花のハーレム状態だな。
一体どんなイベントが起こるのか！？」

駿
「誤解されるような発言は止めてくれませんか！？」

泉
「ではでは～
今日も質問いってみよ～♪」

美希
「ふむ。『駿君に質問。伊澄ちゃんが洋服を着るイベントが原作でもありますが、どんな服を着せたいですか？』」

駿
「洋服だと！？
決まっている。伊澄はどんな服を着ても最高に可愛いさ！！」

理沙
「因みに洋服姿の伊澄君の写真、一枚一万であるけど……」

駿
「全て買い取ります！！」

美希
「という感じだな。
まぁ本編でもやるので、その時を期待してて下さい」

理沙
「では、次回もよろしく！」

泉
「またね～♪」

其の十五　初詣こそ一年の始まり（前書き）

初詣イベントは全部で三回くらいで終了します。
次回の後書きではちょっと新しい形のアンケートもあるのでよろしくお願いします！

初詣イベントが終わったら1章が終了です。
そしたら投稿されたＩＦ編をまずは三つほど載せたいと思います。

では、始まります！

其の十五　初詣こそ一年の始まり

広くどこまでも澄み渡る青空……薄ら薄らと青に浮かぶ白い雲…
その上を流れるように落ちてくるきらびやかな太陽の光……

1月1日。
新しい年の始め……
元旦の朝である。

「ん……！！」

自室の扉を開け放った鷺ノ宮駿は溢れんばかりの光を見上げて思わず一緒目を閉じた。
しかしすぐに目を開けると、外に広がる素晴らしいほどの快晴が飛び込んでくる。

「～っ！！」

彼は二三回首を振ると、思いきり伸びをしてみせる。
日だまりの暖かさと透き通るような冷たい風が心地よい。
駿は気分良く縁側まで歩いていって、鷺ノ宮家の中庭を見渡す。

（今日から新年度か……

伊澄も向こうで新年を祝っているのだろうか……）

彼は遠くの空を見ながら現在スイスに旅行中の伊澄の事を考えていた。彼女はもう二三日したら帰ってくるとの事で、超シスコンの彼としてはかなり待ち遠しいのである。

（しかし、本当に良い天気だな…元旦にはもってこいだ）

まるで空までもが祝っているかのように晴れ晴れとしていて、見ている方も自然と心が弾んでゆくような気分にさえなる。

（理沙の神社に9時……
さっさと飯を食って着替えて支度すｒ）

ドン！！！

しかし、そんな平和な朝は駿が縁側から突飛ばされる事であっという間に崩れた。

「ぶっ！？」

いきなり突飛ばされた彼は目の前にあった池に成す術無く頭から突っ込んでしまった。
豪快な音と共に水しぶきがあがり、彼が立っていた後ろには……

「やーい！！やーい！！
朝一番に池に突っ込んでるぞ～
馬鹿駿～」

嬉しそうにぴょんぴょんと跳び跳ねる悪熊の姿が一つ。
どうやら彼が思いきり体当たりをして駿を突飛ばしたようだ。

「……」

「アハハ！！
頭に水草が乗ってる～
変なの～♪」

駿が池の中からむっくりと身体を起こすと、悪熊はそんな彼の様子を指差し爆笑している。

「アハハ…ハ…ハ？」

「ふっ……」

しかし彼は無言で池から立ち上がると、ゆっくりと口元を曲げて嘲笑してみせた。
濡れた髪で顔が隠れて表情は分からないが周りには黒いオーラが……

「え、えっと……
（あれ？怒ってない？）」

「……」

悪熊は若干慌てたように彼の様子を伺おうとするが、無言なので分かりかねている。

すぐに怒ると思ったのだろう。
予想外の反応に戸惑っているのだ。

しかし、駿はそのまま悪熊の前まで歩いてくると……

「上等だコラ……
相手になってやるよクマ公…！！」

「！！」

やっぱり怒っていた！
ようやく見えたその額には幾つも青筋が浮かんでいる。

ダッ！！

悪熊は反射的に地面を蹴ってその場から逃げ出す。

「待てやコラァァアアア！！！
テメー今から熊鍋にしてやらァァァァァアアア！！」

「わーーーっ！！！
駿がキレたーーーっ！！」

逃げる悪熊を全力で追いかけ始める駿。
何というか、随分と大人気無い有り様だ。

「熱湯でたっぷり煮込んで一口サイズに切り刻んで
朝飯にしてくれるわァァァ！！」

「わーん！！」

鬼の形相で追ってくる駿から悪熊は必死で逃げるがドンドンその距離は縮まっていく。

そして……

「よし捕まえたァァァアア！！」

「わーーっ！？」

あっという間に屋敷の角に追い詰められて、悪熊は敢えなく捕まり持ち上げられてしまった。

「クマ公風情が人間様に勝てると思うてかァ！！」

「離せ、離せーーっ！！」

「あァ？
どの口が言ってんだコラ。
今すぐ鍋に沈みてぇかオイ？」

駿は主人公にあるまじき表情で捕まえた悪熊に凄む。

「よし、まず皮を剥いでやろう。肉は朝食、皮は高く売ってやらァ……」

「んーーっ！！

んーーーっ！！」

彼の恐ろしい台詞に涙目になりながらジタバタと暴れる熊。

「ん？」

フと駿が横を見ると銀華がこちらに向かって歩いてきているのが目に入った。

「おー、ばあちゃん。
皮剥ぐの手伝ってくれよ。
良い朝飯をだな……」

「お前は……」

しかし銀華はゆっくりと駿を見上げると……

「動物を虐めるなァァァァ！！」

「のわァァァァ！？」

無数のクナイを駿に向かって一斉射撃した。

駿は咄嗟に避けるも後ろに倒れ込んでしまう。
その隙に悪熊は銀華の後ろに隠れるように逃げた。

「いきなり何すんだよ！？」

「……」

突然の攻撃に駿は抗議の声を上げるが、彼の目の前には彼とは比べものにならないほどの怒りのオーラを放つ銀華の姿。

「へ？あの……ばあちゃん？」

「私の弟子にも関わらず……
動物を虐めるとは……」

「いやいや！？
それはそもそもあの馬鹿熊が」

ジャキン！！

「黙れ」

「い〝い！？」

駿の目の前に物凄い速度でクナイが連続して突き刺さる。

「喜べ馬鹿弟子。
今からこのオババが直々に相手をしてやろう……」

「い、いや～
あの、もう朝御飯の時間だし、
そろそろ居間に行った方が」

ジャキン！！

またも寸での所にクナイが突き刺さる。

「お前のその腐った性根を叩き直してからの方が飯は美味いの」

「……」

銀華は真っ白に赤い模様の入った仮面を取り出して顔に付ける。
その仮面を見た途端、駿がガタガタと震え始めた。

「これを使うのは三年、いや四年ぶりかの……」

「……」

悪熊は銀華の後ろで驚いていた。何と言ってもあの駿があれだけ震えているのだ。
一体この少女のような女性は何者なのだろうかと見上げる。

その銀華は白い仮面を付けたまま、座り込む駿に対峙している。

「さて、皮を剥ぐ手伝いをすれば良かったんだったか……」

「いや、だから……」

「貴様のを剥いでやるわ……！！」

銀華は先程とは比べものにならない数のクナイ、鎖、そして速度で駿に飛びかかっていった。

「まぁ、お正月から賑やかね〜」
「ホントだねぇ〜」
縁側を眺めながら初穂と九重がお茶を飲んでのほほんとしていた…
「ぎゃあアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

其の十五　初詣こそ一年の始まり

朝風神社は朝からかなりの盛況ぶりだった。
振袖、着物、私服、様々な姿の人々で賑わい活気にも満ちている。
綿飴を持って駆ける男の子や金魚すくいの袋を振り回す女の子。

何だか夏祭りのような風景だ。
勿論、参拝客が一番多いのだが。

そんな賑わいをみせている神社の入口の門にいく一人の青年、鷺ノ宮駿がいた。
白い半襦袢の上から白い綺麗な羽織りを着ている。
下は袴だがいつもの白袴では無く、黒い袴姿。

「ねぇねぇ、何でこんなにいっぱい人がいるの？」

「オメー人がいる所では喋んなって言ったろーが」

駿の肩に乗っている悪熊が彼を見上げて尋ねてきた。
彼は呆れたように悪熊に顔を向けると、なるべく人目につかないように声を潜める。

「今日は正月。
年の始めで日本では色々とお祝いする日なんだよ。
んで、三が日までに神社で参拝するのが初詣」

「ふーん」

それを聞いてキョロキョロと興味深そうに周りを見回す悪熊。

「にしても、
随分と賑わってんな～
近所じゃ一番大きなこの神社がまさか理沙の家だったとはな……」

この神社の事は駿も知ってはいたが、まさか同級生の家だとは思っ

てもみなかったのだ。

そんな事を考えてながら、人々が行き交う神社の入口の門の前まで歩いていくと……

「あ、おーい駿君」

「ん？」

先に到着していたのか聞き慣れた声がかかってくる。

駿が声のした方向を向くと、門の横に美希、理沙、泉の三人が立っていた。

「やっほ～♪
あけましておめでとう～♪」

「うん、おめでとう」

「ふっ、今年もよろしくな」

駿はそれぞれ新年の挨拶をくれた三人に近づいていく。

「ああ、こちらこそ。
あけましておめでとう」

駿が合流して門の前には生徒会メンバーが四人になった。

「ってか、お前らホントに着物着てきたんだな」

「「「当然」」」

駿の言う通り、彼女達はしっかり着物姿だった。
美希の着物は淡い藍色でかなり上質だ。
泉は紫色の可愛らしい着物。
理沙は神社の娘だからか巫女の姿だった。

「へぇ……
普段は制服だけだから想像出来なかったけど、
三人とも良く似合ってるな」

「にはは～♪
ありがと～♪」

「あら、意外ね。
でもありがとう」

「駿君にしては珍しく素直な誉め言葉だ。
ありがたく受け取ろう」

三人は素直な駿の言葉にちょっと驚いたようだが、すぐに嬉しそうに笑ってみせた。

「こうして駿君はフラグを構築しようと…」

「してねーよ」

「まぁ、駿君は今日の生徒会メンバーの着物が楽しみで楽しみで夜も一睡出来なかったらしいからな」

「事実無根な話をさもあったように語らないで下さい」

駿は相変わらずなやり取りに呆れながらも突っ込む。

「そういえば駿君も和服姿だ！
似合ってるね～」

「ふむ、確かに。
かなり着慣れているようだが…」

「ああ、家で着る時間はコレがほとんどだからな」

駿は自分の着ている和服を見ながらそう返した。
すると三人は首を振って残念そうな表情をする。

「しかし残念だな」

「だね～」

「は？何が？」

そんな三人の様子に彼は訳も分からずに首を傾げる。

「「「振袖の方が似合うと思ったのに～」」」

「だから、そっちに話を持っていくなよ！！」

どうやら三人は女装姿を期待していたようだった。
駿にしてみればとんでもない話である。

「いや～、我々の認識では駿君は女装大好きな男の娘だと」

「認識を今すぐ変えて下さい！！
つーかさりげに大好きとか解釈を加えないでくれますか！？」

「今からでも巫女服に着替えてみないか？
スペアは沢山あるよ」

「いらねーよ！！」

駿の必死の叫び声に神社を行き交う人々は何事かと足を止めて振り返る。

「あらあら、お正月なのに大変ね駿君♪」

「でも本当に人がいっぱいですね」

そんな四人に声をかけて近づいてきた二人の女性。

「あ……
愛歌さん、千桜。
あけましておめでとうございます」

「二人とも、あけましておめでとう」

「あけましておめでとう。
それと、ようこそ」

「愛歌さんにちーちゃん、おめでと～♪」

それは着物姿の愛歌と千桜であった。駿達は軽く会釈をして新年の挨拶をする。

「あけましておめでとう。
今年も盛況みたいね～」

「あけましておめでとうございます」

二人も新年の挨拶を返しながら四人に合流する。
愛歌の着物は紫色の綺麗な振袖でよくパーティなんかで着ていくような服装だった。
彼女のこの格好、実は駿はよく見慣れている。
そして千桜は山吹色の質素だが美しい着物。
髪型はいつも通りだが、彼女はコンタクトなのか眼鏡をかけていなかった。

「わ～♪
二人ともとっても綺麗」

「ふふ、ありがとう」

「ありがとうございます」

まず泉が誉めると愛歌は微笑んで、千桜は恥ずかしいのか顔を少し赤くしてお礼を言った。

「へぇ、千桜は今日は眼鏡をかけて無いんだな」

「あ、ああ……
その……変かな？」

やはりまだ慣れないのか、
千桜はぎこちない様子で駿の様子を伺うが……

「いや、とってもよく似合ってるし可愛いと思うよ」

「（か、可愛っ……！？）
あ、ありがとう……」

彼の言葉を聞くと、ますます頬を赤らめて慌てて視線を反らせてしまった。
その表情はどこか嬉しそうでもあるわけで……

（（（ほほう……
これはもしや……）））

隣でニヤニヤしながらその様子を見ている三人娘。
何やら思うところがあるのだろうか。

「駿君はいつも通りの格好なのね、残念」

「残念って何ですか残念って。
まさか愛歌さんまで振袖姿が良いだなんて言い出す気じゃ…」

「ええ♪」

即答だった。
駿はすぐに『ちょっとは否定して下さい！！』と突っ込んだ。

「新年早々、本当に賑やかね～」

「「「？」」」

そんな賑やかな六人にまた声がかかってくる。
一同が振り返ると……

「あ、ヒナ」
「ヒナちゃん、あけましておめでと～♪」

「うん、おめでとう」

話しかけてきたのは生徒会長のヒナギクだった。
綺麗な桃色の振袖をしっかりと着付けていて、髪は後ろに結んでポニーテールになっていた。

「あ、ヒナちゃんも着物姿なんだね～、可愛いね♪」

「うんうん、とてもよく似合っているな」

「ま、当然ね。
ヒナなんだから、どんな格好でも美人になるさ」

「何でオメーが自慢気なんだよ」

口々に着物姿のヒナギクを誉める生徒会メンバー達。
確かに彼女はかなり綺麗で行き交う人々も度々足を止めては振り返る程だ。

「も、もう！
そんなお世辞ばっかり言って…

本当の事を言っても良いのよ？」

だが彼女は素直に誉め言葉を受けとれ無い性格、故に照れ隠しにそんな風に返す。

「本当よ、なぁ駿君」

「えっと……（本当の事、本当の事……）」

美希が少し呆れたように苦笑すると隣の駿に尋ねる。

駿は考えるように視線をさ迷わせて……

「胸の辺りがキツそうじゃなくて良かったな」

バキッ！！

一同は全員集まったので、朝風神社に入ることにした。

入口は人が多いので、二列に並んで先頭から理沙、愛歌、ヒナギク、千桜、泉、美希、駿の順番で歩いている。

「何も殴ること無いよな……」

「いや、アレは駿君が悪いわよ」

「だって本当のことって言うからさ……」

とぼとぼと最後尾を歩いている駿に美希が呆れたように話しかけていた。

本当に思った事と口に出す事とを考えるのは非常に難しい事だと、
まして女性の前では尚更だと改めて思う駿であった。

其の十五　初詣こそ一年の始まり（後書き）

美希
「ではでは、始まりました初詣イベント～」

理沙
「今回は集合、次回は参拝や出店周り、そのまた次回は各キャラと駿君との神社周りというギャルゲー要素満載の……」

駿
「って待て！！
何だ最後のは！？」

泉
「それは次回の後書きをお楽しみに～♪」

駿
「……」

美希
「それでは、今回はこの辺で」

理沙
「次回もよろしくな」

泉
「またね～♪」

其の十六　初参りの願い事って色々と考えちゃうよね（前書き）

今回も悪ふざけばっかりです。
後書きに次回の話を左右するアンケートもあります。

皆さん、是非ご協力お願い致します！

では、始まります！

其の十六　初参りの願い事って色々と考えちゃうよね

朝風神社の参拝本堂は参拝客がずらりと列をなしていた。
かなり広い神社で普通の参拝列より遥かに長い列が出来ている。

「はあ～、スゲー列だなぁオイ」

「そうだね～
お正月はリサちんの所、いっぱいお客さんいるけど、今年は特にいっぱいだね～」

「うん、例年以上の大盛況だ。
やはり今年は色々と催し物を増やしたのが大きかったか」

駿が列から身を乗り出して先頭の方を眺めて言うと、泉と理沙がそんな風に答えた。

「でも、こうして並ぶのも日本って感じで良いわね」

「そうですね。
着物姿の人も多いし、何だか風情がありますね」

「うん。
賑やかでお正月感じね」

愛歌がそうそう言って微笑むと千桜とヒナギクも同意する。

そんな学生達の賑やかも微笑ましいお正月……

「あ、」

「「「？」」」

列に並んでいる最中、突然駿が間抜けな声をあげた。
そんな彼に女性陣が一斉に振り返る。

「クマ公が消えた」

「「え？」」

駿はそう言って自分の肩を見ると先程まで乗っかっていた筈の悪熊が居ないのである。

「え？何で？」

「いや、落としたのかな？」

「かなって……」

不安そうなヒナギクや美希達とは対照的に駿は至って能天気な様子。

「居ないんなら直ぐに探さないと、入口まではいたから…」

「あー、大丈夫大丈夫。
テキトーに歩き回ってるよ。
その内戻ってくるって」

今にも動き出そうとするヒナギクに駿は手を袖の中で組んで楽観的に返事をする。

「何言ってるのよ駿君！！
もし悪い人とかに見つかったりしたらどうするの？
早く見つけてあげなきゃ…」

「そうだぞ駿君！
あんなに可愛らしい小熊を見つけたらきっと持ってっちゃうかもだぞ！！」

「クマちゃんが可哀想だよ駿君～！！」

「飼い主ならちゃんと責任を持たないとダメよ駿君」

女性陣からたっぷりと批難を浴びせられる。

「分ァった分ァった！！
んじゃ俺が探してくるから、皆はここで待っててくれ」

「え、私達も行くわよ」

一対五の状況になっては駿が折れるしか無いだろう。
そんな訳で彼は悪熊を探す為に列から出ようする。勿論ヒナギク達もそれに続こうとするが、

「いいって。
多分神社内にいるから何も皆で探しにいく事は無いから。

せっかく並んでんだし、すぐ戻るよ」

「あ、ちょっと……」

駿は彼女達を留めるように言い残して、ヒナギク達の言葉も聞かずに急ぎ足で列を離れていった。

其の十六　初参りの願い事って色々と考えちゃうよね

「とは言ったものの……
この広い敷地内を探すのか…」

ヒナギク達の居た列から離れて数分、悪熊を探しに出た駿は早くも後悔に苛まれていた。
彼はため息混じりに長く続いている参拝客の列に沿って敷地内を歩いていく。

「あ、駿やないか！」

「あん？」

そんな風に彼がトボトボと歩いていると横からよく聞き慣れた声がかかってきた。

「咲夜！？」

「よっ」

駿が驚いたように顔を向けた先には、彼の幼馴染みである愛沢咲夜が鮮やかな紅い着物姿で列に並んでいた。

「おまっ、何でここに？」

「なんでって、初詣しに来たからに決まってるやないか。そういう自分こそ、初詣なんて珍しいな？」

咲夜は首を傾げて駿に尋ね返す。

「俺は生徒会の約束でな」

「さよか。
どうりで、家に尋ねても自分おらんかったわけや」

「ああ……
って、ウチに来たって俺に何か用があったのか？」

「へ？」

咲夜の話によると、どうやら午前中に彼女は鷺ノ宮家に駿を尋ねて来たみたいだが……

「い、いや……
別に大した用は無いんやけど…」

「はぁ」

「その、ウチも暇やったしどうぜ自分もダラダラしてるやろうから、初詣でも一緒に行ってやろうかと思って……」

咲夜は駿の方を見たり視線を外したりしながら理由を話した。
最後の方は声のトーンがかなり小さくて上手く聞き取り辛かった。
だが概ね伝わったようだ。

「あ、そうだったのか」

「あ、そうだったのかって……
もう少し何か反応はないんか」

「いや、特には」

スパーン！！

直後駿の頭に彼女お手製のハリセンが直撃した。

「痛ってーな！？

何すんだよ!?」

「うっさいボケ!!
こうして可愛い幼馴染みが誘ってあげてるって言ってるのに何やねんその返事は!!」

「いきなり人の頭を叩く奴は可愛いとは言わねーよ!!」

駿は叩かれた頭を擦りながら咲夜に向かって叫び返す。
列に並んでいる人々の視線も集まっているが二人は気に止めた様子は無かった。

「あれ?
ってか、お前も着物なんだな」

「気付くの遅いな……」

また突拍子もない駿の言葉に呆れたように突っ込む咲夜。

「これはせっかくやし、家にあった振袖を着てみたんや」

「へぇ……」

「どや?似合ってる?」

「え?あ……」

彼女は綺麗な紅い振袖を自分でも見て言うと、ゆっくり一周して駿に尋ねた。

ここで駿の頭を過ったのは、先程入口に集合した時の出来事。
ヒナギクに対して思った事を正直に発言したばかりに怒られた……
というか殴られた事を思い出していたのだ。
なので女性を怒らせないようにするにはと考えて……

「えっと、とてもよく似合ってるぞ。綺麗な振袖だしお前にピッタリだな」

取り敢えず誉めることにした。

「へ！？」

彼の言葉があまりに予想外だったのか咲夜は思わず頬を赤らめて驚いたように声をあげた。
憎まれ口の一つでもたたくと思っていたのだろう。

「そ、そうか？」

「ああ、とっても可愛いと思うよ。元々美人だから衣装もより綺麗に見えるんだろうな」

とにかく誉めておけば怒られないと踏んで駿は言葉を選んでいく。
これならばきっと……

スパーン！！

大丈夫じゃ無かった。

「痛っ！？
え？ちょっ、何で叩くの！？」

「アホか！！
この場合に求められるモンは笑いやろ！！
何真面目に喋っとんねん」

思いっきり怒られた駿は頭を擦りながらしきりに“？”を浮かべている。

そうは言っても咲夜は頬が完全に赤らんでいて、彼女なりの照れ隠しなのだろうことは明白だが……

（正直に言っても沢山誉めても怒られる……何故？？？）

それに気付いていなかった彼は、膨らむ頭の中の疑問に考えてもただ首を傾げる事しか出来ない。

（とにかくこのまま怒らせとくのもアレだし、本人に聞いてみよう……）

そこで彼にとってはかなり理不尽な今のやり取りを一旦置いて、咲夜に尋ねようと彼女を見る。

「あ、そういや」

「？」

が、理由を尋ねようとした時、駿はまた何か別の事を思い出したのか声をあげる。

「お前年明けまでスイスに居るんじゃなかったか？」

「……え？

ああ、寒いから帰ってきた」

「帰ってきたって……

んじゃ伊澄もこっちに？」

お忘れかも知れないが伊澄はナギと咲夜と三人でスイス旅行に行く予定があった。

ナギはドタキャンしたので、咲夜と二人で行っていた筈なので彼女が帰って来ているのならば伊澄も戻って来ていると思ったのだが…

「あ～、伊澄さんな……

ちょっと早めに帰る事にしたんで、昨日一緒にスイスの空港から飛び立った筈なんやけど……」

「迷子か……」

「うん。飛行機に乗った時には居たんやけどな……」

咲夜の言葉に駿は呆れたように額を押さえてため息をついた。

「で、見つかったのか？」

「ウチの執事達が何とかマッターホルンで発見したらしくて、無事保護したって連絡は入ってる」

「はぁ……
なら帰ってくんのは後二日くらい先だな」
無事に見つかったと聞いて駿は少し安堵したように息をついた。
「心配なのは分かるけどもう少しの我慢やな。
それに伊澄さんは幸運の女神に溺愛されてるから、心配ないって」
「まぁ、それはな。
ところで、お前は大丈夫か？」
「え？」
不意に駿は視線を咲夜の方に向けるとそう尋ねた。
「海外から帰ってくると体調って崩し易いからさ。
それに気温が急に変わるとよく風邪も引くからな。
で、身体の方は大丈夫なのか？」
「ん、大丈夫やけど……」
彼がそんな事、自分の事を心配してくれていたと言うのが意外だったのか咲夜はきょとんとした表情で小さく首を縦に振った。
「そっか、なら良かったよ。
んじゃ、俺は探し物あるから」
「……」
駿は彼女の頭にポンポンと手を乗せてそう言うと、悪熊探しの為に

またゆっくりと歩き出す。

「じゃあな～」

「あ、うん」

駿はヒラヒラと手を後ろに振りながら更に列の後方に歩いていく。
そんな後ろ姿を咲夜は不思議そうに見つめていた。

○

「って、理由聞き忘れた……」

咲夜と別れて暫く歩いた後、駿は思い出したように呟いた。
何だか先程から忘れてばっかりの主人公である。

（う～ん……
ま、またの機会でいいか）

しかしその為にわざわざ戻るのも何だか変な感じなので、やはり先に悪熊を探すのを優先しようと足を進めることにした。

「あれ？
駿君じゃないですか！」

「？」

すると、また歩いている駿に声がかかってきた。

彼が振り返ると、そこには…

「おー、ハヤテじゃねぇか」

「はい、あけましておめでとうございます」

三千院家の執事である綾崎ハヤテが立っていた。
彼はニッコリと微笑むと駿に新年の挨拶をする。

「ああ、オメーも去年は色々大変だったな……」

「ハハハ、取り敢えず今年も無事に執事を続けられるように頑張ります」

苦笑まじりに言うハヤテ。

「ん……？
あ……！！」

「え？」

駿はそんな彼の腕を見て少し驚いたようす。
何故なら、彼の両腕には何と駿が探していた悪熊が抱かれていたのだ。

悪熊は駿に気付くとハヤテから飛び出して駿の肩の上にちょこんと飛び乗った。

「お前、こんなトコに居やがったのか」

「良かった。
この子、駿君のでしたか。
さっき神社内を迷子になっていたようだったので」

「そっか。
迷惑かけたな、ありがとう」

駿は肩の上の悪熊を軽く指で小突くとハヤテにお礼を言う。

「そういや、何でお前はここに居るんだ？」

「えっと、昨日お嬢様が初日の出を見たいとのことだったので、国道を使って自転車で１００ｋｍ程走って見に行ったんです。
それで帰り道にお嬢様が眠ってしまわれたのでＳＰの方々に任せて僕は電車で帰ってきたのですが、その帰り道にどうせなら初詣でもしようかなって」

「ツッコミ所が満載過ぎるけど、もう何も聞かねーよ」

駿の予想より遥かにぶっ飛んでいるハヤテの一日。
突っ込むと色々と疲れそうなので彼はスルーに決めた。

「じゃ、人待たせてんでここで。クマ見つけてくれて助かったよ」

「あ、はい。
僕も参拝していこうかな」

こうして悪熊を無事保護した駿はハヤテと別れて、列を前を戻っていくことにした。

列は刻々と進んでいたので、ヒナギク達がいる場所までは先程より歩かなければならなかったが、それでもそんなに時間はかからずに彼女達の元に戻っていく事が出来た。

「あ、駿君。
見つかった？」

「ああ、何とかな」

「そう、良かった……」

戻った駿は尋ねてきた彼女達に肩の上にちょこんと乗っかっている悪熊を見せる。
ヒナギク達は心底安堵したように息をついた。

そうこうしている内に、駿達の参拝する順番が回ってきた。
先ずはヒナギクと理沙が賽銭をして大きな鈴を鳴らしてニ礼ニ拍手一礼をする。
数十秒したら二人は列から抜けて今度は千桜と愛歌が同じように賽銭をして参拝をする。
そして遂に駿の番になった。

彼は賽銭箱に小銭を投げ込んで、大きな鈴を右手でゆっくりと鳴らした。そして二回手を叩くと目を閉じる。

（えー、今年も良い年でありますように。
良い年というのはですね、まず勿論伊澄が無事にこっちに帰ってく

ることです。
飛行機が無事に空港につきますように……
あと伊澄に絶対変な虫とかそんな野郎がつきませんように。
でももしついてしまったら全力でソイツに呪いがかかりますよう。
それから、彼女の迷子癖が少しはマシになりますように。
何故かって？そりゃ決まっているでしょう。もし見知らぬ男の部屋なんかに迷い込んだら……
ぬおォォォォ絶対お兄ちゃんは許しません！！絶対絶対認めませんんんん！！！
てな訳で全力で彼氏とかそんなクソヤローが出来ないようにどうか天から見てて下さいマジで神様。あとそれから……」

「「「長いわァァァァ！！」」」

駿は三人娘に思いきりドロップキックをくらって吹っ飛んだ……

「どんだけ長い願い事なのよ」

「というか、途中からほとんど声に出ていたぞ」

「ええ！？」

駿は驚いたように美希達やヒナギク達を見るが、一同の冷めた視線がかなり印象に残った……

○

「新年から相変わらずだな駿君は」

「あれはまだ願い事の半分もいって無かったんだよ」

「「「え……」」」

今ので半分だと言う駿に呆れたように反応する美希達。

「そうだ、初参りも終わったし、おみくじでも引いていかないか？」

「あ、良いわね」

「おみくじか……」

理沙がそう提案したので、一同はおみくじの売っている建物に向かった。

おみくじは筒を振って中から紙が出てくるタイプで、順番にヒナギク、千桜、愛歌、理沙、泉、美希、駿が引く事になった。

「あ、中吉」

「私は小吉だ」

「あら、私も中吉ね」

まずは前半三人が引いてヒナギクと愛歌は中吉、千桜は小吉を引いた。

「ふっ、大吉だ」

「リサちん凄〜い！！
あ、私は小吉だ」

「私も小吉ね」

続いて後半の三人。
理沙は大吉で、泉と美希は小吉であった。
そしていよいよ駿の番である。

「……」

彼が筒を振ると中から紙が一枚飛び出してきた。
その紙を丁寧に開くと……

《絶凶》

「ってちょっと待てェェェェ！！
何だコレは！？」

見たことも無い不吉な文字につい叫んでしまう駿。

「おー、これは凶の中でも最悪の部類の絶凶だな」

「いや、そんな凶聞いたこと無いんですけど。
大凶が一番悪いんじゃないの？」

駿の言葉に理沙は簡単に首を横に振る。

「この朝風神社に限定である凶のレパートリーの一つさ。ウチのおみくじは全部で、

大吉
中吉
小吉
末吉
吉
凶
中凶
中の下凶
中の上凶
大凶
梅凶
竹凶
松凶
鈍凶
仏凶
道凶
裏凶
剛凶
烈凶
殺凶
絶凶
滅凶
最凶、とこんな種類に…」

「ほとんど凶ばっかじゃねぇかァァァァ！！聞いたことねーよ、こんな豊富な凶の種類！！

最早嫌がらせの域だよコレ！！」

とんでもない数の凶をさらっと言ってのける理沙。

「しかもこの絶凶って大凶より遥かに悪いどころか下から二番目なんですけど！！
ってか皆さんよく吉を引けましたね！？」

駿の言う通り、このおみくじの中では小吉ですら大吉に見えるほど出る確率が低いのだ。
しかし駿以外は皆吉……

「波乱の一年になりそうね…」

「頑張ってね駿君♪」

「まぁ、所詮おみくじだから
そんな気落ちしないで…」

ヒナギク、愛歌、千桜も口々に慰め（？）の言葉をかけてくれる。

「うん、またウチの神社でおみくじを引くといい」

「二度と引くかっ！！」

この神社ではもうおみくじは引くまいと心に決めた駿だった。

「まぁそれは置いておいて、せっかくだから昼まで自由行動で祭を

回ってみないか？
私は一応巫女の仕事とかあるしな」

おみくじが一通り済むと、
巫女姿の理沙がそう提案した。

「昼までは各人色々回ったりして、昼になったら皆で集まって一緒にお昼を食べるのはどうだろう」

彼女の言う通り、その方が行動も制限されず思うように縁日を回れて良いだろう。
何せこの神社は広いのだ…

「そうね。
じゃあ、１２時半になったら入口の門の前に集合で」

ヒナギクがそうまとめると一同は了解して頷いた。
そして一旦生徒会メンバーは解散することに。

「ヒナギクはどうすんだ？」

「私は、取り敢えずあの人だかりで何かやってるみたいだから見てこようかな」

駿がヒナギクに尋ねると、彼女は神社の一角に多くの人が集まっている場所を指差して言った。
何かの大会が行なわれているような感じである。

「愛歌さんはどちらに？」

「そうね…
さっきこの神社の裏に際具殿があるって聞いたんだけど、そこに不思議な噂があるらしいんだけど…」

「不思議な噂……
それってまさか幽霊的な…」

「さぁ、どうかしらね」

駿の言葉にクスクスと笑って答える愛歌。
どうやら行くつもりらしい。

「千桜は？
どこか……」

「……え!?」

駿が声をかけようとするが、彼女は神社のとあるスペースを見つめていた。
それは何と小規模ながら様々な筐体が置いてあるゲームセンターだった。
屋根は無く青空ゲームセンターといったところか。

「いやいや!?
何で神社にゲーセン!?
どんな事したらそんな神社が出来るの!?」

「今年からウチも老若男女問わず楽しめる神社を目指していてな」

「ゲーセンある時点で神社じゃねーよ！！」

自慢気に語る理沙にゲームセンターを指差して突っ込む駿。
そのゲームセンターを見つめている千桜はもしかしたら行くつもりなのだろうか。

「んでお前らは……
やっぱいいや」

最後に三人娘に尋ねようとするが面倒なので止めようと……

「「「ちゃんと聞けよ！！」」」

突っ込まれた。

「はいはい、何をするつもりなんだ？」

「ふっ、よくぞ聞いてくれた…
我々の目的は勿論……！！」

渋々駿が尋ねると美希が大袈裟に腕を組んで答える。

「「「正月面白動画を撮ることだ！！」」」

ドーン！！

「へ～」

予想通りだったので駿は全く驚かなかった。

こうして生徒会メンバーは皆どうするかを決めているようではあるが……

（さて、俺はどうするかな……）

・あの大勢の人の集まりも気になるし、ヒナギクと一緒に行くか

・愛歌さん一人じゃ心配だ。一緒に際具殿まで行こう

・やっぱり千桜と一緒にゲーセンに行ってみるか

・三人娘を放っておくのも色んな意味で不安だ。面白動画に付き合おう

・さっきの理由を聞いてなかったな。咲夜を探してみるか

・そういやハヤテも来てるんだった。ハヤテと話すか

「ってオイィィィ！！
何だこのアドベンチャー要素満載の選択肢は！？」

ギャルゲーではお決まりの選択肢を選んで行動する形式です。

「知らねーよ！！
何でこんな事を……」

果たして駿はどうするのか？
次回に続く！

「勝手に終わるなァァァァ！！」

其の十六　初参りの願い事って色々と考えちゃうよね（後書き）

美希
「はい、今回も作者の悪ふざけでアンケートをとることになりました」

理沙
「皆さんが見たいと思う選択肢を三つ選んで感想に書いてくれ！」

泉
「多かった三つを次回の本編でやるそうです♪」

美希
「という訳で、選択肢はこちら！」

1. あの大勢の人の集まりも気になるし、ヒナギクと一緒に行くか
2. 愛歌さん一人じゃ心配だ。一緒に際具殿まで行こう
3. やっぱり千桜と一緒にゲーセンに行ってみるか
4. 三人娘を放っておくのも色んな意味で不安だ。面白動画に付き合おう
5. さっきの理由を聞いてなかったな。咲夜を探してみるか

6．そういやハヤテも来てるんだった。ハヤテと話すか

理沙
「締め切りは２９日の２０時までだ」

泉
「作者の悪ふざけですが、皆さん是非ご協力下さい♪」

美希
「では、次回もよろしくね」

其の十七　祭具殿の奇妙な噂にはご用心（前書き）

愛歌
「皆さんこんにちは♪
霞愛歌です。
今回の前書きでアンケート結果を発表したいと思います♪
一体、駿君はどの女の子を攻略してしまうのでしょうか？」

駿
「前書きから何を言ってるんですか愛歌さん！？」

愛歌
「選んだ選択肢の女の子には駿君が恥ずかしい愛の告白を」

駿
「しませんよ！！
ってか聞こえてますか！？」

愛歌
「結果発表です♪」

選択肢１（ヒナギク）　６票
選択肢２（愛歌）　７票
選択肢３（千桜）　８票
選択肢４（三人娘）　２票
選択肢５（咲夜）　８票
選択肢６（ハヤテ）　６票

愛歌
「という訳で、結果は2、3、5になりました」

駿
「なりましたって……
本当にやるんですか！？」

愛歌
「さぁ、本編ではどんな駿君の恥ずかしい妄言が飛び出すんでしょうか」

駿
「妄言！？」

愛歌
「では、始まります♪」

其の十七　祭具殿の奇妙な噂にはご用心

「じゃあ、１２時半に門の前に集合ね」

ヒナギクの声を皮切りに、生徒会メンバーは一旦解散する事になった。

（さて……）

メンバー達はそれぞれどうするかを決めて歩き始めている中、駿は自分はどうするか考える。

ここは……

（愛歌さん一人じゃ心配だ。
一緒に祭具殿まで行こう）

彼はそう思って軽く頷くと、歩いていく愛歌の後を追っていった。

「愛歌さん！」

「？」

駿が声をかけると愛歌が振り返って不思議そうに首を傾ける。

「駿君？どうしたの？」

「裏にある祭具殿に行くんですよね？だったら俺も一緒に行きますよ」

駿は愛歌を見た後、本堂の裏にあると思われる建物がある方向に目を向ける。

「でもいいの？
他の女の子達を放っておいて」

「メチャクチャ誤解される言い方ですねそれ
そもそもそんなんじゃ無いですからね？」

「あら、そうかしら？」

呆れたような駿の言葉に愛歌はクスクスと笑いを溢す。

「そうですよ……
大体そんな」

「面白いと思うけど」

「いやそうじゃなくて……
とにかく、裏に一人は心配ですからついて行きますよ」

「ふふ、ありがとう」

頭を掻きながら言う駿を見てやはり面白そうに微笑む愛歌。

そんな訳で二人は並んで本堂の裏にあるもう一つの寺院に向けて再び歩き始めた。

「でも祭具殿があるなんて、やっぱり大きな神社なんですね」

「昔使われていた神具や祭具が収められているかなり古い建物だって聞いたわ」

「へぇ……
なら珍しい道具とかもあるかもしれないですね」

「昔の拷問器具とか」

「愛歌さん……」

「冗談よ♪」

そう言って微笑む愛歌を見て駿は彼女が言うと何故か冗談に聞こえないと内心思うのだった……

其の十七　祭具殿の奇妙な噂にはご用心

「ここですか」

「みたいね～」

駿と愛歌の目の前には木造の建物が荘厳と立っていた。古めかしくも綺麗な堂は奥に長く、反対に幅は比較的狭い。
簡単に言えば学校の体育倉庫くらいの幅で、体育倉庫より大分奥行がある感じの建物だ。
建物の入口と思われる扉までは十数段ほどの階段まである。

「外観から見ると割りと普通の倉ですね」

「でも、見るからに古いわね」

彼女の言う通り建物は木の禿げた部分や傷んだ部分が目立っていてかなりの年代感を思わせる。
二人は階段の登っていって規模の割りに小さな扉の前まで来た。
隣の隣にはボロボロになった木の板も立っていた。

「っていうか、こんな所勝手に入って良いんですかね？」

「良いんじゃない？
ほら、扉も開いてるし」

目の前の小さな扉は両開きのようで、右側の扉がまるで誘うようにうっすらと前に開いていた。

「あ、本当ですね」

「それにしても随分妙な開き方ね……」

その意見には駿もそうだと内心頷いていた。
見学用というより、まるで鍵をかけ忘れたかのような開き方だ。
しかし、彼にはもう一つ気になっている事があった。

「そういえば愛歌さん」

「？」

「さっき言ってた不思議な噂って何なんですか？」

そう。祭具殿に行く前に彼女が言っていた話である。
そもそもこの場所に行こうと言う理由の一つはこれだった。

「えっと、誰もいない筈なのに鈴の音がするとか、夜な夜なすすり泣きが聞こえるとか」

「小学校の七不思議レベルですね……」

「まぁ、噂なんてそんなものなんじゃない？」

真夜中に誰もいない筈の音楽室に響くピアノの音、深夜の廊下に聞こえる子供のすすり泣き。
学校の怪談といえばこのような噂がよく挙げられるが、それが神社

で起こるというのはどうなのだろうか。

とは言え、そんな事を今考えても仕方がないと二人は扉をゆっくりと開けて中に入っていった。

中は大体幅が５ｍほどあり奥は薄暗くて完全に見通せないが中々続いていそうな広さだった。
高さは３ｍとあって天井付近にあるごく小さな窓からうっすらと光が差し込んでいて真っ暗というわけでは無い。
そして体育倉庫のように室内には沢山の祭具等が所狭しと並んだり積まれたりしていた。

「祭具殿っていうより、倉庫みたいですね……」

「その割には広いわね～」

「随分古い道具もありますけど…中は結構綺麗ですね。
定期的に掃除でもされてるんでしょうか」

扉から中に足を踏み入れて周りに積まれている色々な形の銅鐘、様々な種類の青銅器、他にも様々な祭具等々を見回して奥に歩いていく。
祭具殿は奥に行けば行くほど入口からの光は遠のいていて徐々に暗くなっていくが、天井にある小窓からの少しばかりの光が室内を見回せる程には届いている。

バタン！！

「「え？」」

二人が更に奥の方に足を踏み入れようとした時、後ろで扉の閉まる音が室内に響いた。
かと思うと先程より室内が一気に薄暗くなる。

「あ、扉が」

「？」

気付いた二人が振り返ると、入口の扉が何と閉められてしまっていたのだ。

「一体……」

すぐに駿は扉に手をかけて開けようとするが、ガチャガチャと音がするだけで全く開かないようである。

「駿君？」

「ダメです。
全く開きませんね……
どうやら閉められたみたいです」

駿は何度か扉を押したり引いたりしたが、手を離すと隣の愛歌に向けて首を振った。

「誰かが閉めたのかしら？」

「いや、人が来た気配は無かったと思います。
それに入口から近い位置にいた俺達に気が付かない筈は……」

「確かにそうね」

建物の中に入っていたとはいえ、二人は入口から入ってまだ少ししか進んでいないのだ。
人が外に来たら気付くだろうし、向こうだって駿達に気が付く筈である。

一応外に向かって声をかけたり、扉を叩いてみたが反応は一切無かった。

「鍵もかかってるなんて尚更不思議ね」

「まさか風で閉まったなんて事は無いだろうし……とにかく困りましたね
（俺はともかく、愛歌さんは体も弱いから……参ったな）」

扉の前でそう呟いて内心の不安を表情に表すまいと唇を噛む駿。
愛歌は頬に手を当てていたが、奥の薄暗がりに目を向ける。

「奥に行ってみたらどうかしら。こんな事態に備えて何か使えるものがあるかもしれないわ」

「そうですね。

取り敢えず見て回りましょうか。あ、じゃあ足元暗いから気をつけて下さい」

ここでジッとしていても仕方が無いと判断した二人は、祭具殿の奥へと進んでいくことにした。

室内は決して明るくは無いが、まだ午前中で小窓をごく僅かながらあるので視野は確保出来る。

「でもこのままだと大変ね～」

「はい？」

「もし、駿君が千桜さんと一緒に閉じ込められたりしたら…」

駿

「千桜！！」

いきなり千桜を抱きしめる駿。

千桜

「ダメよ駿君！

貴方には彼氏という存在がいるのに」

駿

「そんなもの関係ない！！

俺の運命の人は君だけだ……」

千桜
「ああ、そんな……」
そして二人は……

「なんて事に」
「なりませんから！！
っていうか何で彼氏なんですか！？そっちの趣味はありませんよ！！」
慌てたように叫ぶ駿を見て愛歌はクスクスと微笑んでみせる。
「だったらこんなのはどう？」

二人が閉じ込められて遂に5年という歳月が経ってしまうの…
何とか5年の間は中にあった食糧で生き延びるのだけれど、
遂に食糧は勿論水さえも底をついてしまう。
一人残った私は今や化石となった駿君が最後に残したダイニングメッセージを発見するの。
そこには犯人に関する最大のヒントが……

「そこから始まる脱出兼サスペンスなんてどう？」

「その前に何で俺は化石化してるんでしょうかね！？」

「きっと他の出口を探しているうちに中にある穴に落下したのね」

「一緒にいたなら助けてくれてもいいですよね！？」

「そこが犯人の動機ね
きっとまず駿君を亡き者にして遺産を……」

「何か恐ろしい事件の全貌が明らかになってますけれども！？」

そんな話を交わしながら二人は室内の奥に進んでいくのだが…

「あ……」

「駿君？」

脇にずらりと並ぶ祭具を見ながら歩いていた駿が、突然間の抜けた声をあげて立ち止まった。

どうやら何かを見つけたようで、駿の目線の先には……

「愛歌さん、何かこの世界にあってはならないものがあるんですけど……」

「まぁ……」

あの有名な拷問器具、アイ○ンメ○デンに寸分違わぬ像がそのまま祭具の積まれた中に一際目立って置かれていたのだ。

「何ですかねコレ……」

「さぁ、祭具なんじゃない？」

「いやいや、何でそんな恐ろしいものがこんな所あるんですか！？ってかコレ、シャー○ンキ○グに出てませんでした？中に入ってるジャ○ヌさんが自身に瀕死の重症を負わせて○力上げて……」

ガタガタ……！！

駿の言葉を遮るように、アイ○ンメ○デンそっくりの像が音をたてて揺れた。

「……今動きましたよね」

「動いたわね」

「……中に人がいるんですかね？」

「いるかもしれないわね」

・・・・・

「って、冷静に考えてる場合じゃないですよ！！
早く助けないと……！！」

駿は慌ててアイ○ンメ○デンそっくりの像の胴体に手をかけて、扉を開けようとする。

「くっ…！！
開かない！！」

「駿君、これ鍵なんじゃないかしら」

「え？」

愛歌がメ○デンそっくりの像の脇にひっそりと置いてあった輪っか付きの鍵を見つけた。

駿は彼女からそれを受け取ると、像の扉の鍵穴に差し込む……

ガチャ！！

「開いた！」

鍵がしっかりとはまる音と共にメ〇デン像の扉がゆっくりと若干鈍く軋みながら開いた。
そして中から……

『キャホォォォォォ！！！
三年ぶりの外じゃあァァァァ！！』

「のわっ！？」

何かが叫びながら物凄い勢いで飛び出してきた！
駿は思うわず像から離れて尻餅をついてしまい、愛歌も口に手を当てて驚いていた。

『キャッホーーーっい！！！』

飛び出してきた“何か”は歓喜の叫び声をあげながら天井付近をグルグルと飛び回っている。

「な、何ですかアレ！？」

「何かしらね～」

目を見開いて愛歌を見上げる駿に彼女も首を傾げてみせた。

『ふぅ……
久々の自由に思わず感極まってしまったわい……』

すると、暫く天井で叫んでいた“何か”そう呟きながは二人の前に降りてきた。

「ひ、人！？」

それは黒いダボダボの装束のような着物を着た老人だった。
背丈は銀華や飛鳥と同じくらいで瞳はかなりの細目。口には白い髭が長く垂れ下がっている。

そんな小さな老人がフワフワと浮きながら駿達の前に降りてきたのである。

『いやはや、御礼を言わせてもらうぞ坊主、お嬢さん。
ようやくこの像から出ることが出来たわい』

「「……」」

そんな老人の様子に二人は顔を見合わる。

「えっと……アンタは？」

『ホッ、そういえば自己紹介がまだだったのぅ』

取り敢えず駿が目の前の得体の知れない老人に話しかける。
老人は駿達の目線の高さで浮いて一笑してみせた。

『ワシはのぅ……
名前は……忘れたわい。
もうずっと仙人と呼ばれてきたからの。だから仙人と呼んでくれて構わん。それか仙人からとってセンちゃんでも良いぞい』

「「仙人？」」

『ふむ、生きていれば今年で８７８歳になるからのぅ』

「え、生きていればって……」

駿の言葉に老人はコクリと首を縦に振った。浮いたまま

『ワシは死んだ、もう８００年も前にな』

「８００年前！？」

『ホッホッ、今考えれば長いようで短い寿命だったわい』

「なら、今は幽霊って事ですか？」

『その通りじゃよ可憐でビューティフルなお嬢さん』

愛歌が尋ねると老人は細目をキラーンと光らせて続ける。

『かつてワシが生きている間は、この周辺にあった山に籠りひたすら道教に励んだものじゃ。
懐かしいのぅ、来る日も来る日も我を忘れて修行にのめり込んだ若かりし日々……』

老人のバックにいくつもの回想シーンが浮かび上がったが、どれもこれも恐らく若かりし頃の老人が屋敷の大広間で沢山の着物の女性達を侍らせてウハウハの冗談で大笑いしているものだった。

「いやどこが山籠りだよ。
どの辺が道教の修行だよ。

キャバにハマるサラリーマンと変わんない絵面だよコレ」

『今見てもらった回想からも分かるように数々の業績を積み上げたワシは、人々からは“夜の賤人”“屋敷遊びの仙人”等と謳われるようになってのぅ
以来呼び名はずっと仙人じゃ』

「謳われてねーよソレ！！
蔑まれてるよ完全に！！」

誇らしげに表情を綻ばす老人。
駿のツッコミは聞こえているのかいないのか……

『それからというもの、ワシは西へ行ってはオナゴを侍らせ、東へ行ってはオナゴを侍らせ、北へ南へと多忙だが充実な日々を送った……』

「ほとんど女遊びしかしてねーじゃねぇか！！！」

『そして９６歳。沢山のおなごに看取られてワシは息を引き取った……』

「結局山籠りしてねーのかよ！！」

『なに、死んでから暫く暇じゃったから少しは山籠りしたわい』

「それ意味無いから」

仙人と呼ばれる、いや自称する要素はゼロであると陽気に笑う老人を見て駿は思った。

「でもおじいさん?
何故亡くなった後もずっとこの世に残っていたんですか?」

「え、愛歌さん?」

愛歌は頬に手を当てて浮かんでいる老人にそう尋ねた。
駿は今の老人の話は丸々スルーかと驚いて彼女を見ていたが…

『流石美人な女性は意見も的確じゃ』

(的確なのか!?)

『しかし、こんな綺麗なお嬢さんには是非名前で呼んで欲しいの~
ワシの名前は劉安(りゅうあん)と言うんじゃよ♪
リュウちゃんでもリュウさんでも好きに呼んどくれ♪』

「アンタさっき名前は忘れたって言ってなかったか!?」

『うるさい小僧は黙っておれ!!』

「何でだよ!?」

駿のツッコミは老人基劉安の一喝で簡単に跳ね返された。

「じゃあ、劉さん?
何故まだこの世に残っておられるんですか?
そもそも、どうしてこの祭具殿に閉じ込められて?」

『ふむ、話せば長くなるがのぅ…』

劉安はフワフワと浮きながら空中で胡座をかくと、白い髭を手で撫でながら天井を見る。

『ワシは息を引き取っても尚、色々と忙しい身であったからの。暫くフラフラした後、先程言った通り山籠りをしたり、着替えを覗いたり、色々したもんじゃ。

しかし３００年経ったくらいかのぅ、運の悪いことにある陰陽師に見つかってしまいお仕置きという名目のもと、一年間という期限で封印されてしまったのじゃ。

ところが、その陰陽師が急死しおってワシの封印も忘れやがったのじゃ、あのボケ共は……！！』

「聞く限り自業自得の話じゃねーか」

『うるさい小僧は黙っておれ！！』

劉安は駿に一喝するとコホンと咳払いをして続ける。

『そんな封印が解かれたのは今から２００年前じゃったか、当時この地にあったある神社の先代の当主によって偶然ワシは解放される事となった。

当然ワシは怒りに震え人間共に復讐をしてやろうと思ったが……どういう訳かその当主はワシの事が見えるらしく、何だかんだで飲み友達になったのじゃ。

その次の当主からは見えなくなったようだったが、

以来ワシはその恩を返すべく、たまにこの町に魔の気配が来ぬように見張ったり、時折周辺の町をパトロールしておるのよ』

「本音は？」

『現代は綺麗なオナゴがいっぱいでワシの姿も見えないようじゃからウッハウハじゃー♪』

劉安は心底嬉しそうにあっさりと本音を吐いた。
というか元々隠すつもりも無かったようである。

「愛歌さん、出口の鍵でも探しましょう。
これ以上こんな事に付き合う事はありませんよ」

『だあー！！
待たれい小僧！！ここからが話の本題なんじゃ！』

呆れたように駿は立ち上がると
愛歌にそう言うが、劉安が追いすがるように声をかける。

「まぁ駿君、話だけでも聞いてあげましょう。
それも駿君の仕事でしょ？」

「う……
それは、まぁ……」

愛歌にそう言われてしまっては仕方がない。
と言うわけでまた浮かんでいる劉安に渋々向き直る駿。

『コホン……
まぁそれはさておき、何故ワシがこの祭具殿に閉じ込められてしまったかだが……
つい三年前、ワシはそろそろ成仏しようかと思ったんじゃ』

「はぁ、すりゃいいじゃねーか」

『しかし！！！
いざ成仏と思ったその時、ある事を思い出したのじゃ！！
そしてそれは、何故ワシが今まで成仏出来ずにフラフラしていたのかという原因も分からせてくれたのじゃ！！』

「いや、単に邪な思いでフラフラしてたんだろ？」

取り敢えず劉安に駿の言葉は聞こえていないようである。

『それは探し物じゃ』

「「探し物？」」
『そう。それはワシが死んでから５００年くらい経った頃に全国各地に回って隠していたものじゃ。
それを思い出してそれを全てワシの手に戻したら成仏しようという考えた』

「そんなに大切なものなんですか？」

『ああ、散々遊び惚けてきたワシだがそれだけは命より大切な宝であった』

愛歌が尋ねると劉安は真剣な表情で頷いてみせた。
遊び惚けてたという自覚はあるようである。

『そして三年前、その探し物の一つがこの神社のこの祭具殿が立っている辺りにあった事を思い出し、この祭具殿の中に入った。
しかし、運の悪いことにワシはそのアイ〇ンメ〇デンの像の中を探

そうと入ったは良いが、何と出れなくなってしもうた』

「出れなくって……
アンタ幽霊なんだろ?壁のすり抜けくらい出来るんじゃないのか?」

『確かに普通ならば出来るが……このアイ○ンメ○デン像だけは別だったのじゃ
何か呪怨のようなものがあり、入っても出ることは出来なかった』

「呪怨って……?」

「恐らく作者の強い怨念ね
連載打ち切りのような形になっていて続きが気になっていた
完全版が出て良かったと思ったは良いけどもお金が無いから読めない作者の強い恨みがきっと…」

「何の話をしてるんですか愛歌さん!?
ってかそれはただの作者の我が侭ですよね!?」

どうやらメ○デン像の秘密は作者のくだらない怨念だったらしい。
しかも未だに……

『まぁ、とにかく出れて良かった……ワシの気孔術で扉を開けておいた甲斐があったわい』

「ってちょっと待て
扉を開けてたって……」

『ふむ。
ワシがメ○デン像から出るには外部の人間の力を借りないといけな

かったからの。
毎回ワシの遠隔気孔術で扉を開けて助けを求めていたのじゃ
しかし、いつもいつも気にされること無く閉められる日々……
女湯覗きも出来ぬ状況に、夜な夜な何度涙にくれたことか…』

「全然同情出来る話じゃねーんだけど……」

「でもこれで不思議な噂の正体が分かったわね」

愛歌の言う通り、祭具殿にまつわる不思議な噂の正体はこの劉安だったようである。
恐らく鈴の音もこの老人の仕業であろう。

「じゃあ、さっき扉を閉めたのも……」

『ワシじゃ。
せっかく中に入ってきてくれたのに、ワシを見つけずに帰ってしまわぬようにな』

「はぁ……」

シレッと当たり前のように言う劉安に駿は肩を落として大きくため息をつく。

「じゃあもう良いだろ？
早く開けてくれよ」

『まだじゃ。
この中にある探し物が見つかったら開けてやる。
だから一緒に探せ小僧』

「アンタ何様ですか！？」

『仙人』

「……」

あっけらかんと言い放つ劉安にワナワナと拳を震わせる駿。

「まぁまぁ。
良いじゃない駿君。この中はそんなに広い訳じゃないから、そんなに時間はかからないと思うわ」

「いや、俺が心配なのは……」
愛歌の言葉に駿は何か別の事を考えていたのか、それを伝えようとするが遮るように劉安が二人の間に割り込んできた。

『おおー！！
流石美人なお嬢さんは言うことが違うわい！！
小僧、貴様も見習わんか！！』

「いや、もういい……
突っ込むの疲れた……」

いくら突っ込んでも右から左。
フワフワと能天気に浮かぶこの老人には何を言っても無駄なのだと諦めた駿だった。

「じーさん。
探し物って一体何だよ？」

『なんじゃ？
言って無かったか？』

「ああ、聞いてない。
つーかんな昔から隠してたもん残ってるのか？」

『問題ない。
９年前にワシがこの祭具殿の中にあるどこかの棚に移したまでは覚えておるからの』

劉安は楽観的な様子で上に上がっり下がったりしてみせた。
そんな老人に愛歌が話を戻すために尋ねる。

「それで、探し物というのは？」

「うむ。
探し物というのは“春画”じゃァァァァ！！」

春画とは……
簡単に言えば江戸時代のエロ本、エロ画である。

バキッ！！

「辞世の句は詠めたか？」

『ぐふっ……
もうツッコミはしないんじゃなかったのかの……』

あまりにもくだらない事だったので、取り敢えず駿が一発殴っておいた。

「あのなぁ、どこが命より大切な宝なんだよ!?」

『宝じゃ!!
確かに現代のエロ本は最高で素晴らしいが、
アレはワシの淡い淡い青春時代の思い出なんじゃ!!』

「アンタその時代はもう死んでんだろうが!!」

必死に叫ぶ劉安に呆れたように詰め寄る駿。

『そういう小僧だって男であろう!!そういう物は青春の、今の貴様の思い出であろう!!』

「いや、そういう問題じゃ…」

意味不明な事を駿に向かって熱弁する老人もとい仙人。

「駿君はよく畳の下に隠してるわよね♪」

「はい…って何でそんな事知ってるんですか愛歌さん!?」

そして馬鹿正直に答えてしまう馬鹿(しゅん)

『とにかく!!

そのどこかの棚にある一枚の春画を探せば入口を開ける。
だから手伝いを頼むぞい！！』

「「……」」

劉安は言うだけ言うと、顔を見合わせる二人から更に奥の方にある祭具積もりに飛んでいってしまった。

仕方がないので、二人も棚を片っ端から探すことにする。

「しかし、噂の正体が本当に幽霊だったなんて……」

「本当ね～」

二人は所狭しと並んだ祭具から棚を探しては中を開けては調べていく。

暫くして、数ある置物の中でも一際大きな置物があるスペース、つまり祭具殿の一番奥にきた。

周りの置物や道具はどれも駿の身長かそれ以上あり、一体何に使うのかは全くの疑問である。

「ふぅ……」

他の棚を探す為に祭具から一旦離れて、息をつく駿。

「ごめんなさいね」

「え？」

駿が祭具の積まれた場所を探しているとき、後ろで愛歌が彼に声をかけた。

「私が祭具殿に行くなんて言ったばかりに、こんな事に巻き込ませちゃって」

どうやら、彼女は疲れたように息をつく駿をみて少し申し訳なく感じたのだろう。

「いえ、むしろ良かったってホッとしてますよ」

「え？」

しかし彼は首を横に振ってそんな言葉を口にする。

「もし愛歌さん一人でここに来ていたら、それこそ一人で閉じ込められて本当に大変な事になってましたから。
それを考えるとゾッとしますよ。だから、一緒に来て良かったって……」

「……」

そう。彼がついた息は疲れでは無く安堵を表すものだったのだ。
その言葉にキョトンとした表情で彼を見つめる愛歌。
彼女にしては珍しい反応かもしれない。

「それに愛歌さん、身体はそんなに強くないですから、それも心配で。この辺は埃っぽくないですよね？大丈夫ですか？」

「……」

普通こんな状況に巻き込まれた時、本気で他人の心配を出来る人はどれくらいいるだろうか？
人間だったらまずは自分の事や自分の心配を考えるだろう。

だが、彼の目には自分の心配とかそんな考えは微塵も映っていないようで、その表情からも本気で彼女の心配をしているのが分かる。

「……」

「あの、愛歌さん？」
「え？」

駿の心配そうな声をかけられて、彼女はようやく我に返った。

「えっと……
どうかしたんですか？」

「あ、ちょっと考え事を。
駿君ってやっぱり変な子だなぁって」

「え……
すみません、変なのは……まぁ自覚はしていますけど……」

頬に手を当ててクスリと微笑んだ彼女の言葉に不思議そうに首を傾げる駿。

『見つかったァーーーっ！！！』

間が良いのか悪いのか、奥の入口付近から元気の良い劉安の叫び声が駿の言葉を遮り室内に響き渡った。

『見つかったぞ！！
ここに隠した一枚の春画がようやく見つかったわい！！』

「「……」」

ぴょんぴょんと跳び跳ねながら二人の前までくる劉安。
その手には丸まった紙が一つ。

「それは……良かったな。
取り敢えず出口を開けてくれないか、じーさん」

『ホッホッ、仕方がないの。
ほ～れ』

劉安は嬉々として指を鳴らすと、入口の扉の方でガチャリと鍵の空く音がする。

『さて、こうしてはおれん。
各地に散らばったワシの青春の思い出を集めなければ……』

「……因みに、その散らばったソレはいくつあるんだ？」

『５０枚じゃ。

これで残りは４９枚じゃな』

「「……」」

全国各地に散らばった５０もの春画を集めるというのである。
この老人は。

「全国に５０枚って……
願いを叶える七つの玉を集めるより難しそうだな」

全くその通りである。
そもそも現代にしっかりと現存しているのかすら怪しい。
しかしこの老人にはそんな事を言っても無駄な気がする。

『そういえば名前を聞いていないの……
可憐で麗しいお嬢さんのお名前は？』

「霞愛歌です」

『愛歌ちゃんか～
いや～、名前もとってもキュートで可愛らしいの～』

「ふふ、ありがとうございます」

劉安はかなり嬉しそうに浮かぶと上下してみせる。

「俺は鷺ノ宮駿」

『小僧は黙っておれ！！』

「何でだよ！？」

男の自己紹介はどうでも良いようである。

『さてと、では行くとするか』

劉安はそう言って二人より高く天井の方に上がっていく。

『愛歌ちゃんにおまけの小僧。
またの～』

「「……」」

そして天井から手を振ると、あっという間にすり抜けて消えてしまったのだった。

「何だったんすかね……アレ」

「ほんとにね～」

暫く天井を見上げていた二人だったが、劉安曰く入口も開いたことだし早くこの祭具殿から出ようと扉に向かうことにする。

ガチャ……

「ほほう、ここが秘密の祭具殿か」

「何かお化けとか出そうだね美希ちゃん」

駿達が扉の近くにいこうとした時、聞き慣れた声と同時に外側から扉が開いたのだ。
そして……

「「「え？」」」

「あ……」

祭具殿を覗き込むように現れた三人娘と駿達がバッタリと鉢合わせる形となった。

普通に考えてみよう。
もし三人娘の立場だったらと考えて……

ここは人が滅多に来ない祭具殿。その中に一組の男女。
しかも密室

とくれば……

「「「な、ななな！！
駿君が愛歌さんを連れ込んだーーーっ！？」」」

とまぁ、当然こんな誤解にたどり着くわけである。

「いや、お前らの誤解もこの状況だといた仕方がない事だとは思う。
だけどこれは……」

「まさか二人がそんな関係だったとは！？」

「これは一面トップの大ニュースだぞ！！」

三人娘は駿の言葉が届いていないようでひたすら騒ぎたてる。
しかも美希の手にはハンディカムが……

「あ～、聞いてないな。
愛歌さん、事情の説明をお願いします」

「ええ、良いわよ」

駿が何を言っても無駄そうなので愛歌に頼むことにした。

「愛歌さん！！
これは一体どういう事なんですか！？」

理沙がマイクを突き出して、美希はハンディカムで映してジャーナリストのように尋ねる。

「実は……」

「「「実は？」」」

グッと身を乗り出す三人娘。

「駿君がいきなり抱きついてきて、そのまま半ば強引に祭具殿に連れ込まれたのよ」
→
悪ノリ

「そうそう……
って、違うでしょ！？
どさくさに紛れて何言ってんですか！！！」

三人娘の質問に悪ノリして答える愛歌。
しかも今の発言はしっかりとハンディカムに収められちゃってたり
……

「ほう……
駿君が無理矢理……」

「なるほど、狼になったわけだな」

「スキャンダルだね～」

悪ノリなのか本気なのかよく分からない調子で騒ぐ三人娘。

「いやいやいや！！
違うからねコレは！？
ちょっ、愛歌さんもちゃんと説明して……ってもう居ない！？」

隣を見るとそこに愛歌の姿は無く、彼女はもう前方にゆっくりと歩き始めていた。

「ちょっと愛歌さん！？
ちゃんと三人に説明していって下さいよーー！！」

「大丈夫よ
人の噂も７５日っていうから♪」

慌てて後を追う駿とすまし顔で前を歩く愛歌。
何だか見ていて面白い。

「いや、そもそも誤解って…
ちょっ、愛歌さん!?」

その後、彼が三人娘の誤解を解くのはかなりの苦労を用した。
最後は結局愛歌が事情を説明して収まったそうだが……

○

「はぁ……何か凄く疲れた」

愛歌や三人娘と別れた駿はため息をつきながら次の目的地に向かって歩いていた。

その目的地とは……
神社に出現した謎のゲームセンターである。

（千桜がいるかもしれないし、取り敢えず寄ってみるか……）

そんな訳で彼は本殿付近に向かって足を進めるのだった

其の十七　祭具殿の奇妙な噂にはご用心（後書き）

初詣編はあと二回くらい続くことになりました。
まさか愛歌さんの選択肢でこんなに時間が取られるとは（笑）

今回出てきたエロ仙人は意外と出てきたりします。
一応伏線ありです。

次回もよろしくお願いします

其の十八　ゲームセンターでの人付き合いにご用心（前書き）

千桜
「どうも。
今回の前書き担当の春風千桜です。えっと、今回のお話は」

泉
「駿君とちーちゃんがラブラブな話で～す♪」

千桜
「違うだろ！！／／／／
何をいきなり……」

理沙
「しかし、千桜君も彼のどこに惹かれたのか気になるな」

千桜
「だから……！！」

美希
「時折見せるカッコイイ場面か？はたまた一目惚れとか？」

泉
「や～ん♪
ロマンチックだね♪」

理沙

「恋は人を成長させるからな、
ドンドン恋をしろよ少年少々達よ！！」

千桜
「／／／」

カチッ！！↑何かのスイッチ

三人娘
「え？」

チュドーン！！！

千桜
「では、始まります！！／／／」

其の十八　ゲームセンターでの人付き合いにご用心

「ここは本当に神社か……？」

愛歌達と別れた駿は、先程参拝した本殿前の大きな広場に戻ってきていた。
まだまだ参拝客の列は途切れる事無く続いている。
そしてその広大な広場の一角に、神聖な神社とはかけ離れた雰囲気を放つスペースが……

（ホント何を考えたら神社にゲーセンを作るんだよ……）

朝風神社特設のゲームセンターである。駿は呆れたような表情でその大きなスペースに向かって歩いていく。

（ん……？）

駿はそのゲームセンターの入口に注意を向けた。
そこなはかなり身長が大きな男が二人、着物を着た女の子一人を囲んでいた。
二人はムキムキの筋肉に肌の色が黒くサングラスに角刈りヘッド、革ジャンをビリビリに破いて羽織っていて貴金属もじゃらじゃらと着けていてかなりの強面である。

（オイオイまた面倒な事に……
でも放っておく訳にもいかないし……
仕方ねぇ、助けに……ん？）

駿は頭を掻きながら男二人の所に足を向けるのだが、何かに気付いたように目を見開いた。

（って、千桜！？）

そう。その着物の女性とは千桜の事だったのだ。
彼女は物凄く厳つい二人の男に迫られているようだ。

（あいつら！！）

駿は千桜だと分かるや否や駆け出していた。

どんな事になっているかは分からないがとにかく彼女を一刻も早く助けないといけない、そう早る気持ちが不安を煽る。
迫られているのか、脅されているのか、言い寄られているのか。

そうこう考えているウチに、駿は千桜と男達がいるすぐ側までやって来た。
そして聞こえてくる千桜と男達の会話を耳にしようと彼は間に足を踏み出して……

「もぉや～だ～
ホントよっちゃんはおっちょこちょいなんだから～」

「ごめ～ん♪
でもありがとうね、お嬢ちゃんのお陰で助かったわ」

「いえ、大した事では」

ずざざざぁーーーっ！！

盛大に転けて、そのまま地面に滑り込んだ。

「あ、駿君」

「「？」」

その様子に千桜は彼に気付いて、男二人も振り返った。

「よ、よぉ……
何やってんだ千桜」

取り敢えず考えていたのと全然違うような状況だとは分かって、駿は顔を上げて尋ねる。

「この人達に道を尋ねられたから暫くここ周辺の地理を説明していたんだ」

「ホントに助かったわ♪
私達、東京にまだ慣れてなくて～」

男の一人が両手を頬に当てて内股でくねくねとぶりッ子のような仕

草をする。
もう一人も『ねー♪』とか言いながらクネる。
物凄い厳ついなりでメチャクチャ不気味だ。
というか……

（この二人はあっち側の人か！！）

それは衝撃の真実。
このギャングのような格好の二人はオカマだったのである。

（人は見かけによらねぇって本当だったんだな……
まぁ、千桜が何とも無かったみたいだから良かった）

駿はそう思いながら『あ、そうだったのか』と若干ひきつった作り笑いをして千桜の側に寄っていった。

「駿君は何でここに？」

「ああいや、まぁ気分かな」

彼女の問いに駿は適当な理由を口にする。
オカマ達も目の前にいるのに、流石に絡まれていると思ったからとは口に出せない。

「あら、この坊やはお嬢ちゃんのお友達？
カワイイわね～♪」

「ええ、そうですけど…」

オカマの一人がそんな事を尋ねてきたので駿は恐る恐る答える。

「や～ん♪
ホントにカワイイ～♪」

「やだ～
ホントにタイプって感じ～♪」

超厳ついオカマ二人が駿を見て色めきたち始める。
彼からしてみればゾッとするような地獄絵図だが。

「あ、もしかしてお嬢ちゃんと坊やはコレ、なのかな？」

そう言ってオカマの一人がニヤリと笑って小指を立ててみせると…

「いや、ｔ」

「違います！！
ぜ、全然そんなのとかではありませんから！！」

駿が話す前に千桜が慌てたようにその言葉を否定した。
彼女の頬はかなり赤らんでいたが、駿はそれに気付いていないようで……

（いや、まぁそうなんだけど……そんな全力で否定されると……
何か落ち込むな……）

駿は内心勝手に落ち込んでいた。まぁモテない男の性である。

（黙れナレーション！！）

しかしオカマ二人は顔や体格は超厳つい癖に、その言葉を聞くと乙女チックなオーラを出して駿を見下ろして笑いかけてくる。
メチャクチャ怖い。

「ねぇ、坊や♪
実は私達、今日は乙女二人で寂しく回る所だったのよ～」

「そうなの～♪」

二人の言葉に駿と千桜は青ざめて顔を見合わる。

（乙女!?
今この人達“乙女”って言った気がしたんだけど!!）

（確かに言ったよ駿君
明らかに乙女って言い切ったよ）

（無理無理無理!!
俺には出来ねぇよ!?
お世辞でもこの二人に“乙女”なんて口に出して言う事は!!）

（私もちょっと……）

そんな二人の心の会話とは裏腹に、物凄く不気味な笑みを浮かべて駿に迫るオカマ二人。
逃げ場は無い。

「だ・か・ら♪
坊や、今日のお祭り私達と一緒に回りましょう?」

（絶対嫌です！！！）

心中で断言する駿。
でも声には出せない。

「ねぇ？
良いでしょう？女二人じゃ寂しいのよ～」

（女じゃねーだろ！！）

「大丈夫よ♪
最初は優しく教えてあげるから♪」

（何をだァァァァ！！？）

駿の肩に手を置いて恐ろしい言葉を吐く化物二名。
しかも肩に置かれた手の力が尋常じゃないくらい強い。
筋肉の塊のような体格は伊達では無いようである。

「坊やには恋人いないんでしょう？」

「いや、いませんけど…」

「だったら良いじゃない！！
お正月の思い出にね♪」

（一生もんのトラウマになりますから！！！）

有無を言わせず駿を引きずっていこうとするオカマ達。

このままでは大変な事に……

「あの……！！」

「「？」」

すると、千桜がそんなオカマ達に声をかけた。

二人はゆっくりと振り返る。

「その、意見も聞かないで無理矢理連れて行くのは良くないと思います……」

「あら、坊やは嬉しそうよ？」

（何処が！？）

千桜は二人に向かってそう言うが、駿を掴んでいるオカマはそんな言葉を返す。

その言葉に駿はギョッとしたように目を見開くのだが。

「それに……

彼は私と回る予定すから」

「千桜……

（俺の為にわざわざそんな嘘を……）」

二人に向かってそう言い切った千桜。

駿は自分を助ける為に嘘をついてくれた事に感動したように千桜の方を見る。

勿論捕まったまま。

「ふっ……
その言葉を待っていたわお嬢ちゃん」

「「？」」

すると厳ついオカマは口元を緩めて微笑すると、振り返って千桜に向けて指を突き付ける。

「他人から奪ってでも証明させるのが真の愛！！本物の愛！！
最高の愛！！
だから、今から私達は貴方に勝負を申し込むわ！！」

オカマ二人には荒波が岩に叩きつけられんばかりの勢いがオーラとして溢れていた。

「勝負、ですか？」

「そうよ。
今からこのゲームセンターでタッグシューティングゲームのトーナメントが行なわれるわ」

オカマの一人が大きなゲームセンター内部の中央に向かって指を差す。

「そこで……
貴方と坊や、私達二人はタッグを組んでその大会に出場する。
そしてどちらのペアがより上に行けたかで勝負を決める。
例えば、貴方達のペアが準決勝にいって、私達が準々決勝止まりな

ら貴方達の勝ち、という風にね」

「……それで、勝敗がついた場合は？」

千桜が尋ねるとオカマ二人はニヤリと口元を歪めて駿を見た。

「私達が勝った場合はこの坊やを頂くわ！！」

「！？」

「ただし、お嬢ちゃんが勝った場合は坊やは貴方の元に残る。
それでどう？」

「……」

彼女は暫く考えるように黙っている…
それは自分の一存で勝手に話を進めていいのかという駿への気遣いであった。

「その沈黙、受けないって事かしら？
残念ねぇ、中々見込みがあると思っていたけど……
挑まれた試合（ゲーム）を放棄するとは……
貴方の魂（おもい）はその程度なのね……」

「……！！」

あからさまにため息をつくオカマにカチンっと彼女の中のゲーマー魂が反応した。

「良いでしょう。その勝負、受けて立ちます」

「ふっ……
それでこそ真の愛（ラヴ）」

彼女の言葉にオカマ達は微笑してみせた。

「おい千桜……」

「大丈夫よ駿君。
あなたは、私が守るから
（綾波〇イ風）」

（既にスイッチが入ってる！！
俺はアレか！？ポ〇トロンライフルの準備とかするのか！？）

不安そうに声をかける駿だが、千桜の意思は既に堅いようだった。

こうして、駿を巡る超厳つい化物二人対千桜の戦いが幕を開けたのだった！！

（って、何か色々ともぅメチャクチャだよなコレ……）

面白そうなのでツッコミ所は敢えてスルーでいくナレーションなのであった。

（仕事しろよ！！）

其の十八　ゲームセンターでの人付き合いにはご用心

「イェーイ！！
乗ってるかい皆！！」

ゲームセンター中央に響き渡るノリの良い司会の声。

「本日はここ、朝風神社にてタッグシューティング大会が行なわれるぜぃぇ！！
神社なのにシューティングトーナメントだぜ！！神社なのに！！」

声を張り上げる司会の後ろではボードに映し出されたトーナメント表があった。
そこには駿・千桜ペアが一番右端、オカマペアが一番左端にある。

「当たるとしたら決勝ですね」

「あ、あぁ、そうだな」

テンションＭＡＸの司会の後ろのトーナメント表を見ながら、何だかんだでノリノリの千桜と若干戸惑っている駿。

「絶対にあの二人には勝ちましょう」

「まぁ、負けたら俺は二度と地球の大地を踏めなくなるかもしれないからな」

あのオカマ二人に拉致されれば恐らく駿に明日は無いだろう。

「あ、そうだ」

「？」

彼は何かを思い出したように呟くと千桜の方に顔を向ける。

「さっきは助けてくれてありがとな（ホント色んな意味で死ぬかと思ったから）」

駿は安堵からかニッコリと笑ってお礼をいった。

「ま、まだ油断は出来ないから負けないように集中を」

「そうだな」

千桜は照れたように顔を反らしてそう言った。

駿も頷いて司会の方に視線を向ける。

司会者は一通り挨拶を終えたようでマイクを高らかに掲げてテンションは最高潮のようだ。

「それじゃあ開始の掛け声をするぜェーー！！
その前に何度も言わせて貰うけどここは神社だぜ？
そこんとこはお忘れなく！！
じゃあ行くかァ！！
タッグシューティングトーナメントＩＮ朝風神社！！
Ｈｅｒｅ　ｗｅ　ｇｏーー！！」

その掛け声と共に、大会が開始された。

○

ゲーム大会とは言え、そもそも神社の催し物レベルなのでそんなとんでもないプロの方がいるわけも無く、皆そこそこ下手ながらエキサイトしていった。

そんな中、駿と千桜は順調に勝ち進んでいった。
千桜は勿論だが駿も上手く（一応ゲーム好きだから）、二人のコンビネーションもかなり良かった。

しかし、オカマペアはその超厳つい様相に似合わずかなりのコンビ

ネーションと銃捌きで勝ち進んでいったようで、
頭一つ飛び抜けているこのニペアが遂に決勝で当たる事になってしまった。

「イェア！！
遂に最終対決、決勝戦だぜぃ！！
なに？展開が早すぎるって？
そんなものは気にするな！！
大人の都合なんだよ察しろコノヤロー！！
って事で、決勝進出の二組は前に出て握手しやがれー！！」

司会は言葉に駿・千桜とオカマ二人は筐体の前、決勝の舞台で向かい合う。

「ふっ……
やはりお嬢ちゃんとは決勝で当たる運命のようね」

「ここまで来た事は誉めてあげるわよん。
ただ、お嬢ちゃん達のその幸運もここまでね」

オカマ二人は握手をした後、駿達に向かってそう言い放った。
しかし改めて思うが言葉遣いと格好のインパクトが恐ろしいほど合っていない。

まぁ、そんな事はさておき。
決勝戦が開始される。
決勝は先にオカマペアの先攻で、より高いスコアを出した方が勝ちという至ってシンプルなルールである。

「ではまずは先攻のペアから行ってみましょう！！」

司会の高らかな声と共にオカマペアが筐体に立った。

・・・・・

ワアーーーッ！！！

「おおっとこれは凄い！！
先攻のかなり強面のお兄さんペアは」

「失礼ね！！
可憐なお姉さんペアと言えよゴルアっ！！」

「コイツは失礼！
可憐な（？）お姉さん（？？？）ペアはこの大会中最高のスコアを叩き出したぜぇ！！」

司会の言葉通りオカマ達のスコアは本日最高の数字となっていた。

オカマ達が悠々と観客スペースに戻っていくのと同時に今度は千桜達が筐体に向かっていく。
その途中で、お互いに向かい合う形になった。

「どうお嬢ちゃん？
サレンダーするなら今のうちよ。恥をかきたく無かったらね」

オカマの一人がゴツい体格で二人を見下ろすが……

「そちらこそ、あまり私達を侮らない方がいいですよ」

「ま、そういうこった」

二人はそう返して筐体に向かっていく。

（ふっ……
“私達”ね……
見せて貰おうじゃないの！！
貴方達の輪舞を！！）

注）ここは神社です

「では、後攻ペアに行って貰いましょう！！
先攻のスコアを超えれば優勝！！
超えられなければ準優勝！！
この差はデカイぜ！！
ではスタートの掛け声をいってみよう！！」

司会の声を聞きながら二人は銃を片手に持って顔を見合わせる。

「駿君！！」

「ああ、分かってらぁ！！」

ガチャ……！！

「「奇跡はここからだ！！」」

本当にノリの良い奴らである。

・・・・・・

「オイオイオイ！！！
コイツは大変な事になってきたぜナウ！！
なんと後攻ペアのスコアが先攻ペアのスコアと寸分違わぬ同じスコアだ！！」

オオーーーッ！！

なんと、千桜達とオカマ達のスコアが下一桁の位まで同じ数字になったのだ。

「しかし困った！！
予備のステージは予算の都合上用意されてないそうだ！！
全く想定外だなどうするこりゃ！！って事で、取り敢えず両ペア前へ！！」

言われた通り司会者の前に集まる二組。

「これは結果は引き分けということで……」

「「ちょっと待って！」」

「「？」」

オカマ二人が司会者の言葉を止めて口を開いた。

「この勝負は、お嬢ちゃん達の勝ちよ」

「「え？」」

「おう？どういう事だい？」

司会者は勿論千桜達も首を傾げる中、オカマが先程使われていた筐体の前までいってスコア表情画面を起動する。

すると……

ボードに映し出されたのは、

第一位　チハル・シュン

第二位　ビューティフルガールズ第三位

・

・　・

・　・　・

「「！？」」

一位にランキングされているのは何と千桜達のペアだった。
そして二位にはオカマ達のペア名が確かに映っていた。

「これは一体？」

「これはタイムアップと同時にお嬢ちゃんが撃った弾が敵のゾンビの弱点を直撃して追加されたスコアボーナス。
恐らくタイムアップ時には動作の関係で表示されなかったのね」

オカマの一人はそう言って千桜達の元に戻ってくる。

「司会者さん、そういう訳で優勝はこの二人という事で良いわね？」

「ああ、オーケー！！！
それじゃあ優勝は、この二人のペアだ！！
皆、盛大な拍手をーーーッ！！！」

ワアーーーッ！！！

鳴り響く歓声。
朝風神社、大繁盛である。

こうして、千桜と駿は見事に優勝する事が出来た訳だが……

「あの、待って下さい！」

「「？」」

大会も終了し、立ち去っていく二人に千桜は駆け寄っていって声をかけて止めたのだ。
駿はというとちょっと用があるといって一旦千桜と別れていた。

「どうしてあんな事を？
言わなければわからなかった筈なのに」

「……見せて貰らったわ。
貴方達のコンビネーション。
素晴らしかったわ。こんなペアになら、勝ちを譲ってもいい。
そう思ったからよ」

二人はやたらハードボイルドに笑みを浮かべると千桜に向かってグッと親指をたててみせる。

「久々にいい試合だったわ」
「ありがとう！」

「いえ、こちらこそ」

そして、ゲーマー同士同じ戦いを繰り広げた後に生まれる友情のようなものか、三人は握手を交わした。

「後はお嬢ちゃんの戦いね」

「え？」

「もぅ決まってるじゃない！！
あの坊やを落とす事よ～」

「は！？／／／」

先程までのハードボイルドっぷりは何処へやら、急に二人は身体をクネらせてガールズトーク体制に入る。

「ち、違いますよ！！
私は別に、そんな」

いきなりそんな事を言ったのに対し、千桜は顔を真っ赤にして否定する。

「隠さなくたって分かるわよ、
同じ乙女なんですもの♪」

「いや、だから……」

「大丈夫よ！！
お嬢ちゃんなら可愛いから、坊やを絶対落とせるわ！
や～ん、青春ねぇ～」

二人は千桜の話を聞かずに会話だけは乙女な様子で盛り上がる。
因みにこの二人は乙女では無い。それだけは断じて認める訳にはい

かない。

「まずは甘えてみる事よね♪
スキンシップとか」

「たまには髪型を変えたりしてアプローチするとか」

「だから、違いますってば！！」

因みに周りの人々は女子のように騒ぐ二人を見て１ｍは距離をおいていた。

「あ、いたいた！」

そんなやり取りをしていると、いつの間に戻ったのか駿が駆け寄ってきた。

「おやおや、それじゃあ邪魔者は退散するとしますかね～」

「お嬢ちゃん、頑張ってね♪」

二人はニヤニヤしながら駿を見ると、グッと親指をたてて千桜達に背を向けた。

「頑張る？
何をだ？」

「何でも無い！！」

状況がさっぱり呑み込めていない駿はハテナと首を傾げる。
千桜が赤くなっているのもまた謎である。

あ、そうだ！
お二人の名前は何ていうんですか？」

彼女は話を反らせるかのように去ろうとする二人に尋ねる。

「ああ、そういえば自己紹介がまだだったわね。
私は勝英」

「私は勝頼よ♪
じゃあね、お二人さん♪」

（（うわぁ……
やっぱ男の名前だ……））

去っていく筋肉隆々背中を見ながら、二人は改めて世の中の不思議を思い知るのだった。

○

そんな訳で無事にゲーセンから出た二人は本殿の近くに戻ってきていた。

千桜はこの後、愛歌を探すというので駿も咲夜がまだ帰って無かったら理由を聞くために彼女を探そうと、二人はここで別れることにした。

「じゃあ、私はこれで…」

「ちょっと待って……
はい、これ」

駿はそう言って引き留めると、彼女に何かの包みを渡した。

「え？」

「安物だから、気に入ってくれるかは分からないけど……」

それは綺麗な桜色のリボンだった。桜の花びらが生地にほんのりと薄く書かれている。

「私に？」

「ああ。
助けて貰ったお礼。
千桜がいなかったら、俺は今頃大変な事に……だから、さ」

その通り。確実に男としての尊厳を失っていただろう。
いや、元々無いか。

「いやあるよ！！
つーかさっきからナレーションに悪意が込もってませんか！？」

「……」

「って、千桜？
あ、悪い。気に入らなかったか？」

黙っている千桜の反応に不安を覚えたのか駿はそう尋ねるが…

「ううん、ちょっと驚いて……
とっても嬉しい♪
ありがとう、駿君」

彼女は首を振ると、本当に嬉しそうに微笑んでお礼をいった。

「そっか。
なら、良かった」

彼はその反応に安堵したように息をつく。

「あ、それじゃ
また後でな」

「うん」

駿はそう言って本殿の前を後にすると、沢山立ち並ぶ出店に向かって歩いていく。
千桜も桜色のリボンを大切そうに胸の前に抱くと、口元を緩めながら愛歌を探す為に歩き始めるのだった……

其の十八　ゲームセンターでの人付き合いにご用心（後書き）

伽藍
「うん。
何かもぅ色々と凄いですね…
千桜はもう完全にフラグっぽいですねコレ」

駿
「まさか～
全然そんな事無いｔ」

伽藍
「取り敢えず皆さん！！
伊澄ちゃんに言い付けましょう！」

駿
「すみません、勘弁して下さい！！」

其の十九　お正月の幼馴染みにはご用心（前書き）

ナギ
「今回の前書きを担当する、原作ではメインヒロインの三千院ナギだ」

咲夜
「って待たんかい！！
今までの流れだったら今回はウチが担当やろ！？」

ナギ
「いや、お前が担当したらこの小説が沈みそうだからな」

咲夜
「沈むかァァァ！！
沈んでたまるかァァァ！！」

ナギ
「まぁ、咲に担当させると不安要素がありまくりなので私が代わろうという話だ」

咲夜
「不安要素って何や！！
ウチの何処に不安があるっちゅーねん！！」

ナギ
「全部？」

咲夜
「どういう意味や！！」

マリア
「では、始まります♪」

ナギ・咲夜
（取られた……！？）

其の十九　お正月の幼馴染みにはご用心

神社本殿の広場の左側では出店が次々と郡を成して並んでいた。
お正月の風景というより、夏祭りといった方が合っているような気もする。

「ホントに大盛況だな……
さっきのゲーセンといい、ここといい……」

千桜と本殿前で別れた後、駿は咲夜を探してその出店周りの人でごった返している中を歩いていた。

「しかし、この人混みの中から見つけるってのはなぁ……」

彼は笑い合い行き交う人々や出店等を一通り見回すと、困ったように頭を掻いた。
この人混みから特定の一人を探し出すのは中々骨が折れそうだ。

（別に今すぐアイツに会わなくたっていいんだけど…
どうせ今暇だしな……）

確かに駿は今すぐ咲夜に会わなければならない訳ではないが、まだ集合まで時間もあり暇なのだ。
それに幼馴染みの彼女なら余計な気兼ねをしなくても良いだろうと探しているわけだが……

（う～ん……どうしたものか）

この盛況ぶりでこの人混み。

そう簡単に見つかる訳では無い。彼は暫く考えると……

（仕方ねぇ……

久々にあの方法でいくか）

周りを改めて見回して、すぅっと息を吸い込むと

「咲夜の恥ずかしい過去其の１～あれは俺がまだ１０歳の時、咲夜がａ」

スパーンっ！！！

「公衆の面前で何を口走るつもりや自分はーーーッ！！」

「くおぉぉぉ……」

大きく乾いた音に続いてそんなツッコミが響いた。

駿は頭を押さえて暫く地面にのたうち回る。

「ったく……」

いつの間にか、駿の後ろにはハリセンを持った咲夜の姿が。

「流石だな咲夜……

全く見えない距離にも関わらず音速のツッコミを入れるとは……」

駿は頭を擦りながらヨレヨレと立ち上がると彼女に向き直る。

「でもやっぱ痛いぞ」

「当たり前や！！
ホンマに自分はいきなり何口走ってんねん」

「だから、ガキの頃に咲夜が」

「言わんでええわ！！」

一通りコントのようなやり取りも済んで、咲夜はため息をついて駿を見つめた。

「んで？
自分の何のつもりだったん？」

「アレだよ。
この人混みから手っ取り早くお前を探そうと」

「何でウチを？
学校の人達と約束があったんやないの？」

「ああ、昼過ぎの集合までは暇なんだよ。
それよりお前に聞きたい事があったんだよ」

「聞きたい事？」

駿の言葉に咲夜は小首を傾げる。彼は頷くと口を理由を話そうと…

「あったんだけど……忘れた」

ズルゥ!!

「何でやねん!!
ホンマにアホか自分は!!」

「仕方ねーだろ!!
忘れちゃったんだから!!
お前が強く叩くから飛んじまったんだよ!」

「何でウチのせいになるんや!!」

どうやら駿はパソコンよろしく強く叩き過ぎて一旦フリーズしてしまったらしい。

「はぁ……
だったら何でウチを呼んだんや」

「叩かれるまでは覚えてたんだよ」

咲夜は呆れたように息をつくと、駿の隣に寄っていく。

「まぁええわ……
どうせ自分暇なんやろ?

だったら出店でも回らへん？」

「何も奢らねーぞ？」

「アホか！
そういう所で甲斐性を見せんでどうするんや。
だから自分はモテへんのやで」

「（ぐっ……！！否定出来ない）
でも今日は金はほとんど使わねーって決めてんだよ。
倹約も大切な事だろう？」

千桜にはプレゼントした癖に…

（黙れナレーション！！）

「ほほーう
でも、これを見てもそないな事が言えるかいな？」

「？」

すると、咲夜が肩にかけた鞄から一枚の写真を取り出してみせた。
そこには……

「な！？」

なんと、祭具殿に二人きりで入っていく駿と愛歌の姿が……

「な、おまっ！！

これどこで」

「いや～、散歩してたら偶々撮れてしまったんやけど……
これを伊澄さんが見たら何ていうか……」

写真を見た時の伊澄を想像して青ざめる駿。

「いやいやいや！？
別に何も無かったから！！
変なじーさんに絡まれた以外は何も無かったからねコレは！！」

「ほー、それはそれは」

あからさまに視線を反らす咲夜。

「それにこれは愛歌さんにも迷惑がかかるだろ！
俺だけならまだしも……」

「いやでも、さっき愛歌さんに許可を貰った……というか寧ろ、愛歌さんが駿に見せたら面白そうだって……」

（愛歌さーーーん！！！）

やはり駿に味方はいなかったようである。

「と、いうわけで。
一緒に回ろうな♪
奢りで♪」

「はぁ……」

彼の苦悩は続く……

其の十九　お正月の幼馴染みにはご用心

パコッ！！

軽快な音と共に棚に並んでいた人形の一つが地面に落下する。

「お！！当たった！！
当たったでおっちゃん！！」

「はは、上手じゃねーかお嬢ちゃん」

「やっぱり？
ウチ、何やらせても天才やねん」

ここは射的の出店。
咲夜が的の人形を当てると、正月なのに麦わら帽子を被った出店のおじさんが彼女を誉めた。

「んじゃ、可愛いお嬢ちゃんにはサービスだ」

「うわ～、ありがとうおっちゃん！！」

おじさんは愉快そうに笑うと咲夜にもう一つ景品をおまけしてくれた。

「へへ～
見てみ駿。おまけしてもろたで♪ウチが可愛いから？ウチが可愛いからおまけ」

「はいはい……
そこ強調し過ぎな」

咲夜両手に景品を持って楽しそうに駿に振り返る。
彼はそんな様子にため息をつきながら返す。

「何や自分。
せっかくウチが一緒に回ってるのにテンション低いな～」

「せっかくって……
お前と縁日なんてしょっちゅうじゃねーか」

毎年毎年、お祭りや縁日は二人で回る事がほとんどだ。
まず伊澄が速攻で迷子になり、執事達とワタルが次いで探しに向かってしまう。
ナギは元々引きこもりなので来ない結果、駿と咲夜の二人になる。
それはクリスマスパーティーの時等も同じであり、
何だかんだ言って二人は、特に小さい頃はしょっちゅう一緒だったのである。

「まぁせやけど……
こんな可愛い幼馴染みがついてるん、やっぱり嬉しいやろ？」

「はいはい、そうだな」

「気の無い返事やな～」

二人は服装こそ和服姿ではあるがいつも通りのやり取りで出店周りを歩いていく。

「お、お嬢ちゃん！！
りんご飴どうだい？
安くしとくよ！！」

「ホンマ！？
食べる食べる♪」

隣にあった駄菓子の出店から男の快活な声がかかってきて、咲夜はその出店に走ってゆく。

彼女は出店で楽しそうに会話を交わした後駿の元に戻って来た。
手には二つのりんご飴。

「お前、二つも買ったのか？」

「ううん、おまけでもろてきた。はい、自分にあげるわ」

「ああ、ありがとう……ってか、元々俺の金なんだけどな」

駿はそう言って咲夜から一つりんご飴を受け取る。
元々は彼のお金だがそこは気にしたら負けである。

「あの出店に知り合いでもいたのか？何か話してたみたいだけど…」

「ああ、それなぁ。
あの出店のおっちゃんが自分のこと彼氏だと勘違いしとって」

「彼氏？
誰の？」

「ウチの」

首を傾げる駿に彼女はちょっと躊躇いがちに口を開いた。

「ハハハ、それは無いやろって。だってウチと自分が恋人なんて…
……」

「何で無いんだ？」

笑ってそう言ってみせた咲夜を見て駿は尋ねた。

「……だって、なぁ？」

「何だよ？」

そのまま暫く固まる咲夜。
と言葉を待つ駿。

「……」

（何か言え……）

何だか気まずいような空気に、駿は困ったように待つ。

と、その時……

「あれ？
駿に咲夜じゃねーか」

「「？」」

グッドタイミングとばかりに、二人に声がかかってきた。
振り返ると、そこには何やらビニール袋を持ったワタルの姿が。

「ワタル
オメーも来てたのか」

「ああ、俺達も出店を出してるからな」

「へぇ、何の店なん？」

咲夜が尋ねるとワタルは『ついて来な』と手で仕草をして歩き出したので、二人はついていくことにした。

それでテイ○ズよろしくパッと出店前に場面は移動。

「作者もホンマにようサボるな」

「気にしたら負けだ。
つーか……」

咲夜にそう言って駿はワタルの出店に目を向ける。
そして一言

「何コレ？」

「ん？
ビデオショップ橘の出店だな」

ワタルの出店には棚に所狭しと並ぶＤＶＤの数々が……
どうやらレンタル用であるらしく、会員証の作り方の紙まで貼ってあった。

「俺はお前の店が心配になってきたぞ」

「え、何で？」

「ここは神社だよな？」

「ああ、そうだな」

「んで、これはレンタル屋？」

「ああ」

駿の言葉にコクリと頷くワタル。まぁそんな事は見れば分かるのだが。

「いや、もういい……好きに商売してくれ」

「？」

駿は突っ込むのが疲れたのか、ため息をつくとそう言って顔の前で手を振った。

因みに咲夜はいつの間にか向かいの店で金魚すくいをやってたりしている。

ってか正月に金魚すくい？ってツッコミは無しの方向で

「あ、駿さん。こんにちは」

「サキさん……やっぱ何の疑問も持たずにこの出店だしてますね」

今度は奥からサキが顔を出した。彼女もワタルと同じくこの出店には何の疑問も感じていないらしい。真面目で有能そうに見えるが実は超天然でドジだったりする人である。

「今日はお一人なですか？」

「いや、いつも通り駿は咲夜と一緒に回ってるよ、なぁ？」

サキが駿に尋ねたが代わりにワタルが答えてくれた。
駿は軽く頷くと向かいの店にいる咲夜の方に目をやる。

彼女は弾ける水に可愛らしく笑ったり店の人と楽しそうに話したりしている。
そんな様子を見て駿は息をつきながらも口元を緩めた。

「あの笑顔を見てると一緒に回るのも悪くないな……って顔してるな駿」

「ぶっ！？」

駿の表情を見てワタルはニヤニヤとそんな事を口に出した。
彼は不意を突かれたように思わず咳き込んでしまう。

「いや～、中々隅におけないな兄貴」

「馬鹿、んな訳あるか」

駿はそんなワタルの額を軽く小突くと、持っていたりんご飴の最後を口に運ぶ。

「オメーは店の心配でもしてろ。来年も赤字だぞ多分」

「不吉な事言うなぁーーッ！！」

レンタルビデオショップ橘の店長でもあるワタルは若干焦ったよう

な叫び声をあげた。
そりゃ自分の店の将来の事を言われるのは色々と怖いだろう。

「お～い駿！！
金魚すくいで勝負せえへん？
勝ったら今までの代チャラってのはどうや？」

向かいから咲夜が手を振って駿に声をかけてきた。

「ほぅ……
金魚すくいで俺に挑もうとはな
それがいかに愚かな事か教えてやろう」

「その代わり、負けたら倍な♪」

そんな会話を交わしながら駿はワタル達から離れて向かいの咲夜の所に。

「本当にあの二人は仲が良いですね～」

「ホントにな～
ってそうだサキ！！呑気に見守ってる場合じゃねぇ！！商売だ商売！！」

「あ、はい若！！」

二人は駿達を暫く眺めていたが、先程の言葉を気にしているのかワタルの一言で仕事モードに入るのだった。

○

「容赦無いなホント……」

「仕方ないやん♪
賭けに負けたんやから」

二人は出店の立ち並ぶエリアを出で、本殿の裏の方を歩いていた。
裏と言っても祭具殿があった方の裏では無く反対側の裏側である。

因みに金魚すくい対決は一匹差というかなり僅差で駿の負け。
なので後も散々出店回りに付き合った訳で……
まぁ、お祭りの出費などそんなに高くは無いのだが。

「そろそろ時間なんと違う？」

「ん、そうだな。
それじゃあ……」

二人は時間を確認すると、裏から本殿前の広場に戻ろうと……

「ん？」

「咲夜？」

不意に咲夜が足を止めた。
彼女の視線の先には木々が立ち並ぶ脇の道。
そこでは、小学生低学年くらいの男の子数人が何やら騒いでいた。
その真ん中には彼らと同じくらいかそれより小さな女の子が一人。
ただ、彼女は泣いていた……
それを囲うように笑う男の子達。誰がどう見ても間違いなくイジメだ。

（仕方ねぇ……止めさせ）

駿が動こうと足を踏み出したが、既に咲夜がそこに駆けていっていた。

「何してるんや自分ら！！
女の子イジメたりして！！」

彼女の声を聞いた男の子達は驚いたように目を丸くすると、一目散にその場から逃げ出していった。

「ったく……」

咲夜は逃げていく男の子達に呆れたような視線を送ると、座り込んで泣いている女の子の頭にそっと手を乗せた。

「もう大丈夫やで」

「ぐすん……ぐすっ」

彼女がそう言って頭を優しく撫でると、少し落ち着いたのか声をあげて泣く事は無くなったがまだ目にいっぱい涙が溜まっている。

「お母さん…ぐすっ」

「お母さん？
ああ、そうか……
迷子なんやな？」

「うん……ぐすっ
いっぱい人、いて……
お母さんいなくっ…ぐすん」

女の子はどうやらこの神社で母親とはぐれてしまったようである。
何となく事情が分かってきた咲夜に駿が駆け寄ってきた。

「どうした？」

「この娘、迷子みたいなんや。
この神社で母親とはぐれたみたいで……」

「迷子か……
この人混みだからな」

駿は困ったように本殿前の広場の方に顔を向ける。

「しゃーない、んじゃ片っ端から聞いてくしかねーな」

「え？でも自分集合の時間が」

「お前一人だけに押しつける訳にもいかねーだろ。取り敢えず俺がその娘を背負ってくから、眠ってるみたいだし」

咲夜が女の子の方に目を戻すと、泣き疲れたのか女の子は心地よさそうに咲夜にもたれて眠ってしまっていた。

本当は女の子に直接聞けば早いが、すやすやと眠っている彼女を起こすのは可哀想だ。

「せやな。だったら早いトコ探してあげんと」

咲夜は女の子を起こさないように抱くと、駿の背中に預ける。という事で、二人は迷子の女の子の母親探しを開始した。

「お前はホントに変わんねーな」

「？」

本殿前の広場まで向かう途中で、女の子を背負った駿がそんな事を言った。

「昔からさ、ナギが怖がったりワタルがからかわれたりしてたら真っ先に助けにいってたもんな」

「仕方ないやろ、自分を除いて一番年上やったんやから」

因みに伊澄に近寄る男の子がいた場合は駿が徹底的に殲滅……いや

いや、追い払っていた。

（コイツの場合、さっきイジメの相手が高校生の男達でも止めに入るからな……
そう考えると危ねーけど…）

「駿？」

（それがコイツの良い所だからな……）

駿はそう考えると思わず口元を緩めていた。

「何や？
似合わん表情なんてして」

（いつも一言多いけどな……）

本殿前に出たはいいが、生憎とかなりの混雑でこの中から無闇に探そうとすればまず間違いなく日が暮れるであろう。

「さて、どうしたものか」

「この神社の事務室に行けば良いんと違う？
きっと母親も娘が迷子になった事は分かってる筈やし」

「それもそうだな。

行ってみるか」

果たして咲夜の考えは的中した。二人が事務室に向かうと、入口前の建物の前で困ったようにウロウロしている女性を見つけた。彼女は背中にいる女の子を見ると名前を呼んですぐに駆け寄ってきた。

駿が安堵したように女の子を降ろすと、彼女も目が覚めたようで母親の胸に飛び込んでいった。

「一件落着だな」

「うん、良かった」

女性は何度も何度も二人にお礼を言って頭を下げた。
余程心配だったのだろう、その様子を見て咲夜達は心より見つかって良かったと改めて思う。

「お姉ちゃん、お兄ちゃんありがとう！」

「もう迷子になったらいかんよ？」

「うん！」

女の子は咲夜達の元に駆けてくるとちょこんとお辞儀をしてお礼を言った。
咲夜は彼女の頭を優しく撫でて微笑んでみせる。

母親と女の子はもう一度お礼を言うと、二人から離れて広場に戻っ

ていった。

「ウチらも戻ろうか」

「だな」

親子の姿が見えなくなるまで見送ると、二人も広場に戻ることに。
ちょうど集合時間になろうとしている頃合いだ。

「しかし、何つーか……
たった一日に変な人達にいっぱいあったな」

「そうなん？」

「ああ。今年は波乱の一年になりそうだよ」

駿の頭を過ったのはあのエロ仙人やついオカマ達。

「大丈夫やって。
これまでもろくな年は無かったやん。だから今年もいつも通りって考えれば」

「それって俺の人生全否定ですよね！？」

彼女の言葉は辛辣だが中々的を射た意見であった。

「いや、どこも的なんて射てねーよ！！」

そんなこんなで二人が広場前に差し掛かった時だった……

「わ！？」

ゴツゴツとした不安定な岩の地面だったのか咲夜が足を引っかけて体制を崩してしまう。

「危ない！！」

「！？」

下は堅い地面だったので、駿は咄嗟に彼女が転ばないように手を掴んで自分の元に引き寄せた。

結果、彼女は転倒せずに済んだが駿は咲夜を抱き寄せる形となってしまった。

「おい大丈夫……、！？」

「……」

駿が無事かどうか確認しようとすると、目の前には咲夜の顔。
お互いかなり近い距離に…
更に彼女の身体はしっかりと抱き寄せられているので胸などが駿の身体に思いきり当たっていた。
柔らかいその感触や咲夜の温もりには駿に伝わる……

「……／／／」

「……／／／」

この状況はどうしたものか。

あまりに突然の密着に、お互い何も言えずに動けもせずただ赤くなって固まる。

しかも周りには何やらフワフワとした空気が……

「あ、いたいた！！
おーい駿！！」

「わあ！？／／／」

「へ！？」

そんな中、突然聞こえてきた声に咲夜は慌てて駿を突飛ばした。

またもグッドタイミングで声をかけて来たのはワタルであった。

「ここにいたのか……
って、何で咲夜は顔が赤いんだ？」

「何でも無いわ！！／／／」

「はあ……
それに何で駿は倒れてんだ？」

「何でも無ぇよ……」

二人のよく分からない様子にワタルは首を傾げながらも、倒れている駿に目を向ける。

「まあ、いっか……
取り敢えず駿、生徒会役員の三人が探してたぞ」

「あ、ああ……
分かったよ」

駿はゆっくりと起き上がると頭を掻きながらため息をつく。

「んじゃ、俺は行くな。
えっと……」

「うん……
あ、付き合ってくれてありがとな」

「ああ、それじゃあ」

どこか気恥ずかしそうな咲夜に駿はそう言うと、やや急ぎ足で広場に向かっていった。

「……で？
何かあったのか？」

「だから無いわ！！／／／」

（って事は何かあったな……）

咲夜の様子にそう確信するワタルであった。

○

お昼に再び集まった生徒会メンバー

「いや～、まさかヒナがあんな事になるなんてな～」

「良い絵が撮れたな♪」

「たがら消しなさいって言ってるでしょ！！／／／」

美希と理沙が嬉々として騒ぎヒナギクが顔を赤くして怒っている。
何があったのだろうか？

「あれ、ちーちゃん？
そのリボン可愛いね♪
どこで買ったの？」

「いや、これは……！！／／／」

泉は千桜がいつもの黒いリボンから桜色のリボンに変えている事に気付いていた。

「クマ、お前どこに行ってたんだ？」

「最初は会長と一緒にいたみたいだけど、途中からは私と一緒にいたわよ、ね♪」

悪熊は嬉しそうにコクコクと頷くと駿の肩にちょこんと乗っかる。

「あ、それはそれは……
この馬鹿熊が迷惑をかけまして」

「ー！！」

彼がそう言うと怒ったように可愛いく頭突きを始める悪熊。

「ってか愛歌さん、あの後あの変なじーさん見ました？」

「いいえ、見てないわ」

「また出てくるんですかね」

「どうかしらね～」

出来れば関わりたく無いなぁと思う駿。

「待ちなさーーいッ！！」

「「ヒナが怒ったーー！！」」

いつの間にか追いかけっこを始めているヒナギクと美希、理沙。

駿は周りの皆を見回して、
今年も何だかんだで平和な一年になりますようにと願うのだった…
……

其の十九　お正月の幼馴染みにはご用心（後書き）

～三人娘の～
懺悔コーナー

美希
「はい、懺悔コーナーの時間がやって来ました。
今回懺悔をするのは勿論この人！！」

泉
「主人公の駿君で～す♪」

駿
「ええ！？俺！？」

美希
「当たり前よ。
駿君、貴方はこの小説をハーレム小説にする気？」

理沙
「愛歌さんは密室に連れ込み、
千桜君の好感度を上げまくったり、咲夜君を無理矢理抱き寄せたり
…」

駿
「待て待て待て！！

どれもこれも語弊がある言い方しかしてねぇじゃねーか！！
最早悪意を感じるぞ！！」

美希
「では、早速前回の読者様達からの報告と共に、一連の駿君の行動を伊澄君に伝えよう。今」

駿
「いやいやいや！？
ちょっ、待っ……！！」

泉
「って事で鷺ノ宮伊澄ちゃんでーす♪」

伊澄
「久しぶりの登場ですね……」

理沙
「実はな伊澄君……
今回斯々然々で……」

駿が止める間もなく理沙が伊澄に説明中……

伊澄
「お・に・い・さ・ま？」

駿
「違っ！！ちょっと待って伊澄！！

これは誤解だから、ホントに誤解……」

伊澄
「愛歌さんや千桜さんに迷惑をかけて、咲夜にまで手を出すなんて……」

駿
「いや違っ！！
理沙テメー！！何を言ったァァァァ！！」

理沙
「いや～、私は事実をありのままに伝えただけで」

伊澄
「ちょっとお話しましょうか、お兄様♪」

駿
「い、いや……」

駿は札で拘束されると、笑顔の伊澄に有無を言わせずに連行されていった。

美希
「って事で、次回は遂にＩＦ編に突入だ！！」

理沙
「２章の前にまず二つのＩＦ編を入れたいと思う。残りのＩＦ案は

2章以降きりがいいときにちょくちょくいれていくつもりだ」

泉

「ではでは、またね～♪」

目に見えなくても伝わる想い　前編（翼×愛歌）（前書き）

今回からＩＦ編です！
七つ案を頂きましたので、本編の区切りの良い所で一つの案ずつ
れていきたいと思います。

案の順番は

月光閃火様
←
エターナル様
←
灘様
←
００１様
←
カタコンベ様
←
桐生様
←
暁楓様

この順番でいきたいと思います。

【ＩＦ編にあたっての諸注意】

・本編とは一切関係がありません・設定の変更はかなりあります
・ＩＦ編内ではキャラ崩壊が多々あるかもしれません
・本編とは世界観が異なる場合があります

記念すべき最初のＩＦ編は
月光閃火様のリクエストで
“翼×愛歌で二人が相思相愛”
というＩＦです。

今回の話に当たって本編中と設定が違う所がありますのでまずはしっかりと以下の変更点を読んで下さい。

【今回の話の変更点】

・翼と愛歌は幼馴染み

これは本編では二人に接点が無いためこの案限定での設定にしました。

・駿と翼も幼馴染み
以下同文

・愛歌の許嫁を勝手に捏造
原作でも全く分からないので勝手に作りました。

以上の点をご了承して下さい。

本編で二人がくっつくなんて事はまず無いです。なのでかなり作るのが難しかった。
一応前半と後半に分けました。

では……
本編とは全く異なった世界、ＩＦの世界、始まります！

目に見えなくても伝わる想い　前編（翼×愛歌）

「ふぅ……」

夕方の生徒会室……

俺、鷹ノ瀬翼はテーブルに頬杖をつきながら息をついた。

授業も終わって放課後となり、俺達は生徒会の仕事をしていた。

俺は生徒会では副会長をやっている。

本日の仕事は書類の間違いや誤植の点検、確認だけだが量があるとこれまた中々疲れるのだ。

ようやく一区切りついて一面が橙色に染まった空に視線を向ける。

「それじゃあ……

私は先に」

すると……

他のメンバーもいつも通り仕事をしている中、一人の女子生徒が立ち上がった。

彼女の名前は霞愛歌。

生徒会の副会長で霞家のご令嬢である。

「あ、もう時間ね。

お疲れさま」

「「「お疲れさまでした」」」立ち上がった彼女に気付いて、会長の机に座っていた桂ヒナギクが声をかけた。
それに続いて会計の鷺ノ宮駿、書記の春風千桜、役員の三人娘が挨拶をする。
彼女は本日は用事があって生徒会の仕事を早退することになっていたのだ。

「あ、愛歌さん。
俺が家まで送っていこうか？」

「翼君……」

俺は同じように立ち上がると彼女にそう声をかけた。
彼女は一瞬嬉しそうに笑顔になったがすぐに残念そうに顔を伏せてしまう。

「ごめんなさい……
迎えには“あの人”が来ているから……」

「ああ……
そうなんだ」

あの人……
愛歌さんの許嫁だ……
俺は出来るだけ表情を表に出さないように頷いた。

「……だったら、正門まで送っていくよ」

「ありがとう」

俺の言葉にニッコリと笑顔で返してくれる。
俺はすぐに彼女の側までいくと、彼女と一緒に並んで生徒会室を後にした。

俺が生徒会を出た後に……

「いや～、青春だなぁオイ」

「「「ね～♪」」」

等という駿と女子メンバーの声が聞こえてきたが、この際それは無視しよう。

俺と愛歌さんは時計塔を出で広い白皇の敷地内を歩いていく。

「ごめんなさいね、わざわざ正門まで送ってもらうなんて」

「いや、これくらいは……」

俺は大袈裟に顔の前で手を振ってみせた。
昔だったら家まで送っていたんだけどな……

そうこうするウチに俺達は正門前に到着した。
正門の向こう側には長い長いリムジンが停車している。

その車の前には白いスーツを着た男が立っていた。

「やぁやぁ！」

男は俺達に気付くとやたら甲高い声を上げて正門に近づいてきた。
身長は俺より小さく細身の体格。黒髪は綺麗いに7：3に分けられていて、ムースでべったりと固められているようだ。
釣り上がった細目と日焼けもしていた白い肌はいかにも温室育ちを思わせる。

「あ、藤嵜さん……」

「ハハ、迎えに来たよ愛歌」

男は馴れ馴れしく名前を呼ぶと愛歌さんに近付いてしつこい笑みを浮かべた。

彼は藤嵜秀（ふじさきすぐる）という男。年齢は２６、７ぐらいだったか……
彼女の許嫁で藤嵜財閥の御曹司である。やたら馴れ馴れしのはその為だ。

「あぁ、そちらは鷹ノ瀬君か。
僕の愛歌を送ってくれたんだね。わざわざありがとう」

「あ、いえ……」

彼は“僕の”と“わざわざ”を強調して俺に話かけてくる。
セリフとは裏腹に声色が冷たい。俺が邪魔だと暗に、いやあからさまに示している証拠だ。

確かに自分の許嫁に他の男が一緒にいたら面白くは無いだろう。
しかしそれはあくまで“普通ならば”の場合だ。

目の前の男は違う。
この男は愛歌さんとは昔から許嫁ではあったが、彼女が小さい頃は見向きもしなかった。
どころか一度だって会いにきた事は無い。
彼女が成長し高校生になった頃から、途端に態度を変えて近付いてきたのだ。
まるで昔からの知り合いのように馴れ馴れしく……

「じゃあ、後は僕が愛歌を送っていくよ。
さぁ、行こうか」

「あ……」

藤嵜はそう言って愛歌さんの手を引いて行く。
彼女は申し訳なさそうに俺を振り返ったが、俺は『大丈夫』と作り笑いをしてみせた。

（戻るか……）

リムジンが去ってゆくのを暫く黙って見ていたが、ため息をつくと俺は時計塔に足を戻し始めた。

「ふぅ……
ただいま……」

「「「おかえり～♪」」」

俺が生徒会室に戻ると駿と三人娘がニヤニヤしながら出迎えてくれた。

「どうした？
切なそうな顔して？」

「別に、何でもねーよ」

駿が立ち上がって俺に近付いてくる。気を付けていたけど顔に憂鬱そうな表情が出ていたか……

「まぁまぁ駿君。
恋は人を苦しめる言わば病だからな。翼君は今恋愛という名の不治の病に苦しんでいるのさ」

「やーん♪
ロマンチックだねリサちん♪」

「へぇ……
そんなもんなのか……」

理沙達の言葉に駿は“なるほど～”と頷いて俺に顔を戻した。

「んでお前、えっと……
苦しんでんの？」

バキッ！！

俺は取り敢えず駿の頭を殴っておいた。

「痛ぇーな！？
何すんだよ！？」

「いや、何かムカついたから」

「んな理不尽な理由で殴るなよ！！」

本当は気恥ずかしさを隠す為に殴っておいたが、それはまぁ言わなくて良いだろう。

「照れない照れない翼君♪」

「照れてねーよ」

したり顔で頷く美希に俺は精一杯のポーカーフェイスで返す。

「もうダメよ貴方達。
そうやって人を冷やかしたら」

すると、俺の隣にヒナギクが歩いてきて三人娘＋駿に注意をする。
流石は生徒会長。やっぱり人間が出来て……

「頑張ってね翼君♪
幼馴染みの愛歌さんとの仲、応援してるからね♪」

「ってお前も楽しんでるのかよっ！！」

ヒナギクもニッコリ微笑むとそんな事を言い始める。
女ってのは本当にこういう話が好きだな……

俺はため息をつくと、テーブルに歩いていって席に着いた。

この際だ。
別に隠す必要も無いだろう。
俺は愛歌さんが……好きだ。

それは、まぁ認めよう。

彼女とは小さい頃から一緒、いわゆる幼馴染みだ。
霞家と鷹ノ瀬家はかなり仲が良く一人娘の愛歌さんとはしょっちゅう遊んでいた。
彼女は生まれつき身体が弱かったから俺はよく家まで送ったり買い物に付き添ったりもしていた。
歳を重ねてもそれは変わらず、
寧ろ一緒にいる頻度も増えていった。買い物、登下校、家、旅行なんかも……

勿論昔から“好き”だったけど多分その頃から恋愛感情の“好き”になっていたのだろう……

んで、何故その事が生徒会メンバーにバレたのか。
それは……簡単に言うと自爆だ。三ヶ月前、俺にしつこく告白してくる女子生徒がいて、そのいざこざを生徒会室に持ち込んできたんだ。生徒会室に愛歌さんはいなかったから良かったけど……
そん時にまぁ、口を滑らせて……自爆した。

結果……先述したような状況となってしまった訳だ。
生徒会はほとんど女子だから盛り上がりはかなりのものだ……

盛り上がると言っても皆本気で応援してくれたり背中を押してくれたりしてくれるのは分かる。
それは嬉しいんだけどやはり結構恥ずかしいだ……

「お〜い？
大丈夫か？」

ドカッ！！

突然駿が俺の視界に顔を覗かせてきたので、おもむろに彼を殴っておいた。

「だから何で殴るんだよ！？」

「いや、いきなりお前の顔が見えたから。
いきなり出てくるなよ」

「心配してるんだろ！？」

駿は俺がボーッとしているのを心配して覗き込んだらしい。
まぁ、駿たから良いか。

「良くねーよ！！」

「心を読むな」

俺は手元にあった書類を自分の前に引き寄せる。
まだまだ仕事が残ってるから、早いとこ片付けてしまわねぇと。

仕事をしながら苦笑する千桜、仕事をサボろうとする三人娘を捕まえるヒナギク、伊澄ちゃんの心配をしている駿……

俺はいつも通りのメンバーの中、いつも通りのやり取り、いつも通りの雰囲気でいつも通り仕事を始めるのだった……

そんなある日……
放課後の生徒会で、愛歌さんが突然ともいえる言葉を口にした。

“海外に転校する”と……

「「ええ!?」」

当然メンバーは驚愕の声をあげるが俺は驚きはしなかった。
それは事前に、正確には三日前に彼女の許嫁である藤嵜から電話で聞かされたのだ。
電話越しの彼の声はかなり優越感に満ちていて、正直かなり頭にもきたがただ黙って聞くことしか出来なかった。
藤嵜財閥はかなりのお金持ちだが、何より医療関係に特出して優れ

たグループなのだ。
本家には最新の医療設備を揃えた施設がいくらもあり、彼に嫁げば愛歌さんの治療も最新のものを完璧に受けられるといった話まである……

身体が弱い彼女が最新の医療を受けられるのなら、彼女が少しでも楽になるならば、その婚姻は仕方ない事だと思う。
所詮一人の学生が何を言ったて無駄な事なのだ。
それが彼女にとっての幸せであるのだから……

「出発はいつなんですか！？」

千桜やヒナギク、三人娘はただ驚きを隠せないように愛歌さんの周りに集まっている。

「明日……
夕方の便で発つわ」

「「「明日……」」」

信じられないように顔を見合わせる生徒会メンバー。

しかし駿は驚いた様子も無ければ席からも立ってはいなかった。
時々彼女達の様子に目を向けはするが、基本的にノートパソコンに向かって何かを調べているようである。

アイツは既に知っていたのか。
少し気にはなった。

「そんな顔しないで皆。
一生の別れって訳じゃないんだから。こっちにはちょくちょく帰って来れるし、ね？」

「「「……」」」

家が決めた事。
それに対して自分達がどう騒いでもどうしようもない事くらいは彼女達も分かっているようだった。やりきれない、そんな表情で押し黙る……

彼女はまだ荷造りがあるらしく、“明日の朝また最後にここに寄る”と言って生徒会室を後に帰っていった。
出口に向かう途中、俺と目が合ったが俺はただ会釈をしてすぐに反らしてしまった。

俺も、皆と同じだ。
事実は知っていたがどうする事も出来ない。
ただ、黙って見送るしか……

○

「……んん」

眩しい……

頭もぼんやりする……

生徒会室にはいつの間にか橙色の光が強く差し込んでいて、

俺を照らしていた。

どうやら俺は眠ってしまっていたらしい……

「……」

周りを見回すが生徒会メンバーは誰もいなかった。

皆はきっと俺が愛歌さんが海外に行くと聞いてショックを受けたとでも思ったのだろう。

だからこっそりと帰っていったのではないか。

そんな気遣いは、今の俺にはありがたかった。

何となく、一人になりた……

「……」

いや、一人いた。

一人生徒会室に残っていた。

「……居たのか」

「ん？

おお、起きたんか」

それは相変わらずノートパソコンとにらめっこしている駿だった。
彼は一体先程から何を一生懸命に調べているのか。
だが、俺には先に聞いておきたい事があった。

「お前、愛歌さんの話知ってたのか？」

「ああ、知ってたよ。
正確にいえば昨日聞いたんだけどな、咲夜に」

そうか。そういえばコイツは愛沢家のご令嬢とも幼馴染みだとかいってたな。
愛沢家は霞家と仲が良いから、そこからの繋がりで聞いたのか。
どちらにしても、俺の聞きたい事はそれだけだ。

「……」

俺は無言で鞄を掴むと席から立ち上がった。

「帰るのか？」

「ああ……」

駿はパソコンから顔を上げずにそう聞いてきたので、俺は帰るという事を返した。
今は一人になりたい。

「一つ聞いていいか？」

「なんだよ」

出口に向かおうとする俺にキーボードを打ちながら尋ねてくる。

「お前、本当にあの藤嵜家の御曹司に愛歌さんが嫁ぐ事が、彼女にとっての幸せだと思ってんのか？」

「！？」

ドキリとする。

まるで心の中まで見透かされているような……そんな言葉だった。

コイツは昔からそうだ。

いつもの様子からは想像出来ないが、いざという時はまるで人の心を読んでいるかのような意見を口にする。

「……どういう意味だ」

「別に。まんまの意味だけどな」

俺は辛うじてそう返すと、駿はようやく顔を上げて俺を見据えてくる。

その瞳は、まるで何でも分かっているかのようにどこまでも俺を見透かしているようだ……

「……ああ。

そう思ってるよ」

「……」

その視線に我慢出来なくなった俺は、そう言い捨てて生徒会室を後にした。

だけどそれは嘘では無い。

それは、きっと彼女の幸せだ。

俺なんかと居るより……ずっと……

「……っ」

拳を握りしめながら、俺はエレベーターに乗った……

＊

「はぁ……」

駿は翼が出ていったのを見届けると、ゆっくりとため息をついた。

「ありゃ、重症だな……」

困ったようにそう呟く。

（どこまでも不器用な奴……
いつもの真っ直ぐさが変な所で発揮されてやがる……言い換えりゃ、ただの頑固だな）

彼はポケットから携帯を取り出して電話をかける。

ガチャ……

電話はすぐに繋がった。

「ああ、美希か。
さっき言ってた事でちょっと調べて欲しいことがある。
……そうだ。後はヒナギク達にも伝えといてくれ。ああ。んじゃ」

一通り用件を伝えると、駿は携帯を切ってポケットにしまう。

（後は、アイツだけだな……）

彼は立ち上がるとゆっくりと伸びをして、ノートパソコンを閉じたのだった……

目に見えなくても伝わる想い　前編（翼×愛歌）（後書き）

次回！

このまま彼女は本当に行ってしまうのか！？
翼は一体どう動く！？

生徒会メンバーも結構活躍！？

目に見えなくても伝わる想い　後編（翼×愛歌）（前書き）

翼君と愛歌さんのキャラ崩壊に注意です！

翼君は熱く、愛歌さんは何だか乙女チックになってる気がします。

それでは、後編です！

目に見えなくても伝わる想い　後編（翼×愛歌）

目に見えなくても伝わる想い
後編

愛歌さんが海外に行ってしまうという日……

午後になって彼女は予告通り白皇に最後の挨拶に来た。
もれなく許嫁の藤嵜も横についてきていた。

「やぁやぁ！
君達が愛歌がお世話になっている生徒会の人達か
僕は藤嵜。知っての通り、今を栄える藤嵜財閥の御曹司さ」

癇に障る甲高い声が生徒会室に響き渡る。
ヒナギク達は口々に挨拶を返してしたが、俺と駿は彼に対しては何

も言わなかった。

「ああ、そういえば鷹ノ瀬君も生徒会役員だったねぇ」

白々しい。

何を今更言うのだろうか。

俺は出来るだけポーカーフェイスで会釈する。

駿に至っては最早顔も上げずにノートパソコンと向き合っていた。

「本当はもう少し別れの挨拶をさせてあげたいが、何分時間が無くてねぇ。

そろそろ行かなくては」

藤嵜はあからさまな様子でそう言って腕時計を見る仕草をする。

「愛歌さん、どうかお元気で」

「ええ、皆も元気でね」

ヒナギク達は愛歌さんの側に集まっていって最後の挨拶を交わしている。

だが、俺は彼女達の様子にふと違和感を感じた。

昨日の今日、ヒナギク達にはあまりに突然の出来事の筈なのにやけに理解が良いのだ。

納得のいかないという表情には誰一人なっていない。

「駿君も元気でね。

咲夜さんや伊澄さんにもよろしく」

「ええ」

駿も立ち上がって軽く会釈を返した。
そして愛歌さんは最後に俺の方に顔を向ける。当然、俺と視線がぶつかった。

「……」

「……」

何とは言いづらい沈黙。
俺はその雰囲気が堪らなく嫌で、次の瞬間、口を開いていた。

「良かった……ですね。
これで身体の方も安心ですし。
少し寂しくなりますけど、これが愛歌さんにとっての幸せですから」

「……そう、ね」

俺の言葉に愛歌さんは一瞬とても悲しそうな表情になったが、すぐに微笑むと……

「翼君も元気でね」

そう言って笑ってくれた。

ズキリと心に大きな傷が走ったのが自分でも分かる。
だが、俺にはこれ以上どうしようも無かった……

○

「翼、ちょっと校舎裏まで顔貸せ」

愛歌さんが藤嵜と共に行ってしまい、ヒナギク達も見送りの為に出ていったらしく生徒会室に駿と二人だけになったとき、彼は俺にそう言ってきた。

「なんだよ？」

「いいから」

駿はそれだけ言うと、先に生徒会室から出ていってしまう。なんだろう。カツアゲでもされるんだろうか。

仕方がないので俺もそれについていく事にした。

数分で新校舎の裏に到着。

「金ならねーぞ」

「カツアゲなんてしねぇよ！！」

カツアゲでは無いらしい。

じゃあなんだ……もしや告白か？それは大変困るな。
傷つけないように断らなくては

「悪い。
俺にはそっかの趣味は無いんだ」

「何の話だよ！？」

「いや告白かと思って」

「んなわけあるかァ！！」

違うのか。
それは良かった

「そうじゃ無くて、愛歌さんの事だよ」

「……」

ズキリ……
また痛む胸。触れられたくないものを覗かれているような、そんな感じ。

「いいのか？
このままで」

「……それには昨日答えたろ」

二度目。
一体何のつもりで聞いているんだコイツは。

「本当にお前はそう思うのか？
あの藤嵜財閥のボンボンについて行って愛歌さんが幸せになれると思って……」

「だからそうだって言ってんだろ！！！」

いつの間にか俺は怒鳴っていた。心の中にあったモヤモヤが何か一気に弾けたように、何だかもう止まらなくなっていく……

「あの藤嵜財閥との婚姻はずっと昔から決まってた事だし、財力もあって最新の医療設備の施設だって幾つも持っている！！
愛歌さんの将来を考えたらそっちの方が良いに決まってる！！！
俺なんかといるより、ずっと幸せ決まってるじゃないか！！！」

「……」

どのくらい大声を出したか分からない。一気に怒鳴ったので息を切らして肩も上下しながら駿を睨み付ける。

駿は暫く俺を見つめていたが…

「くくっ……あっはっはっは！！」

「……」

いきなり大きく笑い始めた。
何が何だか分からない。
何でコイツは笑ってるんだ？

「何がおかしいんだ？」

俺は若干苛ついたように尋ねると、駿は一通り笑った後俺に視線を戻した。

「いや、安心したんだよ。
やっぱりお前未練たらたらじゃねーか」

「……！？」

今度は心臓を抉られたような感覚を覚えた。
何だって……こんな……

「表情（かお）見りゃ分かるよ」

そう言って口元を緩めると、壁に寄りかかる。

「お前はまだ諦められてなんかねーよ。ちっともそんな気は無いんだよ」

「俺は……」

俺は何か反論しようと言葉を探すが何も思い浮かばない。
駿はそれが分かっているのか続ける。

「愛歌さんといる時のお前はいつもとっても生き生きしてるし、幸せそうだ。
それは愛歌さんも同じだよ」

「え……？」

愛歌さんも……？
まさか、そんな……

「んなもん火を見るより明らかだっての……
俺と話してる時だって愛歌さん、お前の話ばっかりしてんだ。
それに、お前といる時が一番愛歌さんらしい表情してるよ」

「……それは、お前の憶測だろ」

辛うじて返せた言葉がこれだ。
我ながら情けない。

「あ～ぁ……
愛歌さんも可哀想にな。
こんな鈍感野郎が相手で……」

「……」

駿は大袈裟にため息をつくと、壁から離れて俺に向かい合った。

「そうやって逃げるわけか？」

「……！？」

ただ……
また胸がズキリと痛む。

「彼女の気持ちから逃げて、自分と向き合う事からも逃げて……
それでお前はどこに行くんだ？」

「……」

分かってるさ……
だけど、俺には……

「別に逃げるって決めてんなもう何も言わねーよ。
でも、ここで逃げたら……
お前は一生後悔するぞ」

「……それはっ」

そうだ……
分かってる、多分一生後悔する。

「確かに将来の事は大切だよ。
でもお前が考えるべき事は、将来の彼女の事を考えるでもその為に
自分が我慢しなくっちゃならない事なんかじゃ無い」

「……？」

その言葉に俺は反らしてしまった視線を思わず戻す。

「“今どうしたいか”
それだけを考えろ。
後先の事は、それから何とでもなるさ」

「……！」

“今どうしたいか”
それを聞いて心底俺は思った。
本当に俺は馬鹿だったと……

俺はまだ何もしていないじゃないか。どうなったって、どんな結果が待っていたって、伝えなきゃいけない言葉が……
想いがあるじゃねぇか……！！

「……」

俺はいつの間にか拳を固く固く握りしめていた。
手の平からは血が伝う感触…
決意の証だ……

「駿……
俺は……愛歌さんを追いかける」

「……ああ」

今から追いつくかは分からない。でも、動かない訳にはいかなかった。

「ほらよっ」

「？」

そう言って、駿は俺に何かを放り投げた。
キャッチして見ると、それは大型バイクの鍵（キー）だった。

「正門の前に止めてある。
使いたきゃ使え」

「……駿」

なるほどな……
俺はまんまとコイツに乗せられたってわけか……

「済まねぇ！！」

「翼」

俺が正門に駆けていこうとすると、駿が呼び止めた。

「胸張って行けよ。
オメーの持ち味は馬鹿みたいに真っ直ぐな剣（こころ）だろ？」

俺はその言葉に僅かに口元を緩めて返すと、正門に向かって全力で駆け出した。

○

「……ふぅ」

翼の姿が見えなくなったのを確認すると駿はため息をついた。

「中々良かったわよ、駿君♪」

「うん、格好良かったな」

ため息をついて呟く彼の後ろからヒナギクや千桜達生徒会メンバーが現れた。

「こういうのはあんまし柄じゃねぇんだけどな」

駿はそれを分かっていたのか、肩を竦めてみせた。

「でもセリフは寒かったな」

「聞いててちょっと恥ずかしかったよね～」

「せっかくシリアスな雰囲気なんだからそういう事言わないでくんない！？」

理沙と泉の言葉に駿はいつも通りの様子に戻る。

そんな感じで新校舎裏に集まってくる生徒会メンバー。

「まぁいいや……

美希、頼んでだ藤嵜グループのやつは調べてくれたか？」

駿が隣に来た美希に顔を向けた。

「貴方ね……

頼まれたのは昨日の夕方よ？」

「終わって無いのか？」

駿がそう聞くと、彼女はピッと彼の前に書類の束を出した。

「政治家の娘。
調べるのは得意よ」

「助かる」

駿はそれを受け取ってパラパラと速読して納得したように頷く。

「ヒナギク、千桜。
学校の許可は？」

「バッチリ取ってあるわよ」

「ああ、問題無いよ」

今度は駿が二人に尋ねると、二人はニッコリと微笑んで返す。

「泉、理沙。
インターネットの方は？」

「バッチリだよ♪」

「ふっ、私達は白皇最高の動画研究部だからな」

泉と理沙も微笑むと駿に向かって頷いてみせた。

そんなメンバーの様子を確認すると、駿は頭を掻きながら空を見上げた。

「んじゃ……
白皇学院生徒会（おれたち）も行きますか」

＊

『～～便は何時の到着の予定でしたが、乱気流の影響で到着が遅れていて……』

空港のゲート前。
待機場所のベンチに霞愛歌は座っていた。

（はぁ……）

彼女は一人で沢山あるロビーの椅子の一つに腰を下ろしている。
彼女は本家で色々と準備があるという藤嵜を待っているのだ。

彼とあまり一緒にいたくない彼女は先に空港で待つことにした。

この空港のこのスペースは藤嵜家が貸し切りで使っており、この場所には愛歌一人きりである。

奥にある入口やその他の通路には藤嵜家の執事達が待機しているらしい……

憂鬱な表情の愛歌。

彼女の頭の中に浮かんで来るのはヒナギク達生徒会メンバーにお世話になった人々……

そして翼だった……

（ダメね……

もう振り切ったと思ったのに…

やっぱり後悔してる……）

彼女は首を振って目を閉じる。

（結局……

想いを伝える出来なかったけど、これで良いのよね……

私なんかが居たら翼君の迷惑になるから……）

すると、後ろから聞こえてくる足音。藤嵜が来たのだろうか。

「愛歌さん！！！」

（え……？）

しかし、それは聞こえる筈の無い声だった。
愛歌が振り返ると、そこには鷹ノ瀬翼が立っていた。

○

「愛歌さん！！！」

俺は力の限り叫んだ。
間に合って良かったという安堵感とこれからの話の緊張感にきつく拳を握りしめる。

廊下にいた執事は隠れてすり抜け、入口にいた執事達は強引に気絶させてこのスペースに入って来たのだ。

「！？」

愛歌さんが驚いたように俺に振り返った。
俺は彼女の方だけを見つめて息を整える。

「翼君……
どうして……」

「まだ、伝えなきゃいけない事があったんで……」

信じられないような表情をしている愛歌さんに俺はしっかりと向き合う。

「……俺はずっと逃げてました。自分の気持ちから」

「……」

「言ってしまえば何が壊れてしまうかもしれない……
そう思い続けるうちに、いつの間にか自分の想いを心の奥底に封印してしまっていたんです……」

そう。俺はずっと思い込んでいた、いや思い込まされていたんだ……

「でも決めました。
もう、逃げる事も目を反らす事もしません」

「……」

僅かに揺れる彼女の瞳。
俺はすっと息を吸い込む。

「行かないで下さい」

「……！」

「俺は……」

ずっとこの想いを伝えたかった。出会って、一緒に笑って、帰って、

遊んで、時には喧嘩もして……その時からずっと……

断られたっていい、拒絶されても構わない。

ただ、貴方に伝えたい言葉がある

「俺は……

鷹ノ瀬翼は、霞愛歌の事が好きです！！

この世界中の誰よりも…！！」

言い切った……

と同時に俺は思わず目を閉じてしまった。

しかし……

「？」

俺の胸に何かが飛び込んできた。目を開けるとそれは涙目になった愛歌さんだった。

「……！！」

「私も……

私も、ずっと貴方の事が好きでした……」

目には見えなくても……

上手く言葉には出来なくても…

伝わる想いがある。
それはどんなものよりも儚くて、そしてどんなものよりも大切で……

「愛歌さんっ……！！」

「翼君……！！」

俺は彼女を抱きしめた。
伝わるのは彼女の温かさ、優しさ……
しかし同時に彼女は、とても儚く触れれば壊れてしまいそうなくらい脆かった……

「ごめんなさい……」

「……」

「でも貴方とは居られないわ」

分かっている。
彼女には許嫁がいる。
圧倒的な財力があり、影響力があって……
でも……！！

「私が貴方の所にいったらきっと迷惑がかかる。
だから……」

「でも、愛歌さん。
俺は……」

俺がそう言いかけた時だった……

「その心配はありませんよ」

「「！？」」

いきなりかかってきた声に、俺達は慌てて離れて後ろを振り返る。

「「皆！？」」

そこにいたのは、生徒会メンバーだった。
真ん中にいる駿が一歩前に出てくる。

「たった今、藤嵜秀と霞愛歌さんの婚約は破棄されましたから」

「「え！？」」

破棄！？どういう事だ！？

「千桜、説明頼む」

「うん」

駿が隣にいる千桜にそう言うと、彼女は何やら書類がまとめて束になっているものを取り出して俺達の前に差し出した。

「これは藤嵜グループの過去の帳簿です。

上手く誤魔化して修正してありますが、最初に出た帳簿と照らし合わせると明らかに収入と支出に誤差があります」

「つまり不正。
横領や使い込みがあったというわけ。それもここ１０年間ずっとね」

美希はそう言って分かりやすくまとめてくれた。

「一体どうして、こんな事が…」

「政治家の娘だから。
上手く取り計らって修正される前の帳簿を手に入れたの」

それはとんでもなく凄いことなのではないか。
っていう法律的に大丈夫なのか？

「んで、その報告はインターネットを通じてさっきあっという間にマスコミに知れ渡った。
今、トップニュースで報道されてるよ」

千桜の言葉に理沙と泉がブイサインを作ってみせる。
まさか、お前らなのか……
確かに動画サイトは匿名に出来るから分からないが……

「因みに、あの藤嵜財閥のボンボンが使い込みの主犯だ。
間違いなく書類送検で、ムショ行きだな。
藤嵜財閥自体も終りだろうから、当然婚約も解消って訳」

最後に駿がそう言って締めくくる。俺と愛歌さんはあまりの展開に

あっけらかんと顔を見合わせる。

「ああ、因みに空港にいたボディーガード達は全部気絶させておいたから。
ヒナギクが」

「貴方もやってたでしょ！？」

「いやいや、お前の怪人顔負けの戦闘ぶりに比べたら俺なんか」

「誰が怪人よ！！／／／」

なるほど……
本当にやってしまったらしい。

「愛歌さんの家にはちーちゃんが連絡をしておいてくれたから、これで万事解決だね」

「ああ、そうだな」

そう言って盛り上がる生徒会メンバー。

「「皆……」」

俺と愛歌さんは思わず同時に声をだしてしまった。

本当に俺はこんな仲間達をもてた事が誇らしく、嬉しくて胸がいっぱいだ……

「まぁ、それよりお二人さん。
いつまでくっついてるおつもりで？」

「「！？／／／」」

ニヤニヤとそう言った駿に俺達は慌てて離れた。

「い、いや……！！／／／
これは」

「／／／」

俺は駿達に事情を説明しようとするが……

「まぁ、あんなに大胆に告白してたもんね～」

「ねー♪
恥ずかしくて出ていくタイミング難しかったよね／／／」

「本当ね～♪」

どうやら全て見られてしまったようである。

「愛歌さん、今回は私達が弱点を握りましたね♪」

「本当だ」

「あぅ……／／／」

珍しいな……

千桜や駿が愛歌さんより優位に立つなんて……

「ま、じゃあ後はお熱い二人だけで話すこともあるでしょうから。俺達はドロンさせて頂くとしますかね」

「ええ♪
話はまた明日聞かせてもらいましょうか♪」

「動画研究部の素晴らしいネタにもなりそうだな」

駿達は笑いながら別れを告げると、皆で空港のロビーを後にしていった。

「何だか前途多難になりそうだな……」

「本当ね」

そんな仲間達を見送りながら、俺と愛歌さんは顔を見合わせてクスクスと笑い合った。

「じゃあ、もう一度返事を聞かせてくれないか？」

「ええ」

俺は愛歌さんと改めて向き合って見つめ合う。

「俺は愛歌さんの事が好きです。付き合って、頂けませんか？」

「はい／／／
よろしくお願いします、翼君／／／」

どちらからともなく、俺達は抱きしめ合った。
そして、ゆっくりと唇を重ね合わせる……

この先……
どんな事があってもこの人を護ろうと……
俺はこの日、胸に誓った……

八年後……

どこかの教会である二人の恋人が結婚式を挙げた。
それは長い長い交際を経てのようやく辿り着いた場所で……

小さな教会だったが、
恥ずかしそうな新郎と新婦はとても幸せそうで、とてもお似合いだったという。

「おめでとう二人とも♪」

「おめでとうございます！！」

優しくも厳しかった元生徒会長やクールだけど意外と隙だらけな書記に……

「おめでとー♪
二人とも凄いお似合いだよ♪」

「遂にこの日が来たんだな。
おめでとう」

いつも元気いっぱいの委員長に相変わらずミステリアスな風紀委員に…

「これで親友に先を越されちゃったわね、独り身さん♪」

「何も今言わなくても良くね！？
気にしてるからね結構！！
ってかお前も独り身だろ」

調査好きだけど意外と困らせ屋の副委員長とシスコンでちょっとアレだけど決める時は決める会計兼親友……

そんな素晴らしい仲間達に囲まれて……

二人はこれからも共に歩んでゆく為に手を取り合い、永遠の愛を誓ったのだった……

……fin……

目に見えなくても伝わる想い　後編（翼×愛歌）（後書き）

駿
「どこの恋愛小説だよ！？」

伽藍
「うん。何かもう本当に純愛になっちゃってすみません？」

美希
「でもハッピーエンドで良かったわね」

伽藍
「次回から第２章に突入します！！またＩＦ編は近々入れます」

駿
「第２章はかなり波乱の展開となり、原作もどんどん入ります！」

美希
「次回もよろしく」

君の隣で　（駿×ヒナギク）（前書き）

タイトル通り、駿×ヒナギクです。

メチャクチャ苦労しました。
なので、クオリティーが相当酷いです。

この二人は正直合わない（笑）
だって本編では一番あり得ない組み合わせだもの（笑）

という訳で駿がキャラ崩壊してます。あり得ないキャラになってます。
ご了承下さい

それでは、始まります！

君の隣で　（駿×ヒナギク）

東京都杉並区。

ここにそのほぼ全ての面積を占めるという広大な敷地を有する白皇学院という学校がある。
初等部、中等部、高等部とエスカレーター式のこの学園には校舎の他にも沢山充実した施設が完備されている。

その白皇内に一際目立つようにそびえ立つ時計塔、通称ガーデン・ゲート。
白皇のシンボルともいえるこの建物の最上階に位置するのは白皇学院の生徒会室である。

「ふぅ……」

そんな生徒会室内の生徒会長の席に座った私、桂ヒナギクはゆっくりと息をついた。

時刻はまだ午前7時半。
普段なら朝から異様に多い仕事の量を恨めく思うけれど、今日はその逆。

「お疲れさん」

「本当、疲れたわね」

そう。
今日の朝の生徒会は彼、駿君と二人きりだから。
翼君と千桜は珍しく朝の生徒会は欠席。
愛歌さんはも朝は欠席。
美希達はいつも通りサボり。
なので現在、生徒会室には会長の私と会計の駿君しかいない事になる。だから多い仕事量も二人きりの時間が長引くために嬉しくさえ感じるのだ。
え、何故嬉しいかって……？
それは……／／／
「ヒナ？
どうしたんだよ、ボーッとして」
「ふぇ？
あ、ううん。何でも無いわ」
声に気付いて我に返ると、駿君が心配そうにこちらを覗き込んでいた。私は慌ててそう答える。
「大丈夫か？
もしかして具合でも悪いんじゃ……」

「大丈夫。
ちょっと一息ついただけよ。
それより仕事も終わったし……」

尚も心配そうな駿君の表情を見た私は側にあった書類をまとめて席から立ち上がる。

「……」

そして彼に期待するような視線を送る。
せっかく仕事も終わったし二人きりだから、という視線。

「そっか……なら良かった。
んじゃ教室に行くか、そろそろ朝のＨＲも始まるしな」

「え？」

駿君は視線に気付いていないのか生徒会室の時計に目を向けると頷いてみせた。
そうしてくるりと背を向けると歩き出そうと……

「ちょっと、駿君！」

「ん？」

私は慌てて彼の裾を掴む。
彼は何にも気付いていないようで首を傾げている。
仕方ない、それとなく言葉で伝えて……

「えっと……駿君？
今はせっかく二人きりなんだから……」

「ヒナ？」

まだ首を傾げる駿君。
まったく、ホントに鈍感なんだから。

「だから、いつものを……」

「え、ああ……」

顔が赤くなるのを感じながらそう言うと、ようやく彼も気付いたように頬を掻いてみせた。

「……」

それを了解の合図ととった私はゆっくりと彼に近づいてゆく。

「ん……」

「……」

駿君の目の前までいくと、彼はそっと背中に手を回して抱きしめてくれた。
彼の温かさが自分の身体に伝わるのが分かる。

「ヒナ……」

「駿君……」

何だか言わされた敗北感のようなものもあったけど、この温もりが私だけのものだと考えると幸せな気持ちがそんな変なプライドも打ち消してくれるみたい。

とても心地好くて……
とても温かい……

ゆっくりと彼から離れると、彼の頬はさっきよりずっと赤くなっていた。何だか可愛らしい。

「あ、あの……
朝から大胆だな……」

「良いじゃない。
だって恋人同士なんだから」

「まぁ、そうだけど……」

「クス♪
やっぱり私の勝ちね」

そう。
何を隠そう駿君は私の恋人で。
私は駿君の恋人。

今は6月だから……
私と駿君が付き合い始めたのは大体3ヶ月くらい前からということになる。

彼を好きになるきっかけ……
と呼べるほどのものは多分無かったと思う。
今思い出すと笑ってしまうけど、まだ恋なんてしてない時は美希や泉達が話す少女漫画のようなイベントやきっかけがあって人を好きになるものだと思っていたから、駿君を意識し始めた時は自分でも理解出来てなかった。

しょうもない事ばかりやるし、
極度の妹馬鹿だし、デリカシーは無いし、他にも短所をあげればきりがない。
友達としては好きだけど異性としては好きになる訳がないと思って

た。
気になる理由だって自分と共通点があるからだと。

共通点……
まだ駿君が気になる前に翼君から聞いた話。
駿君は鷺ノ宮家の本当の子供では無く、拾われた養子だと。
拾われる前の記憶は一切無いと。

その話を聞いた時、咄嗟に自分の過去と重なった。
私も両親に捨てられて今の家に引き取られて養子になったから。

気になっている理由はその一点だと思っていた。
確かにその話を聞いてから以前より彼を意識するようになったのかもしれない。

でもそうする事で以前より彼と話したり一緒に行動する機会が多くなって、他の面も色々と見えてきた。
意外と行動力があったり、ああ見えて実は気遣いが上手だったり、本当は誰よりも人との繋がりを大切にしていたり……
他にも……

そんな感じで、あっという間に彼の長所でいっぱいになっていた。
そうして彼の笑顔を見て私は気付いた。
ああ、私はこの人が好きなんだって……

「桂?
当たったぞ?」

「へ？」

急に聞こえてきた声に顔を上げると、先生がこちらを見ていた。
まずい、もう授業が始まっていたのか。

「あ、すみません。
少し考え事をしていて」

「む、そうか。
珍しいな。
取り敢えずこの問題を……」

私は軽く頭を振ると授業に集中するために他の考えを頭から振り払った。

＊

キーンコーン……

お昼休み。
私は敷地内の林を抜けた場所にあるちょっとした広場のベンチに座っていた。
ここは普段から人がほとんど来ない場所だが木々や小さな噴水がとても綺麗な謂わば隠れスポット。

私の隣には駿君が座っている。
距離はすぐ近くで肩がほとんど触れ合うくらい。
そして二人はお弁当箱をそれぞれ持っている。

私達はいつもこの場所で二人でお昼を食べている。
私は別に普通に校舎の中庭で良いのだが、彼は『他の人に見られたら殺される』と少し青ざめて言っていた。

だから、私達が付き合っている事は生徒会のメンバー以外誰も知らないという事になる。
まぁ、それはそれで秘密を共有しているみたいで楽しかったりするのだけれど。

「ん！
やっぱりヒナの弁当は美味いな！！これだけで一日やっていける」

「もう、大袈裟よ」

「んな事ねーって」

そう言って笑う彼を見ていると本当に作って良かったと思う。
まぁ、その笑顔を見るために頑張っているのだけれど。

私達のお昼は私と駿君が交代で二人分作るという事にしている。
だから今日は私の番。
因みに昨日の駿君のお弁当はなんとみたらし団子が入っててびっくりした。

「そういや、さっき授業中にもボーッとしてたみたいだけど…」

「あ、うん。
駿君と付き合うまでどんな感じだったのかな～って思い返してたのよ」

「あ、ああ……そっか」

それを聞いた彼は少し赤くなって慌ててお弁当に視線を戻していた。
やっぱり何だか可愛らしい。

「駿君が告白してきたのよね？
ヒナ祭り祭の時に」

「あ～、そうだっけか？
よく覚えてねーな」

それは私の誕生日でもあった。
散々悩んだ結果、その日に私から告白しようと決心したのだけれど、
それより先に駿君の方から夜の時計塔に来てほしいといわれたのだ。
あの時は本当に驚いたけど、本当に嬉しかった。

「そう？
確か告白の時の言葉は『俺は…』」

「あ、あ～大変だ！！（棒読み）
早くしないと昼休み終わっちまうぞ！！だから早く食べよう！！」

「クスクス♪」

彼のあまりに予想通りな反応に思わず笑いが溢れてしまう。

「……」

「……」

私はゆっくりと彼の肩に頭を乗せて寄り添う。
彼は何も言わずに優しく頭を撫でてくれた。
くすぐったいようなそんな感覚に包まれて目を閉じる。

風にさらわれる木々の音に澄んだ水の音が重なる。
そして隣に確かな温かさを感じながら、私達は昼を過ごした。

＊

放課後……
いつも通り生徒会の仕事は、
朝と違って仕事も少なく、メンバーも揃っていたので比較的早く終了した。
と言っても三人娘は途中で居なくなってしまったけど。

「さて、俺はもう帰宅させてもらおうかな」

翼君が鞄を持って立ち上がると隣の千桜と愛歌さんもそれにならっ

て席を立った。

「そうですね。私達もこれで…」
「二人きりになっても襲っちゃダメよ♪」

「しませんよ！！
ていうか何で私なんですか！！」

愛歌さんの言葉に思わず顔が赤くなるのが分かった。
しかし駿君に言うならまだしも何故私に言うのだろうか。

そんなこんなでメンバーの三人は生徒会室を出ていく。
駿君は生徒会の用事で外出中だから、今は生徒会室に一人きりという事になる。

「ん……」

少し疲れたのか。
不意に眠気に襲われたのに気付いた時には、私の瞼は半分まで閉じてしまっていた。

そのまま目の前には暗闇が広がってゆく……

（……？）

ふと気が付くと、周りの暗闇は見覚えのある喫茶店のカウンターになっていた。

（……）

辺りを見回すと、入口の側に何やら人の足が……

（え！？）

上を見上げると、それは男性と女性の二人。
入口から差す光が逆光で表情は見えないが……

（……お父さん？お母さん？）

その二人は私に背を向けると扉を開けて出ていこうとする。

（待って……！！）

そんな二人に追い付こうと手を伸ばし足を進める。
しかし二人は振り返らず入口から出て行ってしまう。

（待って…！！）

私も二人の消えていった入口に足を……

……ナ…！！

……ナ！！

いきなり視界がグラリと揺れて、声が聞こえてきた。
辺りは段々暗くなっていく。

「ヒナ！！」

「！？」

もう一度聞こえてきたその声で、私の目には光が差し込んできた。
訳も分からず顔を上げると、目の前には駿君の心配そうな表情が。

「あ…れ……？
私……」

「大丈夫かヒナ？
随分うなされてみたいだけど」

「……」

今のは夢？
それにしては妙な感じがした。
それに何だか嫌な寒気がする。

あのまま二人を追って扉から出てしまったら、一体どうなってしまったのだろう。
そう思うとゾッとした寒気が…

「大丈夫」

「え……？」

そう考えていた時、私の両手の上から駿君がそっと手を重ねていてくれた。

「何があったかは分からないけどそれは夢だから。
今のヒナはここにいる。
ここがヒナの居場所だ。
だから、大丈夫」

「……駿君」

彼の言葉。
途端に寒気も嫌な感覚も全て消え去った。
彼の手から伝わる優しい温もりに私は薄く口元を緩めた。

そうだ。
私は今ここにいる。
周りには皆もいる。
そして……

「ありがとう。
もう大丈夫」

私は彼の手を逆に包み返してそう言った。
彼は心底安心したように息をついた。

「そっか。
それじゃ、帰ろう」

「うん」

私達は時計塔を出て校舎に戻って下駄箱の方に移動する。
しかし……

「ありゃ、雨が降ってる」

「本当だ」

外はいつの間にか曇天が敷き詰めた空から雨が絶え間なく降り続いていた。
確か教室に折り畳み傘があった筈だけど……

「傘一つで良いよな」

「え？」

駿君は傘置き場から彼の傘を手に取ると、私に向かってそう言った。

「でも、良いの？
私、教室に折り畳みが……」

「この傘、大きめだから。
それに……」

駿君はこちらに近づいてくると私の手を取った。

「今日は少し寒いから。
こうした方が暖かい」

「／／／」

そっと抱き寄せてくれる。

「じゃあ、家までお送りしましょうか生徒会会長様？」

「そ、そうね……／／／
お願いしようかしら」

そんな彼の言葉に『ああ、今回は一本とられたな』と思う。
そう思うと少し悔しかったり。

「昼はやられたけど、今回は俺の勝ちじゃないか？」

「勝ち負けの問題じゃ無いでしょ」

「そっくり返すよ、その言葉」

そう言ってクスクスと笑い合う。

私はもう少し彼に寄り添う。
そして雨の中を一つ傘で一緒にゆっくりと歩き始めた。

私には大好きな場所がある。

私しか知らない特別な場所。

怖い時は安心させてくれる。
泣いていたら慰めてくれる。
嬉しい時は一緒に喜んでくれる。

どんな時でも側にいてくれる……

本当に特別な場所……

だから今日も私は笑っている

君の隣で

君の隣で　（駿×ヒナギク）（後書き）

伽藍
「いや～、大変だった」

駿（本編）
「あれ……誰？」

伽藍
「ははは……
ＩＦ編の駿だよ」

駿（ＩＦ編）
「はじめまして」

駿（本編）
「うわっ！？
何か来やがった」

伽藍
「ぶっちゃけかなり大変だったよ。ヒナギクと駿とかどう考えてもあり得ないからね。
月とすっぽんじゃん」

駿（本編）
「言うに事欠いてお前は…」

ヒナギク（ＩＦ編）
「ううん。
そんな事無いわ。
駿君には素敵な所も沢山あるわ」

駿（ＩＦ編）
「ヒナ……」

ヒナギク（ＩＦ編）
「駿君……」

駿（本編）
「だあァァァァ！！
見せ付けてんじゃねぇ！！
他所でやれＩＦバカップル共！！」

伽藍
「つーかややこしい？
そんな訳でＩＦ編の二つ目が終わりです。
では、次回もよろしくお願いします！」

其の二十　やっぱり地球は回ってる（前書き）

前半にクラ〇ドネタありです。

伽藍
「前回からだと話は凄いギャップかも……
思いきりシリアスな恋愛小説でしたから（笑）」

駿
「後書きにこの小説の第2章での原作介入についての記述があるから、必ず目を通しておいてくれ」

伽藍
「第2章は主に
原作少し→オリジナル（この間も裏で原作が進んでいる）→原作（ハヤテ入学）
と一気に原作では話が飛びます。ご了承下さい」

駿
「後書きは2章の原作介入説明なので、生徒会通信はお休みします」

伽藍

「では長くなりましたが、
第2章、始まります！」

其の二十　やっぱり地球は回ってる

空が死んでいる……

顔を上げてまず飛び込んできたのはそんな感想だった……

どこまでも鈍く重々しく、灰色一色な空は本当に死んだかのように寂しく、哀しく、ただ虚しさを描き出していた。

“自分にはピッタリの色だ”

自嘲気味に口元を歪めると、上空から視線を落とす。

「……」

そこには死体の山。

うん百という数の死体が群がり重なりあっている。

刀が突き刺さったもの、四肢がもげたもの、首から下が離れたもの、形容しがたい形になっているもの……

どれもが無惨な姿を晒して地面を覆い尽くしている。

「……」

その中の死体の一つから巾着袋を取り上げた。
目線の高さまで持ち上げて暫く眺めた後、それを懐に……

「なんだ……
死体を刈る化物が出るっていうんで来てみりゃ……
ただの童(がき)じゃねーか」

「……」

ゆっくりと振り返ると、自分より遥かに高い身長の男が立って見下ろしていた。
年齢は５０くらいだろうか。白髪頭に厳しそうな顔立ち。
爪楊枝を加えたまま鋭い目でこちらを見据えてくる。

「てめえまだ小せぇな。
いくつだ？」

「……」

いくつ？
知るか……年齢なんて……
あれからどのくらい経ったのかも覚えいない……

「見たところ五歳くれぇか……
んで、んなちっこい童(がき)がこんな所で何してんだ」

「……」

放っておいてくれ……
視線でその男にそう返す。

「気に入らねぇ目だな……
まるで自分がこの世で一番不幸だとでも言いたげな、
そんな目をしてやがる……」

うるさい……
俺に構うな……

「童の癖にそんな腐った目をしやがって……」

腐った……？
ああ、そうだ。それでいい。
構うものか……
俺は……

「！？」

次の瞬間、視界がぐるりと回転したかと思うと面倒臭そうな男の顔が横にあった。

どうやら無理矢理担がれてしまったらしい。

「ーーっ！！」

「喚くなクソガキ。
そして暴れるな、落ちたら怪我するぞ」

懸命に足をジタバタさせるが、担がれてた手は力強くビクともしなかった。

「てめえを今から俺達の家に連れていく。拒否権はねぇ」

「……」

「教えてやる。
世の中にはもっと辛い目にあってる奴も大勢いるが……
それでも笑い合える場所がある事を……」

何を言っているんだこの男は……一体……

「世の中はてめえが思ってる程苦しくて辛いもんじゃねぇ。
辛い分、その倍は楽しい分があるって事を……
だから今は黙って言う通りにしてろクソガキ」

「……」

死体が群れる地獄のような場所で、不恰好に担がれてたまま、先程と同じように空を見上げる。

すると死んだように灰色だったその空には、僅かに太陽の光が差し込み始めていた……

其の壱　やっぱり地球は回ってる

「……おい。
起きろ、おい」

「……うん？」

正午の生徒会室

揺すられたて声をかけられた駿はうっすらと瞼を開けた。
彼の瞳にはまばゆいばかりの太陽の光が飛び込んでくる。
「あれ……
俺……？」

「ようやく起きたか」

駿の隣には翼が立ってこちらを覗き込んでいた。
まだ駿は寝ぼけているのかフラフラと視線を泳がせてる。

今は生徒会室には今まで眠っていた駿と隣に立っていた翼しかいない。

「俺、眠って……？」

「ああ。
ずっと眠り続けてたな」

「ずっと……？」

駿はポケーッとした瞳を翼にゆっくりと向ける。

「お前は昼食を食べてから眠り続け、遂には２００年眠り続けてしまったんだ。
つまりここは２００年後の世界なんだよ」

「２００年？
お前死んでんじゃん」

「ああ、これはホログラム映像なんだよ」

「マジかよっ！？」

駿は驚いたように椅子に座ったまま後退る。

「じゃあ、今……
世界はどうなっているんだ！？」

「この世界では生き物はほとんど絶滅し、人間ももう男しか残っていないんだ。女性は全ていなくなってしまった」

「そ、そんな……
じゃあ人類は……」

「ああ、もう長くはもたない」

翼は苦々しい表情で顔を伏せる。

「嘘だろ……
俺が眠ってる間に、そんな…」

駿は頭を抱えて椅子から立ち上がると歩き回り始めた。

ガチャ……

「あら、駿君。
ようやく起きたのね」

「!?」

頭を抱えたままの駿が生徒会室の扉の前までやって来た時、扉が開いてヒナギクが生徒会室に入ってきた。
駿に気付いてそう言ったヒナギクを見て、彼は驚いたように翼に振り返る。

「つ、翼の立体映像!!
どういう事だ!?女性がいるじゃないか!!」

「落ち着け駿。
彼女をよく見てみろ」

「え？」

駿は翼の言葉に従って顔をもう一度ヒナギクに向ける。
彼女は訳が分からないように首を傾げているが。

「といったって……
どこから見ても女性……、む！？」

上からヒナギクを見ていたが、ある一点で駿は気付いたように声をあげる。

「そうか！！胸が無い！！
女性ならばある筈の胸の膨らみが全くと言っていいほど無い！！
という事はこの人は男性なんだ！！くっ……！！やはり世界は滅びる運命にａ」

ドオォォン！！！！

烈火のごとく……
駿は思いきり吹き飛ばされた……

○

「……こんな事して楽しい？」

「ああ。
最高に面白かったぜ」

顔中傷だらけの駿がそう尋ねると、翼は爽やかに親指をたててそう返した。

「ま、いい目覚ましになったろ？」

「目覚ましどころか意識を失いかけたよ！！！」彼は頭に星と小惑星が浮かぶのが見えたようだ。

「まったく……
変な事を言い出したと思ったら、翼君の仕業ね」

ヒナギクは思いきりやり過ぎた為に多少の罪悪感からか駿に絆創膏を貼ったりと治療しながら、呆れたように翼に目を向ける。

「いや、まさか俺もあんな嘘をコイツが信じるとは思わなかったんだ」

「寝ぼけてたんだから信じるよ！！」

信じるだろうか？

「ちょっと駿君。
動かないでジッとしてて」

ヒナギクは立ち上がりそうになった駿を押さえて消毒液をメッシュに湿らせて傷につける。

「痛たたた!?
染みるってお前!!
痛い痛い!?」

「気のせいよ♪」

容赦なく加えられる消毒攻撃は触れる度に激痛が神経全体に走る。

「痛っ!?
何か心の無しか言葉の端々に刺のようなものを感じるんですけど…
まださっきの事怒ってたり…?」

「ぜ・ん・ぜ・ん♪
怒ってなんかないわよ……!!」

それは笑顔なのに全く説得力の無い言葉だったという。

・・・・・

「駿君、何でそんなに傷だらけなんだ?」

「いや、何でも無いんだ……」

数十分後……
生徒会メンバーが集まって会議をしている中、千桜が不思議に思ったのかこっそりと尋ねてきた。
そんな彼女にがっくりと肩を落として答える駿。

ガチャ……

そんな時、生徒会室の扉が勢いよく開いた。

「「「？」」」

一同が振り向くと、る黒服の男が中に飛び込んでくる。

「駿殿はいらっしゃいますか！！」

「え、あ、はい」

その男は鷺ノ宮家の執事だった。彼の言葉に駿は怪訝な表情のまま立ち上がる。

「実は、たった今……
伊澄お嬢様が誘拐されました！！」

「「「！？」」」

予期せぬその言葉に駿は勿論、一同も息を呑んだ。

「お嬢様を連れ去った男は、貧相な顔をしてカシミアのコートを着た少年でして……」

黒服の執事がオロオロと説明するなか、一同は顔を見合わせる。

「鷺ノ宮さんが誘拐って……
駿君……」

「おい駿、取り敢えず落ち着……」

ヒナギクに続いて慌てたように翼は駿に目を向けようとするが…

「「いない！？」」

既に駿の姿は生徒会室には無かった。

「駿君なら、もう飛び出していったわよ」

「文字通り、音速でしたね…」

頬に手を当てながら扉に目を向ける愛歌と驚いたように同じく扉を見る千桜。

「アイツ……
大丈夫か……？」

翼は不安１００％な様子で外に目をやるとため息をついた……

＊

ちょうどその頃……
散々な目に遭い途方に暮れている青年がいた。

「ど……どうしよう……」

彼の名前は綾崎ハヤテ。
またの名を借金執事。

彼の両手には見るも無惨にボロボロとなったコート。
そして彼の後ろには袖で口を隠して首を傾げる伊澄の姿。

この状況を簡単に解説しよう。
マリアからお使いを頼まれてハヤテは“カシミアの超高級コート”を着て屋敷を後にした。
しかし持ち前の不幸体質が様々なアクシデントを呼び込み、色々あって伊澄と出会って何やかんやで鷺ノ宮家の執事を誘拐犯と勘違いしたハヤテは彼等から逃げる為にドタバタあって……

結果、汚すなと言われていた“超高級コート”は無惨なボロ雑巾となってしまったのである。

詳しくはコミックス2巻を読んで下さい。

「あ、あの……」

「え？」

愕然としているハヤテに伊澄はゆっくりと声をかける。

「せっかくのコートが私のせいで台無しなってしまったので…
その……私が弁償を……」

「え……
（気持ちは嬉しいけど、弁償って言ってもこんなちびっこのお小遣いでどうにか出来るコートじゃ無いんだよな……）」

ハヤテは彼女の事を全く知らないのでそう考える。

「ありがとう。
けど、気持ちだけ貰っておく事にするよ」

「え、でも」

「成り行きとはいえ、君を守ると言ったのは僕だから……」

ハヤテはニッコリと微笑んでそう言う。
その時だったーー！！

「！！」

ハヤテは後方に飛んだ。
何故なら、物凄い速度で何かが彼に向かって飛んできたからだ。

「これは！！？」

ハヤテは今、自分が立っていた場所に目を向ける。
それは大量のクナイが突き刺さっていた。

「誰だ！？
（またあの誘拐犯達か！？）」

ハヤテは伊澄を庇うように前に立つと飛んできた方向に向かって叫ぶ。

「誰だ……だぁ？
俺の伊澄に手を出しやがった野郎の分際で……」

「……！？」

公園の木々の中から聞こえてくる声にハヤテは何処だと周りを見回す。

「生きて帰れると思うなよ……」
（くっ……！！
一体どこに……、！？）

ハヤテ持ち前の本能が警告する。“上だ”と

「っ！！」

ハヤテは伊澄を抱きかかえて咄嗟に右に跳ぶ。
次の瞬間ーー！！

上から日本刀を突き立てた青年が落ちてきた。
白く美しい日本刀は公園の地面に物凄い速度で突き刺さる。

（ってか、アレ当たってたら死んでたよね絶対！！）

ハヤテは前方に着地した男に顔を向ける。
ソイツは学校の制服を着ていて、顔は下がっていて分からないが黒い綺麗な髪をしていた。

「ちっ……
避けるとは、面倒な事を」

物凄い物騒な事を言いながら舌打ちをする青年。

「貴方は何者ですか！！」

「俺か？
俺は……」

ハヤテが青年に向かって叫ぶと、彼は顔をゆっくりと上げて……

「「……あ」」

二人は真っ直ぐに向かい合った。同時に漏れる間抜けな声は…

「「あーーーっ！！！」」

紛れもなく、鷺ノ宮駿と綾崎ハヤテのものだった……

其の二十　やっぱり地球は回ってる（後書き）

今回から2章突入します。

ただ先に言っておきますと、
原作の2巻後半から4巻前半の伊澄がハヤテを買ってナギが誘拐されるイベントはカットしたいと思います。
あのイベントは遺産相続の条件が変わるイベントですが、ちょっと駿関連のイベントをこの章で集中させたいので、カットします。

相続条件の変更は既に三千院本家でハヤテが宣言した、という設定でお願いします。
まぁ次回も一応本編でさらっと書きますが。

なので、ハヤテの入学までは原作が結構変わる事になるのでご了承お願いします。

では
次回もよろしくお願いします！！

其の二十一　君が望む永遠はこの空の下に広がっている（前書き）

前回言い忘れていましたが、
第二章の時間軸は1月の5日から始まっています。
初詣編から4日経って伊澄や翼達が帰って来ています。

因みに学校再会は1月10日を予定してます。

・急募

諸事情で一人だけ女性のオリキャラの募集を皆様にお願い致したいと思います。

ちょっと色々と事情があってオリキャラで一人欠員が出たので、
こんな事態になりました？
でも女性は自分では中々考えられないので、こうして募集という形でお願いした次第であります。

オリキャラを入れすぎると話が壊れる事はよく分かっておりますが基本的に原作キャラを目立たせられるようにしていますのでその辺の心配は無いと思います。
基本たまに出るのがオリキャラ（主役、レギュラー以外）という風にしているので

長くなりましたが、そんな訳でお願い致します。
案はメッセージでお願いします。締め切りは前書きの方で書きますので。

決定したら第3章で出せると思います。

其の二十一　君が望む永遠はこの空の下に広がっている

～負け犬公園～

「ええ！？
そうだったんですか！？」

公園にハヤテの驚いたような声が響き渡る。
彼の横には駿と伊澄が隣り合わせで立っていた。

「鷺ノ宮って、あの超お金持ちの！？そしてお二人は兄妹！？」

「ああ、そういや苗字言って無かったよな。
俺は鷺ノ宮駿。んでこっちが妹の鷺ノ宮伊澄」

駿がそう言って伊澄に手を向けると彼女はペコリとお辞儀をする。

「って事はさっきの黒服の方々は……」

「多分執事達だな」

その言葉にがっくりと肩を落とすハヤテ。流石不幸まっしぐらな青年である。

あの後……

誘拐の話が全て誤解である事を知った駿は、ハヤテに出来るだけ誤解の無いように状況を説明した。彼女がナギの親友の鷺ノ宮家のお嬢様であること。
二人が兄妹であること。

「あ、あの……
やっぱりコートの弁償を…」

自分の勘違いに落ち込んでいるハヤテを見て、伊澄が慌てて彼にそう声をかけるが……

「いえ、やはりそれは。
お気持ちだけで十分です。
僕が自分の意志でやった事ですから」

「……」

ニッコリと微笑んでそう答えるハヤテ。本当に良い人である。

「いや、本当に悪かったな。
妹が迷惑をかけて。
コイツは超方向音痴だから、
友達の家に一人で行くなんて、ミッションインポッシブル並みに難しいんだ」

「ーーっ!!」

駿の言葉に伊澄は袖をパタパタと振って抗議する。

「でも、お嬢様のお友達でしたらお屋敷に行きたいんですよね。

でしたら僕がお連れしますよ」

「良いのですか？」

「はい。それも執事の仕事ですから」

ハヤテは胸を張ってそう言い切った。ボロボロのコートを持ったまま。

「悪いな……助かるよ。
コートの件はこちらに非があるから、俺がマリアさんに電話で説明しとく。
あと、執事達にも言っておくから」

「え、でも……」

「大丈夫。
コートがボロボロになったからって、ちゃんと説明すればマリアさんも分かってくれるから。
だから安心して屋敷に帰んな」

「……駿君」

ハヤテが“ありがとう”と微笑むと、駿は頭を掻きながら少し気恥ずかしそうに“大した事じゃない”と返した。
二人とも男である。
何か男女の雰囲気っぽいが、二人とも男なのである。
→
重要

「しかし、お前も大変だったろ……あのジジイの家は」

「はは……
まぁ色々ありましたね」

駿は話題を変えるかのように先程ハヤテに聞いた三千院本家での話を口にする。
駿が事情を説明した時、ハヤテにもここ数日にあった事を聞いたのだ。

変な老人に会ったと思ったら三千院帝だったり、遺産相続の条件がナギが泣いて謝ることでそれを狙ってギルバートとかいう奴が襲いかかってきたり、それを返り討ちにしたハヤテが思わず『遺産が欲しいならまず自分を亡きものにしろ』と宣言してしまったりと…
まぁ色々あったようである。

「遺産相続の条件が執事を倒すって……お前大丈夫なのか？」

「確かに危険かもしれませんが、それでもお嬢様が危険な目に遭われるよりは」

「まぁ、そりゃそうか」

身体的な部分を考慮しても、確かにナギよりハヤテの方がリスクは断然減るが……それでも危険な事には変わりない。

これまで以上にハヤテは三千院家の遺産という事に深く関わっていきそうである。

「では、僕は伊澄さんをお送りしますから」
話が済んで一息おくと、ハヤテは駿と伊澄を見てそう言った。
「ああ。
ただ気をつけろよ。
あり得ないくらいの迷子癖だから」
「はぁ……」
駿はそう言うが、ハヤテはまだあまり実感が無い。
伊澄は怒ったように駿をパタパタと袖で叩いている。
「それじゃあ、俺は学校に戻るから……伊澄を頼む」
「はい！
お任せ下さい」
駿はそう言って、もと来た道を戻っていった。
本来ならば彼が他の男に伊澄を預けるなんてまずあり得ない事だから、今回はかなり珍しい。
「では、行きましょうか伊澄さん」
「……」

こうして二人も三千院屋敷に向かい始め……

「伊澄さん……？
って、居ない！！？」

ハヤテが振り返ると、既に伊澄の姿は消えていた。

こうして、ハヤテは執事達の誤解とコートの件は駿の取り計らいで何とか回避したが、
ある意味一番恐ろしい伊澄の迷子という不幸と闘うことになってしまったのである。

其の弐　君が望む永遠はこの空の下に広がっている

『まぁ、そんな事が……』

「はい。コートはウチが弁償しますから、アイツには怒らないでやって下さい。伊澄を助けてくれた為にこうなってしまったんです」

『いえ、弁償なんて。
大丈夫ですよ。予想も少なからずしてましたし……
それに聞いて安心しました。ハヤテ君らしいというか……』

生徒会室に戻っていた駿は携帯電話でマリアと会話をしていた。
内容は勿論先程のハヤテの件である。

「ホントにご迷惑をおかけしまして……」

『いえいえ、お気になさらないで下さい。
……それでは』

「あ、はい」

ピッ

会話も終了したようで、駿は携帯を閉じてポケットにしまった。

「良かったな。
全部勘違いで」

駿がテーブルに着くと隣に座っていた翼が声をかけてくる。
因みに今生徒会室には翼と駿の二人だけ。

ヒナギク達は少しの間席を外してるらしい。

「まあな。
知り合いで良かったよ。
じゃなきゃいらぬ誤解で殺害事件を起こしてたかも」

「さらっと物騒な事を言うな」

軽く笑いながら口にする駿をパコッとバインダーで叩く翼。

「でも大丈夫なのか？」

「何が？」

「いくら知り合いの奴だって言っても、伊澄ちゃんの迷子は凄まじいじゃないか。
迷子スキルに振り回されて何か大変な目とかに遭ったり…」

「まさか、よほどの不幸体質じゃ無い限り大丈夫……」

駿はそこまで言ってふと言葉を止める。彼の頭に過るのはハヤテの顔……では無くて、彼の底知れぬ不幸体質。

「大丈夫じゃ無いかも……」

「ああ？」

「やべぇ……
俺アイツに死亡フラグを建てちまったかもしんねぇ……」

ハヤテ＝超不幸
伊澄＝超迷子
二人併せて……

「ちょっと俺探してくる！！」

「あ、ちょっと待て駿」

駿は慌てて立ち上がると生徒会室から飛び出していこうとするが、翼に止められる。

「心配すんな。
ヒナギク達が戻ってくるまでには帰って来るつもりだから」

「いや、そうじゃ無くて……」

「なんだよ？」

首を傾げる駿に翼は自分のすぐ隣を指差してみせる。

「伊澄ちゃん、ここに居るんだけど」

「……」

彼の隣にはちょこんと伊澄が座っていた。

「はいィィィィィ！！！？」

一方ハヤテは……

「伊澄さーん!?
何処ですかーーっ!?」

全力で走り回って忽然と姿を消した伊澄を探していた。

「何で!?
何であの一瞬でいなくなるんだ!?」

彼は伊澄の超方向音痴に困り果てながらも持てる力をフル活用して彼女を探し回る。
だが見つからない……

(困った……)

「お!!綾崎じゃねーか!!」

「え?」

ハヤテが途方に暮れている時、彼の後ろから声が聞こえてきた。
振り返るとそこには……

「久しぶりじゃねーか」

「なんだ、まだ生きてたのか」

「あ!!貴方達は……!!

以前僕を売り飛ばそうとした人身売買のヤクザ！！」

鬼武者小路系のあのヤクザ達であった。

「街中で人聞きの悪い事言ってんじゃねーよ」

「詳しくは第1章を読めってんだコノヤロー」

ヤクザ三人寄ってきたので何事かと身構えるハヤテ。

「そう身構えんなよ。
別にとって食いやしねぇって」

「別に商売してるわけでもねーしな」

「え？」

どうやら、彼等は単に顔見知りを見たので寄ってきたようだ。

「んで、こんなトコで何やってんだおめぇ。そんな格好で」

「いや……
えっと……」

＊

「何でここに伊澄がいるんだ！？」

「え、えっと……
気付いたらここに…」

生徒会室では、何故か居る伊澄に駿が驚いたように目を見張っていた。

「だがここに伊澄ちゃんがいるって事は、お前の知り合いはやばいんじゃないか？」

「だな……
やっぱり俺、探して……
って、伊澄も居るんだよな」

「ああ。だったら、俺が伊澄ちゃんを送っていくよ」

翼が駿にそう言って隣の伊澄に目を向けた。

「え、良いのか？」

「ああ。
だから知り合いの方を」

翼の言葉に駿は安心したように頷いた。

「あ、でも……
伊澄の超方向音痴には気をつけろよ」

「ーーっ！！」

また伊澄は怒ったようにパタパタと袖を振る。

「ハハハ、大丈夫だよ。
伊澄ちゃんの迷子には慣れてるから」

翼はそう言って伊澄の頭を優しく撫でてあげる。

「だから、こっちは任せとけ」

「あぅ…／／／
すみません／／／」

やはり撫でられるのは恥ずかしいのか、頬を赤らめる伊澄。
と微笑んで彼女を撫でている翼。かなり微笑ましい光景だ。

しかし、
そんな様子見ていた駿は…

（え……今の反応……
まさか！？）

伊澄の反応について駿はまさかの可能性について思案し始めた。
実際は恥ずかしさから顔を赤くしただけなのだが……

（そんなまさか……伊澄が！？）

そんな事は駿には関係無いのである。彼はどんどんとあらぬ方向に
考えを巡らせてゆく。

伊澄
「翼様……
お願いがあります」

翼
「なんだい？」

伊澄
「これからは……
お兄様と呼ばせて頂けますか？」

翼
「でも、伊澄ちゃんには駿が…」

伊澄
「いいえ、これからは翼様がお兄様ですわ／／／」

ってな感じに……

「呼ばせるかァァァァ！！！
伊澄のお兄ちゃんは俺だけだァァァァ！！これだけは絶対に譲らんからな！！」

「何の話だよ！？」

駿は翼の両肩を掴んで力の限り揺すり始める。
翼は当然何が何だか分からない様子。

（いや……！？
もしかして……）

しかし馬鹿（しゅん）の妄想という名の暴走は留まる所を知らずに…

伊澄
「翼様……」

翼
「伊澄ちゃん…」

お互いに恋愛感情を抱き始めた
伊澄、翼の二人は遂に恋人同士に……

そして一方の駿は……

駿
「……無念」

永遠に恋人も出来ぬまま亡きものに……

という結果に……

「何でだァァァァ！！
何故二人が！？つーか何で俺は死んでんの！？」

「お～い……
聞こえるか～？」

頭を抱えて叫ぶ駿の前で翼はヒラヒラと手を振ってみせる。
すると駿は彼に振り返って指を突き付けた。

「断固反対だ！！」

「何が？」

「お前と伊澄の交際は絶対に認めん！！絶対に絶対に許さないからな！！」

「……」

翼は完全に呆れたような様子。
駿が意味不明なのはよく知っているが……

「お兄様！！／／／／
いい加減にして下さい！」

翼の隣にいた伊澄も馬鹿な兄貴の様子を注意しようとするが…

「い、伊澄まで！？
そうか……そうなんだな……
やはり二人は……」

「「……」」

二人の前でガクリと膝をついて両手を床につく駿。

「ああ、何故こんな事に！！
神よ！！これが貴方の下された罰だというのか！！」

何か一人で天を見上げて叫び始める。

ちょうどその時、千桜と愛歌が生徒会室に戻ってきていた。
そして駿の様子を見て…

「相変わらず元気そうですね」

「本当ね～」

いつも通りだとスルーしていた。

「伊澄ちゃん、放っておいて先に行こうか」

「ご迷惑おかけします……」

そんな訳で、
一人悶え苦しむ駿を放って三千院屋敷に向かう事にしたのだった。

＊

その頃……
ハヤテは……

「でもまぁ、商売を抜きにすればお前みたいな奴、嫌いじゃ無かったけどな」

「え？」

ヤクザ達と多分他愛も無い会話をしていた。

「正月もまだ3日目だ……
なんだったら飯でも奢って…」

「見つけたぞ！！」

そんな時、また違った男達の声が聞こえてきた。
ハヤテがそちらも振り返るとそこには先程の鷺ノ宮家の執事達だった。

「最初から怪しいとは思ってはいたが……
やはり貴様……！！」

「そのヤクザの一味だったんだな！！」

「駿殿から三千院家の執事と聞いたが、やはり嘘か！！」

彼らは怒りの形相でハヤテを睨み付ける。

「おい綾崎……
あいつらは何者だ?」

「聞くまでもありませんよ。
ありゃマフィアですぜ」

「なるほど、同業者か」

そんな執事達の様子にヤクザ達も反応する。

「おいメガネ。
ウチの若いもんに何か用か?」

(ええ!?
いつの間に仲間に!?)

このヤクザの言葉でハヤテは完全にヤクザの一味と認識された。

執事達は日本刀を抜きヤクザ達も日本刀を構える。
そしてお互い睨み合う……

(あれ?
気がつくと……
なんかかなりヤバい事に巻き込まれてませんか?
僕……)

ハヤテは目の前で起きている惨状に改めて気付いた。

（このままではマリアさんどころか、国とかに怒られる事になってしまう……
ここは何とかして逃げなくては）

ハヤテは足を後ろに向けて逃げようとするが……

「おい……
どこに行く気だ綾崎……」

ヤクザに呼び止められる。

「まさかお前……
仲間を捨てて逃げる気か！？」

（だから僕、いつ仲間になりましたっけ！？）

ハヤテの心の叫びも虚しく、仕舞いには執事達の側からも責められる事になってしまう。

そしてヤクザ、執事達全員に日本刀を向けられるハヤテ。

（あ……なるほど
今日、僕は死ぬんだ）

彼は飛びかかってくる日本刀を見て切に思う。
生きて帰れたならば今度はちゃんと謝ろうと……

「いくぞぉーーーっ！！！」

そして彼は一味の中に飛び込んでいった……

＊

～三千院屋敷～

伊澄は無事に到着していた。
翼は生徒会に戻っていって、ナギに伊澄はハヤテに送って貰ったが途中ではぐれてしまった事を話していた。

「急ごう！
ハヤテの事だ。きっと無数の剣に串刺しにされるような状況に陥っているに違いない
コートもボロボロだっていうし」

「まさかそこまでは……」

ナギ達はハヤテを探す為に屋敷の玄関ホールにやって来ていた。

「私のせいで汚したコートなのに、凄く悩んでいて……
それだけナギの執事に一生懸命なんだと……」

「駿君からも聞いてますが、そう言われるとコートの件も怒れませんね～」

伊澄の言葉にマリアはちょっと困ったように笑う。

ナギは何故だか自慢気に『元々怒る気は無い』と言っているが…

リーンゴーン……

「あ、タイミングよく帰ってきたみたいですよ」

「ふ、しょうがない奴だな～」

そんな時、玄関のチャイムが鳴ったのでナギが嬉しそうに扉に駆け寄っていく。

「マリアもハヤテの事怒っちゃダメだぞ。温かく迎え入れてやるのだ」

「まぁ、ナギがそう言うなら…」

ナギはマリアにそう言いながら、思い付いたように後ろの伊澄に振り返る。

「そういえば、ハヤテは私の事なんか言ってたか？」

「え？」

「なんかほら、可愛いとか愛らしいとか……」

「えっと……」

伊澄が思い出したのは、自販機前で迷子になっている時ハヤテに声

をかけられた時の出来事……

ハヤテ
「それに君をみたいな子を放っておいたら、お嬢様に怒られてしまいますから」

伊澄
「お嬢様？」

ハヤテ
「はい。
君と同じくらいのちっちゃい女の子でちょっとだけ我が侭で気が強くて時々手のつけられない暴れん坊だけど……
とっても優しくて、可愛い子なんですよ」

そんな事を思い出した伊澄は、ナギに聞いた事を話す事にする。

「確か、ちっちゃくてワガママで気が強い手のつけられない暴れん坊と……」

ピキっ！！

ナギの中の何かが切れた。
と同時に扉が開いてボロボロになったハヤテが姿を現す。

「……」

「あ、ただいまですお嬢さ」

バタン！！！

ナギはハヤテの目の前で思い切り扉を閉めた。

「って、ええ！？
何で！？何で閉めるんですかお嬢様！？」

「うっさいバーカ！！！」

扉の向こうから聞こえてくるハヤテの悲痛な叫びにナギは怒鳴り声で返す。

「でも優しくて可愛いと…」

「そういう事は早めに言ってあげるといいと思いますよ」

そう続けた伊澄にマリアは怒るナギと伊澄と扉を見ながら困ったよ

うに呟いた。

数時間後……

「ん？誰か倒れて……
って、ハヤテ！？
おい！？大丈夫か！？何があった！？」

「あ……
迎えに来てくれたんだねパト○ッシュ……」

ハヤテが戻ってきたかどうかと伊澄を迎えに行く為に屋敷に訪れた駿により、玄関前でガタガタと震えて倒れている借金執事が発見されたという……

「パト○ッシュ……
僕はもう疲れたよ……」

「パト○ッシュ違う！！
つーか寝るなっ！！
ネ○ーーーっ！！」

其の二十一　君が望む永遠はこの空の下に広がっている（後書き）

美希
「って事で、次回からオリジナル展開になるみたいよ。
それが終わったら原作に戻るらしいけど」

理沙
「3巻辺りの原作の話は丸々カットらしいから気をつけてくれたまえ」

泉
「ではでは～
次回もよろしくなのだ～♪」

其の二十二　晴れ時々雨、所により雷雨に注意。そんな午後（前書き）

伽藍
「後書きにゲストをお呼びしています！」

美希
「遂に私達の活躍の始まりだ」

理沙
「是非後書きまで見ていってくれたまえ！」

泉
「始まるよ～♪」

其の二十二　晴れ時々雨、所により雷雨に注意。そんな午後

アフリカ大陸の南にあるカラハリ砂漠……

上空には燦々と太陽が輝き一面砂地しかないこの地。
カラカラとした気候に燃えるような熱気。

そんな砂の海に浮かぶかのように、一台のバギーが走っていた。
ガタンと揺れながらバギーは砂漠を縦断していく。
その荷台には二人の男性が乗っていた。

足を投げ出すように横になっている茶髪の青年とあぐらをかいて座っている黄色い髪の青年の二人である。

「いや～、後二日後には久々の日本かぁ……何だか故郷に帰郷するのが恋しいって感じ？」

「意味被ってるから」

茶髪の青年が空を見上げながら言うのを黄色い髪の青年が呆れたように返す。
正しくは帰郷だけで良い。

「それに、日本に帰る訳じゃないぞ。日本に行くのはあくまで次の鍵を探す準備の為だ。
一日か二日くらいでまた発つ」

「分かってるって。
でも楓ちゃん達と会うのは二ヶ月ぶりくらい？
楽しみだな～」

「そうだな……」

楽観的な様子で笑う茶髪の青年に黄色い青年も静かに口元を緩めて同意する。

「あ、楓ちゃんと言えば……
アイツがようやく見つかったんでしょ？」

「なんだ。
知ってたのか」

「うん。
お前がアフリカ来る二日前くらいに皇から連絡があったんだよ。
連絡っても一方的に言われて切られたけど」

茶髪の青年は自分の持っていたらしき携帯を取り出して続ける、

「だったらこれで僕ら皆揃うじゃん。最強に至高のメンバーが集まって再会するわけだ」

「意味かぶりまくってるからなお前。それに、事はもっと厄介にな

ってるぞ」

「どういう事だよ梓(あづさ)？」

梓と呼ばれた黄色い髪の青年は腕を組ながら頷くと口を開いた。

「どうやら記憶喪失になっているらしい」

「記憶喪失？
え？何の？」

「俺達の記憶が丸々飛んでいるんだと……
楓が言うんだから間違いないだろうな」

「……マジ？」

茶髪の青年は若干笑顔をひきつらせて固まる。
しかし直ぐに首を振ると…

「ま、直ぐに元に戻るでしょ」

また楽観的な口調に戻った。

「どうしてそう思う？」

「はっ、愚問だねぇ梓ちゃん」

「ちゃん付けするな。
殺すぞ」

「まぁまぁ、穏便にいこうよ。
うん」

梓に睨まれて茶髪の青年は慌てて手をふって宥める。

「それで？
何故そう思う？」

梓の問いに青年は自信満々に親指をたててみせた。

「そんなの、僕らがアイツの大親友だからに決まってるだろ。
だから僕らの顔を見たら一気に記憶が蘇るに違いないよ、うん」

「僕ら？
ほぅ、お前にも友達がいたのか。今度紹介してくれ」

「アンタの事だよ！！！」

茶髪の青年は思わず立ち上がって突っ込んだ。

「俺？
いや、そう思った事は無い」

「いい加減思おうよ！？
何年来の付き合いだよ僕ら！？」

「……二三日？」

「１０年来だろ！？
つーか三日ってアフリカ（ここ）で合流してからの日数じゃんかよ」

茶髪の青年は突っ込むのに疲れたのかまた荷台の上に座り直す。

「でも、マジな話その男って本当にアイツな訳？」

「どういう意味だ？」

少し真剣な口調になった青年に聞き返す梓。

「いやさぁ、全く記憶が無いっていう場合もあるかもしれないけどさ、瓜二つな別人じゃないかって可能性もあるんじゃない？」

「楓や綾姫も同一人物だって言ってるしな。
その可能性は低いと思うぞ」

「まぁ楓ちゃんが言うならそうなんだろうけどさ……
皇は信じられないけど」

「お前いつもボコボコに負かされてたもんな」

「負けてねーよ！！」

青年は声を張り上げて抗議の意を表す。でも声には少し動揺が見られるが……

「しかし、そうか……
本物では無い可能性か……」

梓と呼ばれた青年は腕を組みながら考えるように呟く。
そして暫く考えた後、何かを思い付いたように顔を上げた。

「よし、計画変更だ。
楓達には伝えずにこっそり日本に帰るぞ」

「えぇ～!?
何でだよ!?」

茶髪の青年はその言葉に明らかに不満そうな声をあげる。

「楓達に日本で会わないようにするためだ」

「どうして?
あ、ひょっとしてお前女にでも会いに行くわけ?
可哀想に、今楓ちゃんお前の事ずっと心配してるんだよ?
唯一の肉親で兄妹なんだから会いに行こうよ。
僕も楓ちゃんに会いたいし」

茶髪はジト目で梓を見たが彼は首を振ってみせる。

「最後のはお前の本音だろ。
そうじゃ無い。もっと有意義な事を思い付いたんだ」

「何?面白い事?」

「ああ。
少なくとも、女に会うとかよりは面白い事だろうな」

そう言ってニヤリと口元を歪めた彼に茶髪の青年も興味を持ったらしく寝転がった体制から起き上がってあぐらになった。

「何をするんだよ？」

「お前の言う通り、確かめればいいのさ。
アイツが本物なのかどうか」

ガタン……！！

ちょうどその時、バギーが大きく揺れて停車してしまった。
二人が何事かと振り返ると、運転席から黒人の男が顔を出す。

「＊すまねぇ。
行きのエンジンはここまでだ。
これ以上走ると帰りの分が無くなる」

「＊そうか。
途中まで送ってくれて助かった。後は俺達だけで行く」

＊＝外国語で喋っているが表記は日本語

梓は黒人に対してそう言うと、荷台から降りて彼にチップとして紙幣を渡した。

「＊い、いや……！！
でも行くって、ここから南アフリカ共和国までは後２００ｋｍ以上あるんだが……」

運転席から黒人の男は驚いたように二人を見て言ったが、今度は茶

髪の青年が人差し指を振って答えた。

「＊大丈夫。
後はコイツが運んでくれるから」

「＊へ？」

茶髪が指差す方には梓が立っているだけだ。
運転席の男も訳が分からずに首を傾げるが……

「うぅぅ……」

突然、うめき声と共に彼の身体の真ん中が光始めた。運転手が驚いている間もなく、光は梓を完全に包み込む……

そして……

「＊ひぃ！？」

驚く運転手の目線の先には、たった今梓がいた所に全身銀色の大きな翼が生えた化物が立っていたのだ。
硬そうな銀色の皮にギラギラと光る紅い目。長く鋭い爪を備えた腕と太い足に若干前傾姿勢である。

「＊ああ大丈夫。

これはコイツの変身能力（フュージョン）だから」

「＊あ、ああ……！！」

茶髪の青年は笑ってそう言うが男は驚きのあまりまともに返事も出来ない様子。

「＊ま、いいや。
んじゃ、送ってくれてセンキュー」

茶髪の青年は大きな化物の背中に飛び乗った。
そして次の瞬間ーー！！

「＊う、うわっ！？」

化物は大きく翼を羽ばたかせて、突風を起こすと同時に空高くに飛び上がっていった……

「Ｔｈｅｒｅ　ｉｓ　Ａｔｏｎ……」

運転手は空を見上げて、信じられないまま僅かにそう呟いたのだった……

其の三　晴れ時々雨、所により雷雨に注意。そんな午後

～三千院屋敷～

「はぁ……はぁ……
すみません、ご迷惑をかけてしまって……」

「３８．９度……
風邪だな、間違いなく」

屋敷のハヤテの部屋ではベッドに横たわり真っ赤な顔で荒い息をあげているハヤテと体温計を見て呟く駿の姿。
ってかハヤテの表情が男のものとは思えない程色っぽいがこの際それはおいておく。

同じく部屋にはマリア、伊澄、そしてナギがいるのだが。

「まったく！！
冬だからといって風邪を引くなどとは……

軟弱にもほどがある！！」

気まずさを隠すように腕を組んで怒るナギ。

「まぁ軟弱かどうかは知りませんけど……」

マリアはタオルを濡らすとハヤテの額に置きながら続ける。

「誰かさんにこの寒空の下、ずぶ濡れの服で何時間も外に閉め出されれば……
風邪も引くでしょうね～」

マリアがそう言うと駿、伊澄、タマがジト目でナギを見つめる。

「な…なんだよ！！
それでは私が悪人みたいではないか！！」

「いや、悪だろ」

「うるさい！！」

そんな駿とナギのやり取りの最中でもハヤテの荒い息は続く。

「苦しいですか？
ハヤテ君」

「……とっても」

マリアの問いに何とか答えるハヤテ。駿と伊澄とタマはまたもジト目でナギを見る。

「うるさいうるさい
うるさーーーっい！！！」

そんな我が侭お嬢様の叫び声が屋敷中に響き渡るのだった……

○

「ごめんなさいね駿君。
何だかんだでナギのせいでご迷惑をおかけして」

「まぁもう慣れてますから……
それより、ハヤテの方が危険だと……」

玄関ホールまでやって来ていたマリアと駿、それに隣には伊澄。
ナギは先程『私がハヤテにお粥を作ってやろう！』と爆弾発言をしてキッチンに走っていってしまったのである。
今一番危ないのはハヤテだ。
下手をしたら命の危険すらある。

「そうですね。
ハヤテ君には胃薬を用意しておかないと……」

「胃薬でどうにかなればいいんですけどね……」

酷い言われよう……では無い。
それだけナギの料理は壊滅的なのだ。人が料理を作る常識は彼女には無い。

駿は苦笑混じりに頷くと、隣の伊澄に顔を向ける。

「それじゃあ、俺は学校に戻るけど……伊澄はこっちに泊まっていくのか？」

「いいえ、
私も後で家に帰ります。
今日は依頼も入っていますから」

「なんだ。依頼なら俺が引き受けとくぞ？」

駿はそう言うが、伊澄は頑なに首を振る。

「お兄様一人だとまた無茶をなさりますから。
私も参ります」

「いや、でも……」

「お兄様」

ジッと彼女に見つめられて、駿は仕方ないとため息をつくと彼女の頭に優しく手を置いた。

「分かったよ……
生徒会終わったらまた迎えにくるから」

コクリと頷く伊澄を見て、駿は苦笑すると……

「それじゃあマリアさん、
お邪魔しました。
また後で伊澄を迎えに来ます」

「はい。
お待ちしていますね」

彼はそう言って屋敷を後にした。そんな様子を見送る二人。

「伊澄さんは、本当にお兄さんが好きなんですね」

「え！？
な、別にそういうわけでは……！！」

「こんなに心配なさっているんですから、
駿君も幸せものですね」

「違っ……！！
それは…！！」

顔を真っ赤にしてパタパタと袖を振る伊澄を見て優しく微笑むマリア。

と、同時に……

「まだまだ沢山あるからな！
よし、鍋ごと持ってこよう！」

嬉々としてハヤテの部屋を飛び出していくナギ。

「「……」」

それだけを見て何があったかを大体予測する二人。

「では、私はちょっとキッチンを見てきますね」

「私はハヤテ様の様子を……」

恐らく本日の不幸が頂点になっているであろうハヤテの午後であった。

＊

「じゃあ結局、その駿君の友達は何時間もこの寒空の下に閉め出されてたってわけなのか…」

「何というか……
聞いているだけで不憫な話ね」

夕方の生徒会室。
テーブルには美希と千桜が座ってそんな事を言っていた。
二人に向かい合って座っているのは駿。
彼は三千院屋敷に行っていた事情を簡単に説明していたのだ。

「ところで、ヒナギク達は？」

駿が室内を見回すと二人以外他の人間は誰もいない。

「愛歌さんは用事で帰宅して、翼君は借りてたＤＶＤが今日の５時までだったって帰ったな」

「泉と理沙は年末の追試も赤点だからヒナに補習を受けている。
反面、私は大変賢いからそれを余裕でクリアー」

「オメーも追試は赤点ギリギリだったろーが」

取り敢えず千桜と美希の話を総合すると、今生徒会室には三人しかいないようである。

「さて、ヒナ達が帰って来るまで私達は暇なわけだが……」

美希はそう言いながら鞄から何かを取り出した。

「私達が揃ったら、これしかないだろう」

「そうだな」

「ま、伊澄迎えに行くまでやってくか」

彼女につられて、千桜と駿も鞄から取り出す。
それはＰＳＰだった。
そしてソフトは勿論……

「じゃあ、私はボウガンでいくから……」

「俺はいつも通り太刀だな。
あ、装備変えてたんだ。先にギルド行ってて」

「ハチミツが足らんな。
家のボックスにあったかしら」

モンスターハンター、略してモンハンである。

「ところで何狩るんだ？」

「キ○ンでいこう」

「亜種？」

「うん」

「じゃあ装備は……」

何とも高校生らしい風景。
そんな夕暮れの生徒会室で、ヒナギク達が帰ってくるまで三人は狩りに勤しむのであった。

其の二十二　晴れ時々雨、所により雷雨に注意。そんな午後（後書き）

はい。
今回の話の前半。

まず茶髪の青年は某ギャルゲーの金髪君がモデルです。
キャラも似てます。

そして、梓という青年が使っていた変身能力。
あれはシャドウハーツの主人公ウルが使うフュージョンをまんま参考にしました。

青年が変身した化物はウルの“アモン”とほぼ同じ形容だと思ってくれて構いません。
梓という青年は同じように他にも様々な化物のフュージョン能力をもっています。

えっと、一応二人とも連載前から考えていたキャラクターです。
楓が最初に電話していた相手が彼等ですからね。

パクリが多くてすみません。
彼等が本格的に登場するのはまだまだずっと先です。

因みに次回は普通の妖怪退治になります。

では、後書きです！

三人娘の！！
☆諸事情ラジオ☆

美希
「はい、始まりました！
諸事情ラジオ、略して諸事ラジ！」

理沙
「ＤＪの我々三人娘と雑用の駿君でお送りしていくぞ！」

泉
「周波数は７６．５だよ～♪
皆よろしくね～♪」

美希
「では、早速最初のコーナーに」

駿
「待たんかいィィィイイイ！！」

三人娘
「？」

スタジオに響き渡る駿のツッコミ

駿
「いやスタジオって何処だよ!?
そもそもこれは何だよ!?」

美希
「何って、恒例の諸事情ラジオよ」

駿
「いや恒例違うだろ!?
初めて見たよこんなの!?
つーかここ何処!?」

理沙
「白皇にある秘密のスタジオだ。我々の秘密基地だな」

駿
「あ、そうですか……
じゃなくて!!また何でこんなコーナーを」

泉
「じゃあ本日のコーナーいきま~す♪」

駿
「無視すんじゃねーよ!!」

まぁ簡単に言うと、三人娘がテキトーに駄弁るコーナーです。

駿

「いや、それ生徒会通信と変わらないよね！？」

カンペ
『コーナー行って！』

駿
「いやカンペって何だよ！？」

美希
「はい。
では早速始めましょう。
今回はスタジオに素敵なゲストをお呼びしています」

理沙
「エターナル様の小説『とあるリリカル銀魂／ＳＴＡＹ　ＮＩＧＨ　Ｔストラトス』から、
遠坂凛さん、ギルガメッシュさん、セイバーさんです」

泉
「いらっしゃいませ～♪」

ガチャ……

凛
「ホントにこんな所にスタジオがあったの！？」

ギルガメッシュ
「ふん……
何故我がこんな場所にこなければいかんのだ……」

セイバー
「それより、お腹が空きました」

凛、ギル、セイバーの三人は三人娘と向かい合うように席に着く。

美希
「本日は、馬鹿な作者の無理なお願いに了解頂きましてありがとう」

理沙
「改めまして、ようこそ！
諸事ラジへ！」

凛
「いいえ、こちらこそお招き頂き光栄よ」

ギル
「まぁ、セイバーと一緒だから良しとしてやろう」

セイバー
「お腹が空きました……」

美希
「私は花菱美希よ
生徒会役員をやってるわ」

理沙
「朝風理沙だ。
風紀委員だ。よろしく」

泉
「瀬川泉だよ♪
委員長もやってるよ。
よろしくね～♪」

凛
「遠坂凛。
向こうでは銀時の彼女よ」

ギル
「ギルガメッシュ。
古最強の英雄王だ。
覚えおけ」

セイバー
「セイバーです。
好きな事は食事と剣です」

挨拶を交わす六人。

美希
「あちらは雑用兼ツッコミの鷺ノ宮駿君だ」

駿
「あ、どーも」

隅っこでペコリと頭を下げる

美希
「じゃあ駿君。
まずはゲスト様にお茶とお菓子をご用意して」

駿
「はい！？」

セイバー
「お菓子！？」

理沙
「うむ。
駿君の和菓子は最高級だからな」

泉
「とっても美味しいんだよ？」

セイバー
「是非頂きます！」

凛
「セイバー……」

理沙
「じゃあお願いな」

駿
「……はい」

そんな訳で渋々駿はスタジオを出ていく。

美希
「では、一旦ＣＭです」

～妖怪目録～

【黒鬼ブラザーズ】

・外観
全身真っ黒な身体。
瞳はギラギラと充血したように紅く、歯まで黒い。
１２人兄弟で長男は体長３ｍの超巨体。後の１１人は２ｍ弱

・説明
１２人兄弟の黒鬼。
かなりの乱暴達で妖怪界でもヤンチャで有名。
ならず者で人間界でも手を焼く退魔師も多かったが、駿と翼により瞬殺された。

・伝承
平安時代にとある国に仲睦まじい１２人兄弟が住んでいた。
源平合戦に巻き込まれ幼くして全員命を落として、怨みが募り具現化したと思われる

美希
「はい、ＣＭ明けでーす」

理沙
「お茶も用意出来たみたいだな」

ちょうどＣＭが明けると同時に駿が三人分の和菓子（塩羊羹）とお茶を持ってきた。

駿
「はい、どうぞ」

セイバー
「頂きます！」

駿

「どうぞ」

ギル
「ご苦労、雑種」

駿
「雑種！？」

凛
「ごめんなさいね。
これは彼の癖だから」

駿
「はぁ、そうなんですか」

駿はお茶、和菓子を並べるとひっそりと隅に下がっていく。

セイバー
「む！？これは……！！」

凛
「あ、美味しい！」

ギル
「ふむ、そこそこ。
我の口にはふさわしいな」

駿
「あ、そうですか？」

しかし、それを聞くと駿は直ぐにパッと顔を明るく輝かせる。

セイバー
「あの！」

駿
「？」

セイバー
「お代わりです！！」

セイバーは目をキラキラさせて小皿を差し出す。

駿
「あ、はい。
わかりました！！」

駿は嬉しそうに立ち上がるとスタジオを出ていく。

美希
「いや～、本当に駿君の扱い易さは天下一品ね」

理沙
「そんな彼は置いておこう…」

泉
「面白いけどね～」

美希

「そういえば、さっきさらっと言ってたけど……
凛さんは彼氏がいるのね」

凛
「ええ。
坂田銀時って言って、普段はマダオだけど決める時は決める人よ」

セイバー
「確かに今は凛の男性ですが、
私も負けるつもりはありません」

羊羹を食べながら言うセイバー。

美希
「おお！
何だかややこしい事になってるな」

凛
「ホントにややこしいわよ。
セイバーは良いとしても、フェイトだったり他にも……」

理沙
「ほぅ、かなり罪作りな人だな。その銀時という男性は」

泉
「ハーレムだね♪」

三人娘
「駿君とは大違いね」

駿
「いじめですか！？」

美希
「あ、ギルガメッシュさんはセイバーの事が好きという情報がありましたが、最近はどうも悩んでるとか……」

ギル
「何故貴様がそんな事を知っている！？」

美希
「政治家の娘だから。
調べるのは得意」

ギル
「それは……
ここでする話では無いだろう」

凛・三人娘
（かわしたな……）

セイバー
「お代わりです！」

一同
「また！？」

チャララ～ン♪

美希
「ん、そろそろ終了の時間か」

泉
「時間が経つの早いね～」

理沙
「では、最後に三人に作品の宣伝をしてもらいましょう！」

凛
「え？
あ、えっと……
剣あり、魔法あり、科学あり、ＩＳありのクロスオーバーファンタジー！！」

ギル
「我の活躍を見逃すなよ。
他はどうでも良い」

セイバー
「万事屋の家計も厳しかったり、卵かけご飯しか食べられなかったりしますが…」

凛
「二人ともちゃんとやりなさいよ！！」

セイバー
「では三人一緒に……」

ギル
「仕方あるまい」

凛・ギル・セイバー
「『とあるリリカル銀魂／ＳＴＡＹ　ＮＩＧＨＴストラトス』
よろしくお願いします！！」

美希
「はい、そんな訳で
エターナル様からのゲスト、遠坂凛さん、ギルガメッシュさん、セイバーさんでした！」

理沙
「ありがとうございました！
とても面白い作品なので、皆様是非読んでみて下さい！」

泉
「ではでは、本日の諸事ラジはここまでです♪」

美希
「次回は一体どんなゲストにお越し頂くのか？」

駿
「いや、またやるのかよ！？」

理沙
「次回もよろしく！」

泉
「なのだ～♪」

駿
「聞けェェェェ！！！」

其の二十三　不可思議な依頼（前書き）

募集していた女性オリキャラは決定いたしまして、
闇夜の黒鳥さんのオリキャラを採用させて頂きました。

皆様本当に素晴らしいキャラクターばかりで、独断で選ぶに選べない状況になってしまったので、
あみだくじで決めてしまいました。

せっかく投稿して下さった皆様、選べなくて本当にごめんなさい。
そしてご協力ありがとうございました！

では、始まります！

其の二十三　不可思議な依頼

妖怪退治に悪霊除霊。
退魔に成仏に封印……

この世に残った様々な未練や怨恨に向かい合い、人成らざるモノやコトに対処するのが鷺ノ宮家の仕事であり生業なのである。

この世界は不思議な事や不可解な現象、科学では説明や実証出来ない事象が数え切れないほど存在している。
科学は決して万能などでは無い。科学が“万能学”であるなどと決定付けたのは近代で最も愚かな考えの一つであり、最も恥ずべき人類の行為の一つである。

話は反れたが、あらゆる不思議な出来事や現象には何かしらの原因が存在する。
それは人為的である事もあれば、そうで無い非科学的な場合だってある。だから、それが妖魔や霊の仕業の可能性があるかを調べるのもまた鷺ノ宮の仕事なねだ。
例え違ったとしても彼等は調査をしなければならない。

なぜなら……

それらの可能性を探る事が出来るのは彼等にしか出来ない事だから

である。

・・・・・

「はぁ……
謎の症状ねぇ……」

「はい。
被害はまだ三件と少ないようには見えますが……
一昨日の時点では報告が無かったなりますから……」

夜の鷺ノ宮屋敷。
その屋敷の廊下では駿と伊澄が歩きながら話を交わしていた。

内容は勿論依頼の事かである。
今日の昼頃に鷺ノ宮家に入ってきたのはこんな依頼だった。

『原因不明の患者が増え始めている』

事の始まりは昨日の明け方。
ある女学生が倒れているのが発見された。
病院に運ばれ、無事に意識も戻ったかのように見えたのだが、
表情が虚ろで物も喋る事が出来ない状態だという。
しかも原因が一切不明で、医師もお手上げの状況。
『まるで魂が抜けたようだ』と

鷺ノ宮家にその依頼が来た経緯は二つある。
そんな症状の人間が一人だけでなく他にも二人発見され、尚その原因が一切不明により医師から鷺ノ宮家関係を頼りに伝わってきたのが一つ。
もう一つは『これは魔の物の仕業だ』といい加減なデマカセを言うインチキ祈祷師の話を間に受けた一部の親族や知り合いが風の噂で鷺ノ宮家の話を聞き付けて匿名で連絡してきたのだ。

よって、依頼内容は一つだが依頼の数は数件来ている事になる。

「でも、それだけだと悪霊の仕業かどうか分からないんじゃ…」

「確かにそうですが……
全て深夜から明け方に起こった事のようですし、妖怪の可能性はかなり高いと思います」

「だとしたら、厄介だな。
『魂が抜けたようだ』ってのも気になるし」

「そうですね……
そういう類いの妖怪なのかもしれません」

駿が部屋の引き戸を開けてゆっくりと自室に入った。
伊澄もまだ話があるのか彼に続いて入る。

『あ！！』

二人が部屋に入ると、
ぴょんぴょんと小さな熊が二人に近づいてきた。

『伊澄！！
おかえりーー！！』

「まぁ、アクちゃん
ただいま」

それは鷺ノ宮家が家に保護（？）している妖怪の悪熊だった。
悪熊が走ってくると伊澄は優しく抱きしめてあげる。

「おい、にやけんなクマ公」

『うるさいやい駿！！』

抱きしめられて嬉しそうにする悪熊に駿はジト目でそう言う。

旅行から帰ってきた伊澄は最初は悪熊に驚いたが、駿や初穂が事情を説明すると納得して悪熊を可愛がるようになった。
悪熊も優しくて綺麗な彼女にあっという間になついたのだ。

「被害はこの近辺に集中していますから、今夜から早速動いてみましょう」

「妖怪絡みじゃねーと良いんだけどな」

「その可能性を探るのも鷺ノ宮の仕事ですよ」

悪熊の頭を優しく撫でながらそう微笑む伊澄に駿は軽く頷いて返した。が、その内心はそんな彼女の様子に『可愛い！！』とのたうち回っている事だろう。

「でも、話を聞く限りはそっちの線が強いな」

「？」

駿は学ランを部屋の壁にかけると、畳の上に座り込んで悪熊を膝に乗せる伊澄に向かい合ってそんな言葉を口にした。
不思議そうに彼女は首を傾げるので彼は続ける。

「いや、だっていくら深夜だと言っても通行人くらい何人かはいるだろ？
そんな深夜に学生に何かあったら誰かしら気付くだろ。
本人だって深夜なんだから自分の身にかなり気を配ってる……
変な奴が近づいてきたり話かけてきたりしたら逃げるなりなんなりする筈だ」

「確かに、そうですね。
そう考えると妖怪の仕業の可能性が高いです」

伊澄は駿の言葉に納得したように頷いた後、続けて口を開く。

「ですが、もしそうなら気配で察知出来ますから簡単に解決できると思いますよ」

「それもそうだな」

そうなのである。退魔という職業柄、二人は悪霊や妖怪の気配にかなり敏感だが、数ある退魔師の中でも伊澄はずば抜けてその気配を察知する能力に長けている。
だから彼女は、普通の妖怪は勿論姿をくらましている妖怪でもたちまち発見する事が出来るのだ。

ならば解決は早いだろう。
勿論倒せればの話だが。

「ともかく
深夜に出てみよう。
話はそれからだな」

「はい」

駿がそう言って立ち上がると、彼女も首を縦に振る。
すると彼は伊澄の前まで来て彼女の頭を優しく撫でた。

「お、お兄様……！！」

彼女は頬を赤らめて慌てたようにパタパタと袖を振る。

『伊澄？
赤くなってる？』

「なってません！！」

悪熊が可愛らしく首を傾げて尋ねると顔を赤らめたまま大きく首を振った。

「んじゃ、俺はひとっ風呂浴びてくるから。先に居間に行っててくれ」

「あ、はい」

駿が部屋を出ていこうと戸に手をかけたので伊澄は立ち上がる。

「じゃあ行きましょうアクちゃん」

『あれ、もうこの部屋出てっちゃうの？駿が居ないウチにのこっそり隠してる物とか探さないの？』

しかし悪熊はちょこんと畳の上に座り込みそんな事を言い始める。

「隠してる物？」

「はぁ？お前何言ってんだよ？」

伊澄に続いて駿も手を止めて悪熊を振り返る。

『え、だってこの前畳の下に本を隠して……』

「ばっ！？クマ公！！てめっ！！」

一気に青ざめた駿が止めようとするが、悪熊は隅っこの畳を一生懸

命持ち上げた。
そして……

『ほら』

「い〝い!?」

下から出てきたのは、思春期の男子ならば必ず持っているという女体満載のピンク色の雑誌だった。出てきたそれらの表紙には『人妻』や『お姉さん』の文字が堂々と浮かび上がっていた。

「……」

「ち、違う!!
違うんだ伊澄!!
これはアレ、生徒会で募集したアレで!!」

「……」

「あ、あの……
伊澄さん?」

慌てて言い訳をする駿。
それに対して伊澄は黙ったまま彼に背を向けていたが、暫くしてゆっくりと振り返る。

「少しお話ししましょうか。
お兄様♪」

「……」

その夜……
鷺ノ宮家に、
笑顔の悪魔が降臨した。

其の四　不可思議な依頼

「はぁ……」

深夜。
人気も一切無くひっそりとした商店街を歩きながら駿は盛大にため息をついた。

『まぁ、仕方ないよ』

「誰のせいだよ……」

駿は肩の上に乗った悪熊を睨み付けた。
ため息の理由は勿論エロ本の件である。
結局、駿の見苦しい言い訳も虚しく全て跡形も無く燃えてしまったのだ。

「あんな本の事より、仕事に専念して下さい」

「そんな殺生な……」

まだ少し怒っているようで、伊澄は頭につけたウサミミでビスビスと駿を突いている。

「でも、健全な男子だったら必ず持っているものなんだ。
今これを読んでいるそこの君も！！画面の向こうの貴方も！！」

『誰に向かって話してるの？』

駿は空に向かって思いきり指を突き付ける。

「で、でも！
お兄様にはまだ早すぎます！」

「確かに俺は見た目は１６歳だけど中身は既に１８歳なんだよ。
だから……」

意味が分からない。

「ダメです」

「早いよ!?」

駿が言い終わらないうちにキッパリと一刀両断する伊澄。
彼女は頑固なので多分これ以上何を言っても無駄な気がする。

「それはそうと……
さっきから気になっていたんだが……」

「はい？」

駿は話題を変えるように一息おいて伊澄に改めて振り返る。

「頭に付けてるソレ、何？」

彼が指差す伊澄の頭には、大きなウサミミが付いていた。
先程はスルーしたが今ようやく突っ込む気になったらしい。

「これは探知機『ズラうさ』
何かを頭の中に思い浮かべるとそれがある方向をこのウサミミが示してくれるという……
そんな便利な道具です」

「……便利？」

「はい。このズラうさと私の察知能力を併用すれば迷う事無く妖怪の元にたどり着けます」

「……」

伊澄がそう言うと頭のウサミミがクリンクリンと動いた。
駿はそれを見て暫くどうしようかと考えていたが……

「白皇学院はどっちだ？」

取り敢えず試してみる事にした。

すると、伊澄のつけたウサミミがピコピコと左右に動き始める。
そして二本とも左に向いた。

「あっちです」

「……」

見事に白皇学院の大まかだが方向は合っていた。

「なるほど、
伊澄の方向感覚よりは数百倍宛にはなるな」

ビスビスビス……

駿がそう言って頷くと伊澄は怒ったようにウサミミで彼を突き始める。

「でも、そんな便利な道具があるならいつも使えば良いじゃないか」

「いえ、これは一回使うと次に使うまでに暫く時間が必要なので多用は出来ないのです。

何しろ、鷺ノ宮家の宝具ですから」

「……宝具？」

聞き慣れない言葉に彼は思わず聞き返した。

「はい。このズラうさは代々伝わる由緒正しき鷺ノ宮家の宝具の一つです」

「……」

「お兄様？」

「いや、もう無理。ツッコミ切れん……」

彼は額に手をやると呆れたようにため息をつく。

鷺ノ宮家の将来が激しく不安になる駿であった。

○

そんな訳で……

意味があるかどうか分からない最初のやり取りも含め深夜の被害現場近辺を捜査、調査を開始した鷺ノ宮兄妹だったが……

一時間後……

「おかしいです……」

「そうだな」

二人は調査開始をした場所である負け犬公園に戻ってきていた。
そして二人は首を捻っているのである。

「妖怪や悪霊の気配が一切感じられません……
ズラうさも一切反応しませんし…」

「ズラうさはともかく、
伊澄の勘が一切感じられ無いのはおかしいな……」

伊澄の察知能力は飛び抜けているのだ。
だから、この近辺のみならずいくらか離れていても妖魔や悪霊の気配がすれば感づける。

だが、先程からそんな気配は微塵も感じられ無い。

「クマ公はどうだ?
何か感じたか?」

『ううん
何にも感じ無かったよ』

肩に乗っかる悪熊も首を振ってみせる。

「やっぱり、妖怪の仕業じゃ無かったんじゃねーか？」

「そうなんでしょうか……」

駿はそう言うが、伊澄は腑に落ちないように首を傾げる。

チリーン……

「「？」」

すると、二人の後ろからベルの音が聞こえてきた。
振り返ると自転車に乗ったお巡りさんがこちらにやって来ていたのだ。
人の良さそうな白髪頭の老人の警察官だ。

「君達、こんな時間に何やってるんだい？」

「あ……」

警察の人間にしてみれば、この状況は良くない事だ。
今は午前2時半。学生が出歩いて良い時間は午後11時。

「ダメじゃないか。
君達はまだ学生だろ？
今は何時だと思ってるんだい？」

「あ～、えっと……」

その言葉に二人はどうしようかと困ったように顔を見合わせる。
何も『妖怪の調査』なんて言う訳にはいかないだろう。

「まぁ、何にしても早くお家に帰りなさい。
もうこんな時間なんだから」

「あ、はい」
「すみません」

老人の警察官は二人には深く理由を聞かずに優しい笑顔でそう言ってくれた。
駿達はそういう状況になってしまっては仕方ないと引き上げるしか無いだろう。

「気をつけて」

老人はニコリと微笑みまた自転車を漕ぎ始めて去っていったのだった。

「取り敢えず、今日はもう帰ろうか」

「そうですね……」

二人も警察官を見送ると、仕方無しに鷺ノ宮屋敷に帰る事にする。

「さぁ、出番だ伊澄。
我が家の方向は？」

駿の言葉に、またも伊澄は頭の上のウサミミをピコピコと左右に動

かす。
暫くしてウサミミは両方とも右をさした。

「こっちです！」

「よし、流石鷺ノ宮の宝具。
やはり伊澄の方向感覚の３００倍は使えるようだ」

ビスビスビス！！

怒ったように駿をウサミミで突っつく伊澄。

『……』

「ん？
クマ公？どうした？」

『え！？』

そんな帰り道の途中、駿は肩の悪熊の様子に気が付いた。
悪熊が喋る事もせずにずっと一点を見つめ続けていたからだ。

『う～ん、何か……』

「何か？」

『やっぱり分かんないや』

「？」

悪熊は首を捻ってそう言うので、駿もよく分からないが取り敢えず気にせず帰路に着く事にするのだった。

このままいけば、
二人は今回の依頼は妖怪関係では無いと結論付ける筈だった。
しかし……

翌朝……

『速報です。
今日未明、東京〇〇区で路上で学生が意識不明の状態で倒れているのが発見されました。
倒れていた学生は意識は取り戻しましたが、喋ることは愚か何に反応する事も出来ずに未だ原因は一切不明だそうです。
このような症状はこれで今朝発見された六名の学生とあわせて計七名になりました。更に、昨日未明にも同じような状態の患者が三名病院に運ばれていることから、警察では……』

「どういう事だ……」

駿と伊澄はテレビで流れるニュースを見て愕然としていた。
今日の明け方、何と依頼にあった状態の人間が七人も発見されたというのだ。

計七名の人間は依頼にあったように全員夜遊びをしていたらしい学生達。
しかも全員が発見された時間から考えて昨日の深夜に、駿達が調査していた場所からそう遠くない所で意識不明になり倒れたらしいというのだ。

「昨日の深夜……
そんな……」

「場所も近いな……」

伊澄は信じられないという表情で駿を見る。
彼も平静を保った様子だが、僅かに目を見開いてニュースを見つめている。

「でも、妖魔の気配も悪霊の気配しませんでした……」

「ああ、伊澄がそう言うならそうなんだろうな。
だけどコイツは……」

異常事態……
ただの病気では無いことは確かであろう。
むしろ霊関係や妖怪関係の可能性が限りなく高い。
「お兄様」

暫くしてニュースが別の話題に移ると、伊澄は真剣な目を駿に向ける。

「ああ、分かってる……」

駿は立ち上がると時計を見上げて息をつく。

「俺は生徒会もあるから、
白皇（むこう）の資料倉庫で色々調べてみるよ」

「分かりました。
私も少し、大おばあさまにお聞きしてみます」

そう言って軽く頷き合うと、
駿は急ぎ足で白皇学院に、伊澄は居間から廊下に出ていく……

『あ！！
待ってよ馬鹿駿！！』

「馬鹿っていうな」

悪熊も慌てて駿を追いかけていった……

其の二十三　不可思議な依頼（後書き）

三人娘の（＋雑用）！！

☆諸事情ラジオ☆

美希
「はいっ！
本日も諸事ラジの時間がやってきました」

理沙
「ＤＪは毎回おなじみの、
朝風、花菱、瀬川でお送りします」

瀬川
「なおこの放送は、
白皇学院並びに下記のスポンサーの提供でお送りして」

駿
「スポンサーなんていねーよ！！
それに下にテロップも出ないから！！ラジオだからねコレ！！」

美希
「と、まぁこんな感じでいつも通りグダグダと進行していきます」

理沙
「では、今回も素敵なゲストをお呼びしています」

駿
「なぁ、一つ思ったんだけど」

泉
「どうしたの？」

駿
「この作者ってあんまし知り合い居ないから、ゲストも何回かやったら無くなっちゃうんじゃね？」

美希
「甘いな、駿君。
そんな事はとっくに考えてあるさ」

駿
「お、おう……
そうか」

理沙
「本編と同時に起こっていた我々の話をテキトーに駄弁る」

駿
「それ生徒会通信と変わんない！！長くもつけれども！！」

泉
「じゃあ、早速今回のゲストをお呼びしましょう♪」

美希

「デビルマン様の小説『ハヤテのごとく！～超不幸な青年の物語～』から御剣桂馬さんでーす！」

ガチャ……

桂馬
「あ、こんにちは。
御剣桂馬です」

美希
「わざわざお越し頂きありがとうございます。
では、こちらに」
桂馬は三人の席と向かい合う席に座った。

美希
「私は花菱美希。
まぁ、向こうの世界では多分お世話になってますね」

理沙
「朝風理沙だ。
やはりこの場合は先生と呼んだ方がいいかな」

泉
「瀬川泉だよ♪
向こうでは色々と接点があるみたいだね！」

桂馬
「改めまして、御剣桂馬です。

向こうでは三千院家の執事と白皇学院の教師をやらせて頂いてます」

挨拶を交わす四人。

駿
「あ、俺は」

美希
「雑用です」

駿
「辛辣ですね！！」

理沙
「では、駿君。
桂馬さんにお茶をお出ししてくれ」

駿
「……はい」

美希
「じゃ、その間にＣＭでーす」

夏休み最後のひとときを利用してお嬢様達が田舎へＧＯ！？
ゲームも最新の電子機器もないそんな場所で彼等を待ち受けるものとは！？

劇場版ハヤテのごとく！
～ＨＡＥＶＥＮ　ＩＳ　Ａ　ＰＬＡＣＥ　ＯＮ　ＥＡＲＴＨ～

絶賛公開中！！らしいです！
（僕はまだ見てないけど！！）

泉
「やっほ～♪
ＣＭあけたよ」

美希
「では、早速桂馬さんと色々トークをしていきたいと思います」

桂馬
「あ、よろしくお願いします」

理沙
「早速だが、
三千院家の執事と白皇の教師の両立と凄く大変そうな桂馬さんだけど、なんと彼はライトノベルの超人気作家でもあるのだ！！」

美希・泉
「ええーーっ！？」

桂馬
「いえ、そんな大層なものでは……」

泉
「そんなにお仕事いっぱい抱えて……一体どんなスケジュールなの！？」

美希
「かなり気になるわね」

桂馬
「そうですね……
朝は４時半には起床して朝ごはんの下ごしらえや掃除等の執事業務を、７時半には学院にいって担当の教科の軽いチェックと担任の桂先生との打ち合わせ（居れば）、
放課後は明日の準備と生徒さん達の話を聞いてあげたりしてから帰ります。
屋敷に帰ったら大体１２時くらいまで仕事をして、その後ライトノベルの原稿に取り掛かりますから…寝るのは４時くらいでしょうか。
そしてまた４時半に起床を…」

三人娘
「さ、３０分睡眠！！」

桂馬
「忙しい時はですよ。

軽い時はもう少し睡眠をとらせて頂きます」

泉
「でも凄い一日だね～
桂馬さん大変だ～」

理沙
「しかし全てを完璧にこなしてしまうから素晴らしいな」

美希
「因みに駿君も結構ハードな一日よね？」

駿
「まあね！
日のある内はは伊澄の安全に終始気を遣い、
夜は漫画とゲームで寝るのは午前６時くらいだからな」
→ようやく話が振られて嬉しい

三人娘
「はぁ～」

駿
「何だよ？」

三人娘
「主人公というポジションは同じなのにこの違い……」

駿
「うるさいよ！！」

桂馬
「ハハハ……
あ、すみません。
そろそろ仕事の時間が」

理沙
「む、もうそんな時間か」

美希
「では、桂馬さん！
締めで小説宣伝を！」

泉
「どうぞ～♪」

桂馬
「えっと、僕が出演してます
『ハヤテのごとく！～超不幸な青年の物語～』
是非、見てみて下さい！」

美希
「はい、忙しい中本当にありがとうございました。
御剣桂馬さんでした」

理沙
「次回も諸事ラジをよろしく！」

泉

「そして次回も諸事情をよろしくね～♪」

駿（くうき）

「このルビ嫌がらせかなんかですか！？」

其の二十四　明暗（前書き）

伽藍
「前半ギャグ、後半ちょっとだけシリアスです」

駿
「そういう意味もあってのサブタイトルなんだな」

伽藍
「まぁ、ちゃんと他の意味もあるけどね」

駿
「では、始まります！！」

其の二十四　明暗

ガチャ……

「あ、翼君。
おはよう。今日も早いわね」

「ん、おはよ」

午前7時

生徒会室にヒナギクが入って来ると先に来ていた翼が顔を上げて彼女に挨拶を返した。

ヒナギクが室内を見回すと翼以外はまだ来ていないようである。

「あれ？」

しかし、彼女は自分の机まで来てある事に気が付いた。
翼の席の隣に彼のものとは別のもう一つの鞄が置いてあったのだ。

「駿君も来てるの？」

「ああ」

その鞄とは鷺ノ宮駿のものだ。

こんな早くから彼が登校している事に少し驚くヒナギク。
彼はいつも時間ギリギリに到着する（理由は伊澄と離れる事を極限まで嘆いて神に祈っているという大変面倒且つシスコン全開の習慣があるため）から、こんなに早い時間帯に来ている事は極めて珍しい事なのである。

「アイツなら登校して来るなり直ぐに生徒会室を出ていったよ。何でも学院の地下資料倉庫に行くとか何とか」

「資料倉庫？
あの場所って……
確かもう読まれ無くなったり使われ無くなった本や資料が置いてある所よね。
生徒はおろか先生だって大掃除の時くらいしか開けないっていう」

「らしいな。
そんな場所の為か怪談話も色々と囁かれてる事もあるみたいだけど」

ヒナギクはますます不思議そうに小首を傾げる。

「どうしてそんな所に？」

「さぁ？
ただ『調べものがある』とだけ言い残して出ていったよ。
あ、でも『会議までには戻る』とも言ってたけど」

「そう……」

翼もさっぱりという風に肩を竦めてみせた。
彼の謎の行動に疑問は残るばかりだが、取り敢えず頷いて自分の席

に着くヒナギク。

「でも、調べものに没頭してたら時間なんてすぐに忘れるから……時間になったら呼びに行った方が良いかもな」

「ええ。じゃあ15分前くらいになったら私が呼びに行こうかな」

彼女は鞄を置いて時計に目を向けてそう言った。

「ああ。そうだな。んじゃその前に……今日も朝練に行くか？」

「勿論」

翼の言葉にニッコリと頷くヒナギク。そうして、二人は竹刀の入った鞄を手に取って生徒会室を後にし、武道場に向かうのだった。

其の五　明暗

白皇学院には特定の校舎には地下施設が設けられている。
例えばスポーツジムや室内プール等の運動施設。
或いは事務管理室や機会管理室、防犯カメラのモニタールーム等の安全管理施設等。
各校舎に振り分けられた地下には白皇を運営するのに必要だったり生徒の部活に必要な様々な施設が存在するのだ。

だが……
そんな地下に、他の施設とは極めて異質な場所がある。

旧校舎寄りの一つの新校舎。
予備準備室や副教材予備倉庫等の滅多に人が寄り付かないその校舎の地下。

そこに地下資料倉庫と称される場所がある。
名前の通り、地下のかなり広いスペースを使って古く使われ無くなった書籍や資料、或いは図書館から押しやられた本達、更には古い巻物まで置いてある。

ただでさえあまり人が寄り付かない校舎にあるのに、使われ無くなった書籍等が置いてあるそんな所に足を運ぶ生徒などほとんど、いや全くと言っていい程居ない。
生徒は勿論教師ですら大掃除の時、下手をすれば一年に一回一人来るか来ないかの頻度である。

だからこそ、生徒間で怪談話や幽霊の噂も飛び交う訳で。
ますます人はこの地下資料倉庫には足を運ばなくなるのだった。

その倉庫にある書物はとんでもない量である。
文字通り山のような数であり、ありとあらゆる専門分野の書物に古くから残されている年表までとにかく何でも置いてあるのだ。

しかし、へんぴな位置に加え噂もあってかやはり人はこの場所には足を運ばないようだ。

その校舎の一階の脇にある古めかしい階段を降ると、
無機質で薄暗い地下通路にひっそりと佇む厚い扉が前方に現れる。
その先に地下資料倉庫の室内が広がっている……

資料倉庫内部は比較的綺麗で埃も舞うこと無く、室内の隅々はシンとした雰囲気に包まれていた。
ただ室内の至るところに書物が所狭しと並び、或いは山のように積んである。

「……」

そんな資料倉庫の中心にその青年、鷺ノ宮駿はいた。
目の前のテーブルに広げたかなり古めかしい書物をパラパラと捲りながら時折考えるように口に手を当てては、また捲っていく。

彼の四方はあらゆる書物や巻物で囲まれ、その高さは裕に１ｍは越えている。

そんな山のような書物達に囲まれながら彼は厚ぼったい書物を速読していっているのだ。
一通り読み終わっては次、読み終わっては次といった具合に次々と読み物を変えてゆく。
それは人間の読める速度の限界を超えているのではないかと思われるほど速く、またとてつもない集中力であるのだ。

しかし更に驚くべきは、先程から彼が読んでいるものは古来より日本に伝わりし古文書や巻物。
つまり書かれている文字は現代語では無いのだ。

何故そんなものがこの白皇学院にあるのか。
実はこの古い書物の数々は白皇のものでは無く、ほとんど鷺ノ宮家の書物庫にあったものだ。

鷺ノ宮家はよく白皇のゴーストスイーパーとしての依頼をよく引き受けているので顔がきく。
だから鷺ノ宮の滅多に使われないが時々は使うかもしれないので捨てる訳にもいかない古き書物達を特別にこの場所に置かせてもらっているのだ。

その書物はほとんどが妖怪関係で伝承録や絵巻物だ。
ここならば人は来ないので鷺ノ宮の人間が使うのに何かと便利なのである。
来たとしても鷺ノ宮家の書物や古文書は資料倉庫の奥深くにあるので見つかる事はまず無い。

要するに、鷺ノ宮の人間の秘密の資料場といえばわかりやすいだろう。
ただ伊澄は毎回迷子になるので未だたどり着いた事は無いが。

「……ん？」

暫く書物を捲っていた駿は、何かに気付いたのかある一枚でピタリと手を止めた。

その古く茶色に変色した一枚には羽が生えて人間の身体に和風姿、首がやたらに伸びていて顔が烏の妖怪の絵と筆で文字が羅列されていた。

『烏天狗』

右端の題名の所にそう書かれていたのだ。

「天狗か……」

駿は右端の乱雑に並んだ文字に目を移してゆく。

「……ん？」

何かを見つけたのか一瞬目を見開くと、先程よりゆっくり丁寧に文字を読んでいく。一読してもう一度しっかりと指で文字をなぞっていく。
そして……

「これか！！！」

バンとテーブルを叩いて立ち上がってそう叫んだ。
と同時に、彼の周りに積んであった書物が揺れて……

「へ？」

物凄い量の書物が一斉に一気に駿の元に崩れ始めた！！

「えええええ！？」

＊

「それじゃあ、ちょっと駿君を呼んでくるわね」

「ああ、俺は先に生徒会室行ってるから」

武道場での朝練を終えて胴着姿のままヒナギクは地下資料倉庫に向かうことにした。翼は場所が分からないので先に生徒会室に戻って準備をするという。

「ここね……」

そんな訳で、彼女は旧校舎寄りの新校舎に入って地下への階段を探し始める。
その階段は程無くして見つかったので、彼女は恐る恐る降っていくことにする。

「校舎っていうより廃虚になった病院みたいね……」

無機質な通路に出るとまずそんな感想が口に出た。
若干生暖かい風が通り抜けるのを不気味に感じながらも彼女は前方にある扉に歩いていく。

（本当にこんな場所に駿君がいるのかしら？
っていうか、調べものならこんな怖い場所じゃ無くて図書館にいきなさいよ！）

お化けとか怖い場所は平気なのでは？

（こういうのが平気な女の子なんていないわよ！）

そんなこんなでようやく扉に手をかけると、それはギチギチと軋みながらゆっくりと開いた。

そして視界に広がってくるのは資料倉庫の室内。
気のせいか埃がいくらか舞っているような気がするがそれより…

（これは……
想像以上に酷い散らかりようね…）

見渡す限り地面は書物の山で埋め尽くされていた。

ヒナギクは呆れたように周りを見回すと、先程の薄暗い通路から明るい室内に入った安心感からか中に進んでいく。

「駿君～もう時間よ
居る～？」

彼女はそう声をかけるが返ってくるのは静かな返事だけ。
物音一つしない。

「もうすぐ9時だから生徒会の時間なんだけど……」

そう言いながらどんどん奥に足を踏み入れていった。

ガサッ……！！

「？」

と、いきなり彼女の近くで何か物音がした。
しかし見回しても何も居ない。

「え、えっと……
駿君？い、居るんでしょ？」

只でさえ怪談話が囁かれるこの地下資料倉庫。無機質で薄暗い通路がかなり不気味だったこともあってヒナギクは若干身体を強張らせて尋ねる。

すると次の瞬間！！

ガバッ！！

「！！？」

彼女の足元付近の地面を埋め尽くしていた本の間からいきなり手が伸びてきたのだ！

「キャアアアア！！」

ヒナギクは悲鳴を上げると同時に持っていた竹刀でその手を思いきり叩きつけた。
しかし手はそれから逃れるように左右に動いて本の間から出てこようとする。

「っ！？」

彼女は怯えて声にならない悲鳴を上げるがそれでも竹刀を思いきり振るう。ある意味凄い。

だが手はドンドン伸びてくる……ヒナギクは恐怖から涙目になってはいるが更に竹刀に力を込める訳だが……

「痛っ！？痛いって！！
俺だ俺！！」

「え？」

そんな感じで散々滅多打ちにあっていた手ではあったがドンドン伸びてくると共に聞き慣れた声が聞こえてくる。

「ひょっとして……
駿君！？」

「ようやく気付きましたか……
取り敢えず助けて下さい」

そう。本の間から伸びている手は駿のものだった。
彼は書物に生き埋め状態にされていたのだ。

ヒナギクが周りの書物を退けて手を引っ張るとガラガラと音をたてて駿が息も絶え絶えに這い出してきた。

「はぁ……はぁ……
書物に埋葬されるかと思った」

「……」

「いや～
途中ボコボコにされていた気はするけど、とにかく助けてくれてありがとう」

駿はそう言ってヒナギクに振り返るが……

「……」

「え？あれ？
ヒナギクさん？会長？」

彼女は黙ったまま俯いていたが手に持っていた竹刀をゆっくりと持ち直す。

「こんな……」

「へ？」

「こんな怖い登場の仕方をするなーーーーっ！！！」

ドオォォォォン！！！

本日二度目の命の危険が彼を襲うのだった……

＊

「お、ようやく帰ってきたか駿」

駿とヒナギクが生徒会室に戻るとまだ居る生徒は翼だけだった。
愛歌は欠席との事だったので来るならば千桜と三人娘だろう。

「ってか、お前なんでそんなにボロボロなの？」

翼は駿を見て当然の疑問を口にする。駿は左手が傷やアザだらけで後は顔も傷だらけだった。

「え、えっと……

駿君は、そう！落ちてきた本の下敷きになったらしいの」

「まぁ、それもあるけどな…」

慌てて説明するヒナギクに駿は憮然とした表情で一応頷きはしたが……

「でも、この痛々しい傷の数々のほとんどは隣の悪魔によって行われた所業なんだ」

「な、誰が悪魔よ！！」

「無抵抗の学生を竹刀で残虐に叩きのめす奴を悪魔と言わずに何と言いますか！！」

「だからアレは不可抗力だって謝ったじゃない」

「後半のは不可抗力でも何でもないよな！？」

そんな二人の言い合いを見て翼は何となく事情を察した。経緯はどうあれ、また駿がヒナギクにボコボコにされたのだろうと。

３０分後……
千桜とかなり珍しく三人娘もやってきて生徒会が始まった。
会議や談笑、三人娘の悪ふざけでヒナギクが怒って始まる追いかけっこ等、生徒会はいつも通り進んでいた。
だがその間、駿だけはいつもと違いずっと考え事をしていた。
あまり周りには目立た無いように時折話し合いやふざけに参加し上手い具合に普段通りを装いながら……
昼になって、本日の生徒会が一旦終わった。
ヒナギク達は三人娘に連れられて学食に向かったようだ。
翼はノートパソコンを開いて座っている。
駿はと言うと……
《なるほど……
天狗ですか》
「ああ。規模や特徴を考えると“大天狗”なんて上級妖怪じゃなくて“烏天狗（小天狗）”あたりね中級だと思うよ。
書かれていた過去の事例にも今回と同じようなケースが載っていたから」
人気の無い場所で伊澄と電話をしていた。因みに伊澄は携帯が使えない（開けない）ので家の古い電話機を使っている。
《確かにその類いならば人に姿を変えて気配を消す事が可能ですね》

「そうだ。
でもそこが引っかかるんだよ」

彼が考えていた事は、
どうして“誰も気付いていなかったのか”という事だった。
いくら深夜とはいえ、夜遊びしていた学生ならば近くに仲間もいる筈だし不審な人間が近づいて来たら普通は分かるだろう。
人に化けた天狗ならば天狗の姿に戻らなければ今回のような生気を吸う事は出来ないので尚更だ。

人目のつかない場所に連れていかれたにしても、時刻は深夜。
本人だって何より警戒している筈なのに見ず知らずの他人にそう易々とついていくだろうか…

（いや、待てよ……？）

突然ある事が駿の頭を過った。

（そういえば居るじゃねーか……あの時間帯でも不審に思われる事無く、寧ろ自然な人間が……
だとすれば……）

駿は目を細めると……

「おい、クマ公。
お前昨日の深夜、何か変な気配を感じたか？」

『え？』

先程まで翼に預けられていた悪熊を肩に乗せていた駿は不意にそんな事を尋ねた。

「昨日の深夜、何だかお前の様子がおかしかった。それは何か不審な気配に気付いたからじゃ無いのか？」

『う、うん……でもちょっとだけだよ？気のせいかなと思うくらい』

「それっていつ頃だ」

『えっと……帰りくらいかな？』

駿はそれを聞いてほぼ確信したように頷いた。

「伊澄、大方の見当がついた。少し調べてから帰るから、お前は自分の力の準備をしといてくれ」

《え？あ、はい……》

ピッ……

駿は携帯を閉じると、肩に悪熊を乗せて生徒会室に向かい始める。

『駿、分かったの？』

「まだ決まった訳じゃないからな、しっかりと裏をとらねーと」

そんなやり取りのうちにエレベーターは生徒会室の前で開いた。
駿はやや急ぎ足で生徒会室に入ると、相変わらず翼がノートパソコンを開いて何かを調べていた。

「あ、駿。
ちょっとこれ見ろよ」

「あん？」

言われるがまま、駿がディスプレイを覗くとそこにはインターネット記事が掲載されていた。

『謎の無気力症。
またも増えた被害者。
親族悲しみの声』

活字で淡々とそう書かれていた。その下にはカラー写真で嘆くように病院の被害者に寄り添っている母親らしき人物。

「なぁ駿。
これってもしかして……」

「……」

駿は無言で自分の座っていた席から鞄を取って直ぐに出口へ歩き始めた。

「翼、俺早退すっから。
皆にはそう言っといてくれ」

「って、え？
何か用事があるのか？」

翼がそう声をかけると駿は生徒会室の出口の前で止まって彼に振り返る。

「散歩」

彼はそれだけ言い残して生徒会室を出ていってしまった。

『駿、怒ってる？』

「そうだな」

肩に乗った悪熊は彼の表情を見てそう尋ねると、彼はゆっくりとだがしっかりそう答えた。

『相手の妖怪に対して？』

「いや……」

駿は無意識に生徒会室から持ってきてしまったボールペンをギリギリと握りしめる。

「自分に対して……だな」

程無くして、ボールペンは嫌な音をたてて真っ二つに折れる……

そして彼の手からは赤く痛々しい血がとめどなく流れ始めるのだった……

其の二十四　明暗（後書き）

三人娘（＋雑用）の

☆諸事情ラジオ☆

美希
「皆さんこんにちは！
今日も諸事ラジの時間がやって参りました！」

理沙
「本日はなんと発表することがあります！」

泉
「では、無駄に引っ張るのもアレなんで早速発表しちゃいましょう♪」

駿
「いきなり！？」

？祝？

２３８０００ＰＶ突破～！！

三人娘
「おめでと～♪」

駿
「ちょっと待てェェェェェ！！」

美希
「なんだ駿君。
こんなおめでたい席で」

駿
「何がおめでたいだ！！
微妙過ぎるだろ数字が！！
せめて２５万ＰＶいったら発表すりゃいいだろ！？なんで２３万８千で発表してんだよ！？オールスター人気投票の途中経過じゃねーんだよコレは！！」

理沙
「一旦ＣＭでーす」

駿
「聞けェェェェ！！」

同作者の小説

『銀魂のごとく！～東京都練馬区にて～』

絶賛更新停滞中！！

是非読んで下さい！

駿

「っておい放送部！！

流すＣＭ考えろよ！！

何が絶賛更新停滞中だよ、そんなんで読む気になるかァ！！」

泉

「自虐的なＣＭだったね」

美希

「では、実はもう一つ重大な発表があるのよ」

駿

「……まだあんの？」

理沙

「その通り。

ＰＶ２３８０００を記念してー！！」

？コラボ決定！！？

駿
「こ、こ……」

泉
「コラボだって～！？」

美希
「そう。
道の端っこで細々と頑張っていこうというコンセプトのこんな冴えない小説にも、ようやくコラボという案が来て下さったのよ」

理沙
「ふむ……
これで道端のシケモノから石ころくらいには昇格出来るかもしれないな」

泉
「とっても楽しみだね～♪」

駿
「ち、因みにどことコラボするんだ？」

美希
「それはその時になってからのお楽しみね」

理沙
「おっと、今日はこの辺でラジオは終了だ。
なにしろ仕事をさぼってヒナがカンカンだからな」

泉
「では、また次回も諸事ラジと」

美希
「本編の諸事情を」

三人娘
「よろしくお願いします♪」

駿
「コラボなんてやったら……
俺の主人公としての欠陥さが更に目立ってしまう……！！」

馬鹿の苦悩は続く

其の二十五　白光（前書き）

伽藍
「どこのバトル小説だよっ！？」

駿
「はい？」

伽藍
「読者の皆様に言われる前に突っ込んでみました」

駿
「では、始まります！！」

其の二十五　白光

日も大分傾いた夕方……

鷺ノ宮駿はいつもとは違う顔付きに急ぎ足で屋敷に戻ってきた。

「お兄様」

「伊澄」

駿が自分の部屋の前までやって来ると同じように急ぎ足で伊澄が彼に近づいてきた。

「また被害にあった方が増えたと先程ニュースでやっていました……」

「そうか……」

「私の責任です……
私は力を持っているのに気付けなかった」

「いや……
俺も気付くのが遅すぎた
情けない話だよ」

二人は沈痛な表情で暫く俯いてしまう。
しかし駿は直ぐに顔を上げると伊澄の頭に軽く手を乗せる。

「でも……
ここで俺達が希望を捨てたら、それこそ被害者の方々に申し訳が立たない。
まだ間に合うはずだ。そう信じよう」

「お兄様……」

駿がそう言って微笑すると、伊澄は少し頬を染めながら彼を見上げた。

「そうですね……
私達が責任を持ってこの騒動を治めましょう」

「ああ」

キッパリとそう言いきった伊澄を見て、駿も安心したように頷き返す。

「それで、お兄様は一体何をお調べになっていたのですか？
先程電話で『見当』と言っていましたけど……」

「ああ、その見当は確信に変わったよ。
取り敢えず、話は居間に行ってからだな」

駿は学ランを脱ぐと部屋の中に放って廊下を歩き出す。

「あ、はい」

伊澄は慌てて頷くとそくさくとその後についていく。

『ってコラ！
僕を忘れるなよ駿！！』

「忘れてねーから肩の上で騒ぐな馬鹿熊」

そうして……
二人と一匹は居間に向かって歩いていくのだった……

其の六　白光

時刻は経って深夜の一時……

鷺ノ宮駿と鷺ノ宮伊澄は昨日と同じように公園に立っていた。

ただ違うのは、そこから一切動かない事。
まるで何かを待つかのように……ただそこに立っていた。

そうして数十分経った頃だろうか……

チリーンと自転車のベルの音が公園に響いた。

「あ、また君達かい。
ダメじゃないか」

二人が振り返ると昨日と同じ、
自転車に乗った老人の警察官がこちらにやって来るところだった。

「昨日も言っただろう？
学生はこんな時間に出歩いてはいけないんだよ？」

「……」

「まぁ、今日の所は私も用事があるから見逃してあげるけど。
次に見つけたら交番まで来てもらうからね？」

老人はたしなめるようにそう言うと、ペダルに足を掛けて二人の元から去って行こうとするが……

「……どこの交番だ？」

「？」

それを駿が呼び止めた。
老人は自転車を停めて彼に振り返る。

「どこの交番にアンタは勤めてるっていうんだ?」

「何を言っているんだい?」

老人は笑顔のままそう問い返すが駿の表情には険しい。
伊澄も真剣な表情をしているし、彼女の肩の上の悪熊も毛を逆立てて威嚇している。

「昼から四時間あまりかけてこの区内外のほぼ全ての交番を訪ねて回ってみた。
けどアンタみたいな警察官はどこでもいないと言われたよ」

「……」

「今起きている一連の無気力症の事件。
犯人は人間に化けての生気を吸う物の怪つー可能性が極めて高い」

「ハハハ……
物の怪?おじさん、ゲームの話はよく分からないな」

すると老人は苦笑しながら頬を掻いてみせた。

「何を勘違いしてるのか知らないけど、私は」

「ジーさんよぉ、いい加減白を切るのは止めたらどうだい。
なんなら、その首を斬り落として化けの皮を剥いでやっても良いけどな……」

駿は一切の余念を許さぬように白夜の柄に手をかけて老人を睨み付ける。

「……まったく」

すると老人は自転車のスタンドを立ててサドルから降りた。
かと思ったらゆっくりと口元を緩める……

「無粋な坊や達がいたものだ…
最近の子供達は人を疑うことしか知らない……

そんな風に疑いを持たなければ……

ここで命を落とすことも無かったものを!!!」

その瞬間……!!
老人の背中を大きな翼が夜天に突き抜けるかの如く貫いた

「「!?」」

そしてソレは高々と上空に飛び上がり、二つに分かれた。

「ニ体!?」

「なるほど……天狗さながらって訳かよっ」

そう。
彼等の前に姿を現したのは予想通り烏天狗。
しかし予想外だったのはその烏天狗は二体であった。

一体は黒い和服に袴を着た首が長い頭は烏の天狗。
鍵爪の足には下駄を履き、爪がギラリと光る右手には日本刀。
左腰には鞘も携えられている。
背中には大きな二本の翼。

もう一体は真っ赤な単姿で長い首に笠を被った烏天狗。
手には札を構えて腰には赤い徳利が携えられている。

「赤い天狗は私が引き受けます！お兄様は黒い方を」

「分かった！！」

伊澄が言うが早いか、駿は鞘から抜き放った日本刀で黒い方の天狗をその場から引き離そうとするが……

「？」

黒い和服の烏天狗は自らくるりと方向を変えるとまるで誘うように飛んで赤い天狗から離れていく。

（乗ってやるか……）

駿は伊澄を赤い天狗の前に残してそれを追いかける事にした。

その様子に赤い単の烏天狗はクスクスと怪しく笑う。

『あの坊や……
可哀想だけどこれまでねぇ…
何せあの小天狗の中でも豪傑を謳われる黒の相手にするのだから…
まぁ、お嬢ちゃんもこれまでだけれど……』

「言いたい事はそれだけですか？」

伊澄は素早く札を取り出すと天狗に向かって放つ。
無論相手は袖を翻して飛び上がるとそれを避けた。

『短気なお嬢ちゃんだこと……
そんなに命がいらないのね。
いいわ、相手になってあげる』

「アクちゃん。
しっかりと捕まっていてね」

『うん！』

地面に着地した烏天狗はそう言って紅い札を何枚も取り出した。
対する伊澄もまた御札を構えて肩の上の悪熊同様に相手を睨み付けるのだった。

○

一方、伊澄達から暫く離れた場所で駿は自分の前方に着地した黒い和服の烏天狗と対峙していた。

『クックック……
分からないねぇ……
どうしてそう死に急ぐのか』

「……」

卑しい声で笑う烏天狗。
駿は黙ったまま黒く首の長いそれを見つめている。

風が彼の髪と袖を時折さらってはまた何かを静めるように唸る。

『なぁ、アンタは知ってるかい？生気を抜かれる直前の人間の表情(かお)をさぁ……』

「……」

『それはまるでこの世の終焉を目の前にしているような表情でねぇ……たまらんよ、そんな顔で助けを懇願する叫びもまたねぇ
生と死の淵にたたされたような絶望の表情は何度見ても飽きない。
癖になるというのか、これが…』

直後、烏天狗の視界が真っ二つに両断された。
グラリと揺れるその瞳が捉えたのは、いつの間にか隣まで来て日本刀を鞘に収めた駿だった。

彼はその日本刀で烏天狗を叩き斬ったのだ。
それはまさに“刹那”

「耳障りな声で喚くな……
後は地獄で嘆いていろ……」

彼は低く唸るような声でそう言い放つと、斬り捨てた天狗から離れていこうと……

『残念だねぇ』

「!?」

卑しい粘着性ある声。
駿が振り返るとそこには二体の黒い和服の烏天狗。

（分裂!?）

『我は偉大なる大天狗様が第一の僕なり。
名を烏天狗“黒”と申す』

ニ体に分かれた烏天狗はそう言いながら更に四体に分裂する。

「っ!!」

間髪を入れずに、四体はいっぺんに駿に斬りかかってきた。
彼は身体を捻ってそれを避けると距離をとる。

「共に実体ありか……」

『力を変えずにいくらでも分裂できる……
それが俺の能力である』

分身と分裂は違う。
分身は他は全てがまやかしで実体は一つしか無い。
しかし分裂は他全てにも実体がある。

（ただ共通点もある……）

そう。
分身も分裂も本体があり、それにさえ攻撃出来れば他のものは全て消え失せる。

『クヒヒ……！！
いいねぇその表情……
さぁ、途絶える事の無い絶望に恐れ戦くといい……！！』

「……」

黒い和服の烏天狗は四体から八体に。八体から十六体へと絶え間なく分裂していく。

それが駿の周りを取り囲むのに、時間などかからなかった……

○

伊澄と赤い烏天狗の戦いは一方通行だった。
伊澄が術式を発動する度に烏天狗の持つ徳利から完全無効の防御壁が現れ一切の攻撃を防いでしまうのだ。
天狗曰く『全ての心物の流れが遮断される』との事。

『いい加減に諦めなさいな……
お嬢ちゃんでは私に傷一つつけられなくってよ……』

「いえ……
アナタの敗けです」

伊澄は目の前に何枚もの御札を並んで浮かび上がらせる。

『懲りない攻撃……
頑固ものなのねぇ……』

「……」

『私の完全無効の防御壁がある限りお嬢ちゃんは傷一つつけられやしない……！！

『……』

「！！」

観念して地獄に堕ちなさい』

天狗は勝ち誇ったように甲高い声を夜天に響かせる。

「アナタの敗北は、防御壁に過信し過ぎたことです……」

『頂きーっ！！』

『！？』

伊澄がそういった瞬間、天狗の後ろから悪熊が物凄い勢いで徳利を引きちぎって持ち去ったのだ。

『な！？馬鹿な！？』

「アナタは言った……
その防御壁は一切の流れを遮断すると……
ならば妖怪の気配を感じる流れもまた、遮断されるはず…」

『まさか……！！
それを狙って……！！』

伊澄が防御壁の弱点を見破ったのは最初からだった。
防御壁は一対一ならば最強を誇るも、相手が二体以上になると寧ろそのリスクの方が大きくなる。
視覚出来れば良い一対一とは違い後ろに相手がいるかもしれないからだ。視覚は出来ても感覚は一切遮断される。

だからこそ、伊澄は敢えて術式を連発した。
ずっと防御壁を発動させる為に…悪熊を後ろにいかせても気付かれ

ないように……

『おのれ鷺ノ宮ァ！！』

「アクちゃんを敵ともせず侮り、己の力に過信した敗北です」

伊澄が手を浮かばせると自分の周りからは雷の柱が幾重にも登り、
天狗の周りからは札が現れ無数に貼り付いてゆく……

「天の雷にしてその身を焼かれよ……」

『ぬうゥゥゥ！！！』

「術式八葉……」

伊澄は両手を目の前に併せて瞳を細める。

【建御雷神】

天狗の断末魔と共に
神の雷が轟いた……

『やったーー！！
決まったよ伊澄！！』

「ええ。
これもアクちゃんの活躍のおかげよ」

『エヘヘ』

伊澄が微笑むと悪熊も照れたように顔を綻ばせる。

『う……ぐ……』

すると前方の砂塵が立ち込める中から瀕死のように弱々しいうめき声が聞こえてくる。
それは烏天狗であった。

「……」

伊澄は黙って敵の傍まで寄っていくと、天狗は彼女を見上げる。

『私に…勝ったところで……
あの坊やは終わりよ……
私より遥かに強い小天狗である彼にかかれば……
そうすれば……どのみちお嬢ちゃんも殺される……』

「ご心配には及びません。
お兄様は負けませんから」

しかし、それに対してキッパリと返す伊澄。

「確かにあの妖力は並々ならぬものがありましたが……

お兄様ならば大丈夫です」

『……そう』

それを聞いた赤い烏天狗は何故か淡々と答えて、バタリと地面にうつ伏せになる。

『申し訳ございません大天狗様。私は先に逝きます故、どうかお許しください……』

烏天狗はそれだけ言い残し、跡形も無く消え去ってしまった。

「……きっと、彼女も何らかの未練が募り天狗と化してしまったのでしょうね」

伊澄は烏天狗が居なくなった後を見送るようにゆっくりと手を併せた。

○

『クヒヒヒヒ……
もうどうしようも無いねぇ』

「……」

駿の周りは、それはもう無数の黒い和服を着て日本刀を構えた烏天狗に囲まれていた。
地面の周りは勿論、上空にも覆い尽くすような数の天狗達に囲まれている。

この圧倒的な数を消し去るには、この圧倒的な数の中から本体を見つけなければならない。

誰もが膝をつき絶望する状況…

「最後に聞きてぇ事がある」

『最後……
ついぞ諦め申したか……』

駿はいつも通りの表情で無数の天狗に話しかける。

「何の為に人々の生気を吸う？
しかも相手は皆学生……」

『クックック。
何を不躾に……』

「……」

大勢の天狗達は一斉に笑い始めるが、暫くして全員が口を開いた。

『絶望に呑まれた恐怖する人間（げす）共に快楽を感じるからだ。まだ未来がある若者のは特に、最高の娯楽よ』

そしてまたゲラゲラと笑い出す天狗達。

「……楽しいか？」

『愚問だな
何物にも替えがたい快楽よ』

返ってきたその言葉に、彼はもう何も言わなかった。
そしてゆっくりと日本刀を鞘に収める。

『クヒヒヒヒ……
諦めたようだな……
ならば、これで終わりにしてくれよう！！』

大勢の烏天狗達は上空では一斉に飛び上がり、地面の者達は日本刀を正眼に構える。

そして……

『ゆけえぇぇぇ！！！』

一斉に飛びかかる！！

“研ぎ澄まさんは虚の底”

駿はそっと右手を柄に乗せる。

“影に閉ざされ見えざる路に”

ゆっくりと手と足に力を込めて居合いの構えを。

“刮目させよ心（うち）なる瞳”

そしてゆっくりと両目を閉じる。

“我が白刃は深淵を断つ一閃となりて”

柄を持つ右手に全ての力を込めて……

“己が業に裁きを下さん”

彼は両目を見開く……！！

その瞬間……

云百という数の斬撃が……

閃光の如く舞踊った……

『！？』

烏天狗の視界の全てが歪んでいた……

見えるもの全てが、ありとあらゆるものが歪んで映る……

無数にいた数々の分裂した自分全てに縦の一閃が入り真っ二つになって宙に浮かび、地面に転がる光景が歪んだ視界に広がる。

そして……

身体が横一閃されて上半身と下半身が離れている烏天狗の本体と……

後ろで抜き放った日本刀を鞘に収める青年の姿。

それを確認する間もなく、

天狗の分裂は跡形も無く姿を消して……

烏天狗の視界は真っ暗になってしまった……

「……」

振り返った彼、鷺ノ宮駿は烏天狗が全滅された事を確認すると…

ゆっくりとその場を後にした

○

「お兄様！」

「ん」

駿が戻ると心配で堪らなかったという様子を無理に隠すように伊澄が早足で寄ってきた。

「大丈夫だったか」

「はい。
お兄様もご無事だったのですね…良かったです」

駿は手を伊澄の頭に置いて優しく撫でると、彼女はくすぐったそうに微笑んでみせた。

『馬鹿駿！
僕も活躍したんだよ！』

すると彼女の肩の上から悪熊がエッヘンと胸を張って口を挟んできた。

「嘘つけ。
オメーみたいなチビスケに何が出来んだよ」

『何だとーーーっ！！！』

駿はそんな悪熊の額を小突く。

「どうせ伊澄にひっついて震えてただけだろ」

『もう怒ったぞ！！
鷺ノ宮駿！！抹殺してやるーっ！！』

「おー、怖ぇ怖ぇ」

駿がからかうよいに言うと悪熊は自慢の鋭い爪をぐるぐると振り回して怒りを露にする。

「お兄様……」

「ん？」

そんな感じで悪熊をからかっている時、伊澄が袖を引っ張って話しかけてきた。

「これで被害にあった皆さんは元に戻れるでしょうか……」

確かに元凶は無くなったが、
まだ被害者が元に戻る保証は無いのだ。
だが……

「……大丈夫だ。
そう信じよう」

「……はい」

彼はしっかりとそう言い切った。だから彼女はそれに頷くだけだ。
大丈夫だと信じて……

『死ねーーっ！！
鷺ノ宮駿ーーっ！！』

「いい場面なんだから邪魔すんな熊公！！」

「お兄様！
アクちゃんをいじめないで下さい！！」

先程の戦いが嘘のように、
賑やかな一行は鷺ノ宮家に帰っていった。

翌日……

～生徒会室～

『一昨日から発生していた謎の無気力症ですが、今日の朝方から終息に向かっています。
患者の方１８名のウチ１２名が既に何事も無かったように全快されて、残りの６名も……』

お昼の生徒会室に流れているのはラジオから聞こえるアナウンサーの声。

「いきなりの騒動だったけど、何事も無く終わって良かったわね」

「でも、一体何だったんでしょうかね？」

「感染症って噂もあったけど」

「不思議だね～」

ラジオのニュースを聞きながら生徒会室でヒナギク、千桜、美希、泉は首を傾げていた。

「そうだな……」

すると、向かい側に座っていた翼がノートパソコンを開きながら口を開く。

「きっと……

どっかの誰かさんが、

夜中にこっそり解決してくれたんじゃないかな？」

彼はそう言って口元を緩めると、こっそりと隣に目をやる。

彼の隣では駿が書類の積んである横でとても幸せそうな寝顔で爆睡していたという……

「……むにゃ」

其の二十五　白光（後書き）

美希
「本日は諸事ラジはお休みして、今回の話について作者に説明してもらうわね」

理沙
「さぁ、しっかり説明してくれたまえ」

泉
「ここテストに出るよ～♪」

はい。
では皆さんも疑問に思っているであろう部分を簡単に説明したいと思います。

美希
「まず、今回の駿君と烏天狗の戦いについてだけど。
最後に使ったアレは何？」

わかりました。
本文だとかなりわかりにくい描写でしたのでどんな攻撃だったかを説明しますね。

簡単に言うと、

駿の周り１８０度に無数の斬撃を巻き起こして、同時に一番ダメージを与えたい標的には居合い斬りをくらわせるという意味不明の攻撃です。

はい。人間業ではありません。
チート技です（笑）

ですが！！
決してこれは必殺技ではありません。↑重要

駿に必殺技なんてありませんからね（笑）

彼の戦い方は常に敵に沿って変化するので敵の数が多い時にはこんな感じの時もあります的なアレです

理沙
「いや、アレってなんだよ？」

泉
「じゃあ次。
えっと、駿君が敵を全滅させる直前に出ていたあのモノローグは？」

はい……
あの痛々しい中２感バリバリのモノローグは……

簡単にいうと“ノリ”です。
何か決めるときにモノローグやっちゃうか～的な感じでその場のノ

リで書きました。
後は描写を一々書くのが面倒臭かったのでモノローグで誤魔化してみたり……

あれはセリフではありません。
必殺技をイメージするときに脳内に浮かぶモノローグ描写的な感じのやつです。

美希
「いや～、あれは痛々しかったな」

理沙
「かなり恥ずかしいな」

泉
「アハハ……？」

えっと……
まぁ痛々しさについては重々承知しております故。
まぁあまりにも見ていて恥ずかしかったら遠慮なく言って下さい。
修正します

美希
「まぁ、どこのバトル漫画だよっというツッコミも多々あるとは思うけど」

理沙

「次回からはちゃんとギャグ爆進だから安心してくれたまえ」

泉

「では、今日はこの辺で」

次回もよろしくお願いします

其の二十六　新学期なんて学期が新しくなるだけで心は全然新しくなんないよね

伽藍
「今回から新学期！
駿の馬鹿やちょっぴり授業風景やずっと前に投稿されたオリキャラ
登場や！
大波乱の新学期初日です！」

駿
「では、始まります！」

其の二十六　新学期なんて学期が新しくなるだけで心は全然新しくなんないよね

大型連休……
それは学生達にとっては何ものよりも替えがたい学校からの贈り物である。
どの学生にとってもそれは最高の時間であり、至福の時なのだ。

一ヶ月前になれば彼等の胸は小躍りを始め、半ヶ月を切れば自然と身体は浮きだち始める。
一週間に迫ろうものならあれこれと頭の中で予定ばかりたて始め授業など頭に入っては来ない。

そんな待ち遠しさ溢れる素晴らしいイベントだが……

楽しさの反面、いざ終わってしまうとそれは苦痛に成り変わる。
楽しかった日々が何度も頭の中で走馬灯のように駆け巡り、これから来るであろう現実に悶え苦しむのである。

体どういう事であろうか！？
幸せで楽しいはずの休みでは無かったのか！？
我々学生に一時の蜜を吸わせ、それを嘲笑うかの如く地獄に叩き落として何が休日か！？

大型連休が何の為にあるのか、
連休明け、学校側はどういった措置とるべきか。

それらの意味を明確にするためにも、我々は一度原点に立ち返るべきである。

「意味がどうとか言う前に、
新学期初日なんだから行きなさい」

「……！！」

小鳥のさえずりも止み始めた朝。
三千院屋敷では相変わらず訳の分からない理屈を熱弁するナギにマリアが呆れたように返していた。ナギのすぐ後ろではハヤテが苦笑しながら立っている。

「連休明けの学校！！
それは学生達に並々ならぬ負い目を与える……」

「初日からサボりなんて許しませんよ？」

再び理屈を捏ねようとするナギにキッパリと言うマリア。

「うう～
こんな連休明けで学校になんて行ったら死んじゃうよ～だ」

「死にません！！
ハヤテ君も甘やかさない」

ナギはそう言ってオロオロとハヤテに泣きつく。

ハヤテが彼女を撫でるのを見てマリアは困ったようため息をつく。

「でもお嬢様、せっかくの学校なんですから行きましょうよ。
学校は伊澄さん達のお友達もいらっしゃって楽しいでしょ？」

ハヤテは昨夜にマリアからナギの学校が白皇学院であること、
幼い頃から命を狙われてきた影響もあってか引きこもりになってひねくれた性格になった事を聞いていた。

「そんな事は無い。
物事というのはたまに行くからありがたみを感じるのだ。
毎日行っていては学校に行ける事も感謝しないものになってしまうだろ？
私は学校のありがたみを感じるためにたまにしか行かないことにしているのだ」

（（相変わらずの超引きこもり思考……））

いつも通りのナギ節炸裂。
ハヤテとマリアの反応も多分いつも通り。

「とにかく、今日から僕が送り迎えをご一緒しますから。
学校行きましょう？」

「うう～
で、でも何だか頭が痛いような」

「気のせいですから行ってらっしゃい」

「な、酷いぞマリア！！」

そんなこんなで、引きこもりお嬢様が学校に行くのを渋っているのと同じ頃……

「はぁ……」

時計塔（ガーデンゲート）の最上階にある生徒会室。
通称“天球の間”

木漏れ日が差し込むそんな幻想的な空間に零れるため息。

「「「「授業、ダルいなぁ～……」」」」

鷺ノ宮駿を始め、花菱美希、朝風理沙、瀬川泉の四人は新学期初日から思いきり愚痴っていた。

「大体日本の教育は間違ってるんだよ……
冬休み明けにいきなり授業があるなんてよぉ」

「ホントよね……
一本私達にどれくらい苦しめれば気が済むっていうの」

「これが大人のやり方か……」

「う～ん……
動きたくないよ～」

駿は頬杖をついたまま恨めしそうに天井を見上げ、美希はそれに同意するように呟く。
そして理沙と泉はグテーっとテーブルに突っ伏している。

「初日から何言ってるのよ貴方達……」

「お前らホント生徒の鏡な」

そんな四人の様子を見て呆れたようにため息をつく生徒会長の桂ヒナギクと副会長の鷹ノ瀬翼。

「確かに、分からないでも無いですけど」

「まぁ午前授業なだけ良いんじゃないかしら？」

「それはそうですね」

その隣では文庫本を片手に頷く書記の春風千桜と紅茶を啜る副会長の霞愛歌。

「大型連休明けの学術機関はもっと然るべき措置をとるべきなんだよな。いきなり授業なんてしないでゆっくりと生徒達に慣れさせていくべきだろ。
だから最低でも最初の3日は授業無しのＨＲ帰宅。４日目から午前授業で鳴らしていき、翌週から通常通り授業を再開！！
これがあるべき理想の姿の筈だ！！学校はもっと生徒の身になって

運営を考えるべきなんだ！！」

「「「そーだそーだ！」」」

駿の言葉に激しく同意して同じように叫ぶ三人娘。
その様子は労組のストライキ決起集会のような光景に似ている気がする。勿論たった四人だが。

「学校の運営の文句を生徒会室で言わないの。
第一、連休というのは次の授業の準備や前の授業の復習をするためのお休みなんだから。
そう考えたら、すぐに授業があるのは当たり前だって思えるしょ？」

「「「「俺（私達）にそんな事が考えられるかーーーっ！！」」」」

ヒナギクの連休に対しての考えに四人は指を突き付けて叫び返してみせた。

「大体私達はヒナとは違ってか弱いのよ！」

「その通りだ！！
ヒナのような体力無尽蔵人間と一緒にされては困る！」

「誰がよ！！」

口々に文句を言う彼女らに怒ったように叫ぶヒナギク。

「それにその言い方だと、まるで私がか弱い女の子で無いみたいじゃない！」

「「「「……」」」」

その言葉に駿達は困ったように顔を見合わせると、顔を近づいて何やら相談を始める。

（か弱い女の子……？
おい、どうすんだ？この場合は素直に頷くべきなのか？）

（いやいや、か弱いとはとても…）

（寧ろその辺の男子より遥かに強いからなヒナは）

（まぁ、俺も先日竹刀でボコボコにされたしな）

ヒソヒソと話しているつもりなのだろうが、実際は生徒会室中に筒抜けである。
翼は慌てて仕事に戻り、千桜と愛歌も巻き込まれないように気持ち距離をとって黙っている。

（女の子って言っても実質中身は男の子みたいなものなのよね
昔から女の子いじめる男子を成敗とかしてたし）

（ああ、ついでに身体面も男の子に近いし）

（んな事より、どうすんだ？）

（いやあの……
皆声が大きいんじゃ……）

しかし気付かない三人はヒソヒソ話を続ける。泉だけが困ったように見回しているが、案の定彼女達の背後に黒いオーラが忍び寄ってきた。

「四人とも……？」

「「「「！！？」」」」

かかってくる声に四人は飛び上がるほど肩を震わせる。
ゆっくり振り返るとそこにはとびきりの笑顔のヒナギクが……

「さっきから筒抜けなのよね～
だ・れ・が、実質中身は男の子で身体面でも男子なのかしら…？」

「「「「……」」」」

四人は顔面蒼白。
それもその筈、彼等の前のヒナギクの周りからとてつもない程の黒いオーラ。今にも地響きが起こりそうである。
多分臨界点突破……

「違うぞヒナ……！！
今の話は全てカルガモのヒナの話で！！」

「そうそう！」

「だ、だよな～
カルガモの子供は可愛いよな～
（棒読み）」

取り敢えず言い訳を試みる美希、理沙、駿。
だが……

「言いたい事はそれだけかしら？」

「「「「……」」」」

顔を見合わせる四人をヒナギクは笑顔のまま見つめる。
どうやら全く効果は無かったようだ。しかもいつの間にか手には竹刀が……

追い詰められた四人は……

「……総員退避」

「「「了解」」」
駿のその一言で一目散に生徒会室から飛び出して逃げ出した。

その後を……

「待ちなさーーーいっ！！！」

ヒナギクが竹刀を片手に追いかけていく……

「初日から元気ね～」

「「ホントですね……」」

そんな様子を紅茶を啜りながら呟く愛歌とため息混じりに見つめる千桜と翼。

白皇学院三学期初日……
本日も生徒会はそんな感じで平和（？）だった

其の七　新学期なんて学期が新しくなるだけで気持ちは全然新しくならないよね

「はーい、皆席に着け～」

朝のＨＲ。
一年三組の教室に担任である薫京ノ介が入って来ると、生徒達は次々に席に着き始めた。

「んじゃ、朝のＨＲを始めるぞ～」

彼は教壇に歩いていくと、教卓に出席名簿を置いて室内の生徒達を見回す。

「え～、長かった冬休みも終わって今日からまた授業が……って、鷺ノ宮？」

「……なんでしょう？」

薫はある男子生徒を見た途端に言葉を止めてしまう。
それは駿だった。

「お前……
何でそんなに傷だらけなんだ？」

「……」

彼の言う通り、席に座っている駿の顔は擦り傷、切傷、痣だらけ。
周りの生徒も何事かとドン引きしている。

「いや、実は……
廊下で竹刀を持った殺戮戦闘民族に襲われｔ」

バキッ！！

「……」

駿が言い終わらないうちにどこからともなく黒板消しが高速で飛んできて彼の後頭部に直撃した。
駿はそのまま前のめりに机に突っ伏して気絶。

言うまでもなく黒板消しの出所は駿の斜め後ろに位置する席のヒナギクだった。

「先生？
時間も無いですし、早くＨＲ進めましょう」

「あ、ああ……
そうだな」

ニッコリと微笑むが目は笑っていないヒナギクの言葉に薫はいくつか疑問は持ったものの何も聞かずに頷いておいた。

「それじゃ、
取り敢えず今月の予定を配るぞ～」

若干不安な形ではあるものの、そんなこんなで新学期開始。

【一時間目：世界史】

「はい！
今週は冬休み前の正史と絡めて
中国の秦～清までの制度史をやるわよ。週末にはレポートの提出の

宿題も出すからね～」

一時間目の授業では桂雪路が教壇で黒板にタイトルを書きながら生徒達を見回している。
どうやら今日はちゃんと授業をするようである。

すると翼が手を挙げた。
隣には机に突っ伏したままの馬鹿が一名。

「先生～
駿が寝てます。
つーか気絶してます」

「いつか起きるから大丈夫よ。
それより授業始めるわよ～」

哀れ駿。
気絶したまま授業は開始された。

【二時間目：現国】

「～であるから、ここは～」

教壇では教科担当の先生がチョークで黒板に色々と書いて説明をしている。

「……」

そして相変わらず駿は気絶中……と思いきや

「……ｚｚｚ」

彼は気持ち良さそうな寝息をたてて爆睡していた。

気絶が治ってそのまま眠りに直行したようである。

「お前学生の鏡な」

「……むにゃ」

隣の翼が呆れたように声をかけるとそんな寝言が返ってきた。

【休み時間】

「おい、いい加減起きろ馬鹿」

「ん……？」

二時間目が終わり休み時間になった所で翼が彼を揺すって起こしていた。

「あれ……

俺寝て……？」

「ずっと眠り続けていたよ

もう二時間目終わったぞ」

「終わった……？」

駿は目を擦りながら尋ねる。

「ああ。
２００年程前にな」

「２００年？
お前死んでんじゃん」

「ああ。
これはホログラムなんだよ」

「マジかよ……
じゃあ世界は……って、
このやり取り前もしたぞ……」

言いかけた途中で駿は思い出したように顔をあげる。

「ちっ、流石に二度は騙されねーか」

「ちゃんと起こしてくんない！？」

二度目じゃなかったら騙されたのだろうか。

「んで、次の授業は何？」

「時間割見ろよ」

【三時間目（本日最終）：現社】

「え～、今日はちょっと変わった授業内容にしたいと思うというか実は、先生が授業道具全て忘れただけなんだがな、ハハハ」

（（（じゃあ一体何しに学校に来たんだ！！））））

現社の先生は愉快な方だった。

名前知らないけど……

＊

キーンコーン……

一般生徒の下校を促すチャイムが校舎内に響き渡る。

そんな中、駿と翼、千桜は生徒会室のある時計塔に向かっていた。

ヒナギクは職員室に呼ばれて職員室に寄った後に生徒会室に行くとの事だ。

「しかし、現社の授業は面白かったな。現代の死語講座なんてさ」

「ホント、かなり意外なものまで死語になってるんですね」

翼は歩きながらそう言うと隣の千桜も配られたプリントを見て同じように頷く。

因みに駿はまた授業途中で寝てしまってまだ起きていないので教室で眠っている。

「“ビフテキ”……まぁこれは確かに死語だな。“ぶりッ子”や“アベック”“ひょうきん族”“焼肉(ギャグ)定食”……随分と死語になっていくんだなぁ」

「最近だと“電話ボックス”“テレフォンカード”も死語になりつつあるんですね」

こうしてみると時代の流れというものを感じずにはいられない。

まさか公衆電話が死語になる日が来るとは……

「あ、そういえば」

「？」

歩きながら翼が何かに気付いたのか声をあげた。

「今年に入ってから千桜が着けてるそのリボンって……去年と違うんだな」

「え？」

その言葉に千桜は自分の髪を結んでいるリボンに手をやる。
彼女のリボンは去年までの黒いリボンでは無く、綺麗な桜色のリボンになっていたのだ。

「これが何か……？」

「いや、とっても気に入ってるんだなと思ってさ。学期が始まる前の生徒会でも毎日つけてたし」

「それは、まぁ。
一応貰い物ですから」

千桜はどこか恥ずかしそうにそう呟く。その様子に翼はピンと来たのか自分達の教室の方向に目をやって……

「……もしかしてだけど。
そのリボン贈ったのは駿か？」

「え？
あ、はい。そうですけど…」

千桜は何故分かったのかと驚いたように翼を見る。

「ほほう……なるほど。
知らなかったな」

「？」

「……まさか二人が付き合っていたとは」

「な！？」

その反応と他にも色々考察して彼が導き出した答えはそれだった。

「ち、違いますよ！！
これはそういう物では無くて、単なる貰い物で…」

当然千桜は慌てて否定しようとする。顔を赤らめて言っても一切説得力が無いが。

「いやいや、だって駿が同学年の女の子にプレゼントなんて……
それはズバリ恋人同士という何よりの証拠で……」

「飛躍させすぎです！！」

廊下にいた生徒の何名かが何事かと振り返る。
因みに“～ズバリ”という言い方も実は死語の域に入るかもしれないという。

「だから、これは……その…
そんな意味では……
別に嫌だとかそういう事では無いですけど……でも」

「まぁ、冗談だったんだけどな」

「な！？」

冗談だという彼の一言で千桜はまた別の意味で顔を赤くする。

「実はその贈り物の件も全部知ってたよ。

アイツから聞いてたし」

「ーーーっ！！！／／／」

「ハハハ、悪い悪い」

恥ずかしさのあまり声にならない叫びをあげる千桜に翼はおかしそうに笑いながら謝る。

色んな意味で賑やかに時計塔に向かっていると……

「お～い」

「「？」」

二人の後ろから駿が走って追いついてきた。

「一人置いてくなよ。起こしてくれても良いだろ」

「いや、あまりにも気持ち良さそうに寝てたからな。起こすのは少し可哀想だしかなり面倒臭かったら」

「後者の理由が主かよ！！」

結論から言うと面倒臭かっただけのようだ。

「って、千桜？顔赤いぞ？

大丈夫か？」

「何でない／／／」

「？」

千桜は顔を反らすと先に早足で時計塔の方に歩き出してしまう。

「何かあったのか？」

「まぁ、お前はずっといなかったから鈍感扱いは出来ないわな」

「は？」

翼の意味深な言葉にますます不思議そうな表情をする駿。

「とにかく、俺達も生徒会室に行くぞ」

「あ、ああ……」

二人も千桜を追って時計塔に向かうのだった。

＊

「ただいま……」

「あ、おかえりヒナ」

お昼の生徒会室。
ようやく職員室から戻ってきたヒナギクが疲れたように扉から入ってきたので一同は首を傾げる。

「随分お疲れだな。
何かあったのか？」

「職員室でお姉ちゃんがまた訳の分からない事をしてたから。
色々と時間がかかったのよ…」

取り敢えず代表して駿が尋ねると、ヒナギクはため息混じりにそう答えた。

「訳の分からない事？」

「ええ……」

彼女の話によると、雪路が職員室前に謎の募金箱を設置していたらしい。
その募金箱には
『もやしも食べられない可哀想な桂先生を餓死の危機から救ってあげよう！
一口１０００円　貴方の善意が地球を救う』
と書かれていたのだ。

それを見たヒナギクがどうしたかは、言うまでもないだろう。

それが遅れた＋疲れた主な原因だという。

「何つーか、お前の姉貴はホントフリーダムな」

「雪路らしいと言えば雪路らしいけどな」

その話を聞いたメンバーは呆れる以外に選択肢が無かったので呆れておいた。

「じゃあ、職員室に呼ばれた理由はそれだったのか？」

「いいえ、違うわ。
その事についてなんだけど…」

ヒナギクは自分の机まで歩いていくと鞄を置いてメンバーを見る。

「今日、来年（うち）白皇に編入する生徒が見学に来るそうなの。
その生徒に学校案内をするのが本日の生徒会の仕事よ」

見学生の案内。
職員室に彼女が呼ばれたのはそれが理由らしい。

「来年って事は中学三年ね」

「なるほど……
白皇の恐ろしさを教えてやれば良いのだな」

「いつもの仕事より楽しそうだね♪」

しばしばサボる三人娘も、
こういう仕事の時はやる気があるようだ。

「なぁ、それって一人か？」

「ええ、そうよ。
因みに性別は女の子」

ヒナギクは書類をみながらそう答える。

「あらあら、駿君より可愛い女の子かしら？」

「愛歌さん？
俺は男なんですけど……」

「冗談よ」

多分半分は冗談じゃない愛歌の言葉に駿は冷や汗を流すが、そんな事は置いておく。

「ヒナちゃん！
その娘の名前は何ていうの？」

「えっと……名前は」

泉が元気良く手を上げて質問すると、ヒナギクは数枚重なった書類を捲り調査書を一番上に戻す。

「『十束冥夜（とつかめいや）』ちゃんね」

ガタッ！！

ヒナギクが名前を口にした途端、椅子が大きく倒れる音がした。
一同が見るとなんと翼が椅子から落ちていたのだ。
しかも彼にしては珍しく表情がひきつりまくっている。

「ヒナギク……
もう一度名前を言ってくれるか？」

隣に座っていた駿が恐る恐ると尋ねた。彼の表情もまた若干だがひきつっている。

「え、ええ……
十束冥夜ちゃんって名前みたいだけど……」

それを聞くと翼が地面に座ったまま少し退く。
その様子を振り返り困ったように翼を見る駿。

「十束……」

「冥夜……」

二人は見学生をそれぞれ苗字と名前に分けて口にする。

「まさか……

アイツなのか……」

「だろうな……」

すがるような目で翼は駿を見上げるが、駿は諦めろとでもいうように首を振るとそう返した。

「えっと……
もしかして二人の知り合い？」

「知り合いというか……」

ヒナギクがそんな珍しい二人の様子を見て尋ねてきたので、駿は席を立ち上がって彼女の元に歩いていく。

「俺達が通っていた中学校と同じ中学校に通っている奴だ」

「へぇ、そうだったの
じゃあ、後輩っていう事？」

「まぁ、な……」

駿がヒナギクの隣まで来て調査書を見た後、やっぱりかという表情をして皆にそう説明した。

「でも、翼君はどうしてそんなに表情がひきつっているんだ？」

「かなり珍しい様子ね」

しかし千桜や美希の言う通り、椅子から落ちた翼の様子は一同も当

然疑問のようだ。

「ああ……
それはだな……」

翼の代わりに駿が説明しようと調査書を手にとったその時……

バタバタバタバタ……！！

突然、
生徒会室の外から大きな音が聞こえてきた。

「「「？」」」

バタバタバタバタ……！！

「これって……」

「ヘリだ……」

そう。
よく聞くとそれはヘリコプターの羽の音だった。

白皇学院の時計塔の最上階にある生徒会室。
その上空からヘリコプターの音がしているのである。
かと思ったら……

『翼様ーーーーっ！！
いらっしゃいますか？
いたらお返事をして下さーーい』

「！？」

メガホンを使っているのかというくらいの音量で生徒会室に飛び込んでくる可愛らしい女の子の声。それを聞いた驚いたように翼はビクリと肩を震わせた。

「え？これって一体？」

「来たんだよ、見学生が……」

何事かと周りをキョロキョロするメンバーに対して駿が書類を手にとってそう言った。
と同時に、会長机の後ろにあるバルコニーの下からゆっくりと姿を現すヘリコプター。

「「「え！？」」」

驚く間もなく、ヘリコプターのドアが開き直ぐ様レッドカーペットがヒラリとバルコニーを伝って敷かれてゆく。
そしてヘリから二人程の執事が降りて来ると、バルコニーから生徒会室に続く大きな窓を泥棒ビックリの早業で開けてみせた。

そして室内まで敷かれてゆくレッドカーペット……

取り敢えず生徒会メンバー唖然状態である。

「この本人が書いた自己紹介をよく読んでみろ……」

「え、ええ……」

そんな一同の中、駿がヒナギクにそう言ってもう一度調査書を渡した。

【十束冥夜】

年齢１５
東京都立如月中学校在校
中学三年

・・・・・・・・・

好きな人：鷹ノ瀬翼様

好きなもの：鷹ノ瀬翼様
尊敬する人：鷹ノ瀬翼様
大好きな人：鷹ノ瀬翼様
とても好きな人：鷹ノ瀬翼様
物凄く好きな人：鷹ノ瀬翼様

Q志望動機は何ですか？
A翼様がいるから……本当に書いてしまいました！！／／／

Q編入したらどんな部活に入りたいですか？
A翼様のいる部活に決まっています！そうしたら毎朝彼の為にお弁当を……

Q将来の夢は？
A翼様と……それ以上は言えません！／／／

・・・・・・・・・

「駿君……
これって……」

ヒナギクは何とも言えない表情で書類から目を離し駿を見る。
と同時に、

ヘリコプターから一人の少女が降りてきた。

濃茶髪のウェーブが掛かったロングヘアーに藍色のドレスワンピースをきている美少女だ。
恐らく彼女が見学生である十束冥夜なる者なのだろう。

服装や執事がいることから、どこかのお嬢様だという事は容易に想像出来る。

薄い土色のはっきりした瞳と女性にしては長身であり顔立ちは凛々しめと可愛めの中間くらい。
スタイルはかなり抜群で歳の割には胸もかなり大きい。

「あら！」

「！？」

バルコニーに降り立った冥夜は早速床に座っている翼を見つけたて嬉しそうに声をあげる。

「翼様！
やはりここにいらっしゃったのですね！
ようやく見つけました」

冥夜は胸の前で手を併せると小走りにバルコニーから生徒会室に走ってきて翼の前までやって来た。

「お久しぶりです！
翼様！お身体の方はお元気でしたか？」

「あ、ああ……
大丈夫だよ……
久しぶりだな、十束」

「まぁ、覚えていて下さったのですね！！」

ヨロヨロと立ち上がって挨拶を返す翼に彼女は感激したように微笑んで胸に手を当てる。

そんな彼女の様子について行けずに未だ静まり返っている生徒会。
そんな中でヒナギクがそっと駿に尋ねる。

「駿君……
彼女って……」

「ああ……
見ての通り彼女は“翼命”。
アイツの為なら例え火の中水の中どこまでも追っていく。
周りの事なんてお構い無し、翼が居ればそれで良し。

翼が最も苦手とする人物の一人で……

正真正銘のヤンデレ娘だ」

其の二十六　新学期なんて学期が新しくなるだけで心は全然新しくなんないよね

今回のラストに出てきたキャラは月光閃火さんが翼君とセットで投稿してきてくれたオリキャラです。
出すのがかなり遅れてすみませんでした！

プロフィールはいずれ

次回はオリキャラ冥夜ちゃんが色々と騒ぎを巻き起こします！
彼女のヤンデレっぷりが全開です！多分

更にその話の後は原作でハヤテが白皇に潜入と色々あります第二章！無事にハヤテはフラグを構築していけるのか！
ご期待下さい！

其の二十七　それは暴風雨のように（前書き）

伽藍
「次回からようやく原作介入です！！」

駿
「では、始まります！！」

其の二十七　それは暴風雨のように

前回のあらすじ！！

三人娘と駿の四バカはいつも通りヒナギクを怒らせて追いかけられるという形で新学期開始！

授業も取り敢えず平々凡々に進んでいつも通りに生徒会が始まろうとしていた時、ヒナギクが職員室である仕事を頼まれた。
それは来年白皇学院に編入してくる中学生の学校案内というものであった。

しかし駿達が準備をする前に、いきなりヘリコプターが時計塔の最上階のバルコニーに姿を現した。そしてなんと出てきたのは……
翼の事が大好きな美少女だった！

「えっと……
じゃあ貴方が見学生の十束冥夜さんね？」

「はい」

衝撃の登場の後……
はしゃぎまくる冥夜を翼が何とか宥めて落ち着かせた。
そして現在、彼女は翼の腕にしがみつきながら生徒会メンバーに向

かい合っている。
嬉々として腕にしがみついている冥夜とは対照的に、翼はげんなりとした表情だ。

「改めまして、私は十束冥夜。
十束家の長女で年齢は１５歳。
東京都立如月中学校に在校で現在は中学三年。
部活は剣道部に所属。
今年、こちらに編入が決まりました故見学に参りました。
ここは……生徒会でよろしいのですか？」

冥夜は翼から離れると丁寧な自己紹介の後、スカートの両端を少し持ち上げてお辞儀をした。
まるで貴族のお嬢様のような挨拶と自信に満ちた瞳からは言い知れぬ誇りすら伺える。

「ええ、ここは時計塔（ガーデンゲート）の最上階に位置する白皇学院の生徒会室よ。
そして私達が生徒会の執行部」

ヒナギクは一歩横に下がると翼に引っ付いている冥夜に見えるようにメンバーと生徒会室に手を向ける。

「私は桂ヒナギク。
白皇学院の生徒会長よ
あと剣道部の主将も兼ねてるわ
よろしくね、十束さん」

まずはヒナギクの自己紹介。

簡単ではあるがそれだけでもいかに彼女が文武両道、才色兼備であるかがよく分かる。

「私は霞愛歌です。
一応副会長をやってます。
よろしくお願いしますね」

「春風千桜です
私は執行部の書記を。
よろしくお願いします」

続いて愛歌と千桜が挨拶をする。そして隣にいくと…

「はいは～い♪
私は瀬川泉だよ！
またの名をいいんちょさんレッド！！」

「私は花菱美希。
委員長を支える副会長ブルー！」

「朝風理沙だ。
敵か味方か、ミステリアスに裏で暗躍風紀委員ブラック！」

「「「三人あわせて……
ザ・生徒会役員！！」」」

ドーンと背景効果が現れそうな勢いで決めポーズをとる三人。
相変わらず楽しそうだ。

そして順番は駿の所まで回ってきた。

「俺の事は……まぁ覚えてねーだろうな」

「ええ、存じ上げません」

「少しは考えるぐらいしろよ！！
本人の目の前だろ！？」

あまりにも素っ気ない返事に駿は思わず転けそうになる。

「すみません
ですが私は翼様以外の男に等微塵も興味が無いので」

「よく知ってるよ……
中学の時は、毎回毎回てめえの翼絡みの蛮行のせいでとんだ目に遭わされてきたんだ……」

苦々しそうに語る駿に思わず顔をしかめる冥夜。

「蛮行とは失敬な。
私は翼様への純粋な愛を表しているに過ぎません」

「凄い価値観の違いだな」

価値観は人それぞれだから意見の食い違いは仕方の無い事。
とはいえ、この少女は常人とはかなりズレている気がするが。

「しかし、如月中学の卒業生でしたか」

「予想はしていたが本当に忘れてんのな」

「例えば道端に石が転がってたり雑草が生えていたとしてそれを一々覚えている人はいません。
それと同様です」

「俺はその辺の雑草ですか！？」

容赦ない彼女の言葉に駿は立ち上がって突っ込んだ。

「確かに、言われてみれば翼様の隣にいつも何か埃のようにもう一人くっついていたような気がしますが……それが貴方でしたか」

「あのなぁ、一応同じ中学の先輩なんだからもう少し言い方を考えてくれるかな？」

しかし全く悪びれもなくそう言う冥夜に駿は青筋を浮かべる。

「そうやって先輩だ後輩だとつまらない枠にとらわれて権威を振りかざし威厳を保とうとするほど愚かで滑稽な事はありませんね」

「……」

言いたい放題の冥夜に無言でワナワナと拳を震わせる駿。

「まぁまぁ、落ち着け駿。
彼女にも悪気は無いから。
十束、お前も言い過ぎだぞ」

そんな様子に先程までげんなりしていた翼が慌ててフォローをいれて冥夜に注意をする。
すると……

「は～い翼様♪
ごめんなさい鷺ノ宮先輩！
冥夜が悪かったです！！」

ズルゥ！！

態度が１８０度変化。
翼の腕にしがみついて可愛らしく謝りだした。
これには駿は勿論生徒会一同ずっこけた。愛歌だけは平静と紅茶を飲んで成り行きを面白そうに眺めているが。

「はぁ……」

「何というか……
凄く個性的な娘ね……」

翼のため息とヒナギクの呆れたような声。
これから始まる学校案内の仕事の大変さを象徴するかのような、そんな光景であった。

其の八　それは暴風雨のように

「なるほど……
ここが学院の中心である時計塔という訳ですか
だから最上階に生徒会室を」

駿、ヒナギク、美希、翼は冥夜を連れて学校案内のために生徒会室から出て時計塔のエレベーターに乗っていた。

全員案内に付き合う必要も無いので愛歌、千桜、理沙、泉は通常通り生徒会の仕事をしている。

本当はヒナギク（生徒会長）と翼（冥夜が腕に引っ付いているから）、駿（仲裁役）が案内役だったのだが、面白そうだからと美希もついて来たのだ。
因みに三人娘のウチ誰か一人だけと言われたのでじゃんけんで美希になった。

「じゃあ、今日は高等部の校舎から簡単な施設を案内しましょうか」

「「お～」」

ヒナギクがそう言うと駿、美希、泉が楽しそうに手をあげる。

「はい、お願いします」

嬉々として翼の腕のしがみついてそれに答える冥夜と、

「はぁ……」

対照的にため息をつく翼。

そんな訳で一行は白皇学院を簡単に回る事になった。

～高等部　一年三組～

「えっと、ここが私達の教室で……」

「まぁ！！

ここが翼様の教室『三組』ですね！！」

最初に高等部を回る事にした一行は、色々と教室を見て回り一年三組の教室の前まで来た。

するとヒナギクの説明を遮り、冥夜は歓声をあげて教室に入っていく。

「ここが翼様が普段授業を受けられている教室!!
そしてこれが翼様の席ですね!!」

「いや、なんで知ってるんだよ」

いっぺんの迷いも無く翼の席に寄っていく彼女に翼は慌てて突っ込む。
それは勿論後ろの三人の視線もあるからだが。

「それは勿論、事前に調べてあるからです♪」

「威張って言うな……
っていうかな十束、そういう事は……」

自信満々に胸を張って答える冥夜に困った様子の翼。

「ああ、これが翼様の見ている景色ですね!!」

「聞けよ」

既に彼女は翼の言葉は聞いておらず、彼の席に座ってキョロキョロと周りを見回して自分の世界に入っていた。

「彼女、いつもああなの?」

「さぁ……
でも、少なくとも中学時代から翼命だったかな」

そんな二人の後ろで呆れたようにヒナギクが尋ねると駿は思い出すように天井に目を向ける。

「ヒナ、あんまり長居していると時間が無くなるわよまだ施設等が色々あるし」

「あ、そうね。
二人とも、そろそろ移動しましょう」

美希の言う通り、あまりのんびり回っていると日が暮れてしまう。
という事で一行は次の場所に移動する事にする。

～職員室～

「ここが職員室。
時計塔の近くにあるから、この広い学院でも比較的見つけやすいわね」

「はぁ～
聞いてはいましたが、職員室とは思えない広さですね……」

くどいようだが白皇学院はとてつもなく大きい。
どのくらい大きいかというと住所が杉並区ほぼ全部。
だから必然的に様々な部屋、施設が普通の学校に比べて遥かに広いのである。

冥夜はお嬢様のようだが、やはり少しは驚いているようだ。

『酒よ！！上手くいかない時はとにかく酒を飲めばいいのよ！！つー訳で今日も付き合いなさい！！アンタの奢りで』

『ふざけんな雪路！！
この金はガンプラ買うために引き出したんだよ』

『うっさい！！
ガンプラばっかり作ってるからアンタはモテないのよ！！』

『うるせーよっ！！』

すると、そんな言い合いが扉の向こうから聞こえてきた。
一人は女性というか雪路の声。
もう一人は薫の声だろう。

「……あの、何か職員室にはあるまじき言葉が聞こえるのですけど」

「良いんだ十束。
ここはスルーしてやるのが優しさだ」

「よく分かりませんが、翼様がそうおっしゃるなら」

冥夜は首を傾げるが翼がそう言ったので頷いておいた。

「……次、行きましょう」

「「……」」

ヒナギクは落ち着いて歩き出すが顔にはしっかりと怒りマークが浮かんでいる。

きっと学校が終わった後、桂先生は怒られるんだろうな～と思う駿と美希であった。

～調理室～

「ここは家庭科や部活とかで使われる調理室ね。許可をとれば個人的にも使えるわよ」

白皇の調理室はやはり最高峰の私立を思わせるものだった。

全てＨＩコンロ兼ね備えは勿論、キッチンも広く流しもフッ素加工のステンレス性。

まな板や包丁といった調理器具まで手の込んだ安全性のある（勿論高級）ものである。

「まぁ、なんて素晴らしい調理室なんでしょう！！

ここならば学校でも心置きなく料理が出来ますね」

そんな調理室を見て嬉しそうに手をあわせる冥夜。

「十束さんは料理が好きなの？」

「ええ♪」

ヒナギクの問いに冥夜は笑顔で答えると一人で頬に両手を当てて顔を赤らめる。

（これで毎日毎日翼様に手作りのお弁当を差し上げられます♪
待っていて下さいね翼様／／／）

どうやらもう入学後の計画を考え始めているようだ。

「そういや、中学ん時も毎日毎日お前に無理矢理昼飯持ってきてたもんな……」

「……」

～グラウンド・体育館～

「ここはグラウンドね。
といっても高等部が使う一部のグラウンド。
後は各校舎に付属しているグラウンドと他にも敷地内には森林や見た事も無いような場所も沢山あるけどね」

「流石白皇……
想像を超える広さですね」

言うまでもないだろうが校舎や設備を含め白皇の敷地はとてつもなく広い。
グラウンド一つとっても、その広さは明白だ。

「そして向かい側にあるのが体育館よ」

グラウンドから右の方にあるドーム型の体育館。
やはり大きいし広い。

「他にも集会用の会場とかパーティー用の会場、コンサートホールとかもあるけど、
それは今回は省くわね」

そう。
まだまだ白皇には数多くの施設や建物がある。
忘れがちではあるが、何せ白皇はお金持ちが通う超がつくほど名門な学校なのだから。

「じゃあ、次に行きましょう」

特に突っ込む所も無いので一行は次に進む。

～武道場～

「ここは武道場。
柔道部や剣道部が練習で使う場所ね。調査書によると、十束さんも剣道部だったのよね？」

「ええ
翼様がなき後もしっかりと私が引き継いできましたから」

武道場に着いて簡単に説明をしながらヒナギクが尋ねると冥夜はいかにもお嬢様らしい誇り高そうな仕草で答えた。

「それじゃあ、入学したらウチの剣道部に入ってもらえるのかしら？」

「翼様もこちらの剣道部にいらっしゃるとの事なので、是非入らさせて頂きます！！」

ヒナギクが聞くと勿論とばかりに即答してみせる冥夜。

「良かったわね翼君、こんなに可愛い後輩が出来て」

「ヒナギク、お前なぁ……」

悪戯っぽく微笑んで振り返るヒナギクに、翼は何とも言えない困ったような表情をする。

「な、なななな！！
なんですって～！！！」

「「？」」

しかし、そんな何でもないいつも通りのやり取りの中、冥夜が道場内に響き渡る叫び声をあげた。

「あ、あ、貴方！！
今翼様の事を『翼君』って……
そ、それに翼様もこの方の事を
『ヒナギク』って名前で……
私はまだ名前で呼んで貰った事も無いのに……！！」

「お、おーい……
聞こえてるか十束～」

翼が呼びかけても彼女は暫く独り言を呟きながら頭を抱えて振るばかり。

「駿君、何か変な流れに入ってきそうね？」

「だな……
あのヤンデレはあらぬ方向に思考をぶっ飛ばしてるに違いない」

少し距離をおいた武道場の壁によりかかって翼達の様子を眺めている美希と駿。

二人の予想通り、暫く頭を振っていた冥夜はいきなり顔をあげると右手でビシッとヒナギクに向けて指差した。

「私の翼様をよくも横取りしましたね！！この泥棒猫！！」

「「……」」

そんな突拍子も無い彼女の発言にどう反応して良いやら、呆気にとられているヒナギクと翼。

「え、えっと……
何の話かしら？」

「とぼけても無駄です！！
私が居ぬ間に私の翼様に手を出し、あまつさえ名前で呼ばせているなど！！言語道断です！！」

「落ち着け十束！！
何かもう色々と勘違いしてるからお前。
後俺はお前のものでも無いからな」

ヒナギクに対して怒り心頭といった様子でまくし立てる冥夜を何とか宥めようとする翼。

「またお約束な展開ね…」

「まぁ、全部勘違いだけどな」

のんびり鑑賞している美希達。
駿の言う通り、何もかもが誤解なのだが。

しかし今の冥夜にそれが伝わる筈もなく……

「ど、どうして翼様までこの方を庇うのですか！？
ま、まさか！！まさか……私の知らない所で、二人はそういう関係

だったのですか！？」

「「……」」

妄想もクライマックス。
ついに冥夜は衝撃の真相にたどり着いたようである。

「その沈黙は……
そうなのですね！！」

「「……」」
→
注）呆れて何も言えないだけです

「そんなの……そんなの……
あんまりですわーーーーっ！！」

「あ、十束！！」
「十束さん！？」

彼女は目にいっぱいの涙を浮かべて武道場から外に駆け出していってしまった。

「……はぁ」

彼女が出ていってしまった扉を見て疲れたようにため息をつく翼。
すると彼の肩にポンと手が置かれる。振り返るとそこには駿と美希が立っていた。

「行ってやれよ……

今走らねーと、オメーは一生後悔すんぞ」

「失った後でしか気付かない想いもあるの……
だから行きなさい」

「何一昔前のラブストーリー風に演出してんだ!!
つーかお前らどういう立ち位置!?俺の何なの!?」

哀しげな表情で空に（実際は天井）目を向ける二人に突っ込む翼。

「貴方には私達と同じ道は歩んで欲しくないの……
そう、二度と叶わぬ想いに心を痛めて過去に囚われ続けることなんて……」

美希は首にいつの間にかかけてあったネックレスを哀しそうに目線まで持ち上げてそう言った。

「美希……
それでも僕は君が……」

「ダメよ駿……
私達は……気付くのに遅すぎたのよ……お互いの気持ちに……」

「オーイ馬鹿だろお前ら。
痛んでんのは頭のだろ。
遅かったのはオメーらの馬鹿さ加減だろ」

訳の分からない三文芝居を始めた二人。
翼は呆れたようにそんな馬鹿二人を眺めていたが……

「翼君、二人は放っておいて早く十束さんを探しましょう！」

「ああ、そうだった！」

ヒナギクの言葉で思い出し、二人も遅ればせながら武道場を後にした。

「……ヒナギクに至っては相手にもしてくれ無かったな」

武道場残った二人は翼達が飛び出していった方に目を向ける。

「取り敢えず私達も追いましょう」

「……って、言ってる事とやっている事が逆だぞお前」

美希は道場の畳の上に座り込んでいた。

「いや、疲れて」

「疲れてってお前、歩いただけじゃねーか」

「白皇は普通の学校とは違うのよ……無駄に広いから体力の無い生徒には疲れるように出来てるの」

そう言われると確かにそんな気もしないでも無いが。

「だから、おんぶ」

「は？」

「駿君が私をおぶって追いかければ万事解決」

「いやいや、
万事解決じゃねーよ。
何で俺がお前を背負ってかにゃなんねぇんだ」

因みに伊澄はいつもおんぶさせたがっている駿（シスコン）。

「まぁまぁ、世の中は持ちつ持たれつだから。
学校生活でもそれは同じでしょ」

「お前に助けられた事なんてまず無いんだけど……
むしろいつもはめられてしまっている気がしてならないんだけど」

「それはそれ。
これはこれ」

駿の意見は右から左。
呆気なく落とされた。

「ったく、分かったよ……
んじゃさっさと乗れ。
早くしねーと翼達見つけられ無くなっちまうから」

「う～ん……
何かこう物足りないな」

仕方なくため息をついて屈む駿だったが、美希は直ぐには背負われずにそんな事を言い出した。

「物足りないって何がだよ?」

「う〜ん……
あ、そうだ!
執事らしさが足らない感じ」

「あの……
端から執事じゃ無いんですけど」

こんな奴が執事をやったら世の中おしまいである。

「何!?
さっきからナレーション敵意むき出しですよね!?」

突っ込む馬鹿は特に触れずに置いといて。
美希はポンと手を打った。

「じゃあ一時間だけ花菱家の執事になるというのはどうかしら?」

「どうかしらって……
何で俺が……」

面倒臭そうに美希を見る駿だったが……

「報酬は『伊澄君』の学校生活での可愛らしい写真詰め合わせで」

「お乗り下さいませお嬢様」

速攻で陥落。

その返答までの時間僅か０．１秒。

「うむ、苦しゅうない」

「ではお嬢様、
急いで参りましょう」

相変わらず扱い易さは超一級だった……

＊

～生徒会室～

「この度は本当にご迷惑をおかけしました！！」

日も少し傾いてきた生徒会室。
その室内の真ん中で、十束冥夜が深々と頭を下げていた。

結局あの後……
半ば暴走しかけた冥夜を何とか見つけ出し、翼、ヒナギク、駿、美

希がそれぞれ事細かな説明をしてあげた。結果、何とか誤解は解けてこうして生徒会室に戻って来たという訳である。

「生徒会長さんにもいらぬ誤解でご迷惑をおかけして……」

「まぁまぁ、勘違いは誰にでもあるから……
だから顔をあげて？」

また頭を下げる彼女にヒナギクは慌てて顔を上げさせる。
しっかりと礼儀もわきまえている反面、暴走や妄想のスイッチが入りやすいからかなり対応に困るのだろう。
見ていて飽きないという言い方も出きるが。

「それで、今回の見学だけど……どうだった？
白皇は気に入って貰えたかしら？」

「ええ、とっても。
色々と楽しそうですし、何より翼様もいらっしゃいますから♪」

最後までそれかと突っ込みたくはなるが、どうやら白皇は気に入って貰えたようである。

何はともあれ、これで生徒会は今回の仕事をクリアー出来たという事になる。
取り敢えず良かったとしよう。

「しかし本当に良かったです。
翼様はやっぱり私の翼様でした」

「いやお前のもんじゃ無いからな」

先程の騒動。
ヒナギクが泥棒猫だとかどうだとか騒いでいた事が全て誤解だと分かって改めて安心する冥夜。

「でも考えてみれば当たり前の事でしたね。
先程の説得で皆様に言われて気付きましたわ」

「そりゃそうだろ……
いつもお前は考えが先走り過ぎるんだ」

冥夜の言葉に翼は少し疲れたように頷く。
周囲の人間も二人のやり取りを半ば苦笑混じりで眺めていた。
彼女の次の一言を聞くまでは……

「そうです。
翼様があのような胸がまな板の如く一切無いタイプの女性になびくことなどあり得ませんものね？」

ピキッ……！！！

暖かい雰囲気が一転、
生徒会室に物凄い冷たい亀裂が入る。
それはもう冷たく鋭い亀裂が。

「と、十束……

お前何を……」

「その点私はしっかりと胸もありますから、翼様の隣に相応しい筈ですね♪」

凍てついた空気には一切気付かない冥夜は歳の割りにかなり豊満な自分の胸を見て微笑んだ後、青ざめた翼の腕に幸せそうに抱き付いた。

翼は勿論、生徒会メンバーは誰も何も喋らない。
ただ一人を除いては……

「十束さん……？」

「あ、はい？」

ヒナギクに話しかけられた冥夜は翼の腕から離れて振り返る。
その表情から、先程の言葉には一切の悪意が無い事が容易に窺う事が出来る。

「さっきの言葉って……
誰から聞いたの？」

「先程私が混乱している時に、皆様がご説明下さりましたが……
あちらの方がこっそり教えて下さいました」

あちらの方。
冥夜が指差したのは今にも生徒会室から出て行こうとしていた、
鷺ノ宮駿であった。
彼はびくり肩を震わせ皆に背を向けたまま動きを止める。

冥夜は駿の後輩だが、やはり彼の事は忘れているようだ。
だがそんな事は今は問題では無く……

「そう、教えてくれてありがとう十束さん」

「いえ」

ヒナギクは笑顔でお礼を言うと扉付近で動きを止めている駿に近づいていく。

「いや、いやいや……
ちょっと待って？
ホントちょっと待って？
違うからねコレは。コレはほら、彼女の暴走を止める為の合理的且つ速効性のある手段であって……別に本心とかそういうんじゃ…」

ガシッ！

「じゃあ、私は駿君とちょっとお話があるから♪
十束さんのお見送りは後の皆にお願いするわね」

「「「了解」」」

そう言うことしか出来ません。
そんな訳で、生徒会の皆さんは二人とは目を合わせずに頷く。

「じゃあ、ちょっと外に行きましょうか」

「……」

哀れ駿。

有無を言わせずに引きずられていき、生徒会室から姿を消した。

「生徒会長さん、どうかしたのでしょうか？」

「知らなくてもいい世界があるんだ。気にするな」

「？」

翼は今回ばかりは連れ去られた駿を少し気の毒に思う反面、因果応報だと呆れ半分でそう言った。

そして……

「皆様、本当にお世話になりました～

そして翼様～！！

私が入学するまでどうかお身体と他の女性に気をつけて下さいね～！！！」

冥夜は暫く不思議そうな表情だったが、時間も頃合いとやって来たヘリコプターに乗り、別れの挨拶と共に白皇学院を後にした。

「なんていうか……
とても変わった方でしたね」

「でも、その分賑やかで良いんじゃない？」

パタリと文庫本を閉じて息をつく千桜にクスリと微笑んで答える愛歌。

「良いな～
ミキちゃんは仕事から逃げられて～」

「そうだそうだ！
私達なんかいつもの仕事量倍で大変だったんだぞ」

実際には二人は一応ちゃんと仕事をしていた。
ちょっとアレな感じだったが。

「でも……
これでようやく終わっ……」

「進級したら今日よりももっと大変な日々になる訳よね」

「……」

一難去って一息、という訳にもいかず美希の言葉に翼はその時が来る事を考えまた深々とため息をついた……

その後ヒナギクが帰ってきて、
いつも通り仕事を終えたメンバーはいつも通り帰宅した。
しかし、駿の行方について尋ねる者はいなかったという……

～♪～♪～♪～
→
世にも〇妙な物語のテーマ曲

「なんで最後の最後でホラーになってんだよ!?」

あ、生きてたのか

「死ぬかと思ったわ!!!
頭の中に煌めく北斗七星が浮かんできたよ!!」

まぁ生きてて良かったね。
チャンチャン♪

「無理矢理終わらせんなァァァァ!!!」

其の二十七　それは暴風雨のように（後書き）

三人娘の
☆諸事情ラジオ☆

美希
「はい、今回は本来ゲストにお越しいただく予定でしたが次回に変更して今回はキャラ紹介をやりたいと思います」

理沙
「今回もインパクトの強いキャラクターが出てきたからな」

泉
「駿君に至っては雑草呼ばわりされてたからね……？」

駿だった物体
「＆＊§★※¢$¥℃@」

美希
「ああ、ヒナとＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩしたばかりにあんなことに！！」

理沙
「きっと教導の時のティ○ナより酷い仕打ちを受けたに違いない！」

泉
「ミキちゃん、リサちん……

それ違うアニメの話だよ？」

美希

「そんな訳で、キャラクター紹介行ってみよ～」

十束（とつか）　冥夜（めいや）

【年齢】

１５歳

【誕生日】

？？？

【血液型】

Ｂ型

【家族構成】

父、母

【身長】

１５２ｃｍ

【体重】

秘密

【好き】

翼、翼が好きなもの全て、翼の作る料理、翼に作ってあげる料理

【得意】

話を聞かない、有無を言わせない

【嫌い】
翼以外の男子、翼に危害を加えるもの、翼に寄り付く女

【苦手】
ゴキブリ、昆虫
ちなみに、『虫』や『黒いG』が怖い。　秘密

翼以外の男子、翼に危害を加えるもの、翼に寄り付く女

【苦手】
ゴキブリ、昆虫

・備考
濃茶髪のウェーブが掛かったロングヘアーに薄い土色のはっきりした瞳、成人女性としては長身であり顔立ちは凛々しめと可愛めの中間くらい、スタイルはかなり抜群で特に胸がデカい。

性格は普段は真面目で清楚なお嬢様といった感じだが、翼の事になると一変してどこまでも一途な乙女に……

中学校時代に翼と駿の一つ下の後輩であった彼女は色々あって翼に惚れてしまう。
以来どこまでもついて来るようになった。
因みに駿達の中学校は公立で『如月中学校』なるもの。

白皇学院に翼が居る事を風の噂で聞き付け、自らも白皇学院に編入

すべく、筆記試験を難なく合格しこの春に編入が決まっている。
とにかく翼が大好きで、彼の事になると一途になり過ぎてヤンデレになってしまう。
翼以外の男子は彼女には道端の石や雑草くらいにしか映らない。
駿も

料理の腕前はかなり高く、翼に食べてもらう為に日々腕を磨いている。
ちなみに、『虫』や『黒いG』が怖い。

美希
「と、こんな感じね」

理沙
「彼女は当分先まで出ないが、
我々がまた進級したら登場するぞ」

泉
「そして!!
次回は遂に三千院家の執事君が白皇潜入!?」

美希
「一体どうなるのか?
次回を乞うご期待!」

三人娘

「それでは、
次回もよろしく～♪」

其の二十八　学校は青春の縮図であるようで無いようで（前書き）

伽藍
「今回はちょっと挿絵をのせてみました。
やっぱり下手過ぎますが、これから頑張って色々と練習していくので最初は下手さはご勘弁下さい」

駿
「因みに俺のイメージ画も主人公プロフィールの所に載ってるから良かったら見てやってくれ」

伽藍
「では、久々の原作介入スタートです！！」

其の二十八　学校は青春の縮図であるようで無いようで

高校……
それは勿論勉強する場所でもあるが、それだけで無く友達と会って話したり、部活動に勤しんだり、恋愛をしたり、たまにはサボって遊んだりと一生のうちでかけがえのない時間の一つである。

「なぁ、マリア」

「はい？」

「……ハヤテも学校に行きたいのかな？」

夜の三千院屋敷。
玄関ホールにいたナギがマリアに向かってそんな事を呟いた。

「え？」

「いや、今日学校に行くときに……」

それは、駿達が見学生の相手をしている時と同じ日。
ハヤテがナギを学校に送る時に、どうしても行きたがらないナギに彼は『行きたくても……もう学校に行けない人もいますから』と言って何とか説得させた。

まぁ、結局たどり着け無かったのだが。

「う～ん……
確かに気になってましたが……
どうなんでしょうか？」

マリアは窓の外を眺めながら小首を傾げる。

「よし……
決めたぞ、マリア！」

「決めたって、何をですか？」

すると、いきなりナギが思い付いたように人差し指を立てて口を開いた。

「ずっと考えていたのだ。
先日の件でハヤテには随分と迷惑をかけたので、何かワビをしなくてはいけないと……」

「え？カゼでも引いたんですか？ナギが反省するなんて……」

マリアが驚いたようにナギを見つめ直す。
端から見るとちょっと酷い言われようにも思えるが、
実際ナギが反省するなんてかなり珍しい。

「侮るなよマリア、
かつてドモ○の父、カッ○ュ博士もこう言った……
『問題があってもそれが分かっているなら間違いを正す事も出来る

はず』と！！」

ナギはグッと拳を握りしめるとマリアに振り返って、

「だから私はハヤテを……
白皇学院に通わせようと思う！！」

背景に荒波がうちつけるかの如く高らかにそう宣言してみせた。

それで翌日……

「え？学校ですか？
別に行きたくは無いですけど？」

「……」

庭で仕事をしているハヤテにマリアが尋ねると、彼はあっさりとそう言ってみせた。

「で、でも……
昨日ナギに……」

「ああ……
だってああでも言わないとお嬢様、学校行く気にならないじゃないですか。だからほら、今日はちゃんと一人で学校に行ってくれたようですし」

「まぁ……
確かに……」

ハヤテの言う通り、ナギは今日は白皇に登校したようだ。

「じゃあ、学校に特に思い入れは……」

「あ～あんまり
高校に行ったのも『俺は高校生だった事がある』って親父の自慢がうっとうしかったからですし……」

マリアの問いにハヤテは苦笑して手を振ってみせる。

「それにほら……
そんな両親だから……
授業参観とか凄く嫌だったし…
運動会とかも他の子の両親見せつけられるのも辛かったし……
『お母さんに作って貰いなさい』っていう雑巾も自分で作ったし…
遠足のお弁当だって自分で……
大体夜逃げも多かったから友達出来ないし、出来てもお別れも言えなかったし……
だからもう……
学校なんて……学校なんて……」

話をしながら次第に落ち込んでいったハヤテ。遂には木に手をついて暗いオーラにのしかかられるように声を潜めてしまう。

（やっぱり行きたいんじゃないかしら……？）

そんな彼の様子を見てまずい扉を開けてしまったと困ったように息をつくマリア。

「う～ん……
ではそんなハヤテ君にこの仕事を頼むのは忍びないですわね～」

「へ？何がです？」

ハヤテが振り返るとマリアは綺麗な紫色の生地に包まれた重箱を持っていた。

「あの子お弁当を忘れていったので、届けてもらおうかと思ったのですが……」

「あ！！
別に大丈夫ですよ！！」

しかしハヤテはニコッと微笑むと重箱を自分の元に受け取る。

「それに一度行ってみたかったんですよね、白皇学院。
僕には一生縁の無い場所ですから」

「そうですか……
では、お願いしますね」

「はい！！」

こうして、三千院家の執事としてお弁当を届けるという任務を遂行すべく、ハヤテは白皇学院に向かう事になった。

同時刻……

「チェック」

「う～む……」

朝の生徒会室。
生徒会メンバーが朝のＨＲの時間まで各々紅茶を傍らに休憩をしたり読書をしたりしている中、
鷺ノ宮駿と鷹ノ瀬翼は小さなテーブル囲うように椅子に座り向かい合ってた。

小さなテーブルの上にはチェス盤が置いてあり、
左側には頬杖をついて顔をしかめて唸っている翼。
対照的に右側には足を組んだまま口元を緩めて右手で黒のポーン駒をくるりと回す駿の姿。

「無駄だよ。
チェックメイト、もう詰んでる」

「む、むぅ……」

駿の言葉に翼は眉を寄せて渋々ながら首を縦に振った。

「これで、俺の三連勝だな。
全戦全勝つー訳だ」

「くそ、もう一回」

「何度やったって同じだっつーの……」

駿はそう言って盤上の白のキングを黒のクイーンの駒で倒してみせた。

「へぇ……
駿君でも翼君より勝っている面があったのね」

「お、美希か」

駿が振り返ると、彼らの座っている椅子に花菱美希が近づいてきていた。

「翼君はこういうのは苦手なの？」

「いや、苦手という訳じゃないんだけどな……
昔からコイツにだけは勝てないんだよ。チェスとか将棋とか、どういうわけか」

美希の問いに翼は参ったように口を八の字に曲げて倒された白のキングを元に戻す。

「こういうのは単に頭が良けりゃいいってもんじゃねーからな。
瞬時に局面（ながれ）を読むんだ。目先の場じゃなくて、数手先までの場を常に頭に入れるんだよ」

「瞬時に局面ってお前……
簡単に言うけどな～」

駿は駒を一つ持って椅子から立ち上がるが翼はそんな彼に向かって口を尖らせる。

「お前の場合、特にナイトの使い方だよ」

「ナイトの？
どういう事だよ？」

「そういう事」

翼の問いに駿は手に持った黒のナイトの駒を見せただけで、それ以上の説明はしなかった。
後は自分で考えろといった所であろうか。

「まぁ何にしても、賭けは俺の勝ちな」

「賭け？」

「ああ、翼が一回でも勝ったら俺が昼飯奢る。
逆に俺が全部勝ったら翼が昼飯を奢る」

首を傾げる美希に駿は生徒会に来る前に交わした賭けの内容を簡単に説明した。

「んじゃ、昼はよろしくなっ」

＞i３２２６５―２１５９＜

「賭けは賭けだし仕方ないか……けど放課後こそは……」

駿が自分の手の平で黒のナイトをクルクルと回して悪戯っぽく微笑むと、翼はため息混じりに頷く。が、すぐに表情を引き締めると盤に視線を戻しあれこれと考え事を始めていた。

「ちょっと意外だな
駿君が翼君を負かしてる光景なんて」

「人には得意不得意があるからな」

駿が長テーブルに戻って来ると隣で読書をしていた千桜が本を閉じて彼に話しかける。

「ま、俺にはこういう才能があるって事だな」

「代わりに運動の才能はからっきしってわけね」

駿が少し得意そうに言うと、それを引き継ぐようにヒナギクがクスリと微笑んでそう返した

「……まぁ、生徒会長は才色兼備で完璧ですからねぇ、そういうアレは無いんでしょうけども。
胸以外ｈ」

バコッ！

負けじと言い返そうとした駿だが、言葉が言い終わる前に会長机から飛んできた堅い器物が顔面に直撃して、彼はそのまま長テーブルに突っ伏してしまった。

「何か言った？駿君」

「いえ、何も……」

何で自分の時だけ、と理不尽ささえ言われぬ自らの境遇に内心嘆く駿であった。

其の九　学校は青春の縮図であるようで無いようで

「え？今日ってお昼がある日だったのか？」

お昼も近づいてきた午前１１時。
テラスにある椅子に座っていた三千院ナギは少し驚いたようにそんな声をあげた。

「ええ、午後から特別授業だから」

「そうなのか……」

そんな彼女に向かいに合って座っているのは鷺ノ宮伊澄。

「じゃあ伊澄はお昼を？」

「ええ。
今日お兄様がお弁当を持って来て下さっているから、一緒に食べようと」

伊澄はそう言って少し嬉しそうに口元を緩めた。
ナギは伊澄の兄である人物の相変わらずのシスコンぶりに半ば呆れながら頷く。

「ですがお弁当ならハヤテ様などに持ってきてもらうというのは……」

「ん～
まぁ別に良いよ」

彼女は湯呑みを啜りながらそう言うが、ナギはカップを口元まで運

んで素っ気なく返した。

「このカフェテリアでサンドイッチでも食べれば十分だ」

そう。二人がいるテラスは白皇学院にあるカフェなのだ。
敷地内学食もあるがお洒落なカフェテリアもいくつか設置されている。

そんな感じで二人がカフェテリアで一息ついていると、どこからか二人組の女子生徒がナギ達の後ろから歩いてきた。

「ねーねー
聞きました?校内に黒服の不審者が入ったんですって」

「まー、恐ろしい」

「何でも、随分貧相な顔の不審者で、今桂先生が必死で追いかけてるって……」

「早く捕まると良いですねー」

二人組はそんな会話をしながらナギ達のテーブルの横を通り過ぎていった。

(黒服の不審者って……
まさかハヤテ……か?)

その話を聞いたナギ黒服＝執事とリンクしたのだろうか。
自分の執事であるハヤテの顔を思い浮かべる。

（ハヤテだったら先生に見つかって怒られるのも忍びないし……
ここは私が……
取り敢えず不本意だがヒナギクにでも協力してもらって……）

ナギは一通り考えをまとめると椅子から立ち上がってカップをテーブルに置く。
そして『ちょっと行ってくる』と伊澄に言い残し、彼女は校舎の方に歩いていった。

同じ頃。

不審者と噂される
当の本人はというと……

「う～ん、授業がはじまると……流石にこの辺りは人気が無くなりますね～」

普通に白皇の敷地内を歩き回っていた。
あれから、白皇に到着した彼は門で教師の桂雪路に不審者扱いされて隠れながら移動していたのだが、授業が始まり生徒が居なくなった頃を見計らって出てきたのだ。

「これでようやく落ち着いて事務室を捜せます……
ていうか、そもそも逃げ回る必要なんか無いんですよ。
別に本当に不審者な訳じゃないんですし」

ハヤテは包みを持ったまま周りを少し見回しながら呟く。

「借金取りに追われてた頃の癖で追いかけられると思わず逃げちゃいましたけど、
堂々としていればいいんです！！
だって僕は三千院家の執事なんですから！！」

彼は自分に言い聞かせるようにそう言って拳を握りしめる。

「それにしても……
やっぱりあの時計塔は凄いな～」

彼の目に入ってきたのは白皇学院のシンボルとも言える学院の中心にある時計塔（ガーデンゲート）。高くそびえるその塔は見るもの誰しもを圧倒する。

「せっかく来たんだから……
一度くらいは一番上まで登ってみたいな～」

その塔を少し離れた場所から見つめ、そんな事を呟いた時だった。

「ダメよ。
時計塔の一番上は生徒会メンバーしか入る事を許されないんだから」

「！？」

突然かかってきた謎の声。
ハヤテは慌てて振り返るが後ろには誰も居ない。

「えっ！？だ、誰ですか！？
それにどこから！？」

「クスッ……♪
ここよ、こ・こ・？」

声は上の方から聞こえてくる。
ハヤテが上の方向に振り返ると…

「まったく……
三千院家の執事君が、こんな所で何をしているのかしら？」

「！！」

高い木の枝の上。
桃色の髪の美少女がクスリと微笑みながら……

「……」

「……」

枝に乗った美少女が木の真ん中に手を置いてこちらを見下ろしていた。
というか、ヒナギクだった。

「えっと……
あなたこそ、そんな所で何を？」

「うっ……
さ、流石は三千院家の執事。
いきなり核心をついてくるわね」

ヒナギクは木に掴まりながら少したじろいでみせた。

「白皇学院では最近木登りが流行っているんですか？」

「これが遊んでるように見えるかしら？」

「でも、危ないですよ？」

「そんな事、言われなくても分かってるわよ！！」

上に声をかけるハヤテに思わず叫び声で返してしまうヒナギク。

「こ、これは要するに……
えーとえーと、木って意外と滑りにくいし枝もあるからスルスル登れちゃうんだけど、上ばかり見ていると下がおろそかになるというか……」

「平たく言うと、猫が高い所に登ったは良いけど怖くなって下りられなくなったみたいなもんですね」

「ひ！！平たく言わないでよ！！
なんか私、バカみたいじゃない！！た…！！確かに『バカと煙は高い所に登る』って言うけど私はバカじゃないですからね！！」

（そこまで言ってないのに……）

木の枝の上から抗議の声をあげるヒナギクを呆れように見つめるハヤテ。

「と、ところで……
貴方、三千院家の執事ならそこそこ運動神経はあるのよね？」

「へ？え、えっと……」

「その……
お願いがあるのですけど…」

ハヤテの返事を聞かずにヒナギクは恥ずかしそうに目を閉じて口を開く。

「お願い？」

「だからその……
えっと……
う、受け止めてね」

「え？」

言うが早いか、
ヒナギクは目を閉じたまま枝から飛び降りた。

彼女はそのままハヤテに向かって落ちてくる。

「ってええ！？
え！？やっ！！え！？」

「ん？」

しかし、ヒナギクはいきなり目を開けると足を出してしまう。

どうやらもうハヤテが受け止められると思ったようだ。
結果、彼女の足はハヤテの顔面に直撃。
ヒナギクは無事に着地したが、ハヤテはその場に崩れ落ちた。

「あ！！ご、ごめん！！
だ！！だ！！大丈夫！？」

「え…ええ、何とか」

ヒナギクが倒れたハヤテにすぐさま駆け寄る。
彼は顔を擦りながらゆっくりと起き上がった。

「ダメじゃない。
ちゃんと受け止めないと危ないわよ」

「危ないと思うなら最初から飛ばないで下さい！！」

まだ若干涙目のハヤテは思いきりヒナギクに突っ込む。

「ご、ごめんなさい……
でもそんなに怒鳴らなくたって…凄く怖くて、一秒でも早く下に下りたかったんだもん……
私、高所恐怖症だし……」

しゅんとして謝るヒナギク。
それを見てハヤテは息をつくと、彼女の前にゆっくりと人差し指をたててみせた。

「そんないきなり飛ばなくても、言ってくれれば助けに行きますよ」

「……」

そう言った彼にヒナギクは俯かせていた顔を上げる。

「……へ～
言ってくれれば、助けにきてくれるんだ……」

「？」

手を後ろに組んで口元を緩めるヒナギク。

「そういえば、
高い所が苦手なのにあんな所に？」

「ああ。
だって、しょうがないじゃない。あの子ったら……
巣から落ちて泣いていたんですもの」

「あの子？
あ、ヒナ鳥……」

ヒナギクの目線の先には枝の上にある巣で可愛らしく鳴くヒナの姿があった。

「今時そんな理由で下りられもしない木に登ったんですか？」

「な！！何よ！！
またバカにする気！？」

しかしハヤテはニッコリとヒナギクに向けて微笑んだ。

「いえ……
とても感心しました。
すみません、色々失礼な事を言ってしまって」

「え、いや……
分かれば良いのよ」

するとハヤテは自分に手を向けてみせる。

「僕の名前はハヤテ。
綾崎ハヤテです。
貴方は？」

「え、私？
私は、桂ヒナギクよ」

ヒナギクは咳払いを一つ、そしてハヤテに自己紹介を返した。

「へ～、桂ヒナギクさんっていうんですか。
素敵なお名前ですね」

「あら、ありがとう」

ヒナギクは微笑むとクルリと背を向けたて時計塔を指差した。

「じゃあお礼のついでに、
時計塔の最上階に連れてってあげるわね♪」

「え！？
でも、時計塔は生徒会の人しか入れないんじゃ……」

ハヤテが不安そうに尋ねると、彼女は振り向いて軽くウィンクしてみせる。

「大丈夫よ。
その生徒会の会長は……
私だから？」

＊

「しかし……
雪路が授業抜け出して良いから至急集まれなんて……
一体何事かしら？」

「ね～」

「つーか俺、伊澄とお昼があんだけど……」

場所は変わって、
学院内のとある外通路。
その場所に美希、泉、駿の姿があった。
彼ら三人は授業中にも関わらず雪路によっていきなりこの場に呼び

出されたのだ。

「翼君は呼ばれ無かったの？」

「いや、そもそも翼は授業自体出てなかったぞ。
何かチェスで考えるとかなんとかって、生徒会室に居っぱなしなんじゃねーかな。
そういやヒナギクも教室にはいなかったな」

美希に尋ねられた駿は自分の教室に目を向けて話す。

「そういうお前らだって。
理沙が居ねーじゃん」

「リサちんはエスケープしたからね～」

三人娘の方も、理沙が体よく抜け出してしまったらしい。

「よくぞ来てくれたわね！！」

「「「？」」」

そうこうすると、向かい側の通路から雪路が歩いてこちらに近づいてきた。
彼女の後ろには呆れたような表情の薫の姿もある。

「あ、桂ちゃん！」

「雪路、一体何なの？

この取り合わせは？」

「フッ……
よくぞ聞いてくれたわね！！」

雪路はビシッと三人に指を突き付けると不敵に笑った。

「今から、貴方達には特殊任務を言い渡すわ……」

その彼女の様子を見て、三人はどうせろくな事じゃないだろうと予感したのであった。

其の二十八　学校は青春の縮図であるようで無いようで（後書き）

すみません。
今回は後書き書けませんでした。次回こそ必ず！

伽藍
「挿絵、下手だけど何となく駿は書きやすい気がする」

駿
「まぁ、これと言った特徴もないからな」

伽藍
「アドバイス等もあったら是非お願いします。
次回もよろしくお願いします！！」

其の二十九　Hayate is in Celestial Chamber

今回は挿絵に駿と原作キャラを一人に描いてみました。
まだまだ下手くそですが。

今回でハヤテの潜入編は終了です！！

其の二十九　Ｈａｙａｔｅ　ｉｓ　ｉｎ　Ｃｅｌｅｓｔｉａｌ　Ｃｈａｍｂｅｒ

「皆、よく集まってくれたわね……」

「いや、先生が無理矢理集めたんじゃないですか……」

白皇学院の外にある通路。
日差しも差し込むその場所に腕を組ながら立っている雪路とそれに向かい合うように並んでいる駿、美希、泉、薫の四人。

「薫先生、雪路はどうしたんだ？」

「気にするな。
変なのはいつも通りだ」

四人の前で不敵に笑っている雪路の様子に美希が尋ねるが薫は呆れたように首を振った。

「貴方達を集めたのは他でも無いわ。今、学校に不審者が潜入しているわ」

「「「不審者？」」」

「そう。ソイツはこの学院の生徒の関係者でお弁当を届けにきたと言って、あろうことか私の防衛戦を突破して学院に侵入。
現在も学院内を闊歩しているでしょう。だからなんとしても見つけ出し、悪即斬で倒すのよ」

雪路はそう言って腰に手を当てて息をつく。

「でも先生」

「どうしたの鷺ノ宮（シスコン）君」

「そのルビはどうなんですかというツッコミは置いといて、もしかしたら本当に生徒の関係者かもしれないじゃないですか。その場合は……」

「甘ァァァァい！！」

駿が手を上げて疑問を投げ掛けようとしたが、それは彼女の叫び声に止められる。

「いい？
ソイツが本当に不審者かどうかなんて関係無いのよ」

「？」

「相手が誰であれ天下の白皇学院が『不審者の侵入を許した』のは事実！！
だったらその不審者を倒さない限り、白皇のセキュリティーに対する信頼が失われちゃうのよ！！」

なるほどその通りである。
彼女の主張に確かにと納得しかけた駿達だったが……

「そうなったら大変な事になるじゃない！！

主に不審者の侵入を許した……
私の給料の部分が！！！」

（（（（結局……
そっちの心配かよ……））））

単に自分の給料が危うくなる事に対しての事だった。

「とにかく！！
手分けして捜すわよ！！」

ビシッと四人に指を突き付ける雪路。美希は呆れたまま、駿はお昼休みの心配をしているがそんなのはお構い無し。

「瀬川さんと花菱さんは体育館付近！！薫（あんた）は校舎周り！！
鷺ノ宮君は私と校舎内から確認するわよ！！！」

そんな訳で、雪路のいつも通りのメチャクチャな理屈で一同は無理矢理不審者捜索を開始するのだった。

其の十　Ｈａｙａｔｅ　ｉｓ　ｉｎ　Ｃｅｌｅｓｔｉａｌ　Ｃｈａｍｂｅｒ

「あの、本当に良いんですか？
僕は部外者なのに……」

「良いのよ。
これは私からのお礼なんだから」

白皇学院の時計塔。
その内部のエレベーターに乗っていたのはハヤテとヒナギク。
彼はやはり不安そうに尋ねるが、彼女はそう返した。

「それに、一度くらい登ってみたいって言ってたじゃない。
だったら登った方がもっと満足できるでしょ？」

「それはそうですけど……」

「だったら、せっかくのチャンスを自分からフイにしないの」

ヒナギクは振り返って人差し指を口に当てると……

「綾崎君、少しくらいワガママ言わないと……
幸せ掴みそこねるわよ」

そう言って微笑んでみせた。

その綺麗な表情に少しドキッとするハヤテ。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

「よろしい♪」

そうこうするウチにエレベーターが最上階に到着してドアが開く。

二人は生徒会室の扉の前に歩いていった。

「ここが白皇学院の生徒会室。

通称“天球の間”よ」

「へぇ～」

そしてヒナギク、続いてハヤテが扉を開いて中に入っていくと……

「お、ヒナギクか」

「あれ、翼君？」

翼が椅子に座って小テーブルを前に頬杖をついていた。

彼はヒナギクに気が付くと顔を上げる。

「どうして生徒会室に？」

「ああ、今は授業だけどな。

あのままアイツに負けたままじゃいられねーからな」

翼はテーブルに置かれたチェス盤を指差して答えた。

ヒナギクはそれで今朝のやり取りを思い出し理解したようた。

「ところで……」

翼は椅子から立ち上がると彼女の前まで歩いてくると少し首を傾けてから頷いた。

「意外だな……
ヒナギクが彼氏を連れてくるなんて」

「な!?何言ってるのよ!?
違うってば!!」

後ろにいるハヤテを見てニヤリと笑ってみせる翼。
ヒナギクは少し顔を赤くすると慌ててそれを否定した。

「彼は……
三千院家の執事で綾崎ハヤテ君よ」

「えっと綾崎ハヤテです。
よろしくお願いします」

ハヤテは一歩前に出て翼に軽く会釈してみせる。
すると翼も会釈を返して手を差し出した。

「おう。
俺は鷹ノ瀬翼。白皇学院生徒会の副会長だ。
よろしくな」

「副会長さんでしたか!

よろしくお願いします、鷹ノ瀬さん」

そうして二人は握手を交わす。

「名前で良いよ。
その代わり俺もハヤテって呼ばせてもらうな」

「あ、はい。
じゃあよろしくお願いします、翼さん」

改めて名前で言い直して自己紹介をし合う二人。

「それじゃあ、俺はちょっと戦略を考えてるから。
ゆっくりしていってくれ」

翼はそう言って笑うと、また椅子に座ってチェス盤と駒を見つめ始めた。

「それじゃあ、バルコニーはこっちよ」

「あ、はい」

ヒナギクが生徒会室の奥を指差すと、そこには大きな窓が開かれていて広いバルコニーがあった。
ハヤテは言われるがままバルコニーに出て外に顔を向ける。

「うわーーーーっ!!!」

それはまさしく絶景。
敷地内の森林、東京の建物、広く広く澄み渡る空。
町のありとあらゆるものが一望出来る程に高い。

「ふ……
どう？素晴らしいでしょ？
この時計塔からの眺めはまさに絶景……
あまりの美しさに瞬きすら忘れてしまいそうになるでしょ？」

「そんな奥からでは見えませんよ？」

「私はいいの。
心の目で見てるから」

ヒナギクは室内のソファに座って振り返りもせずそう答える。

「でもここからだと校内の様子がよく見えますね～」

「でしょ？
ここに生徒会室があるのは、生徒の様子をしっかりと見るためなんだから」

ハヤテが校舎を見回すのに対してヒナギクは室内を眺めながらそう説明した。

「でも、今って授業中みたいですけど……
良いんですか？桂さんは出席しなくて」

「……」

その問いにヒナギクは振り返ることは無く口も開かなかった。

「……桂さん？」

「あーもぉうるさいうるさいだまれーーーっ！！」

かと思ったら怒った。

「仕方ないじゃない。
チャー坊を助けてるうちに授業始まっちゃったんだから！！
途中からなんて恥ずかしくて入れないでしょ！？」

「まぁそうかもしれませんが……ところで、チャー坊って？」

聞き慣れない単語に首を傾げるハヤテ。

「さっき助けたヒナ鳥。
茶色のスズメだからチャー坊」

・・・・・

「……単純」

「な！！何よ！！
漫画と名前は分かりやすさが大事なんだから！！」

呆れたように顔を反らすハヤテに分かりやすさを訴えるヒナギク。

「あんまり口答えばかりしてると、不審者って事で警備に突き出すわよ！！」

「すみませんすみません……
それだけはもう勘弁して下さい」

そんな二人のやり取りを翼は苦笑混じりに聞いていた。
すると……

ガチャ……

「昼間っから喧しいな……
つーかお前、やっぱここに居やがったな」

「あ、駿」

生徒会室の扉が開いて駿が頭を掻きながら入ってきた。
彼はそのまま椅子に座っている翼を見つける。

「お前、何も授業潰してまでんなモンやらんでも……
あれ？ヒナギクまでここに居たのか」

「駿君じゃない。
どうしたの？」

駿は今度はソファの前に居たヒナギクを見つける。

「それはこっちのセリフ……
って、んん？」

彼はヒナギクの前まで近づいてきてある人物に気がついた。
その人物も駿に気付いたようで…

「ハヤテ！？」
「駿君！？」

二人は同時に驚きの声を上げた。ヒナギクと翼はその様子に不思議そうに小首を傾げる

「おまっ、何でこんな所に！？」

「えっと、僕はお嬢様にお弁当を届けに……」
「お弁当？
って事は……噂になってた不審者ってお前の事か」

「えっと……
何故だかそんな感じに」

駿は先程雪路に聞いた話と今いるハヤテの目的を聞いてすぐに今回の騒ぎの原因を理解した。

「それより、駿君もこの学校の生徒会だったんですか？」

「まぁな。俺は生徒会の会計って事になってんだよ」

「そうだったんですか～
何だかビックリですよ。

こんな所で会うなんて」

思わぬ形での再会にニッコリと微笑むハヤテ。

「えっと……
ちょっと良いかしら？」

「「？」」

ここでようやくヒナギクが二人に割って入る。

「二人は知り合い？」

「ええ、駿君とは去年のクリスマスに初めて会って……本当に色々と助けて頂いたんです」

「へぇ、そうだったの」

意外な知り合い関係に少し驚いた様子のヒナギク。

「ええ。今僕が三千院家で執事の仕事をしていられるのも、駿君のおかげですから」

「言い過ぎだからな。
ナギのおかげだろ」

ハヤテの言葉に少し決まりが悪そうに頬を掻く駿。
しかしハヤテは首を横に振った。

「いえ。あの時の駿君の言葉があかったら、僕は今こうしていられ

るんですよ」

「んな大層なモンじゃねーよ」

わざとらしく呆れたような口調でそう言う駿。

「本当ですよ
他にも執事になった後も色々助けて頂きました」

「んな事ぁ無ぇから」

駿は誤魔化すように肩を竦めて、翼の座っている椅子の向かい側の椅子に歩いていって座ってしまった。

そんな様子にクスリと笑みを溢すヒナギクと翼。

「あ、そろそろお嬢様にお弁当を届けにいかないと……」

ハヤテは思い出したように声をあげる。
彼は包みを持ったままヒナギクと一緒に生徒会室を出てエレベーターの所に歩いていった。

「さて……
不審者騒動も無事解決した事だし、俺も伊澄と一緒にお昼にするか」

「お前、今日は俺が飯奢るんじゃないのか？」

「それ、明日な」

駿は翼にそう言って椅子に座ったままゆっくり伸びをした。

（そういや……
桂先生に問題無しだったと報告しないとな……）
そんな事を考えながら椅子から立ち上がろうと……

「不審者発見ーーーーっ！！！」

突如、エレベーターホールからそんな叫び声が聞こえてきた。

「……報告の必要は無くなったみたいだな」

明らかに雪路の声である事から、どうやらハヤテは見つかってしまったようだ。

暫くエレベーターホールから何か言い合いのようなものが聞こえてくる。
どうやらヒナギクがハヤテの事を説明しようとしているらしいが声から判断するに雪路は全く聞く耳を持っていないようである。

「あれで姉妹なんだよな」

「世の中分からんな」

ホールから響いてくる声に大体の状況を想像しながら頷く駿と翼。

「私に向かってボケとは何よ！！

ボケとは――――――っ！！！」

「ぬう！？」

すると、ヒナギクの叫び声と共に彼女と雪路が剣を片手に飛び込んできた。

ハヤテも苦笑混じりにその後から入ってくる。

「……何かバトルが始まってるぞ駿」

「戦闘スペックが高い所は似てんだな」

二人の争いを座りながら眺める駿達。翼は同時にチェスの駒を色々と考えながら動かしていく。

一方……

ヒナギクと雪路の争いは姉妹の口喧嘩に発展していた。

お金貸した借りたと言い争う二人にハヤテはいつの間にかカヤの外である。

「あの～……

僕、お嬢様にこのお弁当を届けに」

バッ！！

「捕ったァァァァ！！」

ハヤテが持っていた包みを一瞬の隙をついて雪路が剣を使って奪い

取った。
彼女はそのままバルコニーの取っ手の縁、一歩下がれば敷地の地面落下するくらいギリギリの場所に着地する。

「お姉ちゃん！！」

「ククク……
ヒナ、これを返して欲しい？
でも来れるかしら？高所恐怖症の貴方に。
来れないなら今すぐその不審者をこっちに渡して、ニ万円をチャラにしなさい」

要するに人質ならぬお弁当を取引きに使うつもりである。
流石の駿達も呆れたようにその光景を見ている。

するとヒナギクは一歩、バルコニーに足を踏み出した。

「ヒナギクさん！？」

「バカにしないでよお姉ちゃん。私は白皇学院生徒会長・桂ヒナギク！！
お客様を不審者扱いする事なんて断じてさせないんだから！！」

彼女は高らかにそう宣言した。
雪路はそれを見てフッと口元を緩めると……

「流石我が妹」

ゴオォォォォ……

「「！？」」

刹那……

強い風がバルコニーに吹き抜け、雪路の足場は容易く縁から空中にずれた。

つまり、最上階の高さで足場が無くなった訳で…

「うわァァァァ！？」

「お姉ちゃん！！！」

雪路は時計塔最上階から落下してしまった……

かに思えたが。

「っ！！」

「へ！？」

ハヤテが目にも止まらぬ速さで突っ込み足を柵に引っ掻けて雪路の両手を掴んでいた。

危機一髪……

なんとか彼女落下は免れ……

ズルッ！！

「ええ！？」

「「！！？」」

ハヤテが引っ掻けていた足が僅かにずれて、そのまま柵から抜けてしまった。

つまり……二人とも落下

「嘘……ハヤテ君！！！
お姉ちゃん！！！」

ゾッとした表情で叫ぶヒナギク。しかし、同時に彼女の横を物凄い速度で何かが通り過ぎた。

「え！？」

それは駿だった。

彼はバルコニーの柵を飛び越え二人を追うように最上階から消えていった。

「……」

ヒナギクは訳も分からずに呆然とその場にへたり込む。

「駿～！！

皆無事か～！？」

「！？」

すると、ヒナギクの後ろでロープを掴んでその場で踏ん張る翼がバルコニーに向かってそう叫んでいる姿があった。

暫くして……

『ギリギリな！！』

下からしっかりとした駿の声が返ってきた。

「良かった。
皆無事みたいだぞヒナギク」

「……」

そう。

ハヤテが落下したあの瞬間、翼が生徒会室に偶々あった丈夫な作業用ロープを駿に投げ渡し、駿はそれを掴んだままバルコニーを飛び越え全速力塔を駆けてで落下した二人を助けにいったのだ。

「ったく……
真っ昼間にこんなハードなアクションさせんなよな……」

「ハハハ……
すみません」

ロープをしっかりと掴んだまま、駿はもう片方の手でハヤテの執事服の裾を掴んで時計塔の真ん中辺りにいた。
ハヤテは雪路の手を掴んでいて、三人は全員無事である。

『引き上げるぞ～！！』

上空から翼のそんな声が聞こえてきた。

＊

「あ…ありがとうハヤテ君、駿君、翼君。お姉ちゃんを助けてくれて」

無事に引き上げられた三人。
ヒナギクはまだ腰が抜けているのか座ったままだったが涙目になりながらお礼をいった。

「いえ、とにかく無事で良かったですよ」

ハヤテはニッコリと微笑んでヒナギクに手を差しのべて彼女を立たせた。

「でも、翼がロープ見つけなきゃ今頃仲良くあの世行きだったな…」

「ホント、良くあの一瞬で見つかったモンだ」

駿と翼はそう言いながら、特に駿は疲れたようにソファに腰を降ろす。

取り敢えず、瞬発力が超ハイスペックな三人によって何とか雪路を助ける事が出来た訳だ。

「いやぁ、助かったわ。
やっぱり三千院家の執事は凄いわね～」

「あ、ようやく信じて頂けましたか♪」

雪路もハヤテの事をようやく三千院家の執事と信じたようだ。

「本当に、本当にありがとうハヤテ君、駿君、翼君」

ヒナギクはもう一度礼をいった。ハヤテ笑って、駿はソファに倒れたままだが何とか手だけ上げてヒラヒラと振って答える。

「誤解が解けて助かりました。
では、お嬢様にお弁当を届けにいってきますね」

「え？あの残骸を？」

「ああ！！！」

ハヤテが見たもの。
それは無惨にも床にひっくり返り中身が飛び出ている重箱だった。

雪路が落下する寸前に思わず投げてしまったのである。

「ごめん……
落ちそうになったんでつい…」

「……」

ハヤテはバラバラになった重箱の前で言葉を失い立ち尽くす。

「流石にそこまでは責任持てねーぞ……」

「あ～、うん……
俺もロープ投げるのに夢中で気付かなかったな」

ソファからハヤテ達の様子を見て困ったように顔を見合わせる駿と翼。

「ど…どうしよう……
僕…クビになっちゃう……」

「だ！！大丈夫！！
私がちゃんとナギに謝るから！！
ね！！」

「う、うん！！
先生も謝っちゃおうかな！！うん！！」

その場に崩れ落ちるハヤテにヒナギクと雪路が慌ててフォローを入れようとするのだった……

その頃……

「ハヤテの愛妻弁当まだかな～♪」

「お兄様、遅いですね……」

二人の少女は彼等の事を待っていたという。

ナギの方は楽しみにしていたそうな……

其の二十九　Ｈａｙａｔｅ　ｉｓ　ｉｎ　Ｃｅｌｅｓｔｉａｌ　Ｃｈａｍｂｅｒ

三人娘の
☆諸事情ラジオ☆

美希
「今回は私の挿絵が出たな」

泉
「良いな～ミキちゃん
原作キャラ最初の登場で～」

理沙
「泉は描きにくそうだからな」

泉
「ええ、そんな事ないよ～！！」

駿
「そんな事は置いといて、今回はお客様をお呼びしております！！
闇夜の黒鳥さんの小説『黒と白の物語』から、修二さんと亮さんです！！
では、どうぞ！！」

修二
「薫（妹）の為なら例え火の中水の中、俺の全てはそこにある。
椿修二だ」

亮
「雨が降っても槍が降っても、優花（妹）達の為なら何のその。
それが僕の信念だ。
天道亮です」

駿
「導かん我が道は伊澄（妹）にあり！！彼女無くして何を語る！？
全ては彼女の笑顔のために……鷺ノ宮駿」

駿・亮・修二
「三人あわせて……
神聖妹同盟！！！」

ドーン！！！

美希
「突っ込むのが面倒なんで、一旦ＣＭいきます」

ハヤテのごとく！
３０巻
近日発売！！

美希
「改めまして、本日のゲストは椿修二さん、天道亮さんのお二人です」

修二・亮
「よろしくお願いしま～す」

理沙
「さてさて、お二人はシスコンという事をさっき公言していましたが……」

亮
「僕は妹だけじゃなくて弟も大切にしてるよ」

理沙
「ほう……
修二さんは妹さん命で？」

修二
「当然だ。
薫は誰にも渡さん」

泉
「でも本編ではあんな事に…」

修二
「うわァァァァ！！
それを言うなァァァァ！！」

亮
「乗り越えないとダメだよ修二。彼女も君から旅立つ時が来たんだ」

修二
「認めん！！絶対に認めんからなァァァァ！！」

駿
「その通りです修二さん！！
俺も絶対に認めません！！
人様の妹に手を出すなど言語道断！！」

亮
「アハハ……？」

美希
「いやいや、シスコンが集まると会話が拗れて仕方ないな」

理沙
「全くだな」

泉
「あ、そういえば！
亮さんは先日ご婚約が決まったんですよね？」

亮
「え？
いや、まぁ……
というかよく知ってるね」

美希
「政治家の娘ですから。
調べるのは得意」

修二
「まさか亮！！
お前これを機に妹同盟から脱退を表明するんじゃ無いだろうな！？」

駿
「ええ！？
マジですか！？この固い固い妹同盟という絆を切ってしまうんですか！？」

亮
「安心して。
確かに恋人も大切だけど、それとこれとは別だよ。
妹を大切に思う気持ちは誰よりも強いと自負しているからね！！
ならばこの妹同盟を抜けるなんて愚かな真似、するわけが無いじゃないか！！」

修二
「亮！！」

駿

「亮さん！！」

亮
「二人とも！！」

ヒシッと固い握手を交わし合う三人。

駿・亮・修二
「ちょっとやそっとでは断ち切れない絆！！
それが神聖妹同盟！！」

美希
「何この三文芝居」

理沙
「妹同盟をアピールしたかったんだろう」

泉
「盛り上がってる所悪いんですかそろそろ時間なので……
宣伝タイムを」

亮
「あ、そうだった。
えっと『黒と白の物語』絶賛連載中です！！」

修二
「是非見てみてくれ」

美希
「では、今回は椿修二さんと天道亮さんのお二人でした。
ありがとうございました」

理沙
「次回、遂に物語は動き出す！！」

泉
「多分、次回くらいから第二章の中心の話が始まるよ」

三人娘
「という事で、
次回もよろしく～♪」

其の三十　どんなものにも休息は必要不可欠（前書き）

今回から段々ニ章の核心部分に入っていきます。

あのキャラ達も近々登場。

では、今回もよろしくお願いします♪

其の三十　どんなものにも休息は必要不可欠

雨……
絶え間無く真っ暗な空から降り続ける雨。
ザアザアと音を立てて降り続ける雨。

そんな中、ひゅるりひゅるりと冷たい風が間を抜けるように伝ってゆき……

空には月明かりも無くひたすら果ても無い黒が続いている。

そんな5月の深夜。

雨音が地面にただひたすら打ち付けるまだ肌寒い中、一人の女性が傘をさしながら人気の無くなった住宅街にいた。
綺麗な黒髪をショートカットにして、着物を着た女性。

彼女は道にあるある電柱の前に傘を差しながら立ち止まっている。
その視線の先には、電柱にもたれかかるように座っている黒髪の少年が一人。

足を投げ出し顔を俯かせて寄りかかるその少年は年齢にしておおよそ5歳くらいだろうか。

顔にはいくらか傷があり、所々血が滲んでいる。

彼はまだ子供なのに着ている白い着物は大人用なのかかなりダブダブだ。雨に濡れて地面に吸い付くかの如く地面に出されている。

「大丈夫……？」

「……」

何故こんな時間に、こんな場所に子供が居るのか？
こんな雨の中、一体何をやっているのか？
何故傷だらけなのか？

尋ねるべき疑問はいくらでもある筈だが、女性は屈んでハンカチをそっと差し出した。

「……」

「随分傷だらけね。
それにこんなに濡れて……
寒かったでしょ？」

「……」

女性は少年顔の汚れを丁寧に拭いながら優しく問いかけた。
返答は無かったが、構わず女性は顔から滲む血をハンカチで拭いてあげる。

「喋らなくて良いから、私の質問に分かったら首を縦に、分からなかったら首を横に振ってくれるかしら？」

「……」

こくり。

女性の言葉に少年はゆっくりと首を縦に振った。

「この近所に住んでいるの？」

「……」

ふるふる……

首を横に振る。

「住んでいる場所はあるの？」

「……」

また、少年は首を横に振る。

その反応に女性は僅かに眉を動かした。

「ご両親はいらっしゃる？」

「……」

分からない。

これもやはり同じ反応だった。

「そう……」

女性は少し困ったように呟く。
雨の降り止まない空を見上げて思考に耽っていたようだが、暫くしてもう一度少年の方に顔を向けて微笑んだ。

「だったら……
私と一緒に来る？」

「……？」

この時初めて少年が顔を上げた。二重瞼に綺麗な琥珀色の瞳が二つ、女性を見つめる。

「どうかしら？
来る？」

「……」

こくり。
少年は微笑んで手を差しのべる女性に頷くと、彼女の手に自分の手を重ねた。

「よし。なら決まりね」

「……」

少年は女性が立ち上がるのと同時に、ヨロヨロと覚束ない足取りで立ち上がった。

「鷺ノ宮初穂。

私の名前」

「……」

女性は自分を指差してそう名乗ってみせた。
少年はゆっくりと頷く。

「貴方のお名前は？」

「……」

少年は首を横に降ろうとしたが、何を思ったのかそれを止める。
そして数回瞬きをすると、その顔を初穂に向けて……

「……しゅん」

か細い、しかしそれでいて雨音にはかき消されないしっかりとした声で呟いた。

「しゅん君
良いお名前ね」

「……」

「それじゃあ、行きましょうか」

少年はダブダブの白い着物を引きずりながら、初穂に手を引かれて

深夜の闇の中に消えていった……

「……」

放課後の生徒会室。
鮮やかな夕日が差し込む室内で、椅子に腰掛けている男子生徒が一人。
ひじ掛けに頬杖をつきながら目を閉じて眠りについている。

橙色に染まる天球の間。
その空間で、彼のその姿は一際美しく幻想的な雰囲気を創り出す程に絵になっていた。

「……ん」

その男子生徒、鷺ノ宮駿がうっすらと瞼開けると、橙色の強くまばゆい光が一気に飛び込んできた。
眩しさのあまり思わず声を発して光を遮る為に手の平を前に持ってくる。

「あ、おはよう駿君」

「……？」

すると、彼の横からそんな声がかかってくる。
ゆっくりとそちらを向くと、同じく椅子に座り文庫本を手に持っている千桜がこちらに顔を向けていた。

「あ～……
俺、寝てたのか……」

駿はひじ掛けから手を離して両目を眠そうに擦りながら呟いた。
そして眠気を覚まそうふるふると首を横に振り始める。

コトッ……

「え？」

「はい。
眠気覚ましにコーヒーを淹れたから、飲むと良いよ」

テーブルの駿の前にコーヒーカップを千桜が置いてくれた。
淹れたてのカップからは湯気が立ち上っている。

「お～、ありがとう～」

「本当に眠そうだな……」

駿はまだ寝ぼけ気味なのか目をトロンとさせながらカップを両手に持ってゆっくりと口に運ぶ。

「……」

コーヒーの苦味と熱さが次第に脳を覚醒させていき、周りの景色や前の状況も段々と頭に浮かび上がってきた。

（夢……
随分と懐かしい夢を見た気がする……）

彼は意識をはっきりとさせていくと同時に、たった今まで見ていた夢を思い出す。

それは初め。
この町での彼の最初の記憶。
朧気にしか思い出せない、曖昧でとても心細いがとても温かく大切な思い出。

「ん？
そういえば他の皆は？」

「ヒナと愛歌さんは用事で中等部の校舎に。
翼君は仕事が終わって帰宅、三人もいつも通りサボりといった所かな」

つまりは現在、生徒会室には駿と千桜の二人だけとなる。

「そっか……
もう夕方か……
日が経つの早ぇな」

「まだ1月だからね」

駿はカップをテーブルに置くとグッと伸びをすると、改めて椅子に座り直す。

「ん？アレ、千桜もその本読んでたのか？」

「え？」

そう言って彼が指差したのは、千桜が持っていた文庫本もといライトノベルの表紙だった。
表紙には『女狐と香辛料』と書いてある。

「駿君もこれを？」

「いや、知り合いがな面白い面白いってしつこく言ってる本がそれなんだよ」

駿は千桜の隣に寄って彼女の本に目を向けた。
因みに知り合いとはワタルの事だったりする。

「ああ、私も噂に聞いて最近手に取ってみたんだが……
噂以上に面白かったよ」

「へぇ……」

千桜はそう言って文庫本を手渡すと、彼はパラパラとそれを捲り始めた。

「特にヒロインの口調がかなり良いんだ」

「口調……
ああ、ホントだ。
廓詞(くるわことば)か」

駿はページを捲る中でヒロインの台詞を見つけたようだ。

「うん。
あの口調に態度や性格もかなり可愛いよ」

「確かにそうだな……
やっぱ作品はヒロインの如何なるかが大きいよな」

「全くその通りだ駿君。
ヒロインの可愛さ、これに尽きる」

駿の言葉にキラリと目を光らせて頷く千桜。

「世界観も面白そうだし、ちょっと読んでみようかな」

「だったら私が貸してあげるよ。今度1巻を持ってこよう」

「ホントか？
ありがとう」

ラノベの話で盛り上がる。
いかにも中高生らしい放課後の風景だ。

（ん……？）

と、そんな平穏な一時の最中。
千桜はフとある事に気が付いた。

（あ、あれ……？
そういえば今ってヒナも愛歌さんも他の皆もいないよな……
え？という事は……）

先程自分で言っていた事なのに改めて確認するように頭の中でじっくりと反芻する。

（今この生徒会室で……
駿君と……二人きり……？）

何を今更。
かと思うかもしれないが先程まではコーヒーを出したりラノベの話等でそんな事は微塵も気にはしていなかった。

人間というのは不思議なもので。普段気にも止めないような事でも一旦気になると、どうしてもどうやっても気になってしまうものである。

（ふ、二人きり……？
二人きりって……
しかもこの状況は……）

そう。駿は隣に座っているのだが、千桜との距離がかなり近い。
肩と肩が触れ合うか合わないかくらい近いのだ。

（……こ、これは／／／）

駿はラノベを軽く読んでいるので気付いていないが、千桜は一度意識してしまったが為に急に頬を赤らめ……

（いや、違う！！
これは断じて違う！！
こんな状況はいつもの事。
生徒会室で二人きりなんてよくある事じゃないか）

誰に対して訴えているのかは分からないが、彼女は一人否定するように首を横に振る。

（落ち着け私！！冷静に！！
クールになるんだ春風千桜！！（↑ひぐらし風）
べ、別に何とも思っていない訳だから、こんな状況だって何とも無い訳だ。
そう、だから……）

「千桜？」

「ひゃうっ！！／／／」

すると、ピトッと文庫本の表紙が千桜の頬に触れた。
彼女は驚きと表紙の冷たい感触も相まって慌てて長テーブルから立ち上がる。

「え、えっと……
大丈夫か？」

「いや……／／／

別に、何でも……」

「え、でも……」

彼女の明らかに何でもなく無い様子に駿は何か声をかけようとするが……

「えっと……そうだ！
私も職員室に用事があったんだ。そ、それじゃあ！！」

「あ、おい！？」

千桜はテーブルにあった完了済みの資料を無理矢理自分の元に引き寄せると、逃げるように生徒会室を後にしてしまった。

「……」

そんな訳で彼はポツンと一人取り残される。

（……あれ、もしかして避けられた？）

止める間もなく出ていった千桜の後、生徒会室の扉を見つめながらいらぬ不安を覚える駿であった…

其の十一　どんなものにも休息は必要不可欠

「……」

「……」

日もすっかり暮れた午後六時。

鷺ノ宮家のとある一室で、銀華が腕を組んでため息をついていた。
その前には難しい表情で正座をしている駿の姿。

何故このような状況になっているのかというと、
それは一時間前に遡る……

「ふぅ……
何か疲れたな……」

午後五時半
生徒会の仕事を終えて駿は鷺ノ宮家に帰ってきた。
結局、千桜の様子の理由も分からなかったがヒナギクと愛歌も帰ってきたので生徒会は解散になり、帰宅したのだ。

（暇だし、ゲームでもやる前に
白夜でも手入れするか……）

彼は自室に戻ると不意にそう考え、室内の奥に丁重に置かれている白い日本刀の前まで歩いていく。
（……）
駿は思い返すように白夜を手に取ると、鞘から刃を抜こうと……

「……あれ？」

鞘から抜こうと……

「……え、あれ？」

・・・・・

「……抜けない」

そんな訳で現在に至る。

「で、ばあちゃん。
白夜は一体どうしたんだ？」

「簡単に言えば故障じゃな」

駿が身を乗り出すようにして尋ねると、銀華は簡単にそう答えた。

「故障？」

「白夜は刃に不可思議な霊力が込められた鷺ノ宮家の宝刀。
刃の先端から柄の細部に至るまで繊細に霊力が宿っている。
故に折れたり錆びたりする事が一切無い」

「それは、前にも聞いたけど……」

「しかし、一方で複雑な機械と同じように長い間使っていれば度々故障も起こる。手入れをするのは切れ味やそういった普通の刀とは違い、こういった故障を起こしにくくする為じゃな」

銀華は駿から白夜を受け取ると優しく鞘を撫でながらそう言った。

「治るのか？」

「無論。
お前が手にするまでも何度かこういう事があったからの。
といっても、このオババが生まれてから今までで二度しか無かったがの。大体５０年に一度起こるか、くらいの確率じゃな」

「そっか……」

彼女の言葉に駿はそうに頷いた。それを見た銀華は付け加えるように口を開く。

「まぁ、刀といえど少しは休ませてやるのも必要という事じゃな」

「大体どのくらいで元に戻るんだ？」

「このての白夜の反応は故障でいえば軽い方じゃ。
戻るまでには一週間かからない、三日から五日くらいか」

「じゃあ、それまでは白夜は使えないんだよな」

「そうなるの」

駿がそう尋ねると銀華は白夜に目を落としながら答えた。
それを確認すると駿は困ったように息をつく。

「弱ったな……
それまで刀どうすりゃ良いんだか……」

「正宗を使えば良かろう」

「いや、正宗は暫く俺の言うこと聞いてくれないって」

銀華の提案に駿は顔の前で大袈裟に手を振ってみせた。

「何故？
喧嘩でもしたのかえ？」

「いや……
喧嘩つーか……」

そう。
あれはまだ白皇に編入する前、
二ヶ月前の事だった。

俺は朝寝坊して急ぎ足で朝食に向かっていたんだ。
朝御飯は皆大好き卵かけご飯。
俺は辛いもの好きだから溶き卵に一味唐辛子、ラー油を入れて最後に醤油を入れてご飯にかけて食べるんだが……
その日は急いでいて醤油ビンをうっかり手から落としてしまった。

しかし手を滑らせた場所の下には、その日偶々椅子に立て掛けておいた正宗があってだな……
運悪く正宗に醤油がかかってしまったんだ……

「勿論すぐに鷺ノ宮特性の洗浄で不幸中の幸いで染みも匂いも取れたんだが、以来正宗は一切反応を見せてくれなくなってな……」

腕を組ながらうんうんと一人頷いている駿。

「……」

「まぁ最近は少しは反応してくれるけど、やっぱりまだ怒ってるみたいで……
ってあれ？ばあちゃん？聞いてる？」

彼の前では先程まで座っていた銀華が立ち上がっていた。

「……己は」

「へ？」

次の瞬間、彼女は無数のクナイを一斉に構えた。

「鷺ノ宮の家宝に何をさらしとんじゃあァァァァアアア！！！！」

「ぎゃあァァァァ！！！」

ドォォォォォン！！！

屋敷に断末魔の叫び声が響き渡った。

＊

午後八時……

公園のベンチで深々とため息をつく駿が一人、ポツンと寒空の夜の中にいた。

「……はぁ」

「弱ったな……」

あの後……

怒った銀華は罰として白夜が戻るまで自力で何とかしろと代わりの刀及び武器を鷺ノ宮で貸す事を拒否。加えて本日は深夜に依頼が入っている。

最悪素手ということになるが、それだけは避けたい。

という事で何とかしようと外に出たは良いものの。

鷹ノ瀬家は翼に言えば余計な心配もするだろうし迷惑をかけられないので断念。

白皇学院は竹刀と言っても妖怪相手では使いものになるかどうかで却下。

だからといって三千院家や愛沢家にいきなり戦う為の道具を貸して

くれとも言える筈が無く……

「……はぁ」

結局、ベンチで途方に暮れている始末である。
駿は白い息を吐き出して、夜空を見上げた。

キラキラといくらか星達が美しく輝いている。
彼はその空を見ているうちに考えるのも馬鹿らしくなってきた。
もうこのまま帰ろうかと考えていたその時……

『お～、いつぞやの小僧』

「……あ？」

視界が夜空からいきなり現れた老人によって塞がれた。
駿は少し離れてちゃんと目の前の光景にピントを合わせる。

「あ、あんた！！
神社でのジジイ！！」

『いかにも。
ワシが歴史が誇る色男こと劉安じゃ』

その老人とは、あの神社の祭具殿に閉じ込められていた幽霊、劉安であった。

「んな事ぁ聞いてねーって。
つーかアンタこんな所で何してんだよ？」

『無論、春画の回収と若いおなごの観察に決まっておろう』

「威張って言うなエロ仙人」

劉安はフワフワと浮きながら愉快そうに笑っている。

「んで？
エロ仙人が俺に何の用だよ？」

『何、偶々ここを通りかかったら小僧が随分と困っているようだったのでな。
ここは一つ、からかってやろうかと』

「今すぐ帰れ」

『冗談じゃ。
まぁ計らずも助けて貰った礼もあるしの。
相談に乗ってやろうと思ったのじゃ』

劉安は宙でクルリと一回転すると、浮かびながらそう言った。

「良いよ
アンタに相談してどうこうなる問題でも無いし」

『これ、侮るなよ若造。
ワシは何世紀にも渡りこの世に残ってきている仙人。
大抵の悩みなど朝飯前じゃ』

「いやだから……」

『良い良い
良いから話してみよ』

「……」

『ほれほれ～』

話すまでずっとここに居そうなので、駿は仕方なく経緯を簡単に話す事にした。

・・・・・・

「つー訳だよ。
分かったらもうどっかに行ってくれ」

『なんじゃ、そんな事か。
ならばワシがお主に刀を一つくれてやろう』

「え？」

言うが早いか、劉安が両手を前に翳した。
するとどうだろう。みるみる何か赤い光が球体状になってゆく。

『手を出せ』

「は？」

『良いから』

言われるがまま、駿は光の球体の下に両手を差し出す。
劉安は光の球体に手を突っ込んでまるで袋の中を漁るようにごそごそと動かし始めた。

『うーむ……
貴様に相応しい刀は……
おお、そうじゃ。これが良い』

「!?」

暫くすると、
彼の両手に一つの刀がずしりと重みを伴い落ちてきた。

『ふむ』

「???」

劉安は満足そうに頷いて光の球体から手を抜く。光は瞬く間に消え去ってしまった。

駿の手に落ちてきた刀。
それは柄と鞘が鮮やかな紅い色で染まった綺麗な日本刀だった。
鞘には火蜥蜴の模様が施されていて、柄にも細く火蜥蜴の模様が。

「これは……?」

『これは妖刀“蜥尾(せきび)”
蜥蜴の尻尾を宛がってつけられた名前じゃな。

昔ある妖怪が打ったと言われる妖刀だと言われておる。
使い手を選ぶ刀。器が無いものには一切扱えないまさしく妖刀』

「こんなもん、何でアンタが……？」

駿は紅い日本刀を持ったまま劉安を見つめて尋ねる。

『これはのぅ……
ワシがブイブイいわせてた若かりし頃、とある貴族の娘と一晩を共にした事があった。
翌朝の別れの際に彼女が別れの惜しみに色々と土産をくれたのだが、その中の一つにその刀があってのぅ。後に調べてみたらそのような大層な刀だったのだが……』

「えらく胡散臭い話なんだが…」

『これがまた可愛いおなごでな。紗花ちゃんと言って……いや、絢香ちゃんだったか？
あれ季華ちゃん？いや晴香ちゃん？むむ、穂歌ちゃんだったかの』

「オイィィィィィ！！！
胡散臭いどころの話じゃねーよコレ！！明らかに偽物だろ！！」

あまりにいい加減な劉安の話に駿は紅い日本刀を手にそう叫ぶ。

『まぁ、ワシの所有物の一つをくれてやろう。
この間の礼だと思ってくれ』

劉安はフワリと浮き上がり去っていこうとする。

「ちょっと待て！！
お前これ完全に押し付けようとしてんじゃねーか！！
何がお礼だ！！明らかに在庫処理だろオイ！！」

『んじゃ、ワシはまた春画回収に勤しむんで。
その妖刀、上手く使いこなすのじゃぞ』

「聞いてる！？
勝手にまとめに入ってんじゃ……」

ポン！

「……」

駿が言い終わらないウチに、彼はあっという間に煙をあげて消え去ってしまった。
またも彼はポツリと一人取り残される。

「……え？
どうすんのコレ？」

駿は自分の手にある紅い日本刀、【蜥尾】を見つめてそう呟くしか無かった。

其の三十　どんなものにも休息は必要不可欠（後書き）

駿
「三人娘の～（棒読み）」

三人娘
「諸事情ラジオ！！！」

三人娘（＋雑用）の

☆諸事情ラジオ☆

美希
「やってきました諸事ラジ」

泉
「今日も元気いっぱいでお送りしまーす♪」

理沙
「では今日の諸事ラジは質問コーナーだ！！」

美希
「じゃあ駿君、よろしく」

駿
「はいはい。

じゃあ最初の質問。
ペンネーム『００１』様からです。『駿に質問。原作で伊澄が洋服を着る事がありますが、駿はどんな服を着せたい？』
よ、洋服だとォォォォォ！？
伊澄の洋服姿……ぐばっ！！」

美希
「吐血したよ」

理沙
「相変わらずだな」

駿
「白いカーディガンに黒いスカート。ソックスとかもあれば……
ぐばっ！！」

泉
「にはは～？
次の質問行こうか」

駿
「次の質問。
ペンネーム『桐生』様から。
『伊澄に質問。一番尊敬している人は誰？』」

伊澄
「尊敬……ですか？
それは沢山いますよ。私の周りの方々は皆尊敬出来る方々です」

美希

「ほう、それは勿論我々もという事かな？」

理沙
「フフン」

駿
「それはねーな。
んじゃ最後の質問。
ペンネーム『灘』様から。
『烏天狗が化けていた警察官が駿達の生気を吸わなかったのは駿達が退魔師だから？』
はい、その通りです。
迂闊には手を出せなかったと言った所ですね」

美希
「では、今回はここまでだ」

理沙
「次回は駿君が新たなる力で依頼をこなす！？」

泉
「そしていよいよ話は二章の核心部分に入っていくよ♪」

三人娘
「次回もよろしく♪」

其の三十一　利用規約とか契約内容とかちゃんと読まないと後々面倒な事になるよ

今回と次回はこの章で自分が一番書きたかった話です。

今回もよろしくお願いします！！

其の三十一　利用規約とか契約内容とかちゃんと読まないと後々面倒な事になるよ

「……」

午後八時
真っ暗な寒空の下、鷺ノ宮駿は突っ立っていた。
彼の両手には紅い日本刀。

与えた劉安曰く
妖刀“蜥尾”という名前の刀らしい。彼が昔女と一夜の遊びの後別れ形見に色々貰った土産の一つというかなり胡散臭い代物である。

鞘から柄まで統一された鮮やかな赤色。
鞘には禍々しい火蜥蜴の模様が彫られていて、絵にも同じ模様が浮き彫りになっている。
美しい真紅に染まっているのにどこか薄気味悪く不気味な感じのするのは妖刀と名前からなのか、はたまた火蜥蜴の禍々しい模様なのか。

「……どーすんだコレ」

駿は蜥尾を手に持ちながら困惑したように先程劉安の消えた宙を見つめる。
しかしそこには何も無いただの暗闇な訳で、
呟いても返事など返ってくるはずもない。

（……取り敢えず、戻るか）

いつまでもここに居ても仕方がないと思った彼は一つため息をつくと、蜥尾を持ったまま、踵を返してその場を後にする事にした。

屋敷に帰宅すると、時刻は十時を回っていた。

銀華は白夜の治癒の為に屋敷内の蔵に閉じ籠っており、伊澄は今日はナギの家に泊まっている。

九重と初穂は恐らく就寝しているであろう。

依頼まではまだ時間があったので、駿は零時くらいまで学校の宿題……は勿論やらず、縁側に横になって時間を潰した。

「……」

その際に蜥尾を何度か手に取り鞘から刃を抜こうと思ったが、その度に何故か躊躇われて実戦ぶっつけで良いだろうと前に置いたまま相も変わらず中庭を眺めながら横になる。

「妖刀ねぇ……」

自分の目の前に置いた蜥尾を眺めながら誰にともなく呟く。

《持ち主を選ぶ刀……
扱える者は限られる……》

彼の脳裏には先程の劉安の言葉が反芻される。

「……ふぅ」

息をついて一旦中庭に視線を反らすと、もう一度目を戻す。
蜥尾は月明かりに照らされ怪しげな光を放っていた。

＊

屋敷を出た駿は空き地に立っていた。
昼間でも人気のほとんど無い林が生い茂る奥にあるその空き地は妖怪や悪霊が住まうには絶好の場所といえる。

今回は依頼では無く単に妖怪の気配を感じての退治の仕事。
駿は伊澄程では無いがある程度の気配までなら察知する事が出来るのだ。
彼が感じられる気配という事は下級の妖怪に違いないのだが。

そんな訳で彼が明かりも月の光しか届かぬような空き地に到着すると、月も少しずつ陰り段々と周りの気温が低くなってきた。

「……おいでなすったか」

そんな駿の言葉を皮切りに、空き地の周囲からのそりのそりと妖怪

達が姿を現してきた。

否や、駿の周りには顔面に札が貼ってある天の邪鬼、つまり小鬼達と車輪の形をした妖怪達が続々と現れ始めた。

「妖刀だか霊刀だか知らねーが、早速使わせて貰おうじゃねぇか……！！」

駿は周りを一瞥して確認すると、柄に手をかけ、一気に鞘から刃を抜き放っ……

・・・・・・

「……」

無い。

刀にある筈のものが無い。

無くてはならない部分が無い。

というかこれが無かったら刀じゃない。

「……は？」

その紅い日本刀、蜥尾には……

刀身が無かった。

「はあァァァアアア！！？」

つまり柄と鞘だけ。
肝心の刃が何処にも無い。
まさしく模造刀の如く。

「あんのジジイィィ！！
何が妖刀だ散々意味深な事ぬかしやがって！！
結局紛い物押し付けやがっただけじゃあねぇかァァァァ！！」

柄と鞘、それぞれ両手に持って怒りとも困惑ともとれる叫び声をあげた駿。
と同時に…

『キシャアァァァ！！』

「！？」

数体の妖怪が図ったように一斉に駿に向けて飛びかかってきた。
彼は慌ててその場から飛び退きそれらと距離をつくる。
そして刀を構え……

（って！！だから刃が無ぇんだ！！
どーすんだ！？いくら下級共でも流石に素手じゃどうしようも…）

霊は現代科学においてはイレギュラーな存在とされる。
従って一般人には可視は出来ないし、接触する事も出来ない。
従って物理的衝撃に対して影響は無い。
そんな霊の想いを何からの力で実体としてこの世に現出するのが妖

怪であり、確かにそれらとは接触も衝撃も与える事が出来るが物理的衝撃は形として受けてもほとんど、いや全くと言っていいほど影響は無いに等しいだろう。

要するに、奴等に対しての物理攻撃は効果が無いのだ。
だからこその式術であったり退魔用の武器であったりする訳なのだが。

『キシャア！！』

「ちっ！！」

妖怪は待ってくれる筈も無く、容赦無しに飛びかかってきた。
駿はそれに鞘を叩きつけると、その後ろから次々と迫ってくる妖怪達を確認して脇の林に逃げ込む。

『シャアっ！！』

妖怪達は彼を追うように林に入っていき、叩きつけられた妖怪もすぐに起き上がり続いた。
やはり鞘で叩きつけたくらいではせいぜい押し退けるくらいの効果しか無い。

（面倒な事になっちまったな……）

林を逃げてゆく駿は内心で舌打ちをする。
このまま林を抜けて来た道を戻り住宅街に出るなんて事は決してあってはならない。

姿を現した妖怪をみすみす町に放つなんて事になったらどうなるか分かったもんじゃない。
それだけは避けなくては。

だから空き地、もしくはこの林で絶対に留め退治しなければならないのだ。

（くそ……！！
せめて札の一つでも持ってくりゃ……）

とはいえ、今彼の手元には刀身の無い紛い物の日本刀しか無い。
彼は普段からこういう時は余計な物は一切持たないのだが、今回はそれが裏目に出てしまった。

『グルル……』

「……っ」

そうこうするうちに前方の方から続々と妖怪達が顔を現してくる。
それを確認すると駿は苦々しそうに顔をしかめて唇を噛んだ。

その時……

《……めるか？》

（！？）

脳裏にいきなり何か声が聞こえてきた。
しゃがれていて何を言っていたのか聞き取れなかったがそれは確かに脳裏に響いた。

《力を求めるか……？》

「！？」

今度は先程よりはっきりと、しゃがれた声が脳裏に響く。
駿は何かに気付いたように咄嗟に自分の持っていた日本刀に目を落とした。

「……お前なのか？」

《……汝は力を求めるか？
否か？》

駿が紅い日本刀に囁くように声をかけるとそれに答えるかのように、またもしゃがれた声が脳裏に伝ってくる。
しかし彼にはそれについて考えている暇は無かった。

「ああ。
力でも何でもいい。とにかく何でも良いから頼む」

《ならば我が力を使うが良い。
ただし一度力を使わば……
その器、近々試させて貰うぞ》

その言葉が途切れると同時に、
彼の持っていた柄から上の部分が紅い光を放ち始めた。

『ガアァァァァ！！』

もう目前にまで迫ってきていた妖怪達。
その中の数体が彼に再度飛びかかってきた。

「っ！！」

駿はまだ光を放つ蜥尾の柄をそれらに向かって振り抜いた。

『ガアっ！？』

それは一瞬……
紅い一閃が飛びかかってきた妖怪達を僅か一瞬で両断した。
周りの妖怪達も驚いたように警戒して距離をとる。

「……」

その光が収まると、蜥尾に長い刀身が現れていた。
それは銀色の刃に美しい赤みがかった輝きが添えられるように輝いている。

思わず息を呑む程の美しい刃。
妖刀という名に相応しく無い程に輝かしい刀身。

「これが……」

駿がそう呟いて蜥尾を掲げると、刀身は月明かりに照らされ艶やかで怪しげな紅が光る。

『キシャアァァァ！！』

「力、借りるぞ……！！」

警戒していた妖怪達はそれでも一斉に駿に向かってくる。
駿は蜥尾の柄を握りしめると、
前線の妖怪に一閃を投じ、そのまま群れに突っ込んでいった。

○

「……ふぅ」

最後の妖怪達を斬り、それらの魂が空の彼方に登っていったのを確認すると、林の中で駿は深々と息をついた。
彼の周りは何の変鉄も無いただの林であり、夜風にさらさらと枝葉達が囁き声を奏でている。

気配のあった妖怪達はこれで全て退治する事が出来た。

（しかし……）

駿は鞘に収めた紅い日本刀、蜥尾に視線を落とす。
その表情は半分は安心、もう半分は驚きだった。

（オイオイ……
この日本刀、どうなってんだ？）

彼は不思議そうに顔を傾ける。
なぜなら、彼が今使っていた日本刀は常識では考えられないくらい軽い。
刀身は白夜より長い筈なのに、白夜より遥かに軽いのだ。

そう。まるで蜥尾が腕と一体化したよう。
剣も腕の一部かと思えるほど軽く、扱い易い。

（コイツぁ、ある意味妖刀かも知れねぇな……）

そのあまりの軽さ故、思わずそんな事を考えてしまう。
しかし同時にある事も頭に思い浮かぶ。

（でも、これなら……
白夜と二本に併用する事も出来るかもしれない）

脳裏に浮かぶイメージ。
それは右手に白夜を持ち、左手に蜥尾を持った自分の姿。
つまりは二刀流。

駿は元々両利きに近いので多敵の際は二本刀を使う事も何度かはあったが、やはり右手と同等の重さを左手で扱うのは困難だった。
だが、この刀ならば左手で扱う事も容易い。

（……！？）

不意に

二刀流をイメージしていた時、
もう一つ、別の映像が脳裏に紛れ込んできた。

それは全く知らない映像。
真っ白な羽織りに白い袴を着た黒髪の青年が曇天の下、二本の刀を持ったまま幾ばくもの死体や刀が転がる中に立っていた。

まるで戦場のような……
それにしてもあまりにも地獄絵図な光景……
その青年も返り血か自分の出血かは分からないが血だらけだ。

（……！！）

駿は分けも分からず慌てて頭を振り払う。
するとその映像はあっという間に脳裏から消え去った。

（何だ……？
今の……）

彼は一瞬浮かんできた見慣れない筈の、それでいて何故か知っているような気がする映像に気味の悪い違和感を覚えた。

だが、考え過ぎだとすぐに首を振ると屋敷に戻る為に彼は林の中で歩き出す。

（そういや……
さっき頭に響いた声、何か言っていたような……）

先程『力を求めるか』と尋ねてきた謎の声。

駿はあの時は何も考えずに答えてしまったが、今になってあの時の言葉が気になった。
一体何と言っていたのか、よくは聞いて無かったから尚更だ。
そうして立ち止まると暫く考えるように日本刀を見つめていた駿だったが、

（まぁ、いいか……
取り敢えず帰ろう）

いつまでもここに居ては仕方がないと思っていたのか、
再び足を進め始めた。

其の十ニ　利用規約とか契約内容とかちゃんと読まないと後々面倒な事になったりする

翌日……
駿の目覚めは良好だった。

「頂きまーす」

彼はいつも通り朝食を摂り、

『死ねェ！！駿ーーーっ！！』

「……」

爪をたてて抹殺をはかってきた悪熊を軽くあしらい（悪熊は初穂の所に逃げていったが）、

「行ってきます」

「気をつけてね～」

悪熊を抱っこした初穂に見送られ生徒会に向かった。

生徒会室では仕事が終わると、
三人娘は鬼ごっこをしてヒナギクを怒らせていたし、愛歌はそんな様子を微笑ましそうに眺めながらティータイム。
千桜は駿と共に今読んでいるラノベについてああだこうだと話していて、翼はまたも貰った何枚ものラブレター処理。

いつも通りの生徒会室であった。

授業は一時限目は雪路が担当する世界史。
だが途中から野球になり、ヒナギクに怒られた。

二時限目は英語。
抜き打ちテストがあり、ちょうど駿は爆睡していたので0点。
罰としてプリント運びに職員室まで連行される。

三時限目は体育。
体育館での男女合同でバレーボールだったが、勿論翼がいつも通り大活躍。
黄色い声が上がりまくっていたが本人は自覚無し。

駿は奇跡的に一回だけレシーブが上手くいったが後はダメダメ。
滑る、転ける、顔面にボールが直撃する。
男子からだけで無く、女子からも慰めの声をかけられる始末。
結構凹んだ。

そんでもって、お昼休み。

「手伝い？」

「ああ」

駿と翼は学食のテラスで向かい合って昼食をとっていた。
その時に、翼が『依頼を手伝ってくれ』と言ってきたのだ。

「別に構わねーけど、
珍しいな」

「まぁ、結構数も多いみたいだしな」

「分かった。
んじゃ、伊澄も連れてくか」

駿は軽く頷くとピラフを一気にかけ込んだ。

四時限目は現社。
現代社会のお勉強。
結構退屈な授業。
駿は欠伸混じりに窓の外を眺めていた。

「鷺ノ宮～
窓の外に黒板は無いぞ」

「え？」

と思ったら先生が彼の方に顔を向けていた。

「全くお前という奴は……
今、私が何を言ったのか聞いていたか？」

「えっと……
結婚したい？」

プチっ！！

「廊下に立ってろーーーーっ！！！」

「昭和の怒り方っすか！？」

先生を怒らせた駿は廊下に立たされてしまった。
因みに現社の先生は４３歳独身だそうだ。

六時限目は数学。
皆がカリカリと鉛筆を動かして問題を解いている中……

（後これは……
やべ、金足りねーじゃん。
じゃあ新作の英〇伝説は中古になるのを待つか……
世〇樹２を買って、来月までにこれだけ残ってれば大丈夫か……
あ、テイ〇ズもあったな……）

駿も一応計算をしていた。
ゲームと貯金の計算である。
数学は彼が最も苦手な分野なので現実的にこちらの計算をした方が良いと考えたようだ。

カリカリ……

（あ、新しい液晶の保護シートも買わねーと）

こういう奴の事を総じて学生の鏡という。
無論皮肉である。

キーンコーン……

そんな感じで平々凡々な学校も終わり、駿達は放課後の生徒会室でいつも通りの仕事を行った。

夕方になると仕事も終了し、各自解散。
駿は一旦翼と別れて伊澄のいる三千院屋敷に向かった。

「迫り来る十ニ次元の世界!!
ブリトニーの決断は!!」

（ドキドキ……）

屋敷に着くと、案の定ナギと伊澄は漫画を描いていた。
横ではハヤテが話を聞きながら困惑したように笑っている。
やはり彼にも二人の世界は理解出来ないようだ。

二人が忙しそうなので、駿はハヤテと話しながら待つ事にした。
いくらか時間が経って、ようやく区切りがついたようなので、ここで駿は伊澄と一緒に屋敷から鷺ノ宮家に帰宅する事に。

帰り道で伊澄に今日の用件、つまり翼のトコの依頼を手伝う事を話しておいた。

そして午前零時半。
翼と待ち合わせ場所で合流。
目的地は少し遠くのお寺の裏という事だった。
伊澄が迷子にならないように執事達に送ってもらいお寺に到着。

そうして三人はお寺の裏にある寂れた広場に向かって歩いていく。

「お兄様？
白夜はどうされたのですか？」

「本当だ。
お前、刀が……」

歩いている途中で、二人が駿の携えている刀がいつもと違う事に気が付いた。

「あ～
実はなぁ……」

駿は頭を掻くと経緯を話始めた。白夜が機械でいう故障をした事。
正宗は醤油を溢してしまって以来敬遠されている事。
しかし、今持っている日本刀を劉安から貰った事は伏せておいた。
だからこの刀の事は曖昧に誤魔化しておく。

「醤油溢すってお前……」

「だから正宗を使わなかったのですか……」

正宗の件で二人は完全に呆れ返っていた。

そりゃそうだ。

家宝に醤油を溢してしまった馬鹿の話など聞いた事が無い。

「いやアレだよ。

俺はちゃんと謝ったんだけど、

中々許してくれないっつーか…」

「「……」」

気まずそうに言い訳をする駿だが二人は既にジト目になっていた。

「行こうか」

「そうですね……」

「あ、ちょっと二人とも!?」

そんな情けない話を聞きながらも三人は寺の裏に足を踏み入れた。

広場の中央の方に歩いていくと…

「お二人とも……!!

気配が…!!」

「「……」」

伊澄がいち早く何かの気を察知して口を開く。
駿と翼がお互いに横を向くと、空気の中からドロドロと妖怪達が現れ始めた。

「数が多いな……
駿、向こうを頼む」

「はいよ」

「私はこちらの方を」

次々と出現していく妖怪達に、
三人は場を分担して対処する事になる。
各々が刀、木刀、札を構えて妖怪退治が始まった。

＊

駿達が次々と妖怪達を退治している場所からかなり離れた建物の屋上に二人の青年が立っていた。
一人は黄色い髪にTシャツとジーパンというラフな格好で腕を組んで立っている。
もう一人は茶髪でGジャンを羽織った青年が双眼鏡を使いながら座っていた。

「おー、やってるやってる。

で、どうするの？」

茶髪の青年が双眼鏡を覗きながらそんな事を呟く。
どうやら彼等は駿達の方向を見ているようである。

「そうだな……
あの場所に悪意（マリス）を集中させるか…
もう少し奴の様子が見てみたいからな」

「楓ちゃんが知ったらきっと怒るよ。つーか、梓の力だったらバレちゃわない？」

「構わないさ……
もう少ししたらすぐに日本を発つんだ。バレようがバレまいが関係ない」

黄色い髪の青年、梓はそう言うと口元を緩める。
茶髪の青年はそれを見て勝手にしろと肩を竦めるのだった。

＊

「くっ！？
どうなってんだこの数！！」

「ちょっと多過ぎねーか！？」

駿達は周りの妖怪達を見てそう叫んでいた。
妖怪退治を始めて、途中までは順調に退治して残りも僅かになる筈だった。
しかし、突然溢れんばかりの妖怪、悪霊が出現し始めたのである。
その数は尋常では無く、退治しても退治しても一向に減る気配が無い。

「何か別の力が働いている感じがします！！
お兄様、翼様、周囲になにかあるのかもしれません！！
気をつけて下さい！！」

「ああ」
「分かった！！」

伊澄が次々と迫り来る妖怪を式術で粉砕しながら言うと、二人とも敵を斬り倒して頷く。

確かに数は異常に多いが、
ここにいる三人は各々の家柄で最強を謳われる三人だ。
ちょっとやそっとでやられるような者では無い。

翼は黒い木刀で一度に数体を切り裂いていき、伊澄も隙の無い判断で術を使い多数の妖怪達を退治してゆく。
駿は言うまでもなく……

ドクンッ……！！

「！？」

それはあまりに突然だった。
彼の体内で何かが大きく脈を打ったように高鳴る。
かと思うと体全身が発火したかのごとく一気に熱を帯びた。

「がはっ……！？」

駿は成す術無く、その場に崩れ落ちてしまった。

「お兄様！？」
「駿！？」

離れた場所で妖怪達の相手をしていた二人は彼の異変に気付く。
あり得ないその事態に二人は慌てて彼の元に駆け寄ろうとするが、

『キシャアアアアア！！』

「っ！！」

翼にも、伊澄にも妖怪が次々と向かってきてその場を離れる事が出来ない。
そのチャンスを妖怪達が見逃す筈も無く……

『ガアアアアア！！』

「！？」

多数の妖怪が一気に倒れている駿の元に飛びかかっていった。

『キシャアアア！！』

「お兄様！！
逃げて！！！」

伊澄の悲痛な叫び声が響く。
駿は何とか顔をあげるも立ち上がる事が出来ない。

「駿！！！」

「お兄様！！！」

二人の叫び声は……

『ガアァァァァ！！！』

駿の目前に迫っていた妖怪達の咆哮にかき消される。
そして妖怪達は一斉に爪や太刀などの武器を振り上げた。

これまでか……
駿がそう諦めかけた時……

「！？」

自分の周りの光景ががらりと変わったのを駿は目にした。
一秒前まで妖怪に囲まれていた筈が、その妖怪達は全て八つ裂きにされていたのだ。

それは無数の斬撃が走るかのごとく、彼の周りの妖怪を一瞬で消し去ってしまった。

「……！？」

そして彼の目の前に、フワリと一人の美少女が舞い降りる。

「お、お前……」

辛うじて動かせる頭で目の前を見上げる駿の視界に映ったのは、長い漆黒の刀を構えて、黒い長いカーディガンをなびかせる……

篠月楓の姿だった。

「……」

彼女は振り返って駿を見下ろす。綺麗な二つの瞳が彼を捉えると、

「邪魔よ
動けないなら退いてなさい」

「がっ！？」

彼を右足で蹴飛ばした。
彼はいとも簡単に吹き飛ばされて広場の隅に押しやられる。

その光景に伊澄、翼は勿論妖怪達まで動きを止めてしまっている。

「そこの二人、彼が襲われないように側にいさない」

「「え……」」

「早く」

有無を言わせぬその言葉に二人は訳も分からないまま従い、蹴られて倒れている駿の元に駆け寄っていく。
伊澄は何が何だがと目を見開いているが、翼には同い年くらいのあの女性に見覚えがあった。

「綾、少し数がいるわ。
手伝ってくれる？」

楓はそんな三人には構わず何処へか声をかけると……

「致仕方ありませんわね……
それでは手伝って差し上げますわ」

彼女のすぐ隣にスゥっと赤い和服に扇子を広げたを着た美少女が現れた。
まるで大気からいきなり姿を現すかのごとく……

「片付けるわよ。

大して時間はかからないと思うけれど……」

「無論ですわ。
浅ましい怨念の欠片など、この私（わたくし）の前には一切の無力だという事を教えて差し上げましょう……」

次々と沸き上がり、無数に犇めく妖怪達を見据え……

篠月楓は漆黒の刀を構え、
皇綾姫は口元を隠すように扇子を広げたのだった。

其の三十一　利用規約とか契約内容とかちゃんと読まないと後々面倒な事になるよ

すみません、諸事ラジは次回の後書きに回します。

伽藍
「今回は……
最後に楓ちゃんと綾姫ちゃんが出てきましたね」

駿
「つーか、楓さん性格変わってませんでした？」

楓
「え、えっと……
アレは……」

伽藍
「その理由は次回で明かすと思います」

綾姫
「ああも性格が変わり変わりだとこちらも大変ですわ」

楓
「仕方ないじゃない。
私だって意識してる訳じゃ無いのに昔からの癖で……」

駿

「でも蹴り飛ばす事なくね？」

楓
「え～と、ごめんなさい。
でも多分軽くだったと……」

綾姫
「思いきり蹴っていましたわよ……？」

楓
「あぅ……」

伽藍
「ま、まぁそんな訳で
次回もよろしくお願いします♪」

其の三十ニ　それぞれの想いの形（前書き）

前回のお話を増量して投稿し直しました。
二倍くらいの量になって、無事楓と伊澄の出会いは完了しました。

今回の話がニ章の一番大切な話になります。
次回からはいよいよお約束の呪いや駿と蜥尾のお話。

そして原作介入となります。

では、始まります！！

其の三十二　それぞれの想いの形

倒れている駿に寄り添っていた伊澄と翼は前方の光景に驚いたように目を見開いていた。

美しい黄色い髪に黒いカーディガンを夜風に揺らしている楓と綺麗な青みがかった髪に紅の着物の綾姫の姿がそこにはあった。

楓は三尺五寸ばかりあるとてつもない長さの刀身をした漆黒の刀を構えて、綾姫は扇子で口元を隠したまま周囲に群がる妖怪達を睨み付けながら毅然と立っている。

「何の原因でここまで数が増えたかは分からないけれど……この程度に時間はかけていられないわよ」

「そうですわね……本当は下級妖怪にこの式神を使うのは勿体無いですが、今は駿様も心配ですし……手早く片付けましょう」

楓の言葉に綾姫は首を縦に振ると、扇子を持つ方とは逆の手をゆっくりと横に差し出した。

その手には朱色に輝く数珠玉が握られている。

朱色の数珠の真ん中は黄色の数珠が一つ。

「出ていらっしゃい……
ご飯の時間よ」

綾姫がそう呟くと、彼女の数珠玉が一気に光を放ち始めた。
彼女が数珠を横に振り払うと、大気中に黄色い煙が線のように浮かび上がってくる。
あっという間に細い煙の線は扉を形作った。

『……』

「「!?」」

煙が形作った扉がゆっくりと開いてゆき、そこから姿を現したものに駿達は驚き目を見張る。

輝かんばかりの黄金の胴体に煌めく金の鬣。
頭部には二本の小さな角に挟まれ大きな黄金の角。
口元から伸びる鋭い牙は月明かりに照らされギラギラと光り、
赤く鮮やかな四本足で凛と立っている獣。

出で立ちは鹿よりもガッシリとしていて、鬣は獅子のごとく。
牙は狼のように鋭い。
なのにそれは恐ろしいという印象は一切無く、むしろ神聖な雰囲気を身に纏っている。

「式神……」

「あれが、式神……？」

後ろにいた伊澄は思わずそう呟いて翼もまた驚いたように尋ねかえした。駿も起き上がる事は出来なくても顔を上げて楓と綾姫達を見つめている。

「麒麟、ご覧なさい。
今日は沢山ご飯がありますわ」

『……』

綾姫に呼ばれた獣は前方に溢れる妖怪達に目を向けた。
そう。この獣こそ太古の昔、日本で聖獣と言われている【麒麟】である。

麒麟はまた綾姫に目を向けた。
まるで『食べていいのか』と尋ねるように。
それに対して綾姫は扇子をピシャリと閉じて口を開いた。

「ええ、勿論。
ただし……残らず喰いなさい」

次の瞬間、麒麟は綾姫達の前から駆け出した。

「綾、ここは任せたわ」

「ええ」

それに続くように楓もそう言い残すと刀を構えて麒麟とは別方向の妖怪の群れに駆けてゆく。

綾姫だけは、光を放った数珠を左手に持ちながら駿達に背を向けたまま立っていた。
楓の任せるとは、駿達の所に妖怪を通さぬようにという意味だ。

こうして楓と綾姫は各々行動をとり始めた訳だが……
そこからの戦いは圧倒的としか言いようが無かった。

まずは楓。
彼女は三尺半もある長い刃を扱い次々と妖怪を斬り裂いてゆく。
それだけの刀身がある刀ならば重い筈なのに彼女は軽々しいそれを振ってゆく。

闇夜に流れる綺麗な髪。
そして彼女が纏う黒がひらりと舞い、月明かりに銀が光る。
それは誰もが目を奪われるような美しさ。

悪鬼羅刹の群がる中ではかなり不思議な光景。
例えるなら煉獄に差す一筋の光のような……

「……凄い」

「……」

伊澄と翼はその様子に息を呑んで見つめていた。

楓は飛びかかる無数の妖怪や妖魔達を休むこと無く斬り続けているにも関わらず、息一つ切らせていない。

更に彼女の剣技が凄まじい。
楓が漆黒の刀を一振りするだけで、周囲の妖怪達全員に幾ばくもの斬撃が走り、一瞬で奴等を八つ裂きにする。
可視出来るのは一太刀でも、
目に見る事の出来ない程の剣速で振っているとでもいうのか。

特に翼は驚きを隠せなかった。
彼は以前に彼女と会ってその戦いを少し見ていたが、その時の彼女とは段違いだ。

一体どれだけの経験を積めば、
どれだけ剣を振ればそんな事が可能なのか。

一方……
綾姫の使役する麒麟も負けず劣らず圧倒していた。
金色の一角を突けば十数体が砕けちり、四肢を踏み鳴らせば周りに衝撃が走る。
咆哮は魔を退けぞらせ、鋭い牙で悪鬼達を次々と噛みきり喰う。

敵の攻撃等ものともしないで凛の立ちはだかる麒麟の姿は見る者全てを圧倒するだろう。
だが、これだけの数だ。
前線にいる楓や式神の麒麟の合間を何とか抜けて駿達の元に迫ろうとしてくる奴等もいる。

驚くべき事にそれらは綾姫が対処していた。
彼女は三人の前方に立ち、向かってくる妖魔達を自身の式術で粉砕してゆく。
扇子を横に振れば風が刃となって妖怪を切り、軽く振り上げる仕草をすれば砂が一気に隆起し壁となり行く手を阻む。

何が驚くべき事か。
それは式神を召喚した状態のまま尚も術を使う事が出来るの、彼女の力の大きさである。
桁が違うのだ。

「……」

駿や翼は勿論驚いていたが、特に伊澄は信じられないような表情に綾姫の後ろ姿を見つめていた。
彼女は鷺ノ宮家最強の力を持つ少女である。
故に今の今まで彼女の周りで自身と同等かそれ以上に力がある者は見た事が無かったのだ。

こうして……
楓と綾姫によって駿達が来た時より何倍もの妖怪は、僅かな時間であっという間に殲滅された。

唖然とする伊澄と翼、二人に寄り添われてうつ伏せに顔だけを上げている駿達の元に

楓は刀を持ったまま、綾姫は数珠玉でまた煙の扉を作り式神を戻し、扇子で口元を隠しながら近づいてきた。

「楓……
お前一体……」

「……」

駿は楓を見上げて口を開いた。
伊澄は兄の知り合いなのかと一歩下がったが、近づいた彼女は側に片膝になり屈むと……

「悪いけど、貴方へ説明する手間は省かせて貰うわ」

「へ？」

ガッ！！

有無を言わせず、楓は駿の首に手刀を振り下ろした。

「お兄様！！」
「駿！？」

伊澄と翼は慌てて寄って駿に声をかける。
が、彼はそのまま気を失ってしまったようだ。

伊澄は楓を睨み付けるように振り返るが彼女は平静と立ち上がる。

「貴方達は……何者ですか？
お兄様とは一体どんな関係ですか？」

「……そうね。
知り合い、とだけ言っておきましょうか。
それより……」

挑むようなその視線に楓は息をつくと、ようやく伊澄に視線を向けた。

「彼は、恐らく何らかの呪いにかかっている可能性が高いわ。
突然身体の力が切れたように倒れて起き上がる事も出来ないなんて、その類いの兆候が一番高い証拠ね」

「呪い！？」
「どういう意味だ？」

楓は伊澄の問いには詳しく答えずに、倒れている駿に目を向けてそう口を開いた。
二人は訳が分からないといった表情で同じように駿に顔を向ける。

「そういう意味よ鷹ノ瀬翼君。
こういう仕事をしている身ならそういった事例は耳にする事がある筈よ」

「……」

久しぶりねと付け加えて挨拶をする楓に翼は違和感を感じていた。
以前会った時と明らかに口調や性格が異なっているのだ。

「とにかく、彼に呪いのような兆候が見られたから私達は助けに入ったのよ」

「え……？」

楓は一息つくと、伊澄と翼をしっかりと見据える。

「単刀直入に言うわ。
貴方達は彼を置いてこの場を去りなさい。
彼は私達が引き受けるから」

「……お断りします。
理由はどうあれ、誰とも知れね人間にお兄様をお渡しする事など出来ません」

伊澄はそう言って立ち上がると、駿を庇うように前に立って楓と対峙する。

「分からない娘ね……
今の貴方に何が出来ると言うの？力はあるみたいだけれど、現に彼を治療する事も出来ていないでしょう？」

「……！！」

そう。楓達の戦いに驚いている間も伊澄は駿に自分が出来る治癒の術を使っていた。
しかし結果はどれも不発。
彼の容体は一向に良くならなかった。

楓の意見に言い返せないのか、
伊澄はグッ言葉に詰まった。
それでも何か言い返そうとした時……

「いい加減にして下さい楓さん。このままでは進む話も拗れるばかりですわ」

楓の横に綾姫がやって来て彼女の刀を取り上げた。
すると……

「あ……」

急に楓の雰囲気が変わった。
冷徹に伊澄に向けられた視線は無くなり、代わりに気まずそうな声が一つ。

「ご、ごめんなさい！！
つい癖で……
こんな事まで言うつもりは無かったの！！」

「「え？」」

そして彼女はポカンとした表情の二人に向かって頭を下げたのだった。

其の十三　それぞれの想いの形

「これは……
やはり呪いですわね……」

「「呪い……」」

一瞬険悪になりかくた雰囲気は楓の突然の豹変ぶりであっという間に無くなった。
その後、楓と綾姫は敵意が無い事を伝えて伊澄に駿の容体を調べる許可を貰ったのだった。

駿自身二人の事を知っているような反応だったし、彼女達も知り合いだと言った事から事実だと考えたのだ。
それに楓達には助けられていることもあって拒否する理由が見当たらなかったようだ。

そうして、調べていた綾姫がやはり呪いだと断言してみせた。

「恐らくはこの刀でしょう……
この刀からは通常とは異なる力の流れを感じます。

これが原因でまず間違いないですわね」

「一体……
お兄様はどこからこの刀を…」

綾姫が指差した刀とは蜥尾のことであった。
これが駿に起きた異変の原因だという。

「兆候からみて、恐らく明日明後日には呪いの形が露になると思いますわ。
一体どんな呪いなのかは見当がつきませんが……」

「「……」」

綾姫の言葉に伊澄達はもう一度駿の事を見つめる。
各々複雑そうな面持ちである。
伊澄は蜥尾の異なる力に気付けなかった事を自分で責めているように表情が浮かない。

「そういえば、自己紹介がまだだったわね」

「「……？」」

楓がそんな中で二人にそう話しかけた。

「私は篠月楓」

「私は皇綾姫ですわ」

「鷺ノ宮伊澄です……」

「鷹ノ瀬翼だ」

四人は各々自己紹介をし合う。
楓達は伊澄を見て、駿とは兄妹なのだなと確認した。

「さて、自己紹介も済んだところで……
用件も早めに済ませた方が良いですわよ、楓さん」

「ええ、そうね……」

楓は先程とは打って変わって、少し申し訳なさそうな表情で再び二人の前に向かい合った。

「突然こんな事を言うのは申し訳無いけど……
あまり時間も無いからもう一度言うわね……
彼は私達が引き受けたいの。
勿論呪いが解決したら貴方達の元に返すつもりよ。
だから、彼をこちらに引き渡してくれないかしら？」

それは口調こそ丁寧だったが、先程と変わらない内容だ。

「……お断りします。
刀の事に気付けなかった私の責任でもありますから、これは私がなんとかします」

しかし、伊澄の返答もやはり変わらないものだった。

「どうして？
貴方の力ではどうしようも無いと分かった筈よ？」

「それは……
それでも、何とかします。
私が、絶対に。
何より……お兄様を他の所に引き渡すなんて出来ません」

頑な返事。
伊澄は一旦決めた事は絶対に貫き通す所存のようだ。

「そう……
本当はこういう形は嫌いなんだけど……」

楓はその返答を聞くとため息をついた後、ゆっくりと漆黒の柄に手を置いて……

「どうあっても意見は合わないようなら……
仕方がないわね……」

刀を引き抜いた。
と同時に楓の口調もまた冷たいものに変わる。

「おい！！」

伊澄に刀が向けられたのを見た翼が慌てて彼女の前に駆け寄ろうとしたが、

「なっ……！？」

彼の動きは金縛りにあったように止められてしまった。

「楓さんの説得の間、貴方のお相手は私が務めさせて頂きますわ」

「!?」

いつの間に移動したのか、翼のすぐ後ろに扇子を広げた綾姫が立っていてそう口を開く。

かと思った瞬間……

「!?」

翼の視界は一気に歪み、ついさっきまで広場だった景色はあっという間に真っ白な空間へと変わってしまったのだ。

「な!?」

「驚きまして？
これは私の移動術の一つ。
本人と対象を別空間に移動させるものですわ」

「別空間だと!?」

「ふふ、ご安心なさい。
外側から見れば私達はただ円形の球体に囲まれているだけ。
その球体の内部に別空間を創り出しているだけの事です。
広場からは一歩も動いていませんわ」

つまり、楓や伊澄から見れば綾姫と翼はいきなり球体に包まれたように見えると言うことになる。
しかし内部は別空間という難しい術のようだ。

「ここで貴方が駿様をこちらに引き渡さざるを得なくなると教えて差し上げましょう。
万が一にも私が破れる事などあり得ません故……」

「くっ……！！」

扇子を広げてそう断言した綾姫を見て、翼は木刀を握りしめた。

「出来るだけ傷付けたくは無いけれど……彼の身に何かあってからでは遅いのよ。だからそちらを優先させて貰うわ。
悪く思わないでね、小さなお嬢さん」

カチンっ！！

「小さいかどうか…
試してみますか……？」

一方、外の広場でも刀を向けて挑発を受けた伊澄が御札を取り出して対峙していた。

「無駄な足掻きだと思うけど」

「……！！」

伊澄はその言葉を聞くと同時に、数枚の御札を放つ。

ドオォォォォォン！！

札は一直線に楓に突っ込んでいき爆発が起こった。

直前まで楓は動かなかったので直撃しただろう事は誰が見ても明らか……

「！？」

砂塵が巻き起こる中、伊澄の視線の前に楓は平静と現れた。

彼女は一切無傷。

刀を右手に持ちながらゆっくりと歩いてくる。

（避けられた！？

いや、確かに当たったと…

効いてない？そんな筈は……！！）

伊澄は先程より遥かに多くの御札を速い動作で取り出し楓に向かって放った。

「一直線な攻撃……

そういうのは嫌いじゃないけれど、長生きは出来ないわよ？」

楓は薄く口元を緩めると、迫り来る多くの札達に向かって刀を寝か

せて居合いの構えをとる。

（一体何を……？）

「……っ！！」

その行為に首を傾げる伊澄だったが、楓は札が札が彼女の目の前に迫った所で刀を振り払った。

ドオォォォォン！！

「！？」

すると、放った札は楓に当たる事なく全て地面に逸れて着弾。そのまま爆発した。

そして砂塵の中から楓が再び無傷のまま姿を現す。

「刀だけで軌道を変えた……！？術が効いていない……」

「確かに貴方の力……かなり強いもののようね」

楓はため息をつくようにそう言うと驚いたままの伊澄の瞳を見つめる。

「だけど、所詮正面からの一辺倒な攻撃じゃ恐らく私には届かない

わ。
それに、力でいえば綾の方が遥かに強いわね」

「……っ！！」

尚も伊澄は札を取り出すと、今度はそれを正面では無く両側に飛ばした。
高速で飛ぶ札は両サイドから楓を囲むように彼女の左右の地面に貼り付く。

「術式八葉……」

「頑固なのね……」

伊澄が両手を前に差し出すと、楓の立つ地面に光の輪のような線が入り、周りには札が立ち上る。
そして術が発動……

「はあァっ！！」

「なっ！？」

しなかった。
正確に言えば、楓によって阻止された。
僅か一瞬、彼女が漆黒の刀を横に一閃するや否や……
無数の斬撃とともに札も陣も消え去ってしまったのだ。

（発動が防がれた……！？）

伊澄は驚きを隠せない。

今までこんな事態が起こった事など一度たりとも無いのだから。

「余所見している暇があるのかしら？」

「！？」

気が付くと楓がすぐ目の前に、まるで瞬間移動したかのごとく高速で伊澄の目前まで距離を詰めてきていた。

楓は少し姿勢を屈めると鞘に収めた刀の柄に手をかける。

「くっ……！！」

「！！」

伊澄は咄嗟に自分の周りに円形のバリアーを張り巡らした。

楓の刀は伊澄の術によって何とか留められる。

「なるほど……

強堅な守りなのね」

「……」

刀をバリアーに押し当てたまま、楓は伊澄を見る。

伊澄も負けじと円形の内から、外の楓を見返した。

同じ頃……

翼は移動させられた白い空間で綾姫と戦っていた。

いや、正確にいうと彼は遊ばれているだけのと言える。

どういう事か。

翼は先程から綾姫に近づこうとダッシュで距離を縮めるが、その度に彼女はその場から姿を消し、
いつの間にか彼から離れた場所に現れる。
その繰り返しだ。

「くっ……！！」

「ふふ……
そんな事では永遠にこの空間から出られませんわよ？」

またも、翼が綾姫を捕らえようと今度は木刀を振るったが彼女の姿はスッと消えて木刀は空を斬るばかり。

「あんた達は一体何者なんだ！？
一体駿とはどういう関係がある！？」

「あらあら……
教えて欲しかったらは私を捕まえてみて下さいな」

また翼の前方に姿を現した綾姫を見て、彼はそう叫ぶが彼女はクスクスと笑って扇子で口元を隠すばかり。

「っ……！！」

先程からいくら質問してもその一点張り。
だが、同じように翼は一向に綾姫を捕まえる所か触れる事すら出来ない。

彼自身、先程の戦いを見て彼女達の力は段違いだという事をまざまざと思い知らされていた。
だから今の自分では彼女を捕まえる事は出来ないかもしれないと薄々勘づいているのである。

（通じるかはわからないが、
かくなる上は……！！）

翼は何か閃いたように前方の綾姫を見ると……

「あ！！あんな所に、獅子〇凱がいるぞ！！」

ただの注意を反らす小学校レベルの作戦であった。
こんなアニメキャラの名前を叫ぶ子供騙しに引っかかる筈は……

「ええ！？
あのガ〇ガ〇ガーの獅子〇さんが！？」

めちゃめちゃ普通に引っかかっていた！

「貰った！！」

「！？」

今だと言わんばかりに翼は地面を蹴り綾姫の目の前まで一瞬で距離を縮める。
その速度は、まさに神速のごとく……

「はあァァ！！」

彼はそのまま彼女を捕まえようと腕を伸ばした。
しかし……

「!?」

綾姫の姿は消えて、彼はまたも大気だけをすり抜けて前につんのめってしまう。

「残念ですが……
そんな子供騙しには引っかかる訳がありませんわ」

そうして、翼の後ろにまたスッと姿を現した。

「いや……
今、『ええ!?』って驚いてたろ。信じてただろ。
まさか俺も信じないだろうと冗談混じりでやったのに、振り返ってたろ」

「そんな訳ありませんわ!!／／／
あれは……そう、わざと引っかかるふりをしてあげたんですの。
私が、そんな戯言に惑わされるなど……!!」

あり得ないとばかりに真っ赤になって否定する綾姫。
明らかに動揺している。
そりゃ、あんな罠にかかったら恥ずかしいだろうが……

「コホン!!
と、とにかく……

あの方を私達に引き渡すと言って頂ければ、ここから出して差し上げますわ」

綾姫は再び真剣な雰囲気に戻すために無理矢理咳払いをすると、そう口を開く。

「ここで素直に首を縦に振れる訳ねーだろ。悪いが断るよ」

翼は後ろにいる綾姫に振り返ると、木刀を握り直してはっきりと答えた。

「そうですか……ならば無理矢理にでも分からせてあげましょう……！！」

「！？」

彼女は息をつくとパチンと指を鳴らす。その途端、翼は身体全身が金縛りにあったかのように動かなくなってしまった。

「ぐっ……！！」

「……」

そうして綾姫は身動きが取れなくなった翼に近づいていく。

「……！？」

外にいた伊澄は自分を囲っていた円形が無くなり、その場に思わず片膝をついていた。

「どうやら……
これで詰みのようね」

「……」

楓に刀を向けられた伊澄はそれでも尚、負けじと彼女を睨み返している。

そう。驚くべき事に伊澄を守るように囲っていたバリアーは破壊されてしまった。
大量の妖怪退治から始まり、伊澄も大分力の消費が激しかった事で最大限の力を発揮出来なかった事もあるが、楓が刀だけでバリアーを叩き斬ったのもまた事実であった。

それでも伊澄は札を手に構えて対峙する。
降伏しようという気など全く持ち合わせていないようだ。

「彼と貴方……
血は繋がっていないでしょ？」

「え？」

彼女の様子を見かねた楓が、不意にそうな事を口にした。
“彼”とは勿論駿の事だ。
それを聞いた伊澄は心底驚いたように視線を楓の瞳に合わせる。

「どうして……それを？」

「詳しく話すつもりは無いわ。
ただ、私は……
私達は……彼をずっと前から知っているの。
ずっと長い時間を、ずっと苦しい時間を……そして、ずっと楽しかった時間を……」

そう話す彼女の表情はどこか物寂しく、それでも今まで見せることの無かった優しさに満ち溢れていた。

「私達がこうして立っていられるのは彼のおかげなの……
でも彼は……」

そこで彼女の言葉が途切れる。
その先の言葉は出せないかのように。

「……どういう事ですか？」

「貴方達が理由なんて分かる必要は無いわ。
とにかく、彼をこちらに引き渡してくれればそれで。
彼がいなくなれば、私達は私達では無くなってしまうの」

「……」

伊澄は相手のあまりに抽象的過ぎる話についていけなかった。
ただその言葉は冗談でも嘘でも無く、極めて真剣なものなのだという事だけは理解出来た。

「……どういう意味だ？」

「言葉通りの意味ですわ」

別空間にいる翼も綾姫から同じように話を聞いていた。
金縛りにあった状態で聞いた話は抽象的過ぎて意味が全く分からない。

「あの方と私達は、貴方達よりもずっと昔から一緒にいました。
ずっと同じ道を歩んできました。始まりこそ違えど、歩いてきた道も想いも違うことはありませんでした」

「……」

「だから、本日こうしてあなた方の前に現れました」

翼は目の前の彼女が何を言っているのかさっぱり理解出来ない。
ただ、真剣なその表情から何かがあるとは感じていた。

「今回、私達が助けに入らねばどうなっていたか……」

綾姫が扇子を閉じると翼を見据えそう口を開く。

「今回だけじゃ無いわ。
これからも今回以上の危険が彼に降りかかるかも分からない。
貴方達の手に負えないくらいのね……」

と同時に、外の楓も伊澄を見据えてそう言った。

「その時、貴方にどうにか出来る？現に今もこうして追い詰められているのに……」

と楓。

「こんな術一つ破れない貴方が、それ以上の脅威に立ち向かえると……？」

と綾姫。

「「分かったら……
彼（あの方）を引き渡すことに了承しなさい（して下さいまし）」」

そして外と内で、二人は伊澄と翼それぞれにそう言い放った。
その言葉には有無を言わせぬ力があるかのようだ……

しかし……

「お断りします」
「断る」

伊澄と翼は同時にそう返した。
それもきっぱりと、何者にも屈しない強い意志を込めて。

「断る……？
話を聞いていませんでしたの？」

一面白い空間で綾姫は呆れたような表情で翼を見る。

「現にこうして」

「約束したんだ」

「……約束？」

綾姫の言葉を遮るように翼が口を開いた。

「昔……
俺は、自分が大嫌いだった。
皆と違う力がある自分が大嫌いだったんだ」

「……」

「自分は他の人とは違う。
そんな事をいう家も、家族も、
俺は嫌いだった……
だからどんどん卑屈になっていったし、斜に構えて友達も出来なかった」

翼は嫌な思い出を、痛々しい傷をみるような表情で続ける。

「それで良いと思ってたし、友達なんか必要無いと思ってた。
今思えば寂しかっただけなんだろいな……

そんな寂しさを埋めるために、俺は親や先生に反抗さたり、悪い連中と付き合ったりしていた……
周りからはいつの間にか不良のレッテルを貼り付けられて、ますます孤立していった……」

でも、と続ける翼。
痛々しい彼の表情はそこで穏やかなものに変わった。

「アイツに出会った。
最初はなんて馬鹿な奴なんだろうって思ってたよ……
コイツとは絶対に仲良くなれないって思ってた」

「……」

「けど、色々あってアイツに教えられた。
そして気付いた。
燻ってた自分がいかに愚かだったかも。周りの景色がどれだけ素晴らしいものかも」

翼はきつく、一言一言噛みしめりように続ける。

「だから、俺は約束した。
アイツが道を間違ったり、苦しんでたりする時は……
今度は絶対に俺が力になるってな……」

「……何故、そこまで？」

「友達（だち）だからだ。
友ってのは助け合うのが当然だろ？」

綾姫の問いに間髪入れずに翼はそう答えた。

「何故、断るの？」

楓の方も、同じように伊澄の返事に驚いたように聞き返す。

「昔、とても強い妖怪と戦った事がありました。
その時からお兄様は強くて、けれど私はまだまだ未熟でした。
そして、私が自分のミスで襲われそうになった時……
お兄様が私を庇って……」

続ける伊澄の表情は鎮痛なものになってゆく。

「意識不明の重態にまでなってしまいました……
私のせいで……
怖かったです。このままお兄様がいなくなったら……
そう考えると私はどうしようも無くて……ただただ自分の力の未熟さを恨みました」

「……」

「幸い、お兄様は意識を取り戻して妖怪も二度目で退治する事が出来ました。
だから……
その時から私は決めたんです。
もっと力をつけて、これからは私がお兄様を守ると……
どんな事があっても、絶対に」

絶対的な意志。
どんな屈強な圧力にも負けない、そんな強さが彼女の瞳には宿っていた。

「……でも、現に今回彼は危険だった。これからもそんな事が起こらないとも限らないわ……」

楓は先程より少し揺らいだ瞳で反論をする。

「そんな、口先ではなんとでも言えますわ。
私の術一つまともに破れないのに……」

綾姫も再び扇子を口元に持ってきてそう言ったが……

「「それでも……」」

二人の反論に力強く口を開く伊澄と翼。

「「……？」」

「言う通り、まだまだ私は未熟です。でも……！！」

と外にいる伊澄。
彼女は目の前に御札を高速で浮かび上がらせた。

（この娘まだそんな力が……！？）

「確かにこの先危険な事は山ほどくるだろうな。
だったら……」

と内にいる翼。
彼は金縛りの術にあっているにも関わらずギリギリと動き始める。

（まさか……！？
私の術を力ずくで……！？）

「「お兄様（アイツ）は絶対に守ります（死なせねぇ）！！」」

そう断言するな否や……
伊澄は目の前の楓に札を放ち、
翼は思いきり地面を蹴って木刀を振り上げる。

ドオォォォォォン！！！

外と内。
両方で大きな音が響き渡る。
そして砂塵が広場全体を包み込んだが……

「貴方達がお兄様の何であろうと関係ありません。
あの人は……私の唯一のお兄様ですし、」

「俺の親友だからな……」

砂煙の中で、札を構えた伊澄とすぐ隣に木刀を肩に乗っけた翼が立

っていた。

伊澄は咄嗟の式術に最大限の力を込めて楓を攻撃、翼は金縛りを自力で解いて、綾姫が創り出した白い空間の一部に思いきり木刀を振り下ろした。

結果、楓は吹き飛ばされて綾姫の術も解ける。

翼は外に出られ伊澄の横に並んだという形になった訳だ。

と、砂塵の中から術を破られた綾姫が扇子を構えて立っていた。

「くっ……！！

この程度の術を破ったからといって、調子に乗って貰っては困りますわ！！まだまだ…！！」

「止めなさい綾！！」

綾姫が扇子を振り上げて何か術を発動させようとしたが、後ろから声が飛んできた。

振り返ると、砂塵の中から楓が刀を鞘にしまって歩いてきた。

（そんな……！？）

伊澄はそれを見て再び驚愕する。あれほど近距離で最大限に力を込めたにも関わらず、楓は無傷でいたからだ。

あの近距離の式術でさえ、彼女は防いだという事か。

「綾、もうそれまで。

退くわよ」

「な!?か、楓さん!?」

楓の意外な一言に綾姫は思わず目を見開く。
しかし楓はそれに構わず伊澄と翼の前にやって来た。

「「……」」

グッと警戒する二人だったが、
それに反して

「驚いた。さっきのはちょっと危なかったわ」

「「……?」」

彼女はクスリと微笑んで伊澄の頭に手を乗っけたのだ。
思わず拍子抜けしてしまう二人。
「貴方達の言葉、完全にでは無いけど、信じさせて貰うわね」

「え……」

そして彼女の返答はかなり意外なものだった。

「どうして……
そんな急に?」

「そうね……
二人の目を見て……かな?」

その言葉を聞いても尚、分からないように?マークが浮かんでいる

伊澄達。
そんな様子に優しく微笑みながら、楓は倒れている駿と伊澄達を交互に見て続ける。

「きっとまた会う事になるけど…暫く駿の事、よろしくお願いするわね、伊澄ちゃん、翼君」

「あ、ちょっと楓さん!?」

楓はそう言うと、伊澄や翼が何か尋ねようとする前に黒いカーディガンをひらりとなびかせてその場を後にした。
その後を慌てて綾姫が追いかけていく……

「……一体、なんだったのでしょうか?」

「ああ……」

伊澄と翼はそんな二人の後ろ姿を不思議そうに見つめる。

「あ!!そういや駿の事忘れてた!!」

「あ……」

二人は気付いたように駿に駆け寄ると、慌てて鷺ノ宮家に連れて帰ったのだった。
その日、翼は鷺ノ宮家に泊まることにした。

＊

「楓さん！
一体どういう事ですの！？」

「？」

一方……
楓と綾姫は夜道を歩いていた。
ようやく楓に追いついた綾姫が尋ねると、楓は『何が？』といった表情で振り返る。

「先程、何故退陣なさったんですの？自ら敗けを認めるなど…」

「違うわよ綾。
敗けたと思った訳じゃ無くて、
信じてみたくなったの」

「信じる？」

「ええ」

憮然としない綾姫の表情とは対称的に楓の表情は晴れやかである。

「私に追い詰められた時の彼女の瞳を見て思ったわ……
似てるって……」

「……？」

「どんなに逆境に圧されても、阻まれても屈しないあの目。
あの頃の……
駿の周りにいた私達にそっくりじゃない？」

楓はクスリと微笑んでそう言ってみせた。

「翼君と戦ってた時の彼の目もそうだったんじゃない？」

「そう……かもしれませんわね」

「そう。
だから信じてみたくなったのよ」

楓は後ろに手を組んで夜空を見上げる。

「確かに、ここは全然星が見えないけれど……
彼の周りにはいつだってどんな闇にも屈しない輝く星達が集まってくる。
それは今も昔も変わらないって分かったわ」

「星……ですか」

綾姫もつられて空を見上げた。
東京の夜空はビルや繁華街の明かりに阻まれて見える星は少ないが、
それでも深夜はそこそこの数の星が煌めいている。

「でも、
私達も彼の事を守らないとね。
完全に彼女達に任せた訳じゃ無いわよ？」

「わかっていますわ。
駿様には皇家を継いで頂かなくてはなりませんもの。
私がしっかり……」

「だから、そんな話を勝手に決めないの」

断言する綾姫にムッとしたように言葉を遮る楓。

「あら楓さん？
１６にもなって嫉妬ですか？
まだまだ未熟ですわね～」

「違うわよ。
そういう綾だって、術を自力で解かれてだじゃない。
まだまだ未熟の証拠よね？」

「な！？
ち、違いますわーーっ！！
あれは破られたんじゃありませんわ！！わざと解かせて差し上げたんです！！私が破れるなど……！！」

「あ～、はいはい。
分かったわよ。そういう事にしておいてあげるわね」

「全然分かっていませんわ！！

わざとですの！！私は彼等の為に仕方なく……！！」

ピリリリ……

綾姫が抗議の声をあげるなか、携帯電話の着信音が響いた。

「あ、電話だ」

「ちょっと楓さん！？
聞いてますの！？」

「はいはい、後でね」

楓は軽くあしらい、自分の携帯を取り出した。
画面を確認せずに電話に出る。

「もしもし……？」

『おお、楓か？』

「その声……
兄さんね？」

『ああ』

楓は電話越しに呆れたような声を出した。
“兄さん”という単語に先程まで騒いでいた綾姫もぴたりと止んだ。

「楓さん？
梓さんからですの？」

「ええ」

楓はそう言うと、携帯のプッシュホンを押した。
これで電話の内容が綾姫にも聞こえる。

『どうだ、調子は？』

「白々しい。
どこか遠くからずっと見てたんでしょ？私達の事」

『なんだ。バレていたか』

「そりゃ、あんな風に悪意（マリス）を貯めて妖怪を集める事が出来るなんて、
兄さんくらいのものよ？」

楓はため息をつくと、続ける。

「それで？
駿の事も見たんでしょ？」

『ああ、確かに本物のようだな。周りにいる連中を見て、そう確信
したよ』

「ええ、私達も同じよ」

楓は綾姫を見て、どちらからとも無く頷いた。

「それより、日本に帰ってるならどうして連絡してくれないのよ？」

『連絡したら俺達がやろうとする事がバレる。
そしたらお前は止めるだろう？』

「当たり前でしょ」

『だからだ』

電話越しの梓の声はクスリと笑っていた。

「じゃあ、今から帰ってくる？
綾と一緒にご飯作って待ってるけど……」

『悪いがもう成田に向かう。
一ヶ月くらいしたら暫く日本に帰ってくるつもりだ』

「そう……
分かったわ。兄さん、気をつけてね？」

『勿論だ』

楓の表情は少し寂しそうだが、それでも彼女は明るいように努める。

「あ、という事は弘也(ひろや)君も一緒にいる？」

『ああ、一緒に……』

『はいはーい♪
楓ちゃん久しぶり～♪』

梓の声が途切れて、陽気な別の声が入ってきた。

「あ、弘也君。
元気？兄さんが迷惑かけてない？」

『それが聞いてよ楓ちゃん。
コイツがさぁ、僕の事を』

『最高の親友だと思ってる』

『だよね♪』

不満そうにいった声は梓の一言でコロッと変わっていた。

「クスクス。
相変わらずみたいね。元気そうで良かったわ」

『僕も楓ちゃんの声が聞けて良かったよ』

電話越しの弘也の声はかなり弾んでいる。

「私は声を聞いて最悪ですわ」

『げっ！！
その声は皇綾姫！！
お前までいんのかよ！？』

「なんですの！！
いたら悪いとでも言うんですか！？」

弘也の声に叫び返す綾姫。
この会話だけで二人は犬猿の中である事がよく分かる。

『別に～
あ、そういえばお前。今日戦いに敗けてたよね』

「な！？
敗けてなどいませんわ！！！」

『またまた～
いつも偉そうな事言ってる割には随分呆気なかったね』

「な、ななな！！
弘也さん！？貴方という方は…！！」

『べ～』

一触即発。
見かねた楓が何とか綾姫から携帯を遠ざける

「弘也君、兄さんに代わってくれる？」

『うん、オッケー』

弘也の声から今度は梓に代わったようだ。

「それより、帰ってこないならどうして電話をしてきたの兄さん？」

『ああ、その事なんだが』

楓は後ろで喚いている綾姫に構わず梓に尋ねると、彼はコホンと咳払いをして続ける。

『今日の一件もあるが、やはりこれからお前達は何かとアイツの側にいた方が何かと良いと思ってな。昨日、お前と綾姫の手続きをしてきた』

「手続き？何の？」

全く身に覚えが無いのか楓は首を傾げる。

すると梓が

『駿の通っている白皇学院。そこにお前達の編入手続きをしてきたということだ。試験は一週間後。これはまぁ、お前達は一通り大学までの勉学を修了しているから問題無いだろう。入学は二週間後だ』

「……え？」

『これからはなるべくアイツの側にいた方がいい。住む場所も白皇学院の寮にしておいた。そういう訳だ。俺達は鍵を捜す、お前達は駿を頼む』

「……」

あまりにトントン拍子に進む話と梓の言葉に暫く目が点になる楓な

のであった。

其の三十ニ　それぞれの想いの形（後書き）

美希
「次回はいよいよお約束の呪いのお話だ！」

理沙
「一体駿君に何が起こる！？」

泉
「次回もよろしくね～♪」

其の三十三　すみません！！呪い保険とかありませんか？（前書き）

呪いにしては、
かなりお約束の展開。

一体どんな風に物語が進んでいくのか！？

それは僕にも分からない……

駿
「分からないのかよ！？」

楓
「では、始まります♪」

其の三十三　すみません！！呪い保険とかありませんか？

「ふわぁ……」

朝の鷺ノ宮屋敷。
昨日ここに泊まった翼は欠伸混じりに廊下を歩いていた。

昨日の今日ではあるが、本日も普通の平日。
学校もあるので駿を起こしにいく為に彼の部屋に向かっているのである。

それに楓達が言っていた呪いというのも心配だ。
いつ何があっても対応できるように出来るだけ近くにいないとと伊澄も言っていた。

ガラッ……！！

そうこうするうちに部屋の前まで到着したので、引き戸を開けて室内に入る。
そして畳の部屋の真ん中にある布団に近づいていく。

「おーい駿。
朝だぞ、起きろー」

彼はその掛布団をひっぺがして寝ている駿を起こそうと……

「……」

そこには、駿の姿は無かった。
代わりに駿によく似た小さな男の子が一人。

「……え？
ちょっと……え？」

「……うん？」

翼が目の前の光景に訳も分からないでいると、男の子が目を覚まして翼を見上げてきた。

綺麗な黒髪に瞳は琥珀色。
小さなその容姿は大変可愛らしく、女の子ととられても何らおかしくないほど整っていた。

それは駿によく似た特徴。
というか全く同じ特徴。

「……お前、誰？」

「……？」

翼は恐る恐る少年に尋ねると、彼は可愛らしく首を傾げて翼を見つめたが……

「……しゅん」

「……駿？
お前の名前？駿？」

「……」

翼の質問にこくりと頷く駿。
少年はその後もパチパチと瞬きして翼の言葉を待つ。

（……え？
ちょっと待って？え？
コイツが駿の寝ていた場所にいて、名前は駿で……）

翼の脳裏には昨日の綾姫の言葉が浮かび上がる。
“何かしらの呪いがかかっていますわ……
恐らく近々それが形を現すことが……”

（呪い……？
妖刀の呪い？
まさか……っ！？）

翼はある可能性を思い浮かべ、もう一度男の子に目を向ける。
そしてある事に気付いた。

男の子の着ている服は、いつも駿が来ていた寝間着で今はダブダブになっていたのだ。

（……）

翼はその可能性を確信する。
ダブダブになった寝間着、容姿、名前。以上の事から彼が導き出し

た答えは……

“幼児化”

「えエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！！？」

翼の叫び声は屋敷に響き渡ったのだった。

其の十四　大丈夫です！！呪い保険入ってますから

「ほ、本当なんですか！？
この子が、お兄様？」

「ああ……
恐らく、楓達の言っていた呪いだろう」

鷺ノ宮屋敷の居間。
そこに伊澄、初穂、九重、銀華と鷺ノ宮一同が勢揃いしていた。
悪熊も伊澄の膝の上にちょこんと乗っている。

「全く……
また面倒な事に巻き込まれおって……」

翼は昨日の状況を詳しく説明、更に今朝の事も説明し終えた所で銀華がため息混じりにそう呟いた。

『ホントにコレが駿なの？
さっきから全然喋らないけど……わっ！！』

「！？」

伊澄の膝の上にいた悪熊が小さな駿を訝しげに見ると、いきなり両手を広げて声を上げる。
駿はびっくりして飛び上がると、慌てて初穂の所にかけていき、彼女の背中に隠れてしまった。

『アハハ！！
驚いてる驚いてる』

「ダメよクマちゃん。
怖がらせちゃ」

初穂は駿の頭にそっと手を乗せて優しく撫でてあげた。

どうやら小さな駿は初穂を一番安心出来る人と認識したようだ。

「……信じられません。
全然お兄様じゃないみたい」

伊澄も我が目を疑うように初穂の後ろの男の子を見ている。

「そうね。
確かに伊澄ちゃんの知っているジュン君じゃないかも知れないわ。
でもこの子は間違い無くジュン君よ。鷺ノ宮家に初めて来た頃のジュン君そのものよ。
ですよね？お母様、おばあ様」

「そうだね。
伊澄はまだ小さかったから覚えて無いだろうけど……
懐かしいね」

「まぁ、
確かにあの頃はこんな感じで可愛げがあったがのぅ」

初穂の問いに九重、銀華は思い出すように頷いた。
伊澄は自分の全く知らない、鷺ノ宮に来たばかりの兄の様子を聞いて、そして実際に目の前で見て驚きを隠せなかった。

いつものダルそうながらもしっかりとした光の宿った瞳。
時に呆れさせられる一面、時に笑ってしまうくらい明るい一面、
毎回ため息をつかされるくらい妹馬鹿な一面。
そして、何物にも屈しない真っ直ぐな芯の通った一面。

それらの面影は片鱗も見せず、今の小さな駿はただ何かに怖がって

いるかのように初穂の着物の裾を掴んで後ろに隠れているだけ。
いつもの鷺ノ宮駿の様子とは程遠い小さな駿。

「取り敢えず……
お兄様がこんな状態のままでは大変ですから、何とか元に戻さないといけません」

「そうだのぅ……
まぁ、オババも白夜の修復と一緒に調べてみようかの」

伊澄がそう言うと、まず銀華が立ち上がり小さな駿に目を向ける。

「いつまでもこんな情けない状況では困るしの」

「お願いします、大おばあ様」

「ふむ」

銀華は頷いて飛び上がると白夜の修復のため、蔵の方に向かっていった。

「これから学校ですが、
駿はどうしましょうか？」

「そうね～」

翼は時計を見てそう尋ねる。
初穂は考えるように頬に手を当てると……

「学校につれていった方が良いかもしれないわね。
もしかしたら何かヒントがあるかもしれないわ」

「なるほど、そうですね。
分かりました。
それじゃあ、俺が責任を持ってつれていきますよ」

初穂の意見に翼も賛同した。
確かにジッとしているよりは何か動いた方が良いかもしれない。

「では、私は今日は家で呪いの前例を調べてみますわ。
翼様、お兄様をよろしくお願いします」

「ああ、任せてくれ伊澄ちゃん」

伊澄は家に残って呪いについて調べるようだ。
なので小さな駿は翼が白皇につれていくことになった。

「クスッ……
今は伊澄ちゃんのお兄さんって言うより、弟みたいよね。
こんな風に見ると、ほら」

「え？」

すると、初穂がクスリと笑って小さな駿を伊澄の前にそっと押し出してみせた。
伊澄が振り返ると駿が小さな容姿で彼女を見上げている。

「……おねえちゃん？」

「はぅ……！！」
もう一つ小さな駿の特徴……
それは物凄い可愛い事である。

性格は置いといても、
元々整った顔立ちで間違いなく美形の類に入る駿である。
それが五歳くらいに幼児化したらどうだろう。

怯える様子も首を傾げる様子も初穂の後ろに隠れる様子もかなり可愛らしいが、
今のように上目遣いで“お姉ちゃん”などと呼ばれてみては……

「お兄様！！可愛い！！」

「！！」

伊澄はあまりの可愛さに思わず小さな駿を抱きしめてしまった。
駿はいきなりのことに慌てて顔を真っ赤にする。

「お兄様！！
翼様の側を離れてはいけませんよ。知らない人とかについて行ったら絶対にダメですからね？」

「／／／」

伊澄は駿を抱きしめたまままるでお姉さんのように話しかける。
その様子に翼は苦笑、初穂と九重は微笑ましそうに眺めていた。

＊

（しかし……
このままって訳もなぁ……）

屋敷を出た翼は無事に白皇に到着していた。
今日は休日で授業が無いのでそれは幸いか。

だがこのまま一人で事情を抱えているのも何か不安である。
他に誰か協力してくる人がいれば助かるのだが……

（あ、そうだ）

何かを思い付いたように彼はポンと手を打った。

「え？
呪い？」

「ええ、色々ありまして」

取り敢えず生徒会室に移動。
そこで翼は愛歌に事情を説明していた。

今は生徒会室には愛歌と翼、そして駿だけでありヒナギクは所用があったのでちょっと席を外している。そこを見計らって愛歌に駿の事を説明したのだ。

「それじゃあ、この子が駿君という事？」

「まぁ、そんな感じです。
でも外形だけじゃ無くて中身も逆行してるみたいで……」

愛歌の問いに翼がそう答えると、彼の後ろから駿が恐る恐る顔を出した。
いきなり見ず知らずの場所につれてこられたので警戒しているようである。

そんな駿に愛歌は優しく微笑みかけて手を差しのべた。

「怖がら無くても大丈夫よ。
だから、ね？」

「……」

すると、駿はこくりと頷いて愛歌の手に自分の手を重ねた。
そして若干恥ずかしそうに俯いたまま、彼は翼の後ろからトコトコと歩いていき、今度は愛歌の制服の裾を掴んで彼女の後ろに隠れてしまったのである。

「……」

彼女は優しく駿の頭を撫でてあげると、彼は安心したような表情に

なっていた。どうやら初穂と同じように愛歌にも安心出来る人だとなついたらしい。

（流石愛歌さんだ……
警戒心の強そうなあの駿があっという間になつくなんて）

その様子に思わず感心する翼。
が、やはり彼女の優しさがそうさせるのだろうなと納得したのもつかの間……

「フフフ……♪」

愛歌は駿を安心させるのと同時にノートに楽しそうに何かを書き込んでいた。
ノートの表紙には『ジャプニカ弱点帳【特別版】』という活字が。

（許せ駿……
完全に見誤ったよ……
ここでもやっぱり弱点帳だったよ……）

記憶が無い間に弱点がしっかりと記される駿に、そして恐らくこれからも増え続ける彼の弱点に心底同情する翼であった。

○

「へぇ～
それじゃあ、この子は駿君の従兄弟なのね」

「まあ、な」

翼が愛歌に呪いの事情説明をして数十分後……
生徒会室にはヒナギク、千桜、美希、泉、理沙がやって来た。

愛歌の提案により今の小さな駿は鷺ノ宮駿の従兄弟ということにしたのだ。
駿は愛歌の膝の上にちょこんと座っていて、翼はその隣に腰かけている。

ヒナギクは翼の言葉と愛歌の膝の上に座っている小さな男の子を見て納得したように頷いた。
「でも、どうして駿君の従兄弟がここに？」

「ああ～」

千桜が最もな疑問を口にする。
翼は考えて無かったのか頬を掻きながら天井に目を向ける。

「実は、来年から白皇の初等科に入学することになってるのよ。
それでその見学に」

「「なるほど」」

引き継いで愛歌がそう答えてくれた。それで一同は納得したように頷いた。

「じゃあ、皆にご挨拶して」

「……」

愛歌の言葉にこくりと頷くと駿は膝の上から降りて恐る恐るヒナギク達の前に歩いていく。

「……光（こう）」

彼はゆっくりとせう名乗った。

そう。これは勿論偽名だ。

ヒナギク達が来る前、彼が流石にそのまま本名ではマズいだろうと駿の従兄弟としての偽名を考えてそれを彼に言うように言っておいたのだ。

「そ、その……

よろしくお願いします……」

駿もとい光は躊躇いがちに顔を上げると、上目遣いでヒナギク達を見つめて挨拶した。

「「「！！」」」

それを見た彼女達は一斉にキュンとして顔を赤らめた。

考えて見て欲しい。

綺麗な髪と二重の瞳、まるで女の子のような容姿の小さな背丈の男の子が上目遣いでこちらを見てきたら、どうだろう。

（（（（（か、か、可愛い……／／／）））））

そう。可愛いに決まっている。

「わ、私は桂ヒナギクよ！！
よろしくね光君！！」

「私は春風千桜！
よ、よろしく！！」

「花菱美希よ。
えっと……」

「朝風理沙だ！！
よろしく光君」

「あ！！
邪魔するな理沙！！」

「私は瀬川泉だよ♪
お姉ちゃんって呼んでいいよ♪」

「な！？
ずるいぞ泉！！自分だけ！！
私も美希お姉ちゃんと呼んでくれ！！」

「なら私も理沙お姉ちゃんと呼ぶ事を許可しよう」

「いっぺんに言わないの！！
光君が困っちゃうでしょ？
わ、私の事もヒナギクお姉ちゃんって呼んでいいわよ？」

「私の事も……
千桜お姉ちゃんと呼んでくれると……／／／」

次々と……
それはもう凄まじいくらいの勢いで身を乗り出して自己紹介をする
女子陣。

「！？」

駿はあまりの勢いに驚いたように目を大きくすると慌てて座っている愛歌の所まで逃げていき、
彼女の服の裾を掴んで後ろに隠れてしまった。

（（（（（か、可愛過ぎる！！／／／）））））

その小動物のような彼の様子にますます可愛いと思うヒナギク達。

「あらあら、そんな勢いで迫ると光君が怖がっちゃうわよ。
もう少し優しく話しかけないと」

「……」

クスクスと微笑んでそう言う愛歌の後ろから恐る恐る顔を覗かせる駿。若干涙目になっている姿もまた女の子のようである。

「ごめん、そうよね。
いきなりで驚かせちゃったわね」

「そうだな。

もう驚かせないから。大丈夫だからこっちにおいで」

ヒナギク、美希を始め女子陣は慌てて謝ると笑顔を駿に向ける。

「……」

「大丈夫よ。
だから、ほら」

それでも彼は不安そうに愛歌を見上げるが、彼女はそう言って彼の背中を優しく押してあげた。

駿は頷いて今度は躊躇うこと無くトコトコと歩いていった。
しかし……

「今のはいいネタになりそうね～♪」

「愛歌さん……
切り替えに躊躇いが無いですね…」

やっぱり愛歌は弱点帳に何やら書き込んでいた。
翼は隣で『もし駿の記憶とかが戻ったら大変なんだろうなぁ』と同情半分呆れ半分な思いだった。

「ところで、駿君は？
今日は欠席？」

「ええ、今こうして従兄弟の光君が来ているでしょ？
つまり鷺ノ宮家に親戚が集まっているらしいの。

彼はその挨拶で今日は休みだそうよ」

ヒナギクの問いに弱点帳を片手に答える愛歌。

なるほどと一同は納得する。

（凄いな愛歌さん……

嘘に一辺の躊躇いも無い）

翼は彼女の受け答えに色々な意味で感心していた。

その後……

生徒会室ではヒナギクや千桜達が駿もとい光について色々と楽しそうに盛り上がっていた。

抱っこをする順番とかお姫様抱っこをするとか『お姉ちゃん』と呼ばせるとかその他色々……

駿は安心したのか彼女達にもある程度心を開いたようであったが、代わりに仕事はほったらかし。

三人娘はいつもの事だが、珍しくヒナギクと千桜までも。

なので仕事は翌日に持ち越しとなったのだった。

＊

生徒会終了後……
駿を連れて鷺ノ宮家に戻った翼は屋敷の居間の真ん中にあるちゃぶ台の周りの座布団に座っていた。
彼の前には正座している伊澄、腕を組んで柱に寄りかかっている銀華、駿を膝の上に乗せて座っている初穂が集まっている。

「それで……
学校ではお兄様に何か変化はありましたか？」

「いや、特に何も……
強いて言えば……」

「言えば？」

翼が考えるように頬を掻くと伊澄は首を傾げた。

「かなりモテモテだった事くらいかな？」

「そ、そうですか……
ま、まあそれは今は仕方ないですね……」

その言葉に伊澄は一瞬ムッとさたような表情をしたがすぐに落ち着いた表情に戻す。

「そちらの方は？
呪いについて何か分かりました？」

「いえ、調べてみましたがそう言った前例はありませんでした。

ですが……」

翼が尋ねると伊澄は首を横に振ったがその視線を銀華に向けた。
すると銀華がため息一つ、柱から離れて翼達の前に腰かける。

「分かった事がある。
幼児化という類いの呪いは大抵外形が幼くなっても中身は変わらないものが多い。
ただし、今回は勝手が違う。
妖刀の呪いで中身の記憶が無い。となれば可能性は一つ……」

「「……」」

銀華は人差し指を立ててみせると伊澄達を交互に見て続ける。

「その妖刀の中に駿本人の精神が囚われた事になる」

「囚われた？」

「ああ。
恐らくあの馬鹿は妖刀と何らかのコンタクトをとったのだろう。
それが意識しての事か、無意識の中での事かは分からんがの」

やれやれといった様子で銀華はもう一度ため息をついた。

「でも、それじゃあどうやって駿を戻せるんですか？
あの妖刀を壊せば？」

「それはならん鷹ノ瀬の小僧。
それを壊せば恐らく駿の魂は永遠に戻ってこない」

「じゃあ、どうすれば？」

銀華はその問いには直接答えず、立ち上がるとまた柱の所まで歩いていき寄りかかった。

「これは奴の問題。
あの妖刀の中で奴は何らかの事態に直面しているだろう。
それはこちらは全く知る術も無ければ手を貸す術も無い」

「つまり……
私達はお兄様が戻ってくるのをただ待つだけ、という事です」

ここで銀華の言葉を伊澄が引き継いだ。
彼女は翼が学校に行っている間に今の話を聞いていたのだろう。

「何も分からないのは悔しいですが、とにかく今はお兄様を信じましょう。
きっとお兄様なら大丈夫です」

「……そうだな。
アイツはこんな事くらいでくたばるたまじゃ無いな」

伊澄は駿を信じるという意志が固まっているようで、その強い瞳に翼も納得して頷いた。

「それでも、今の私達がやらないといけない事もあるわ」

「「？」」

すると、今度は初穂がゆっくりと口を開く。
いつに無く真剣な表情だ。

「いくら魂が戻ってこようとしても、このジュン君の身体が無事でなければ話にならない。
だからジュン君が元に戻るまで、この子が事故等に遭わないようにしないとね」

「確かにそうですね……」

初穂の意見はズバリその通りで、ただ待つといっても伊澄達にはやるべき事があるのである。

「だったら、それまで俺も協力します。この状況をこのまま放って帰る事も出来ないし」

「でも、それでは翼様にご迷惑が……」

「大丈夫。
家にはちゃんと説明しておくし、駿には沢山借りがあるから」

「翼様……」

翼はニコッと笑うと伊澄達に向かって頷いてみせた。

「馬鹿弟子が迷惑をかけるの。
今度あの馬鹿も連れて礼をしようぞ。それと、飛鳥にはこちらから説明しておくからの」

「あ、はい。

お願いします」

銀華はそう言ってまた白夜の為に蔵に戻っていった。

こうして……

翼、伊澄達は幼児化した駿が元に戻るまで面倒をみる事になった。

一体鷺ノ宮駿の中身はいつ戻ってくるのか。

それは翼達には分からない。

一週間後かもしれないし、一ヶ月後かもしれない。

あるいは一年、二年という可能性もないとは言えない。

逆に一日、二日後という可能性だってある。

だが……

何の根拠も無いのだが、伊澄は彼がすぐに戻ってくると……

そんな直感があった。

「……ん？」

真っ暗。

一面見渡す限り真っ暗な空間で、鷺ノ宮駿は目を覚ました。

「あ…れ……？

ここ……は…？」

天井も無い、床も無い、そもそも奥行とかそういう概念すら感じられないくらい一面が、全てが真っ黒に包まれている。

駿は寝ぼけているのかと思いきり首を振った。

暫くしてぼやけた意識もはっきりしてくる。

だが……

「……どこ？」

やはり全ては真っ暗な空間。

見渡す限り黒一色。

他には何も無い。

「……っ！！

そうだ俺、退治の時に倒れて……それで楓と綾姫が現れて……」

駿は思い出したように額に手を当てると覚えてる限りの記憶を辿っていく。

「楓……

アイツ、何であんな……

綾姫と知り合いだったって事か。でも何か妙な既視感が……

コイツは一体……」

綾姫には前回妖怪退治の時に出会っていたが、楓がまさかああいう場にいたとは。

同業者というには何か違うような、そして彼女の戦う姿が何処かで見た事があるような言い知れぬ疑問に考え込んでしまう。

その時だった……

『ようやく目が覚めたか。
我を求めし小僧よ……』

「！！？」

考え込んでいる駿の後ろからしゃがれた声が聞こえてきた。
駿が慌てて振り返ると、
そこには……

『ふん、貧弱そうな小僧だの』

茶色いインバネスコートを身に纏い、スーツ用の薄い茶色ズボンをはいている一昔前の西洋風の服装で二足歩行の顔が蜥蜴の生き物が立っていた。
蜥蜴の頭には洒落たハットを被り、パイプを吹かしている。

『ようこそ、我がＳ』

「うらァァァァ！！！」

蜥蜴がニヤリと口元を緩めて話を続けようとしたが、
それを阻止するかのように駿が思いきり飛び蹴りを蜥蜴の顔面に叩き込んだ。

蜥蜴は鼻血（鼻あったっけ？）を吹き出してひっくり返る。

「……」

『貴様ァァ！！
我輩に向かっていきなり何をする！！』

数秒後、蜥蜴は怒りを露にして怒鳴りながら起き上がった。

『初対面の人間にいきなり飛び蹴りを顔面に叩き込むのが貴様の世界の礼儀だというのか！？』

「うるせェェェ！！
どう見てもテメー人間じゃねぇだろーが！！
ただの気持ち悪い蜥蜴だろ！！
シャー○ック○ームズみたいな格好しやがって！！」

駿は目の前に現れた理解不能の生き物には取り敢えず飛び蹴りをくらわした後次々にツッコミをいれていく。

「つーかお前誰だよ！？
ここは何処だよ！？」

『クックックッ……
なんじゃ貴様、そんな事も分かっていないのか』

「ああ？」

蜥蜴は駿が現状を理解していないと分かると機嫌が直ったのか途端に不敵な笑みを浮かべた。

『ここは蜥尾の中。
ワシはここの言わば支配人的な？いや、精霊的なポジションの立ち位置じゃ。
因みにこのイベント限りの出演らしい』

「……は？」

『だから……
ここは貴様が使った妖刀蜥尾の中で、貴様の精神は蜥尾に吸い込まれたという事じゃ』

・・・・・・

「はあァァァァァァァァァァァァァァァ！？」

目の前、そして周りのあまりに意味不明な現状に向けられてた駿の叫び声は真っ黒な空間に大きく響き渡った。

其の三十三　すみません！！呪い保険とかありませんか？（後書き）

今回から少し、駿が幼児化した世界の様子と蜥尾の中の世界を同時進行でやると思います。
そしてその後は蜥尾の中の世界でのアレコレがメインになるかなと……

まぁ、出来るだけギャグになるようにしたいとは……（笑）

次回もよろしくお願いします♪

其の三十四　呪い保険がダメなら仕事時の呪いって事で労災保険降ろして頂けませんか？

伽藍
「刀や剣の呪いといえば、大抵はシリアスなんですが……」

駿
「が？」

伽藍
「駿（こいつ）の場合はシリアスなんて似合わない！
って事でギャグ一色になってしまった今回」

駿
「それどーいう意味だオイ！？」

伽藍
「シリアスも多分あるかな、とそんな感じで進んでいきます」

駿
「早くもまとめ！？」

伽藍
「では、始まります！！」

其の三十四　呪い保険がダメなら仕事時の呪いって事で労災保険降ろして頂けませんか？

前回までのあらすじ！

妖刀蜥尾を劉安から貰った駿は妖刀の呪いを受けて身体と精神が幼児化してしまう。
どうやら彼の身体と精神は引き離されてしまったらしい。
幼児化した駿は彼の精神が元に戻るまで翼と伊澄によって面倒をみられる事になる。

一方、駿の精神は謎の空間で目を覚ます。
記憶を頼りに考え込んでいた彼の後ろからしゃがれた声が聞こえてきた。
彼が振り返ると、
そこにはシャー〇ック〇ームズのような格好をした二足歩行の蜥蜴が立っていたのだった。

『クックックッ……
どうやら驚きが隠せんようじゃのぅ』

駿の叫び声を聞いた蜥蜴は愉快そうに口元を緩める。
蜥蜴だけにかなり不気味だ。

「そりゃそうだよ！！
目が覚めたらいきなり気持ちの悪い蜥蜴が出てきて、おまけにここは妖刀の中だとか言いやがったらな！！」

『誰が気持ち悪い蜥蜴じゃァァァァ！！めちゃめちゃダンディーじゃろ！！世界中探してもこんなお洒落でダンディな蜥蜴はいないよ絶対！！
私はダンディじゃ、イエイ！！』

「うるせェェェ！！
蜥蜴がペラペラに喋んな！！
つーか何なのその格好？
何でパイプ加えてんの？何で帽子被ってんの？
無性に腹立つんだけど」

自信満々に胸を張る蜥蜴に駿は心底面倒臭そうに返す。

『黙れ小童が！！
これは我輩の最高にイケてるファッションなんじゃ！！
ワシは時代の最先端をいくんじゃ！！』

「いや最先端じゃねーよ。
思いきり旧英国式だよソレ。
どんなファッションのアンテナ張ってんだよ。
それから自分の一人称コロコロ変えんな、会話しづらいんだよ統一しろよ」

『え？
だったら……我輩？
いや私（わたくし）？
ん～、どっかがダンディ？
英国に行けばどっちもジェントルマンだぞ多分？何なら行ってアンケート取ってきてやろうか？

英国の優雅な午後ティータイムにお洒落な蜥蜴を見たあの冬』

「どうでもいい！！死ぬほど！！
ホント何なのお前？何で途中からポエム風になってんの？
どうでもいいよ、英国でもどこにでも勝手に行けよ。
つーかいっそ沈め。地の底に沈んで二度と上がってくるな」

『沈んでたまるか！！
私、いや我輩、いやミーをどなたと心得るのじゃユー！！
ミーは歴史に名を残す偉人になりたいな、いつの日かフォーエバー』

「もう突っ込むのたりぃよ激しく面倒臭せぇよ。
心の底から終わってくれよ頼むから」

『ふむ。
しかしどちらも言いにくいし……致仕方あるまい。
ここは苦肉の策で
【おいどん】にしよう』

「西郷さん！？」

ボケとツッコミの応酬は駿が思いきり地面（真っ暗だが）に頭を打ち付けて一段落した。

間

「んで、一体どういう事なんだよこの状況は？」

『やれやれ小童。
ワシの話を聞いていなかったようじゃの』

（結局“ワシ”が一人称かよ）

取り敢えず駿は再び真っ暗な空間で蜥蜴に向かい合う形になっていた。

『もう一度説明して欲しいかぇ？』

「ああ」

『ならば“どうかお願いします御主人様。私めは一生御主人様の下僕です”と言って膝まづいてワシの靴を舐めよ』

バキッ！！！

「もっと殴ればテメーは性格を改変出来るか？ああ？」

『グフッ……
後頭部は止めろ後頭部は。
今リアルにお花畑が見えかけたワシ……』

右手の拳に息を吹きかける駿と後頭部を押さえて踞る蜥蜴。

『仕方ないの。
もう一度説明してやろう』

蜥蜴は頭を擦りながら帽子を被り直して立ち上がると再び駿に向かい合った。

『ここはお前さんが所有する、いや譲り受けた妖刀蜥尾の中じゃ。
そしてお前さんはこの蜥尾の力により精神を現実世界からこの中に呼び寄せられた。
そして今に至る、といった所かの』

「……もしかして夢コレ？」

『現実じゃ』

「……マジ？」

『マジじゃ』

ピシャリといい放つ蜥蜴に駿はがっくりと項垂れる。
ある程度異常事態だと察していたようだが、やはりどうしても信じたく無いのだろう。

「ちょっと待て。
俺の精神がここにあるって事は、向こうの世界の俺はどうなってんの？消えた？」

『いや、これは妖刀の呪いのようなもの。
現実世界のお前は精神、つまり中身をとられ逆行しているだろう。
それにつられて恐らく外見も逆行している』

「もっと分かりやすく説明しろタコ」

『タコじゃない蜥蜴じゃ。
うむ、まぁ簡単に言えば幼児化という事だの』

「幼児化？
幼児化ってあれ……コ○ン君みたいなアレ？
身体は子供みたいな？
え？マジ？幼児化？」

『いや、お前さんの場合身体は子供、心も子供じゃ』

焦ったような駿の問いにあっけらかんと言う蜥蜴。

ガシッ！！

「おいィィィ！！
ヤバいって、それは何か多分色々マズイ！！他人にバレたら何か色々不味い気がするから！！
元に戻せ！！俺の精神を現実世界に戻せ！！今すぐ！！」

『あばばばば！？
揺らすな揺らすな！！
酔う、マジ車酔いする乗ってないけど！！』

駿は慌てて蜥蜴の襟を掴んで思いきり前後に振る。
蜥蜴は何とか駿の手から離れて息を整えた。

『あ～コホン。
いきなり戻せと言ってもそれは無理じゃ』

「あ？
何でだよハゲ」

『ハゲとらんわ！！
育毛剤毎日使ってるわい！！
フサフサでダンディじゃ！！』

「いや髪ねーだろ」

『心の中に生えとるんじゃい！！』

何このやり取り。
字数稼ぎだろって？
ハハハ、まさかそんな。

『話を戻すぞムカつく小童。
良いか？ワシはお前さんがこの妖刀蜥尾を使うに値するか相応しいかを試す為にお前さんの精神を呼び寄せた。
つまり認められるまでお前は現実世界へは戻れないという事だ、ハゲろそして死ね』

「待てオイ。
じゃあいつまでも認められなかったら永遠にこのままで現実世界の俺は別物になるって事なのか？
お前が死ね、尻尾もげろ」

『その通りじゃ。
これまでもこの妖刀を手にしてそのままこの蜥尾に呑まれこと切れた精神は数知れず。

無事に現実世界に帰れたものは今の所一人しかおらんのじゃ。
お前こそ死ね、二度死んで芋虫に転生しろ』

「一人！？
たった一人しか抜け出せなかったのか！？
尻尾切断されて死ね。宅配物とかを包んでるあのプチプチの一つに
転生して指で潰されて一生終えろ」

バキッ！！ドカッ！！

取っ組み合いが始まり、
殴る殴られる蹴る蹴られるの不毛な応酬が十分ほど続く。

『ぜぇ……ぜぇ……
そう。
そやつは今の今までこの蜥尾を使っていたから暫く誰の精神も来な
かったが、久々に来たのが貴様の精神というわけじゃ』

「はぁ……はぁ……
なるほど、つー事ァそれがあのジジイなんだな……
ったく、とんでもねぇ厄介事寄越しやがって……」

息を切らして言う蜥蜴に同じく息を切らせながら呟く駿。
ジジイとは劉安の事である。

「ジジイは今度しばくとして……一体どうすりゃここから出ること
が出来んだ？」

『無論、貴様が蜥尾を使うに値するか見極める。

まぁバトル小説的に試練とかを突破したらじゃな』

「だったら今すぐその試練やらをやらせろ。
いつまでもこんな所にいる訳にゃいかねぇんだよ、早く伊澄の元に戻らねーと」

駿は一回深呼吸をして息を整えると蜥蜴を睨み付ける。

『そう急くな若造。
まぁ良かろう。
じゃがその前に……』

蜥蜴はニヤリと口元を緩めると駿を見返して……

ガタッ……

『よっこらせ……』

「は？」

蜥蜴は何も無い筈の真っ暗な空間からちゃぶ台を出してきた。
続けて座布団を二枚出して来てちゃぶ台の前に敷く。

「おーい何やってんだ？」

駿の言葉も聞かずに蜥蜴はまた何処からか湯呑みを出してちゃぶ台に置いた。
更にまた何処からかリモコンを取り出していきなり出現した液晶テ

レビを付ける。

『ほれ、座れ』

「いやだから何をやって……」

『試練だとか何とかと堅苦しい事を行う前に、まずはリラックスをした方が良いと思うてな。
という訳で今から何か見ようぞ。映画か、いやドラマ？いやコメディー、バラエティーか……
そうじゃ、バラエティーから始めてコメディー、映画とローテーションしていこう。
ほれ、座っておれ』

蜥蜴はポンと手を打つと座っていた座布団から立ち上がり液晶テレビの方に歩いていこうと……

「アル○マバスタァァァァァァァ！！！」

『いきなり顔面！！？』

駿は思いきり蜥蜴の顔面に飛び蹴りを叩き込む。
蜥蜴はまた鼻血を出して吹き飛んだのだった。

其の十五　呪い保険がダメなら仕事時の呪いって事で労災保険を降ろして頂けますか？

駿が幼児化してから一日が経ち、また翼は駿を連れて白皇学院にやって来ていた。

時刻は午後三時過ぎ。

彼は生徒会の為に時計塔（ガーデンゲート）のエレベーターで最上階に登って、生徒会室に到着。

「あ、翼君」

「よっ」

翼が扉を開くとヒナギクや他の生徒会メンバーが到着していた。

「あら、光君。
今日も来てくれたのね！」

「……」

小さな駿は翼からヒナギクの前まで歩いて来るとこくりと頷く。

「私の事覚えてる？」

「うん」

ニッコリと頷く駿。

ヒナギクはそれを聞くと嬉しそうに『ありがとう』といって彼の頭を撫でる。

「よし、今日はこの美希お姉ちゃんから光君を抱っこしよう！」

「抜け駆け無しだ！！
今日は私からだぞ！」

「リサちん、そんな勢いだと光君が怖がっちゃうよ！」

「だったらまず私から……」

そんな賑やかな感じで駿は向かい入れられ女性陣は各々盛り上がり始めた。

「それで、昨日はあれから何か分かったの？」

「いえ……
特には何も」

翼はそんな様子を苦笑混じりに眺めながら席につくと、隣から愛歌がそっと尋ねてきた。

特に何の進展も無かったので、彼は肩を竦めてそう返す。
因みに愛歌が弱点帳を広げている部分には敢えて触れなかった。

そんな感じで……
光もとい小さな駿を可愛がりながら仕事を進めていった生徒会。
仕事も適度に、駿はヒナギクや千桜に優しくして貰ったり、三人娘に遊んで貰ったり、愛歌が弱点帳を書いたりと何だが微笑ましい感じで時間は過ぎていく……

三時間後……

「ふぅ……
これで今日の仕事は終了ね」

「「「疲れた～」」」

日が沈んだ頃、ようやく生徒会の仕事が終了。
ヒナギクがそう言うと三人娘は糸が切れたようにテーブルに突っ伏した。

翼は残りの書類を最終調整として整理していて、千桜もそれを手伝っている。
愛歌は紅茶を片手に、駿は愛歌の膝の上にちょこんと座っていた。

こうして今日も無事に生徒会は終了したかに見えた。
しかし……

バタン！！

「ヒナーーーっ！！！
大変大変よヒナ！！」

「「「？」」」

生徒会室の扉が乱暴に開けられ、叫び声と共に女性が物凄い勢いで飛び込んできた。

「お姉ちゃん！？」
「「桂先生？」」
「あ、桂ちゃんだ」
「「何だ雪路、騒々しいぞ」」

いきなり入ってきた女性は他でも無い、桂雪路であった。

「そんなに慌ててどうしたのよお姉ちゃん」

「大変なのよヒナ、それに皆。
とにかくもう一大事なの」

生徒会室に彼女が来る時は授業サボりや二日酔いで爆睡、訳の分からない提案等とろくな事が無いのだが、彼女の慌てぶりからどうやら今回は余程の事らしい。

「一大事ですか？」

「そうなの一大事なの！！」

翼が尋ねると雪路は何度も首を縦に振る。他のメンバーも雪路に注目する中、雪路は少し落ち着いたように息を整え話を続ける。

「実は昨日の朝、
三千院家の執事君が編入試験を受けに来たんだけど……」

「！」

雪路の言葉にヒナギクは驚いたように目を大きくした後、そっと口元を緩めた。

「三千院家の執事って……
前回の不審者騒動の人か？」

「にはは～
そんな事もあったね♪」

「ああ、俺は会ってるよ。
綾崎ハヤテっていう男子だったな」

雪路が話した三千院家の執事という語に座っているメンバーは顔を見合わせている。

「へ、へぇー。
白皇の編入試験は難しいのによくやるわねハヤテ君。
ま、受けるのは自由だけど」

ヒナギクは思わず口元を緩めた仕草を悟られまいと意味も無くノートを持ち上げてみせる。

「でも、もしかしたら努力してるかもしれないし三千院家の執事という立場上頑張っているかもしれないから……邪魔しちゃダメよ、お姉ちゃん」

「え？」

ギクッ……！！

「……」

「……」

暫し生徒会室を支配する沈黙。
そして見つめ合う桂姉妹。

ゴゴゴゴゴゴ……！！

そして、何処から取り出したのか竹刀を持ったヒナギクが後ろに物凄いオーラを放ちながら雪路の前に立ち塞がった。

「お姉ちゃん……？
お姉ちゃん、まさか……」

「ち！！違うの！！
ちょっとしたイタズラをしただけなの！！
軽いジョークのつもりだったの！！まさか後一点足りなくて不合格になるなんて思わなくて！！」

因みにヒナギクからはダー〇サイドがみるみると広がっている。
焦り慌てて弁明しようとする雪路の抵抗も虚しく……

「何、人の人生台無しにしてるのよーーーっ！！！！」

「キャアァァァァ！？」

ヒナギクの制裁が始まった。
それはもう、見るも無惨で残酷な光景で……

「！？」

駿は恐さのあまり目を閉じて愛歌に抱きついた。
愛歌はよしよしと駿ね頭を撫でている。流石にこの場では弱点帳は無いだろうと……いや、やっぱり弱点帳書いてました。

「しかし、相変わらずどっちが姉か分からんな～」

「ヒナちゃんも桂ちゃんも絶好調だねミキちゃん」

「いや、冷静に分析していないでそろそろ止めた方が……」

「良いんだ千桜。

多分だけど因果応報だから」

のんびりと乱闘を眺める三人娘に千桜は不安そうに声をかけるが、翼は恐らく桂先生が悪いんだろうなぁと思って肩を竦めていた。

暫くして乱闘が終了。
呆れたように椅子に座っているヒナギクの前で正座をしている姉の雪路。

「で……お姉ちゃんのイタズラでハヤテ君は不合格になったかもしれなくて、
その事を本人に伝える役目を理事長から言い渡されて、一人では気が重いから私に相談にきたと……そういう訳ねお姉ちゃん？」

「おっしゃる通りでございます」

ヒナギクの確認雪路は遂に土下座をしてしまう。
何というかあまりにも情けない。

「はぁ……
仕方ない、こういう事を相談出きるのは……」

ヒナギクは盛大にため息をつくと携帯電話を取り出して一旦生徒会室を出ていった。
雪路も勿論一緒に連れていく。

「……色々と大変そうだな」

「そうね～」

呆れたような表情の翼に愛歌はそう答えると駿をそっと降ろして立ち上がる。

「あれ、愛歌さんどちらに？」

「ええ、ちょっと所用で。
皆は先に帰ってて構わないわ」

愛歌は鞄を手にすると微笑んで生徒会室から出ていった。

それから数分後、ヒナギクがガチガチに固まった雪路と一緒に戻ってくる。

「私達、今から三千院家に向かうことになったから。
先に帰るわね」

「ご、ごめんなさい！」

「謝る相手が違うでしょお姉ちゃん。さっさと行くわよ」

ヒナギクは急ぎ足で荷物をまとめると『それじゃあね、皆』と言って再び生徒会室を後にした。
雪路も慌てて後を追っていく。

「それじゃあ、俺達も帰るか」

「……」

翼が駿の頭に手を乗せてそう言うと、駿はこくりと頷いた。

「あ、なら私達も途中まで光君を一緒に送っていこう！！」

「私もーーっ♪」

「ならば皆で一緒に帰るか！
レッツゴーだ翼君！！」

「だーー！！
分かったから騒ぐな三馬鹿」

「「「誰が三馬鹿だぁ！！」」」

そんな訳で、
ヒナギクは雪路を連れて三千院家へ、愛歌はまだ白皇に残り、
翼達は皆で時計塔を後にして帰路につくのだった。

『でも、精神は囚われたっていうけど……
一体駿はどんな目に遭ってるんだろう？』

場所は変わって鷺ノ宮家。
日が暮れた薄暗い空を見上げながら縁側に伊澄とその膝の上に悪熊がちょこんと座っていた。

悪熊が伊澄を見上げて可愛らしく首を傾げると、彼女はその頭を撫でてあげる。

「わかりませんが……
妖刀の呪いだけに、とても辛く苦しい試練や困難に遭っているのだと思います……」

『このままだと僕も抹殺が出来ないからね！
ふ、不本意だけど早く帰ってくれないとね』

「フフ、そうね……」

意地を張っているのがみえみえな様子で口を開く悪熊に微笑みかける伊澄。

「とにかく、今は信じましょう。お兄様なら大丈夫……」

伊澄は自分に言い聞かせるように呟くと夜空を見上げ、悪熊もそれにつられて顔を上げた。

どんな世界かも分からない場所にいる駿に、希望や願いを込めるかのように。

「ただいま帰りました～」

すると玄関の方から翼の声が聞こえてきた。

『あ、伊澄。
ちっこい駿達が帰ってきたみたいだよ！！早く行こう！！』

「またいきなり脅かしたらダメよ？」

『うん分かってる！
ちゃんといってから驚かせるよ！』

「もう……
アクちゃんったら……」

二人は縁側から立ち上がって、屋敷の玄関の方に向かって歩いていくのだった。

『「だーっはははははは！！！」』

一面真っ暗な空間の筈が、ある一ヵ所だけちゃぶ台があり座布団が二つ敷いてある。
その前には液晶テレビと、画面に映っているのはバラエティー番組の“すべ〇ない話”。

そしてそれを見ながら爆笑している蜥蜴と青年。
二人はちゃぶ台に置いてある煎餅を食べながらテレビに向かって時折突っ込み時折大笑いしている。

《それが実は～～～なんすよ～》

「オイオイそりゃねーだろ。
アハハ、おかしっ」

『ワシにも経験があるのぅ。
お、そうだ。他にも茶菓子もあるぞ小童、食うか？』

「あ～すみませんねなんか
気を遣わせちゃって」

『なんのなんの』

蜥蜴はまた何処からかお饅頭や大福を取り出してきた。
駿がペコリと頭を下げると愉快そうに手を振ってそう答える蜥蜴。

《なんと～～～～という！！》

『「ぎゃはははは！！
あり得ねぇ――――っ！！」』

呪いの受難はまだまだ続きそうである……

其の三十四　呪い保険がダメなら仕事時の呪いって事で労災保険降ろして頂けませんか？

ほとんどがボケとツッコミの応酬で終わった蜥尾の中。
何だがこれからもギャグ中心で進んでいきそうです。
勿論シリアスも入れたいとは思っていますが……どうなるやら

現実世界ではさりげなく原作介入してました。
まぁ実は前回がハヤテの編入試験の日だったんだ的な、そんな感じです。

後書きは次回こそ！

次回もよろしくお願いします♪

其の三十五　あ、すみません！！呪い保険証忘れちゃいました（前書き）

お陰様でこの小説も３０万ＰＶを突破しました。
これもひとえに皆様のお陰であります。本当にありがとうございます。これからもどうか、温かい目で諸事情を見守ってくださると嬉しいです。

では、始まります！！

其の三十五　あ、すみません！！呪い保険証忘れちゃいました

「さて……
どうするかな…」

鷺ノ宮屋敷の入口門の前で翼は空を見上げながらそう呟いた。
その隣には小さな駿と手を繋いだ伊澄が立っている。

「一緒に教室に連れていくのは難しいですね。
ご迷惑をおかけしてしまうかもしれませんし」

「確かになぁ……」

幼児化三日目……
今日は月曜日で普通に学校で授業がある。
流石に五歳くらいの駿を伊澄の教室に、又は翼の教室に連れていくのは難しいだろう。
無理を言えば可能かもしれないが伊澄は迷惑をかけるのは忍びないとの事である。

「しかし、一人で屋敷に残していくのも……」

現在鷺ノ宮屋敷には人がいない。銀華は白夜を持ってどこかに行ってしまっているし、初穂と九重は外出している。

「やはり、事情を話して友人の所で預かって貰うのが良さそうです

ね」

「友人って……
三千院家とか？」

「いえ、違います。
こういう複雑な事情を話しても大丈夫な所です」

翼が尋ねると伊澄はふるふると首を振ってみるとある方向を指差して言う。
翼はよく分からなかったが、取り敢えず彼女の言う住所に連れていく事にした。

一面真っ暗な筈の世界で、液晶テレビの前に青年と蜥蜴がちゃぶ台を囲むという異様な光景。

『「……！！」』

彼らの見ているのは有名なスパイアクション映画。
どうやらお笑い番組から次のテレビにシフトしたようだ。
只今、思わず手に汗握るような緊迫するシーン。

『「くっ……！！」』

相変わらず『何やってんだ』とツッコミが飛ぶだろう馬鹿みたいな絵面だ。
暫くこの光景に変化は無さそうである……

「おや？
ここは……」

翼と伊澄はとある屋敷の前に到着していた。
屋敷の門にある苗字を見て、翼は意外そうな表情をする。

「愛沢家？」

「はい、ここは私とお兄様の幼馴染みの咲夜の家です。
彼女の学校は確か今日は休みだったので、お願いしようかと」

そう。ここは愛沢家のお屋敷。
二人は学校に行く前にこの場所に立ち寄ったのだ。

「はぁ～……
アイツ、あの愛沢家のご令嬢とも知り合いだったのか。
知らなかったな……
でも伊澄ちゃん、呪いの事を話して大丈夫なのか？

しかも突然押し掛けたりして」

「その点については問題ありません。咲夜にならば話しても大丈夫ですよ。それに先程執事の方々に伺うと連絡を入れて貰いましたから」

「そうなのか。
まぁ、だったらお願いしようか」

翼は愛沢家の令嬢、咲夜とは全く面識が無かったが伊澄がそう言うなら大丈夫なのだろうと呼び鈴を鳴らした。

「……」

リーンドーンと屋敷らしい音が鳴り響き、暫くして玄関から執事と思わしき男性が出て来たのだが…

「あ～、ええってええって。
連絡きてるしウチが出るから」

そんな声が聞こえてきて執事は屋敷の中に引っ込んだ。
代わりに玄関からは、
白いワンピースに紺色のカーディガンを着た咲夜が出てくる。

彼女は門の前まで来ると翼を見て『おや？』という表情で首を傾げる仕草をした。
恐らく伊澄かと思っていたら知らない来客だったのでちょっと驚いているといった所だろう。

愛沢家のご令嬢のその様子に気付いて、翼は不審がられないように

口を開く。

「あ、えっと……
俺は伊澄ちゃんの付き添いで……って、あれ!?」

が、隣を見ると……
つい先程までいた筈の伊澄が綺麗さっぱり消えていた。

（何でこのタイミングで迷子!?）

思わず叫びたくなるような絶妙なタイミングで失踪する伊澄。
というか目を離したのなんて僅か二秒くらいなのだが。

「それで……
兄ちゃんは誰や?」

「あ～、えっと……」

其の十五　あ、すみません!!呪い保険証忘れちゃいました

トントン拍子に進んで、翼は愛沢家の中に案内されていた。

「そうだったか。
伊澄さんの付き添いで……」

「ああ。
門までは一緒だったんだけど、ちょっと目を離した隙に」

「まぁ、伊澄さんは二秒あれば人前から瞬間移動出来るからな」
翼がため息混じりにそう言うと咲夜はクスリと笑ってそう答える。

翼達の前にお茶等が用意されてから、彼は思い出したように口を開いた。

「あ、そういえば自己紹介がまだだった。
俺は鷹ノ瀬翼。
駿とは中学からの付き合いだ。
今は白皇学院で生徒会をやってる」

「おー、何や自分やったんか。
たまに駿から話は聞いとったで。駿とは違ってえらい万能な男子生徒やって」

「いや、そんな事は……」

「そんな謙遜せんでええって。
確かに今見て納得したわ。
きっとアイツとは違ってえらいモテはるんやろうな」

慌てて大袈裟に両手を振る翼だったが、咲夜は愉快そうに笑って続ける。

「ウチは愛沢咲夜。
駿と伊澄さんとは幼馴染みや。
とにかく笑いが命。
面白い人・事は大好きやで♪
よろしくな鷹ノ瀬の兄ちゃん」

「ああ、よろしく愛沢さん」

（関西の生まれなのかな……
イメージは違ったけど、元気で快活そうな良い娘だな）

彼女の自己紹介に翼が考えていたお嬢様のイメージとは違ったが、可愛くて明るいその様子に悪い印象を持つ筈も無かった。

「それで、隣の子は？」

「ああ、そうだった」

すっかり忘れていたというように手をポンと打つ翼。
そして隣にちょこんと座っていた駿を咲夜の前に出した。

「えっと……

酷く説明しづらい話なんだが…」

・・・・・・

「という訳なんだ」

「またえらい話の持っていき方やなというツッコミは置いといて、この子が駿って……ホンマに？」

「俄には信じられないかもしれないけど……本当だ」

翼の袖を掴んでいる小さな男の子を見て咲夜は首を傾げる。

「ちょっとした事情があって、今は姿も中身も幼児になっているのよ咲夜」

「「……」」

すると、二人の横から然も当たり前のように伊澄が出てきて翼の話を引き取った。

「いつの間に……」

「相変わらず神出鬼没なスキル全開やなぁ……」

二人とも彼女の迷子スキルが凄まじい事は知っているのでそれほど

大袈裟に突っ込むような真似はしない。

「まぁ自分らが言う駿が幼児化したちゅー事情は分かったわ。けど、何でそないな事になったん？」

「実は……」

咲夜は二人が嘘を言っているようには見えなかったので、現状に至るまでの経緯を尋ねる。

それに答えたのは伊澄。

彼女はかいつまんで呪いの事を話した。

駿がおかしな刀を拾ってきた事。その刀の呪いで朝、いきなり幼児化していた事。

外見だけでなく、中身まで年齢が逆行していた事など。

「はぁ、自分が普通やない仕事をしとったのは知っとったけど……随分ややこしい事に巻き込まれたもんやなぁ」

「ええ。

だからお兄様が元に戻るまで何とか面倒をみる事にしたのだけれど今日は家には誰も居なくて、かと言って流石に学校の授業についていく訳にはいかないから」

「分かった。

今日は学校休みやし、そういう事ならウチで預かるわ」

ある程度事情を把握した咲夜は特に訝しむ事も無く、快く頼みを承諾してくれた。

「ありがとう咲夜。
夕方過ぎには迎えにいくと思うわ」

「済まない愛沢家のご令嬢、迷惑をかける。俺からも礼を言わせてくれ」

伊澄に続いて翼も咲夜に向かって丁寧にお礼を言った。

「ええねん、気にせんといて。
ま、伊澄さんはどうせ迷子になるやろうから鷹ノ瀬の兄ちゃんが迎えに来てな」

「え、ああ。
分かった」

「ーーーっ！！」

咲夜の言葉にきょとんとした表情で頷く翼。
そして怒ったようにパタパタと袖を振る伊澄。

「改めてこんな事言うのもちょっと変な気がするけど、
よろしくな駿」

「……」

駿はこくりと頷いて素直にトコトコと咲夜の側まで歩いていた。
その様子は最初の頃より大分警戒心が薄くなった事を思わせる。

とまぁそんな訳で、
駿は二人が白皇学院に行っている間、咲夜の家で預かって貰う事になった。

『「ぐすっ……」』

またも場所は移動して真っ暗な蜥尾の空間。
ちゃぶ台を囲んだ蜥蜴と青年は先程とは打って変わってしんみりとした雰囲気。

二人の見ている画面には駅前で待つように座っている犬。
雪の中、ずっとずっと……

犬と主人の絆、忠誠心を描いた有名な某日本映画である。

『「……」』

いい加減物語的にも何か動けよと突っ込みたくなる絵面だが、彼らは動かない。
そこに感動がある限り（↑？）

「なるほど……
確かに見れば見るほど小さい頃の駿にそっくりやなぁ」

翼と伊澄が学校に出ていった後、咲夜は駿と隣あってソファに座っていた。
横には執事も二人立っている。

「で、自分記憶は小さい頃のまんまなん？
何も覚えてへんの？」

「……？」

咲夜の質問がよく分からなかったのか、駿は首を傾げるが少ししてこくりと頷いた。

（ははーん！
中身が子供っちゅー事は、
今の内に色々おもろい事が出来る訳やな。
だったら……）

キラーンと目を光らせると、内心でニヤリと笑って立ち上がって駿の前に来て向かい合った。

「ちょっと、“お姉ちゃん”って言ってみてくれへん？
いや“咲夜お姉ちゃん”の方がええな」

「……」

彼女にしてみれば普段は兄の位置にいる駿に弟のような反応をさせると面白いだろうという考えと、もし駿が元に戻った場合、この記憶があれば面白い事になるだろうていう考えがあった。

しかし、そんな考えはあっさりと無くなる事になる。

「咲夜お姉ちゃん……」

「……っ!?／／／」

幼く綺麗な琥珀色の瞳二つが咲夜を見つめてきて、“お姉ちゃん”の一言。

彼女は胸を押さえてその場に踞った。

「だ、大丈夫!?
お姉ちゃん!?」

「ぐはっ!?」

彼女の様子に慌てて駆け寄って声をかけた駿だが、彼の言葉が彼女に吐血させんばかりの勢いのダメージを与える。

「何やろう……
一体何なんやこれは……」

咲夜が胸を押さえたままゆっくりと立ち上がると、駿はまだ心配そうにオロオロとしていた。

「大丈夫……
何でもあらへんよ？」

「……」

咲夜がそう言って駿の頭を撫でると、彼はホッとしたような表情に戻る。

（で、でも……
これはあかんな。何だか分からんけど不意に聞くと強力過ぎる…）

「お姉ちゃん？」

キュン……！！

駿が考え込むような仕草をしていた咲夜を不思議そうに見上げてそう尋ねると、彼女はまたも胸を押さえてしまう。

（だから何なん！？
これは一体！？）

「それは“キュン”という萌えの感情の一種ですお嬢様」

「いきなり人の心を読むな巻田。そしてさらっと解析すな」

サッと彼女の横に来てそう解説をする執事の巻田。
咲夜はそれにしっかりと突っ込むと、一二回深呼吸をする。

「よ、よし……
もう大丈夫や」

「……？」

ようやく落ち着いたのか、咲夜は彼の頭にポンポンと手を乗せて呟く。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

「うっ……！！
まだ慣れへんかも」

「「萌えですよお嬢様」」

「うっさい！！」

口を揃える執事二人に慌てて叫び返す咲夜だった。

「なぁ……
もういい加減に話進めた方が良くね？」

感動系のＤＶＤを片付ける蜥蜴に駿は息をついてそう言った。

『ふむ……
だがしかし、貴様はこれを見ても同じ口がきけるかな？』

「！？」

蜥蜴が取り出したＤＶＤはピンク色のパッケージ。

「そ……それは！！
かの伝説を謳われる【淫らな保健室シリーズ】！？」

『クックックック……
そう。今や入手はおろか閲覧すら困難な伝説のシリーズじゃ。
一瞬の輝きが忘れられない第一巻はまさに逸品』

「……」

愕然とした表情の駿に向かって蜥蜴はニタリと口元を歪める。

『さて……
お前さんはこれからどうしたいのじゃ？
話を進めるのか？』

「……」

駿はかなりシリアスな険しい表情を作って、蜥蜴の前まで歩いていくと……

「その前に青少年の心の休息、
聖地への回帰が必要だな」

『うむ、その通りじゃ。
流石は劉安が選んだだけはあるの』
馬鹿共はお互い頷くと、固く固く握手し合ったのだった。

「はぁ～、だるいな……」

「何やいきなりため息なんかついて……レジでそんな顔しとったら客も来ぃへんよ？
そもそも今日は学校と違うん？」

「うるせーな……
余計なお世話だろ」

ここは、レンタルビデオショップタチバナ。
そのレジでダルそうに頬杖をつく少年ワタルとレジの机に寄りかかっている咲夜の姿があった。

「つーか何でお前ここに来たんだよ？」

「何や用が無いと来ちゃいけへんみたいな言い方やな」

「そうじゃねーけど……
大体お前が連れて来たあの子供、光って言ったっけ？
店なんか手伝わせて良いのかよ？」

咲夜は駿を預かった後、暫く屋敷で面倒を見ていたがせっかくだし外出しようという事でワタルの店に遊びに来たのだった。
その際ワタルには、予め伊澄に言われていた通り駿の呪いの事は明かさずに親戚の光という設定で説明していた。

そして今、咲夜の勝手な薦めで駿は可愛らしいエプロンをつけてお店の手伝いをしているのだった。手伝うと言っても所詮幼児。出来る事はたかが知れているが。

隣でサキが丁寧に説明しながらＤＶＤの並べ方を教えている。

「まぁ、細かい事はええやん。
し…光も楽しそうやし、これも社会勉強の一環って事で」

「いや……
あんな小さい子供に仕事なんて…大体ここは漢字だらけだし」

ワタルが困ったように呟くと、駿がエプロンを付けたままトコトコとレジの方に歩いてきた。

「ん……？
あれ、もう終わったのか？」

「わ、若……

この子凄いですよ。
下の列のＤＶＤをちゃんとラベルと種類別に分類出来てました」

一緒に来たサキがかなり驚いたように駿を見ながらワタルに言う。

「マジでか。
じゃあ……ちょっと光」

「……？」

ワタルは駿にちょいちょいと手招きすると、レジの前にＤＶＤを四つ並べてみせた。

「ワタル？
何をするつもりなん？」

「ちょっとテストだ。
これはうちのバイト用のテストに必ず出る問題だ。
光、この中で君が名作だと思うものはどれだ？」

ズルっ！！

「何やバイト用のテストって！！
つーかんなアホらしい事、バイトに聞いとるん！？
そりゃ店も赤字や！！」

「誰が赤字だァァァァ！！
これはうちで働くためにはかかせない質問なんだよっ！！」

ワタルが咲夜にそう叫び返すと同時に、駿はおもむろにとあるＤＶＤを指差した。

「何ィ！！
無○超○ザ○ボ○ト３を指しただとォ！？」

「……？」

「普通はこの四つが並んだらガン○ムやマク○スを指すのが一般的、しかしコイツはザ○ボ○トを指した！！
し、神童だ……！！
神童が現れた……！！」

「若っ、お気を確かに！！」

あまりの衝撃にフラりとよろめくワタルを慌てて支えるサキ。

「咲夜、この子は大物になるぞ……」

「いや、テキトーに指しただけやろ」

「否、断じて違う！！
きっと熱いロボット魂が彼に語りかけたんだ！！なぁ？」

ワタルは意味不明な持論を熱弁して駿に顔を向ける。

「……？」
→
テキトーに指差しました

「やはり！！
その瞳は肯定の意！！
なんてこった……
俺はとんでもない才能を発掘してしまった……！！」
→
通じてません

（ダメやな……
この店……）

そんなアホなやり取りを見て、咲夜は首を横に振った。

一方白皇では……

「あれ？
今日も駿君休み？」

「え、えっと……
ああ。ちょっと疲れが身体にきたみたいで寝込んでるんだ」

相変わらず欠席している駿にヒナギクや千桜は不思議そうに翼に尋ねる。
彼は何とか取り繕ってその場しのぎの答えをするが……

（これ以上は誤魔化すのはきつそうだな……
駿、早く戻って来いよ）

翼は教室から窓の外の空に向けて視線を向けるのだった。

その駿はというと……

ピ――――――――――――――【自主規制】

ホントどうしようも無い馬鹿だった……

＊

「まだまだ日は短いな〜」

時刻もすっかり夕方。

咲夜と駿は並んで屋敷への帰路に着いていた。

駿のワタルのビデオ屋でのお手伝いぶりは中々のもので、

高い棚には手が届かないが、低い棚はしっかりと整理整頓してみせていた。

ワタル曰く『ドジなサキより役に立つな』との事。

サキはダメージを受けていたが。

そんなビデオ屋とも別れを告げてから数十分、二人はようやく屋敷前に到着。
門を通り、屋敷の中に入ると……

「まぁ、お帰りなさい咲夜、お兄様」

「伊澄さん!?」

何故か咲夜の家から伊澄が出迎えてきた。

「何でおるん?」

「さっき五時間目の移動教室だったのだけれど……気付いたら咲夜の家に居たみたいで……」

「自分国際スパイとか目指しとんのか?」

相変わらずの迷子スキルはフル活動だった。

その数十分後……
予定通り、翼が屋敷に駿の事を迎えにきたのだが……

「何で伊澄ちゃんまでいるんだ?」

迎えに来た彼の第一声はそれだった。

「いつも以上に迷子パワー全開やから、帰る時も気ぃ付けた方がええよ?」

「分かった。頑張ってみよう」

「ーーーーっ！！」

自覚の無い伊澄だけが袖をパタパタと振っていた。

「それじゃあ、駿の事助かった。ありがとう。
迷惑とかかからなかったか？」

「大丈夫やで。
色んな意味で面白かったし」

玄関ホールで翼と伊澄は見送りの咲夜と向かい合っていた。
駿は疲れたのか翼におんぶされてスヤスヤと眠っている。

「まぁ、でも早く元に戻って欲しいな。
やっぱり駿に思いきりツッコミを入れんと調子出ないしな」

「……そうだな。
駿ならきっと大丈夫だ。
何だかんだで結局丸く収めちまう奴だからさ」

「せやな。
でも、その分人にいつも心配ばっかりかけるからなコイツは。
全く……」

咲夜は仕方ない奴だと少し怒ったように表情をしてみせた。

それを見た翼はやれやれと内心で苦笑する。

（……コイツはホント、幸せ者だな）

「何か言ってん？」

「いや、何でも無いよ」

彼は首を振ると、駿をもう一度背中にしっかりと持ち上げる。

「それじゃあ、今日は迷惑をかけたな。ありがとう」

「ええよ、気にせんで。
また遊びに来てや。
駿が戻ったら二人で漫才を待ってるで」

「いや、何で漫才……？」

何故か翼と駿は漫才をする事が彼女の中で決定したようだった。

「それはそうと……」

「？」

「気付いたら伊澄さんもう居てへんで？」

「ああ！？
いつの間に！？」

二人が気付いた時には隣にいた筈の伊澄がもう姿を消していた。

恐るべきエスケープ能力。

「そ、それじゃあ！！
俺は伊澄ちゃんを探しくる！！」

「またな～」

翼は駿を背負ったまま急いで屋敷を飛び出していった。
余談だが、彼が伊澄を見つけたのはそれから一時間半後だったという……

真っ暗な空間……
ちゃぶ台を囲んだ二人は湯呑みを啜ってまったりとしていた。

『どうじゃ？
あの一瞬の煌めき……
素晴らしかったろう？』

「確かに素晴らしかったけど……もういい加減進めた方が良くね？」

『うむ。
大分精神的にもリラックスしたじゃろう。流石ワシの気遣いは一流じゃの』

「おーい
まだ鼻血出てんぞ」

蜥蜴は立ち上がってティッシュで鼻血を拭うと、指をパチンと鳴らした。

「！？」

するとどうだろう。
今まで座っていた座布団やちゃぶ台やテレビがあっという間に消えてしまい、元の真っ暗な空間に戻ってしまった。

『さて……
今から試練を言い渡すが……
その前にいい忘れてた事があった？』

「あ？」

蜥蜴はやたら長い爪の生えている指を一つ立てると、思い出したように口を開く。

『この世界での時間と現実世界での時間は全く違う。
それを忘れるなよ。
それでは……』

「……いや待て、ちょっと待て。それってつまり……」

『む。
ここでの一時間が向こうでの一分になるかもしれないが、一日にな

るかもしれないし、一ヶ月になるかもしれないという事じゃ。
つまりは全く分からん。下手したら一年とかの』

駿は今まで散々液晶テレビで映画やバラエティーや○○や色々と見たり、お茶を飲んでまったりしたりしてきた訳で……
結構な時間ここに居た事になる。そういう事を先に言ってくれれば決してそんな真似はしなかったであろう。

『ま、そんな些細な事はおいておいて……
これよr』

「ヘルバリスタァァァァァァァ！！！」

駿の渾身の右足が蜥蜴の顔面に直撃した。
会心の一撃！
蜥蜴に４９６のダメージ！

・解説
【ヘルバリスタ】
名前を叫びながら左足を軸に相手の顔面に右足の踵を叩き込むただの回し蹴りの反対回り版。
名前を叫ぶのはその方が何か威力出そうだし、ツッコミも出来るという一石二鳥のようなそんな気がしないでもないから。
ギャグパートのみ使用可。

『ごばぁっ……！？』

取り敢えず蜥蜴は物凄い勢いで吹き飛んでいった。

まだまだ受難は続きそうである

其の三十五　あ、すみません！！呪い保険証忘れちゃいました（後書き）

わやなか

其の三十六　川に浮かぶ流木になりたい（前書き）

主人公に１０のアンケート！！
～ゲーム編～

Q．１ゲームは好きですか？

駿
「当然」

Q．２どのくらいゲームをやりますか？

駿
「寝る間を惜しんで。
時には徹夜」

Q．３どんな種類のゲームが好きですか？

駿
「ロープレ（ＲＰＧ）」

Q．４では、好きなＲＰＧを三つ上げて下さい

駿
「山ほどあるけど……
ペルソナ４、シャドウハーツ、
ＤＱ５」

Q．５ペルソナ４で好きなペルソナは何ですか？

駿
「ヨシツネ、アリス、タムリン
かな」

Q．６ペルソナ４で好きなキャラクターは？

駿
「番長（主人公）かな……
やっぱカッコイイじゃん？」

Q．７シャドウハーツで好きなキャラクターは？

駿
「ＳＨ２でウルとカレンかな。
この二人は好きだな、うん」

Q．８シャドウハーツで好きなフュージョンは？

駿
「天剴凰かな。
あとはアモン。
必殺の光線はツボだ」

Q．９　ＤＱ５ではビアンカ、フローラ、デボラの三人で誰を選びましたか？

駿

「俺は断然フローラ派なんで。
勿論フローラです。
フローラ以外あり得ないです。
他の方々は心底どうでも良いんで×××でも×××××でも好きにすれば良いんじゃないですか。
まぁフローラは俺の嫁なんで」

Q．１０　もしＤＱ５の世界に入れたらどうしたいですか？

駿
「フローラと結婚して新婚初夜に【ピ――――――（自主規制）】です。後は【ピ――――】とか【ピ――――】とか【ピ――――】とかですかね」

以上です。
回答ありがとうございました。

其の三十六　川に浮かぶ流木になりたい

『……』

「……」

真っ暗な空間に蜥蜴と駿が二人。前回とは全く違う険しい雰囲気で睨み合って……

『鼻が痛い……
ワシのダンディなお鼻が…』

「うるせーよハゲ」

『誰がハゲじゃあァァァァ！！
フサフサじゃ！！身心共にフサフサなんじゃあァァァァ！！
お洒落に言うとＦＵＳＡＦＵＳＡじゃあキャッホぅぅぅ！！』

「さっさと進めんかこの【ピーーー】がァァァァ！！！」

『ペレスト〇イカ！！』

駿の踵が蜥蜴の脳天にクリティカルヒットした。

其の十六　川に浮かぶ流木になりたい

「ふぅ……」

朝の白皇生徒会室。
ＨＲ前に生徒会の仕事にやって来た翼は椅子に腰を降ろして息をついた。

今日も勿論授業はあるから駿は置いてこようとしたのだが、またも屋敷内で初穂達は行方不明と若干鷺ノ宮家自体が危ないような状況だったので途中まで一緒に登校していた。
しかし、途中で偶々咲夜に会った翼は何となく事情を悟られ彼女の家に駿を預ける事になった。
彼は二度目は流石に悪いとその旨を伝えたが、咲夜は『一日くらいサボっても平気』だと言ってくれたので駿を預けたのだ。
今度ちゃんとお礼をしようと思う翼だった。勿論漫才以外で

因みに伊澄には念には念をとリムジンで登校をさせたが、何故かリ

ムジン内から失踪という最早物理学の定理を覆す神業的な迷子スキルを発動し只今執事達が大慌てで捜索中である。

駿が居ると居ないとでは、伊澄の迷子パワーがここまではっきり現れるのか。

彼の存在はやはり彼女にとってかなり大きいらしい。

（まぁ、駿の幼児化自体はそこまで問題にはならない……

鷺ノ宮家や愛沢さん達に協力して貰えば何とかなる。

それにあまり迷惑はかけたく無いけど、店にいる姉さんに手伝って貰うという手もあるけど……）

翼は姉や曾祖母に今回の事情を話すのには若干抵抗があった。

理由はこういう事態で迷惑をかけたく無いからという実に家族想いなものだ。

翼の家は、両親が海外で仕事があり家には居ないが、お金は毎月振り込んでくれる為生活には全く困っていない。

一方、姉は鷹ノ瀬家系列で両親が営んでいた喫茶店で不在の両親に代わってマスターとして働いている。

彼女の美しさ目当てでくる客も多く、翼は時々心配で見にいく事もある。

だから彼女に事情を話せば、仕事を休んで翼を手伝うとも言い出しかねないので話しつらいのだ。

（でも、そんな事を言ってる場合じゃ無いな。

取り敢えず黙ってた方が後で拗ねたりするし、今日は駿と一緒に喫茶店に顔を出してみるか……）

何とはなしに窓の外に目を向けてぼんやりとそんな事を考える。
が、暫くしてすぐに意識をはっきりさせると脱線しかけた考えをもう一度反芻し直す。

（まぁとにかく、小さい駿自体は何とかなるんだ。
問題なのは……）

「翼君、今日も駿君は欠席なのか？」

そう、こっちの駿だ。
流石にこう何日も顔を出していないといい加減に変だと気付かれてしまう。

「あ、ああ……
何かまだ具合が悪いみたいでな。まだ休むらしい」

「そうか……
それは心配だな」

声をかけてきた千桜に翼は内心困惑しながらも平静を装ってそう返した。
それを聞いた千桜は心配そうに窓の外に目を向ける。

「あら。
千桜、駿君の事が気になるの？」

「え！？」

すると、会長の机に座っていたヒナギクが書類を整理したと同時に

クスリと笑ってそう言った。
慌てて振り返る千桜だったが…

「そういえば昨日から彼の事が気になって仕事も集中していなかったものね～♪」

「ちょっ、何言ってるんですか愛歌さん！？」

今度は千桜の隣に座っていた愛歌が微笑みながらそう口を開く。
彼女の目は若干Sモードになり、弱点帳も置いてあった。

「ち、違いますよ！！
そういう意味じゃ無くて、私はただ同じクラスメートとして心配で……」

「「へぇ～」」

「本当ですって！！」

ヒナギクと愛歌の言葉に千桜は頬を赤らめて必死に弁解しようとするが、二人は意味ありげに口元を緩めていた。

（助かった……
何とか話題は反れたな）

翼はホッと一息。
これ以上考えても無駄だろうと考えて、勝手に盛り上がる女性陣を背景音に彼は仕事に取りかかるのだった。

『おのれ小童……
蜥蜴の妖精であるワシにこの仕打ち……
覚えておれ』

蜥蜴は頭を擦りながら立ち上がると帽子を被り直してヨレヨレと立ち上がった。
そしておもむろにパイプを口に運ぶ。

「いや、帽子は分かるけど、もうパイプは良いだろ。
明らかに吸ってないだろ、完全にキャラ作りだろ」

『な、誰がキャラ作りじゃ！！
誰が！！』

「オメーだよジジイ」

『ジジイ！？
貴様紳士に向かってジジイとはなんじゃ、ジジイとは！！
キング・オブ・ダディと呼べ。
もしくはＭｒ．ブリティッシュと……』

「もう良いよ何でも。
とにかく、早く進めてくれ。
これ以上グダグダやってると字数稼ぎだってバレる」

『いや……
たった今お前さんがバラしちゃったから……』

蜥蜴は仕方なさそうにため息をつくと、『ため息つきたいのはこっちなんだよ』という駿のツッコミをスルーして彼の目の前まで歩いてきた。

『良かろう。
では貴様の器、この蜥尾に相応しいか試すことにしよう……』

「……」

『まずは……
この蜥尾にまつわる古からの伝承を伝えるとするかのぅ』

蜥蜴はパイプを口から離して、ふぅっと息を空中にはく。
煙は出なかったのでやっぱり吸ってはいかなった。

授業も終わった放課後……
鷹ノ瀬翼は一足早く白皇学院を後にしていた。
彼は生徒会には顔を出さず、愛沢家に駿を引き取り―その際駿は楽

しそうな表情でニコニコしていたので咲夜が上手く面倒をみてくれたのだろうと彼は感謝した―そのまま鷺ノ宮家とは少し違った方向の道を進んでいた。

向かった先は、駅前にある大通りの商店街の一つ手前にある西洋風の雰囲気が漂う煉瓦作りの小さな通りだった。
周りにはその通りに似つかわしいお洒落なパン屋や西洋風の雑貨屋が並んでいる。

そして大通りから通りに入って真っ直ぐ進むと二つ目の十字路の左端にアンティークだが綺麗な喫茶店が建っていた。
ここが翼の目的地であった。

ガラッ……

入口、少し大きめのドアを開くと外観同様にお洒落で綺麗な店内が彼の視界に飛び込んでくる。
落ち着きのある雰囲気で、居心地の良さを感じさせるその店内には夕方だが何人も客がテーブルに座って各々新聞を読んだり読書をしたり、或いは友人同士で会話しながらお茶をしていた。

朝は駅へ向かう通勤者達はここをよく通るため、この店で新聞片手にコーヒーを飲んでいくサラリーマンも多い。
昼間は近隣に幼稚園もあるため、所謂ママさん達が付き合いでお茶をするにはお洒落で綺麗な喫茶店という事でうってつけの場だ。
夕方から夜にかけては比較的男女比は均等か少し男性の方が多いように思える。

立地も駅近という事もあり繁盛しているが、繁盛の理由はそれだけでは無い。

「いらっしゃ……
あら、翼じゃない」

「姉さん」

翼はかかってきた声に反応して目をカウンターに向ける。
そこにはエプロン姿の翼の姉、弥生がいた。

カウンターは偶々人がいなかったので、彼はそのまま歩いていってカウンター席に腰を降ろす。
駿も抱っこして、隣の席に座らせてあげた。

「久しぶりね、こんな時間に来るなんて」

「まぁな……」

そう。この喫茶店は鷹ノ瀬系列のお店である。
両親が経営していた店を、今は弥生がマスターとして継いでいるのだ。客足が多いの理由のもう一つはこれだ。

翼の姉、弥生はそれはもう美人である。
おまけに聞き上手で相談役は得意ときたもんだから、彼女目当てにくる男性客は多い。
ただ中にはいやらしい事を考えてくる輩もいて、翼はそれが心配だからこうして訪れている。
最もそんな客は彼女に引っ張たかれて追い返されるのがオチだが。

綺麗とカッコイイを兼ね備えたような女性なので同性からも人気が高いらしく、最近では下校中の中学生の女の子や女子高生が相談にくる事も多いようだ。
相談は主に恋愛相談なのだろうが……

「今日はどうしたの？
何か相談事？」

「まぁ、そんな所かな……」

弥生は普段翼が店に来るもしくは家に帰ってくるのは生徒会、部活が終わったらという事を知っているのでこんな早い時間に帰ってくるのには何か理由があると踏んだらしい。

「えっと……
コイツの事なんだけど」

「あら……」

翼が隣の男の子に手を向けたところでようやく彼女はその存在に気付いた。
背が小さくてよく見えなかったのだろう。

「実は……」

彼はありのままの事実を話すことにした。
説明を中途半端にすると彼女も心配するだろうし、何より翼は嘘をつくことが苦手だ。

お客には聞こえないように最低限の音量で分かりやすく話す。
カウンターに誰も座っていなかったのは幸いだった。

「そう。
じゃあ、この子が駿君なのね」

「まぁ、そんなトコ」

弥生は翼の話をすんなりと信じたようだった。
いや、信じざるを得ない状況といった方が正しい。
翼の真剣な表情と瞳を見ていれば嘘では無い事が明白だからだ。

「なるほど……
翼が暫く鷺ノ宮家に泊まってたのはそういう訳だったのね」

「ああ。
それで、まぁ普段は鷺ノ宮家で面倒を見てるんだけどあの家はいつなんどき皆が行方不明になるか分からないから、そういう時になったら協力して欲しいんだ。
勿論、迷惑でない範囲で」

翼は少し申し訳なさそうな表情でそう話す。
本来彼がそんな表情をする必要は一切無いのだ。悪いのは駿(ばか)とエロ仙人こと劉安なのだから。

「ええ、分かったわ。
だったらそういう時はこの喫茶店で預かるっていうのはどう？」

「うん、助かるよ。

ありがとう姉さん」

そんな突然の頼みにも、弥生は嫌な顔一つせず微笑んで頷いてくれた。翼も一安心した様子。

「でも、その呪いっていつ解けるの？」

「さぁ、それはさっぱり。明日かもしれないし、一ヶ月後かもしれない」

翼は困ったように肩を竦める。だからこそ、もしもの時の為にこうして弥生にも話しておいたのだが。

「それにしても……」

「？」

弥生はカウンターから翼の隣に座っている小さな駿を不思議そうに見つめる。

「小さい頃の駿君ってこんな感じだったのね」

駿は初めて来る喫茶店に怯えているのか翼の制服の裾を掴んで離そうとしなかった。

ビクビクしているのは火をみるより明らかだ。

「駿君？

男の子ならこのくらいで怯えてたらいけないわよ？」

「いやでも、このくらいの歳の子は皆こんなもんだろ？」

弥生が駿に注意して裾から手を離させたのを見て、翼が苦笑混じりにそう言った。

「あら、ダメよ翼。
こういう事で甘やかしちゃ。
男の子は小さい頃からでも心だけは強く持ってないと」

「いやいや……
まだ五歳くらいじゃないか」

「五歳だったら、コンビニ付近にたむろしている高校生達を払い除けるくらいの気概があった方が好ましいわね。私ならそうさせるかも……」

「姉さんは絶対に子供を持つべきじゃないと思う」

弥生は基本的に優しいし子供も大好きだが、一方で結構厳しい面もある。
基本的に性別、年齢に例外無く曲がった事や考えを持つ人間に対しては正々堂々戦いを挑むようなタイプだ。
それが翼の悩みの種でもある。
彼女ならヤクザにでもつっかかって注意をしかねないからだ。

男性を見る目は言うまでもなく厳しい。
なよなよした男はそれだけでアウトだそうだ。

「よし！

良いこと思い付いたわ。
今から幼児の駿君の怖がりを直すために、彼にお店を手伝ってもらいましょう」

「……え？」

また、彼女は行動が早い。
思いたったら吉日と言わんばかりに動くのだ。

「ちょっと姉さん、
いくら何でも駿一人じゃ……」

「勿論、翼も一緒に手伝うのよ」

そして、しばしばその行動は読めなかったりする。

「じゃあ二人ともエプロン着て。ウェイター、よろしくね♪」

「「……」」

かくして、本日の弥生の喫茶店には夕方限定のウェイターが二人増えたのだった。

遥か遥か昔……
日本神話の時代……
ある村には悲しい風習があった。その村には恐ろしい火蜥蜴の怪物に長い間支配下におかれておったのだが、毎年夏至の日、その村の娘を火蜥蜴に生け贄に捧げなければならなかったのじゃ。

そんなある夏、
腕のたつ男が旅の途中にその村にやってきた。
その男は泊まった宿の娘と恋におちる。

夏至も間近となった時、なんとその宿の娘が生け贄になる事になった。男は猛烈に反対したがそれは決定事項であった。
だが、男は諦め無かった。
村人全員に自分が火蜥蜴を退治するといって説得に回り、男はなんとか数人の村人を仲間にする。

そして夏至の晩……
数人の村人の協力で宿の娘と娘に変装した男を入れ替え、男は火蜥蜴のいる洞窟にはいった。

油断した火蜥蜴が娘に扮した男にの時……
男は持っていた紅い刀で怪物の尻尾を思いきり切り裂いた。

そして激怒した火蜥蜴を相手に男は一歩も退かず激闘の末、遂に男は怪物の心臓に刀を突き立て退治に成功したのじゃ。

その後……

男は村の英雄として崇められ、宿の娘とめでたく結納。
その男の刀は火蜥蜴の尾を切り裂く切れ味から【蜥尾】と名付けられた。
男の死後も、刀は村の神として崇められ続けた。
後に村は人口減少から自然消滅。その刀もどこかに流れてしまい、外の世に様々な人々の手に渡っていったようじゃの。

「……随分と歴史の深そうな刀なんだな」

『無論じゃ。
この蜥尾は遥か神話の時代からあるとも言われている』

「言われている……？
アンタがずっとこの中に居るんじゃないのか？」

『いや、ワシは五十代目。
因みにワシの先祖、十五代目が劉安の時の支配人らしい』

「五十代って……
長いな」

駿は驚いたように目を見開くが、冷静な表情で蜥蜴に向かい合う。
蜥蜴は一通り話を終えて息をついたが、再び駿に目を向ける。
その瞳には真剣な光を帯びている、爬虫類なのに。

『試練……というか貴様の器を試す方法は代々ワシの先祖が行ってきた事をやるだけじゃ』

「何だよソレ？」

『簡単に言えば、怪物退治じゃ』

蜥蜴はニヤリと口元を歪めてみせる。

「怪物？」

『今から、貴様にはある場所に行ってそこに現れる怪物を退治してもらう。それがまぁ試練みたいなもんじゃろ』

「怪物なんていんのかよこの刀の中には……あ、もう既に怪物が一体いるか」

『誰が怪物じゃ戯け。そんな事はまぁ良い』

蜥蜴はコホンと咳払いをする。

『怪物といっても、ワシが当時を想像し創り出す紛い物』

「創る！？オメーそんな事出来んの！？ホログラム？」

意味不明な蜥蜴な言葉に駿は首を傾げる。

『創造物とはいえ……
実体があるからの。
ホログラムとか立体映像とかでは無い。
殺される事も十分にあり得る』

「……殺される？
え？死んだらどうなるの？」

『貴様の魂は永遠にこの蜥尾に囚われる。現実世界に戻れる事は二度と無い』

「はあ！？
ちょっ待っ……！！」

駿は慌てたように蜥蜴に目を向けるが……

『んじゃ、せいぜい死なんようにな』

パチン！！

「！？」

蜥蜴は指を鳴らすと、駿の周りの視界から蜥蜴も消えてまた真っ白になってしまった。

ドカッ！！！

「痛っ！？」

次の瞬間、駿はどこかの地面に叩きつけられた。
堅い地面のようなその感触に駿は慌てて起き上がり周りを見回す。

＞ｉ３３４８６―２１５９＜

「……ここは？」

そこは石柱がいくつも建っている遺跡のような場所だった。
岩や折れた石柱の跡、岩の塀などが不恰好に置いてある。

地面の下からは気のせいか僅かだが水の音がするような、もしかしたら地下があるのかもしれない。

「……！！」

その時……
駿の前方から地面が揺れるような音が聞こえてくる。

その音は次第に大きくなっていき、奥の暗やみからギラリと光る紅い二つ現れた。

「オイオイ……
やべーなこりゃ……」

そして間もなく
彼の前方に、
背中に燃えるような刺を生やし長い尾を引きずった巨大な蜥蜴が、
牙を剥き出しにして現われたのだった。

其の三十六　川に浮かぶ流木になりたい（後書き）

三人娘の
★諸事情ラジオ☆

美希
「諸事ラジ、今日は久々にゲストコーナーでーす」

理沙
「暁楓先生の小説【ＰＨＡＮＴＡＳＹ　ＳＴＡＲ　ＬＹＲＩＣＡＬ　ＩＮＦＩＮＩＴＹ－夜天の英雄－】から、ファラク・レアスさんとリインフォースさんをお呼びしてま～す」

駿
「は！？
ファラクが来んの！？」

泉
「実は暁先生の【ＰＨＡＮＴＡＳＹ　ＳＴＡＲ　ＬＹＲＩＣＡＬ　ＩＮＦＩＮＩＴＹ－夜天の英雄－】とウチの小説はコラボさせて頂いてます！！
詳しくは暁先生の小説で♪」

ガラッ……

ファラク

「ふわぁ……
あ～、眠ぃな……」

リインフォース
「ファラク、挨拶くらいはしっかりしましょう。
はじめまして。よろしくお願いします」

三人娘
「いらっしゃ～い♪」

取り敢えず席につく二人。

ファラク
「お、駿じゃねーや……馬鹿（シスコン）じゃねぇか。オメーもここに居たんだな」

駿
「待てコラ。
何で言い直した？
しかも凄い読みしたからな今」

美希
「取り敢えず自己紹介といきましょうか。
私は花菱美希」

理沙
「朝風理沙だ」

泉
「瀬川泉だよ～♪」

駿
「鷺ノ宮駿」

ファラク
「いや、お前はどーでもいい」

駿
「ハゲろ」

バギッ！！

ファラク
「何か言ったか～？」

駿
「何でもありません……」

駿の顔面に裏拳が炸裂していた。

ファラク
「ま、いっか。
俺はファラク・レアスだ。
暁んトコで主人公やらせて貰ってる」

リインフォース
「私は妻のリインフォース・レアスです。
以前はファラクがお世話になったようで」

駿
「いえいえそんな……は!?
妻!?」

リインフォース
「はい？」

駿
「え、えっとリンフォースさんだっけ？
え？妻って言った今？」

リインフォース
「はい。
私はファラクの妻です。
一年前に結構したんです」

ファラク
「といっても、まだまだ新婚顔負けの雰囲気だけどな。
夜の方もそりゃ……」

リインフォース
「だ、ダメです!!／／／
人様の小説でそんな事!!」
美希
「ラブラブな雰囲気ね」

理沙
「うむ。ピンク色の空間が二人を囲んでいるな」

泉
「微笑ましいね～♪」

駿
「ってちょっと待てェェェェェ！！ファラクてめェェェェェ！！
どういう事だオイ！！」

ファラク
「あん？
何がだよ？」

駿
「いつの間に結婚なんてお前！！
俺達は約束したじゃねぇか！！
いつ如何なる時もリア充撲滅を誓うって！！
それをお前……結婚なんｔ」

ファラク
「んな約束するか！！」

バキッ！！

駿
「ぶべらっ！？」

またも裏拳炸裂。
今度はかなり痛そうだ。

駿
「って待てよお前！！」

ファラク
「復活早っ！！」

駿
「夜の方って……
お前リンフォースさんとあんなコトやこんなコトを……」

ファラク
「ああ、勿論バリバリだ。
それ用の隠し部屋もある」

リインフォース
「ファラク！！／／／」

ガタッ！！

駿
「ぬおォォォォォ！！
リア充なんて爆発しろ！！
つーかもげろ！！首がもげろ！！
毛根死滅しろ！！」

ファラク・リインフォース
「あ……」

駿は負け犬的な捨て台詞を残して放送部を出ていってしまった。

リインフォース
「ファラク、一体彼はどうしたというのでしょう？」

ファラク
「さぁ……」

美希
「駿君はかねてより主人公にあるまじきモテ無さを常に気にしてるからな」

理沙
「友人がモテまくるからより気にするのだろう」

泉
「にはは～？」

美希
「まぁ、そろそろ時間ですから駿君の事は気にせず宣伝を」

ファラク
「お、そうか。
んじゃリインフォース」

リインフォース
「はい！」

ＰＨＡＮＴＡＳＹ　ＳＴＡＲ　ＬＹＲＩＣＡＬ　ＩＮＦＩＮＩＴＹ
－夜天の英雄－

作：暁楓様

ファラク
「ファンタシスターポータブル２とリリカルなのはのクロスオーバーだ」

リインフォース
「私達以外にもリリカル勢、ファンタシスター勢が沢山活躍します！どうか読んでみて下さい」

美希
「では、ファラクさんとリインフォースさんでした～」

理沙
「次回、遂にバトル展開へ！」

泉
「次回もよろしくね～♪」

其の三十七　火蜥蜴退治（前書き）

主人公に１０のアンケート！！
～恋愛編ｐａｒｔ１～

Ｑ．１　恋愛したいですか？

駿
「人並みには」

Ｑ．２　自分はモテる方だと思いますか？

駿
「喧嘩売ってるんですか？」

Ｑ．３　人生で告白された（ラブレターも含む）は何回ありますか？

駿
「……０」

Ｑ．４　告白した事はありますか？

駿
「無いですね」

Ｑ．５　現在恋愛対象として好きな人はいますか？

駿
「いませんね、多分」

Q.６　自分は女の子の好意に鈍感だと思いますか？

駿
「鈍感も何も、女の子から好意なんて向けられてた事無いんで……
ハッハッハッハッ……
あ、やべ……泣きそ」

Q.７　自分の周りにモテる人はいますか？
また、それについてどう思いますか？

駿
「いますね。
友人Tですね。
羨ましいですね、マジで。
いつか爆発して欲しい」

Q.８　もし好きな人が出来たら自分から告白しますか？

駿
「さぁ……
その時になってみないと何とも。でも、多分するんじゃないかな」

Q.９　好きでも無い人に告白されました。どう断りますか？

駿
「そ、それは……

難しそうだな。
でも、やっぱりちゃんと自分の気持ちを伝えて断る……かな？」

Q．１０　自分の周りには美人、可愛い、美少女はいますか？
また、その人の印象を教えて下さい（複数回答可）

駿
「言われりゃ沢山いますね……
妹の伊澄は当たり前ですが、めちゃくちゃ可愛いです。
最強です、はい。
生徒会メンバーも皆美人かな。
ヒナギクはかなりの美少女でしょうね、ファンクラブも沢山あるみたいだし。
愛歌さんも美人ですね、弱点帳は怖いですけどホント。
千桜も綺麗ですね。
話もよく合うかなと思うし。
美希は美少女って感じかな、理沙はミステリアスな美人って感じで、泉は元気いっぱいで可愛いって感じですね。
咲夜も幼馴染みで美少女だと思うけど、ハリセンが痛い。
マリアさんは年上だし綺麗だしメイドで完璧ですよね、怒ると怖いけど……
メイドと言えばサキさんも綺麗ですね、ワタルとラブラブしてますけどね～
まぁ、今思いつく限りだとこんな所かな？
でも総じて言えば普段はそんな事はあんま考えませんね。
まぁ俺の嫁はフローラだけなんで、お父様のお許しも既に頂いてるんで」

お前の悲しい脳内のみでな

駿
「いや、俺の心の中に生きている」

精神科行け。
因みに永遠の一位はｓｏｌａの四方茉莉だから。
彼女こそ僕の心の中に生きていつも笑いかけてくれるから

駿
「オメーも十分病んでるじゃねーか」

長々とどうでもいいアンケートにお付き合い頂き誠にありがとうございました。
取り敢えず著者と主人公は速急に精神科に行った方が良さそうですね。

後書きもよろしくお願いします

其の三十七　火蜥蜴退治

ゴオォォォォォ……

一体どこから吹いてくるのか。
唸るような風が石造りの地面を叩きつけ、駿を通り過ぎてゆく。

「オイオイ……
どこのワ○ダだよ……
巨像かアレ？」

彼は前方から地面を軋ませてゆっくりとこちらに向かってくる怪物、
火蜥蜴を見つめながら口元を僅かにひきつらせる。

《どんな手を使っても良い……
あるもの全てであの火蜥蜴の怪物を鎮めよ……》

「鎮めよって……
刀も何も持ってねーぞ」

《それも含めて何とかせよ……》

「あ、オイ！？」

駿の頭上に響いてきた蜥蜴の声はそれを最期に途絶えてしまった。

「……」

駿は参ったように首を振ると、まだ遠くにいる巨大な火蜥蜴に目を向ける。

火蜥蜴は四足歩行で全長は十数メートルにも及ぶだろう。
尻尾が特に長く、全長の半分程になる。
怪物の背中にはゴツゴツとした棘のような紅い鱗があり、それが両手両足の皮膚にまで及んでである。爪はほとんど無いが、顔にある紅い目がギラギラと怪しく光り口から牙を剥いている。

（あんな化物……
どうしろってんだよ……
とにかく、素手のままじゃ）

火蜥蜴は前方にいるが、まだ駿に気付いていないのかずんぐりと歩行している。
駿は怪物が遠くにいる内に、何とか使えそうな物を探そうとサッと周りを見回す。

（ん……？）

彼はちょうど横に積んであった瓦礫に何かが寄りかかるように置いてあるのに気付いた。
恐る恐る寄っていくと……

（……！？）

それは白骨化した遺体だった。

よく見ると首の骨がボッキリと折れていて、食い千切られたように見える。
もう何百年も前のようで衣服もボロボロで何とか和風と認識出来るかという程。

（死ぬ事も十分あり得る、ね……）

駿の脳裏に蜥蜴の言葉が思い起こされる。

（あながち間違いじゃ無さそうだな……）

駿は嫌な汗を一筋流して遺体を見つめる。
遺体の隣にはその人の所有物だろうか、鞘に収まった刀が無造作に転がっていた。

（これは……）

駿はおもむろにそれを拾い上げて鞘からゆっくりと柄を抜く。
すると驚くべきことに、彼の手元にしっかりとした銀色の刀身が現れた。

（錆びて……ない？）

もしこれがこの遺体の物だとしたら何百年前の物かも分からないくらい古い代物だ。
酸化してとっくに錆びているに違いない。
だが、駿が手にとった物は真新しいとまでは言わないまでも十分に普通の日本刀として通用する。

「この刀……
使わせて貰うな。
仇はとってやっから」

駿は日本刀を手にすると目を閉じて呟く。
その言葉は目の前の遺体に、もしくはこの空間で散っていったであろう全ての人々の無念に語りかけるかのようだった

其の十七　火蜥蜴退治

刀を手にした駿は前方に動く火蜥蜴の方に近付いていた。
勿論真正面からでは無く、火蜥蜴の視界に入らないように瓦礫や巨大な石柱に隠れながら弧を描くように回り込んでいく。

（あんな巨大な化物……
直接刀で斬りつけたところで無駄なのは目に見えてる

だったら……）

駿は地響きをたてながら歩いていく火蜥蜴から距離を取った左側の位置まで辿り着いた。
彼はそのまま火蜥蜴の傍にある一つの石柱に身を潜める。

（思った通り……
この柱は大分傷んでんな）

一旦巨大な柱を見上げてた後、
下の部分を見て駿は軽く頷いた。柱の下の部分は相当な打撃を幾ばくも受けた痕跡があり、ここでかつて同じように試練で怪物が暴れた事が容易に想像出来る。

（この柱なら、もう倒せる……）

柱の影に身を潜めながら、ゆっくりと柱の横を歩いていく火蜥蜴をそっと覗く。

そう。駿はこの巨大な柱を倒して火蜥蜴を下敷きにしようと考えたのだ。
この柱から火蜥蜴までは１０ｍほど距離はあるが、柱は全長１０ｍ以上あるので上手く倒せればちょうど火蜥蜴に背中のあたりに直撃することになる。

１０ｍ以上ある巨大な石柱を人間が倒す事など不可能に近いが、だからこそ駿はこの柱を選んだ。
この柱は他の柱より明らかに傷んでおり、特に下の方はかなり削れていたのだ。
だからといって、やはり普通の人間に倒せる重量では無いのだが。

「……」

彼は柱で一番傷付き抉れている部分を見つめ拾った日本刀の柄に手をかけ……

「！！」

刀を振り抜き柱を横に一閃した。

鈍く鉄が岩に擦れる摩擦音がしたかと思うと、
ギシギシと軋みながら、巨大な石柱がゆっくりと駿とは反対方向に傾き始める。

（よし……！！）

しかし同時に、もう一つの鈍い音が響いた。

（っ……！！
やっぱり折れたか）

それは刀の折れた音。
駿が使った刃は先から折れて欠けてしまったのだ。
やはり普通の日本刀、しかもどのくらい古い刀なら当然だろう。

（でもこの分なら……）

駿が距離を取る間も柱はどんどんと傾いていく。
そして……

ドオォォン！！！

『グオォォ！？』

そして計算通り、石柱は倒れて火蜥蜴の背中に直撃した。
物凄い轟音と火蜥蜴の呻き声が大気を振動させる。

「やったか！？」

駿は砂塵の巻き起こる中、様子を伺おうと柱が直撃した場所に近づいていく。

『ルオォォォォオオオ！！！』

「！？」

その瞬間……
鼓膜を突き破かんばかりの咆哮が地を揺らした。
柱が倒れた場所の砂塵が吹き飛び火蜥蜴が姿を現す。
駿は本能的にその場所から距離を取り後ろに退いた。
それとほぼ同時
駿の前方、火蜥蜴の周りにあった石柱は一気に薙ぎ倒され、一瞬で消し飛んでしまった。

火蜥蜴は自分を軸に回転し、その長い尾を振り払ったのだ。
その威力や言うまでもなく、その範囲も相当なもので、距離を取っていた駿へも物凄い風圧が襲いかかってきた。

「……っ！！」

駿はあまりの圧力に思わず片膝をついて前方の怪物に目を向ける。
火蜥蜴は無傷。
背中にあの巨大な石柱が直撃した筈だが、火蜥蜴の背中はゴツゴツとした棘のような鱗に甲羅のように覆われていて、それが防御の役割を果たしたのだろう。

とてつもなく重い石柱が直撃しても無傷な背中の防御はまさしく鉄壁というに相応しい。

（やべーな……
傷一つ付かねぇとは
それにあの尻尾の攻撃……
当たったら洒落にならねぇ）

たった今、火蜥蜴が凪ぎ払った尾の攻撃を目の当たりにした駿。
もしあれを直接受けたら、まず間違いなく死ぬだろう事は誰の目にも明白だ。

『ウウウ……』

「……」

砂塵から火蜥蜴が顔をあげた時、その禍々しく紅い瞳が駿の姿をは

っきりと捉えた。

『ルオォォォォ！！』

「っ！？」

途端、咆哮をあげてこちらに向かってくる火蜥蜴。
その動きは巨大故に決して機敏なものでは無いが、逆にその巨大さ故に一歩一歩が大きく、モタモタしていたらあっという間に目の前までやって来てしまう。

「こんなトコで死ぬのだけは勘弁だぞ……！！」

駿は慌てて折れた刃を拾い、欠けた刀身を鞘にねじ込むと火蜥蜴から距離を取るために駆け出した。

伊澄は縁側に座ったまま夜空に浮かぶ月を眺めていた。
夜風が彼女の綺麗な黒髪をさらい、その容姿は闇夜に光り輝いているかのように美しい。

両手を重ねるように手を置いて、目を閉じながら身をまかせるその様はまるで一枚の絵画のようだ。

ガラッ……

「あ……
翼様……」

すると、彼女の座っている縁側の後ろの扉が開き翼が姿を現した。
伊澄は目を開けて振り返る。

「お兄様は……？」

「ようやく眠ってくれたよ。
アイツ寝間着だけはいつも使ってたブカブカのやつじゃないと眠れないみたいだ」

「どこかにお兄様の記憶が残っているのかもしれませんね……」

翼がやれやれと溜め息をつくと、伊澄はクスリと笑って答える。

「でも、伊澄ちゃんはどうしてこんな所に？」

「ええ……
少し空を見たくて……」

伊澄はどこか寂しそうに呟くと、また夜空に目を向ける。

「駿が心配かい？」

「そう……ですね
何やら胸騒ぎがしたので……」

翼が隣に腰を降ろすと伊澄はゆっくり頷いて胸元に両手を重ねてみせる。

「胸騒ぎ、か……
俺にはさっぱりだこど…
やっぱり、兄妹だとそういう事も分かるのかな」

「どうしょうね……」

夜空を見つめたまま薄く口元を緩める伊澄。
星と雲そして月が浮かんでいる闇夜に、何か別のものを見出だそうとするかのように。

「さて……」

暫く見上げていた伊澄だが、不意に立ち上がって裾を直した。

「外は寒いですから……
居間に戻りましょうか」

「ん、そうだな」

翼も同じように立ち上がり、一旦伸びをすると屋敷の中に歩いていくのだった。

「はぁ……はぁ……」

時折地響きが鳴りながら軋む地。その地鳴りから距離を取った場所にある瓦礫の影に、駿は隠れていた。荒い息を整えるように胸に手を置いて深呼吸を一つ。

（取り敢えず……
後ろはとったが……）

先程火蜥蜴に見つかってから、彼は全力で逃げ続けた。
石柱や瓦礫、岩盤の影を上手く使いながら隠れ火蜥蜴を撹乱すると同時に体よく敵の後ろに回り込むことに成功。
現状に至る。

（後は……
上手く動けりゃ良いんだが）

彼が後ろを取ったのにはちゃんと考えがあった。

逃げながらまず思った事は、火蜥蜴のあの強力な尾についてだ。
無闇に近づき当たれば勿論ただては済まない―下手をすれば即死だろう―上に思いきり振り払われると柱や瓦礫も崩され隠れる場所も無くなってしまう。

だから、まずはその尾を潰してしまおう考えた。
幸い尻尾には何の鱗も無く、防御は最薄だ。

柱を尾に直撃させれば、まず間違いなく潰せる。

その為に柱の倒れる向き、速度、距離の計算を念頭に置きながら上手く火蜥蜴の後ろに回り込んだのだ。

（よし……
もうちょい左側に行けよ…）

柱は人間の手で倒せるものでは無いので火蜥蜴自身に倒させるという作戦に決めた。
火蜥蜴が尻尾を振り払った時に、倒した柱がちょうど尾に直撃するように。
ただこれは彼自身リスクも高く、もし尾の攻撃に当たっては元も子もない。
上手く避けつつ、尻尾を振り払わせなければならない。

（もう少し……）

自分が計算した位置に火蜥蜴が入るまで後ろで身を潜める駿。

（もう少し……
もう少しだ……）

そして、火蜥蜴が更に左側に前足を踏み出した瞬間……

ダッ……！！

駿は後ろの瓦礫から飛び出し、火蜥蜴に向かって走っていった。
ある程度まで近付くと、地面に落ちていた岩を拾い上げ……

「よっ……！！」

火蜥蜴に向かって投げつけた。
ダメージなど全く無いだろうが、当てられた火蜥蜴は気づいてゆっくりと後ろに顔を向ける。

「聞こえてっか化物！！
俺はここにいんぞ馬鹿！！ハゲ！！
次いでにオメーの管理人もハゲ！！」

『ウゥゥ……』

駿が大きな声で悪口を叫ぶと、獲物を見つけた火蜥蜴は尻尾を垂らして身を屈める。
攻撃の構えだ……

「っ……！！」

それを見た駿は速攻でその場から駆け出した。
出来るだけ距離を取らなければ巻き込まれてしまう。

『ルオォォォォ！！！』

間もなく、火蜥蜴は咆哮しながら尾を豪風の如く振り払った。

「がっ！？」

駿は尾の直撃は免れたものの、爆風のように強力な風圧と衝撃に、背中を突飛ばされ地面に叩きつけられてしまった。

そして巻き起こる大砂塵。

直ぐに受け身から駿は起き上がるも視界は全て砂嵐に塞がれ、前方が見えない。

『グオォォォォォォォォォォ！！』

しかし次の瞬間、

火蜥蜴のものと思われる鈍く重い呻きが大気に木霊した。

それはまさしく悲痛な叫び。

（よし……

尾に直撃したな）

駿は腕で吹き付ける砂煙を防ぎながら、手応えを感じて火蜥蜴の方向を睨む。

後は砂塵が引くのを待って……

（？）

不意に……
駿は聞き慣れない何か別の音を耳にした。
それは火蜥蜴の方向から聞こえてくる。

（！？）

そう思った時、
火蜥蜴を包む砂煙はあっという間に消え去った。
そこに現れたのは、確かに尾が石柱の下敷きとなっていた火蜥蜴の姿ではあったが……

（っ……！？）

その火蜥蜴は、なんと口から火炎を吹き出していたのだ。
豪々と音をたてて火炎を放射し、自分の周りの砂塵を消してゆく火蜥蜴。

「なるほど……
火を吹く蜥蜴だから火蜥蜴……
ホントに化物だなオイ」

駿は前方で火を吹き出している蜥蜴を見て頬をひきつらせる。

（尻尾は潰したが、また厄介なモンが増えやがった……）

火蜥蜴の尾は倒れた石柱により潰されていたが、火蜥蜴はそれを自ら切断したようだ。
ただ何かに怒りをぶつけるかの如く、火炎を放射している。

『ウウウ……！！』

「ん？」

すると、怒り狂う火蜥蜴の瞳が再び駿の姿を捉えた。

「また見つかっ……」

『グオォォ！！』

駿は再び距離を取ろうとしたが、なんと火蜥蜴が口を開けて、そこから巨大な火炎の玉を噴射したのだ。

「な！？」

これは流石に予想外。

大きな火炎が駿に向かって一直線に突っ込んでくる。

「オイオイ……
これやべぇ」

ドォォォォォォォン！！！

言葉が終わらぬ内に、

巨大な火炎の玉は駿の居た地面を丸ごと飲み込むように大爆発したのだった……

ピキッ……！！

「「！？」」

居間に座っていた伊澄と翼は、ちゃぶ台の上に置いてあった湯呑みに燁が入ったのに気付いた。

「驚いたな。
いきなりひびがはいるなんて……ちょっと、湯呑み替えてくるよ」

「あ、はい……」

翼は少し驚いたようだったがすぐに苦笑すると、燁が入った湯呑みを持って居間を出ていった。

しかし伊澄は明らかに不安を感じたのか胸に手を当てると、宛も無く天井に目を向ける。

「お兄様……？」

其の三十七　火蜥蜴退治（後書き）

思いきりバトルパートでした（笑）前回までのギャグはいずこ？

今回は火蜥蜴退治でしたが、
敢えて分割しました。

まぁ二つくらいに分けた方が良いかなと思いまして。

それでは、次回もよろしくお願いします♪

其の三十八　自分が自分として過ごす日常に意味を持つ為に人間は生きていく。

今回でようやく蜥尾の呪いが終わりです。

次回からは原作介入を突っ切っていきます！

よろしくお願いします♪

其の三十八　自分が自分として過ごす日常に意味を持つ為に人間は生きていく。

蜥尾内部……
石柱が立ち並び、瓦礫や岩盤が転がる遺跡のような場所。

その一角に巨大な蜥蜴が堂々と身を置いていた。
その身体は焦げたように黒く、背中は棘のような鱗で覆われ橙色に燃えるように発火している。
四肢は同じように鱗に覆われ地面を踏みつけ、その尾は切断されたのか途切れていた。

側には巨大な尾が倒れた石柱に潰されていた。

『グルルル……』

火蜥蜴が向ける顔の先には、真っ黒に焦げた地面がただただ広がっていた。
柱は煤だらけで崩れ落ち、瓦礫は全て溶かされ粉々に。

まるで爆弾でも投下されたような無惨な景色。
そんな場所に人影など、ある由も無かったが……

「はぁ……はぁ……」

真っ暗な空間。
だが、水の流れる音がはっきりと聞こえる。

先程の遺跡とはまた違った場所で、鷺ノ宮駿は座り込んでいた。
彼は和服が破かれ血が滲む左肩を押さえながら、荒い息を整えようとしている。

「……はぁ」

彼の上は四角い穴が開いていて、そこから僅かに明かりが差し込んでいる。
その穴を見上げると、先程までいた遺跡の石柱がいくつか見えた。

そう。ここはあの遺跡の地下。
駿は今、その地下に身を潜めているのだった。
地下と言ってもその高さはあまり無く、せいぜい遺跡から地下２ｍ半くらいといった所か。
造りは地下水路の洞窟によく似ている。

「ヤバかった……
今回はホントにヤバかった。
死んだかと思った。
走馬灯的なイメージが脳裏に流れ始めてた……」

何故駿がこんな場所にいるのか。実は火蜥蜴放った炎が当たる直前、逃げようとする駿の足元の石タイルが少し浮かび上がっていた。駿は慌ててそれを剥がして、間一髪、その中に飛び込み難を逃れたのだ。

「あ～、運が良いのか悪いのか分かりゃしねぇ」

彼は怪我を押さえながら恨めしげにそう呟く。

「つーか……
この地下、何か水の音が」

先程遺跡を駆けていた時にも気付いていたが、地下に落ちてからはよりはっきりと水の音が聞こえてくる。

（……ん？）

よく目を凝らすと、
真っ暗だが、上から漏れる僅かな明かりのおかげで何とか周りが見えてくる。
彼が座り込む前には、石造の大きな筒が横たわり、永遠と両方の方向に続いているのが分かった。

（これは……）

ゆっくりと目の前の岩石の筒に手を置くと、その手には微細ながら何かが流れる振動が。
耳を近付けると水の流れる音が。

（水道管、か……）

よく考えた結果、彼はそう結論を下した。
そう。これは水道管。
遺跡の下にはこんな巨大な地下水道が張り巡らされていたのだ。

大きさにして、東京都内の地下にある水道管の倍以上。
石造のこのような巨大で且つ精密な設計など近代文明の我々には考えられない技術である。

（しかし、何でまた地下水道なんて……）

駿は顔の煤を手で払うと、水道管を軽く手で叩きながら思案を巡らせ始めた。

（水道……水……
……ん？）

駿は目を細めていたが、不意に何かを思い付いたように目を見開いて石造の筒を凝視した。
そして額に手を当ててもう一度目を細める。

（だとしたら……
最大の問題はタイミング、だな……）

彼は自分の頭上、四角く開いた穴から地上の遺跡を見上げる。

「仕方ねぇ……
あと少し動きますか……」

彼はもう一度頬の血を拭うと、ゆっくりと息をついた。

其の十八　自分が自分として過ごす日常に意味を持つ為に人間は生

きていく……これテストには出ないよ

駿は腰にしっかりと日本刀を携え直すと、地面に開いた穴からゆっくりと地上の遺跡へと頭を覗かせた。

『……』

駿の視線の前方には火蜥蜴の姿。それは後ろ姿で、どんどんと離れていっているようだ。
獲物を消したと慢心しているのだろうか。

だが、これは好機とばかりに駿は地下から姿勢を屈めたまま遺跡の石造の地面に這い上がる。

（よっと……）

這い上がった彼は、たった今自分が上がってきた地面の周りに手をかけた。
そして開いた穴の周りの地面のタイルを持ち上げていく。

そして幾らかタイルを持ち上げ脇に退けると、先程より地下がはっきりと見える程の大きさの穴になった。
先程は人一人のギリギリの幅だったが、今は人二三人分の幅にはなっただろうか。

（これで良しと……
後は……）

駿は息をつくと、作業を終えた地面から視線をゆっくりと離れていく火蜥蜴の後ろ姿に向ける。
火蜥蜴は後ろの駿には全く気付く様子が無く、地面を踏み鳴らしながら歩いていた。

（上手く距離を取る必要があるな）

駿は立ち上がると、火蜥蜴の方向に向かって駆け出した。
前方に一直線には向かわず、怪物に向かって横に横に回り込むように走る。
柱と柱の間を駆け、瓦礫や岩盤を飛び越しながら火蜥蜴に横から迫ってゆく。

そうして、遂に駿は火蜥蜴の進路前方に先に回り込んだ。

「よぉ、怪物」

『ウゥウ……』

火蜥蜴の前の瓦礫から姿を現した駿。
前の怪物を見上げて口元を緩めると、巨大な瞳は憎々しげに彼を見下ろしてくる。
殺した筈の獲物が生きていてはそれは面白くないだろう。

『ルオォォォォ！！！』

「おー、おー
えらい歓迎ぶりだなぁオイ」

火蜥蜴は上空に向かって高らかに咆哮を上げると、駿の方に向かって四肢を振り上げ迫ってきた。
駿はそれを見て、先程とは逆方向に回り込むように駆け出す。

『グオォォ！！』

それを追いかけるように怪物は地面を鳴らし、彼は揺れる大地に時折躓きながらも追い付かれないように走ってゆく。

『グオォォォォ！！！』

「うおっ！？」

火蜥蜴は追いかけながら口から火炎を放射する。
先程の球体では無く、文字通り放射状に吹き出る火炎。

上手く計算された距離を保っていた駿は何とか避けられたが、

「い！？
服が焦げた！！」

羽織の裾に飛び火が当たり見事に焦げ目がついてしまった。

「あ～、また怒られる……
テメー、倍返しにしてやるからなコノヤロー」

『グオォォォォ！！』

彼の愚痴など露知らず、火蜥蜴は咆哮を上げながら牙を剥き出しに獲物に迫り来る。
逃げる駿と追う火蜥蜴。
火蜥蜴は前足を振り上げ潰しにかかろうとしたり、火を吹いて焼き殺そうとしたり。
駿は大きな足を転がって避け、火は近くの石柱や瓦礫を盾に逃れてゆく。
暫くはその繰り返し。

そんな構図が終わりを迎えたのは、駿が先程地下に落ちた場所に戻ってきた時だった。

「ふぅ……」

駿は追ってくる火蜥蜴から一気に距離を取り、地下へ穴が開いた地面の側まで来た。
そこで立ち止まると、逃げるのを止めて前方から来る火蜥蜴を見据える。

『ルオォォォォ！！』

一気に距離を取られた火蜥蜴は駿に向かって口から炎の球体を吹き出してきた。

豪々迫り来る炎。
駿はそれをギリギリまで自分の元に引き付けて……

「よっと……！！」

先程自分が持ち上げて広げた穴に飛び込んだ。
彼はそのまま地下に落下する。

そして帯刀していた鞘から欠けた刀を抜くと、目の前の水道管にゆっくりと押し当てた。

「さぁ、来やがれ怪物
終幕といこうじゃねーか」

彼は地下から上を見上げる。
最初は明かりが漏れていたが、暫くすると強い地響きとともに暗くなっていった。

それはよく見ると火蜥蜴の下顎の部分。
そう。火蜥蜴は先程殺したと思った獲物が生きていた為に、今度は火を吐いた後もその場に確認しにきたのだ。

結果……
地下にいる駿のちょうど真上に火蜥蜴がやって来た事になる。
真上にある穴からは火蜥蜴の下側が見える。

（まだだ……
もう少し……）

穴から見える火蜥蜴の下顎は首の部分に移動した。
駿は刀を両手で握りしめ、黙って地下からそれを見上げている。

（…………）

首から胸の裏側の部分。
彼はギュッと柄に力を込めた。

そして真上にきたのがちょうどお腹の部分になった時……

（今だっ！！）

駿は欠けた刀を大きく振り上げ、

「突貫！！！」

思いきり水道管に叩きつけた。
次の瞬間……

ドオォォォォォォォォォォォォォォォォォン！！！！

爆発音のような轟音と共に、地下から地上に水が噴水の如く噴射された。
地下の水道管を駿が破裂させたのだ。
噴水はとてつもない勢いで開いた穴から立ち上る。
しかし穴の真上には当然火蜥蜴のお腹があるので……

『グオォォォォォ！？』

噴水は火蜥蜴の腹部に直撃。
そのあまりの勢いと衝撃に、怪物は堪える事が出来ずに浮きあげられてしまう。

『ォォォォォ！？』

勢いよく突き上げられ、そのまま絵に描いたように背中から地面に叩きつけられひっくり返ってしまった。

「っ！！
予想以上に水圧が強ぇな、どんな技術だよあの水道管！！」

そして、地下の地面からずぶ濡れの駿が咳き込みながら這い上がってきた。
彼の右手には日本刀では無く、折れた刃が。
その為手の平から血が滴り痛々しくあるが、そんな事はお構い無しに駿はひっくり返った火蜥蜴に向かって駆けていく。

『ルォォォォォ！！！』

「っ！！」

起き上がろと叫ぶ火蜥蜴。
その腹部に駿は刃を突き立ててよじ登っていく。
さながらロッククライミングのように。

『グォォォォォ！！』

「いいっ！？」

それを振り落とそうと倒れたまま揺れる火蜥蜴。
しかし駿は落とされまいと必死に刃を握りしめ食らい付く。
その度に手からは痛々しい血が流れ出る。

「くっ……！！」

それでも何とか歯を食い縛り、彼は火蜥蜴の胸部に辿り着いた。
ひっくり返ったままなので、ちょうど胸部が頂上という事になる。

『ルオォォォォ！！！』

「っ！！」

最期の抵抗。
火蜥蜴はやられまいと必死に身体を揺らした。
駿は左手に全力の力を込めて捕まりそれに耐えると、右手を思いきり振り上げ……

「おおおおおお！！！」

心臓に向かって刃を突き刺したのだった……

「……！」

真夜中……

鷺ノ宮屋敷の居間。

そこには初穂と彼女の膝の上に乗った悪熊がいた。

『初穂さん……？
どうしたの？』

「ジュン君が……
帰ってくるわ……」

『……え？』

初穂は不意に天井を見上げるとはっきりとした口調でそう呟く。

「クマちゃん……
ジュン君の所にいてあげて
伊澄ちゃんもついていると思うから」

『う、うん……』

彼女の真剣な口調に、悪熊は頷いて膝の上から降りるとそろそろと居間を出ていった。

「お疲れさま……“駿”君」

それを見届けると、
初穂は再び天井を見上げてゆっくりと微笑んだ。

「ぜぇ……ぜぇ……」

遺跡の瓦礫。
そこに駿は寄りかかるように座り込んでいた。

右手には着物の裾を切って包帯のように巻き付けてあるが血は滲む出ている。
羽織はかなり破けていて、肩からはやはり血が滲んでいる。
顔にも斬り傷がいくつもある。

「あ～、しんどかった……」

駿は瓦礫に身を預けるとどこにともなくそう呟く。

『ご苦労じゃったな』

「……ん」

すると、彼の横にゆっくりと旧英国式の服装をした蜥蜴が寄ってきた。

「これで……
試練は合格なんだよな？」

『うむ。
貴様をこの蜥尾に相応しい使い手と認めようぞ』

「そりゃ、どうも…」

蜥蜴はそう言って駿に手を差し出すと、彼は微笑してその手を握り返し立ち上がった。

二人はお互い相手を認めあったように向かい合う。
これで駿も蜥蜴も互いに……

『いや～、本当に助かったぞ。
ここの化物を倒してくれてありがたい』

「……あ？
ちょっと待て。あの化物はアンタが創り出したんじゃないのか？」

『あー、アレは嘘じゃ』

蜥蜴はケラケラと愉快そうに笑うと、歩き始めた。

「嘘！？」

『ああでも言わないと貴様は退治しとくれんじゃろ』

「何でそんな事を……」

駿は蜥蜴の後を追いながらその理由について尋ねる。

『実はのぅ……
この空間にワシの宝を隠しとったのじゃが、ある日から火蜥蜴の怪物が住み着いての。
ワシではどうしようも無いので試練って事で貴様に退治して貰ったのじゃ』

「あ……？」

『そうそう。
ここじゃ』

蜥蜴は立ち止まるとある地面を見つめて屈む。
そしてその地面のタイルをゆっくりと剥がした。

『おー♪
ようやく帰ってきたか。
ワシの宝物♪』

そして蜥蜴がその地面から取り出したのは、ビニール袋に入ったＤＶＤだった。
その色はピンク色の、所謂アダルトＤＶＤだ。

『いや～♪
良かった良かった。
これで淫らな保健室シリーズが全て揃ったわい』

「……」

『どれ、退治してくれた礼じゃ。貴様も一緒にどうじゃ？』

蜥蜴は駿に向かってクックックッと笑い始める。

『いや～♪
この第三巻は最高傑作での。
日本でも五本指には……』

駿は右手の拳に全ての力を込めて……

「我が○断を感じろォォォォォォォォォォォォォォォ！！！」

『ラストエ○ペラー！！！』

蜥蜴にＭＡＸのアッパーを食らわした。

カッ！！

次の瞬間、駿の目の前は一気に真っ暗になった。

「はっ！？」

真夜中の鷺ノ宮屋敷。
そのある部屋で鷺ノ宮駿は目を覚ました。

「……？」

周りをキョロキョロと見回すと、そこは駿の自室だった。

「あ、あれ……
もしかして……」

駿は自分の着ている服に目を向けると、先程までの戦闘装束から寝間着に変わっていた。

（元に戻った……のか？）

フと気付くと、彼の布団には伊澄がもたれかかって眠っていた。
夜中にも関わらず駿についていてくれたのだ。

（……戻ったんだな）

それを見た駿は蜥尾から現実世界に戻った事を確信した。

「ありがとう……

それと心配かけてごめんな
伊澄」

「すぅ……」

駿は微笑むと寝息をたてる伊澄の髪を優しく撫でてあげる。
心無しか伊澄は安心したような表情になった。

「ん……？」

よく見ると、伊澄の隣には悪熊も寄り添うように横になっている。

（ったくコイツは……
俺の命を狙ってんじゃねーのかよ……）

駿は呆れたように息をついたが、だが少し口元を緩めて悪熊の頭を撫でてあげた。

「……」

駿はゆっくりと二人を起こさないように立ち上がると、部屋の奥にある紅い日本刀の蜥尾の前まで歩いていく。

「妖刀だろうが何だろうが、
これからは遠慮なく使わせて貰うからな」

彼がそう語りかけると、闇夜にも関わらず蜥尾はキラリと答えるように光ったのだった……

翌朝……

元に戻った駿の吉報は悪熊によって屋敷中に広まった。
一同は朝早くにも関わらず居間に集まる。

駿は皆集まった所で、開口一番謝罪とお礼を口にして頭を下げた。
彼には幼児化間の記憶が無く、現実世界でどんな事が起こったかわからなかったが心配や迷惑をかけただろう分、しっかりと頭を下げた。

伊澄はまず安堵して涙ぐみ、かと思ったら怒って、そして喜んで駿に抱き着いた。
駿はコロコロと変わる伊澄の様子に困ったようにオロオロしていたが、それでも伊澄の元に戻ってこれた事に安心していた。

翼も安堵したようで、駿には何故彼がここにいるかわからなかったがきっと迷惑をかけたのだろうとお礼と謝罪をし、詳しい話は学校に行くまでに聞く事にした。

悪熊は『ずっと幼児のままなら良かったのに』と憎まれ口を叩いていたが、それでも喜んでいる事は見え見えだ。

初穂は微笑んで『お帰りなさい』とだけ言ってくれた。
何も言わなくても大丈夫と、その笑顔は語っていた。

九重も『良かった良かった』と喜んでくれたし、執事の人達も安心して喜んでくれていた。
無論、伊澄の迷子パワーが収まるという喜びも含めて。

銀華からは色々と怒られ説教は受けたものの、それは心配をしての事だと分かっていたし、最後には『よく戻ったの』と言って肩を叩いてくれた。

こうして……
一つの妖刀から生じた一連の騒ぎは幕を閉じ、
鷺ノ宮駿が鷺ノ宮駿としての日常が戻ってきたのであった。

其の三十八　自分が自分として過ごす日常に意味を持つ為に人間は生きていく…

主人公に１０のアンケート！！
～恋愛編ｐａｒｔ２～

駿
「まだやんの？」

飽きるまでやる

Q．１　好きな女性の髪型は？

駿
「う～ん……
まぁ、セミロングの髪型とかポニーテールとかかな」

Q．２　好きな女の子と付き合ったとして、髪型がロングヘアーとショートカットだったらどちらにして欲しいですか？

駿
「どっちも良いと思うよ。
女の子が自分でこの髪型が良いと思ったのならそれが一番素敵なんだと思うから」

ちっ、凡回答かよ。
まぁいいや、次

駿
「聞こえてんぞナレーション」

Q　３　巨乳と貧乳、どちらが良いですか？

駿
「巨乳で」
→
即答

Q　４　【Q　３】の回答の理由は何んですか？

駿
「そりゃお前……
【ピ――――――――――――――――――――（完全自主規制）】
だな、うん」

Q　５　どんな性格の女性がタイプですか？

駿
「清楚でおしとやかな感じも好きだけど、最近は明るくて自分の意見がはっきりしている人が良いなって思ってるかな。
一緒にいたいと思えるのが一番だけど」

オエっ……キモいな
まぁ、次にいこう

駿
「悪意しか見えないナレーション」

Q. 6　両想いだとして、告白はする方？されたい方？

駿
「完全に喧嘩売ってるよこのアンケート。徹底的に俺を痛めつけるつもりだよ、精神的に」

早く回答、なぅ

駿
「多分……する方だと思う」

Q. 7　積極的な女性と控えめな女性、どちらが良い？

駿
「どっちもそれぞれ良いと思うけど……どちらかと言うと積極的な方かな。積極的過ぎるのはちょっとアレだけど、良い意味で積極的ならそっちの方が良いかも」

Q. 8　恋人とのデート。
手を繋ぐ？腕を組まれる？

駿
「ありもしない幻想を考えても悲しくなるだけなんだけど……

まぁ、一緒にいられるならどっちも良いと思います」

無理無理。妄想止まりだよ

駿
「アンタが聞いたんでしょ！？」

Q. ９　恋人が泣いています。
あなたはどうしますか？

1. 優しくそっと抱きしめる
2. 声をかけて慰める
3. 一人にしてあげる

駿
「時と場合によるでしょう……
つーか答えるの恥ずかしいんだけど」

Q. １０　今までの質問をまとめて、自分の周りの女の子の中では
誰が一番恋愛対象のタイプですか？

駿
「ノーコメント」

回答ありがとうございました。
次回もよろしくお願いします

其の三十九　最近の主人公って不幸体質が多い気がする（前書き）

伽藍
「いくらかアンケートをストックしていますが、こんな編のアンケートがいいというのがあれば遠慮なくいって下さい。
こっそり受け付けてます」

駿
「んじゃ、ようやく職場復帰だな」

伽藍
「多分サブタイトルと関係あるかなと……」

駿
「では、始まります！！」

其の三十九　最近の主人公って不幸体質が多い気がする

「白夜ァァァァ！！
会いたかったぞォォォォ！！」

朝の鷺ノ宮家。
鷺ノ宮駿は居間で白い日本刀
“白夜”をひしっと抱き締めて叫んでいた。

駿の呪いが解けた朝。
伊澄や翼、銀華に喜ばれたり怒られたりして言葉を交わして、
家族と翼に一同で朝食をした。

その後、銀華から『白夜が直った』と居間に白夜を持って来て貰ったのだ。

「このまごう事なき白！！
よしよし、寂しかったか白夜！！」

駿はようやく戻ってきた刀に感動していた。
今回の妖刀の呪いの件もあり、白夜に頼もしさがよりはっきりしたのだろう。

「日本刀と抱き合うな阿呆。
気味が悪いわ」

「ハハハ……

でも良かったな戻ってきて」

同じく居間にいた銀華と翼はその様子を呆れたように眺めている。

「ま、これからはもっとちゃんと手入れをしてやるのだぞ」

「ああ、そうだな。
分かってるさ」

銀華の言葉に駿は頷きながら白夜の鞘を撫でる。

「でも、白夜は帰ってきたけど。あの妖刀はどうするんだ？」

「ん？
ああ、両方使おうと思ってる」

「二刀流、か？」

「まぁ、簡単に言えば。
別に毎回二刀一緒に使う訳じゃねーけど、あの蜥尾はとにかく軽いんだよ。
妖怪が多いときは二刀の方が効率良く戦える」

駿は暫く白夜を眺めていたが、
立ち上がると翼の言葉にそう返した。

「ま、お前は元々二刀の方が適しているタイプだからの。
二刀にしやすい刀が手にはいったならその方が良かろう。
だが……」

銀華はそう言いながら歩いていくが、居間から出る前に立ち止まって駿を振り返った。

「今回のように、また何があるかは分からぬ。くれぐれも気をつけておけよ」

「分かってら」

「ならば良い」

銀華は息をつくと、縁側から庭のほうに飛び出していった。

「んじゃ、俺達は学校に行こう。もう四日も休んでんだから、生徒会に顔出さねーと」

「そうだな……あ、でも俺が呪いを受けてる時のこっちの様子って……」

「それも含めて登校中に説明してやるよ。ほら、行こう」

立ち上がって居間を出ていく翼の後を追うように駿も続いて居間から出ていった。

「そういやまた伊澄ちゃんを怒らしたんだって？」

「いやさ……どれだけ心配したと思ってるんだって怒っちゃって……」

どうやら伊澄はまた怒ってしまったようである。
そんな訳で彼女の登校は鷺ノ宮家の執事達に頑張って貰う事に。

其の十九　最近の主人公って不幸体質が多い気がする

「ぐあっ……
マジでか」

「マジだよ」

白皇学院までの登校中。
翼から現実世界での話を聞いた駿は手を額に当てていた。

姿が幼児化した事。
中身も幼児のままだった事。
生徒会でお世話になったり、咲夜にお世話になったりした事。

次いでモテモテだった事。

「生徒会って……
もしかして事情は皆知って？」

「いや、事情を知っているのは愛歌さんだけだよ」

「そ、そうか……
それは良かっ……って愛歌さん！？」

駿はホッと安堵したように一息つこうとして、慌てて翼に顔を向ける。

「そうだが……
どうかしたのか？」

「どうかしたのかってお前……
弱点帳が」

「ああ……
楽しそうに何か色々書かれていたな」

翼の言葉にガックリと肩を落とす駿。彼女の“楽しそう”は＝“サディスティック”になるのだ。

「まぁ良いじゃねーか。
お前の場合、今更弱点が一個や二個や十個増えた所で変わらんだろ」

「フォローなってねーんだよ」

恐るべきは弱点帳。

「それはそうと、愛歌さんも誤魔化すのに協力してくれたんだからちゃんとお礼を言っとけよ」

「分かってるよ」

「それに……」

翼は更に付け加えるように人差し指をたてて見せる。

「愛沢家のお嬢さんも幼児化したお前を随分面倒みてくれたんだから、本人にしっかりお礼をしとかないと」

「あ～、はいはい……
って、ちょっと待てよ？」

歩きながら駿は頭に何か過ったように首を傾けれと、

「お前……
咲夜は俺が幼児化したことは言って無いよな？」

恐る恐るそう尋ねた。
さっきは咲夜に世話になったとだけしか聞いていない。

「いや……
伊澄ちゃんが言ってたよ」

「マジでか……」

嫌な予感的中とばかりに表情をしかめる駿。

「別に良いじゃねーか。
ちゃんと理解もしてくれてお前を預かってくれた上に、翌日なんて学校を休んでまで引き受けてくれたんだぞ彼女」

「いや……
これをネタに弱みを握られる事山の如しだ」

翼の言葉とは正反対に駿は溜め息をついて額に手を当てる。

「お前……んな事言ったらバチが当たるぞ？
あんなに親身になってくれたのはお前が大切だからだ。
幼馴染みだろ？」

「分かった分かった。
俺が悪かったよ。
ちゃんとお礼も行ってくるから」

真剣なその言葉に駿は折れたのか頷いてみせる。
翼はこういう義理や人情事になると熱くなる性分のようだ。
駿も慣れているのか反論はしようとはしなかった。

「後、姉さんにも一応世話に……いや、アレはコキ使われただけかな？」

「何!?
弥生さんにもご迷惑を!?」

また付け加えるように口を開いた翼だったが、駿はそれにいち早く

反応した。

「いや、迷惑は寧ろこっちが…」

「それは一大事だ。
すぐに弥生さんの喫茶店にご迷惑をおかけした謝罪とお世話になったお礼を申し上げに行かねば。
そしてティータイムに弥生さんとのお話に華を咲かせねば
よし、今から行くか」

「待てい」

クルリと通学路から背を向ける駿の首根っこを掴む翼。

「んな挨拶は学校が終わってからで良いだろ。
つーか何でそんなに態度が変わるんだよ」

「馬鹿オメー、報告が遅れたらそれだけ信頼が失われちゃうだろ？
弥生さんの俺に対するイメージが……」

「変わらんから安心しろ。
姉さんはそういう事は気にしない性格だから」

翼の手から離れようともがく駿を呆れたように宥める。
でもジタバタとする駿（バカ）

「小学生かお前は……
それより、早く学校行くぞ」

「うお！？

ちょっ、引きずるな!!
首が締まる!!」

翼は本日何度目かの溜め息をつくと、彼の首根っこを掴んで無理矢理白皇に連れていくのだった……

そんな感じ白皇到着。

「……あ」

「あん？」

相変わらず引きずられっぱなしの駿だったが、
正門をくぐった所で何かに気付いたように声を上げる。
何事かと翼は彼を振り返るが、

「あ～、お前先に生徒会行っててくれ」

「何かあったのか？
もしかして逃げようと？」

「後からすぐに行くから。
心配しなくたってサボるなんてしねぇよ」

「……分かった
なら先に行ってるぞ」

翼は怪訝そうな表情のままだったが、駿の言葉に取り敢えずは頷い

て手を離すと時計塔への近道に向かって歩いていった。

「痛っつつつ……」

駿は首に手を当てて一回転させると、正門に入って正面に向かって歩いていく。

前方には見知った二人の背中。

一人は制服を着た黄色いツインテールの女の子、もう一人は執事服を着た水色の髪をした青年

「よぉ、ハヤテ。
ついでにナギも」

「「？」」

その二人に声をかけると、驚いたように振り返る。

それはハヤテとナギであった。

「あ、駿君！！
おはようございます！！」

「む、朝から面倒な奴に……
というかついでとはどういう意味だ！！」

ハヤテは駿を見ると嬉しそうに表情を綻ばせ、ナギは面倒臭そうに口を尖らせる。

「お前ら一体こんな早くからどうしたんだ？
まだ授業まで二時間弱はあるけど……」

「それが、
実はですね……」

不思議そうに首を傾げる駿にハヤテは少し気恥ずかしそうに口を開き理由を説明し始めた。

「へぇ……！！
ハヤテは白皇に編入したのか。
凄いな」

「いえ、本当は危なかったんですけど……
マリアさんのおかげで」

「でも、凄いよ。
流石三千院家の執事だな」

白皇の編入試験はかなり難しい。それに合格したのはやはり凄い事だ。ハヤテの言葉を駿は謙遜と捉えたようだった。

「それで、こんな朝早くからハヤテに連れらて学校なんぞに来たという訳だ。
ふわぁ……」

「なるほど……
ナギにしては早朝だもんな」

「な、馬鹿にするな！！」思わず吹き出しそうになる駿にナギは両手を振り回して抗議してみせた。

「お嬢様！！駿君！！」

「「ん？」」

そんな二人にやたら嬉しそうな声がかかる。
二人が振り返るとニコニコとした顔を向けたハヤテが時計塔を指さしていた。

「あれ、僕の母校なんですよ♪」

「「は？
いや、知ってるよ……」」

「あ、知ってました？
知られちゃってました？
アハハ……」

ハヤテははにかみながら顔を赤らめて頭を掻いてみせた。

「なんか……
えらく喜んでんなアイツ」

「うむ。
前々から学校に行きたかったらしかったからな」

駿とナギは浮かれまくっているハヤテに目を向けて苦笑する。

「というか、お前とこうして普通に話を出来ているのが今更ながら驚きだ」

「まぁお前は馬鹿だからな」

「馬鹿って言うなチビ」

「誰がチビだぁ！！」

憤慨したように駿に向かって怒鳴るナギ。

「でも、お嬢様は凄いですね。
飛び級で高校生なんて」

「ん～？」

不意に、ハヤテが思った事を口にしたおかげで二人の口論は勃発せずに済んだ。

「別に凄かないよ。
飛び級は私だけじゃないし、毎年数人はいる」

「伊澄も飛び級だしな」

ナギの言葉を引き継いで駿が何故か自慢気に頷く。
彼女は少し溜め息をつくがそのまま続ける。

「それにこの学校における飛び級の記録保持者は、１０歳で入学して１３歳で卒業している」

「ええ！？」

「おまけに生徒会長を2期連続で務め、成績は3年間ぶっちぎりの

トップ。
最優秀生徒に贈られる銀時計を3つも持っている強者だ」

「は～……」

ナギの話にハヤテはただただ驚きを隠せずに間抜けな反応をしてしまう。

「いるんですね～
世の中にはそんな化物みたいな人が……」

「ああ、確かにいるな。
そんな化物みたいな人が、オメーのすぐ側にな」

「え？」

ハヤテが空を見上げてそんな事を呟くと今度は駿が代わりにそう答えた。
その時ちょうど、三千院屋敷では3つならんだ銀時計の前でくしゃみをしていたそうな。

「それにしても……」

「ん？」

並木通りを歩きながらハヤテはナギと駿に振り返る。

「こんなに朝早く来てもやる事がないですね」

「お前が来たいと言ったんだろうがぁ！！」

そりゃそうだ。

まだ時刻は午前7時をちょっと過ぎたくらいなのだから。

「先生に挨拶しなくてはいけないのに、その先生もいないとは…」

「だから私は最初から！！」

そんなハヤテにナギが抗議の声をあげようとしたその時……

「くくく……

あはははは……」

「「「？」」」

三人の後ろから唐突に笑い声が聞こえてきた。

「早起きはしてみるものだね……面白い人に会える」

桜舞い散る木に、

本を片手に寄りかかる美形の男性がそこにはいた。

肌の色は色黒で、首筋までかかる綺麗な黒髪。

耳には十字架のイヤリングに、執事服の上から前を開けた茶色い上着。

見れば見るほどかなりの美男子で舞う桜も彼をより引き立て…

「えいっ！えいっ！」

彼の後ろにいる小さな男の子が笊から一生懸命に桜吹雪を舞い散らせていた。

（一番面白い人はお前だって突っ込んだら負けなんでしょうか！？）

（（多分な……））

意味不明な美男子の登場にどう対応していいのか分からない三人。

「ヒムロ……
花、もういいかな？」

「ありがとう大河坊っちゃん」

氷室と呼ばれたその美男子は大河という男の子にお礼を言った。
坊っちゃんという言葉と氷室の格好から二人の関係がご主人と執事だと言うことが何となく分かるが……

「えっと……」

「その服、君も執事だね」

どうやらこの氷室という男性は本当に執事のようだ。

「あ、はい……
三千院家で執事をやっている…」

「三千院？
ああ、君が噂の……」

ハヤテの挨拶を遮るかのようにぴくりと氷室が反応した。
かと思うと……

「って事は君を倒すと、
三千院家の遺産が貰えたりするのかな」

（え！？）

いきなりハヤテの目の前に立ち見下ろしてきていた。
それはまるで瞬間移動したかのごとく。

「えっと……はぁ」

「まぁ、正直僕には大河坊っちゃんという金ヅルがいるから、
別に興味は無いんだけど」

しかし、一転してそんな事を言い出す氷室。
後ろでは大河がガーンとショックを受けたような仕草をしていた。

「それで……」

「ん？」

すると、今度は氷室の視線がハヤテの隣の駿に移った。

「君が鷺ノ宮家のご子息。
鷺ノ宮駿君だね」

「え？

あ、はい……そうですが」

駿はいきなり名前を呼ばれ少し驚いたのか、不思議そうに氷室を見つめ返す。

「噂は色々と聞いているよ……
一度会ってみたかった。
勿論、お金の事は抜きでね」

「は、はぁ……」

どこか掴み所の無い彼の様子に、駿は何だかリズムを崩されるような感覚になってしまう。

「君がいれば鷺ノ宮家は安心なのだろうね。
最強の番人と謳われる君がいれば……」

「……さあ、そんな噂は聞いた事がありませんね」

その言葉に、駿は目を細めてそう返した。
断言と言うよりも、その言葉を拒絶するかのように。

氷室はそんな様子に微笑すると何も言わずにまたハヤテの方に視線を戻す。

「でも君は……
そんなにボーっとしてると、
取られちゃうよ」

「え？」

氷室がスッと右手を上げると、そこにはいつの間にかハヤテの蝶ネクタイの紐があった。

「え!?あれ!?
それ僕のネクタイ!?」

ハヤテの執事服はハラリと上がはだけた。

「一体どうやって?」

「愚問だね。
そんな事、決まっているじゃないか……」

氷室はハヤテに背を向けると、ゆっくりと歩き始めた。

「僕が……
一流の執事だからさ」

彼はそう言い残して、嬉しそうに後についていく大河と共にその場を後にしたのだった……

＊

ハヤテ達はネクタイを取りに帰る為に一旦屋敷に帰り、駿はそのま

ま時計塔の生徒会室に向かった。久しぶり乗る時計塔のエレベーター、と言っても実質四日しか経っていないのだが、久しぶりに感じてしまうのは白皇生徒会としての自分に随分と慣れたのだなと苦笑気味に思う。

（生徒会室、か……）

最上階に到着してどこか懐かしいように感じながら、駿は俯いたまま生徒会室の扉を開けようと……

ムニュ……

「……え？」

扉の取っ手にしてはやけに柔らかい感触。
というか柔らか過ぎる。
効果音がおかしい。

駿は訳も分からず何かを掴んでいる右手を見つめる。
というか周りの状況すら理解出来ていない。

ムニュ……ムニュ……

「……？」

しかし、よく見ると俯いた彼の視線には誰かの両足が。

（……え？）

とてつもなく嫌な予感がした彼は、ゆっくりと顔を上げる。
そこには……

「／／／」

資料を左手に持った千桜が顔を真っ赤にして立っていた。
そして彼女の胸の位置に、
まぁ見事に駿の右手が乗っかっている、というか掴んでしまっている訳で……

「……あ、あの～
ち、千桜さん……？」

「／／／」

彼女は更にどんどんと真っ赤になっていき……

「ち、違っ……」

「ーーーっ！！！／／／」

そこで駿の視界は真っ暗になってしまった……
手に彼女の柔らかい感触だけを残して……

其の三十九　最近の主人公って不幸体質が多い気がする（後書き）

～今回のＮＧシーン～

氷室
「噂は色々と聞いているよ……
一度会ってみたかった。
勿論、お金の事は抜きでね」

駿
「は、はぁ……」

どこか掴み所の無い彼の様子に、駿は何だかリズムを崩されるような感覚になってしまう。

氷室
「君がいれば鷺ノ宮家は安心なのだろうね。
最強のシスコ……、コホン。
いや、最強の番人と謳われる君がいれば……」

駿・ハヤテ
（（シスコン！？
シスコンって言いかけたよ今！？））

ナギ
「いやシスコンだろ」

駿
「いやでもどんな噂!?
陰口だよね!?」

氷室
「失礼。
つい本音が」

駿
「本音!?
本音なの!?」

これはまぁ、真面目にやろうと思ってました。
面白いし良いかな～と。
でも何かシリアス場面が皆無だったので、考えた末に止めました。
そんな場面です。

美希
「というか私達のコーナーをやらないとはどういう事だ!!」

理沙
「毎回後書きがコロコロと変わり過ぎだぞ!!」

泉

「ちゃんと私達の後書きも書いてよ～」

伽藍
「はい……
まぁコロコロ変えるのがこの後書きの特徴みたいな……」

三人娘
「好転すんなーーーっ！！」

伽藍
「はい、すみません……
次回は諸事ラジを書きます
どうか今回はご勘弁を」

理沙
「という訳で、
復帰初日からラブコメハプニングをやらかした駿君！！」

美希
「次回も引き続き白皇の話から始まるみたいね」

泉
「次回もよろしくお願いしま～す♪」

其の四十　サブタイトル表示前より後の方が短くなる事もたまにはある。例えば

主人公に１０のアンケート！！
～無人島編～

Q．１　アナタは無人島に漂着しました。手持ちの物が三つまであります。何ですか？

駿
「え～、解毒剤とエロ本数冊の束とＡＶ……はプレーヤー無いとダメだから、サバイバルナイフかな」

Q．２　漂着したのは朝。まずは何をしますか？

駿
「フィールドワーク。無人島の特徴、地形、広さの確認。食糧採取、水が飲めるポイント、食べ物が貯蔵出来るポイントも確認する」

Q．３　無人島で一番やってみたい事は？

駿
「伊澄に愛を叫ぶ。力の限り」

Q. ４　昼になりました。どうしますか？

駿
「取り敢えず火を起こす道具を作る。あと釣りだな。
夕飯用だ。
初日の昼は抜きになるな」

Q. ５　夜になりました。どうしますか？

駿
「火を起こして、魚や昼間に採った実や植物を食べる。
満腹にならないように」

Q. ６　寝る場所はどうしますか？

駿
「比較的死角になりやすくて日も当たるポイントがいいな。
布団は木をくくりつけた板に藁を敷こう。無ければ代わりになるよ
うな植物を使って」

Q. ７　初日以降の話です。
探索中に二種類のキノコを発見しました。赤と紫、どちらをたべま
すか？

駿
「赤」

Q.　８　それを食べた後腹痛に見舞われました。どうしますか？

駿
「解毒剤を使う」

Q.　９　数十日過ぎだ時、上空にヘリコプターがやって来ました。
しかし地面は砂浜では無く草場。どうやって気付いてもらいますか？

駿
「エロ本数冊の１ページ１ページをＳＯＳの形に素早く並べる」

Q.　１０　何とか気付いて貰い、乗せて貰う事が出来るそうです。
最後に一つ帰る前にやっておきたい事は？

駿
「エロ本のページに『橘ワタル』と書いて無人島に残しておこう」

ワタル
「自分の名前書けよ！？」

回答ありがとうございました。
それでは本編、始まります

其の四十　サブタイトル表示前より後の方が短くなる事もたまにはある。例えば

午前7時半前……
まだ小鳥のさえずりも聞こえる清々しい朝。

「えっと、駿君
その……大丈夫？」

「ああ、うん……
大丈夫大丈夫」

生徒会室では千桜が心配そうに、というかかなり申し訳なさそうに
長テーブルの彼女の席の隣に声をかけていた。
その隣には駿の姿。
彼の顔には絆創膏が貼ってある。

「その……
ごめん駿君。気付いたら身体が勝手に」

「い、いや……
謝らなくていいって。
悪いのは１００パー俺だからさ」

千桜が申し訳なさそうに謝るのに対し、駿は慌てて手を振ってそう
返す。

つい先程まで、ちょっとハプニングがあって駿の意識は闇の中にさ
迷っていた。
それを千桜が介抱してあげたのだが……
実はその原因は千桜にあったり無かったりという訳で。
彼女は申し訳なさそうにしているのだ。

とは言え、根本の原因を作ったのは駿なので総合すると駿が悪いと
いう事になる。

「で、でも……
私のせいで駿君に怪我を」

「いやいやいや。
俺の不注意が一番悪いから。
ホントにそれだけだから。
それに怪我なんて全然大した事は無いしさ」

まだ心配そうな彼女の様子に大袈裟なくらい手を顔の前で振ってみ
せる駿。ついでに頬の怪我も大した事は無いと付け加える。

「然気にしなくて大丈夫だから。それに俺もちょっと嬉しいという
か得した気分に……」

「え？／／／」

「あ、いや……コホン！！
何でもない！！
とにかく全く問題無いからさ」

思わず隠していた本音までほとんど口に出しかけ千桜が一瞬頬を赤らめたので、駿は喋り過ぎだと慌てて咳払いをして誤魔化した。

「あらあら♪
朝から仲良しね二人とも」

「ホントね～♪」

「砂糖もいらないくらい甘々な雰囲気ね～」

そんな中かかってきた三つの声。二人が振り返ると愛歌、ヒナギク、美希の三人がクスリと微笑みながら見つめてきていた。

因みに今生徒会室にいるメンバーはこの五人だけ。
理沙と泉は多分サボりで翼は出ているのか姿が見えない。

「な、違いますよ！！
私はただ彼の心配をしていただけで……」

千桜は立ち上がるとヒナギクと美希のいる会長机の方に歩いていって抗議するが、

「「“彼”ね～♪」」

「だから……！！／／／」

ヒナギク達は意味深に微笑み顔を見合わせたのでそれが更に千桜の顔を紅潮させた。

そんな風に会長机付近で女性達が盛り上がっている中、愛歌がそっと座っている駿の隣に腰かけた。

「さっき翼君が言っていたけど、もう幼児化は治ったのね」

「あ、はい。
ご迷惑おかけしまして」

駿が来る前、翼が生徒会メンバーに今日から駿が復帰すると伝えていた。
なので愛歌以外のメンバーは具合が治ったのだという認識だったが、彼女は事情を把握しているので呪いが解けたという認識になる。

「迷惑だなんて……
寧ろとても面白かったわ」

「は、はぁ……
面白かったのですか……」

「ええ♪」

面白かった。
その言葉に対する駿の危惧は明白である。無論弱点帳だ。
愛歌もその事に気付いたのかクスリと微笑んでこう付け加えた。

「心配しなくてもこれには何も書いていないわ」

「え？」

彼女がテーブルに置いたのは例の弱点帳。

「こういう事は簡単に書いたら誰かに見られて外に広まる危険もあるし、何より駿君が大変な時にこんなノートに書くのは不謹慎でしょ？」

「愛歌さん……」

駿は彼女の言葉に嬉しさを感じると同時に絶対に書かれているであろうと思っていた自分を恥じた。やはり彼女は……

「だ・か・ら♪
こっちの特別版に書いてみたの」

「……」

前言撤回。
やはり信じられるのは自分だけのようだ。

愛歌が取り出したのは二冊目のノート。
それを見た駿は内心で挫けるなと自分自身にエールを送っていた。

「そういえば……
翼はどこに？」

不意に、駿は気付いたように室内を見回すと尋ねる。
翼の姿は見受けられないのだ。
駿より先に生徒会に顔を出している筈だが。

「翼君なら武道場よ。
剣道部の朝練で」

「あ、そうか」

それに答えたのは書類に目を通していたヒナギクだった。

「でも、ヒナギクは行かないのか？」

「ええ、今日は書類が多かったから。あ、そうだ……」

彼女は思い出したように机から紙を取り出す。

「駿君、ちょっと武道場に行って翼君にこれを渡してきてくれないかしら」

「果たし状？」

駿はヒナギクの所まで行ってその紙を受け取ると首を傾げてそう言った。
その後すぐに『そんな訳無いでしょ！！』といって怒られたが。

「部活の今週の予定よ。
これを部室の前に貼るの
これは男子の分」

「まぁ、分かった。
翼に渡せば良いんだな」

「ええ、お願い」

駿は取り敢えず頷いてそのまま生徒会室を後にした。

＊

駿が武道場に近付くと、中から竹刀を振る音が忙しなく聞こえてくる。恐らく翼が鍛錬に打ち込んでいるのだろう。

「翼～
居るか～？」

駿が声を上げながら武道場の入口を開けると、予想通り翼が懸命に竹刀を振り下ろしていた。
胴着姿で防具は勿論着けずに。
入ってきた駿には気づいていない程集中している。

（朝っぱらからよくやるな……）

駿は眠たそうに欠伸をすると、翼に近付いていく。

「おーい、翼」

「ん？」

ようやく気が付いたのか、翼は腕を止めて振り返った。

「はい、これ」

駿はヒナギクに頼まれた紙を渡してその旨を説明した。
翼は納得したように頷くとそれを受け取って『後で貼っておくよ』と言った。

「んじゃ、俺はこれで」

「あ、駿。
ちょっと待て」

「ん？」

用事を終えた駿はヒラヒラと手を振って武道場を後にしようとしたが、翼はそれを呼び止めた。

「お前、ちょっと手合わせしてくれないか？」

「は？」

駿が振り返ると、彼はいきなりそんな事を言い出した。

「胴着ならそこの部室に余りがある。防具は着けなくていいから、頼む」

「何で俺が……」

「幼児化してた時に面倒見てやったろ？その礼という事で」

「うっ……」

それを言われてしまったら返す言葉が無い。
今の駿には記憶が無いが、幼児化時に翼にはかなり世話になったのは確実。

「はぁ……
分かったよ。んじゃ、着替えてくっからちょっと待ってろ」

駿は溜め息をつくと、頭を掻きながら武道場にある部屋に向かって歩いていった。

5分後……

「お前の胴着姿、久しぶりに見るな」

「そういやそうだな」

駿は胴着に着替えて竹刀を片手に翼の前にやって来た。

「俺は本気でいくぞ。
本気の死合いだと思って相手をしてくれ」

「オイオイ……
お前どうしたんだよ？
何かあったのか？」

「……授業まで時間はまだまだあるからな」

駿が口にした疑問には答えずに時計を見て呟く翼。
彼の言う“死合い”といは妖怪退治などの事。

「いくぞ」

「……」

翼は竹刀を構えてスッと駿を見据える。
駿は未だに翼の心中を測りかねているようだったが、仕方なく竹刀を持つと構えをとった。
翼は上段に竹刀を構えて、駿は正眼に竹刀を構えている。

ジリジリと二人の間に緊張感が張り詰める…

「はァァァァ！！」

「！！」

その張り詰めた空気を我が物にするかの如く、翼が一歩踏み出して声を張り上げた。
駿は一歩退いて竹刀を握る手に力に込める。

ダッ！！

まず動いたのは翼。
素早く足を前に踏み出し、一気に駿との間合いを詰める。

そして上段から竹刀を振り下ろした。

駿は後ろに退いてそれを避けると、すぐに自分の竹刀を振り上げ反撃に移る。

バシッ！！

駿が振り下ろそうとした竹刀は翼が持ち上げた竹刀に防がれ、二つの竹刀は両者の前で乾いた音を響かせ交差する。

「っ！！」

翼は相手の竹刀を力で自分の竹刀ごと横に倒す。

交差した状態が崩れ、竹刀を横に押しやられ目の前ががら空きとなる駿。

翼はそのまま引いた竹刀を相手の顔に向かって振り払った。

駿は持ち前の反射神経で振り払われた竹刀を顔をひいて何とかかわす。

「はっ！！」

しかし続けざまに翼が素早く竹刀を持ち直して正面から突きを出してきた。

パン！！

駿は冷静に竹刀を斜め上から振り、その突きを反らす。
が、翼は反らされたその力を利用して素早く上段に竹刀を持ってきた。

駿の竹刀は振り下ろされたばかりでまだ構えられておらず、チャンスである。

「でやぁ！！」

「……」

翼は思いきり竹刀を振り下ろしたが、駿はそれより速く反応していて身体を上手く捻って竹刀を寸での所でかわした。

しかし……
なんと避けながら、その体制から駿は腕を振り下段から竹刀を翼の腰に向けて一瞬で振り払った。

「！？」

翼は素早い下段からの攻撃に慌てて竹刀を横から出して防ぐ。

バシッ！！

駿は防いだ相手の竹刀から自分の竹刀を巧妙に引き、揺らいだ翼の竹刀を弾くように一瞬で振り上げる。

「っ！？」

「……」

竹刀を弾かれ目の前が無防備となった翼。
それを構えてさせる間を与えず、駿は彼の首に竹刀を押し当てた。

「はぁ……はぁ……」

「……」

息をきらせて突き付けられた竹刀に目を向ける翼。
真剣ならば彼は首を斬られていたことであろう。
つまり、彼の負けになる。

（いつもより動きが粗いな……
攻め急ぎすぎて隙が多い）

「……」

一方、汗一つかいていない駿はゆっくりと竹刀を引いて冷静に分析をする。

「もう一手、頼む」

「……ああ」

翼は息つくと、もう一度竹刀を構えて駿を見つめた。
駿はまだ彼の様子に少し疑問を抱いてはいたが、彼の真剣な様子に

ゆっくりと頷いて竹刀を構えるのだった……

＊

「ふぅ……」

「……」

武道場のすぐ横にある草場に大の字に寝転がる翼。
その表情は先程より幾分か穏やかになっており、朝の運動の心地良さを物語っている。
その隣に腰を下ろしているのは何やら釈然としない表情の駿。

「やっぱり……
まだまだお前には敵わないな。
結局一本も取れなかった。
俺はまだまだ未熟かな」

寝転がりながらそう言う翼の口調は清々しいもので、悔しくもどこか楽しそうにも見える。

「いや……
お前は前より随分強くなったよ。実際、もう一太刀一太刀の力の強さや剣圧はお前の方が上だ。

どんどん実戦に強くなっていってる証拠だ」

「そうか。
まぁお前が言うならそうなんだろうな」

駿は翼の言葉に首を振ってそう言うと、翼は少し安堵したように頷いてみせた。

「でも、今回はいつものお前と何か違った」

「え？」

「いつもよりどうも攻め急いでいる感じがする。
お前……何かあったのか？」

打ち合いの中で気付いた翼の様子の違和感。
駿は寝転がる彼に目を向けると、思いきって尋ねてみた。

「そうだな……
特に意識してるつもりは無いんだが……強いていえば少し焦ってたのかもな」

「焦ってた？」

彼の口から出た意外な言葉に駿は思わず顔をしかめた。

翼はそれに答えるように身体を起こすと、その旨を話始めた。
それは駿が倒れ、楓と綾姫が助けに入った時の話だった。

「……そうだったのか」

「ああ。
とにかく圧倒されっぱなしでな」

話を聞き終えた駿は長い息をつくとともに首を縦に振った。

楓と綾姫が圧倒的な強さで妖怪、悪霊達を殲滅した事や二人が駿の事を知っているような様子だった事を翼から聞いた。
流石に楓達とやり合った事は話さなかったが。

それで翼が今以上に強くなろうと内心焦った理由もはっきりした。
格段に腕が上の様子を何も出来ない状態で見せつけられては。
競争心という訳では無いのだろうが、向上心を掻き立てられたのは間違いない。

「なるほど……
それで様子が変だった訳か」

「まぁ、さっきまではな。
でも、お前と久しぶりに剣を合わせて分かったよ。
焦っても意味は無い。
俺は俺らしく強くなっていけば良いんだって」

清々しい表情の理由はそれか。
先程の稽古で何か思う所があったのだろう。
彼は『鍛錬は今まで以上に励むけどな』と付け加えると笑ってみせた。

「とにかくありがとな、付き合ってもらって」

「まぁ、こんな風に学校で動くのはもうゴメンだ。
これで最後にしてくれよ」

駿はわざとらしく溜め息をついて翼を見る。

「んな事言って……
やっぱしお前剣道部入らないか？お前が来たら向かう所敵無しになるぞうちの剣道部は」

「冗談よせって。
んな大層なもんじゃないし、部活なんて柄じゃないよ俺は」

駿は勧誘にうんざりしたように手を顔の前で振った。
ただこんな勧誘はいつもの事で、このやり取りは日常茶飯事なのだが。

しかし、そんな事より駿は他に聞きたい事があった。

「なぁ、その二人……
知り合いだったのか？」

「ん？
ああ、そうみたいだったな」

「……そうか」

翼は思い出そうと顎に手を置くとちょっとして頷いた。
それを聞いて駿は考え込むように顔を俯かせる。

（と、すれば……
綾姫に初めて会った時に感じたもう一人の気配は楓だったという事か……？
待て、断するには材料が少なすぎる。そもそも彼女達は何者なのかまだ分からない。
同業者？いや、それにしては……）

「駿？」

暫く思案にふけっていた駿は耳に入ってきた翼の声で現実に引き戻された。
『何だよ？』といって顔を上げると釈然としない表情の翼がこちらに顔を向けている。

「あの二人とお前、昔から知り合いなのか？」

「いや……
一応知り合いだけど、初めて会ったのは去年の１２月だ。
まだ知り合って一ヶ月くらいしか経ってない」

「そうなのか？
二人とも昔からお前を知っているようだったけど」

翼が怪訝な表情でそう言うと駿は口に拳を当てて考え込む。

「……それは無いと思う。
ばあちゃんに世界中色々と連れ回されていた時にどこかで会っていた可能性もあるから確証は無いけど……少なくとも会話をした記憶は無いな」

「ああ、銀華さんとの修行か」

「あれは修行とは言わん。
幼児虐待、拉致、育児放棄だ」

駿は嫌な事を思い出したのか苦い表情で首を振る。
そんな彼の様子に翼はただ苦笑するのみだが。

「それか、記憶が無い空白の五年の間に会った可能性も無いとは言えないけど……
そんな昔に一度や二度会ったきりで覚えているとも思えないしな」

駿が言った“空白の五年”とは、彼が鷺ノ宮家に来るまでの事である。記憶が無いので空白と言っているのだ。

「う～ん……
二人の口調は何というか……
ずっとお前と苦楽を共にしてきたみたいな感じだったんだが」

「まさか」

首を捻りながら呟く翼に駿は軽く笑って肩を竦めた。

「それはねーって。
思い過ごしだよ、思い過ごし」

「むぅ。
まぁ確かにそうなんだけどな。
何か気になるっていうか」

まだ翼は何かが引っかかるように首を傾げたままだったが、無理矢理自分を納得させる。

「まぁ、同業者ならその内二人に話を聞く機会もあるか。それより、そろそろ戻らねーと授業始まるな」

「もうそんな時間か」

駿は気付いたように高等部の校舎を見ると立ち上がる。続けて翼も立ち上がった。

二人は急いで着替えてを済まして、生徒会室に戻るために武道場を後に歩いていく。

「あ、そういや……」

その途中、駿は気付いたように立ち止まった。

「ん？
どうした？」

翼がそんな彼に気付いて顔を覗き込む。
すると駿はクスリと口元を緩めると一言。

「今日は他クラスに転校生が来るんだったな……」

其の二十　サブタイトル表示前より後の方が短くなる事もたまにはある。例えば今回の話とかね

「……」

高等部校舎内。
一年七組の教室の前には一人の男子生徒が緊張した面持ちで鞄を片手に立っていた。
彼の名前は綾崎ハヤテ。
本日からこの学校、このクラスに転校してくる生徒である。
転校初日とあってかなり緊張しているようだ。

『後は～～～で、～～～から』

教室内からは連絡事項を伝える担任の桂雪路の声が聞こえてくる。
その声が外にいるハヤテをより緊張させ心拍を早める。

雪路から紹介があればすぐに教室に入らなければいけないのだ。
いつその話になるのかと彼はドキドキとしていた。

「よっ、転校生」

「!?」

すると、いきなり彼の後ろから声がかかってくる。
振り返るとそこに立っていたのは駿と翼だった。

「駿君!!
それに翼さんも……」

「んだぁ?
緊張してんのかハヤテ」

驚いたように二人を交互に見ると、駿はニヤリと笑ってみせた。

「そうか、今日からハヤテも白皇生なんだな。
クラスは……七組か。三千院のお嬢さんと同じクラスなんだな」

「あ、はい。
何とか合格してお嬢様と同じクラスになれました」

翼はハヤテと教室を見て言うと、ハヤテは少しはにかんで頭を掻いてみせる。

「何っ!?
伊澄と同じクラスだと!?
ハヤテお前!!俺の愛する伊澄に手を出そうものなら……!!」

「はいはい。
それはお前が心配しても仕方ない事だからな」

ガシッ!!

「あべしっ!?」

ハッと気付いた駿は物凄い勢いでハヤテに飛びかかろうとするが、翼はそんな彼の首根っこを掴んで引き戻す。

『それじゃあ、連絡はこれで最後ね。一部の人は知ってるかもしれないけど今日から、このクラスに転校生が来ます!!』

そんな時、教室内から聞こえてくる雪路の声色が変わる。
ハヤテはまた緊張した面持ちで教室に目を向けた。

『転校生なの、桂ちゃん!?
男の子!?女の子!?』

すると、教室内の生徒達がワイワイ騒ぎ始める。
そして生徒の中の一人がそう質問すると雪路は『一応男の子よ』と返していた。

『はーい♪
桂ちゃん質問!!
その男の子はカッコイイですか~?』

また一人の生徒が質問する。
それに生徒達は『それは重要ね』と同調する。

「おお、転校初日にありがちな質問だな」

「そ、そんな事言われたら緊張しますよ……」

そんな教室の様子を外から聞いていた駿は面白そうに呟くと、ハヤテは顔の前で手を振って答える。

まぁ、そこは担任が入り易い雰囲気を作ってくれるだろうと……

『因みに転校生は凄くカッコイイわ！！！』

「「「！？」」」

雪路の言葉と共に教室に黄色い声が響き渡る。
その言葉にはハヤテは勿論、駿や翼まで驚いて目を見開いた。

しかし雪路は止まらない。
何かイケメン俳優の名前を沢山出して説明を続ける。

『声を聞いただけで気絶しそうで……流し目の効果音はズギューンって感じで人を殺せるんじゃないかな！？
しかも彼は三千院家の執事をやってて頭脳は天才的！！
運動神経だって物凄いのよ！！』

黄色い声はますます高まり、女性陣のキャアキャア言う声が教室外にも筒抜けになる。

「……」

「「……」」

唖然としたままのハヤテと何と声をかけていいのか分からない駿と翼。

「あ、あ～……

まぁ何だ。

初日は色々あるけど、少ししたら打ち解けるようになるから」

「あ、ああ……

駿の言う通りだな」

未だに唖然とするハヤテに慰めともつかない言葉をかける二人。

「俺らもそろそろ教室に行かないと行けないから。

取り敢えず……頑張れ」

駿がそう言って、翼は無言でハヤテの肩をポンポンと叩いた。

そして二人は自分達の教室に向かう為にその場を後にして歩き始める。

後ろでは雪路ね快活そうな声とともに、ハヤテが教室に入っていったような音が聞こえた。

「つーか駿」

「あん？」

「俺達遅刻じゃないか？
もうＨＲとっくに始まってるぞ」

翼は腕時計で時間を確認しながら顔をしかめる。

「良いんだよ……
生徒会は遅刻しても問題無いんだ」

「そんな事は初耳なんだが」

「今俺が考えた」

そう言って欠伸をする駿を横目に溜め息をつく翼。
そんな対称的な二人は何だかんだと言いながらのんびりと教室に向かうのだった。

其の四十　サブタイトル表示前より後の方が短くなる事もたまにはある。例えば

三人娘の
☆諸事情ラジオ★

理沙
「ふぅ、ようやく帰ってきたな」

泉
「何だか久しぶりだね～」

美希
「それじゃあ、いつも以上に張り切っていこうかしら」

理沙
「では、思いつきで諸事ラジの定番化させることになったこの企画
！！」

～本日のＮＧシーン～

・冒頭の千桜が駿に謝るシーンのＮＧ

千桜
「で、でも……
私のせいで駿君に怪我を」

駿
「いやいやいや。
俺の不注意が一番悪いから。
ホントにそれだけだから」

まだ心配そうな彼女の様子に大袈裟なくらい手を顔の前で振って大丈夫だと言ってみせる駿。

駿
「それに、このくらい怪我なんてなんとも無いよ。
向こうに座ってる胸なし会長なんて、無抵抗の男子生徒を資料で叩くわ、黒板消しを叩き込むわ、
竹刀でメタメタにボコるわ、首根っこ掴んで地獄の門まで連行しようとすｒ」

バキッ！！ドカッ！！グシャッ！！

ヒナギク
「何か言ったかしら？
駿君」

駿だった物体
「＄￠％£§@&℃￥
（訳：ごめんなさい）」

美希
「無惨ね……」

駿だった物体
「％£＆@§¥$¢°℃
（訳：だから、気にしなくても大丈夫なんだ）」

千桜
「う、うん……
分かったよ？」

美希
「何で通じているのよ」

美希
「はい、慰め方を間違えて駿君の形が変わるＢＡＤエンドでした」

理沙
「口は災いの元だな（笑）」

泉
「いや、笑い事じゃないんじゃ？」

美希
「では、続いては」

～ぶっちゃけ本音コーナー～

美希
「取り敢えずタイトル通り、
本編に関係なくぶっちゃけた本音を言ってもらうその場しのぎの企画ね」

理沙
「これは別に定番化するつもりはないけどな」

泉
「では、最初のぶっちゃけは伽藍さんで～す♪」

伽藍
「えっと……
ではぶっちゃけます」

【小説の第何章という形式を止めようと思う】

美希
「え？止めるの？」

伽藍
「はい。
何だか区切るのが難しくなってきたので、序章を除いて何章形式とするのは止めようと思います。

銀ごとのように長編、中編にはその都度タイトルを付けるといった感じで。
近々変える予定なので、一応ご了承の程お願い致します。
因みに、ＩＦ編はもう少ししたら二つほどやりたいと思います。
場所は前回のＩＦ編の所に入れるので」

美希
「何だか活動報告みたいな企画になってしまったわね」

理沙
「まぁ、悔いた所で仕方ない」

泉
「それでは、今回はこの辺で♪」

三人娘
「また次回～！！」

其の四十一　新天地と新境地って似てるけど特定の会話で使いどころ間違えたら恥ずかしいよね

今回は闇夜の黒鳥さんの考えて下さったオリキャラの登場です。
個人的にかなりお気に入りのオリキャラになりました！

投稿、ありがとうございました！

という訳で、またまた新たなキャラクターの参戦です♪

其の四十一　新天地と新境地って似てるけど特定の会話で使いどころ間違えたら

天下の名門白皇学院
その敷地面積は東京都杉並区ほぼ全てというとんでもなく広大なものである。

故にこの学院に編入、転校してきた生徒は好奇心から色々な場所に足を運びたくなる。
そして必ずと言って良いほど……迷う。

「参ったな……」

授業も終わった放課後。
本日編入してきた男子生徒、綾崎ハヤテもまた広大な敷地内で迷い、敷地内のどこか林の中を歩いていた。

其の二十一　新天地は新境地って似てるけど特定の会話で使いどこ

ろ間違えたら大変な事になる

遡ること昼休み。

駿達と別れた後、雪路にメチャクチャに紹介をされながらも持ち前の経験と営業スマイルで何とかクラスの好評を得て始まった初日。

久しぶりの学校での授業も何処か親切で楽しんだハヤテは昼休みにナギと一緒に学院のベンチに座っていた。

「いやー、やっぱり学校って楽しいですねお嬢様♪」

「そうか？」

「お嬢様は楽しくないんですか？」

ハヤテがそう言って座っているナギを見ると、彼女は顔を俯かせて溜め息をつく。

「人がいっぱいいるからな……
私は出来るだけ静かにひっそりと一日の大半を漫画とゲームに費やしつつ生活したい」

「それじゃダメ人間ですよ」

「飛び級したのだって、12年も学校に行きたく無いからだからな」

「そ、それは筋金入りですね」

引きこもりまっしぐらなナギの発言に困ったように笑うと、ハヤテは空を見上げた。

「でも、こうやってお嬢様と学校に通えて僕は嬉しいですよ」

「え？」

「これも推薦して下さったマリアさんと、何よりチャンスを下さったお嬢様のおかげです」

いつの間にかハヤテはベンチに腰かけナギの隣で微笑んでいた。

「ありがとうございます。
お嬢様」

「いや、あ……うむ」

その笑顔に思わず顔を赤らめてしまうナギ。

「私も……

ハヤテといられて……」

そして更に頬を赤らめながらナギはゆっくりとハヤテに顔を近付けて……

「相変わらず人気の無い場所好きね～」

「おや、お邪魔だったかな」

後ろから聞き覚えのある声が二つ聞こえてきた。

ナギは驚いてビクッと身体を震わせて振り返る。

「ひ、ヒナギク！？

それに鷹ノ瀬まで！！」

「あ、ヒナギクさんと翼さん。

こんにちは♪」

「こんにちは♪」

「よっ」

声をかけてきたのはヒナギクと翼だった。

焦って叫ぶナギに続いてハヤテも笑顔で二人に挨拶する。

ヒナギクは笑顔で翼も片手を上げて挨拶を返した。

「それにしても、ヒナギクさん達何故こんな所に？」

「ちょっとミーティングがあって部室に行く途中なのよ」

「ここは近道なんだよ」

ハヤテの問いにそう答える二人。ナギはというと恥ずかしさから真っ赤になって後ろを向いてしまっていた。

「へ～、お二人とも生徒会長と副会長をやりながら部活もちゃんとやっているんですね～」

「あら？
それくらい両立出来なくてどうするのよ」

感心したように声を上げるハヤテにヒナギクは当然とばかりに口元を緩めた。

「そういえば……
お嬢様は部活動とかなさらないんですか？」

「へ！？
な、なんで！？」

いきなり話を振られて驚いたように振り返るナギ。

「いえ……
やはり学校生活の醍醐味は友人達との部活動にあるのではと……
ですから……」

「や……！！
ば、馬鹿者！！」

ナギは慌ててハヤテの言葉を遮ると、気まずそうにプイッと横を向

いてしまう。

「良いんだよ私は……
そういうのはもう……」

「あら？
でも籍は残ってるわよ？」

すると、そんなナギの様子を見たヒナギクが不意にそんな事を言った。

「む……！！
ヒ、ヒナギク！！」

「あの、ヒナギクさん。
籍って何ですか？」

慌てて叫ぶナギとは対称的にハヤテは首を傾げる。

「この子、私と同じ部活に入ってたのよ」

「へぇ、それは意外だな。
あの三千院のお嬢があの部活とは」

衝撃の事実。
そんな言葉に翼は心底驚いたように目を見開いてみせる、
ナギは慌てて『馬鹿！！』と叫んでいるが。

「え、部活って？」

「剣道部♪」

ヒナギクはニッコリと微笑んでそうハヤテに答えた。

ナギ曰く高校に入学した時、このまま引きこもりはまずいと思った事があるらしい。
その時に覗いたのが剣道部で、
ヒナギクを見た彼女はカッコイイと心底思ったようだ。

それを聞いたハヤテは当然何故止めてしまったのかを問う。
その理由は……

「防具も竹刀も重くて……
上手く動けないから」

という何とも情けないものであったのだが。
ヒナギクは『子供用を使えばいいのに』と言ったが、ナギは憤慨したように断固拒否していた。

彼女は分かっていたのだ。
同じスポーツをしても同じようにはなれないのだと。

そこでハヤテは考える。
このままナギを放っておいたら末はニートかネトゲ廃人。
ならば……

「よし！！
お嬢様！！」

「ん？」

ハヤテは思い立ったら吉日とばかりにナギに声をかける。

「放課後、僕と一緒に剣道部を見学しにいきませんか？」

そして放課後になり、ハヤテは初日という事で職員室で色々と話があったのでナギはヒナギク達と先に武道場へ。

ハヤテは後から向かう形になったのだ。

という訳で現在に至るのだが…

「う～ん……

ここは何処だろう」

ハヤテは案の定、絶賛迷子中であった。

興味本位で敷地内を少し見て回ってみた所、そのあまりの広大さ故に見事に迷ってしまった。

今はどの位置にあるかも分からない林の中を宛も無く歩いている。

（弱ったな……

こんな事ならちょっと敷地を見てみようなんて思わず素直に武道場への道を尋ねながら行くべきだった……

これ以上お嬢様達を待たせる訳にはいかないし、何とか外に出なくては）

ハヤテは取り敢えず風の流れや日の差し込み方を考えて、来たと思われる方向に足を進めていく。

と、その時……

「そこの君ーーーっ！！」

「へ？」

いきなり聞き慣れない女性の声。彼は訳も分からずに周りをキョロキョロと見回す。

「避けて！！
ぶつかるーーっ！！」

「！？」

その声は頭上。
ハヤテがハッと気付いて顔をあげようとするが……

「キャア！！」

「わわ！？」

時既に遅し。
上空から降ってきた何かにハヤテはぶつかってしまった。

彼は成す術無く、そのまま地面に押し倒されてしまう。

「痛っつつ……」

痛みを意識しながらも、身体の上に乗っかる感触に気付いた彼はゆっくりと目を開けた。

「ご、ごめんなさい！！
大丈夫！？」

「え……？」

彼の目前で、
綺麗な栗色の髪をポニーテールにまとめた少女が心配そうにこちらを覗き込んでいた。

「……」

ハヤテに覆い被さるように乗っかてしまっているその少女。
澄んだ大きな瞳に美しく整った容姿、サラサラと風に揺れる栗色の髪、そして押し当てられてしまっている胸。
着ているのが白皇の制服から、どうやらこの学校の生徒のようだ。

かなりの美少女にハヤテは押し倒されているのも忘れて、思わず見惚れてしまっていた。

「え、えっと……？」

「あ！！
わわ、すみません！！」

しかし不思議そうに話しかけられた次の瞬間、彼は慌てて声を上げて我に返る。

「えっと、大丈夫ですけど……
その／／／」

「あ、重かったよね？
ゴメン！！」

美少女は思い出したようにハヤテの上から退いた。
ハヤテは胸が当たってしまっていて恥ずかしかったのだが、彼女は気付いていなかったようだ。

彼女が退いて立ち上がったのを確認すると、ハヤテもゆっくりと起き上がった。

「君、大丈夫？
怪我とかしてない？」

「へ？
あ、ええ。大丈夫ですよ、頑丈なのが取り柄ですから」

「そう。良かった……」

ハヤテが笑ってそう言うと、美少女は安心したようにホッと胸を撫で下ろした。

「いきなりごめんね？」

「いえ、僕は大丈夫ですけど。
寧ろそちらはお怪我はありませんか？」

流石ハヤテ。
自分より他人の心配をするとは、紳士である。
何処かの馬鹿（シスコン）とは雲泥の差だ。

駿
『放っとけ！！』

どこかで誰かが叫んだがお気になさらず。

「大丈夫。
私もこう見えて丈夫だから」

ハヤテの言葉に彼女も笑って首を振った。
それを聞いた彼は良かったと安堵したようだった。

「でも、一体どうして上から落ちてきたのですか？」

「うん。
実はこの子が木から降りられなくなってたから、降ろしてあげようとしたんだけど……
降りる時に足を滑らせちゃって」

恥ずかしそうに笑う少女の腕にはなるほど、子猫が抱き抱えられていた。
彼女はゆっくりと屈むと、両手を離して子猫を地面に降ろしてあげる。

「でも、もう大丈夫よ。
次はこんな危ない所に登ったらダメだからね？」

彼女は降ろしてあげた子猫の頭を優しく撫でて微笑んだ。
その笑みは男子を思わずドキリとさせるほど可愛らしく、美しかった。

子猫が暫くして駆けていってしまうと、少女はスッと立ち上がってハヤテに向き直った。

「良かったですね、子猫が無事で」

「うん。君が助けてくれたお陰だね♪」

実際は下敷きになっただけだが、彼がいなかったら彼女も地面に叩きつけられて大変だったかもしれない。

「いえ、助けたなんてとんでもないですよ……」

「ううん。
バイト終わりでちょっと疲れてたからドジっちゃって危なかった。
ありがとう」

綺麗な笑みを浮かべて彼女にお礼を言われたらそれは男子としてはかなり嬉しいだろう。
ハヤテも素直にお礼を受け取っておく事にした。

「でも、バイト終わりって……
今までバイトを？」

「ええ……
私は一人暮らしでいくつかバイトを掛け持ちしながら学校に通ってるの」

「へぇ～
それは大変ですね。
それにお一人でなんて凄いです」

生活費の為にバイトをしながら一人暮らしで白皇に通うなんて凄く大変な事だと驚くハヤテ。

「あはは……
そんな大した事ないよ。
でも今日はいくつかあるバイトの一つで、偶々午前だけのバイト日の筈だったんだけど……」

誉められたのが嬉しかったのか少し照れた彼女だったが、今日のバイトの話になると段々暗くなっていき……

「度重なる失敗でクビになっちゃって……
それで他のバイトを探してたら学校に間に合わなくて……」

「あ、あの？」

いつの間にか体育座りになってしまう少女。

「それに来る途中に烏に睨まれるし、黒猫には横切られるし、

おまけに子猫をたすけようとしたら足を滑らせるし……グスン」

「だ、大丈夫ですよそのくらい！！そんなの気にしなくても大丈夫ですよ！！

超不幸の僕が言うんだから間違いありません、はい！！」

涙声になってしまった彼女にハヤテはフォローしようとにかく慰める。

超ド級の不幸体質であるハヤテには、何となく彼女の気持ちに共感出来たのだ。

「すぐに良いこともありますよ！！」

「確かに、そうかも。

良いこともあったかな」

すると、その美少女が立ち上がってクルリとハヤテの方に向き直った。

「君に会えたからね♪」

「え……？」

クスリと微笑んでそう言った彼女にハヤテはキョトンとした表情になってしまう。

「そういえば、自己紹介がまだだったわね。

私は嵩宮美波皆からは“みなみん”って呼ばれてるよ。

白皇学院の二年生。

部活は帰宅部……バイト部かな」

「あ、これはこれは二年生だったのですか。
僕は綾崎ハヤテと言います。
今日からこの学院に編入してきた一年生です。
よろしくお願いします、嵩宮先輩」

ハヤテは美波の挨拶にニッコリと笑顔で返すが……

「むー……
ダメ、６０点」

「え？」

「“先輩”って特徴の無い呼び方とか、苗字はあんまり好きじゃないの。
だから“嵩宮先輩”じゃなくて
“みなみん”って呼んでくれないと１００点はあげられません」

「ええ？１００点？
いや、でもそれは……」

頬を膨らませる美波に困ったように口ごもるハヤテ。
流石に先輩をニックネームで呼び捨ては抵抗があるだろう。

「じゃあ特別に“みなみん先輩”なら９０点差し上げます！」

「え、えっと……
それも恥ずかしい気が」

「むー、仕方ないな。

なら１００歩譲って“美波先輩”で妥協してあげるよ」

「あ、はい」

可愛らしく腕を組んでツンとした素振りをみせる美波にハヤテはようやく納得して頷いた。

「では、改めて
よろしくお願いします、美波先輩」

「よろしい。
よろしくね、後輩君♪」

手を差し出したハヤテに美波は満足そうに微笑んで握手をした。

「ってあれ？
美波先輩は“後輩”って呼んでますよ？」

「残念！
私は先輩だから良いんです。
このルールは後輩君のみに適用されるのです！」

「え？ルールなんですか？」

「そう。
間違えて“先輩”って言っちゃったら敷地内１０週の刑になっちゃうよ？」

「どんだけ重いんですか！？」

エッヘンと胸を張る美波に思わず突っ込むハヤテ。
何だか掴み所の無い人だ。

「あ、いたいた！
おーい、ハヤテ君！！」

「「？」」

すると、ハヤテ達に向かってそんな声と共にがこちらにやって来る人が一人。
それはヒナギクだった。

「ヒナギクさん！！」

「あ、ヒナちゃん」

ヒナギクが二人の前に来ると、各々彼女に反応する。

「もうどこに行ってたのよハヤテ君。探したのよ……って、美波先輩じゃないですか」

「あ、もう！
みなみん先輩って呼ぶように言ったでしょう？」

ヒナギクの言葉に美波はまたまた頬を膨らませる。
何だかとても可愛らしく、とても先輩には見えないのだが。

「先輩はどうしてこんな場所に？」

「うん……
またバイト一つクビになっちゃって、新しいバイトを探してたら遅くなっちゃったのよ」

「またですか先輩……
先月もだったじゃないですか」

溜め息をつく美波にヒナギクは困ったように返す。

「でも今度こそ大丈夫。
次は上手くやってみせるわ！」

「ハハハ……」

彼女はグッと拳を握りしめて高々とそう宣言してみせた。
ヒナギクは取り敢えず苦笑しているが。

「あ、そういえば職員室にいって出てない授業のプリント貰いに行かないと……
それじゃあ、またねヒナちゃん。それと後輩君♪」

「あ、はい！」
「頑張って下さい（色々な意味で）、美波先輩」

美波はそう言って二人に向かって片手を上げるとハヤテとヒナギクはそれぞれ頷いて返す。
美波はちょっと走りながら校舎の方へ向かっていった。

「ヒナギクさん。
あの人をご存知なんですか？」

「ええ、嵩宮美波先輩。
色々と共感することも多くて家の事とかたまに相談にのって貰ったりしてるの。
たまにドジな所もあるけど、とっても優しくて皆から慕われてる先輩なのよ」

ハヤテの質問にそう言って優しい笑みを浮かべるヒナギク。
彼は美波の人柄を思い返して、なるほどそうだろうと納得した。

「ところでハヤテ君？
美波先輩と二人だけみたいだったけど、変な事とかしてないわよね？」

「へ！？
そんな事あるわけ無いじゃないですか！！」

「ホ・ン・ト・に？」

「勿論ですよ！！」

ジト目で尋ねてくるヒナギクに慌てて頷くハヤテ。
まぁホントに何にも無かった訳だが、ハヤテが答えるとシロも怪しくみえる。特に女性関係。

「まぁいいわ。
それより、早く行きましょう。
ナギも心配してるわ」

「そうですね！」

クルリと背を向け、武道場のある方向に歩き出したヒナギクの後をハヤテも追っていくのだった。

一方主人公は……

「あ～、今から咲夜の家に行かねーとな……」

一人寂しく下校していた。

翼は剣道部、伊澄は執事達に任せてある。

これから彼は幼馴染みの家に呪いが解けた報告とお礼をしにいくのだ。翼の言葉によって。

（絶対にからかわれる……

いや、からかわれるつーかそもそも幼児化した時の記憶が無いから余計に質が悪い。

何か記録されてたり、録画されてたりしたら……

あの咲夜の事だ、笑いネタとかいってやってるに決まってる……）

駿は重い足取りに加えて深々と溜め息を一つ。

（あ～、アイツがもっと優しくておしとやかな女だったらなぁ……）

そんな訳で、彼の苦悩は続きそうなのであった。

其の四十一　新天地と新境地って似てるけど特定の会話で使いどころ間違えたら

三人娘の
☆諸事情ラジオ★

美希
「では勿論このコーナー」

理沙
「オリキャラ紹介だ！」

～オリキャラ紹介～

嵩宮美波

【年齢】
１７歳

【家族構成】
父、母、祖母（故）

【身長】
１６４ｃｍ

【体重】
４６ｋｇ

【好き・得意】
学校、バイト、後輩君♪、後はこれから次第に明らかに

【嫌い・苦い】
これから明らかに

【備考】
腰まで届く栗色の髪をポニーテールにしている。
顔立ちは、可愛い7割、綺麗3割で出るとこは出てしまる所はしまったスレンダーボディ。

白皇学園二年生の女子高生。　現在は一人暮らしの為、バイトをいくつか掛け持ちして生活しているが、ドジな為、長くは続かない。かなり明るい性格なのだが、失敗が重なるとすぐに落ち込む。
　逆に立ち直りも早い。何回かドジが重なっても、周りからは不思議と嫌われずに、学校でもかなり皆から慕われている。
ヒナギクや他の後輩の話や相談を聞いてあげたりするお姉さん役としても人気。

彼女にはもう少し秘密があるが、それは追々明かすことになる。

美波
「はい！

ご紹介に預かりました、嵩宮美波です♪」

美希
「おお、ご本人登場とは。
ありがとうございます先輩」

泉
「ようこそ、諸事ラジへ♪」

美波
「ありがとう皆！」

理沙
「この際、駿君に代わって彼女に諸事ラジのアシスタントを…」

駿
「待て待て待て！！
何勝手に俺を後書きから追い出そうとしてんだオメーら」

美希
「ぶっちゃけ駿君がいても数字がとれないからな。
思いきって変更を」

駿
「本人の目の前で言うなよ！？
傷つくよ普通！？」

泉
「ではでは、今回はこの辺で♪」

駿
「終わるなよ！？」

美波
「次回もよろしくお願いします♪」

駿
「え？マジで終わｒ」

プツン……

其の四十二　ジムに行くとランニングマシンで隣の人と張り合ってついついとんでもない距離走ってしまう

今回でまた一区切りです。
次回は遂に他作者様の小説とコラボをさせていただきます♪

コラボの後はＩＦ篇を二つほどやります。

あと、今回から第何章という区切りは無くなるのでご了承下さい。

では、始まります！

其の四十二　ジムに行くとランニングマシンで隣の人と張り合ってついついとんでもない事になる

「くくく……わかりました。
どうやら貴方と戦う事は避けられぬ運命のようです！！」

「東宮君？」

放課後の武道場。
そこでは胴着を身に付けた桂ヒナギクといつも通りの執事服に竹刀を持った綾崎ハヤテ。その後ろに膝をつく東宮康太郎と隣には彼の執事である野々原楓。
そして武道場の壁には三千院ナギと鷹ノ瀬翼、河家執事の冴木氷室、彼の服の裾を掴んで後ろに隠れている主の大河がいた。

「ならばこの剣で……
僕が貴方より強い事を証明するまで！！ゆくぞ野々原！！」

「はい坊ちゃま！！」

東宮は立ち上がると竹刀を構えてそう叫ぶ。
野々原もそれに続いて竹刀を右手に持った。

「まぁそんな訳だからよろしくね、ハヤテ君」

「あ……はい」

一方ヒナギクは竹刀を持って後ろのハヤテに微笑むと彼等に対峙する。そして東宮はヒナギクに、野々原はハヤテと向かい合う形になった。

「……なぁ、三千院のお嬢」

「ん？」

そんな四人の様子を見ながら、壁際にいた翼はナギに向かって声をかける。

「前にも似たような光景なかったっけ？」

「ああ……
あったな。似たような光景が」

それは駿と翼が初めて剣道部に顔を出した時。
東宮が駿に決闘を申し込み、何やかんやで翼と野々原が戦う事になった話。

「つーかいいのか？」

「何がだ？」

「野々原さんはかなり強いぞ。
訳の分からん必殺技も持ってるし、ハヤテは危ないんじゃ……」

ヒナギクと東宮の勝負は見るまでも無いのだが、ハヤテと野々原の戦いではハヤテが心配なのかナギに顔を向けた。
しかしナギは腕を組んだままその言葉を一笑する。

「ふっ……
ハヤテならば大丈夫だ。
ハヤテは戦いにおいて無敵だし、加えて料理、洗濯、掃除、執事業はエキスパート、更に並々ならぬ資格を幾重にも習得していて、宇宙一カッコイイ（私だけの／／／）執事だからな！！」

「……いや、そこまでは聞いてないからな」

「故にハヤテが負ける事は決してない。
そう、例えて言うならば連○軍とザ○ト軍に立ち向かう蒼天の剣の如く！！」

「聞いちゃいないなこの娘は…」

目を輝かせ拳を握りしめるナギを見て呆れた様子の翼。

「さて……
それはどうでしょう？」

「「？」」

すると二人の隣にいた氷室が薔薇を手にしたままフッと口元を緩めて呟く。

「あの程度で野々原君に勝てるかどうか……」

「「え？」」

そんなナギ達が戻した視線の先ではヒナギクと東宮、ハヤテと野々原がそれぞれ対決を始めようとしているのだった。

其の二十二　ジムに行くとランニングマシンで隣の人と張り合ってついついとんでもないスピードで走っちゃったりする

「グスっ……グスン」

「おい、いい加減泣き止めよ咲夜」

夕暮れの商店街の一角に目に涙を溜めて俯いている少女と隣で声をかけ慰めている男の子がいた。

少女は大体五歳くらいで男の子は少し上の八歳くらいにみえる。

「だって……
あのブレスレット、せっかく駿兄ちゃんが今日、ウチの誕生日にくれたのに……」

「……」

少女はそう言ってまた瞳を潤ませた。そんな様子に男の子は困ったように少女の横顔を見つめる。

どうやら今日が女の子の誕生日なのだが、彼女がこの男の子から貰ったプレゼントを無くしてしまったらしいのだ。

「グスン……」

「また買ってやるから、だから泣くなって。
それよりもう帰ろう。
日も暮れてきたし、家の人達も心配してるから、な」

男の子の言う通り、
商店街は薄暗い橙色に染まり始め、空も橙色に紫色が混ざり夕暮れの終わりをゆっくりと告げようとしている。

「ちゃうねん、そういう問題やない」

「？」

「大事な物を無くすウチの不注意さが情けないんや。
だから見つかるまで帰らへん」

少女はそう言って涙で濡れた瞳を擦る。
そこにはしっかりとした意志が込もっていた。

「駿兄ちゃんは先に帰ってて。
もう遅いし、迷惑かけられへんから」

「……」

少女はそう言って男の子に背を向けると、一人商店街から無くした物がを探すためにもと来た道を戻り始めた。

「……ったく」

男の子は暫く彼女の後ろ姿を眺めていたが、溜め息を一つ。
そして少女を追い越して前に立つと……

「ほら、行くぞ」

「？」

彼女に向けて手を差し出した。
そんな彼に少女は首を傾げるが、彼は手を引っ込めない。

「一人より二人の方が早く見つかんだろ。
だから、暗くなる前にさっさと探すぞ」

「……」

暫く少女は黙って男の子を見ていたが、

「うん！！」

次の瞬間には大きく頷いて、嬉しそうに微笑む。
そうして彼女が男の子の手をしっかりと握ったのだった。

「……ん、」

駿が目を開けるとそこはいつも和室では無いが、見慣れた洋室だった。

（……いつの間にかうたた寝しちまったのか）

ソファにひじ掛けに頬杖をついていた彼は、ゆっくりと身体を立てると手で目を擦る。

ここは愛沢家の応接間。
そこにあるソファで彼は少し眠ってしまったらしかった。

（ん、遅いな咲夜のヤツ）

駿は時計に目を向けると息をついて部屋の扉の方に視線を移動させる。

彼が愛沢家の屋敷に来たのは３０分くらい前。
チャイムを鳴らして出てきたのは執事の国枝で、咲夜は外出しているので暫く応接間で待つように言われたのだ。
駿は一旦帰ろうかと思ったが、すぐに戻ってくるような口調だったので待つ事にしたのだが。

（やっぱり一旦帰って出直した方が良いかな）

彼はそう考えてソファからゆっくりと立ち上がる。
とその時……

ガチャ……

応接間の扉が開いて人が室内に入ってきた。
しかしそれは咲夜では無く……

「おお、駿君じゃないか。
久しぶりだね」

「あ、咲夜のお父さん。
お久しぶりです」

Ｙシャツの上にベージュのスーツと紺のネクタイをした、灰色の短

髪に眼鏡を掛けた男子。
咲夜の父親だった。

彼の挨拶に駿は少し驚いたように会釈を返した。

「うむ、久しぶりだ。
最後に会ったのはシチリアの海岸でバーベキューをして以来だね。
いやぁ、あの時は楽しかった。
昼は皆で大騒ぎし、夜は海辺でシチリアの晩鐘について語り合った」

「え……そんな事ありましたっけ？」

「……無かったな」

不思議そうに聞き返す駿に、咲夜の父親はふむふむと頷きながら駿の前のソファに腰を降ろした。

「相変わらずですね」

「その通り。
変わらない事が私の美徳なのだよハーブ・コール君。
まぁ、座ってくれ」

（ハーブ・コール？）

駿は首を傾げながらも咲夜の父親に言われた通りにもう一度ソファに着いて小テーブルを囲んで向かい合った。

「いつこちらに戻っていらしてたんですか？」

「ああ、一昨日大阪から子供達と戻って来たんだ。
いや、一年ぶりかな。
子供達はちょくちょくこちらに来ていたが。
また来週になったら向こうに行くのだがね」

「そうなんですか。
それは大変ですね」

「ハッハッハ、中々面白いアメリカンジョークだね駿君。
腕を上げたね」

「いや、ジョークなんて一言も言ってませんけど」

父親は愉快そうに笑うと、いつの間にか用意されていた紅茶を啜った。

「いやいや、流石は私の見込んだ男だね。
どうだろう、ウチに婿に入る気は無いかな？
君になら安心して咲夜を任せらるるのだが」

「全然話が見えないんですけど」

「ハッハッハ。
冷静なツッコミ、一本やられたね」

（一本？）

愉快そうな父親としばしば首を傾げる駿。
談笑をしているようで全く話が噛み合っていない会話。

「あの、そういえば咲夜は？」

「ああ、そうだった」

取り敢えず駿は紅茶を啜って一息いれると、話を元に戻した。
父親は思い出したようにポンと手を叩く。

「いや実はね、咲夜はまだ出掛けているのだが……
いつ帰るか分からないようなのだよ。それを伝えようと来たのだった私は」

「そうですか……
わかりました、だったら俺は一旦家に戻ります。
また改めてお伺いしますので」

「うむ、そうか。
いや悪いね。
帰ってきたらこちらから連絡するよ」

「お手数おかけします」

いつ帰ってくるかも分からないのならば駿は一旦家に戻ろうと考え、
ソファから立ち上がり父親に会釈をした。

「しかしこのまま帰すのも忍びない。
そうだ、せっかくだから何か見せてあげよう」

「いえいえ、そんなお構い無く」

「ハッハッハ、遠慮することは無い。

直に婿に入り私の息子となる駿君の為だ」

「なりません」

「アメリカンジョークさ」

父親は楽しそうにチッチッチと人差し指を振ると、立ち上がる。

「よし、だったら私も得意の裸漫談を披露してみせちゃうk」

「「させるかボケェェェ！！」」

自分の服に手をかけようとした咲夜の父親を止めたのは、二つの元気なツッコミだった。

父親はいきなり出てきたハリセンで頭を叩かれて慌てて振り返る。

「な！！父さんになにをするんだ日向、朝斗！！」

「何をやあらへん！！

お客様の前で何さらそうとしとんねんお父ちゃん！！」

「せやせや！！」

父親にハリセンでツッコミをいれたのは二人の子供だった。

一人はショートカットの女の子、もう一人は短髪の男の子だった。

「だからっていきなり叩くことないだろう！？

ドメスティックバイオレンス！？」

「お父ちゃんがアホな事しようとするからやろ！！」

「よし分かった！
取り敢えず二人の怒りを鎮めるために父さん裸になるよ」

「「鎮まるどころか悪化するはドアホォォォォ！！」」

応接間に飛び交う響き渡るボケとツッコミ。
駿はどうしたものかと半ば呆れたように成り行きを眺めていたが、

「「あ！！」」

すぐに、日向と朝斗と呼ばれる二人が駿の存在に気付く。
二人はクルリと駿の方に向き直った。

「全然モテへん駿兄ちゃんや！！」

「ホンマや！！
恐ろしくモテへん駿兄ちゃんがお客さんやったんか！！」

「うるせぇぇぇガキ共！！
人様の名前の前に辛辣な言葉を置くんじゃねぇ！！」

日向と朝斗が嬉しそうに指を差すと、駿は怒りマークを浮かべて叫び返す。

「ほら、そうやってすぐに怒るからモテへんのや。
これだから駿兄ちゃんは……」

「それに辛辣や無くて事実やろ」

日向はやれやれと肩を竦めてあからさまに溜め息をつき、朝斗は真顔で言葉を駿の胸に突き刺す。

「モテないって決め付けてんじゃねーよ！！
オメーらが知らない所でもしかしたらモテてるかもしれねーだろ！！」

「それって画面の中やん？
もしくは自分の脳内のみやろ」

グサッ！！

日向はいとも簡単に駿の言葉を切り捨てる。

「な、んな事ねーよ
俺が本気を出せばラブレターの一つや二つ、容易く……」

「無理無理。
不可能や、ミッションイン〇ッシブルや。
イー〇ンでも成し遂げられんミッションやな」

「うんうん。
咲姉ちゃんもいつも言ってるしな」

グサグサッ！！

反撃する隙さえ与えずに着実に駿の心にダメージを与えていく日向と朝斗。
例えて言うならば羽〇にバーサカー〇ウルを使う遊〇の如く。

「まぁまぁ、でもええやないか。モテへんのは仕方ないやん。だって駿兄ちゃんやから」

「せやせや。
駿兄ちゃんがモテたら世の中ひっくり返ってまうやん。
だからこのままが一番やで」

フォローのフの字にすらなっていません。
駿のライフはもう零で、
ガラスのハートは粉々だ。

「フッ……」

「「？」」

するとがっくりと膝をついていた駿が自虐気味に口元を緩めた。

「上等だガキ共……
モテない男達がいかに辛く険しい道のりを歩んでいるか……」

そしてゆらりと立ち上がり…

「その身に教えてやらぁ！！
そこになおれテメーらァァァァ！！」

「「モテへん男が怒ったーーーーっ！？」」

追いかけっこが始まった。
逃げる子供二人を全力で追いかける駿。
とても大人気無く情けない光景である。

「ハッハッハ、いや愉快愉快。
やはり家には笑いが無いといけないね」

そして呑気に笑っている咲夜の父親なのであった。

～武道場～

「超爆裂炎冥斬（セーフティーシャッター）！！」

「ぐはっ！！」

武道場では野々原が超必殺技を繰り出しハヤテが追い詰められる展開となっていた。
横には伸びている東宮と終始呆れた様子のヒナギク。

「あの……
あんまり燃えてもらると武道場が焦げてしまうんですけど…」

「つーか火事になるよな普通」

ヒナギクは呆れ半分心配半分といったようにそう言う。
しかし翼の言う通り焦げる以前に火事にならないかが心配である。

「しかし、このままでは三千院家の執事が負けてしまうね」

「む、そんな事は無い！！
ハヤテは絶対に負けん」

薔薇を片手に冷静に戦局を眺める氷室とハヤテの勝利を信じてグッと拳を握りしめるナギ。

「というか氷室さん」

「なんですか会長？」

「前から思ってたんですけど、
どうして野々原さんは燃えてるのに平然としてるんですか？
そもそもどうやって燃えてるんですか？」

呆れ半分のヒナギクの質問に氷室はフッと微笑した。
簡単な事だとでもいうように。

「決まっているじゃありませんか、それは一流の執事だからですよ」

「……」

「一流の執事たるもの、あのくらいの超必殺技は一つや二つ使いこなせて当然。
全身が火に包まれようと電撃を身に纏おうと何ら驚くべき事はありませんよ」

（執事って……）

ますます執事に対する疑念が膨らむヒナギクだった。

＊

「ただいま帰りました……」

鷺ノ宮屋敷。

駿は疲れたようにそう言うと玄関から屋敷に上がっていく。

日向、朝斗と追いかけっこしたりまた咲夜の父親が裸漫談をしようとしたり、再びそれを日向達がぶっ叩いたり、転んだり、挟まったり、刺さったりしてようやく自宅に帰ってきたのだ。

咲夜の家には明日にでも行こうと考えた。

駿が元に戻った報告は今朝翼が電話で話してくれたそうなので、今すぐ行かないといけない訳では無いのだ。

明日の放課後にもう一度伺おうと思いながら、廊下を渡り自室に向かっていく。

「しかし、ここ数日でホント色々あったなぁ……」

妖刀を貰ったと思えば呪いを受けて精神を吸い込まれたり、変な蜥

蜴の妖精（自称）に会ったり、一緒にテレビを見たり、ワ〇ダに出てくるような巨大な火蜥蜴が現れたり、それを倒したり……

「思い出したら何か疲れてきた……ちょっと寝るかな」

駿は自室に入ると、溜め息と共にそう呟いて朝から敷きっぱなしだった布団に近付いていく。

着替えをする前に掛布団を剥がして……

「ホンマ大変やったな～、自分」

「ああ、ホントに大変……」

・・・・・・

「って、何でお前が俺の布団に居るんだよ!?」

布団には制服姿の咲夜が横になっていたのだ。

駿は突然の事に思わず声を上げて後退る。

「用が無いと居たらいけんの？
ウチと自分の仲やないの」

「な!?
っっ……」

咲夜わ起き上がると胸に両手を当てて上目遣いで駿を見る。

駿は紛らわしいその言い回しに上手く言葉が返せなかった。

「まぁそんな冗談はさておき。
ちょっと自分、女の子が寝てる部屋にいきなり入って来るなんてデリカシーが無いんとちゃう？」

「ここ俺の部屋なんだけど。
だから何でお前は俺の……」

駿が尋ねようとするが咲夜はピッと指を彼の口に当ててその続きを止めた。

「悪いけど……少し静かにしてくれへん？
今はそういう気分やないねん」

「……？」

彼女の目が真剣なものだったので駿はますます訳が分からないと首を傾げた。
すると咲夜は手をそっと離して続ける。

「ウチな、家出してきてん」

「家出ぇ？」

彼女の口から出た予想だにしなかった言葉に駿は思わず聞き返してしまった。

「家出ってお前……
何があったんだよ？」

「……」

すると、彼女の瞳に涙が浮かび上がってきた。

「!?」

まさか泣いてしまうとは。
あまりに突然の事に駿は焦って思わず立ち上がる。

「ちょっ、おまっ!!
何で泣いてんの!?
え?もしかして何か聞いちゃいけない事だった!?」

慌てまくりの駿に咲夜はふるふると首を振った。

「ちゃうねん……
家で……」

「い、家?」

「お父んや皆が……
あんまりにも無茶な事言い出して……」

そう言って肩を震わせる咲夜。
目からは涙が零れおちる。

(ひょっとして喧嘩とかか?
そうか、咲夜の父さんいつ帰るかも分からないって言っていたのはそういう意味だったのか)

先程の咲夜の父親との会話の謎が解けた駿。
だが今はそんな事をのんびり考えている場合ではなく……

「……ったく。
何があったかは知らねぇけど、
力になれるならなってやっから。だから話してみろ」

「駿……」

「それに、呪いを受けてた時世話になった礼もちゃんとしてないからな」

潤んだ瞳を向ける彼女に駿は頭を掻きながらそう言った。
何だかんだ言っても幼馴染みだし幼児化時には迷惑もかけたので、
何とか力になろうという駿は気持ちは真剣である。

「けど、こればっかりはいくら自分でも……」

「いいから。
悩んでる事があんなら話すだけで気が楽になる事もあんだろ。
誰にも言わねーからその辺も心配いらねぇよ」

「……」

咲夜は彼の言葉を聞くと、彼を見上げる。

「なら……
恥ずかしいけど自分だけに打ち明けるで？」

「ああ」

意を決したのか咲夜は駿を見つめたまま口を開いた。

「歯がな……痛いねん」

「……」

・・・・・・・

「は？」

「そんなギャグ笑われへんわ。
ホンマ痛いんやから」

唖然として聞き返してきた駿に、咲夜は右頬を押さえて涙目になりながら訴える。

咲夜の悩み……
それは“虫歯”だった。

いきなりの告白で暫し唖然としてしまった駿だったが、
何とか解決法を口にする。

「……歯医者行けよ」

「いややぁぁ！！
自分もあのお父んと同じ事言うんかぁぁ！！」

「……」

「あんな歯の治療と称した刃物が並ぶヤクザの事務所より恐ろしい煉獄に行かせるなんて非道や！！外道や！！」

咲夜は目にいっぱいの涙を浮かべて叫ぶ。
右手は尚も痛そうに頬に添えられたまま。

「歯医者が怖いって……
お前は幼稚園児かっ！！」

「だって怖いんだから仕方ないやん！！怖いものは怖いやん！！」

呆れたような駿の言葉だが、咲夜の言う通り人間やはり怖いものは怖いのだろう。

「ウチ、あれだけはホンマだめやねん。考えただけで泣きそうになるねん」

（ああ……
そういやコイツ、昔歯医者が嫌がってた事があったな……）

ふと小さい頃の思い出が駿の脳裏に過る。

（しかし、虫歯は歯医者で治療するしか術が無いしな。咲夜には悪いが今回は歯医者に行って貰うしか……）

「こんな事相談出来るのはもう自分しかいないんや。
ウチ、どうしていいか……」

「う……」

彼は解決法は歯医者の一点しか無いと判断し彼女に伝えようと顔を上げるが、普段は見せないようなか弱い咲夜の様子と言葉、そして潤んだ瞳に駿は良心が痛んで思わず口をつぐんでしまう。

（だからといって他に方法なんて……ん？）

不意にある可能性が彼の頭に思い浮かんだ。
ここは他でもない、鷺ノ宮家ではないか。

「あ～、んじゃちょっとここで待ってろ。
ちょっと方法を探してくるから」

「うん……」

駿は咲夜にそう言うと、背を向けて一旦部屋から出た。
そして彼が向かったのは……

銀華の部屋だった。

「何？
虫歯の治療？」

「ああ。
実はさ、知り合いが酷い虫歯になってんだけど歯医者がダメだって

言うんだよ。それでここって鷺ノ宮家じゃん?だから歯医者に行かなくて済む治療方法は無いかな～って」

「ふむ……」

駿の言葉に銀華は腕を組ながら納得したように頷く。
咲夜というのは敢えて伏せておいた。特に理由は無いが。

「直接的な治療は無理だの。
そもそも鷺ノ宮は術式を主とする一族だからな。
それに回復の類いは切傷等の怪我のみで今のところ伊澄しか使えん」

「そっか……
あれ、そういえば伊澄は?」

「下校中に迷子。
静岡の民家で保護されたという連絡を受けて、執事達がヘリで至急迎えに行った
そろそろ到着している頃じゃろ」

「静岡……
富士山とお茶か」

伊澄はいつも通りテレポート並の迷子スキルで静岡にいるらしい。
杉並区から静岡。
伊澄の迷子にしては中の下くらいだろうか。

「じゃが、治療は出来なくても移す事なら可能じゃ」

「へ?」

銀華はニヤリと笑うと室内にある棚から何かの御札を取り出してきた。
そして駿に差し出す。

「これは？」

「これは“移せりの札”
病や怪我を違う人間に移せる魔札じゃ」

「物騒な札だな」

それを聞いた駿は顔をしかめる。使い方によっては悪事にも利用出来そうだからである。

「これを病にかかっている者の額につけて移したい病気を思い浮かべたあと、代わりになる者の額につける。すると病気は何と入れ替わるのじゃ。
まぁ虫歯くらいならなら人助けには使えるが……
どうする？使うか？」

「まぁ、そうだな。
んじゃ使わせて貰うか
助かったよばあちゃん」

駿は暫し考えた後、御札を受け取った。
そしてゆっくりと立ち上がる。

「それで？
一体誰に移すんじゃ？」

「はぁ……
んなもん一人しか居ねーだろ」
銀華の問いに駿は深々と溜め息をついて部屋を出ていった。

～武道場～

「はぁ……」

「う～」

「疲れた～」

武道場ては美希、理沙、泉が溜め息を吐きながら雑巾をもって床を拭いていた。

「まだ始まって１０分も経ってないだろ。
頑張れ三人娘」

「「「だって～」」」

そんな三人へ壁を掃除しながら鼓舞する翼。

「大体何で私達まで武道場の掃除をしないとならないのだ！！」

「まぁまぁお嬢様……」

その後ろでは何とあのナギが箒をもって憤慨していて、ハヤテは同じように箒を持ちながらそれを宥めていた。

「仕方ないでしょ？
さっき試合で武道場が汚れちゃったんだから。
だから皆で協力して早く終わらせましょう」

そんな不満に対してヒナギクは胴着姿でやはり壁を掃除しながら答える。

ハヤテと野々原の対決は何やかんやでハヤテの勝利―無論野々原は手加減していたが―となった。
その対決の後、武道場がかなり散らかってしまったのでヒナギク、翼を始め、生徒会をサボっていた三人娘、ハヤテ、ナギで掃除をしているのだ。
ハヤテは自分のせいだと進んで掃除をしているが、ナギは何故自分がと不機嫌である。
まぁお嬢様だから仕方がないといえば仕方がないが。

「ほら頑張れって。
終わったら調理室でデザート作ってやるから」

「おお！！」
「ホント？翼君♪」
「翼君の料理は天下一品だからな」

グテーっとしている三人娘に翼がそう言ってあげると、途端に目を輝かせる。
翼の料理が天才的に上手いことはたまに生徒会に持ってきてくれるケーキやクッキー等でメンバーには周知の事実なのだ。

「「「よ～し、頑張るぞー！！」」」

「ホント現金だなお前ら……」

そんな訳で、七人は暫く武道場の掃除に勤しむのであった。

「「「デザートをご馳走になって宿題も手伝ってもらおー！！」」」
「そんな約束はしてねぇ！！」

＊

「へ？
催眠術？」

「ああ」

場所は戻って鷺ノ宮屋敷。
駿は自室に戻って布団の上に正座している咲夜に説明していた。

「鷺ノ宮家に伝わる治療用の催眠術をかけて感覚を一旦無くして痛みを感じなくさせるんだ。
その間に、ちょうど今家に来ている鷺ノ宮家の親戚で日本屈指の歯科医が一瞬で治療してくれる。
これならお前の悩みも問題無く解決できる上に安全性、予防対策もバッチリだ」

勿論全て嘘である。
だが正直に他人に迷惑がかかると話したら彼女は止めると言うだろうし、そもそも御札一枚で治るなど今時胡散臭いにも程があるのでいた仕方ない。

「う～ん、何やよう分からんけど……駿がそう言うんやったら」

咲夜は取り敢えず了承したのか頷いてくれた。

「よし、目ぇ閉じろ」

「ん、」

駿に言われた通りに彼女は目を閉じる。

「んじゃ、今から催眠術をかけるからな。
目だけは絶対に開けるなよ。
開けたら効果がきれて激痛が歯に走る」

「わ、分かった」

彼はそう警告すると、札を取り出して咲夜の額に押し当てるのだっ

た。

１５分後……

「はい、口を閉じて」

「……」

咲夜はまだ目を閉じたまま口を閉じる。

移す作業自体は二分足らずで終わったのだが、それで終了ではあまりにも信憑性が無いため彼女に目を閉じさせたまま暫く口を開かせたり口を閉じさせたりしていたのだ。こうすると本当の催眠術のような気がするが。

「よし、もう大丈夫だ。
目開けて良いぞ」

「……？」

駿はわざとらしくパチンと指を鳴らすと、咲夜は恐る恐る目を開いた。

「どうだぁ？
もう全然痛くねーだろ？」

「……あ、ホンマや」

「催眠術もきったから口の感覚も元に戻ってる筈だ」

「うん、もう痛くあらへん♪」

駿の言葉に咲夜は本当に嬉しそうに顔を輝かせる。
その様子に彼は安堵したように息をついた。
ついでに『もう二度とこんな事は出来ないから虫歯予防はしっかりしろよ』と念を押しておく。

「でも、口を治療された感覚とか無かったような……」

「それはお前、催眠術にかかってたからな。感覚が一切無かったんだよ」

「さよか。
あ、でもずっと駿の声しか聞こえへんかったよ？」

「あ～、その歯科医はとてもシャイな奴なんだよ。
“おはよう”と“いただきます”と“おやすみ”しか喋らないんだ」

彼女の疑問に駿は天井を見ながら答える。

「それに気配もしなかったような気が……」

「あ～、うん。
ホント幽霊みたいな奴だからな。真後ろに立たれてても気付かない

んだよ」

これ以上突っ込まれたらまずいと思った駿は話題を変える事にする。

「それより、早く家に帰らねーと親父さんや巻田さん達が心配するぞ？」

「あ、せやな」

思い出したのか咲夜は少し慌てて立ち上がると障子の前まで歩いていき駿に振り返った。

「駿、ありがとな♪
助かったわ」

「別になんもしてねーよ。
治療したのは歯科医であって俺じゃねーからな」

「ううん、そんな事あらへんよ。自分に相談してホンマに良かったわ♪ありがとう」

「分かったからさっさと行け。
眠いんだよ俺は」

駿は頭を掻くと面倒臭そうにそう言うと、咲夜は嬉しそうに制服を翻して部屋を後にした。

「痛っっ……」

彼女が見えなくなったのを確認すると、彼は顔をしかめて右頬に手を当てる。

「全く…
知り合いというのは咲夜だったか」

「!?」

いきなり後ろから声が聞こえてきたので振り返るとそこには銀華がニヤニヤしながら腕を組んでたっていた。

「はて?右頬が腫れているな?
どうした、チンピラにでも殴られたか?」

「……和菓子食べ過ぎて虫歯になった」

駿は右頬を押さえながら憮然とした表情でそう返した。

「そうか虫歯か。
ならば歯医者に行かんとな。
それとも“移せりの札”でも使うかの?これは病を人に移せるという魔札じゃ」

「いや……」

相変わらずニヤニヤとしている銀華に駿はズキスギする頬を押さえて一言。

「歯医者で」

因みに……

駿は銀華が紹介してくれた鷺ノ宮系列の歯医者に行ったのだが、

「ぎゃあぁぁぁぁぁぁ！！！」

「し、死ぬゥゥゥゥゥゥ！！」

そこの歯医者は一発で治るがお客の阿鼻叫喚が飛び交う超痛い歯医者だったので、

駿は虫歯が少しトラウマになったという……

其の四十二　ジムに行くとランニングマシンで隣の人と張り合ってついついとく

ご覧になっていてお気付きになった方もいるとは思いますが、
咲夜の父親並びに弟妹は大阪と東京を行ったり来たりしているという設定を勝手につくってしまいました。

子供達はよく東京の方に帰って来ますが、父親は度々大阪に行くという感じです。

本編でもどうなっているのかよく分からないので、勝手に設定してしまいました。
ご了承下さい

次回もよろしくお願い致します

特別話　この世の裏側には何億という別世界があるんだよって昔おじいちゃんが

祝コラボ！！

☆前書きのあれこれ★

「はい、注目～」

とある和室で、パンパンと手を叩いて室内に声をかけていれ鷺ノ宮駿。

「何や？
前書きで改まって……」

畳の上にあるちゃぶ台に頬杖をついて駿の方に目を向けたのは愛沢咲夜。

「つーか、何で俺までここにいんだ？」

咲夜に向かい合ってそう呟いた少年は橘ワタル。

咲夜とワタルの二人は何故か前書きにこうして集まっている訳だが…

「今日オメーらを前書きに召集したのは他でもねぇ。

今回、この小説は他小説とコラボする事になったんだが……」

「「ええ！？」」

さらりと話を進めようとする駿だが、ワタルと咲夜は驚きの声を上げる。

「ちょっ、何やそれ！？
そんな話聞いてへんよ
一体どんな作品とコラボするん！？」

「俺達がここに居るのも関係あるって事か！？」

「うるせーなぁ。
だから、今からそれを説明するんだろーが」

駿は頭を掻きながらそう言うと、何処からともなく移動式の黒板を引っ張り出してきた。
そしてチョークを手に黒板を二三回叩いてみせる。

「いいか。
今回俺らがコラボを依頼された作品は【桐生乱桐】先生が執筆する二次創作『とある科学の超電磁砲～今を戦うガタック～』
『とある魔術の禁書目録～戦いの神と呼ばれた者～』
という小説だ。
見て分かる通り、原作はとある科学の超電磁砲、とある魔術の禁書目録。
この二作は続編になっている。
学園都市と呼ばれる人口のほとんどが学生という街、ありとあらゆる最先端技術や学生全員に施される人為的な超能力の集まる超科学

都市が舞台になっている。

その学園都市で風紀委員（ジャッジメント）という言わば学生の治安維持組織のようなものに所属する主人公『鏡弥アラタ』とヒロインであるレベル５の超能力者『美坂美琴』を始め、風紀委員のメンバー、原作の主人公や学校の仲間達、学園都市の仲間達が繰り広げる笑って泣けて熱くなれるラブコメバトル小説だ。

しかしこの小説の特徴はとあるの世界に仮面ライダーの世界観を組み込んだ事だ。

主人公を始め、様々な仮面ライダーが登場する。

また、仮面ライダーに登場していた主人公達も出演しているんだ」

「おお、何か凄い面白そうだな！」

「ウチの駄小説とは違って華がありそうやな～」

ザッと説明した駿に対して、ワタルは興味津々といった視線を黒板に向ける。

そして実際咲夜の言う通りこんな小説より遥かに華があるのは確かである。

「その小説がウチらの小説なんかとコラボしてくれるなんてありがたい話やないの

何やこの小説もまだ頑張れるやないか」

「俺も本物のライダー見てみたいぜ！！」

咲夜とワタルは今回のコラボが楽しみなようで盛り上がり始めるが……

「バカヤロォォォォォ！！」

「ぐはっ！？」

駿がそんなワタルに喝を入れるべく右ストレートをお見舞いした。

「ワタル！？大丈夫か！？
ちょっ、いきなり何すんねん駿！？」

咲夜は慌ててワタルに駆け寄り彼を助け起こす。

「何浮かれてんだテメーら。
今回のコラボがこの小説存続の危機に繋がるって事が分からねーのか？」

「存続の……」
「危機！？」

二人は驚いたように声を上げるので駿はやれやれと溜め息をつく。

「いいか。
桐生先生の所の、いや原作のとあるシリーズの世界観。
それは魔術や科学、超能力といったそれはもう凄まじい能力が飛び交うものだ。
人間が火の玉や風を起こすのは序の口。テレポートやあらゆる物質の完全反射、コインを弾いて電磁砲を繰り出す能力者なんて化物みたいな連中もいる。
他にも異能力を全て打ち消せる能力……イマジンなんちゃらとかいうものを持っている奴もいる。

そして学園都市を支えるカッコイイ仕事や役割、それと対立する魔術サイドも徹底された世界観で読者を魅了している。
それだけでなく、更に今回コラボする小説には仮面ライダーも組み込まれ異能力、超能力、魔術、ライダーの必殺技や見応えある派手なバトルが特徴の一つになっついる。つまり……」

「「つまり……？」」

「今の現状でコラボなんてしてしまったら……
今まで以上にこちらの地味でグダグダ感が露見され、読者の皆様に更に呆れられちまうって事なんだよ！！！」

ドーン！！

駿が指を突き出してそう叫ぶと、和室に衝撃が走ったかのように室内の空気が震えた。

「せ、せやな。
確かにウチらの小説は基本地味やしバトルの際も必殺技とかあらへんな」

「そ、それに最近だとグダグダ感に拍車がかかり既に多くの読者から呆れられている始末」

咲夜とワタルは今のこの小説の現状を思い出す。
駿も腕を組んで黒板に寄りかかり頷いた。

「そういうこった。

コラボコラボと浮かれる前に、自分達の小説がそれに値し、且つ問題無くこなせる作品なのかどうかを振り返らなきゃならねーんだよ」

「なるほど……
駿はそういう事をしっかりと考えてた訳やな」

「当たり前だ。伊達に主人公やってる訳じゃねーんだよ。
それに……」

駿は組んでいた腕を解いて二人に再度指を突き付ける。

「このままコラボしたら、
向こうの華がある主人公に比べて、俺の地味でダメダメな所が浮き彫りになってますますモテなくなるじゃねーかァァァァ！！」

（（結局……！！
そっちの心配かい！！！！））

渾身の訴えは結局自分の事で、咲夜とワタルは『やっぱり馬鹿だコイツ』と思うのだった。

「でだ、それで今回オメーらを読んだのは他でも無ぇ。俺達三人で向こうの小説に徹底対抗するんだよ！！」

「な、なんやて！？」
「何だって！？」

衝撃を受ける二人を気にせず駿は続ける。

「そこで俺達はここで団結し、
対コラボ組織を結成しようと思う」

「「はぁ！？」」

「そう。俺達三人のグループは今から！！
【諸事情解放戦線】
〈Ｆｒｏｎｔ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　Ｌｉｂｅｒａｔｉｏｎ　ｏｆ　ｓｏｍｅ　Ｃｉｒｃｕｍｓｔａｎｃｅ〉
略して【ＦＬＣ】！！」

ドーン！！

「って、待たんかいィィィ！！」

「うるせーなぁ。
んだよ咲夜」

「何独立国組織みたいな名前付けとんねん！！
どこから解放されようとしてんのや！！自分のアホな頭か！？」

咲夜は今にもハリセンで駿の頭を叩きそうな勢いで突っ込む。

「何言ってんだ。
このくらいの名前を付けねーと向こうさんに対抗出来ねぇだろうが」

「せんでええわ！！」
「しなくていいよ！！」

咲夜は勿論ワタルまで声を揃えて叫ぶ。

「オメーらなぁ……

向こうさんなんて風紀委員って書いてジャッジメントって読んでるからね。警備員をアンチスキルって読んでるらかね。

幻想殺しと書いてイマジンブレイカーって読む凝りようだからね。

だったらこっちもメチャクチャ凝ってる名前で対抗すりゃいいんだよ。

俺達ＦＬＣとか生徒会（セキュリティーキーパー）とかな。

そもそも幻想だったら英訳したらイマジネーションだろーがぁ！！

イマジンだったら動詞じゃねぇかぁ！！」

「「いい加減にせんかぁ！！

ダメ主人公がぁぁぁぁぁ！！」」

バキッ！！！

「ぶべらっ！？」

ワタルと咲夜はついに飛び蹴りを炸裂させた。

駿は黒板もろとも吹き飛ぶ。

「何勝手に生徒会に名前付けとんねん！！お前の感想なんてどうでもええわ！！」

「そもそもＦＬＣなんて入ってねーよ！！活動云々も今作ったばかりだろ！？」

「痛っっっ……」

怒りを通り越して呆れ果てた二人の前で駿は頭を擦りながらヨレヨレと立ち上がる。

「ま、まぁ落ち着け……
この即興組織【ＦＬＣ】はちゃんとした活動目的があるんだよ…」

「「……」」

どうせ録な事では無いだろうとジト目で目の前の馬鹿を見る咲夜とワタル。

「それは無論……
コラボの話を白紙に戻ｓ」

ドオォォォォォォン！！

高らかにそう宣言しようとした駿に突然御札が飛んできて爆発してしまった。

「いい加減にして下さいお兄様。いつまで前書きを引っ張るつもりですか」

「すみません……
調子乗ってました……」

やって来たのは鷺ノ宮伊澄。
丸焦げになって畳にめり込んでいる駿は何とかそう答えた。

「全く……
馬鹿のせいでえらく話が反れてもうたな」

「そうだな。
それじゃあ、ようやくだけど話を始めるか」

「今回はコラボ篇です。
桐生乱桐様の小説とコラボさせていただきます。
ありがとうございました」

咲夜、ワタルの言葉に続いて伊澄がペコリと頭を下げる。

「因みに、前書きの内容は関係あらへんからな……多分」

「それでは、
今回もよろしくお願い致します」

一同ペコリ。

注）今回の話は特別編の為に時間軸は小説本編とは一切関係ありません。ご了承下さい

特別話　この世の裏側には何億という別世界があるんだよって昔おじいちゃんが

「あ～……
暇だな……」

ここは鷺ノ宮家のお屋敷。

東京にある三千院家や愛沢家等の超お金持ちと並ぶ名門の武家一族であり、同時に先祖代々から妖怪や悪霊といった悪鬼羅刹の類いの退治を生業としている由緒正しき家柄である。

そして屋敷の縁側に座りながら中庭を眺めて座っているこの青年が鷺ノ宮駿。
一応この小説の主人公。

「伊澄もまだ帰って来ねぇし……」

“伊澄”とは彼の妹の鷺ノ宮伊澄ことだ。
鷺ノ宮家歴代最強を謳われる式術師である。

「ん～、何をしよう。
あ、そうだ。伊澄が帰ってくるまでこの溢れる伊澄への愛を歌にしてみよう」

駿は所在の無いように空を見上げると閃いたようにそう呟いた。

聞いて貰って分かる通り、この青年は妹の伊澄が可愛くて可愛くてたまらない、つーかもう愛し過ぎて死にそうだという超ド級シスコン野郎なのだ。
どの程度のシスコン度かというと初対面の相手は勿論、酷い時は長年付き合いがある者もドン引きさせる程のものにまでに至るという妹馬鹿っぷり。

「いや？
歌よりもこのときめきを詩にしようか。その方が伊澄の心に響きやすいような……
いやいや、詩ってお前。
女子か俺は。
それよりは和歌だな。
伊澄への愛を込めた和歌。
うん、それでいこう。
伊澄の感動して涙する姿が目に浮かぶ……
さて、掴みは……
う～む……ちょっと待てよ？
やっぱり歌の方がいいかな。
うん、和歌より歌の方が熱い想いを伝えられるな。
よし、歌にしよう。歌に決定。
テーマは俺から伊澄に捧げるラｂ」

「喧しいわァァァァァ！！！」

駿が決意も固く立ち上がろうとした時、彼の背中に怒鳴り声とともに渾身の飛び蹴りが炸裂した。
馬鹿は顔面から中庭の地面に突っ込む。

「全く貴様は……
真っ昼間からでかい声で馬鹿な事をべらべらと。
大体学校はどうした、学校は」

「い、いや……
今回は特別編だから。
その辺のアレは曖昧なんだ」

「早速メタ発言すな馬鹿弟子」

顔面傷だらけでヨレヨレと立ち上がる駿を見て呆れたように溜め息をつく女性。
彼女は鷺ノ宮銀華。
見た目は可愛い幼女だが実は年齢は９１という駿の曾祖母なのだ。
同時に幼い彼に体術や剣術をとんでもなく厳しいスパルタで叩き込んだ師匠でもある。

「いい加減少しは妹離れ出来んのかお前は。
しかも歌って……」

「良いじゃん別に。あまりにも退屈なんだし」

駿は口をへの字に曲げると、身体の土を払いながら銀華に言葉を返す。

「ほぅ。
ならば退屈しのぎに稽古でもしてやろうか？全力で」

「生言ってすみませんでした！！」

一転。
それはそれは美しい直角で頭を下げて謝る駿。
情けなさを通り越して気の毒に見えてくる。

「ホントに情けないのぅ……
まぁよい。とにかくあまり昼間から騒ぐなよ」

「了解」

銀華はもう一度盛大に溜め息を吐くと、敬礼する駿に背を向けて屋根の上に消えていった。

「仕方ない……
歌は諦めるか。ばあちゃんに捕まったら確実に死ぬ」

駿は一息つくと中庭から縁側に戻って足を投げ出して座る。

「仕方ない……
この愛を小説にしてみよう」
→
全然懲りてませんでした

ピーンポーン……

「ん？」

駿がノートと鉛筆を持って来ようと縁側から立ち上がると、ちょうどその時屋敷のチャイムが鳴るのが聞こえた。

「お、帰って来たか」

彼は表情を明るくすると、小走りで玄関に向かう。
そして玄関から門の前までやって来ると……

「あれ、ハヤテ？」

「あ、駿君。
こんにちは。伊澄さんのご帰宅に付き添いで来ました」

門を開くとそこにはハヤテが立っていた。
隣には伊澄もいる。
どうやら彼女が迷子にならないように付き添ってくれたらしい。

「そっか。
伊澄の迷子で迷惑かけなかったか？」

「いえ、今回は大丈夫でしたよ」

駿がお礼を言うとハヤテは笑顔でそう返す。
伊澄は『誰が迷子ですか！！』と怒って袖をパタパタ振っていたが。

取り敢えずお茶でも出すからと、ハヤテに屋敷に上がってもらう事にした。
伊澄はハヤテに丁寧にお礼を言うと一旦部屋に戻っていったので、

廊下を駿とハヤテの二人は軽く談笑しながら歩いている。

「それにしても、お嬢様と伊澄さんの理解力は本当に凄いですね。僕にはさっぱり……」

「アレはある種特殊なコミュニティだからな」

『マジカルデストロイ』というナギの訳の分からん漫画について理解し合う伊澄達の様子を話すハヤテ。駿の言う通り、アレは二人だけの空間で常人には理解しえない世界なのだ。

「お二人の話を他に理解出来る方っていらっしゃるんでしょうか？」

「無いだろうな。
まぁ空から人とかが降ってくるくらいあり得ない可能性だ」

そんな冗談を交えながら居間に向かって歩く駿達。
ふと、何気なくそれこそもう『いい天気だなぁ』くらいの気持ちで中庭に目を向けた二人。

カッ！！

突然、中庭の上空の空間に大きな穴が開いた。
そしてその穴から何か人のようなものが出てくる、というか落ちてきた。

ドサッ……

それは音をたてて中庭のちょうど真ん中に落下する。

「「……」」

そして上空の穴はゆっくりと閉じられて消えてしまった。

「……ハヤテ君、ハヤテ君。
今、上空で何か起こらなかった？」

「……穴が開きましたね」

駿が上空を見ながら尋ねるとハヤテも同じように答える。

「穴から何か出てこなかった？」

「……人が出てきましたね」

若干頬をひきつらせて尋ねると同じような声色でそう返事が返ってくる。

「俺達の前に何か倒れてない？」

「……見知らぬ青年が倒れてますね」

「……生きてるの？」

「……どうでしょう」

駿とハヤテ。
仲良く並んで状況整理。
二人だったが……

「「……」」

たった今目の前で起きた出来事について呆然と一問一答を繰り返す

「そ、それでは僕はお嬢様の所に戻りますから。
伊澄さんによろしくお伝え下さい」

いち早く危険を察知したハヤテは片手を上げるとそう言って颯爽と帰ろうとする。
しかし駿がその肩を掴んでそれを許さない。

「いやいやいや。
まだ伊澄を送って貰ったお礼もしてないから」

「いえいえ、
そんなお気遣い無く。大丈夫ですよ僕は」

笑顔でこちらに引き戻そうとする駿に対し、ハヤテも笑顔で離れようとする。

「お前は大丈夫でもウチはそういういい加減な礼は許さないんだよ、家柄的に。
恩人をただで帰すなんて言語道断だよコレ。
鷺ノ宮の名折れだよ、うん」

「恩人なんて滅相も無いですよ～僕はただ執事の業務をこなしただけですから。
そんな人間にお礼をする必要なんて皆無でしょう？」

駿の言葉をやんわりと、だが確実に切り捨てるハヤテ。
お互い笑顔ではあるものの…

「いやいや」

「いえいえ」

「いやいやいや」

「いえいえいえ」

お互いの主張を一歩も譲ろうとしない。

「空気読もうよハヤテ君
ここは選択肢的に残るだろ？
イベント発生フラグだよ？
フラグ魔の君なら残るだろ？」

「何言ってるんですか駿君
フラグなら最近駿君の方が頑張ってるじゃないですか。
何だかんだ言って隠れハーレム的なフラグ建設しようとしてるじゃないですか」

引き戻そうとする駿の手にも、帰ろうとするハヤテの足にもかなりの力が込められる。

「誰が隠れハーレムだコラ。
それはアレか？モテない俺に対する嫌みか？俺のガラスのハートにひびを入れて楽しいかコノヤロー」

「だったら読者に聞いてみた方が早いですよ。
初詣編とか其の三十九、四十、前回の話を読み返せば分かると思いますが。
建設まっしぐらですよ
フラグ大建設事業の予算案可決ですよ」

遂に二人は笑顔から怒りマークのついた表情で向かい合ってしまい今にも胸ぐら掴み合わんとする距離に。

「オイィィィ、いい加減にしろよテメー！！
誰のおかげで（この小説で）三千院家の執事になれたと思ってんだ。
ちょっとくらい残ってくれたって良いんだろ、
ちょっとくらい巻き込まれてくれたっていいだろ」

「生憎僕は過去を振り返らない質なので。
終わった過去は引きずらないで新しく明日を目指す前向きな生き方を理想としてるんで」

「何が過去は引きずらないだ、
コミックス１８巻、２２巻～２５巻読み返してみろ。
オメー昔の女引きずりまくってんじゃねーか。
意志揺らぎまくってんじゃねーか」

「それは原作の僕なんで。
こっちの僕はポジティブを主としてるんで。
え？コミックス？

はて、何の事でしょう？」

二人はギャグ的にもうなんか色々と一触即発状態である。
しかし……

「あの……」

「「？」」

そんな二人を止めたのは一人の青年の声だった。

（（い、生きてた！？））

二人が振り返ると、先程謎の空間の穴から飛び出てきた謎の青年がヨロヨロと立ち上がり二人に声をかけてきていたのだった。

特別話　この世の裏側には何億という別世界があるんだよって昔おじいちゃんが言ってた

「……どうぞ、粗茶ですが」

「あ、すみません」

居間。

そこのちゃぶ台を囲んで駿、ハヤテ、伊澄、そして青年が正座していた。

青年の格好はYシャツにノースリーブのセーター、その上に白いスーツを着ていて、　下はシンプルな白いズボン。

頭には白いソフト帽を被っているのがアクセントになっている。

駿がお茶を差し出すと青年は丁寧に頭を下げた。

「えっと……

それで貴方は一体？」

「あ、そうだった」

ハヤテの一番肝心な疑問に青年は慌てて向き直る。

「俺は鏡弥アラタと言います。

高校一年で１５歳。

風紀委員（ジャッジメント）です」

「あ、俺は鷺ノ宮駿。

白皇高等部一年で１６歳だ」

「鷺ノ宮伊澄です」

「綾崎ハヤテです。
僕も一年で１６歳です」

お互い訳の分からない状況ではあるが、取り敢えず自己紹介を交わしあう。

「それでは……
風紀委員としてお尋ねしたいのですが、ここは第何区ですか？」

「「何区……？」」

アラタが少し身を乗り出して尋ねると一同は首を傾げて顔を見合わせる。

（え……？）

その反応にアラタは言い知れぬ不安を感じた。

「あの……
ここは日本……ですよね？」

「ああ、勿論。
日本の東京都ですよ」

「そうですか……」

少しホッとしたように首を縦に振るアラタ。

しかしまだ解せない事はあるような表情。

「えっと……
ここは学園都市内ですか？
それとも外部ですか？」

「「学園都市？」」

それを聞いた駿とハヤテはきょとんとした表情で聞き返す。

「学園都市を……知らない？」

「え、ええ。
聞いた事が無いですが。
どこかの施設ですか？」

信じられないと目を見開くアラタにかなり困惑したように口を開くハヤテ。
どうも先程から話が噛み合っていないようである。

（待て……
ここは東京都だとこの二人が言っている。
でも東京にいて学園都市は知らないなんて事があり得るのか？
もしかして……）

アラタは出来るだけ心中を落ち着かせて様々な可能性を脳内をフル稼働させて考える。

（テレビや電気といった技術はこの部屋にも見受けられる。
テレビに至っては液晶。

技術は新しいといえる。
学園都市が出来たのは５０年前と言われているから、少なくとも過去にタイムスリップした訳じゃ無さそうだ。
だとすれば……）

そして……

「俺達は……
ひょっとしたら異世界に来てしまったのかもしれない」

「「「え？」」」

彼の出した結論がこれだった。
呟き程度の声だったが静かな居間では三人にはっきりと聞こえる。

「ちょっ、それはどういう…」

「！！」

あまりに唐突な発言に駿は目の前の謎の青年アラタに質問しようとするが、アラタは何かに気付いたように表情を強張らせると素早く立ち上がった。

「すみません、俺の他に中学生くらいの女の子を見ませんでしたか？」

「「？」」

「髪は茶髪で肩くらいまで伸びていて、制服を着ている女の子です！！」

駿とハヤテは顔を見合わせるともう一度アラタに視線を戻す。

「いえ、見かけてはいないですね」

「そうですか……」

焦ったようなアラタの様子にハヤテ達はどうしていいものかと黙っていると。

「すみません。
事情は後でお話ししますから、今は彼女を探すのを手伝って頂けますか？きっと俺と一緒にこっちに来ている筈だ。
俺はこの辺の地理、いやもしかしたらこの世界すら知らないかも知れない」

「え、えっと……」

アラタは座っているハヤテ達にそう言って頼む。
その瞳からは詳しくは分からないが事の重大さが窺える。

「お手伝いして差し上げて下さいお兄様、ハヤテ様」

「伊澄？」

「私は屋敷で待っていますから、今は鏡弥さんに協力を」

伊澄は何となく事情を把握したようでそれ以上は何も言わずに二人を見つめる。
それでようやく駿も頷いた。

「分かった。
取り敢えず協力するよ」

「ええ。何やら急を要するみたあですし、僕もお手伝いします」

「すみません、助かります」

二人が首を縦に振ってアラタを見ると、彼は安堵したように頭を下げた。

「ただし条件がある……
えっと、アラタだっけか？」

「？」

駿は頭を掻きながら人差し指を立ててみせる。

「敬語は止めてくれ。
同い年くらいみたいだし、堅苦しいの苦手なんだわ俺」

「ああ、分かった。
本当に済まないがよろしく頼む。えっと……」

アラタはそう言って二人を交互に見る。
どうやら何と呼ぶか決めかねているようだ。

「駿で良いよ」
「ハヤテで良いですよ」

「よろしく頼む駿、ハヤテ」

こうして突如現れた謎の青年アラタは駿、ハヤテに続いて急いで鷺ノ宮家から外に出ていった。

～鷺ノ宮屋敷門前～

「でも駿君、一体どうやって探すんですか？その人、どこにいるかも分からないのに」

「任せろ。
こういう時に役に立つ奴を連れてきてある」

駿はそう言うと来ていた和風の右裾をトントンと叩く。

「出番だぞクマ公。
出てこい」

『ん……』

すると、駿の白い和風の裾の中から小熊がちょこんと顔を出した。

「「熊！？」」

ハヤテとアラタは驚いて思わず一歩後退る。

裾から顔を出した愛らしいこの小熊は『悪熊』という妖怪である。
元々は駿を抹殺するために妖怪界からやって来たのだが、いつの間にか鷺ノ宮屋敷に住み着いてしまったのだ。

「え？駿君？
熊を呼んでどうするんですか？」

「まぁ見てろ」

不思議そうな表情の二人に向かって駿はそう口元を緩めると、悪熊に顔を向ける。

「おいクマ公。
この辺に変わった人間の雰囲気を感じないか？」

『ん～……』

悪熊は裾から出るとちょこちょこと身体を登って肩にちょこんと乗った。
そしてキョロキョロと顔を見回し始める。

「どうだ？」

『うん。
とっても特殊な感じがあるよ。
向こうの方から感じる』

悪熊は頷くと前足を三人の前方に向けて言った。
ハヤテとアラタは『熊が喋った！？』と唖然としている。

「よし、でかしたクマ。
匂いは辿れるな？」

『当たり前だい。
僕を誰だと思ってるのさ』

駿が肩を見てそう尋ねると悪熊はエッヘンとまるで胸を張るかのように返した。

「んじゃ二人とも、早く行ってみよう」

「「いやいやいや！？」」

「？」

さも当然に動き出そうとする彼に向かってハヤテとアラタは慌てて声をかける。

「「その熊、今喋って……」」

「ああ、コイツ妖怪だから」

「「妖怪なの！？」」

さらっと流す駿。
驚くべきは妖怪がいるという事では無く、妖怪を連れているという事なのだが。

「とにかく早く行こう。

また移動しちまうかも知れないから」

「そうですね」

「そ、そうだな！」

色々ツッコミ所はあったが、

何よりまず探さないといけないなとアラタは駿達に続いていく事にするのだった。

～負け犬公園～

『この辺から、特異な感じがするけど……』

悪熊の言葉通りにきた三人は昼間でやたら人気の無い公園にやって来ていた。

「つー事はこの公園のどこかにいる可能性があるのか」

『多分ね……

それじゃあ僕はまた寝るね』

「ああ、助かった」

悪熊は欠伸をすると、肩の上からまた和服の裾に潜り込んでしまった。

そうして駿達は公園の奥に進んでいく。

「この公園にいらっしゃるんでしょうか？」

「クマ公の鼻は確かだからな。
さて、一体どこに……」

駿とハヤテがキョロキョロと辺りを見回しながら歩いていくと、

「あ！」

「「？」」

当然アラタが声を上げた。
彼の５０ｍくらい先の広場の奥に一人の少女がいた。
肩までかかるかの綺麗な茶髪制服を着ている美少女だ。
髪の右側に髪留めをしている。

「あの、アラタさん。
あの娘ですか？」

「ああ、美琴だ」

アラタは安堵と同時に頷く。
しかし安心もつかの間、その少女の前には三人の高校生ぐらいの男子連中が立っていた。
男共はピアスやネックレスなどをチャラチャラと着飾り、制服はダラダラ。そして明らかにその少女に迫っている様子。

「アラタさん！
大変です、あの人迫られてますよ！！」

「何か思いきりベタな展開に突入してんな。どうすんだ？」

「早く助けましょう！」

二人がアラタを見ると彼も険しい表情で頷く。

「ああ、勿論助ける。
このままじゃ、彼等の身が危ない」

「ええ、危な……
え？彼等？」

と思ったらアラタは意外な言葉を口にする。
何とあの三人が危ないといっているのだ。

「あの……
どう見ても危険なのはあの娘では……」

「彼女は強い上に時々加減を知らないからな。
まぁ最近は大分加減するようになったけど」

「オイオイ、強いってお前。
相手ら大の男子三人だぜ？
それを慰すなんて……」

アラタの言葉をよく理解出来ない駿とハヤテ。
少女一人と男三人。
普通はどう考えても少女が危機的状況にあるといえる。

「とにかく止めさせよう。
説明は後だ」

「あ、ああ」

アラタがそう言うのでとにかく今は前方の状況を止める事にする。
ハヤテと駿はまだ釈然としない表情だったが、アラタの言葉の意味はすぐに明らかになった。

「おーい、美…」

三人が少女達の元に走って２０ｍくらいまで迫ると、
アラタが彼女に向かって口を開こうとしたが、

「だから……
しつこいって言ってるでしょ！！」

「「え？」」
「まずい……」

男三人に迫られていた少女がそう叫んでポケットから何かコインのようなモノを取り出した。
その様子にハヤテ達はハテナマークが浮かび、アラタは苦い表情をする。

次の瞬間……

「「「ぐはっ！？」」」

少女がコインを弾いた。
同時に目の前な男三人は宙に舞うように吹き飛ぶ。

「「は？」」

ハヤテと駿は呆然。
そして彼女の延長線上にいた彼等に向かって何か電気の塊のようなモノが一直線に飛んできた。
まるで電磁砲のように。

「「えええ！？」」

「くっ！！」

アラタは駿とハヤテの前に立つと目の前から向かってくる電気の塊に向かって右手を差し出した。

カッ！！

すると、電磁砲はあっという間に消え去り巻き起こる砂塵だけが広場に残る。

「ふぅ……
危なかった」

「その声、アラタ！？」

「ああ、そうだよ」

砂煙が止むと少女がアラタに気付いてこちらに走ってきた。

「良かった……
居たのね。さっきからずっと探してたの」

「俺もだ。
とにかく無事で良かった……と言いたいが、いきなり超電磁砲（レールガン）を放つのはどうかと思うぞ、美琴」

「大丈夫よ。
大分加減したから」

美琴と呼ばれた少女が振り返ると男三人が気絶して伸びている。
アラタは安堵とも困惑ともとれるようなため息をついた。

「それより何なのよこの世界？
色々な人に話を聞いたけど
学園都市じゃないみたいだし、外部でもないみたい」

「ああ、やっぱりそうか。
どうやらここは異世界らしい」

「嘘……ホントに？」

信じられないというような表情の美琴にアラタは軽く肩を竦めて答える。

「とにかく、状況を整理したい。彼等に色々と話を聞こう。こちらがどんな世界なのかを」

「彼等？」

美琴はアラタの後ろにいたハヤテと駿にようやく気付いた。

「この二人は、鷺ノ宮駿と綾崎ハヤテ。俺はこの二人にこっちの世界で拾って貰ったんだ」

「そうなんだ」

少し警戒するように駿達を見つめる美琴。

「紹介する。
彼女は御坂美琴だ」

「アラタがお世話になったみたいね、ありがとう」

「お前、俺の母親みたいな挨拶すなっ」

取り敢えずお礼をいう美琴とそれに突っ込むアラタ。

「……いえいえ、そんな」

「……取り敢えず、ウチに戻りましょうか」

ハヤテと駿は未だに唖然とした状態だったが何とか精一杯の作り笑いをするとそう言ったのだった。

～鷺ノ宮屋敷～

鷺ノ宮家の居間。
そこにある大きなちゃぶ台を囲んで、右側にはアラタと美琴が腰を降ろしていた。
二人とも最初は遠慮していたが、初穂が遠慮しなくていいと優しく微笑んでくれたので少し安心したように座ってくれた。
初穂は駿の友達だと思っていたのだろう。お茶とお菓子も出してくれた。

その向かい側にはハヤテと駿。
押し黙って座っている。

伊澄はこういう話し合いには銀華の意見も必要だと呼びにいった。
なので今は銀華と伊澄が来るまで居間で待っている状況である。

（駿君んん！！
何なんですかこの人達！！
一体何者なんですか！？
というか何で僕まで巻き込まれてるんですか！？
帰っていいですか！？）

（待て待て待て！！
帰らないで！！こんな訳の分からない状況に俺一人置いてかないで

！？）

ハヤテと駿は恐るべきアイコンタクトで会話をする。

（無理です、無理無理！！
だってあの女の子手から電撃放ちましたよ！？
アラタさんはその電撃をあっという間に消してしまったんですよ！
？何なんですか一体！？）

（落ち着けェェェェ！！
ここまでで推測出来る可能性は一つしかない。
二人は……超能力者だ！！）

（マジですか）

ハヤテは目を見開く。
駿は頷いてそのままアイコンタクトを続ける。

（いいか。
古来マヤ文明より伝えられし宇宙へのメッセージがつい最近になって他の惑星で受信されたんだ。
それを聞いたその惑星の王様はこの地球の調査の為に派遣をした。
それがこの二人だ！！）

（何ですって！？
一体何の為に！？）

（んなもん決まってんじゃねーか……この地球を侵略し、征服するためにだよ！！）

どんどんと考えが飛躍していく二人。

（その第一段階として奴等は俺達との交渉に入るつもりだ）

（ヤバいじゃないですか）

（ヤバいな。
とにかく地球の運命は俺達にかかっている訳だ。
上手くやらなければ……俺達は滅びる）

駿とハヤテは意を決したように目と目で頷き合う。

（それじゃあ、まずは地球側の要求をｔ）

「って、そんな訳あるかァァァァ！！」

駿が二人に顔を向けようとした時、ようやくハヤテが突っ込んだ。
駿はちゃぶ台に叩きつけられる。

「痛っ！？
ハヤテ君！？いきなり何すんの！？」

「いくら何でも話を飛躍させ過ぎでしょうが！！
一体どんな展開に持ってくつもりなんですかアンタは！？」

「何かこんな感じにした方がＳＦ感があって面白そうだろうが」

「そういう問題じゃありませんよ！？」

額を擦りながら起き上がる駿に呆れたように叫ぶハヤテ。

その様子を見ていた美琴とアラタは……

「何か変な人達ね……」

「いや、まぁいきなり異世界って言われたら無理も無い気がするけどな」

アラタは彼女の言葉に思わず苦笑いして答える。

ガラ……

すると、ようやく伊澄が戻ってきた。今日は屋敷でも迷子にならなかったらしい。

「すみません、大おばあさまは今外出しているようで。ですから私達だけでお話をお伺い致します」

どうやら銀華は不在らしい。

伊澄はペコリとお辞儀をすると、駿達の座っている側についてアラタ達と向かい合う。

「えっとそれじゃあ……まずは俺達の方から」

アラタはコホンと咳払いをすると、少し身を乗り出した。

「俺達は戦闘中にこっちに飛ばされてしまったんだ……」

彼はゆっくりと事のあらましを話し始めるのだった。

特別話　この世の裏側には何億という別世界があるんだよって昔おじいちゃんが

伽藍
「えっと、という訳でコラボ開始です。
桐生乱桐様の作品とコラボをさせていただく事になりました。
多分二三話くらいになると思われます。
桐生様、アラタ君達の口調や雰囲気に違和感を感じたら誠に申し訳ございません。
なんなくおっしゃって下さい。
そしてもう一つ。
えっと、とある魔術の禁書目録という作品をベースにした二次創作とコラボしている訳ですが、
如何せん僕はとあるシリーズの知識がほとんどありません」

駿
「ええ!?無いの!?」

伽藍
「中学生の頃に原作本を四巻くらいまで読んだっきりです。
ですので色々と説明が間違っているかも知れません。
その時はどんどんおっしゃって下さい。出来るだけ訂正したいと思いますので」

駿
「ま、まぁ……
そんな訳で次回もコラボ篇は続きます」

伽藍

「はい、次回もよろしくお願いします」

特別話　さぁ、異世界交流を始めよう（前書き）

とあるの原作のキャラを守れるかはわかりません。
詳しい知らないので。
予めご了承下さい

駿
「んじゃコラボ篇第二回！！」

アラタ
「始まります！」

特別話　さぁ、異世界交流を始めよう

学園都市……

東京西部に位置する完全独立教育機関の総称。

ありとあらゆる教育機関・研究機関の集合体であり、外部の地域より数十年進んだ最先端技術が集まる超科学都市。

人口は八割が学生という学生の街でもあり、

その学生達全員には人為的な超能力が実用開発がされている超能力開発機関とも言われる。

東京都西部から神奈川、埼玉、山梨県にまでいたる地理に、外観は円形に設計された都市である。　総面積は東京都の３分の１に相当するとも言われ、総人口は２３０万人にも登る。

学園都市はそれぞれ違った役割をもつ２３の“学区”によって構成されており、それぞれの学区に独自の条例が制定されている。

学園都市自体にも独自の法律があり、所謂アメリカ合衆国と同じように合衆国憲法と州憲法の関係と考えれば理解は早い。

完全な内陸部であり海には面してはいない。

一部を除いて基本的には平野が地形となっている。

司法、行政、立法の三権を独自に運営する学園都市は、表向きには日本の一都市とされているが、その実は独立国家の扱いに相当されている。

学園都市の治安は主に志願学生から選抜された“風紀委員（ジャッジメント）”と“警備員（アンチスキル）”によって維持されている

「というのが、俺達の居る世界なんだ……」

「「……」」

簡単に説明を終えたアラタがお茶で一息ついてそうまとめた。
簡単にというが駿とハヤテはあんぐりと口を開けんばかりに唖然としている。
伊澄はというと瞳をキラキラさせて話を聞いていたが。

「どうかしら？
やっぱりそんな話は聞いた事は無い？学園都市を知らない？」

「「……」」

美琴は今一度駿達にそう尋ねると二人は何とか数回首を縦に振って返した。
そんな世界は聞いた事も無いと。

「やっぱり、ここは異世界みたいね……」

「ああ、そうだな」

駿達の反応を見て改めて自分達の境遇を確信する。

「それで俺達は学園都市でとある魔物を追っていたんだ」

「魔物？」

「ええ、ソイツは次元を操る怪物で戦闘中に時空を裂いて逃走しようとしたの。
それで私とアラタが追おうとしたら……」

「こっちに飛ばされてしまったと……」

「多分ね」

駿が言葉を引き取ると二人は大きく頷いた。

「それじゃあ……
えっと、御坂さんが先程手から電撃をだしたのも超能力なんですか？」

「まぁ、そういう事になるわね」

ハヤテの問いに何故か得意そうに答える美琴。

「んじゃアラタが電撃を消したのも超能力？」

「いや、俺は超能力者じゃない。強度（レベル）0だからね」

「「強度？」」

また出てきた新しい単語に駿達は首を傾げる。
そうだったとアラタは人差し指をたてて三人を見回した。

「能力にはレベルや種類ごとに色々分けられているんだ。
一概に能力といっても色々あって超能力っていうのは能力のかなり上級能力の事をいうんだ。
強度（レベル）というのは簡単に言えば能力の強さ。

レベル１は【低能力】
　スプーンを曲げる程度の日常では役に立たない力だな。
レベル２は【異能力】
低能力とほとんど変わらない程度の力だけどね。
レベル３は【強能力】
日常において活用可能で、便利と感じられる力だ。
人にも十分危害が加えられる危険なものまで色々ある。
レベル４は【大能力】
ここまでくると軍隊や国家において戦術的価値を得られる程の力になるんだ。レベル３と４では人数がかなり少なくなるな。
レベル５は【超能力】
これはもう単独で軍隊と戦える程の力になる。
これは学園都市でもたった七人しかいない。
レベル６は【絶対能力】
「神の領域の能力」と言われる文字通り絶対能力だな。

それで、俺はレベル０
一般的に言う【無能力】で測定不能や効果がかなり薄く見出だせないような力の事を言うんだ。

まぁ、以上が学園都市の人為的な超能力の簡単な説明かな」

「「は、はぁ……」」

いっぺんに説明されて少しこんがらがってしまうハヤテ達。
だがとにかく彼等の世界が凄まじく発達した世界なのは分かった。

「あれ？
じゃあ御坂さんは超能力者って事は、レベル５って事なんですか？」

「ああ、彼女は学園都市に七人しかいないレベル５の第三位。
超電磁砲（レールガン）だ」

アラタが彼女に手を向けてそう説明すると美琴は腕を組んだまま得意気に頷く。

（（という事は単独で軍と渡り合える超能力者!?
その中のベスト３!?））

目の前の女の子がとんでもない力を持った人間だと分かり驚くと同時に逆らったら殺されるかもしれないという恐怖も。
人間見た目では分からないものである。

「じ、じゃあアラタさんは無能力者なんですか？」

「ん、そうだな」

「でも、先程電撃を消して……」

ハヤテの疑問にアラタは納得したように頷いて右手の裾を捲った。
するとそこからは人間の肌では無く義手が現れる。

「こっちの腕は義手でね、異能力を吸収し蓄積する特殊機能が備わっているんだ。
さっきの美琴の超電磁砲を消せたのもその為」

「お前……
義手だったのか……」

アラタの義手を見て驚く駿。
少なくとも、彼の動きは義手とは思えない程自然なものだったからだ。

「まぁ色々とな」

「そっか」

駿はそれ以上は何も聞かずにただ首を縦に振る。
きっと辛い事情があるのだろうと考えたのだ。

「それで……
こっちの世界は一体？」

「僕達が住んでる世界はそう言った人為的な超能力なんて一切存在しませんよ。
勿論、そんな凄い科学技術も…」
今度はアラタ達がハヤテ達の世界について尋ねる。
ハヤテは学園都市の技術とは程遠い今の世界を暫く説明した。

「なるほど……
つまり外部と似たような感じって事かな」

「ええ、そういう理解で良いと思います」

ハヤテは“外部”について詳しい話を聞いた訳では無いが、相手が納得するように敢えて頷いておいた。

「では、お二人はこれからどうされるのですか？」

それまで黙って話を聞いていた伊澄が一段落ついた所で尋ねる。

「達はこれから恐らくこっちの世界に逃げた魔物を探すわ。ソイツを倒せば元の世界に帰れるからね」

「でしたら、私どももお手伝い致しますわ」

美琴の言葉を聞くと伊澄は湯のみをちゃぶ台においてそう言った。

「いや、それは出来ないよ。
ただでさえ迷惑をかけたのにこれ以上一般人を巻き込む訳には…」

アラタは慌てて彼女の言葉に首を振るが……

「んじゃ、俺ぁテキトーに用意してくっから。
ハヤテはどーすんだ？」

「乗りかかった船ですから僕も協力しますよ。
取り敢えずマリアさんに連絡しておきます」

「あ、ちょっと……！！」

駿とハヤテは立ち上がるとアラタの言葉を待たずにそくさくと部屋から出ていった。

「鏡弥様、御坂様。こちらの世界の探索ならば地理に詳しい人間がいた方が良いと思います」

「いや、でもこれは危険な…」

「その点につきましてはご安心下さい」

美琴の言葉を待たずに伊澄はニッコリと微笑む。

「この鷺ノ宮家は遥か昔から闇に潜む妖怪・悪霊なる悪鬼羅刹の退治を生業とする家柄。
こういう事は日常茶飯事です」

「「……」」

アラタと美琴は思わず顔を見合わせる。彼女が嘘を言っているようには見えない。

「でもあの二人、何の能力も無いように見えるけど……」

「確かに、お兄様やハヤテ様はそちらの世界で言えば無能力者に分類されるのでしょう」

「だったらやっぱり……」

美琴は本当に一般人に、まして短い時間ながら世話になった人間に

迷惑をかけたくは無いと思っているのだろう。
しかし伊澄は薄く口元を緩めるとゆっくりと首を横に振る。

「大丈夫です。
あの二人といればそのような心配も無くなると思いますわ」

「「……」」

彼女の言葉に二人は現段階で一切の根拠を見出す事は出来ない。
しかし何故か納得出来てしまうような雰囲気がそこにはあった。

「分かった。
だったら協力して貰おうかな」

二人はもう一度目を合わせてお互いの気持ちを確認し頷きあうと伊澄にそう言った。

それから駿達が戻ってくるまで暫く、伊澄がアラタ達の世界について興味があると尋ねたので二人は他にも学園都市について色々な事を話してあげた。
伊澄は終始瞳がキラキラしており、とても楽しそうだったという。

２０分くらい経った頃……
駿とハヤテが部屋に戻ってきた。
どうやら準備が出来たようだ。

「お兄様？

その格好で行かれるのですか？」

駿は和服姿ではなく、長袖のシャツに白いパーカーを羽織っていて下はジーパン姿に変わっていた。そして手には木刀が一本。

「真っ昼間から和服に日本刀持ってたら危ねー奴だろ。だから今回はコイツをな」

「その木刀は？」

駿が見せた木刀は正宗では無く、真っ白な木刀だった。

「コイツは鷺ノ宮家に代々伝わる木刀“白蓮”精霊の力を宿した鷺ノ宮が誇る珠玉の一本だ」

「そんな木刀聞いた事がありませんよ？本編でも出てませんし……」

「コイツは秘宝だからな。まぁボス系の敵に追い詰められた場合の最終秘密兵器的な感じなんだよ」

首を傾げる伊澄や一同に駿は白蓮を色んな角度から見せてやる。と、木刀の底を見せた時にそこには白い四角いシールと数字が。

「お兄様……値札が張ってありますよ」

「え゛！？」

駿は慌てて木刀の底を見る。
そして思わず声を洩らした。

（だから言ったじゃないですか駿君。値札は浮き上がるから剥がしとけって）

（だって同じ白だし大丈夫だと思ったんだよ！！）

顔を伊澄達から背けてコソコソ話を始めるハヤテと駿。
因みに会話は狭い室内にだだ漏れである。

「ってかその木刀、柄の端っこが茶色じゃない？」

「へ？」

今度は美琴が白蓮の柄の右端を指差して言った。
見るとなるほど、彼女の言う通り真っ白の木刀の柄の端が少し茶色になっておりまるでペンキが禿げたような有り様になっている。

（テメー！！
細かい部分もカラーリングしとけよオイ！！）

（しましたよちゃんと！！
端は乾くのに時間がかかるのに駿君が完全に乾く前に持っちゃうからそうなったんでしょ！！）

（それを最初に言えよ！！
って事は……あ、やべ！！
手に白が付いちゃってる、これ落ちる！？）

（正しく洗えば落ちますよ。
あ～、もう仕方ない。
手伝ってあげますから、お風呂場に行きますよ）

ハヤテは慌てる駿を連れて部屋を出ていった。
そんな様子にため息をつく伊澄と唖然と見送るアラタ達。

（（木刀にただ白を塗っただけ！？
何しに来たのあの人達！？））

アラタと美琴は二人、主に駿の馬鹿さ加減に呆れを通り越して心の中で突っ込む。

二人が本当に探索に加わって大丈夫なのか改めて不安になる二人だった。

2007

特別話　さぁ、異世界交流を始めよう

～鷺ノ宮の作ってワ〇ワク！！～

駿
「はい、こんにちは♪
今日の作ってワ〇ワクのコーナーです。
今日作る物はこちら！！」

・木刀“白蓮”
鷺ノ宮家に代々伝わる太古の精霊の力を宿した宝刀である……
という話を着替えている間に考えた駿がハヤテと協力して市販の茶色い木刀に油性のカラースプレーでカラーリングした木刀である。

・制作時間：１５分（目安）

・必要なもの
木刀、油性カラースプレー、新聞紙沢山、ゴム手袋

駿
「作り方は至って簡単。
まずは市販の木刀を買ってこよう。木刀はコーティングされていない方が早く乾くので選ぶ時には注意してね。
木刀を買ってきたらまず新聞紙を下にかなり広めに広げてその上に木刀を乗せます。
この時、新聞紙は必ず三枚以上重ねて敷いてね。でないと床が汚れてしまうから。次に必ず窓を開けること。

油性のカラースプレーはあっという間に悪い成分を含んだ気体が部屋に広がるから換気体制は十分に整えておこう。
そしたらようやくカラーリング。ゴム手袋をしたらスプレーを持って、木刀には上からスプレーを吹き掛けていこう。
この時に注意するのはスプレーのかけ方。
ノロノロとかけているとかかり過ぎている部分と薄い部分が出来てぼつぼつが浮き出てしまうんだ。だから手首を素早く振りながら出来るだけまんべんなくスプレーが行き渡るように心がけよう。
柄を持ちながらくるくると回しながらしっかりと色をつけていってね。
柄意外をスプレーしたら一旦置いて、上の部分を持って柄に丁寧に吹き掛けよう。
最後に底をスプレーしたら完成。

これで鷺ノ宮家に代々伝わる宝刀“白蓮”は君の物だ!!
君も今日から俺達と一緒に妖怪退治にでかけよう!!」

※木刀は振る時は半径3mに誰もいないくらいの余裕を持ってね。

駿
「それでは鷺ノ宮の作ってワ○ワク、また次回~」

チャラチャラチャーン♪

2009

「「「どこの教育番組だァァァァ！！！」」」

「3対1！？」

駿はアラタ、美琴、ハヤテに同時に蹴りをくらわされ鷺ノ宮家の前から吹き飛んだ。

駿（ばか）は顔面から突っ込み地面を抉るように滑って隣の塀に頭から激突する。

「アンタねぇ……！！」

「あ、痛い痛い！？」

美琴は怒りマークを浮かべながら塀に突っ込んだ駿を思いきり引っ張り出す。

「何なのよあのどうでも良い木刀の件は！？
やる気無いでしょ！！最初からふざけてんでしょ！！」

「いやいや、
やる気あるってホント。
アレは字数稼ぎの為のアイキャッチ的なアレだよ」

「「「余計質悪いわっ！！」」」

地面に転がり頭には瓦礫が刺さって血まみれの駿の言葉に三人は一

斉に声をあげる。

「馬鹿なの!?アンタ馬鹿なの!?
何なら今すぐ輪廻転生させて頭の中身変えたげましょうかっ!!」

「ぶべらっ!?」

更に怒りマークを増やした美琴は足で駿を蹴り始める。
蹴る度に頭から血が出て駿の血の気が引いていく。

「落ち着け美琴!!
ダメだって、それ以上やったら彼ホントに死んじゃう!!
血の気どんどん無くなってる!!」

「落ち着いて下さい御坂さん!!
お気持ちはよく分かりますけど、この人は元々どうしようも無い人ですから!!
こんなコトで怒ってたらキリありませんから!!」
アラタとハヤテは大急ぎで止めに入るが、

「止めないで二人とも!!
こういう馬鹿は一回ちゃんとぶっ飛ばした方が良いのよ!!」

「いや!!
ホントに飛んじゃうから!!
身体から魂がぶっ飛ぶから!!
もう顔色真っ青通り越して真っ白になってる!!」

「きゅぅ……」

美琴に蹴られ続けている駿はアラタの言う通り何かもう色々とヤバい状態である。
情けない声を洩らす駿の表情は目が点になって、身体が震え始める。

「ヤバいって！！
目が点になってる！！しかも何か痙攣し始めてる！！」

「御坂さん！！
駿君旅立つ！！お花畑に旅立っちゃいます！！」

「あ～、うるさいうるさい！！
離せーーーっ！！」

その後暫く、アラタ達は駿にとどめを刺そうとする美琴を必死で食い止めるのだった。

＊

「さて……
早速その魔物を捜索する訳だが」

（（あの瀕死の状態から何事も無かったように……！！））

宛も無く住宅街を歩く一行。
振り返った駿が塀に寄りかかりながらそう口を開いた。
怪我や血はすっかり無くなっているのだが。

「一体どんな魔物なんだ？
つーか真っ昼間から魔物が彷徨いてたらすぐにニュースになると思うんだが」

「いや、その魔物基本的に注目されるような事はしないんだ。
深夜に徘徊して人々に害を与えたり、昼間は一般人は可視出来ないような空間を作ってそこにいたり、それを使って色々な害を振り撒いたりする」

アラタは寄りかかる駿の問いになるべく分かり易く説明する。

「俺達は学園都市で結構な被害があって退治を要請され、風紀委員として追っていたんだ」

「私は風紀委員じゃ無いけどね」

アラタの説明に続けて美琴もそう付け加える。

「魔物って一体どんな魔物なんでしょうか？」

気になっていたのかハヤテが不思議そうに尋ねた。

「そうだな……
時間を操るような魔物なんだ。
結構な曲者で、だからこそ逃げられたんだけどな」

「それは厄介そうですね……」

簡単な話を聞いただけでも大変そうな相手にハヤテと駿は思わず顔

をしかめる。

「そうすっと……
まずはアラタとビリビリから逃げられるような魔物をどうやって見つけるかだな……」

「待ちなさい。
誰がビリビリですって？」

「いや、アンタビリビリしてるから色々と」

それを聞いた美琴は怒りマークと共にフッと口元を緩めると右手を目の前に持ち上げる。

「じゃあアンタを黒焦げにしてビリビリの恐ろしさを教えて上げるわ」

「何か調子乗ってすみませんでした」

「分かればよろしい」

コインを取り出した彼女に駿は両手を着いて土下座をした。
その前で頷く美琴。

（（ああ……！！
異世界同士の上下関係がたった今構築された……！！））

取り敢えず駿は本編だろうが異世界だろうがどんな時でも最下層に位置するのであまり気にしくて良いだろう。

「ま、まぁ駿君の言う通り……
どうやって場所を特定するかですね」

「クマ公はさっき散歩に飛び出しちまったから当分帰って来ねぇしな」

ハヤテの言葉に駿も立ち上がって辺りをキョロキョロと見回す。
アラタは難しい表情で顎に手を当てて考える。

「うーむ……
魔物が放つ気配は僅かにだけど何となく感じられる。
だからもっと高い場所に行けば少なくとも方向くらいは分かるかもしれないな」

「高い場所、ですか……」

それに続いてハヤテも同じように頬に手を当てるがすぐに思い付いたように声をあげる。

「あ、それならもってこいの場所がありますよ。ね、駿君」

「ん、ああ……
そうだな」

その言葉に駿も頭を掻きながら答える。
不思議そうな顔の二人を連れてハヤテ達は再び歩き始めた。

数十分後……

「「……」」

アラタと美琴は白皇学院の正面入口門の前で愕然としていた。
無論、その圧倒的な巨大さ故である。

「ちょっ、駿！？
ここ……学校、なのか！？」

「ああ。
ここは白皇学院。
俺達の母校だな」

駿はさらりと答えるが白皇学院の巨大さはとてつもない。
敷地面積は東京都杉並区ほぼ全てにあたり、高等部、中等部、初等部が揃うエスカレーター式の教育なのだが、校舎の他にもそれ以上に巨大な施設が沢山存在し森と言えるほど広い木々や噴水広場なども当たり前のように存在する超ド級大型教育機関なのである。

「……凄い」
「全くだ。見てるだけで迷子になりそうだよ」

軽く説明を聞くとますます驚くばかり。
金持ち達が通う学院といえどもその広さは想像の遥か彼方をゆく。

「で、でも……
一体何故学校に？」

「ま、来りゃ分かるよ」

そう言って敷地内に入っていく駿とハヤテに続いて恐る恐る足を踏み入れるアラタと美琴であった。

校舎に向かうまでの並木街道でアラタと美琴達は色々と楽しそうだった。やはりこれだけ大きいと学校というよりテーマパークのように思えるのだろう。

そんな感じで賑やかに歩きながら校舎を抜けて時計塔の前までやって来た。

「うわーーっ!!」

「大きいな……」

時計塔の前に立った二人は上空を見上げて思わず目を見開いた。
時計塔のてっぺんは地上からは見えないくらい高い。

「ここはこの学校の生徒会専用の時計塔。
ここの最上階は生徒会室だ。
そこなら四方を十分に見渡せるんじゃねーか」

「え、でも生徒会専用なのに勝手に入っていいのか?そもそも俺達ホントの意味で部外者だし」

「構いやしねぇよ。
俺、そこの執行部だからさ」

駿はかるく口元を緩めると時計塔に入っていく。

その後にハヤテ、アラタ、美琴と続いていった。

エレベーターで最上階に到着すると四人は生徒会室の前に。

「んで、ここが学院の治安維持を仕切る生徒会の本部（セキュリティーキーパー）だ」

「いや、何がセキュリティーキーパーですか。
何前回の前書きの話引っ張ってんですかアンタ」

ガチャ……

突っ込みを入れるハヤテの隣で駿が生徒会室の扉を開けた……
すると……

「あら、ハヤテ君？」

「あ、ヒナギクさん。
こんにちは♪」

中から白皇学院生徒会長である桂ヒナギクが姿を現した。
ハヤテに気付くと驚いたように声をあげる。

「珍しいわね、いらっしゃい♪
あ、駿君も居たのね」

「俺はおまけか？」

「ええ♪」

「おーい……
否定してくれないと流石に傷つくよ俺も」

しかしすぐに微笑むとハヤテに挨拶をする。
隣の駿にも気付いたようで彼の反応にクスクスと微笑んで答えた。

「えっと……？」

そんな中、アラタと美琴が遠慮がちにハヤテ達の後ろから顔を覗かせる。

「ああ」

駿は二人を振り返ると一歩退いてヒナギクに手を向けた。

「彼女は白皇学院生徒会長兼関東部治安維持総司令部所属、桂ヒナギク大佐だ。
その圧倒的強さ、勇敢さ故に敵味方双方から
“桃色の流星”と呼ばれていｒ」

「誰がよっ！！」

バキッ！！！

「「！？」」

自信満々に話す駿は次の瞬間、ヒナギクによって顔面から壁に叩きつけられた。
駿は顔がまるごと壁にめり込んでしまう。

「生徒会長の桂ヒナギクです♪」

「「あ、はい……
よろしくお願いします」」

アラタと美琴は本能的にこの人に逆らってはいけないと悟ったのだった……

特別話　さぁ、異世界交流を始めよう（後書き）

多分次回でコラボ篇完結です。
次回もよろしくお願いします♪

2021

特別話　ライダーと退魔師と執事と超電磁砲（前書き）

ようやくコラボ篇完結。
桐生先生、ありがとうございました。

次回は本編を少しやってからＩＦ篇をやります！

よろしくお願いします

2022

特別話　ライダーと退魔師と執事と超電磁砲

「なるほどね……
じゃあ二人は異世界から飛ばされてしまって、駿君達は彼等を元の世界に帰す為に動いている、と」

「全くその通りなんですが……
かなり理解が早いですねヒナギクさん。普通はもっと疑うと思いますけど……」

「それは信じるわよ♪
だって今回は特別篇でしょ？」

「ヒナギクさん！？
メタ発言ですよそれ！？
キャラが変わってますよ！？」

白皇学院生徒会室。
ヒナギクとハヤテ、アラタ、美琴はソファに座って向かい合っていた。
アラタ達との自己紹介も済んで、ハヤテが恐る恐る事情を説明するとヒナギクは笑顔であっさり納得してしまう。
誰の影響か間違いなく彼女もキャラが変わってる部分がある。
まぁ誰かと言えば恐らく一人しか居ないだろう。

「ところで……
駿君、いつまでそんな場所に立ってるの？」

「そうですよ、早くこっちに来てください」

（（立ってない！！完全にめり込んでる！！
ってか思いきり貴方がやってましたよね……！！））

ヒナギクとハヤテが声をかけた先には、生徒会室の壁に顔面からめり込んでいた。
駿は何とか顔を壁から引き剥がすとフラフラと振り返る。

「あら、血が出てる。
大丈夫？」

「凄いやこの人……
前話の記憶が丸々消えてるよ」

駿の頭には石の破片や針金が刺さりまくっていて血が吹き出していた。
しかしそのままソファにやって来て何事も無かったようにに座る。

（（怖っ……！！））

アラタと美琴の二人は無論ドン引きだが。

「でもヒナギク、今日はオメーしかいないのか？」

（（そして普通に喋ってる！！））

「ええ、今日は授業も無いし私だけよ。生徒会もホントは休みだし」

「ヒナギクさんは休みでも来てらっしゃるんですか。
凄いですね」

（（こっちも普通に返してるし！！
何なのこの人達!?何で突っ込まないの!?俺（私）達が間違ってるの!?））

三人のやり取り、主に駿のとんでもない状態にも関わらず普通に会話を交わす状況にアラタと美琴はこの世界がかなり怖くなった。

特別話　ライダーと退魔師と執事と超電磁砲

キーンコーン……

休みの日でもしっかりと鳴るチャイムを耳にしながらアラタ達は生

徒会室のバルコニーに出ていた。ヒナギクはあの後放送で職員室に呼ばれていったので今は四人しかいない。

「凄い景色！！」

「ああ、これはまさしく絶景だな」

美琴とアラタは最上階から一望できる学院、東京の景色に息を呑んだ。

「夜になるともっと素敵な景色になるのでしょうね」

「ああ、こんな景色……
夜に二人で見れたら良いな」

「ちょっとアラタ／／／」

景色を眺める二人の間には何かピンク色の雰囲気が広がる。

「あの～……
お二人さん？
魔物の気配は？」

駿が困ったように話かけるが二人には届いていないのかお互い顔を赤らめながら見つめ合っている。

「あの～、もしもーし……」

「「／／／」」

「すみませーん！
聞こえてますか、すみませーん！！」

反応無し。
完全に二人だけの世界に入ってしまったようだ。

「すみません聞いて下さい！！
ちょっ、聞けってお前ら！！
あああああああ！！！」

プチっ！！

「うるさァァァァい！！！」

「ぶべらっ！？」
「何で僕も！？」

駿の叫びに業を煮やした美琴は駿とハヤテに渾身の飛び蹴りを炸裂させた。
二人は後ろの室内に吹っ飛ぶ。

「全く……
どんだけ無神経なのよ」

「いや美琴、ハヤテまで巻き込まれてるけど……」

ようやく腰に手を当てて溜め息混じりに振り返る美琴と、苦笑しながら頬を掻くアラタ。

駿とハヤテもすぐに立ち上がりバルコニーに戻ってきた。
駿は痛そうに頭を擦っていたが、ハヤテは首を傾げながら二人に向かって口を開く。

「お二人はもしかしてお付き合いされてるんですか？」

「え？そうなの？」

「「えっと……まぁ／／／」」

ハヤテが尋ねるとアラタと美琴はまた顔を若干赤らめながら頷いてみせる。
駿はかなり驚いたようにアラタ、美琴、ハヤテを見回していた。
そんな駿にハヤテは『気付いて無かったんですか』と呆れたように溜め息をついたが正直彼も呆れられる義理は無いと思う。

「アラタ君、アラタ君……」

「ん？」

駿はそんな事はお構い無しに表情をひきつらせながらアラタに声をかける。

「君……何歳だっけ？」

「１５歳、高校一年だけど」

それを聞いた駿はガックリと膝をついて落ち込み始めた。

「まぁ、そんな駿君はおいといて……魔物の気配、ありますか？」

「いや、ちょっと分からないな……」

「どんな格好の魔物なんでしょうか？」

ハヤテが尋ねるとアラタは頷いて返す。

「時計に手足がついたような魔物だな。基本的に攻撃はせずに逃げるのが専門のような魔物、直接人に害は与えない。けど時空や時間を狂わせる力を持ってるから厄介だ。放っていたら信号や電車のダイヤ乱したり、時計を逆転させたりする」

「地味に嫌な攻撃ですね……」

「それだけじゃない、医療機器を狂わせたりしたら人命に関わるしある意味一番厄介だな」

ハヤテが肝心の本題である魔物について尋ねると、アラタはバルコニーから景色を望んで表情をしかめた。

と、そんな時……

ドーン……！！

「「「！？」」」

彼等が見ている前方の森から音と共に煙が上がった。
その場所は白皇の敷地内である。

「行ってみましょう！」

「だな！」

何か感じとったのか美琴がまず走り出す。
それにアラタも続いた。

「あ、待って下さい！！
迷いますから僕達が先導します。ほら、いつまでも落ち込んでないで行きますよ駿君」

「うん……」

ハヤテはそんな二人が迷わぬように慌てて駿の首根っこを掴み追いかける。
駿は情けない声を上げながら引きずられていった。

＊

「さっきの方向から、恐らくこっちです！！」

ハヤテは先程爆発音のあった方角をしっかりと覚えており、また最

短距離でその場に到達出来るルートを瞬時に選びながらアラタ達を先導してゆく。
二人は走りながらそれについていっている。

「……っていうかハヤテ！！
後ろ思いきり引きずってるけど大丈夫か！？」

「大丈夫です。この人は無駄に丈夫ですから」

ハヤテは駿を引きずったまま森の中を走っているのだが、駿は首根っこを掴まれたままなので…

「いや大丈夫って、何度も地面に叩きつけられてるわよ！？
木の幹や枝に思いきり叩きつけられてるわよハヤテさん！？」

「問題ありませんって。
この人は不死身の男って呼ばれてますから」

ツッコミを入れる美琴にニッコリと微笑んでそう返すハヤテ。

「いやいや！？
駿に色々刺さってるよ！？
枝とか石の破片とか刺さってまた血が出てる！！それに顔色が白いし……」

「あ～れ～」

「何か情けない叫び声も聞こえる！！」

アラタは引きずられる駿を見て絶句した。

彼の頭には木の枝や地面の石、木の破片等が刺さっておりダラダラと流血している。
しかも本人は目が虚ろになって声を上げていた。

「大丈夫です♪
駿君ですから」

「「何か恨みでもあるの!?」」

そんな感じで一行は爆発音があった場所にたどり着いた。
すると……

「クックックッ!!
待っていましたよ三千院家の執事綾崎ハヤテ!!」

「「!?」」

三人と引きずられる駿の前には黄土色のパーマのスーツ姿の外国人とその後ろに巨大なロボットが立っちはだかっていた。
ロボットはどこぞの恐竜のような前傾姿勢で足が二本、それ以上に大きな両手があり後ろには長い尻尾もある。三角形の巨大な頭部には『7』という文字が施されている。（コミックス3、4巻でギルバートが乗っていた巨大ロボ7号です）

「あ、貴方はあの時お屋敷に出た変な外国人……!!」

「ギルバートです!!」

そう。前方にいるのは三千院家の遺産を狙う咲夜の義理の兄（咲夜父の隠し子）ギルバートだった。

「そのギルバートさんがこんな所で何をしてるんですか？」

「A～HA～
決まっているじゃないデスか！！
綾崎ハヤテ！！貴方を倒し三千院家の遺産を手にいれる事です！！」

ビシッと指を突き付けハヤテに宣言するギルバート。

「ハヤテ、あの人は？」
「知り合い？」

いきなり現れた外国人にアラタと美琴は首を傾げる。
もっと突っ込む要素（後ろの巨大ロボとか）はある気もするが二人ともギャグ的な意味で規格外のこの世界に慣れたのだろうか。
華麗にスルーしていた。

「ああ、気になさらないで下さい。ただの変質者ですから」

ハヤテは笑顔でさらっと酷い言葉を口にした。

「つーかどうやって入ってきたんだこの馬鹿。
白皇のセキュリティーを掻い潜ったのか？」

（（もう復活しとる……！！））

駿も頭を掻きながらハヤテの横に並びギルバートに視線を向けた。
アラタと美琴は彼のギャグ的な回復能力の高さに驚く。

「簡単でしたよ～
愛沢家の関係者と言ったら、あっさり通してくれました」

「何やってんだ白皇のＳＰは……」

駿はそれを聞いて呆れたように溜め息をつく。

「って事で早速綾崎ハヤテをデストロイしたいと思いマスが、冥土の土産に面白い話をしてあげましょう」

「「……」」

ギルバートは巨大ロボットの手の平に乗ると不敵な笑みを浮かべてみせる。
駿とハヤテは反応するのも面倒臭いのでテキトーに話させる事にした。

「実は先程、時計に手足が付いたような化物に会いマシてね～
いや、ホントに奇妙な体験でした～」

「「！？」」

その話に反応したのはアラタと美琴であった。
二人は目を見開いてロボットの手に乗るギルバートの方に目線を向ける。

「一つ質問いいか？」

「？」

ギルバートの話を遮るようにアラタがハヤテ達の前にたった。
白いコートが風に揺れる。

「その化物、一体何処にいる？」

「ＯＨ、なんですかアナタは？」

「質問しているのはこちらなんだが？」

アラタは目を細めてギルバートの言葉を跳ね返す。

「ＨＡ～、生意気なガキデスね。人にものを頼むならばそれ相応の態度があると思いマスが？」

「こういう事はあまりしたくないけど……時間が無いんだ。
力づくにでも聞き出させて貰うぞ」

口元を歪めるギルバートにアラタは息をついて巨大ロボに向かって歩いていく。

「良いでしょウ！！
私の目的は綾崎ハヤテですが、皆まとめてデストローイ！！」

ギルバートは高らかにそう叫ぶとロボットの手の平から頭部に移動する。
そのロボットの頭は開かれるとコックピットになっていた。
ギルバートはそのままコックピットに座り頭部は閉じる。

「駿、ハヤテ。
暫く後ろに避難していてくれ」

「おい！？」
「アラタさん！？」

アラタは後ろの二人にそう言うと歩いていく。
駿とハヤテは止めようとするが彼は歩みを止めない。

「美琴、手伝ってくれ」

「勿論」

美琴は大きく頷いてアラタの後ろについていく。

「心配無い。
ここは俺達に任せてくれ」

「「……」」

少し振り返ってアラタがそう言うと駿とハヤテは怪訝な表情で顔を見合わせたがここは黙って従う事にした。

『A～HA～、ガキ二人でこの巨大ロボに勝てるとでも思っているんデスか？』

「さぁな、アンタがどう思ってるかは知らないが……」

アラタは巨大ロボットの前に立つと口元を僅かに緩めた。

「負けるつもりは毛頭無い」

そして巨大ロボットを前に立つアラタと美琴。

『クックックッ！！
ならば綾崎ハヤテより先に死ぬが良ーーーイっ！！』

「「！？」」

巨大ロボットの右腕が大きく振り上がり、次の瞬間二人に向かって拳が思いきり迫り来る。

ハヤテ達は危ないと身を乗り出すが二人は避ける気配も無い。

「頼む」

「ええ！」

アラタの一言に美琴はコインを取り出して一気に弾いた。

ドオォォォォン！！！

『！？』

迫る拳に放たれた電磁砲が正面から直撃する。
巨大ロボは右腕が弾かれて後ろに数歩仰け反ってしまう。

そしてアラタ達の周りには電磁砲の影響で砂塵が巻き起こった。

『一体!?
今のは一体何なのデスか!?』

ギルバートを乗せた巨大ロボットは狼狽えたように叫ぶ。

「彼女は超電磁砲（レールガン）
学園都市の第三位」

『!?』

すると砂塵が引いて行き、先程までアラタが立っていた場所には違うモノが立っていた。

それは骸骨を模した顔をして、白い帽子とマフラーを身につけている黒いボディをした仮面ライダーであった。

「さぁ、お前の罪を数えろ」

「あれは……?」

「変身、した?」

一方、後ろにいた駿達は立っているライダーを見て首を傾げる。

「仮面、ライダー……とか？」

「え、仮面ライダーって……
あの仮面ライダーなんですか？」

駿が呟いた言葉にハヤテは信じられないような表情をした。

「いやだって……
変身っていったら仮面ライダーじゃね？」

「そう言われても……」

訳が分からない二人だったが取り敢えずアラタ達の様子を見守る事にする。

『Ｗｈａｔ？
アナタ達は一体何者ですか？』

「ただのライダー、とでも名乗っておこうか」

「ただの超電磁砲よ」

巨大ロボットに向けてアラタと美琴はそう言った。

『Ｓｈｉｔ！！
とにかく私の邪魔をする奴はデストローイ！！』

巨大ロボは再び右腕を振り上げるがアラタ、いや仮面ライダーは腰についたホルスターからマグナムを取り出すと瞬時に構える。

ドドドドド！！！

『ＯＨ！？』

マグナムが火を噴き巨大ロボットの右腕に全弾命中する。
先程受けたダメージも相まってロボットの右腕は爆発して破壊される。

『Ｎｏｏｏ！？』

爆発を受けてロボは横によろめいてしまう。
しかしその隙を与えずに美琴が再び取り出したコインを弾く。

ドオォォン！！

『ぬゥゥゥ！？』

発射された超電磁砲はロボットの脚部に命中。
相当数の電圧がロボットの全体の機能を一瞬にして混乱させる。

巨大ロボットはガタガタと震え始めやがて身体の中心から動力部分が剥き出しになった。

「アラタ！」

「ああ！！」

ライダーは素早くマグナムを構えると、照準を合わせて引き金を引いた。

ドン！！

巨大ロボットは煙のようなものを上げて動きが完全に停止する。
目からは光が消えてコックピットがパカリと開いた。
ギルバートは気絶している模様。

「凄い……！！
あの巨大ロボットをあっという間に」

「圧倒的だな……」

ハヤテと駿はアラタ達に駆け寄っていく。
同時にアラタが変身を解いたようで元の姿に戻った。

「アラタさん、今のは一体…」

「ああ、驚かせたかな。
仮面ライダースカル、これが俺のもう一つの姿なんだ」

仮面ライダー……

駿の半分冗談とも言える呟きは本当だったのだ。

「ええ！？
仮面ライダーなんですか！？
本当あの仮面ライダー！？」

「そうだけど……
ライダーを知ってるのか？」

「いや知ってるも何も……」

日曜日の午前中に大活躍する子供達のヒーロー。
お父さんの世代から今の子供の世代にまで受け継がれる誰もが知っている正義の味方である。

「僕、本物見るの初めてですよ～」

「俺だってそうだよ。
いやしかし、スゲーなぁ……」

ハヤテと駿は感激したように言うとアラタを見た。

「あ～、コホン。
とにかくあの外国人に敵の行方を尋ねないとな」

二人の尊敬の眼差しを一身に受けたアラタはわざとらしく咳払いをすると、ギルバートの方に顔を向け……

「クックックックッ！！
油断しましたねガキ共！！」

「「！？」」

彼等が振り返ると、そこにはギルバートが立っていた。
どうやら気絶したふりをしていたようだ。

「私の作戦はまだまだこんなものではありまセーン！！」

パチンと指を鳴らすと、彼の地面が浮かび上がりまたもロボットが出現した。

「くっ……！！
ニ体も用意してやがったのか！！」

「しつこいわね！！」

出現したロボットは先程のロボットよりは大分小さいがそれでもまだ十分に大きい。
腕だけが異様に太い二足歩行タイプのロボットだった。
ギルバートは素早くそれに飛びのると右手の平に乗っかりアラタ達を見下ろす。

「さて、まずはおかしな力を使うガキ二人を始末しましょう！！
くらいなさい、このロボットのパンチ力は最強デス！！」

（っ！変身解いたばかりだっ！！）

ギルバートを乗せたロボットは思いきり腕を振り上げる。
アラタは変身を解いてしまったのでまたも変身して迎え撃ちたいが明らかに間に合わない。

美琴もそれに気付いてコインを取り出うとするも拳を振り上げる動作はもう完了している。

（間に合わないっ！）

結果……

『全員あの世で安らか眠りなサーイ！！ゴッ○ハン○クラッシャー！！』

ギルバートの乗るロボットの拳がアラタ達に直撃……

「？」

……しなかった。

それどころかロボットの右腕はアラタ達に迫るポーズのまま止まっていたが程なくして両断され崩れ落ちる。

「『愛沢』の名使って、あんま咲夜に迷惑かけんなよな……」

『！？』

「「！？」」

ロボットの横にいつの間にか移動した駿が木刀を腰に戻しながら歩いていた。

かと思うとロボットは電源が落ちるような音をたてて一切動かなくなる。

「全く……
あんまりしつこいと倒す側も大変なんでちょっとは考えて下さい」
反対側にはまたハヤテがロボットの横に一瞬で移動していてそう呟くと同じように歩いていく。
間もなくロボットは後ろから崩れ落ちて大きな砂煙を巻き上げた。

（は、速い……！！
あの二人、俺達と並んでた筈なのに……）

今度はアラタ達が驚かされる番であった。
駿は一瞬ロボットの右腕を切断し、ハヤテは瞬速でロボットの腹部にあった動力部を蹴り壊していたのだ。

先程の巨大ロボットよりは大分小さいとはいっても人間よりは十分大きなロボット。
まして彼等は特殊な能力も特殊な力も使った訳では無い。
本来持つべき純粋な力のみ。
とても人間の成せる速度、力とは思えない。

《お兄様とハヤテ様、お二人と一緒に居ればわかりますわ》

屋敷でそう言った伊澄の言葉が思い出される。

「アンタ達……一体何者？」

美琴がそう尋ねると前方の駿とハヤテは歩みを止めた。

「なぁに、通りすがりの……」

駿の言葉で二人同時に振り返る。

「執事と」

「……」

そして決めゼリフを……

「ちょっと駿君!?
何で何も言わないんですか!?
ここは決める所ですよ!!」

「いや、俺何て言えば良いんだろうと思ってさ……」

「は?」

急に訳の分からない事を呟き出す駿。

「お前はほら、“執事”で良いじゃん。“通りすがりの執事”ってカッコイイじゃん。
こん中でお前にしか当てはまらないだろ?」

「はぁ」

「けど俺は何だろう?ってふと思った訳よ。
学生?いやいやお前もアラタ達も学生だろ。
ならダメだ。

じゃあ退魔師？いや何か語呂悪いしなんか変だ。退魔してないし、ロボット倒しただけだし。
侍？いや侍違う、それ銀〇だし。という訳で言う事が決まらなかったん……」

「んなもん前もって決めとけェェェェェ！！！」

ハヤテのツッコミという名のドロップキックが駿に炸裂した。
馬鹿は後方に吹っ飛ぶ。

「……やっぱ馬鹿みたいね」

「ハハハ……」

二人の決めシーンは駿のせいで台無しになりましたとさ。

・・・・・

「とにかく、この外国人から魔物の居場所を聞き出そう」

「そういう事なら任せて下さい♪」

アラタの言葉にハヤテは笑顔で頷くとギルバートの元にいく。

「ギルバートさん、一体魔物は何処に行ったんですか？」

「クックックッ……

私を倒してもまた第二、第三のギルバートが貴様を襲……」

ドガガガガガ！！
《過激な表現を避ける為擬音のみで表しています》

ズドドドドド！！
《過激な表現を避ける為擬音のみで表しています》

ダダダダダダ！！
《過激な表現を避ける為擬音のみで表しています》

「それで？
あと何回ボコせば素直に話してくれるんですか？」

（容赦無い……
ハヤテさん優しそうな顔とは裏腹にとんでもなく容赦無いわ！！）

（つーかあの外国人もある意味凄いんだけど）

美琴とアラタはハヤテの容赦無い尋問に驚き呆れる。

「ん？」

するとギルバートの身体が急に青く光だした。

ハヤテ様子を窺う為に一旦距離をおく。

「「!?」」

するとギルバートから青い光が飛び出して形成してゆき、時計に手足がついた魔物が現れた。
なんとギルバートに取りついていたのだ。

「アイツだ!!
ようやく見つけた」

「うわっ、ご都合主義な展開」

アラタと美琴。
それぞれ感想は全く違うようである。

「ご都合結構。
そろそろページ数もきてるからな」

「駿君、それメタ過ぎますよ」

駿とハヤテもそう言いながら現れた魔物に目を向ける。

「皆、あれは普通の攻撃じゃあ留めはさせない。
素早い敵だから逃がさないように頼む」

「へ〜い」
「わかりました」
「ええ」

アラタはそう言って腰に何やらベルトを巻き付けた。
再び変身するようだ。

その隙に逃げられないようにハヤテがまず魔物の前に飛び出した。

「っ！！」

といっても相手は向こうの世界でアラタ達を振り切って逃げた時空を操る魔物、かなり素早く俊敏であっという間にハヤテから抜けてしまう。

しかしそこはハヤテ。
持ち前の反射神経とスピードで魔物の前に再び立ち塞がる。

『！！』

魔物は尚も抜こうと横にダッシュし、ハヤテがギリギリの所でそれより前に出て逃がさない。
そんな攻防が繰り返される。

何度目かハヤテが魔物の前に立ち塞がった時、

「今よ！！避けてハヤテさん！」

「はい！」

ハヤテが瞬時に姿を消してそのすぐ後ろにコインを構えた美琴が姿を現す。

『！？』

そう。ハヤテが何度も魔物の前に塞がったのは逃がさないようにするためだけでは無い。
美琴が魔物に攻撃を直撃させられる位置に気付かれないように誘導する作戦であったのだ。

美琴の周りにバチバチて音を立てて電気が走る。
同時にコインは宙を舞う。

「……」

全ての神経を集める。
僅か秒の動作に最大の集中力を。

「当たれーーーっ！！！」

そして弾いた。
雷鳴が轟くと大地が震度し大気が悲鳴をあげる。

放たれた超電磁砲（レールガン）は一直線を音速で走り見事に魔物に直撃した。
全身に電気を一身に浴びる魔物は後方に吹き飛ばされる。

「行ったわ！！」

「はいよ」

魔物が吹き飛ぶ先には木刀を構えた駿が立っていた。

彼は柄を握る手に力を込めると……

「アラタ！！
これで……
決めやがれェェェェェェ！！」

思いきり振り払った。
飛んできた魔物に木刀が真芯でヒット、ホームランのごとく高々と吹き飛ばす。

上空に浮き上がった魔物のちょうど真下に鏡弥アラタこと仮面ライダースカルが風に白をたなびかせ立っていた。

「いくぞ……」

スカルが静かにそう呟くと黒いボディの胸から骸骨型のエネルギーが凄まじい圧力を伴い発生する。

「っ！！」

そのエネルギーの前にスカルは飛び上がる。

「おォォォォ！！！」

そして回し蹴りの要領で渾身の一撃を加えて放った。
エネルギーは落ちてくる魔物に向かっていき……

ドオォォォン！！！

上空で起こった大爆発と共に、スカルは勝利を確信したのだった。

「「初めて見た……
ライダーキック……」」

その凄まじい演出のような攻撃に駿とハヤテはそんな事を呟いたのだった。

＊

「色々と世話になったな」

「いえ、こちらこそ」

森から出た一行は白皇学院内にある広大なテラスの一角に向かい合っていた。

魔物の退治が済んで、その魔物から元の世界に帰る事が出来る道具

を回収することに成功したのだ。

「迷惑をかけたけど色々とこっちの世界も興味深かったわ（色んな意味で）」

「ああ、まぁ何はともあれ良かったな」

たった一日だったが長い旅路だったかのようにお互いに別れの挨拶を交わしあった。

「ところで、あの外国人は？」

「すぐに復活してどっかに逃げていきましたよ」

ハヤテは困ったように溜め息をつく。またいつぞや襲ってきても不思議はないのだ。

まだまだ色々と話をしたいが元の世界に帰るのにはもう時間が限られている。

「じゃあそろそろ行くよ」

「達者でな」

「お二人とも、お気付けて」

「そっちも頑張ってね」

アラタが小さな懐中時計を翳すと美琴と二人の周りを白い光が包み込む。

「それじゃあ」

「ああ」

最後にアラタと駿が向かい合ってお互い握手を交わす。

「「これからも連載頑張っていこう！」」

「「それメタでしょうがァァァァ！？」」

ハヤテと美琴の叫び声と共に光は球体状になり、空に登るように消えていったのだった。

「……あ、」

「どうしたんですか？」

恐らく帰っていった二人を見送りながら駿は思い出したように声をあげた。

「サイン貰っとけば良かった」

「……え？」

こうして、二つの世界同士が交わった物語りは幕を閉じたのであった。

特別話　ライダーと退魔師と執事と超電磁砲（後書き）

元、霞空斗先生
現、桐生乱桐先生の
『とある科学の超電磁砲～今を戦うガタック～』
『とある魔術の禁書目録～戦いの神と呼ばれた者～』
とのコラボ篇でした。
とても面白い小説なので是非読んでみて下さい。

最近の仮面ライダーはとあるシリーズ以上に全く知識が無いので頑張って色々調べましたが違う部分が多々あると思いますが多目に見ていただけたらと思います。

ご協力ありがとうございました。

次回もよろしくお願いします

其の四十三　転校生の美少女って展開的に主人公と同じクラスっていうのが大半

伽藍
「久しぶりに本編～♪
という事で早速かなり時間が飛びます。早く原作を進めたいのですがマラソン大会まではもう少しかかるかも。ちょっとあの二人を加えてないとならないので。
マラソン大会に入ってしまえばそこからは一気に突っ切ります」

駿
「大体１０日くらい時間が飛ぶのでご了承をば」

伽藍
「あと、これは予告なのですが……またオリキャラが登場すると思います」

駿
「また！？」

伽藍
「まだ未定ですが一応翼君関係のオリジナル話になると思います。その展開的にはオリキャラが必須なので。
多分五人くらい」

駿
「捌けんの？」

伽藍
「大丈夫です。レギュラーキャラとかでは全然無いので。

勿論白皇の人ではありません」

駿
「ほぅ」

伽藍
「他校の生徒会の人達です。
勿論この小説に登場するからにはただの生徒会メンバーではありませんが。
一応設定は冷徹な生徒会として何となく出来上がっています。駿や翼達と絡む場面や白皇生徒会と絡む話が。
まぁ先の話ですが」

駿
「まぁこんな感じだけどこれからもよろしくお願いします」

伽藍
「では、始まります！」

其の四十三　転校生の美少女って展開的に主人公と同じクラスっていうのが大半

あの蜥尾の色んな意味で楽しかったり疲れたりした試練とあらゆる意味で恐ろしい呪いが解けてから一週間と数日あまり。

伊澄に銀華達鷺ノ宮家。
愛歌や咲夜、翼達といった事情を知る者にも挨拶を済ませ、駿の日常は別段何の変化も無く至って普通に進んでいった。

駿が馬鹿をやってヒナギクに怒られたり、翼がラブレター配達の駿に理不尽さを訴えられたり、千桜はゲームやアニメについて駿と色々熱く話したり、雪路の授業が破綻してヒナギクが怒ったり、体育の授業は翼が大活躍で駿は更なる球技音痴を曝したり、伊澄と寝ようとした駿が吹き飛ばされたり、伊澄とお風呂に入ろうとした駿が吊るされたりとまぁいつも通りの日常を送っていた。

しかし一つ変わった事と言えば、妖怪悪霊類いの依頼が全く無かったという事である。
これほど長い間大人しい夜が続いた事は珍しい。

鷺ノ宮家だけでは無く鷹ノ瀬家の方でもそうだったようで、駿は『これで暫く深夜にゲームに勤しむことが出きるな』と冗談を言ってたものだが。

「でやぁっ！！」

「うらぁ！！」

一月も二十日に差し掛かった日の深夜、鷺ノ宮駿と鷹ノ瀬翼は人気の一切無い冷たい広場で腕を振るっていた。
二人の周りを取り囲むのは下級の妖怪達。

駿は白く美しい日本刀と紅く鮮やかな日本刀の二本を流れるような動作で振るいながら悪鬼羅刹達に一閃を入れていく。

その様子は例えて言うなら風が自在に舞い踊っているかのごとく。
薄く掴み所ない剣筋である。
風で流れる綺麗な黒髪がその美しさを特徴付けているように思えるほど。

＞ｉ３５２０２―２１５９＜

一方、駿が舞う風ならば翼は力強く打ちつける波といった所か。
翼が振るうのは漆黒の木刀。
ただの木刀と侮る事無かれ、彼の木刀は轟音をあげながら妖怪達を凪払ってゆく。
にも関わらず木刀自身は全く折れる気配も無く、むしろその黒い刀身は強くなっていくような気さえ感じさせる。

まさしく剛剣というべき彼の刃は悪鬼羅刹を尽く打ち砕いていくのだ。

ーーーカッ！！！

駿の振り抜いた白夜が翼の後ろの妖怪を斬り裂き、翼が叩き付けた漆黒の木刀が駿の背後の妖怪を見事にうち砕いたのだった。

「ふぅ……」

駿は息をついて白夜を地面に突き立てるとそれを支えとしてその場に腰を降ろす。
そのまま後ろにある木にもたれ掛かった。

「何だ、もうへばったのか？」

それを見た翼が木刀を肩に担いでおかしそうに口元を緩めるとその隣に立つ。

「うるせーなぁ……
体力バカのオメーと一緒にすんなよ」

そんな翼に向かって駿は息をつくと恨めしそうに見上げる。

「情けない。
この程度で息切れしてたら鷺ノ宮の名折れだろ」

「良いんだよ。
どんなに情けなくてもみっともなくても俺は俺の我を通すって決めてんだ」

「いや、カッコイイ事言ってるけど中身はただ遊んでただけだろ、ゲームで徹夜しまくって授業中爆睡してただろ」

「ん、んな事ぁねーよ。
俺は腕を磨くために剣の鍛錬に励んだ故に、徹夜となって已む無く学院でも少し睡眠をとってしまっただけで……」

「嘘つけ。
お前全く運動して無かっただろ。現に今へばってるし」

「いや、学校の体育があった」

「それは日々の運動には入らねーよ馬鹿」

「馬鹿って言うな」

ちょっと焦ったように答える駿に翼はやれやれと呆れたように溜め息をつく。

「そういうお前だって運動は……」

「早朝ランニング往復２０ｋｍ、昼と放課後は剣道部。

筋トレは時間のある時に。
帰宅した後は飯を作って晩御飯前にランニングと竹刀を振るう。
まぁこれが大体最低限の一日の運動だな」

「……運動バカめ」

そう言った駿は翼にポカリと頭を叩かれた。

「お前も一日一回くらい運動しろよ」

「し、してるさ。
生徒会ではヒナギクに怒られることで物理的耐性をつけ、愛歌さんの弱点帳で精神的耐性を。
帰宅してからはコントローラー捌きにボタン連打の運動までをこなす毎日。
あと伊澄とお風呂に入ろうとして吹き飛ばされたり……」

「何にもしてない事がよく分かったよ」

翼はもういいと手を振って駿(ばか)の話を止める。
本当に呆れ果てたようだ。

「いや、違うってお前。
アレだよ、剣の修行はちゃんとやってたよ？」

「ほぅ……」

「緋色の剣客の第三シーズンを見直してたんだなこれが。
うん、見て修行する感じ。
いや～、勉強になった」

「……」

どうせ録な修行じゃあ無いだろうと思っていた翼は予想が見事に的中した事に最早何も言わずに首を振る。

「第三シーズンは特に最高なんだってホント。主人公が京から四国、九州という剣豪ものの時代劇ではあまりスポットが当たらない舞台に赴くのが良いんだよ」

「特に不正がまかり通る瑠甲城の君主と対峙する話は素晴らしいですわね」

「そうそう！五話から十話までの瑠甲編。あれは最高……って、え？」

駿が翼に良さを説明していたがもう一つ声が混ざっていた事に気付いて慌てて振り返る。

「おわっ！？」

「！？」

すると駿のもたれ掛かっていた木のすぐ隣の木にいつの間にか紅い着物の女性寄りかかってこちらを見つめていた。

「お前……！！
っておわっ！？」

「こんばんは、駿様」

つい数秒前まで誰もいなかった筈だと駿は驚いてもたれ掛かっていた木からズレて倒れてしまい、翼は一歩退いた。

「あら、鷹ノ瀬さんもいらっしゃいましたの」

「アンタ……名前何だっけ？」

ガクッ！

翼にも顔を向けた女性だったが、彼の言葉に思わず前のめりになって転びそうになってしまう。
しかしすぐに姿勢を正すと色をなして指を突き付けた。

「なななな、なんですって！？
わ、私の名前を……！！この由緒ある皇の姓を！！この皇綾姫の名を忘れたとおっしゃるのですか！？」

「ああ、そういやそんな名前だったな……」

翼はポンと手を併せて思い出したように呟く。
そう。着物の女性は皇綾姫であった。
「何て事ですの……
私は未だ嘗て名前を忘れられた事などありませんのに……」

「悪いな、高飛車な奴としか覚えていなかった」

「誰が高飛車ですって!?
あ、貴方無礼にも程がありますわーーっ!!」

綾姫は翼の言葉に扇子を閉じるとそれを向けて叫ぶ。
翼は肩を竦めてみせるだけだが。

「あの～、何で綾姫はここに?」

「ふぇ!?」

ここでようやく駿が立ち上がって綾姫に尋ねた。
彼女は我に返ったように驚くがすぐに何事も無かったように佇まいを直す。

「失礼しました。
私とした事が……
(駿様の前で何てはしたない!!
もぅ、私のばかばか!!)」

綾姫はそう言ってみせるが内心は真っ赤になって動揺と後悔の念にかられていた。

「それで、何故ここに?」

「少し話したい事があったからよ、私からね」

「「!?」」

その疑問に答えたのは綾姫では無く、後ろから聞こえてきたもう一つの声だった。

二人が振り返ると今度は篠月楓が綺麗な黄色い髪と黒いカーディガンを揺らしながら歩いてきた。

「お前は……」

「楓……？」

駿と翼は数歩退きながら彼女の方に目を向ける。

「待ちなさい貴方！！
私の名前は忘れていて何で楓さんの名前は覚えていますの！？」

「もう良いわ綾。
話が進まないから」

翼の言葉に憤慨する綾姫だが、楓が静かな声でそれを制する。
そしてそのまま二人の前までやって来た。

「鷹ノ瀬君。
悪いけど、彼と二人で話があるの。貸してもらえる？」

「……分かった」

楓が右に立っていた駿に手を向けてそう言うと、翼は一瞬間を開けたが頷いてみせた。

「じゃあ、少し歩きましょう」

くるりと背を向ける彼女の後を見て駿は素直に従う事にしたのか黙

ってついて行った。

残ったのは二人の姿を目で追う翼と拗ねてしまったのか隅で体育座りして顔を背けている綾姫。

「なぁ……」

「何ですの？
今更謝ったって遅いですわ！！」

「いや最初から謝るつもりは無いけど……」

「な！？」

さらりと言った翼に綾姫は拗ねるというより最早ガクリと落ち込んでしまったようである。

「そんな事より……
アンタ達と駿って知り合いなのか？」

（そんな事……！？）

翼は二人の去っていった方向の暗闇を見つめながら尋ねると綾姫は更にダメージを受けるも、何とか立ち上がった。

「それは……
私個人から話す事は出来ませんわ」

「……」

「ただ、駿様は私達にとって大切な方。それだけは確かですわ」

「……そうか」

はっきりとした迷いの無い言葉。翼はそれ以上深く聞くことを止めてフッと息をついて木に寄りかかった。

駿は楓についていって深夜の河川敷に来ていた。
今二人は初めて会った屋根付きのベンチの木造建物に。
楓は腰かけて、駿は建物の木の柱に寄りかかっている。

「んで？
話とは？」

「多分だけど……
貴方の方から聞きたい事があるんじゃないかなと思って」

「……」

つまり彼女の方から話があるのでは無く、駿の方から質問があるのではないかと彼女が考えたのだ。確かにその通りで駿は今度彼女達に会った時には尋ねたい事があるとは思っていた。

「それじゃあ、幾つか質問をさせてもらおうかな」

「ええ、答えられる範囲ならね」
何故彼女がそんな事を思い、またこのタイミングで接触を試みたのかという疑問には敢えて触れず、駿は楓の顔を見つめて口を開く。

「まず一つ目……
綾姫は妖怪退治が出来るみたいだけど……楓も彼女と知り合いなのか？」

「ええ。
綾……綾姫とは幼馴染みなの。
ごめんなさい、黙ってるつもりは無かったんだけどね」

楓は少し申し訳なさそうに苦笑してみせる。

「……なるほど。
あの時、綾姫と初めて会った時にもう一人感じた気配は楓だったんだな」

「驚いた……
気付いてたのね」

「僅かにだけどな」

口に手を当てて驚いた仕草をする楓に駿は肩を竦めて返した。

「それじゃあ二つ目。
二人は俺達と似たような種類の人間なのか？」

「というと？」

「気を失う前だけど……
オメーら二人が妖怪を殲滅してるのは見た。
だから、同業者かと思ってな」

「……」

彼が遠慮がちに尋ねると彼女はゆっくりと首を横に振った。

「違うわ。
確かに私達にはそういった力があるけれど、私も綾も退魔の仕事をしてるわけじゃない。
たまたまそういう力を与えられたって所かしらね。
勿論、見つけたら日常に被害が及ばないようにはしてるけどね」

『それは力を持っている人間の義務だから』と付け加えて彼女は答える。それには駿も納得した。
同じ東京都という広い中でははまだ聞いた事も無い退魔業をする人や能力者はいてもそこまで情報を広げている訳では無いので分からないが、少なくとも近隣の区内にそういった人間がいるという事は否応なしに耳に入ってくる。
だが近隣に住んでいるであろう楓や綾姫の話は聞いた事が無かったのだ。仕事をしていないのなら知らなくても納得出来る。

「じゃあ最後に……」

駿は何か考えるように少し間を空けると、一旦視線を彼女から深夜の空に移す。

「アンタ達は……俺の事を知っているのか？」

「……」

もう一度視線を楓の瞳に合わせて尋ねると、僅かに一瞬だが彼女の瞳が揺れたような気がした。
それが動揺によるものか、はたまたなんという事は無い、ただの自然現象かは駿には分からない。
彼女の返答を待つのみである。

「……ええ、知ってるわ」

「え？」

暫くして彼女から返ってきた言葉は駿には予想外だったようで思わず聞き返してしまった。
彼は楓が答えないと思っていたのだろう。
しかしその予想はすぐに当たりである事が分かった。

「だって、去年の冬に会ったでしょ？」

「……あぁ」

彼女は続けてそう答えたのだ。
確かに去年の冬に、つまり最近にこの場所で二人は出会った。
初めて出会ったのは夜の道の角の出会い頭だったが。
だが彼が聞いたのは『自分の事を昔から知っているのか』という意味だ。
それを分かっていてそう答えたのは、つまりその問いには答えられないという事を暗に意味する。

「そうだな……」

「ええ、そうよ」

駿はそれ以上この話について追求する事を諦める。
楓の表情には先程とは違って一切の迷いは無く、この話についてそれ以上の返答をしない事を暗に物語っていたからだ。

（それに……）

触れてしまえば壊れてしまうものもある。
知ってしまえば失ってしまうものもある。
それはとても繊細なもので、目には見えないほど些細なもの。
それでいて何よりも大切で、確かにそこに存在している。

（逃げてるな……俺は）

彼は自分の過去をしろうとはしない。その事で今の日常が、今笑っていられるこの日常が崩れてしまったら……
そう考えると彼は踏み出そうとする足を留めてしまう。

分からないのならそれで良い。
いつか分かる事としても……
今はこのままでいたいと。
少なくとも、今だけは……

「それじゃあ、私からも一つ質問いいかしら」

「え？」

少し駿が思考を巡らせていると、楓が立ち上がって彼の前まで来ていた。
彼女の問いに駿は我に返って彼女を見つめ返す。

「貴方は……今、幸せ？」

「……」

まるで彼の心の中を見透かしたような、そんな言葉。
彼は暫し返す言葉に迷ったが、

「ああ……多分、な」

夜空を見上げると自分に言い聞かせるように呟いた。

「……そう」

寂しいようなそれでいて安心したような表情で頷く楓。

「じゃあ、話はおしまいね。
戻りましょう」

「……ああ」

薄く微笑むとくるりと背を向けて歩き出す楓にそう言って駿はついてゆく。

「あ、そうだ」

「？」

歩きながら楓は思い出したようにポンと手を打った。

「これからは……
もっと会える機会が増えると思うから、よろしくね」

「え？近くに引越してでもくるのか？」

「う～ん……
近いかもね。引越しといえば引越しかな？」

「へぇ……
っていうか、そもそも何処に住んでるんだ？」

「それは秘密♪」

「？」

訳が分からない様子で首を傾げる駿にクスクスとおかしそうに微笑む楓であった。

其の四十三　転校生の美少女って展開的に主人公と同じクラスって

いうのが大半

「え？転校生？」

翌朝の生徒会室。
思わず声を上げた駿の前には机に座っているヒナギクの姿。

「ええ。
昨日薫先生から言われたのよ。
私達のクラスに転校生が来るって」

「へぇ……それはまた突然」

翼も興味深そうに駿の隣に座ると口を開く。

「待てよ？俺と駿でもう二人もあのクラスに転校生が来てんだろ？
なのにまた転校生があのクラスに？」

「ええ、それは私も疑問だったんだけど……
学校側の決定みたいだから。
あ、それと二人らしいわ」

「「二人！？」」

累計すると駿達のクラスには四人の転校生が来る事になる。
普通ならばあり得ない事だが。

「男子？女子？」

「それはまだ聞かされて無いわね」

駿の質問にヒナギクはペンをクルクルと回して続ける。

「何でも二人は白皇の寮に入るみたいなんだけど、そこへの引越しのために今日学校に来て、ついでにＨＲで挨拶だけするらしいの」

「へぇ……」

「それで、今からちょっと職員室にその二人の資料を貰ってきて欲しいのよ。
駿君、お願い出来る？」

「構わねーけど」

ヒナギクは少し仕事が忙しく資料を貰いにいくのを駿に頼んだ。

「あ、んじゃ俺も」

「私も職員室に用事があるから、一緒に行くよ」

「ええ、それじゃあよろしくね」

続いて翼と個人的に用があるという千桜も駿の後に続く。

「あ、そうだ駿君」

「？」

生徒会室を出ようとした駿をヒナギクが呼び止めた。

「封の中を開けて資料を勝手に確認したらダメよ？
個人情報もあるし、何より転校生を先に知るのは楽しみが減るからね」

「分ァってるって……
んな野暮な真似はしねーよ」

駿は背を向けたままヒラヒラと手を振りながら翼達と生徒会室を後にした。

そんでもって職員室……

「これが転校生二人の資料の入った封筒だ。
中は覗くなよ？」

「分かってますって……
信用無いですね俺」

「まぁ、お前だからな」

薫は資料を取りに来た駿と翼に本日顔を見せる転校生二人の資料を手渡した。
苦笑する駿にさらっと付け加える薫は彼等の担任である。

「先生、転校生の性別は？」

「二人とも女子だよ。
しかも喜べお前達。
とびっきりの美人ときた」

薫の言葉に『マジですか』と顔を輝かせる駿とそれを見て苦笑いする翼。

「ああ、それと……
彼女達は今日は寮に引越すために顔を出すだけだから、案内はお前達生徒会に頼むよ」

「ええ、任せて下さい」

いつになくやる気をみせる駿（ばか）もとい駿（へんたい）。
まぁとびっきりの美女が来るのなれば男ならば俄然テンションがあがるものだろう。

「まぁ、俺は基本年上タイプなんだけどな」

「鷺ノ宮？」

「あ～、いえ。
何でもありません」

とにかく頼まれた書類の入った封筒を貰った二人は、職員室を後にした。
出口でちょうど別の用件を終えた千桜と合流する。

「資料は貰えた？」

「ああ、バッチリ」

千桜に駿は手に持った封筒をヒラヒラとさせてみせた。

「何だか随分機嫌が良いけど。
何かあったの？」

「あ、あ～……それは」

駿の様子に千桜が首を傾げると翼は訳知り顔で頬を掻きながら言葉に詰まる。
すると駿が自ら口を開いた。

「いやさぁ、薫先生曰く、転校生が二人ともかなりの美人らしいんだよな」

「……ほぅ」

それを聞いた千桜はジト目になって彼を見るが駿は気付かずに続ける。

「まぁ、俺は基本的に年上タイプだから同い年や年下とかはあんまり興味無いんだけど……
美人と聞けばそりゃ悪い気はしないだろ？

もしかしたらかなりお姉さんタイプの転校生かもしれねーし？
それなら最高だな、うん」

「……」

ジーっと彼を見つめる千桜。
心なしかその視線は冷ややかなものになっているような。

「それに転校生つったらここではゼロからスタート、つまり俺達の事は何にも知らない訳だ。
彼女達に新たな鷺ノ宮駿を築き上げるのも悪くないかな～っなんて……」

ギュッ！！

「ーーーっ！！？」

にやけた駿の話を聞いていた千桜が彼の爪先を踏んで止めた。
彼は痛さのあまり声にならない叫びをあげてその場に踞る。

「い、いきなり何すんだよ！？」

「別に、ただのあまり朝から大きな声で騒ぐと迷惑だから止めただけだよ」

踞りながら何とか顔を上げて抗議する駿にさらりと答える千桜。

「いや、止めるにしてももう少しやり方が……」

「それでは、私はまだ仕事があるからこれで。新しく築き上げるなりなんなり勝手に頑張ってくれ」

彼のツッコミをスルーして千桜はくるりと背を向けると、仕事用の書類を抱えて二人から去っていった。

「うーむ……
流石千桜、クールだな」

「いや、何感心してんだ」

そんな彼女の凛としていてどこか冷然とした後ろ姿を見て翼は感心したように頷くが駿は足を擦りながら立ち上がる。

「痛っつつ……
アイツ、何もいきなり踏む事ァねーだろ。注意なら口で言えゃ済む事だろうに」

「いや、お前が悪い」

「何でだよ!?」

踏まれた上に翼にバッサリ切られて訳の分からない様子の駿。
そんな彼のに翼は心底呆れたように溜め息をつく。

「お前……
彼女が本当に注意するためにした事だと思ってるのか？」

「え？

いやだって、自分でそう言ってたじゃねーか」

「はぁ……もういいよ」

翼はダメだこりゃというように首を振ると一人歩き出した。

「ちょっ、どういう意味だよ？」

「今のお前に言ったところで恐らく時間の無駄だ。
それより、さっさとヒナギクに届けに行くぞ」

「あ、おい！？」

一人歩いていく翼を駿は何が何だかといった表情のまま追っていくのだった。

＊

「皆～、また転校生がこのクラスに来る事になった」

おお～っ！！

高等部一年三組の教室。
担任である薫が教室を見回してそう言うと生徒達はどよめいた。

「しかも喜べ男子諸君。
今回は女子が二人だ。
（しかも二人ともかなり美人だぞ）」

おォォォォっ！！！

薫の言葉に、特に最後に小さく呟いた言葉に男子達の期待を込めていた声が叫び声に変わった。
勿論その中には駿もいるわけで。

「それじゃあ……ん？」

転校生はまだ扉の向こうにはいないので、先に生徒達の出席を取ろうと椅子に座った薫が名簿を広げた所で、駿がスッと席から立ち上がり教壇に立った。

ダン！！

そして教卓に思いきり手を叩きつけて教室を見回す。

「ダメだ、こんなんじゃ全くなってねぇ男子共」

「「「？？？」」」

いきなり教壇に立った駿に何事かとざわめく生徒達。

しかし構わず駿は続ける。

「いいか男子諸君!!
俺達は今から何をやる!?
体育祭の選抜リレーか!?
水泳大会の選抜メドレーか!?
否!!俺達は今、美人な転校生をこの教室に向かえようとしてるんじゃねーか!!」

「「「!?」」」

いきなり演説のようなものを始める駿。
しかしその無駄な迫力にクラスの男子達は勿論、女子達も驚いてざわめきを止める。

「選抜リレーやメドレーといった一部の人間の集まりとは違う!!
全員が集まったこのクラスで、新たな仲間を迎える訳だろ!?
美人な女子を二人も迎える訳だろ!?それなのにそんなバラバラで転校生が気分良く且つクラスの雰囲気に馴染めるとでも思ってんのか!?」

「「「!?」」」

ここで男子達（翼を除く）は一斉にハッとした表情になる。

「そう!!もしこのままだと、
今から俺達のクラスにくる美人な女子生徒がバラバラな俺達に幻滅し、俺達で無く他クラスのカッコイイ男子に走っちまう可能性だってあるんだよ!!
そうならない為にも、ここでこのクラスの、俺達のクラスの野郎共

がいかに結束し素晴らしいかを見せてやらなきゃならねぇ！！
そうだろテメーら！！」

「「「！！」」」

もうお気付きかもしれないが男子生徒は少なからず感銘を受けた表情で演説に聞き入り、思わず立ち上がってしまう男子もいる。
反面、女子生徒は呆れ気味な人も居れば困惑したように笑っている人も様々である。

「つまり！！
ここがこのクラスの男子全員！！
俺達の漢（おとこ）の見せ所つー訳なんだよ！！」

駿はもう一度教卓を叩くとそう叫んで室内を見回す。

「そうだーーっ！！」
「いいぞ鷺ノ宮ーーっ！！」
「俺達は漢になるんだーーっ！！」「【美少女同盟一年三組軍】隊長益田、及び各小隊の出撃体制が整いました！！鷺ノ宮司令官、いつでも出陣命令を！！」
「「「サー、イエッサー！！」」」

その問いかけに室内中から男子達の声援が帰ってくる。
そんな声援に右手の拳を突き上げて答える駿（ばか）。

今ここに、馬鹿共による馬鹿共のための絆が築き上げられた。

「バカですね……」

「千桜はバッサリいくな……
まぁ同感だけど」

机に座って一部始終を見ていた千桜は呆れたように呟き、前の席の翼もそれに同意する。
室内は最早馬鹿共による鷺ノ宮コールに沸いているのだが。

「でも何であんなにハイテンションなのかしら？」

「きっとアレですよ。
コラボ篇で向こうの主人公のあまりの格好良さを目にして色んな意味で頑張ろうと努力したんじゃないかな？
んで本編に戻ったからハジけて発散しようと……」

「色んな意味で危ないからやめなさい」

首を傾げる愛歌に人差し指をたてて答える翼。
それを止めさせるヒナギク。

「でも駿君凄いわね～
クラスの男子あっという間に仲間に引き込むなんて、そういう才能があるんじゃない？」

「感心してる場合じゃ無いでしょ……全く駿君は毎回毎回おかしな方向に持っていくんだから」

愛歌の言葉にそう返すとヒナギクは溜め息をついて席を立つ。

「止めるの気か？」

「当たり前でしょ」

ヒナギクはそう言うと教壇に向かって歩いていく。
そして右手を突き上げて『ありがとう、ありがとう』と声援に向かってお礼を言っている駿の後ろに立つと……

バタンッ……

次の瞬間、駿はその場に崩れ落ち竹刀を持ったヒナギクが満面の笑みで生徒達の前に現れた。

「皆、馬鹿な事はやってないで普通に転校生を待ちましょう？良いわね♪」

「「「「Ｙｅｓ，Ｙｏｕｒ　Ｈｉｇｈｎｅｓｓ（イエス・ユア・ハイネス）！！！」」」」

駿政権。
生徒会長ヒナギクにより
陥落……

時間にして僅か一秒足らず。
こうして一同は普通に転校生を待つことにし、駿は自分の机に連行

された。

１０分後……

「え、え～それでは……
転校生が二人とも扉の前に来たようなので、入って貰うか。
どうぞ」

薫が教室の扉に声をかけるとゆっくりとドアが開いた。
そして姿を現したのは……

白皇の制服を少し恥ずかしそうに着た美少女と紅く鮮やかな和服で堂々とした態度の美少女だった。

おおおォォォォォォオオオ！！！！

男子陣テンション再び爆発。
ただでさえこのクラスには千桜、愛歌、そしてヒナギクといった美少女達がいらっしゃるというのに、このクラスは天国か！？といった感じである。

「え、え～と……」

二人の内、一人の制服姿の転校生が男子陣の叫び声に困惑したように恐る恐る薫の側に歩いていく。着物の転校生は扇子で口元を隠しながら優雅な佇まいでその後に続くが。

制服姿の美少女は綺麗な黄色いロングヘアーに右側の前より少し横の髪を赤いリボンで結って垂らしてある。
エメラルド色の澄んだ瞳に大きな二重瞼、美しく整った容姿。
そしてスラリとした身体に美しい形の胸。
そして優しく柔らかな笑み。

着物姿の美少女は青みががった綺麗な黒髪を腰よりやや高い位置まで流している。
艶やかな紅い着物に映える紅梅色の扇子で口元を隠し、二重瞼で藍色の瞳が覗く。
スタイルは和服だから詳しくは分からないが恐らくスレンダーだろう佇まいでこちらも相当な美人である。

「「……」」

クラスの男子が盛り上がり、女子達も綺麗と見惚れている人も居る中で……
駿と翼は唖然とただ教壇の横に立つ二人の転校生を見つめていた。

「……おい、アレって」

「……ああ、間違いない」

そう。その二人の転校生とは、
紛れもなく篠月楓と皇綾姫であった。

（（えェェェェェェェェ！？））

二人の叫び声は各々の心の中で響き渡ったのだった。

其の四十三　転校生の美少女って展開的に主人公と同じクラスっていうのが大半

前半シリアス、後半は駿が色々ぶっ飛びました。
今回はちょっと無理なので諸事ラジは次回やります。

次回、遂に転校生として現れた二人。駿の明日はどっちだ！？

其の四十四　我らが学舎（前書き）

伽藍
「今回もさして面白くない普通の話です。
もう少しで原作に突入します。
暫しお待ちを」

駿
「んじゃ、始まります！！」

其の四十四　我らが学舎

高等部一年三組の教室。
その朝のＨＲの時間に担任である薫京ノ介が隣にいる転校生二人に手を向けながら室内を見回して口を開いた。

「え～、彼女達は今週からこのクラスに編入してくる事になった二人だ。
彼女達は今日から白皇の寮に住むことになっているんだが、それに伴い今日は挨拶だけをしてくれることになった。
クラスに入るのはもう少し後だ。それじゃあ、二人とも」

薫が一歩退くとまずは一人目が前に出る。

「篠月楓といいます。
こんな時期に編入してきて困惑している方も多いと思いますが、残り少ない月日をこのクラスの皆さんと一緒に楽しく過ごしたいです。だからどうか、よろしくお願いします♪」

楓は丁寧に頭を下げると最後にニッコリと微笑んだ。

（え、笑顔……！！
そうだ！！僕はこの笑顔を待ってたんだ！！）
（何という優しい笑み！！

癒される……）

（生徒会の超美少女メンバーに加えて！！くぅ～っ！！一年三組で良かった～！！）

（美少女同盟軍一年三組小隊！！

今後彼女に他クラスの危険分子（おとこ）が付かぬように全員注意を払え！！）

（サー、イエッサー！！！）

彼女の挨拶に早くも男子陣が心中で大体同じ事を考えてある意味結束していた。

駿（ばか）の与えた影響は色んな意味で大きいようだ。

女子生徒達も楓の挨拶を聞いて、彼女とは仲良くなれそうだと思っていた。

楓が一歩下がると続いて紅い着物の転校生が前に出てきた。

扇子をピシャリと閉じると現れた美しい口元を優しく緩める。

「同じく。

私は皇綾姫と申します。

女子生徒の皆様、短い期間ではありますがどうかよろしくお願い致しますわ」

（（（お、お姉様……！！）））

彼女の清らかな様子に普通の女子とは違った趣味を持つ一部の女子生徒が顔を赤らめた。

敢えてもう一度言おう、女子が顔を赤らめた。

しかし今の彼女の挨拶は女子にあてられたものだけ。
男子生徒ははてと首を傾げる。
すると綾姫は男子生徒達を見てー睨み付けてという方が正しいかもしれないー続けた。

「男子生徒の皆様。
最初に言っておきますが……
基本的に男性が大嫌いなんですの。無論、私が認めた殿方は別ですが。
特に情けない態度やはっきりしない性格、女性を軽視するの方はもっての他。
ですから、私に話しかける際はそれ相応の覚悟をお持ち下さいまし」

（（（こ、怖っ……！！））））

きつく睨みそう言った綾姫に一般男子は一転して肩を震わせた。
逆に女性陣からは多くカッコイイという印象を与える。
それでも一部の男子は……

（何というツン！！
だが逆にそれが良い！！
縛られたい！！）
（きつくふ…踏まれたい…！！）
（俺…実はMなんだよ…）

変態チックではあるがそんな感想を浮かべる者達もいた。
本人が聞いたら激怒し、血まつりにされる事は間違いないが。

「あ、あ～……

それでは自己紹介も終わりかな」

綾姫が一歩下がると、
薫が苦笑混じりに名簿を持って前に出てくる。
また個性的な転校生の登場に不安も色々とあるのだろう。やはり担任とは大変な仕事である。

男女生徒達が様々な反応を見せる朝のＨＲで、浮かない表情というか何か焦りや困惑を無理矢理隠そうするように俯く様子の男子が二人。

「「……」」

左に鷺ノ宮駿、
右に鷹ノ瀬翼である。

（オイオイ……
一体どういう訳だコイツは）

机に肘をついて額を押さえる翼は隣の駿に視線を送る。

（俺が知る訳ねーだろ。
こっちが聞きたいくれぇだよ）

同じく額を押さえる駿は視線だけで心情を表現し返す。

（お前昨日彼女と何か話してたじゃねーかっ）

（んな話聞いてねーよ……
つーか知ってたらオメーに言ってるよ）

流石に中学時代からの付き合いというべきか。
お互いアイコンタクトで会話を成立させる。

（駿、これはもしかして……）

（さぁな、ソイツは直接聞いてみねーと……）

「駿君？翼君？
……大丈夫？」

「「え？」」

すると、後ろの席のヒナギクが二人の様子に気付いたのか話しかけた。
二人はやや慌てて振り返るとヒナギクと左隣の愛歌も怪訝そうな表情をしている。
右隣の千桜はいつも通り冷静で特に気にした様子は無いようで文庫本を読んでいるが。

「焦ってるようにも見えるけど？」

「い、いや……
別に何でも」

「いえ、何でもないですよ」

愛歌が尋ねると二人はそう言って軽く首を振ってみせたがその表情は若干引きつっているようにみせる。

「また変な事でも考えてたんじゃないんですか？」

「いや、違うからね！？
しかもまたって何だよ！？」

本から視線を離した千桜はそう言ってジト目を駿に向ける。
そんな様子に翼はただ苦笑してみせるだけだが。

「え～、それじゃあ挨拶は以上。彼女達はこれから寮に向かうから今日のＨＲはここまでにしたいんだが……」

教壇の薫が手を叩いてざわつく教室を静まらせた。
そして楓と綾姫を見るともう一度教室に目を戻す。

「誰か寮に行く彼女達の案内役を頼まれてくれないか？
出来れば……」

ガタッ！！

「「俺達が行きますっ！！」」

薫の言葉が終わらないうちに駿と翼が立ち上がってそう言った。
二人の行動にクラスに心中でどよめきが走る。

（な、何と！！
あの二人、いきなりの特攻！？）
（凄い……！！

皇さんのあの挨拶の後で手を上げるなんて……！！）
（流石鷺ノ宮！！
手を上げづらい俺達の意思を汲んで自ら特攻してくれるなんて！！）
（玉砕覚悟か同志よ！！）

男子生徒達は特に綾姫の厳しい挨拶の後とあって手を上げた二人（特に駿）に賞賛の眼差しを送る。まぁ実際は全然違うのだが。

「え、いや……
あ～、二人はそれで良いのか？」

薫はどうしたものかと困ったように駿達を見ると楓と綾姫に目を向ける。
彼としては女子寮だし綾姫の挨拶も踏まえて女子生徒の方が問題無いと思ったのだ。

「はい、大丈夫です」

「ええ、構いませんわ」

しかし、楓と綾姫はすぐに頷いて薫に返した。
これによって先程より強く教室がどよめいた。

（な、何ィィィ！？
篠月さんはともかく、皇さんまで頷いただとォォォォォ！？）
（やはり鷹ノ瀬がいるからか！？
あのモテ男はオーケーなのか！？）
（おのれ鷹ノ瀬め……
羨ましい過ぎるぞ！！）
（負けるな鷺ノ宮！！

俺達の思いを届けさせるんだ！！）

男性が大嫌いと言った綾姫が頷いたのは校内一の男前である翼がいるからだとほとんどの生徒が思っていた。
それは当然の心理でまさかモテない事に定評がある駿が認められている男性だとは到底思えないのだろう。
したがって男子生徒は駿に負けるなと心中でエールすら送っている者もいるのである。

「そうか……
まぁ二人は生徒会だからな。
だったら転校生の案内は二人任せよう」

「「……」」

駿と翼は黙ってそくさくと教卓の前まで歩いていく。
そうして楓達の隣に並んだ。

「それじゃあ、二人は今日はこの辺で。
授業には後日から出ることになるから、皆よろしくやってくれ」

「よろしくお願いします」
「お願い致しますわ」

薫の言葉に続いて楓と綾姫は丁寧に頭を下げた。
生徒達は盛大な拍手で返して朝のＨＲは終了する。

こうして四人は担任の後に続いて教室を出ていった。

「翼君はともかく、駿君が進んで転校生案内なんて大変な生徒会の仕事を引き受けるなんて……珍しいわね」

「言われて見ればそうね～」

駿達が急ぎ足で出ていった後を眺めながらヒナギクがそう呟くと愛歌も頬に手を当てて答える。

「どうせ……」

「「？」」

すると千桜が目を通していた文庫本をパタリと閉じて顔を上げる。

「彼女達に新しい自分を築き上げようとでもしてるんじゃないですか……？」

「「……」」

そして教室の出口に視線を向けてそう言った。

彼女の素っ気ないような態度にヒナギクは思わず首を傾けて愛歌の顔を見た。一方愛歌はクスクスと笑っている。

「千桜？
何か怒ってる……？」

「別に、いつも通りだよ」

不思議そうに尋ねるヒナギクだが千桜は至って普通な様子。

「嫉妬なんてしなくても大丈夫よ千桜さん♪」

「してません！！」

「クスクス」

慌てて叫ぶ千桜を見ておかしそくに微笑む愛歌。

そしてまだよく分からないように首を傾げるヒナギクであった。

其の四十四　我らが学舎

「へぇ～！！

噂には聞いていたけど……

こうして見ると白皇学院って本当に広いのね～」

「これは中々の景色ですわね……」

白皇学院にある時計塔。
その最上階に位置する生徒会室のバルコニーから楓と綾姫が東京都の景色を一望して感嘆の声をあげていた。

「本当に良い眺め……
だけどここまで高い場所に登らないと遠くまで見渡す事が出来ないのね、“ここは”」

「そうですわね。十何年と見慣れていてもあのところ狭しと立ち並ぶビルの数々は風情がありませんわね。私達が知っている本当の景色は……」

ゆっくりと周りを見渡し笑顔の中にどこか掴み所の無い複雑そうな表情を浮かべる。

「そろそろ教えて欲しいんだけど……」

「「？」」

すると彼女達の後ろ、生徒会室からバルコニーに駿と翼が歩いてきた。その表情は困惑と警戒がいり混じっている。

彼等は寮に向かう前にまず話を聞く為に、この時間帯に一切人気がない生徒会室に楓達を連れてきたのだ。
ここならば盗み聞きされる心配も無いし、入口も一ヶ所しか無いので安心といえる。

「それで……
何で二人がここに居るんだ？」

「何でって……編入試験を受けて合格したからだけど」

「いや、そういう意味じゃ無くてだな……」

当然と言えば当然の答えを返す楓に翼は頭を掻きながら曖昧に口ごもる。

「単刀直入にいこう……」

「「？」」

駿が言葉を引き継いで二人の前に一歩出る。

「あんましこんな事は言いたかねぇんだが……
最初に会った時の様子、仕掛けてきた行動。
この間助けて貰った時のタイミング。
そして昨日の今日でこんな時期に編入生……」

「「……」」

「考えられる可能性は二つ。
一つは全くの偶然。
もう一つは……」

駿がそれ以上先を言おうとすると楓がサッと人差し指を彼の口に当

ててそれを止めた。

「監視？」

そうして彼女が恐らく駿が言おうとしたであろう言葉を先に口にしてみせた。

「私達は貴方に何らかの目的があって、貴方を監視するためにここに送り込まれた？」

「……悪いな。
家柄的にそういう考えが先行しがちなんだ」

「確かに、そういう仕事をしていればそう考えるのも頷けるわ」

楓は彼から少し距離を取ると、気を悪くした様子も無くそう言ってみせた。

「でも、それは違うわ。
今回の編入は兄が勝手に決めた事だし、前回の事も本当に偶然よ」

「ええ。駿様のお考えは理にかなってはいますが、私達は貴方達を監視する目的はありませんわ」

きっぱりと。
楓と綾姫は真っ直ぐ駿達の目を見つめて首を振った。

「細かい疑いは消えないかもしれないけど……
これだけは信じて」

「「……」」

彼女は駿の目を見つめたままゆっくりと口を開く。

「私達に敵意は無い。
寧ろ貴方の味方よ」

「ええ、それだけは間違い無いですわ」

彼女達の真っ直ぐな瞳に嘘偽りは一切見受けられない。
それな翼には勿論、駿にも確かに感じられた。

「駿、二人は嘘なんて言って無いよ。だから信じよう」

「……」

駿は翼の方に顔を向け、何も言わずに視線を向ける。

「人との繋がりってのは、やっぱり人を信じる事から始まるのが基本だろ？」

「……かもな」

翼の言葉に駿はフッと息をつくと口元を緩めた。
そうして楓達に振り返る。

「分かった。
二人を信じるよ」

「ありがとう二人とも」
「駿様とそのご友人なら信じて下さると思ってましたわ」

楓と綾姫はニッコリと微笑んでお礼を言った。

「んじゃ、寮の方に案内するよ。荷物は後から届くみたいだから」

「ええ」
「はい」

四人は生徒会室を後にして、本来の目的地である女子寮に向かう事にしたのだった。

＊

白皇の女子寮は他の施設に負けず劣らず大きな建物で流石超お金持ちが通う名門校だ。
造りは古風な洋館がモデルのようで外観からも荘厳な雰囲気が漂うのが感じられる。

利用者は学校の規格外の規模故に中々多く、規則も基本的に頭の良い生徒達が集まっているので生徒自身に任せているのでそれが逆に評判が良い。

寮内の一階はホテルのような広いフロント、ソファやリラックススペースがあり落ち着いた雰囲気。二階は丸々食堂。
かなりの広さで皆で食事をする場所になっている。
三階からはそれぞれ利用者の部屋となっているが、娯楽スペースやカフェ等もある高級ホテル顔負けの快適さを有した施設、いわば白皇学生ホテルとも言えるのだ。

「お～！！
やっぱり凄いな白皇は」

「全くだ……」

女子寮前に到着した四人はその建物の凝りように驚いていた。
楓達は勿論駿達も地図通り来たとはいえ、寮を見るのは初めてなのだから。

「何だか……
楽しそうね、学校って」

「本当ですわね……」

楓と綾姫は寮までの道で色々な生徒達が授業をする教室や体育の授業を見てきたのを振り返りそう呟いた。

「「？」」

二人の不可解な反応に駿と翼は不思議そうに首を傾げる。
それに気付いた楓は慌てて口を開いた。

「私達、ちゃんとした学校って初めてだから」

「え……」

彼女の思わぬ言葉に駿はそんな声を洩らした。

「あ、別に学校が初めてって訳じゃないよ？
小さい頃は皆で暮らすような学舎に行って育ってきたから」

「育って……？」

「ええ、私は両親はいなかったから。兄さんや綾達と一緒にそこの学舎で暮らしてたの。
そこは親の居ない子供達も沢山集まったから」

楓は笑ってそう言うが、とても笑って聞けるような話では無い。
駿も翼も何と返して良いのか分からずに黙ってしまう。

「まぁ、私は皇家がその学舎のすぐ近くだったので通っておりましたのですが」

「私達がそこに拾われた日に綾と初めて会ったのよね」

「クスクス……
そうでしたわね。懐かしいですわ」

そんな空気を和らげようと楓が言うと綾姫はクスクスと微笑む。

「その時に綾と喧嘩してる弘也君ともあったのよね」

「そんな事もありましたわね、あまり良い思い出ではありませんが……」

思わず顔をしかめる綾姫を見ておかしそうに微笑む楓。

「えっと……？」

「あ、ごめんなさい」

そんな二人に駿が遠慮がちに話しかけると彼女は気付いたように振り返る。

「まぁ、要するにちゃんとした学校っていうのが今日初めてだから少し嬉しくなっちゃって……」

「ここの皆様は楽しそうに笑っていらして、こちらまで明るい気分になりますわね」

そう言って優しく微笑む二人。
それを見た駿達は事情は分からないが頷いてくれた。

「じゃあ寮内に俺達は入れないからここまで。中にいる寮母さんには話を通してあるから聞けばすぐに分かるよ」

「ええ、ありがとう」

翼が寮を指差して言うと二人はたまお礼のために頭を下げた。
授業もあるので翼達は校舎の方へ、楓達は寮の方に行くためにここで一旦別れる。

「楓、綾姫」

「「？」」

駿が不意に二人を呼び止めた。
二人は不思議そうな表情で振り返る。

「その……さっきは悪かった。
疑うような事言って」

彼女達に少しでも疑いを持ってしまった事を悔いるように駿は心から謝った。

「謝られる事などありませんわ。その方が駿様らしいです」

「ええ♪
これからよろしくね」

全く気にしている様子の無い二人はクスリと微笑んでくれた。
駿はそれに頷き返すと、翼と一緒に校舎に向かって歩き出した。

「学舎……
本当に懐かしいですわね……」

「そうね。
本当にかなり昔だけど……」

綾姫が寮に入る前に空を見上げて呟くと、隣の楓も同じく見上げて頷く。

「“彼”は楓さん達が来た後にいらしたのですね」

「ええ、一年くらい後にあの人に拾われてきたのよね……
きっとあの人の事だから無理矢理連れてきたんだろうけど……」

口元を緩めてそう言う綾姫に楓はそう言ってクスリと笑う。

「最初は全く心を開いてくれませんでしたね。何を言ってもずっと
黙っていらして……」

駿達が去ってしまった後を振り返って綾姫が頬に手を当てる。
楓は『そうだったわね』と寂しそうに返す。

「“彼”が居たから今の私達がある……
だから私達かこれからも“彼”を守っていかないといけない」

「ええ、よく存じ上げておりますわ」

一方の駿達……

「彼女達、何か随分と複雑な事情があるみたいだな」

「……」

「……駿？
どうしたんだ、さっきから押し黙って」

校舎に向かって歩いていた翼は駿の様子に気付いて話しかける。

「ああ……
何だか少し引っかかってな」

「彼女達の事か？」

「いや、彼女達の話が……
上手く説明出来ねーけど頭に妙な感じが……」

額に手を当てる駿の様子にますます分からないと首を傾げる翼。

「やっぱり何でもない。
それより急ごう。
このままだと授業遅刻だ」

「あ、ああ……」

駿は頭を二三回振ると、翼と一緒に校舎に向かう足を早めた。

＊

放課後……

「じゃあ、二人は駿君達と知り合いだったのね」

「まぁ一応。
そういう事になるかな」

生徒会室でヒナギク達に駿達が詳しい事情を話していた。
今朝の二人の様子や反応はそのためのものだとメンバーはようやく納得したようだった。

「寮の案内を引き受けたのもそういう理由だったんだ」

「ああ、いきなりだったから事情が聞きたくてさ」

千桜がそう尋ねると駿は苦笑混じりにそう返した。
それを聞いた彼女は少し安心したような表情になる。

「良かったわね、千桜さん♪」

「ちょっ、何で弱点帳を開いてるんですか愛歌さん!?」

愛歌は笑顔に似つかわしくない恐ろしいノートを広げている。

「いーなー!!
ヒナちゃんのクラスにまた転校生なんて」

「一体どんな娘なんだ?」

「私もまだ調べてないわね」

三人娘も今日来た転校生に興味があるようでヒナギクに顔を向けてみせる。

「だったら、私達で今から会いに行ってみる？
寮のあれこれは生徒会の役割だからちょうど今、彼女達に寮を説明してあげようと思ってたんだけど」

「あ、楽しそー♪
行くー！！」

「当然参加だ！！
何故ならば仕事がしたくないからな」

「色々と話が聞いてみたいわね」

ヒナギクの提案に三人娘はすぐさま賛成をする。

「だったら私も行きます。
同じクラスメートになりますから」

「私も行こうかしら」

続いて千桜と愛歌も賛成のようでヒナギクに向かっていく。

「って、それじゃあ生徒会俺達だけになるんじゃ……」

「ええ。
帰って来るまでは二人だけでよろしくね♪」

ヒナギクはそう言ってニッコリと微笑んだ。
二人でこの量はキツイと駿と翼は顔をしかめてしまう。

しかし、楓達が学校に馴染めるように早めにヒナギク達と話せるようになった方が良いと判断した駿は仕方なく居残りを引き受ける事にした。

「しかし、この量はホントに大変そうだな……」

ヒナギク達が後にした生徒会室で結構な仕事量を前にする二人。
すぐに駿がサッと片手をあげて歩き出した。

「仕方ねぇ。
ここは気持ちを入れ替える為に俺が弥生さんの喫茶店に行ってる間にお前は仕事を頼む」

ガシッ！

「行かせるわけねーだろ。
二人して片付けるぞ」

「いや、だったら俺が三千院家でマリアさんとお話してる間にお前は仕事を……」

「よし、お前仕事量倍な」

こうして、居残り二人はヒナギク達が早く帰ってくる事を願いながら仕事に立ち向かうのであった。

其の四十四　我らが学舎（後書き）

～作者の戯言～

早いものでこの小説も１０００分近くまでいってしまいました。
大して面白さも目新しさも表現出来ないこんな自分の小説をここまで読んで下さった事を心から感謝致します。
本当にありがとうございます。

さて、前回今回を見て気付いた方もいらっしゃるかとは思いますが駿に対する千桜の態度が若干変化しています。
ジト目を向けたり、足を踏んだりｅｔｃ……

これは以前より気を許している証拠かな～と思います。
より本音を言える仲というか。
これからは以前のように喋る時はいつも仲良くという訳では無く、他にも色々あると思います。
言い合ったり喧嘩したりもするかも知れません。

という言い訳が大体三割弱。
残りの理由は原作のクールさを駿の前でも入れたいな～と思ったからです。

だって最高じゃないですか、
クーデレ♪
ツンデレも良いですが僕はやはりクーデレ派なんですよ。
というかデレなくてもクールなキャラが結構好きなんですね。

コードギアスのC．C．然り。
アマガミの七咲然り。
アビスのティア然り。
ルミナスアークのサキ然り。

他にも沢山居ますが挙げていたらキリがないので割愛。

中でも七咲は最高ですね、いやホント。クーデレの中ではダントツ一番です。
高校の時にＰＳ２でアマガミやって彼女の反応に一々萌え殺されそうになったのは今でも鮮明な記憶ですね。

まぁ全てを含めての一番はまた違いますが……
はい、すみません。
どうでも良い話をしました（笑）

まぁ話を戻すと、
千桜のクールさを若干修正っぽい感じで入れていきたいけれどどんな言い訳にしようと考え出した結論が上記です。

違和感をもたれた方はすみません。これからはそんな感じでやっていくのでよろしくお願いします。

ついでに今書いた真の理由を頭から消去して上記に述べた言い訳だ

けを残して頂ければ完璧です（笑）

感想、評価、批評、指摘、質問、何でも頂ければ嬉しいです。
では、次回もよろしくお願いします！

其の四十五　悪熊と一緒！（前書き）

伽藍
「今回は悪熊のちょっとした冒険みたいな話と駿達のほのぼのな日常です」

駿
「次回はＩＦ編を更新するらしい」

伽藍
「では、始まります！」

其の四十五　悪熊と一緒！

『ふわぁ～……』

お昼も過ぎて日が傾き始めた時間帯は誰しも眠くなりがちである。
それは体内の温度が低くなる時間帯だと言われているからだと言われている。

『わふ……』

午後四時。
鷺ノ宮家の縁側。
そこにちょこんとうつ伏せになって欠伸をしたのは鷺ノ宮家に居候中の【悪熊】だった。

容姿は可愛らしい小熊のぬいぐるみだが、その実は一人前になるために人間界にやって来た妖怪のタマゴである。
鷺ノ宮家の長男、鷺ノ宮駿を抹殺するためにぬいぐるみのような可愛い両手から鋭い爪を日夜光らせているが、この頃は知らず知らずに駿に随分となついており、彼の肩の上はいつの間にか悪熊の特等席となっている。

駿の妹である伊澄や母である初穂にもべったりで膝の上に座って甘えているが、やはり駿の肩の上が気に入っているようで彼がいる時は肩の上に乗る事が多い。
だから……

『あ～、馬鹿駿と伊澄早く帰って来ないかな～』

駿や伊澄が学校で居ない間にそんな事を口にする始末だ。

何かもう普通のペットに近い。

バタバタ……！！

『？』

悪熊がゴロゴロしていると鷺ノ宮家の執事達が廊下を慌ただしく走ってくる。

そうしてもう一つの執事達と合流していた。

「どうした！？」

「駿殿から！！

伊澄お嬢様がナギお嬢様の家に向かわれたが生徒会の仕事を翼殿と二人でこなさないといけずに付いていってやれないから送りを付けてくれと」

「ああ、だから先程護衛をお付けしただろう？」

慌てる若い執事達に少し年配の執事が落ち着いた様子で返す。

しかし若い執事達は首を横に振った。

「違います！！

その後護衛から連絡があり、伊澄お嬢様をロストしたと！！」

「何！？」

先程まで落ち着いていた年配の執事が途端に顔色を青に変える。

「護衛によればロストする前にお嬢様に持たせた巾着袋に発信器を入れたので今追っているが彼等だけでは到底間に合いそうも無く、至急応援をとの連絡です！！」

「分かった！！
大至急全ての要員を向かわせるように指示を入れる！！
発信器の場所は！？」

年配の執事が素早く腕時計に目をやり尋ねると、若い執事の一人が携帯電話を取り出した。

「発信器は……先程まで長野県の松本にて反応していましたが、原作は大阪……いえ鳥取にシフトしたようです！！」

「よし！！
ヘリを出動させろ！！
全員が持ち場につけ！！
いいか、何としても国内で保護しろ！！絶対にだ！！」

「「「了解！！」」」

そうしてまた執事達は一目散に散らばってゆく。
そんな様子を眺める悪熊。

（何だ～、伊澄はまだ帰って来ないんだ……

駿も生徒会で遅いだろうし…）

そう考えて悪熊はまた可愛らしくコロコロと転がる。

『あ！！そうだ！！』

しかしすぐに何かを思い付いたように跳ねあがる。

『こっちから駿の所に行こう！
あ、でも……』

そう結論付けた悪熊だったが、すぐに考え直す。
基本的に駿や伊澄は悪熊に一人であまり遠くまで出歩かないようにと注意している。

特に深夜の一人での外出は厳禁。理由は簡単で、悪熊は見た目は小熊だが中身は妖怪。
何かしらで妖怪を把握出来る人間がいたら危険だし、そうでなくとも小熊などこの東京ではかなり目立つだろう。
深夜に悪熊を珍しがり抱えた人間が悪熊の気配につられた別の妖怪に襲われないとも限らない。
そうなったら大変だ。

なので悪熊は昼間はちょくちょく散歩をしたりするがあまり遠くまでは散歩はしない。
注意を受けてるのもあるが、悪熊自身危険だと分かっているからである。
しかし白皇までは彼にしてみれば遠くに部類されるし、何より白皇自体がとんでもなく広く何があるか分からない未知の敷地も沢山存在するのだ。

一人で行くのは中々勇気がいる。

『って、何を弱気になっているんだ僕は！！
こんなコトじゃ駿抹殺なんて出来ないぞ！！』

ふるふると首を振って自分を鼓舞する悪熊。
抹殺対象が住んでいる家でよくもまあ、そんなセリフを口に出来るものだ。

『そうだ！！
僕は一人前になるためにここに来たんだ。
だからこれは試練。
白皇に行って駿をぶっ飛ばす試練だ！！これは妖怪としての僕の器が試されるんだ！！』

悪熊は可愛らしく両手両足をパタパタさせてやる気を出す。
本当に彼が言っても何の説得力も無いが。

『よし……！！
何としてもこの試練を乗り越えてみせるぞ！！』

悪熊はそう言って四足歩行になると、縁側を飛び出してとことこ門まで歩いていく。

「ほぅ……
駿の所まで行くのかえ？」

『銀華さん？』

すると門の側で銀華が寄りかかって仔猫達と遊んでいた。
彼女は悪熊を見ると懐から一枚の封筒を取り出す。

「駿の所に行くのならこの封筒を奴に渡してくれぬか？」

『これは？』

「フェっフェっフェ……
駿に渡せば面白い事になるから途中で開けぬように気をつけろよ？」

銀華はそれだけいうと仔猫達を連れてサッと姿を消してしまった。
悪熊は不思議そうに首を傾げるが、すぐに戻すと意気揚々と門を出ていくのであった。

其の四十五　悪熊と一緒！

『うぅ……』

家を出発した悪熊は早くも障害にぶち当たっていた。
封筒をくわえた悪熊は白皇までの最初の住宅街の一角で進むのを躊躇うあのように前足を出したり引っ込めたりしている。

『……』

彼のいる道路の脇にはとある一軒家があり、家の前の庭にはちょっと大きめの犬小屋が置いてある。

悪熊が白皇に行くためにはこの庭にある犬小屋の前を通らなければならない。

道路と犬小屋とはある程度距離はあるが、そこには巨大な犬が住んでいることを悪熊は知っている。普段散歩の時にこの辺までは来るのだが、どうしても勇気が無くてこの先には進めないのだ。
家の庭の入口にも『猛犬注意』と札が張ってある。

（い、いつもはここで帰っちゃうけど……
今日は違うぞ！！）

悪熊は一瞬弱気な表情をするがすぐに首を振って前足にギュッと力を込める。

『……』

そしてゆっくりと歩き始めて犬小屋の前を横切って行く。
一歩一歩、道の感覚を踏みしめるように。

しかし悪熊が庭入口の半分を越えようとした時、

「ワン！！」

『！？』

犬小屋にいた犬がこちらに気づいてしまい立ち上がっていた。

「ワンワン！！」

そして勢いよく悪熊に向かって走ってくる。

悪熊は驚いて動けない状態になってしまい、気付けば犬はもう目の前に。

「ワン！！」

『っ……！！』

大きな口を開ける犬に思わず目を閉じてしまう悪熊だったが……

「クゥン♪」

『ふぇ！？』

犬は悪熊を食べるわけでもなく、甘えるようにすりよってきた。

『ワン♪』

「わっ！！

ちょっと、舐めるな～」

『ワン♪』

犬は嬉しそうに舌をペロペロとさせて悪熊を舐める。

『もう止めろ～！！』

『ワン♪』

こうして、悪熊は暫くこの犬と仲良く戯れた。

＊

『はぁ……

まったく、時間を無駄にしちゃったよ……』

悪熊は銀華に渡された封筒をくわえなおすと、また白皇に向かって歩き始める。

『ん？』

すると住宅街の一角にトラックが停車しているのが見えた。

その荷台に貼ってあるシールには『白皇××運送』と書いてある。

（あっ！！
あれに乗れば……）

ラッキーとはまさにこの事。
悪熊はトコトコとトラックに寄っていくとこっそり飛び乗る。
そしてすぐにトラックは発進して悪熊は住宅街を後にした。

『う～ん……眠い』

トラックに揺られる心地好さに悪熊はうとうとしてしまい、自然と可愛らしい瞳が閉じてしまう。

１５分後……

『……あれ？』

悪熊は白皇学院の正門に到着する筈だったが、何故か彼はどこかの林で目を覚ました。

『僕寝ちゃって……
ここ……白皇？』

キョロキョロと辺りを見回すと僅かだが見知った制服姿の生徒が遠くに見えたのでどうやらここは白皇学院の敷地内のようだ。

恐らく白皇に到着したトラックの運転手が悪熊をぬいぐるみかなにかと勘違いしてその辺に放ってしまったのだろう。

『早く馬鹿駿を探さないと……』

悪熊はふるふる首を振ると、しっかり封筒をくわえ直して敷地内を宛も無く歩き始める。

『？』

暫く歩くと悪熊の前方には荘厳な洋館造りの建物が現れる。
悪熊は首を傾げるがとにかく駿を探すためにその建物に向かって足を進め始めた。

＊

「へぇ……
それじゃあ楓と綾姫は駿君の古い知り合いなんだ」

「ええ」
「そういう事になりますわね♪」

白皇学院の女子寮の一階フロントのソファに座って話をしている女子達がいた。
それはヒナギク達生徒会の女子メンバーと本日の転校生、楓と綾姫であった。

ヒナギク達は駿と翼に生徒会の仕事を任せて楓達に寮の案内をしていて、今は一息ついている所なのである。
自己紹介も終えてお互い簡単に談笑中となっている。

「親戚か何かかしら？」

「ええ、まぁそんな所ですね愛歌さん」

愛歌が尋ねると楓は軽く頬を掻いて答える。

二人は駿の古い知り合いという話で通す事にしたのだ。

「それにしても、皆様素晴らしいですわ」

「「「？」」」

「女性の方々が学院の代表を占めるなんて、皆様は本当に優秀な方々なのですね。

尊敬致しますわ」

綾姫は心の底からそう思っているのだろう。

ニッコリと微笑んでそう言った。

「いや～、それほどでも」

「フッ、ありがとう綾姫君」

「にはは～、そう言われると照れるな～」

早速反応する三人娘。

その調子の良さに呆れるヒナギクと千桜であるが。

「学校で困った事があったらいつでも生徒会に相談して下さいね、篠月さん、皇さん」

「ありがとう千桜。
私の事は呼び捨てで楓でいいわ」

「ありがとうございます♪
私の事も綾姫でよろしくてよ」

千桜の言葉に楓と綾姫は微笑んでみせる。
千桜は口元を緩めて頷くと『よろしく楓、綾姫』と返した。

「だったら私も千桜で良いよ」

「私も泉って呼んでね～♪」

「美希で良いよ」

「私はミナミハルオと……」

パコッ！！

「すまん、朝風理沙だ」

そんな感じで八人は微笑ましく談笑を続けていると、そのソファの近くにひょっこりと悪熊が姿を現した。

（……ここは？）

悪熊はキョロキョロと辺りを見回しながらトコトコと歩いていく。

そして口に封筒をくわえたまま明らかに目立つ格好でヒナギク達の所にやって来た。

「あっ！！」

『？』

案の定、ヒナギクが悪熊の姿を見付けて抱き上げた。

「駿君の所の！！
こんな所でどうしたの？」

「あ～♪
クマちゃんだ」

「おー、ホントだ」

生徒会女子メンバーが突然現れた小熊を可愛がる様子に楓と綾姫は首を傾げる。
それに気付いた千桜は

「ああ、この小熊は駿君の所のペットらしいんだよ」

「へぇ、そうなんだ」
「珍しいですわね」

二人は珍しそうにそう言うとヒナギク達が抱いている小熊に近づいていく。
それはそうだろう。
小熊をペットにしている家など聞いた事が無い。

「あ♪
今身震いした。可愛い♪」

「何だかぬいぐるみみたいな可愛らしさですわ♪」

一方悪熊はいつも通り女性陣に可愛がられていたが、ちょっと困ってもいた。

（う～、このままだと駿に会えないな……
あ、そうだ！！）

悪熊は自分のくわえた封筒をわざとヒナギクの方に向けた。

「あら？
これは……封筒？」

「む、宛先が書いてあるな。
えっと……」

千桜達が封筒の表を見ると『駿へ』と書かれていた。

「もしかしてこの子、駿へ手紙を届けに来たんじゃない？」

『コクコク』

楓の言葉に悪熊は大袈裟に首を縦に振る。

「そうなのね。
駿君達なら今生徒会に…」

「ううんヒナちゃん。
さっき翼君が仕事はなんとかなったから駿君と二人で喫茶店か何かに行ってから帰るって。
生徒会の戸締まりは任せたってメールが来たよ」

ヒナギクが考えるように頬に手を当てると、泉が携帯を取り出して確認した。

「喫茶店って……白皇内の？」

「外出するって言ってたか多分外じゃないかな？」

「うんうん。
翼君だってたまにはサボりたくなるんだな。
私達と一緒だな」

「二人は仕事を終わらせたんだから貴方達とは違うでしょ……」

勝手に頷き始める美希と理沙に呆れたように突っ込むヒナギク。

「何処にいるか、今は分からないけど暫くしたら帰ってくると思うから……」

「ヒナギクさん。
あの小熊、もういらっしゃいませんわよ？」

「え？」

ヒナギクが視線を落とすと先程まで抱いていた筈の悪熊は既にそこ

にはいなかった。

その悪熊はというと

（外の喫茶店か～……）

何とか白皇学院から外に出ると、また宛も無く歩き回っていた。

（いっぱいあるからな～、喫茶店なんて……）

近くから片っ端に当たろうか、それとも遠くから当たろうかと考えていると……

『！？』

不意に悪熊の身体がフワリと浮いた。何事かと上を見ると……

「カァー！！」

『うわわ！？』

なんとカラスが悪熊の背中を掴んで飛び上がっていたのだ。

ジタバタと暴れる悪熊だが、カラスは全く気にせず高度を上げる。

『うわーーっ！？

離せよバカーーっ！！』

「カァー♪」

『笑うなーーーっ！！』

こうして悪熊は飛んでいった…

＊

「「はぁ……」」

とある喫茶店。
四人座れるスペースで駿と翼は向かい合って座っていた。

「いや、二人であの量は相当キツイな翼……」

「つーか、俺らが来る前はヒナギク達だけでこなしてたんだよな。今考えると凄いよ」

二人は疲れたように溜め息をつくと彼女達の能力の高さを改めて実感していた。

「こんな時は甘いものだな。
何か頼むか」

「んじゃ俺チーズケーキな。
よろしく駿」

駿がメニューを捲ると翼は逆にパタリとメニューを閉じてそう言った。

「よろしくってお前……
まさか俺に奢らせる気？」

「良いじゃないか、たまにはさ」

「う～ん……」

駿はどうしたものかと考え込むように腕を組む。

「ならウチはラズベリーのムースとチョコレートケーキ、あと苺のフロマージュ。
よろしくな駿」

「いや今考えて……
って、おわっ！？」

駿が驚いて向けた視線の先には咲夜が当たり前のように翼の隣に座ってこちらを見て笑っていた。

「よっ駿♪」

「何でオメーが居るんだよ！？」

「今更何言うとんねん。
幼馴染みには神出鬼没のライセンスがデフォルトで備わってるんやで」

「知らねーよんなもん！！」

駿の言葉もお構い無しに咲夜はメニューをパラパラと捲る。

「あ、愛沢さん。
こんにちは」

「おー、鷹ノ瀬の兄ちゃんやないか。奇遇やな。
自分も駿に奢らせに？」

「ホントに奇遇だな
愛沢さんもか」

ハッハッハと二人して爽やかに笑い合う。
よくありがちな高校生の風景。

「いや笑い合う場面でも会話でもねーから！！
人に奢らるとか言って何爽やかに笑ってんの！？」

駿の一切のツッコミをスルーの翼と咲夜。

「んじゃ、今の注文でよろしくな駿」

「ふざけんな。
何でオメーにまで奢らにゃならねーんだよ」

「酷い！！
ウチと自分の仲やないか」

「誤解される言い回しは止めろ」

うるうると瞳に涙を溜める咲夜だったがバッサリと切り捨てる駿。
続いて翼が口を開いた。

「俺とお前の仲だろ？
この間お前、『私めは翼殿の忠誠な家臣でございます。今後何かあれば必ずや私めが奢らせていただきます』って」

「言ってねーよ！！
しかも何か俺めちゃめちゃ本望そうだよなオイ」

「そんな……
駿、ウチという者がいながら鷹ノ瀬の兄ちゃんの方を取るんやな？」

「何で三角関係みたいになってんの！？あとその嘘涙止めろ」

二人の立て続けのボケに突っ込んだ駿は一旦間を開けると、水を口にした。

「とにかく、オメーらは自分で注文しろ」

「アホ、そんな事言ってるから自分はモテないやで。
こういう時こそ男の甲斐性見せんかい」

「オメーなんかに甲斐性見せてどーすんだよ。
意味ねぇってんな」

スパーン！！

乾いた心地よい音とともに駿の頭は咲夜が取り出したハリセンで思いきり叩かれた。

「何すんだよ!?」

「レディーに失礼な口きくからやで」

「いきなり人の頭をハリセンで叩く奴はレディーとは言わねーよ」

駿は頭を擦りながら顔を上げる。翼は『まるで漫才だな』と苦笑混じりにある意味感心していた。

「まったく……
ホンマにごちゃごちゃ小さいやっちゃな～。
なら、これで決めようやないの」

「「？」」

咲夜は呆れたように溜め息をつくと、鞄からカードの束を取り出した。

「「トランプ？」」

「せや。
誰もが知ってるド定番のババ抜きで決着をつけようやないの。
ビリになった奴が二人分奢る。
……どや？」

咲夜は束になったトランプを見せるとニヤリと不敵に笑う。

「面白ぇ……
後で後悔しても遅ぇからな」

駿も乗り気のようで不敵に笑い返す。このまま理不尽に奢らせられたのではたまらない。

「んじゃやるか！
財布をかけたババ抜き対決だ」

翼の呼びかけと共に、三人の戦いが始まった。

＊

『う～……』

場所は変わってどこかの商店街。悪熊がトボトボと歩いていた。勿論あまり人目につかないようにだが。

『う～……
どこだよここ～』

カラスに連れ去られた悪熊は必死の抵抗で何とかすり抜けることが出来たが案の定落下してしまい、どこかの商店街でトボトボと歩いていた。

『う～……』

駿はどこにいるのか、そもそもこのままでは帰れるのかという不安を抱えたまま周りを見回す。

すると……

『あっ』

何回か見回した時、とある喫茶店と思わしき建物のガラスの向こうに駿が座っているのが見えた。

（いたーーーっ！！）

先程までの困惑の表情から一転、安堵と嬉しそうな表情をしてその喫茶店に駆けていく。

人と人との間を上手くすり抜けて店内に潜入する。

お店の人にバレないように柱や死角を使いながらちょこちょこと移動していく悪熊。

そしてガラス越しに見たお目当ての席までいくと……

「ん？お前……」

『あ……』

座っていた翼が悪熊に気付いた。悪熊はちょっと驚いたが翼に近づいていく。

「どうしたんだ？
こんな所まで」

『ちょっと、駿をさがして…』

こそこそ話をする翼に小さな声で返す悪熊。

「ああ、駿なら……」

翼は悪熊を両手で抱き上げるとゆっくりと肩の上に乗せた。
乗った悪熊の視界にはテーブルを挟んで対峙する駿と咲夜の姿。

『あれ……何やってるの？』

「ババ抜きで負けた方が全員分のデザートを奢る対決をな。
因みに俺はもう上がったけど」

こそこそと話し合う二人。

一方テーブルの駿と咲夜の戦いはクライマックスを迎えていた。
駿の手札は一枚、咲夜は二枚。

「どうや駿。
長くなるのもアレやし、これで最後にせぇへん？
ババを引いたら自分の負け。
違ったら自分の勝ち」

「上等。
そっちの方が分かりやすいな」

という事で、これが最後の運試しとなる。
駿が揃うカードを引けばそのまま勝ちだが、もしババを引いたらその時点で負けというルールだ。

駿は平静とした様子で咲夜の手札にゆっくりと手を伸ばす。

（さて……
いよいよラストなわけだが）

駿は二枚のウチ右側に手を移動させる。

「……」

そして今度は左側に手を移動させる。

「……」

駿は表情には出さなかったが内心ニヤリと微笑んだ。

（勝った……
悪いな咲夜）

「何や？
えらく自信満々やな自分」

と思ったがどうやら彼の表情にでてしまったようだ。
仕方ないと駿は口元を緩めると口を開く。

「甘い……甘いな咲夜。

お前はまだあの癖が治ってねぇ」

「癖？」

「そう。

自分が不利になると本当に僅かに瞼の上が二回ほどひきつる癖があるんだよ！！」

自信満々にビシッと咲夜に指を突き付ける駿。

『おぉ！』と翼も驚く。

「そして俺が右側に手を移動させた時にお前に反応があった。

つまり！！」

駿は右手を振りかぶると……

「正解は右側だーーーっ！！！」

某カードゲームアニメの主人公のように華麗に咲夜の右側からカードを掠め取る駿。

「……」

反面ふるふると肩を震わす咲夜。それを見た駿はますます引いたカードの当たりを確信する。

「一体何年の付き合いだと思ってんだ。オメーの考えてる事なんざぁ俺には通用しねぇよ。

この程度で……」

口元を緩めた駿が引いたカードをゆっくりと自分の前に持ってきてひっくり返すと……

『ＪＯＫＥＲ』

「あれぇ！？」

「……くっ」

駿の目の前にはジョーカーとカードが。
そして肩を震わせていた咲夜が堪えきれなくなったのか遂に吹き出した。

「あっはははは！！
見事に引っかかりよった！！
アッハッハッハ！！」

「！？」

そして大笑いし始める咲夜。
本当におかしいのか目には涙も溜まっていた。

「自分がウチの癖をはかろうとしてたのなんてお見通しや。
だから敢えて罠をかけたら……
案の定、くくっ」

「謀ったな咲夜！？」

そう。
咲夜は駿の考えを見抜いてわざと反応を右側の時だけ大袈裟にしていたのだ。

「何年の付き合いかって、それはウチのセリフや。
それにしても……あかん！！
駿の自信満々でババを引いていきよった様子を思い出したら……
笑いが止まらへん、くくっ！！
アッハッハッハ！！」

「うっ……」

大爆笑する咲夜とは対照的にがっくりと項垂れる駿。

「とまぁそういう訳で、奢りは駿で決定だな」

「そんなら早速注文やな～」

そんな訳で駿は翼と咲夜への奢りが決まった。
哀れ……彼の財布は氷河期へ逆行していく。

「あれ、何で悪熊がここにいるんだよ？」

『……』

翼の肩に乗った悪熊に気付いた駿は声をかける。
すると悪熊は駿の側までいってくわえた封筒を差し出した。

「手紙？

……あ、ばあちゃんから。
わざわざ届けてくれたんか、ありがとな」

『ふ、ふん！！
駿を抹殺しに行く途中のついでだい』

悪熊はふいっとそっぽを向くといつも通りちょこちょこと駿の肩の上に乗る。
駿は『何で抹殺対象の肩の上に乗るんだよ』と呆れていたが。

「何や、この小熊が伊澄さんが言ってた拾ってきた妖怪かいな」

「まぁそうだな。
今じゃ図々しい居候だけどな」

カプッ！！

「痛たたた！？
噛むな馬鹿熊！！」

『うるさいやい馬鹿駿！！』

「つーかあんま喋んな！！
聞かれたら不味いだろ！？」

駿が咲夜に紹介すると悪熊が怒ったように手に噛み付く。

「アッハッハッハ！！

ええ反応やクマ！！
そのままそのアホの腕噛みきったれ」

『うん♪』

「『うん』じゃねェェェェェェ！！」

ガヤガヤとざわつく喫茶店の中でも彼らの席は結構騒がしい。
まぁそんなこんなで駿が奢らされたデザートも運ばれてきて……

「ん～♪
やっぱり疲れた時は甘いものやね」

「糖分は疲れに良いからな。
うん、ここのチーズケーキは美味いな」

「あ……そう。
良かったな……」

満足気な咲夜と翼。
向かい合わせて溜め息をついてコーヒーをすする駿。
咲夜の前にはラズベリーのムースと苺のフロマージュと紅茶。
翼の前にはチーズケーキとコーヒー。駿の前には苺のショートケーキ。因みにクリームはこっそり悪熊に食べさせてやっている。

「なんや、駿は元気あらへんな」

「誰のせいだよ」

可愛らしく笑う咲夜の裏で駿の財布は悲鳴をあげていたりする。
まぁ勝負なので仕方ないが。

「まぁまぁ。
そんな落ち込まんと、ウチのムース少し分けてたるから」

「良いのか？」

「一口だけやで」

「んじゃ、遠慮なく」

駿はスプーンで咲夜のムースを掬って一口食べた。

「あーーっ！！
自分今、ラズベリー食べたやろ！！」

「ん？
そういえば口の中に上品な酸味が……」

酸味と柔らかいプチプチ感。
間違いなくラズベリーだ。

「アレはウチが最後まで楽しみに取っておいたのにっ！！」

「いや、食べていいってオメーが言ったんだろ」

「食べるもんにも空気を読まんかいドアホ！！
せやったら……！！」

咲夜は駿の前にあったショートケーキの脇においてある苺をかっさらい食べてしまった。

「ああ！？
それは俺が最後まで楽しみに取っておいた苺！！
なんて事すんだよオメー！！」

「これでおあいこや」

「ふざけんな！！
だったら俺は！！」

こうしてトランプに引き続きデザートでも二人の戦いが始まった。
ああ言えばこう言い、ああだこうだとデザートの攻防戦。

「ハハハ……
ホントに仲良いな」

『というかお店に迷惑なんじゃ……』

早くも避難してきた悪熊が翼の肩の上に乗って二人で駿達の様子を眺めていたのだった。

＊

激闘も何だかんだでようやく幕を閉じて、三人と一匹は一緒に帰路に着いていた。

『あ、駿。
手紙手紙』

「あ～、そうだったな」

悪熊の口から手紙を受け取る駿。これで依頼は完了だ。
色々あったが何とか目的を達成出来た（当初の目的は駿抹殺だが）と安堵して肩でふにゃふにゃと休む悪熊。

「銀華ばあちゃんからの手紙って、何やろな？」

「重大な連絡とか？」

「さぁな……」

不思議そうな二人を横目に封筒を開いていく駿。
中にあった手紙を取り出そうとすると……

バッ！！

「！？」

いきなり中の紙が独りでに飛び出してきて駿の顔の前に浮かんでき

た。

「は！？」

紙から小さなタコの式神が浮かんでくる。
タコは駿の顔を見ると……

「ぶっ！？」

大量の墨を口から噴射して彼の顔面に直撃させる。
成す術なくその攻撃を受ける駿。隣の二人はポカンとした表情。
肩の上にいた悪熊は咄嗟に袖の中に隠れていた。

暫く墨の噴射が終わるとタコは煙のように消えて、紙が地面に落ちる。その紙には『やーい！！引っかかった引っかかったバーカ』と書いてあり猫のスタンプが押してあった。

「「くっ！！」」

隣の二人は駿の顔を見て思わず吹き出す。
彼の顔は真っ黒も真っ黒で白い目だけが残っているという何とも残念な姿に。

「あはははは！！
何や自分それ、傑作やん！！
流石はウチの相方の一人。
自分のには笑いの神がついているんやきっと。
あはははは！！」

「くくっ……！！
止めろお前、その顔でこっち向くな…！！くくくっ！！」

「アッハッハッハ！！
駿、変な顔～♪
アッハッハッハ！！」

お腹を抱えて大笑いする咲夜と必死に笑いを堪える翼。
目の前で爆笑する悪熊。
本日はなんとまぁ笑いの絶えない日で。

駿は地面に落ちた紙を拾うと、

「あのババアァァァァ！！」

真っ二つに引き裂いて復讐を誓うのだった。

そんなこんなで悪熊の一日は本日も笑いで平和に閉じたのだった。

因みに……
伊澄は沖縄で無事保護されたとかなんとか

其の四十五　悪熊と一緒！（後書き）

次回はＩＦ編です。
二つのリクエストをやります！
ＩＦ編はＩＦ編の章の場所に更新するので、ご了承下さい。

美希
「次回は後書きに久々のゲストだ」

理沙
「うむ、久々にメチャクチャにやるか！」

泉
「次回もよろしくね～♪」

其の四十六　夜の学校は昼間とは全く違って見える（前書き）

伽藍
「ようやく原作介入です。
ここからは一気にコミックスを突っ走ります！！
あ、でも勿論オリジナルも挟みますが」

駿
「今回は五巻から。
近々マラソン大会編も始まる予定です」

伽藍
「では、始まります！」

其の四十六　夜の学校は昼間とは全く違って見える

キーンコーン……

「占い……？」

「ああ。
今朝美希から貰ったんだがこの雑誌の占い、結構面白くてさ」

放課後。
生徒会室ではいつも通り執行部が運営中。

そんな生徒会室で駿が女性物の雑誌を長テーブルに出して千桜に見せていた。
彼の隣には翼、向かいには愛歌もいる。
三人娘はまだ来ていないらしく、会長であるヒナギクも今は出ているようだ。

「それで、これが？」

「あ、うん。
千桜も占ってみないか？」

「私？」

駿の言葉に千桜は少し驚いたような表情をする。
占いというものは面白いもので、自分を占うより他人を占う方が楽しかったりする。

「翼は休み時間に占ってみたけど、見事に的中しやがった」

「恋愛占いで休み時間中にラブレターを貰うでしょうってヤツな」

駿がそう言うと翼は苦笑混じりに頬を掻いてみせる。
二時間目が終わった休み時間に駿が翼に恋愛占いをした結果、お昼にラブレターを貰うという結果が出て、実際にお昼休みに翼はラブレターを貰ったのだ。
因みにならば自分もと恋愛占いをした駿だが、結果は『お前は一生シケモノの人生、さらば青春』と可愛らしい字で書いてあったそうな。

「へぇ、それじゃあ結構当たるのかしら？」

「いえ、泉や理沙は大ハズレみたいでしたけど」

クスリと微笑む愛歌に駿は肩を竦めて口元を緩めた。
因みに泉と理沙は勉強占いで小テストで最高の結果が出るという結果だったらしい。

「う～ん……
私はあまり占いとかは信じないからな……」

「そうなのか。
女の子は皆そういうのが好きなんだと思ってた」

「まぁものによりけりだけど……
自分の事は自分で決めたいっていうか」

翼は意外そうな表情で千桜に目を向けると、彼女は『上手く言えないけど』と少し困ったように笑ってまとめた。

「でも確かに、分かる気がするな」

「何となくね」

考えるように腕を組んでいた駿だがそう言って彼女の言葉に同意する。彼女も微笑んで頷き返してくれた。

「あ、でも……
一回くらい占ってみないか？」

「まぁ、一回くらいなら」

せっかく雑誌も出した事だし。
という事で千桜の承諾も得て、駿は雑誌で占いをする事に。
愛歌の提案で恋愛占いになった。

・・・・・・

「えっと結果は……

貴方は近いウチに素晴らしい出会いがあるでしょう。
太陽の塔とガン〇ムを足して二で割って東京タワーをかけてエッフェル塔とコン〇トラーVをおまけしたような男性が貴方の理想のタイプです」

「は……？」

結果を聞いた千桜はジト目を駿に向ける。

「いや、あはは……
ただの占いだから」

「……」

慌てて雑誌を閉じる駿。
まさかこんなにメチャクチャな結果になるとは思わなかったのだろう。

「やっぱり、あまり占いは信用出来ないな。
全然理想のタイプでは無いし」

「ははは……
そうだな」

この占いに関して言えば全くその通りだ。
翼も思わず苦笑い。
さて、この話もおしまいかと思われた時……

「じゃあ千桜さんの好きな男性のタイプってどんななの？」

「え？」

計ったようなタイミングで愛歌がそんな事を尋ねてきた。
いきなりそんな質問がきた事に驚く千桜。

「えっと……それは」

「「？」」

「うぅ……／／／」

うっすらと頬を赤らめる千桜は答えにくそうに口ごもる。
その様子に駿と翼は首を傾げるばかりだが。

「例えば……ですけど。
その……」

「「「うん」」」

千桜はそう言って三人の表情を見て、もう一度その中の一人の顔を本人に気付かれないように見てすぐに目を反らすと続ける。

「普段は頼りなかったり、ちょっとふざけてたりしても……
その、大事な所では頼りになったりとか……」

（ああ、なるほど……
そりゃ今は恥ずかしいかもな）

少し赤くなりながら話す千桜に翼はなるほどという表情でこっそり

頷いていた。
よく見ると愛歌も心なしか微笑んでいるように見える。
ただそれは優しい微笑みというより、どちらかというと“S”な笑みのような気が……

「後は……楽しそうに笑う所とか意外と他人の事を気にかけている所とか……何だかんだいっても優しい所とか」

「あらあら♪
好きなタイプを聞いたのに何だか特定の人の好きな所みたいな答えになってるわね♪」

「！？／／／」

ハッと気付いたように千桜が顔を上げると愛歌はクスクスと笑いながら、翼も分かったような表情で彼女を見ていた。
反面、駿はただ聞いているだけの様子。

「フフ……♪」

（や、やられた……！！
愛歌さんに誘導尋問された！！）

気が付いても時既に遅し。
愛歌の右手にはしっかりと弱点帳が、左手には鉛筆が。

「も、もうこの話はおしまいです！！」

「あら、そう？」

「そもそも占いの話からズレてますし、私は……その、仕事を思い出したので！！」

千桜は頬を紅潮させたまま慌てて立ち上がると側にあった書類を手に取る。
そして『失礼します』と急ぎ足で生徒会室から出ていった。

「どうかしたんかな千桜。
随分慌ててたけど」

彼女の様子に駿は『はて？』といった表情で生徒会室の扉に視線を向ける。

「ま、いずれ分かるんじゃないか？」

「そうね～♪」

「？？？」

そんな彼に翼と愛歌は含んだような物言いで返した。
それがますます彼の首を傾げさせるのだが。

「それより、駿君も占ってみたら？」

「あ、そうですね。
それじゃあ今日のこれからの運勢でも……」

愛歌がふと尋ねると駿は頷いて再び雑誌の占いコーナーを開いた。

・・・・・・

「えっと結果は……
『夜の学校で女の子二人に囲まれるラッキーイベント♪』
……何だこりゃ？」

「ほほ～、良かったじゃないか」

雑誌を眺める駿が思わず顔をしかめる。
隣から覗き込む翼がからかうようにそう言った。

「いや、良かったってお前。
んなおいしい展開あるわけねーだろ」

「あら、分からないわよ。
他にも……」

ひらひらと手を振る駿の前から愛歌は雑誌を取ると彼の結果の箇所に目を通す。

「え～と……
『深夜の学校で美少女に囲まれた駿君は理性を抑えきれずに二人を密室に連れ込み、無抵抗の二人の服を剥ぎ取りそのまま押し倒して……』」

「書いてませんよねそんな事！！
っていうか何で記事に個人名！？」

「でも駿君ならそうなりそうじゃないかしら♪」

「なりませんよ！！
愛歌さんは俺を何だと思っているんですか！？」

慌てる駿の反応を見てクスクスと微笑む愛歌。
そんな感じで放課後は進んでいくのだった。

其の四十六　夜の学校は昼間とは全く違って見える

「ふわぁ……」

夜の白皇学院。
綺麗な黒髪に端正な顔つきの青年が欠伸を一つ。

白い半襦袢の上から白い羽織を着た下には白い小袴姿のその青年、鷺ノ宮駿は闇夜を周りに纏うように深夜の学院内を闊歩していた。

「あ～……
これから新しいＲＰＧをやろうと思ってたのによ～」

彼は急遽夜に入った依頼で白皇学院にやって来ていたのだ。
せっかく新作のゲームを夜やるのを楽しみにしていたのにと溜め息をつく。

「それに今日は伊澄が居ないから一緒に寝られないし……」

伊澄は本日はナギの家に行って漫画を書いて遅くなるので泊まっていくとの連絡があった。
夜に伊澄と一緒に居られないという事もあって彼は浮かない表情。
因みに伊澄は恥ずかしがって駿と一緒に寝る事には滅多に首を縦に振らないが。

「仕方ねぇ、さっさと片付けるか」

駿は頭を掻くと目的地に向かってトボトボと歩き始める。
そんな感じで暫く深夜の敷地内を歩いていると……

「あら？
駿様ではありませんか」

「あ、本当だ」

「ん？」

彼の横から聞き覚えのある声が二つ聞こえてきた。
振り返るとそこには見知った女性が二人。

「こんばんは駿様」

「奇遇ね、こんな時間に」

「綾姫、楓……」

それはつい最近転校してきた皇綾姫と篠月楓だった。
近づいてくる彼女達に駿は意外そうな表情を向ける。

「どうしたんだ？
こんな時間に？」

「私達は旧校舎に用事がありまして。今から楓さんと一緒に向かう所ですわ」

綾姫は隣の楓を見て旧校舎のある方向に視線を向けた。

「用事？」

「ええ。
あ、そういえば話して無かったわね」

こんな時間に用事とはと駿が首を傾げると楓はポンと手を打つと彼の前に一歩出た。

「私達はこの学院の悪霊駆除のような役割を頼まれているのよ。

それを引き受ける代わりに学費と寮費を何とかして貰ってるの」

「そうだったのか……」

彼女達は両親も居ないという複雑な事情も相まって、妖怪や悪霊というものから学院の安全を守るという役割を担う事も白皇に通う事が出来る理由の一つらしい。

他にも幾つか理由があるらしいが、それはまたいずれ。

「あ、でも……
俺もその類いの仕事で来たんだけど……」

「まぁ、そうだったんですの」
「確かに和服姿だもんね」

駿も悪霊駆除の依頼を受けて夜の白皇にやって来たのだ。

「でも、人数が多いに越した事はありませんし……
一緒に行きませんこと？」

「そうね。
三人でやればより効率が良いものね」

「ま、俺も早く帰りたいし。
そういう事なら協力して片付けるか」

三人は頷き合うと揃って依頼目的地である旧校舎に向かうことにした。

同時刻……

「え？
ハヤテ君が学校に？」

夜の宿直室。
そこには宿直当番である桂雪路を始め、美希、理沙、泉の三人娘とヒナギクがいた。
三人娘は雪路に勉強を教えて貰っていて、ヒナギクは彼女達へ差し入れにカレーを作ろうとここに寄ったのだ。
そして今、ハヤテが先程この部屋に寄ったという話を聞いたのである。

「うん。
何でもナギちゃんの忘れ物を取りに来たって」

そう。
ハヤテはナギがノートを忘れたというので、夜の白皇に来ているのだ。

「しかしちょっと帰りが遅いな……」

「もしかしたら間違って旧校舎に迷い込んでるのかもよ？」

美希の言葉に泉が人差し指を立ててそう予想する。

実はその通りで、今ハヤテは校舎を間違って夜の旧校舎の方にいるのだ。

「まぁそれはないと思うけど間違ったら大変ね。あそこは本当に出るって言うし」

「うむ。

最近では迷い込んだら二度と生きては出られないという噂……」

「しかも取り壊しの予定が近いから床が抜けて転落死という事も……」

雪路が棚に寄りかかりながらそう言うと、理沙と美希も天井を見上げて呟いた。

そんな彼女達の言葉を聞いていくとヒナギクの表情も不安そうになっていく。

「私、ちょっと捜してくる」

「ヒナちゃん!?

お化け出るよ?」

泉は声をかけるがヒナギクは軽い足取りで出口に駆けてゆく。

「もし旧校舎に入ってたら怪我とかしてるかもしれないし、確認しに行かないと。

大丈夫、私お化けとか平気だから」

『ちゃんと勉強しておくののよ』と言い残し、ヒナギクは急いで宿直室を後にした。

「流石だなヒナは」

「ホント、女にしておくのは勿体無いたくましさね～」

残った雪路と三人娘は出ていった彼女の後を呑気に眺めていた。

＊

「へぇ、旧校舎ってこんな風になってるのね。
何だかお化け屋敷みたい♪」

「取り壊しが近いみたいだから床とか気をつけろよ」

一方の駿達三人は旧校舎に入って散策をしていた。
旧校舎内の雰囲気は廃虚のような寂れたものでかなり異質。
楓はこういう平気なのかすいすいと進んでいて、駿はそんな彼女にそう言って注意を呼びかける。
ただ綾姫は……

「ほ、本当にここ白皇ですの？
新校舎とは全然雰囲気が違いますわ」

落ち着かない様子でしきりにキョロキョロしながら二人に遅れずについて来ていた。

「クスッ、綾はこういう雰囲気は怖いから苦手だもんね」

「へぇ、そうなんか」

「そ！！そんな事はありませんわ！！私を誰だと思ってるのですか！！

だ、第一妖怪や妖魔と戦っているのにそんな怖いなんて……！！」

楓の言葉を必死で否定する綾姫。だが動揺しているのは火を見るより明らかである。

楓は『今更隠すことでも無いでしょ』といって

ギァアギァア！！

「ひゃあ！？」

不意に隣の窓から見える木の枝に止まっていたカラスが一斉に鳴き出す声が響いた。

綾姫は驚きのあまり声を上げて楓の腕に抱き着いてしまう。

「大丈夫よ綾。

ただのカラスだから」

「うぅ……え？」

楓がクスリと微笑んでそう言うと綾姫はハッと気付いたように彼女から離れる。

「ち、違いますわ！！
今のはちょっと驚いただけで決して怖いとかそういうのでは！！」

「クスクス」

綾姫は真っ赤になって抗議を始めるが楓はおかしそうに笑っているだけ。

「別に良いんじゃねーか」

「え？」

すると楓の隣にいた駿が必死に両手を振る綾姫に顔を向けた。

「退魔師やってようが、ゴーストスイーパーやってようが怖いものは怖いんだからさ。
それに、そういうのが苦手なのはそれはそれで女の子らしくて良いと思うよ」

「駿様……」

珍しい事もあるものである。
主人公の面汚しの代名詞でもある駿がまともなフォローを入れるとは。

「あら？
じゃあ私は女の子らしくないって事かしら？」

「い、いや…！！

ものの例えだから！！」

楓がジト目を向けると駿は慌てて両手を前で振って答える。
彼女はすぐに冗談だといって悪戯っぽく微笑んだが。

（あり？
そういや、放課後の占い……）

そんなやり取りの中で彼はふと放課後の生徒会室で占った自分の結果を思い出していた。

結果は確か『深夜の学校で女の子二人に囲まれる嬉しいイベント♪』だった筈。

（ラッキーかどうかは置いといても……確かに当たってると言えば当たってるな）

駿は隣に楓と綾姫という二人の美少女がいる事を改めて確認する。

（意外と当たるのか……
んじゃ今度伊澄の占いもしてやろう。きっと『お兄様大好き』という結果が出るに違いない）

注）そんな結果はありません

「綾、別に掴まってても大丈夫よ？」

「そ、そんな必要はありませんわ！！」

そんな感じで三人がそこそこ賑やかに旧校舎を進んでいる時、

キャアーーーーーーーっ！！！

「ひゃうっ！？」

旧校舎内に女の子の悲鳴のようなものが響き渡った。
綾姫はまた楓の腕に抱き着いていたが。

「ねぇ、今の悲鳴って……」

「ああ。
多分生徒だ」

先程とは一点して駿達の表情が強張る。
三人はここに悪霊駆除の依頼で来ているのだ。
だとすればこの悲鳴はその悪霊に会った、もしくは襲われた悲鳴の可能性が高い。

「こっちよ！！」

楓が一瞬で方向を判断し駆ける。その後をすぐ駿と綾姫が追っていった。

＊

「キャアーーーっ！！」

ヒナギクは今、悲鳴を上げながら逃げていた。
彼女の後ろからは火の玉を纏った車輪のようなものが追ってくる。

そう。
ハヤテを捜しに旧校舎に来た彼女は運悪く妖怪に遭遇してしまったのである。
お化けとかは平気だとは言っていたが、やはり彼女も女の子。
怖いものは怖い。

「あっ！？」

無我夢中で逃げているために冷静さを失った彼女は床の出っ張りに躓いてしまい、体制を戻そうとして逆に壁際にへたり込んでしまった。火の玉の車輪はそんな彼女をゆらりゆらりと追い詰めていく。

「ーーっ！！」

そしてその妖怪はヒナギクの目の前に。
彼女は思わず目を閉じる。

（誰か……
誰か……！！）

脳裏に浮かぶのはハヤテと初めて会った時に彼が言った一言。

《言ってくれれば、助けに行きますよ》

「ハ……！！
ハヤテく――――ん！！！」

そしてその名を精一杯叫んだ。
次の瞬間、

ドン！！！

ヒナギクの前にいた車輪は吹き飛ばされ、目の前には執事服を来た“彼”の姿が……

「大丈夫ですか！？
ヒナギクさ」

彼、ハヤテが慌てて振り返ると同時にヒナギクが彼の胸に飛び込む形で抱き着いた。

「え……え？
あ、ヒナギク……さん？」

いきなり抱き着かれたハヤテは真っ赤になって彼女に声をかける。
彼女が顔を上げると目には涙が溜まっていて頬も赤らんでいた。

「助けてくれてありがとう。
だけど……」

「へ？」

「こんな怖い所に迷い込むなーーーーっ！！」

「いたーーーっ！？」

ハヤテは真っ赤になったヒナギクに思いきり殴られた。

その様子を少し遠くの影からこっそり見ている三人。

左から駿、楓、綾姫である。

「まさか悲鳴の正体がヒナギクさんでしたとは……」

「間一髪だったわね」

綾姫に続いて楓もホッと安堵したように一息つく。

「それにしても……

彼は一体何者かしら？」

「アイツは綾崎ハヤテ。

執事だよ」

「「執事？」」

駿の言葉に二人は揃って首を傾げる。

「三千院っつーでかい屋敷があるだろ、練馬区に」

「ええ、あの三千院家の別宅のお屋敷でしょ？」

「ああ。
その屋敷に勤める執事なんだ。
可愛い顔してるけどかなりの手練れだな」

驚きの表情をする彼女達。
やはり超お金持ちのあの三千院家執事と言えば驚きも当然か。

「ま、アイツがいればきっと上手くやってこのまま帰ってくれんだろ……」

「「……」」

一般人を巻き込む訳にいかない三人はハヤテ達が帰るまでそっと様子を窺う事にする。

そのハヤテ達はようやく落ち着いたらしく向かい合っていた。

「この事は絶対に秘密だからね、ハヤテ君！！」

「あ、はあ……」

まだ赤らんだ顔でヒナギクがそう言うとハヤテも少し顔を赤くして曖昧な返事をする。

「私があんな風に怖がってたとか他の人には勿論……
特に美希や愛歌さん、駿君のような生徒会の人達に言ったら本気で

殴るわよ！！」

「まぁたった今も本気で殴られた気がしますが……」

少し後ろの方で彼女の言葉を聞いていた駿は内心で『悪い、既に一部始終を目撃してしまった』と申し訳なさそうに手を併せていた。

「でも、あんなものに追いかけられたら怖がるのは普通ですよ」

「関係ないの！！」

ハヤテのフォローをピシャリと跳ね返すヒナギク。

「いい！？
生徒会長っていうのは威厳が大事なの、威厳が！！
それなのにちょっとお化けを見たくらいであんな……
あんな……醜態を……」

彼女の脳裏に浮かぶのは先程の悲鳴をあげて逃げる自分やへたり込んでしまった自分。

「まぁ確かに格好良く無かったかもしれませんね。
いつものヒナギクさんに比べたら……」

「！！」

ハヤテは少し同意したように呟くとヒナギクは肩を震わせてその場に固まる。

「でも、ここが旧校舎だって分かりましたから……

用も無いですし出ましょうか、ヒナギクさん」

「何を言っているのかしら？ハヤテ君」

「……は？」

さっさと旧校舎から出ようと提案するハヤテだが彼女は一向に動かない。

嫌な予感がしたハヤテが尋ね返すとヒナギクの周りには何かオーラのようなものが……

「このままお化けの正体も掴めないまま……

格好悪いまま……

この私が負けっぱなしで帰るなんてしていいと思って？」

「いや……

でも僕、お嬢様のノートを取りに行かないと……」

「却下よ！！」

バッサリである。

最早ハヤテの意見は届かない。

「とにかくあんなものを学校に放っておくわけにはいかないわ！！

だからハヤテ君……！！

私と一緒に、お化け退治よ！！」

言うが早いかヒナギクはツカツカと歩き始めてしまう。

その後をハヤテが慌てて追っていく。

そんな二人の後ろ姿を眺め溜め息をつく駿達。

「参ったな……」

「参ったわね……」

「参りましたね……」

駿達は負けず嫌いモード全開のヒナギクをどうやって帰すのかと、暫く頭を抱えるのだった。

其の四十六　夜の学校は昼間とは全く違って見える（後書き）

すみません！

後書きを誤って消してしまいました？
次回もう一度載せますので！！
本当にすみません？

其の四十七　皆違うから面白い（前書き）

旧校舎編終了。
次回はクルージング編かマラソン大会編。

駿
「作者の気分次第らしいから。
どうかご了承をば」

では、始まります！

其の四十七　皆違うから面白い

其の四十七　皆違うから面白い

「さて……
見事に会長にスイッチが入ってしまった訳だが……
これからどうするか」

「ヒナギクさん、実はかなり負けず嫌いな性格でしたのね。
意外ですわ」

「あら、綾も負けて無いでしょ？」

「どういう意味ですの！？」

影に隠れている駿、綾姫、楓の三人は困っていた。

三人は白皇に妖怪駆除を依頼され夜の旧校舎にやって来ていたのだが、ハヤテがナギの忘れ物を取りに旧校舎に迷い込み、彼を捜しにヒナギクまでもがやって来てしまったのだ。

更にそこで彼女は偶々妖怪に遭遇してしまい、悲鳴をあげて逃げるウチに追い詰められる事態に。
間一髪、ハヤテに助けられたのだが普段のカッコイイ姿からは程遠い格好悪い姿を散々露呈してしまった彼女は威厳回復とプライド奪回の為に旧校舎で妖怪退治を始めることにしたのだ。

そんな訳で現在、一般人を巻き込む訳にはいかない駿達三人はどうやって二人に帰ってもらうかと考えているのである。

「とにかく、このままじゃ大変。早くなんとかしないと……」

「ハヤテが上手くやってくれると良いんだが……
あの分だと多分無理だな」

楓と駿は先を行くヒナギク達の後をこっそりとつけながら顔を見合わせる。

「お二人とも、それよりもっと心配する事がありましてよ」

「「はい？」」

しかし綾姫はふるふると首を振るので二人は思わず彼女に振り返った。

「若い男女が二人きり。
しかもこの暗闇です。
あの男がヒナギクさんに襲いかかるとも限りませんわ」

「「……」」

至って真剣に語る綾姫に楓と駿は曖昧な表情で返す。

「無い無い。
アイツにんな事出来やしねぇって」

「考え過ぎよ綾……
私はあの男の子の事を知らないけど、そんな事をするような人には見えないわ」

「楓さんは甘いですの。
すぐに人を信じるのですから。
良いですか、男性と言うのはいくら優しそうでも結局狼だとお母様も仰っておられましたわ。
ですから……」

「はいはい、分かった分かった」

楓は溜め息をつくと半ば無理矢理綾姫の口を塞いで話を止めた。
駿は苦笑しながらその様子を見ると、再び前方のヒナギク達に視線を戻す。

「取り敢えず……
後ろより前の方に移動しないか？」

「そうね」
「そ、そうですわね」

三人はヒナギク達の様子を後ろから見るより前から窺う方が良いと考え移動し始めた。

「あの……
やっぱり帰りませんか？」

「ダメよ！！
絶対正体を掴んでみせるんだから」

ハヤテはまだ出口の方向に目を向けながらヒナギクにそう声をかけるが、彼女は頑なに頷こうとしない。

「でも危ないですし……」

「何言ってるの？
危ないから退治するんでしょ？」

どちらの言い分も正しい。
このままでは平行線である。

「大体さっきから帰りたがってるけど……せっかく夜の学校で女の子と二人きりなんだから、もう少し喜んでも良いんじゃない？」

「でもヒナギクさんと話してるとなんか……
お嬢様と話しているような気がして……」

「な！？
なに子供扱いしてるのよ！！
私生徒会長なのよ！？」

目を反らしながら言うハヤテにヒナギクは抗議の声をあげる。

どうやら彼にはあまり女の子と二人きりという意識は無いようである。

「ふん！！
いいわよ、一人でも退治してみせるんだから！！」

「まあ一応ご一緒しますけど」

ヒナギクの隣でハヤテは内心で溜め息をつく。

（は～、ヒナギクさんやっぱりお嬢様と同じで……
凄い負けず嫌いだなぁ～）

「それにしても……
冬だっていうのに、何か暑いわね～」

「！！」

ヒナギクは上着の下に着た服をパタパタと扇ぐ。
下着も見えかねないその行為に隣のハヤテはドキッとして顔を赤らめた。

「ん？」

「……」

ハヤテの反応に気付いたヒナギクは彼の方に目を向ける。
そして悪戯っぽく口元を緩めた。

「何赤くなってるのハヤテ君。

見たいの？」

「べっ！！別に赤くなんかなってませんよ！！」

「何よ？人の事子供扱いしといて……やっぱり私の事意識してるのかしら？」

クスクスと笑うヒナギクにハヤテは慌てて背を向ける。

隣にいるのは超美少女のヒナギクなのだからり意識してしまうのは当然であろうが、彼は恥ずかしいのか真っ向から否定にかかる。

「べ…別にヒナギクさんの事なんか意識したりしませんよ！！」

この一言で彼女の頬には怒りマークが浮かぶ。

「だ…大体前にも言いましたけど、ヒナギクさんは少し無防備過ぎます！！

ヒナギクさんの事、何とも思ってない僕だから良いような僕だから良いようなものの……

普通の男の子の前ではもう少し恥じらいっていうものを持たないと……」

背を向けて話す彼にヒナギクはどんどんムカついていくようで。

「そんな軽い事では……

何をされたって」

「良いわよ……」

「へ？」

すると、ハヤテの言葉を遮りヒナギクがそう呟いた。
そして彼の背中にはヒナギクの両手がそっと添えられる。

「ハヤテ君になら……
何をされても……」

「え……あ……」

後ろの彼女もそうだろうが、ハヤテも今まで以上に真っ赤になる。

「「「!?」」」

同じくその様子を前方に移動して窺っていた三人はいきなりの展開に驚愕した。楓と綾姫は頬を赤らめてしまう。

「え?何これ?
そういう感じなのコレ?
まさかの特急ノクターン行き?」

「ヒナギク、大胆ね……／／／」

「やはりそうなりましたわ!!
このままだと大変です!!」

唖然としている駿と赤くなっている楓をよそに綾姫は勢い良く影から立ち上がる。

「ちょっ、待てってお前！！
なに飛び出そうとしてんだ！！」

「離して下さいまし駿様！！
このままではヒナギクさんがあの男の毒牙に！！」

「毒牙ってお前……
無理無理！！邪魔出来る雰囲気じゃ無いから！！」

ヒナギク達の前に飛び出そうとする綾姫を必死で止める駿。

「なりましたわ！！
暗闇で女性に手を出そうなど言語道断！！
私があの男を式神で蹴散らして」

「早まっちゃダメよ綾！！
落ち着いて！！」

扇子を振り上げようとする綾姫に楓も慌てて止めに入る。

（ん……？
式神……？）

ここで駿の頭にふとある考えが浮かんできた。
それはそうと大変な事態になりそうなヒナギク達に視線を戻す。

一方、ヒナギクに後ろから抱き着かれるような形となったハヤテの顔は混乱のあまりかなり真っ赤。

「え…ヒ…ヒナギク…さん？」

狼狽えまくりながらハヤテが振り返ると……

「なんて冗談言うと、男の子は真に受けるのかしら？」

「！！！」

クスリと悪戯っぽく微笑むヒナギクが。

「ご忠告ありがとう。
今後注意するわ、ハヤテ君みたいな男の子には」

「……」

ガクリと膝をついて肩を落とすハヤテに『勝った♪』と上機嫌な様子のヒナギクはそう言った。

ハヤテは確信する。
彼女はナギ以上に負けず嫌いなのだと。

「良かった……
何でも無くて。
綾の心配も杞憂だったわね」

「わ、私は最初からこうなると思っていましたわ！！
予想通りですの」

「クスッ、本当に可愛いんだから！」

「な、何するんですの！？」

隠れて様子を窺っていた三人は取り敢えず一安心。
無理して強がってみせる綾姫の可愛さのあまり楓は思わず彼女を抱きしめた。

「ところで、さっきから黙ってるけど……どうしたの駿？」

「いや、あの二人を帰す事が出来るかもしれない考えが」

駿はそう言って二人に顔を向けると続ける。

「綾姫、お前の式神を使えば良いんだよ」

「私の？」

「ああ。
要はヒナギクが納得すりゃハヤテと一緒に帰ってくれる。
だったらアイツを納得させられる演出をすれば良い」

つまり駿の考えはこうだ。
綾姫が強そうな式神を召喚してヒナギク達にラスボスだと認識させる。そしてその式神をヒナギクに華麗に倒させて納得させる。

「なるほど！
素晴らしいお考え、流石駿様ですわ！」

「確かに、それならヒナギク達も納得しそうね」
綾姫は両手を併せて楓も頷いてみせた。
「でも、そうなると問題はどうやって彼女に式神を大将だと認識させるかね」
「そうですわね。
私の式神で言葉を話せるモノは強力な式神ばかりですから危ないですわ。
そこそこ弱くないとヒナギクさんに怪我をさせてしまいますし…」
（怪我の心配にハヤテは入っていないのな……）
駿は綾姫の言葉に多少ツッコミ所を感じながらも考える。
「だったら……
誰かが式神に吹き替えするとか」
「それは名案ですわ」
「そうね。
それが一番早いわね」
駿の提案に綾姫と楓はそう返すとじっと彼の顔を見つめる。
「……？」
「吹き替えならば駿様が適任だと思いますわ」

「え、俺！？」

駿はいきなり自分に振られた事に驚いて目を見開く。

「迫力を出すためによ。
頑張って！」

「駿様なら出来ますわ！」

二人の意見により駿が式神の吹き替え役に任命された。

「後は式神ですわね……」

そう言うと綾姫は数珠を軽く振ってヒナギク達にバレないように小さな光を浮かばせる。
次の瞬間、光からぴょこんと小さな式神が姿を表した。

「え？」

駿は登場したその式神に思わず目を見開く。
それは兜を被り甲冑を身に付けた全長１０ｃｍほどの可愛らしい二足歩行の式神であった。

「あの……これが？」

「心配無用ですわ。
この子は特殊な能力があるんですの」

不安そうな表情の駿にクスリと微笑む綾姫であった。

一方……

「しかし、一向にお化けが出ないわね……」

「やっぱり帰りましょうヒナギクさん」

「ダメだって言ってるでしょ」

「でも……」

ヒナギクとハヤテがそんな感じで歩いていると……

『ハハハハ！！
よくぞここまで辿り着いたな！！』

「「！？」」

二人の前に体長２ｍ超にもなる甲冑に身を包んだ兜が出現した。
その兜は高らかに笑いながらハヤテ達を見下ろす。

「一体何者！？」

『よくぞ聞いたな小娘。
我はこの旧校舎に住み着きお化け達を統括する、ラスボスだ！！』

「ラスボス！？
変わった名前ね……」

『名前じゃねーよっ！！
ラスボスっていうのはラストボスの事だよ！！
これを倒せばゲームクリアってやつ！！』

首を傾げるヒナギクに甲冑のお化けは思いきり突っ込む。

「何だか、何処かで聞いた事のある声ね」

「そう言えばそうですね……」

『あ～、コホン！！
気のせいだ気のせい！！』

甲冑は咳払いをすると両手を振り上げて二人の前に立ちはだかる。

『とにかくハヤ、じゃ無かった間違えた。
さぁ！！
勇敢なる学生よ！！
うぬらが我を格好良く倒せたならばこの旧校舎に住まう妖怪を無くしてやろう！！
さすれば納得し早く家に帰るが良い！！家の人も心配してるぞきっと』

（……ハヤ？
ん？まさか……）

ハヤテは甲冑の言葉に何か気付いたように考える。

（これは人の声だ。
しかもどこかで聞いた事がある。

という事は本当は妖怪じゃ無くて帰って欲しいただの脅し？
そうだ。それならあのやけに説明口調なのも納得出来る！！
だったら……）

ハヤテは気付いたように顔を上げるとパイプを構えるヒナギクが。

『しかし！！
うぬら雑魚に』

「でやぁ！！」

『ヌハっ！？』

甲冑の話の途中でヒナギクが竹刀を叩きつけた。
甲冑は無惨に倒れ込む。

『こ、小娘！！
不意打ちとは卑劣な！？』

「よくもお化けなんて旧校舎に住まわしてくれたわね……
このままじゃ済まさないわ！！
覚悟しなさい！！」

『いや、ちょっ待っ！？』

ヒナギクはパイプを振り上げてひたすら甲冑を叩きのめし始めた。
甲冑は無惨にもやられっぱなしでどう見てもヒナギクが圧倒している状況に。

「ヒナギクさん！

やっぱりそんなお化け放っておいて帰りましょう」

「ダメよ！！
今度こそ私が倒すんだから！！」

「でも……
『そのお化けが更に恐ろしい最終形態とかになるかもしれません。
それを倒せば一件落着』でしょうけど！！倒せなかったら大変危険ですよ！？」

ハヤテのまるでヒナギク以外に言うような叫びに甲冑がハッと閃いたように顔を上下させた。

「大丈夫よハヤテ君！！
怖がらずに戦えばコイツ、大して強くは」

『フハハハハハ！！
よくぞ我をここまで追い詰めたな！！』

「へ？」

ボコボコにされている中、急に甲冑が不敵に笑い始めゆらりと立ち上がった。

『貴様らに我が最終形態を見せてくれるわ！！』

そう言うが早いか甲冑は更に巨大化して全長３ｍ超にまでなってヒナギクを見下ろした。
しかし彼女も怯まない。

「そんな大きくなったところで、私がやっつけて」

さぁ反撃開始か、と思いきや…

ドーン！！！

『ええ！？もうエネルギー切れ！？
じゃ無くて……
ぐはぁ！！やられたァァァァ！！』

「「……」」

ヒナギクが攻撃をくわえようとする前に何と甲冑が勝手に爆発してしまったのだ。
そして残ったのは小さな兜だけ。
ハヤテは『早いよ』と呆れ半分の表情。

「え……？
まだ私何もしてないのに……」

『な、何と！！
小娘貴様、『気』の使い手か！？
我が攻撃される事なく一瞬でやられるとは！！』

ヒナギクの呟きにギクリとした兜は慌ててそう返す。

「そ、そうですよヒナギクさん！！
今のが『気』ってやつですよ。

なんか達人とかが使う……！！」

ハヤテも話を合わせるように彼女に近づいてそう言ってみせた。
しかし彼女の表情は怪訝なまま。

「『気』って……
私別に……」

「きっと無意識のうちに使ったんですよ！！
いや凄いな～ヒナギクさんは！！」

「いや……
『気』なんて普通使えな」

「使えますよ！！」

無理にでもそれで押し通そうとするハヤテ。
ジト目のヒナギクにハヤテはとにかく納得させようと必死だ。

「いや～、僕も今必殺技を覚えたいと思ってるんですけど……
やっぱ必殺技は『気』とかじゃないと！！僕も修行とかして早く覚えたいなー！！」

「じゃあ、会得したら見せてね」

「ええ勿論……って、え？」

いきなりのヒナギクの発言にハヤテは思わず聞き返す。

「『気』を使って相手を倒す必殺技……ハヤテ君が会得したら必ず

見せてね」

「え…？ええ？」

「じゃ！！
ハヤテ君いっぱい修行しなきゃいけないだろいから……
帰りましょうか！！」

ヒナギクはくるりと背を向けるとそう言い残して歩き始める。
その後をハヤテが慌てて追っていった。

「はぁ……
ようやく終わったか……」

「危なかったわね……」

そんな二人の後ろ姿を眺める駿、楓、綾姫。

「ご苦労様。
お戻りなさい」

綾姫が数珠を優しく差し出すと小さな兜はちょこちょこと光の中に歩いて戻っていった。

「まさかあの小さな兜に巨大化の能力があったとはな」

「フフ、驚きまして？」

「でも、あの兜は一体なんの為の式神なんだ？」

「あの子は“手乗り兜”
小さくて可愛らしい式神。
敵に気付かれないような潜入や人が通れない場所を通ったりして助けてくれますの」

綾姫が両手を併せて嬉しそうに話す。まるで我が子を可愛がっているしている親の優しさのよう。

「巨大化は？」

「あれは見せかけですわ。
あれで驚かせて注意を引いたりするんですの。
でも強さまでは変わりませんわ」

「まぁ、さっきもボコボコにされてたしな。
大丈夫なのかあの兜」

「心配いりませんわ。
あれはやられてる振りです。
兜は元々防御は相当高いですから」

「なるほど」

それを聞いて一安心する駿。

「でも焦ったな。
まさかいきなりパワー切れをするとは」

「巨大化の時間に限りがありますから。
ですが駿様のフォローも見事でしたわ」

「いや……
アレはダメ元だったんだが…」

とにかくこれで一件落着。
ヒナギク達も帰った事だし三人は本来の仕事である妖怪駆除に。

「話しているうちに悪霊がどんどん出てきたみたいね」

「っと、揃いも揃って夜行パーティーでもすんのかね」

いつの間にか駿達の前方には沢山の妖怪、悪霊達が。

「んじゃ、さっさと片付けるか。楓、左側から頼めるか？
俺は右側から……」

三人はそれぞれ武器を構えて戦闘体制に……

「はぁ！！」

「！？」

とはならず、楓がいきなり駿に向けて刀を振り払った。
間一髪、駿は寸での所でそれを避けるがあまりに突然の事に腰から地面に落ちる。

「ちょっ、楓!?
いきなり何を」

「……」

腰をついた駿の目の前に楓が黒い刃を突き立てた。
あと僅かに頭が前にあったら間違いなく駿の鼻は無くなっていた。

（えええええええ!?）

「……」

そして彼を見下ろす瞳は冷酷な光を帯びている。

「ちょっ、あの……楓さん?
いえ楓様?
これは一体……」

「貴方が正面から突っ込みなさい。私達はその隙に奴等を蹴散らすわ」

「……はい?」

先程までとは全く違う楓の豹変ぶりに駿は訳も分からずに視線だけで隣にいる綾姫に助けを求める。
綾姫は溜め息をつくと駿の隣にまで寄っていきソッと屈んで口を彼の耳元に寄せた。

（ご覧になった通り、楓さんは性格が１８０度変わる事がございますの）

（何故！？）

（ええ……
実は楓さんは手に刀や剣類の武器を持つとあのように冷酷で容赦の無い楓さんになってしまうんですの。ご自身でもコントロールが出来ないらしくて）

（はいィィィ！？
何その隠れ設定！？）

綾姫はそれだけ言うと立ち上がって楓の隣に戻る。
彼女は『こうなったら止められないから従うしかありません』とでも言うように肩を竦めた。

「現状、この中で最弱且つ多敵戦が得意である貴方が正面から突っ込み私達が統率の崩れた妖怪を一掃する。貴方は丈夫だし適任よ、仲間として信じてるわ」

「あの、もし断った場合は……」

「……」

楓は目を細めて刃を地面から引き抜くと駿の胸元に突きつけた。

「肺は二つあるから、一つ消えても大丈夫よね」

「すみません全然仲間の発言とは思えません！！
敵意しか感じられません！！」

至って真面目に言う楓に真っ青になって抗議する駿。
すると……

「ごちゃごちゃ言ってないで……」

「ひぃ！？」

楓が駿の胸元をひっ掴み彼女の前に持ってくると、

「さっさと突っ込んでいきなさい、男でしょ！！！」

「えェェェェェェ！？」

前方の妖怪達の方に思いきり蹴り飛ばした。
駿は成す術なくぶっ飛んでいく。
そして……

「のおォォォォ！？」

飛んできた駿に大勢の妖怪、悪霊達が一斉に群がってきた。
彼はあっという間に袋にされる。

「さて、片付けるわよ綾」

「楓さん……
後でちゃんと謝って下さいね」

この後楓達が妖怪達を一掃。
こうして、夜の旧校舎の妖怪駆除は無事に終了したのだった。

因みに駆除後……

「本当にごめんなさいっ！！」

「い、いや……
うん、もう大丈夫だから」

ボロボロの駿に元に戻った楓が平謝りして何とか丸く収まったとか
そうでないとか。

『夜の学校で美少女二人に囲まれてラッキーイベント♪』

（……）

もう二度と占いなんかしないと心に決めた主人公であった。

其の四十七　皆違うから面白い（後書き）

三人娘の
★諸事情ラジオ☆

美希
「さて、久々の諸事ラジね」

理沙
「気分とノリ次第で急に終わったり急に始まったりする何とも不安定な後書きコーナーだ」

泉
「それじゃあ本日のコーナーいってみよ～♪」

～本日のＮＧシーン～

ハヤテ
「そんな軽い事では……
何をされたって」

ヒナギク
「良いわよ……」

ハヤテ
「へ？」

すると、ハヤテの言葉を遮りヒナギクがそう呟いた。
そして彼の背中にはヒナギクの両手がそっと添えられる。

ヒナギク
「ハヤテ君になら……
何をされても……／／／」

「……」

普通の男子なら卒倒してしまうほどの彼女の行動と言葉。
しかし、後ろのヒナギクに対してちょっと困ったようにハヤテは振り返り……

「えっと、すみません。
僕は巨乳しか興味が無いので」

バキッ！！！

ハヤテは動かなくなった……

☆リアル回答で回避不能のＢＡＤエンド☆

美希
「凄まじいエンドだな」

泉
「きっとハヤ太君は上手く返してあげようと思ったんだね？」

理沙
「ハヤ太君らしく無さそうで意外とハヤ太らしいな」

美希
「では、続いてはオリキャラ紹介。ようやくこの二人です」

泉
「行ってみよー♪」

・キャラクター紹介

篠月（しのづき）　楓（かえで）

＞ｉ３７０９３－２１５９＜

【年齢】

１６歳
【誕生日】
７月２日
【血液型】
Ａ型
【家族構成】
？？？
【身長】
１６０ｃｍ
【体重】
何キロだって良いでしょ！！
【好き】
駿、生徒会の皆、白皇、平和な事、皆が笑っている場所、？？？
【得意】
お化けとかそういうの、家事全般、？？？
【嫌い・苦手】
？？？

【備考】

本当は主人公になる筈だったキャラクター。
駿とのチェンジで、今は主人公の謎を知る仲間キャラクターの一人となった。

黄色のロングヘアーで右側の前髪を赤いリボンで結っている。
目はエメラルド色の瞳に二重。
スタイルはスレンダータイプで良い方。
学校では制服、私服は黒い洋服を好んで着ている。

基本的に誰とでも分け隔て無く優しく接するタイプで笑顔を大切にしている。常に相手の立場になって考える事の出来る彼女は男子女子共々非常に人気が高い。
ただ本当に分け隔てが無いので勘違いしてしまう男子も出てきそうなのが欠点。

妖怪退治が出来て、白皇では簡単な見回り地味た事もこっそり頼まれ編入した。
退魔の実力は圧倒的で刀身が異様に長い黒い太刀を扱い敵を瞬殺していく。
一振りに見えて実は幾重も斬撃が走るほどの刀の使い手で、現状で言えば駿より強い。

また、刀類を持つと普段の優しい性格が一変し冷徹で容赦の無い性格になる。
本人もコントロールが出来ずに困っている。

プロフィールの項目も含めてまだ明かせない部分が沢山あるが、それは本編で。

皇綾姫（すめらぎあやめ）

＞ｉ３７１３０―２１５９＜

【年齢】
１６歳

【誕生日】
９月１５日
【血液型】
Ｂ型
【家族構成】
？？？
【身長】
１５８ｃｍ
【体重】
何て事を聞くんですの！？
【好き】
お強い殿方、私が認めた殿方、
女性の味方ですわ、？？？
【得意】
？？？
【嫌い・苦手】
プライドが傷付く事、草食系男子、というか男性、女性を軽視する
男性、廃虚とかそういう場所、
〇〇↑本編でやる予定の漢字二文字の事、？？？

【備考】

楓の親友でいつも隣にいるキャラクター。
主人公の謎を知る一人である。

青みがかった綺麗な黒髪を腰まで流していて、整った容姿に藍色の
少し細い瞳が特徴の相当な美人。
よく紅梅色の和服をきていて、手には必ず白ベースに金のアクセン
トの扇子を持っている。

絵に描いたような高飛車お嬢様キャラ。
強がりで負けず嫌い、そしてプライドも人一倍高いとかなり大変な女性。

基本的に男性が嫌いで女性にはかなり優しい。
意外と言葉に容姿が無く美しい容姿とは裏腹に男子をバッサリ切り捨てる事もしばしば。
なので学校では女子の人気が圧倒的に高い。色んな意味で。
楓同様に退魔能力は郡を抜いている。
召喚術師で様々な式神を使役して妖魔を倒していくスタイルが主。
彼女の使役する式神の数は相当数で召喚能力は非常に高い。
術師としても優秀で術の魔力だけなら伊澄に引けをとらない。
反面、近接戦闘にかなり不利。
近接戦が得意な人間と二人一組で戦うのがベスト。

楓同様にプロフィールを含めて謎が沢山。
駿と何やら特別な関係があると彼女は自称しているが……？

伽藍
「とまぁこんな感じです。
まだ??が多いプロフィールですが、そのウチにオリキャラ全てのプロフィールを改めてまとめたいと思います」

理沙
「楓君の方が強いという記述があったが……」

泉

「駿君は女の子より弱いって事？」

駿
「そんな簡単にまとめないで！？
その言い方だと俺ホントどうしようも無い奴みたいじゃね！？」

理沙・泉
「違うの？」

駿
「意外そうに尋ねるな！！」

美希
「因みに私の調査では駿君は綾姫君より下で、あの謎の男子二人よりも下らしい」

伽藍
「いつの間に調べられた！？」

駿
「別に最強系の主人公じゃ無いからね」

美希
「どちらかというと最哀系ね」

駿
「一文字変えて最悪な言葉作らんでくれますか！？」

伽藍
「あ、そう言えば駿は対魔力も全然無くて、実は翼君の半分以下も

対魔力が無いくらいなので純粋な強さなら伊澄より弱いです」

理沙
「弱体が徐々に露呈する主人公」

駿
「ストップ！！
止まれ弱体化！！」

美希
「更に学校では球技音痴な上に体育の成績もすべからく悪いという始末」

泉
「ガンバだよ～♪」

駿
「ラジオで集団いじめの被害にあってます」

美希・理沙・泉
「友情だよ」

駿
「嘘つけ！！」

美希
「てな訳で次回は多分クルージング編かもしくはマラソン大会編に突入のどちらかです」

泉

「え！？
まだ決まってないの？」

理沙
「まぁ、クルージング編が上手く思い付かなかったらマラソン大会
編になるだろうな」

三人娘
「次回もよろしく～♪」

其の四十八　一回で良いからタイタニックのあの超名シーンをやってみたい。あ

一応ちゃんと明記しておきたい事があります。

楓の事ですが、彼女は二重人格ではありません。
二重人格、解離性同一性障害とは一人の人間に二つの人格、言わば二人の人間がいるようなものです。
一方の人格が活動している時はもう一方はその時の記憶が無いという精神疾患の一種なんです。

楓の場合はギャグ的にキャラが変わるというだけで人格形成がもう一つある訳ではありません。
病気ではありません。
記憶も後付けでなくその時の記憶がちゃんとありますので。

大した語弊では無いと思われるでしょうがこの違いというのは本当に大切な事なので、どうかご了承の程をお願いします。

其の四十八　一回で良いからタイタニックのあの超名シーンをやってみたい。あ

お昼休み。
本日の生徒会室いつもよりメンバーが少し違っていた。

会長机にヒナギクはいつも通り。長テーブルには翼と千桜の姿。
これもいつも通り。
愛歌は午前中で早退。
これも珍しい事では無い。
三人娘はお昼休みなんで自由奔放にサボり。これもいつも通り。

しかし珍しく駿の姿が無かった。何だかんだ言っても彼は毎回生徒会に出ているのだが、今日に限っては朝から姿を見せていなかったのだ。

そしてもう一つ珍しい事。
それは……

「ヒナギクさん、こちらの棚はこれで宜しいんですの？」

「ええ、ありがとう綾姫」

「こっち書類まとめておいたから」

「助かるわ楓」

生徒会室にメンバー意外の人間、楓と綾姫がいることである。
綾姫は机の隣の書類が沢山入った棚を丁寧に整理していて、楓は積んであった書類を綺麗に分けていた。
二人は生徒会の仕事を手伝っている。

「本当にありがとう二人とも。
人手が少ない時は助かるわ」

「ううん、これから生徒会には色々とお世話になると思うから」

「ええ、このくらいは当然ですわ」

今日は駿、愛歌、三人娘が居ないので人手が少なく二人に手伝って貰っていたのだ。

「お二人は手際が良いですね。
この分だと仕事も早く終わりそうです」

「ありがとう千桜。
私達なんかで良ければ」

「いつでもお力になりますわ」

千桜も書記の仕事をしながらそう言うと楓と綾姫は顔を見合わせて微笑んだ。

「二人はもう学校には慣れたか？」

「まだ来たばかりだけど、とっても素敵な学校だと思うわ」

「そうですわね。
実はまだ学生という実感もありませんの」

翼が尋ねると楓はニッコリと微笑んで綾姫は少し恥ずかしそうにそう返してみせた。

「ところで、駿様は今日どうされたんですの？
お姿がお見えにならないですが…」

「あ～、駿はなぁ……
今頃は海の上かな……」

姿が見えない駿にふと疑問を持った綾姫。
翼は天井を見上げて少しおかしそうに口を開いた。

其の四十八　一回で良いからタイタニックのあの超名シーンをやってみたい。あ、でも相手居ないや

「はぁ……」

「なんや自分。
せっかくウチがクルージングデートに誘ってやったのにその浮かない表情は」

巨大な豪華客船の甲板の上。
どこかの洋画で見た事があるような設計の船だ。
青空の下、巨大な豪華客船の甲板の端で鷺ノ宮駿は海を眺めながら溜め息を一つ。
彼はシャツの上から白いパーカーを着て下は某スポーツメーカーの名前が書かれた黒いウォームアップパンツ―冬の部活動なんかで着る所謂シャカパンというやつだ―という格好。

そんな彼に声をかけたのはすぐ隣ので同じく海を眺める愛沢咲夜。
シャツ上に胸元のリボンが特徴的なブレザーで下のボタンを幾つか開けていて、紺の短めのスカートと黒いニーソックスていう制服姿だった。

「何が悲しくてオメーとクルージングなんてしなくちゃならねーんだよ」

「酷い……！！
ウチの気持ちも知らんとそんな事言うん？
せっかく自分と二人の思い出にと思ってデートに誘ったのに……」

咲夜は頬を少し赤らめ瞳をうるうるとさせて駿を見つめる。
普通の男子ならば思わずドキリとしてしまうような仕草だが、駿にとってはいつもの演技だと知っているので憮然とした表情のまま。

「何がデートだ。
昨日の夜いきなり電話で連絡よこして一方的に切りやがって。
今朝早かったんだぞ」

「せやけど、ちゃんと来たやん」

「伊澄が行くっつーからついて来たんだよ」

そう言って駿が振り返ると青空のテラスでティータイム中の鷺ノ宮伊澄と三千院ナギの姿。
ナギはセーラー服のような洋服を上に桃色のドレススカート。
伊澄はいつも通り着物姿。
二人はのほほんと自分達の漫画の話に華を咲かせているのだろう。

「っていうかもう少し嬉しそうな顔せんかい。
せっかくのウチの船で優雅にクルージングなんやで？」

「だから不安なんだろ」

「何が？」

そんな駿の言葉に咲夜は不思議そうに首を傾げる。

「いやだってお前と一緒の船とか……沈むじゃん」

「沈むかぁ！！
そこまで笑いの神は降臨せえへんわ！！」

「笑いの神ならんな物騒な事態にならねーよ。

沈没って言ったら……ク○ーケンとか？」

「ウチは人間や！！」

駿の言葉に咲夜は憤慨する。

まぁせっかくの船旅を沈むの一言で片付けられたらそれは怒るだろうが。

「つーか何でお前は制服なんだよ？」

話が変わって彼はもう一つ気になっていた事を尋ねる。

「ああ。これはアレや、自分女の子の制服姿好きやったろ？」

「おー、まぁな。

私服も良いけどやっぱ制服っていうのは何か良いんだよな。

なんつーか妙にそそられるものが……って何を言わせんだよっ！！

変態か俺は！！」

「ナイス！

期待通りのノリツッコミや！」

「……まさか、んなくだらないやり取りをするためだけに着てきたのかよ」

笑いにかける彼女の行動に呆れた様子の駿。

まぁ制服姿は可愛いのでそれはそれで良いのだが。

「まったく……

綺麗な青空の下のクルージング、優雅な一時だと言うのに昼間から

騒がしい奴等だな」

「お兄様……
そんな不謹慎な事を言ってはいけませんよ」

すると、駿達二人向かってテーブルに座っていたナギと伊澄がそう言って顔を向けた。
駿達はテーブルに近づいていていって駿は立ったままだが、咲夜は席に着く。

「二人でイチャつくのも結構だが場所は考えた方が……」

「イチャついとらんわ！！
どこをどう見たらそうなるんや！！」

ナギが紅茶を啜りながら済まし顔でそう言うと咲夜は慌てたようにそれを否定する。

「……」

「痛っ！！
い、伊澄！？」

伊澄はジト目で隣に立つ駿の腕をつねっていた。
彼がどうしたのかと伊澄を見るが彼女は何事も無かったかのようにお茶を啜った。

「しかし咲……
大丈夫なのかこの船」

「何やナギまで」

「いや、こんな間違いなく沈みそうなデザインで」

「アホか！！
デザインで船の性能を決めんな！！ってそこの二人も頷くな！！」

ナギの沈みそう発言に駿と伊澄も頷いていたので咲夜は人差し指をたててみせる。

「ええか？
この船、タイタニック号の『タイ』は、タイガースの『タイ』やねんで？
せやから無敵やっちゅーねん！！」

「「「……」」」

ザ・大阪ダジャレ。
キラーンと目を光らせる咲夜に色んな意味で言葉を失う三人。

「……伊澄、ナギ。
この船はじきに氷山にでも激突して沈むだろうからもう帰るか」

「うむ。
せっかくハヤテへのつれない態度がときめきを作る作戦を考えていたが死ぬのはご免だからな。
マリアとハヤテを連れて帰るか」

「うおぉい！！
何帰ろうとしてんねん！！

沈むかぁ！沈んでたまるかぁ！！」

席を立とうとするナギ達を咲夜は叫んで呼び止める。

「この船にはタイタニックの映画より金かかっとんねん！！
テロリストにでも占拠されん限り、ウチの“タイタニック号”が沈む訳は……」

パーン！！

咲夜の言葉は突然響いた銃声によって止められた。
四人が何事かと振り返ると……

「あー、あー！！
乗組員に告ぐ！！
たった今この船は我々グラ○・パピ○ンが占拠したぁ！！
よって大人しく我々に従えぇ！！」

軍服のような格好にマクスで頭全体を隠した三人組が機関銃をもってそう叫んでいた。
彼等の顔には蝶々の仮面のようなものが。

「早速占拠されたな……」

「うむ、流石咲夜の船だ。
沈む準備は万端か」

「どういう意味や！！」

色んな意味で逃げ惑う人々を他所に駿達はやっぱり咲夜と一緒だとこうなるのかと感心していた。

「あー、そこのテロリスト諸君。乗組員や客には手を出すな。人質なら少ない方がいいだろ？」

「お、おいナギ……お前まさか」

ナギは半ば呆れたまま三人のテロリストにそう声をかけた。その言葉に咲夜は驚いたように彼女に目を向ける。

「何だ小娘、お前人質を買って出ようって気か？」

「ああ、適任だと思うぞ」

そう言ってナギはスッと隣に指をさす。

「なんせコイツがこの船のオーナーだからな」

「って！！ウチが人質になるんかい！！！」

推薦だった。

「このように小さなボケも見逃さず見事にツッこむキレの良さ」

「なに冷静に推薦しとんねん！！」

「なるほど適任だな。
いやお前にしか務まねぇ。

むしろお前の為の役割といって良い」

「駿まで何言い出すんや！！」

そんな感じで漫才が始まってしまいテロリスト達は唖然。

「なんてしてる場合じゃねぇ！！
テメーらも言うことを聞きやがれ！！」

テロリスト達は機関銃を振り上げ四人に襲いかかろうとする。
しかし忘れてはならない。
彼女達にはどんなピンチでも我が身を省みず主を守るプロフェッショナル達がいる事を。

ドカッ！！バキッ！！

「ぐはぁ！！」

登場から僅か数行でテロリスト達は全員銃を奪われ地面に倒れ込んでしまった。
そしてテロリスト達の前には何人もいる中、代表するかのように立つ三人の執事の姿。

「まったく……
最近のテロリストは鉄砲を持てば勝てるつもりでいる」

三千院家執事長クラウス。

「まったくなってないですね」

愛沢家執事国枝。

「功夫（クンフー）が足りませんよ」

愛沢家執事巻田。

「ぐ……

な、なんて強い連中なんだ…」

「なのにどこか紳士的な態度。

お…お前達は一体……」

テロリストは両手を縛られて地面にひれ伏されながら何とか顔を上げる。

「愚か者め。

我々が何者か知らずにこの船に乗り込んで来るとは……

いいかよく聞け」

クラウス達はギロリとテロリスト達を睨むと、手に持った指で弾を弾く。

「我々はお嬢様を守る……」

「「一流の執事だ」」

そう言い残して彼等は背を向けて歩き始める。

「お嬢様を傷つけようとする連中は我々が全力で排除する。よく覚えておけ！！！」

去り際をクラウスが決めて、一件落着と……

「なーんてカッコつけてもこんな連中の侵入を許したドジは消えへんで？」

「「「！！」」」

咲夜の言葉にクラウス達はビクッと肩を震わせた。
言われてみれば確かにその通りである。

「んで？
オメーらの目的は何なんだ？」

「せやで。
もう自分ら捕まった身なんやから大人しくした方がええよ」

捕獲された状態のテロリストの一人に駿と咲夜が寄っていって尋ねる。

「ふん！！
貴様らになど言うものか！！」

「いや大人しく吐いて楽になれよ。オメーさんまだ学生だろ？田舎のお袋さんも泣いてるぞ」

「なんで聴取する刑事みたいになっとんの？

しかも学生と違うやろ」

駿の説得にもテロリスト達は顔を背けて一向に従おうとしない。
あまつさえ怒鳴り返すほどの元気すら有り余っているようで。

「貴様のような全然モテなさそうなガキとチビタヌキのような女には話す事など何も無いわ！！」

ブチッと二人の何かが切れた音がはっきりと聞こえた。

「……咲夜、そういや昼飯まだだったな」

「ぬぐ！？」

駿は怒鳴ったテロリストの顔を右手でグッと掴むと口を開く。

「だったら今日の昼飯はお好み焼きだ。しかもコイツらの目玉を潰して作る特別製だ。
マヨネーズとソース持ってこい」

「それはナイスアイデアや。
巻田、国枝！マヨネーズとソースを大至急」

「「かしこまりました！」」

額に怒りマークを浮かべる咲夜は駿の提案に同意して執事に材料を持ってこさせる。

マヨネーズとソースが揃うと、駿はマヨネーズを持ち咲夜はソースを持ってテロリストの前に屈んだ。

「ひぃ！？
ちょっ、貴様何を！」

「お好み焼きに決まってんだろ。
大人しくしてろコラ、今からテメーの目にマヨネーズを流し込んで
下味をつけてやる。
引っ張り出して焼くのはその後だ」

主人公とは思えない程の邪悪な笑みを浮かべる駿。

「咲夜、オメーは左目にソース流し込んでくれ。
俺は右目を殺るから」

「任しとき」

咲夜もニヤリと笑ってソースをテロリストに近づける。

「ちょっ、待て！！
ちょっとホント！！
冗談でしょ！？ちょっと冗談…」

「「せーの！！」」

「分かったァァァァ！！
言います！！洗いざらい吐きますからそれだけは止めて！！
ちょっ、」

あああああああああ！！！

○

「なるほど……
つまりハヤテを亡き者にしたら借金がチャラになるとオメーらのボスはそう言った訳だな」

「「「はは あ！
おっしゃる通りでございます！！！」」」

テラスの前に拘束された状態で土下座をするテロリスト三人。
一応三人共両目が無事のようでお好み焼きの刑は免れたらしい。

「しかしテロリストともあろう奴等が揃いも揃って情けねーな」

「まったくや。
このくらいであっさり白状しおってからに。
自分らプロ意識あるんか？」

「あんな残酷な仕打ちを受けそうになったら誰でも白状するだろ。
そもそもテロにプロもアマもないからな」

溜め息をつく駿と咲夜にナギが心底呆れたようにツッこんだ。
伊澄は袖で口を隠したまま頭にハテナマークが浮かんでいる。
周りの執事達もテロリストを連行する役割以外の者は各々も持ち場に戻っていった。

「まぁ、とにかくハヤテを連れて来ないとな。
俺、ちょっと捜してくる。
クラウスさん、伊澄達をお願いします」

「あ、ならウチも行くわ。
一応ウチの船やからな」

「いや、ハヤテの事だから……」

駿と咲夜は恐らく艦内で迷っているだろうハヤテを捜すためにテラスから中に走っていく。
ナギが止める間も無く二人は艦内に消えていった。
それを見たナギはやれやれと溜め息をつく。

「あのお嬢様……」

「ん？
何だクラウス？」

「伊澄お嬢様もいらっしゃらないのですが……」

「え？」

ナギは隣を振り返るとほんの数秒前まで居た筈の伊澄の姿はそこには無かった。

「……」

迷子スキルは全開だった。

○

「と言ってはみたが……
何処に行きゃ良いんだ？」

「せやな。
取り敢えず運転室やな。
船の人もいるやろうから」

駿と咲夜は色々捜す前にまず一番近くにある客船を操作する部屋から捜しに行く事にする。
そこならば船の人間もいくらか居るだろうし都合が良いと考えたのだ。

ガチャ……

「「あれ？」」

しかし、二人が部屋に入るとそこには誰もいなかった。
と思いきや……

「うぅ……」

「「！？」」

地面になんと拘束されて倒れている人の姿が。
それは中年くらいの歳の立派な髭が特徴のダンディーな男性で、軍服着ている人間のだった。

「貴方は……
ひょっとして艦長！？」

「いや、ここ客船やねんけど」

「う……」

駿は咄嗟に艦長だと勝手に認識して彼に駆け寄る。
咲夜は怪訝な表情をするが。

「大丈夫ですか艦長！？
しっかりして下さい！！
テロリストにやられたんですか！？」

「うぅ……
我らが大和の日の丸は、このタイタニック号と共に沈むのか……」

「艦長！？
大丈夫ですか！？」

駿が側で声をかけると男は虚ろな目で呟く。
しかし縛られている以外外傷は無いようだ。

「せめて本国にいる人々に笑顔を届けたかった。

しかし、もうこれまでか……」

「何を言ってるんですか!?
しっかりして下さい艦長!!」

「君に、最後の命令がある……
聞いてくれるか……？」

必死に呼びかける駿に向かって手を伸ばす。
駿は大きく頷いてそれを両手で掴んだ。

「隊員全員を連れてこの戦線を離脱しろ……」

「しかし!!
それでは艦長が……!!」

「私はいい……
もう待っている家族もいない。
だが君達には待っている家族がいるだろう……
だから」

スパーン!!

「さっさと話を進めんかいっ!!
このドアホがーーーっ!!」

痺れを切らした咲夜が二人に思いきりハリセンを叩きこんだ。

「ぐふ……」

「艦長ォォォォォォ！！！」

こうして駿の叫びと共に艦長は目を閉じた。

「……よし、ハヤテを捜すぞ」

「切り替え早っ！！」

因みにこの人は艦長でも何でも無くただの軍人マニアの一般乗客だという事が後日発覚した。

「まったくバカに付き合ってて思いきり時間無駄にしたわ。とにかくここには誰もおらへんから別の場所に……」

「つーかこの船無駄に広すぎなんだよな……」

二人は部屋から出るために歩き始めようとしたその時……

ドォォォォォン！！

「きゃ！？」

「のわっ！！」

物凄い揺れが二人を襲った。

咲夜は思わず倒れてしまい駿も彼女の上に倒れ込んでしまった。

（今の揺れ……爆発か！？
だとしたら……）

駿は普通ではあり得ない程の揺れと音からそう考える。
そうなると伊澄達も危険だ。

「おい咲夜！！
一旦上に……ん？」

「……」

駿はそう言って咲夜の方に顔を向けて始めて今の状況に気付いた。
彼は咲夜の押し倒しているような状態なのだ。
しかも、彼の左手は地面に付いているが右手は何故かかなり柔らかい感触がする。

（ま、まさか……）

嫌な予感がした彼は右手の方を見ると、何ともまぁ見事に咲夜の胸の上に乗っかっていた。
歳の割に結構大きな彼女の胸の感触はかなり柔らかく色々とアレなのだろうがそんな感想を述べている状況では無い。

「のわ！？
わ、悪い！！」

駿は大慌てで手を離すが彼女の手にはいつもとは違うかなり固めのハリセンが。

「お……」

「ちょっ！！
ちょっと待て！！
悪気もわざとでも無いからねコレは！！事故だ事故！！」

「お、お……」

「お？
落ち着けの『お』だよなそれは。うん、だからちょっと落ち着…」

「オノレは何さらしとんねん、
このド変態がァァァァ！！／／／」

咲夜は渾身の力で固いハリセンを振り払った。
駿は叫び声すらあげる間もなく吹き飛ばされ地面に着弾する。

着弾したすぐ隣にはあの軍服を着た男性が倒れたままだった。

「ぐ……
艦長、自分はもう……」

「若人よ……
タイタニック号と共にあらんことを……」

「「永久（とわ）に……」」

こうして二人はタイタニック号の名誉と共に眠りについたのだった。

「ってあかん！！
馬鹿に乗ってたらまた犠牲者を出してもうた！！
ちょっ、はよう起きろ馬鹿！！」

咲夜はハッと我に返り顔を赤らめたまま駿に駆け寄り叩き起こそうとする。

一体タイタニック号はどうなってしまうのか。
そして一行も出てきていないハヤテの運命は！？
そしてラッキーな駿は爆発しろ。二回爆発しろ。

ってな訳で次回に続く！

其の四十八　一回で良いからタイタニックのあの超名シーンをやってみたい。あ

美希
「いや～、流石駿君だな。
またも女の子の胸を触るとは」

理沙
「最早意図的にやっているとしか思えん行為だな。
けしからん行いだ」

駿
「止めてくんない！？
意図的でも故意でも無いからね！？事故だからね事故！！」

美希
「事故を口実にやりたい放題」

理沙
「あの娘にこの娘。
その日の気分で選んじゃう感じか」

駿
「俺はバブル世代の申し子か！？」

美希

「という事で読者の皆様の怒りを代表して」

理沙
「我々が代わりに裁いてしんぜよう」

泉
「いや、止めた方が……？」

ポンポン！

美希
「被告人、鷺ノ宮駿は事故だ偶然だのを口実にあんな事やこんな事とやりたい放題！」

駿
「してません！！」

理沙
「という事で判決を出します」

駿
「何で裁判みたいになってんの！？つーか弁護士いないよね俺の方に！！何この違法裁判！？」

美希
「駿君の弁護士ミッシェルは帰郷中だよ」

駿

「誰だよミッシェルって！？」

ポンポン！

判決：有罪！！

駿
「早過ぎるだろ！？
審議も何もしてないじゃん！？」

美希
「という事で刑罰、伊澄君や楓君、綾姫君に今までの駿君の破廉恥な行為を伝える、でいこう」

理沙
「というかもう伝えてあるけどな、既に」

駿
「最初から確定裁判じゃねーかァァァァ！！
って、ちょっと！？
ええ！？ちょっと待って！？」

駿は伊澄達三人にどこかに連れていかれてしまった。

美希
「悪は滅びたな……」

理沙
「という事で、次回もよろしく！」

泉
「……大丈夫かな、この後書き？」

其の四十九　船旅には危険がいっぱい（前書き）

今回は短めです。

次回から二、三話オリジナル話をやろうと思います。
一応人情ものの予定です。
三人娘も久々の出番で、駿と一緒に活躍予定（笑）

この話で珍しく駿が結構本気で怒る場面もあるかと……

それでは、始まります！

其の四十九　船旅には危険がいっぱい

ドォォォォォォン！！

爆発音と共にタイタニック号の上は大きく揺れた。
テラスにいたナギやクラウス達執事も慌てたように周りを見回す。

「これは一体……！？」

「フフフ……
残念ながら我々はまだ諦めた訳では無い！！」

ナギ達の驚いた様子を他所に確保されたテロリスト達が高らかに笑う。

「船には時限爆弾がしかけてあったのさ！！
これで船もろともあの執事を消してやるぜーーっ！！」

「クラウス！！
取り敢えずその馬鹿共を眠らせておけ！！」

「承知」

ナギの指示で捕まった状態でさも勝ち誇ったように笑うテロリスト

達をクラウスは一撃で気絶させてひれ伏させる。

「それより！！
ハヤテや伊澄、咲は無事なのか！？」

「いやお嬢様。
駿殿もいらっしゃるかと」

「アイツは多分大丈夫だからどうでも良い。
とにかくハヤテ達を捜すのだ！」

哀れ駿。
こんな状況でも心配すらされていないとは。
ナギの言葉に数名の執事、ＳＰ達が動き始める。

「綾崎やお嬢様方の事は我々にお任せして、お嬢様は救命船の方へ」

「う、うむ」

出来れば自分から捜しに行きたいナギだが、この状況下でそんな行動をすれば返って彼等の足手まといになるだけだ。
今は彼等がすぐに見つけてくれると信じて、仕方なくクラウスと一緒に避難する事にした。

そしてナギが心配している執事、綾崎ハヤテはというと……

「痛たた……
何だ？急に爆発なんて……」

貨物庫と思わしき場所で迷っていたハヤテは大きな爆発と揺れの被害を受けて木箱等の下敷きになってしまっていた。

「まさかやっぱ氷山に当たった？この船デザインがデザインだから何かあったらすぐに沈みそうで……」

ハヤテが何とか抜け出して立ち上がると地面に赤い液体がボタボタと垂れた。

「え？」

それはハヤテの頭から出ている大量の血液だった。
額から手を離すと手にもべっとりと血が付いている。

「うあ！！
何だこりゃ！？
血！？何かいっぱい血が出てるよ！！」

しかも爆発でハヤテのいる貨物庫にはとんでもない勢いで海水が流れ込んでくる。

凍てつくような一月末の海にこの状態で入ったら……

間違いなく……死！？

「と！！とにかく！！
止血の前に上に上がらないと。
お嬢様も心配だし！！」

幸い彼のすぐ後ろは階段で海水がまだそこまで届いていないのですぐに避難すれば……

「……」

不意にハヤテの前方に海水に浮かんでいる木箱が。
しかもその上には伊澄が困ったように乗っていて。

「でーー！！
い、伊澄さん！？
何でこんな所に！？」

「それは……」

「聞くまでもなく迷子ですよね！？てか大丈夫ですか！？」

迷子スキル全開の少女。
先程までナギの隣にいたのだが。

「待っていて下さい！！
今すぐ助けにーー！！」

ハヤテは一歩踏み出した所で気付く。今の自分のとんでもない状況を。

前方の伊澄が乗る木箱までには一月末の凍てつく海水。
今の自分は何だか知らないけど大量出血状態。

因みにこの辺りの冬の水温は3度だそうで……
出血で体温が下がっている時に冷たい水に入ると死ぬらしい。

其の四十九　船旅は危険がいっぱい

「クラウスさん！」

「あ、駿殿！咲夜お嬢様！
ご無事でしたか」

慌ただしくクラウス達が救命ボートの用意や避難の先導していると
駿と咲夜が走ってやって来た。

「そっちは大丈夫ですか？」

「いや、それが……」

駿がクラウスに尋ねると彼はやや慌てたように口ごもる。

「それより何だか頬が赤く腫れておられますが……もしや爆発でお怪我を？」

「これは隣の暴力女にやられたんですよ」

「誰が暴力女や！！
自分が変態行動をとるのが悪いんやないか！！」

「事故だって言ってんだろ！！」

クラウスの言う通り駿の頬はひっぱたかれたように赤くなっていた。
駿が隣を指差して言うと咲夜は思わず赤くなって叫ぶ。

「それより伊澄達は……」

「あ、それが……」

クラウスは駿達に現状を早口で話を始める。

「な！？
伊澄とナギも迷子！？」

「ええ。
少し目を離したら伊澄お嬢様が消えてしまい、綾崎を捜してお嬢様も……」

話を聞いた咲夜達は余裕の無い事態に驚く。

「四の五の言ってる場合じゃねーな。ちょっと行ってくる」

「あ、ウチも……」

「オメーは危険だからクラウスさん達とここに居ろ。心配無いって、ちゃんと四人とも戻ってくっから」

駿はそう言って彼女の頭にポンポンと手を乗せると素早く艦内に走っていってしまった。

「あの……
大丈夫ですかハヤテ様」

「大丈夫ですよ?
僕はディカプリオより鍛えてますから」

血だらけのハヤテは海水に入って伊澄の乗った木箱を押していた。
伊澄はオロオロとしているがハヤテは大丈夫と笑顔で返す。

「しかもこの水、最初痛いくらい冷たかったのに……
段々暖かくなってきたっていうか……」

「それは多分、体がまずい状態になってきたというか……」

前言撤回。
多分もうヤバい状態である。

「まぁ結構頑丈な体ですし、何とかなりますよ」

「ですが血もいっぱい出ていますし……その血につられて何やら大きなお魚が……」

「……」

ハヤテの後ろからスッと近づいてくる三つの鰭。
と思うと水しぶきを上げて水面から大きな鮫が飛び出してきた。

「ぬはァァァァ！！」

ハヤテは持ち前の何か色々凄い身体能力で水から飛び上がる。
そして両手で鮫の口の上を両足で下をとめて鮫が口を開けたまま閉められないの状態を維持させた。
ギャグ漫画みたいなことをするやつである。
伊澄はオロオロして枝を振っているばかり。

「ハヤテ！！」

ちょうどその時、階段の所にナギが降りてきた。
ハヤテの声を聞き付けてやって来たのだ。
そしてこの状況を見て唖然。

「だ…大丈夫、じゃないのは何となく分かるが……
どんな感じだハヤテ！！」

「そ…そうですね……
多分…ピンチかなぁと……」

間違いなくピンチである。
ハヤテは鮫の口が閉じられないように必死に全身に力を入れる。

（いかん……
何かもう凄い絶望的な状況だ。
というか何でこんな所にホホジロザメが来るんだよ……
どうなってんだよこの船は、というツッコミは置いといて。
確か鮫はもう二匹いたよな。
そんなのが襲ってきたらもうそれこそおしまい……）

ドボン！！

ハヤテは何かが飛び込むような音に気付く。
慌てて前方を見ると……

「ま…！！
待っていろハヤテ！！
わ…！！私が今すぐ助けて…やるから…！！」

「「！？」」

なんとナギが真冬の海水に入ってこちらに向かおうとしているではないか。
冷たさに震えながらもその表情に迷いはない。
だがハヤテと伊澄の顔はゾッとしたように青ざめる。

「ダメですお嬢様！！
鮫はまだ二匹いるんです！！」

「え？」

ハヤテが必死で声をかけると同時に、一匹の鮫がナギに向かって直進していった。
そして大きな口を開けて目前まで迫る。

「お嬢様！！」

「！！」

伊澄は仕方ないと袖からお札を数枚引き抜くと鮫に向かって構えるが……

「お嬢様に……」

「！？」

その前にハヤテが動いた。
ハヤテは全身全霊の力を両手に込めて鮫の上の口を掴み……

「手を出すなーーーっ！！！」

その鮫を背負い投げるようにしてナギに迫った鮫に渾身の力で叩きつけた。
二匹の鮫はそのダメージと驚きのあまり気絶してしまう。

「ご無事ですかお嬢様！！」

「ハヤテ！！」

ハヤテはその勢いでナギの隣に着水した。

まだ何とか意識はあるようだ。
だが……

「伊澄！！後ろ！！」

「え？」

そう。まだ鮫は一匹残っている。
ナギが悲鳴に近い叫び声を上げると同時に、伊澄の乗った木箱の後方から先程より更に巨大な鮫が飛び出してきたのだ。

「伊澄さん！！」
「伊澄！！」

巨大な鮫はそのまま大きな口を開けて物凄い速度で伊澄の迫って来る。
彼女は咄嗟に目を閉じてしまう。

（お兄様……！！）

ピシッ……

その時、貨物庫の天井に幾重もの亀裂が入った。

「俺の伊澄に……！！」

次の瞬間……

「手ぇ出すんじゃねぇぇぇぇえええ！！！」

天井が轟音をたてて崩れてそこから飛び込んできた何かが鮫に直撃したのだった。
伊澄は勿論、ハヤテとナギも驚きのあまり声を失う。

「ったく……
魚類風情が伊澄に触れようなんざ百年早ぇんだよ」

鮫は気絶。
その鮫の上に乗っているのは黒いパーカー姿の駿であった。
両手には船内にある厚さ２０ｃｍほどもある鉄パイプが。

「お、お兄様……」

「伊澄！！
良かった……無事だな」

駿はそう言いうとサッと伊澄の木箱に移った。
彼女が無事だという事に心底安堵したように息をつく。

彼は貨物庫の上の階から角材で地面を突き破り真下の鮫に鉄パイプを直撃させたのだ。
鮫の位置、角材で地面を突き破る力、そもそも彼女の危機を察知する力。
どれを考えても普通では成せないような事だ。
しかし伊澄の事となると事を成してしまうのが鷺ノ宮駿の力なのである。

「ナギも無事だな……
ん、ハヤテはどうした？」

「それが……！！
ハヤテが……！！」

木箱に掴まっているナギも無事なようでホッとするのも束の間。
ナギは必死で水面に目を向けている。

「私を助けてくれた後、意識を失って沈んでしまって……！！」

「っ！！」

ナギは泳ぐ事は愚か潜る事すら危うい。しかも今は真冬の海水。
この助けたくても助けられないのだ。

駿は舌打ちをすると急いでパーカーを脱いで階段の所に放った。
流石に真冬の水なので下のシャカパンは着たままで、足元のジッパーを開けてなるべく動き易い状態をつくる。

「暫くしたらクラウスさん達が来るからそこで海水から上がってじっとしてろよ」

「な、おい……」
「お兄様！？」

彼は鉄パイプ持って重りとするとそのまま海水に飛び込んだのだった。

「「……」」

その様子を唖然と眺めているナギと伊澄。

「「「お嬢様！！」」」

そして暫くすると海水に浸った貨物庫に大急ぎの執事やＳＰ達がやって来た。

一方、ハヤテはゆっくりと水中に沈んでいた……

（あ……まずいな…
今ので全部力を使い果たして…
指一本動かせないや……

このまま僕……
死ぬのかな……？）

光が差す水面下からどんどんと離れていくハヤテ。
ゆっくりと手を伸ばすもそれは届かない……

（すみませんお嬢様……
僕、あんまり役に立てなくて……
本当に……すみま）

ザブン！！

（!?）

遠退く意識の中で彼が最後に見たものは……

（しゅ…ん…く…ん?）

自分に向かって必死に右手を伸ばしている駿の姿だった。
しかし間もなく、ハヤテの視界は真っ暗になり意識を手放したのだった。

＊

「……見知らぬ天井」

「沈んでまだボケてんのか?」

ハヤテが目を開けると、そこは見慣れない場所だった。
分かるのは自分がベッドに横になっている事と、彼の隣に人が幾らか居る事だった。

ハヤテは慌ててベッドから身体を起こした。
するとナギが安心したようにハヤテに声をかける。

「ようやく意識がしっかりしてきたみてぇだな……」

「あ、駿君」

ハヤテが横を向くと濡れた黒髪をタオルで拭いている駿が彼を見ていた。

「ここは？」

「救助船の中だよ。
取り敢えず皆無事だ。マリアさんや咲夜は今は甲板にいると思う」

駿はタオルを首に掛けるとベッドの隣の丸椅子に腰掛ける。

「駿君が助けてくれたんですよね」

「あん？」

「意識を失う直撃に駿君が手を伸ばしてくれてるのが見えましたから」

ハヤテはそう言って何故か少し頬を赤らめる。
ナギはその様子に思わず表情をひきつらせた。

「ここまでオメーを運んだのはクラウスさんだけどな。
俺は水から引っ張り上げただけだから、んな大した事はしてねぇって」

「そんな事無いです。
助けて下さってありがとうございます、駿君」

お礼を言うハヤテはやはり少し頬を紅潮させている。

多分これは感謝をする時の彼の無意識の癖なのだろう。
だが勘違いからかナギはますます目が点に。

「へぇへぇ。ま、クラウスさん達にもちゃんとお礼言っとけよ」

「はい」

駿は面倒そうにひらひらと右手を振ってそう返す。
ハヤテはクスッと微笑んで頷いてみせた。

何故か男はつれない態度に心ときめくという……

「ダ!!ダメだからな!!
それは絶対ダメだからな!!」

「え!?え!?
何の事ですかお嬢様!?」

こうしてお嬢様の心配事がまた一つ増えたという……

其の四十九　船旅には危険がいっぱい（後書き）

クルージングはこれにて終了。前書きでも書きましたが次回は二話ほどの予定でオリジナル話をやろうと思います

駿
「オリジナルなんで構成が甘かったりするかもしれないけど、多分作者は頑張るのでよろしく」

美希
「久々に私達も活躍ね！」

理沙
「うむ、我々と駿君のコンビネーションをみせてやろう」

泉
「楽しみだね～♪」

駿
「俺は激しく不安だけどな…」

駿は本編では珍しく結構怒りを表す場面もあるので

美希
「そう言えば駿君は滅多に怒らないな」

理沙

「あんまりイメージはないけどな」

滅多にどころか、恐らく生まれてから一度くらいしか無いですよ彼は。

本気でキレたら……

まぁ……明日はありませんね。

そんな場面はまだまだ当分無いですが。

駿

「伊澄に変な虫が付いた時とか、告白しようとする輩がいた時とかな」

美希

「それはギャグだろ？」

駿

「真剣だよ」

泉

「にはは～？」

まぁそんな訳で……

三人娘

「では、次回もよろしく～♪」

其の五十　巡り合わせは一本の蕎麦のように（前書き）

今、ちょっと考えているのですが今やっているオリジナル話を終わらせた後について考えてます。

マラソン大会編に入るに当たり、少しの間休載としようと思っているのです。
と言っても二週間くらいです。
理由はその間に銀ごとを更新していく為になのですが。

そこで、諸事情のオリジナル話を終わらせたらこの作品を完結させようかなと。
完結させて少し休載を挟んだら新しい小説で二期としてマラソン大会編から始めようかなと思っています。

簡単に言うと、マラソン大会編から新しく二期的な感じで分けて書くということです。

何故分けようかと思ったかと思ったかというと１０００分を越えて色々と編集や修正が大変になってきたのと新しく始めると色んな意味で心機一転になるかな～と。
アニメも二期はマラソン大会から始まってましたし（笑）

諸事情（二期）のタイトルは変えるつもりはありません。
多分そのままで

という事で皆様にどうかご意見を伺いたいのです。
マラソン大会編から分けて書いても大丈夫でしょうか。
もしこのまま続けた方が良いと思ったなら遠慮なくそうおっしゃって下さい。
その意見が多ければこのままでずっと続いていきたいと思います。

感想でもメッセージでも良いので是非、ご意見お待ちしております。
感想、批評、疑問質問もお待ちしております。
是非お願い致します！

其の五十　巡り合わせは一本の蕎麦のように

いつかの時代……
どこかの世界……

美しい山々に囲まれたとある村。人々が笑い合ったり世間話をし合ったり、屋台車の出店が並び商人達が声を掛け合ったり子供達が球遊びをしてはしゃいだり。

とても穏やかで平和な雰囲気のある村の一角に、少し古めかしい木造の建物があった。
広いその建物の前には門があり、小さな子供達が列になって入っていっている。

門をくぐり大きな木造の建物の中に入ると、様々な和室に分かれている。

その中でも広い一面畳の部屋に大体５０歳くらいだろうか白髪頭の厳しそうな顔立ちの男性が腕を組んで立っている。
彼の後ろには五歳くらいの男の子が隠れるようにいて、男性の前には四人の和風姿の子供達が座っていた。

「あの、先生？
こんなに朝早くからどうしたんですか？」

「ああ」

四人のうち、黄色い髪の五歳くらいの女の子が男性に尋ねた。
男性は頷くとゆっくりと横に移動すると黒髪の男の子が現れた。

「先生、その子は……」

今度は先程の女の子より少し年上だろう黄色い髪の男の子が男性を見た後に黒髪の男の子に目を向ける。

「拾ってきたんだよ、オメー兄妹同様にな。
このガキは近くの平地に居やがった。恐らく戦場の跡だな」

「「……」」

“先生”と呼ばれた男性が黒髪の男の子に目を向けて言うと、黄色い兄妹は少し複雑そうな表情をした。

「戦場って……
今やってる大きな戦争の事でしょ」

すると今度は茶髪の男の子が手を上げて口を開いた。

「全く、間抜けな解答ですわね。
剣頼朝（つるぎよりとも）様が率いる剣氏（けんじ）と陛清盛（きざはしきよもり）様が率いる陛氏（へいし）との中央覇権を争う戦い。
頼朝様は父親のご遺志を継いで挙兵され陛氏と戦っておられる時代ですわ」

その茶髪の男の子の言葉に青みがかった黒髪の女の子が扇子を広げて答えた。

「誰が間抜けだよ！！
お前みたいな高飛車女よりは百倍マシだね」

「なんですってぇーーっ！！」

「良いから少し黙ってろ。
朝っぱらから元気だなテメーらは……」

茶髪の男の子と黒髪の女の子が言い争いが始まりそうになると男性が頭を掻きながらたしなめた。

「まぁとにかく、このガキも身寄りが無いらさいから今日からこの学舎に置く事になった。
つーか俺が勝手に決めた。
良いか、今日からよろしく頼まぁ」

男性がそう言って後ろの黒髪の男の子の背中を押すと、男の子は俯きながら無言で頭を下げた。
その表情は“無”であり感情は読み取れない。

四人の子供達はゆっくりと立ち上がって男の子の前に。

「私は――――。
この学舎でお世話になってるの。これからよろしくね」

と、黄色い髪の女の子。

「俺は――――だ。
俺もここに住んでいる。
よろしくな」

続いて黄色い髪の男の子。

「私（わたくし）は――――ですわ。
近くに私のお屋敷がありましてこの学舎に通っていますの。
よろしくお願いしますわ」

青みがかった黒髪の女の子。

「僕は――――だ。
まぁこの辺だと僕に敵う奴はいないからね。困った事があったら何
でも僕に言ってよ」

「よく言いますわ、ヘタレの癖に」

「ヘタレ言うな高飛車！！」

「一度ならず二度までも！！
もう許しませんわ！！」

そして茶髪の男の子。
黒髪の少女のツッコミに噛み付いてまた二人は口喧嘩を始めてしまう。

こうしてまぁ何とか四人が挨拶をし終えた。しかし黒髪の男の子は依然として俯いたまま。

見かねた男性は男の子と同じ高さまで屈んで肩に手を置いた。

「いいか？

今日からここがオメーの家だ。
コイツらがオメーの家族だ。
オメーには居場所が出来たんだ。
帰って来れる場所が出来たんだ」

「……」

「すぐには理解出来ねぇかも知れねぇ。だが、まずは自己紹介からだろうよ。
ほら」

男性はそう言って立ち上がると黒髪の男の子の背中をそっと押す。
すると彼は恐る恐る口を開いた。

「俺の名前は……」

其の五十　巡り合わせは一本の蕎麦のように

土曜日。
午前中に東にあった日も高く登りお昼前。

「ふわぁ……」

午前中の学校を終えた駿は欠伸を一つ、白皇近くの杉並の端にある住宅街を歩いていた。白皇の近辺とあって杉並の大部分が敷地となってはいるがここはお金持ちの住宅街という訳では無く、一般的な住宅街である。

暫く歩いて少し開けた場所に到着する。
その一角に木造の建物の前に彼はやって来た。
建物の看板には『蕎麦　家』と書いてある事からここは蕎麦屋であるようだ。
古めかしいがどこか立派な造りは老舗の雰囲気も醸し出している。
引き戸の扉には『準備中』と書かれた札が掛かっていた。

しかし駿はそれを気にせずにその引き戸を開ける。

ガラガラ……

「こんちは～」

そしてさも当たり前のように店の中に足を踏み入れていった。
室内は小綺麗な和風造りでカウンター席と段差の上に畳がありそこに幾つかのちゃぶ台とセットの座布団の席という親しみのある居酒屋のようだった。

「オヤジさーん、要るか～？」

「んだぁ？
今は準備中と……」

駿はカウンターに座って奥に声をかけると暖簾をくぐり頭を掻きながら黒髪かの先に白髪が入っているの男性が出てきた。
男性は顔を上げると駿に気付いて意外そうな表情をした。

「おぉ、鷺ノ宮んトコの坊主じゃねーか。暫くぶりだな。
二ヶ月くれぇか？」

「あぁ、多分そのくらいかな。
相変わらず無駄に元気そうだなオヤジさん」

“オヤジさん”と呼ばれた男性はニカリと笑うとカウンターに立って座っている駿に向かい合った。

「ったり前、こちとらそれが売りだからよ。テメーも暫く顔見せ無かったからくたばっちまってたのかと思ったぜ」

「編入先で色々忙しくなってさ。
前の学校みたいに自由は出来ないんだよ」

「そうかい。
そりゃご苦労さん」

快活そうに笑う男性の前で頬杖を着く駿。

「んで、今日は飯を食いに来たんだけど……」

「オメーなぁ、その前に溜まったツケ払ってけよ。
最後に払ったのが……」

「分かってるよ。
後でまとめて払うから。
それより今日は俺だけじゃ無くて連れもいるんだ」

「ほほう」

駿がそう言うとガラガラとお店の扉がゆっくりと開いた。
そして少し遠慮がちにそろそろと顔を出したのは花菱美希、瀬川泉、朝風理沙の三人であった。

「お、ようやく来たか」

「おー、いらっしゃい」

「「「あ、お邪魔します」」」

男性がカウンターから声をかけると三人はペコリと頭を下げて座っている駿の隣の席に着いた。

「彼女達は生徒会の仲間で左から美希、泉、理沙だ。
こちらはこの店の店主の有賀浩二さん」

「よろしくな嬢ちゃん達。
いつもコイツが世話になってるみたいだな」

駿の紹介で三人が挨拶をすると、店主である有賀も挨拶を返した。

「この人、オヤジさんとは長い付き合いで。
もう六年くらいになるかな」

「最初に店に来たのはオメーさんが小学校の時からだからなぁ。
始めの頃は可愛い気もあったが今やツケだなんだと言いやがるようになっちまって。
嬢ちゃん達もコイツと一緒だと色々と苦労してるだろ」

有賀がカッカと笑ってそう言うと、美希達もうんうんと頷く。

「確かに、駿君には中々苦労させられているな」

「うんうん、いつも仕事サボるしね～」

「まったく手を焼かされている」

「それはオメーらだろっ！！」

そんな四人のやり取りを愉快そうに見ている有賀。

「んじゃ、注文を受けようか。
嬢ちゃん達は何を食べる？」

「あ、それなんだけど……」

有賀が腕を組みながらエプロンを着ると美希が疑問に思ったのか口を開く。

「今は準備中って札があったけど、良いのかな」

「ああ、それなら問題ねぇよ。
この店は元々夜専門という事になってるからそういう札があるだけで実は昼も決まった曜日は営業してんだよ。
知ってる客は一部らしいけどな」

駿は頬杖のまま欠伸混じりにそう言ってみせる。

「隠れ家の店みたいな感じかな？」

「くくっ、かもな」

泉が頬に手を当ててそう言うと有賀はおかしそうに笑った。

「昼間はガラガラだけど、夜は居酒屋みたいに賑やかになるからな、この店は。
馬鹿みたいに明るくな」

「ハッハッハ、昼にガラガラなのは皆は知らねぇからな。
ま、静かっちゃ静かだけどな」

有賀は頭に三角巾を巻いてカウンター越しに四人に『それで注文は？』と再び尋ねた。

「それじゃ私、天ぷら蕎麦で♪」

「お、なら私も天ぷら蕎麦！」

「私もだな」

「天ぷら……高価な蕎麦を。
このブルジョワ共め」

天ぷら蕎麦を頼む三人娘とは対称的に駿は財布の中身とにらめっこ状態。

「悪ぃなオヤジさん、ざる蕎麦一つ。ツケで」

「テメーよぉ……
ツケってのは信頼があるからするもんなんだよ」

「大丈夫だって、絶対次回まとめて払うから。
いやホント」

「ったく……」

手を顔の前に出して申し訳ないというポーズをしてみせる駿に有賀は溜め息をつきながらも口元を緩めてとカウンターから見える調理場に入っていく。

予め仕込みはしてあるので待つこと15分程で四人の前には注文の品が並んだ。

「美味し～♪」

「うん！
これは美味いぞ！！」

「だろ？」

三人娘は満面の笑みで天ぷら蕎麦を食べる。
紹介した駿も良かったという表情だ。

「そらぁ良かった。
白皇っつたらお金持ちの学校だからな。こんなちんけな店の味で良かったらいつでも来てくんな」

「「「はーい♪」」」

有賀が腕を組んだまま満足そうにそう言うと美希、理沙、泉は元気よく返事をして蕎麦を食べる。

「ま、ここは絵にかいたような俺達庶民の為の店だからな」

「オメーが言うなアホ」

駿が肘をついて天井を見ながら言うと店主の拳が軽く飛んできた。

「っていうか駿君は鷺ノ宮家なんだからお金持ちでしょ？」

「家はな。
俺個人の金銭感覚は至って普通だよ。
ばあちゃんに日本より遥かに貧困な国々に散々飛ばされまくったりしたから余計にな。
今は財布も氷河期だし……」

「そりゃそうだ。
オメーさんに大量の金持たせたらしめぇだからな」

美希の問いに駿はひらひらと手の甲を振ってみせた。
有賀はそんな様子に心底おかしそうに笑う。

「そう言えば、駿君はさっき長い付き合いって言ってたけど……」

「ああ。
最初に会った時、コイツは店の前にぶっ倒れてたんだよ」

「「「？」」」

思い出すように天井に目を向けると語り始める有賀。

「六年くらい前だったか……
相当寒い雪の日でな。
ボロボロになってたコイツを拾って一杯の温かいかけ蕎麦を食わしてやったんだ。以来よくここにくるようになってなぁ。
一杯の蕎麦の縁ってやつかねぇ」

「何だかえらく人情みの入った話だな」
「感動的なお話そうだね～」

しみじみと語る蕎麦屋の店主に美希達も興味深そうに耳を傾ける。

「しかし、何故駿君はそんな日にボロボロで外に？
６年前っていったら１０歳くらいだろう？」

「ああ、あん時か……
確か寝てる間に南アフリカの名も無き砂漠の国に連行されてな。
死ぬ思いで日本に帰ってきたんだけど、帰りに身心共にヘトヘトで

帰ってきた俺は空港で迎えを待っていたんだ……
そうしたらばあちゃんが」

『寒いから迎え無理。
徒歩で帰って来い　ｂｙ銀華』

「つー訳で成田からここまで徒歩で来たんだよ。
金も無いからタクシーは愚か飯すら食えないしな。
んで、この店の前で力尽きた時にオヤジさんに助けられたって話だ。
泣けるだろ？」

（（（ある意味号泣ものだけれども……）））

ツッコミ所があり過ぎる話に流石の三人娘も呆れを通り越して最早驚きの表情。
だが取り敢えず美希が一言。

「駿君って……馬鹿なのか」

「誰が馬鹿だコノヤロー！！」

美希がからかい泉が笑って。
理沙が上乗せして駿が怒って。
そんなこんなでお昼の時間も過ぎてゆき学校に戻る為に席を立った時だった。

「……ん？」

ふと美希が店内のカウンター前にあった写真に気付いた。
その写真には恐らく有賀と思わしき男性と高校生くらいと思われる男の子が写っていた。

「これ……一体何の写真ですか？」

「ん？
ああ……ソイツかい」

有賀も気付いたのか写真に目を向けると少し寂し気な表情を作ったが、すぐにそれを消して続ける。

「コイツは……俺の息子だ。
昔の写真だけどな」

「息子さん……ですか」

美希や泉達がまじまじと写真を見つめる。
店主もまだ若く昔のもののようである。

「まだ帰ってきて無いんだな、息子さん……」

「「「え？」」」

すると駿がやや複雑そうな表情で写真の隣にあったカレンダーを見て呟いた。
三人は彼の言葉に思わず聞き返してしまう。

「ああ。

ウチの息子はもう随分昔に家出しちまってな……
もう１０年になるか」

「「「……」」」

「ま、ただの馬鹿息子って事だ。
ホントに仕方ねぇ奴よ……」

有賀は腕を組んだまま苦笑してみせる。
それはどこか無理をした笑いだという事は三人にもよく分かった。

ガラガラ……

「また来てくんな嬢ちゃん達。
鷺ノ宮、オメーは次はツケまとめて払えよ」

「へぇへぇ」

「「「ごちそうさまでした～～♪」」」
四人は引き戸を開けて蕎麦屋を後にした。
店主の声に駿はひらひらと手を振ってみせる。

「美味かったろ？
昼の営業は一部しか知らないから特にオススメだけどな」

「うん♪
とっても美味しかったよ！」

「これから午後の授業もぐっすり眠れそうだな」

駿の言葉に泉と理沙が大きく頷いてみせる。

ただ授業は起きた方が良い。

「うむ、駿君にしては良い仕事だったな」

「一言余計なんだよオメーは」

「ふにっ！？」

美希がそう言うと駿は彼女の両頬を掴んで軽く引っ張った。

そして伸ばしたり縮めたり……

「つーかオメーの頬柔らかいな、ほれほれ」

「ふぁらへ～（離せ～）」

駿は頬を掴んで暫く引っ張ったりして遊び彼女はパタパタと抵抗している。

「にはは～

美希ちゃん可愛い～♪」

「しかし、とか何とか言ってる間にもう授業間近だぞ。

確かに次は世界史だったような……」

お昼休みも終了が近い。

そんなこんなで店から離れて白皇に戻ろうと歩き始める。

「……」

と、蕎麦屋のから少し離れて回り込んだ裏側に一人の男性が立っていた。
その男性はどこか虚しげな表情でこの店を見つめている。

「あれ……」

「「「？」」」

駿はその人物に気付くと立ち止まり彼を見つめた。
三人娘は何事かと不思議そうに顔を向ける。

すると駿はその男性の方に足を向けて近づいていった。

「ちょっと駿君？」
「どうかしたの？」

三人も慌ててその後を追う。
駿は男性の側まで来るとコンコンと肩を軽く叩いた。

「……はい？」

年齢は大体２０代後半くらいか。人の良さそうな男性が気付いて彼の方に顔を向けた。

「あんた……有賀さん？」

「はい、そうですが……」

駿が尋ねると男性は少し驚いたように答えた。

「そこの蕎麦屋の店主の息子さん？」

「「「え？」」」

駿の質問に今度は美希達が驚いたような表情をする。

「そうですが……
えっと、貴方達は一体？」

そして男性は若干警戒したようにだが頷いてみせたのだ。

何かが繋がっている。

この行動の先に果たして何が待っているのか。
そんな言い知れぬ不安から感じた微かな胸騒ぎを駿は急いで振り払ったのだった。

其の五十　巡り合わせは一本の蕎麦のように（後書き）

サブタイトル前の冒頭部分にあった話はお分かりの通り日本史を元にした世界観ですが、正史とは苗字も違いますし勢力関係、戦の名前や場所、年齢や主従関係なんかも違います。

まぁオリジナルの世界だと思って頂ければ。
今はまだ本編には直接は関係ありませんので。
時期がくれば詳しく説明するかと思います。

美希
「なんだか本当に久々の出番な気がするわね」

泉
「でもいいじゃないか♪
この話では出番があるみたいだし」

理沙
「二話の予定が三話か四話くらいになるらしいな」

美希
「ま、諸事ラジは次回なので今回は特にやる事も無いから……
思いつきで駿君の一日のスケジュールでも載せてみよう」

駿
「待てい。
何人のスケジュールを勝手に、つーか何でお前が知ってるんだよ！
？」

美希
「調べるのは得意」

泉
「作者が原作の２８巻を読んでハヤ太君のスケジュールを見た時に
駿君ならどうなるかとか思ったらしいよ♪」

理沙
「では、駿君の基本的なスケジュールをみてみるか」

美希
「暇なのでスタート！」

ＡＭ７：００　起床→伊澄にべったり→たまに術式でドカン
ＡＭ７：３０　生徒会へ
ＡＭ９：００　授業開始→伊澄の安全確認→伊澄に怒られる
ＰＭ１２：００　お昼＋生徒会→会長に怒られたり
ＰＭ１６：００　生徒会→たまに動画研究部へ行ったり
ＰＭ１９：００　帰宅→伊澄に一直線の愛を→術でドカン
ＰＭ２０：００　晩御飯とか風呂とか伊澄にべったりしたいけど怒
られたりとか
ＰＭ２２：００　ゲームとかバリバリやりまくる
ＡＭ０：３０　仕事（依頼によって時間はそれぞれ）

ＡＭ３：００　風にあたりながらぶらぶらする→河川敷とかに
ＡＭ４：３０　帰宅→寝る
ＡＭ７：００　起床

美希
「ろくな一日じゃ無いわね」

駿
「だったら載せるなよ！？」

理沙
「ま、特に落ちもないが今回はこの辺で」

泉
「まったね～♪」

次回もよろしくお願いします！

其の五十一　親の心子知らず（前書き）

前回の新しい小説にして第2弾として始める件はもう少し先送りにする事にしました。

やっぱりマラソン大会編からじゃ何か半端かなぁと。

なので第2弾はコミックの14巻からにしようと思います。
つまり学年が一つ上がって進級したらです。
咲夜の誕生日篇で一旦完結させて、駿達が進級する所から新しく始めたいと思います。

ですからもう少しこの小説がぐだぐだ続くと思いますが、何卒よろしくお願いします！

オリジナル話も二回目。
多分あと二話くらい続くと思います。

其の五十一　親の心子知らず

住宅街の中にある小さな公園のベンチに鷺ノ宮駿と２０代くらいの男性が座って向かい合っていた。
駿の隣には瀬川泉、朝風理沙が座っていて、花菱美希は彼の隣で立っている。

「そうでしたか。
貴方は親父の知り合いで…」

「まぁ……
助けて貰った恩があるというか」

男性は有賀の息子で“有賀喜之（ありがよしゆき）”と名乗った。
間違いなく彼が家出をした息子である。
彼は『いつも親父がお世話になってます』と四人に頭を下げた。

「ずっと家出してるってオヤジさんに聞いてましたけど……」

「もしかして会いに来たとか？」

駿に続いて泉が尋ねると喜之はふるふると首を振ってみせた。

「僕は……

確かに親父に会いに来ました。
話があって……ですが、もう出ていってから10年も経ってしまっているから」

どうして良いのか分からないといった所か。
彼は苦笑いをして頭を掻いた。

「家出したのだって……
母が死んで脱サラから蕎麦屋を始めた親父に対する反抗みたいなもので、自分が勝手にやった事ですからね。
親父は止めもしなかったな。
『出ていきたいなら出ていけ』ってそれだけ」

「……」

寂しそうに笑う喜之。
一旦空を仰ぎ見て続ける。

「葉書で生きていると伝えても向こうからは何の連絡も無いから。
もうどうでも良いと思われてるんじゃないかな。
会ってもくれないかもしれないから、ちょっと迷ってたんですよ」

「だったら……
今から」

美希が口を開いて言おうとするが、喜之はまた首を横に降った。

「今日は諦めます。
もうこんな時間だ、会社に戻らないと。
話は、また今度にしますよ」

彼は腕時計を見て少し慌ただしく立ち上がった。
そして『これからも親父の店をよろしく頼みます』と言うと公園を去って行こうとする。

「ちょっと待って下さい」

「え？」

そんな彼を駿が呼び止めた。
喜之はこちらに振り返る。

「今日の夜、もう一度会って頂けませんか？
そうだな……夜9時くらいに」

「別に……構いませんが」

「では、
夜9時、オヤジさんの蕎麦屋前で待ち合わせで」

喜之は不思議そうな表情だったが丁寧に頭を下げると今度こそ公園から去っていった。
そんな後ろ姿を暫し見つめると駿は三人に振り返る。

「美希、理沙、泉。
今すぐ調べて欲しい事があんだけど。頼めるか？」

「今すぐ……という事は授業をサボってと言う事かな？」

「ま、そうなるわな」

理沙がニヤリと笑ってそう言うと駿も小さく口元を緩めて頷いた。

「ならば任せておきまたえ！」

「仕方ない。
乗り掛かった船だし、手伝うわ」

「なのだ～♪」

サボりOKと聞いて三人は快く了承してくれた。

「それじゃあまず……」

それを見た駿は三人にこれからする事の説明を始めるのだった。

一方、公園から離れた場所にあるどこかの裏路地には先程別れたばかりの喜之の姿があった。
彼は携帯を耳に当ててひたすら困惑したような表情をしている。

『なら、明日あんたの親父さんに話すんだな』

「ええ……まぁ」

『しっかりしてくれよ。
あそこの店の地価はかなりのもんだ。あんなジジイに持たせとくのは勿体無いっつー話さね。
上手く親父さんを立ち退けさせたらアンタの借金もチャラにしてや

るって言ってんだからよぉ』

電話越しに聞こえてくるのはいかにも柄の悪そうなドスの聞いた低い声。

「ですが今の所順調に借金を返せてる訳で……」

『テメー、何も分かってねぇな。ウチは闇金だ。やろうと思えば利子なんざぁ好きなように上げ下げ出きるんだよ。お宅はそういう違法な所から金を借りたんだ』

「……」

『立ち退き交渉が出来ねぇってんならお宅の利子を今までの五倍にするけどなぁ』

「五倍なんて！？
今のままでギリギリなのに……」

『だったらさっさと親父さんに店を畳むように言うんだな。なぁに、テメーら親子なんだから自分と一緒に暮らそうとかほざけば泣いて店なんざ手放すんじゃねぇのかぁ？』

聞いているだけで不快感を覚えるその声は電話越しで愉快そうに笑っている。

『まぁとにかく、朗報待ってるからよぉ。
自分の立場を良く考えな』

「……」

そう言って電話はぷつりと切られる。携帯からは無機質な音だけが流れていた。

其の五十一　親の心子知らず

午後5時

「まったく……
貴方達どこに行ってたのよ」

三人娘が生徒会に戻る頃には時刻は既に夕方になっていた。
学校はとっくに終わっている。

という事で案の定ヒナギクに怒られることに。
しかし彼女達にも言い分がある訳で。

「違うんだヒナ、今回はサボりじゃ無くて手伝いをしていてちょっと、な……」

「予想以上に時間かかっちゃったからね～」

「まぁ、今回はふざけ無しの手伝いだったがな」

ヒナギクを前に三人は目を見合わせる。

「またそんな事言って……
いつも補習とか掃除とかサボってるでしょ？」

「「「い、いや……それは」」」

日頃の生活態度を持ち出されると途端に彼女達には分が無くなる。
真面目に学生をしておかないとこういう時に不利である。

「コイツらの話は全部ホントだよ」

「あ、駿君」

しかし暫くして生徒会室にやって来た駿が助け船を出してくれた。
ヒナギクを始めテーブルに座っている翼や千桜も少し驚いた表情になる。

「お前、どこ行ってたんだよ。
昼に出ていってから急に消えちまって。千桜なんかずっとお前の事心配してたんだぞ？」

「な！？
そ、そんなことありませんよ！！
何で私が……」

そこでいきなり千桜に話を振る所は実に翼らしい。
これは彼なりのエールなのだ。
まぁ焦ってしまった千桜はそれをばっさりと切り捨ててしまったのだが。

「という三人が手伝ってくれたんだよ」

駿は三人を見てからヒナギクに顔を向ける。

「美希達は俺が無理を言って仕事を手伝って貰ってたんだ。
今職員室に行って先生に説明してきたから。
だから悪いのは俺だよ」

「……なるほど。
本当なのは分かったわ」

彼の言葉に嘘や偽りは一切無い。ヒナギクは溜め息を一つ、納得したように頷いた。

「ま、その代わり生徒会の仕事は四人ともちゃんとやって貰うわよ。
特にいつもサボる三人には」

「「「う゛っ！！」」」

彼女がそう付け加えると三人は何とも言えないような表情で声を洩

らすのだった。

＊

時刻は午後９時。
有賀喜之は約束通り蕎麦屋の近くにやって来ていた。

しかし彼の足取りは重い。
この店に、この店の側に近づくのが躊躇われる。
何か後ろめたさに上手く足を出せずにいるのだ。

（……）

やはり何かいたたまれなくなり店に背を向けようとした時、

「……ん？」

明かりの零れる蕎麦屋から大きな笑い声が聞こえてきたのに気が付いた。
聞き覚えのあるその声に喜之は自然と店に近づいていく。
そして脇にある窓からそっと中を覗き込んだ。

（……）

そこに広がる光景に彼は言葉を失ってしまった。

そこには……

カウンターに座って酒を飲みながら愚痴を溢している常連客、カウンターから少し離れた畳で蕎麦を食べながら気持ち良さそうに騒いでいるサラリーマン達、ちゃぶ台に倒れこむように嘆いたりする若者達。

そして、カウンターにそれら全員を眺めて高らかに笑い声を響かせる親父……有賀浩二の姿があった。

その光景はとても暖かく、雰囲気はとても優しく……

ここに来る客は皆この店が好きなのだという事がはっきりと分かる光景。

（……）

喜之は何とも言えない表情で口元をゆっくりと緩めて窓から見つめていた。

「凄いですよね。
この店はいつもこういう温かさに溢れて」

「？」

すると、彼の後ろから声が聞こえてくる。
振り返ると昼間に会った駿が黒いパーカー姿で喜之の後ろに立っていた。

「貴方は……昼間の」

「ども」

駿が軽く会釈するとその後ろから私服姿の美希、泉、理沙もやって来る。
美希は白いカーディガンに青いスカート、泉は桃色のワンピース、理沙は黒いトレーナーとジーパン姿だ。

「少し話を聞いて頂けませんか？」

「……ええ」

喜之の了承を得ると、五人は場所を蕎麦屋の前から先程の公園に移動した。
屋根付きの休憩場に腰を降ろす五人。

「驚きましたよ……」

椅子に座ると喜之は溜めていたものを吐き出すようにそう言った。

「親父、あんな風に笑ってるんですね……
僕は笑った親父の顔なんて知らなかった。いつも厳しく黙り込むばっかりでね。
寡黙っていうのとはちょっと違うような気がするけど」

駿達が頷くのを見ると彼は

「笑うどころか口数もかなり少ない人で。
母が亡くなってからは特に。
僕も反抗期があってか口論が絶えなくなって。
と言っても僕が一方的に喧嘩をしていたようなものですけど。

そんな親父がいきなり家を手放して蕎麦を始めるって言った時、とうとうキレてしまって。
それで家出をね……」

喜之は気まずそうに頬を掻いてみせた。

「その後一応、年賀状なんかで生きている事は伝えましたけど……破門されたんですかね、連絡も一切無くて。まぁ期待なんかしてなかったんですけどね。
ってすみません、昼間もしましたよねこの話」

彼が申し訳なさそうに頭を下げると駿や美希達はとんでもないといって慌てて手を振った。

「ところで……お話とは？」

「……ええ。
余計なお世話かもしれないですけど」

駿はそう言って美希、泉、理沙に目を向ける。
彼女達は静かに頷く返した。

「どうしても知っておいて欲しい事があるんです。
オヤジさんの為にも、貴方の為にも」

「？」

再び顔を戻して言う駿に喜之は不思議な表情。
しかし駿ゆっくりと続ける。

「オヤジさんは……
貴方の事をずっと思っていますよ多分今も……」

「え？」

思ってもいない言葉だったのだろう。思わず声を洩らす喜之に駿は頭を下げた。

「先に謝っておきます。
今から話す事は俺達じゃなくてオヤジさんから言うべき事なのかもしれない。
勝手に話して良いものかも分からない」

「あの……一体何を」

彼は少し不安そうに表情を曇らせるがそのまま駿は美希達に視線を送った。
すると美希が一歩前に出る。

「話を伺いました。
あの店の常連の人達に」

「話？」

美希達が調べていた事。
それは有賀の事とあの店の事だった。有賀に店によく来る人達を尋ねて四人で手分けをして片っ端から話を聞いていたのだ。

それを聞くと喜之の首はますます不思議そうに傾く。
何故そんな話を自分にするのだろうかと。

「話を聞いた皆さんはお店が大好きだっておっしゃってました」

「うん、皆言ってたよ。
あの店は自分のもう一つの居場所だって」

美希に続いて泉もニッコリと微笑んで口を開く。

「家族の愚痴や仕事の愚痴。
人間関係の愚痴やのろけ話。
あの人は何でも聞いてくれる自分達の父みたいな人だともな」

「オヤジさんより年上のおじいさんもそう言ってたよね」

理沙は何故か腕を組んだまま柱に寄りかかってそう言うと泉がクスリと笑って付け加えた。

「そのようですね。
僕は親父の店の様子は知らなかった、いや当時は知りたく無かったから。
でも今日見てその通りだと思いました。僕の前では決して見せないような顔、してましたよ」

「そんな事は無いと思いますよ」

喜之の言葉に駿はゆっくりと首を横に振ってみせる。

「オヤジさん、馴染みのお客さんに貴方の事を話してました。
俺も何回かは聞いた事がありましたし」

「……え？」

「俺にはただ家出した息子がいるとしか聞いていませんでした。
でももっと親しいお客や友人には貴方の事を話していたそうです」

駿は目を見開いている喜之から美希達に視線を移す。

「特に深夜前で普通のお客さんが帰った後はオヤジさんも一緒に飲んだりしてたみたいで。
その時によく……」

「……親父は、何て？」

喜之は聞くのが躊躇われたのか少し言葉に詰まりながらも尋ねる。
しかし美希はパタリと手帳を閉じると首を振った。

「詳しい話は本人の承諾もありませんから聞けませんでした」

「でも、皆口を揃えて言ってる事は同じだったよ。『あの人はとっても息子さんを心配している』って」

美希の言葉を継いだ泉が喜之に向けて両手を広げてみせた。
が、喜之は力なく首を横に振る。

「まさか……
親父がそんな」

「いいや……」

理沙が寄りかかったまま彼の言葉を遮り口を開く。

「店内のカウンターにはいつも貴方との写真が飾ってあった。
その写真は貴方とのものだったけれど、お客の一人から話を聞くと
毎年毎年写真を変えているそうだ。勿論、貴方と写っているものを」

「……」

理沙に続いていつの間に移動していたのか隣から泉も顔をひょっこ
りと出す。

「それから毎年、決まった日に神社にお参りに行ってるんだって。
その神主さんが言ってたよ。
あの人は毎年決まった日に参拝に来て御守りを買っていくって」

「……それは」

「喜之さんの誕生日に。必ず」

「っ！！」

そう言った泉の表情は真剣で喜之はグッと言いかけた言葉を呑み込
んだ。

「何故、私の誕生日を？」

「お店のカレンダーに丸が付いていて、尋ねたらオヤジさんが教え
てくれました。
明日、ですよね」

「……カレンダー、に」

美希の言葉に彼は自分に言い聞かせるように呟いた。
その表情には言い様の無い動揺が。

「だから……
オヤジさんは貴方の事を忘れてなんかいない。
いや、きっと今もずっと待っていると思います」

駿は喜之の瞳をまっすぐと見つめてそう言った。
喜之は何と答えて良いのか分からない様子で彼を見つめ返す。

「昔オヤジさんから聞いた事があったんですよ。
あの店の名前の由来」

「「「？」」」

喜之は勿論だが三人娘も首を傾げる。彼女達も初耳のようだ。

「確か俺が小学五年くらいの時だったかな……
そん時オヤジさんの店には二人のサラリーマン達が沢山いて……」

「くそぅ！！
せっかく頑張って来たのにあのプロジェクトから外された！！
美味しい所はお偉方が全部かっさらっていくんだよチクショー！！」

「よせよ、子供も居るんだぞ」

若いサラリーマン二人がカウンターに座り愚痴を吐いていた。
男の一人はコップを握りしめて叫んでおり、もう一人はそれをたしなめているようだ。
その隣に二つ席を挟んで小学生くらいの男の子、鷺ノ宮駿がオレンジジュースを手に座っていた。

「だからってあれはあんまりだろ！！ちくしょう！！」

「おい……」

なおも叫ぶ男に注意しようとするもう一人。
しかしそんな二人の前にコップが二つ置かれた。

「構いやしねぇよ若いの。
こんな店で良かったら好きなだけ愚痴溢していきゃいい」

「「オヤジさん……」」

二人が顔を上げるとニカッと笑っている有賀の姿。

「若ぇウチに沢山嫌な目や辛い目に遭うだろうよ。
そこで潰れちまったら元も子も無ぇ。今が踏ん張り時だ。
今日は俺が持ってやるからよ、また明日から胸張って会社に行けよ」

「うぅ……！！
ありがとうオヤジさん！！」

「大袈裟な奴だな。
大の大人が泣くんじゃねーや」

涙を流して―多分酔いがまわっているからだろうが―礼を言うサラリーマンに有賀は頭を掻きながらしかし口元を緩めて返す。

「オヤジさん……
ホントこの店はもう一つの家みたいだよ」
「おうよ。
そう思ってくれんなら始めた甲斐があるってもんよ」

泣き上戸気味のサラリーマンの隣でもう一人が呟いた。
有賀はそう返してちまちまオレンジジュースを飲んでいた駿の頭にポンポンと手を乗せる。

「この店の名前はなぁ。
テメーら全員が自分の家みてぇに馬鹿騒ぎしたり愚痴溢したり泣いたり笑ったり出来るようにってな『家』って付けたんだよ。
話しか聞いてやれねぇが、それでも救いになるなら喜んで聞いてやるって話さね。
だから嫌な事があったらいつでも駆け込んできな」

「「オヤジさん……！！」」

有賀はそう言うと駿の上に乗せていた手を離す。
そして誰に言う訳でも無く誰に聞こえる訳でも無く、小さく呟いた。

「辛くなったらいつでも帰ってくるといい。
だから俺はいつまでもここにいてやる……」

「……」

「“テメーら皆の家にしてやりたい”いつもそう言って笑ってますよオヤジさん。
だからきっと、貴方の家にだってなるってそう言いたかったような気がします」

駿はそう言って少し視線をさ迷わせた。何かを考えるかのように。
しかし次の言葉が出る事は無かった。
何故なら……

「貴方達は……君達は本当にお人好しですね。
親父のためにそこまでしてくれるなんて」

喜之が椅子から立ち上がったからだ。彼の表情に先程までの不安や動揺は見られない、どこか吹っ切れたものがあった。

「本当にありがとうございます」

「いや、そんな……」
「勝手にやった事だから」

突然のお礼と深々と頭を下げられて慌てて立ち上がる三人。
駿だけは何かを待つかのように座ったまま喜之を見つめる。

「いえ、君達のおかげで僕のするべき事がわかりましたから。
僕は危うく大変な間違いをおかす所だった」

「「「……え？」」」

しかし次に喜之が口にした思ってもみない言葉に美希達は思わず声をあげてしまう。

「僕は……

あの店を、皆さんの大切な居場所を無くしてしまうところでした」

其の五十一　親の心子知らず（後書き）

駿
「本番入りまーす。
3、2、1……」

三人娘の
☆諸事情ラジオ★

美希
「三人娘の～」

泉・理沙
「諸事情ラジオ～♪」

駿
「いやだからタイトルテロップ出たろうよ。
意味無いだろ今の」

三人娘
「うっさいシスコン馬鹿！！」

駿
「馬鹿って言うな」

美希
「さて、気分とノリ次第で急に始まったり急に終わったりするこの

コーナー」

泉
「今日は素敵なゲストに来て頂いています♪」

理沙
「では、ゲストが来るまでの間ＣＭと行こうか」

最近、貴方の身近に妙な出来事や不可解な現象はありませんか？
それはもしかしたら貴方に害を与える悪霊の仕業かもしれません。
心当たりのある方は鷺ノ宮家にお気軽にお電話下さい。
最強を謳われる式術師と色々とアレなシスコンがパパッと解決します。

鷺ノ宮家妖怪相談窓口

駿
「窓口なんて無ぇよ！！」

泉
「では、ＣＭも開けた所で。
ゲストのご紹介でーす♪」

美希
「那家乃ふゆい様の小説『ハヤテのごとく！～愛沢家執事物語～』から主人公の愛沢タケル君とヒロインの愛沢咲夜さんです」

タケル
「ども。
咲夜の兄兼執事の愛沢タケルです」

咲夜
「おー、これがパラレルワールドってやつやな。
ウチは愛沢咲夜や。
よろしくな」

美希
「確かに、パラレルワールドになるわね。
私は花菱美希。ここの主人公である駿君のご主人様一号」

泉
「瀬川泉だよ～♪
駿君のご主人様二号なのだ」

理沙
「朝風理沙だ。
駿君の主三号」

駿
「俺は共有の下僕か！？」

咲夜
「自分が馬鹿で超ド級のシスコンで救いようが無い変態と噂の伊澄さんの兄貴かいな」

駿
「すみません、もう少し言葉を選んで下さいませんか」

タケル
「そうだぞ咲夜。
せめて“救いようが無い”って所は抜いてやれよ」

駿
「そこっすか！？」

三人娘
「そこだな」

駿
「……」

タケル
「まぁ、世界は違うけどうちの妹がお世話になってるみたいで」

駿
「そっちも大変だな。
咲夜が妹だと苦労するだろ」

タケル
「そっちも、コイツの幼馴染みだと何かと苦労するだろ」

咲夜
「ちょ！！
何頷きあってるん自分ら！！」

美希
「まぁ、駿君は色々と大変みたいだな。この間も胸を揉むラッキーハプニングをやらかしてたし」

理沙
「年下に手を出すとはな～」

泉
「にはは～♪」

タケル
「それだーーーっ！！」

バキッ！！

駿
「右ストレート！？」

突然タケルが駿に右ストレートを炸裂させた。
駿は勿論ひっくり返る。

駿
「いきなり何を！？」

タケル
「それはこっちのセリフだ！！
人の妹を汚しておいて！！」

駿
「いやいや！？
紛らわしい言い回しすんなって！！」

タケル
「関係あるか！！」

咲夜
「ちょっ、ええ加減にせんとタケル。あの馬鹿にも悪気は無かった訳やから。しかも世界違うし」

タケル
「世界は違うと言えど咲夜に手を出したんだ。万死に値するな」

咲夜
「自分も結構シスコンやなぁ。
そんなにウチの事好きなん？」

タケル
「当たり前だろ。
世界で一番大切だって」

咲夜
「ちょっ！？
な、人様の後書きで何言うてるん！？／／／」

タケル
「？」

美希
「ほぅ、タケル君も中々のシスコンね」

理沙
「こっちのシスコンは帰ってこないけどな」

泉
「せめて安らかに眠ってね駿君」

駿
「勝手に殺すな」

美希
「あ、復活した」

タケル
「駿よ……
確かに世界は違えど気持ちは同じなんだ。例えば俺達の世界で伊澄が同じ目にあったらどうする？」

駿
「殺す」

三人娘＋咲夜
「物騒過ぎるわ！！」

タケル

「つまりそういう事だな」

駿
「くっ……！！
そうか、そういう事なのか」
がっくりと膝をつく駿。

咲夜
「何がやねん」

駿
「俺が間違っていた！！」

タケル
「分かってくれれば良いって」
そして握手をする駿とタケル。

美希
「いやだから何の握手よ」

駿
「つー訳で今からそっちの世界の伊澄が変なヤローの毒牙にかからないように持てるだけ兵器類を持って徹底抗戦をしに」

咲夜
「行かせるかドアホーーーっ！！」

咲夜のハリセンフルスイングで駿はどこかに飛んでいった。

泉
「しっかりオチもついた所で、ちょうどお時間なので」

理沙
「二人にはコーナー恒例の宣伝で締めて貰おうか」

咲夜
「任しとき。
可愛くておしとやかで繊細な少女とその兄が様々な人達との交流しながらお笑い天下一を目指す笑って泣けるラブコメ小説や」

タケル
「全然違うだろーがっ。
特に前半とか正反対だろ」

咲夜
「誰が正反対や！！」

タケル
「えっと、うちの作者が書いている『ハヤテのごとく！～愛沢家執事物語～』はある出来事で咲夜の兄兼執事となった俺と妹の咲夜を中心に色々と物語が繰り広げられる小説です」

咲夜
「あ、ちょっ！
聞いてるん！？」

タケル

「それでは」

咲夜
「待てって言うてるやろ！」

美希
「はい、とても面白いので皆様も是非！」

理沙
「では、今回はこの辺で」

泉
「次回ら三話目！
遂に物語が動くよ♪
そして四話目で遂に駿君が……」

三人娘
「それでは、また次回～♪」

其の五十二　嫌な予感って大抵当たるから不思議（前書き）

最近終わってしまいましたが僕の大好きだった時代劇『塚原卜伝』のサントラＣＤを先日ようやく入手しました。

ずっと欲しかったので最高に嬉しかったのですが、音楽はその喜びを凌ぐ傑作でした。
ホントもう最高という言葉では足りないくらい最高です。

戦闘曲は全てにおいて素晴らしくテンションも上がりまくりです。
メインテーマも最高でもう言葉に尽くし難い！！

そんな感じでサントラを聞きながら執筆した今回でした。
ちょっと微妙な出来ですが？

話はもしかしたらあと二回くらい続くかもしれません。
出来れば次回でラストにしたいのですが……

では、始まります！

其の五十二　嫌な予感って大抵当たるから不思議

「いえ、君達のおかげで僕のするべき事がわかりましたから。危うく間違いをおかす所だった」

「「「……え？」」」

喜之の言葉に今度は三人が不思議そうな表情をする。

「僕は……
あの店を、皆さんの大切な居場所を無くしてしまうところでした」

喜之はそう言って公園から蕎麦屋の方向に目を向ける。
何が何だか分からない美希達の代わりに、座っていた駿が口を開いた。

「昼間に言っていた“話”ってやつですか」

「……はい」

駿の問いかけに喜之はバツが悪そうに表情を曇らせると頷いた。
そして恐る恐る続ける。

「私には……借金があるんです。お恥ずかしい話、若気の至りで株に手を出してしまい借金が。
知り合いに勧められた金融会社にお金を借りたんですが、そこが所謂ヤミ金というやつでして……」

「「「「……」」」」

よくドラマ等で聞く話ではあるが実際に聞くと現実味が湧かない。

四人は突然変わった話題に驚いて顔を見合わせる。

「ただ元々借りた額が大袈裟なものでは無かったので会社で働いて順調に返済していたんですが…

最近になってそのヤミ金融の人達がとある土地に目をつけたらしいのです」

「……もしかして、それがあの店ってんじゃ」

「その通りです」

間髪を入れずに喜之は頷いた。

「恐らく相当な高値で買うという人間がいたのでしょう。

ですから私に親父を説得して店を売らせる事を頼んできました。

私には借金がある。その借金を無くす事を条件に、ね」

「……」

「本当は今日、親父に話をするつもりだったんです。

真実は伝えずにこのままだと親父が危険だと口実を作って。

最低ですね」

喜之はその時の自分を思い出しているのか恥じるように唇を噛み締めている。

「ですが先程……

親父の店を覗いて、そして君達の話を、してくれた事を聞いてはっきりと分かった。
あの場所が、親父が……
皆さんにどれだけ愛されていて、どれだけの人々の居場所を作っているのかを」

「「「……」」」

「そして一瞬でも躊躇った自分がいかに恥ずべき事かも」

噛み締めていた唇を緩めていつもの優しげな表情に戻す。
しかしその瞳には先程までのような迷いや戸惑いは一切見受けられ無かった。何かを決心するように強い光がそこにはあった。

「本当ありがとう……
僕はとんでもない過ちを犯す所でした」

もう一度深々と頭を下げる喜之。そんな様子に四人は口元を緩めて顔を見合わせた。

「でも、それとは別に借金の方が大変なのでは?
相手はヤミ金でしょう?」

「心配ありません。
元々返済は順調ですしいくら法外金融でも返してしまえば口は出しませんよ」

理沙が尋ねると彼は軽く首を横に振って返す。

「それよりもうこんな時間だ。

僕の為にこれ以上四人の家の人が心配をさせるような事は出来きません。ですからこの辺で」

喜之は四人を見ると『もう僕は大丈夫です』と付け加えて会釈。
そして背を向けた。

「オヤジさんには会っていかないんですか？」

「……僕には会う資格はありません」

そんな背中に駿は一番肝心な事を問いかけた。
振り返る事をせずに答える喜之に美希達は寂し気な表情をしてしまう。

「ですが……」

「「「？」」」

喜之はくるりと振り返るとゆっくりと口元を緩めた。

「しっかりと借金を返したら会ってみようと思います。
許して貰えるかはわかりませんが」

「そうですか」
「ああ、それが良い」
「うん、そうだね！！」

彼の言葉に三人は安心したように頷く。
そうして喜之はもう一度頷き返すと歩いて公園を後にした。

四人も暫くして公園から出ようと歩き始める。
理沙と泉は少し前に出て追いかけっこをしていて、その後ろから美希と駿がついていく。

「でも……
何だか釈然としないわね。
これで解決なのかしら」

「さぁな……
ま、後はあの二人の問題だからな」

歩きながら考え込むような表情で口を開く美希隣で駿は夜空に煌々と輝く月を見上げて呟いた。

其の五十ニ　嫌な予感って大抵当たるから不思議

「ざけんなコラァ！！」

「ぐっ……！！」

翌日の午後三時。
喜之は店の土地について報告の為にもヤミ金融業者の指定した人気の無い廃工場後にいた。

彼等は当然交渉の方はどうなったと尋ねてきたので、喜之は昨晩固めた思いをそのまま話し、借金はちゃんと自分で返すから勘弁してくれと頭を下げた。
しかし返ってきたのはヤクザの男の拳であった。

「ああ！？」

喜之は思いきり殴られ倒れ込み、たて続けに胸ぐらを掴まれ無理矢理起き上がらさせられる。

「てめぇな……
あそこの土地は今相当な高値が付いてんだよ。
てめぇら貧相な親子には勿体無ぇくらいの金で買ってやる。
それでてめぇの借金も返せんだろうが」

「ですから、私は自分で借金を返すと……ぐはっ！！」

胸ぐらを掴まれた状態で喜之は思いきり蹴りを入れられた。

「いい加減にしろよ……

てめぇのカスみたいな金なんざぁもうどうでも良いんだよ。
さっさと説得させてあのジジイを店から退けろ。
何なら無理矢理誓約書を書かせるんでも良い」

「くっ……」

ヤクザの男は更に喜之を引き寄せてドスのきいた声で脅す。

「止めねぇか」

「あ、兄貴！！」

すると、喜之を脅すヤクザの男の後ろから声が。
４０代くらいの白いスーツの厳つい顔の男性が沢山の黒服のヤクザに囲まれ立っていた。
その男性は相当な威圧感を放っており所謂ヤクザの若頭に位置する人間のようだ。

ヤクザの男が手を放すと喜之は地面に倒れ込んでしまう。
白いスーツの男性は煙草をくわえると倒れている彼に近づいて屈みこんだ。

「有賀の息子さんよぉ……
悪い事ぁ言わねぇ。
店を畳ませろ」

「お、お断りします……
借金なら返します。だから親子の店には手出ししないで下さい」

「なら仕方がねぇな……」

男性はそう言って立ち上がる。
納得してくれたのかと喜之がホッとしたのもつかの間、

「づぁ……！！」

一瞬物凄い痛みが走ったかと思うと彼の意識は真っ暗になった。

「おい、コイツを縛っとけ」

男性の右手にはスタンガン。
ヤクザ達はすぐに気絶した喜之を拾いに集まる。

「脅しますか？」

「ああ。
店のジジイがここに来るように仕向けろ」

男性は煙草を投げ捨てると新しい煙草を取り出してくわえる。

「あのジジイが店を止めると言ったら一件落着ですが……その後は二人とも帰すんですか？
サツにでも駆け込まれたら厄介に……」

「何言ってんだ……
俺達は少しでも得する方を選ぶ。人間は高く売れる部分が沢山あんだろうが……息子は勿論、ジジイでもなぁ」

下っ端の一人の言葉に白いスーツの男性はそう言って口元を歪めてみせた。

＊

夕方六時前……
白皇の生徒会室ではいつも通り生徒会執行部のメンバーが仕事をしていた。
珍しい事に……

「う～、やっぱ疲れるな～」

「もうヘトヘトだよ～」

室内には理沙や泉の姿があり、しかも遊んでいないで生徒会の仕事をしているのだ。

「珍しいわね……
貴方達が進んで手伝うなんて」

「今日は雪でも降るのかしら？」

机に座っているヒナギクとその隣で資料を整理している愛歌がそう言った。

「本来は毎回仕事をしないといけないんだけどな」

「まぁ、それはそれだ」

「にはは～」

テーブルに座っている翼がそう言うと理沙と泉はサッとそれを受け流す。

「駿君？」

「……え？」

翼の向かい側には駿が座っているのだが先程から黙ったまま。

隣にいる千桜がそれ気付いて声をかけると彼は慌てて顔を上げた。

「大丈夫？

何だかぼーっとしていたみたいだけど」

「ああ、いや……

少し、な」

駿はふるふると頭を振ると心配そうな表情の彼女に『大丈夫だ』と返した。

その様子を見たヒナギクと愛歌は顔を見合わせてクスリと笑う。

ガチャ……

すると生徒会室の扉が開いて美希が入ってきた。

「あら美希、どこに行ってたの？」

「いや……
ちょっとね」

ヒナギクに彼女は曖昧に答えると駿の側に寄っていく。

「駿君」

「ん？」

駿は頬杖をつきながら美希の方に顔を向ける。

「オヤジさんのお店って……
休みの日があるのか？」

「いや、基本的に毎日やってるけど……まぁ、夜が本業だからな」

「そっか。
なら今は店にはいないのかな。
電話しても出なかったから」

美希は納得したように頷くと理沙達の所に歩いて……

「ちょっと待て」

「え？」

不意に駿はテーブルから立ち上がると彼女を呼び止めた。

「電話に出なかったってどういう事だ？」

「いや、昨日のお礼を兼ねてちょっと電話をしてみようと思ったんだけど……繋がらないみたいで」

彼女の言葉に駿は考え込むように思わず額に手を当てる。

（電話に出ない……？
いや、この時間にオヤジさんが店にいない筈は無い。
夜の準備が……）

彼の胸中には嫌な予感がふつふつと募りはじめる。

「……悪い、ちょっと出てくる」

「あ、駿君！？」

彼は椅子に掛かっていた学ランを掴むと美希の言葉も聞かずそのまま生徒会室から出ていった。

翼やヒナギク達も訳が分からない様子で顔を見合わせるばかりであった。

＊

ガラ……！！

蕎麦屋『家』に着いた駿は嫌な予感を振り払うように頭を振ると店の引戸を開け放つ。

「オヤジさん？」

ガランとした店内が広がる。
電気は付いたままだが人の気配は全く感じられない。
彼が声をかけるがカウンターの奥からは反応が無い。

「オヤジさん？」

彼はどんどんと広がる嫌な予感に苛まれながらもゆっくりと店内に足を踏み入れる。

「……ん？」

すると、入口の引戸の端っこに一枚の紙が落ちているのに気が付いた。
彼はそれを拾い上げる。

『息子に対面させてやる。
午後五時に〇〇区の工場跡地に来い』

淡々した文字。

たったの数行の文字がそこにはあった。

「……」

それだけで何があったのか、今から何が起こるのか彼が推測出来るには十分だった。

「駿君！」

「何かあったの？」

たて続けに美希達三人が蕎麦屋の入口にやって来る。
どうやら気になって後をつけてきたようだ。
彼は黙って入口から出ると三人に背を向けた。

「オメーらに頼みがある」

「「「え？」」」

いきなりの言葉に三人は思わず声を洩らしてしまった。
しかし彼はそのまま続ける。

「生徒会終わったら俺が戻って来るまで暫くこの店に居てくれ。
客は誰も入れるな、本日休業だ」

「？」

美希達は訳が分からない様子で顔を見合わせる。
そうして何があったのかを尋ねようと彼に目を向けるが……

「……」

尋ねる事は無かった。
いや出来なかった。
彼から感じられる雰囲気がいつもとは全く違っていたからだ。
今まで見たことが無い、感じた事が無いような彼の“ソレ”は彼女達が尋ねる事を躊躇わせる。

彼の右手には紙が握られ、ギリギリと潰されている。
その手があまりにも白いためにどれだけの力が込められているのか想像出来ない。

「後で連絡する。
だから店を頼む」

それだけ言い残して彼はゆっくりと歩き始める。

「どこに……？」

美希声をかけると彼は振り返らずに頭を掻いた。

「溜まったツケ、返しに行かねーとな」

＊

冬は日が短い。
六時近くにもなれば日はすっかり沈み辺りは暗になってしまう。
人気の一切無い廃工場の周りでは２０人以上の黒服のヤクザ達が日本刀や金属バットを手に立っていた。
「しかし……
若頭も非道だねぇ。
親子から店を奪って本人達も売り捌くとはなぁ……」
「今頃、工場の中ではケリが着いてるかもなぁ」
黒服のヤクザ達は真っ暗になった工場に目を向けるとニヤリと口元を歪めた。
彼らは工場内で何かが行われていてそれを見張るヤクザ達のようである。
「ま、何にしても寒いから早く終わって欲しいもんだぜ」
「まったく。店がどうなろうがジジイがどうなろうがどうても良いんからよぉ」
卑しい笑い声をあげるヤクザ達。その不快な音は夜の空気に響き渡る。
「……ん？」
「あん？」

そんな時……
夜の空気を揺らすように一人の男がその２０数名のヤクザ達の前に歩いてきた。
白い和服姿の男はただ闇夜を纏い向かって来る。

「何だ……ガキか？」

「おいおい……
何でこんな場所にガキが迷い込んでいやがんだぁ？」

ヤクザ達が訝しげに目を細める先の男……暗闇で表情は見えないが、それは確かに青年だった。
白い羽織袴に木刀を肩に担いでいる一人の青年。

「仕方ねぇ。
俺がちょっと追い払ってくらぁ」

「面倒臭ぇから殺るんじゃねーぞ」

「分かってらぁ。
紳士的に追い返すだけだ」

一人のヤクザがその青年に向かって歩いていく。
彼はもう一人のヤクザの言葉に手に持つ金属バットを揺らして返してみせた。

「おい小僧。
てめぇここがどこだか分かってんのかぁ、ああ？」

「……」

そうしてヤクザはその青年の前に来ると金属バットを握りしめて凄みをきかせる。

後ろのヤクザは『大人気ねぇぞ』と笑いながらその光景を愉快そうに眺めていた。

だが……

「っづあ……!?」

「「「!?」」」

その笑い声はすぐに止んだ。

青年の前にいたヤクザが呻いたかと思うと崩れ落ちたからである。

「何だ!?

おい、どうした!?」

ヤクザ達は一瞬何が起こったのかと分からない様子だったが、すぐに崩れ落ちたヤクザは青年の手によるものだと予測した。

「この……!!」

「クソガキがぁ!!」

「ガキ、てめぇ何しやがったぁ!!」

次々に金属バットや日本刀を構えて崩れ落ちたヤクザの元に近づき始めるヤクザ達。

「何って……？
決まってんだろーが」

すると青年は倒れているヤクザの背中を踏みつけ足を乗せて口を開いた。

「テメーら下郎共の頭に伝えろ。
常連客がオヤジさんトコの蕎麦食べに来たってな……」

月明かりに照らされようやく見えたその青年は、
紛れもなく鷺ノ宮駿その人であった。

其の五十二　嫌な予感って大抵当たるから不思議（後書き）

今回はアレ……
駿はちょっと微妙でしたね。
まぁある程度は怒ってます多分。

決してキレてはいませんが。
まぁ怒る理由は次回で明らかになるかなと。

次回はちょっと時間が戻ってオヤジさんの動きから入るかと。

次回もよろしくお願いします！

其の五十三　誰が為にある想い（前書き）

それは突然の出来事だった。

有賀浩二は家出した息子の誕生日である今日、彼は神社にお参りに行っていた。
１５時過ぎに神社に向かい神主と少し話をして１６時半頃に店の方に戻ってきた。

開店の準備のためにカウンターに入ろうとするとテーブルに一枚の紙が。

『息子に対面させてやる。
午後６時に〇〇区の工場跡地に来い』

彼は初めは悪戯かと思った。
しかしその後にまるで図ったかのように匿名で電話が。
それは息子を現在預かっているという内容だった。

彼はエプロンを乱雑に放り投げるとそのまま店から飛び出す。
その時に脅迫状がカウンターから入口付近に落ちてしまったがそれには当然気付いていない。

向かった先は指定された〇〇区の工場跡地。
準備は万全という事か有賀が到着すると２０数名はいるであろうヤクザ達が彼を取り囲んだ。

そのまま彼は工場の中に連れて行かれる形となった。

工場の中は薄暗く、もう使われなくなった鉄材や木材、機械類が埃を被っているのが分かるほど寂れていた。

「親父！！」

「っ！？」

そして重々しい入口から前方にヤクザが２０数名。
先程のヤクザ達より身なりが良くこの組織の中でも上の人間なのだろう。
そのヤクザ達に囲まれるような形で喜之がいた。
両腕を掴まれていて吊るされるように立たされてはいるが有賀の方に顔を向けている。

「……喜之」

紛れもない自分の息子の顔。
決して忘れる事は無かった彼の息子の顔。

「親父！？
な、何で来たんだ！！」

「……」

喜之は表情をひきつらせて有賀に叫ぶ。しかし有賀は足を止めずに喜之を囲むヤクザ達の前までやって来た。

「親父！！
何で……！！」

「良いから黙ってろ」

喜之は掴まれたまま叫ぶが彼は首を振って前に進む。
と、ヤクザの中の白いスーツを着た男性がニヤリと口元を歪めて前に出てきた。

「よく来てくれたな……
有賀さんよぉ」

「……」

「話は分かってるな……」

「ああ……」

話。
電話の内容である。

「店を畳む事を交換条件にてめぇの息子を引き渡そうじゃねぇか。どうだ？」

そう言って有賀ににじり寄る白いスーツの男性。
しかし拘束された喜之は必死に首を振って声を張り上げた。

「止めろ！！
頷いてちゃダメだ！！
親父は今まであの場所でお客さんを笑顔にしてきたんだろ！！

お客さんに居場所を、家を作って来たんだろ！！
僕なんかどうなっても良いんだ。だから…」

「馬鹿やろうっ！！」

「っ！？」

返ってきたのは有賀の

「どうなっても良いなんて、軽々しく口にするんじゃねぇ！！
オメーの命は自分だけの命だと思うな。この馬鹿息子が」

「……親父」

「命より大切なもんなんてありゃしねぇんだよ。
どんなもんにも変えらんねぇたった一つのもんだろうが」

「で、でも……
あの店は……」

「オメーは、妻(あいつ)が腹痛めて作った命だぞ。
ここで迷ってたら天国にいるあいつに叱られらぁ」

有賀は工場の暗く高い天井を見上げて目を細める。
そんな父に喜之は『……親父』とだけ呟いて顔を俯かせた。

パチパチパチ……

「いやいや、感動的な話だねぇ。俺達も見習わねぇとなぁ」

白いスーツの男性はわざとらしく手を叩くと喜之を囲む黒服達に視線を向ける。

それを合図に黒服の一人が喜之の腹に思いきり拳を打ち付けた。

「っぁ！？」

「！？」

彼は声にならない叫びをあげて気絶してしまう。

有賀は思わず前に出ようとするが白いスーツの男性がそれを阻むように立ち塞がる。

「おっと、その前に誓約書にサインを」

「っ！！」

彼はひらひらと一枚の紙を振ってみせる。恐らく店の土地に関する物だろう。

有賀はそれを奪い取り殴り書きのように署名をした。

「これで……」

「ああ。

今、息子を返してやろう」

有賀の言葉に白いスーツの男性が後ろの黒服達を振り返る。

黒服達は喜之を持ち上げて有賀の前にやって来た。

そしてドサッと喜之を有賀の前に落とした。
有賀は屈んで彼に手を置く。

「……」

喜之は気絶したままだがほぼ無傷で無事。
有賀は工場から出るために彼を担いでいこうと……

「おっと待ちな。
まだ終わりじゃねぇ」

「？」

しかし白服はニタリと口を歪める。すると黒服はぞろぞろと有賀親子に近づいてくる。
暗闇でよく分からなかったがざっと３０人超はいるようだ。

「どういう事だ。
店の話は……」

「そうじゃねぇな」

白服の男性は首を振ると倒れている喜之に目を向ける。

「てめぇの借金が作った５０００万の借金だ。
だから今からそれを返して貰おうか」

「待て、借金の変わりに店をって話だろうが！！
それにコイツの借金は２００万だって……」

「今言ったろう。
店は息子の身柄と引き換えだ。
今さっき俺が口頭で言っただろう、なぁ？」

「ああ、言ってたな兄貴」

白服の男性がそう言って笑うと黒服達も笑う。

「それに借金はさっきまで２００万だったんだが、この二時間で５０００万になったんだよ……
俺が決めた利子でなぁ」

「てめぇら……」

無茶苦茶な話である。
店を取られ更に更に金を返せと、話が全く違う。
白服はニヤリと笑って一歩前に足を出す。

「最初からそのつもりで……」

「何の事やら……」

ヤクザ達を睨み付ける有賀だが白服はわざとらしく肩を竦める。

「まぁ、期限は今日までだからな。早く返して貰おう」

「くっ……」

今日までに５０００万。
しかも今日作られたようなもの。返せる訳が無い。

「無理なら俺達のやり方で返済して貰うがな……
てめぇらの臓器でも売ってな」

白服の言葉に後ろの黒服達は日本刀やら金属バットやらを構え始める。

「……待て」

「あん？」

すると有賀は倒れている喜之の前に庇うように立った。
そして訴えるような視線をヤクザ達に向ける。

「コイツは勘弁してくれ。
俺なら臓器だろうが何だろうが好きにしてくれて構わねぇ」

「……くくっ、構わねーよ。
てめぇの願いを聞いてやろうか。
だが……」

白服はおかしそうに笑うと有賀の脇腹にに思いきり蹴りを入れた。
有賀は成す術なく倒れ込む。

「気が向いたらな……」

「くっ……！？」

『やれ』と白服の男が顎で倒れている有賀を指すと、黒服達が数人有賀の前に近づいてくる。

「おら！！」

黒服達は蹴りなど脇腹に入れて有賀を気絶させようといたぶる。
その痛みに思わず意識を手放しそうになる。
だが有賀は必死に目を開けると倒れている喜之の方に顔を向けた。

「頼む…！！
コイツだけは、コイツだけは勘弁してくれ！！」

「うるせぇ！！」

有賀が必死に手を伸ばすが黒服は足で思いきり踏みつける。

「面倒だ。
さっさと眠らせろ」

そんな有賀を見下しながら蔑むように口を開く。
その言葉通り黒服の一人が金属バットを振り上げた。

黒服がバットを叩きつけようとしたその時。
工場の入口がゆっくりと開く音がした。

「「「？」」」

一同が振り返るとそこには工場内にゆっくりと入ってくる一人の人間の姿が。

「よぉ……」

「お、オメぇ……」

有賀は何とか顔を上げて入口を見る。そこには木刀を肩に担いだ青年、鷺ノ宮駿の姿があった。

「溜まったツケ返しに来たぜ、オヤジさん……」

其の五十三　誰が為にある想い

「ほら。
ここが私達のお家よ」

「……」

真っ暗な空。
星一つ見えない闇夜が空一面に広がっている。

背景音はザアザアと振る雨。
その無数に降り注ぐ雨の中に桃色の一つの傘。

その傘の下には和服姿でショートカットの美人な女性と白いダボダボの和服を引きずっている黒髪の男の子がいた。

二人の前には大きなお屋敷と入口である門。
お屋敷は昔の日本の武家屋敷のような造りで縁側に所々明かりが漏れているのが分かる。

「さぁ、入りましょう」

「……」

女性はそう言って門をくぐろうとするが男の子は戸惑ったように立ち尽くしていた。

まるで何かに怯えているかのように。

「大丈夫。
だから一緒に行きましょう」

「……」

そんな彼に女性は優しく微笑みかけると手を差しのべる。
それで安心したのか男の子は彼女と手を繋いで門をくぐった。

「お、お邪魔します……」

男の子は何故か申し訳なさそうに俯き加減で呟いた。

「違うでしょ？」

「え……？」

すると女性が彼の頭に手を乗せてそう言った。彼は不思議そうに女性を見上げる。

「今日からここが貴方の家。
貴方は今日からここの、私達の家族なのよ。
だから“ただいま”よ？」

『ね？』と優しく微笑む女性、鷺ノ宮初穂。
男の子は暫く目をパチパチとさせていたがやがて……

「ただいま」

「はい……
おかえりなさい」

嬉しそうに口を開いた。
初穂はそんな彼の頭を優しく撫でてそう返してくれた。

しかし同時に、男の子の目からは涙が零れる。
彼自身は悲しいという感情を感じていないのに、自然に涙が頬を伝うのである。

「……」

初穂はゆっくりと屈むと彼を優しく、だがしっかりと抱きしめた。

「辛い思い、悲しい思いを沢山してきたのね……」

「？」

初穂はまるで自分の事のように彼に語りかける。
当の本人はまだ状況が分かっていないようだが。

「これからは私達が側にいてあげるからね……だからもう大丈夫」

「……」

降りしきる雨の中でも。
肌寒い空気の夜でも。
星一つ見えない闇夜の下でも。

この日初めて、鷺ノ宮駿は“家族”というものの温かさを知った。

其の五十三　誰が為にある想い

ガラガラと鉄材の崩れる音と共に鷺ノ宮駿は工場の中に足を踏み入れてゆく。

「てめぇ、何者だ……！！」

白服の男性が凄みをきかせるように唸り、後ろの黒服達もたて続けに駿を睨み付ける。
だが彼はそれらを一切無視し、倒れいる喜之とそれを庇うように倒れる有賀の元まで近づいた。
有賀は薄れそうな意識の中、何とか顔を上げる。

「お、オメー……
一体……何でここに……」

「……ツケ。
まだ返して無かったからな」

「……お前」

「もういい。
暫く休んでくれ、オヤジさん」

駿がそう言って口元を緩める。
有賀の視線は彼を何とか捉えるもついに耐えられなくなったのか、
その瞳は力無く閉じられ彼は意識を手放した。

駿はその様子を見届けるとゆっくりと有賀親子の前に、ヤクザ達に
対峙するように立ち上がった。

「ガキがこんな場所に何の用だ。その馬鹿共の知り合いか？
ああ、それともあのカスみたいな店の客か？」

白服の男性は驚きが少し落ち着いたのか余裕を含んだ笑みで駿に顔
を向ける。
黒服達も相手が子供達だと分かり緊張を解いた。

「外の奴等はどうした？
隠れてこっそりやって来たのかぁ？だが残念だったな。
中には外の奴等以上に強ぇ頭数がいるぜぇ」

彼等がそう思うのも無理はない。“一人の青年が外にいるヤクザ達
とやり合える筈が無い。
大方隠れて忍び込んだのだろう”くらいにしか考えていないのだ。

が、実際は工場の外に熨されたヤクザ２０人以上が無惨にも転がっている。
勿論全員生きているものの、その状態は見るに耐えないほどである事を彼等は知らない。

「わざわざ一人で何だ、コイツら助けに来たってか？
てめぇみたいな貧弱そうなガキが一人で？
ご苦労なこったな」

白服がそう言い終えて高らかに笑うと黒服達もつられて一斉に笑い始める。

「まぁ兄貴、売れる身体がもう一つ増えるんだ。
都合が良いじゃねぇか」
「なるほど、違ぇねぇな！！」

更に黒服達は恐ろしく物騒な話で勝手に騒ぎ始めた。

「おいおい、たった一人でやって来た勇敢なる正義の少年をあんまり脅かしてやるなテメーら。
ま、その通りになるけどなぁ」

押し黙っている駿を見て怯えていると思ったのか白服はそう言って口元を歪める。

「……別に正義の味方だのなんだの宣うつもりはねぇよ。
そんな柄でも、そんな大層な人間でも無ぇからな」

ようやく口を開いた駿の声色はいつもとは比べものにならない程低い。

「だが……」

「あん？」

駿の言葉に白服を始め黒服達もガンを飛ばすように目を細める。

しかし駿は薄暗闇の中顔を俯かせたまま続ける。

「てめぇら……

息子の苦しみに付け込み、私利私欲のために利用しやがったな……」

駿は右手に持った木刀にギリギリと力を込める。

「息子を想うオヤジさんの気持ちを、己の都合で踏みねじりやがったな……」

彼の周りの大気はギリギリと軋むかのように呻く。

「親子の想いを……家族の痛みを、てめぇらは道具にしやがったな……」

駿の頭に浮かぶのは蕎麦屋で大笑いしている有賀と客達の姿。

苦しみながらも決意を新たにした喜之の姿。

「そんな奴等を目の前に立たせておくほど俺は腐ってるつもりも無ぇ……」

そして……
初めて初穂に“家族”の温かさを教えて貰った日の事を。

「ほざけ」

しかし白服は表情を歪めて吐き捨てるように言い放つ。

「戯言も程々にしろや。
人の痛み？親子の想い？
そんなもんに何の価値がある？」

「……」

「そんなものに踊らされる奴等はクズ同然。
そういうクズは黙って強者に従っていれば良い。
俺達がクズ共に利用価値を与えてやっているんだ。
そこの弱者共みてぇにな」

白服は有賀親子を見下して唾を吐き捨てた。

「この世は弱肉強食なんだよ。
こいつらのような弱者は永遠に底辺を苦しんで生き続けて、俺達は永遠に高笑いを続けて生きる。
そういう風に出来てんだよ。
もっと社会をお勉強するだなガキ」

白服を始め、ヤクザ達はそれぞれ嘲るように有賀親子に顔を向けて

いる。

「……分かってねぇのはてめぇらだ」

駿はゆっくりと顔を上げて白服達をただ見据える。

「人の想いを嘲笑うような奴等に、この二人を見下す資格は無ぇ。人の痛みを考えようともしねぇ奴等が強さを語る資格は無ぇ」

ヤクザ達は反射的に金属バットや鉄パイプ等の凶器を構えて駿を取り囲み始めた。

「店も自分まで捨てて息子を護ろうとしたオヤジさんを、父親の夢護る為にたった一人で話を付けにいった喜之さんを……互いを想う気持ちがこれだけ強いこの二人をてめぇらごときが弱者呼ばわりする資格は無ぇんだよ……」

木刀を握る手が更に強められギリギリと軋む音が乾いた空気に響く。

「何言ってやがんだガキ！！」

「囲まれたのにびびって頭いかれちまったのか？足すくんじまったか？」

「くくっ、違ぇねぇ！！」

数の差は一目瞭然。

駿が一人、周りにはヤクザ達が軽く４０人以上。

そんな状況ならば、彼等が高笑いするのも当然だ。

文字通り、圧倒的なのだから。

だが……

「教えてやるよ……」

「「「!?」」」

その瞬間、それらは全て覆された……

ヤクザ達はただ、戦慄する。
目の前の、たった一人の青年にただただ戦慄を覚える。

彼から感じられるのは怒りでも悲しみでも無く、ただ底知れぬ闇。
まるで奈落の底のような、
その場にいる全員が呑まれてしまうような底知れぬ恐怖がそこにはあった。

「今からてめぇらに……
本当の弱肉強食ってやつを」

「……ん？」

肌に刺すような冷たい風に有賀はうっすらと目を開けた。

意識が戻るのが実感する。

耳や鼻も冴えてくるのと同時に、身体にある痛みも感じられた。

「目ぇ覚めたか、オヤジさん……」

「オメー……」

すると有賀の視界の前にひょっこりと青年の顔が出てくる。
それは鷺ノ宮駿だった。

有賀はゆっくりと立ち上がる。
どうやら彼は壁にもたれ掛かっていたらしい。

「ここは……？
それに、あの男達は……」

有賀が顔を見回すと辺りは彼が最後に見た工場内の景色とは違い、
前方に川が流れるに静かな広場だった。
コンクリートの地面に灰色で無機質な長方形の建物が幾らか周りに
ある事から先程の工場跡地の近くのようだが。

「っ！？
アイツは……」

「息子さんならちゃんと」

はっと気付いて慌てたようにもう一度辺りを見回す有賀に駿は頷い
て彼の後ろを指差した。

振り返ると喜之が同じように壁にもたれ掛かって眠っていた。
しっかりと寝息が聞こえるので無事のようだ。

「……」

有賀は心底安心したように息をついたが、頭を振ってすぐにいつもの表情に戻した。

「だが、あの男共は……？
それにオメーは……」

「ついさっきな」

未だによく状況が呑み込めていない有賀。
そんな彼の言葉を遮るように駿は口を開いた。

「向こうの工場でヤクザ同士の抗争があったらしい」

「は？」

「随分派手に暴れたらしいが、幸い民間人は一切巻き込まれいなかった。別段珍しい話じゃねーな」

「オメー何を……」

唖然としている有賀に構わず駿は続ける。

「でも、俺の知り合いの政治家の娘の調べによると……
片方のヤクザグループは様々な人から金を騙しとったりとんでもない過払い請求をさせてたり、人身売買に手を出していたりと違法だらけだった。
だからこれから警察が来て一斉摘発。これにて一件落着。
それだけの話だよ」

「……」

「オヤジさんは今日もいつも通り店にいて、息子さんはあくまで単なる被害者で今日は会社を休んでお店に相談に来ていた。だから二人ともこの工場跡地には一切来ていないんだ」

そう言って駿は口元を緩める。

「そういうシナリオだけど、何か質問は？」

「……はぁ」

有賀は敢えて何も尋ねずにため息をつくように軽くフッと微笑してみせた。

「だが大丈夫なのか？
俺達があの場所にいた事は…」

「心配いらねーさ。
政治家の娘に頼んである。
シナリオ通りの事実を警察に流してくれるさ。
被害にあった人々の被害届けと一緒にな」

「……ったく、相変わらずだなオメーは」

そう言ってニヤリと笑う駿に有賀はやれやれと頭を掻いた。

「今、何時だ？」

「7時前だな……」

腕時計を見て確かめると時刻は午後7時。
辺りはすっかり暗くなっている。

「まだ間に合うな……
店を開けるか」

有賀は肩を回して空を見上げるとそう呟いた。
そして歩き始める。

「オヤジさん」

「ん？」

駿は去っていこうとする彼の背中を呼び止める。

「息子さんとは話していかないのか……？」

「……」

どんな形にせよ、せっかく二人が顔を向かい合わせる機会が出来たのだ。

「今会っても、俺には何を話していいのか……
どんな顔をしてやれば良いのか分からねぇよ」

「でも、息子さんは……」

振り返らずに言う有賀に駿は喜之の方に目を向けた。
彼の想いを分かって貰おうと。
しかし、有賀はゆっくりと首を横に降ったのだ。

「前に俺があの店の名前について話した事があったな」

「ああ……」

いきなり変わった話題に駿は少し驚いたようだが頷いた。

「本当はなぁ……
あの名前、コイツの為に付けたんだよ」

「え？」

有賀は駿に背を向けたままもう一度ゆっくりと夜空を見上げる。

「喜之は早くに母親を亡くして家ではいつも一人でな。
俺は妻の事を考え無いようにと仕事に打ち込んでで夜も一人にしちまう事が多かった。
そんなんだから息子とは年中喧嘩が絶えなかったよ。
些細な事で何度もぶつかった」

その寂しそうな視線は冬の星を数えるかのように空に動いてゆく。

「ある日、息子が一日家出しちまった事があってな。
そん時気付いたんだよ。
家で一人になるとこんなに静かで寂しいもんなのか。
俺はコイツにそんな思いをずっとさせてきちまったんじゃないか、って」

まるでその時をもう一度体験しているかのような表情の有賀。
駿は黙ってただ頷く。

「だからあの店を始めたんだよ。脱サラしても構わねぇ、コイツがもうこんな寂しい思いをしねぇように賑やかな場所を作ってやろうって。
まぁ、そのすぐ後に本当に家を出ていっちまったけどな……」
そう言って有賀は今度は視線を空から自分の手の平に向ける。
「店の名を決めたのはそん時からだ……」
「あの『家』って名前か……？」
「ああ。
辛い思いや苦しい事があった奴等が笑っていられる場所にしたい。
そして……そんな賑やかな場所にコイツが帰ってきた時、今度は寂しい思いにならねぇような、今度は俺も笑って迎えてやれるような『家』にしてやりてぇ……ってな」
「……オヤジさん」
有賀はそう言ってフッと息をつくと視線を再び空に戻す。
「だからよぉ……
俺はあの『家』で、どこほっつき歩いてるかめ分からねぇ馬鹿息子を待っててやらなきゃならねぇんだ……
今日も変わらずにな」
「……そっか。
なら、休んでる訳にはいかねーな」

「ったり前よ。
タクシー拾って早く帰らねーとな」

有賀は振り返って笑ってみせる。『迷惑かけたな』とお礼を言うとゆっくりとその場を後にしたのだった。

「……」

それを見送った駿は壁にもたれ掛かっている喜之の方に戻っていく。

「良いんですか？
声をかけなくて……
ずっと聞いてたんでしょ？」

「……っ！？」

そしてそう声を書けると、彼の肩はびっくりしたように上下する。

「気付いて……いらしてたんですか」

「そりゃ気付きますよ。
だって……

それだけ涙を流してるんだから」

喜之の両頬にはもう幾重にも重なった涙が絶え間なく伝っていたのだ。

「僕は……私は本当に馬鹿者です！！親父の気持ちも知らないで、
自分勝手ばかりして……！！
心配も迷惑もかけて……！！」

「……」

「僕には親父に話しかける資格なんて無い……！！
こんな僕には……！！」

喜之は堪えるように肩を震わせながら首を振った。

「顔を合わせられる資格なんて…ある訳が無いんです……！！
僕は……本当に……」

そんな彼を見て駿も腕を組んで壁に寄りかかる。

「……でも、貴方には言い足りない事がいっぱいあるんでしょ？
謝りたい事も、聞いて欲しい悩みも、まだまだ沢山」

「……ですが、僕には」

顔を上げた喜之に駿は黙って首を横に振る。
そうしてパーカーのポケットから携帯を取り出した。

「あ～、そういう訳だから……
ちょっと迎えに来てくんねぇか、美希」

『もう来てるわよ……』

携帯からそんな声が返って来ると同時に、二人の横に一台のリムジ

ンが出てきた。
そして車の窓からひょっこりと顔を出す女の子。

「全く……
さっきから人に頼んでばかりで貴方は……」

「悪ぃ、ちょっと忙しくてな」

それは花菱美希だった。
彼女はやれやれといった表情で駿を見つめる。

「警察の件。
結構大変だったのよ？」

「だから感謝してるって」

「ダメね。
感謝が足りないわ」

「何言ってんだ。
俺の顔を見てみろって、感謝に満ち溢れてるだろ？」

「そう？
いつも通りのだるそうな表情よ」

美希はそう言ってクスリと笑うと喜之に顔を向けた。

「ともかく、乗って下さい。
向こうで泉達も待ってますから」

「え……？
でも一体どこに？」

喜之は分けが分からないというように首を傾げる。

「もう晩飯時です。
とっておきのお店を紹介しますから、食べに行きましょう」

駿はそう言ってニッコリと微笑んでみせたのだった。

３０分後……

リムジンはゆっくりの走行でかなり時間をかけながらようやく目的地に到達した。
そこは駿達は喜之と初めて会った公園であった。

「あの……？」

喜之は公園をキョロキョロと見回している。
これのどこがお店なのか、ただの公園である。

「おーい♪」

すると三人の前方から手を振りながら駆けてくる泉と理沙の姿が。

二人は駿達の前まで来る。

「頼まれてくれたか」

「うん♪

バッチリだよ」

「常連客達にも伝えてきたさ」

駿の言葉にＶサインで答える泉と親指を立てる理沙。

「じゃ、一名様のご案内だな」

「「「うん！！」」」

四人が喜之を連れて向かった先は……

「ここは……！！」

蕎麦屋『家』であった。

喜之は目を見開いて思わず声を洩らしてしまう。

「ここの蕎麦屋は本日、超ＶＩＰ専用で特別に貸し切りなんだ。

他のお客は誰もいないぞ」

「……」

「今晩はこの店の店主であるオヤジさんにゆっくり愚痴でも悩みでも心行くまで聞いてもらえますよ～♪」

そう言って蕎麦屋の入口に手を向ける泉と理沙。
だが喜之はまだ何かを躊躇うように瞳を揺らせる。
まるで自分には入る資格が無いとでも言うかのように。

「家族に会うのに、資格なんていらねーさ」

「！？」

「会いたいと思ったらいつでも店の暖簾をくぐれば良い。
声聞きたいと思ったら食べ物注文して世間話でもすりゃ良い。
伝えたい事があるんなら……
いつでも愚痴りに行けば良い」

そう言いながら駿はポンと喜之の肩に手を乗せた。

「だから……」

「「「「行ってらっしゃいませ、本日の超ＶＩＰ様」」」」

「……ありがとう。
ありがとうございます……皆さん」

喜之は俯いて肩を震わせると、すぐに顔を上げて一歩を踏み出す。
また一歩、また一歩。

そして……
暖簾の下の引戸を開けた。

「いらっしゃい」

「……」

中に入ると、そこにはカウンター席と畳の席に分かれているまるで居酒屋のような店内が目に飛び込んできた。

なんて事は無い、どこにでもありそうな店内。

それでいて、とても落ち着く心地好さと温かみのある店内。

そしてカウンターの奥には、エプロンをつけたたった一人の父親の姿。

「……」

喜之はカウンターの真ん中にそくさくと座った。

「注文は？」

「え？」

有賀の一言に喜之は思わずハッとする。

「今お金持っていなくて……」

喜之は困ったように両手を見てポケットを探る。

すると有賀が顔を彼の方に向けて。

「馬鹿やろう。
今日の晩飯は何が良いかの注文に決まってんだろう。
これから二人分の晩飯を作るんだからよ」

「……親父」

ぶっきらぼうな物言い。
だがそこに彼の想いが込もっている事を喜之はもう分かっていた。
口に出すのは気恥ずかしい。
だから心の中で一言呟く。
“ありがとう”と。

「それとな……」

「え？」

「ここはオメーの『家』だぞ。
家族が『家』に帰ってきたらなんか言う事があんだろ」

「ああ……」

有賀の言葉にようやく喜之は気付く。
自分がずっと言いたかった事。
まず最初に言わなくてはならない事。
それは謝罪でもお礼でも無い。

何よりも大切な言葉。
何よりも優しい言葉。

何よりも温かい言葉。

この一言なのだ、と。

「ただいま……

親父」

「ああ……

おかえり」

其の五十三　誰が為にある想い（後書き）

静かな夜の道。
歩く駿、美希、理沙、泉の四人の姿。

「大丈夫かな～
上手くいくなか」

「ま、後はあの二人次第だろ」

泉が心配そうに後方にある蕎麦屋を振り返ると理沙はそう言って頷いてみせた。

「でも、まさかいきなりお店を貸し切ってくれなんて言われるとは思わなかったよ」

「全く。
駿君も無茶を言うな」

「常連客さん達に知らせるの大変だったんだよ～」

泉と理沙はそう言って後ろの駿に振り返る。

「感謝してるよ。
たった一時間足らずで準備してくれるなんて驚いた。

流石だな」

「「えっへん！！」」

そう。

駿は有賀親子を工場内から移動させた際に泉達にと美希にそれぞれ連絡を入れていたのだ。

「私の方もあの短時間でのやり取りは大変だったんだけど？」

「分かってるって。
やっぱりオメーら三人はやる時はやるんだな」

「「「まあね！！」」」

美希達ら誉められて嬉しそうな様子。

「この調子で生徒会の仕事も……」

「「「それは無い」」」

即答だった。

「甘いな駿君！！
我々を侮って貰っては困る！！」

「例えいくらシリアスモードになろうとも！！」

「私達は変わらないのだ～♪」

ザ・生徒会役員のポーズを決める三人娘。
三人はやっぱり元気。
その明るさに駿も思わず口元を緩めた。

「「「という事で明日は駿君にゴチになろ～！！」」」

「え？」

前言撤回。
彼の表情は思わずひきつった。

～翌日～

ガラガラ……

『いらっしゃい！！』

昼休みに駿と三人娘は蕎麦屋『家』にやって来た。
中に入ると有賀の元気の良さそうな声がカウンターの奥から聞こえてくる。

しかし、本日はもう一つ……

「いらっしゃいませ」

聞いた事のある男性の声。

「「「あ！！」」」

声を上げた三人娘の前に、お店のエプロンを付けた有賀喜之の姿があった。

「喜之さん！？」
「どうしたの？」

いきなりの登場に驚く三人だが、喜之はニッコリと微笑んで返した。

「ここは僕の『家』ですから。
お店の手伝いですよ」

「なるほど」

彼の言葉に駿は微笑して頷いた。そしてカウンターに目を向ける。

「あのオヤジさんの店で働くなんてなぁ、きっとバイト代もけちられるだろうに」

『うるせぇ！！
オメーはさっさとツケを払え』

カウンター奥からそんな叫び声が返ってくる。
そんな様子にクスリと笑う喜之と三人娘。

「今日は四人ですか？」

「いや、あと四人うちの生徒会のメンバーも呼んでいて」

駿がそう言うと同時に引戸が開いて『お邪魔します』とヒナギク、翼、愛歌、千桜が入ってきた。

「わかりました。
八名様、畳の席をお使い下さいね」

喜之は笑顔で頷いてカウンターに戻っていく。
その様子は本当に幸せそうで、駿と三人娘は顔を見合わせると思わず笑いを溢した。

そんな訳で……

「因みに今日は全員を駿君が奢ってくれるからな！！」

「はあ！？」

今日も『家』には……

「あら珍しいわね。
ありがとう駿君」

「あらあら、大変ね駿君」

「おう、サンキューな駿」

「え、でも良いのか駿君？」

「モチのロンだよ～♪」

「オメーが答えるなぁ！！」

いつも通り、いや……

「オヤジさん！！
無理だ、八人分ツケで」

「んな事出来るかぁぁぁ！！」

「親子！！

蕎麦が落ちるって！！」

いつも以上の笑いが……

響くのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7745s/

ハヤテのごとく！～鷺ノ宮家の諸事情～

2011年12月17日04時01分発行